栃木県埋蔵文化財調査報告第 331 集

東谷・中島地区遺跡群 10

－都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－

権現山遺跡北部・杉村遺跡

（2～4区・SG1区）　（GN1区）

（第1分冊）

2010. 3

栃 木 県 教 育 委 員 会
㈶とちぎ生涯学習文化財団

東谷（とうや）・中島（なかじま）地区遺跡群 10

－都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－

権現山（ごんげんやま）遺跡北部・杉村（すぎむら）遺跡

（２～４区・SG1 区）　（GN1 区）

（第１分冊）

2010. 3

栃 木 県 教 育 委 員 会
㈶とちぎ生涯学習文化財団

序

東谷・中島地区遺跡群は、栃木県の中央部である宇都宮市南部から上三川町北部に位置しています。この地域は、なだらかに広がる低台地と肥沃な沖積地に恵まれているため、磯岡遺跡・立野遺跡・西刑部西原遺跡・砂田遺跡などの原始・古代の集落跡と、東谷古墳群・中島笹塚古墳群・磯岡北古墳群・琴平塚古墳群をはじめとする多くの古墳群が所在します。

このたびの都市再生機構による土地区画整理事業に先立ち、事業地区内に所在する 12 遺跡の取り扱いについて、関係機関と協議の上、平成６年度から記録保存を目的とした発掘調査を行ってきました。

本報告書は、このうち権現山遺跡北部および杉村遺跡を中心とする地区の調査成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとりまして郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多くのご協力をいただきました都市再生機構、宇都宮市教育委員会、上三川町教育委員会をはじめとする関係機関、並びに関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成２２年３月

栃木県教育委員会

教育長　須藤　　稔

総　目　次

〔第１分冊〕

序

目次・検索表・例言

第１章　調査の経緯
第１節　調査に至る経緯　第２節　調査の方法　第３節　調査の経過

第２章　遺跡の環境
第１節　地理的環境　第２節　歴史的環境

第３章　調査区の配置と標準土層
第１節　杉村遺跡における調査区の配置と概要
第２節　権現山遺跡における調査区の配置と概要
第３節　権現山遺跡・杉村遺跡と周辺の土層

第４章　杉村遺跡 GN1 区
第１節　縄文時代の遺物　第４節　古墳時代の土坑　第７節　時期不明の溝状遺構
第２節　弥生時代の遺構と遺物　第５節　遺構外出土の古墳時代遺物　第８節　時期不明の土坑
第３節　古墳時代の竪穴建物跡　第６節　奈良時代の竪穴建物跡

第５章　権現山遺跡各調査区の旧石器・縄文・弥生時代遺物
第１節　権現山遺跡 SG1 区の旧石器時代遺物　第３節　権現山遺跡各地区の縄文土器　第５節　権現山遺跡各地区の弥生土器
第２節　縄文時代の遺物出土状況　第４節　弥生時代の遺物出土状況　第６節　権現山遺跡各地区の石器

第６章　権現山遺跡２区
第１節　古墳時代の竪穴建物跡　第５節　中世の井戸跡　第 ９ 節　時期不明の掘立柱建物跡
第２節　古墳時代の掘立柱建物跡　第６節　遺構外出土の中世遺物　第 10 節　時期不明の井戸跡
第３節　古墳時代の柱穴状土坑　第７節　近世の溝状遺構　第 11 節　時期不明の土坑
第４節　古墳時代の遺物集中地点　第８節　時期不明の溝状遺構

第７章　権現山遺跡２区・杉村遺跡 GN1 区・磯岡遺跡３区の古環境
第１節　分析結果の概要と考古学的評価　第４節　権現山遺跡２区と杉村遺跡 GN1 区の植物珪酸体分析　第７節　権現山遺跡２区出土木材の樹種同定
第２節　権現山遺跡２区と杉村遺跡 GN1 区のテフラ分析　第５節　権現山遺跡２区と磯岡遺跡３区における花粉分析
第３節　権現山遺跡２区と磯岡遺跡３区の放射性炭素年代測定結果　第６節　権現山遺跡２区における種実同定

第８章　権現山遺跡３区

第９章　権現山遺跡４区
第１節　古墳時代の竪穴建物跡　第 ６ 節　古墳時代の柱穴状土坑　第 11 節　時期不明の柱穴状土坑
第２節　古墳時代の掘立柱建物跡　第 ７ 節　時期不明の掘立柱建物跡　第 12 節　４区の遺構外出土遺物
第３節　古墳時代の方形周溝状遺構　第 ８ 節　時期不明の井戸跡　第 13 節　４区東側低地部の調査
第４節　古墳時代の溝　第 ９ 節　時期不明の溝状遺構　第 14 節　権現山遺跡４区の埋没谷と井戸跡 SE72 におけるテフラと古環境
第５節　古墳時代の土坑　第 10 節　時期不明の土坑

〔第２分冊〕

第 10 章　権現山遺跡 SG1 区
第１節　縄文時代の土坑　第 ７ 節　古墳時代の遺構外出土遺物　第 15 節　時期不明の集礫遺構
第２節　古墳時代の豪族居館（首長居宅・方形区画遺構）　第 ８ 節　古代の溝状遺構　第 16 節　時期不明の井戸跡
第 ９ 節　中世の溝状遺構　第 17 節　時期不明の溝状遺構
第３節　古墳時代の竪穴建物跡　第 10 節　中世の竪穴遺構　第 18 節　時期不明の土坑
第４節　古墳時代の竪穴鍛冶遺構　第 11 節　中世の井戸跡　第 19 節　時期不明の柱穴状土坑群
第５節　古墳時代の土坑・円筒形土坑・墓壙　第 12 節　中世井戸跡の木質遺物と昆虫遺体　第 20 節　SG1 区東側低地部の調査
第６節　権現山遺跡 SG1 区における古墳時代土坑の土壌理化学分析　第 13 節　中世の土坑　第 21 節　権現山遺跡 SG1 区におけるテフラと遺構の年代・古環境
第 14 節　中世～近代の遺構外出土遺物

第 11 章　権現山遺跡・杉村遺跡出土の鉄関連遺物
第１節　両遺跡の調査区と鉄関連遺構　第３節　金属学的分析対象資料と考古学的所見　第４節　権現山遺跡・杉村遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査
第２節　各遺構出土の鉄関連遺物　第５節　鉄関連遺構・遺物のまとめ

第 12 章　まとめ
第１節　旧石器・縄文・弥生時代　第２節　古墳時代　第３節　古代・中世・近世

参考文献・写真図版

第１分冊　目次

序…… iii
目次…… v
杉村遺跡・権現山遺跡北部　遺構一覧・検索表（第１分冊）…… xi
例言…… xiv
第１章　調査の経緯……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の方法……3
　第３節　調査の経過……5

第２章　遺跡の環境……8
　第１節　地理的環境……8
　第２節　歴史的環境…… 12

第３章　調査区の配置と標準土層…… 26
　第１節　杉村遺跡における調査区の配置と概要…… 26
　第２節　権現山遺跡における調査区の配置と概要…… 26
　第３節　権現山遺跡・杉村遺跡と周辺の土層…… 31

第４章　杉村遺跡 GN1 区 …… 33
　第１節　縄文時代の遺物…… 33
　第２節　弥生時代の遺構と遺物…… 36
　第３節　古墳時代の竪穴建物跡…… 37
　第４節　古墳時代の土坑…… 56
　第５節　遺構外出土の古墳時代遺物…… 56
　第６節　奈良時代の竪穴建物跡…… 57
　第７節　時期不明の溝状遺構…… 61
　第８節　時期不明の土坑…… 63

第５章　権現山遺跡各調査区の旧石器・縄文・弥生時代遺物…… 68
　第１節　権現山遺跡 SG1 区の旧石器時代遺物 …… 68
　第２節　縄文時代の遺物出土状況…… 68
　第３節　権現山遺跡各地区の縄文土器…… 70
　第４節　弥生時代の遺物出土状況…… 88
　第５節　権現山遺跡各地区の弥生土器…… 88
　第６節　権現山遺跡各地区の石器…… 97

第６章　権現山遺跡２区…… 106
　第１節　古墳時代の竪穴建物跡…… 106
　第２節　古墳時代の掘立柱建物跡…… 138

第３節　古墳時代の柱穴状土坑…… 142
第４節　古墳時代の遺物集中地点…… 142
第５節　中世の井戸跡…… 145
第６節　遺構外出土の中世遺物…… 145
第７節　近世の溝状遺構…… 145
第８節　時期不明の溝状遺構…… 148
第９節　時期不明の掘立柱建物跡…… 150
第 10 節　時期不明の井戸跡 …… 151
第 11 節　時期不明の土坑 …… 152

第７章　権現山遺跡２区・杉村遺跡 GN1 区・磯岡遺跡３区の古環境 …… 160
第１節　分析結果の概要と考古学的評価…… 160
第２節　権現山遺跡２区と杉村遺跡 GN1 区のテフラ分析 …… 株式会社 古環境研究所 161
第３節　権現山遺跡２区と磯岡遺跡３区の放射性炭素年代測定結果…… 株式会社 古環境研究所 164
第４節　権現山遺跡２区と杉村遺跡 GN1 区の植物珪酸体分析 …… 株式会社 古環境研究所 165
第５節　権現山遺跡２区と磯岡遺跡３区における花粉分析…… 株式会社 古環境研究所 170
第６節　権現山遺跡２区における種実同定…… 株式会社 古環境研究所 177
第７節　権現山遺跡２区出土木材の樹種同定…… 株式会社 古環境研究所 179

第８章　権現山遺跡３区…… 181

第９章　権現山遺跡４区…… 182
第１節　古墳時代の竪穴建物跡…… 182
第２節　古墳時代の掘立柱建物跡…… 298
第３節　古墳時代の方形周溝状遺構…… 300
第４節　古墳時代の溝…… 301
第５節　古墳時代の土坑…… 303
第６節　古墳時代の柱穴状土坑…… 312
第７節　時期不明の掘立柱建物跡…… 312
第８節　時期不明の井戸跡…… 314
第９節　時期不明の溝状遺構…… 316
第 10 節　時期不明の土坑 …… 316
第 11 節　時期不明の柱穴状土坑 …… 318
第 12 節　４区の遺構外出土遺物 …… 319
第 13 節　４区東側低地部の調査 …… 319
第 14 節　権現山遺跡４区の埋没谷と井戸跡 SE72 におけるテフラと古環境 …… 321
9.14.1. 分析結果の概要と考古学的評価 …… 321
9.14.2. 権現山遺跡４区の埋没谷と井戸跡 SE72 における土層とテフラ …株式会社 古環境研究所 322
9.14.3. 権現山遺跡４区の埋没谷における放射性炭素年代測定 …… 株式会社 古環境研究所 324
9.14.4. 権現山遺跡４区の埋没谷における植物珪酸体分析 …… 株式会社 古環境研究所 325
9.14.5. 権現山遺跡４区の埋没谷における花粉分析 …… 株式会社 古環境研究所 328

挿図目次

第 1 図　東谷・中島地区位置図 (1/10 万)……2
第 2 図　東谷・中島地区遺跡群遺跡位置図 ……4
第 3 図　遺跡の位置 (1/60 万)……9
第 4 図　周辺地形分類図 (1/10 万)……10
第 5 図　周辺の遺跡分布図 ……14
第 6 図　杉村遺跡・権現山遺跡とその周辺 (1/10,000) ……18
第 7 図　東谷・中島地区遺跡群と杉村・権現山・百目鬼遺跡 (1/10,000) ……19
第 8 図　杉村遺跡・権現山遺跡および周辺遺跡 (1/2,500) … 27･28
第 9 図　権現山遺跡北部・杉村遺跡の標準土層 ……30
第 10 図　杉村遺跡 GN1 区 全体図 (1/800) ……34
第 11 図　杉村遺跡 GN1 区 全体図 (1/400) ……35
第 12 図　杉村遺跡 GN1 区 縄文時代の遺物 ……36
第 13 図　杉村遺跡 GN1 区 SK-57 遺構・遺物……36
第 14 図　杉村遺跡 GN1 区 弥生時代の遺物 ……37
第 15 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-1 遺構・遺物……38
第 16 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-2 遺構・遺物……40
第 17 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-3 (1) 遺構 ……42
第 18 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-3 (2) 遺物 ……44
第 19 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-3 (3) 遺物 ……45
第 20 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-4 (1) 遺構 ……47
第 21 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-4 (2) 遺構・遺物 ……48
第 22 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-5 (1) 遺構 ……50
第 23 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-5 (2) 遺構 ……51
第 24 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-5 (3) 遺物 ……53
第 25 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-5 (4) 遺物 ……55
第 26 図　杉村遺跡 GN1 区 SK-53 遺構・遺物……56
第 27 図　杉村遺跡 GN1 区 遺構外出土の古墳時代の遺物 ……56
第 28 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-6 (1) 遺構 ……57
第 29 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-6 (2) 遺物 ……58
第 30 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-6 (3) 遺物 ……59
第 31 図　杉村遺跡 GN1 区 SD-8･24･64 遺構・遺物……62
第 32 図　杉村遺跡 GN1 区 時期不明の土坑 (1) 遺構 ……64
第 33 図　杉村遺跡 GN1 区 時期不明の土坑 (2) 遺構 ……65
第 34 図　杉村遺跡 GN1 区 時期不明の土坑 (3) 遺構 ……66
第 35 図　権現山遺跡 尖頭器 ……68
第 36 図　権現山遺跡 遺構外出土の縄文土器 (1) ……71
第 37 図　権現山遺跡 遺構外出土の縄文土器 (2) ……74
第 38 図　権現山遺跡 遺構外出土の縄文土器 (3) ……77
第 39 図　権現山遺跡 遺構外出土の縄文土器 (4) ……82
第 40 図　権現山遺跡 遺構外出土の縄文土器 (5) ……84
第 41 図　権現山遺跡 遺構外出土の縄文土器 (6) ……87
第 42 図　権現山遺跡 遺構外出土の弥生土器 (1) ……90
第 43 図　権現山遺跡 遺構外出土の弥生土器 (2) ……94
第 44 図　権現山遺跡 遺構外出土の弥生土器 (3) ……96
第 45 図　権現山遺跡 遺構外出土の石器 (1) ……98
第 46 図　権現山遺跡 遺構外出土の石器 (2) ……100
第 47 図　権現山遺跡 遺構外出土の石器 (3) ……101
第 48 図　権現山遺跡 遺構外出土の石器 (4) ……103
第 49 図　権現山遺跡 遺構外出土の石器 (5) ……104
第 50 図　権現山遺跡 2 区 全体図 (1/1,200)……107
第 51 図　権現山遺跡 2 区 北半部全体図 (1/600) ……108
第 52 図　権現山遺跡 2 区 南半部全体図 (1/600) ……109
第 53 図　権現山遺跡 2 区 SI-1a (1) 遺構 ……110
第 54 図　権現山遺跡 2 区 SI-1a (2) 遺構 ……111
第 55 図　権現山遺跡 2 区 SI-1a (3) 遺物 ……112
第 56 図　権現山遺跡 2 区 SI-1a (4) 遺物 ……114
第 57 図　権現山遺跡 2 区 SI-1a (5) 遺物 ……116
第 58 図　権現山遺跡 2 区 SI-1a (6) 遺物 ……118
第 59 図　権現山遺跡 2 区 SI-1a (7) 遺物 ……119
第 60 図　権現山遺跡 2 区 SI-1b 遺構・遺物 ……120
第 61 図　権現山遺跡 2 区 SI-1c 遺構・遺物 ……122
第 62 図　権現山遺跡 2 区 SI-98 (1) 遺構・遺物 ……123
第 63 図　権現山遺跡 2 区 SI-98 (2) 遺物 ……124
第 64 図　権現山遺跡 2 区 SI-99a (1) 遺構 ……126
第 65 図　権現山遺跡 2 区 SI-99a (2) 遺構 ……127
第 66 図　権現山遺跡 2 区 SI-99a (3) 遺物 ……129
第 67 図　権現山遺跡 2 区 SI-99a (4) 遺物 ……131
第 68 図　権現山遺跡 2 区 SI-99a (5) 遺物 ……133
第 69 図　権現山遺跡 2 区 SI-99a (6) 遺物 ……135
第 70 図　権現山遺跡 2 区 SI-99a (7) 遺物 ……136
第 71 図　権現山遺跡 2 区 SI-99b 遺構・遺物……137
第 72 図　権現山遺跡 2 区 SB-3 遺構・遺物……139
第 73 図　権現山遺跡 2 区 SB-4 遺構……140
第 74 図　権現山遺跡 2 区 SB-121･122 遺構 ……141
第 75 図　権現山遺跡 2 区 柱穴状土坑 P-127･128･134 遺構・遺物 ……142
第 76 図　権現山遺跡 2 区 古墳時代の遺物集中地点 SX-94 遺構・遺物 ……143
第 77 図　権現山遺跡 2 区 中世の井戸 SE-63 遺構・遺物 …145
第 78 図　権現山遺跡 2 区 中世の遺構外遺物 ……145
第 79 図　権現山遺跡 2 区 SD-2･5･44･51･68･118･120 (1) 平面図 (1/600) ……146
第 80 図　権現山遺跡 2 区 SD-2･5･44･51･68･118･120 (2) 遺構・遺物 ……147
第 81 図　権現山遺跡 2 区 時期不明の溝 SD-75･78 遺構・遺物 ……149
第 82 図　権現山遺跡 2 区 時期不明の溝 SD-89･91･93 遺構・遺物 ……150
第 83 図　権現山遺跡 2 区 時期不明の掘立柱建物跡 SB-126 遺構 ……151
第 84 図　権現山遺跡 2 区 時期不明の井戸 SE-46･73･88 遺構 ……151
第 85 図　権現山遺跡 2 区 時期不明の土坑 (1) 遺構 ……153
第 86 図　権現山遺跡 2 区 時期不明の土坑 (2) 遺構 ……155
第 87 図　権現山遺跡 2 区 時期不明の土坑 (3) 遺構 ……157
第 88 図　権現山遺跡 2 区 時期不明の土坑 (4) 遺構・遺物 …158
第 89 図　権現山遺跡 2 区と杉村遺跡 GN1 区の土層柱状図とテフラ分析試料 ……164
第 90 図　杉村遺跡 GN1 区の植物珪酸体分析結果 ……167
第 91 図　権現山遺跡 2 区 39-13 グリッドの植物珪酸体分析結果 ……169
第 92 図　杉村遺跡 GN1 区と権現山遺跡 2 区の植物珪酸体の顕微鏡写真 ……170
第 93 図　権現山遺跡 2 区 39-13 グリッドにおける樹木花粉組成図 ……172
第 94 図　権現山遺跡 2 区 39-13 グリッドにおける樹木花粉組成図 (花粉総数が基数) ……172
第 95 図　磯岡遺跡 3 区 20-25 グリッドにおける樹木花粉組成図 ……173
第 96 図　磯岡遺跡 3 区 20-25 グリッドにおける樹木花粉組成図 (花粉総数が基数) ……173
第 97 図　権現山遺跡各地区および磯岡遺跡 3 区の花粉・胞子遺体 (1) ……175
第 98 図　権現山遺跡各地区および磯岡遺跡 3 区の花粉・胞子遺体 (2) ……176
第 99 図　権現山遺跡 2 区 39-13 グリッド最下層の種実 ……178
第 100 図　権現山遺跡 2 区 39-13 グリッド最下層の出土木材の顕微鏡写真 ……180
第 101 図　権現山遺跡 3 区とその周辺 (1/2,000) ……181
第 102 図　権現山遺跡 4 区 全体図 (1/400･ 等高線主曲線 20㎝) ……183
第 103 図　権現山遺跡 4 区 SI-1 遺構・遺物 ……184
第 104 図　権現山遺跡 4 区 SI-2 (1) 遺構・遺物 ……186
第 105 図　権現山遺跡 4 区 SI-2 (2) 遺物 ……188
第 106 図　権現山遺跡 4 区 SI-3 遺構・遺物 ……189
第 107 図　権現山遺跡 4 区 SI-4 遺構・遺物 ……192
第 108 図　権現山遺跡 4 区 SI-5 遺構・遺物 ……194
第 109 図　権現山遺跡 4 区 SI-6 遺構・遺物 ……195
第 110 図　権現山遺跡 4 区 SI-7 (1) 遺構 ……196
第 111 図　権現山遺跡 4 区 SI-7 (2) 遺構 ……197
第 112 図　権現山遺跡 4 区 SI-7 (3) 遺物 ……199
第 113 図　権現山遺跡 4 区 SI-8 遺構・遺物 ……201
第 114 図　権現山遺跡 4 区 SI-9 遺構・遺物 ……203
第 115 図　権現山遺跡 4 区 SI-10 (1) 遺構 ……204
第 116 図　権現山遺跡 4 区 SI-10 (2) 遺物 ……206
第 117 図　権現山遺跡 4 区 SI-10 (3) 遺物 ……209
第 118 図　権現山遺跡 4 区 SI-11 (1) 遺構・遺物 ……211
第 119 図　権現山遺跡 4 区 SI-11 (2) 遺物 ……212
第 120 図　権現山遺跡 4 区 SI-12 (1) 遺構 ……215

第 121 図　権現山遺跡 4 区 SI-12 (2) 遺物 …… 216
第 122 図　権現山遺跡 4 区 SI-13 (1) 遺構 …… 218
第 123 図　権現山遺跡 4 区 SI-13 (2) 遺物 …… 220
第 124 図　権現山遺跡 4 区 SI-14 (1) 遺構・遺物 …… 222
第 125 図　権現山遺跡 4 区 SI-14 (2) 遺物 …… 224
第 126 図　権現山遺跡 4 区 SI-15 遺構・遺物 …… 227
第 127 図　権現山遺跡 4 区 SI-16 (1) 遺構 …… 230
第 128 図　権現山遺跡 4 区 SI-16 (2) 遺物 …… 231
第 129 図　権現山遺跡 4 区 SI-17 遺構・遺物 …… 233
第 130 図　権現山遺跡 4 区 SI-18 遺構・遺物 …… 236
第 131 図　権現山遺跡 4 区 SI-19 遺構・遺物 …… 238
第 132 図　権現山遺跡 4 区 SI-20 遺構・遺物 …… 241
第 133 図　権現山遺跡 4 区 SI-21 遺構・遺物 …… 242
第 134 図　権現山遺跡 4 区 SI-22 遺構・遺物 …… 244
第 135 図　権現山遺跡 4 区 SI-24 (1) 遺構・遺物 …… 246
第 136 図　権現山遺跡 4 区 SI-24 (2) 遺物 …… 248
第 137 図　権現山遺跡 4 区 SI-24 (3) 遺物 …… 250
第 138 図　権現山遺跡 4 区 SI-24 (4) 遺物 …… 252
第 139 図　権現山遺跡 4 区 SI-25 遺構・遺物 …… 254
第 140 図　権現山遺跡 4 区 SI-26 (1) 遺構 …… 256
第 141 図　権現山遺跡 4 区 SI-26 (2) 遺物 …… 257
第 142 図　権現山遺跡 4 区 SI-27 (1) 遺構 …… 259
第 143 図　権現山遺跡 4 区 SI-27 (2) 遺物 …… 260
第 144 図　権現山遺跡 4 区 SI-28 (1) 遺構・遺物 …… 265
第 145 図　権現山遺跡 4 区 SI-28 (2) 遺物 …… 266
第 146 図　権現山遺跡 4 区 SI-29 (1) 遺構 …… 267
第 147 図　権現山遺跡 4 区 SI-29 (2) 遺物 …… 269
第 148 図　権現山遺跡 4 区 SI-30a 遺構・遺物 …… 271
第 149 図　権現山遺跡 4 区 SI-30b 遺構・遺物 …… 273
第 150 図　権現山遺跡 4 区 SI-31 (1) 遺構 …… 274
第 151 図　権現山遺跡 4 区 SI-31 (2) 遺物 …… 276
第 152 図　権現山遺跡 4 区 SI-32 遺構・遺物 …… 278
第 153 図　権現山遺跡 4 区 SI-33 (1) 遺構 …… 279
第 154 図　権現山遺跡 4 区 SI-33 (2) 遺物 …… 280
第 155 図　権現山遺跡 4 区 SI-34 遺構・遺物 …… 281
第 156 図　権現山遺跡 4 区 SI-54 遺構・遺物 …… 282
第 157 図　権現山遺跡 4 区 SI-59 (1) 遺構・遺物 …… 284
第 158 図　権現山遺跡 4 区 SI-59 (2) 遺物 …… 286
第 159 図　権現山遺跡 4 区 SI-59 (3) 遺物 …… 288
第 160 図　権現山遺跡 4 区 SI-74 (1) 遺構 …… 290
第 161 図　権現山遺跡 4 区 SI-74 (2) 遺物 …… 292
第 162 図　権現山遺跡 4 区 SI-76 遺構・遺物 …… 294
第 163 図　権現山遺跡 4 区 SI-92 遺構・遺物 …… 295
第 164 図　権現山遺跡 4 区 SI-103 遺構・遺物 …… 296
第 165 図　権現山遺跡 4 区 SI-130 遺構・遺物 …… 297
第 166 図　権現山遺跡 4 区 古墳時代の掘立柱建物 SB-62・63 遺構・遺物 …… 299
第 167 図　権現山遺跡 4 区 古墳時代の周溝状遺構 SX-23 遺構・遺物 …… 301
第 168 図　権現山遺跡 4 区 古墳時代の溝 SD-143 遺構・遺物 …… 302
第 169 図　権現山遺跡 4 区 古墳時代の円筒形土坑 (1) 遺構 … 304
第 170 図　権現山遺跡 4 区 古墳時代の円筒形土坑 (2) 遺構 … 305
第 171 図　権現山遺跡 4 区 古墳時代の円筒形土坑 (3) 遺物 … 307
第 172 図　権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑 (1) 遺構 …… 309
第 173 図　権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑 (2) 遺物 …… 311
第 174 図　権現山遺跡 4 区 古墳時代の柱穴状土坑 P-107 遺構・遺物 …… 312
第 175 図　権現山遺跡 4 区 時期不明の掘立柱建物 SB-132・153 遺構 …… 313
第 176 図　権現山遺跡 4 区 時期不明の掘立柱建物 SB-155 遺構 …… 314
第 177 図　権現山遺跡 4 区 時期不明の井戸 SE-72・73 遺構・遺物 …… 315
第 178 図　権現山遺跡 4 区 時期不明の溝 SD-154 遺構 …… 316
第 179 図　権現山遺跡 4 区 時期不明の土坑 遺構 …… 317
第 180 図　権現山遺跡 4 区 時期不明の柱穴状土坑 P-108 ～ 156 遺構 …… 318
第 181 図　権現山遺跡 4 区 遺構外出土の遺物 …… 319
第 182 図　権現山遺跡 4 区 低地トレンチ 断面図 …… 320
第 183 図　権現山遺跡 4 区 土層柱状図とテフラ分析試料 …… 322
第 184 図　権現山遺跡 4 区 植物珪酸体分析結果 …… 326
第 185 図　権現山遺跡 4 区 植物珪酸体の顕微鏡写真 …… 327
第 186 図　権現山遺跡 4 区 埋没谷部における花粉ダイアグラム …… 330
第 187 図　権現山遺跡 4 区の花粉 …… 331

表　目　次

第 1 表　東谷・中島地区遺跡群遺跡一覧表 …… 5
第 2 表　東谷・中島地区周辺の遺跡 …… 15
第 3 表　杉村遺跡 GN1 区 SI-1 出土遺物 …… 39
第 4 表　杉村遺跡 GN1 区 SI-2 出土遺物 …… 41
第 5 表　杉村遺跡 GN1 区 SI-3 出土遺物 …… 43 ～ 45
第 6 表　杉村遺跡 GN1 区 SI-4 出土遺物 …… 46 ～ 49
第 7 表　杉村遺跡 GN1 区 SI-5 出土遺物 …… 54・55
第 8 表　杉村遺跡 GN1 区 SK-53 出土遺物 …… 56
第 9 表　杉村遺跡 GN1 区 遺構外出土遺物 …… 57
第 10 表　杉村遺跡 GN1 区 SI-6 出土遺物 …… 60・61
第 11 表　杉村遺跡 GN1 区 SD-24 出土遺物 …… 62
第 12 表　杉村遺跡 GN1 区 時期不明の土坑 …… 63 ～ 67
第 13 表　権現山遺跡各地区の縄文・弥生時代石器 …… 99 ～ 105
第 14 表　権現山遺跡 2 区 SI-1a 出土遺物 …… 111 ～ 119
第 15 表　権現山遺跡 2 区 SI-1b 出土遺物 …… 121
第 16 表　権現山遺跡 2 区 SI-1c 出土遺物 …… 122
第 17 表　権現山遺跡 2 区 SI-98 出土遺物 …… 125
第 18 表　権現山遺跡 2 区 SI-99a 出土遺物 …… 128 ～ 136
第 19 表　権現山遺跡 2 区 SI-99b 出土遺物 …… 138
第 20 表　権現山遺跡 2 区 SB-3 出土遺物 …… 138
第 21 表　権現山遺跡 2 区 古墳時代の柱穴状土坑 …… 142
第 22 表　権現山遺跡 2 区 P-134 出土遺物 …… 142
第 23 表　権現山遺跡 2 区 SX-94 出土遺物 …… 144
第 24 表　権現山遺跡 2 区 SE-63 出土遺物 …… 145
第 25 表　権現山遺跡 2 区 中世の遺構外出土遺物 …… 145
第 26 表　権現山遺跡 2 区 SD-51 出土遺物 …… 148
第 27 表　権現山遺跡 2 区 SD-78 出土遺物 …… 149
第 28 表　権現山遺跡 2 区 時期不明の土坑 …… 152 ～ 159
第 29 表　権現山遺跡 2 区 SK-125 出土遺物 …… 159
第 30 表　権現山遺跡 2 区・杉村遺跡 GN1 区 テフラ検出分析結果 …… 163
第 31 表　権現山遺跡 2 区・杉村遺跡 GN1 区 屈折率測定結果 …… 163
第 32 表　権現山遺跡 2 区・磯岡遺跡 3 区 放射性炭素年代測定試料と方法 …… 164
第 33 表　権現山遺跡 2 区・磯岡遺跡 3 区 放射性炭素年代測定結果 …… 164
第 34 表　杉村遺跡 GN1 区 植物珪酸体分析結果 …… 167
第 35 表　権現山遺跡 2 区 植物珪酸体分析結果 …… 168
第 36 表　権現山遺跡 2 区・磯岡遺跡 3 区 花粉分析結果 …… 174
第 37 表　権現山遺跡 2 区 種実同定結果 …… 177
第 38 表　権現山遺跡 4 区 SI-1 出土遺物 …… 184・185
第 39 表　権現山遺跡 4 区 SI-2 出土遺物 …… 187・188
第 40 表　権現山遺跡 4 区 SI-3 出土遺物 …… 190
第 41 表　権現山遺跡 4 区 SI-4 出土遺物 …… 193
第 42 表　権現山遺跡 4 区 SI-5 出土遺物 …… 194
第 43 表　権現山遺跡 4 区 SI-6 出土遺物 …… 195
第 44 表　権現山遺跡 4 区 SI-7 出土遺物 …… 198 ～ 200
第 45 表　権現山遺跡 4 区 SI-7 滑石製臼玉の計測値 …… 200
第 46 表　権現山遺跡 4 区 SI-8 出土遺物 …… 201
第 47 表　権現山遺跡 4 区 SI-9 出土遺物 …… 202
第 48 表　権現山遺跡 4 区 SI-10 出土遺物 …… 207 ～ 210
第 49 表　権現山遺跡 4 区 SI-11 出土遺物 …… 213 ～ 214
第 50 表　権現山遺跡 4 区 SI-12 出土遺物 …… 217
第 51 表　権現山遺跡 4 区 SI-13 出土遺物 …… 219 ～ 221
第 52 表　権現山遺跡 4 区 SI-14 出土遺物 …… 223 ～ 226
第 53 表　権現山遺跡 4 区 SI-15 出土遺物 …… 228
第 54 表　権現山遺跡 4 区 SI-16 出土遺物 …… 229 ～ 232
第 55 表　権現山遺跡 4 区 SI-17 出土遺物 …… 234
第 56 表　権現山遺跡 4 区 SI-18 出土遺物 …… 237
第 57 表　権現山遺跡 4 区 SI-19 出土遺物 …… 239 ～ 240
第 58 表　権現山遺跡 4 区 SI-20 出土遺物 …… 241

第 59 表　権現山遺跡 4 区 SI-21 出土遺物 …… 243
第 60 表　権現山遺跡 4 区 SI-22 出土遺物 …… 244
第 61 表　権現山遺跡 4 区 SI-24 出土遺物 …… 247 ～ 252
第 62 表　権現山遺跡 4 区 SI-25 出土遺物 …… 253 ～ 255
第 63 表　権現山遺跡 4 区 SI-26 出土遺物 …… 258
第 64 表　権現山遺跡 4 区 SI-27 出土遺物 …… 261 ～ 263
第 65 表　権現山遺跡 4 区 SI-28 出土遺物 …… 264 ～ 266
第 66 表　権現山遺跡 4 区 SI-29 出土遺物 …… 268 ～ 270
第 67 表　権現山遺跡 4 区 SI-30a 出土遺物 …… 272
第 68 表　権現山遺跡 4 区 SI-30b 出土遺物 …… 273
第 69 表　権現山遺跡 4 区 SI-31 出土遺物 …… 275 ～ 277
第 70 表　権現山遺跡 4 区 SI-32 出土遺物 …… 278
第 71 表　権現山遺跡 4 区 SI-33 出土遺物 …… 279 ～ 281
第 72 表　権現山遺跡 4 区 SI-34 出土遺物 …… 281
第 73 表　権現山遺跡 4 区 SI-54 出土遺物 …… 282
第 74 表　権現山遺跡 4 区 SI-59 出土遺物 …… 283 ～ 289
第 75 表　権現山遺跡 4 区 SI-74 出土遺物 …… 291 ～ 293
第 76 表　権現山遺跡 4 区 SI-76 出土遺物 …… 294
第 77 表　権現山遺跡 4 区 SI-92 出土遺物 …… 295
第 78 表　権現山遺跡 4 区 SI-103 出土遺物 …… 296
第 79 表　権現山遺跡 4 区 SI-130 出土遺物 …… 298
第 80 表　権現山遺跡 4 区 SB-63 出土遺物 …… 299
第 81 表　権現山遺跡 4 区 SX-23 出土遺物 …… 301
第 82 表　権現山遺跡 4 区 SD-143 出土遺物 …… 302
第 83 表　権現山遺跡 4 区 古墳時代の円筒形土坑 …… 303 ～ 306
第 84 表　権現山遺跡 4 区 古墳時代の円筒形土坑 出土遺物 …… 306 ～ 308
第 85 表　権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑 …… 308 ～ 310
第 86 表　権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑 出土遺物 …… 310・311
第 87 表　権現山遺跡 4 区 P-107 出土遺物 …… 312
第 88 表　権現山遺跡 4 区 SE-72 出土遺物 …… 315
第 89 表　権現山遺跡 4 区 時期不明の土坑 …… 316 ～ 318
第 90 表　権現山遺跡 4 区 時期不明の柱穴状土坑 …… 318
第 91 表　権現山遺跡 4 区 遺構外出土遺物 …… 319
第 92 表　権現山遺跡 4 区 テフラ検出分析結果 …… 323
第 93 表　権現山遺跡 4 区 屈折率測定結果 …… 323
第 94 表　権現山遺跡 4 区 放射性炭素年代測定試料と方法 … 324
第 95 表　権現山遺跡 4 区 放射性炭素年代測定結果 …… 324
第 96 表　権現山遺跡 4 区 植物珪酸体分析結果 …… 326
第 97 表　権現山遺跡 4 区 花粉分析結果 …… 329

杉村遺跡・権現山遺跡北部　遺構一覧・検索表（第 1 分冊）

杉村遺跡 GN1 区

弥生時代の土坑

	グリッド	形状	重複関係	規模（m）	深さ（m）	掲載ページ
SK-57	41.5-19.0、42.0-19.0	楕円形	SD-8 より古	長径 2.80 ×短径 2.20	0.32	36 ～ 37

古墳時代の竪穴建物跡

	グリッド	規模（m）	重複関係	火処	付属施設	掲載ページ
SI-1	42.0-17.0	東西 6.30 ×南北 6.10		炉 1（北）	貯蔵穴 2	37 ～ 39
SI-2	41.5-17.0･17.5	東西 6.47 ×南北 6.65	SK-11 より古	不明（炉 1?）	貯蔵穴 1	39 ～ 41
SI-3	41.5-19.5、42 .0-19.5	東西 5.78 ×南北 5.51		カマド 1（北）	貯蔵穴 2、入口施設	41 ～ 45
SI-4	41.0-19.0･19.5、41.5-19.0･19.5	東西 6.28 ×南北 5.84	SD-8 より古	カマド 1（北）	貯蔵穴 2	46 ～ 49
SI-5	40.5-18.5･19.0、41.0-18.5･19.0	東西 9.29 ×南北 9.48		カマド 1（北）	貯蔵穴 2、入口施設	49 ～ 55

古墳時代の土坑

	グリッド	形状	重複関係	規模（m）	深さ（m）	掲載ページ
SK-53	41.0-17.5	不整楕円形		長径 1.01 ×短径 0.83	0.12	56

奈良時代の竪穴建物跡

	グリッド	規模（m）	重複関係	火処	付属施設	掲載ページ
SI-6	40.5-18.0･18.5	東西 4.40 ×南北 3.26	SD-24 より古	カマド 1（北）	入口施設	57 ～ 61

時期不明の溝状遺構

	グリッド	重複関係	幅（cm）	深さ（cm）	その他	掲載ページ
SD-8	40.0 ～ 43.5-19.0 ～ 19.5	SK-57 と SI-4 より新	60 ～ 200	55 ～ 60	北関東自動車道路調査区の第 135B 号溝跡に連続	61 ～ 62
SD-24	39.5 ～ 42.5-18.0 ～ 19.5	SI-6 → SD-24 → SK-26･27･28	70 ～ 110	14 ～ 35	北関東自動車道路調査区の第 103A・B 号溝跡に重複 SD-64 と連続？	61 ～ 62
SD-64	42.5-19.5	SK-45 より古	80 ～ 100	最大 20	SD-24 と連続？	62 ～ 63

時期不明の土坑 45 基（SK-9 ～ 23･25 ～ 36･39 ～ 45･47･50･51･54 ～ 56･60 ～ 63）は第 12 表（p.63・66 ～ 67）を参照。

権現山遺跡 2 区

古墳時代の竪穴建物跡

	グリッド	規模（m）	重複関係	火処	付属施設	掲載ページ
SI-1a	46.5-11.0･11.5、47.0-11.0･11.5	東西 8.07 ×南北 8.22	SI-1c → SI-1b → SI-1a	カマド 1（北）	貯蔵穴 2、入口施設	106・110 ～ 119
SI-1b	同上	東西 7.02 ×南北 6.98	SI-1c → SI-1b → SI-1a	カマド 1（北）	貯蔵穴 1、入口施設	119 ～ 121
SI-1c	同上	東西 6.20 ×南北 6.15	SI-1c → SI-1b → SI-1a	カマド 1（北）	貯蔵穴 2	121 ～ 122
SI-98	48.5-11.5、49.0-11.5	東西（推定）6 ×南北 5.78		カマド 1（北）	貯蔵穴 1	122 ～ 125
SI-99a	48.5-10.5･11.0、49.0-10.5･11.0	東西 7.10 ×南北 7.16	SI-99b → SI-99a	カマド 1（北）	貯蔵穴 1	125 ～ 136
SI-99b	同上	東西 5.88 ×南北 5.86	SI-99b → SI-99a	カマド 1（北）	貯蔵穴 1、入口施設	136 ～ 138

古墳時代の掘立柱建物跡

	グリッド	形状	重複関係	長さ	幅	掲載ページ
SB-3	46.5-10.5･11.0、47.0-10.5･11.0	長方形	SB-4 と重複	桁行 3 間（8.03 ～ 8.15m）	梁行 2 間（4.52 ～ 4.98m）	138 ～ 139
SB-4	46.5-10.5･11.0、47.0-10.5･11.0	正方形	SK-79 より古、SB-3 と重複	桁行 2 間（4.14 ～ 4.22m）	梁行 2 間（4.14 ～ 4.22m）	140
SB-121	48.0-10.5、48.5-10.5	長方形		桁行 3 間（6.37 ～ 6.48m）	梁行 2 間（4.17 ～ 4.52m）	140 ～ 141
SB-122	48.0-10.5 と 11.0	長方形		桁行 1 間（2.88 ～ 2.91m）	梁行 1 間（2.56 ～ 2.64m）	140 ～ 141

古墳時代の柱穴状土坑 3 基（P-127･128･134）は第 21 表（p.142）を参照。

古墳時代の遺物出土地点

	グリッド	立地	重複関係	範囲（m）	深さ（m）	掲載ページ
SX-94	37.0-12.5･13.0、37.5-12.5･13.0	北東緩斜面	SD-91 より古	長軸 15.7 ×短軸 6	0.05 ～ 0.60	142 ～ 144

中世の井戸跡

	グリッド	形状	重複関係	口径（m）	深さ（m）	掲載ページ
SE-63	48.5-13.5、49.0-13.5	円形		2.53 × 2.25	0.77 以上	145

近世の溝状遺構

	グリッド	形状	重複関係	幅（m）	深さ（m）	掲載ページ
SD-5a	44.0 ～ 47.5-11.5 ～ 13.0	L 字状	SK-14 より古?、SD-2 と同時？	0.6 ～ 1.05	0.18 ～ 0.48	145 ～ 147
SD-5b	47.5 ～ 50.5-11.0 ～ 13.5	方形区画溝		1.2 ～ 2.7	0.32 ～ 0.66	146 ～ 147
SD-51	47.5 ～ 50.0-12.5 ～ 15.0		SK-52 より新、SD-68 と重複	0.9 ～ 1.8	0.14 ～ 0.52	146 ～ 148
SD-118	47.5-11.0 ～ 12.5	直線状	SK-115 より新	0.6 ～ 1.5	0.14 ～ 0.20	146 ～ 148

時期不明の溝状遺構

	グリッド	形状	重複関係	幅（m）	深さ（m）	掲載ページ
SD-2	46.0-10.5・11.0・11.5	直線	SD-5a と同時？	0.6 ～ 0.9	0.12	146 ～ 148
SD-44	45.0-11.0、45.5-11.0	直線		0.45 ～ 0.6	0.11	146 ～ 148
SD-68	49.0-14.0、50.0-13.0・14.0、51.0-13.0	直線	SD-51 と重複	0.9 ～ 1.95	0.16 ～ 0.7	146 ～ 148
SD-75	42.0-11.0、43.0-11.0、44.0-11.0	不整弧状	SK-76・77 より古	0.1 ～ 1.5	0.21 ～ 0.38	148 ～ 149
SD-78	42.0-11.0・12.0、43.0-12.0	直線		0.5 ～ 1.5	0.37 ～ 0.41	149
SD-89	37.0-11.0・11.5、37.5-12.0・12.5	直線	SD-93 より古	0.4 ～ 1.3	0.07 ～ 0.16	149 ～ 150
SD-91	37.0-12.5、37.5-12.5	「く」の字形	SX-94 より新	0.4 ～ 1.3	0.07 ～ 0.16	150
SD-93	37.0-11.0 ～ 38.0-11.5	直線	SD-89 より新	1.1 ～ 1.6	0.4 ～ 0.6	150
SD-120	49.5-10.5 ～ 50.5-10.5	直線		0.3 ～ 0.9	0.08 ～ 0.1	146 ～ 147・150

時期不明の掘立柱建物跡

	グリッド	形状	重複関係	長さ	幅	掲載ページ
SB-126	47.0-10.5、47.5-10.5	長方形		南北 2 間（4.32 ～ 4.58m）	東西 2 間（4.47 ～ 4.64m）	150 ～ 151

時期不明の井戸跡

	グリッド	形状	重複関係	口径（m）	深さ（m）	掲載ページ
SE-46	46.5-12.0	円形	SK-26 より古	1.93 × 1.83	0.95	151
SE-73	50.0-14.0	円筒形		1.50 × 1.36	約 1	151 ～ 152
SE-88	37.5-11.5	円形		1.51 × 1.43	0.71	151 ～ 152

時期不明の土坑 103 基（SK-6 ～ 43・45・47 ～ 50・52・54 ～ 62・64 ～ 67・70 ～ 72・74・76・77・79 ～ 87・92・96・97・100 ～ 117・119・123 ～ 125・129 ～ 133）は第 28 表（p.152・154・156・159）を参照。

権現山遺跡４区

古墳時代の竪穴建物跡

	グリッド	規模（m）	重複関係	火処	付属施設	掲載ページ
SI-1	36.5-11.5	東西 5.05 ×南北 4.91	SK-36 より古	不明	入口施設 1	182・184 ～ 185
SI-2	36.0-12.0、36.5-12.0	東西 5.27 ×南北 5.05		カマド 1（東）	貯蔵穴 1、入口施設	185 ～ 188
SI-3	35.5-11.5、36.0-11.5	北東 - 南西 5.35 ×南東 - 北西 5.20	SI-92 → SK-93 → SI-3、SI-4 より新	カマド 1（北）	貯蔵穴 1	189 ～ 190
SI-4	36.0-11.5	東西 4.33 ×南北 4.55	SI-3 より古	カマド 1（東）	貯蔵穴 1	191 ～ 193
SI-5	35.5-11.0、36.0-11.0	東西 2.08 以上×南北 3.92		不明	貯蔵穴 1	193 ～ 194
SI-6	35.0-11.0、35.5-11.0	東西 1.70 以上×南北 3.52		不明	貯蔵穴 1	194 ～ 195
SI-7	35.0-11.5、35.5-11.5	東西 6.78 ×南北 6.72	SI-8 より新、SB-153 より古？	カマド 1（北）	貯蔵穴 1、張出土坑 1、入口施設	196 ～ 200
SI-8	35.5-11.5	東西 3.72 ×南北 3.84	SI-7 より古	カマド 1（北）	貯蔵穴 1	201
SI-9	35.0-11.5	東西 4.8 ×南北 4.33		カマド 1（北）	貯蔵穴 1	202 ～ 203
SI-10	36.0-12.0	東西 6.50 ×南北 6.20	SK-45 より古	炉 1（中央）、カマド 1（東）	貯蔵穴 1、入口施設	204 ～ 210
SI-11	35.5-11.5・12.0、36.0-11.5・12.0	東西 5.38 ×南北 5.15	SK-48・49 より新	カマド 1（北）	貯蔵穴 1、入口施設	210 ～ 214
SI-12	35.0-11.5・12.0、35.5-11.5・12.0	東西 5.59 ×南北 5.55	SI-13・54 → SI-12 → SK-66	カマド 1（東）		215 ～ 217
SI-13	35.0-11.5・12.0	東西 5.65 ×南北 5.82	SI-54 → SI-13 → SI-12、SK-52 より新	カマド 1（北）	貯蔵穴 2、入口施設	217 ～ 221
SI-14	35.0-12.0・12.5、35.5-12.0・12.5	東西 5.81 ×南北 5.05	SK-120 → SI-14 → SK-109、SB-155 と重複？	カマド 1（北）	張出土坑 1、入口施設	221 ～ 226
SI-15	34.5-11.5・12.0、35.0-11.5・12.0	東西 5.90 ×南北 5.70	SI-16 より新、SB-132 より新？	カマド 1（北）		226 ～ 228
SI-16	34.5-11.5・12.0	東西 6.50 ×南北 6.18	SI-15・19 より古	炉 1（東）	貯蔵穴 1	229 ～ 232
SI-17	34.5-12.0	東西 4.95 ×南北 5.20	SI-18・19 より新	カマド 1（北）		233 ～ 234
SI-18	34.0-12.0・12.5、34.5-12.0・12.5	東西 5.75 ×南北 5.68	SI-18 → SI-19 → SI-17、SK-157 より新	カマド 1（北）	貯蔵穴 1	235 ～ 237
SI-19	34.0・34.5-12.0	東西 4.75 ×南北（推定）4.8	SI-18 → SI-19 → SI-17、SI-16 より新	カマド 1（北）	貯蔵穴 1、入口施設	238 ～ 240
SI-20	34.0-11.5	東西 3.54 以上×南北 4.93	SB-62・63 より古	炉 3（北・中央・東）	貯蔵穴 1	240 ～ 241
SI-21	33.0-11.5・12.0、33.5-11.5・12.0	東西 4.51 ×南北 4.55		カマド 1（北）	張出土坑 1、入口施設	241 ～ 243
SI-22	33.0-11.5・12.0	東西 4.77 ×南北 3.63 以上		炉 1（北）		244
SI-24	34.5-12.5・13.0、35.0-12.5	東西 6.51 ×南北 6.49	SI-76 より新	カマド 1（北）	貯蔵穴 1	245 ～ 252
SI-25	35.0-13.0	東西 3.60 ×南北 5.25		炉 2（西・南）	貯蔵穴 1	253 ～ 255
SI-26	35.0-13.0・13.5、35.5-13.0・13.5	東西 7.11 ×南北 7.33	SK-133・SK-135 より新、SK-60 より古？	カマド 1（北）	貯蔵穴 1	255 ～ 258
SI-27	35.5-12.5	東西 5.42 ×南北 5.40	SI-59 より古、SB-155 柱穴と重複	炉 1（北）	貯蔵穴 3	258 ～ 263
SI-28	36.0-12.0・12.5、36.5-12.0・12.5	東西 4.1 ×南北 4.10		カマド 1（東）	貯蔵穴 1	264 ～ 266
SI-29	36.0-13.0・13.5	東西 6.35 ×南北 6.00	SI-30a、SK-50・51 より古	炉 1（西）	貯蔵穴 3、入口施設	267 ～ 270
SI-30a	36.0-13.5	東西 5.55 ×南北 5.70	SI-29・30b より新	カマド 1（北）	貯蔵穴 1	270 ～ 272
SI-30b	36.0-13.5	東西 4.77 ×南北 4.75	SI-30a より古	カマド 1（北）	貯蔵穴 2、入口施設	272 ～ 273

SI-31	36.5-12.5・13.0	東西 5.82 ×南北 5.42		カマド 1（北）	貯蔵穴 1	274 ～ 277
SI-32	36.5-13.0・13.5	東西 6.45 ×南北 6.20		炉 1（北）	貯蔵穴 2	277 ～ 278
SI-33	36.0-13.5、36.5-13.5	東西 5.62 ×南北 5.68		カマド 1（北）		278 ～ 281
SI-34	36.5-11.0・11.5	東西 4.74 ×南北残 2.40 東西とほぼ同じと推定	SK-35 より古	不明		281
SI-54	35.0-11.5・12.0、 35.5-11.5・12.0	東西 4.00 ×南北残 1.15 東西とほぼ同じと推定	SI-12・13 より古	不明	貯蔵穴 1	282
SI-59	35.5・36.0-12.0・12.5	東西 6.36 ×南北 6.28	SI-27・SK-129 より新	カマド 1（北）	貯蔵穴 1、入口施設	283 ～ 289
SI-74	35.0-12.5、35.5-12.5	東西 4.60 ×南北 4.52	SK-77・SK-142 より新	カマド 1（北）	貯蔵穴 1	290 ～ 293
SI-76	34.5-12.5・13.0	東西 4.18 ×南北 4.20	SI-24 より古	カマド 1（北）	貯蔵穴 1、入口施設	293 ～ 294
SI-92	35.5-11.5、 36.0-11.0・11.5	東西約 4.30 ×南北約 4.60	SI-92 → SK-93 → SI-3	炉 1（東）	貯蔵穴 1	294 ～ 295
SI-103	35.5-13.0	東西 3.70 ×南北 2.90	SK-128・134 より新	カマド 1（北）	貯蔵穴 1	296
SI-130	33.0・33.5-11.5	東西 3.1 以上×南北 7.48	SK-121 より古	炉 1（東）	貯蔵穴 1	297 ～ 298

古墳時代の掘立柱建物跡

	グリッド	形状	重複関係	長さ	幅	掲載ページ
SB-62	34.0-11.5	長方形	SI-20 より新	東西 2 間（3.6m）以上	南北 3 間（6.60m）	298 ～ 299
SB-63	34.0-11.5	長方形	SI-20 より新	東西（推定）2 間以上	南北 2 間（5.01m）	299 ～ 300

古墳時代の方形周溝状遺構

	グリッド	形状	重複関係	外径（m）	内径（m）	掲載ページ
SX-23	34.0-12.5・13.0、 34.5-12.5・13.0	隅丸方形		6.6 × 6.54	5.74 × 5.78	300 ～ 301

古墳時代の溝状遺構

	グリッド	重複関係	幅（m）	深さ（m）	その他	掲載ページ
SD-143	31.5-11.5・12.0、 32.0-11.5 ～ 12.5	SK-87 より古	1.50	0.33 ～ 0.54	南にある SG1 区の居館と同時期	301 ～ 302

古墳時代の円筒形土坑 31 基（SK-37・45・48・49・52・53・58・60・64・67・75・77・83・85・95・97 ～ 100・102・104・113・114・116 ～ 119・125・127・129・133）は第 83 表（p.303・306）を参照。

古墳時代の土坑 21 基（SK-65・71・79・81・82・84・86・87・91・93・94・96・101・105・109・112・120・123・135・137・157）は第 85 表（p.308・310）を参照。

古墳時代の柱穴状土坑

	グリッド	形状	重複関係	規模（cm）	深さ（cm）	掲載ページ
P-107	35.0-12.5	円形		25 ～ 27	15	312

時期不明の掘立柱建物跡

	グリッド	形状	重複関係	長さ	幅	掲載ページ
SB-132	34.5-11.5、35.0-11.5	長方形	SI-15・SK-104 と重複	東西 2 間（5.35m）	南北 2 間（4.00m）	312 ～ 313
SB-153	35.5-11.5	ほぼ方形	SI-7 より新（？）・ SK-48 と重複	東西 1 間（2.3 ～ 2.4m）	南北 1 間（2.60m）	312 ～ 313
SB-155	35.5-12.0、35.5-12.5	長方形	SI-27 と重複	東西 3 間（4.02m）以上	南北 2 間（4.01m）以上	313 ～ 314

時期不明の井戸跡

	グリッド	形状	重複関係	口径（m）	深さ（m）	掲載ページ
SE-72	32.5-12.0	楕円形		長径 0.95 ×短径 0.76	1.95	314 ～ 315
SE-73	32.5-12.5	円形		長径 1.2 ×短径 1.15	1.07	314 ～ 315

時期不明の溝状遺構

	グリッド	形状	重複関係	幅（m）	深さ（m）	掲載ページ
SD-154	33.0-12.5	直線		0.95 ～ 1.15	0.07 ～ 0.11	316

時期不明の土坑 23 基（SK-35・36・50・51・66・68 ～ 70・80・88・89・106・110・111・115・121・122・128・131・134・142・146・147）は第 89 表（p.316・318）を参照。

時期不明の柱穴状土坑 7 基（P-108・148 ～ 152・156）は第 90 表（p.318）を参照。

例　言

１．本書は、独立行政法人都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴い発掘調査を実施した東谷・中島地区遺跡群の内、権現山遺跡の２区～４区・SG1 区（宇都宮市東谷町字立野・字杉村、同市砂田町字吉原・字原田に所在）、杉村遺跡 GN1 区（宇都宮市砂田町字原田・字上谷田・字吉原および河内郡上三川町大字磯岡字コムナセゴ所在）の発掘調査報告書である。

２．発掘調査は、栃木県教育委員会事務局文化財課の指導のもと、財団法人とちぎ生涯学習文化財団が独立行政法人都市再生機構と受託契約を締結し、埋蔵文化財センターが実施している。区画整理事業地内各遺跡の発掘調査は平成６年度（1994 年度）から平成 19 年度（2007 年度）まで実施した。

各遺跡周辺の確認調査は、平成６・７年度（1994・1995 年度）に実施した。権現山遺跡の本調査は、平成７年度（1995 年度）に SG2 区、平成８年度に SG1 区、平成９年度に２区、平成 10 年度に３区と SG5 区、平成 11 年度に４区と SG9 区・SG10 区、平成 12 年度に SG15 区の調査を実施した。杉村遺跡 SG1 区と GN1 区の本調査は平成８年度（1996 年度）、磯岡遺跡 SG9 区の本調査は権現山遺跡 SG9 区と一緒に平成 11 年度（1999 年度）に実施した。また、平成 17 ～ 21 年度に、上記各地区の整理作業を実施した。

今回の報告書では杉村遺跡 GN1 区と権現山遺跡北半部（２区～４区・SG1 区）を報告する。杉村遺跡 SG1 区は『東谷・中島地区遺跡群３　推定東山道関連地区』（2003）で報告済みである。権現山遺跡南半部（SG2 区・SG5 区・SG9 区・SG10 区・SG15 区）は、磯岡遺跡 SG9 区とともに続刊の報告書に掲載する。

３．東谷・中島地区遺跡群の発掘調査は以下の担当者により実施した。

平成６年度　菅谷 豊、塚本師也、塚原孝一

平成７年度　中山 晋、稲木 実、関口正明、増山孝之、山本訓志、塚原孝一、安永真一、藤田直也

平成８年度　中山 晋、稲木 実、増山孝之、山本訓志、塚原孝一、石川幸弘、藤田直也

平成９年度　初山孝行、小島昭寿、増山孝之、山本訓志、塚原孝一、石川幸弘、高野瑞枝、藤田直也

平成 10 年度　初山孝行、松本 敏、名越侍郎、岡部正晴、小島昭寿、増山孝之、山本訓志、中村享史、塚原孝一、内山敏行、石川幸弘、高野瑞枝、柿沼利幸、藤田直也、大島美智子、田中裕子

平成 11 年度　田代 隆、松本 敏、名越侍郎、岡部正晴、小島昭寿、後藤信祐、中村享史、塚原孝一、内山敏行、高野瑞枝、柿沼利幸、上原康子、藤田直也、大島美智子、田中裕子、（発掘補助員）佐藤 斉

平成 12 年度　田代 隆、名越侍郎、江頭 進、中村享史、内山敏行、上原康子、藤田直也、矢野里織、（発掘補助員）佐藤 斉、田崎真理

平成 13 年度　田代 隆、江頭 進、中村享史、内山敏行、谷中 隆、江原 英、藤田直也、矢野里織、（発掘補助員）田崎真理

平成 14 年度　田代 隆、江頭 進、馬場秀典、中村享史、内山敏行、谷中 隆、藤田直也、矢野里織、（発掘補助員）田崎真理

平成 15 年度　田代 隆、小出功一、馬場秀典、中村享史、内山敏行、谷中 隆、今平昌子、塚田浩久、（発掘補助員）岡田 圭、田崎真理

平成 16 年度　田代 隆、津野 仁、小出功一、馬場秀典、内山敏行、谷中 隆、今平昌子、（発掘補助員）田崎真理

平成 17 年度　田代 隆、津野 仁、小出功一、馬場秀典、内山敏行、谷中 隆、今平昌子、（発掘補助員）田村雅樹

平成 18 年度　田代 隆、津野 仁、篠原浩恵、内山敏行、谷中 隆、中山真理、（発掘補助員）津野田陽介

平成 19 年度　後藤信祐、大瀧貴史、石田善成、内山敏行、谷中 隆、今平昌子、宮田宜浩、峰崎武昭、田村雅樹、（発掘補助員）津野田陽介

平成 20 年度　後藤信祐、内山敏行、今平昌子、亀田幸久
平成 21 年度　塚原孝一、内山敏行、今平昌子、亀田幸久
４．各調査区の発掘調査は以下の担当者により実施した。
平成８年度（杉村遺跡 GN1 区）　増山孝之・石川幸弘・藤田直也・山本訓志
平成８年度（権現山遺跡 SG1 区）中山 晋・稲木 実・増山孝之・石川幸弘・藤田直也・山本訓志
平成９年度（権現山遺跡２区）　山本訓志・高野瑞枝
平成 10 年度（権現山遺跡３区）小島昭寿
平成 11 年度（権現山遺跡４区）岡部正晴・塚原孝一・高野瑞枝
５．本文の執筆は後藤信祐・谷中隆・亀田幸久・内山敏行、編集は内山敏行が行った。第１章第１・２節と第２章第１節は、既刊の報告書９冊（『東谷・中島地区遺跡群』１～９）の記述をもとに、権現山遺跡・杉村遺跡にかかわる部分等を加除修正した。これ以外の執筆分担は、遺構が後藤・谷中・内山、古墳時代以降の遺物は谷中・内山、旧石器・縄文・弥生時代（第５章）が亀田・内山、まとめは内山が担当した。また、鍛冶関連遺物については穴澤義功氏、自然科学分析結果は大澤正己氏（九州テクノリサーチＴＡＣセンター）・株式会社古環境研究所・パリノ・サーヴェイ株式会社による。
６．呪符木簡の釈読と実測は田熊清彦氏（栃木県教育委員会事務局文化財課）に依頼した。また、鍛冶関連遺物の分類と観察を穴澤義功氏、鍛冶関連遺物の金属学的分析を九州テクノリサーチＴＡＣセンター、基準点測量・航空写真撮影・航空写真測量と遺跡周辺全体図デジタルトレースを中央航業株式会社、自然科学分析を株式会社古環境研究所とパリノ・サーヴェイ株式会社にそれぞれ委託した。
７．遺構写真は各調査担当者が、遺物写真は内山が撮影した。尖頭器（図版 99 の上段）は小川忠博氏、遺物のＸ線写真は車塚哲久、航空写真は中央航業株式会社が撮影した。
８．発掘調査から報告書作成まで、次の諸機関及び諸氏に御協力、御指導を頂いた。記して謝意を表したい。
都市再生機構栃木開発事務所、宇都宮市教育委員会、上三川町教育委員会
阿部芳郎・中村信博・箱崎和久・藤澤良祐・藤野一之・簗瀬裕一（五十音順、敬称略）
９．各地区の調査成果は、栃木県教育委員会『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』20 平成８年度 (1996) ～『同年報』23 平成 11 年度 (1999)、『埋蔵文化財センター年報』第７号（平成９年度）～第 10 号（平成 12 年度版）、宇都宮市教育委員会文化課『宇都宮市文化財年報』第 13 号（平成８年度）～第 16 号（平成 11 年度）で一部概要が公表されているが、本書をもって正報告とする。
10．本報告書名は遺跡名ではなく、業務名である。
11．本遺跡の遺物・図面・写真等は財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターが保管している。
12．発掘調査（確認調査・本調査）には次の方々の御協力を得た。
会沢嘉明、青木良人、青柳　茂、阿久津正代子、阿久津フミ、阿久津昌子、鮎澤賢三、新井みや子、荒井光美、飯田国松、石井けい子、石川晶子、石川東司、石川てる子、石崎富美子、石崎幸子、石塚洋太郎、石渡ヨシイ、磯崎恵子、石濱ふみ子、伊東祐子、稲垣　節、稲川洋子、稲葉るみ子、猪瀬岩夫、今井光子、入江キイ、入江文子、入江タカ子、入江　徹、入江つや子、入江通子、岩本文子、上野久子、臼井ツヤ、榎本健夫、大垣カツ、大垣一子、太田勝雄、太田リエ子、大塚スガ、大塚三代子、大塚サダ、岡田紀子、岡田イセ、岡田　満、小澤一雄、尾島サキ、片山重子、加藤マツエ、川島利子、川島　昭、川畑忠久、木村昭絵、工藤英子、黒川法子、毛塚雪子、郷間和子、小島清子、小高真理子、小林マス、小林ミツエ、斉藤みつ、斎藤幸子、斎藤近由、坂井原弓子、坂入廣子、坂入厚子、坂本キミ子、笹崎剛夫、佐藤武尚、佐藤ヨシ、佐藤つや子、佐藤ミサ子、下谷文男、篠原信子、柴タミ子、清水タネ、椎貝フヂエ、椎貝祥子、白井チセ子、杉山　巧、鈴木恒正、鈴木ヨシ子、高木ハマ、高嶋絹子、高嶋勝征、高嶋典子、高嶋ミヨ子、高嶋キヨノ、高島秀子、高嶋一平、高田滋子、高野ヨシ子、高橋平次、高橋松男、高橋洋子、高秀ハツエ、高松美和子、高松米子、高

山シツ江、田崎真理、田崎照明、田崎信夫、田仲静男、田仲ヤス、田仲コト、田中征子、対馬順子、鶴見世及、寺内千代子、寺内　尉、寺内キヌ、寺内ミツエ、寺内キイ、寺内千代子、豊田孝子、直井房一、直井清之、中山伸子、野口忠士郎、野口コウ、野崎久美子、野澤　守、野沢トミ、野沢トシ、野沢伸嘉、野澤　充、橋本フヂ、畠山　弘、馬場キワ、林　孝行、伴　三千子、平井克美、平井待子、平石キヨノ、広田愛子、深澤光一、福田ツヤ、福田林蔵、福田純子、藤原美枝、古谷安司、細野重信、本田　衛、本牧キン、増淵キミ、増淵皓三、増淵三男、増淵フミ、増淵正弘、増山晃広、真分フキ、宮本スミエ、宮本俊明、宮本恒雄、室井キン、茂垣　栄、杢保美枝、望月シズイ、百瀬洋子、森田幸江、谷田部キヨ子、柳田加子、柳田悦子、梁嶋ヨシ、山崎洋子、山崎千代子、吉沢千代、吉田みつえ、渡辺洋子、渡辺四郎、渡辺フミ。

13．整理・報告書作成作業には次の方々の御協力を得た。

天野崇弘・荒川（篠原）知美・石下泰枝・石田静枝・石濵有希子・伊藤恵美子・市川貴子・沖田有孝・尾見　愛・蒲生光子・川瀬晶子・齋藤久美子・篠原彩子・芝田恵美・菅野路子・鈴木実花・角田（飯塚）織絵・関　和美・高橋（赤荻）久美子・高松美和子・田崎　望・鶴見里子・豊原あき子・中山真理・野沢茂子・比嘉睦美・福田春美・藤原真弓・松崎和子・松本恵子・丸茂智子・本橋敬子・茂呂由実・横田通子・米野裕子・和田恵美・渡辺都

14．遺跡・遺構・遺物の記載方針は下記のとおりである。

〔遺跡〕

公共座標　各調査区の全体図には、国土調査法による平面直角座標第 IX 系の座標値を記入した。日本測地系による座標値の他に、2002 年 4 月から使用されている世界測地系の座標値もあわせて表示した。緯度・経度の表示は世界測地系による。

遺跡略号　略号は、調査区周辺を代表する小字名に対応して UT-GN（宇都宮市 - 権現山）および UT-SG（宇都宮市 - 杉村）を用いた。

権現山遺跡各地区の略号は UT-GN-II（権現山遺跡 2 区）、UT-GN-III（権現山遺跡 3 区）、UT-GN-IV（権現山遺跡 4 区）、UT-SG- Ⅰ（権現山遺跡 SG1 区）、UT-SG-II（権現山遺跡 SG2 区）、UT-SG- Ⅴ（権現山遺跡 SG5 区）、UT-SG-IX（権現山遺跡 SG9 区）、UT-SG- Ⅹ（権現山遺跡 SG10 区）、UT-SG-XV（権現山遺跡 SG15 区）である。

杉村遺跡の各地区の略号は UT-GN- Ⅰ（杉村遺跡 GN1 区）および UT-SG- Ⅰ（杉村遺跡 SG1 区）である。『東谷・中島地区遺跡群 3』で報告済みの杉村遺跡 SG1 区は、権現山遺跡 SG1 区と一括して調査したので略号も同じ UT-SG- Ⅰ である。

東谷・中島地区の確認調査を実施した部分の略号は UT-TN（宇都宮市 - 東谷・中島地区）で、遺物には UT-TN-GN（宇都宮市 - 東谷・中島地区 - 権現山遺跡）または UT-TN-SG（宇都宮市 - 東谷・中島地区 - 杉村遺跡）と注記した場合もある。

発掘調査時には、地区番号をローマ数字（Ⅰ区～Ⅹ区）で表記した。また、「杉村遺跡Ⅴ」以前と「権現山遺跡 II」以前は「区」の文字が付いていない。本書では「アラビア数字＋区」（1 区～ 10 区）に統一した。

遺跡名・地区名新旧対応表

報告書掲載遺跡名	遺跡略号	（発掘調査時点の旧遺跡名）	報告書・参考事項
権現山遺跡 2 区	UT-GN-II	（権現山遺跡 II）	本書
権現山遺跡 3 区	UT-GN-III	（権現山遺跡 III 区）	本書
権現山遺跡 4 区	UT-GN-IV	（権現山遺跡 IV 区）	本書
権現山遺跡 SG1 区	UT-SG-I	（杉村遺跡Ⅰ）	本書　※杉村遺跡 SG1 区と一緒に調査し略号も同じ
権現山遺跡 SG2 区	UT-SG-II	（杉村遺跡 II）	次回報告
権現山遺跡 SG5 区	UT-SG-V	（杉村遺跡Ⅴ）	次回報告
権現山遺跡 SG9 区	UT-SG-IX	（杉村遺跡 IX 区）	次回報告　※磯岡遺跡 SG9 区と一緒に調査し略号も同じ
権現山遺跡 SG10 区	UT-SG-X	（杉村遺跡Ⅹ区）	次回報告
権現山遺跡 SG15 区	UT-SG-XV	（杉村遺跡 XV 区）	次回報告
杉村遺跡 GN1 区	UT-GN-I	（権現山遺跡Ⅰ）	本書
杉村遺跡 SG1 区	UT-SG-I	（杉村遺跡Ⅰ）	『東谷・中島地区遺跡群 3』　※権現山遺跡 SG1 区と一緒に調査し略号も同じ
磯岡遺跡 SG9 区	UT-SG-IX	（杉村遺跡 IX 区）	次回報告　※権現山遺跡 SG9 区と一緒に調査し略号も同じ

〔遺構〕

遺構名　略号は、竪穴建物跡を SI、溝状遺構を SD、土坑を SK、柵列を SA、掘立柱建物跡を SB、井戸を SE、その他（周溝遺構・集礫土坑・遺物集中地点）を SX とした。土坑は SK であるが、柱穴状土坑は略号を P とした場合もある（4 区・SG1 区）。原則として現地調査時の遺構番号を使用したが、遺構の性格認定に伴って記号を変更した場合はある（例：旧名称 4 区 SK-108 → 4 区 P-108）。また、以下の遺構は、現地で使用した旧番号から変更・統一を行った。（　）内が旧遺構名である。

杉村遺跡 GN1 区 SD-64（← GN1 区 SD-24 に連続する北東部）
権現山遺跡 4 区 SK-157（← 4 区 SI-18 に重複する無番号土坑）
権現山遺跡 SG1 区 SI-18 の張出ピット（← SG1 区 SK-125）
権現山遺跡 SG1 区 SI-33 の貯蔵穴（← SG1 区 SK-52）
権現山遺跡 SG1 区 SI-174（← SG1 区 SI-180）
権現山遺跡 SG1 区 SB-106 東棟持柱（← SG1 区 P-12）・SB-106 西棟持柱（← SG1 区 SK-134）
権現山遺跡 SG1 区 SD-37（← SG1 区 SD-188）

縮尺　遺構図の縮尺は、古墳～奈良時代および時期不明の竪穴建物跡を 1/80、カマドを 1/40、掘立柱建物跡・井戸・方形周溝遺構を 1/80（一部の井戸は 1/60）、2 区の遺物出土地点を 1/100 で示した。土坑は、小形土坑や遺物の多い場合が 1/40 で、それ以外の土坑が 1/80。柱穴状土坑は 1/40、柵列および柱穴群は 1/80 ～ 1/200。その他の遺構は、各図中にスケールで示した。

土層・柱穴等の番号　遺構内外の土層や、竪穴建物跡・掘立柱建物跡に伴う柱穴・土坑などに対して現地で与えた P1・P2・P3…などの番号は、整理作業時に番号を整理・変更したものが多い。

方位　図示した方位は、小縮尺の地形図（第 4 図）が真北、他の図は座標北（平面直角座標第 IX 系の X 軸方向）である。遺構の主軸方位は座標北に対する振れを示す。竪穴建物跡の主軸方位は、縦横 2 軸のうち、入口施設を通る方の軸で示し、入口が不明の場合は長軸方向で示した。

標高　断面図基準線の値は海抜標高で、水糸記号または縮尺の脇に示した。

〔遺物〕

計測値　「口」・「頸」・「底」はそれぞれの径、「大」は最大径、「復」は復原値、「残」は残存値、「推」は推定値を表す。

縮尺　遺物図の縮尺は、次のとおりである。土師器・須恵器・中近世土器は 1/4、土製品・焼粘土塊・石製品・鍛冶関連遺物は 1/2（または 1/4）、鉄製品は 1/2、玉類は 1/2、小形の玉は 1/1。縄文・弥生土器は 1/3、石器類は金床石を 1/8、礫器・打製石斧・磨石・石皿を 1/3、片刃石器・スクレイパー・石匙・剥片・石核を 1/2、石鏃を 2/3、旧石器時代尖頭器を 2/3 とした。これらは原則で、例外もある。

破片の拓影図　縄文・弥生土器では外面 - 断面または外面 - 内面 - 断面、それ以外の須恵器などは内面 - 断面 - 外面の順序で配置した。

器質　須恵器は断面を黒塗り、金属製品は斜線、その他の遺物は白抜きにして示した。

器面調整と施釉　古墳時代以降の土器は、ナデの範囲を破線、ケズリの範囲を実線、ケズリ方向を矢印、漆仕上げと施釉の範囲を一点鎖線で示した。

色調　農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1967『新版　標準土色帖』の 18 版（1996）により表示する。土器・土製品は焼成当時の色調に近い部分で観察し、黒斑や二次的な煤・コゲ・被熱変色・塗彩は別の特徴として扱う。

胎土　混和材の多少を基準に、「粗い／やや粗い／やや緻密／緻密」とする。

・混和材の種類：径 0.2mm 未満は「微粒」、0.2 ～ 0.5mm は「細粒」、0.5 ～ 2.0mm は「粗粒」、2.0mm 以上は「礫」とする。

・混和材の色は「灰・白・黒・赤・褐色・透明」とする。透明と白の中間的なものは「半透明」とした。雲母は「白」または「金色」とする。

焼成　「硬質／やや硬質／やや軟質／軟質」とする。特別に示す必要がある場合は「良好」などと記す。

不掲載遺物の出土量　各遺構から出土した遺物のうち、実測図を掲載しなかった破片の数と重量を計量して記述した。別時代の遺物は除外されているが、同時代で異なる時期の混入遺物は除外していない。

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

宇都宮テクノポリス計画は、「高度な技術を持つ産業の集積、産・学・官の共同研究と技術交流による頭脳ネットワークの形成、そして自然と都市機能が調和した快適な生活環境づくり」を目標に栃木県が昭和58年７月に栃木新時代創造計画で開発計画を策定し、翌年５月に高度技術工業集積地域開発促進法（テクノポリス法）に基づき通商産業省（当時）の開発計画の承認を受けた。

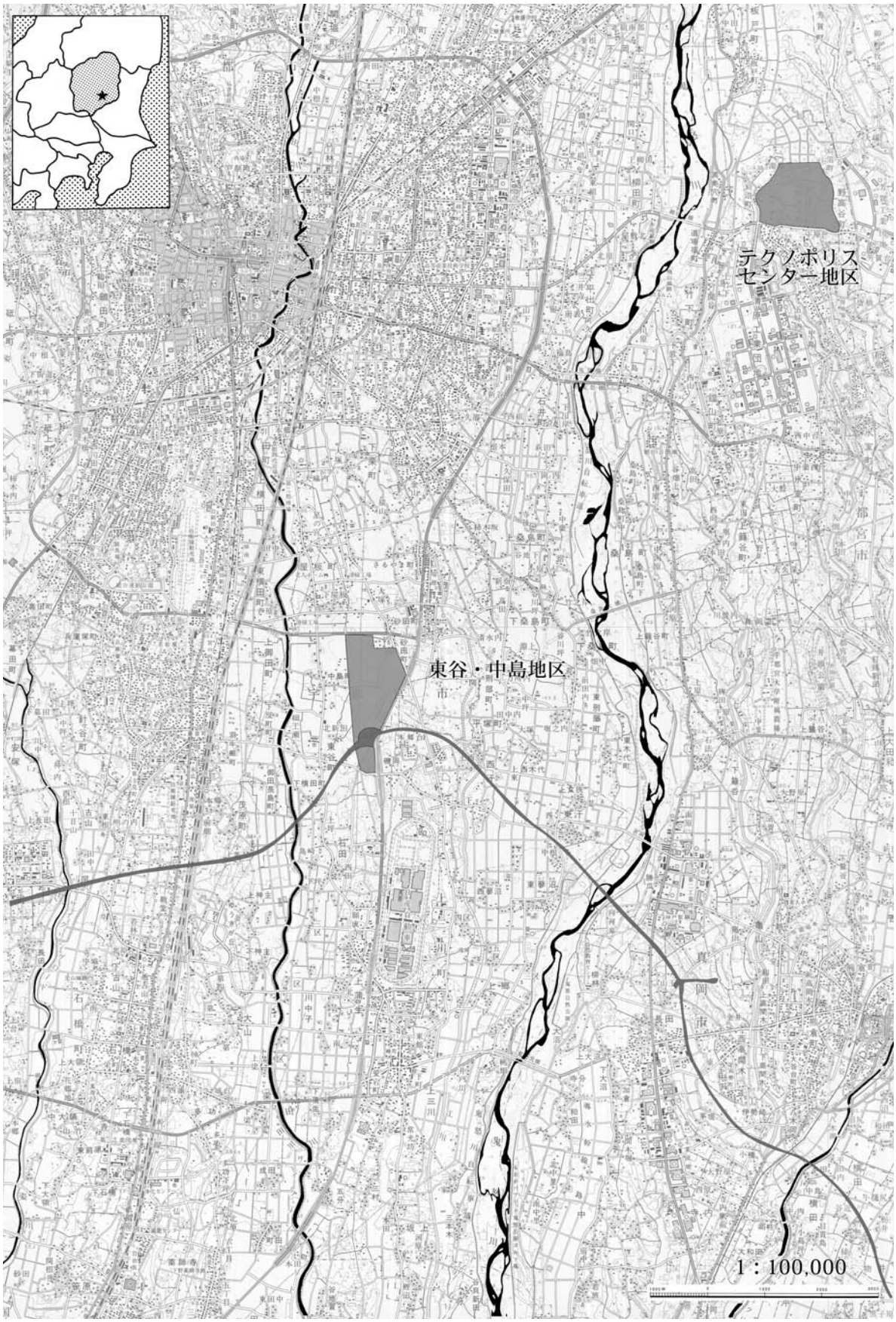
この計画を受け、昭和60年度より県企画部と県教育委員会（以下「県教委」という）は開発区域内遺跡の取り扱いについて協議を開始した。平成元年度には栃木県と宇都宮市が住宅･都市整備公団（以下「公団」という）に開発の要請を行った。公団はこれを了承し、平成２年度より開発区域の用地取得に入った。

公団が事業主体となるテクノポリス計画は、宇都宮テクノポリスセンター土地区画整理事業と東谷・中島土地区画整理事業の２地区である。前者事業区域は、宇都宮市野高谷町･刈沼町･板戸町にまたがる地区（以下「センター地区」という）の177.2haに及び、「住宅」を核に県工業技術センター、産業支援施設、商業施設、民間研究施設、小･中学校などを整備したニュータウン計画で、テクノポリスが目指す「産･学･住･遊」の拠点整備をも担う。後者事業区域は、宇都宮市東谷町・中島町・砂田町・平塚町・屋板町・上横田町・西刑部町と上三川町磯岡・西汗にまたがる地区（以下「東谷・中島地区」という）の137.5haに及び、北関東自動車道路や新４号国道などの広域交通網と結び付いた利便性を生かし流通業務施設や先端技術、高度技術産業の研究所・工場などの整備を図ることにある。

平成２年７月には公団から県教委へ事業地区内の埋蔵文化財の有無について照会がなされた。県教委は、東谷・中島地区について「周知されている遺跡６か所と遺跡の可能性がある区域を含め、約90haの確認調査が必要」と回答した。その後、開発と埋蔵文化財調査のスケジュールを調整する協議が継続された。

平成６年８月、埋蔵文化財保護と開発事業の円滑な推進を図るため、県教委・宇都宮市・公団・埋蔵文化財センターの四者が事業区域内の分布調査を実施した。その結果、センター地区では周知の遺跡８か所・面積267,000m²、試掘が必要な地点７か所・面積95,500m²、東谷・中島地区では周知の遺跡12か所・面積490,400m²、試掘が必要な地点８か所・面積340,600m²であった。この結果を基に発掘調査を開始する協議が行われ、同年９月１日付けで県教委の調整のもと、公団と（財）栃木県文化振興事業団は「東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」の受託契約を締結し、確認調査を開始した。平成７年４月からは、周知の遺跡の本調査と確認調査を継続中である。センター地区については、平成７年９月１日付けで公団と（財）栃木県文化振興事業団が「宇都宮テクノポリスセンター地区埋蔵文化財発掘調査」の受託契約を締結し、確認調査を開始した。翌年からは、調査規模の拡大に伴い宇都宮市が同地区の発掘調査を担当している。

平成８年12月には東谷・中島地区、翌年４月にはセンター地区の区画整理事業が建設大臣の認可を受け、開発事業が開始された。公団・県文化財課・宇都宮市・埋文センターは、年数回の綿密な協議を重ねつつ開発事業計画に沿った発掘調査を行っている。なお、開発事業は平成11年から都市基盤整備公団、平成16年７月からは都市再生機構に継承された。(財) 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センターは外郭団体の統合再編により平成12年度から (財) とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターとして業務を継承している。



第 1 図　東谷・中島地区位置図（1/10 万）

第２節　調査の方法

独立行政法人都市再生機構（旧住宅・都市整備公団および都市基盤整備公団）による東谷・中島土地区画整理事業の事業区域は、東西約 1.0km、南北約 2.5km の 137.5ha に及ぶ。

調査対象地区は、周知の遺跡範囲及び平成６年８月に県教育委員会事務局文化課（現文化財課）が事業予定地を踏査した成果に基づいて決定された。この結果、10 地区 12 遺跡、調査対象面積 831,000m² が把握された。対象面積が膨大なため、これらの遺跡範囲の確定及び調査事業量の把握が急務とされた。よって、住宅・都市整備公団による用地取得の完了した部分より確認調査を実施し、その結果に基づきおおむね公団の示す調査優先地区について順次本調査を行った。確認調査の結果によっては遺構外とされる地区もあり、随時本調査地区より除外した。また、平成９年には発掘調査の進展に伴い調査対象地区の見直しを行った。この結果、調査対象地区は確認調査により遺跡外とした地区も含め 10 地区 12 遺跡、896,800m² となった。さらに 2006（平成 18）年度に面積の見直しがなされ、総面積 887,600m² となった。

確認調査

本調査に先行する確認調査は、遺跡範囲を確定して遺構全体量を把握することを目的とした。調査にあたっては調査対象範囲内にトレンチを設け、おおむねローム層上面まで掘削することにより遺構・遺物の有無、また、その遺存状況の把握に努めた。調査対象面積に対するトレンチ総面積は５～ 10％を目安とした。

グリッド設定　調査対象地区の南西外を原点（X ＝ 0,Y ＝ 0）とする局地座標を定めた。原点は、日本測地系による平面直角座標第 IX 系 X ＝ 52,800,Y ＝ 6,400（世界測地系では X ＝ 53154.1623,Y ＝ 6107.0425）の位置である。この座標は調査対象地区全体を覆い、20m 単位に南から北へ X ＝ 0 ～ 130、西から東へ Y ＝ 0 ～ 60 と展開する。また、20m × 20m の一グリッドをその南西隅の座標値で呼ぶ。一グリッド内の細分は小数点以下の座標値を用い、同様の方法で行う。以上のグリッドは、本調査時においても踏襲した。

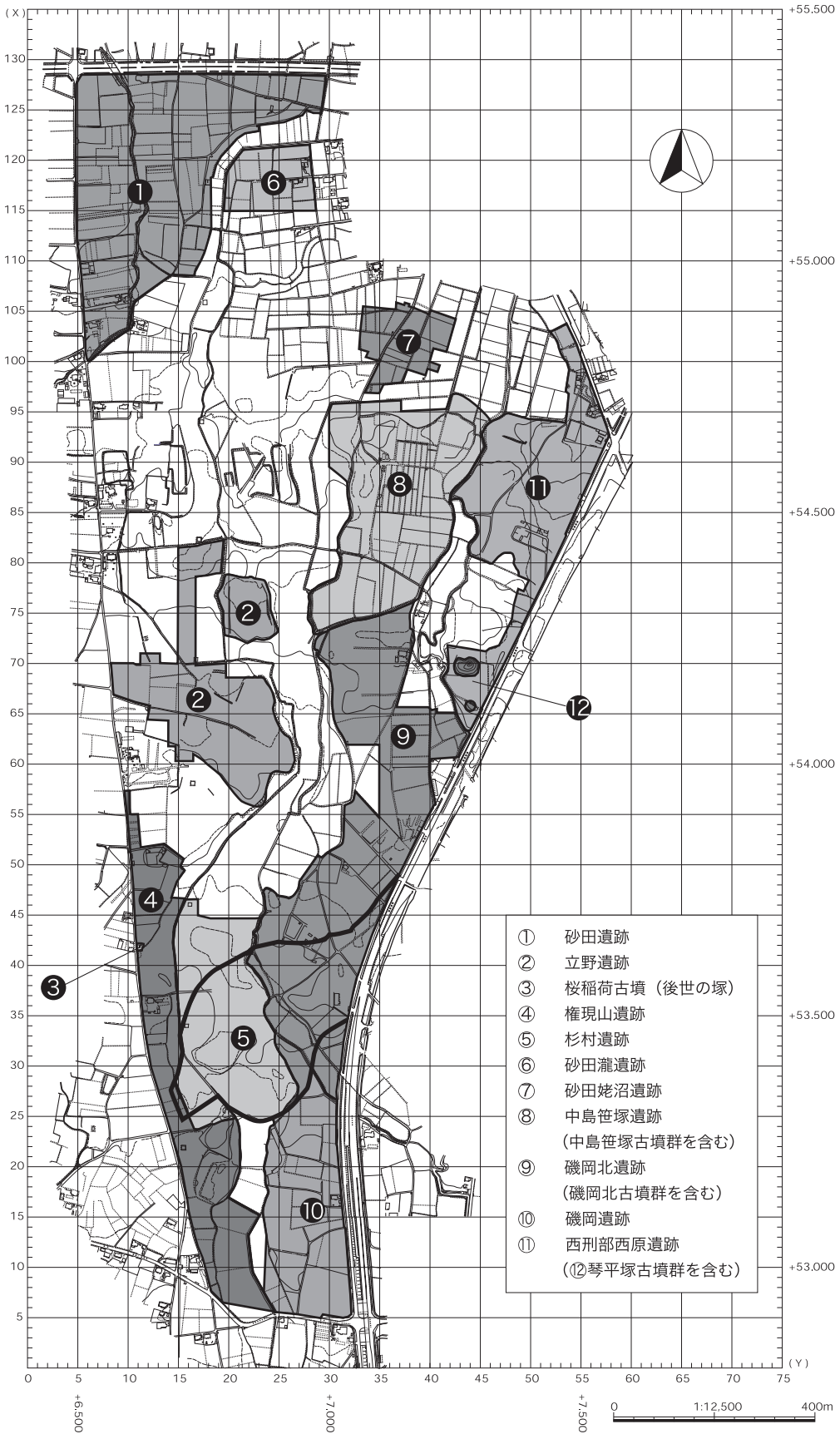
トレンチの設定　トレンチは幅約 2m で、グリッドラインの北側に沿って、20 ないし 40m に一本の割合で東西方向に設けることを基本とした。これは、地形が概ね南北に伸びる低地部とその東西の低台地部により形成されていることによる。記号 'TX' に X 軸の座標値を添えてトレンチの名称とし、必要に応じて Y 軸の座標値（Y ＝ 0 ～ 60）を添える。なお、対象地区の微地形の相違等状況の変化によっては柔軟に対応した。

トレンチの発掘　重機を用い、精査の後、図面と写真による記録を行い、遺物を取り上げた。また、必要に応じ、一部遺構の精査、自然科学分析を実施した地区もある。権現山２区・杉村 GN1 区・磯岡３区では、1994 年度確認調査トレンチの土層試料でテフラ検出と古環境復原のための分析を行った（第７章）。

本調査

公団の示す地区とその優先順位に従って実施した。これは公団の用地取得状況と工事展開に従ったものである。よって、調査時にはこれを 10 地区 12 遺跡における調査地区とし、遺跡名に算用数字を付して調査地区名とした。2000（平成 12）年度までは算用数字ではなくローマ数字（Ⅰ区 ,Ⅱ区 ,Ⅲ区…）を使用していたが、この報告書ではすべて算用数字を用いる。遺構の管理は各調査区で行い、種別によらず原則として通し番号とした。遺物は出土遺構単位で管理し、種別によらず通し番号とした。

現地調査は、重機による表土除去、基準杭設定、遺構確認、各遺構精査、航空写真撮影・測量、遺物洗浄、必要に応じ自然科学分析等の手順でおおむね実施した。調査方法は担当者間で統一を図り、図面・写真等の等質な記録作成に努めた。表土除去、基準点測量、航空写真撮影・測量等は外部委託して効率化を図った。遺構がない権現山遺跡３区以外は、各地区の航空写真を撮影し、調査区の遺構配置と等高線を図化した。



第 2 図　東谷・中島地区遺跡群遺跡位置図

第１表　東谷・中島地区遺跡群遺跡一覧表

No.	遺跡名	略号	所在地	面積（㎡）	時代・種別	調査前の状況
1	砂田遺跡	UT-SN	宇都宮市砂田町字瀧、同市屋板町字赤沢・字赤沢向、同市中島町字十里木他	145,200	旧石器剥片、縄文時代陥穴、古墳～平安集落、方形周溝、近世墓、近世以降の炭窯	田畑等
2	立野遺跡	UT-TT	宇都宮市東谷町字立野、同市中島町字小路谷田	122,800	縄文・古墳時代と中世の集落、弥生時代土坑、終末期方墳、奈良時代竪穴建物、近世の溝	田畑・林
4	権現山遺跡（3 桜稲荷古墳を含む）	UT-GN UT-SG	宇都宮市東谷町字立野・字杉村・字下原、同市砂田町字吉原・字原田、上三川町磯岡字西谷	92,000	古墳時代集落・豪族居館、縄文・平安時代竪穴建物、奈良・平安時代の推定東山道、中世集落	畑地等
5	杉村遺跡	UT-SG UT-GN	宇都宮市砂田町字原田他、上三川町磯岡字コムナセゴ	22,000	縄文～古墳・奈良時代集落、奈良・平安時代の推定東山道	田畑・林等
6	砂田瀧遺跡	UT-ST	宇都宮市砂田町字瀧	60,000	古墳・奈良時代の遺物散布地	田畑等
7	砂田姥沼遺跡	UT-SU	宇都宮市砂田町字姥沼	16,400	古墳～平安時代の集落	田等
8	中島笹塚遺跡（中島笹塚古墳群を含む）	UT-NK	宇都宮市砂田町字笹塚・吉原・姥沼	91,100	旧石器剥片、縄文土坑、弥生土器、古墳群 16 基と土壙墓、古墳～奈良時代と中世の集落	畑・林
9	磯岡北遺跡（磯岡北古墳群を含む）	UT-SG	宇都宮市砂田町字笹塚、上三川町磯岡字笹塚、同町磯岡字コムナセゴ	128,100	縄文～奈良時代・中世集落、古墳群 10 基と土壙墓等、奈良・平安時代の推定東山道	田等
10	磯岡遺跡	KM-IS	上三川町磯岡字中原・同町磯岡字屋敷西浦	72,000	縄文・古墳～平安時代集落、弥生時代土坑	田畑等
11	西刑部西原遺跡（12 琴平塚古墳群を含む）	UT-NS	宇都宮市平塚町西原、同市西刑部町西原、上三川町西汗字西赤堀	138,000	縄文時代陥穴、旧石器・古墳～平安時代集落、古墳群 14 基、奈良・平安時代の推定東山道	田畑等

・4・9・10 の各遺跡は 5 杉村遺跡とは別遺跡だが、現地調査時に「杉村遺跡」（UT-SG）の名称や略号を用いた部分がある。
・確認調査の略号は UT-TN とし、本遺跡群内における位置はトレンチ及びグリッド番号で示した。

第３節　調査の経過

〔**確認調査**〕平成 6・7 年度（1994・1995 年度）

関係各機関との協議、事務処理、調査方針の策定を経て、本書で報告する権現山遺跡北部と杉村遺跡の確認調査を平成 6・7 年度に実施した。作業の手順は前節の通りである。基本的には重機によるトレンチ発掘を先行させ、トレンチ内精査、次いで遺構確認状況等の写真撮影、実測等記録の順序で行った。

1995（平成 7）年 3 月には権現山 SG1 区・2 区・4 区と杉村遺跡 GN1 区西半部の確認調査を行った。権現山 SG1 区南部に試掘トレンチ TX20 ～ TX25、権現山 SG1 区北部に試掘トレンチ TX25 ～ TX32、権現山 2 区周辺に試掘トレンチ TX38 ～ TX51、権現山 4 区周辺に試掘トレンチ TX33 ～ TX36、杉村 GN1 区西半部周辺に試掘トレンチ TX37 ～ TX45 を設定して遺構の有無や密度を確認した。以上のうち、杉村遺跡 GN1 区南端部の 37-16 グリッドでは低地堆積土層に対するテフラ検出分析とプラント・オパール分析を実施した。また、権現山遺跡 2 区南端部の 39-13 グリッドでは低地堆積土層に対するテフラ検出およびプラント・オパール分析、出土木材の 14 C 年代測定、樹種・花粉・種実同定分析を実施した（第 7 章）。

1995（平成 7）年 5 月には杉村遺跡 GN1 区東北部に試掘トレンチ TX41 ～ TX45 を設定して確認調査を行い、そのうち杉村遺跡 GN1 区北東部の 43-21 グリッド低地堆積土層と、45-19 および 45-20 グリッドの旧流路堆積層で、テフラ検出分析とプラント・オパール分析を実施した。

〔**本調査**〕平成 8 ～ 10 年度（1996 ～ 1998 年度）

杉村遺跡は、GN1 区と SG1 区の 2 地区に分けて合計 22,000m² の調査を実施した。また、権現山遺跡は 2・3・4・SG1・SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区の 9 地区に分けて合計 71,900m² の調査を実施した。これらのうち、本書で報告する杉村遺跡 GN1 区と権現山遺跡 2 区・3 区・4 区・SG1 区の本調査実施経過を以下に示す。

【杉村遺跡】

杉村遺跡 GN1 区　宇都宮市砂田町字上谷田 606 番地、砂田町字原田 15 番地、砂田町字吉原 21 ～ 23・27 ～ 30・35 ～ 40・50 ～ 53 番地、河内郡上三川町大字磯岡字コムナセゴ 465-2 番地 18,400m²　竪穴

建物跡 6 棟、土坑 47 基、溝 3 条

平成 8 年度（1996 年 4 月 10 日～ 1996 年 10 月 24 日）

調査担当者：増山孝之・石川幸弘・藤田直也・山本訓志

南には本遺跡の北関東自動車道路調査区が隣接し、さらにその南に杉村遺跡 SG1 区がある。西方は開析谷を挟んで権現山遺跡 2 区があり、東方は開析谷を挟んで磯岡北遺跡 SG3 区がある。区画整理後は店舗（薬品の大規模小売店）として利用され、東側の開析谷から磯岡北遺跡 SG3 区にかけての部分は調整池となっている。

4 月 10 日～ 5 月 15 日に重機で表土を除去した。南西にある権現山遺跡 SG1 区と同時並行で調査を実施し、5 月 29 日から竪穴建物跡の調査を開始した。6 月 13 日夜から 14 日朝には、SI-3 と SI-5 の土器が盗難の被害にあう事件が発生した。6 月 19 日には宇都宮市立雀宮東小学校の校長以下職員 15 名が遺跡見学に訪れた。1996 年 9 月 6 日までで遺構の調査を終了し、10 月 24 日には杉村遺跡 SG1 区と同時に航空写真を撮影した。

【権現山遺跡北半部】

権現山遺跡 2 区　宇都宮市東谷町字立野 890 ～ 898 番地、東谷町字杉村 899-1 番地、砂田町字吉原 20・24 ～ 26・31 ～ 34・41・42 番地　24,300m²　竪穴建物跡 6 棟（3 棟の建替）、掘立柱建物跡 5 棟、井戸 4 本、溝 13 条、遺物集中地点 1 箇所、柱穴 3 基、土坑 103 基

平成 9 年度（1997 年 5 月 6 日～ 1997 年 10 月 8 日）

調査担当者：山本訓志・高野瑞枝

北には本遺跡 3 区、南には本遺跡 SG1 区が連続し、東側は開析谷を挟んで杉村遺跡 GN1 区がある。区画整理後には北部が複数の飲食店、南部が公園として利用されている。

前年度（1996 年 9 月 9 日～ 10 月 22 日）に既に表土除去を終了していた部分に対して、1997 年 5 月 6 日から遺構確認作業、19 日から遺構調査を開始した。地区を分割して調査したため、5 月 13 日～ 21 日、7 月 7 日～ 22 日には重機による表土除去をそれぞれ追加実施した。1997 年 8 月 6 日と 1997 年 10 月 2 日にそれぞれ航空写真の撮影をおこなった。97 年 10 月の航空写真は権現山遺跡 2 区の北半部を中心として再度撮影したものである。10 月 8 日で現地調査作業を終了した。

権現山遺跡 3 区　宇都宮市東谷町字立野地内 865-3 番地・889 番地　2,400m²　遺構なし

平成 10 年度（1998 年 5 月 29 日～ 1998 年 6 月 9 日）

調査担当者：小島昭寿

南には本遺跡 2 区が連続し、北側は約 200m 離れて立野遺跡が同じ台地上に所在する。区画整理後は、中央部が東西方向の道路となり、その南北は飲食店・小売店およびその駐車場として利用されている。5 月 29 日に現地調査範囲の確認を行い、6 月 1 日から 8 日まで重機による表土除去作業と遺構確認作業を行った。地表面にある厚さ約 30cm の撹乱土層と、その下にある厚さ約 30cm の黒色表土層を除去して、ローム漸移層で遺構確認作業を行った。遺構・遺物は確認されず、6 月 9 日には重機で埋め戻しを行い、調査を終了した。航空写真撮影や測量図作成作業は実施しなかった。

権現山遺跡 4 区　宇都宮市東谷町字杉村 900 ～ 904 番地、砂田町字原田 9・13 番地　4,300m²　竪穴建物跡 41 棟、掘立柱建物跡 5 棟、方形周溝遺構 1 基、井戸 2 本、溝 2 条、柱穴 8 基、土坑 75 基

調査担当者：岡部正晴・塚原孝一・高野瑞枝・大島美智子

平成 11 年度（1999 年 9 月 13 日～ 1999 年 12 月 27 日）

北側には本遺跡 2 区が、南側には本遺跡 SG1 区が連続する。東側は開析谷を隔てて杉村遺跡の北関東自動車道路調査区が所在する。区画整理後は中央が南北方向の都市計画道路、西部が公園、東部が店舗（自動車販売店）として利用されている。

地区内に所在した民家の土地境界確認や埋設配水管の対応についての調整に時間を費やしたため、年度前半には砂田遺跡６区等の調査を先行して実施した。８月 27 日にようやく調査着手可能となった後、調査範囲の測量杭確認や、表土除去工事の入札を経て、９月 13 日から９月 30 日まで重機で表土を除去し、10 月４日から遺構調査を開始した。12 月末までに現地作業を終了させるという条件の下でかなり苦しい調査日程をこなした。地下水位が低下した 12 月には調査区南東部の低地トレンチの土層記録を作成し、12 月 15 日に航空写真の撮影、12 月 24 日まで竪穴建物跡の貼床除去をおこなった。12 月 27 日にようやく現地作業を終了し、職員・作業員と機材などは翌年１月から西刑部西原遺跡２区および磯岡遺跡５区の調査現場へ移動した。

権現山遺跡 SG1 区　宇都宮市東谷町字杉村 905 ～ 910 番地、砂田町字原田４・５・８番地　7,800m²
竪穴建物跡 39 棟（鍛冶遺構１を含む）、居館跡１箇所（溝１・塀 1・柵列１・掘立柱建物１・不明遺構１・柱穴 61）、井戸３本、溝７条、柱穴 114 基、土坑 87 基（土壙墓 ?1 を含む）、集礫遺構１

平成８年度（1996 年４月 22 日～ 1997 年３月 28 日）

調査担当者：中山 晋・稲木 実・増山孝之・石川幸弘・藤田直也・山本訓志

北側には本遺跡４区、南側には本遺跡 SG10 区、東側は本遺跡の北関東自動車道路調査区、南東側は古代道路遺構（推定東山道跡）が調査された杉村遺跡 SG1 区が連続する。区画整理後は中央以西が南北方向の都市計画道路、東部が店舗（自動車販売店・ホームセンターなど）として利用されている。

４月 22 ～ 26 日と５月７～ 14 日に表土除去を実施した部分に対して､5 月 31 日まで遺構確認作業を行った。しばらく杉村遺跡 GN1 区の調査を優先させた後に、７月３日から権現山遺跡 SG1 区の遺構調査を開始した。また、７月 15 ～ 18 日には重機で表土除去作業を追加実施した。９月９日には、低地グリッド調査実施部分のうち、遺物出土層よりも下位について重機で掘り下げを行った。1996 年 11 月 17 日には古墳時代の豪族居館を中心として、現地説明会を実施した。その後、1996 年 11 月 26 日から 12 月 18 日まで、SG1 区南部で工事用仮設道路を撤去して重機で表土を除去し、その範囲内の遺構を 1997 年１月８日～３月 28 日に調査した。３月 29 日には隣接する杉村遺跡（SG1 区および北関東自動車道路調査区）の古代道路遺構についての現地説明会を実施した。

航空写真の撮影は、1996 年 10 月 24 日と 1997 年３月 19 日におこなった。96 年 10 月の航空写真は権現山遺跡 SG1 区北半部の古墳時代集落を中心として撮影した。97 年３月の航空写真は権現山遺跡 SG1 区・杉村遺跡 SG1 区・杉村遺跡北関東自動車道調査区で調査した古代道路遺構を中心として、権現山遺跡 SG1 区南半部や杉村遺跡 GN1 区の古墳時代集落も一緒に撮影したものである。

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

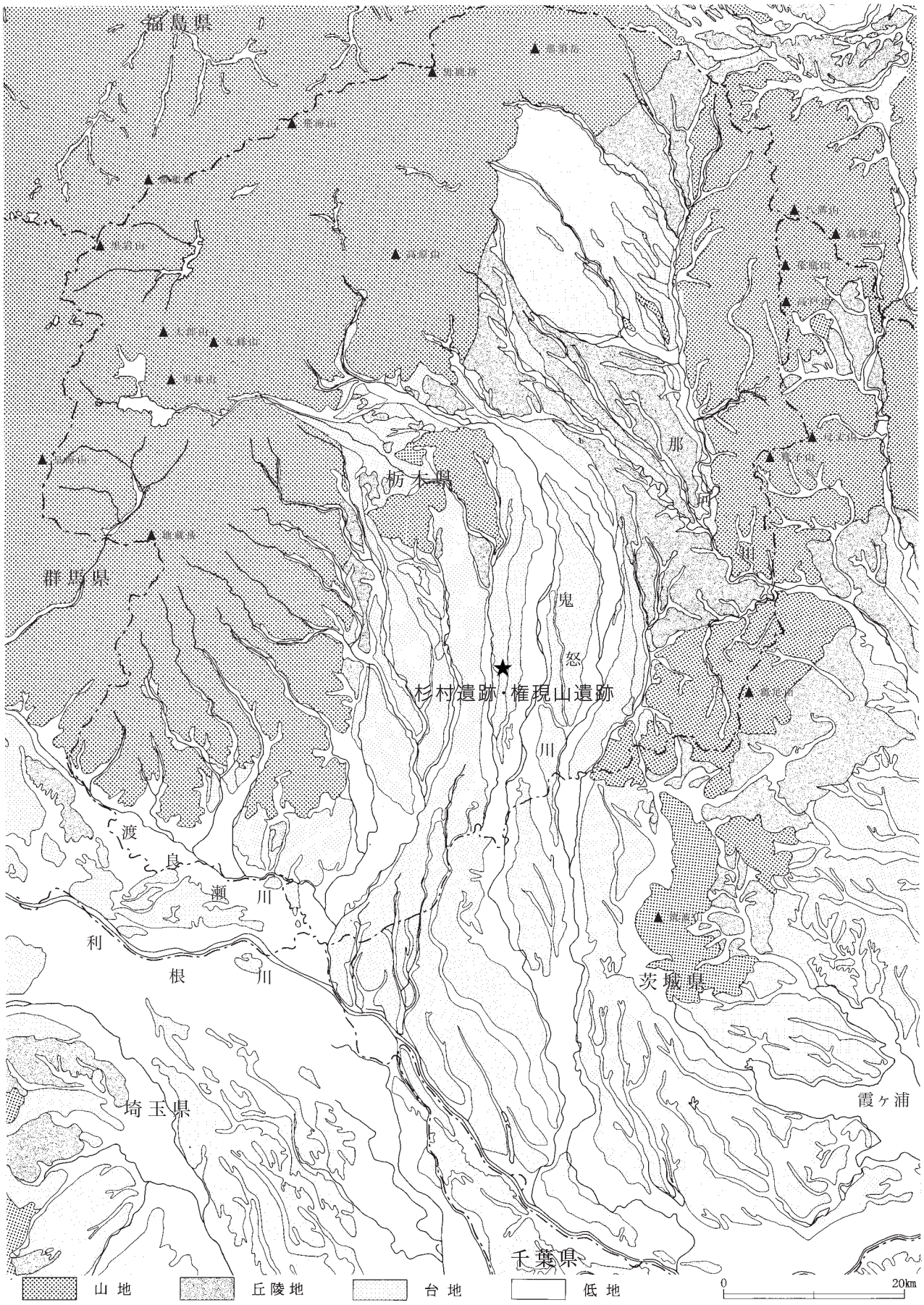
位置　東谷・中島地区遺跡群は栃木県域の南東部、宇都宮市と河内郡上三川町に跨り、宇都宮市街地から南南東へ約７km、上三川町の中心地から北へ約 5km に位置する。東へ約 5km に鬼怒川、西へ約 1.5km に田川がそれぞれ南流する。周辺は起伏の少ない田園地帯が広がっており、各遺跡の発掘調査前の状況は水田、畑地、平地林が主で、一部に宅地が見られた。一方、本遺跡群は、東側が国道４号バイパス（新４号国道）、西側は旧上三川街道、南側は県道雀宮・真岡線、北側は宇都宮環状線に接する。また、地区内に北関東自動車道路の宇都宮・上三川インターチェンジが位置し、交通の要衝としてその重要度を高めつつある。こうした利便性と相まって、近年、本地域は流通業務施設や商業施設等の進出と市街地化が進行している。杉村遺跡と権現山遺跡は、東谷・中島土地区画整理地区（完成後の名称は「インターパーク宇都宮南」）の南西部に位置する。

現況　杉村遺跡は宇都宮市砂田町に所在し、南東の一部は河内郡上三川町磯岡に及ぶ。GN1 区は北緯 36 度 29 分 15 秒・東経 139 度 54 分 20 秒に所在する（世界測地系）。南流する２本の小川の開析谷の間に島状に残された標高 81.0 ～ 81.8m の微高地上に立地する。この開析谷は、杉村遺跡の西側が「西谷田」、東側が「中島谷田」と呼ばれていた（*1）。今回報告する GN1 区は杉村遺跡の北端部で、北緯 36 度 29 分 15 秒・東経 139 度 54 分 20 秒にある。また、遺跡中央部（北関東自動車道路調査区）は北緯 36 度 29 分 07 秒・東経 139 度 54 分 25 秒にある。杉村遺跡の面積は 33,200m² で、今回報告する GN1 区は 18,400m²、報告済みの SG1 区が 3,600m²、北関東自動車道路調査区が 11,200m² である。調査前の状況は主に荒地で、一部は山林であった。

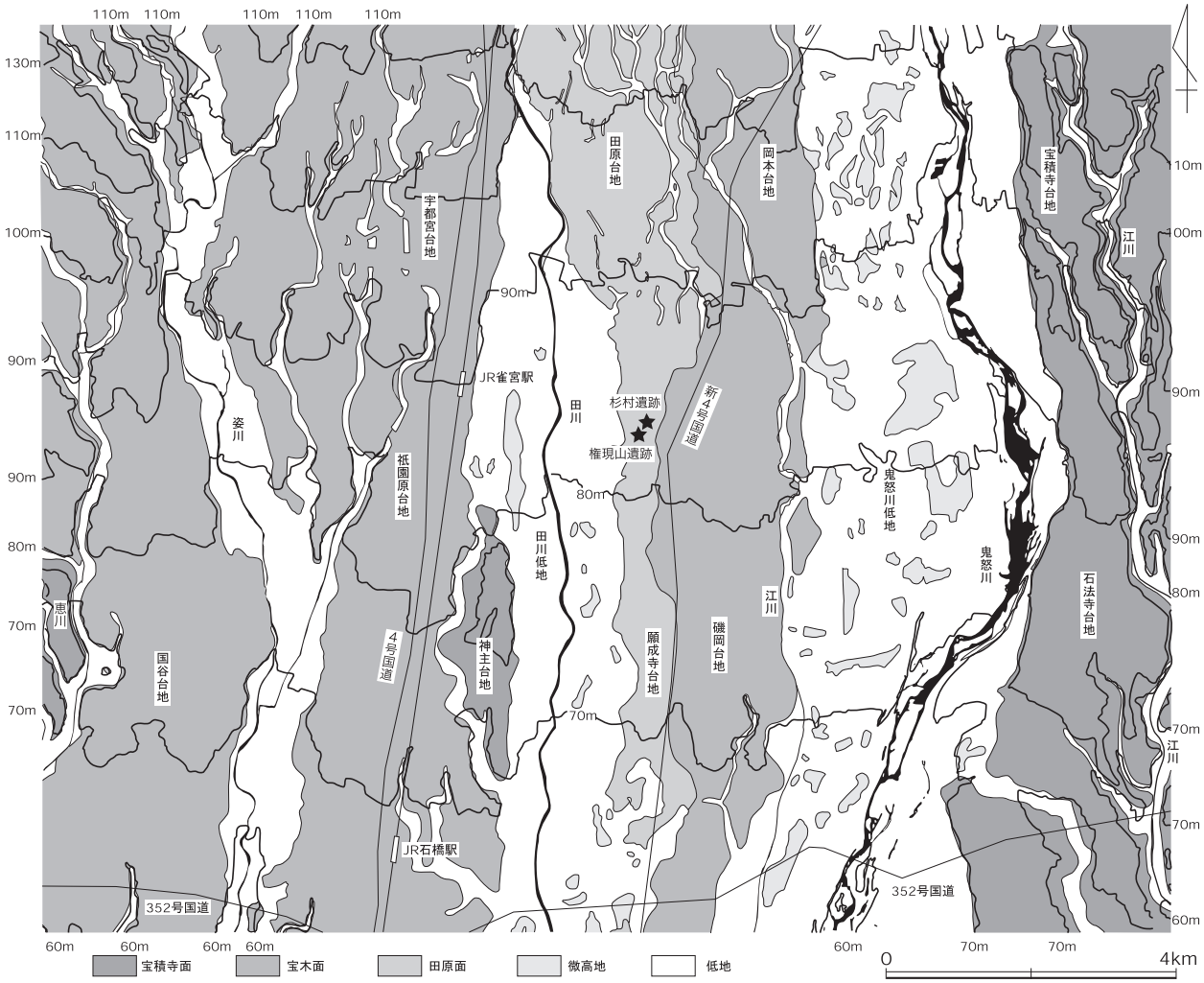
権現山遺跡は宇都宮市東谷町および砂田町に所在し、ほぼ中央部に相当する SG1 区で代表させると、世界測地系で北緯 36 度 29 分 01 秒・東経 139 度 54 分 17 秒に所在する。上記の「西谷田」と呼ばれる小川の開析谷に面し、主にその西側の台地上に立地する。ただし権現山遺跡の南東部（SG2 区・SG9 区・SG15 区など）は、上記の「西谷田」と「中島谷田」にはさまれた低地にある。一方、権現山遺跡の西半部（北関東自動車道路調査区など）は、「赤沢川」や「川田用水」が南流する開析谷に面している。権現山遺跡の範囲はおよそ東西 250 ～ 400m ×南北 800m で推定総面積は約 26 万 m² あり、そのうち東谷・中島地区内では 71,900m² の発掘調査を実施した。今回報告する権現山遺跡北部（２区・３区・４区・SG1 区）の合計面積は 38,800m² である。調査前の状況は主に畑地と水田で、南部の SG10 区周辺は山林であった。山林であった部分も、後世に開墾などの土地利用を経ていると思われる。

地形の分類　栃木県は関東地方の北部に位置し、東と南を茨城県、西を群馬県、北を福島県と境を接している。栃木県域の地形は、大きく見ると、東部山地、中央部平地、西部山地に分けられる。東部山地は八溝、鷲子、鶏足などの山塊からなる八溝山地、西部山地は那須、高原、日光、足尾などの山塊からなる下野山地と足尾山地である。東西の山地は南北に連なっており、両者に挟まれるように中央部平地が広がる（阿久津 1981）。本遺跡は中央部平地に位置する。中央部平地は関東平野の北縁をなし、山地から南北に延びる丘陵とそれに平行するように延びる台地と低地・河川からなる。これらの台地と低地・河川は、東から鬼怒川低地（鬼怒川）、岡本・磯岡台地（宝木段丘面＝中位段丘面）、田原・願成寺台地（田原段丘面＝下位段丘面）、田川低地（田川）、神主台地（宝積寺段丘面＝上位段丘面）、宇都宮･祇園原台地（宝木段丘面＝中位段丘面）と分類されている。

田原・願成寺台地　権現山・杉村両遺跡を含む東谷・中島地区遺跡群の大半の遺跡（砂田・立野・磯岡・磯岡北・中島笹塚・砂田姥沼遺跡等）と、その周辺の関連遺跡群（東谷古墳群の東半部や上石田遺跡・砂田



第３図　遺跡の位置（1/60 万）



第４図　周辺地形分類図（1/10 万）

東遺跡）は、田原・願成寺台地の上に立地する（第５～７図）。この台地は、中央部低地の中央に南北に連なり、鬼怒川低地（鬼怒川）と田川低地（田川）に挟まれている。宇都宮市北部の今里町～北東部の上田原町～宇都宮市市街地東部の砂田町・東谷町～河内郡上三川町願成寺・上蒲生周辺にかけての台地であり、全長は約 33km、東西の幅は 2.0 ～ 2.5km、標高は 170m ～ 68m である。台地の北から南への傾斜は平均すると 4.2/1000m であり、田川低地との比高は１～２mほどである。台地内部には、小河川によって形成された細かな開析低地が発達している。東側にある一段高い岡本・磯岡台地とは約２mの比高があるが、両地形面の差は南に行くほど不明瞭となる。

田原・願成寺台地の台地表層部は、田原段丘礫層を最も新しい田原ロームが 0.5 ～２mの厚さで覆っており、南に行くほど薄くなっている。田原ロームの鍵層である七本桜軽石層（Nt-S）と今市軽石層（Nt-I）は日光の男体山から噴出した火山灰（ともに 1.4 ～ 1.5 万年 cal BP）で、栃木県域北部に分布する。宇都宮市街地北方付近ではやや薄くなり、これ以南では本遺跡群のようにローム層中に軽石が点在する程度となる。田原ロームの下には、砂質土・砂層の厚い堆積が認められる。

田川低地　東谷・中島地区遺跡群の西方には田川低地が広がり、その微高地上には東谷古墳群の西半部や百目鬼遺跡・東谷北浦遺跡が位置している（第７図）。田原・願成寺台地と田川低地との境には、南流する赤沢川（井川）がある。田川低地は、宇都宮市域の北から宇都宮市街地を通過して南へ延び、田原・願成寺台地の西側に幅 1.5 ～２km にわたって分布する。この低地は、現在水田となっている田川の旧河道とされる部分と、それより 1.0 ～ 1.5 mほど上位で現在は集落が分布する自然堤防などの微高地上とに識別するこ

とが可能である。低地や微高地の形成時期などを決める資料は得られていないが、およそ２万年前以降に田川の営力によりできたものと推定されている。

岡本・磯岡台地　田原・願成寺台地の東側には岡本・磯岡台地が広がり、東谷・中島地区遺跡群の東端部にある西刑部西原遺跡および琴平塚古墳群や、東側にある西赤堀遺跡などが所在する。田原・願成寺台地と岡本・磯岡台地との境には、南流する無名瀬川（*2）がある。岡本・磯岡台地は、宇都宮市白沢・岡本～宇都宮市平出・猿山～上三川町磯岡・日産自動車用地～下野市三王山周辺の南北に長い台地である。全長約 35km、東西幅 1.5 ～ 2.5km、標高 162.5 ～ 54 ｍである。台地の北から南への傾斜は 4.5/1000 ～ 1/1000 で南ほど緩傾斜となる。鬼怒川低地との比高は、白沢付近で約 15 ｍあり明瞭だが、南へ行くほど緩斜面状を呈する。台地表層部は宝木段丘礫層を田原ロームと宝木ロームが厚さ５～ 10 ｍ程で覆っている。厚さは南に行くほど薄くなる。台地内部は、小河川によって形成された細かな開析低地が発達している。

*1 「にしやだ」および「なかじまやだ」の通称は、宇都宮市砂田町在住の福田林蔵氏（1930 年生）からの御教示による。漢字表記は推定である。
*2 「むなせがわ」の漢字表記は、開発前の 10,000 分の 1 地形図による（上三川町役場 1981 年作成）。「武名瀬川」や「田川用水」とも表記・呼称されている。

参考文献

栃木県企画部土地対策課 1984『土地分類基本調査　壬生』
経済企画庁総合開発局国土調査課 1960『土地分類基本調査　地形・表層地質・土壌調査　宇都宮』
上三川町史編さん委員会 1979『上三川町史』資料編　原始・古代・中世　上三川町
宇都宮市史編さん委員会 1979『宇都宮市史』第一巻　原始・古代編　宇都宮市
阿久津純 1981「自然と環境」栃木県史編さん委員会編『栃木県史』通史編 1　原始・古代一　栃木県 pp.11-36.

第２節　歴史的環境

東谷・中島地区周辺の遺跡は塚原（1999）の第 II 章第２節が網羅し、各時代・各遺跡の評価は塚原（1999）と中村（2004）、古墳については秋元（2003）が詳しい。これらを参考に資料を追補し、本遺跡で遺構遺物が出土した時期の歴史環境を述べる。権現山・杉村両遺跡（110・111）周辺の遺跡分布を第５～７図に示す。

旧石器時代　水晶製尖頭器が、権現山遺跡 SG1 区で古墳時代竪穴に混入していた。本来の出土層は不明だが、次章の標準土層 II ～ IV 層間に包含されていたことが想定され、Nt-S（七本桜軽石）と Nt- I（今市軽石）の示す 1.4 ～ 1.5 万年 cal BP 頃から、As-YP（浅間板鼻黄色軽石）の示す 1.5 ～ 1.65 万年 cal BP 頃に相当する可能性がある。権現山遺跡西半の北関東自動車道調査 A 区で As-YP 層相当の遺物集中地点が２箇所ある（谷中他 2001）。東谷・中島地区付近は、宝木段丘面に立地する西刑部西原遺跡（146）を除くと、最上位の田原ローム層だけが載る低段丘に相当するため、旧石器時代後半の遺跡が若干見られる程度である。

東谷・中島地区では、磯岡北遺跡の宇都宮市調査 B 区で安山岩の剥片４点（153：勝見 2005,p.37）、磯岡遺跡の 2,3,6 区で尖頭器（164：津野 2005, p.24）、砂田遺跡５区（103：津野・篠原・今平 2007, p.22）で尖頭器と黒曜石剥片１点、中島笹塚遺跡３区・７区（150：内山 2008,p.95）で黒色安山岩剥片がある。西刑部西原遺跡３区（146）では遺物集中地点３箇所と礫群があり、黒曜石・珪質頁岩の尖頭器・削器・彫器などが多数出土し（とちぎ埋文 2001, p.39）、同遺跡２区にも黒色安山岩の剥片が１点ある（中村 2004, p.169）。東側の西赤堀遺跡（161）では尖頭器と掻器を主体とする遺物集中地点が Nt-I 直下に６箇所と（安藤編 1996）、出土層不明の珪質頁岩の縦長剥片が１点ある（亀田 2007）。

縄文時代草創期～早期　草創期の遺構・遺物は権現山・杉村遺跡ではみられない。東側の磯岡遺跡３区に爪形文土器（津野 2005）、北方の立野遺跡 A 区に多縄文土器（亀田 2008）がある。1.4 ～ 1.5 万年 cal BP に降下した今市・七本桜軽石を混入する陥穴状土坑や土坑が、中島笹塚遺跡３・５・７区（150：内山 2008）、磯岡北遺跡 SG16 区 SK-20（153：内山 2006）・西刑部西原遺跡６・７区（146：とちぎ埋文 2002, pp.40-41）・砂田遺跡３区（103：藤田・田代 2002, p.205）・立野遺跡５・８区（108：内山 2005, pp.66,710）にある。田川西岸では殿山遺跡（85：大川他 1995）に溝型土坑を含む時期不詳の陥穴状土坑が３基ある。

縄文時代早期　権現山遺跡では撚糸文系土器（井草・大丸・夏島式土器と擦痕文土器）が目立ち、沈線文系（三戸式・田戸下層式・田戸上層式・出流原式）・条痕文系土器や早期末の縄文条痕土器も出土した。杉村遺跡の今回報告分は条痕文系土器少量だけだが、北関東自動車道路調査区で稲荷原式土器・スタンプ形石器と住居又は土坑１基、沈線文（主に田戸下層式）・条痕文系土器がある（藤田・安藤 2000, pp.31-34,38）。

東谷・中島地区では、撚糸文期の遺物が目立つ。北側にある立野遺跡５区（108）に撚糸文系土器・黒曜石製円形掻器・石鏃未成品を含む遺物集中地点があり、撚糸文系・条痕文系土器の包含層や、撚糸文系土器片を出土した陥穴状土坑もみられる（内山 2005, pp.33-53,63,67）。砂田遺跡（103）では、1 区で鵜ガ島台式、2 区で撚糸文系（夏島式）・沈線文系・条痕文系土器（藤田・田代 2002, pp.20,165-169）、4 区から 6 区にかけて撚糸文系土器１片と礫器少量（津野・篠原・今平 2007, p.22）がある。開析谷を挟んだ東側にある磯岡遺跡（164）の I 区で井草式以降の撚糸文系土器と野島式土器が少量（塚原 1999, p.41）、同遺跡５区に夏島式土器が１片ある（津野 2005, p.22）。磯岡北遺跡（153）の SG17 区（内山 2006）や宇都宮市調査 B 区（勝見 2005,pp.19,38）に撚糸文系土器（井草式）・スタンプ形石器・礫器が若干まとまって見られる。中島笹塚遺跡（150）では撚糸文系（井草式・大丸式・天矢場式）がやや目立ち、沈線文系（三戸式・田戸下層式）・条痕文系（鵜ガ島台式を含む）土器と、田戸下層式期の土坑１基がある。西刑部西原遺跡（146）の多くは未報告だが、宇都宮市調査地点で撚糸文系土器が１片ある（土生・宮田他 2007b, p.31）。

田川の東岸地域では、瑞穂野団地遺跡南調査区（135：岩上他 1978, p.58）と仏沼遺跡（173：倉田編 1971, pp.88-91）に撚糸文系土器が見られる。西赤堀遺跡（161）には夏島式土器が少量あり、時期不明だが埋土のしまりが強い陥穴状土坑が 1 基調査されている（亀田 2007, pp.21-23）。

田川の西岸地域では、西下谷田遺跡（50：板橋編 2003, p.388）・薄市遺跡（86：秋元 1988, p.32）に井草式土器、宮の内遺跡（14：田代 1996, p.180）の B 遺跡で撚糸文系土器・スタンプ形石器および鵜ヶ島台式土器、茂原向原遺跡（80：安永 2001, p.347）と神主古墳群の後志部古墳（82：石部他 1998, p.74）で条痕文系土器、殿山遺跡（85：大川他 1995, p.20）で撚糸文・条痕文系土器がある。文珠山遺跡（53 のすぐ南西：今平 1999, p.107）と上神主・茂原遺跡（79：安永 2001, p.76）の両遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が少量出土している。上神主・茂原遺跡の撚糸文系土器は浅間神社古墳（82）の調査でも出土した（石部他 1994）。このほか、木田遺跡（68：前澤 1979）にも早期の遺物があるという。

縄文時代前期　権現山遺跡では黒浜式期の土坑が SG1 区に 1 基あり、遺構外に黒浜、諸磯 a ・ b 、浮島・興津式と前期末の土器がある。東谷・中島地区周辺では、縄文前期の遺跡は少ない。開析谷の対岸にある磯岡遺跡では諸磯 a ～ c ・浮島式と前期末～中期初頭の土器（津野 2005, pp.23,289）、中島笹塚遺跡には羽状縄文系・浮島式・諸磯 b 式と前期末～中期初めの土器がある（内山 2008, p.422）。浮島式（？）が砂田遺跡 6 区に 1 片（津野・篠原・今平 2007, p.22）、諸磯式が西刑部西原遺跡に 1 片ある（土生・宮田他 2007b, p.31）。田川の東岸域では、仏沼遺跡（173：倉田編 1971, pp.88-91）に羽状縄文系土器がごく少量ある。

田川の西岸では、殿山遺跡（85：大川他 1995, pp.19-20）に羽状縄文系・諸磯 a ・ b ・浮島・興津式が見られる。神主古墳群（82）の後志部古墳（石部他 1998, p.74）で興津式、天狗原遺跡に諸磯 a 式が少量ある（36：神野 1994, pp.51,55）。

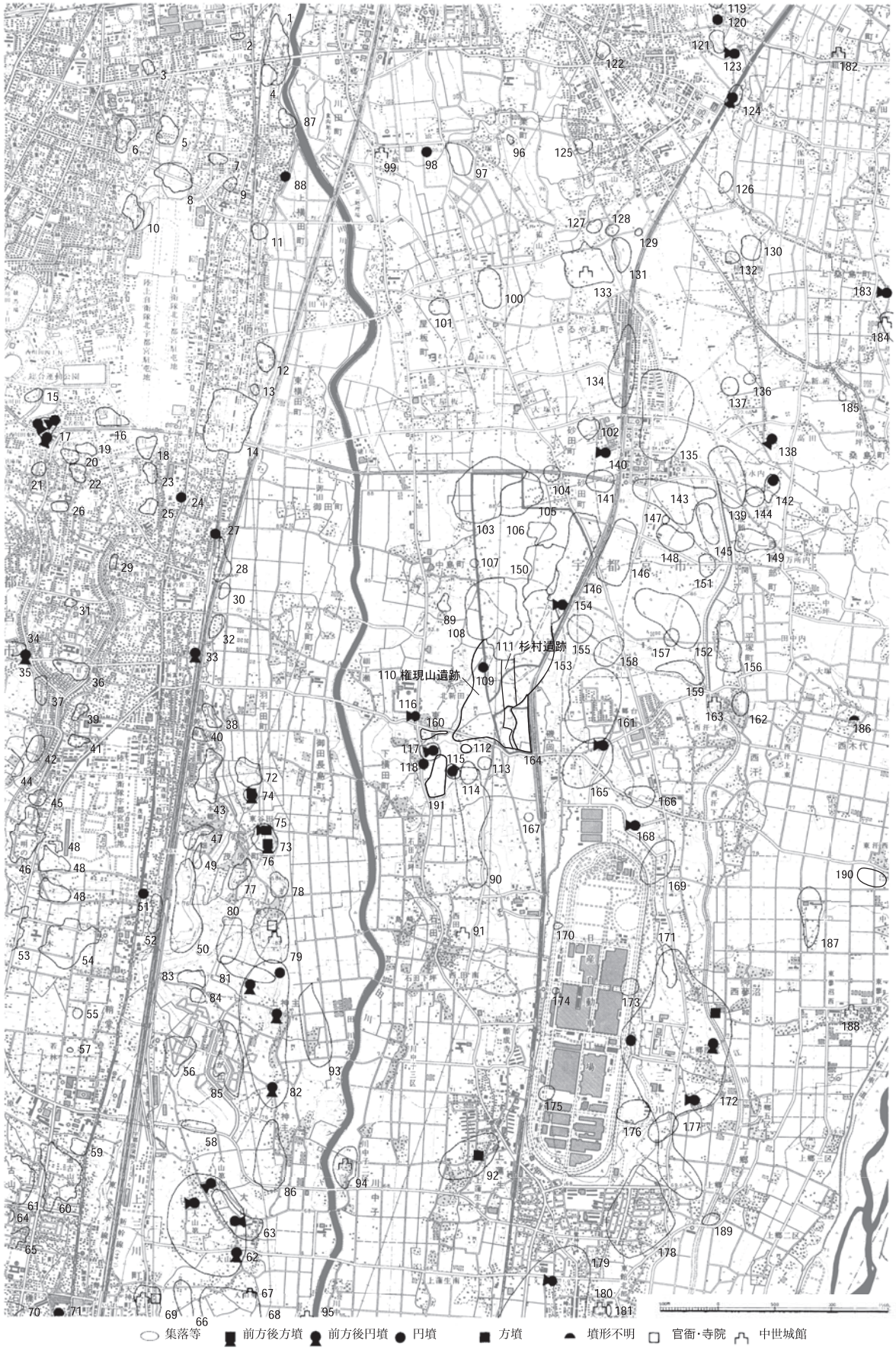
縄文時代中期　権現山遺跡では五領ヶ台式、阿玉台 I ～ IV 式、加曽利 E Ⅰ～ EII 式土器が出土した。

東谷・中島地区は大半が低台地上なので、中期の資料は少ない。開析谷を挟んだ東側の磯岡遺跡（164）では I 区（塚原 1999, p.37）に阿玉台式期の竪穴 1 棟、2 ～ 7 区（津野 2005, pp.24,289）に阿玉台 1b ～加曽利 EI 式土器がある。北側の立野遺跡（108）では 5 区に加曽利 E 式期の土坑が 2 基ある（内山 2005, pp.62-63）。磯岡北遺跡（153）では、北部の SG17 区に阿玉台式期の竪穴 1 棟と遺物集中地点 1 箇所、SG12・SG17 区に前期末～中期初頭と加曽利 E 式土器が極少量あり（内山 2006, p.39）、同遺跡南部の SG13 区でも阿玉台～加曽利 E 式土器が少量ある（藤田 2003, p.152）。中島笹塚遺跡で加曽利 E1 式期の竪穴 1 棟と前期末～中期初頭・阿玉台・加曽利 E Ⅰ・EIII ～称名寺式が少量ある（内山 2008, p.422）。無名瀬川東岸の琴平塚古墳群（154）でも加曽利 EII 式が少量見られる（中村 2004, p.171）。

田川の東岸域では、上三川町の市街地付近に中期遺跡群が見られる。島田遺跡で阿玉台 1b ～加曽利 E II 式期の竪穴建物 28 棟と袋状土坑を含む土坑 277 基が調査された（178：江原他 2004-2006）。島田遺跡の一部かと思われる東館遺跡や、その北方の大野遺跡（176）でも中期後半の遺物が知られる（倉田編 1971, pp.116,118）。上三川城跡（180）でも加曽利 EI 式期の土坑が 10 数基確認されている（江原他 2006, p.157）。宇都宮市域では柿木坂遺跡（130：大関 1992）で加曽利 E2 式期の遺物が報告・検討されている。

田川西岸では、西川田川の谷周辺に遺跡群がある（名取他 1996）。石川坪遺跡（44：宇都宮市 2003, p.20; 同 2004, p.13）で阿玉台式期中心の竪穴と袋状土坑群、二軒屋遺跡（20：五十嵐 1981; 名取他 1994）で加曽利 EII 式期の竪穴と袋状土坑がある。旭ヶ丘団地（21：名取他 1998, pp.94-102）・兵庫塚 A 地点（山崎 1970）・二軒屋西（田代 1968, pp.11,24）は同一遺跡と思われ、阿玉台～加曽利 E 式土器や 10 基の袋状土坑が知られる。その南の台地や、赤土山（39）・富士見団地北（41）遺跡にも遺物がある（名取他 1996, pp.38-42,52-56）。

縄文時代後期　権現山遺跡では堀之内 1・2 式、加曽利 B 式、曽谷式、後期安行式土器が出土した。杉村



第５図　周辺の遺跡分布図

第２表　東谷・中島地区周辺の遺跡

No.	遺跡名
1	本村遺跡
2	陽南１丁目遺跡
3	ガンセンター東遺跡
4	西原境遺跡
5	並松遺跡
6	雷電山遺跡
7	江曽島北原遺跡
8	関道遺跡
9	江曽島北原南遺跡
10	おしめ尽遺跡
11	大房林遺跡
12	城南３丁目遺跡
13	城南３丁目南遺跡
14	宮の内遺跡
15	塚山北遺跡
16	北若松原遺跡
17	塚山古墳群
	塚山古墳（１号墳）
	塚山西古墳（２号墳）
	塚山南古墳（３号墳）
18	一向寺別院付近遺跡
19	若松原遺跡
20	二軒屋遺跡（中原遺跡）
21	旭ヶ丘団地遺跡
22	西原北遺跡
23	留西遺跡
24	十里木古墳
25	留西南遺跡
26	若松原南遺跡
27	綾女塚古墳
28	雀宮東浦遺跡
29	雀の宮四丁目遺跡
30	雀宮駅東遺跡
31	大谷田遺跡
32	牛塚東遺跡
33	雀宮牛塚古墳
34	二子塚北遺跡
35	針ヶ谷二子塚古墳
36	天狗原遺跡
37	島の前遺跡
38	宇都宮機器南遺跡
39	赤土山遺跡
40	多功神塚古墳群
41	富士見団地北遺跡
42	岡田山遺跡
43	茂原北原遺跡
44	石川坪遺跡
45	富士見向山遺跡
46	明ノ内遺跡
47	西の前遺跡
48	上原遺跡
49	前畑遺跡
50	西下谷田遺跡（北原東遺跡）
51	下古山北原古墳
52	北原遺跡
53	大木遺跡
54	一本松遺跡
55	若林北遺跡
56	上ノ原遺跡
57	若林南遺跡
58	大山遺跡
59	谷端北遺跡
60	谷端遺跡
61	東浦遺跡
62	大山古墳群
	五社神社古墳（大山１号墳）
	大山瓢箪塚古墳（大山９号墳）
	新出古墳（大山 13 号墳）
	長塚古墳（大山 D20 号墳）
63	新出遺跡
64	稲荷城遺跡
65	横塚遺跡
66	舗飛内遺跡
67	大山館跡
68	木田遺跡
69	多功遺跡
70	上大領兵行内遺跡
71	長持塚古墳
72	権現山北遺跡
73	愛宕塚東遺跡
74-76	茂原古墳群
74	茂原権現山古墳
75	茂原大日塚古墳
76	茂原愛宕塚古墳
77	小蓋遺跡
78	江面遺跡
79	上神主・茂原遺跡
	茂原城跡
80	茂原向原遺跡
81	後志部遺跡
82	神主古墳群
	上神主浅間神社古墳（神主１号墳）
	上神主狐塚古墳（神主５号墳）
	後志部古墳（神主７号墳）
	下原古墳（神主 20 号墳）
83	向原遺跡
84	向原南遺跡
85	殿山遺跡
86	薄市遺跡
87	台内手遺跡
88	大山祇神社古墳
89	芋内遺跡
90	上石田遺跡
91	石田館跡
92	上蒲生の古墳群
	十三塚古墳（上蒲生１号墳）
93	後志部東遺跡
94	粕内遺跡
95	梁館跡
96	大塚神社古墳群
97	下栗念仏塚遺跡
98	下栗大塚古墳
99	東川田城
100	菅谷遺跡
101	赤沢遺跡
102	下桑島西原古墳群
103	砂田遺跡
104	砂田東遺跡
105	砂田瀧遺跡
106	砂田姥沼遺跡
107	赤沢高塚群
108	立野遺跡
109	桜稲荷古墳（古墳ではなく後世の塚）
110	権現山遺跡
111	杉村遺跡
112-118	東谷古墳群
112	権現山遺跡Ｂ区（原古墳群）
113	車塚古墳群
114	権現塚古墳群
115	松の塚古墳
116	双子塚古墳
117	笹塚古墳
118	鶴舞塚古墳
119	新谷台遺跡
120	三日月神社古墳
121	三日月神社南古墳群
122	十ヶ屋敷遺跡
123	久部浅間山古墳
124	久部台古墳群
	久部愛宕塚古墳（１号墳）
125	追金仏遺跡
126	石井久保田古墳群
127	大久保台山遺跡
128	天王山遺跡
129	猿山東原遺跡
130	柿木坂遺跡・柿木坂古墳群
131	東原古墳群
132	西原庚申塚
133	さるやま城遺跡・さるやま城古墳群
134	猿山遺跡
135	瑞穂野団地遺跡
136	根本西台古墳群
137	桑島台古墳群
138	飯塚古墳
139	藤腰遺跡
140	南原古墳
141	上横田Ａ遺跡
142	成願寺北遺跡
143	大関台遺跡（小屋原遺跡）
144	成願寺遺跡
145	西刑部古屋原遺跡・西刑部古屋原古墳群
146	西刑部西原遺跡
147	大関高塚群
148	中道遺跡
149	榎戸遺跡
150	中島笹塚遺跡（中島笹塚古墳群を含む）
151	後尚塚遺跡
152	古屋原高塚群
153	磯岡北遺跡（磯岡北古墳群を含む）
154	琴平塚古墳群
155	西沼遺跡
156	平塚原根岸遺跡
157	不動堂遺跡
158	内野遺跡
159	下小屋原遺跡
160	東谷北浦遺跡
161	西赤堀遺跡・西赤堀古墳群
162	南浦遺跡
163	高島館跡・高島遺跡群
164	磯岡遺跡
165	磯岡・西汗の古墳群
	屋敷東浦愛宕塚古墳（磯岡・西汗３号墳）
166	西赤堀東遺跡
167	磯岡Ｂ遺跡
168	西赤堀狐塚古墳（磯岡・西汗２号墳）
169	西赤堀南遺跡
170	西田遺跡
171	西林ノ内遺跡
172	上郷の古墳群
	愛宕神社古墳（上郷１号古墳）
	笹塚古墳（上郷２号墳）
	上郷瓢箪塚古墳（上郷３号墳）
	長塚古墳（上郷Ｄ３号墳）
	しらみ塚古墳（上郷４号墳）
	上郷 26・27 号墳
173	仏沼遺跡
174	願成寺遺跡
175	上蒲生遺跡
176	大野遺跡
177	西原遺跡
178	島田遺跡
179	上三川地区の古墳群
	八龍塚古墳（上三川１号墳）
180	上三川城跡
181	大町遺跡
182	石井城跡
183	高尾神社古墳
184	桑島城跡
185	根本遺跡
186	高霊神社古墳（西木代１号墳）
187	五丁免遺跡
188	中館跡
189	上郷遺跡
190	五霊遺跡
191	百目鬼遺跡

遺跡では安行２式が少量ある。

後期の遺跡は少ない。北側にある立野遺跡（108）の４・５区で堀之内１式期の土坑各１基と後期土器片が少量ある（内山 2005, p.733）。開析谷の東側では、磯岡遺跡で後期初頭～堀之内１式の土器がある（津野 2005, p.24）。磯岡北遺跡（153）では、宇都宮市調査Ｂ区で堀之内式（勝見 2005,p.38）、SG17 区で称名寺・堀之内・加曽利Ｂ式（内山 2006,p.39）が出土し、SG13 区に堀之内～加曽利Ｂ式期の土坑と遺物集中区がある（藤田 2003, pp.144-156）。中島笹塚遺跡（150）には加曽利 EIII ～称名寺式が少量ある（内山 2008, p.422）。

田川東岸では、西赤堀遺跡（161）で称名寺式期の竪穴住居跡が１棟調査されている（亀田 2007, pp.20-21）。仏沼遺跡（173：倉田編 1971, pp.88-92）に綱取系および堀之内１式土器が見られる。また、粕内遺跡（94：前澤 1979）にも後期の遺物があるという。田川西岸では、天狗原遺跡に堀之内２式が少量あり（36：神野 1994, pp.51,55）、兵庫塚３丁目（名取他 1996, pp.40-47）・石川坪（44：渡辺他 1993・下野考研 1993）・殿山（85：大川他 1995）の各遺跡に後～晩期の遺物がある。

縄文時代晩期　権現山遺跡では、次回報告予定の南半部に大洞 C2 式期の竪穴が１棟あり（SG10 区 SI-63）、遺構外遺物に大洞 B-C・C2・A 式土器が少量ある。

東谷・中島地区では、北方の立野遺跡（108）に晩期土器が少量ある（内山 2005, pp.57-58）。開析谷の東側では磯岡３・６区に晩期前～中葉の大洞系土器（津野 2005, p.24）、磯岡北遺跡 SG17 区に大洞 C2 式と晩期安行式（153：内山 2006）、中島笹塚遺跡に晩期中葉の大洞 C2 式など（内山 2008, p.422）がそれぞれ少量ある。田川東岸域では大野遺跡に大洞 C1 式があるが、資料は少ない（176：倉田編 1971, p.116）。田川西岸では著名な石川坪遺跡（44：渡辺他 1993・下野考研 1993）の他、薄市遺跡（86：秋元 1988）や神主古墳群（82）の後志部古墳に大洞Ａ式（石部他 1998, p.74）、北側の後志部遺跡（81：鈴木 1991）に大洞Ａ′式がある。

弥生時代中期　権現山遺跡では弥生前期後葉～中期前葉の大洞系土器と条痕文系深鉢形甕が目立つ。中期中葉の出流原型～中期後葉の土器もあり、在来の重四角文・貼付口縁・撚糸文の土器の他に、中部高地型櫛描文や東北南部系平行沈線文の土器も少量ある。

東谷・中島地区周辺で弥生中期の遺構・遺物は希薄である。北方の立野遺跡（108）では４区と１区に中期後半およびその可能性のある土坑があり、他区でも少量の遺物が出土した。開析谷の東対岸にある磯岡遺跡５区（津野 2005, pp.26,289）に中期後半の土坑２基と土器、磯岡北遺跡の北関東自動車道路調査区に中期後半の竪穴建物１棟と土坑２基がある。中島笹塚遺跡では条痕・撚糸・縄文や充填縄文の破片が少量ある。撚糸文の土器は、立野４区（内山 2005, pp.631-637）、磯岡Ⅰ区 SK-96（164：塚原編 1999）、磯岡北遺跡北関東自動車道路調査区３号土坑（153：藤田・安藤編 2000, pp.325-338）、仏沼遺跡の土坑２基（173：倉田編 1971, pp.94-95）にある。

田川の西岸では、弥生中期前半の土坑が殿山遺跡（85：大川他 1995）、中期後半の住居と土坑各１基が西下谷田遺跡（50：今平 2006）、上神主・茂原遺跡に中期後半の土坑１基と中期後半および後期の土器片がある（79：安永 2001, p.81）。薄市遺跡（86：秋元 1988, p.35）と本村遺跡（1：富川 2004, pp.50-54）で多く出土した弥生土器にも中期の資料を含む。権現山北遺跡（72：大島編 1979, pp.152,156）に撚糸文を用いる土器がある。愛宕塚東遺跡にも中期後半の土器があるという（73：今平 2008）。

弥生時代後期　杉村遺跡では弥生後期二軒屋式期の土坑が１基ある。権現山遺跡では弥生後期の二軒屋式少量と樽式１片の他、アメリカ式石鏃もあるが中期か後期か決めることは難しい。磯岡北遺跡 SG17 区で出土したような幅広有茎鏃（153：内山 2006,p.45）を、弥生後期と考える意見がある（海老原 2004, p.14）。

後期には、田川流域全体で遺跡数がやや増加する。田川東岸にある東谷・中島地区では、砂田姥沼遺跡３区で、古墳前期の竪穴建物で弥生土器も出土した（106：とちぎ埋文 2006a・b）。中島笹塚遺跡（150：内

山 2008,pp.106,310）や、権現山遺跡の西に隣接する百目鬼遺跡（191：谷中・大島編 2001）と東谷北浦遺跡（篠原・亀田 2009）では、遺構が未確認だが後期土器が一定数あり、集落を形成していたと考えられる。

上記の遺跡以外では弥生後期の資料は希薄である。開析谷の対岸にある磯岡遺跡５区に附加条１種で施文する破片が少量ある（津野 2005, p.26）。北方の立野遺跡（108：内山 2005）は約 61,000m² を調査したが、弥生後期土器は立野５区の１片だけであった。砂田遺跡（103）も、既報告地区の合計６万 m² には弥生土器が皆無である。

遺跡は田川西岸地域で目立つ。西川田川と兵庫川の谷周辺にある二軒屋遺跡（20：寺内他 1939a）や天狗原遺跡（36：神野 1994）が代表的である。「東河田遺跡」（名取他 1998, pp.78-79）として戦前から知られる本村遺跡（1：富川 2004 および水野・柏崎他 2007）の竪穴 19 棟と、殿山遺跡（85：大川他 1995）を中心とする上ノ原遺跡から向原南遺跡の範囲（56・84：大川他 1992）の竪穴 21 棟が、比較的大きな集落群である。また、古墳前期の項で触れる西下谷田遺跡の竪穴建物中９棟から樽式・十王台式・吉ヶ谷式など、大日塚古墳墳丘下竪穴建物や愛宕塚古墳下層で樽式系などの弥生後期土器も出土した。

古墳時代前期　田川東岸の東谷・中島地区周辺では、本格的な古墳時代集落は中期前葉に現れる。それまでは小規模な集落が点在する程度である。東谷・中島地区内では北部の砂田姥沼遺跡２区 SI-01 と３区 SI-05 が前期の竪穴建物である（106：とちぎ埋文 2006a・b）。この他に西刑部古屋原遺跡 SI-02（145：清水 2002）、砂田東遺跡 B 区 SI-12・13（104：中山 1996）がある。田川東岸の低台地では、粕内遺跡に前期の遺物がある（94：前沢 1979）。

前期末～中期初めの建物は、杉村遺跡北関東自動車道路調査区の 60・69・70 号住居跡（藤田・安藤 2000, p.410）、北側の立野遺跡５区 SI-14（108：内山 2005, pp.122-123,739）、西方の東谷北浦遺跡 SI-139（160：篠原・亀田 2009）がある。

前期古墳と同じく前期の集落も田川西岸の茂原地域に多い。大日塚・愛宕塚古墳下層（75・76：久保編 1990）・愛宕塚東（73：名取他 1998, pp.87-89）・西下谷田（50：今平 2006）の各遺跡に前期前半の集落が見られる。権現山北遺跡で前期後葉の竪穴１棟（72：大島編 1979）、上ノ原遺跡で竪穴６棟（56：大川他 1992）、殿山遺跡で１棟（85：大川他 1995, p.230）が報告されている。田川西岸に面する台地では、木田遺跡（68：栃木県教委 1988, p.77）に前期の竪穴建物がある。やや西方にある西川田川の開析谷では、天狗原遺跡（36：神野 1994）に竪穴３棟、留西遺跡（23：宇都宮市 1983, p.317）と留西南遺跡（25：名取他 1996, p.31）に前期の遺物がある。

前期～中期初頭の古墳　田川東岸では、前期古墳が小規模で数も少ない。最初に現れるのは小形方墳で、西刑部古屋原２・４号墳（145：辺長 10 ～ 14m、清水 2002）や上郷 26・27 号墳（172 の西部：辺長 11 ～ 14m、秋元 2000）である。中島笹塚７・８号墳も中期初頭の小形方墳と思われる（150：辺長 7.1 ～ 12.6m、内山 2008）。この他、権現山遺跡 B 区（112）の土壙墓２基が前期末～中期初頭である（谷中他 2001, III-p.284）。

東谷・中島地区から田川をはさんだ対岸（西岸）では、有力な首長墳が築かれる。前方後方墳３基を含む茂原古墳群がよく知られている（久保編 1990）。大日塚古墳（75：墳長 35.8m・箱式木棺・素文鏡１面）・愛宕塚古墳（76：墳長 50m・舟形木棺・S 字文または重圏文鏡）・権現山古墳（74：墳長 63m）の３基で、大形化している権現山古墳が最後に築かれたと推定されている。小形墳としては、牛塚東遺跡で辺長 11m と６m の方墳（32：今平 1993）、北原東遺跡に辺長 13.0 × 11.8m の方墳（50 の南端部：安永 2001）、殿山遺跡に「方形周溝墓」２基（85：大川他 1995, p.7）がある。上神主浅間神社古墳（82 の北端）は墳径 53 ～ 54m で、茂原古墳群に続いて方系墳から円墳に転換した中期初頭頃の首長墳である（石部・秋元編 1994）。茂原周辺地域以外では、城南３丁目遺跡２号墳が方墳の可能性がある（12：今平 1996）。

古墳時代中期の集落　古墳中期集落は周辺に数多い。田川東側地域では、上述した前期末～中期初頭の小



第６図　杉村遺跡・権現山遺跡とその周辺（1/10,000）



第７図　東谷・中島地区遺跡群と杉村・権現山・百目鬼遺跡（1/10,000）

集落（立野５区 SI-14、杉村遺跡 60・69・70 号住居、東谷北浦遺跡 SI-139）の次段階から、東谷・中島地区周辺に多数の中期集落が現れる。東谷北浦遺跡（160）の SD-77・87 が中期初頭の溝で、東谷古墳群の初期首長墳と推定される笹塚古墳（117）のすぐ東北にある。東谷古墳群と周辺遺跡群の形成が中期初頭に東谷北浦遺跡から始まってきたことを示すものかもしれない。その中核である権現山遺跡は、豪族居館（首長居宅）と考えられる施設を SG1 区と SG5 区に含み、周辺の竪穴建物も高密度で（4 区・SG5 区・SG10 区・北関東自動車道Ａ区）、遺物の質・量も豊富である。

周辺の中期集落群は権現山遺跡と同時か、または少し遅れて現れる。その例は、砂田４・６区（津野他 2007）、立野５・６区周辺（後述）、西刑部西原３区（とちぎ埋文 2001, pp.39-40）、杉村（藤田他 2000）、磯岡（塚原 1999・藤田他 2000・高野他 2004・津野 2005・栗田 2005）の諸遺跡がある（103,108,146,160,164）。北方の砂田東遺跡（104：中山 1996）や東方の成願寺遺跡（144：篠原編 2000）も、東谷・中島地区の諸遺跡と時期をそろえるように形成される。

権現山遺跡の北側では、開析谷を挟んで西側集落の立野遺跡と、東側墓域の中期群集墳が対応して営まれる。立野遺跡（108）の５区・６区・宇都宮市調査Ａ地区周辺で調査した 91 棟の古墳時代竪穴建物は、約半数の 44 棟が中期で、磯岡北古墳群（153）と中島笹塚古墳群（150）に先行する中期中葉に 13 棟、中島笹塚古墳群の前半期および磯岡北古墳群に対応する中期後葉に９棟が確認されている。磯岡北古墳群の造営停止後、中島笹塚古墳群の後半期に対応する中期末は立野５・６区周辺の竪穴建物が最も多い時期で、３区の単独建物を含めて 21 棟ある（内山 2005, pp.735-742; 水野他 2005, p.35）。このうち２棟はそれぞれ辺長 14.5m と 12m で（宇都宮市調査Ａ地区 SI-2・3）、古墳時代を通じて最大級の竪穴建物である。

開析谷の東側でも、少数の集落が形成される。磯岡北遺跡（153）では、磯岡北古墳群の造営前・造営後の竪穴建物６棟が SG17 区（内山 2006）・SG11 区（藤田 2003）と宇都宮市調査Ａ・Ｂ区（勝見 2005）にある。中島笹塚遺跡（150）でも５区に中期（中葉？）の竪穴建物１棟と円筒形土坑３基がある。

田川西岸では、塚山古墳群（17）を中心とする兵庫川・西川田川の谷に大集落が現れる。北若松原遺跡は塚山古墳群とほぼ同じころの集落で、竪穴 24 棟が調査された（16：宇都宮市 1992, p.38; 1994, p.30）。中原（二軒屋）遺跡も同様と思われ（20：寺内他 1939b）、若松原（19）・西原北（22：名取他 1996, p.36）の両遺跡と一連の大集落であろう。若松原遺跡周辺と北若松原遺跡では石製模造品が豊富で、臼玉生産を示す未成品も多数採集され（名取他 1998, pp.108-133）、塚山古墳群と対応する拠点集落の手工業生産地区と見てよい。北方の雷電山遺跡には TK-23 ～ 47 型式期の特異な長方形竪穴建物群がある（6：今平 1994）。

また、田川西岸で前期の中枢地域だった神主台地の茂原周辺にも大集落がある。殿山遺跡（85：大川他 1995）では、首長居宅と見られる辺長 50m の方形区画溝の周囲で調査した 447 棟の竪穴建物の大半が中～後期で、陶質土器（定森 1999）・初期須恵器・鍛冶遺構や、凝灰岩切石の竈焚口枠（水野他 2005, p.36）などを伴う。権現山北遺跡（72）では中期前～中葉の竪穴８棟と中期末葉の１棟を調査した。ここでは権現山４区・立野５区等と同様の円筒形土坑群が、遺物からみて中期の集落に伴うらしい（大島編 1979, pp.132-145）。

中期古墳　田川東岸では、栃木県域中央部を代表する中期古墳群の東谷古墳群が、東谷・中島地区のすぐ西側に造られる（橋本・谷中 2001）。双子塚（墳長 73m）・笹塚（100m：小森 1979, 秋元・今平 1998）の前方後円墳２基と、鶴舞塚（径 53m：梁木 1984）・松の塚（48m：谷中他 2001）・権現塚（30m）・車塚（35m）の大形円墳が北西から南東へ順に立地し、おおよそこの順序で築かれた可能性がある（112-118）。東谷地域における中期後半の首長墳は埴輪のない大形円墳になる。田川東岸で埴輪を持つ中期後葉の前方後円墳は墳長 40m の八龍塚古墳がある（179：秋元 1989）。中期群集墳としては東谷古墳群の東半部に含まれる円墳群（112：谷中他 2001）と、磯岡北古墳群（153：内山 2006）・中島笹塚古墳群（150）・西刑部古屋原 1,3,5,6,7 号墳（145：墳径 14 ～ 28m：清水 2002）がある。磯岡北と中島笹塚の古墳群は、立野遺跡５・

6 区周辺の集落に対応する墓域と推定される（第 8 図）。中島笹塚 2・10 号墳と磯岡北 3 号墳でそれぞれ円墳から小形倭鏡を 1 面ずつ出土している点は（とちぎ埋文 2005b）、次に述べる田川西岸の状況と同様である。

田川西岸では、東岸の東谷笹塚古墳に続いて塚山古墳群が現れる（17：宇都宮大 1995・2003）。また、雀宮牛塚古墳が豊富な副葬品を持つ（33：大和久 1969）。塚山（墳長 98.3m）→塚山西（63.1m）→雀宮牛塚（56.7m）・塚山南古墳（58.0m）の順で、TK-216 ～ 23 型式期に築かれた可能性が高い。塚山西・南古墳並行期に、本村遺跡（1：富川 2004）の 2 号墳（径 24m・乳文鏡 1 面・銀杏葉文線刻埴輪他）、城南 3 丁目遺跡（12：今平 1996）の 1 号墳（径 12.9m・木棺 2 基・乳文鏡 1 面）など、副葬品がやや豊富な中小古墳がつくられる。

古墳時代後期・終末期の集落　古墳時代終末期後半（7 世紀後半）には、古墳中～後期以来の中心的な集落遺跡が衰退する。権現山遺跡と、その北側の立野遺跡 5・6 区周辺（108：内山 2005, p.742）の古墳時代集落は終末期前半（8 段階＝ 7 世紀前半）、杉村遺跡も終末期後半（9 段階＝ 7 世紀後半）までで衰退する。中期集落の項で上述した周辺各遺跡も、多くが同様な状況を示す。

それに代わって、砂田遺跡（103：藤田他 2002・中山他 2005・津野他 2007）と、東側の岡本台地上にある西刑部西原（146）・西赤堀（161：安藤 1996）・瑞穂野団地（135：岩上他 1978）・大関台（143：杉浦 2001）の各遺跡が中心的な集落になってゆく。また、後期から出現する集落も見られる。中期群集墳が形成された中島笹塚・磯岡北遺跡では、墓域が消滅する後期以降に集落が現れる（150・153）。中島笹塚遺跡では、部分的な調査で後～終末期集落が知られ、一部は奈良時代へ続く可能性がある。磯岡北遺跡は、宇都宮市調査Ｂ区（勝見 2005）と SG3 区・SG11 区（藤田 2003）に終末期の建物が知られる。

田川の西岸地域でも同様な状況がある。神主台地の中核的集落として中期から続く殿山遺跡（85）は、後期には向原遺跡（83：大川・三輪 2000）や向原南遺跡（84：大川・吉岡他 1992）も加わり、終末期前半まで継続する。権現山北遺跡（72）も後期後半までは集落がみられる。殿山遺跡 KT-100 などを最後として、終末期後半にはこれらの集落群が消滅し、南側の薄市遺跡（86：秋元編 1988）と北側の西下谷田遺跡（50：板橋編 2003,2006; 今平 2008）に中心が移る。西下谷田遺跡は竪穴建物 86 棟と掘立柱建物 45 棟の他に門を持つ 150 × 108m の板塀区画施設を含み、河内評家かと考えられている（板橋 2007）。

中期後半における田川西岸地域の中心であった塚山古墳群周辺の集落は、後期以後の状況が不明確である。弥生後期・古墳前期の項でも触れた天狗原遺跡（36）では、古墳後期の竪穴建物や、立野 5 区と同様の円筒形土坑・円形周溝遺構がある。関道遺跡（8：赤石澤 1988）は古墳後期～奈良時代まで続くようである。

後期・終末期古墳　田川東岸の後期前半では、琴平塚 1 号墳が最大の古墳である（154：長 52m・二重周溝、中村 2004）。ただし中期末の可能性もある。笹塚古墳以降の東谷・中島地区周辺でしばらく途絶えていた前方後円墳と埴輪樹立がここで再開する。他に、墳長 31m のしらみ塚古墳がある（172 の西部：秋元 2000）。田川西岸の後期前半では、墳長 48.8m の上神主狐塚古墳が最大である（82 の北西部：石部・秋元編 1995）。琴平塚 1 号・上神主狐塚・しらみ塚は、いずれも前方部が短い帆立貝形前方後円墳である。琴平塚 1 号墳を中心として後期前半から群集墳が形成される（中村 2004）。下桑島西原古墳群（102：今平他 2002）では後期前半の円墳 2 基と後期後半の墳長 35m の前方後円墳 1 基（140：南原古墳）が知られ、周溝内の木棺直葬・竪穴式小石室や、古墳外の土壙墓も見られる点が琴平塚古墳群と同様な時期・群構成である。

後期後半に古墳が増えて群集墳が盛行し、その中に前方後円墳が所在する（中村 2004, p.190）。田川東岸では墳長 68m の上郷瓢箪塚古墳が最大である（172 の東端：前澤 1979,p.414）。東谷・中島地区では琴平塚 3・5 号墳（長 25.0 m と 23.7m）がある。周辺に長 50.5m の久部愛宕塚（124：梁木他 1995）、32 ～ 38m の根本西台 1・2・5 号墳（136：水野他 2008b・c）、38.5m の飯塚古墳（138：斎藤他 2003）、

30 ～ 40m の西刑部古屋原 8 号墳（152：清水 2002）、42m の西赤堀 1 号墳と 27m の同 2 号墳（161：安藤編 1996）、39m の西赤堀狐塚（168：大川・水野他 1987/ 中山・井他 2005）、36m の高尾神社古墳（183：内山 1998,2000）などがある。墳長 36 mの屋敷東浦愛宕塚古墳（165：前澤 1979, p.398）も後期後半と推定される。径 43.5m の下栗大塚古墳は終末期大形円墳と想定される（98：宇都宮市 1996, pp.2-3）。後～終末期群集墳は成願寺（144：篠原編 2000）・西赤堀（161：安藤 1996）両遺跡、単独所在の小形方墳が立野遺跡 5 区にある（108：内山 2005）。

田川西岸では、推定長 45m 以上の本村 3 号（1 の北部：水野他 2007）、40 ～ 50m の綾女塚（27：秋元・飯田他 1998）、30 ～ 40m 前後の針ヶ谷二子塚（35：宇都宮市 1990）、43m の大山瓢箪塚（62 の南端：前澤 1979）、47.4m の後志部（82 の中央：石部他 1998）が後期後半の前方後円墳である。墳形不明の十里木古墳（24：宇都宮市 1998, p.16）は切石石室で 7 世紀初葉とされる（秋元・飯田他 1998, pp.114,128）。市街地化していない地域では、これら首長墳の周囲に群集墳を確認できる（1 本村古墳群・62 大山古墳群・82 神主古墳群）。また、円墳だけの古墳群もみられる（50 西下谷田古墳群：今平 2008）。

奈良・平安時代　権現山・杉村遺跡から北東（磯岡北・杉村北・西刑部西原遺跡）に続く古代道路状遺構は東山道と推定されている（藤田 2003・亀田 1999）。この道路状遺構以外は古代の遺構・遺物が少ない。

奈良時代以降の建物は少数または単独で見られる。杉村遺跡では GN1 区に 1 棟と北関東自動車道調査区（藤田・安藤 2000）に 2 棟の奈良時代前葉の竪穴建物があり、次回報告する権現山 SG10 区（旧称は杉村Ｘ区：とちぎ埋文 2000, p.32）で 9 世紀代の 1 棟がある。また、古代の溝が権現山 SG1 区に 1 条ある。北側にある立野遺跡（108）でも古代の遺構が希薄で、5 区に奈良時代末頃の単独建物がある。立野遺跡では 4・7・8 区の大溝と、その溝に降りる 2 区の通路遺構が注意される（内山 2005, pp.748-749）。東に隣接する磯岡北 SG3・SG4 区でもそれぞれ単独の竪穴建物がある（藤田 2003, pp.167-172,177-179）。磯岡北遺跡の各古墳や中世溝にも 7 世紀末～奈良時代の須恵器が少量混入していた（153：内山 2006）。中島笹塚遺跡では古墳終末期～奈良時代の集落と、奈良時代の溝を通過する道路状遺構（8 区）を調査した。東側の磯岡遺跡（164）でも 8 ～ 9 世紀代の竪穴・掘立柱建物が少数あり、漆紙文書の具注暦（塚原編 1999, pp.442-445）と円面硯・獣脚・鉄鉢形土器（津野 2005, p.103,112,117,294）が見られる。

東側の高位台地上に大規模な古代の集落 - 猿山（134：川原他 1981; 常川他 1978）・瑞穂野団地（135：岩上他 1978; 水野他 2008b）・大関台（143：杉浦 2001）・西刑部西原 3 区（146：とちぎ埋文 2001）・西赤堀（161：前澤 1976・安藤 1996・亀田 2007）がある。遺跡の立地が総じて東へ進むことが指摘されている（橋本 2002, p.13）。

東谷・中島地区遺跡群の多くが立地する田原低台地では、砂田遺跡が最も大規模である（103：芹澤 1993/ 藤田・田代 2002/ 中山・青木他 2005/ 津野・篠原・今平 2007）。8 世紀代に掘立柱建物跡の比率が高い集落である。砂田 3 区 SI-97 に「中嶋」の墨書土器があり、『倭名鈔』の郷名に見られない「中島」の地名が 9 世紀から現代まで続くことを示した（藤田他前掲）。同遺跡 5 区の墨書土器から 9 世紀中～後葉に「大麻」部集団等が居住したと解釈されている（津野他前掲 , p.687）。県調査分の砂田 24 区（津野他前掲）や宇都宮市調査分のＡ地区（中山・青木他 2005）では、旧河道に降りてゆく古墳後期と平安時代の水場遺構がある。

田川西岸台地にある上神主・茂原遺跡（79：秋元・保坂 1999; 深谷他 2003）は、西下谷田遺跡を引き継いで 7 世紀後葉に成立する。推定東山道に取り付く位置にあり、奈良時代の河内郡家政庁と、人名瓦を伴う瓦葺倉を含む正倉群と考えられている。また、多功遺跡（69：秋元他 1997）も河内郡衙と推定されている。

中世　権現山遺跡 SG1 区では不整方形の区画溝内に 13 世紀後半～ 14 世紀前半を中心とする竪穴遺構 2・土坑 2・井戸 1 が認められた。方形区画溝は次回報告の権現山 SG10 区にもあり、区画内外に柱穴群や井戸

を伴う（とちぎ埋文 2000, p.32）。すぐ北側の立野遺跡（108）では、5 区に方形区画溝・8 区に方形竪穴遺構 1 基（内山 2005）、宇都宮市調査 A 地区に方形竪穴遺構群（水野他 2005）がある。

台地の東端から西端まで、古墳群の周溝をも連結・利用しながら伸びる 13 世紀頃の長い溝が、磯岡北古墳群の北端部に認められる（磯岡北遺跡 SG12・SG 16 ～ 17 区）。常滑産陶器・青磁碗・かわらけが見られ、磯岡北古墳群周辺を中世に利用していたようである。集落に関わる遺構としては方形竪穴があり、磯岡北遺跡 SG3 区で 1 基（153：藤田 2003, p.173）と、同じく磯岡北遺跡の一部に含まれる「杉村北遺跡」（亀田 1999）で 2 基が確認され、後者では井戸が隣接している。

東谷・中島地区の周辺は、鎌倉・室町時代において宇都宮氏および芳賀氏の支配下にあったことが知られている。小規模な城館として刑部城（186 の北東 1 km）・桑島城（184）・高島館（163）がある。また北方には石井城（182）・さるやま城（133：宇都宮市 2005b, p.12）があり、これらの分布から、中世から鬼怒川低地の開発が本格的に行われたものと考えられている（橋本 2002, p.19）。大関台遺跡（143）では長辺 80m の方形区画溝を戦時の臨時拠点と考える意見がある（杉浦 2001, p.386）。立野遺跡 5 区や権現山遺跡 SG1 区・SG10 区の方形区画溝はより小規模で溝も浅いので、大関台遺跡と同様な性格を考えてよいかどうかは不詳である。

（第２章第２節　参考文献）

赤石澤亮 1988『関道遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第 25 集　宇都宮市教育委員会
秋元陽光編 1988『薄市遺跡・大山遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告第７集　上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
秋元陽光編 1989『八龍塚古墳』上三川町埋蔵文化財調査報告第８集　上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
秋元陽光編 2000『上三川町の古墳』Ⅰ　上三川町埋蔵文化財調査報告第 21 集　上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
秋元陽光 2003「上三川町における古墳の素描 - 古墳から見た古墳時代集団の抽出 -」『栃木の考古学』塙静夫先生古稀記念論文集「栃木の考古学」刊行会（宇都宮）pp.225-238.
秋元陽光・飯田光央・篠原真理 1998「綾女塚古墳の課題」『栃木県考古学会誌』第 19 集　栃木県考古学会　宇都宮 pp.109-133.
秋元陽光・大橋泰夫 1988「栃木県南部の古墳時代後期の首長墓の動向」『栃木県考古学会誌』第９集　栃木県考古学会　宇都宮 pp.7-40.
秋元陽光・君島利行・諏訪間伸・藤田典夫・植木茂雄 1985『大町遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告第５集　上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
秋元陽光・今平利幸 1998「宇都宮市東谷笹塚古墳出土の遺物」『峰考古』第 13 号　宇都宮大学考古学研究会　宇都宮 pp.41-64.
秋元陽光・保坂知子・及川真紀 1997『多功遺跡』Ⅲ　上三川町埋蔵文化財調査報告第 16 集　上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
秋元陽光・保坂知子 1999『上神主・茂原遺跡』Ⅰ　上三川町埋蔵文化財調査報告第 19 集　上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
安藤美保編 1996『西赤堀遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 178 集　栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
五十嵐利勝 1979「権現山北遺跡採集の石器について」『権現山北遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第５集　宇都宮市教育委員会 pp.177-182.
五十嵐利勝 1981「宇都宮市二軒屋遺跡発掘調査報告」『下野考古学』2　下野考古学研究会　宇都宮 pp.1-140.
石部正志・秋元陽光編 1994『上神主浅間神社古墳・多功大塚山古墳』上三川町埋蔵文化財調査報告第 12 集　上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
石部正志・秋元陽光編 1995『上神主狐塚古墳』上三川町埋蔵文化財調査報告第 13 集　上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
石部正志・秋元陽光・飯田光央編 1998『後志部古墳』上三川町埋蔵文化財調査報告第 17 集　上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
板橋正幸編 2003『西下谷田遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 273 集　栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
板橋正幸編 2006『西下谷田遺跡Ⅱ』栃木県埋蔵文化財調査報告第 297 集　栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
板橋正幸 2007「県内の郡内複数官衙について－古代下野国河内郡を中心として－」『上神主・茂原官衙遺跡の諸問題』栃木県考古学会　宇都宮 pp.51-64.
岩上照朗・石橋知明編 1978『宇都宮市瑞穂野団地遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第４集　宇都宮市教育委員会
内山敏行 1998「宇都宮市上桑島町　高尾神社古墳発掘調査報告（１）」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』20　平成８年度（1996）　栃木県埋蔵文化財調査報告第 217 集　栃木県教育委員会 pp.117-137.
内山敏行 2000「宇都宮市上桑島町　高尾神社古墳発掘調査報告（２）」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』22　平成 10 年度（1998）　栃木県埋蔵文化財調査報告第 233 集　栃木県教育委員会 pp.97-121.
内山敏行 2005『東谷・中島地区遺跡群５　立野遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 290 集　栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
内山敏行 2006『東谷・中島地区遺跡群７　磯岡北古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第 299 集　栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
内山敏行 2008『東谷・中島地区遺跡群８　中島笹塚古墳群・中島笹塚遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 311 集　栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
宇都宮市教育委員会社会教育課編 1983『宇都宮の遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第 10 集
宇都宮市教育委員会文化課 1990 ～ 2009『宇都宮市文化財年報』第６号〔平成元年度〕～第 25 号〔平成 20 年度〕
宇都宮大学考古学研究会 1995「塚山古墳外形確認調査報告」『峰考古』第９号

宇都宮大学考古学研究会 2003『塚山西古墳　塚山南古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 48 集　宇都宮市教育委員会
江原美奈子・深谷昇 2004『島田遺跡』Ⅲ　縄文時代編１　上三川町埋蔵文化財調査報告第 28 集　上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
江原美奈子・深谷昇 2005『島田遺跡』Ⅳ　縄文時代編２　上三川町埋蔵文化財調査報告第 31 集　上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
江原美奈子・深谷昇 2006『島田遺跡』Ⅴ　縄文時代編３　上三川町埋蔵文化財調査報告第 33 集　上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
海老原郁雄 2004「アメリカ式石鏃とその周辺」『唐澤考古』第 23 号　唐澤考古会　佐野 pp.1-16.
大川清・水野順敏・矢野淳一 1987『栃木県上三川町　西赤堀狐塚古墳』上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
大川清・三輪孝幸 2000『向原遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告第 22 集　上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
大川清・吉岡秀範・三輪孝幸・中島雄一 1992『栃木県上三川町　上ノ原・向原南遺跡』日本窯業史研究所報告第 43 冊　馬頭（栃木県那須郡）
大川清・吉岡秀範・三輪孝幸・中島雄一 1995『栃木県上三川町　殿山遺跡Ⅰ』日本窯業史研究所報告第 46 冊　馬頭（栃木県那須郡）
大島和子編 1979『権現山北遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第５集　宇都宮市教育委員会
大関利之 1992「宇都宮市柿木坂遺跡の加曽利Ｅ式土器」『栃木県考古学会誌』14　宇都宮 pp.93-100.
大和久震平 1969『雀宮牛塚古墳』宇都宮市教育委員会（1984 年『牛塚古墳』として再版）
小野麻人（東京航業研究所編）2007『砂田姥沼遺跡　Ｂ区』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 64 集　宇都宮市教育委員会
勝見一晶（埋蔵文化財発掘調査支援協同組合編）2005『磯岡北遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 53 集　宇都宮市教育委員会
亀田幸久 1999『杉村北遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 221 集　栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団
亀田幸久 2007『西赤堀遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 304 集　栃木県教育委員会・(財）とちぎ生涯学習文化財団
亀田幸久 2008「宇都宮市立野遺跡の縄文草創期土器について」『唐澤考古』27　唐沢考古会　佐野　pp.29-32.
川原由典・中山晋 1981『猿山遺跡　付久部台古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第 38 集　栃木県教育委員会
神野安伸 1994『天狗原遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 34 集　宇都宮市教育委員会
久保哲三編 1990『茂原古墳群』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第 28 集　宇都宮市教育委員会
倉田芳郎編 1971『栃木日産遺跡』先史７　駒沢大学考古学研究会　東京
栗田欣行 2005『磯岡遺跡第２次調査報告』上三川町埋蔵文化財調査報告第 32 集　上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
小森哲也 1979「宇都宮市笹塚古墳出土の円筒埴輪の年代的位置づけ」『峰考古』第２号　宇都宮大学考古学研究会　宇都宮 pp.60-83.
今平利幸 1993『牛塚東遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第 32 集　宇都宮市教育委員会
今平利幸 1994『雷電山遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第 35 集　宇都宮市教育委員会
今平利幸 1996『城南３丁目遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 39 集　宇都宮市教育委員会
今平利幸 2006『西下谷田遺跡－弥生・古墳時代前期編－』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 56 集　宇都宮市教育委員会
今平利幸 2008『西下谷田遺跡－古代編Ⅱ－』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 65 集　宇都宮市教育委員会
今平昌子 1999『一本松遺跡・文珠山遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 230 集　栃木県教育委員会・(財）栃木県文化振興事業団
今平利幸・梁木誠 2002『下桑島西原古墳群』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 30 集　宇都宮市教育委員会
斎藤恒夫・鈴木宣孝・栃本さや・大塚伸子 2003「宇都宮市飯塚古墳測量調査報告」『峰考古』第 14 号　宇都宮大学考古学研究会　宇都宮 pp.1-10.
定森秀夫 1999「陶質土器から見た東日本と朝鮮」『青丘学術論集』第 15 集　韓国文化研究振興財団　東京 pp.5-93.
篠原浩恵編 2000『成願寺遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 239 集　栃木県教育委員会・(財）栃木県文化振興事業団
篠原祐一・亀田幸久 2009『権現山遺跡・東谷北浦遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 318 集　栃木県教育委員会・(財）とちぎ生涯学習文化財団
清水正幸 2002『西刑部古屋原遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 46 集　宇都宮市教育委員会
下野考古学研究会 1993「石川坪遺跡」『下野考古学』19　宇都宮
白﨑智隆（埋蔵文化財発掘調査支援協同組合編）2008『砂田姥沼遺跡（Ｃ区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 62 集　埋蔵文化財発掘調査支援協同組合・宇都宮市教育委員会
杉浦昭博編 2001『大関台遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 251 集　栃木県教育委員会・(財）とちぎ生涯学習文化財団
鈴木正博 1991「栃木『先史土器』研究の課題」『古代』第 91 号　早稲田大学考古学会　東京 pp.133-171.
芹澤清八 1993『砂田Ａ遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 132 集　栃木県教育委員会
芹澤清八 2003「大曲北遺跡出土尖頭器の再評価」『栃木県考古学会誌』24　栃木県考古学会　宇都宮 pp.5-20.
高野浩之・戸部孝一・深谷昇・平岡和夫 2004『磯岡遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告第 29 集　都市基盤整備公団・上三川町教育委員会・山武考古学研究所
田代　寛 1968『鉢木遺跡の袋状土壙』塩谷郷土史館研究報告第２集　氏家（栃木県塩谷郡）
田代己佳 1996『宮の内Ａ遺跡・宮の内Ｂ遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 175 集　栃木県教育委員会・(財）栃木県文化振興事業団
塚原孝一編 1999『東谷・中島地区遺跡群　No.1　磯岡遺跡（Ⅰ区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第 229 集　栃木県教育委員会・(財）栃木県文化振興事業団
常川秀夫・山野井清人 1978『猿山Ａ遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 24 集（原本では第 20 集と記載）　栃木県教育委員会
津野　仁 2005『東谷・中島地区遺跡群６　磯岡遺跡（２～７区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第 292 集　栃木県教育委員会・(財）とちぎ生涯学習文化財団
津野　仁・篠原浩恵・今平昌子 2007『東谷・中島地区遺跡群８　砂田遺跡（４～６・18・19・23・24 区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第 305 集　栃木県教育委員会・(財）とちぎ生涯学習文化財団
寺内武夫・篠崎善之助 1939a「下野中原遺跡調査概報－第一回－」『考古学』10-10　東京考古学会 pp.514-527.
寺内武夫・篠崎善之助 1939b「下野中原遺跡調査概報－第二回－」『考古学』10-11　東京考古学会 pp.537-555.
栃木県教育委員会事務局文化課 1988『栃木県埋蔵文化財保護行政年報〔昭和 62 年度〕』栃木県埋蔵文化財調査報告第 99 集
栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997『埋蔵文化財センター年報』第７号（平成９年度）
栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999『埋蔵文化財センター年報』第９号（平成 11 年度）

栃木県立なす風土記の丘資料館 1999『栃木の遺跡』第７回企画展図録　小川（栃木県那須郡）p.45
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2000『埋蔵文化財センター年報』第 10 号（平成 12 年度版）
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2001『埋蔵文化財センター年報』第 11 号（平成 13 年度版）
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2002『埋蔵文化財センター年報』第 12 号（平成 14 年度版）
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2003『埋蔵文化財センター年報』第 13 号（平成 15 年度版）
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2004『埋蔵文化財センター年報』第 14 号（平成 16 年度版）
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2005a『埋蔵文化財センター年報』第 15 号（平成 17 年度版）
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2005b「中島笹塚遺跡と磯岡北遺跡」『栃木県埋蔵文化財センターだより　やまかいどう』No.39　栃木県教育委員会 p.5.
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2006a『埋蔵文化財センター年報』第 16 号（平成 18 年度版）
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2006b「砂田姥沼遺跡３区」『栃木県埋蔵文化財センターだより　やまかいどう』No.41　栃木県教育委員会 p.5.
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2007『埋蔵文化財センター年報』第 17 号（平成 19 年度版）
富川　努 2004『本村遺跡（弥生・古墳編）』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 49 集　宇都宮市教育委員会
中村享史 2004『東谷・中島地区遺跡群４　琴平塚古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第 283 集　栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
中山　晋 1996『砂田東遺跡・上横田Ａ遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 176 集　栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
中山哲也・井　博幸・三輪孝幸（日本窯業史研究所編）2005『西赤堀狐塚古墳第２次調査報告』上三川町埋蔵文化財調査報告第 30 集　上三川町教育委員会
中山哲也・青木健二・倉田有子（日本窯業史研究所編）2005『砂田遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 54 集　宇都宮市教育委員会
名取昌昭・武藤健三・五十嵐利勝 1994「宇都宮市二軒屋遺跡第二次調査報告」『下野考古学』21　下野考古学研究会　宇都宮 pp.1-146.
名取昌昭・武藤健三・五十嵐利勝 1996「雀宮周辺の分布調査 ６」『下野考古学』24　下野考古学研究会　宇都宮 pp.1-60.
名取昌昭・武藤健三・五十嵐利勝 1998「雀宮周辺の分布調査　補足編」『下野考古学』26　宇都宮
橋本澄朗・谷中隆 2001「『東谷古墳群』と権現山遺跡・百目鬼遺跡」『権現山遺跡・百目鬼遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 257 集　栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
橋本澄朗 2002「大谷磨崖仏造像の歴史的背景について」『研究紀要』10　（財）とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター pp.1-20.
土生朗治・越智徹・富川努 2008『中島笹塚遺跡（Ａ区）』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 63 集　山武考古学研究所・宇都宮市教育委員会
土生朗治・宮田和男・越智徹・大塚雅之（山武考古学研究所編）2007a『西刑部西原遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 59 集　宇都宮市教育委員会
土生朗治・宮田和男・越智徹・大塚雅之（山武考古学研究所編）2007b『砂田姥沼遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 60 集　宇都宮市教育委員会
深谷昇・梁木誠・田熊清彦 2003『上神主・茂原官衙遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告第 27 集・宇都宮市埋蔵文化財調査報告第 47 集　上三川町教育委員会・宇都宮市教育委員会
藤田直也 2003『東谷・中島地区遺跡群３　推定東山道関連地区』栃木県埋蔵文化財調査報告第 274 集　栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
藤田直也・田代隆 2002『東谷・中島地区遺跡群２　砂田遺跡（1 区・2 区・3 区）』栃木県埋蔵文化財調査報告第 265 集　栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
藤田典夫・安藤美保編 2000『杉村・磯岡・磯岡北』栃木県埋蔵文化財調査報告第 241 集　栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団
前澤輝政 1976『西赤堀遺跡』上三川町教育委員会
前澤輝政 1979「原始・古代編」上三川町史編さん委員会編『上三川町史』資料編　原始・古代・中世　上三川町
増渕純子・簗島佐知子 1985「宇都宮市茂原町愛宕塚東遺跡採集の弥生土器」『峰考古』第５号　宇都宮大学考古学研究会 pp.15-21.
水野順敏・河野一也・栗田欣行（日本窯業史研究所編）2005『立野遺跡（Ａ地区）』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 55 集　宇都宮市教育委員会
水野順敏・柏﨑広伸・井　博幸・三辻利一・三輪孝幸（日本窯業史研究所編）2007『本村古墳群・本村遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 58 集　宇都宮市教育委員会
水野順敏・柏﨑広伸（日本窯業史研究所編）2008a『砂田姥沼遺跡（Ｄ区）』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 67 集　宇都宮市教育委員会
水野順敏・柏﨑広伸 2008b『みずほの台遺跡群（根本西台古墳群第２次・瑞穂野団地遺跡東地区）』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 68 集　宇都宮市教育委員会
水野順敏・柏﨑広伸 2008c『みずほの台遺跡群Ⅱ（根本西台古墳群第３次・西刑部上原遺跡）』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 69 集　宇都宮市教育委員会
森嶋秀一 2004「204. 上三川町・宇都宮市上神主・茂原官衙遺跡出土の大型尖頭器」『Aesculus』No.22　Aesculus 同人（栃木県石器時代研究会）　宇都宮 pp.1-3.
安永真一 2001『上神主・茂原　茂原向原　北原東』栃木県埋蔵文化財調査報告第 256 集　栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
谷中隆・大島美智子編 2001『権現山遺跡・百目鬼遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 257 集　栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
梁木誠 1984『鶴舞塚古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第 13 集　宇都宮市教育委員会
梁木誠・今平利幸 1995『久部愛宕塚古墳・谷口山古墳・御蔵山古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 37 集　宇都宮市教育委員会
山崎芳家 1970「宇都宮市兵庫塚Ａ地点・Ｂ地点および針ヶ谷遺跡について」『足跡』２　宇都宮学園高等学校地理・歴史研究会　宇都宮 pp.22-26.
渡辺邦夫・上野修一 1993「宇都宮市石川坪遺跡出土の石製品」『Aesculus』19　Aesculus 同人　宇都宮 pp.15-16.

第３章　調査区の配置と標準土層

第１節　杉村遺跡における調査区の配置と概要

調査区と遺構　杉村遺跡は、東谷・中島土地区画整理事業用地内の南部に所在する。田川東岸の低台地を南北方向に開析する「西谷田」と「中島谷田」の谷にはさまれた微高地上で、標高約 81.0 ～ 81.8m、低地との比高は約 1m またはそれ以下である。今回報告する GN1 区は遺跡の北端部分で、これまでに報告を刊行した SG1 区および北関東自動車道路調査区の北側である（第８図）。北関東自動車道路調査区では縄文時代竪穴遺構２基、古墳時代前期末～終末期 67 棟と奈良時代２棟の竪穴建物跡からなる集落跡、古代道路遺構（推定東山道）などが調査された（藤田・安藤編 2000）。杉村遺跡 SG1 区では、この古代道路遺構に連続する南西部が調査されている（藤田 2003）。

杉村遺跡 GN1 区で認められた遺構の種類と数は、弥生時代の土坑１／古墳時代の竪穴建物跡５と土坑１／奈良時代の竪穴建物跡１／時期不明の溝３・土坑 45 である。古墳・奈良時代の集落は、北関東自動車道路調査区の集落跡に続く北側部分である。

隣接する調査区　杉村遺跡から「中島谷田」の開析谷をはさんだすぐ東側は、標高 82 ～ 83m の低台地上に磯岡北遺跡の南端部がある。磯岡北遺跡では各時代の多様な遺構・遺物が知られていて、そのうち杉村遺跡の対岸部分である北関東自動車道路調査区・SG3 区・SG4 区・杉村北調査区では、縄文中期加曽利Ｅ式期の土坑（北関東自動車道路調査区）、縄文後期堀之内１・加曽利Ｂ式期の土坑と包含層（SG3 区と杉村北調査区）、弥生中期後半川原町口式並行期の竪穴建物跡と土坑（北関東自動車道路調査区）、古墳時代終末期の竪穴建物跡（SG3 区と北関東自動車道路調査区）、東山道と推定されている古代道路状遺構と周辺の古代竪穴建物跡（SG3・4・6・11・14 区と杉村北調査区・北関東自動車道路調査区）、中世の方形竪穴と井戸（SG3 区と杉村北調査区）などがある。SG3 区・SG4 区は藤田 2003、北関東自動車道路調査区は藤田・安藤編 2000、杉村北調査区は亀田 1999 で報告されている。また、杉村遺跡から「西谷田」の開析谷を隔てた西側には権現山遺跡が所在する。

第２節　権現山遺跡における調査区の配置と概要

調査区と遺構　権現山遺跡は、区画整理事業対象地区の南西部にあり、地区外の南側から南西側まで広がる。遺跡の中心は「西谷田」の開析谷よりも西側の低台地上にあり、標高 79.7 ～ 83.0m で北部ほど標高が高い。低地からの比高は、大きいところでも 1.0 ～ 1.5m 前後。遺跡の南東部は、「西谷田」より東側にある標高 79.0 ～ 79.4m の低地にも及ぶ（SG2 区・SG9 区・SG15 区）。

権現山遺跡２～４区と SG1・SG2・SG5・SG10・SG15 区の調査で認められた遺構の種類と数は、次のとおりである。ただし、権現山遺跡南半部（SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区）は整理作業の途上であるため、今後の整理作業によって遺構数に変動が生じる可能性がある。権現山遺跡 SG9 区のすぐ東側に所在する磯岡遺跡 SG9 区（古墳時代の竪穴建物跡 2、時期不明の溝２・土坑２）は、権現山 SG9 区と同時に発掘調査を実施したが、実際は磯岡遺跡の一部であることから、下記の権現山 SG9 区の遺構数は磯岡 SG9 区を除外して集計している。また、下記の各遺構のうち権現山 SG1 区の古代道路遺構は、杉村遺跡 SG1 区や磯岡北遺跡の道路状遺構と一連の遺構で、『東谷・中島地区遺跡群３』（藤田 2003）で報告済みである。

（権現山遺跡北半部）

権現山２区…古墳時代の竪穴建物跡６棟（３棟の建替）・掘立柱建物跡４・柱穴状土坑３・遺物集中地点１／中世の井戸１／近世の溝４／時期不明の掘立柱建物跡１・井戸３・溝９・土坑 103



第 8 図　杉村遺跡・権現山遺跡および周辺遺跡（1/2,500）

権現山３区…遺構なし

権現山４区…古墳時代の竪穴建物跡 41・掘立柱建物跡２・方形周溝遺構１・溝１・柱穴状土坑１・土坑 52（土坑 21・円筒形土坑 31）／時期不明の掘立柱建物跡３・井戸２・溝１・土坑 28・柱穴状土坑７

権現山 SG1 区…縄文時代の土坑１／古墳時代の竪穴建物跡 37（鍛冶遺構１を含む）・土坑 25（土壙墓 ?1・土坑６・円筒形土坑 18）・居館跡１（外郭溝１・塀１・柵列１・掘立柱建物１・不明遺構１・柱穴状土坑 61）／古代の道路遺構１／古代の溝１／中世の竪穴遺構２・井戸１・溝２・土坑２／時期不明の集礫遺構１・井戸２・溝４・土坑 59・柱穴状土坑 114

（権現山遺跡南半部）

権現山 SG2 区……古墳時代の土坑２／時期不明の溝１・土坑 48・石積遺構１／自然流路７

権現山 SG5 区…古墳時代の竪穴建物跡 36・溝４・遺物集中地点１・土坑 71・不整形遺構１・居館跡１（柵列１・SG10 区と連続する居館外郭溝２）／平安時代の土坑１／中世の土坑１／時期不明の掘立柱建物跡３・柵列１・井戸４・溝６・土坑 46・柱穴状土坑 74

権現山 SG9 区…古墳時代の土坑１／時期不明の通路状遺構１・溝５・焼土１・土坑 23

権現山 SG10 区…縄文時代の竪穴住居跡１・土坑６／弥生時代の土坑１／古墳時代の竪穴建物跡 88（鍛冶遺構１と SG5 区に続く建物２を含む）・井戸１・溝 17・居館外郭溝２（SG5 区と連続）・土坑 55／平安時代の竪穴建物跡１・土坑１／古代の道路側溝 (?)2／中世の井戸６／中近世の溝４・近現代の溝２／時期不明の竪穴遺構１・掘立柱建物跡１・井戸５・溝 22・焼土１・土坑 145・柱穴状土坑 233

権現山 SG15 区…時期不明の溝２・土坑７／自然流路２

以上の権現山遺跡の９地区の遺構を、時代・種別ごとに集計すると次のとおりである。上記のように、整理作業途上の SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区を含めているので、遺構数には変動が生じる可能性がある。また、権現山 SG9 区の遺構数からは磯岡 SG9 区を除外している。

縄文時代：竪穴住居１、土坑７

弥生時代：土坑１

古墳時代集落跡：竪穴建物 206（鍛冶遺構２を含む）・掘立柱建物跡６・方形周溝遺構１・溝 22・柱穴状土坑４・土坑 206（土壙墓 ?1・円筒形土坑を含む）・遺物集中地点２・不整形遺構１・井戸１

古墳時代居館跡：２箇所（外郭溝３・塀１・柵列２・掘立柱建物１・不明遺構１・柱穴状土坑 61）

奈良～平安時代：溝１・道路遺構１・道路側溝 (?)2

平安時代：竪穴建物１、土坑２

中世：竪穴遺構２・井戸８・溝２・土坑３

中～近世：溝４

近世：溝４

近現代：溝２

時代不明：竪穴遺構１、掘立柱建物８、井戸 16、溝 50、土坑 459、柱穴状土坑 428、焼土２、石積遺構１、柵列１、通路状遺構１、集礫遺構１

自然地形：自然流路９

このうち、今回報告する北半部だけの遺構数は、巻末の「報告書抄録」に示したとおりである。

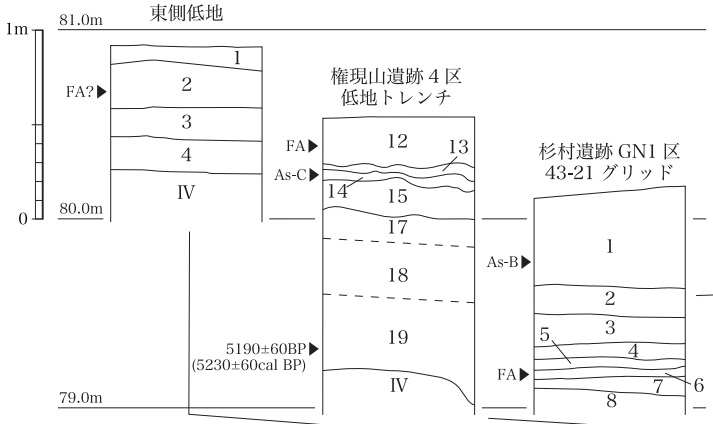
隣接する調査区　権現山遺跡の西部は、北関東自動車道路建設と県道拡幅に伴って発掘調査が実施されている。権現山遺跡県道調査区では古墳中期の竪穴建物６棟から、土師器・須恵器や直弧文のある紡錘車等が出土した（篠原・亀田 2009）。北関東自動車道路の権現山Ａ区では旧石器時代遺物集中地点１箇所・古

〔低　地　部　の　土　層〕

権現山遺跡 SG1 区
東側低地

権現山遺跡４区
低地トレンチ

杉村遺跡 GN1 区
43-21 グリッド



(低地部の土層)
権現山 SG1 区東側低地
1　暗褐色耕作土　　乾くと白褐色
2　明黒色　　白色粒・暗褐色土少
3　暗褐色
4　暗黒色
Ⅳ　暗黄褐色ローム　上面はやや褐色

権現山４区低地トレンチ
(1〜11 層は時代が新しいため省略)
12　黒褐色　白色粒少　茶色土塊やや多　土師器・須恵器混入　古墳後期初頭の Hr-FA テフラ降下
13　暗茶褐色　白色粒・茶色土塊少　赤色鉄分含む
14　黒色　白色粒・茶色粒含む　古墳前期の As-C テフラ降下
15　黒色
17　暗茶褐色　粘質　赤褐色鉄分少
18　淡茶色　少し粘質
19　淡茶色　砂粒・塊多　黒色土塊少　やや粘質　縄文後期中葉の土器出土
14C 年代 5190±60y.BP
Ⅳ　黄褐色　ローム層　砂・粘土も含む

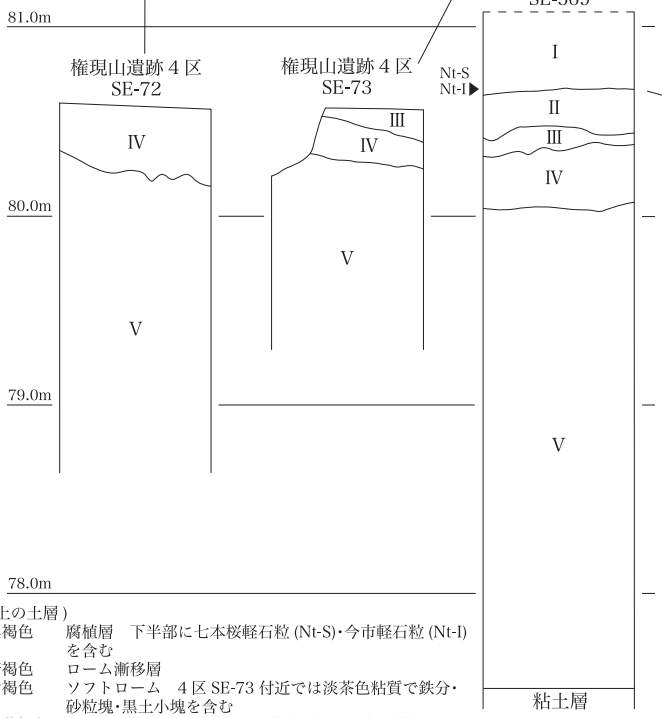
杉村 GN1 区 43-21 グリッド
1　暗褐色表土　上から暗褐色・暗灰色・黄灰色に３分可能　黄灰色層に As-B テフラを含む
2　暗茶褐色
3　茶褐色砂　砂質土　粘性・しまり弱
4　茶褐色　粘性強　しまり弱
5　黒色　粘性有　しまり弱
6　黄褐色　Hr-FA テフラ純層
7　黒灰色　粘性有　しまり弱
8　亜円礫　砂と拳大の礫

〔台　地　上　の　土　層〕

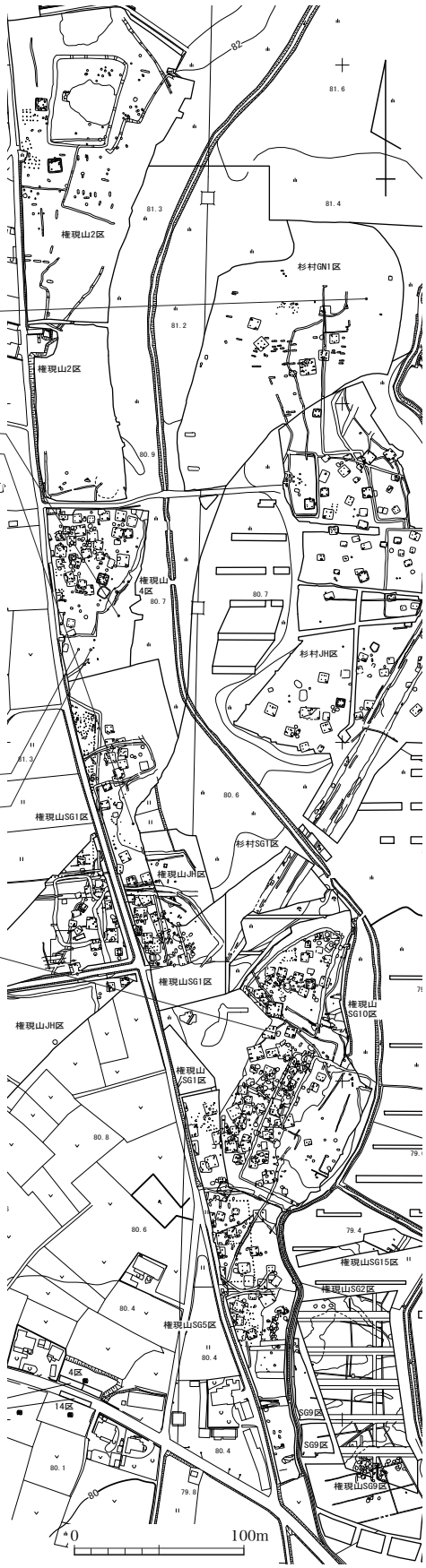
権現山遺跡 SG10 区
SE-569

権現山遺跡４区
SE-72

権現山遺跡４区
SE-73



(台地上の土層)
Ⅰ　黒褐色　腐植層　下半部に七本桜軽石粒 (Nt-S)・今市軽石粒 (Nt-I) を含む
Ⅱ　暗褐色　ローム漸移層
Ⅲ　黄褐色　ソフトローム　４区 SE-73 付近では淡茶色粘質で鉄分・砂粒塊・黒土小塊を含む
Ⅳ　明黄褐色　ハードローム　SG10 区では黄色砂や光る細砂粒を上半に含む　４区では赤色小塊 (酸化鉄 ?) を含む
Ⅴ　灰色　円礫と砂の互層　一部の層では鹿沼軽石や黄褐色砂も少し混じる



第９図　権現山遺跡北部・杉村遺跡の標準土層

墳中期～終末期の竪穴建物跡 160 棟・中世の可能性がある方形竪穴 1 棟と地下式坑 1 基、同じく権現山 B 区では古墳中期の円墳 10 基・土壙墓 2 基と中～後期の竪穴建物跡 16 棟などが調査された（谷中・大島編 2001）。B 区は主に墓域で、東谷古墳群の東半部である。

権現山遺跡の西縁を赤沢川が画している。この小川をはさんだすぐ西側には、標高 80m の微高地があり、東谷古墳群の西半部と、百目鬼遺跡、東谷北浦遺跡が立地している。百目鬼遺跡では古墳中期の竪穴建物跡 53 棟と大形円墳の周溝（松の塚古墳）が北関東自動車道路調査区で確認された（谷中・大島編 2001）。東谷北浦遺跡では笹塚古墳北側にある古墳前期末～中期の竪穴住居 13 軒や溝が知られ、笹塚古墳と双子塚古墳の中間では円墳も調査されている（篠原・亀田 2009）。

権現山遺跡の北側には、少し間をあけて同じ台地上に立野遺跡 5 区・8 区・4 区などがある（内山 2005）。立野遺跡 5 区は縄文早・中・後期と弥生中期（?）の土坑、古墳前期末～終末期と奈良時代の竪穴建物跡、中世の集石土坑、中・近世の溝などが確認された遺跡で、古墳中期 32 棟・後期 39 棟・時期不明 1 棟・奈良時代末 1 棟の竪穴建物跡がある。立野遺跡 4 区・8 区では縄文後期と弥生中期の土坑、古代の溝、中～近世の方形竪穴遺構 1 棟、時期不明の掘立柱建物跡 1 棟と柱穴群などが含まれる。

権現山遺跡から低地を隔てた東側には、磯岡遺跡と、上で説明した杉村遺跡がある。磯岡遺跡は「中島谷田」の開析谷より東側の低台地上にあり、1 ～ 8 区と SG9 区において古墳中期～終末期の竪穴建物跡 167 棟・奈良～平安時代の竪穴建物跡 13 棟と掘立柱建物跡・井戸・土坑・道路状遺構などが調査されている（高野他 2004・津野 2005・栗田 2005）。

第３節　権現山遺跡・杉村遺跡と周辺の土層

台地部の土層　権現山遺跡のうち西半部の台地上に立地する 2・3・4・SG1・SG5・SG10 区では、台地上で地山の最も深い部分までを把握できた SG10 区の標準土層記号を準用して、Ⅰ層からⅤ層までに区分できる（第 9 図下段）。SG10 区にある中世の井戸 SE-569 で確認した地山の標準土層を図下段右に示す。Ⅰ層が表土、III 層と IV 層がローム層、Ⅴ層が礫層である。

Ⅴ層（礫層）は明瞭な水成堆積層である。鹿沼軽石層（Ag-KP　4.5 万年 cal BP）は、層としては確認できず、砂礫層群であるⅤ層を構成するラミナ（葉層）の中に鹿沼軽石粒が混在してみられる。

IV 層（ハードローム）には砂粒を含むので、水の影響も受けながら田原ローム（更新統最上部のローム層）が堆積したことがわかる。この地域におけるローム層（IV 層）の形成開始期を示す情報としては、権現山遺跡 3 区の北側に隣接する立野遺跡 5 区と、権現山遺跡西半部の北関東自動車道路調査区で、ローム層最下部から浅間大窪沢軽石（As-Ok1　未較正年代で 1.7 万年 BP）や浅間板鼻黄色軽石（As-YP　1.5-1.65 万年 cal BP）が検出されている（古環境研究所 2001・2005b）。権現山遺跡 SG1 区で旧石器時代の尖頭器が出土していることも、ローム層形成年代の一時期を示してくれている。ただしこの尖頭器が本来含まれていた層は不明で、古墳時代の竪穴建物に混入していた遺物である（第 5 章第 1 節）。

七本桜軽石（Nt-S）と今市軽石（Nt-I）は 1.4-1.5 万年 cal BP の男体火山起源のテフラである。東谷・中島地区周辺では、層を形成するのではなく粒・塊状で認められ、II 層（ローム漸移層）から III 層（ソフトローム）を中心として、その上下を含む範囲（黒色腐植層の最下部からハードローム層の最上部まで）に散在している。権現山遺跡 SG10 区ではⅠ層最下部に七本桜軽石と今市軽石が認められたが、さらに西側の権現山遺跡北関東自動車道路 A 区では II 層中に見られる（谷中・大島編 2001,pp.28,34）。人為的な土地利用の影響も含め、Ⅰ層（腐植）の形成つまり土壌化の進行状況によってこのような差が生じたものと推定される。立野遺跡 5 区ではハードローム最上部に七本桜・今市軽石があり、同じ東谷・中島地域でも差が見られる。

低地部の土層　低地部および微高地部分で地山にローム層がほとんど発達しない杉村遺跡 GN1 区と、権

現山遺跡２区・４区・SG1 区の東端で台地から低地へ移行する部分では、統一した標準土層名を用いることができない（第９図上段）。杉村遺跡 GN1 区では As-B（浅間火山起源、1108 年降下）と Hr-FA（榛名火山起源、古墳後期初頭）、権現山遺跡２区・４区では Hr-FA（古墳後期初頭）と As-C（古墳前期）がそれぞれ検出された。詳細は、第７章第２節（pp.161-164）と第９章第 14 節（pp.322-324）で述べられている。

Hr-FA は肉眼でよく観察できる場合が多い。第９図上段では、杉村 GN1 区 43-21 グリッドの６層が Hr-FA の純層、権現山４区低地トレンチの 12 層が Hr-FA の降灰層準で、権現山 SG1 区の２層に含まれる白色粒も Hr-FA の可能性が高い。古墳後期初頭の Hr-FA と古墳後期中葉の Hr-FP は、テフラの層相や火山ガラス屈折率から識別することが難しい場合がある。東谷・中島地区周辺の遺構内や低地堆積層で確認される榛名火山のテフラは、テフラの分布（古環境研究所 2000,p.379）および考古学的遺構･遺物との関係（古環境研究所他 2005b,p.495）から判断すると、古墳後期初頭の Hr-FA と考えられる。

As-C は、Hr-FA に比べると観察しにくい場合が多いが、第９図上段では権現山４区の 14 層で認められている。詳細は、第 182 図のトレンチ２（p.320）と第９章 14 節（pp.322-324）に示されている。

遺構・遺物との関係　台地上では、II 層（ローム漸移層）で弥生・古墳時代以後の遺構を確認できた。縄文時代でも前半期の遺構や包含層は、ソフトローム層（権現山遺跡では III 層）まで掘り下げないと遺構確認が難しい状況が、中島笹塚遺跡３区、磯岡北遺跡（磯岡北古墳群）SG17 区、立野遺跡５区などで認められている。低地部では、古墳時代テフラの降灰層準で古墳時代遺構を確認できることになる。ただし、今回報告する権現山遺跡北半の低地部では､検出が期待された水田遺構を含めて､古墳時代遺構は確認されなかった。

（註）

古環境研究所 1999「栃木県、磯岡遺跡Ｉ区の自然科学分析」『東谷・中島地区遺跡群 No.1　磯岡遺跡（Ｉ区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第 229 集　栃木県教育委員会・(財）栃木県文化振興事業団 pp.409-411.

古環境研究所 2000「テフラ分析」『杉村・磯岡・磯岡北』栃木県埋蔵文化財調査報告第 241 集　栃木県教育委員会・(財）栃木県文化振興事業団 pp.377-384.

古環境研究所 2001「権現山遺跡・百目鬼遺跡の土層とテフラ」『権現山遺跡・百目鬼遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 257 集　栃木県教育委員会・(財）栃木県文化振興事業団 pp.250-258.

古環境研究所 2003「杉村遺跡 SG1 区、磯岡北 SG3・SG6・SG11 区、西刑部西原遺跡２区の自然科学分析　第１節　土層とテフラ」『東谷･中島地区遺跡群３　推定東山道関連地区』栃木県埋蔵文化財調査報告第 274 集　栃木県教育委員会･(財）とちぎ生涯学習文化財団 pp.235-251.

古環境研究所 2004「栃木県西刑部西原遺跡の土層とテフラ」『東谷・中島地区遺跡群４　琴平塚古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第 283 集　栃木県教育委員会・(財）とちぎ生涯学習文化財団 pp.197-203.

古環境研究所 2005a「立野遺跡５区竪穴建物跡の古墳時代火山灰」『東谷・中島地区遺跡群５　立野遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 290 集　栃木県教育委員会・(財）とちぎ生涯学習文化財団 pp.389-390.

古環境研究所他 2005b「立野遺跡５区の指標テフラと古環境」『東谷・中島地区遺跡群５　立野遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 290 集　栃木県教育委員会・(財）とちぎ生涯学習文化財団 pp.495-500.

古環境研究所 2005c「磯岡遺跡の自然科学分析　Ｉ．磯岡遺跡のテフラ分析」『東谷･中島地区遺跡群６　磯岡遺跡(２～７区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第 292 集　栃木県教育委員会・(財）とちぎ生涯学習文化財団 pp.302-305.

古環境研究所 2005d「磯岡遺跡の自然科学分析　Ｉ．磯岡遺跡の土層とテフラ」『東谷・中島地区遺跡群６　磯岡遺跡（２～７区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第 292 集　栃木県教育委員会・(財）とちぎ生涯学習文化財団 pp.309-313.

古環境研究所 2007「砂田遺跡の自然科学分析　Ｉ．土層とテフラ」『東谷・中島地区遺跡群８　砂田遺跡（４～６・18・19・23・24 区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第 305 集　栃木県教育委員会・(財）とちぎ生涯学習文化財団 pp.748-753.

古環境研究所 2008a「栃木県東谷・中島地区（中島笹塚遺跡６区）における火山灰分析」『東谷・中島地区遺跡群９　中島笹塚古墳群・中島笹塚遺跡（１～８区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第 311 集　栃木県教育委員会・(財）とちぎ生涯学習文化財団 pp.368-373.

古環境研究所 2008b「栃木県東谷・中島地区（中島笹塚遺跡７区・８区）における火山灰分析」『東谷・中島地区遺跡群９　中島笹塚古墳群・中島笹塚遺跡（１～８区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第 311 集　栃木県教育委員会・(財）とちぎ生涯学習文化財団 pp.375-380

第 4 章　杉村遺跡 GN1 区

杉村遺跡は、東西の低地に挟まれた中州状の微高地に立地する。発掘調査前の現況地形では遺跡標高 81.0 ～ 81.8m、低地との比高が 0.5 ～ 1m 前後であり、低地への移行は緩やかである。杉村遺跡の調査区全体の範囲は、GN1 区・SG1 区・北関東自動車道路調査区の 3 地区を合わせて南北 370 ×東西 170m である。このうち古墳～奈良時代集落の範囲は東西 100m ×南北 260m で、ほぼ微高地全体に及んでいる。遺跡の南部から東部にかけて、古代道路遺構（推定東山道）が確認されている。

古墳～奈良時代集落遺跡と古代道路遺構の中心部は北関東自動車道の宇都宮・上三川インターチェンジ部分であり、高速道路建設に伴って 1995（平成 7 ）年度に調査され、すでに報告書が刊行されている（藤田・安藤 2000）。また、遺跡南端部の杉村遺跡 SG1 区で 1996（平成 8）年度に調査した古代道路遺構（推定東山道）も報告済である（藤田 2003）。

今回報告する GN1 区は杉村遺跡の北端に当たり、栃木県宇都宮市砂田町字上谷田・字原田・字吉原、河内郡上三川町大字磯岡字コムナセゴに所在する。古墳～奈良時代集落遺跡の中心部からは北へ離れた部分である。遺構は調査区中央部付近の微高地に集中する。GN1 区の位置は北緯 36° 29′ 15″・東経 139° 54′ 20″、杉村遺跡集落跡の中心は北緯 36° 29′ 07″・東経 139° 54′ 25″にあたる（世界測地系）。

第 1 節　縄文時代の遺物

縄文時代遺物は、確認調査トレンチや古墳時代遺構などから出土している。総じて縄文時代遺物は台地上ではなく、台地縁辺の斜面部から出土する傾向がある。

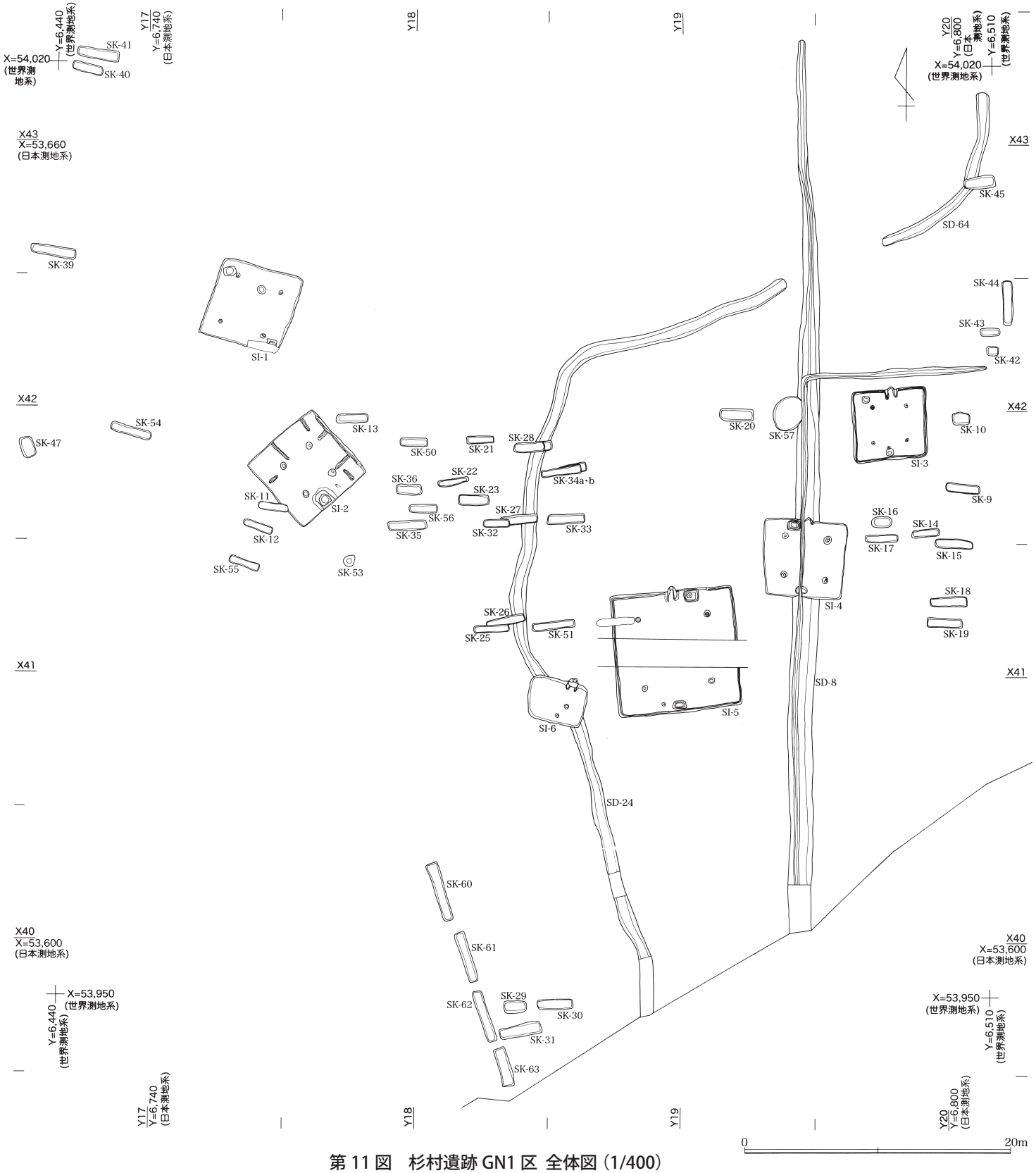
縄文時代遺物は土器片 9 点、石器 1 点がある（第 12 図）。土器は早期 1 点、後期後半 7 点、不明 1 点。早期土器は調査区西寄りの台地西縁（SI-2 混入）、早期と見られる石器は中央やや北寄りの低地への斜面部（43-19 グリッド表採）。後期後半と見られる遺物は東へ傾斜する斜面部付近（42-20 グリッド確認調査）で、同一時期のものがまとまる。後期後半の粗製土器と見られる 1 点（7）は遺跡西側の低地内出土（41-15 グリッド確認調査）。

［古墳時代遺構内等出土の縄文時代遺物］　片刃石器（打製石斧）1 点と土器片 1 点があり、ともに早期頃とみられる。1 は緻密な安山岩製の片刃石器である。扁平な河原石を素材としていると見られ、表裏両面に自然面を残す。小形であり、左右両側縁および下端刃部とも裏面側から剥離調整される。特に刃部は急角度な調整で刃部再生により消耗したものかと思われる。長さ 9.0cm、幅 4.7cm、厚さ 2.0cm、重さ 92.5g。権現山遺跡 SG10 区の遺構外出土遺物にも類例があり（第 45 図 15）、縄文早期の条痕文系土器に伴うと考えられている（中村 1990,p.34; 出居 1986）。2 は縄文早期条痕文系土器片かとみられる。無文で脆く、胎土に繊維と白色ないし半透明の粗～細粒を含む。色調は 10YR5/6 明褐色。

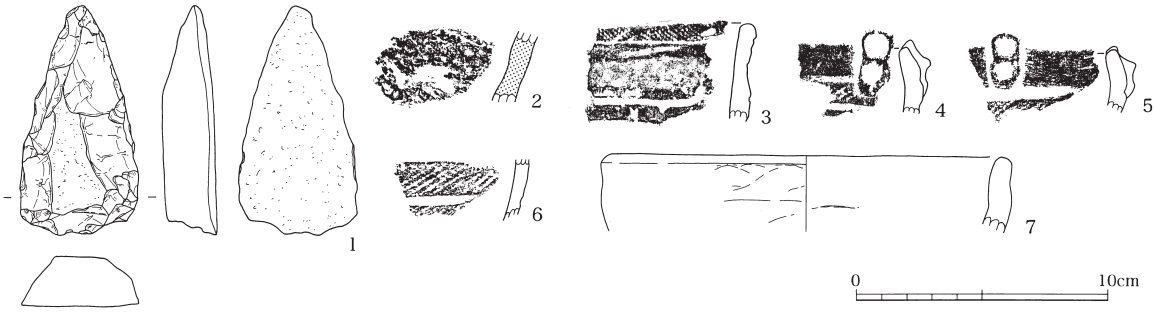
［確認調査出土の縄文時代遺物］　確認調査では古墳中期後半～後期の遺物が出土したが、縄文時代遺物も 8 点あり、すべて後期後半安行 2 式に相当すると見られる。このうち 6 点（4・5・6 と図化しない 3 点）は同一個体の可能性が高い。3 は口縁端部が撚糸文で直下に細い沈線があり、強い横方向のナデによる幅広な凹線を挟んで下位に沈線 2 本が確認できる。胎土に白色微粒が多い。色調は黒褐色で、外面には煤のような黒色物質が付着する。4 ～ 6 は同一個体と見られる浅鉢？で、2 段 LR の縄文施文後に沈線・縦位に凹みが 2 つ並ぶ突起貼り付けののち磨かれる。胎土には白色・砂細粒を少量含む。7 は粗製土器と見られる。無文で、荒い作りながら内面から口縁部上端を中心に磨かれている。胎土には多量の白色微粒のほか赤褐色粗粒をわずかに含む。口縁部復原径 16.2cm。3 ～ 6 と同時期の可能性もある。



第 10 図　杉村遺跡 GN1 区 全体図 (1/800)



第 11 図　杉村遺跡 GN1 区 全体図 (1/400)



第 12 図　杉村遺跡 GN1 区 縄文時代の遺物

第 2 節　弥生時代の遺構と遺物

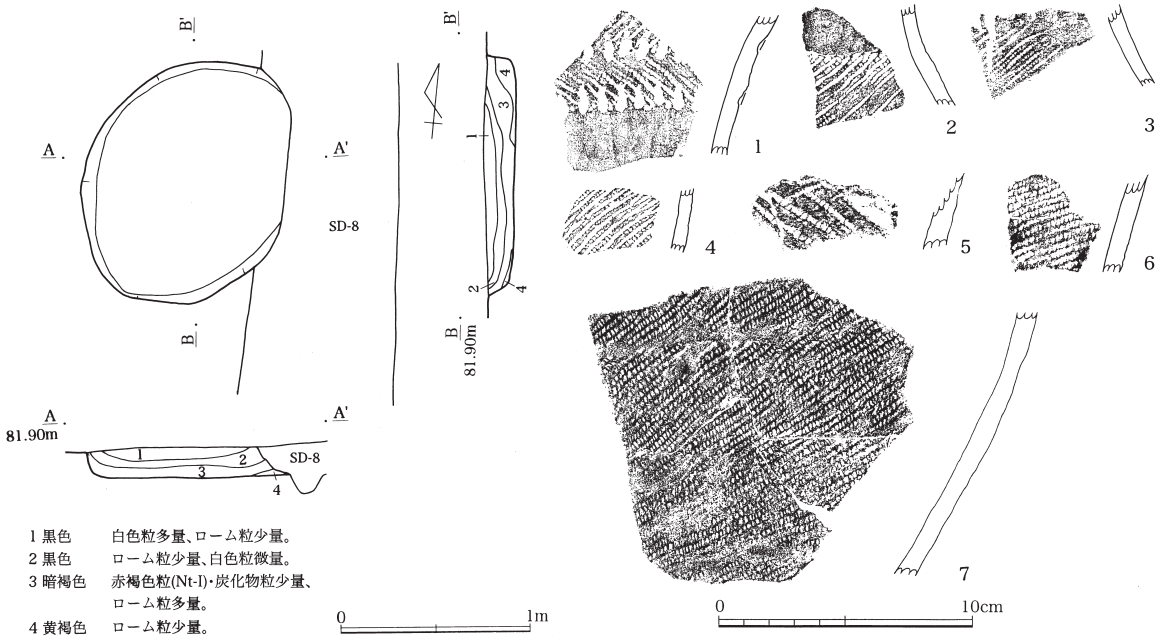
弥生土器は、古墳～奈良時代建物跡（SI-3,4,5,6）および時期不明の土坑 SK-33 に混入して破片が少量ずつ出土した。各遺構とも台地上に位置し、縄文時代の遺物とは異なり、台地上から出土する傾向にある。弥生時代土坑の SK-57 も台地上にあることから、これ以外にも台地上に該期の遺構があった可能性もあろう。

〔弥生時代の土坑〕

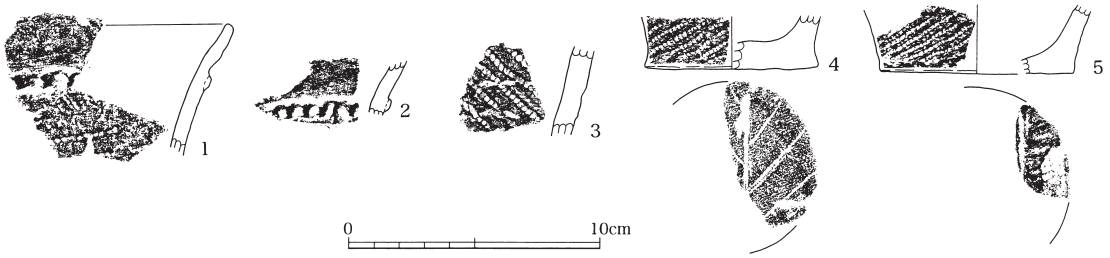
GN1 区 SK-57（第 13 図、写真図版 3・102）

GN1 区中央部の微高地上平坦面、41.5-19.0 と 42.0-19.0 グリッド所在。西に時期不明の SK-20 が近接する。東が時期不明の SD-8 に切られる。長径 2.80 ×短径 2.20m、深さ 0.32m の楕円形で中軸線は N-30°-E。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は 1・2 層に白色粒、3 層に炭粒を含む。全体に緻密で、自然堆積と考えられる。

弥生土器はすべて壺破片と見られ、復原できるものはない。文様などから数個体分がある。11 片出土し、7 点を図示した。1 は丁寧な縦ナデ後、附加 2 条の附加条縄文 1 種を羽状に施し、各段の下端に原体を押捺する。上段は 2 段 LR ＋ 1 段 R、下段は 2 段 RL ＋ 1 段 L。内面は横ヘラナデ、焼成は硬質で明るい褐色、胎土は精緻で白色粗粒を微量含む。外面に煤が付着する。2 も 1 に似る精緻な胎土で、内面は横ヘラナデ、外面は丁寧な縦ナデの後、附加条 1 種附加 2 条、2 段 LR ＋ 1 段 R で施文する。1・2 は胎土がよく似ていて同一個体の可能性がある。3 も縄文は 2 と同様で、指頭または先が丸い施文具で上端に押圧とそれに伴う



第 13 図　杉村遺跡 GN1 区 SK-57 遺構・遺物



第 14 図　杉村遺跡 GN1 区 弥生時代の遺物

鋭い刺突を加える。1・2 と似た精緻な胎土で、2・3 とも外面に煤が付着する。4 は硬質で白色・半透明細粒が多く、附加条 1 種附加 2 条、2 段 LR ＋ 1 段 R で施文する。 5 は附加条 1 種附加 2 条の原体で羽状縄文を施すが、軸縄圧痕は見えない。金色雲母を特徴的に含む。6・7 はやや大形の土器の胴部下半と見られる赤褐色の硬質な土器で、2 段 LR で施文する。7 は外面に煤が付着し、胎土に黒色・白色微粒が多い。

〔弥生時代の遺物〕（第 14 図、写真図版 102）

古墳時代遺構内など出土の弥生後期土器が 14 点あり、このうち 5 点を図化した。5 点とも壺と見られる。1・2 は外面に粘土紐貼り付け後指頭ないし丸味を持つ工具により押圧を加える。2 は押圧の間隔が 1 より狭い。1 の下位には附加条と見られる縄文が羽状に施されるが、附加された一段 L・一段 R のみが見られ、軸縄の圧痕はほとんど残っていない。3 も同様に一段 L のみが外面に残る。1 は白色・半透明・黒色細粒を含む。2・3 は胎土に白色・黒色・赤褐色細粒のほか金色雲母をわずかに含む。4・5 は底部片で、ともに胴部の縄文は附加条 1 種附加 2 条、 2 段 LR ＋ 1 段 R、底部には木葉痕が残る。胎土は 5 がやや緻密で、4 は白色粗～細粒を含むやや粗いもの。

第３節　古墳時代の竪穴建物跡

GN1 区 SI-1（第 15 図、写真図版 3）

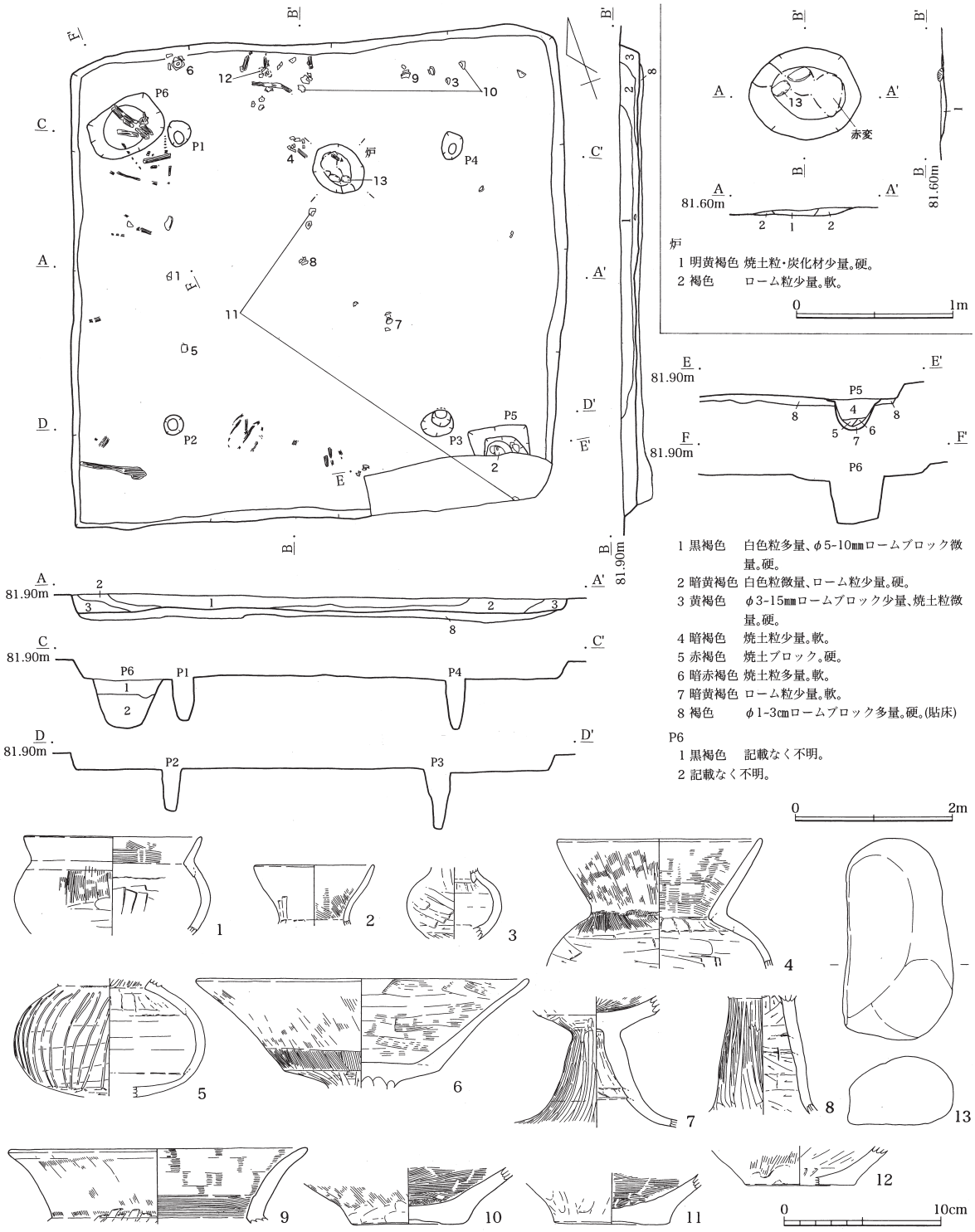
［位置］ 南西の低地を望む微高地上、42.0-17.0 グリッドにある。同じく古墳中期の SI-2 が南にある。重複する遺構はない。南東部壁が撹乱を受ける。

［規模と形状］方形で東西 6.30 ×南北 6.10m、壁の残存高は 0.12 ～ 0.26m、中軸線は N-19° -E。床は平坦で、写真で見ると、南東部の貯蔵穴 P5 周辺は東西約 2.5 ×南北約 1.5m の長方形範囲をロームの多い土で貼床するらしく、やや硬化している様に見える。南西隅や炉周囲も不定形範囲がやや硬化するようである。掘形は壁際でやや深く床から 5 ～ 20cm、中央部ではやや浅く 3 ～ 10cm。ローム塊が多い 8 層で貼床する。南東壁際と北壁際はロームをそのまま床面とする部分もある。

主柱穴は 4 本で、P1 は径 34 × 30 ×深さ 56cm、P2 は径 26 × 24 ×深さ 54cm、P3 は径 42 × 32 × 深さ 78cm、P4 は径 36 × 24 ×深さ 64cm。柱間は P1-P2 間 3.66m、P3-P4 間 3.38m、P1-P4 間 3.48m、P2-P3 間 3.44m。

貯蔵穴は P5 と P6 の 2 基がある。P5 は南半が撹乱されるが、竪穴壁と平行する方形と考えられる。東西長 76 ×南北残存長 34cm、深さ 56cm。底部が丸く、床下数 cm ～ 10cm の段から上が緩く開く。底面からやや浮いている焼土（5 ・ 6 層）が竪穴覆土 3 層と続くものであれば、建物廃絶時に開口していたものと推定される。P6 は竪穴壁と斜行する隅丸長方形で 100 × 68 ×深さ 60cm。底面は円形で、東西壁は緩く、南北壁が急である。P6 の覆土の詳細が不明であるため、P5・6 が同時存在かどうかは不詳である。複数貯蔵穴は杉村遺跡 GN1 区に多く、権現山遺跡 4 区 SI-27 などにもある。

［炉］ 中央部北寄りにある炉は楕円形で径 70 × 59cm、床面から深さ約 5cm。火床は平坦で、立ち上がりが緩い。被熱痕は北半に顕著で、径 27 × 18cm の楕円形範囲が硬化赤変する。火床面南半の直上に、棒状



第 15 図　　杉村遺跡 GN1 区 SI-1 遺構・遺物

の河原石 2 点の長軸を合わせて置く。ともに表面が被熱するので、炉の構成材であろう。特によく焼けている 13 を図示した。

[埋土とテフラ] 自然埋没で、1・2 層に含む白色粒が火山灰かどうかは確認できていない。壁際の 3 層に微量の焼土を含む。竪穴内に多い炭化材はほぼ 2 層で出土する。

[遺物出土状況] 遺物は全域で出土するが、完形品はなくすべて破片で、床から 5 ～ 10cm 浮くものが多い。1・

第３表　杉村遺跡 GN1 区 SI-1　出土遺物

番号 種類 材質	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 11.4 高　残 6.3 最大　復 12.6	外面口縁～体部上端ヨコナデ、体部８本/1cmのハケのちナデ。内面口縁部８本/1cmのハケのち軽いヨコナデ、体部ヘラナデ。体部上端のみはナデで、口縁部と体部の接合痕が明瞭に残る。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白細～微粒少、砂礫・赤粗～細粒微 硬質	中央北西部床上 3cm 口～体 1/6 周 13
2 土師器 小形壺	口　復 7.6 高　残 3.9	小形。外面口縁部ヨコナデのち下半一部ヘラナデ、内面口縁部下半９本/1cmのハケのち口縁部上半主体にヨコナデ。	7.5YR7/6　橙 緻密　白・透明・赤細～微粒微 硬質	P5 内底上 8cm 口 1/4 周 17
3 土師器 小形土器	高　残 4.7 胴　復 6.0	壺形だろう。外面体部上端ヨコナデ・下端ケズリのち胴部中位光沢のあるナデ。内面口縁部下半ナデで、口縁部と体部の接合痕は明瞭に残る。体部ナデ、体部下端ヘラナデ。	10YR6/3　にぶい黄橙 緻密　白・赤細粒微 硬質	北東隅床上 4cm 体 1/5 周 34
4 土師器 小形壺	口　復 13.0 高　残 8.3	外面口縁～胴部上半９本/1cmのハケのち口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ。内面口縁部９本/1cmのハケのちヨコナデ、胴部上半ナデのち一部ヘラナデで、紐積痕としぼり目残る。頸部接合痕あり。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　白・黒・透明粗～細粒少、赤粗～細粒微 硬質	中央北部床上 4cm 口～胴上半 4/5 周 2
5 土師器 小形壺	高　残 7.5 最大　12.2	外面胴部ナデのち胴部下半軽いケズリのち胴部疎らなミガキ。頸部付近には、９本/1cmのハケがわずかに見られる。ナデ以前の調整痕か。内面口縁部下端密なミガキ、胴部ナデで、上半にしぼり目と紐積痕が残る。胴部下半には積み上げ休止による接合痕があり、内面にわずかな段差として残る。	5YR7/6　橙 やや緻密　白・黒・赤粗～細粒微 やや硬質	中央西部床上 9cm 胴 2/3 周 14、一括
6 土師器 高杯	口　復 21.2 高　残 7.1	外面杯部６本/1cmのハケのち口縁～体部ヨコナデ・底部ケズリ。内面杯部６本/1cmのハケのち口縁～体部軽いヨコナデ。	5YR7/8　橙 やや緻密　砂・白・黒・透明細粒少、白粗粒・赤粗～細粒微 硬質	北西隅床上 12cm 杯口～体 1/2 周、底完存 1
7 土師器 高杯	高　残 8.4	外面杯部体部下端～底部ケズリのち底部ミガキ、脚部上半～中位ナデ・下半ヨコナデのち脚部密なミガキ。内面杯部底部放射状のミガキ、脚部上半軽いナデで、しぼり目残る。下半ヨコナデで、脚部中位には接合痕が明瞭に残る。	2.5YR5/4　にぶい赤褐 やや緻密　白・砂粗～細粒少、赤・黒粗～細粒微 硬質	中央南東部床上 9cm 杯底一部、脚上半～中位一部欠 4
8 土師器 高杯	高　残 7.6	柱状脚。外面脚部上半８本/1cmのハケのち疎らなミガキ。内面脚部上半ケズリで、紐積痕がわずかに残る。	5YR7/6　橙 やや緻密　白・砂粗～細粒少 硬質	中央床上 8cm 脚上半一部欠 9、一括
9 土師器 甕	口　復 19.0 高　残 4.8	外面口縁部縦方向の９本/1cmのハケのちヨコナデ、内面口縁部横方向の９本/1cmのハケのち上半～中位ヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　砂細粒少、白・透明・赤・黒細粒微 硬質	北東隅床面 9cm 口 1/2 周 5
10 土師器 甕	高　残 3.6 底　7.4	外面胴部下端７本/1cmのハケのちナデ、底部ナデで突出した平底であり、中央の径約４cmの部分が浅くくぼむ。内面胴部下端～底部７本/1cmのハケが明瞭。底部のハケは上から見て反時計回りに施される。	5YR6/6　橙 やや粗い　砂・白・黒・赤・透明礫～細粒少 硬質	北東隅、床上 6cm 胴下端～底完存 6、29
11 土師器 甕	高　残 3.3 底　7.3	10 と似た底部。胴部下端ナデ、底部ナデ。底部は突出する平底で、中央の径約 3.5cm の部分が浅くくぼむ。内面胴部下端～底部７本/1cmのハケが明瞭。底部のハケは上から見て反時計回りに施される。	5YR7/6　橙 やや粗い　白・黒・赤・透明粗～細粒少 硬質	中央北部床上 3cm 底ほぼ完存 3、18
12 土師器 甕	高　残 2.5 底　復 7.0	外面胴部下端７本/1cmのハケのちナデ。底部ケズリで平底であり、わずかに浅くくぼむ。内面胴部下端～底部ヘラナデ。	5YR6/6　橙 やや粗い　白・赤粗～細粒少、黒粗粒・透明細粒微 やや硬質	北壁際中央床上 6cm 底 1/3 周 26、一括
13 礫	長　12.7 幅　7.0 厚　4.4	河原石。特に加工の痕跡なし。全面被熱により赤変している。表側のみ部分的に煤付着。重量 544.7g。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや粗い 流紋岩	炉内火床面直上 完形 42

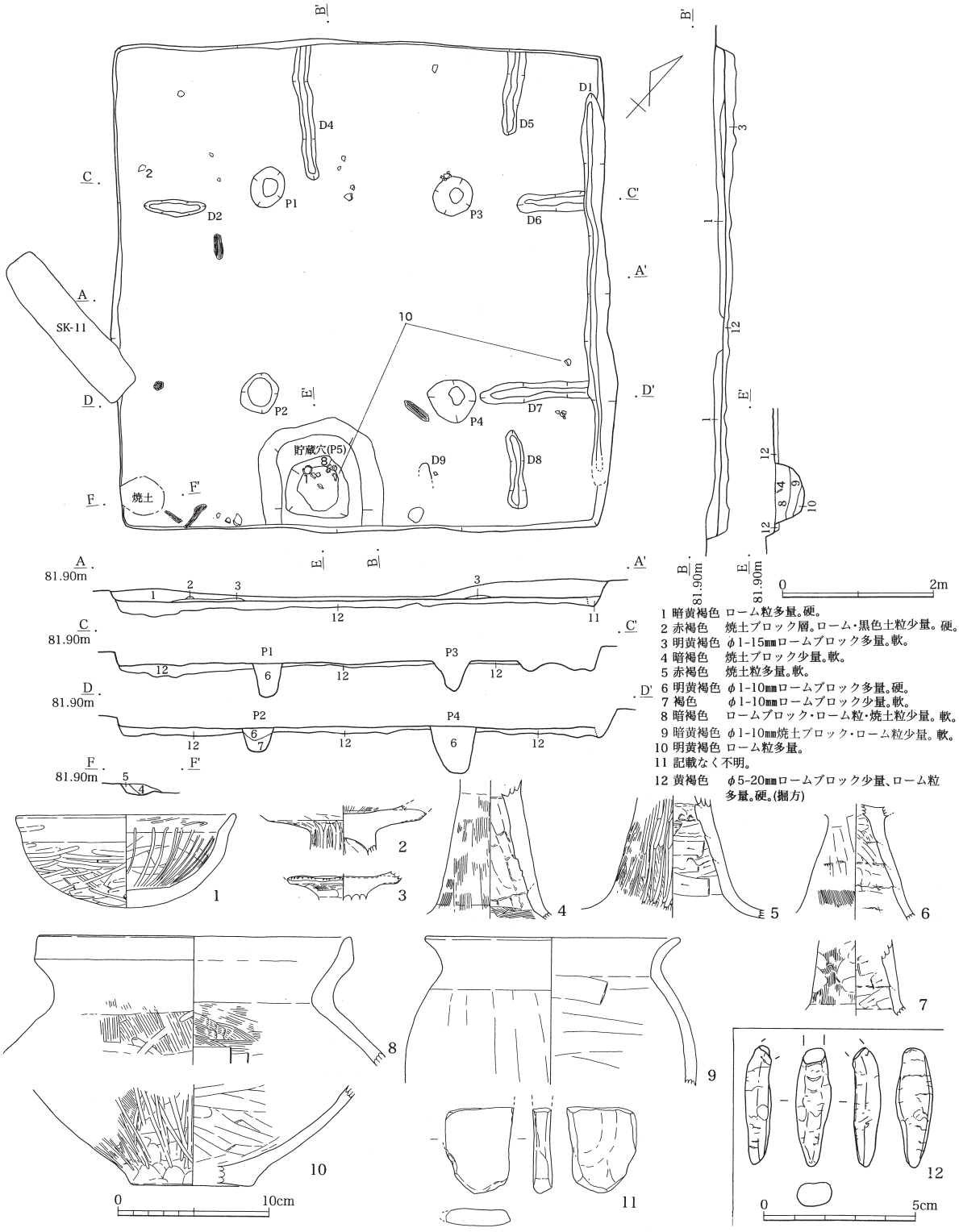
3・4・11・13 が床に近い。西半の壁寄りで床から約 10cm 浮いて棒状炭化材が多く、壁から建物中央に向かう状態が目立つ。原形を留めるものはないが上屋構築材であろう。

［**出土遺物**］遺物は少量で杯類が少なく、高杯と壺が目立つ。3 は珍しい壺形の小形土器。図化以外の土師器 109 点（989g）の内訳は、杯 44 片（217g）、高杯 11 片（103g）、壺甕類 54 点（669g）。

GN1 区 SI-2（第 16 図、写真図版 3 ～ 4・113）

［**位置**］南西の低地に面する微高地縁辺、41.5-17.0・17.5 グリッドにある。同じく古墳中期の遺構として北に SI-1 がある。時期不明の SK-11 に切られる。

［**規模と形状**］方形でわずかに南北に長く、東西 6.47 ×南北 6.65m、残存壁高 0.16 ～ 0.36m。中軸線は N-40° -W。主柱穴は 4 本で、P1 は径 54 × 46 ×深さ 45cm、P2 は径 54 × 46 ×深さ 39cm、P3 は径 55 × 50 ×深さ 40cm、P4 は径 62 × 55 ×深さ 62cm。柱間は P1-P3 間 2.45m、P2-P4 間 2.58m、P1-P2 間 2.70m、P3-P4 間 2.62m で南北に僅かに長く、建物規模に比べ柱間が狭く柱が壁から遠い。入口施設は不明だが D8・D9 間が想定される。貯蔵穴 P5 は東西 82 ×南北 80 ×深さ 45cm で上層に焼土を含む。160 × 145cm の堤状高まりが貯蔵穴を囲む。東端の掘方底で確認した壁溝 D1 は断面「U」字状で幅 18 ～ 32cm、深さは記録がない。掘方底で 8 本確認した断面「U」字状の間仕切溝は幅約 14 ～ 27cm・深さ不



第 16 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-2

明で地山に達する。D2・6・7 は柱穴の線上、D5・8 は相対する位置にある。P2 西側付近に D3 もあるらしいが詳細不明。掘方は床より 4 ～ 18cm 低く、中央より壁際がやや深い。

[**炉**]未確認。炉を反映する可能性もある焼土が P4 北側で床から 3 ～ 5cm 浮くが、範囲が図示されていない。

[**覆土**] 自然埋没と思われ、1 ・ 3 層にローム塊が多い。テフラ粒は見られない。南西壁に接し、南東壁から 15 ～ 20cm 離れた床面に 56 × 52cm の範囲で焼土塊・粒があり、焼土と壁の間に暗褐色の 5 層を挟む。

第４表　杉村遺跡 GN1 区 SI-2　出土遺物

番号 種類 材質	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　14.4 高　6.1	内斜口縁で、丸底。外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリのち疎らな横方向の幅広なミガキ。ケズリは体部は少なく、底部主体。内面口縁部ヨコナデのち横方向の疎らなミガキ。体～底部ナデのち放射状の疎らなミガキ。内面底部は平坦に作られる。	2.5YR6/6　橙 やや緻密　黒・赤礫～細粒・白礫～微粒多 やや硬質	P5 内底上 34cm、やや斜位 口 3/4 周、底完存 2、6
2 土師器 高杯	高　残 3.3	外面杯部体部下端ケズリのちナデ、底部８本 /1cmのハケのち稜周辺のケズリのち疎らな縦方向のミガキ。脚部上端８本 /1cmのハケのち疎らな縦方向のミガキ。内面杯部底部ナデのち疎らな放射状のミガキ。脚部上端ナデ。杯部は円板状の底部に体部となる粘土を積み上げて作られる。	10YR8/6　黄橙 やや粗い　砂・白粗～細粒多、黒・赤粗～細粒微 硬質	西隅床上 14cm 杯底～脚上端 1/3 周 9
3 土師器 高杯	高　残 1.9	外面杯部底部８本 /1cmのハケのち横方向のナデ。内面杯部ナデ。杯部は円盤状の底部に粘土を積んで作るもので、円盤部分の外縁には粘土の接合を良くするためのヘラによる刻み目が施される。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　白細～微粒多、赤・透明細～微粒微 硬質	西隅床上 5cm 杯底ほぼ完存 10
4 土師器 高杯	高　残 9.2	外面脚部上半～中位８本 /1cmのハケのちナデ、内面脚部上半～中位荒く強いナデで、ナデがあまり及ばない中位では、紐積痕が残る。残存部下端は８本 /1cmのハケ。	5YR7/6　橙 やや緻密　白礫～粗粒・赤粗～細粒微 硬質	脚上半～中位 1/6 周
5 土師器 高杯	高　残 8.0	外面脚部上半～中位８本 /1cmのハケのちやや疎らなミガキ。内面脚部上端ナデで、紐積痕顕著に残る。上半～中位ケズリで、紐積痕わずかに残る。中位以下はナデで、残存部下端はヨコナデ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　砂・白細～微粒少、赤細～微粒微 硬質	脚上半～中位 1/3 周
6 土師器 高杯	高　残 7.6	外面脚部上半８本 /1cmのハケのち縦方向のナデ。内面脚部上半軽いナデで、紐積痕としぼり目が顕著に残る。上端は接合面で欠損する。	10YR8/4　浅黄橙 やや緻密　赤・砂細～微粒少、白細～微粒微 やや硬質	脚上半 1/3 周
7 土師器 高杯	高　残 5.0	外面脚部中位８本 /1cmのハケのちナデ、内面脚部中位ケズリで、紐積痕残る。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　白細～微粒少、赤・透明・砂・白粗～細粒微 硬質	脚中位 1/4 周
8 土師器 壺	口　復 20.6 高　残 8.5	複合口縁状。外面胴部上半５本 /1cmのハケのち光沢のあるナデ、口縁部内外面ヨコナデ、内面胴部上半５本 /1cmのハケのちヘラナデ。外面口縁部中位の突出部下面に煤付着。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　砂細粒多、白・黒・透明細粒微 硬質	P5 内底上 39cm 口～胴上半一部 3
9 土師器 甕	口　復 16.8 高　残 9.7 最大　復 19.2	外面胴部上半ナデのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半ヘラナデ。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや粗い　白・砂粗粒微、白・砂・透明細～微粒少 硬質	P3 北西底上 12cm 口～胴上半 1/6 周 17
10 土師器 甕	高　残 6.7 底　復 8.0	外面胴部下半７本 /1cmのハケ・胴部下端ナデのち胴部下半全体に縦方向の疎らなミガキ。底部ケズリで平底であり、全体に浅くくぼむ。内面胴部下半ナデ、胴部下端～底部ヘラナデ。残存部上端付近は積み上げ休止による接合面になると見られる。	5YR7/6　橙 やや粗い　白・赤・砂粗～細粒少 硬質	東隅床上 10cm 胴下半 1/6 周、底 1/3 周 2、19
11 石器 砥石	長　残 5.6 幅　残 4.4 厚　1.2 重　残 33.5	長方形の板状の砥石と見られ、上端を古く欠損する。左側面は発掘時の欠損の可能性がある。表裏面および右側面が使用面で、３面とも残存部中央がわずかにくぼむ。表面は極めて平滑で、擦痕も残っていない。右側面も平滑。裏面は磨滅のためか細かく剝落しており、表面の観察ができない。下端～左下は切削加工時の縁辺をそのまま残す部分だろう。	7.5Y7/2　灰白 やや粗い 流紋岩質凝灰岩	破片
12 土製品	長　残 3.9 幅　1.2 厚　0.9	棒状の粘土塊で、上端を欠損する。全面ナデで、中軸線と直交する方向に多数の粘土の皺が残る。残存重量 3.11g。	7.5YR6/6　橙 緻密　白細粒微 やや軟質	一部欠

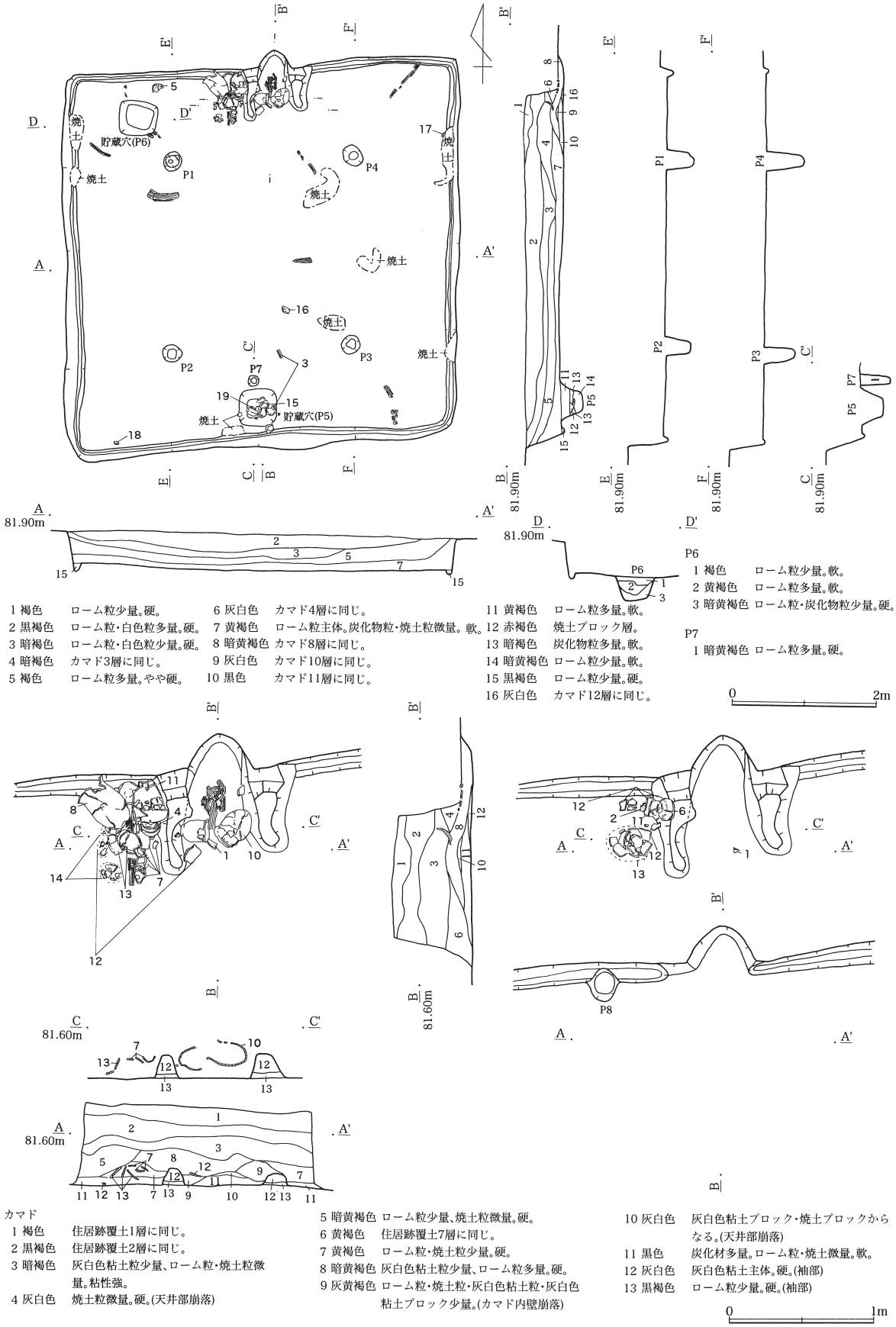
［遺物および出土状況］集中しない。貯蔵穴周囲の 1 や 8 は底面から 30cm 以上浮く。建物南半の床からわずかに浮いて炭化材が数点出土した。杯（1）は丸底化して口が外に開く。受口状の壺（８）は権現山遺跡４区 SI-5 などにある。遺物量は少なく、特に杯破片が少ない。図化以外の土師器 250 片（2,492g）の内訳は、杯 33 片（101g）、高杯 35 片（277g）、甕壺類 182 点（2,114g）。

GN1 区 SI-3（第 17 ～ 19 図、写真図版 4 ～ 5・113）

［位置］GN1 区の東側低地に向かう斜面に近い微高地上、41.5-19.5 と 42.0-19.5 グリッドにある。同じく古墳後期の遺構として、南西に SI-4・5 がある。重複する遺構はない。北壁付近が確認調査時のトレンチに切られ、壁は数 cm 分だけが残る。トレンチは竪穴床には達しない。

［規模と形状］東西 5.78m、南北 5.51m のややいびつな方形で、中軸線は N-0°-E である。壁は直線的に外傾し、トレンチ破壊部以外で残存高 0.43 ～ 0.50m。床面は緩い凹凸があるが傾斜はなく、特に硬化部はない。掘方はなく、ほぼ全体がロームをそのまま床面としている。

主柱穴は 4 本で P1 は径 29 × 24 ×深さ 38cm、P2 は径 27 × 25 ×深さ 36cm、P3 は径 27 × 25 × 深さ 44cm、P4 は径 32 × 26 × 深さ 54cm。柱間は P1-4 間 2.54m、P2-3 間 2.50m、P1-2 間 2.66m、P3-4 間 2.61m でほぼ同様で、竪穴に相似した不整方形に配置する。カマド西の掘方底で確認した P8 は径 24cm、掘方底面から深さ 4 ～ 6cm で浅く柱穴ではない。貯蔵穴 P5 の北にある入口ピット P7 は径 16



1 褐色　ローム粒少量。硬。
2 黒褐色　ローム粒・白色粒多量。硬。
3 暗褐色　ローム粒・白色粒少量。硬。
4 暗褐色　カマド3層に同じ。
5 褐色　ローム粒多量。やや硬。
6 灰白色　カマド4層に同じ。
7 黄褐色　ローム粒主体。炭化物粒・焼土粒微量。軟。
8 暗黄褐色　カマド8層に同じ。
9 灰白色　カマド10層に同じ。
10 黒色　カマド11層に同じ。
11 黄褐色　ローム粒多量。軟。
12 赤褐色　焼土ブロック層。
13 暗褐色　炭化物粒多量。軟。
14 暗黄褐色　ローム粒少量。軟。
15 黒褐色　ローム粒少量。硬。
16 灰白色　カマド12層に同じ。

P6
1 褐色　ローム粒少量。軟。
2 黄褐色　ローム粒多量。軟。
3 暗黄褐色　ローム粒・炭化物粒少量。硬。

P7
1 暗黄褐色　ローム粒多量。硬。

カマド
1 褐色　住居跡覆土1層に同じ。
2 黒褐色　住居跡覆土2層に同じ。
3 暗褐色　灰白色粘土粒少量、ローム粒・焼土粒微量。粘性強。
4 灰白色　焼土粒微量。硬。(天井部崩落)
5 暗黄褐色　ローム粒少量、焼土粒微量。硬。
6 黄褐色　住居跡覆土7層に同じ。
7 黄褐色　ローム粒・焼土粒少量。硬。
8 暗黄褐色　灰白色粘土粒少量、ローム粒多量。硬。
9 灰黄褐色　ローム粒・焼土粒・灰白色粘土粒・灰白色粘土ブロック少量。(カマド内壁崩落)
10 灰白色　灰白色粘土ブロック・焼土ブロックからなる。(天井部崩落)
11 黒色　炭化材多量。ローム粒・焼土微量。軟。
12 灰白色　灰白色粘土主体。硬。(袖部)
13 黒褐色　ローム粒少量。硬。(袖部)

第 17 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-3（1）　遺構

×深さ 43cm の円形柱穴状で、覆土は単層。カマド以外を全周する壁溝は断面逆台形または「U」字状で床から深さ２～ 4cm（北壁西部は 7cm）。貯蔵穴は２箇所で、北西と南に P5・6 がある。P5 は 63 × 52 ×深さ 33cm の隅丸方形・平底で、壁は下半が急で、上部が外傾する。P6 は隅丸方形で 61 × 48 ×深さ 32cm。底面はわずかに彎曲し、壁はやや外傾する。P5 中層や P6 下層の焼土や炭が、竪穴床を覆う７層中の炭化材と関わるならば、２つの貯蔵穴を建物廃絶期まで用いたことになる。

［カマド］北壁中央にある。天井部は崩れ、北側上部は確認調査トレンチで削られる。規模は東西 95 ×南北長 90cm。竪穴床面上に 12・13 層で袖を作る。火床は 11 層下面で、床と同じレベルの平坦面である。11 層は火床面を覆う炭・焼土混層。天井内面が焼土化して崩れた 10 層、天井部粘土の崩れた８層などが燃焼部に堆積する。煙道は壁を「U」字状に約 28cm 掘り、火床面から同じレベルで続き、先端が緩く上がる。覆土は燃焼部と同じ８層で、南半の底面に袖部から続く 12 層の粘土を薄く貼る。カマド焚口部に２個の土師器甕を掛けていたと見られるうち西側の中形甕１点と、袖部左側の杯１点は調査中に盗難に遭った。

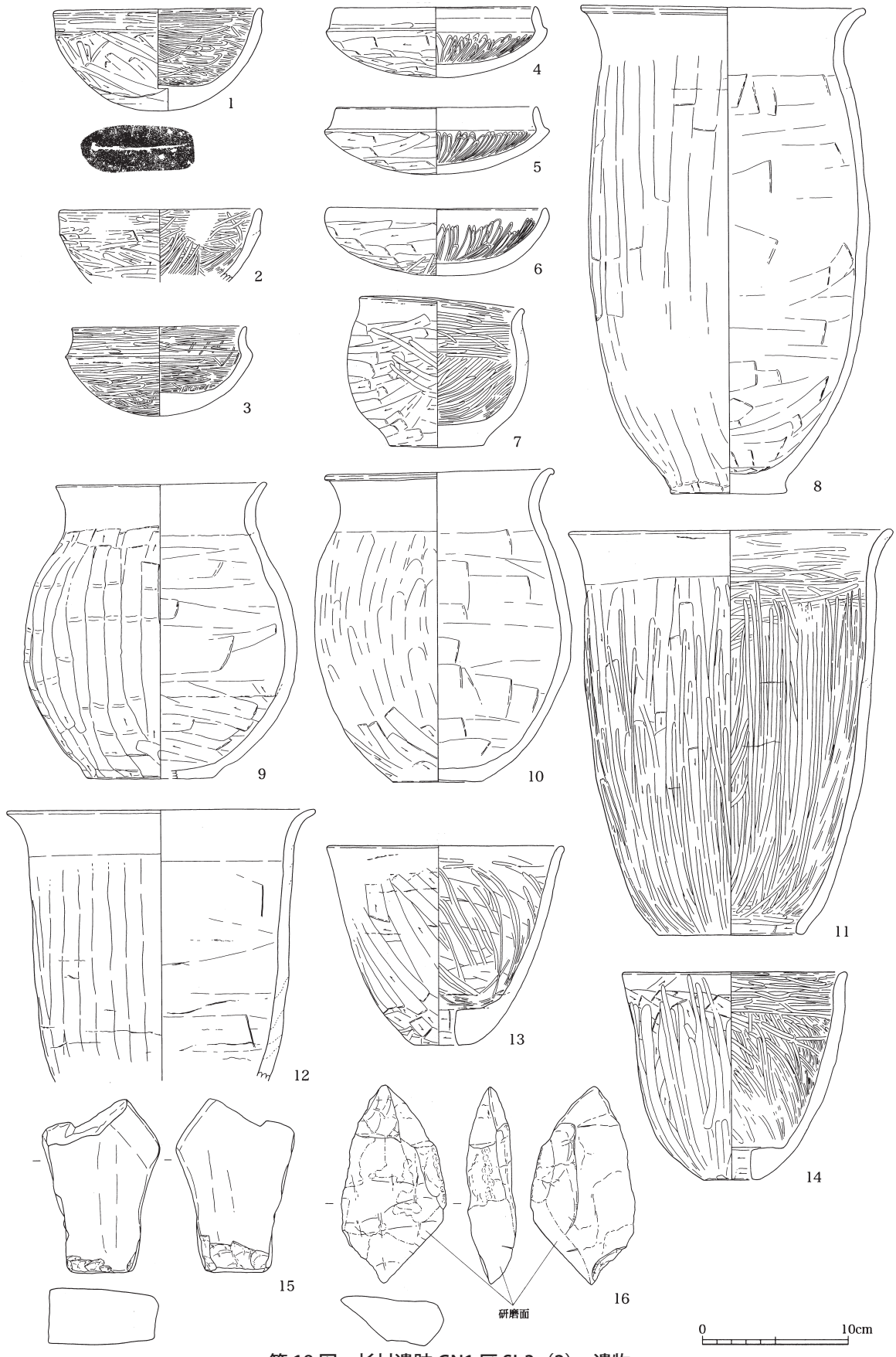
［埋土とテフラ］自然埋没で２・５層にローム粒が多い。白色粒が２層に多く、３層にも含むが、火山灰かどうかは未確認。床面の７層は焼土と炭を含み、焼土は集中せず各所にあるが、特に多い部分を図示した。

［遺物出土状況］遺物はカマド周辺と P5 に集中する。カマドに掛けた土師器甕２個のうち西側の中形甕と、カマド西袖左側の完形に近い杯１点が盗難に遭っている。礫は特に P5 内に多い。床直上で焼土以外に少量出土した炭化材は、壁際から建物中心を向き、上屋材の一部と推定される。カマド燃焼部内・P5・P6 にも炭が入っている。砥石と椀形鍛冶滓は、南・東壁付近の床上７～ 10cm と南貯蔵穴内で出土した。鉄滓は３点だけで、鍛冶炉も見られないので、周辺から流入した遺物と見られる。

［出土遺物］３は漆仕上げと密なミガキを行う。椀形鍛冶滓は３点あり、18 は金属学的分析結果から低温操業によるものと考えられた（第 11 章）。図化以外の遺物 174 片の内訳は、土師器杯７片（22g）、土師器甕壺類 167 片（564g）、須恵器蓋１片、砂岩２片である。砂岩２片は同じ石質で、使用面が認められない小片だが砥石であれば粗砥とされるもの。P5 内に多い礫は流紋岩や安山岩の河原石７点で使用痕はなく、長 6 ～ 19cm、重さ 140 ～ 1,600g で大きさや形に統一性はない。

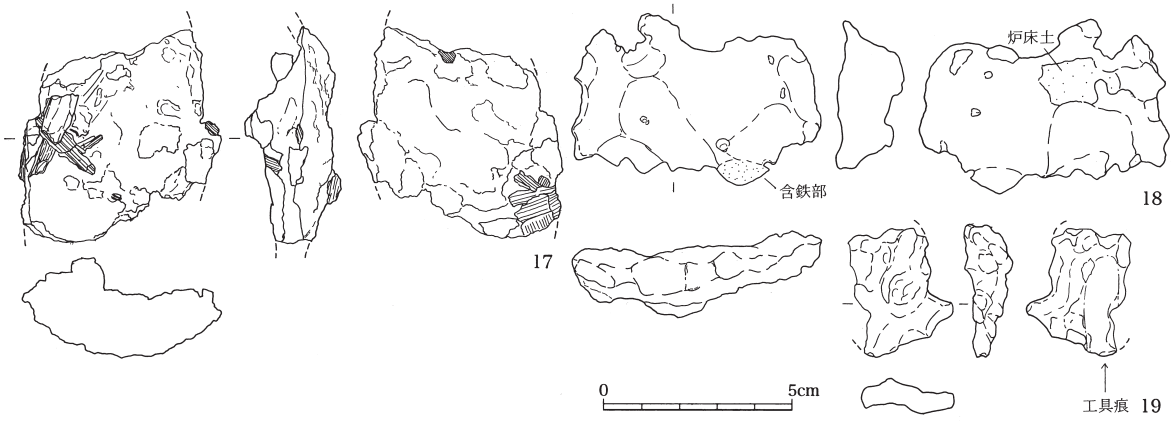
第５表　杉村遺跡 GN1 区 SI-3　出土遺物

番号 種類 材質	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　14.4 高　7.0	丸底。外面口縁部ヨコナデのち横方向の疎らなミガキ、体～底部ケズリのち光沢のあるケズリ。底部にヘラ状工具によると見られる直線状の線刻あり。長さ 6.7cmで、光沢のあるケズリにより一部つぶれている。内面口縁～体部ヨコナデのち口縁～底部密なミガキ。底部は平坦で、ほぼ一方向にミガキが施される。内外面口縁～底部一部に黒色物質付着。漆仕上げの可能性あり。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白・透明細～微粒多、白・赤粗～細粒微 やや硬質	カマド西床上 4cm、斜位 4 の杯の下 完形 15、17、30、カマド内の一片も接合
2 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 5.0	外面口縁部ヨコナデ・体部ケズリのち口縁～体部疎らな横方向のミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデのち口縁～体部横ないし斜め方向のやや密なミガキ。	5YR6/6　橙 やや緻密　白・透明細～微粒少、白・赤粗粒微 硬質	No.11 下床上 1cm 口～体 1/3 周 29
3 土師器 杯	口　12.0 高　6.2	内外面全面に比較的密なミガキを施す。外面口縁部ヨコナデのちミガキ、体～底部ケズリのち体部横方向・底部一方向のミガキ。内面口縁～体部ヨコナデ・体～底部ナデのち口縁～体部横方向・底部一方向のミガキ。底部は外面は丸く、内面は平底気味に平坦に作られる。内外面ほぼ全体漆仕上げ。	5YR5/4　にぶい赤褐 やや緻密　白・透明微粒・赤粗～細粒少 やや硬質	P5 内底上 25cm、斜位 口 4/5 周、体～底完存 3、28、31
4 土師器 杯	口　13.8 高　4.8 最大　15.2	外面口縁部ヨコナデのち下端のみミガキ、体～底部ケズリ。内面口縁～底部ヨコナデのち体～底部放射状のミガキ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや緻密　白・赤・透明粗～細粒微、透明微粒多 硬質	カマド西床上 4cm、斜位 ほぼ完形 16
5 土師器 杯	口　13.8 高　4.6 最大　15.4	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ。内面体～底部ヘラナデのち口縁～底部ヨコナデのち体～底部放射状のミガキ。内外面ほぼ全体が漆仕上げと見られるが、残存部分は少ない。	10YR4/2　灰黄褐 やや緻密　白・黒・赤粗～細粒微、透明細～微粒多 軟質	北壁際西部床上 5cm、正位 口～底 2/3 周 32
6 土師器 杯	口　15.4 高　4.7	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ。底部は、ケズリ後に幅の狭いナデを部分的に施す。線刻ではない。内面口縁～底部ヨコナデのち放射状のミガキ。内外面全体漆仕上げ。	10YR5/2　灰黄褐 やや緻密　白・黒・透明細～微粒多、赤細粒微 硬質	No.11 下床上 9cm 完形 24
7 土師器 鉢	口　11.3 高　10.4 底　6.5 最大　12.4	小形で、深身の杯のような形。外面口縁部ヨコナデのち体～底部ケズリのち体部一部ミガキ。底部は突出する平底で、中央が削られずにやや突出してしまうため、安定しない。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデのち口縁～底部密なミガキ。ミガキは横方向主体で、底部は多方向。	10YR5/4　にぶい黄褐 やや緻密　白・透明細～微粒多、赤細～微粒少 硬質	カマド西床上 8cm 胴部一部欠 5、7、8、9
8 土師器 甕	口　19.5 高　33.5 底　7.8	外面口縁部ヨコナデのち胴部縦方向のナデ。胴部には紐積の緩やかな凹凸が残る。底部ナデで、突出する平底。内面口縁部ヨコナデのち胴～底部ヘラナデ。外面胴部被熱により赤変する部分多い。外面胴部上半～中位粘土付着。外面胴部全体表面の剝落著しい。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　白・赤・砂粗～細粒少 やや硬質	カマド西床上 16cm、横位 口～底一部欠 2



第 18 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-3（2）　遺物

9 土師器 甕	口　14.5 高　20.1 底　9.0 最大　18.7	甑に多用するような精良な胎土。胴部下半の積み上げ休止による接合面の上下で胎土は異なり、接合面より下はにぶい黄橙色（10YR7/3）で作る。外面口縁部ヨコナデのち胴～底部ケズリ。突出する平底で、全体に丸味を持つ。内面口縁部ヨコナデ、胴部下半～底部ケズリのち胴部上半ヘラナデ。胴部上端には口縁部の接合痕が残る部分もある。胴部下半の接合面はわずかな段差として残る。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤・砂粗～細粒少、白細粒微 やや軟質	P2 北 口～胴中位ほぼ完存、胴下半～底 1/2 周 P2 北
10 土師器 甕	口　15.6 高　21.4 底　6.2 最大　17.5	外面胴部丁寧なナデのち口縁部ヨコナデ、胴下端～底部ケズリ。底は浅くくぼむ。口縁端は外へ粘土がめくれる。内面口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラナデ。外面胴中位以下は全体が黒褐色に変色し、中位は部分的に褐色粘土付着。底部の約 1/2 ほどが被熱赤変し、表面が剝落する。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・透明細粒多、白・赤粗粒・砂粗～細粒微 やや硬質	カマド内火床上 17㎝、斜位 ほぼ完形 12
11 土師器 甑	口　22.2 高　27.7 底　10.0	無底式。外面口縁部ヨコナデ、胴部ナデのち、下半主体にケズリのち疎らなミガキ。内面口縁部ヨコナデのち横方向の疎らなミガキ、胴部横方向のヘラナデのち縦方向の密なミガキ。底部ケズリで面取りしたのち横方向のミガキ。 ［注記］1、UT-TN-GN TX42-19 SI ローム上	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白・赤・砂粗～細粒少 硬質	カマド西床上 20㎝、斜位 口～胴上半ほぼ完存、胴下半～底 1/3 周 注記は左欄
12 土師器 甑	口　復 21.2 高　残 18.4	外面口縁部ヨコナデ、胴部上半～中位丁寧な縦方向のナデで、紐積の凹凸が器面に残る。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。胴部には紐積痕残る。外面胴部下半には、被熱により赤変する部分あり。	2.5YR6/8　橙 やや粗い　白・赤礫微、白・透明・赤粗～細粒少 やや硬質	カマド西床上 2㎝ 口～胴中位 1/2 周 8、26、27
13 土師器 甑	口　復 16.3 高　13.6 底　4.0	鉢形。外面口縁部ヨコナデのち体～底部ケズリのち底部周辺一部ナデ。胴部に紐積痕わずかに残る。内面口縁部ヨコナデのち体～底部ケズリのち口縁～底部やや疎らなミガキ。底部にケズリにより穿孔される一孔あり。楕円形で、径は 2.3 ～ 2.8㎝。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白・透明細粒・赤粗～細粒少 硬質	カマド西床上 3㎝ 口～体上半 1/3 周、体下半～底ほぼ完存 4
14 土師器 甑	口　16.0 高　14.2 底　4.0	鉢形。外面口縁部ヨコナデのち体部上半横方向のケズリのち体～底部縦方向のケズリのち体部縦方向の太いミガキ。底部は平坦面がほとんどなく、部分的にナデが施される。内面口縁部ヨコナデのち体部ケズリのち口縁～体部やや密なミガキ。ミガキは口縁部横方向、体部斜め方向。底部中央にケズリにより穿孔される一孔あり。平面形は隅丸方形で、径は 2.6㎝。	7.5YR5/6　明褐 やや緻密　白・透明微粒・赤粗～細粒多 やや硬質	カマド西床上 4㎝ 口～底 2/3 周 6、9、21
15 石器 砥石	長　11.9 幅　7.9 厚　3.8 重　462.0	表裏２面を使用面とする。下および右側面は古い切削加工面であり、全体に磨滅している。上および左側面は磨滅する部分もあるが、やや新しい剝離面であることから、大形の板状の砥石であったものを分割ないし欠損後に再利用したと見られる。表裏とも平滑で側面から見て中央が浅くくぼんでいるほか、表側中央に長軸方向のごく浅い溝状のくぼみが形成されている。	2.5Y7/3　浅黄 やや緻密 砂岩	P5 内底上 9㎝ 完形 36
16 石器 砥石	長　13.5 幅　7.1 厚　3.0 重　217.6	木葉形をした小形の砥石。本来は裏側左下の面を使用面とする大形の砥石であったものを、欠損後ないしは分割したのちに再利用したものと見られる。表側は剝離面、裏側は節理面からの剝離面であり、右側面は表側が使用面で、凹凸のある表面の突出した部分のみが研磨により平滑になっている。	7.5Y5/1　灰 やや粗い 砂岩	中央南部床上 4㎝ 完形 37
17 鉄滓 椀形鍛冶滓（極小、含鉄）	長　残 5.6 幅　5.4 厚　2.5 重　残 40.2	短軸側の両側部が破面となった含鉄で極小の椀形鍛冶滓。上下面と左右の側部が生きており、上面左側には植物質の付着物が明瞭に残されている。また、左下半側の側部には木炭が固着する。全体に薄手の椀形鍛冶滓で肩部に向かって薄くなって収束する。上面は緩やかに凹む半流動状の面で、下面は浅い皿状のイガイガした面となる。一部に炉床土の痕跡を残し、左側の側部が工具痕様にわずかに凹んでいる。滓質は密度が低く、破面には中小の気孔が目立つ。鍛冶関連遺物構成№ 81。	表　茶褐色～濃茶褐色 地　黒褐色 磁着度　3 メタル度　錆化（△）	焼土下床上 10㎝ ほぼ完形 両端部欠 38
18 鉄滓 椀形鍛冶滓（極小、含鉄）	長　6.5 幅　4.5 厚　1.9 重　32.3	肩部に小破面がある程度のほぼ完形で極小の椀形鍛冶滓。左右方向に長手の扁平な滓で、左側の端部は羽口先寄りのためか表面が粘土質の滓となっている。また、滓量が少ないために側部の出入りが目立つ。上面は浅く窪み、木炭痕がかすかに残されている。側部から下面は粉炭痕主体で、左上手側のみが小さく突出して炉床土の痕跡を残す。含鉄部は下手右側に小さく突出する黒錆の吹いた部分で、径 1㎝程度と小範囲。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、滓部は濃茶褐色から黒褐色となる。分析資料№ 12、鍛冶関連遺物構成№ 80。	表　茶褐色～濃茶褐色 地　濃茶褐色～黒褐色 磁着度　3 メタル度　錆化（△）	南西隅床上 7㎝ ほぼ完形 35
19 鉄滓 椀形鍛冶滓（極小、工具痕付き）	長　3.4 幅　2.8 厚　1.4 重　残 6.1	下面に幅 1㎝以上の突き刺したような工具痕を残す極小の椀形鍛冶滓破片。側部２面が破面で上下面と右寄りの側部２面が生きている。粘土質の強い滓で部分的に錆色が点在している。工具の横断面形は丸棒状。鍛冶関連遺物構成№ 79。	地　青灰色 磁着度　1 メタル度　なし	P5 内底上 3㎝ 破面２面 48



第 19 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-3（3）　遺物

GN1 区 SI-4（第 20 ～ 21 図、写真図版 5 ～ 6・113・114）

［位置］ GN1 区の東側低地をのぞむ微高地上、41.0-19.0・19.5 と 41.5-19.0・19.5 グリッド所在。同じく古墳後期の SI-3・5 が近接する。時期不明の SD-8 に切られる。

［規模と形状］ 東西 6.28m、南北 5.84m の方形で、中軸線は N-4°-E である。壁は外傾し、残存高は 0.42 ～ 0.46m。床は平坦で傾斜せず、特に硬化部はない。掘方は床から深さ 2 ～ 13cm で、 4 cm 前後の部分が多い。ほぼ全体を 14 層で貼床する。

主柱穴は 4 本（P1 ～ P4）。P1 は径 48 × 46 ×深さ 52cm、P2 は径 48 × 46 ×深さ 50cm、P3 は径 50 × 40 ×深さ 52cm、P4 は径 64 × 58 ×深さ 56cm。柱間寸法は P1-P4 間 3.32m、P2-P3 間 3.1m、P1-P2 間 3.0m、P4-P3 間 3.12m。柱間はそれぞれほぼ同様であり、柱穴配置は竪穴と相似のやや不整方形。掘方底面では P7 ～ P10 の柱穴 4 本を確認した。P7 と P9 は主柱穴の中間にあり、P8 は中間より少し P4 に寄るが、それぞれ補助柱穴の可能性もある。P7 が径 48 × 28cm、掘方底面から深さ 38cm、P8 が径 46 × 36cm、掘方底面から深さ 40cm、P9 が径 26 × 18cm、掘方底面から深さ 8cm。P10 はカマド東側にあり径 18 × 16cm、掘方底面から深さ 32cm。掘方底面で確認した間仕切溝 D1 は北西壁と主柱穴 P1 を結ぶ。断面「U」字状で幅 18 ～ 19cm、深さは掘方底面から 4cm、床面から 9 ～ 10cm。

貯蔵穴は P5 と P6 の 2 基で、東西軸の長方形。P5 は中央上部が SD-8 に少し切られる。隅丸長方形で 86 × 50 ×深さ 22cm。底はやや彎曲し、壁は直線的。人為的に埋めたような状況は特にない。上方の覆土に焼土や炭を含む。深さは P5 とほぼ同じである。P6 は 94 × 72 ×深さ 22cm。掘り込みは段状で、床面下約 5 cm に幅 4 ～ 13cm の平坦面があり、一段深い部分は 66 × 47cm。平底で壁は直線的。カマドから流れ込んだと見られる炭・焼土を覆土に含む。P6 東側の床面はやや高いが、堤状の高まりの一部か、あるいはカマド袖部構築に係わるものなのかは確定できない。

［カマド］ 北壁中央にあるカマドは大半が SD-8 に切られる。東西幅推定 90 ～ 100cm ×南北 52cm である。燃焼部掘方を埋めた整地土 12 層上に、粘土主体の 11 層で袖を作る。火床は 12 層上面で、床面からわずかに下がった平坦面である。天井の内面焼土化部分と崩落粘土の多い 3 ・ 4 層が燃焼部に堆積する。煙道や焚口から流入した 9 層を火床面との間に挟む。火床面から緩くわずかに上がる煙道は、北壁を「U」字状に 26 ～ 34cm 掘り、崩落土の 6 層や燃焼部と同じ 9 層で覆われる。

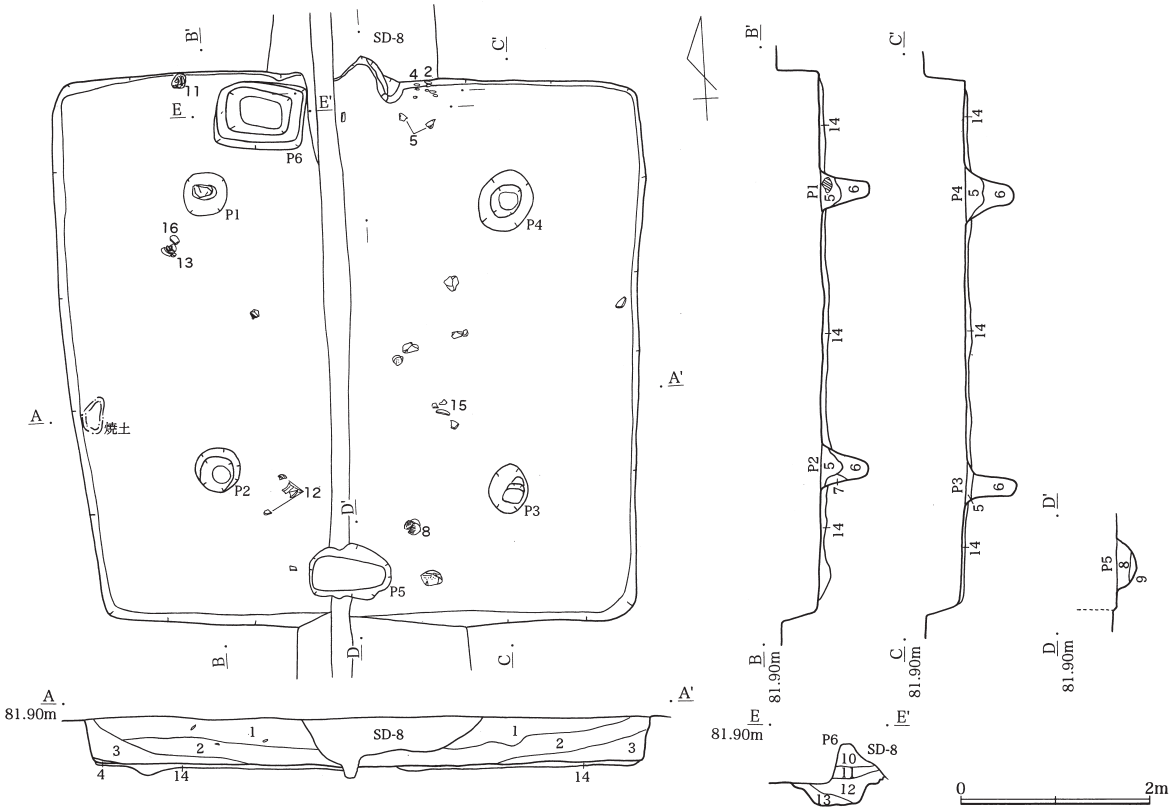
［埋土とテフラ］ 自然埋没で 3 層にローム粒が多く、1・2・4・10 ～ 12 層に焼土を含む。1 層の白色粒が火山灰かどうかは未確認。

［遺物出土状況］ 床付近の遺物は中央部の南北に長い範囲にある。床から大きく浮く遺物は北西隅の壁際で高く、中央部で低いので、竪穴外から流入した可能性がある。重複部の SD-8 覆土にある 8 世紀初頭の遺物数個体は SI-4 上層の遺物が流入した可能性が高い（12 ～ 15）。SD-8 の遺物はこの周辺にある 8 世紀初頭の遺物だけで、また SI-5 上層にも同時期の遺物がある。これらは SI-6 に関わる集落から流入したと推定される。

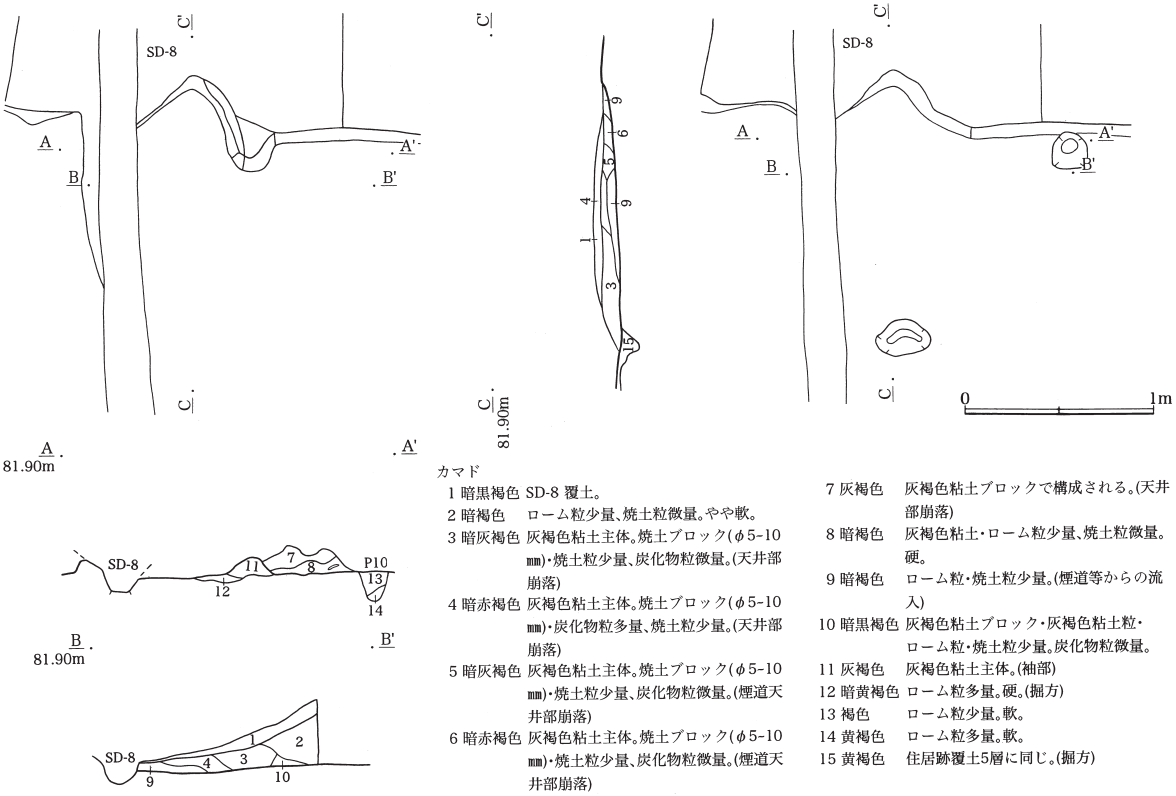
［出土遺物］ 遺物は少ない。杯は内面のミガキが減少したもので、 5 の疎らなミガキが特徴的。外面ハケ調整の甕は図示した 9 以外に 1 個体あり、胴部下半を削っている。図化以外の 319 片（3,708g）の内訳は、土師器杯 58 片（398g）、土師器壺甕類 255 片（3,287g）、須恵器 6 片（23g）。長さ 4 ～ 18cm、重さ 35 ～ 2,300g の礫が 10 点あり、大きさや形状は多様。12 ～ 15 は出土状況の項で述べた混入遺物。

第 6 表　杉村遺跡 GN1 区 SI-4　出土遺物

番号 種類 材質	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 13.0 高　残 4.2 最大　復 13.2	口縁部はほぼ直立し、下端はわずかに段になる。外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリ。内面体部ヘラナデのち口縁～体部ヨコナデ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げと見られるが、内面の漆はほとんど残っていない。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　白・赤・黒粗～細粒微 やや硬質	口～体 1/3 周

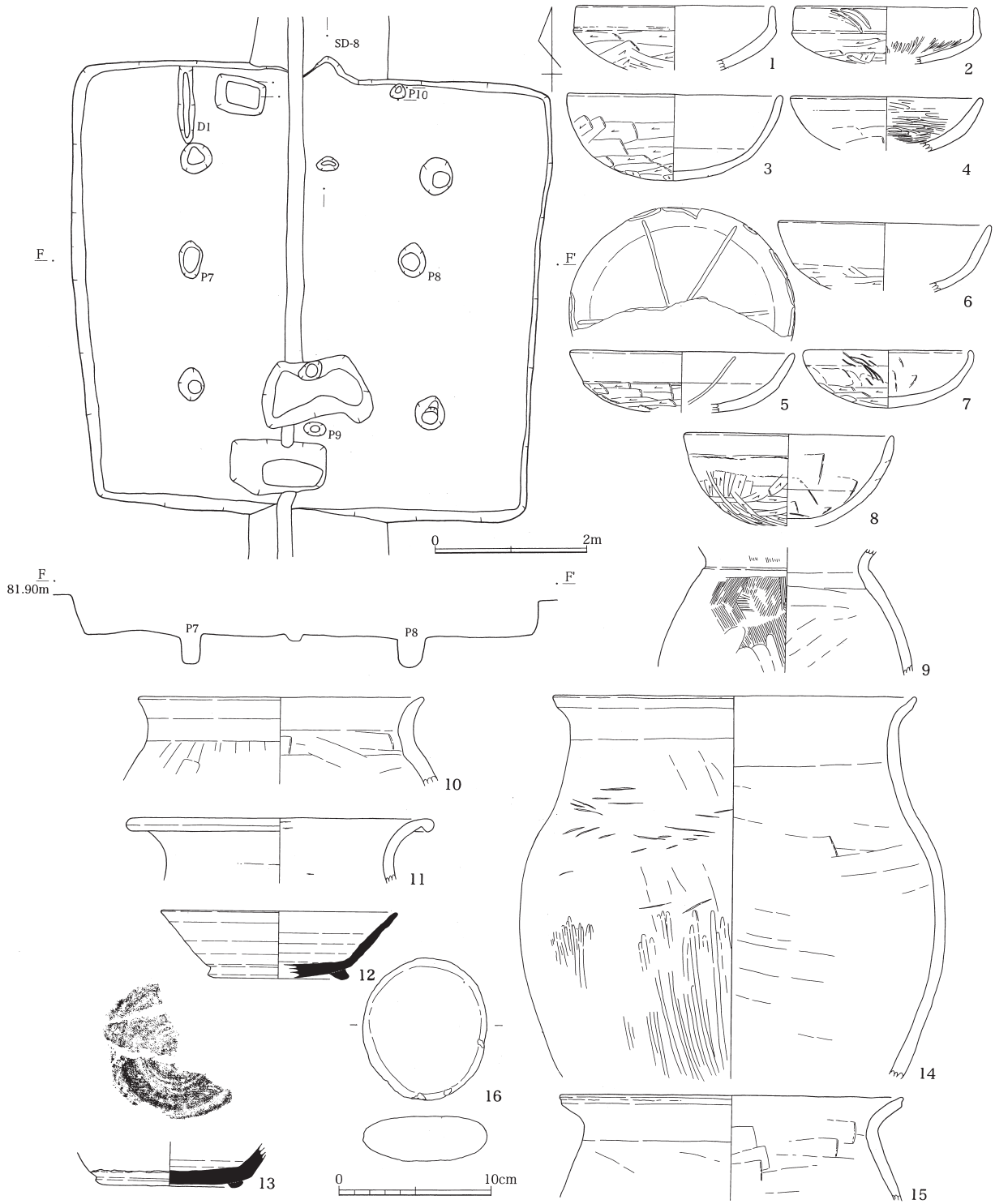


1 黒褐色　白色粒少量、焼土粒・ローム粒微量。硬。
2 暗褐色　ローム粒少量、焼土粒微量。硬。
3 暗黄褐色 ローム粒多量。硬。
4 暗赤褐色 焼土ブロックからなる。
5 暗褐色　ローム粒少量。やや硬。
6 暗黄褐色 ローム粒多量。硬。
7 黄褐色　ローム粒多量、炭化物粒微量。硬。
8 暗褐色　ローム粒多量、炭化物粒少量。
9 褐色　　ローム粒多量。
10 黒褐色　焼土粒・ローム粒微量。やや硬。
11 暗褐色　ローム粒少量、焼土粒微量。やや軟。
12 暗黄褐色 ローム粒少量、焼土粒・炭化物粒微量。やや軟。
13 暗褐色　ローム粒微量。やや軟。
14 黄褐色　ローム粒・ロームブロック多量。(掘方)



カマド
1 暗黒褐色 SD-8 覆土。
2 暗褐色　ローム粒少量、焼土粒微量。やや軟。
3 暗灰褐色 灰褐色粘土主体。焼土ブロック(φ5-10㎜)・焼土粒少量、炭化物粒微量。(天井部崩落)
4 暗赤褐色 灰褐色粘土主体。焼土ブロック(φ5-10㎜)・炭化物粒多量、焼土粒少量。(天井部崩落)
5 暗灰褐色 灰褐色粘土主体。焼土ブロック(φ5-10㎜)・焼土粒少量、炭化物粒微量。(煙道天井部崩落)
6 暗赤褐色 灰褐色粘土主体。焼土ブロック(φ5-10㎜)・焼土粒少量、炭化物粒微量。(煙道天井部崩落)
7 灰褐色　灰褐色粘土ブロックで構成される。(天井部崩落)
8 暗褐色　灰褐色粘土・ローム粒少量、焼土粒微量。硬。
9 暗褐色　ローム粒・焼土粒少量。(煙道等からの流入)
10 暗黒褐色 灰褐色粘土ブロック・灰褐色粘土粒・ローム粒・焼土粒少量。炭化物粒微量。
11 灰褐色　灰褐色粘土主体。(袖部)
12 暗黄褐色 ローム粒多量。硬。(掘方)
13 褐色　　ローム粒少量。軟。
14 黄褐色　ローム粒多量。軟。
15 黄褐色　住居跡覆土5層に同じ。(掘方)

第 20 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-4（1）　遺構



第 21 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-4（2）　遺構・遺物

2 土師器 杯	口　復 12.0 高　残 3.7 最大　復 12.3	口縁部はほぼ直立し、下端はわずかに段となる。外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリ。口縁部にはヨコナデ後に施される 2 本の沈線あり。体部下半にも直線上の沈線 1 本あり。幅 0.4㎝、長さは 2.0㎝分残存。内面口縁～体部ヨコナデのち体部放射状のやや疎らなミガキ。外面口縁部・内面全体漆仕上げと見られるが、漆が良好に残存するのは口縁部内外面のみ。	5YR7/6　橙 緻密　白細粒微、赤細～微粒少 やや硬質	カマド東床上 4㎝ 口～体 1/3 周 26-2
3 土師器 杯	口　14.0 高　5.6	口縁～体部やや歪みあり。胎土は精良で、器厚は薄い。外面口縁部ヨコナデのち体～底部丁寧なケズリ。内面口縁～体部ヨコナデ、体～底部ナデ。	7.5YR7/6　橙 緻密　透明微粒多、赤微粒微 やや硬質	口～底 2/3 周 SD-8 41-18 グリッド内
4 土師器 杯	口　復 12.6 高　残 3.5	外面口縁部ヨコナデ。体部ナデと見られるが、表面が細かく剝落しているため調整不詳。内面口縁～体部ヨコナデのち横方向のミガキ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒少 やや硬質	カマド東床上 4㎝ 口～体 1/6 周 26-1

5 土師器 杯	口　復 14.6 高　残 3.9	外面口縁部ヨコナデのち体～底部ケズリ。口縁部下端はわずかな段となる。内面口縁～底部ヨコナデのち放射状のミガキ。ミガキはおよそ 60°の間隔を空けており、杯の中心で交わる３本のミガキがほぼ均等に配置されたものと見られる。外面口縁部・内面全体漆仕上げ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　白・赤細粒多、白・赤粗粒微 硬質	カマド東床上 2cm 口～底 1/2 周 10、11、溝内
6 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 4.4	外面口縁部ヨコナデのち体部ケズリ。内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁部・内面全体漆仕上げ。	7.5YR8/6　浅黄橙 やや粗い　白・透明細粒微、赤粗～細粒少　やや硬質	口～体 1/3 周
7 土師器 杯	口　復 11.2 高　3.7	外面口縁部ヨコナデ、体部上半軽いナデ、体部下半～底部丁寧なケズリ。体部上半には無調整部分があり、粘土の皺が残るほか、一部に細い沈線が施される。内面口縁～底部ヘラナデのちヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　赤・白・黒細粒微、白・透明微粒少 硬質	北壁際西部床上 2cm 口～底 1/2 周 3
8 土師器 杯	口　13.6 高　6.2	口縁～体部は楕円形に歪む。外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリで丸底。体部上半には無調整部分があり、一部に紐積痕が残る。内面口縁～底部ヘラナデのち口縁～体部ヨコナデ。内面体部には、荒いナデによる器面の補修痕あり。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　赤・灰・砂粗～細粒少 硬質	中央南部床上 2cm、やや斜位 ほぼ完形 1
9 土師器 甕	高　残 8.3	外面口縁部下半～胴部上半に７本 /1cmのハケのち口縁部下半ヨコナデ、胴部上半一部ナデ。内面口縁部下半ヨコナデ、胴部上半ナデ。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　透明・白細～微粒少、黒細～微粒微 硬質	口下半～胴上半 1/6 周
10 土師器 甕	口　復 18.5 高　残 5.7	外面胴部上端縦方向のナデのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上端ヘラナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　砂細粒多、白・赤細粒・砂粗粒少　硬質	口～胴上端 1/4 周
11 土師器 甕	口　復 20.0 高　残 4.2	口縁部内外面ヨコナデ。口縁端部は外に張り出し、下面が垂下するように丸く仕上げられる。	10YR7/4　にぶい黄橙 粗い　砂粗～細粒多、白・赤・黒粗～細粒少　硬質	確認面 口 1/5 周 確認面
12 須恵器 有台杯	口　復 15.4 高　4.4 台　9.2	外面口縁～体部ロクロナデ、底部反時計方向の回転ケズリのち高台貼付。内面口縁～底部ロクロナデ。益子窯産。奈良時代初めの遺物が混入。	2.5Y5/1　黄灰 やや緻密　白・黒細粒少 硬質	中央南部床上 18cm 口 1/3 周、底 1/2 周 SD-8、SI4-4、SI4-5、SI4-6、SI4-7
13 須恵器 有台杯	高　残 2.9 台　9.6	外面体部下半ロクロナデ、底部反時計方向の回転ケズリのち高台貼付。内面体～底部ロクロナデで、底部にはロクロナデ以前の布圧痕あり。布目は８本 /1cmの平行線。三毳窯産。奈良時代初めの遺物が混入。	2.5Y7/2　灰黄 やや緻密　白礫～粗粒微、白細～微粒少 やや軟質	西部床上 25cmで逆位 体下半～底 2/3 周 SD-8 一括グリッド 内 41-18、SI4-2
14 土師器 甕	口　復 23.6 高　残 24.9 最大　復 27.6	外面口縁部ヨコナデで、端部は下向きの面となる。胴部上半ヘラナデで、ヘラ痕あり。胴部中位ミガキ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半～中位ヘラナデ。奈良時代初めの遺物が混入。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　白・白雲母細～微粒多、白・白雲母礫～粗粒微、赤礫～細粒微 硬質	口～胴上半 1/5 周
15 土師器 甕	口　復 22.4 高　残 6.7	内外面とも表面の磨滅が著しく、調整不明確な部分多い。外面口縁部ヨコナデで、端部は外向きの面となる。胴部上半丁寧なヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半ヘラナデ。奈良時代初めの遺物が混入。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　白雲母粗～細粒少、白粗～細粒多、砂・赤粗～細粒微 やや硬質	中央南東部床上 18cm 口～胴上半 1/3 周 SD-8 一括グリッド 内 41-18、SI4-9
16 礫	長　9.5 幅　8.1 厚　2.95	河原石。特に加工の痕跡はないが、表面は平滑であり、磨石の可能性がある。重量 318.7g。	2.5Y4/2　暗灰黄 やや粗い 安山岩	西部床上 21cmで斜位 完形 22

GN1 区 SI-5（第 22 ～ 25 図、写真図版 6 ～ 7・114）

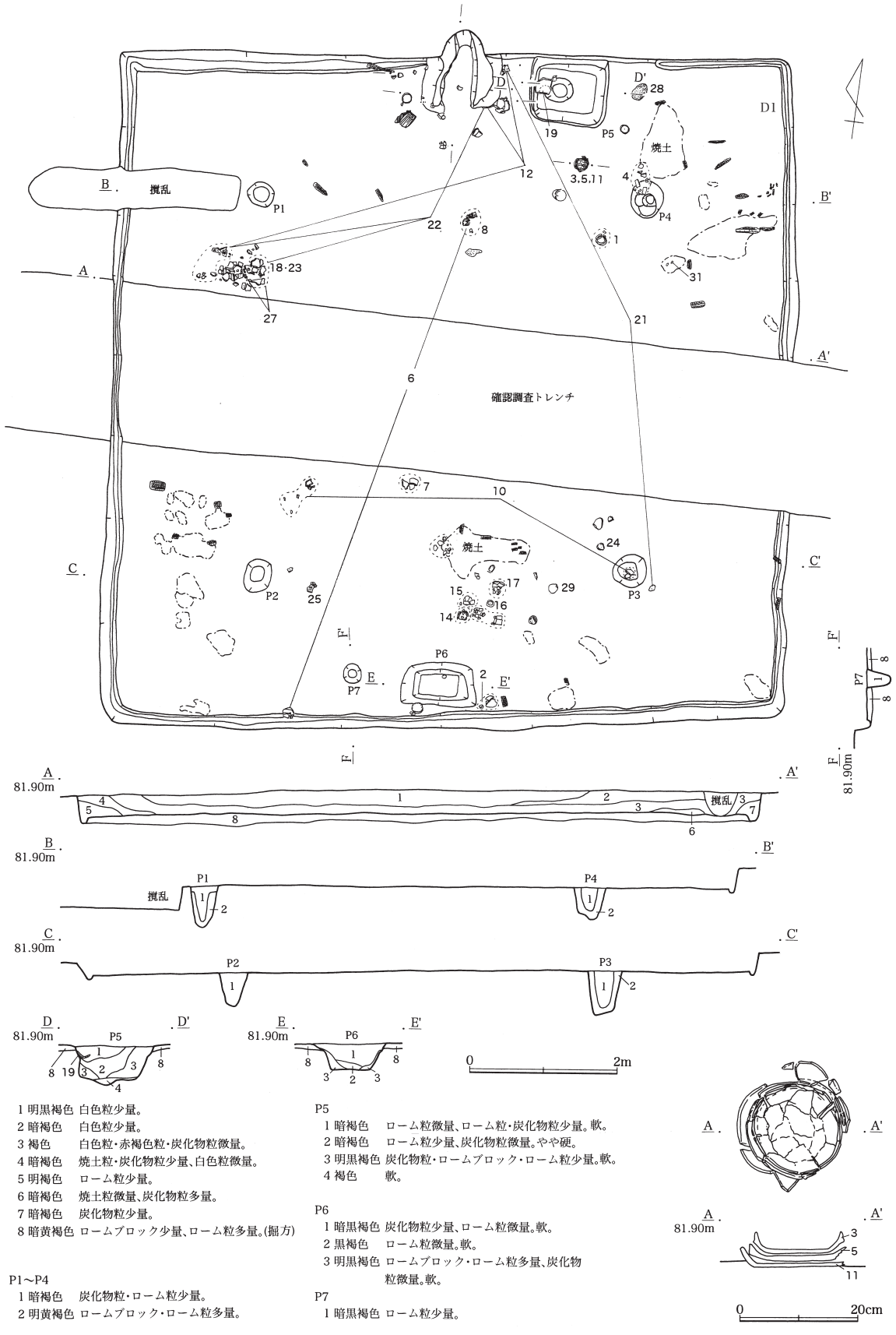
［**位置**］GN1 区の微高地中央部、40.5-18.5・19.0 と 41.0-18.5・19.0 グリッドにある。同じく古墳後期の SI-4 が北東にあり、西 2m に奈良時代の SI-6 がある。重複する遺構はない。北壁際中央西寄りにある倒木痕（推定）を切る。北西の一部が撹乱を受け、中央部は東西方向の確認調査トレンチで床面下まで切られる。

［**規模と形状**］東西 9.29m ×南北 9.48m の方形で、中軸線は N-7°-W。壁は直線的に外傾し、残存高 0.18 ～ 0.30m。掘方は床面から深さ 4 ～ 18cm で底に凹凸があり、ローム粒・塊の多い８層でほぼ全体を貼床する。

主柱穴は 4 本（P1 ～ P4）。P1 は径 37 × 31 ×深さ 59cm、P2 は径 48 × 37 ×深さ 47cm、P3 は径 48 × 46 ×深さ 66cm、P4 は径 51 × 46 ×深さ 44cm。柱間は P1-P4 間 5.27m、P2-P3 間 5.03m、P1-P2 間 5.15cm、P4-P3 間 5.05m でほぼ等しい。

掘方底や確認トレンチ底で P9 ～ P36 を確認した。P15・P17・P22 は柱穴２本の重複と考えられる。P9 ～ P36 の多くは用途不明。間仕切溝に伴う P28・29・35・33 は、P1 ～ 4 より 10cm 以上浅いので補助柱穴の可能性もある。入口ピットや貯蔵穴も２基あるので、P28・29・35・33 を旧主柱穴と推定することもできるが、その場合は６本主柱穴のうち北西柱穴と南東柱穴が確認できないことになる。柱間は P35-P29 間 5.92m、P35-P33 間 2.20m、P28-P29 間 2.66cm。

P9 は径 30 × 25 ×深さ（以下 P36 まですべて掘方底面からの深さ）14cm、P10 は径 27 × 23 ×深さ 10cm、P11 は径 47 × 39 ×深さ 25cm、P12 は径 29 × 26 ×深さ 30cm、P13 は径 27 × 23 ×深さ 13cm、P14 は径 29 × 21 ×深さ 18cm、P15a は径 29 × 22 ×深さ 27cm、P15b は径 26 × 24 ×深さ 20cm、P16 は径 20 × 19 ×深さ 14cm、P17a は径 22 × 17 ×深さ 13cm、P17b は径 26 × 19 ×深さ 14cm、P18 は径 25 × 20 ×深さ 9cm、P19 は径 26 × 23 ×深さ 12cm、P20 は径 27 × 24 ×深さ 23cm、P21 は径 29 × 25 ×深さ 16cm、P22a は径 28 × 21 ×深さ 22cm、P22b は径 31 × 21 ×



1 明黒褐色 白色粒少量。
2 暗褐色　白色粒少量。
3 褐色　白色粒・赤褐色粒・炭化物粒微量。
4 暗褐色　焼土粒・炭化物粒少量、白色粒微量。
5 明褐色　ローム粒少量。
6 暗褐色　焼土粒微量、炭化物粒多量。
7 暗褐色　炭化物粒少量。
8 暗黄褐色 ロームブロック少量、ローム粒多量。(掘方)

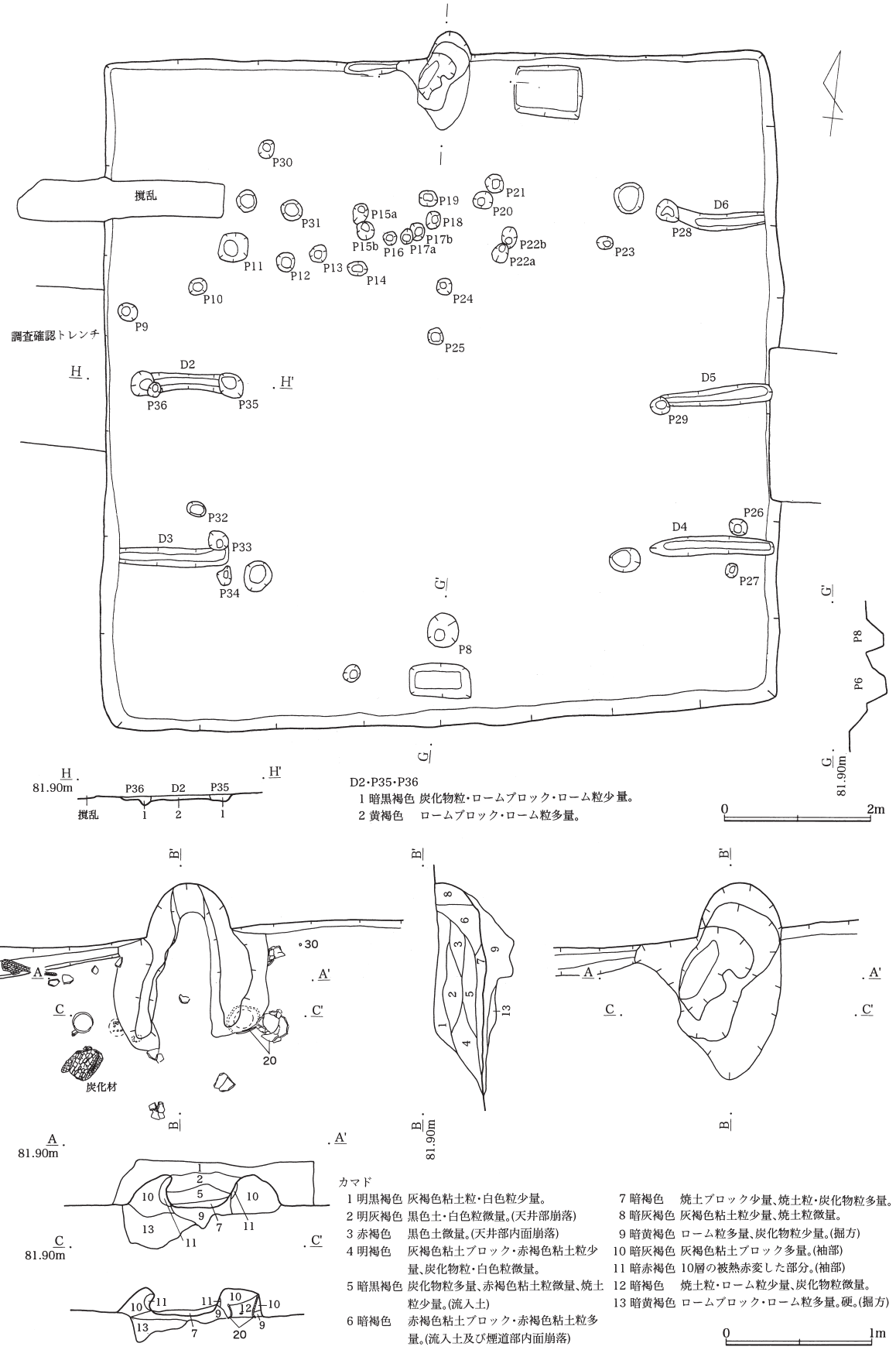
P1～P4
1 暗褐色　炭化物粒・ローム粒少量。
2 明黄褐色 ロームブロック・ローム粒多量。

P5
1 暗褐色　ローム粒微量、ローム粒・炭化物粒少量。軟。
2 暗褐色　ローム粒少量、炭化物粒微量。やや硬。
3 明黒褐色 炭化物粒・ロームブロック・ローム粒少量。軟。
4 褐色　軟。

P6
1 暗黒褐色 炭化物粒少量、ローム粒微量。軟。
2 黒褐色　ローム粒微量。軟。
3 明黒褐色 ロームブロック・ローム粒多量、炭化物粒微量。軟。

P7
1 暗黒褐色 ローム粒少量。

第 22 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-5（1）　遺構



第 23 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-5（2）　遺構

深さ 13cm、P23 は径 23 × 18 ×深さ 13cm、P24 は径 24 × 23 ×深さ 21cm、P25 は径 24 × 23 ×深さ 21cm、P26 は径 27 × 22 ×深さ 13cm、P27 は径 20 × 17 ×深さ 11cm、P28 は径 35 × 29 ×深さ 19cm、P29 は径 28 × 25 ×深さ 11cm、P30 は径 27 × 23 ×深さ 29cm、P31 は径 32 × 28 ×深さ 11cm、P32 は径 26 × 22 ×深さ 26cm、P33 は径 29 × 27 ×深さ 22cm、P34 は径 28 × 22 ×深さ 16cm、P35 は径 41 × 33 ×深さ 11cm、P36 は径 43 × 33 ×深さ 14cm。

円形柱穴状の入口ピット P7 と P8 が南壁際にある。P7 は床で確認し、径 29 × 25 ×深さ 38cm。P8 は掘方底で確認し、径 48 × 44 ×掘方底から深さ 24cm の底面がやや南西に寄る円形で、覆土は不明。カマドと貯蔵穴がある北壁中央以外を全周する壁溝 D1 は、断面「U」字状で床面から深さ 6 ～ 10cm。D2 ～ D6 の間仕切溝 5 本を掘方底で確認した。D4 以外は旧主柱穴に付随する位置。東西の各溝が相対するので、P1 西側の撹乱部に D6 と対応する溝を想定できる。断面「U」字状で長さ 98 ～ 169 ×幅 17 ～ 27cm、深さは掘方底から 9 ～ 12cm、床面から最大 14cm。

貯蔵穴は P5 と P6 の 2 基とも東西軸の長方形で、一方を埋め戻したような状況はない。P5 は 130 × 86 ×深さ 56cm。平坦な長方形底面の西部に、径 34cm･底面から深さ 6cm の丸い窪みがある。壁は直線的で、北西部は垂直気味、南東部はやや外傾する。床面下 5 ～ 10cm で北・西側に平坦面を持ち、南・東側もここで傾斜を緩くしてから短く直線的に床に至る。覆土各層に炭を含み、カマドに近いのに焼土はない。P5 周囲の貼床は他よりローム塊が多くてやや高いが、その範囲は不明確。P6 は南壁とわずかにずれる東西軸で 106 × 58 ×深さ 47cm。底面は平坦な長方形で壁は直線的に外傾した後、床下 10 ～ 13cm で緩く開く。東西両辺は傾斜変化部付近でわずかな平坦面がある。覆土 3 層にローム塊が多く、 1 ・ 3 層に炭を含む。

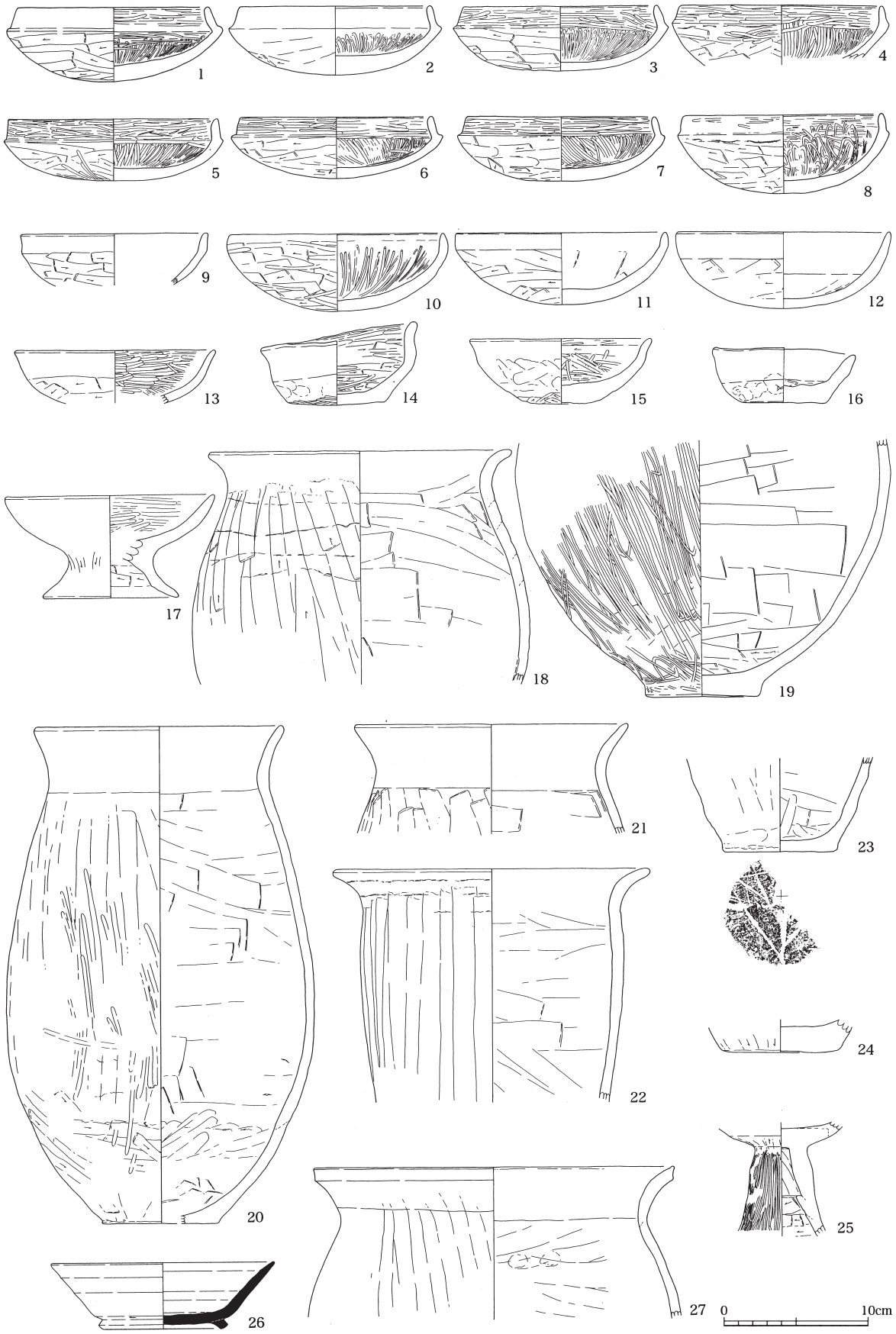
［カマド］ 北壁際中央にある。天井部は崩れるが、比較的良く残る。袖幅 94 ×長 95 cm。西袖下部が深くなる掘方を埋戻した 13 層の上に、粘土（10・11 層）で袖を構築する。火床はローム粒の多い 9 層上面で、竪穴床面からわずかに下がる。燃焼部には、天井内面が焼土化した 3 層、天井の粘土塊を含む 4 層、天井部の崩れた灰褐色粘土主体の 2 層などが堆積する。煙道は北壁を約 25cm「U」字状に掘り、 6 ・ 8 層が流入する。火床から煙道へ屈折して上がり、煙道先端は垂直。

［埋土とテフラ］ 自然埋没と思われる。壁際に炭・焼土の多い 3 ・ 4 ・ 6 層があり、焼土・炭化材の集中部を図示した。これらの下にローム主体の 5 層や炭を少量含む 7 層がある。 1 ～ 3 層中の白色土粒が火山灰かどうかは未確認。

［遺物出土状況］ 主柱穴に囲まれた範囲やカマド周辺、入口ピット P6 を含む縦長の範囲に比較的多く、東西両壁際で少ない。平面図で完形に近い土師器杯 6 点があるが、調査中に盗難され図示できない（取上番号 4・5・7・8・39・53）。

［出土遺物］ 量が多い。杯は図示以外に半球状で直立口縁と杯身模倣形の杯がそれぞれ数点ある。高杯は短脚で、図化品のほかに 2 片ある。甕は図化以外に底部 3 個体、口縁部 2 個体がある。破片は甕主体で、個体は杯（特に杯身模倣形）が多い。図化以外の 823 片（6,577g）の内訳は、杯 123 片（581g）、高杯 38 片（198g）、甕壺類 657 片（5,793g）、須恵器 5 片（5g）。粘板岩製臼玉は 4 区 SI-7 などにある。

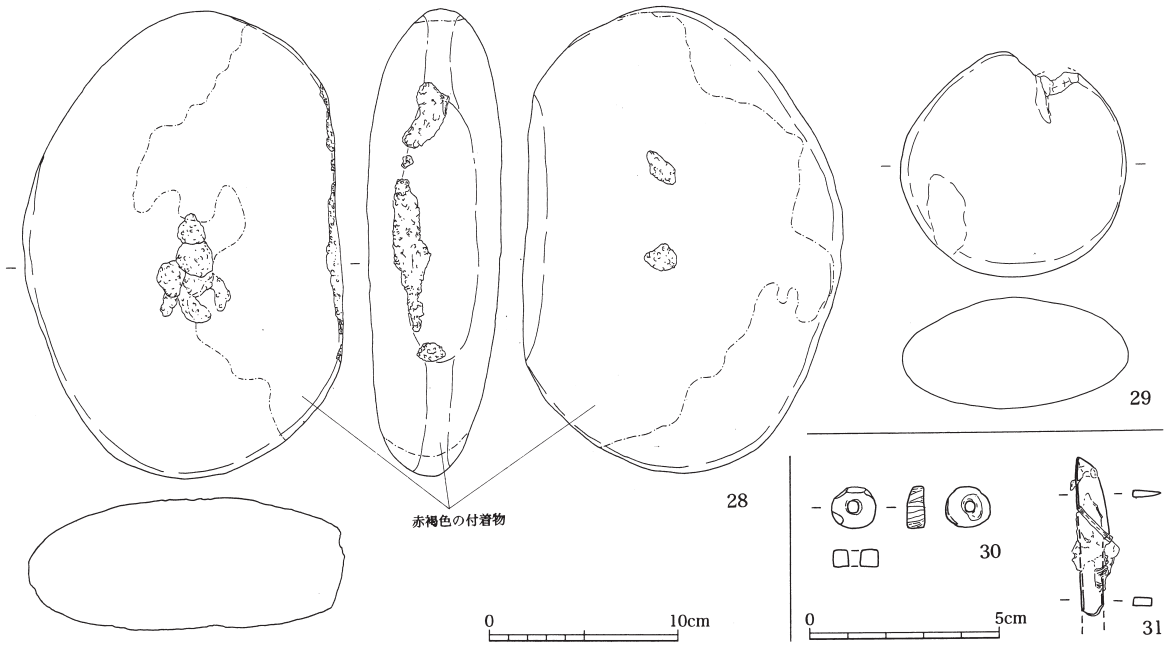
他時期の混入遺物は、奈良時代や古墳中期の土器がある。25 は SI-1・2 などから混入した古墳中期中～後葉の高杯。26・27 は本建物よりも新しく、奈良時代初頭の須恵器杯（26）は「SD-8 No.1」と注記のある破片に接合した。奈良時代の SI-6 から古墳後期の SI-4・5 跡地に破片が混入した後に、SI-4 から SD-8 へ混入した遺物であろうか。27 は胎土中の雲母を明確に確認できないが、形状は常総型甕に類似する。常総型甕は茨城県域からの搬入品で、本遺跡 GN1 区 SI-4 に混入した遺物にも見られる（第 21 図 14・15）。この地域に常総型甕が搬入されるのは古墳時代終末期からであり、本書掲載の権現山遺跡では 4 区 SI-24 に例がある（第 136 図 26）。



第 24 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-5（3）　遺物

第 7 表　杉村遺跡 GN1 区 SI-5　出土遺物

番号 種類 材質	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　13.4 高　5.2 最大　15.0 重　344.5	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ。内面口縁～底部ヨコナデのち体～底部放射状のやや密なミガキのち口縁～体部上端横方向の疎らなミガキ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　砂礫微、白・透明細～微粒少 硬質	中央北東部床面直上で斜位 完形 9
2 土師器 杯	口　復 13.4 高　4.8 最大　14.8	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリのちナデ。内面口縁～底部ヨコナデのち体～底部放射状のミガキ。内外面全体漆仕上げ。	7.5YR8/8　黄橙 やや粗い　砂・黒・透明・白細粒多 硬質	南壁際中央床上 2cm で逆位 口～体 3/4 周、底完存 14
3 土師器 杯	口　13.6 高　4.5 最大　15.0	外面口縁部ヨコナデのち疎らな横方向のミガキ、体～底部ケズリで、体部は丁寧に施される。内面口縁～底部ヨコナデのち体～底部放射状の密なミガキのち口縁部密な横方向のミガキ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げと見られるが、残存するのはわずか。	2.5YR6/6　橙 緻密　赤・白・砂粗～細粒微、白・透明微粒少 硬質	中央北東部床上 1cm で正位 ほぼ完形 1
4 土師器 杯	口　14.0 高　残 4.2 最大　15.0	外面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ､体部ケズリのちわずかに横方向のミガキ。口縁部下端の稜はややなだらか。内面口縁～体部ヨコナデのち密なミガキ。ミガキは体部縦方向のち口縁部横方向であり、体部のミガキは 10 ～ 20 本程度の一単位ごとに、同一方向に施される。内面黒色処理。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒少、白細粒微、透明微粒多 やや硬質	P4 周辺床上 3cm 口～体 2/3 周 10
5 土師器 杯	口　14.6 高　4.3 最大　15.2	外面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ、体～底部ケズリのちわずかに多方向のミガキ。内面口縁～底部ヨコナデのち体～底部放射状の密なミガキのち口縁部横方向の密なミガキ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。	7.5YR7/6　橙 緻密　赤・白粗～細粒微､白微粒少 硬質	中央北東部床上 4cm で正位 ほぼ完形 2
6 土師器 杯	口　復 13.4 高　4.3 最大　14.6	外面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ、体～底部ケズリ。内面口縁～底部ヨコナデのち密なミガキ。内面のミガキは底部一方向のち体部縦ないし斜め方向のち口縁部横方向。外面口縁部・内面全体漆仕上げ。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤礫・白細粒微、赤粗～細粒少 やや軟質	南西壁際床上 3cm 口～体 2/3 周、底完存 12、13
7 土師器 杯	口　復 13.2 高　4.5 最大　14.4	外面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ、体～底部ケズリのちナデ。内面口縁～底部ヨコナデのち密なミガキ。内面のミガキは体部やや斜め方向のち口縁部横方向・底部一方向。外面口縁部・内面全体漆仕上げ。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒少、白・砂粗～細粒微、透明微粒多 硬質	中央南部床上 4cm 口～体 2/3 周、底ほぼ完存 18
8 土師器 杯	口　復 14.0 高　5.4 最大　復 14.6	外面口縁部ヨコナデのちわずかに横方向のミガキ、体～底部ケズリで、体部に紐積痕残る。内面口縁～体部ヨコナデ・体～底部ヘラナデのち口縁～底部ミガキ。内面ミガキは、口縁部横方向のち体～底部放射状に近い斜位のもの。内面黒色処理。	2.5YR7/8　橙 やや緻密　赤・白粗～細粒少、透明微粒多 やや硬質	中央北部床上 4cm 口～体 1/2 周、底ほぼ完存 12、覆土第 2 層
9 土師器 杯	口　復 13.0 高　残 3.6	外面口縁部ヨコナデのち体部丁寧なケズリ。内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁部・内面全体漆仕上げ。	5YR7/6　橙 緻密　赤粗～細粒少 やや軟質	P1 覆土 口～体 1/3 周 P1
10 土師器 杯	口　復 15.0 高　5.4	外面口縁部ヨコナデのち体～底部ケズリのち体～底部わずかにミガキ。内面口縁～底部ヨコナデのち口縁～底部放射状のミガキ。	5YR7/6　橙 やや緻密　透明・白・砂粗粒・赤細粒微、透明・白・砂細粒少 硬質	P3 内底上 7cm 口～底 2/3 周 27、34、覆土第 2 層
11 土師器 杯	口　14.8 高　5.0	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ。内面口縁～底部ヘラナデのちヨコナデ。内面口縁～底部漆仕上げ。外面体部に帯状に黒色物質付着。	2.5YR7/8　橙 やや粗い　白・黒・赤粗粒微、白・黒細粒多 硬質	中央北東部床上 3cm ほぼ完形 3
12 土師器 杯	口　復 15.0 高　5.3	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデのちナデ。外面口縁部・内面全体漆仕上げと見られるが、残存する漆はわずか。	2.5Y7/3　浅黄 緻密　白細粒少、赤細粒微 やや硬質	中央西部床上 29cm 口～底 1/3 周 40、42、56、P1 南 1m 破砕甕群の覆土中
13 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 3.7	外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリ。内面口縁～体部ヨコナデのち横方向の密なミガキ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　赤・黒・透明粗～細粒微 やや硬質	口～体 1/6 周
14 土師器 小形土器	口　11.0 高　5.8 底　6.6	鉢形で、全体に歪みあり。外面口縁部ヨコナデ、体部軽いナデ、底部ケズリのちミガキ。底部は平底だが、荒い調整のため凹凸あり。内面口縁部ヨコナデのち体～底部ケズリのち口縁～底部疎らなミガキ。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　赤粗～細粒少、白・透明微粒多 硬質	中央南部床上 6cm ほぼ完形 16
15 土師器 小形土器	口　復 12.6 高　4.5 底　4.0	胎土・調整とも 14 に類似する。外面口縁部ヨコナデ､体部軽いナデ。底部はケズリにより丸味を持つ平底に整形される。内面口縁部ヨコナデのち体～底部ケズリのち口縁～底部わずかにミガキ。	5YR7/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒少、透明・白微粒多 硬質	中央南部床上 4cm 口～体 1/5 周､底 2/3 周 19
16 土師器 小形土器	口　10.0 高　3.6 底　5.6	浅い鉢形で、全体に歪みあり。外面口縁部ヨコナデ、体部荒いナデで、指頭圧痕や紐積痕残る。底部ナデで、平底。内面体～底部ナデのち口縁～体部ヨコナデ。	5YR7/6　橙 緻密　赤粗粒微、白微粒少 硬質	中央南部床上 4cm 完形 15
17 土師器 高杯	口　復 14.6 高　7.1 脚　復 9.4	短脚。外面杯部口縁部ヨコナデ、体部表面が細かく剝離するため、不明。脚部上半丁寧な縦方向のケズリ、下半表面剝落のため不明。内面杯部口縁～底部横方向の密なミガキ。脚部上半丁寧なケズリ、下半ヨコナデ。外面口縁～体部、内面全体漆仕上げと見られるが、内面の漆はごくわずかしか残っていない。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　赤・砂粗～細粒微 やや硬質	中央南部床上 13cm 杯口～体 1/4 周、底～脚上半 3/4 周、脚下半一部 21
18 土師器 甕	口　21.1 高　残 16.2 最大　復 23.4	外面口縁部ヨコナデのち胴部上半ケズリで、胴部上半には紐積痕残る。内面口縁部ヨコナデのち胴部上半ヘラナデ。	5YR6/6　橙 やや粗い　白・明褐礫微、白・砂・明褐粗～細粒多 やや硬質	中央西部床上 22cm 口一部欠､胴上半 1/2 周 55､P1 南 1 m 破砕甕群の覆土中
19 土師器 壺	高　残 17.7 底　7.8	外面胴部下半～底部ナデのちミガキ。底部突出した平底。内面胴部下半～底部ヘラナデ。	10YR6/4　にぶい黄橙 緻密　白・灰色礫微、白・黒・透明細粒少 硬質	P5 内底上 28cm､正位 胴下半 1/2 周、底完存 29



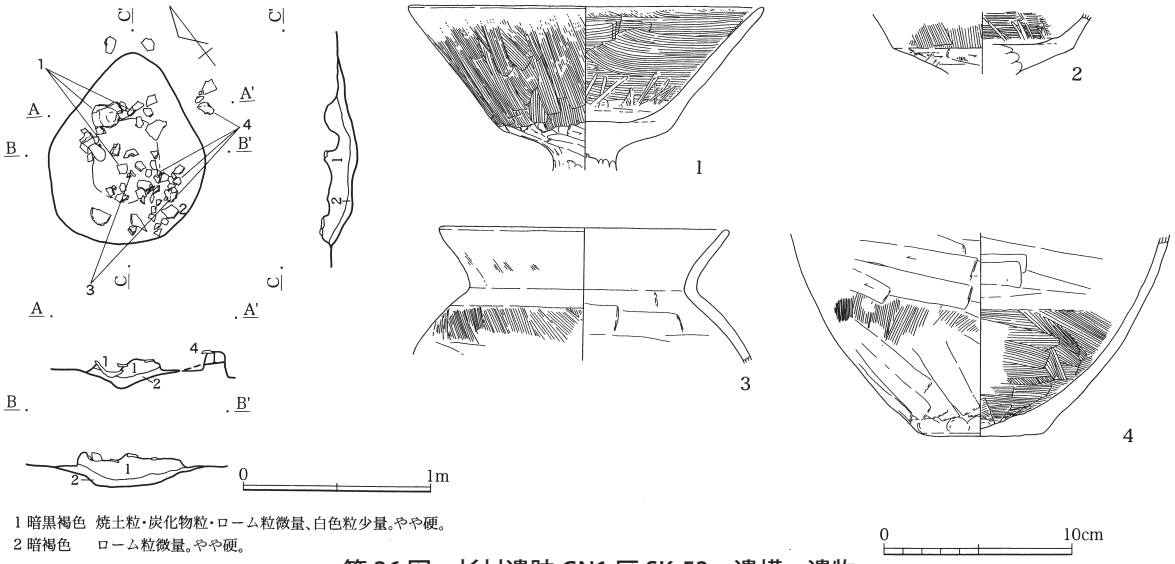
第 25 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-5（4）　遺物

20 土師器 甕	口　復 17.4 高　復 34.5 底　復 8.0 最大　復 21.4	薄手。口縁～胴部上半と胴部下半～底部に二分した状態。両者は接合しないが、全体の形状から器高を復原した。外面口縁部ヨコナデ、胴部ナデのち下半ケズリで、部分的にミガキ状の調整が施される。底部ケズリで、平底。内面胴～底部ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。胴部下半には積み上げ休止による接合面があり、荒いナデの痕跡や器厚の変化として残る。外面口縁～底部一部粘土付着。外面胴部中位一部煤付着。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや粗い　白・砂粗～細粒少、赤・透明粗～細粒微 硬質	カマド右袖構築材 床上 2㎝で逆位 口～底 1/2 周 41、42
21 土師器 甕	口　復 19.0 高　残 7.6	外面胴部上端ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。内面胴部上端ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白・砂・赤粗粒微、透明・白微粒多 硬質	カマド東床上 2㎝で横位 口 1/2 周、胴上端 1/4 周 28、40
22 土師器 甕	口　復 22.0 高　残 16.2	外面口縁部ヨコナデのち体部ケズリ。口縁部に紐積痕顕著に残る。内面口縁部ヨコナデのち体部ヘラナデ。内外面とも調整は比較的丁寧。	5YR7/6　橙 やや粗い　白礫・赤粗～細粒微、白・透明・砂粗～細粒多 硬質	中央西部床上 32㎝ 口～胴上半 1/3 周 42、50、54、55、P1 南 1m 破砕甕群の覆土中
23 土師器 甕	高　残 6.5 底　復 8.0	外面胴部下半軽いナデ、底部２回の木葉痕で、平底。内面胴部下半～底部ヘラナデのちナデ。	5YR6/6　橙 やや粗い　白・砂・金雲母粗～細粒少、白礫微 硬質	中央西部床上 22㎝ 胴下半 1/6 周、底 1/2 周 55
24 土師器 甕	高　残 2.3 底　8.3	外面胴部下端ケズリ、底部ナデで、突出する平底。内面底部ヘラナデ。	5YR7/6　橙 やや粗い　砂・白粗～細粒少、赤粗～細粒・砂礫微 硬質	中央南東部床上 4㎝ 底ほぼ完存 26
25 土師器 高杯	高　残 7.9	中期の遺物の混入。外面杯部体部ナデで、体部下端は稜となる。底部ケズリ。脚部ケズリのち密なミガキ。内面杯部底部ミガキと見られるが、表面剝落のため不詳。脚部上半縦方向のナデ、中位ケズリで、紐積痕残る。杯部は、円盤状の底部に粘土を貼って体部以上の部分を作るもの。	2.5YR6/8　橙 やや粗い　赤粗～細粒・白・砂粗粒微、白・砂細粒多 硬質	中央南西部床上 4㎝、横位 杯底 1/2 周、脚上半ほぼ完存 6
26 須恵器 有台杯	口　復 15.6 高　4.6 台　9.0	外面口縁～体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリのち高台貼付け。ケズリは反時計方向。内面口縁～底部ロクロナデのち底部にロクロ目を消すためと見られるナデ。口縁部に幅 4.5㎝、端部から 0.6㎝の片口状の欠損あり。磨滅の状態から、使用時に欠損していた可能性あり。益子窯産。SI-6 などからの混入と見られる。遺構間接合。	5Y5/2　灰オリーブ やや緻密　白礫微、白・黒細粒少 硬質	破砕甕群覆土 口～体 3/4 周、底ほぼ完存 SD-8-1、P1 南破砕甕群の覆土中
27 土師器 甕	口　復 25.0 高　残 10.6	外面胴部上半ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。口縁端部は強いナデが施され、やや下向きの面となる。内面胴部上半ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。SI-6 などからの混入と見られる遺物。	5YR6/6　橙 やや粗い　白・砂粗～細粒多 硬質	中央西部床上 26㎝ 口～胴上半 1/4 周 55、57
28 石器 台石	長　24.6 幅　16.9 厚　6.9 重　2880.7	偏平、平面楕円形の河原石を素材とする。表裏面中央に敲打痕あり。右側面はややくぼんだ研磨面で、研磨により形状は大きく変形する。研磨面の縁辺にも敲打痕あり。研磨面を中心に、赤褐色物質が多量に付着する。表側では、表面の細かな凹凸内に白色物質が入り込んでいる。	2.5Y5/1　黄灰 粗い 安山岩質溶岩	中央北東部床面直上 完形 36
29 礫	長　11.9 幅　12.0 厚　5.9	河原石。特に加工の痕跡はないが、磨石の可能性はある。重量 940.5g。	5Y6/1　灰 やや粗い 安山岩	中央南部床上 7㎝ 一部欠 31
30 石製模造品 臼玉	径　10.88～11.73 厚　0.47 重　0.9	表裏は節理に沿った剝離面のままで、研磨されない。側面は穿孔と同方向の切削加工工具痕が残る。表側からの穿孔と見られ、孔径は表側 3.12㎜、裏側 2.90㎜で、裏側には孔周囲に穿孔時のものと見られる剝離あり。	N3/　暗灰 緻密 粘板岩	カマド東床面直上 完形 52
31 鉄製品 鉄鏃	長　残 4.2 幅　0.8 厚　0.2 重　残 2.4	長頸鏃。鏃身関部周辺は銹に覆われているが、X 線写真の観察から、やや鈍角な関部となる片刃箭式とみられる。鏃身部は棟の方向にやや曲がっている。表面の一部には、植物質が銹着する。		焼土下床面直上 鏃身～篦被部完存 60

第 4 節　古墳時代の土坑

GN1 区 SK-53（第 26 図、写真図版 7・8）

GN1 区中央の微高地上、41.0-17.5 グリッド。重複遺構はない。不整楕円形だが、立ち上がりが緩いので平面図ほど不整な印象はない。1.01 × 0.83m、深さ 0.12m（確認面上に残る覆土厚を含め 0.20m）。中軸は N-38° -E。自然埋没状で上層に焼土・炭と白色粒（テフラ？）を含む。遺物は底付近にもあるが、底上 8 ～ 12cm に多い。土師器 53 片・計 836g の内訳は甕 29 片・600g で 2 ～ 3 個、中・小形壺か杯 9 片・63g で中・小形壺各 1 個？、高杯 15 片・173g で約 4 個体分。高杯はすべてハケ調整で、甕もハケを多用する。



1 暗黒褐色　焼土粒・炭化物粒・ローム粒微量、白色粒少量。やや硬。
2 暗褐色　　ローム粒微量。やや硬。

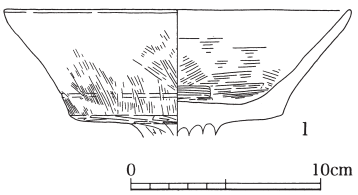
第 26 図　杉村遺跡 GN1 区 SK-53　遺構・遺物

第 8 表　杉村遺跡 GN1 区 SK-53　出土遺物

番号 種類 材質	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高杯	口　復 18.8 高　残 8.7	外面杯部口縁～体部 7 本 /1cmのハケのち口縁部軽いヨコナデ。底部はケズリで、体部下端の稜付近には、指頭圧痕が残る。脚部上端ミガキ。内面杯部口縁～体部 7 本 /1cmのハケのち口縁部軽いヨコナデ・底部ナデのち体～底部疎らなミガキ。脚部上端ナデ。杯部は円盤状の底部に体部以上を貼り付けて作出される。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　白・赤粗～細粒少、砂粗～細粒微 硬質	北部床上 6cm、正位 杯口～体 1/2 周、底完存 1、31、55
2 土師器 高杯	高　残 3.2	外面杯部体部 9 本 /1cmのハケ、底部 9 本 /1cmのハケのちケズリ。内面杯部体部 9 本 /1cmのハケのち底部ナデのち体～底部疎らなミガキ。杯部は円盤状の底部に体部以上を貼り付けて作出するもの。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや緻密　白粗粒微、白・黒・赤・透明細～微粒少 硬質	南部床上 13cm 杯体～底 1/3 周 3、埋土一括第 1 層
3 土師器 甕	口　復 15.4 高　残 7.0	外面胴部上半 8 本 /1cmのハケのち口縁部ヨコナデ・胴部上半ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半ヘラナデ。	7.5YR5/6　明褐 やや粗い　白粗～細粒少、透明・赤粗～細粒微 硬質	中央床上 11cm 口～胴上半 2/3 周 33、52、第 1 層、埋土一括
4 土師器 甕	高　残 10.7 底　復 6.4	外面胴部下半 8 本 /1cmのハケのち中位付近ケズリ・下半ナデ。底部ケズリで平底。内面胴部下半～底部 8 本 /1cmのハケのち中位付近ナデ・底部中央ナデ。胴部中位付近には積み上げ休止による接合面があると見られ、接合前の胴部下半内面がハケ調整と見られる。	10YR5/3　にぶい黄褐 やや緻密　白・砂粗粒・赤・透明細粒微、白細粒少 硬質	南東部床上 8cm 胴下半～底 1/4 周 25、28、52

第 5 節　遺構外出土の古墳時代遺物

確認調査で出土した高杯 1 点を図化した（第 27 図）。42-17 グリッド南縁で SI-1・2 付近から出土し、いずれかの建物に伴う可能性もある。GN1 区の表採品と確認調査出土品は土師器小破片で、表採などでは杯 3 片（11g）、高杯 5 片（136g）、壺甕類 33 片（172g）、計 41 片（319g）。確認調査では、杯 8 片（63g）、高杯 3 片（44g）、甑 10 片（62g）、壺甕類 87 片（958g）、計 108 片（1,127g）である。



第 27 図　杉村遺跡 GN1 区
遺構外の古墳時代遺物

第９表　杉村遺跡 GN1 区　遺構外出土遺物

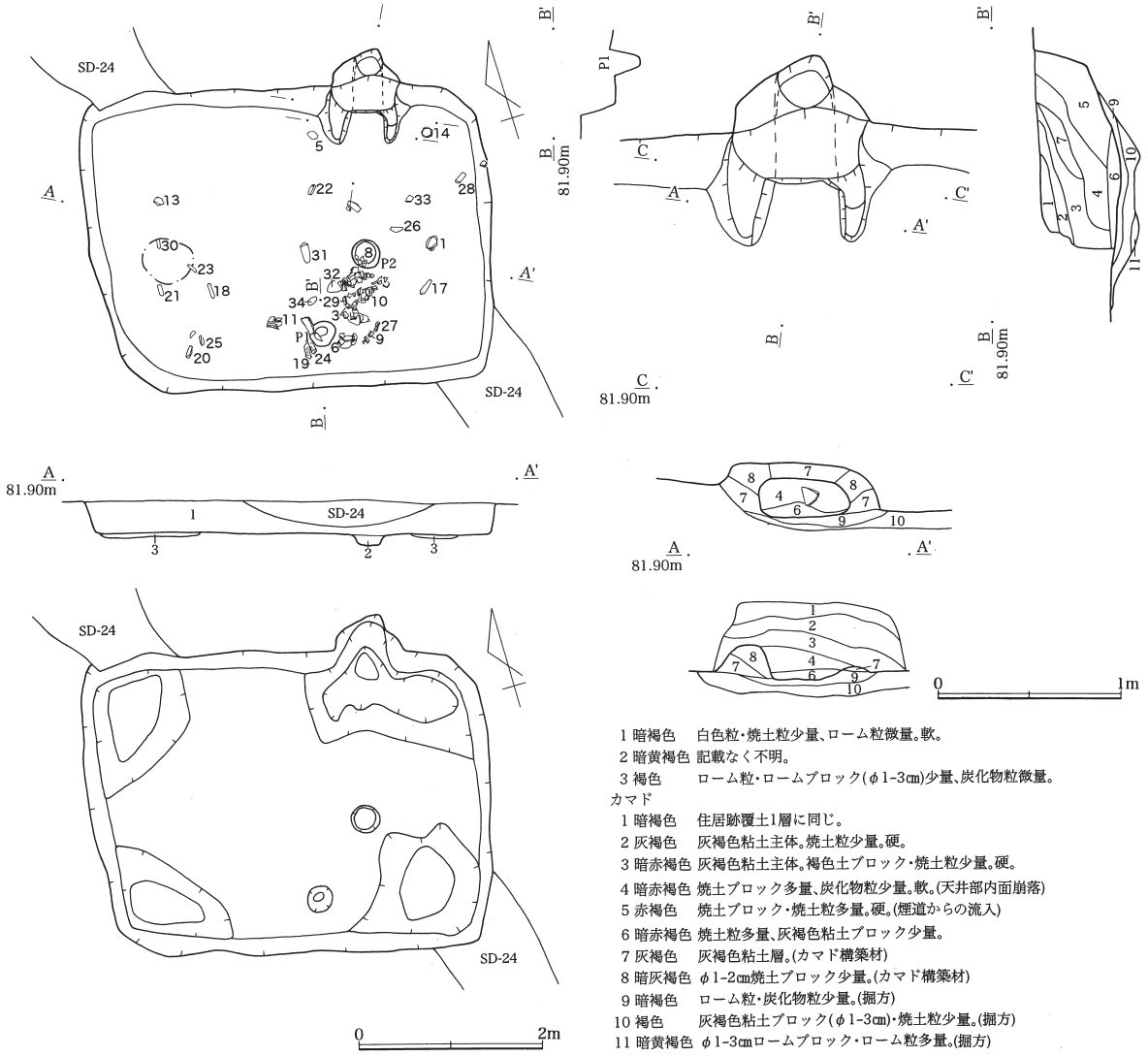
番号 種類 材質	大きさ (㎝・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高杯	口　復 18.2 高　残 6.6	外面杯部口縁～体部６本/1㎝のハケのちヨコナデ。体部下端の稜より 1㎝上には、ヨコナデによると見られる沈線状のわずかなくぼみあり。底部８本/1㎝のハケのち外周は周方向、中央寄りは縦方向のケズリ。内面杯部口縁～底部６本/1㎝のハケのち口縁～体部ヨコナデ、体～底部ナデで、底部外周のみ周方向のナデ。	5YR6/6　橙 やや粗い　砂・白礫・砂・赤粗～細粒微、白粗～細粒少 硬質	杯口 1/6 周、体～底一部欠 UT-TN-GN　TX42-17

第６節　奈良時代の竪穴建物跡

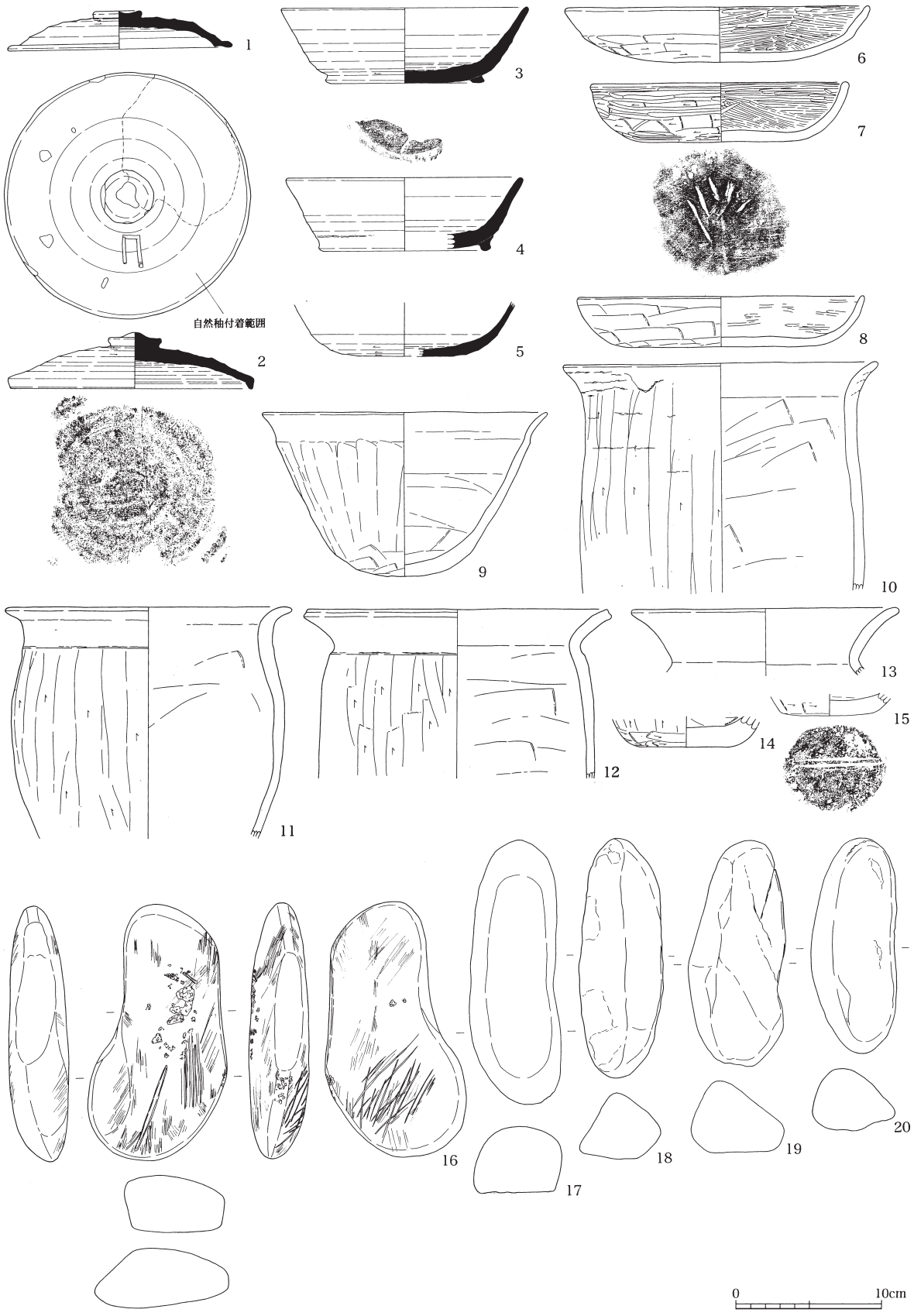
GN1 区 SI-6（第 28 ～ 30 図、写真図版 8 ～ 9・114）

[**位置**]南西低地に面する微高地平坦面縁辺の 40.5-18.0・18.5 グリッド所在。東 2m に古墳後期の SI-5 がある。北西から南東にかけて時期不明の SD-24 に切られるが、床面には達しない。

[**規模と形状**] 東西 4.40m、南北 3.26m の隅丸長方形で、南北の中軸線は N-16°-E。壁は直線的に外傾し、残存高 0.34 ～ 0.38m。床に緩い凹凸はあるが、傾斜せず、硬化部もない。西部床面直上に径約 50cm の範囲で焼土がある。掘方は四隅が深く、床からの深さは８～ 19cm で、ローム粒・塊を含む褐色の３層で貼床する。東西壁近くも４～ 5cm ほど薄く貼床する（断面図 A-A′）。これ以外は地山ロームをそのまま床面



第 28 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-6（1）　遺構



第 29 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-6（2）　遺物

とする。

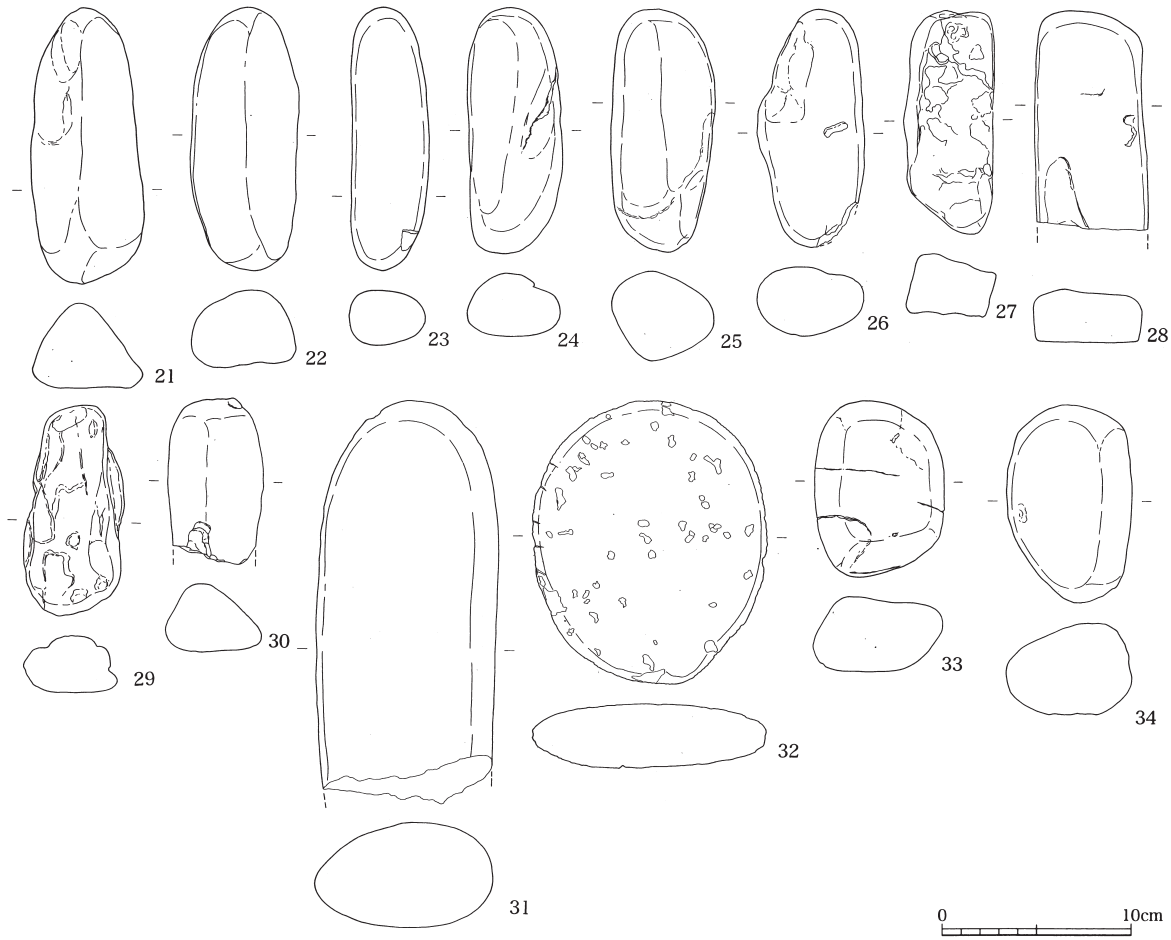
主柱穴は不明で、中央部東寄りにある P2 は径 30 × 28 ×深さ 14cm。南部にある入口ピット P1 は径 26 × 28 ×深さ 34cm の円形柱穴状で、覆土の特徴は不明。

［カマド］ 北壁の東部にある。天井部が崩れずに良く残る。東西袖幅 99cm、焚口から煙道先端まで 107cm。掘方を埋め戻した 9 ～ 11 層上に灰褐色粘土の 7・8 層で袖と天井を作る。火床は 9 層上面で、床面から緩く下がった凹面である。燃焼部には、天井部内面の焼土化した塊を含む 4 ・ 6 層が堆積する。煙道は北壁を「U」字状に約 40cm 掘り、 5 層が流入する。煙道奥壁は屈折して急に上がる。

［埋土とテフラ］ 焼土粒・白色粒を含む暗褐色土で、白色粒が火山灰かどうかは確認できていない。

［遺物出土状況］ 遺物は比較的多く、南半に集中する。床面直上の遺物はないが P1 周辺が最も低く、壁に近い遺物ほど大きく浮く。中央付近で完形の須恵器蓋が出土したが、盗難に遭い図示できない。編物石は一箇所に集中しない。奈良時代初頭の遺物は、SI-6 以外に SI-4・5 でも出土した（第 21 図 12 ～ 15、第 24 図 26・27）。SI-6 の時期に SI-5・6 跡地に遺物を排棄・遺棄したものだろうか。

［出土遺物］ 茨城県新治窯産の須恵器蓋（1）にかえりを残す、奈良時代初めころの遺物。蓋上面の目立つ位置にヘラ記号を入れるのは、益子窯産の奈良時代須恵器蓋によく見られる特徴である（2）。図化以外の遺物 251 片（2,320g）の内訳は、杯 32 片（284g）、高杯 5 片（39g）、甕壺類 200 片（1,907g）、粘土塊 1 点（11g）、須恵器 13 片（79g）。土師器・須恵器の杯が少量混じる。土師器盤は、図化した 6 ～ 8 以外の破片はない。9 は古墳時代終末期まで一般的に使われた土師器小形甑と類似した器形の鉢である。図化以外に土師器甕底部は 3 個体、須恵器有台杯は 1 片がある。



第 30 図　杉村遺跡 GN1 区 SI-6（3） 遺物

第 10 表　杉村遺跡 GN1 区 SI-6　出土遺物

番号 種類 材質	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋	口　復 15.4 高　残 2.6	外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。つまみは高さ 0.5cm、径 3.4cmで偏平。内面口縁～天井部ロクロナデ。新治窯産。	5Y7/1　灰白 やや緻密　白・半透明粗～細粒・白雲母細～微粒少 やや硬質	口～体 1/3 周、天井ほぼ完存 覆土一括
2 須恵器 蓋	口　16.8 高　3.8	外面口縁～体部ロクロナデ、天井部回転ケズリ。つまみは高さ 0.9cm、径 3.6cm。体部に「コ」の字形の線刻あり。外面の 3/4 ほどには自然釉が付着。また径 0.3 ～ 2cmほどの不定形の窯壁のカスが多数熔着しており、これを除去しようとしたためか、器面が浅く剝落する部分もある。内面口縁～天井部ロクロナデで、天井には布の圧痕が残る。布目はハケ状の平行線で、7 本 /1cm。益子窯産か。	5Y6/1　灰 やや緻密　白礫～粗粒・黒細～微粒微 硬質	中央東部床上 26cm、逆位 ほぼ完形 5、SI-5 覆土
3 須恵器 有台杯	口　復 16.8 高　5.2 台　10.8	外面口縁～体部ロクロナデ､底部反時計方向の回転ケズリのち高台貼付け。底部は丸味を持ち、底部中央と高台下端はほぼ同じ高さとなる。内面口縁～底部ロクロナデ。三毳窯産。	5Y7/1　灰白 やや緻密　白・乳白礫～粗粒微、白・乳白細～微粒少 やや硬質	中央南東部床上 14cm 口～体 1/5 周、底部ほぼ完存 8、9、覆土一括
4 須恵器 有台杯	口　復 16.2 高　復 5.0 台　復 11.6	外面口縁～体部ロクロナデ、底部反時計方向の回転ケズリのち高台貼付。内面口縁～体部ロクロナデ。底部には体部のロクロナデ以前のものと見られる布圧痕あり。布目はハケ状の平行線で、6 本 /1cm。三毳窯産。	5Y8/2　灰白 やや緻密　白細～微粒少、白礫～粗粒微 やや硬質	中央南東部床上 24cm 口～体 1/3 周、底一部 8、一括、覆土一括
5 須恵器 杯	高　残 3.7 底　8.4	外面体部ロクロナデのち体部下端～底部回転ケズリ。底部は丸味を持つ平底。内面体～底部ロクロナデ。底部のロクロ目はやや顕著で、ロクロナデ後、中央の径 4cmの内側には、少なくとも 3 回の同一方向へのナデあり。	2.5GY5/1　オリーブ灰 やや緻密　白細～微粒少、白・黒粗粒微 硬質	カマド西床上 31cm 体一部、底 3/4 周 1、3
6 土師器 盤	口　20.8 高　3.8	丸底だが、底部はなだらかに広く、正立の状態で安定する。外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ。内面口縁～体部ヨコナデのち横方向（6 角形状）のミガキ、底部一方向のミガキ。内面全体漆仕上げ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　透明細～微粒多、白細～微粒・赤細粒少 硬質	中央南部床上 12cm 口～体 3/4 周、底完存 10
7 土師器 盤	口　17.7 高　4.1 底　10.0	外面口縁部ヨコナデのち横方向の疎らなミガキで、端部は丸く肥厚する。体～底部ケズリのち疎らなミガキ。底部は平底で、中央にケズリ以前に施された 5 本のヘラ痕あり。内面口縁～体部ヨコナデのち横方向の密なミガキ。底部ナデのち一方向の密なミガキ。	2.5YR5/8　明赤褐 やや緻密　白・砂粗粒微、白・透明・赤細～微粒少 硬質	中央南部床上 6cm ほぼ完形 7、15、21
8 土師器 盤	口　復 19.6 高　3.4 底　復 14.0	外面口縁部ヨコナデのち体～底部ケズリ。内面口縁～体部横方向、底部一方向のミガキ。表面はクレーター状に剝落しており、特に内面で顕著。平底。	5YR5/8　明赤褐 やや緻密　白粗～細粒微、白・透明微粒・赤粗～細粒少 硬質	P2 内底上 1cm 口～底 1/4 周 40
9 土師器 鉢	口　19.4 高　11.3	胎土精良で､薄手な土器。丸底だが､底部付近が重いためか不安定ながら正立する。外面口縁部ヨコナデのち胴～底部ヘラナデ。内面口縁～胴部上半ヨコナデ、胴部下半～底部ヘラナデ。外面底部、内面胴～底部黒褐色。外面胴部クレーター状の剝落著しい。	5YR6/8　橙 緻密　白・赤粗～細粒微 やや硬質	ほぼ完形
10 土師器 甕	口　復 21.4 高　残 15.6	底部までの破片はあるが､砕けている部分が多く接合できず。外面胴部上半ケズリ､口縁部軽いヨコナデで、口縁部を中心に紐積痕残る。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半ヘラナデ。	7.5YR8/4　浅黄橙 粗い　砂粗粒多、赤・白粗粒少 硬質	中央南東部床上 10cm 口～胴上半 1/3 周 20
11 土師器 甕	口　復 19.6 高　残 15.7	外面胴部上半ケズリのち口縁部ヨコナデ。口縁部は直立したのち上半が外反する。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半ヘラナデと見られるが、内面は剝落している部分が多く、調整は明確ではない。胴部中位付近の内面にコゲ付着。	2.5YR5/8　明赤褐 粗い　砂粗～細粒多、赤・白・透明粗～細粒微 硬質	中央南部床上 26cm 口～胴上半 1/4 周 12、13、20
12 土師器 甕	口　復 21.0 高　残 11.5	外面胴部上半ケズリのち口縁部ヨコナデ。口縁端部は面取りされてやや中央がくぼむ平坦面となる。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半ヘラナデ。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　白・砂礫～粗粒微、砂・透明・赤・白細粒少 硬質	中央北西部床上 9cm 口～胴上半 1/5 周 18、カマド一括
13 土師器 甕	口　復 18.2 高　残 4.6	口縁部内外面ヨコナデ。内面には黒色物質付着。	7.5YR3/1　黒褐 やや粗い　砂礫・赤細粒微、白細粒少 硬質	中央北西部床上 9cm 口 1/4 周 18
14 土師器 甕	高　残 2.1 底　6.4	外面胴部下端～底部ケズリ、内面底部ヘラナデ。外面胴部下端～底部褐色、灰白色粘土付着。	10YR5/2　灰黄褐 やや粗い　透明・白・砂細～微粒多 硬質	北東隅床面 13cm 底ほぼ完存 2
15 土師器 甕	高　残 1.5 底　6.4	外面胴部下端～底部ケズリ。底部には、砥石に転用した結果と見られる 2 本の明確な条線状の擦痕がある。内面底部ナデのちケズリ。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや粗い　砂・透明・白細～微粒多、砂・白粗粒微 やや硬質	底完存
16 石器 磨石	長　17.5 幅　9.6 厚　4.0 重　927.2	河原石素材。表裏および右側縁の 3 面が研磨面で、右側縁が最も平滑。表側は中央に敲打痕、下半中央に沈線状の刻線があるほか、全体に縦ないし斜め方向の擦痕が残る。裏側は中央にわずかな敲打痕があり、下半中央には多数の刻線が集中し、全体に縦ないし斜め方向の擦痕がある。	5Y5/2　灰オリーブ 緻密 ホルンフェルス	完形
17 石器 編物石	長　18.1 幅　6.1 厚　4.5	河原石。特に加工の痕跡なし。表面の多くに酸化した鉄分と見られる赤褐色物質が付着する。重量 723.6g。	10YR6/6　明黄褐 やや粗い 礫岩	中央南東部床上 31cm 完形 23
18 石器 編物石	長　16.4 幅　5.8 厚　4.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 471.9g。	2.5Y6/1　黄灰 やや粗い 安山岩	中央南西部床上 10cm 完形 33
19 石器 編物石	長　15.5 幅　6.4 厚　4.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 567.3g。	7.5Y6/2　灰オリーブ やや粗い 礫岩	中央南部床上 29cm 完形 16
20 石器 編物石	長　14.7 幅　5.9 厚　4.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 459.2g。	2.5Y7/2　灰黄 粗い 礫岩	南西隅床上 31cm 完形 32
21 石器 編物石	長　14.6 幅　5.9 厚　4.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 534.3g。	7.5Y5/2　灰オリーブ やや粗い 礫岩	中央南西部床上 23cm 完形 35

22 石器 編物石	長　14.0 幅　5.6 厚　4.1	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 498.5g。	2.5Y6/4　にぶい黄 やや粗い 礫岩	中央北部床上 3㎝ 完形 27
23 石器 編物石	長　13.9 幅　4.1 厚　3.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 288.6g。	10Y6/1　灰 緻密 砂岩	中央西部床上 10㎝ 完形 34
24 石器 編物石	長　13.0 幅　4.9 厚　3.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 359.5g。	5GY6/1　オリーブ灰 やや緻密 砂岩	中央南部床上 28㎝ 完形 17
25 石器 編物石	長　12.9 幅　5.5 厚　4.7	河原石。特に加工の痕跡はない。一部被熱により赤変している。重量 425.0g。	10Y6/2　オリーブ灰 やや緻密 流紋岩	南西隅床上 27㎝ 完形 31
26 石器 編物石	長　12.5 幅　5.6 厚　3.7	河原石。特に加工の痕跡はないが、被熱のためか全体が赤変するほか、黒色物質が付着する部分がある。残存重量 330.4g。	7.5YR5/3　にぶい褐 やや粗い 流紋岩	中央東部床上 1㎝ ほぼ完形 26
27 石器 編物石	長　11.9 幅　4.8 厚　3.5	河原石。特に加工の痕跡なし。表面はほぼ全体に、酸化した鉄分と見られる赤褐色物質が付着する。重量 288.8g。	10YR6/6　明黄褐 やや緻密 流紋岩	中央南東部床上 14㎝ 完形 19
28 石器 編物石	長　残 11.5 幅　6.0 厚　2.8	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 378.6g。	5Y6/2　灰オリーブ 緻密 安山岩	北東隅、床上 3㎝ 破片 24
29 石器 編物石	長　11.2 幅　5.2 厚　3.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 212.2g。	2.5Y6/2　灰黄 やや緻密 流紋岩	中央南部床上 9㎝ 完形 39
30 石器 編物石	長　残 8.8 幅　5.1 厚　3.6	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 220.5g。	2.5Y5/4　黄褐 やや粗い 礫岩	中央東部床上 25㎝ 破片 36
31 礫	長　残 21.3 幅　9.6 厚　6.0	河原石。残存部には、特に加工の痕跡なし。残存重量 1744.3g。	5GY6/1　オリーブ灰 やや緻密 安山岩	中央床上 19㎝ 破片 28
32 礫	長　14.9 幅　12.4 厚　3.4	河原石。特に加工の痕跡なし。磨石の可能性あり。重量 792.3g。	5Y6/1　灰 粗い 安山岩質溶岩	中央南部床上 10㎝ 完形 38
33 礫	長　9.3 幅　6.9 厚　4.0	河原石。特に加工の痕跡なし。被熱のためか、表面全体がやや赤変して見えるほか、黒色物質が一部に付着する。重量 373.3g。	2.5Y5/1　黄灰 やや緻密 流紋岩	中央東部床上 2㎝ 完形 25
34 礫	長　10.4 幅　6.7 厚　4.8	河原石。特に加工の痕跡なし。表面の磨滅著しい。重量 411.2g。	2.5GY7/1　明オリーブ灰 やや粗い 安山岩	中央南部床上 10㎝ 完形 29

第７節　時期不明の溝状遺構

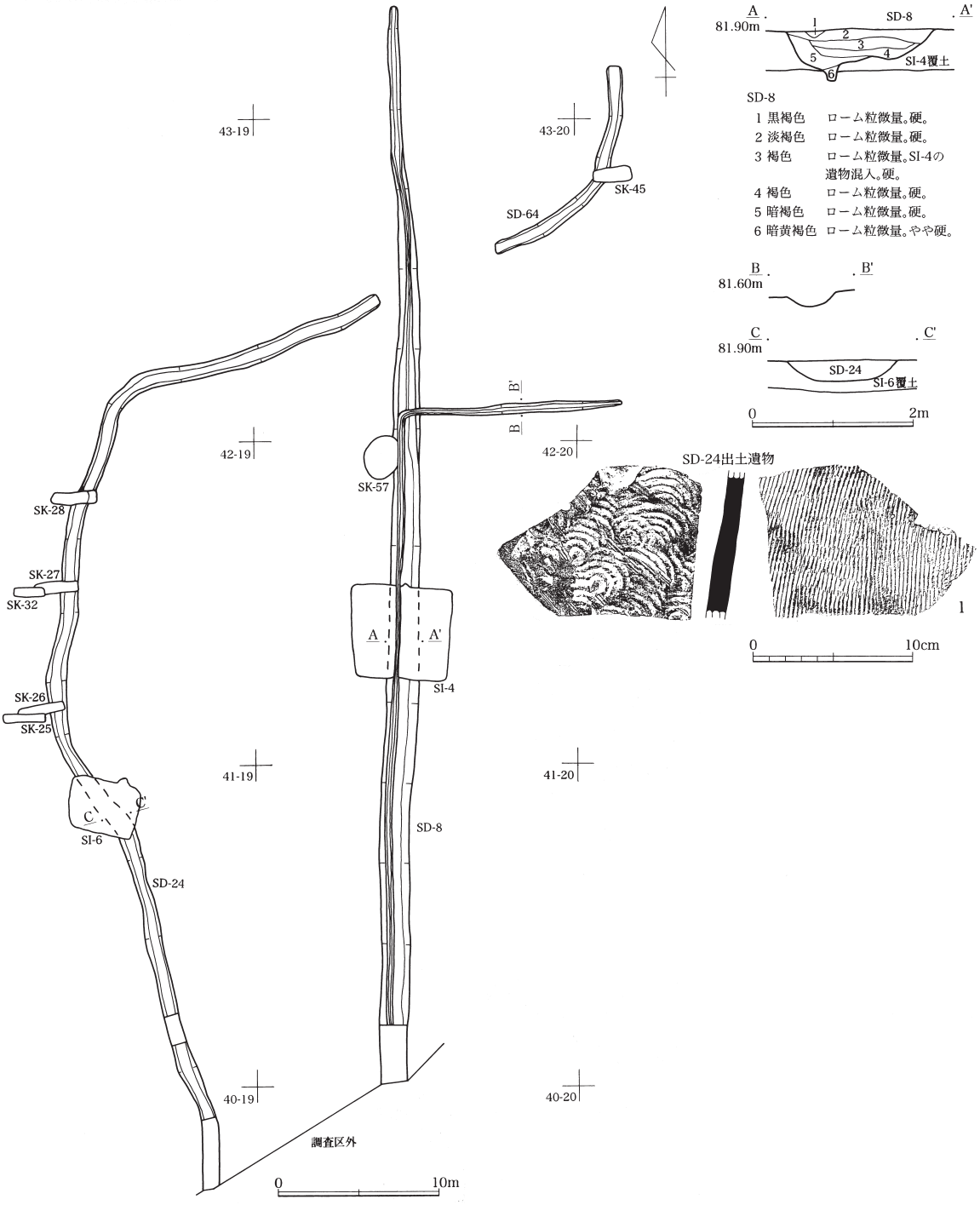
GN1 区 SD-8（第 31 図、写真図版 9）

GN1 区中央部の X40.0 ～ 43.5 間、Y19.0 ～ 19.5 間にある。GN1 区の南側に接する北関東自動車道路調査区の第 135B 号溝跡に連続する。弥生時代の SK-57 と古墳時代の SI-4 を切る。時期不明の SD-24・64 が連続する中間部分で SD-8 と重複していた可能性もあるが新旧は不明。幅 60 ～ 200cm、残存する深さは 55 ～ 60cm だが、X42.5 付近よりも北側では地形が低くなるので次第に溝が浅くなって消滅する。底面は一方向には傾斜しない。底面標高は X41.0 から X42.5 付近（81.15 ～ 81.19m）と北端（81.27m）が高くて、GN1 区南端（81.06m）と X43 付近（80.97m）が低い。覆土は自然埋没で、１～４層から見ると溝の掘り直しを行っている可能性が高い。５・６層に対応する古期の溝が、SK-57 の少し北側で折れて東側へ出る（土層断面 B-B′付近）。テフラの層や粒は見られない。遺物は混入品と考えられる古墳中～後期の土師器と奈良時代前半の土師器・須恵器がある。主な遺物は SI-4 出土破片と接合したので SI-4 の遺物として扱った。奈良時代前半の遺物は、SI-6 に係わるものが SI-4 上層に流入した後に、SD-8 へ混入した可能性がある。近世以降の溝である可能性が高い。

GN1 区 SD-24（第 31 図、写真図版 9・114）

GN1 区中央部の X39.5 ～ 42.5 間、Y18.0 ～ 19.5 間にある。GN1 区の南側に接する北関東自動車道路調査区で第 103A・B 号溝跡の北辺と重複する。北東の SD-64 と連続する溝の可能性がある。SD-64 との中間は遺構確認面が低くて溝が確認されていないので、SD-8 との重複関係は不明。SI-6 と重複する土層断面図に SD-24 覆土の説明が記録されていないので、新しい時期の撹乱と判断された溝である。奈良時代の SI-6 を切り、時期不明の SK-26・27・28 に切られる。幅 70 ～ 110cm、残存する深さは 14 ～ 35cm。底面の標高は X41 付近で高く（81.48m）、GN1 区南端で 81.31m、北東端で 81.27m。図示した古墳後期頃の須恵

器甕胴部が出土した他に、古墳中期～後期の土師器 6 片があり、いずれも混入品と見られる。



第 31 図　杉村遺跡 GN1 区 SD-8・24・64　遺構・遺物

第 11 表　杉村遺跡 GN1 区 SD-24　出土遺物

番号 種類 材質	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 甕	高　残 9.4	外面胴部平行タタキ、内面胴部同心円当て具痕のち斜位の疎らなナデ。	10Y4/1　灰 緻密　白粗～細粒微、白微粒少 硬質	胴部片一部 一括

GN1 区 SD-64（第 31 図、写真図版 9）

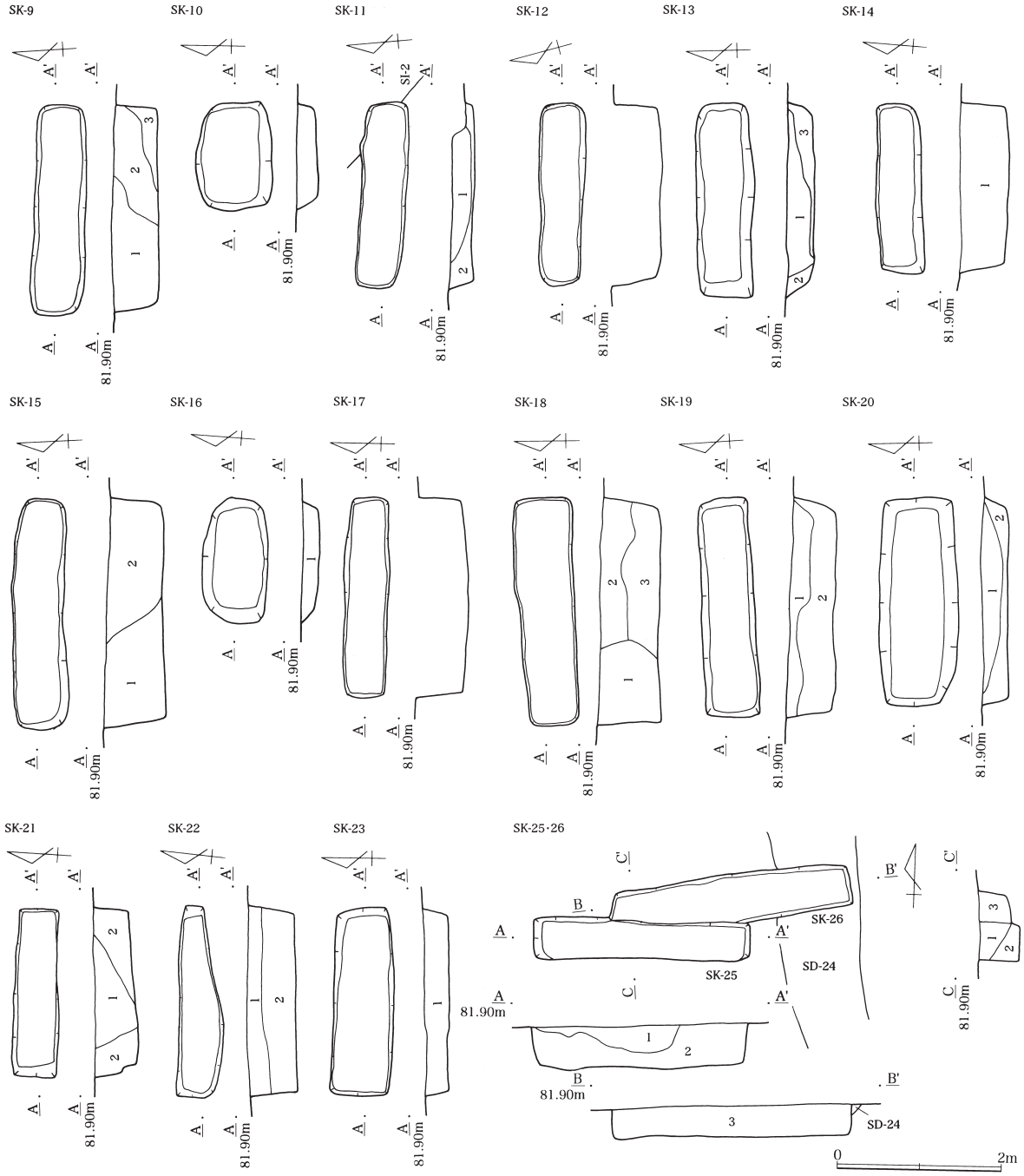
GN1 区北東部、42.5-19.5 グリッド所在。南西の SD-24 に連続する可能性がある。現地調査時には遺構番号が付けられていないので、SD-24 と同一遺構として扱った可能性が高いが、整理作業時に SD-64 の番号を与えた。SD-24 との中間は遺構確認面が低くて溝が確認されていないので、SD-8 との重複関係は不明。時期不明の土坑 SK-45 に切られる。南西から北東へ延びる曲線状の溝で、溝幅 80 ～ 100cm、残存する深さは最大 20cm で、北東部では地形が低くなるので次第に溝が浅くなって消滅する。底面標高は X43 付近で最も低く（81.27m）、他は 81.34 ～ 81.41m。覆土の特徴は不明で、土層断面の記録が作成されていないので、現地調査時に時期の新しい撹乱溝と判断したとみられる。遺物は出土しなかった。

第８節　時期不明の土坑（第 32 ～ 34 図、写真図版 9 ～ 11）

時期不明の土坑は計 45 基を調査した。近代以降の農業関連土坑（通称「イモ穴」）が多いと見られ、人為的に埋め戻したものが目立つ。東西方向に軸を揃えて、中央部（SI-2・5 間）と東部（SI-3・4 の東側）にまとまりをなしている。詳細は第 12 表に示した。

第 12 表　杉村遺跡 GN1 区　時期不明の土坑

遺構名	グリッド	平面形	重複	長径（m）	短径（m）	深さ（m）	中軸線	覆土
SK-9	41.5-19.5･20.0	長方形	重複なし	2.58	0.62	0.57	N-85° -W	人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。土層断面図に「人為埋め戻し土」とコメントあり。								
SK-10	41.5-20.0	長方形	重複なし	1.13	0.87	0.28	N-88° -E	自然堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性があるが、他のものほど長くない。								
SK-11	41.5-17.0･17.5	長方形	SI-2 より新	2.28	0.52	0.32	N-80° -W	人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。古墳時代の SI-2 を切る。								
SK-12	41.5-17.0	長方形	重複なし	2.24	0.49	0.72	N-72° -W	不明
遺物なし。東西軸の長方形。SK-12･54･55 は方向が揃う。土層断面図はないが、図面に「イモ穴と思われる」とコメントあり。								
SK-13	41.5-17.5	長方形	重複なし	2.37	0.66	0.37	N-90° -E	人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。土層断面図に「埋め戻し土」とコメントあり。								
SK-14	41.0-19.5、41.5-19.5	長方形	重複なし	2.09	0.50	0.60	N-85° -E	人為堆積？
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。土層断面図に「埋め戻し土か？」とコメントあり。								
SK-15	41.0-19.5･20.0	長方形	重複なし	2.81	0.60	0.78	N-84° -W	人為堆積？
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。図面に「埋め戻し土？」とコメントあり。								
SK-16	41.5-19.5	長方形	重複なし	1.54	0.70	0.24	N-87° -E	自然堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。								
SK-17	41.0-19.5、41.5-19.5	長方形	重複なし	2.44	0.49	0.66	N-90° -E	不明
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。覆土の土層注記なし。								
SK-18	41.0-19.5･20.0	長方形	重複なし	2.79	0.60	0.80	N-87° -E	人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。SK-18･19 は方向が揃う。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。土層断面図に「埋め戻し土」とコメントあり。								
SK-19	41.0-19.5･20.0	長方形	重複なし	2.68	0.62	0.63	N-88° -W	人為堆積？
遺物なし。東西軸の長方形。SK-18･19 は方向が揃う。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。覆土上層に「埋め戻し土？」とコメントあり。								
SK-20	41.5-19.0	長方形	重複なし	2.54	0.96	0.32	N-88° -W	人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。								
SK-21	41.5-18.0	長方形	重複なし	2.40	0.50	0.52	N-80° -E	人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。								
SK-22	41.5-18.0	長方形	重複なし	2.32	0.50	0.58	N-84° -E	人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。土層断面図に「イモ穴と思われる」とコメントあり。								



SK-9
1 暗褐色　ロームブロック・黒褐色土ブロック多量。硬。
2 黄褐色　ロームブロック主体。硬。
3 黒褐色　ローム粒少量。硬。

SK-10
1 暗褐色　ローム粒少量、焼土粒微量。硬。

SK-11
1 明黄褐色　φ1-3㎝ロームブロック多量。硬。
2 黒褐色　ローム粒少量。軟。

SK-13
1 暗褐色　φ1-3㎝ロームブロック少量。軟。
2 明褐色　黒色土粒微量。軟。
3 明黄褐色　φ1-3㎝ロームブロック・ローム粒多量。軟。

SK-14
1 暗黄褐色　ロームブロック多量。軟。

SK-15
1 暗褐色　ロームブロック少量。硬。
2 暗黄褐色　ロームブロック主体。硬。

SK-16
1 暗褐色　ローム粒少量、白色土粒微量。硬。

SK-18
1 黒褐色　ロームブロック多量。軟。
2 暗黄褐色　ロームブロック主体。軟。
3 暗褐色　ロームブロック少量。軟。

SK-19
1 黄褐色　ロームブロック多量。硬。
2 暗褐色　ローム粒少量。硬。

SK-20
1 暗黄褐色　ロームブロック多量。硬。
2 暗褐色　ローム粒少量。

SK-21
1 明黄褐色　φ2-5㎝ロームブロック多量。軟。
2 褐色　ローム粒少量。硬。

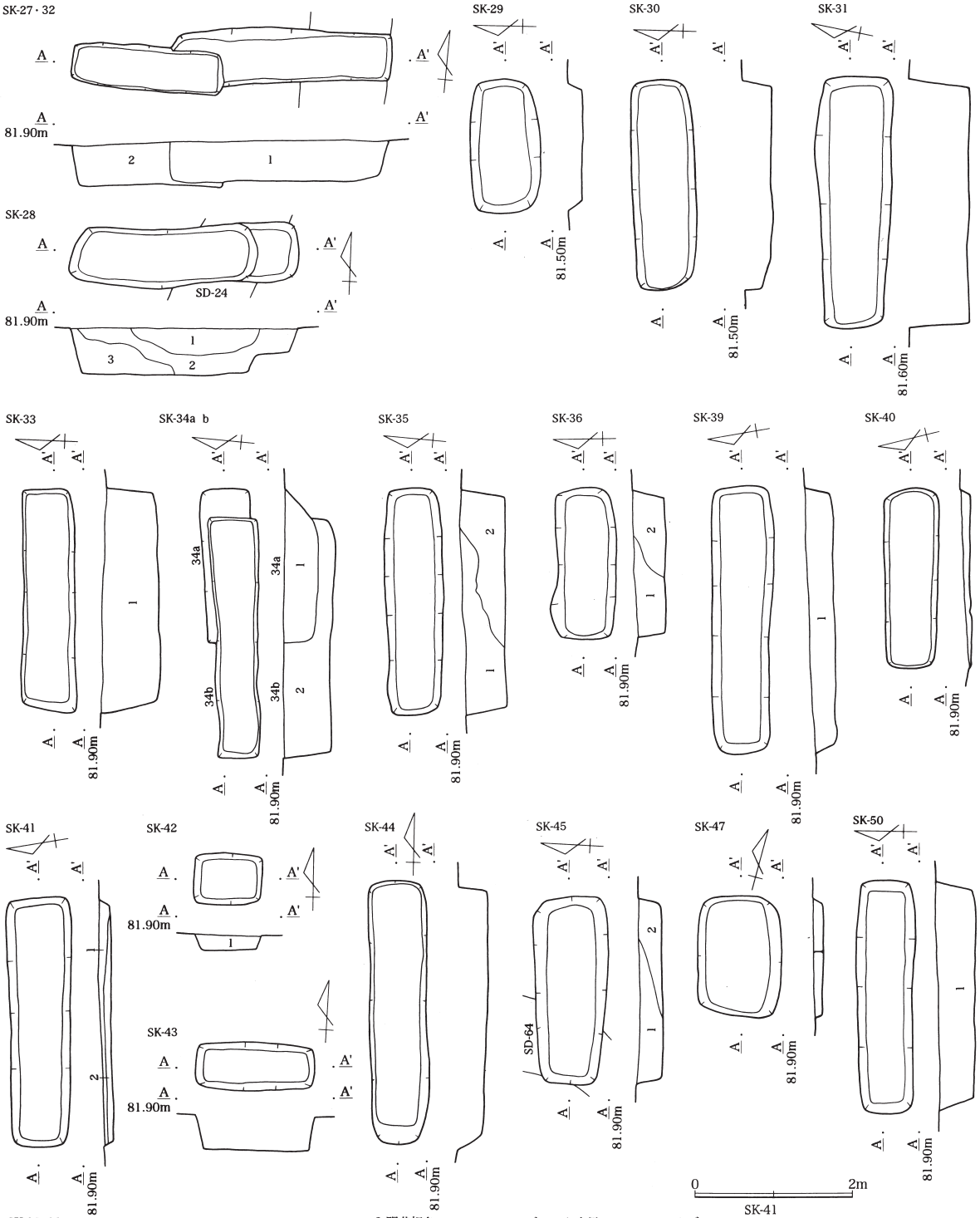
SK-22
1 暗褐色　φ1-2㎝ロームブロック少量。硬。
2 明黄褐色　ローム粒多量。軟。

SK-23
1 暗黄褐色　ローム粒・φ1-2㎝ロームブロック少量。硬。

SK-25
1 褐色　ローム粒多量。硬。
2 明黄褐色　φ5-10㎝ロームブロック多量。軟。

SK-26
1 黄褐色　φ1-3㎝ロームブロック多量。軟。

第 32 図　杉村遺跡 GN1 区 時期不明の土坑（1）　遺構



SK-27・32
1 SK-27覆土　記載なく不明。
2 SK-32覆土　記載なく不明。

SK-28
1 黄褐色　φ1-3㎝ロームブロック多量。硬。
2 暗褐色　φ1-2㎝ロームブロック・φ3-5㎝褐色土ブロック少量。硬。
3 明黄褐色　φ1-5㎝ロームブロック多量。軟。

SK-33
1 明黄褐色　φ1-8㎝ロームブロック多量。軟。

SK-34a・34b
1 暗褐色　φ1-5㎝ロームブロック・ローム粒多量。硬。(SK-34a覆土)
2 明黄褐色　φ2-7㎝ロームブロック少量、φ1-2㎝ロームブロック多量、φ約1㎝赤褐色粒(Nt-I)微量。軟。(SK-34b覆土)

SK-35
1 暗黄褐色　φ1-5㎝ロームブロック・ローム粒多量。軟。
2 暗褐色　ローム粒少量。硬。

SK-36
1 暗黄褐色　φ1-5㎝ロームブロック少量、ローム粒多量。軟。
2 暗褐色　φ1-5㎝ロームブロック微量、ローム粒少量。硬。

SK-39
1 暗黒褐色　ロームブロック多量。硬。

SK-40
1 暗褐色　ロームブロック多量。軟。

SK-41
1 暗褐色　ロームブロック多量。軟。
2 褐色　ローム粒微量。硬。

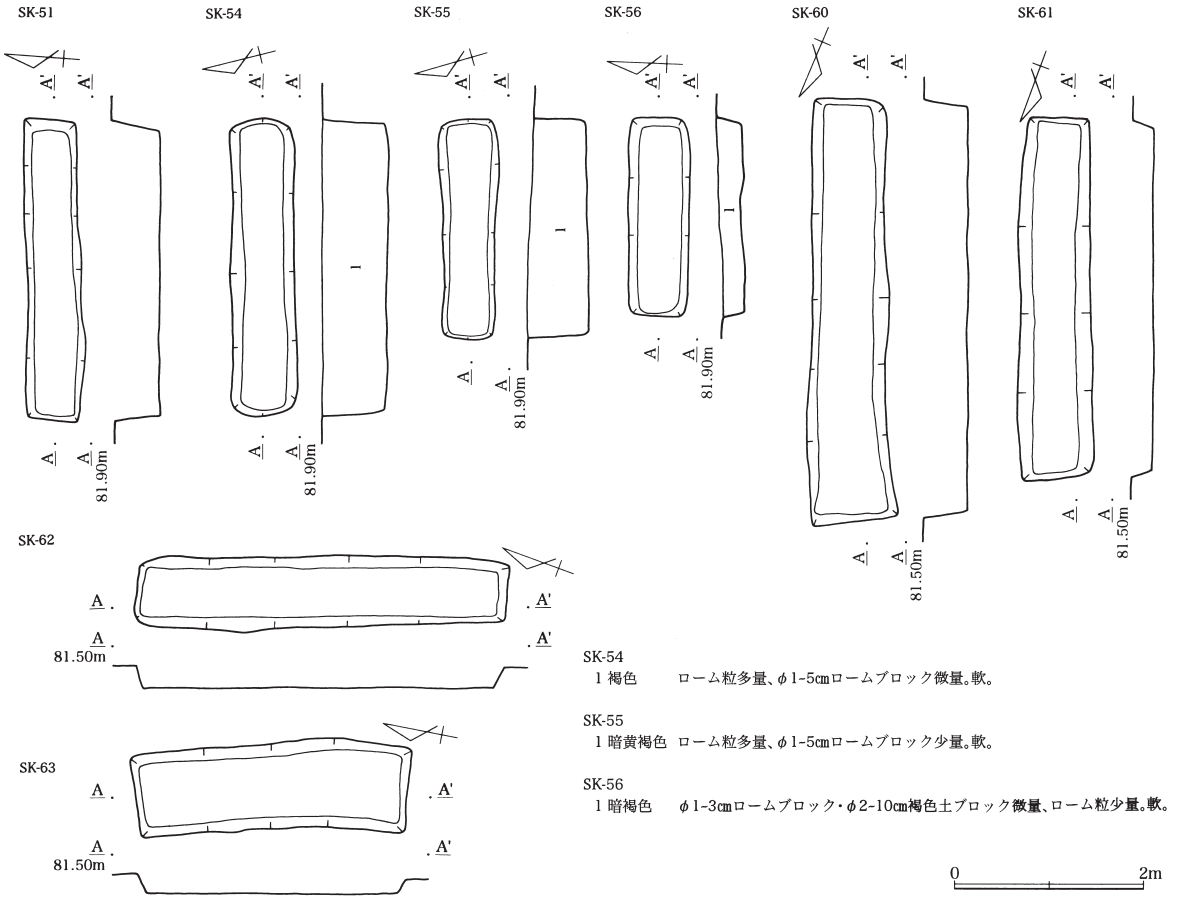
SK-42
1 暗褐色　ローム粒少量。硬。

SK-45
1 暗黄褐色　ロームブロック多量。軟。
2 暗褐色　ローム粒少量。軟。

SK-47
1 暗褐色　ローム粒・白色土粒少量、赤褐色粒(Nt-I)微量。

SK-50
1 明黄褐色　φ1-5㎝ロームブロック・ローム粒多量。軟。

第 33 図　杉村遺跡 GN1 区 時期不明の土坑（2）　遺構



第 34 図　杉村遺跡 GN1 区 時期不明の土坑（3）　遺構

SK-23　41.5-18.0　長方形　重複なし　2.30　0.66　0.32　N-89° -W　人為堆積
遺物は古墳時代の土師器 3 片（105g）で、壺・甕 2 片（32g）と高杯 1 片（73g）。遺構に伴う遺物とは考えられない。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。

SK-25　41.0-18.0　長方形　SK-26 より新　2.64　0.50　0.52　N-89° -E　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。時期不明の SK-26 を切る。

SK-26　41.0-18.0　長方形　SK-25 より古、SD-24 より新　0.77　0.75　0.12　N-80° -E　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。時期不明の SD-24 を切る。

SK-27　41.5-18.0　長方形　SK-32・SD-24 より新　2.80　0.61　0.54　N-84° -E　不明
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。覆土の土層注記なし。時期不明の SD-24 と SK-32 を切る。

SK-28　41.5-18.0・18.5　長方形　SD-24 より新　2.94　0.70　0.61　N-87° -E　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。イモ穴 2 基の重複か掘り直しの可能性あり。時期不明の SD-24 を切る。

SK-29　39.5-18.0　長方形　重複なし　1.68　0.70　0.22　N-88° -E　不明
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。覆土の土層注記なし。

SK-30　39.5-18.0・18.5　長方形　重複なし　2.68　0.62　0.40　N-87° -E　不明
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。覆土の土層注記なし。

SK-31　39.5-18.0　長方形　重複なし　3.10　0.74　0.87　N-80° -E　不明
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。覆土の土層注記なし。

SK-32　41.5-18.0　長方形　SK-27 より古　1.93　0.55　0.55　N-90° -E　不明
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。時期不明の SK-27 に切られる。覆土の土層注記なし。

SK-33　41.5-18.5　長方形　重複なし　2.85　0.63　0.78　N-88° -E　人為堆積
古墳時代の土師器甕 2 片、須恵器甕、瓶類各 1 片出土し、混入と考えられる。東西軸の長方形。土層断面図に「イモ穴」とコメントあり。

SK-34a　41.5-18.5　長方形　SK-34b より新　1.95　0.63　0.46　N-82° -E　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。

SK-34b	41.5-18.5	長方形	SK-34a より古	3.43	0.52	0.64	N-82° -E　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。							
SK-35	41.5-17.5･18.0	長方形	重複なし	2.88	0.61	0.57	N-84° -E　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。							
SK-36	41.5-17.5･18.0	長方形	重複なし	1.92	0.64	0.46	N-90° -E　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。							
SK-39	42.5-16.5	長方形	重複なし	3.42	0.72	0.44	N-81° -W　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。							
SK-40	43.0-16.5	長方形	重複なし	3.40	0.60	0.09	N-76° -W　人為堆積？
遺物なし。東西軸の長方形。SK-40 と 41 は方向を揃えて並ぶ。近代以降の農業関連土坑(イモ穴)の可能性あり。土層断面図に「埋め戻し土？」とコメントあり							
SK-41	43.0-16.5	長方形	重複なし	3.17	0.72	0.19	N-80° -W　人為堆積？
遺物なし。東西軸の長方形。SK-40 と 41 は方向を揃えて並ぶ。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。覆土上層は「埋め戻し土？」とコメントあり。							
SK-42	42.0-20.0	長方形	重複なし	0.79	0.60	0.24	N-90° -E　自然堆積
遺物なし。東西軸の長方形。							
SK-43	42.0-20.0	長方形	重複なし	1.52	0.53	0.48	N-88° -E　不明
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。覆土の土層注記なし。							
SK-44	42.0-20.0	長方形	重複なし	3.34	0.72	0.38	N-1° -W　不明
遺物なし。南北軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。覆土の土層注記なし。							
SK-45	42.5-20.0	長方形	SD-64 より新	2.38	0.90	0.34	N-84° -E　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。時期不明の SD-64 を切り、南北軸の撹乱坑に切られる。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。							
SK-47	41.5-16.5	長方形	重複なし	1.52	1.08	0.14	N-13.5° -W自然堆積
遺物なし。やや南北軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性がある他の土坑とは異なる形態で、主軸方向も異なるが、イモ穴の可能性はある。							
SK-50	41.5-17.5･18.0	長方形	重複なし	2.96	0.65	0.53	N-90° -E　人為堆積
古墳時代中期後半頃の土師器甕２片のみ出土し、混入であろう。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。							
SK-51	41.0-18.0･18.5	長方形	重複なし	3.21	0.56	0.53	N-85° -E　不明
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。覆土の土層注記なし。							
SK-54	41.5-16.5･17.0	長方形	重複なし	3.12	0.68	0.68	N-74° -W　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。SK-12･54･55 は方向が揃う。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。							
SK-55	41.0-17.0	長方形	重複なし	2.32	0.56	0.64	N-73° -W　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。SK-12･54･55 は方向が揃う。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。							
SK-56	41.5-17.5･18.0	長方形	重複なし	2.10	0.63	0.32	N-89° -W　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。							
SK-60	40.0-18.0	長方形	重複なし	4.52	0.72	0.49	N-22° -W　不明
遺物なし。南北軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。SK-60 ～ 63 が一列に続き、南側は北関東自動車道調査区の 139 号溝へ向かう。							
SK-61	39.5-18.0、40.0-18.0	長方形	重複なし	3.86	0.69	0.23	N-18° -W　不明
遺物なし。南北軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。SK-60 の項を参照。							
SK-62	39.5-18.0	長方形	重複なし	3.97	0.64	0.25	N-18° -W　不明
遺物なし。南北軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。SK-60 の項を参照。							
SK-63	39.0-18.0、39.5-18.0	長方形	重複なし	2.99	0.89	0.22	N-14° -W　不明
遺物なし。南北軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。SK-60 の項を参照。							

SK-34b	41.5-18.5	長方形	SK-34a より古	3.43	0.52	0.64	N-82° -E　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。							
SK-35	41.5-17.5･18.0	長方形	重複なし	2.88	0.61	0.57	N-84° -E　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。							
SK-36	41.5-17.5･18.0	長方形	重複なし	1.92	0.64	0.46	N-90° -E　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。							
SK-39	42.5-16.5	長方形	重複なし	3.42	0.72	0.44	N-81° -W　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。							
SK-40	43.0-16.5	長方形	重複なし	3.40	0.60	0.09	N-76° -W　人為堆積？
遺物なし。東西軸の長方形。SK-40 と 41 は方向を揃えて並ぶ。近代以降の農業関連土坑(イモ穴)の可能性あり。土層断面図に「埋め戻し土？」とコメントあり							
SK-41	43.0-16.5	長方形	重複なし	3.17	0.72	0.19	N-80° -W　人為堆積？
遺物なし。東西軸の長方形。SK-40 と 41 は方向を揃えて並ぶ。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。覆土上層は「埋め戻し土？」とコメントあり。							
SK-42	42.0-20.0	長方形	重複なし	0.79	0.60	0.24	N-90° -E　自然堆積
遺物なし。東西軸の長方形。							
SK-43	42.0-20.0	長方形	重複なし	1.52	0.53	0.48	N-88° -E　不明
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。覆土の土層注記なし。							
SK-44	42.0-20.0	長方形	重複なし	3.34	0.72	0.38	N-1° -W　不明
遺物なし。南北軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。覆土の土層注記なし。							
SK-45	42.5-20.0	長方形	SD-64 より新	2.38	0.90	0.34	N-84° -E　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。時期不明の SD-64 を切り、南北軸の撹乱坑に切られる。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。							
SK-47	41.5-16.5	長方形	重複なし	1.52	1.08	0.14	N-13.5° -W自然堆積
遺物なし。やや南北軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性がある他の土坑とは異なる形態で、主軸方向も異なるが、イモ穴の可能性はある。							
SK-50	41.5-17.5･18.0	長方形	重複なし	2.96	0.65	0.53	N-90° -E　人為堆積
古墳時代中期後半頃の土師器甕２片のみ出土し、混入であろう。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。							
SK-51	41.0-18.0･18.5	長方形	重複なし	3.21	0.56	0.53	N-85° -E　不明
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。覆土の土層注記なし。							
SK-54	41.5-16.5･17.0	長方形	重複なし	3.12	0.68	0.68	N-74° -W　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。SK-12･54･55 は方向が揃う。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。							
SK-55	41.0-17.0	長方形	重複なし	2.32	0.56	0.64	N-73° -W　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。SK-12･54･55 は方向が揃う。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。							
SK-56	41.5-17.5･18.0	長方形	重複なし	2.10	0.63	0.32	N-89° -W　人為堆積
遺物なし。東西軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。							
SK-60	40.0-18.0	長方形	重複なし	4.52	0.72	0.49	N-22° -W　不明
遺物なし。南北軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。SK-60 ～ 63 が一列に続き、南側は北関東自動車道調査区の 139 号溝へ向かう。							
SK-61	39.5-18.0、40.0-18.0	長方形	重複なし	3.86	0.69	0.23	N-18° -W　不明
遺物なし。南北軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。SK-60 の項を参照。							
SK-62	39.5-18.0	長方形	重複なし	3.97	0.64	0.25	N-18° -W　不明
遺物なし。南北軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。SK-60 の項を参照。							
SK-63	39.0-18.0、39.5-18.0	長方形	重複なし	2.99	0.89	0.22	N-14° -W　不明
遺物なし。南北軸の長方形。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）の可能性あり。SK-60 の項を参照。							

第５章　権現山遺跡各調査区の旧石器・縄文・弥生時代遺物

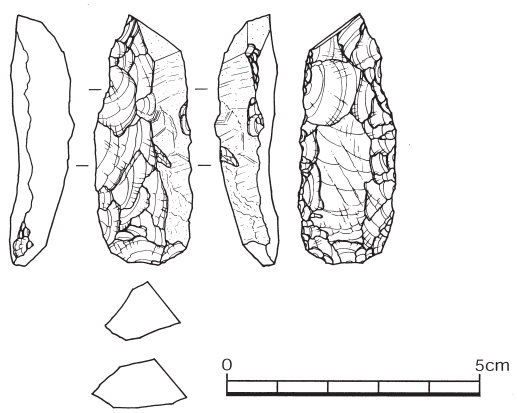
第１節　権現山遺跡 SG1 区の旧石器時代遺物

水晶製の両面調整尖頭器が、権現山遺跡 SG1 区で古墳時代の竪穴建物跡 SI-69 に混入して 1 点出土した（第 35 図）。本来の文化層は不明だが、第３章で述べた標準土層 II ～ IV 層の間に石器が包含されていたことが想定される。そうであれば、Nt-S（七本桜軽石層）および Nt- I （今市軽石層）の示す 1.4 ～ 1.5 万年 cal BP 頃から、As-YP（浅間板鼻黄色軽石）の示す 1.5 ～ 1.65 万年 cal BP 頃に相当する可能性がある。

透明度が高い良質の水晶を用いている。横断面は三角形に近く、背面に稜線を持つ。平面形は左右が非対称で、基部に丸みを持つ。背面の多くと腹面の全周を調整するが、背面右半部は自然面。これが素材の自然面とすれば、素材が転石ではなくて大きな結晶の形であったことを示すことになる。

先端右上部には、オベリスク状の水晶の結晶の表面が石器の軸に斜行して残るので、未成品と考えられる。この斜面は背面右半部の自然面より新しいように見えるので、製作途中で斜行する節理面に当たって割れたために廃棄したと考えることもできる。

背面の調整後に腹面周縁を調整している。また、両側面図に示した細かい調整剥離が認められる。長さ 4.9cm、幅 1.9cm、厚さ 1.1cm、重量 11.65g。



第 35 図　権現山遺跡　尖頭器

第２節　縄文時代の遺物出土状況

権現山遺跡の縄文時代遺構は、SG1 区で前期の土坑 1 基（SG1 区 SK-125）があり、また SG10 区で晩期中葉大洞 C2 式期の竪穴住居 1 棟（SG10 区 SI-63）と縄文時代の可能性を持つ土坑６基（SG10 区 SK-219・265・307・443・697・699）がある。SG1 区 SK-125 は本報告書の SG1 区で報告し（第 10 章第 1 節）、SG10 区の各遺構は今後刊行する権現山遺跡南半部の報告書で掲載する。

次に、縄文時代遺構以外で出土した遺物の状況を地区ごとに触れる。

［権現山遺跡 2 区］縄文時代の遺構はない。縄文時代遺物は土器片 18 点・石器２点で、確認調査トレンチや古墳時代遺構などから出土した。各地点とも遺物は同一時期の破片でまとまる。早期では撚糸文土器群 2 片が 43-13 グリッド（27）、条痕文系土器３片が 41-11 グリッド（116）、前期は黒浜式６片が 43.5-12.5 グリッド（130）、中期は加曽利 E 式５片が F 地区つまり２区北部の X46 ～ X48 間付近にある（225）。石器では、灰褐色を呈する良質な珪質頁岩製の石匙（第 45 図 19）が SB-3 に、ホルンフェルス製の礫器 1 点（第 47 図 32）が SX-94 に、それぞれ混入していた。石匙は北半の台地上で、これ以外の早～前期土器と SX-94 混入礫器は２区南半の台地斜面で出土する傾向がある。

［権現山遺跡 3 区］縄文時代の遺構・遺物は認められない。

［権現山遺跡 4 区］確実な縄文時代の遺構は確認されていない。ただし、時期不明の土坑のうち SK-128・134 は埋土の特徴や重複関係からみて縄文時代の可能性もある。

遺構に伴わない遺物として、早期では夏島式を含む撚糸文系（16・20・32・35）が SI-25、条痕文系土器（117・125）が SI-25 と 35-13 グリッドに若干あり、出流原式が SI-31 にある（102）。前期では諸磯ｂ

式（145）が SI-59、浮島式・興津式（146 ～ 148・151 ～ 155・170）が SI-21・24・25・26 と SK-41・106 と SD-304、前期末の土器（198）が SK-140 にある。中期では五領ヶ台式（200・201）が SI-76 と遺構外、後期では加曽利 B 式（251）が表採品にある。

［権現山遺跡 SG1 区］ SG1 区の縄文時代遺構は、前期黒浜式期の土坑が 1 基だけある（SK-125）。縄文早期では撚糸文系土器が中央部～北部の SI-6・70・89 と低地にあり（2・3・7・21）、田戸下層式土器が中央部の SD-37 に混入してやや目立つ（42・52・54・57・77・82・93 ～ 95）。前期では黒浜式（131）・諸磯 a・b 式（135・136・138・139）と浮島・興津式（166・171・174）が、北部に少量ある（SI-1、SD-95、旧名称 SD-98 の撹乱溝、SK-99）。前期末の土器（187・192・196）は SD-99・低地部・北部の SI-1 に少量混入していた。中期では五領ヶ台式（205）が北部の SI-1、加曽利 E 式（218 ～ 221・223）が中～南部に少量ある。後期では堀之内 2 式（241・242）が東部低地と中央部で、後期安行式（273）が撹乱溝 SD-36 で出土した。

［権現山遺跡 SG2 区］ 縄文時代の遺構はない。阿玉台式（214）、加曽利 E 式（227・229）、加曽利 B 式（266・269）が、旧流路中および遺構外で出土し、主に SG2 区の東半部で見られた。

［権現山遺跡 SG5 区］ 縄文時代の遺構はない。遺構に伴わない土器は、早期は撚糸文系土器（1・4・5・6・8・10 ～ 15・17 ～ 19・22 ～ 25・28 ～ 31・34・36）が中央部の遺構に混入していた（SI-11・18・22・137 と SK-88・96 と SD-41・44・101・227）。沈線文系は三戸式（40）・田戸上層式（98）があり、また出流原式（99 ～ 101・103 ～ 108・111・112）が中央部東半にある。条痕文系土器（123）・縄文条痕土器（126）は中央部の SI-21 と遺構外にある。前期は黒浜式（133・134）が東部低地の SK-181、浮島・興津式（157・158）は中央部の遺構外と SD-42、前期末葉の土器（188・189）は中央～西部にある。中期は五領ヶ台式（203・204）が中央部の SI-18 と南部遺構外、阿玉台式（206・207・210・212）が中央部と南部、加曽利 E 式（217・233 ～ 235）が中央部の SD-227・北部の SI-6・南部の SX-129 と低地にある。後期は加曽利 B ～曽谷式（254・258 ～ 260・267・268・270）が中央部（SI-17 ～ 19 と SD-101）と南部（SX-129 と 9-18 グリッド）にある。晩期は大洞 B-C 式（278）が中央部西端の SI-12、大洞 A 式？（282・285）が東部低地にある。

［権現山遺跡 SG9 区］ 縄文時代の遺構はない。遺構外の遺物は、中期では阿玉台 III 式（208）が SG9 区西部にある。後期では、加曽利 B1 ～ B2 式（248・249）が中央部に、ザル圧痕の底部（271）が西部にある。

［権現山遺跡 SG10 区］ 遺構は大洞 C2 式期の竪穴住居（SG10 区 SI-63）と、縄文時代の可能性を持つ土坑（SG10 区 SK-219・265・307・443・697・699）がある。これらの各遺構は、南半部の報告書に掲載する。

早期は撚糸文系土器（9・26・33・37・38）が SG10 区南部に多い。沈線文系土器は三戸式（39・41）が北半部（SD-527・SK-566）に、田戸下層式（43 ～ 51・53・55・56・58 ～ 76・78 ～ 81・83 ～ 92・96・97）が中央部付近の各遺構に混入していた。出流原式（109）が中央部東半の遺構外にあり、条痕文系土器（113 ～ 115・118 ～ 122・124）が中央部東半の SD-319・527・594 と SI-16・34・56 に混入していた。前期は黒浜式（127・129・132）が南東部、諸磯 a 式（137）が北部の SD-527、同 b 式（138 ～ 144）が中央～南部、浮島式および興津式（149・150・156・159・160 ～ 165・167 ～ 169・172・173・175 ～ 185）が北部（SI-60・61・66・70・73・81 と SD-527・SK-600）と南西部（SI-33・34・45・47・50・106・110 と SD-201）に多く、東部低地にもある（SD-815 と遺構外）。前期末葉の土器（186・190・191・193 ～ 195・197）は中央部にある。中期は五領ヶ台式（199・202）が北部東縁の SD-527・594、阿玉台式（209・211・213）が北部と南部にある。加曽利 E 式（215・216・222・224・228・230 ～ 232・236）は北東部に多く（SI-80・81・86、SK-553・600、SD-503・527、SE-552）、東端部低地にもある（236）。後期は堀之内 1 式（237 ～ 240）が南端部と中央部にある。加曽利 B ・曽谷式（243 ～ 247・250・252・253・255 ～ 257・261 ～ 265・272）は北東部に多く（SI-75・113・116 と SD-527・SD-503・SD-594）、中央部東半の SI-57 にも少量ある。後期安行式（274 ～ 277）が中央部東端

の SD-521 と中央部西半の SK-233・SI-40 にある。晩期では、大洞式（279 ～ 281・283・284・286 ～ 288）が中央部東半の SD-304 にあり（重複する大洞 C2 式期の住居 SI-63 から混入？）、北端の SI-86 や南端の SD-43・201B にもある。

［権現山遺跡 SG15 区］縄文時代の遺構・遺物はない。

第３節　権現山遺跡各地区の縄文土器

縄文時代の遺構以外から出土した縄文時代遺物は、地区ごとに分けないで、南部（SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区）を含む全地区で出土したものをまとめて分類し、本節で報告する。

【第１群　撚糸文系土器】（第 36 図 1 ～ 38、写真図版 103）

口縁端部が肥厚する撚糸文系土器（井草・大丸・夏島式土器と擦痕文土器）の破片は、開析谷に面する台地東端の各調査区（4 区・SG1 区・SG5 区・SG10 区）で、主に古墳時代以降の遺構に混入して出土した。1 群を以下の 1 ～ 4 類に分類した。

1 類　口縁部の肥厚が顕著なもの。（1 ～ 11）

1・2 種は頸部文様帯（縄文）を有する井草 I 式、3 ～ 6 種は頸部に縄文が無く井草 II 式および大丸式に該当する。1 類の大半に共通する特徴として、胎土が比較的緻密で白細粒・白砂と黒・透明細砂がやや多い。半透明～白色の粗い砂がやや多いものも見られる。5 はやや粘土質。焼成は比較的硬質だが、やや軟質でさわると指先に粉質の土砂が付着してくるようなものも含む。灰黄色（7.5YR7/2）～浅黄色・淡黄色（7.5YR8/4）や、浅黄橙色・にぶい黄橙色（10YR5/4 ～ 8/6）が主体である。同じ東谷中島地区の北部にある磯岡北遺跡（磯岡北古墳群）SG12 区・SG17 区、中島笹塚遺跡 3 区・7 区、立野遺跡 5 区の撚糸文系土器と同様の胎土・焼成・特徴がみられる。

〔1 種〕口縁上面・口縁部側面・頸部・胴部に縄文を施文するもの。（1 ～ 4・21）

肥厚する口縁部の上面・側面・頸部に斜走縄文、胴部には縦走縄文を施す。2 ～ 4 は胴部が破損しているが、1 は胴部に縄文が縦走することがわかる。1 は上面と側面が RL 横回転で、頸部と胴部が RL 斜回転。2 と 3 は同一個体の可能性があり、上面と側面が LR 縦回転でその境界に RL の縄側面を押圧し、頸部は指頭押圧の後に RL 斜回転。4 は上面と側面が RL 横回転で、頸部は（おそらく指頭押圧後に）RL 斜回転。21 は 1 種に対応する胴部破片。1 は SG5 区 SK-88、2 は SG1 区 SI-70、3 は SG1 区低地小グリッド 5-C、4 は SG5 区 SI-11 出土。

〔2 種〕口縁部側面上半に斜走縄文、頸部に横走縄文を施すもの。胴部は破損しているが、縦走縄文を施していたと考えられる。（5）

口縁部側面上半は 1 段 R 横回転、側面下半は無文、頸部は RL 斜回転。SG5 区 SD-41 出土。

〔3 種〕口縁部側面に縄文、頸部に襞状圧痕、胴部に縄文を施すもの。（6・7）

6 は口縁部側面が R 横回転で施文し、胴部は施文が非常に浅くて不明瞭で縦位の撚糸文（次に述べる 4 種）かもしれない。7 は口縁部側面上部に R または RL の横回転、胴部は原体不詳だが 2 段の縄を斜回転しているようにもみられる。6 は SG5 区 SI-22、7 は SG1 区 SI-89 出土。

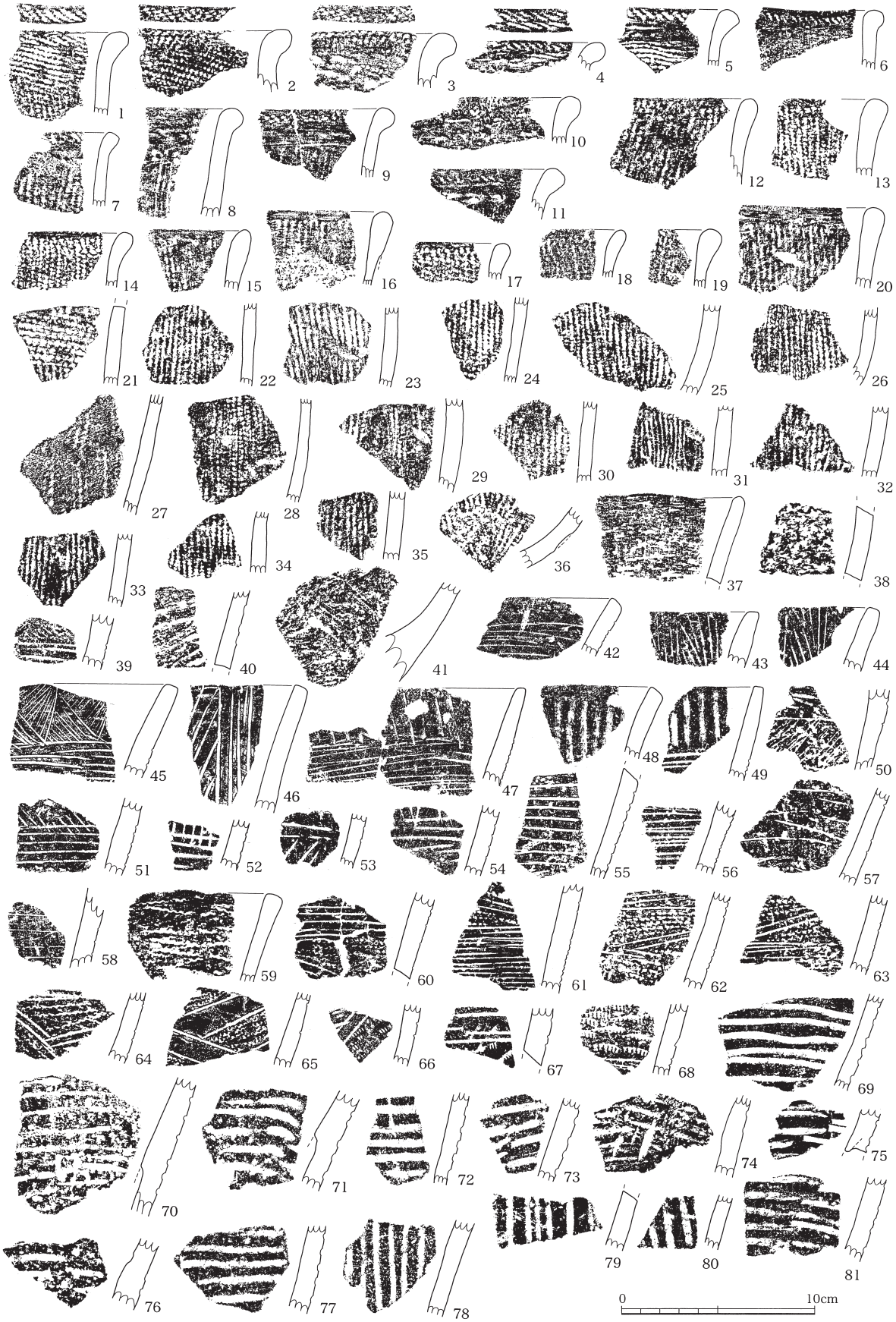
〔4 種〕口縁部側面に縄文、頸部に襞状圧痕、胴部に撚糸文を施すもの。（8）

口縁部側面の縄文は磨滅して不詳だが、R 横回転の可能性もある。胴部は横位に削った浅い擦痕の後に撚糸文（?）を施すが施文原体は不明瞭で、3 本以上の集合沈線（?）のようにもみえる。

8 は SG5 区 SI-137 出土。

〔5 種〕口縁部側面に縄文、頸部にナデ、胴部に縄文を施すもの。（9）

口縁部側面は RL 横回転。胴部は RL 斜回転かもしれないが不明瞭。SG10 区 18.2-18.2 グリッド出土。



第 36 図　権現山遺跡　遺構外出土の縄文土器 (1)

〔**6 種**〕その他の口縁部破片（10・11）

10・11 は頸部に襞状圧痕を持ち、胴部は破損して不明。口縁部側面は、10 が磨滅気味で文様不明、11 は 1 段 R（または 2 段 RL）横回転。10 は SG5 区 SD-44（注記は SI-102）、11 は SG5 区 SI-18 で出土。

2 類　口縁部が若干肥厚するもの。（12 ～ 20）

2 類は夏島式に該当する。2 類の大半に共通する特徴として、胎土が比較的緻密で白および半透明の礫～細砂が多く、黒・透明細砂も含む。焼成は比較的硬質で、灰褐色～にぶい橙色（7.5YR4/2 ～ 6/4）や、灰黄橙色～にぶい黄橙色（10YR4/2 ～ 6/4）が主体である。

〔**1 種**〕口縁部から胴部にかけ縦位の縄文を施す口縁部破片。（12 ～ 18）

14 と 17 は同一個体。縄文はいずれも RL 斜回転。12 と 13 は口縁部側面上半まで施文するが、14 ～ 18 は側面上半部をナデあるいはミガキで無文にする。12 は SG5 区 14.5-17.5 グリッド（注記は 17.5-14.5）、13 は SG5 区 SD-101、14 と 17 は SG5 区 SD-44（注記は SI-102）、15 は SG5 区表採、16 は 4 区 SI-35、18 は SG5 区 SD-227 出土。

〔**2 種**〕口縁部から胴部にかけ縦位の撚糸文を施す口縁部破片。（19・20）

19 は 1 段 R の撚糸文、20 は 1 段 L の撚糸文かと思われるが、縄の節は不明瞭で、無節縄文を斜回転施文している疑いも残る。19 は SG5 区 SD-156（SD-156 は抹消番号なので遺構外）、20 は 4 区 SI-25 で出土。

3 類　縄文のみが施される胴部から底部の破片。（21 ～ 36）

1 類と 2 類に対応する胴部で、34 は頸部付近、25・26・28・29 は胴部下位、36 は底部の破片。21 は 1 類 1 種に対応する頸～胴部で、RL の原体を頸部で横回転、胴部で斜回転する。22 は RL（?）斜回転、23 は 1 段 R 斜回転、24 ～ 26・28 ～ 30 は RL 斜回転、27 は RL 斜回転かまたは 1 段 L の撚糸文、31 は原体不明の無節縄文、32 は 1 段 R 斜回転で内面ケズリ後ナデ、33・34 は RL 斜回転、35 は 1 段 L 斜回転。36 は RL 斜回転で外面がやや剥落する。21 は SG1 区 SI-6、22・23 は SG5 区低地北部、24 と 25 は SG5 区 SI-11、26 は SG10 区 SI-34、27 は 2 区中央東端部付近の確認調査トレンチ TX43-13、28 は SG5 区 SK-96、29 は SG5 区 SI-18、30 は SG5 区 14.0-17.0 グリッド（注記は 17.0-14.0）、31 は SG5 区 SD-101 の B 区、32 は 4 区 SI-25、33 は SG10 区 19.4-17.5 グリッド、34 は SG5 区の確認調査トレンチ TX44-15 表採、35 は 4 区 SI-25、36 は SG5 区 SI-21 北側で出土した。

4 類　擦痕文の土器。（37・38）

〔**1 種**〕口縁部破片。（37）

〔**2 種**〕胴部破片。（38）

4 類は撚糸文系土器に伴う無文土器で、天矢場式（中村 2002）に該当する。4 類の胎土は 1 ～ 3 類とは異なり、白色と半透明の礫～砂がきわめて多い。外面は横位に削り、内面は丁寧なナデで、内面が炭素吸着で黒褐色（10YR3/1）になる。37 は硬質で、外面はにぶい黄橙色（10YR7/3）だが、外面口縁部まで内面の炭素吸着がおよぶ。38 は焼成がやや不良で、外面は橙色（7.5YR6/6）。37 は SG10 区 SD-817、38 は SG10 区 SI-75 出土。

【第 2 群　早期沈線文系土器】（第 36・37 図 39 ～ 112、写真図版 103・104）

1 類　三戸式土器。（39 ～ 41）

〔**1 種**〕格子目文を描くもの。（39）

39 は胴部に 3 本現存する横位の平行沈線で区画した内部に細線で斜格子文を描く。やや硬質で、白・透明の砂～細砂と黒細砂を含み、内外面がにぶい橙色（7.5YR6/4）。SG10 区 SK-566 出土。

〔**2 種**〕太沈線による平行凹線を描くもの。（40）

胴部外面を斜位に削った擦痕の上に、浅く幅広な斜位の沈線を描く。硬質焼成で、黒・透明の砂～細砂が

多く、白細砂も含み、内外面がにぶい橙色（7.5YR5/4）。SG5 区表採。

中村信博氏の御教示によると、同種の沈線は三戸式と田戸下層式にみられる。40 が採集された SG5 区では田戸下層式と三戸式は確認されていないが、北側に隣接する SG10 区に三戸式（39･41）と田戸下層式（42 ～ 97）がある。

〔**3 種**〕底部破片。（41）

尖底土器の底部付近で、外面を横位と斜位に削る擦痕が顕著。硬質焼成で、白・透明の砂～細砂が多く、赤粒も含む。外面はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、内面は炭素吸着で黒褐色（7.5YR4/1）になる。平底の天矢場式土器ではなく、尖底の三戸式と考えられる。SG10 区 SD-527 出土。

2 類　田戸下層式土器。（42 ～ 97）

2 類の大半に共通する特徴として、胎土が比較的緻密で白色の砂～細砂が多く、黒・透明細砂も含む。赤粒を含むものも見られる。焼成は硬質・良好で、にぶい橙色～浅黄橙色（7.5YR6/4 ～ 8/6 および 10YR6/3 ～ 8/4）が主体である。内面調整は丁寧なナデで、胴部下半では縦方向に少し雑にナデる。70・86・89・92・96 は内面が黒褐色。

〔**1 種**〕細沈線を施すもの。（42 ～ 58）

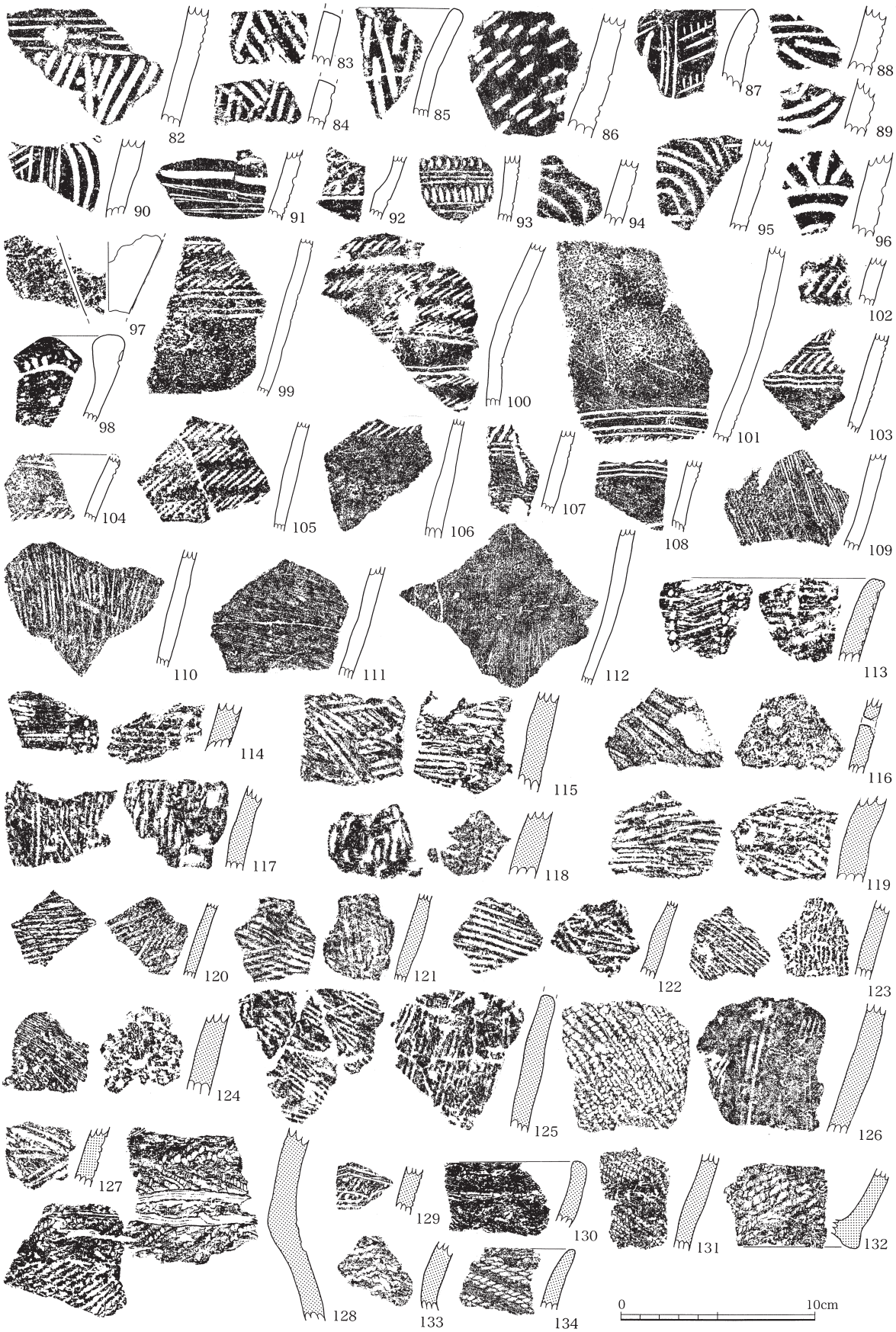
細めの棒状施文具で沈線を描く。42・48 は外削ぎ状の口縁端部をなし、他は口縁端部断面が角頭状。42 は一本描きの横位沈線を描く。43 ～ 46 は口縁部に一本描きの山形沈線を施文後に細密な沈線を充填する。45 は波状口縁で、胴部に細めの丸棒状施文具で一本描きの横位沈線を描き、45・46 は口縁端面と内面をよく磨く。46 だけは多截竹管状の施文具で、やや間隔の空いた 2 本 1 組の細線を充填している。47 ～ 49 は口縁部の縦沈線と胴部の横沈線を持ち、48・49 は縦沈線が浅く幅広い。横位平行沈線文帯に接して斜行沈線文を描く 50 ～ 54 は、ほぼすべて細線だが、50 の上部には太線もみられる。50・51 では斜線→横線、54 では横線→斜線の施文順序がわかる。55・56 は横位沈線の間隔が狭く、55 は外傾接合の面が剥がれている。57･58 は胴部中位の破片。42 ～ 58 は SG1 区と SG10 区で出土している。42 は SG1 区 SD-37 西側、43 は SG10 区 20.0-20.1 グリッド、44 は SG10 区 20.2-20.2 グリッド、45 は SG10 区 SD-304A の X22.7 付近、46 は SG10 区 22.5-18.5 グリッド付近、47 と 49 は SG10 区 SI-61、48 は SG10 区 SK-251、50 は SG10 区 SD-505、51 は SG10 区 21.10-17.65 グリッド、52 は SG1 区 SD-37 西側、53 は SG10 区 SI-64 南側、54 は SG1 区内出土、55 は SG10 区 22.2-18.4 グリッド、56 と 58 は SG10 区 SI-61、57 は SG1 区 SD-37 で出土した。

〔**2 種**〕細沈線で施文し、貝殻腹縁文を充填するもの。（59 ～ 68）

放射肋のある貝殻を使用する。59 は口縁部上端面にふくらみを持ち、口縁部は横位と斜位の貝殻腹縁文で、下方にあったとみられる細沈線文は欠損している。59・60 は貝殻腹縁を器面に直角に当てる。60 ～ 63 は横細線を重畳して区画した間を斜細線と貝殻腹縁文で充填する。61 ～ 64 は貝殻腹縁を器面に対して少し斜めに当てる。64 ～ 66 は二本一組の斜位細沈線を互いに鈍角方向に当てる文様があり、二本線の間隔が狭い 64 から広い 65 まで差がある。65・66 は斜位に当てた貝殻腹縁を短く引きずる。67・68 も二本一組の横細線があり、貝殻の背側をやや長く引く。59 ～ 68 はすべて SG10 区で出土した。59 は SG10 区 SI-45（以下「SG10 区」を省略）、60 は SD-501 の 20.5-19 グリッド、61 は SI-10、62 は SD-201 の 18.0-17.0 グリッド、63 は SD-501 の 21.1-18.4 グリッド、64 は SI-50、65 は SI-308、66 は SI-53、67 は SD-304A の 22.3-17.9 グリッド、68 は SI-61 出土。

〔**3 種**〕太めの沈線を施すもの。（69 ～ 86）

線の太さに対してやや浅く、えぐり取るように描くので、線の底面に細砂粒の移動を観察できる。横沈線を描く 69 ～ 77 と 81 は主に胴部中～下位とみられ、70･71･76 は底部に近くて厚く、70 は内面が黒褐色。71・73 ～ 76・81 は短い線を少しずらして横につなぐ。縦沈線を描く 78 ～ 80 と、縦線間を平行斜線で



第 37 図　権現山遺跡　遺構外出土の縄文土器 (2)

埋める 82 ～ 85 は、カーブが緩いので胴部上半。82 は縦・斜線に比べて横線が少し細く、横線の底面には砂移動痕がない。破片中央下部にある刺突文は、半円形に近い形で器面をえぐるように施文し、脇の粘土は盛り上がらない。85 は口縁部で、内面を丁寧に磨く。短斜線を描く 86 は底部に近くて厚く、内面が黒褐色。

69 ～ 86 のうち 77 と 82 は SG1 区、他は SG10 区で出土した。69 は SG10 区 SI-110、70 は SG10 区 SI-34、71 は SG10 区 SD-201、72 は SG10 区 SD-304 の 21.4-18.7 グリッド、73 は SG10 区 SI-73、74 は SG10 区 SI-64 東側（注記は SK-516）、75 は SG10 区 SD-503 の 21.5-19 グリッド、76 は SG10 区 SK-265、77 は SG1 区出土、78 は SG10 区 SD-304、79 は SG10 区 SD-509、80 は SG10 区 SI-106、81 は SG10 区 SI-61、82 は SG1 区 SD-37、83 は SG10 区 SE-345、84 は SG10 区 SD-308 の東部、85 は SG10 区 SD-304、86 は SG10 区 SK-675 付近出土。

〔**4 種**〕太沈線と細沈線を組み合わせるもの。（87 ～ 91）

いずれも上半部の破片。太沈線は 3 種と同様で、えぐるように描く。87 ～ 90 は縦・斜・横位の平行細沈線を描いた内部に、太沈線で弧線を入れる。87 は口縁端面が外削ぎ状で、細い平行横線に沿って細い平行縦短線を配し、内面は横方向に丁寧に磨く。89 は内面が黒褐色。91 は下に平行横細線を描き、その上側では横方向につなぐように太線を描く。87 は SG10 区 SD-304、88 は SG10 区 23-19.5 グリッド採集、89 は SG10 区 22.0-18.6 グリッド、90 は SG10 区 SD-304、91 は SG10 区 SI-61 出土。

〔**5 種**〕平行沈線による区画の中に刺突あるいは縦位の短沈線を入れるもの。（92・93）

92 は、平行斜線間にごく浅い弧状刺突を約 6mm 間隔で入れる。その下側では右上方から刺突した浅い孔を横に並べ、孔の左脇に粘土が少しはみ出す。内面は黒褐色で、内面側だけに口～頸部境の段を持つ。93 は平行細沈線による横位の区画帯に縦位の短沈線を充填する。92 は SG10 区 SI-73、93 は SG1 区 SI-2 で出土した。

〔**6 種**〕曲線（渦文）を施すもの。（94 ～ 96）

平行太沈線で曲線を描く。太沈線は 3 種と同様で、えぐるように描く。94 は SG1 区、95 は SG1 区 SD-37、96 は SG10 区 SI-63 で出土。

〔**7 種**〕底部。（97）

長く延びる尖底状で、黒・透明砂～細砂と白細砂が多いが砂の移動痕が目立たないので、削った後にナデていると思われる。97 は SG10 区 SI-106 で出土。

3 類　田戸上層式土器。（98）

頸部から口縁部にかけて彎曲する器形と見られ、波状口縁の上端が厚くなる。外面は口縁部に沿って太沈線を 1 本入れ、その上側に太い短沈線を配列する。黒・灰色・透明砂～細砂が多く、白細砂も含み、にぶい橙色（5YR6/4）。SG5 区 SD-101 で出土。

4 類　出流原式土器。（99 ～ 112）

4 類の胎土は白・黒砂～細砂がやや多く、赤粒～細粒も含む。繊維は含まない。やや硬質またはやや軟質の焼成で、にぶい褐色～橙（7.5YR5/4 ～ 6/6）またはにぶい黄橙色（10YR6/3 ～ 7/4）。

〔**1 種**〕ヘラ状施文具による多段の連続刺突を施すもの。（99 ～ 108）

わずかに丸味のある原体で浅く刺突する出流原ｂ式であり、角張った原体で深く刺突する出流原ａ式は含まない（阿部 2009）。99 ～ 101 は胴部中位に広い無文帯を持つ同一個体の破片とみられるが、阿部芳郎氏の御教示によると出流原式でこのような広い無文帯を持つ例は今のところ知られていない。斜位の刺突を横に連続させて多段に並べ、最大 6 段が残る（100）。99 ～ 101 は二本一組の浅い横沈線を二段（計 4 本）で区画する。また、104 は二本一組、103（破片上位および破片中位の区画線）と 107・108 は三本一組である。108 の破片下端にも横沈線が一本だけ残っている。外面は軽いナデ調整、内面は丁寧なナデで、107 は破片下端を横方向に削る。107・108 の外面ナデはきわめて浅い斜位条痕とみることもできる。106

の外面に煤が付着する。

SG5 区中央部東半の台地東端から低地にかけて古墳時代遺物包含層を調査した小グリッド（番号 21 ～ 45）から主に出土した。99 ～ 101 は SG5 区 45 グリッド、102 は 4 区 SI-31、103・104 は SG5 区 33 グリッド、105 は SG5 区 21 グリッド、106 は SG5 区 33 グリッド、107 は SG5 区 SD-101、108 は SG5 区 38 グリッド出土。

〔**2 種**〕浅い条痕を施すもの。（109 ～ 112）

1cm あたり 7 ～ 10 本の細かく浅い条痕を外面に施す。胴部下半とみられ、110 と 112 は内面が黒褐色。109 は SG10 区 19.8-20.6 グリッド、110・111・112 は SG5 区のそれぞれ 39・40・45 グリッド出土。

【第３群　早期条痕文系土器】（第 37 図 113 ～ 125、写真図版 104）

条痕文系土器はにぶい橙色～浅い黄橙色の軟質焼成で、繊維多量と白砂を含む胎土が主体で繊維の脱痕が目立つ。SG10 区の中央部付近に多い傾向がある。

１類　縦位の刺突を持つもの。（113・114）

113 と 114 はすぐそばで出土し、同一個体の可能性がある。横～斜位の条痕を内外面に施し、僅かに斜め下方から刺突を縦位に連続して行う。繊維と白・黒・透明砂～細砂が多く、白礫も少量含み、にぶい橙色（7.5YR6/4）。113 は SG10 区 SD-319、114 は SG10 区 SI-34 で出土した。

２類　貝殻条痕を内外面に施す胴部破片。（115）

外面に斜位、内面に横位の条痕を施す。繊維と白粒・細粒が多く、白砂と黒・透明細砂も含み、軟質でにぶい黄橙色（10YR7/3）。SG10 区 SI-56 出土。

３類　貝殻以外の条痕文を内外面に施すもの。（116 ～ 125）

116 と 120 ～ 123 の薄さからみて胴部上半の外面に斜～横位の条痕が多く、117 ～ 119 と 124・125 の厚さから見て胴部下半の外面に斜～縦位の条痕が多い傾向がみられる。116 は補修孔がある。124 は外面が細密な条痕で、内面は同様の条痕というよりむしろナデに近い。３類は１・２類と同様のにぶい黄橙色～浅黄橙色で、繊維と白粒・細粒と黒細砂が多く、119・124・125 は白砂・白礫も目立つ。116 だけは黒・透明砂が多く、灰白色（7.5YR8/1）で胎土が異質。

116 は 2 区南部付近の確認調査トレンチ TX41-11、117 は 4 区 SI-25、118 と 119 は SG10 区 SD-527 の 22.5-19.5 グリッド、120 は SG10 区 SD-594、121・122 は SG10 区 SD-319、123 は SG5 区 SI-21、124 は SG10 区 SI-16、125 は 4 区 35-13 グリッド出土。

【第４群　早期末葉の土器】（第 37 図 126、写真図版 104）

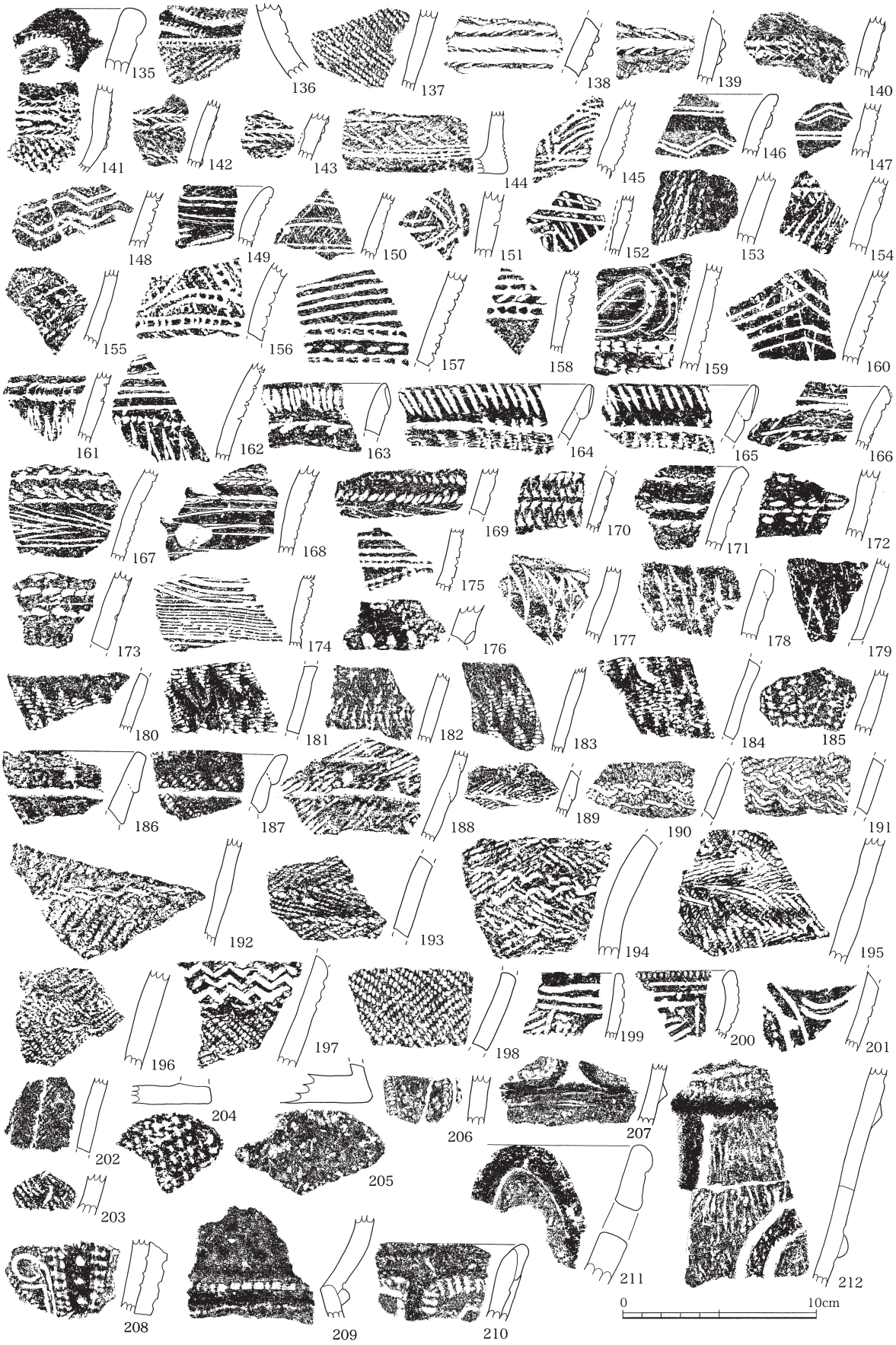
１類　縄文条痕土器。（126）

外面は 2 段 RL 横位施文、内面は丁寧なナデの後に粗い条痕を浅く施す。繊維と透明砂～細砂が多く、白細粒も含み、やや硬質でにぶい橙色（7.5YR7/4）。SG5 区 14-17 グリッド表採（注記は 17-14）。

【第５群　前期の羽状縄文系土器】（第 37 図 127 ～ 134、写真図版 105）

１類　黒浜式土器。（127 ～ 134）

127 は多截竹管状施文具による斜位・横位平行沈線で頸部に文様を描く。2 片が接合する 128 は、頸部は 1 段 L と 1 段 R の縄で横位に施文して羽状に構成し、胴部は 1 段 L 横回転で施文後、頸～胴部の境に二本の幅広く浅い横位沈線を引く。129 は 1 段 L の縄による無節縄文を地文とし、半截竹管状施文具により平行線を描く。130 は内彎する口縁部で外面に 1 本の浅凹線があり、他の文様は磨滅して不詳。131 は外面が 2 段 RL 横回転で、内面を丁寧に磨く。132 は薄手で上げ底状になり、胴部は 1 段 L の横回転。133・



第 38 図　権現山遺跡　遺構外出土の縄文土器 (3)

134 は同一個体の可能性があり、1 段 R の縄を二本一組にして附加した附加条縄文を施す。

いずれの土器も胎土に繊維と白細粒が多く、透明細砂も含み、129・131・134 は黒細砂も少し見られる。明暗の差はあるがほぼ灰褐色～にぶい橙色（7.5YR5/2 ～ 7/4）で、127・131 はにぶい黄橙色（10YR7/2）。出土地区は一定せず様々で、127 は SG10 区 18.2-20 グリッド、128 は 2 区 42.5-12.5 と 42.5-12.7 グリッド、129 は SG10 区 17.8-19.5 グリッド、130 は 2 区 43.5-12.5 グリッド、131 は SG1 区表採、132 は SG10 区 SI-88、133 と 134 は SG5 区 SK-181。

【第６群　前期の竹管文系土器】（第 38 図 135 ～ 145、写真図版 105）

１類　諸磯ａ式土器。（135 ～ 137）

135・136 は同一個体の可能性が高い。135 は口縁部に突起が付いてやや厚くなり、竹管の背で描いた曲線状沈線の外側斜面に、半裁竹管の腹で C 字形の連続刺突を行う。136 は胴部上端に 2 段 LR 横回転で施文後、半截竹管の腹で押し引きした連続刺突による横線で頸～胴部境を区画し、頸部は竹管の背による沈線の上側斜面に半截竹管の小口で C 字形刺突を連続する。137 は 2 段 RL で縄文を施す。135 ～ 137 は硬質で透明・白砂～細砂多量と黒細砂、135・136 には白色針状物質（骨針）も含む。135・136 は灰褐色（7.5YR4/2 および 5/2）、137 はにぶい赤褐色（5YR5/4）。135・136 は SG1 区 SI-1、137 は SG10 区 SD-527 出土。

２類　諸磯ｂ式土器。（138 ～ 145）

138 ～ 143 は浮線上に刻みを入れる。138・139 は同一個体の可能性が高く、斜線刻みを入れた高い浮線の間を横へなぞるようにナデて、139 は胴部に 2 段 RL の縄を横位に回転する。140 ～ 143 も同一個体で、扁平な浮線の上に矢羽状の刻みを入れる。141 下部の地文は 2 段 RL 横回転。144・145 はｂ式の新段階で、144 は上部が開く深鉢の底部外面に地文の RL 縄文をやや広く見せ、半截竹管の平行沈線が上下にある。144 の内面にコゲが付く。145 は半截竹管の腹による平行線で集合沈線を描く。138 ～ 145 は灰褐色～橙色（5YR5/2 ～ 7/6）の硬質で白・透明砂～細砂が多く、黒細砂も含み、140 ～ 144 には灰色砂も多い。138・139 は SG1 区 SI-13、140 ～ 143 は SG10 区東半低地部（140 は 19.0-20.2、141 と 143 は 19.9-20.3、142 は 19.9-20.2 の各グリッド）、144 は SG10 区 S-308、145 は 4 区 SI-59 出土。

【第７群　浮島式および興津式土器】（第 38 図 146 ～ 185、写真図版 105）

第 7 群は緻密で焼成が比較的硬く、にぶい橙・にぶい黄橙～浅い黄橙色（7.5YR7/3 ～ 8/6 および 10YR7/3 ～ 8/6）。白・透明細粒を含み、白砂も少量含む。

１類　半截竹管で平行沈線を描くもの。（146 ～ 152）

〔**1 種**〕間隔の狭い平行沈線を描くもの。（146 ～ 150）

平行沈線幅は 3.5mm 前後で、148 は 5mm。146・147 は同一個体の可能性があり、146 は貼付口縁。148 は原体不詳の撚糸文、150 は 1 段 R の浅い撚糸文を地文とし、他は地文がない。146・147 は 4 区の SI-25 と 26、148 は 4 区 35-13 グリッド、149・150 は SG10 区の SI-66・73 で出土。

〔**2 種**〕間隔の広い平行沈線を描くもの。（151・152）

1 段 R の撚糸文を地文として、半截竹管の腹で幅 5.5 ～ 6.0mm の深い平行沈線文を描く。151 は 4 区 SI-25、152 は 4 区 SK-41 で出土した。

２類　撚糸文を縦方向に施すもの。（153 ～ 155）

撚糸文を地文とする浮島Ⅰ式。153 は地文 1 段 L で、破片上端は沈線に沿って折損している。154 は地文 1 段 R で、破片上部に半截竹管の腹部角で有節平行線文を描く。155 の撚糸文は 1 段 L かもしれないが不明瞭。153 は 4 区 SK-106、154 は 4 区 SI-21、155 は 4 区 SD-304 で出土した。

３類　半截竹管により平行線と爪形文を描くもの。（156 ～ 159）

半截竹管の腹で平行線を引きながら等間隔で刺突している。159 の破片下部では刺突部分に粘土の盛り上がりが目立つ。157・158 は平行沈線間にヘラ先で連続刺突も行う。156 は 1 段 L による縦方向の撚糸文を地文に持つが、157 ～ 159 は地文がない。156 は SG10 区 SD-527 の 23.0-19.5 グリッド、157 は SG5 区 15.5-15.5 グリッド（調査区外採集？）、158 は SG5 区 SD-42、159 は SG10 区 SD-815 で出土した。

4 類　波状貝殻文を地文として平行沈線文を描くもの。（160 ～ 162）

放射肋を持たない貝殻腹縁で施文し、160 は貝殻圧痕が繊細で、平行沈線の山形文を重ねて描く。161・162 は貝殻圧痕が幅広く、161 上部には爪形の両端が深い変形爪形文、162 では貝殻文と平行沈線の間に有節沈線（平面三角形）を入れる。160・161・162 は SG10 区の SI-45・47・106 でそれぞれ出土した。

5 類　口縁部に条線を入れる浮島 III 式土器。（163 ～ 165）

外削ぎ状の口縁端部に半截竹管で条線文を入れる。163 は口縁部直下に浅い沈線を入れて段に見せかけ、この沈線上に有節沈線を重ねる。164・165 は口縁部外面に積み上げ痕跡を装飾として残し、そのすぐ下段には放射肋を持つ貝殻の腹縁外面を少し引きずるようにして波状貝殻文を描く。163・164・165 は SG10 区の SI-34・60・61 からそれぞれ出土した。

6 類　半截竹管の小口端部で有節平行沈線文や変形爪形文を施文するもの。（166 ～ 173）

166 は 171 と同一個体と見られ、半截竹管の片側を当てた一本線で口縁部直下に横線と有節沈線を描き、破片下部にある有節沈線文は 171 を見るとロッキング施文の有節平行沈線である。167 では 1 列、168 では 2 列（上段は半欠）の幅広い有節平行沈線文を描き、167 ～ 169 の破片下半は平行線文。169・170・173 はロッキング施文で上下両端が深く施文される変形爪形文で、170 は縦長三角形が横位に密に連続するように仕上がる。172 も有節沈線であろうが、結果として連続刺突文になっている。166 は SG1 区 SD-98、167 は SG10 区 SD-201 の 19-17.5 グリッド、168 は SG10 区 SI-34、169 は SG10 区 SI-34(?)、170 は 4 区 SI-24、171 は SG1 区 SD-98、172 は SG10 区 SK-600、173 は SG10 区 SI-81 で出土した。

7 類　興津式土器。（174 ～ 176）

174 は櫛歯状施文具で横位の条線を描いた後に、半截竹管の平行沈線で弧線を描く。175 は幅の狭い半截竹管で施文し、平行沈線の横線文と、爪形文の斜線（菱形文？）を描く。176 は口縁部下方外面に輪積痕を残した部分に、器面に傾けて当てた多截竹管の背面で逆 C 字形の刺突を連続して凹凸文を作る。174 は SG1 区 SD-95 の 1 区、175 は SG10 区 SI-110、176 は SG10 区 SK-600 で出土した。

8 類　波状貝殻文を施す胴部破片。（177 ～ 185）

放射肋を持つ貝殻で施文する。177・178 は貝殻の背面を土器の器面に斜めに当て、179 では外面を縦位に削った後に貝殻腹縁を器面へ垂直に当てる。180 ～ 185 は貝殻の背面をすこし引きずるようにして波状文を施す浮島 III 式。177 は SG10 区 SI-70、178 は SG10 区 SD-501 の 20.5-19.5 グリッド、179 は SG10 区 SI-33、180 と 181 は SG10 区 SI-50、182 は SG10 区 20.0-20.3 グリッドの遺物集中部（注記は S-907）、183 は SG10 区 SI-45、184 は SG10 区 SI-50、185 は SG10 区 SD-201 の 19-17.5 グリッドで出土した。

【第 8 群　前期末葉の土器】（第 38 図 186 ～ 198、写真図版 105）

1 類　粘土積み上げ痕・横位結節縄文・結束のある縄文を持つ土器。（186 ～ 196）

第 8 群 1 類は灰褐色～にぶい褐色（7.5YR4/2 ～ 6/3）が主で、187 と 194 はにぶい黄橙色（10YR7/3）、190・191・193 はにぶい赤褐色（5YR5/4）。硬質で白色と透明の砂～細砂が多い。189 ～ 192 では金色の雲母細片、194 ～ 196 は黒砂～細砂も目立つ。また、196 は白色針状物質（骨針）も少量含む。

186 ～ 189 は粘土紐積み上げ痕を装飾的に残し、そこで破損した剥離面が目立つ。186・187 は口縁部で、186 は無文だが指頭で押したような浅い凹凸が見られる。187 は 2 段 RL、188 は 1 段 L を横回転する。

189 ～ 192 は 2 段 LR を用いた横位の結節縄文で、189 ～ 191 の破片上下端は粘土紐積み上げ痕で剥離している。193 ～ 196 は 2 段 RL と LR の原体を結束する。194 と 196 は 2 本の縄の閉端を結束する際に結び目を作る「結束第 2 種」と見られる。194 の破片上部では原体の上下の向きを変えて 1 回ずつ横位に施文した時に、結節縄文が左半部でずれて二股に見える。186 は SG10 区 SD-527、187 は SG1 区 SD-99、188 は SG5 区 SD-41、189 は SG5 区 14-16.5 グリッド確認調査トレンチ（注記は 16.5-14）、190 は SG10 区低地部 19.7-19.6 グリッド、191 は SG10 区 SK-811、192 は SG1 区低地部 5-B グリッド、193 は SG10 区 SD-527、194 は SG10 区 18.6-18.7 グリッド、195 は SG10 区 20.8-18.8 グリッド、196 は SG1 区 SI-1 で出土した。

2 類　平行沈線で鋸歯文を描くもの。（197）

197 は浮線ではなく、丸みのある施文具による 4 本以上の沈線で鋸歯文を描く大木 5 式～ 6 式。2 段 RL の縄で施した結節縄文が破片中位と下位に見える。にぶい黄橙色（10YR7/3）のやや硬質で白礫と白・黒砂～細砂が多く、透明砂～細砂も含む。SG10 区 SD-527 出土。

3 類　羽状縄文の胴部破片。（198）

198 は胎土の共通性から第 8 群に含めた。破片右下部は 2 段 LR、それ以外は 2 段 RL の縄を横位に回転する。縄の閉端を結束しているかもしれない。にぶい黄橙色（10YR7/4）のやや硬質で透明砂・細砂と白細砂が多く、灰色砂と赤粒も含む。198 は 4 区 SK-140 出土。

【第 9 群　五領ヶ台式土器】（第 38 図 199 ～ 205、写真図版 106）

第 9 群は、にぶい赤褐色～橙色（5YR4/3 ～ 6/6）・にぶい褐色～にぶい橙色（7.5YR5/3 ～ 6/4）の硬質で、白・透明の礫と砂～細砂が多い。200・201・203・204 では金色雲母、205 では白雲母も含む。

1 類　半截竹管状施文具の背で沈線、小口で刺突文を施すもの。（199 ～ 201）

199 は上部横線→左下部の斜線→縦線の順で沈線を描く。200 は口縁部内面に明確な稜を持ち、外面は原体不詳の無節縄文を地文として、口端に縦位の平行短線、口縁部の横線間には交互刺突を行う。201 は弧線に沿って連続刺突を入れる。199 は SG10 区 SD-527 の 22.5-23 グリッド、200 は 4 区内出土、201 は 4 区 SI-76 出土。

2 類　縦位の結節縄文を持つ胴部破片。（202・203）

202 は 2 段 RL、203 は 2 段 LR の縄で縦位の結節縄文を施す。202 は SG10 区 SD-594、203 は SG5 区 SI-18 出土。

3 類　底部破片。（204・205）

204 は 1 本超え -2 本潜り -1 本送りのザル編み圧痕を持つ。205 の底面はナデ仕上げで無文。204 は SG5 区 9.5-18 グリッド表採、205 は SG1 区 SI-1 で出土。

【第 10 群　阿玉台式土器】（第 38・39 図 206 ～ 214、写真図版 106）

第 10 群は、にぶい褐色～橙色（7.5YR5/4 ～ 6/6）か、にぶい赤褐色～橙色（5YR5/4 ～ 6/6）の比較的硬質で、雲母細片と白・透明砂～細砂が多い。雲母は 210 が白雲母で、それ以外は金色雲母。208・210・212 は白・透明礫も目立つ。206 だけは胎土が異質で、雲母を含まずに片岩の礫と黒細砂を含み、硬質・緻密。

1 類　三角押文を持つもの。雲母は含まない。（206）

206 は先端を剣先状にした多截竹管またはヘラ状施文具で、縦位の沈線と押引き沈線を描く。新道式の影響を受けた阿玉台 I 式。206 は SG5 区 13.5-17 グリッドで出土した（注記は 17-13.5）。

2 類　単列および複列の角押文を持つもの。（207 ～ 210）

207 は隆帯による区画帯の内部に、斜めに削いだ半截竹管を押引きし、複列に近く仕上げる阿玉台 II 式。

208 は III 式で、上下に長く貼り付けた高い隆帯の上面に 1cm 間隔の押圧を行い、隆帯の両側には斜めに削いだ竹管の背で下から上へ押引き沈線を施す。破片左半では蕨手形と逆Ｌ字形の沈線を描く。破片左縁にも右下～左上方向の連続刺突または押引き沈線を半截竹管で行う。209 は頸部下端に貼った断面三角形隆帯の上側に沿って多截竹管(?)の背で押引き沈線を描く。210 は低い隆帯で口縁部に作った区画帯の内側に沿って多截竹管の背で押引き沈線を施し、右区画では竹管幅が広くて、左区画では竹管が狭い。207 は SG5 区 14.5-17.5 グリッド、208 は SG9 区 9-18.5 グリッド、209 は SG10 区 SK-5 南側で出土し、210 は SG5 区南地区で表採。

３類　縄文を施すもの。（211・212）

211 は阿玉台 IV 式、202 は III 式または IV 式。211 は円孔のある把手の外周に隆帯が廻り、その内側に沈線が沿う。区画内に原体不明の浅い縄文が見られるが隆帯上は無文。212 は隆帯上と隆帯区画内に無節（原体１段Ｌ）または単節（２段 LR）の縄文が縦走する。211 は SG10 区 SI-78、212 は SG5 区中央東半の低地部で出土した。

４類　大形の把手または波状口縁を持つもの。（213・214）

213 は把手の内面側に凹面を作り、内外全面をよく磨く。214 は山形の口縁直下に貫通孔を持ち、口縁部外面の隆帯に沿って２本１組の施文具で２列の連続刺突を行い、頸部以下は４～６歯の櫛歯状施文具で縦方向の波状沈線を描く阿玉台 IV 式で、口縁部内面に稜を持つ。213 は SG10 区 SD-527 の X23.3-23.4 間、214 は SG2 区の C 区東半にある旧流路中で出土。

【第 11 群　加曽利Ｅ式土器】（第 39 図 215 ～ 236、写真図版 106）

１類　口縁部の把手や口頸部の隆線文様が発達した加曽利ＥⅠ式。（215 ～ 217）

１類は白・透明の砂と細砂が多く、黒砂・細砂も含む。215・216 はやや軟質で 217 は高質緻密、215 はにぶい褐色（7.5YR6/3）、216・217 はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）。

〔1 種〕口縁部の縦位沈線上に隆帯を貼り付けるもの。（215）

キャリパー形の深鉢で、丸棒状施文具で縦位沈線を描いた後に、内彎する菱形状に隆帯を貼って、脇に浅い沈線を入れる。215 は SG10 区 SI-81 出土。

〔2 種〕肥厚する口縁部および突起の上面に文様を持つもの。（216）

丸棒状施文具で口縁上面に深い溝を入れた後に、溝の底にヘラ状施文具の先で３～ 5mm 間隔の刺突を入れる。216 は SG10 区 SK-553B 出土。

〔3 種〕口頸部に複弧文を持つもの。（217）

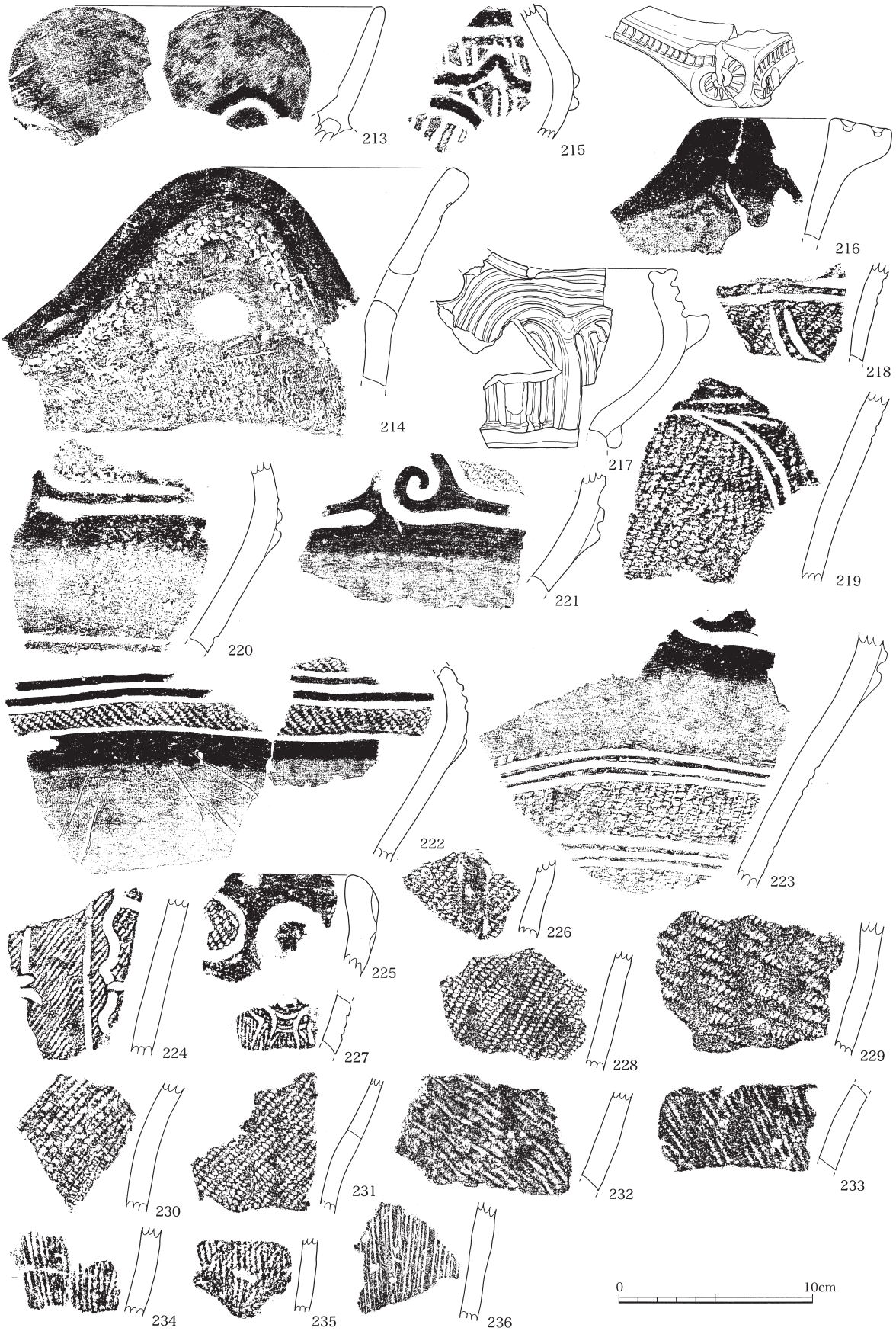
キャリパー形の深鉢で、図の左上部に貫通孔があり、この先に把手を持つ。「３」を横に倒した形の高い隆線があり、その周囲には相対的に低い隆線を半截竹管で作り出す。口端部上面と内面に凹線を持つ。217 は SG5 区 SD-227 の１片と SG5 区表採の２片が接合。

２類　縄文を地文とし、沈線間を磨り消さない胴上半部。（218・219）

218・219 は別個体で、地文は２段 RL 縦回転。頸部下端に２本の平行横線、胴部に２本の平行曲線を丸棒状施文具で描く。白・透明砂～細砂を含み、218 には金色、219 には金色と黒色の雲母粗～細片が多い。218 は灰褐色（7.5YR5/2）で、219 はにぶい黄橙色（10YR6/3）。218 は SG1 区 28-13 グリッド、219 は SG1 区 SD-45 出土。

３類　頸部に無文帯を持つもの。（220 ～ 223）

220 ～ 222 は口縁部の縄文が２段 RL 横回転で、無文帯や低い隆帯上を横方向によく磨く。223 は胴部縄文が２段 RL 縦回転で、狭い平行沈線間の縄文を磨り消す。金色雲母粗～細粒と白・透明砂～細砂が多いが、222 だけは金色雲母がなく黒砂～細砂が多い。いずれもにぶい黄橙色（10YR7/3）で軟質。220 は SG1 区



第 39 図　権現山遺跡　遺構外出土の縄文土器 (4)

中央低地中央部、221 は SG1 区南部の試掘トレンチ TX24-15、222 は SG10 区 SD-503 と SK-553 が接合、223 は SG1 区 SD-37 出土。

4 類　縦沈線と蛇行沈線を描く胴部。（224）

地文は 2 段 RL 縦回転で、太い丸棒状施文具で縦線と蛇行線を描いた後に、横線が縦線を切る。金色雲母粗～細片と白・半透明砂～細砂が多く硬質でにぶい橙色（7.5YR6/4）。SG10 区 SD-527 出土。

5 類　磨消縄文を用いる口縁部と胴部。（225・226）

225 は口縁部の楕円形区画内に 2 段 RL で横位に施文し、破片右側に渦巻文の一部が残る。226 は 2 段 RL の縄で縦位に施文し、平行沈線の間を磨り消す。この 2 点は加曽利 EII 式で、白粒～細粒と透明砂～細砂が多く、やや軟質で灰黄褐色（10YR4/2）とにぶい黄褐色（10TR5/4）。同種の胴部 3 片とともに 2 区の「F 地区表採」なので、2 区北部の X46 ～ X48 間付近で採集されたもの。

6 類　縦位条線を地文とし、細めの平行沈線で弧線と蛇行線を描くもの。（227）

平行沈線は半截竹管で描いたと見られる。金色雲母片と白・透明砂～細砂が多く、硬質でにぶい橙色（7.5YR6/3）。SG2 区の B 区東半で出土。

7 類　縄文・撚糸文・条線を施文する胴部。（228 ～ 236）

7 類はやや硬質で灰褐色～橙色（7.5YR5/2 ～ 6/6）が主体。加熱使用で内面が黒色化したものが多い。白・透明細砂が多く、一部には雲母も含む（228 に白雲母片、229・231 に金色雲母片が多い）。7 類 2 種（234・235）は 11 群 7 類に含めたが、粗い白砂や透明砂が少なくて胴部がわずかに薄いので別類にするべきかもしれない。

〔**1 種**〕縦方向に縄文を施文する胴部。（228 ～ 233）

232 は無節、233 はおそらく単節、他は明瞭な単節縄文。228 は SG10 区 SI-80、229 は SG2 区の C 区東半にある流路中、230 は SG10 区 SE-552、231 は SG10 区 SK-600、232 は SG10 区 SI-86、233 は SG5 区 SI-6 で出土した。

〔**2 種**〕縦位の撚糸文を持つ胴部。（234 ～ 235）

いずれも 1 段 R の縄で施す。234 は SG5 区 SX-129、235 は SG5 区低地南部で出土した。

〔**3 種**〕縦位の条線を持つ胴部。（236）

2cm あたり 8 ～ 10 本の施文具を使う。236 は SG10 区 20.1-20.3 グリッド出土。

【第 12 群　堀之内 1 式・2 式土器】（第 40 図 237 ～ 242、写真図版 107）

1 類　堀之内 1 式土器。（237 ～ 240）

〔**1 種**〕3 本単位の沈線で文様を描くもの。（237）

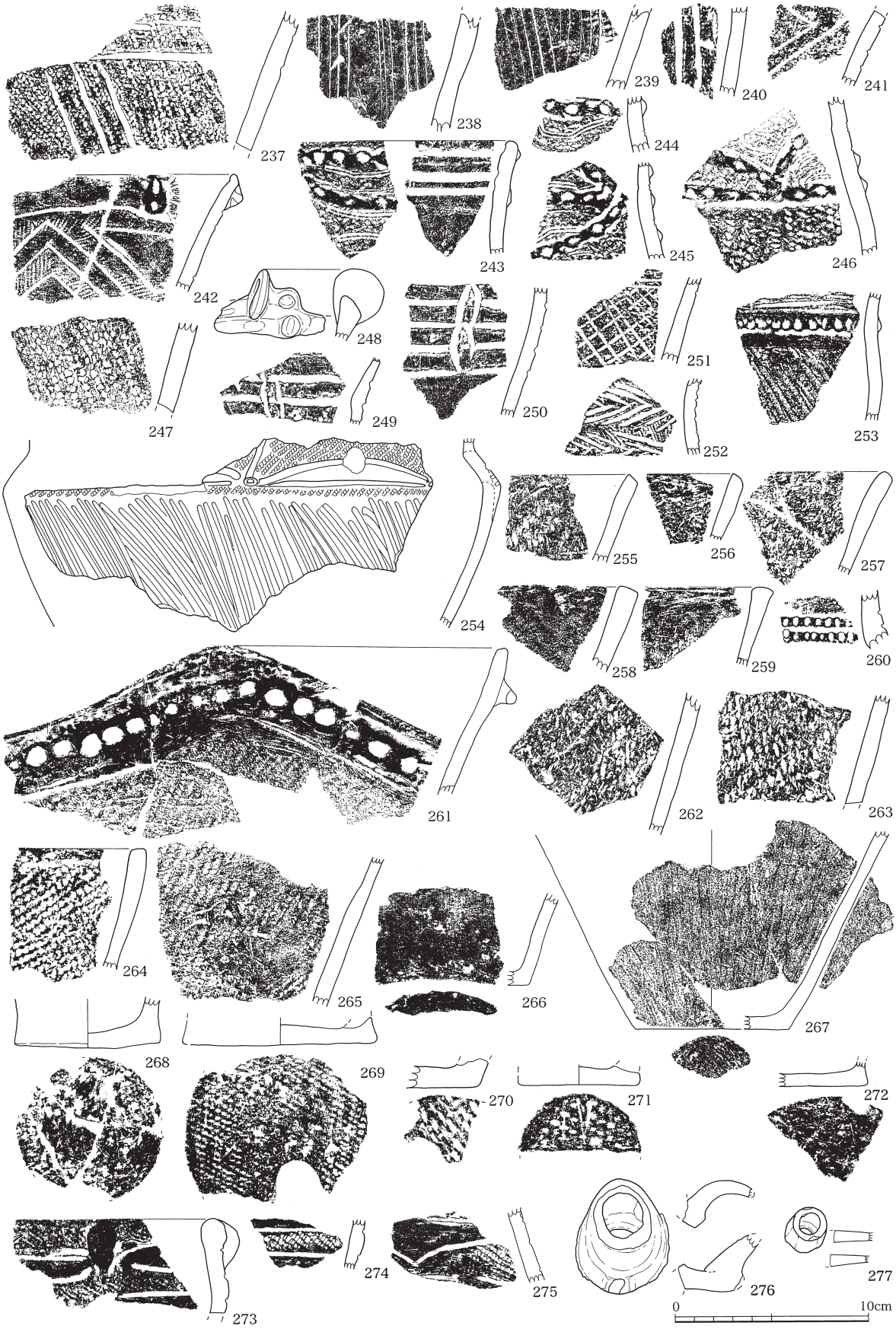
237 は地文が 2 段 LR の縄をやや斜位に回転する縄文で、2 本以上の横沈線で頸部を区画し、胴部に三本一組の沈線で単位文様を描く。硬質で白・透明礫～細砂と金色雲母片が非常に多く、にぶい赤褐色（5YR5/4）。SG10 区 SD-503 の 23.5-19.5 グリッド出土。

〔**2 種**〕多条沈線で文様を描くもの。（238・240）

238 と 239 は同一個体とみられ、細く鋭い沈線 3 ～ 5 本を一組とする施文具を使う。240 は太い丸棒状施文具を使い、破片上端部には横に延びる弧線状の文様があった痕跡が見える。2 種は白・灰色砂～細砂と黒・透明細砂がやや多く硬質で、浅黄橙色（10YR8/3）～にぶい橙色（7.5YR7/3）。238 は SG10 区 SI-87、239 は SG10 区 SK-447、240 は SG10 区 SD-503 の 23.0-19.5 グリッドで出土。

2 類　堀之内 2 式土器。（241・242）

241・242 は朝顔形深鉢。241 は外面ヘラケズリ調整後に菱形文を描き、二本線の間のヘラケズリ擦痕を消すように見える。242 は菱形文の内部に 2 段 LR の縄で縄文を充填して、非充填部と口縁部を平滑に磨く。



第 40 図　権現山遺跡　遺構外出土の縄文土器 (4)

棒で２箇所刺突する貼り付け文を先に付け、その直下の横沈線を曲げて避けている。白・灰色砂～細砂多量と黒細砂少量を含み硬質で、にぶい橙黄色（10YR7/3）～にぶい橙色（5YR6/3）。241 と 242 は SG1 区東部の低地で出土し、241 は確認調査トレンチ TX28-13、242 は SG1 区 28-13 グリッド北トレンチ。

【第 13 群　加曽利Ｂ式および曽谷式土器】（第 40 図 243 ～ 272、写真図版 107）

1 類　紐線文の粗製土器。（243 ～ 247・253）

〔**1 種**〕縄文を地文として押圧のある弧状紐線文を頸部に持つ粗製土器。（243 ～ 247）

加曽利 B2 式期の遠部第３類土器（阿部 2001）。243 ～ 247 は同一個体の可能性がある。浅くやや不明瞭な縄文を２段の縄（RL?）で施し、弧状紐線を貼った間に半截竹管状施文具で平行条線を充填する。243 は推定口径 18 ～ 22cm 程度で、口縁部内面に３条の平行凹線を持つ。胴部破片 247 には被熱痕跡がなく、244・246 の外面に焼成時の薄い黒斑がある。

白・赤細粒がやや多く黒・透明細砂も含みやや軟質でにぶい橙色（7.5YR7/4）。243・244・247 は SG10 区 SI-75、245 は SG10 区 SD-527、246 は SG10 区排土中で出土した。

〔**2 種**〕横位の紐線文がある粗製深鉢。（253）

頸部下端の粘土紐上を押圧する。頸部に横位、胴部に斜位の浅いナデビキ単線を入れる。253 は白・黒・透明細砂がやや多く硬質で褐色（7.5YR5/2）。SG10 区 SI-57 で出土した。

2 類　左右非対称の耳状突起を口縁部に持つもの。（248）

加曽利 B1 式の精製深鉢で、突起の右側には２個の凹みを縦位に並べる。白・透明細砂が多く、黒細砂も含み、やや軟質で灰黄色（2.5Y7/1）。SG9 区 8-20 グリッドで出土した。

3 類　平行沈線の後に縦位の対弧線で区切りを入れる精製深鉢。（249・250）

加曽利 B1 式または B2 式。外面はケズリ調整で、縄文などは充填しない。249 は頸部下端～体部の境がくびれる。250 は対弧線が縦に長い。白・透明砂～細砂を含み、249 には灰色砂・細砂も多い。硬質で 249 は灰白色～黄灰色（2.5Y8/2 ～ 4/1）、250 は橙色（7.5YR7/6）。249 は SG9 区 7-21 グリッド、250 は SG10 区 SD-503 の 22.5-19.0 グリッドで出土した。

4 類　沈線で格子文や羽状文を描く精製深鉢。（251・252）

251 は破片上部に平行横沈線がある。252 は明瞭で密な条痕（条線）を地文として、その上に羽状沈線を描く。白・透明砂～細砂を少量含み硬質で、251 は外面が黒褐色で内面が浅黄橙色（10YR8/3）、252 はにぶい黄橙色（10YR7/4）。251 は 4 区表面採集、252 は SG10 区 SD-527 の 22.5-19.5 グリッドで出土。

5 類　胴部上位に磨消弧線文を描くソロバン玉状深鉢。（254）

加曽利 B3 式。弧線の連接点を竹管の木口で刺突する。弧線の上側は２段 LR 横回転の縄文を充填し、ソロバン玉状の張り出し部にも縄文を付ける。無文部はよく磨く。胴部下位のナデビキ斜線は、単斜線および二本一組斜線で描く。254 は白･透明砂～細砂が多く、黒･灰色細砂も含み、硬質でにぶい褐色（7.5YR5/3）。SG5 区 SD-101 の 13.5-16.5 グリッド（注記は 16.5-13.5）で出土した。

6 類　無文および粗い縄文を持つ口縁部。（255 ～ 259）

口縁部が無文の精製土器も含んでいるかもしれない。255 ～ 257 は外面にケズリ調整の擦痕を残し、255・257・259 は加曽利 B 式にみられる粗い縄文を浅く施す（262・263 と同様）。258・259 は口縁端面が広い。白・灰色・透明の砂～細砂が多く硬質で、255 は浅黄橙色（7.5YR8/4）、256 ～ 259 は灰白～灰褐色（7.5YR8/1 ～ 6/2）。255 は SG10 区 SI-116、256 は SG10 区 SI-75、257 は SG10 区 SD-503 の 22.5-19.0 グリッド、258 は SG5 区 SX-129、259 は SG5 区 SI-18 で出土した。

7 類　２段の平行沈線間に刻みを入れるもの。（260）

曽谷式土器。沈線は深く、刻みは少し浅い。260 は白･黒砂～細砂と灰色礫を含み灰黄褐色（10YR5/2）。

SG5 区 SI-19 で出土した。

8 類　押圧のある隆帯を持つ波状口縁部。（261）

加曽利 B3 式の波状口縁深鉢。隆帯より上側はナデ、下側は外面にケズリ調整の擦痕を残す。261 は白砂・細砂が多く、黒・透明細砂も含み、やや硬質でにぶい黄橙色（2YR6/3）。SG10 区 SD-594 で出土した。

9 類　縄文を施すもの。（262 ～ 265）

262・263 は同一個体の可能性もあるもので、加曽利 B 式にみられる粗い縄文を浅く施し（255・257・259 と同様）、原体は 2 段 LR 横回転かもしれないが不明瞭。264 は 2 段 LR の原体で比較的明瞭に縄文をつける口縁部。265 は 1 段 L の縄でごく浅い無節縄文を施し、それ以前のケズリ調整（擦痕）もよく残る。白・灰色砂～細砂と透明細砂を含み硬質で、にぶい黄橙～浅黄橙色（10YR7/3 ～ 8/4）。262 は SG10 区 SI-113、263 は SG10 区 SI-75、264 は SG10 区 SD-503、265 は SG10 区 SD-594D 出土。

10 類　底部破片。（266 ～ 272）

〔1 種〕底面が無文のもの。（266 ～ 268・272）

底面はナデ（またはミガキ）調整。胴部下位の外面は 266・267 が縦位、268 が横位に磨く。267 は密に重ねたナデビキが磨きの効果を出している。白・透明砂～細砂が多く、灰色細砂も含み硬質で、にぶい赤褐色～橙色（5YR5/4 ～ 7/6）。266 と 267 は外面が被熱赤化し、267 の内面は黒褐色。266 は SG2 区 F 区東、267 は SG5 区 SD-101 の 13.5-16.5 グリッド（注記は 16.5-13.5）、268 は SG5 区 9-18 グリッド、272 は SG10 区 SI-113 で出土。

〔2 種〕底面に網代編み圧痕があるもの。（269）

269 の圧痕は 1 本超え－ 1 本潜り－ 1 本送りで、経条が固定しているようにも見えるので、次の 3 種（ザル編み圧痕）に含められるかもしれない。調整は胴部下端外面が不詳、内底面がナデ。白礫と白・透明・灰色砂～細砂が多く、やや硬質で、褐灰色～にぶい黄橙色（10YR6/1 ～ 7/3）。SG2 区の F 区で出土した。

〔3 種〕底面にザル編み圧痕があるもの。（270・271）

270・271 の圧痕はともに 1 本超え－ 2 本潜り－ 1 本送りで、圧痕としては観察できない経条の間に、それよりも軟質の緯条を編み込んでいる。270 はにぶい黄橙色（10YR7/2）、271 はにぶい橙色（5YR7/3）。黒・白・透明細砂を少量含みやや軟質で、270 は SG5 区 SI-17、271 は SG9 区 8.5-19 グリッドで出土した。

【第 14 群　後期安行式土器】（第 40 図 273 ～ 277、写真図版 107）

SG10 区の北部に少量みられ、274 と 275 は同じ後世の溝に混入して出土した。

1 類　厚みのある隆起帯上に縄文を持つもの。（273・274）

273 は縦長の瘤を持ち、隆起帯上には 2 段 RL 横回転の縄文を入れ、低い部分は横位に磨く。274 も同様の小破片。黒細砂が多くて白・透明細砂も含み、硬質で灰褐色～にぶい橙色（7.5YR6/2 ～ 7/4）。273 は SG1 区 SD-36、274 は SG10 区 SD-521 で出土した。

2 類　弧線内に縄文を充填するもの。（275）

275 は一本の丸棒状施文具で描いた沈線内に 2 段 RL 横位の縄文を充填し、無文部はヨコヘラケズリの擦痕が見られる。内面は磨かずヨコナデ。SG10 区の SD-521 出土。

3 類　注口土器。（276・277）

277 は小破片なので後期か晩期か不詳だが、後期の 276 と一緒に便宜的に 14 群に含めた。276 は基部より先端側が薄く、注口の上部先端が下へ曲がり、基部の下側はふくらんで下へ垂れ下がる。巻き積み成形した接合痕が内面に残る。277 は細く直線的で、先端側よりも奥側で孔径が小さく、先端側から丸棒を差し込んで孔内面を調整している。276 と 277 は白・透明砂～細砂が多くて灰色砂と黒細砂も含み硬質で、にぶい黄橙色（10YR7/4）。276 は SG10 区 SK-233、277 は SG10 区 SI-40 で出土。

【第 15 群　大洞式土器】（第 41 図 278 ～ 288、写真図版 107）

大洞式土器は、SG5 区と SG10 区で出土した。279・280・286・287 は大洞 C2 式期の竪穴住居 SI-63 から混入した可能性がある（279・280・287 を出土した SD-304 が SI-63 を切り、286 を出土した SI-59 は SI-63 と隣接する）。SG10 区 SI-63 は権現山遺跡南部の報告書に掲載予定である。

1 類　羊歯状文を描く壺形土器。（278）

大洞 B-C 式で、羊歯状文の部分をよく磨く。上半を施文した後に、胴部下半に 2 段 LR 横回転の細かい縄文を施文する。白･透明砂～細砂多量と黒細砂･灰色砂･赤細粒を少量含み、やや硬質で浅黄橙色（10YR8/3）だが、内面全体と外面の多くは黒褐色を帯びる。SG5 区 SI-12 出土。

2 類　平行沈線間を連続刺突する深鉢。（279・280）

279 と 280 は先の鋭い棒状施文具で左側から斜めに刺突しているので、天地逆にして浅鉢と考えることもできるが、頸部がすこしすぼまる深鉢と見ておく。器面を磨く。279・280 は白・透明砂～細砂多量と黒細砂･灰色砂･赤細粒を少量含み、やや軟質で浅黄橙色（10YR8/3）。279 と 280 は SG10 区 SD-304 出土で、大洞 C2 式期の住居跡 SG10 区 SI-63 から混入した可能性がある。SI-63 に類似する深鉢もあるが、279・280 と同一個体ではない。

3 類　浅鉢の口縁部。（281）

口縁部外面上端を約 1cm 間隔で刻み、その下部は器面を抉るような沈線を施文している。縄文はない。白砂～細砂を含み、やや軟質でにぶい橙色（7.5YR7/4）。SG10 区 SI-86 出土。

4 類　工字文および平行沈線文の浅鉢。（282 ～ 285）

282 は太い平行沈線を 4 条以上持ち、破片上端が沈線部で割れる。白礫～細砂と透明･灰色砂～細砂を多量、白色針状物（骨針）と黒細砂を少量含み、硬質で橙色（5YR6/6）。SG5 区 12.5-17.5 グリッド表採。

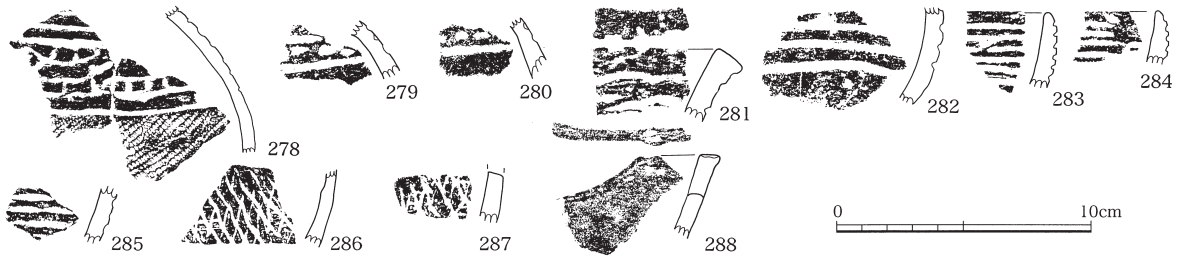
283 は上から 2 本目、284 は上から 3 本目の沈線が下方へ T 字形に出て工字状になる大洞 A 式。283 は外面を赤色に塗彩する。285 は平行沈線部の小破片。白・透明細砂を少量含み、やや硬質で、283 は灰黄褐色（10YR5/2）、284・285 は浅黄橙色（10YR 8/3）。283 は SG10 区 SD-43、284 は SG10 区 SD-201B、285 は SG5 区低地調査部の 28 グリッドで出土した。

5 類　網目状撚糸文を施す粗製深鉢。（286・287）

1 段 R の縄を巻いた単軸絡条体で縦位に施文する。白細粒多量と黒・透明細砂少量を含み硬質でにぶい黄橙色（10YR7/3）。286 は SG10 区 SD-304、287 は SG10 区 SI-59 で出土し、2 点とも大洞 C2 式期の住居跡 SG10 区 SI-63 から混入した可能性がある。SI-63 には類似する深鉢もあるが、286・287 と同一個体かどうかは断定できない。

6 類　突起を持つ口縁部。（288）

A 突起を持つ口縁部で、波頂部の口端上面を凹ませて、外面側に少し張り出す。大洞 C2 式の古相。黒・透明細砂が多くて白細粒も含み、やや硬質で褐灰色（10YR5/1）。288 は SG10 区 18.5-19.5 グリッド出土。



第 41 図　権現山遺跡　遺構外出土の縄文土器 (6)

第４節　弥生時代の遺物出土状況

［権現山遺跡 2 区・3 区］弥生時代の遺構・遺物は出土しなかった。
［権現山遺跡 4 区］弥生時代遺構はない。中期後半の東北南部系土器が SI-27、細かい撚糸文の土器が SI-29 に混入していた（50・74）。
［権現山遺跡 SG1 区］弥生時代遺構はない。中期後半の土器が南部にある。SI-8･10･174 と SD-31 に混入し、SD-31 にやや多い（12・17・18・20・56・58・59・66・67・69・80）。
［権現山遺跡 SG2 区］弥生時代遺構はない。弥生土器は主に中期で、遺構外または旧流路から出土した（10・19・31・63・64・81 ～ 84・89・109）。
［権現山遺跡 SG5 区］弥生時代遺構はない。前期の変形工字文土器（1・2）が中央部の SI-18・19 にあり、前期後葉～中期前葉の第 2 群 1・2 類（3・5 ～ 8）と 9 群 3・4 類（85 ～ 88・90 ～ 96）が中央部西端の SI-116 周辺にまとまる。中期中葉の出流原型（9）は東部低地にある。中期後半では、3 群（11・13 ～ 16）が中央東半（SI-22 と SK-247・219）と南部の SK-129 に、5 群（23・29・30・32）が東部低地、6 群（35 ～ 37）が中央東半の SK-203 と SI-20・18、擬縄文の 7 群 2 類（41）と 99・100 が南部遺構外と中央部の SI-18、東北南部系の 8 群（44・45・52・53）と 97・98 が遺構外と中央部西端の SI-12 にある。後期では二軒屋式（105）が東部低地にある。他に、縄文・撚糸文の 9 群 1・2 類（54・55・65・73・76 ～ 79）や底部片（106・107）がある。
［権現山遺跡 SG9 区］弥生時代の遺構はない。中期後半の貼付口縁土器（21）が 6.5-22 グリッド、後期の二軒屋式（102）と樽式（104）が 11-18.5 と 6-23.5 グリッド、木葉底片（108）が 7.5-19.1 グリッドにある。
［権現山遺跡 SG10 区］SG10 区では、弥生時代とみられる土坑が 1 基ある（次回報告予定の SK-544）。
遺構に伴わない遺物では、中期後半の土器として 5 群（24 ～ 28）が中央部～西部の SI-64・106 と SD-304、重四角文の 6 群 1 類（33・34）が北東部の SI-74、7 群 1 類（38 ～ 40）と 7 群 3 類（42・43）が中央部東半の SD-527・821 と遺構外にある。東北南部系の 8 群 1・2 類（46 ～ 49・51）は北東部に多く（SI-81 と SD-503・527）、中央西部の SI-106 にもある。後期は二軒屋式（103・110）が南西部の SI-30 と北西部遺構外にある。他に、縄文や撚糸文の 9 群 1・2 類（57・60 ～ 62・68・70 ～ 72・75）が出土した。
［権現山遺跡 SG15 区］弥生時代の遺構・遺物は認められない。

第５節　権現山遺跡各地区の弥生土器

弥生時代遺構は、権現山遺跡南部に土坑が 1 基ある（SG10 区 SK-544）。この土坑は、今後刊行する権現山遺跡南部の報告書に掲載する。弥生時代の遺構以外から出土した弥生土器は、地区ごとに分けないで、南部（SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区）を含む全地区で出土したものをまとめて分類し、本節で報告する。

【第 1 群　変形工字文を持つ土器】（第 42 図 1 ～ 2、写真図版 108）
1 類　大洞系の文様を持つ前期後葉の土器。（1・2）
1 と 2 は同一個体の可能性が高い。頸部より一段高い肩部に 1 段 L の縄で細かい無節縄文を地文として、深い沈線で工字文を描く。最上段の沈線は破片左端近くで止め、2 段目の沈線は破片中央で止めて、それぞれ工字状にする。「工」字の立棒の両脇は僅かに粘土を貼り足して高くする。口縁部は緩い波状。2 の正確な天地は不詳。白･透明砂～細砂が多く硬質。内外面の大半が黒褐色（10YR3/1）で、灰黄褐色（10YR6/2）の部分もある。1 は SG5 区 SI-18、2 は SG5 区 SI-19 で出土した。

【第２群　縄文を地文として沈線で弧線や菱形文を描く土器】（第 42 図３～ 10、写真図版 108）

第２群１類・２類は、第９群３類・４類とともに SG5 区 SI-116 に混入していた土器が主体で、前期後葉～中期前葉の土器である。第２群３類は中期前葉の新相。

１類　縄文を磨り消さないもの。（３～５）

〔**１種**〕弧線を描く胴部。（3）

２段 LR の縄で横位に施文したやや細かい縄文を地文とし、弧状の沈線を描く。５と同一個体の可能性もある。白・黒・透明細砂がやや多く、灰黄色（2.5Y7/2）で硬質。SG5 区 SI-116 で出土した。

〔**２種**〕菱形を描く胴部。（４・５）

５は３と同一個体の可能性もある。５は２段 LR の縄で縄文施文後に横位の菱形を連続させて描く。４も同様だが、菱形が横方向に連結している。４は白砂・細砂と黒・透明細砂を少量含みやや硬質で灰黄褐色（10YR5/2）。４は SG5 区 SI-20、５は SG5 区 SI-116 で出土した。

２類　菱形文と充填縄文のある鉢形土器。（６～８）

口径約 15cm に復原される同一個体の破片で、文様は１段目と３段目が半月形の中に２段 RL 横位の縄文を充填し、２段目は菱形で縄文を入れない。黄灰色～黒褐色（2.5Y4/1 ～ 3/1）で外面の黒味が強いのは煮炊使用の煤によると思われる。透明・灰色砂～細砂と白細粒を含み、やや硬質で黒色（2.5Y2/1）。SG5 区 SI-116 の５片、SG5 区 16.5-14.5 グリッド表採の１片、SG5 区 SI-16 の１片が同一個体。SG5 区 SI-16 と SI-116 は隣接している。

３類　刺突文・斜線文を描く出流原型の土器。（９・10）

９は丸棒状施文具の端部～木口部で刺突を繰り返す。10 は２段 LR で横位施文したやや浅い縄文を地文とし、一本の丸棒状施文具で横位と斜位の沈線を描く。10 の外面破片下位に煤が少量見られ、破片内面上縁部には内容物の水位上縁ラインに沿ってコゲが薄く付着する。透明細砂が多く、白砂～細砂と黒細砂も少量含み、硬質で褐灰色（5YR4/1）。９は SG5 区の低地調査小グリッド 25、10 は SG2 区の E 区で出土した。

【第３群　横に長く延びた波状文を描く土器】（第 42 図 11 ～ 16、写真図版 108）

中期後半の土器で、SG5 区に多い。３群１・２類（11・12）は白・灰色砂～細砂と黒細砂を少量含み、にぶい橙色（7.5YR7/4）で硬質。　３群３類（13 ～ 16）は淡黄色（2.5Y8/3）のやや硬質で、胎土が粗くて白礫～細砂と灰色・透明砂～細砂が非常に多く、13 は金色雲母片も少量含む。

１類　太い丸棒状施文具を用いるもの。（11）

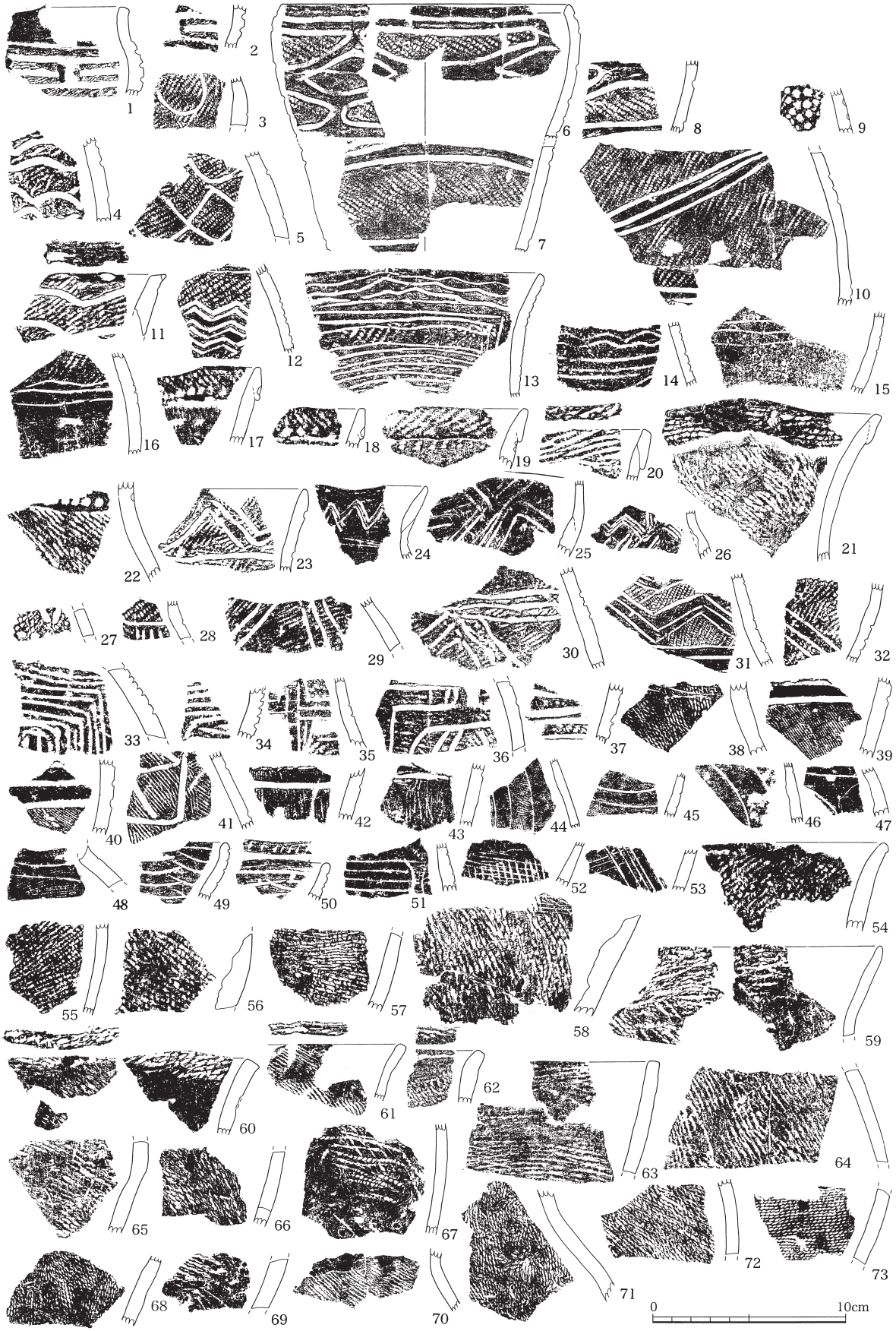
７は短く外へ張り出した口縁端を約 1cm おきに押圧している。１段 L による無節縄文を地文として波状沈線を描き、磨消は見られない。SG5 区 SI-22 出土。

２類　二本一組の丸棒状施文具を用いるもの。（12）

破片上端に横線をひいてから、破片上半に LR 横位の縄文を充填した後に、破片下半に波状文を２本ずつ描く。SG1 区 SI-10 出土。

３類　やや細い丸棒状施文具を用いるもの。（13 ～ 16）

13 は頸部の重四角文がやや細く、口縁部の波状文をやや太い線で描く。重四角文を描いた後に、中央部だけ２段 LR の縄文を横位施文で充填する。14 は 13 と同一個体の頸部下位で、地文はない。13・14 の外面には煤が付着する。15・16 も 13・14 と同一個体かもしれないが不確実で、頸部下端に横位の波状文を描き、胴部外面は横～斜位に軽くヘラケズリしている。16 は波状文の上側に２段 LR の縄で横位に施文する。14・15・16 の内面は斜位ヘラケズリで砂移動痕が顕著。13・14 は SG5 区 SK-247、15 は SG5 区 SK-219、16 は SG5 区 SK-129 出土。



第 42 図　権現山遺跡　遺構外出土の弥生土器 (1)

【第４群　貼付口縁の土器】（第 42 図 17 ～ 22、写真図版 108）

中期後半の土器で、主に甕形土器。17 と 18 は同一個体で、22 も同一個体の胴部と見られる。貼付口縁部に 1 段 R の縄で無節縄文を施文してから、口縁部下端に棒状施文具の木口隅でやや右下から連続して刺突する。22 は 1 段 R の縄で無節縄文を施文して、頸部に棒状施文具の木口隅でやや右から連続刺突している。19 は二本一組の施文具で横位に刺突した上側に貼付口縁を付け、2 段 LR で横位に施文する。20 は 1 段 R の縄を巻いた原体で撚糸文を貼付口縁部と口縁端面に施文する。21 も 1 段 R の撚糸文を、貼付口縁部と頸部に施す。第 4 群は黒・透明細砂が多くて白・灰色砂～細砂も含み、やや硬質で、18・19・20・22 はにぶい橙色（7.5YR7/4）、19 は灰白色（2.5Y7/2）、21 は灰褐色（5YR4/2）。17・18・22 は SG1 区 SD-31、19 は SG2 区の C 区西部、20 は SG1 区の SI-8、21 は SG9 区の 6.5-22 グリッドで出土。

【第５群　波状文・山形文・鋸歯文などを描く土器】（第 42 図 23 ～ 31、写真図版 108）

中期後半の土器で、SG5 区と SG10 区に多い。

1 類　甕形土器の口縁部。（23・24）

23 は 2 段 LR の後に一本の施文具で描く。24 は外反する口縁部に二本一組の施文具で山形文（波状文）と、頸部に横線を描く。23 は白・灰色砂と黒細砂を含み硬質でにぶい褐色（7.5YR5/3）、24 は黒細砂と透明砂～細砂多量と灰色砂も含み、にぶい橙色（7.5YR6/4）。23 は SG5 区の低地調査小グリッド 42、24 は SG10 区 SI-64 で出土した。

2 類　中部高地型櫛描波状文を描く胴部破片。（25・26）

25 は二本一組、26 は三本一組の施文具を使う。25 は波状文の他に斜位の直線が破片左半にあり、外面上部には煤、内面下部には煮炊の汚れが付着する。26 は斜位と縦位の直線を上下に加える。透明・灰色砂と黒細砂を含みやや硬質で橙色（5YR6/6）。2 点とも SG10 区の SD-304 で出土した。

3 類　壺形土器の頸～肩部。（27 ～ 31）

27 ～ 29 は壺の頸～肩部に 2 段 LR で縄文を施文する。27 は山形文と右方向からの連続刺突、28 は横一本線の下側に二本一組の施文具で縦位平行線。同一個体の可能性が高い 29 と 30 は一本施文具で山形文を描く。31 は一本施文具でやや細い線を描いた後に、上部の二本線間と下部の三角形を 2 段 LR 横位の細かい縄文で埋める。27・28 は浅黄橙色（7.5YR8/6）、29・30 はにぶい橙色（5YR6/4）で、27 ～ 30 は黒・透明細砂が多い。31 は灰褐色（7.5YR5/2）で白・黒・透明細砂を含む。27 は SG10 区 SD-304、28 は SG10 区 SI-106、29・30 は SG5 区の低地調査小グリッド 42、31 は SG2 区の B 区で出土した。

4 類　甕形土器の胴部。（32）

32 は 2 段 LR の縄で施文後に一本施文具で斜線を描く。煤が外面に多く付着する。白・灰色砂～細砂と透明細砂が多く硬質で、にぶい褐色（7.5YR5/4）。SG5 区の低地調査小グリッド 42 で出土した。

【第６群　重四角文・弧線文などを描く土器】（第 42 図 33 ～ 37、写真図版 108）

1 類　重四角文を描く壺形土器。（33・34）

中期後半の土器。地文に縄文はない。一本施文具を使うと見られるが、縦線部分では二本ずつを平行して描いているようにも見える。33・34 が同一個体と見られる。黒細砂が多く白・透明細砂も含み、硬質で浅黄橙色（10YR8/4）。2 片とも SG10 区 SI-74 で出土した。

2 類　四角形や同心円を描く壺形土器。（35 ～ 37）

中期後半の土器。35 は LR2 段横位施文の縄文が破片右下に少しあり、一本施文具の深い沈線で垂直線と水平線を描く。36 は破片下端に同心円状文様（フラスコ形文様のくびれ部）が残り、その両側から上側を四角形で囲む。地文は 1 段 L の縄による無節縄文。37 は同心円の下端部と、周囲を囲む四角形の下辺が

見られ、縄文の種類は不明確。白・灰色砂と黒・透明細砂を含み、35・36 は灰白～淡黄色（2.5Y8/1 ～ 8/2）、37 はにぶい橙色（7.5YR7/4）。35 は SG5 区 SK-203、36 は SG5 区 SI-20、37 は SG5 区 SI-18 掘方で出土した。

【第 7 群　撚糸文・擬縄文・条痕を地文として沈線で文様を描く土器】（第 42 図 38 ～ 43、写真図版 108）

1 類　撚糸文を地文として沈線で文様を描く土器。（38 ～ 40）

38 ～ 40 は 1 段 R の縄を使う細かい撚糸文を持つ。38 は壺の肩部で、撚糸文の後に細い横線を入れる。39・40 は横線より上側が無文で、39 は外面に煤が着く甕形土器。灰褐色～橙色（5YR4/2 ～ 6/6）の硬質で、黒細砂が多く、白砂～細砂と透明細砂も含む。38 は SG10 区 SD-527（22.5-19.5 と 23.0-19.5 グリッド）、39 は SG10 区の 20.0-20.2 グリッド、40 は SG10 区 SD-821（X19 と X19.5 の間）で出土した。

2 類　擬縄文を地文として沈線で文様を描く土器。（41）

41 は擬縄文（植物の茎側面の回転圧痕）を地文とする。透明細砂が多く、黒細砂も含み、浅黄橙色（10YR8/4）でやや硬質。SG5 区の 10.5-17.5 グリッド表採。

3 類　条痕を地文として沈線で文様を描く土器。（42・43）

42 はハケメのような整った条痕、43 はやや浅く不明瞭な条痕を持つ・黒・透明細砂と白・灰色砂を含みやや硬質で、42 はにぶい赤褐色（5YR5/4）、43 はにぶい褐色（7.5YR5/3）。42 は SG10 区の 19.8-20.6 グリッド、43 は SG10 区 SD-527（22.5-19 と 23-19 グリッド）で出土した。

【第 8 群　平行沈線文を描く東北南部系の土器】（第 42 図 44 ～ 53、写真図版 108）

1 類と 2 類は弥生中期中頃～後半の東北南部系土器で、胎土には白砂・細粒を少量含む。SG10 区の北半部に少量あり、4 区と SG5 区でも出土した。3 類は中期後半～末頃の土器とみられ、透明・灰色細砂を含みやや硬質で、SG5 区で出土した。

1 類　一本の施文具で平行沈線を描く土器。（44 ～ 46）

〔1 種〕縄文を施すもの。（44・45）

中期中頃の南御山 2 式。44・45 は一本施文具で描くので線の間隔がやや不定で、縄文帯と無文帯が交互にある。縄文帯は 2 段 LR の縄（直前段 4 条の可能性もある）で非常に細かい縄文を入れ、無文帯は磨く。彩色は認められない。 44・45 はにぶい黄橙色（10YR7/2）で薄くやや硬質。44 は SG5 区表面採集、45 は SG5 区 11-18 グリッド採集。

〔2 種〕縄文を施さないもの。（46）

46 は、一本施文具なのかどうかが、やや不確実である。にぶい黄橙色（10YR7/2）で薄くやや硬質。SG10 区 SD-503 の X23.5 ～ 23.75 間で出土した。

2 類　二本一組の施文具で平行沈線を描く中期後半の土器。（47 ～ 51）

〔1 種〕壺の胴部。（47・48）

47・48 は非常に浅いハケメ状の条痕を横位に施してから沈線を描く。47・48 の破片上端が沈線に沿って割れ、その下方の沈線との間隔が一定なので、二本一組の施文具で描いた可能性がある。やや硬質で褐灰色（7.5YR4/1）。47 は SG10 区 23.5-19.5 グリッド所在の撹乱坑（S-546）、48 は SG10 区 SI-106 で出土した。

〔2 種〕壺の口縁部。（49・50）

弱く内彎する口縁部外面に二本一組の施文具で弧線を描き、口縁部上端に横位沈線が一本ある。49 は浅黄橙色（10YR8/3）、50 は黒褐色（7.5YR3/1）でやや硬質。49 は SG10 区 SD-527 の X23.5 ～ 24.0 間、50 は 4 区 SI-27 で出土した。

〔3 種〕壺の頸部。（51）

二本一組の施文具による横線が４条あり、そこに縦位の弧線を一対描く。浅黄橙色（10YR8/3）でやや軟質。SG10 区 SI-81 出土。

３類　三本以上の施文具で格子目を描くもの。（52・53）

52 は四～五本一組の施文具かもしれない。53 は三本一組の斜線だが、３本の両側に少し離れた各１本の線も中央の三本線に平行している。52 はにぶい黄橙色（10YR6/3）、53 は黒色（10YR3/1）。52 は SG5 区東部にある低地の北半部で、53 は SG5 区の竪穴建物（番号不詳）で出土した。

【第９群　地文のみ及び無文の土器】（第 42・43 図 54 ～ 89、写真図版 108・109）

縄文・附加条縄文・撚糸文・条痕文・オオバコ系擬縄文を施すもので、主に甕形土器である。条痕文の深鉢形甕（本群３類）と器形が共通する無文の深鉢形甕（本群４類）も、この群に含める。

１類　縄文を施す甕形土器。一部には条痕も併用する。（54 ～ 58）

54 は少し外反する口縁部に２段 LR 横位施文。55 は２段 RL 縦位施文・内面ヨコヘラケズリで、外面に煤が付着する。56 と 58 は同一個体の可能性が高く、２段 RL で縄文を施文してから、58 の破片右上に横位条痕と、破片下部にタテヘラケズリを行う。57 は１段 R 横位施文。１類は褐灰色～橙色（5YR6/1 ～ 7/6）のやや硬質で、透明砂・細砂がやや多く、黒・白細砂も含み、56・58 は赤・灰色礫も含む。54 は SG5 区 SI-28、55 は SG5 区の低地調査小グリッド 37、56 は SG1 区 SD-31、57 は SG10 区 19.1-20.4 グリッド、58 は SG1 区 SD-31 で出土した。

２類　撚糸文や附加条縄文を施すもの。２類３種の一部には条痕も併用する。（59 ～ 82）

〔１種〕内面口縁部と外面に撚糸文を施す甕形土器。（59 ～ 62）

口縁部外面は１段 R の縄を巻いた原体で斜位の撚糸文。60 ～ 62 は端面と内面にも同じ原体で施文する。59 には口縁部端面の縄文がない。黒細砂が多く、白・透明細砂も含み、硬質～やや硬質。61・62 は褐灰色～にぶい黄橙色（10YR4/1 ～ 7/3）、59・60 は橙色（5YR6/6）。59 は SG1 区 SD-31、60 は SG10 区 SI-50、61 は SG10 区 SI-37、62 は SG10 区 SI-64 で出土した。

〔２種〕撚糸文を施し、口縁部が比較的まっすぐ延びる甕。（63・64）

63 と 64 は同一個体で、１段 R の縄を巻いた原体を使って口縁部に横位、胴部に縦位の撚糸文を施す。64 の外面には煤も付着する。透明細砂が多くて黒・白細砂も含み、硬質で灰白～浅黄橙色（10YR8/1 ～ 8/3）。63 と 64 は SG2 区の F 区で出土した。

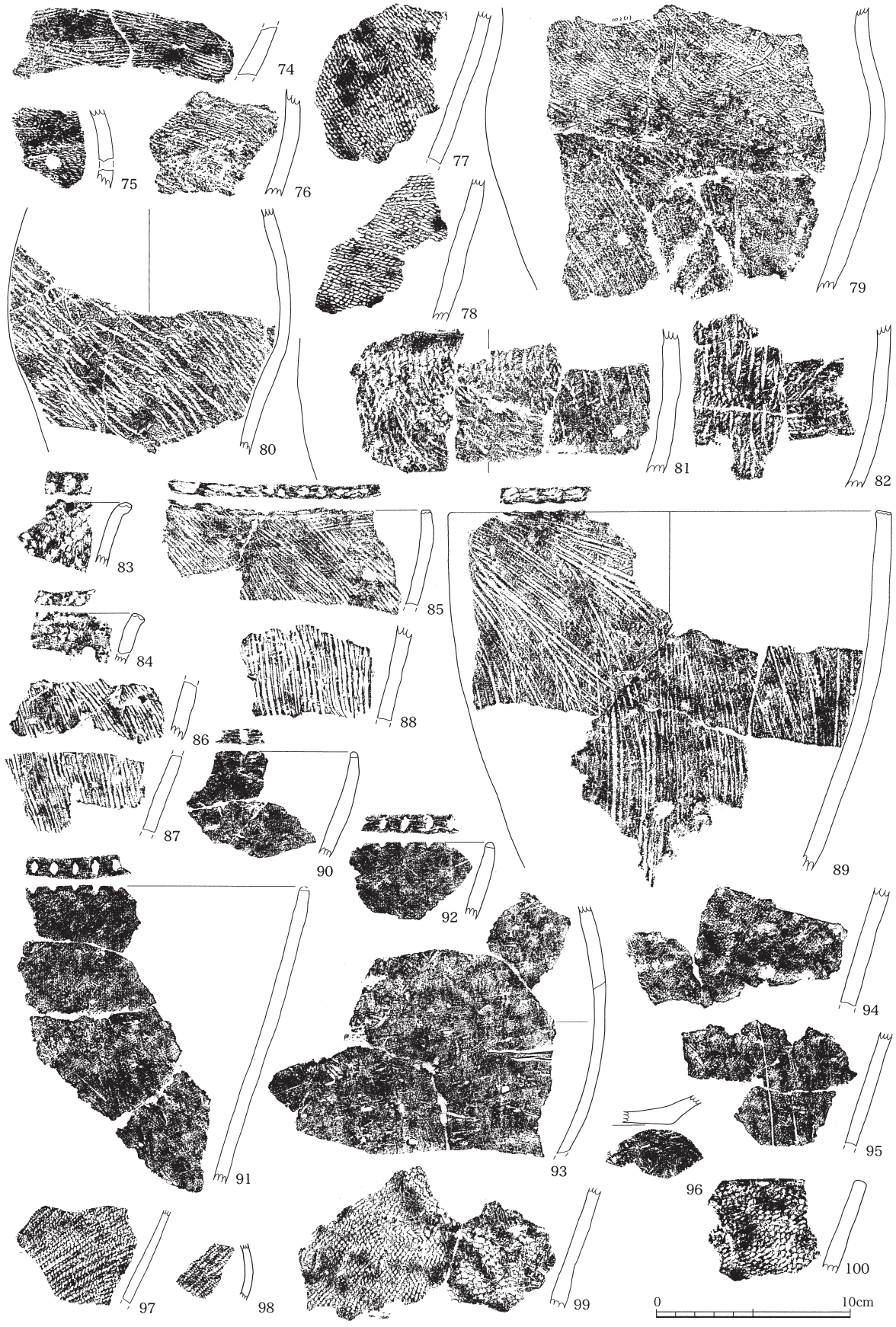
〔３種〕細かい撚糸文を施す胴部破片。一部には条痕も併用する。（65 ～ 79）

65 ～ 71・73・74・76 ～ 79 は１段 R、72・75 は１段 L の縄を巻いた原体を使う。内面のケズリは 66・68・70 ～ 72・74 に認められ、他は内面ナデ。70・71 は頸部下方の破片で、70 の頸部は無文。75 は焼成後に補修孔を外面から回転穿孔している。79 は胴部上半の撚糸文の後に、下半に条痕を施す。78・79 は外面に煤、67・68・77 は内面にコゲが付着する。胎土は黒・透明細砂の目立つものが主体で、白細砂もやや多い。焼成はやや硬質で、にぶい褐色～にぶい橙色（7.5YR5/3 ～ 7/4）が中心である。

65 は SG5 区 SD-41、66 は SG1 区 SI-174、67 は SG1 区内、68 は SG10 区北部の撹乱坑（S-529）、69 は SG1 区 SI-10、70 は SG10 区 SI-83、71 は SG10 区 SD-527、72 は SG10 区 SI-87、73 は SG5 区表面採集、74 は４区 SI-29、75 は SG10 区 SI-75、76 は SG5 区 SD-41、77 は SG5 区 14-17.5 グリッド（注記は 17.5-14）、78 は SG5 区 SI-22、79 は SG5 区 15-17 グリッド（注記は 17-15）で出土した。

〔４種〕粗い附加条縄文を施す胴部破片。（80 ～ 82）

撚糸文の可能性も残るが、軸縄がよく見えない附加条縄文と考えられる。80 は１段 R の縄を R 方向に巻く。同一個体の 81・82 は軸縄が２段 RL の可能性もあり、１段 L の縄を R 方向に巻いている。81 の破片上端は頸部付近で無文。81・82 は外面に煤、内面下位にコゲが付着する。80 は黒細砂が多く透明細砂と



第 43 図　権現山遺跡　遺構外出土の弥生土器 (2)

白砂～細砂も含み、やや軟質でにぶい橙色（5YR7/3）。81・82 は黒・透明砂～細砂が多く、白・灰色・透明礫も含みやや軟質で灰褐色（7.5YR5/2）。80 は SG1 区 SD-31、81 と 82 は SG2 区の E 区で出土した。

〔**5 種**〕縄文を施す口縁部の端面を縄で押圧する甕形土器。（83・84）

83・84 は弱く外反する口縁の端面を縄の側面でやや深く押圧し、内面頸部はヨコヘラケズリ。口縁部外面は、83 が 2 段 LR 横位の粗い縄文を施文し、84 は雑なナデで無文。透明細砂がやや多く、黒・白細砂も含み、硬質でにぶい褐色（7.5YR5/3）。83 と 84 は SG2 区の A 区で出土した。

3 類　条痕文を施す深鉢形の甕。（85 ～ 89）

前出の第 2 群 1 類・2 類や、本群 4 類とともに、SG5 区 SI-116 に比較的まとまっている。

〔**1 種**〕口縁部端面を絡条体で押圧する深鉢形の甕。（85・89）

弥生前期後葉頃に見られる深鉢形の甕である。1 段 R の縄を巻いた径 1cm 弱の絡条体で口端を連続押圧している。外面は斜位の条痕で、条痕の原体にも絡条体を使ったのかもしれない。内面は反時計方向のヨコヘラケズリ。85 は 86 ～ 88 と同一個体の可能性がある。85 は白・灰色礫～細砂が多く、黒・透明細砂も含み、やや硬質で灰黄褐色～にぶい黄橙色（10YR4/2 ～ 6/3）。89 は透明・灰色砂～細砂と黒細砂が多く、白砂～細砂も含み、やや軟質で褐灰色（7.5YR4/1）。85 は SG5 区 SI-116、89 は SG2 区の F 区で出土した。

〔**2 種**〕条痕を施す胴部破片。（86 ～ 88）

胴部の 86 ～ 88 が、口縁部の 85 と同一個体の可能性が高い。外面は縦～斜位の条痕で、内面は多方向のヘラケズリとヘラナデ。85 ～ 88 は SG5 区 SI-116 出土。

4 類　無文で深鉢形の甕。（90 ～ 96）

本群 4 類は前出の第 2 群 1 類・2 類とともに SG5 区 SI-116 で出土した。90 ～ 92・94・95 が同一個体で、93 と 96 も同一個体と見られる。4 類は白・透明礫～細砂が多く、黒細砂と灰色砂もやや目立つ。やや硬質で、黒褐色～にぶい黄橙色（10YR3/2 ～ 6/3）。9 群 3 類（条痕）と 9 群 4 類（無文）は、同様な器形の「深鉢形の甕」である。9 群 3 類も SG5 区 SI-116 に多い。

〔**1 種**〕端面に切れ込みを入れる口縁部。（90 ～ 92）

口端面にヘラ状施文具で切り込む。外面はナナメヘラケズリ後ナナメナデ。外面に煤が付き、内面胴部下位にコゲが付着している。内面は胴部がヘラケズリ、口縁部がヨコヘラミガキ。

〔**2 種**〕無文の胴部。（93 ～ 95）

93 は内外面ヨコヘラケズリで、次に述べる 96 と同一個体の可能性が高い。94・95 は内外面はヘラケズリ後ナデで、外面に煤が付着し、前出の 90 ～ 92 と同一個体の胴部破片と見られる。93 は白・透明砂～細砂が多く、白・灰色礫と黒細砂も含み、やや硬質で、にぶい橙色および黒褐色（7.5YR7/3 と 3/1）。

〔**3 種**〕底部破片。（96）

96 は前出の 93 と同一個体の可能性が高い。復原底径は 5.5 ～ 6.0cm 程で、外面胴部下端は雑なナデ、外底面は多方向ヘラケズリで上げ底状、内面ヨコヘラケズリ。

5 類　直前段多条または附加条の細かい縄文を施すもの。（97 ～ 98）

97 は LR 横位施文、98 は LR 縦位施文。1 本おきの条が浅めなので、原体が直前段多条か附加条と見られる。白細砂を含む胎土を参考にすると、弥生中期後半の東北南部系土器（第 8 群）の胴部の可能性がある。97 は白・透明細砂と少量の黒細砂・灰色砂を含み、にぶい黄橙色（10YR7/2）。98 は白細砂を含み褐灰色（10YR4/1）。97 は SG5 区表面採集、98 は SG5 区 SI-12 出土。

6 類　オオバコ系擬縄文を施すもの。（99・100）

99 と 100 はおそらく同一個体で、植物を原体にしたオオバコ系擬縄文を回転施文する。99 の破片右半部では擬縄文がやや深く粗い。内面はナデで、煮炊の汚れが見られる。SG5 区 SI-18 出土。透明・白・黒細砂を含み、やや硬質で浅黄色（2.5Y7/3）。

【第 10 群　弥生時代後期の土器】（第 44 図 101 ～ 105、写真図版 109）

1 類　頸部外面の段に刺突を施すもの。（101）

成形時の接合痕を外面側だけ意図的に残して段を作り、指先または縄文原体の縄先端で段の下端に刺突を行う。縄文や櫛描文はない。内面は磨かない。透明・白細砂が多くて灰色砂・黒細砂も含み、硬質でにぶい黄橙色（10YR7/3）。SG10 区の確認調査トレンチ TX21-19 出土。

2 類　二軒屋式土器。（102・103・105）

弥生後期の在来型式で、本類の底部が 11 群 3 類になる。

〔**1 種**〕回転を利用しない櫛描波状文を描く頸部。（102）

透明礫と白・透明砂～細砂が多く、軟質でにぶい橙色（5YR6/4）。SG9 区の 11-18.5 グリッドの FA 層上で出土。

〔**2 種**〕附加条縄文 1 種で羽状縄文を施す胴部。（103・105）

105 の破片は羽状の構成がわからないが、便宜的に本類に入れた。103 はよく見えない軸縄に 1 段 R の縄を 2 本附加し、おそらく LR+2R。105 は RL+2L。2 点とも黒・透明細砂が多く白細砂も含み軟質。色調はにぶい黄橙色で、103 は 10YR7/3、105 は 10YR7/2。103 は SG10 区 SI-30、105 は SG5 区の低地調査小グリッド 11 で出土。

3 類　回転を利用して櫛描波状文を口縁部に描く樽式土器の甕。（104）

口端に刻みがなく、波状文に回転を利用する点が、十王台式や二軒屋式とは異なる。器面に向かって右から左へ施文し、櫛歯は 5 本以上。黒・透明細砂を少量含み、やや硬質で淡赤橙色（2.5Y7/4）と灰白色（10YR8/1）。SG9 区 6-23.5 グリッド出土。

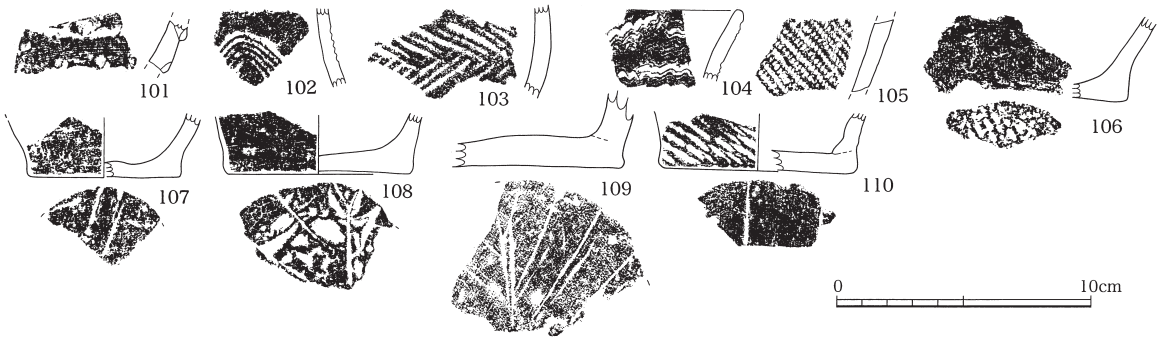
【第 11 群　木葉痕やザル編み圧痕を持つ底部破片】（第 44 図 106 ～ 110、写真図版 109）

1 類　ザル編み圧痕を持つ底部。胴部下端は無文。（106）

圧痕は経条が固定的なザル編みで、緯条は一本越え - 一本潜り - 一本送り。胴部内外面はナナメナデ。白・灰色砂～細砂が多く、黒・透明砂～細砂も含み、硬質で外面はにぶい赤褐色（5YR5/4）。SG5 区 SI-18 出土。

2 類　木葉痕を持つ底部。胴部下端は無文。（107 ～ 109）

107 は木葉の主脈圧痕が位置をずれながら 2 回付く。胴部内外面は主に横位のヘラケズリ。108 は木葉の裏面圧痕で、対向する 3 次脈が Y 字形に連絡する状況からカシワの可能性がある（高岡・橋本 1988,p.31）外面はタテヘラナデ。109 は木葉の裏面圧痕がずれて二重に付き、胴部外面はナデで下端が少し外側に張り出す。107 は白・透明砂・細砂、108 は黒・透明細砂、109 は白・灰色礫～細砂と黒細砂を含む。にぶい黄橙色～浅黄橙色（10YR7/2 ～ 8/3）で、107 はやや硬質、108・109 はやや軟質。107 は SG5 区 SK-225、108 は SG9 区 7.5-19.1 グリッド、109 は SG2 区の E 区出土。



第 44 図　権現山遺跡　遺構外出土の弥生土器 (3)

３類　木葉痕を持つ底部。胴部下端は附加条縄文１種。（110）

前出の二軒屋式土器（10 群２類）の底部。胴部外面は附加条縄文１種 LR+2R で、縦位に施文する。木葉痕は側脈が２本見える。透明礫～細砂が多く、黒細砂も含み、硬質でにぶい橙色（5YR6/4）。SG10 区 21.65-18.40 グリッド撹乱中出土。

第６節　権現山遺跡各地区の縄文・弥生時代石器

権現山遺跡の縄文・弥生遺構以外から出土した石器は、地区ごとに分割するのではなくて、全地区で出土したものをまとめて分類し、本節で報告する。権現山遺跡の北半部だけでなく、南半部（SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区）の石器もここで扱う。

石鏃（第 45 図１～ 13、写真図版 99）　遺跡中央～南部の台地端にある SG1･SG5･SG10 区で主に出土した。低地部の SG9 区にも１点ある（10）。石材はチャートが目立つ。浅い凹基無茎鏃が多い。特殊な形態の鏃は、鍬形鏃（6）と幅広三角形の鏃（9）がある。また、アメリカ式石鏃（13）は弥生時代と考えられる。

片刃石器（第 45 図 14・15、写真図版 99）　SG10 区に２点ある。平坦な板状素材の縁辺に階段状の刃部を作る 14 と、厚みのある石器で周辺に急角度の剥離を行う 15 はかなり異なる。15 の類例は杉村遺跡 GN1 区にもあり（第 12 図 1）、縄文早期の条痕文系土器に伴うと考えられている（中村 1990,p.34; 出居 1986）。

スクレイパー（第 45 図 16 ～ 18、写真図版 99）　16 は珪質頁岩に似た質感・色調で少し粗粒の珪質泥岩を用い、剥片末端を加工する。17 は両側縁を加工し、下縁に微細な剥離（使用痕）がある。18 は透明感のある良質の黒曜石製。

石匙（第 45 図 19、写真図版 99）　２区西縁北半部にある古墳時代の建物 SB-003 の柱穴 P3 内に混入していた。硬質・緻密な硅質流紋岩の縦長石匙。

剥片（第 46 図 20 ～ 27、写真図版 100）　各地区で出土したうちの一部を選択して図示した。21 ～ 23 と 27 は微細な剥離痕を持つ剥片。26 はさらに明瞭な剥離が縁辺に連続する。24 は石質からみて礫器製作に伴う剥片と見られ、25 もそうかもしれない。22 と 27 はガラス質に近い黒色安山岩。

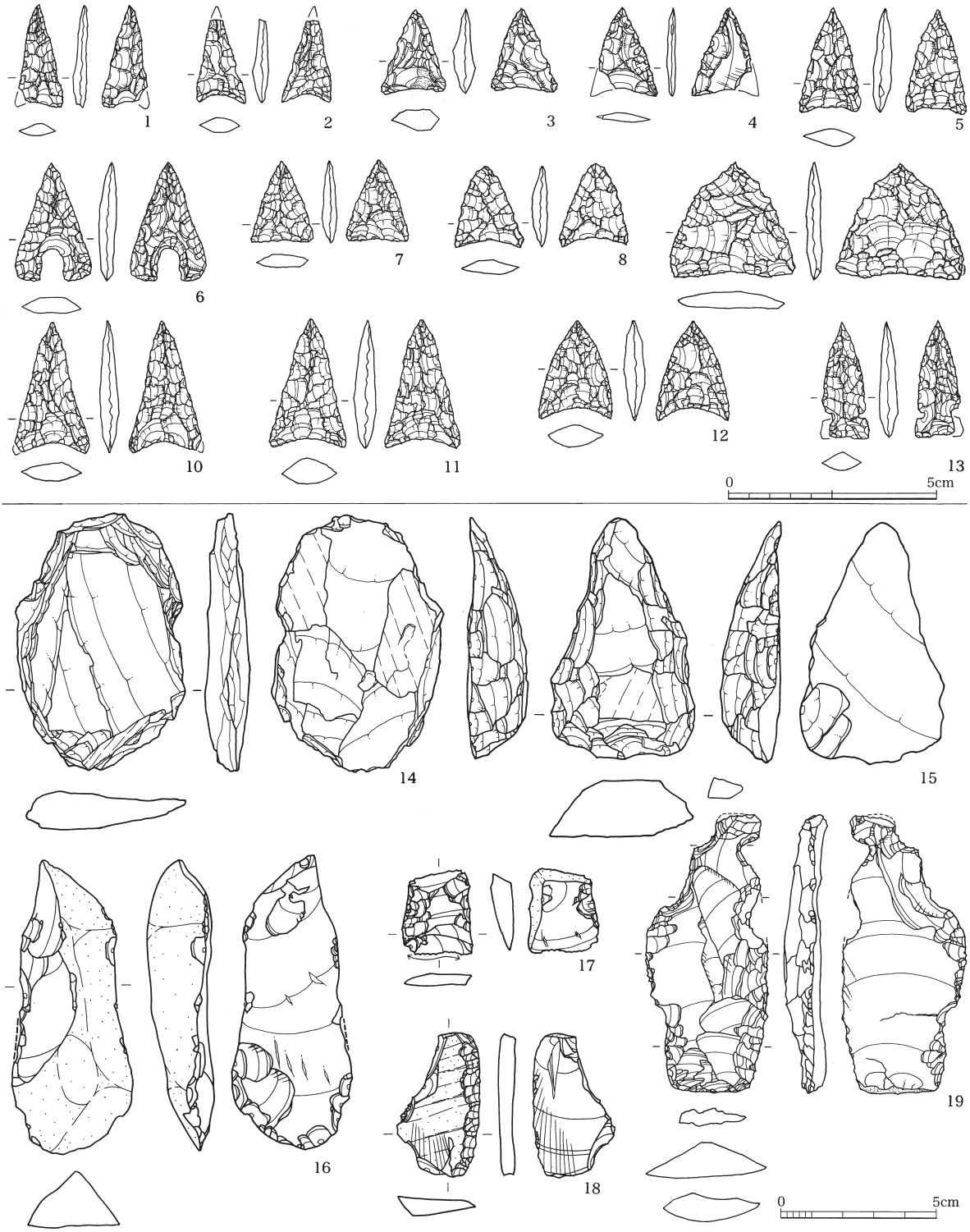
石核（第 46 図 28、写真図版 100）　SG5 区の１点を図示した。ポジティブな剥離面を持つが、剥片ではなく、石核を分割したものと判断した。

礫器（第 46・47 図 29 ～ 39、写真図版 100）　SG5・SG10 区に多く、SG1・SG2 区にもある。石材はホルンフェルスが多く、デイサイトや流紋岩もある。29 ～ 31 は厚い剥片の側縁を加工してやや鈍い角度の刃部にする。35 は全面を剥離したもので厳密には礫器ではないが、素材や鈍い刃部角は礫器と共通している。

打製石斧（第 48・49 図 40 ～ 47、写真図版 101）　権現山遺跡中央～南部の台地東端にある SG1・SG5・SG10 区に計５点あり、SG1・SG5 区では台地直下の低地部出土遺物を含む。また、低地部の SG2・SG9 区にも計３点ある。大半は分銅形だが、43 は楕円形。46 は後世の井戸から出土したもので、砥石に転用したような研磨痕または擦痕がある。47 は磨製石斧の破損品（または製作失敗品）を打製石斧に転用したものかもしれない。

磨石（第 49 図 48 ～ 51、写真図版 101）　権現山遺跡南部の台地東端にある SG5 区と SG10 区で出土した。ただし 48 と 49 は出土地区不明で、「UT-SG」の注記があるので権現山遺跡 SG1・2・5・9・10・15 区で出土した可能性があるが、同じく「UT-SG」の略号を用いた磯岡北遺跡の疑いも残る。48 ～ 50 は磨石兼凹石で、50 は表裏上下左右の６面に明瞭な深い凹みを持つ。51 は磨滅した円礫が被熱して煤も付着するもので、古墳時代竪穴からも同様な遺物がしばしば出土するので縄文・弥生時代以後の可能性もある。

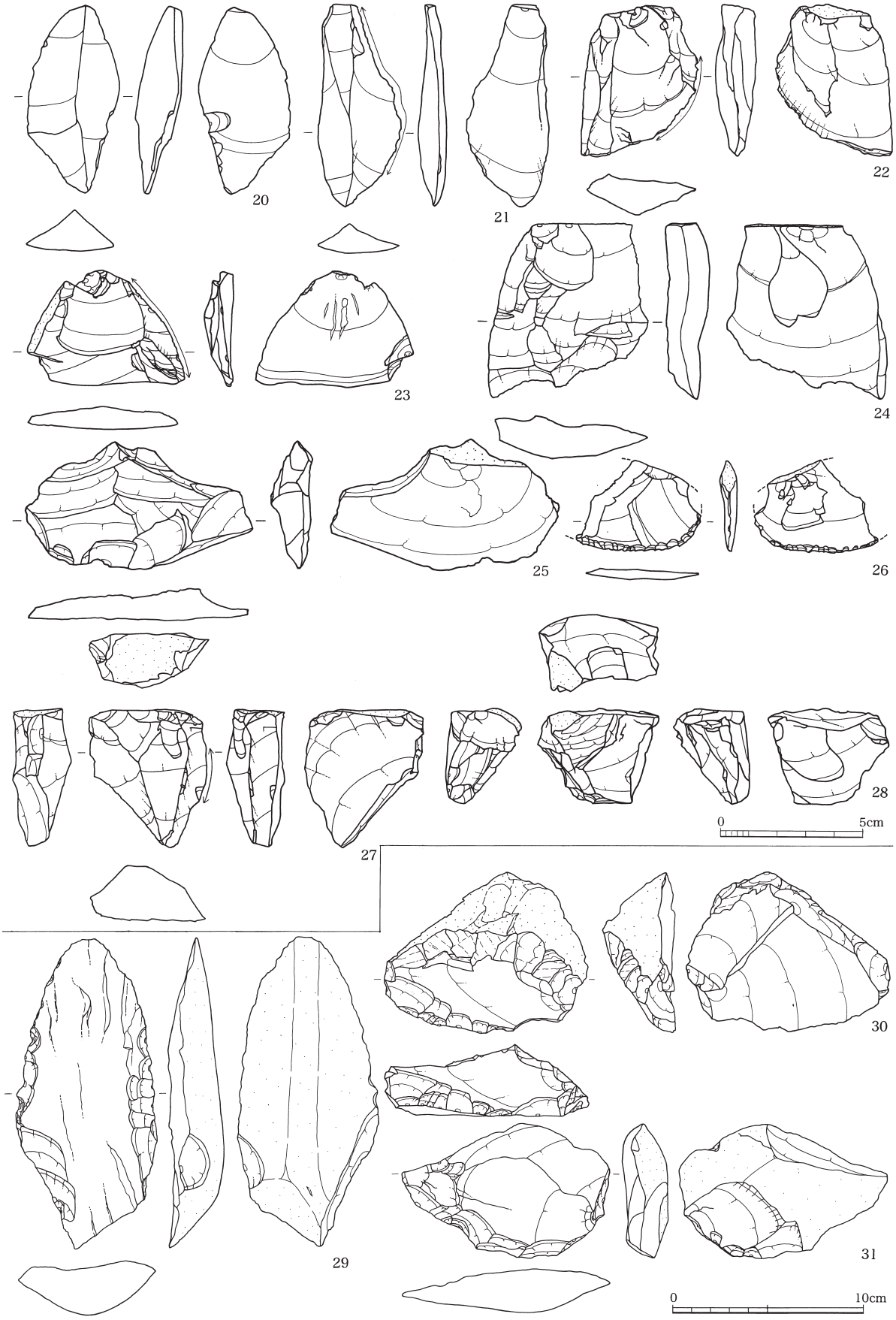
石皿（第 49 図 52、写真図版 101）　SG1 区で小片が１点だけ出土した。側面や裏面もよく整えられている。



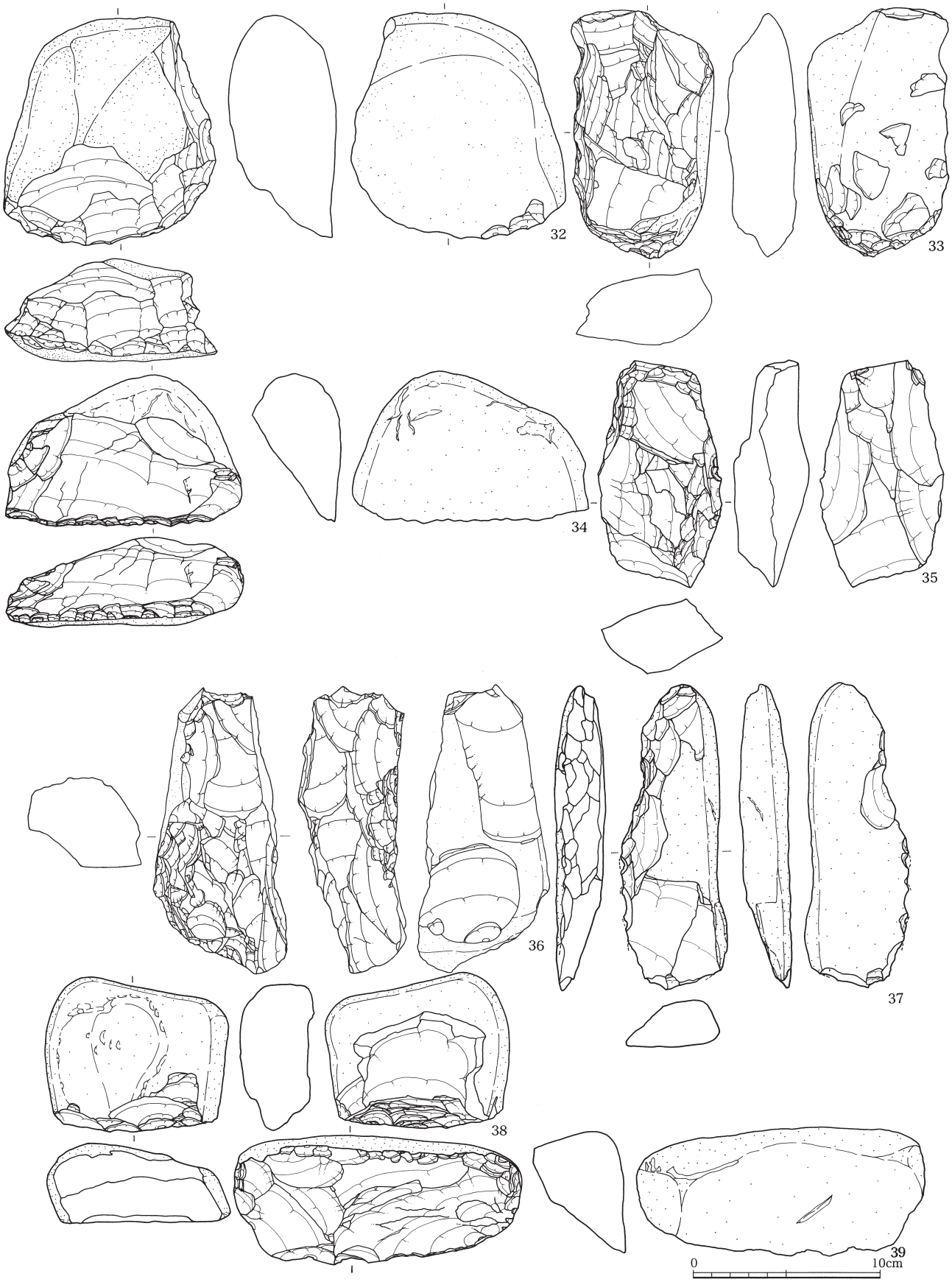
第 45 図　権現山遺跡　遺構外出土の石器 (1)

第 13 表　権現山遺跡各地区の縄文・弥生時代石器

番号 種類 器種	大きさ (㎝・g)	特　　徴	色調 石質	出土状態 残存状態 注記
1 石鏃	長　2.5 幅　残 1.0 厚　0.3	先端がやや狭まり、先端角 40°。抉入部幅 9㎜×深さ 1.5㎜（復原値）。抉入部中央の加工後に両側縁から剝離を行う。流紋岩の可能性も残る。残存重量 0.68g。	7.5YR7/1　明褐灰 頁岩	SG10 区の古墳時代溝 脚部欠 UT-SG-X SD-42 17.1-18.1
2 石鏃	長　残 2.0 幅　1.2 厚　0.4	先端は使用で折損した可能性を持つ。左図の右側縁中央部に発掘時のガジリ有り。抉入部幅 11㎜×深さ 2㎜。やや透明感があり、黒縞の入る石材。残存重量 0.63g。	N5/（B）　灰 チャート	SG10 区の古墳時代竪穴 先端部欠 UT-SG-X SI-106 №61
3 石鏃	長　2.0 幅　1.6 厚　0.5	やや厚味がある。抉入部幅 13㎜×深さ 1㎜。右図の中央部が素材剝離の面。左図の中央と片方の脚部両面に褐色の付着物あり。やや透明感があり、黒縞のある石材。重量 1.05g。	N5/（B）　灰 チャート	SG5 区の古墳時代竪穴 完形 UT-SG-V SI-22
4 石鏃	長　2.2 幅　残 1.2 厚　0.2	ごく薄い。抉入部が幅 16 ×深さ 2㎜。先端が非常に細く鋭い。右図の右半が素材剝離の面。残存重量 0.48g。	N3/　暗灰 チャート	SG10 区の古墳時代竪穴 脚部欠 UT-SG-X SI-72
5 石鏃	長　2.5 幅　1.5 厚　0.5	左図の面が甲高になる。先端が狭くなって鋭く、再生した可能性もある。抉入部が幅 12 ×深さ 1.5㎜で浅い。一部に明灰色の部分が混じる石材。重量 1.3g。	N3/　暗灰 チャート	SG10 区の古墳時代竪穴 完形 UT-SG-X SI-16
6 石鏃	長　2.8 幅　1.8 厚　0.4	抉入部が幅 6 ×深さ 8㎜で極めて深い鍬形鏃。右図の下半中央が素材剝離の面。先端部がごくわずかに再生した可能性もある。黒縞が少し残る石材。重量 1.56g。	2.5Y5/1　黄灰 チャート	SG10 区の古墳時代竪穴 完形 UT-SG-X SI-2
7 石鏃	長　2.0 幅　1.6 厚　0.3	両側縁が整って、先端部まで連続する。縦方向の稜は左図で弱く、右図では見られない。抉入部は深さ 0.5㎜で非常に浅い。透明感のある石材。重量 0.8g。	N6/　灰 チャート	SG1 区 完形 UT-SG-I 低地
8 石鏃	長　2.0 幅　1.7 厚　0.4	左図の面が甲高になる。抉入部が幅 15 ×深さ 2㎜で浅い。先端が狭くなり再生した可能性もある。光沢のある石材。重量 0.8g。	2.5Y8/1　灰白 流紋岩　凝灰岩	SG5 区 完形 UT-SG-V SX-129 №3
9 石鏃	長　2.8 幅　3.1 厚　0.4	幅広いけれども厚味は目立たない。側縁から先端へ急に狭くなる部分を最後に加工している。抉入部幅は不明瞭で約 20㎜、深さ 1㎜。左図左下の脚端は少し破損している可能性あり。重量 2.9g。	10YR4/1　褐灰 流紋岩	SG1 区の古墳時代竪穴 完形 UT-SG-I
10 石鏃	長　3.2 幅　1.8 厚　0.5	先端がやや狭まり、先は細く鋭いので再生した可能性もある。抉入部は幅 17 ×深さ 3㎜（復原）。黒と白の細い縞が入る石材。残存重量 1.8g。	2.5GY3/1 暗オリーブ灰 チャート	4 区 脚部欠 UT-SG-IX
11 石鏃	長　3.1 幅　1.9 厚　0.6	側縁から先端部へやや狭くなる。やや厚く、縦方向の稜が左図の面でより目立つ。右図の中央部右半は素材剝片の面。抉入部は幅 17 ×深さ 2㎜。重量 2.3g。	N6/（B）　灰 チャート	SG1 区 完形 UT-SG-I SD-36
12 石鏃	長　2.4 幅　1.7 厚　0.5	やや厚く、両面が丸くて縦方向の稜を待たない。側縁と抉入部が弧状。抉入部は幅 17 ×深さ 3㎜でやや深い。透明感のある石材だが左図中央部は少し白く濁る。重量 1.6g。	玉髄	4 区 完形 UT-GN-IV 32-11.5
13 石鏃	長　2.8 幅　残 1.1 厚　0.5	先端が非常に細く鋭いので未使用か？左図の中央に縦の方向の稜を持つ。アメリカ式石鏃で、片側の破損は製作時の可能性もある。黒縞の入る石材。残存重量 1.14g。	N4/（B）　灰 チャート	SG5 区 基部欠 UT-SG-V 12.5-17.5
14 片刃石器	長　8.3 幅　5.5 厚　1.4	粘板岩起源の節理が発達した石材を用いて、平坦な剝離を行う。両面中央付近の広い剝離はいずれも節理に沿った面。左図の面の周縁を繰り返し加工して、階段状に剝離した刃部を全周に作る。石材が硬質で磨耗痕は不詳。重量 58.2g。	N5/　灰 ホルンフェルス	SG10 区の古墳時代竪穴 完形 UT-SG-X SI-14 24
15 片刃石器	長　7.7 幅　4.6 厚　1.9	素材である厚手の剝片は背面と腹面が節理に沿って平坦に近く割れている。その剝片の腹面側から急角度の剝離を行って刃部角 60 ～ 80°に仕上げる。重量 71.2g。	5Y6/2　灰オリーブ ホルンフェルス	SG10 区の古墳時代溝 完形 UT-SG-X SD-304 42
16 スクレイパー	長　9.5 幅　3.9 厚　2.1	自然礫の稜部分から剝離した縦長剝片で製作する。末端部腹面を中心として両側縁にも少し加工を行う。末端の刃部周辺が少し赤味を帯びるので、被熱している可能性もある。重量 60.4g。	2.5Y8/3　淡黄 珪質泥岩	SG5 区の古墳時代溝 完形 UT-SG-V SD-44 №32 B
17 スクレイパー	長　2.7 幅　2.3 厚　0.8	自然面を表面に残す礫から剝離した小形の剝片で、背面の両側縁と腹面の 1 側縁に加工を行う。図の下縁は薄く鋭い剝片末端部で、ここに微細な剝離が生じている。重量 4.9g。	10BG4/1　暗青灰 チャート	SG2 区の時期不明土坑 完形 UT-SG-II F 区 SK-5
18 スクレイパー	長　残 4.6 幅　残 2.6 厚　0.6	縦長剝片で背面の大半と打面は自然面。背面右辺に連続する加工を行う。刃部角は約 40°。左辺と下端は粗い剝離で、破損したものと思われる。残存重量 6.8g。	N2/　黒（半透明） 黒曜石	4 区の古墳時代竪穴 2 辺欠 UT-GN-IV SI-26 北東壁際
19 石匙	長　残 9.0 幅　3.9 厚　1.2	自然面を打面にした縦長剝片の両側縁を調整し、剝片末端につまみを作った部分の背面にも自然面を少し残す。剝片の腹面には、図の左半部がやや磨滅気味で弱い光沢をもつ。残存重量 37.7g。	2.5Y5/1　黄灰 硅質流紋岩	2 区の古墳時代掘立柱建物柱穴内　一部欠 UT-GN-II SB-3 P3
20 剝片	長　6.6 幅　3.2 厚　1.6	使用痕は認められない。石材がやや軟質で、稜線や側縁は磨滅気味。背面の右下部と腹面の左下部は新しい破損（ガジリ）。重量 20.6g。	2.5Y6/2　灰黄 安山岩	SG10 区の古墳時代竪穴 完形 UT-SG-X SI-73 18
21 剝片	長　7.1 幅　2.9 厚　1.0	縦長剝片の右側縁に微細な剝離痕を持つと見られる。ただし、重複する破損（ガジリ）がやや目立つので不明瞭。重量 14.7g。	7.5Y5/1　灰 安山岩	SG10 区の古墳時代竪穴 完形 UT-SG-X SI-9 42

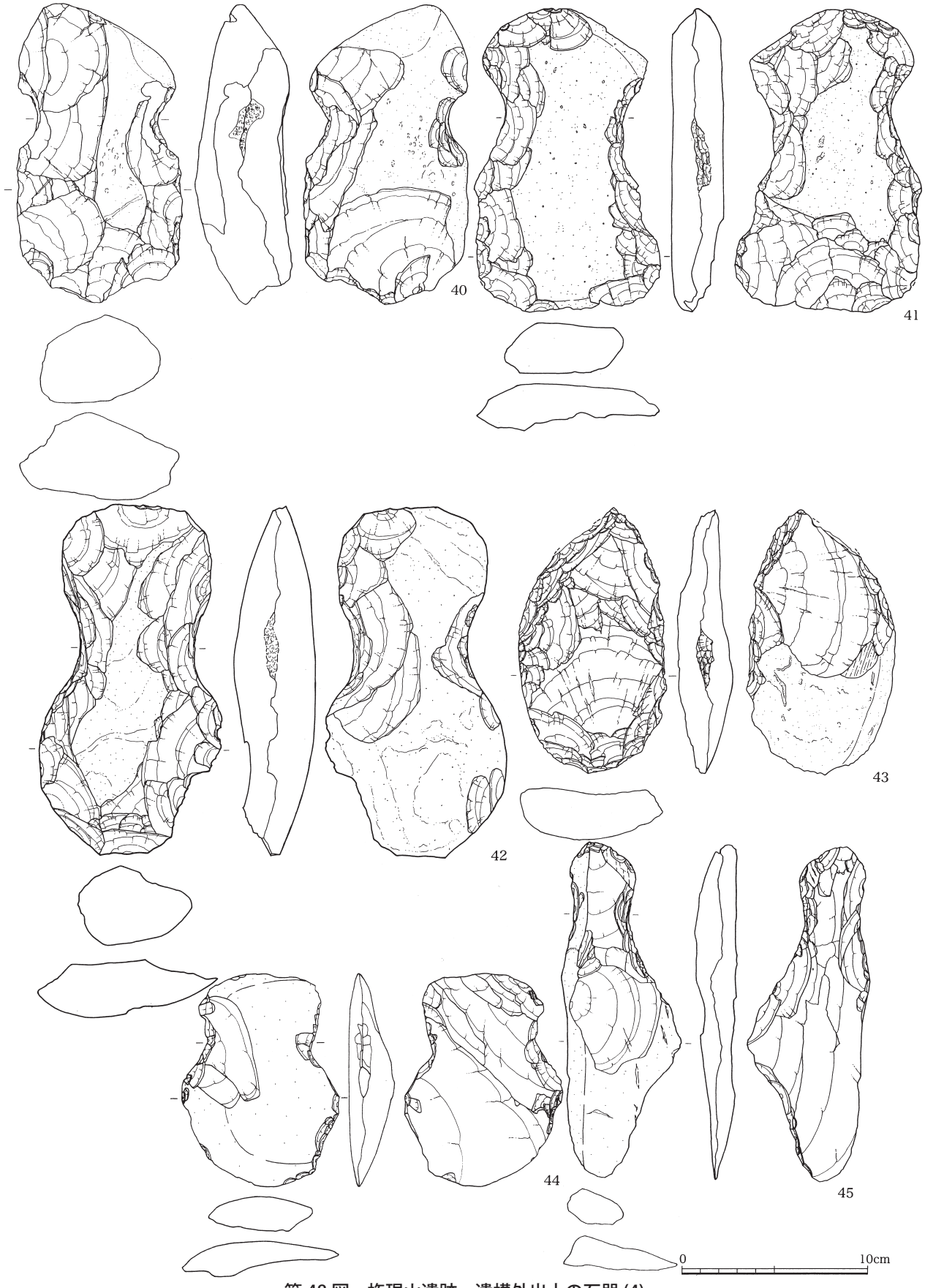


第 46 図　権現山遺跡　遺構外出土の石器 (2)

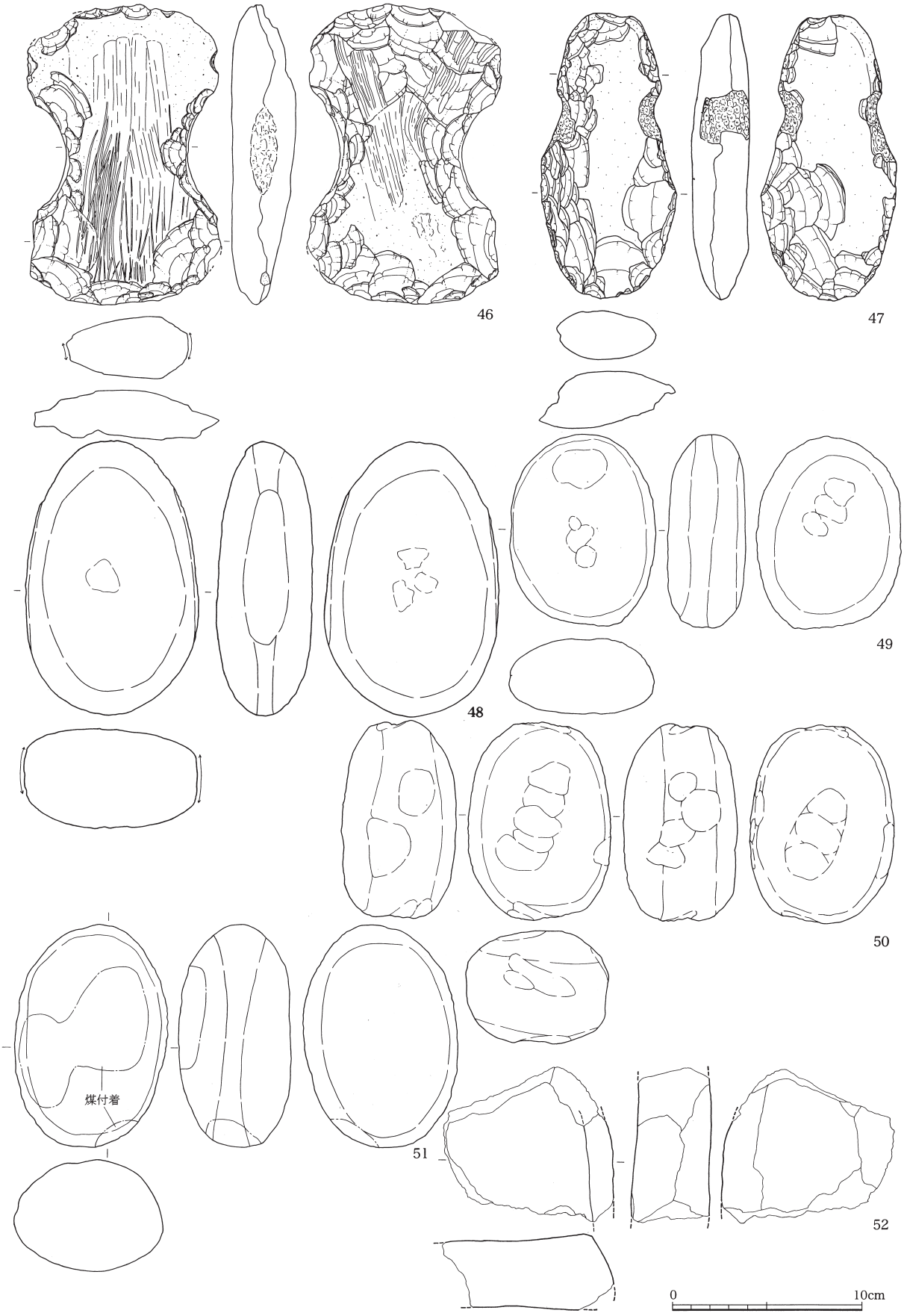


第 47 図　権現山遺跡　遺構外出土の石器 (3)

22 剝片	長　4.2 幅　4.1 厚　1.4	自然の礫面を１面だけ残す部分が打面。剝片下縁のうち約半分は腹面側からの力で折損する。下縁部右半と右側縁には微細な剝離痕が見られる。重量 29.5g。	5Y2/1　黒 黒色安山岩	SG5 区東部の低地調査 37 グリッド　　完形 UT-SG-V グリッド 37 21
23 剝片	長　4.0 幅　5.6 厚　1.1	1 側縁に自然面を残す。また、打面も自然面の可能性を持つ。剝片の下縁は背面側に反り気味で、鋭さを欠く。右側縁に微細な剝離痕を持つ。重量 18.0g。	7.5Y4/1　灰 チャート	SG1 区表面採集 完形 UT-SG-I 表採
24 剝片	長　6.2 幅　5.6 厚　1.6	礫の自然面を打面とする。二次加工は見られない。石材からみて、礫器の製作に伴う剝片かと見られる。重量 20.6g。	5Y5/2　灰オリーブ ホルンフェルス	SG1 区の古墳時代竪穴 完形 UT-SG-I SI-32 貯蔵穴
25 剝片	長　4.5 幅　8.0 厚　1.5	自然面を打面として、角度の緩い平坦な剝離を行う。二次加工は見られない。重量 33.5g。	7.5Y5/1　灰 安山岩	4 区の古墳時代土坑 完形 UT-GN-IV SK-113
26 剝片	長　残 3.2 幅　残 4.3 厚　5.4	自然面を打面とする横長剝片の下縁に沿って、小さな剝離痕が両面に見られる。背面の左半部と右端部が欠損する。破面の風化状況から見て、かなり古い時期に破損したと考えられる。残存重量 6.1g。	5Y7/1　灰白 流紋岩	4 区の古墳時代土坑 両端欠損 UT-GN-IV SX-75
27 剝片	長　4.8 幅　4.1 厚　2.0	上下両方に打面を持ち、自然面を上に残す石核から剝離した、厚手の剝片。1 側縁に微細な剝離痕がある。重量 41.1g。	7.5Y2/1　黒 黒色安山岩	SG10 区の古墳時代竪穴 完形 UT-SG-X SI-115 一層
28 石核	長　3.3 幅　4.2 厚　2.7	図の上側に自然面をわずかに残す。右図の面はポジティブな剝離面で、石核を２分割した面かもしれない。剝離後に全面がかなり被熱して赤色化している。重量 33.1g。	7.5YR6/4　にぶい橙 流紋岩	SG5 区の古墳時代竪穴 完形 UT-SG-V SI-116 貼床
29 礫器 （剝片素材）	長　16.3 幅　7.4 厚　2.9	石の節理に沿って原礫から剝離した扁平な剝片を素材とし、両側縁の主に腹面を加工して 60 ～ 70°の刃部角に仕上げている。重量 325.3g。	N4/　灰 ホルンフェルス	SG5 区の古墳時代溝 完形 UT-SG-V SD-229 19
30 礫器 （剝片素材）	長　8.6 幅　10.6 厚　3.8	円礫の表面を一部に残す剝片を素材とする。背面側の 1 側縁を加工して刃部とする。刃部角は 50 ～ 55°。重量 303.5g。	10Y7/1　灰白 流紋岩	SG5 区東部の低地調査 8 グリッド　　完形 UT-SG-V グリッド 8 9
31 礫器 （剝片素材）	長　7.1 幅　10.9 厚　2.2	大型の剝片を素材として、側縁の背面と腹面に簡単な加工を加えたもの。片面に礫面を広く残す。刃部角は左図の右半で 65 ～ 70°、左半で 55 ～ 60°。重量 173.6g。	7.5Y6/1　灰 ホルンフェルス	SG10 区の古墳時代溝 完形 UT-SG-X SD-221 一括
32 礫器	長　12.1 幅　11.3 厚　5.7	片面の丸味が強い自然礫の一端を剝離し、刃部角は右半部で 60 ～ 70°、左半部で 70 ～ 90°の鈍い刃部を作る。重量 936.1g。	5Y5/1　灰 ホルンフェルス	2 区の古墳時代遺物出土地点　　完形 UT-GN-II SX-94 №307
33 礫器	長　13.3 幅　7.6 厚　3.8	板状に割れる節理が少し入る円礫を素材にして、1 長辺に片面から、1 短辺に両面から、それぞれ剝離を行う。長辺の刃部角は 70°前後でやや緩く、短辺の刃部角は 90°前後の急角度。重量 537.1g。	N5/　灰 ホルンフェルス	SG2 区の確認調査トレンチ　　完形 UT-SG-II TX12 B 区 57
34 礫器	長　8.1 幅　12.7 厚　4.6	丸味のある自然礫を素材として、図の下側から大きく剝離した後に、片面から連続的に加工して刃部を作る。刃部角は約 80°。図の左上方向からも剝離を行っているが、刃部を形成してはいない。重量 454.4g。	7.5Y5/1　灰 ホルンフェルス	SG10 区の古墳時代竪穴 完形 UT-SG-X SI-6 151
35 礫器	長　12.8 幅　6.6 厚　4.0	全面を剝離し素材礫面がほとんど残らないが、図上端は原礫面か？ 小形石器用の剝片を作る石材ではないので、一種の礫器か。右図面を大きく加工後、左図面周縁に小加工を行い、両側縁と下縁を急角度の刃部にする。重量 299.5g。	5Y5/1　灰 ホルンフェルス	SG2 区の確認調査トレンチ　　完形 UT-SG-II TX12 B 区 9
36 礫器	長　15.4 幅　7.2 厚　5.6	片面と 1 側面のほぼ全面を加工し、他面は自然礫面をかなり広く残す。図示した側面と、右図の面との境が刃部で、刃部角は約 80°。左図の面の左下部もかなり加工されているが、角度は 90°～ 100°程で、刃部か疑問がある。重量 577.0g。	7.5Y5/1　灰 ホルンフェルス	SG10 区の中～近世溝 完形 UT-SG-X SD-201 13
37 礫器	長　残 16.4 幅　残 5.7 厚　2.7	両面に自然面を残す扁平な細長い礫を素材とする。片方の側縁を中心として、主に片面に比較的急角度の剝離を行う。残存重量 299.5g。	5Y6/1　灰 ホルンフェルス	SG5 区の古墳時代溝付近で採集 周縁に破損 SD-101 付近表採
38 礫器	長　8.3 幅　9.9 厚　4.3	不整な隅丸直方体の自然礫を素材にして、両面に剝離を行う。図の下面側は急角度の剝離を繰り返している。刃部角は 75°前後。重量 483.5g。	2.5Y7/4　浅黄 デイサイト	SG1 区の古墳時代竪穴 完形 UT-SG-I SI-12
39 礫器	長　6.9 幅　15.4 厚　4.6	丸味のある自然礫を素材として、主に図の下側から大きな剝離を加えている。図下側の刃部が緩い角度、図上側の刃部が急角度になる。両方の刃部に小さな剝離痕があり、使用によるものと見られる。重量 630.9g。	7.5Y5/1　灰 ホルンフェルス	SG10 区の古墳時代竪穴 完形 UT-SG-X SI-28 38
40 打製石斧	長　16.1 幅　8.9 厚　5.3	厚味のある自然礫が素材で、主に図下半と両側縁を加工。図上側は大半が礫面のままで刃部をなさない。図下側は刃部が磨耗し、左図の右半は破損剝離した可能性あり。クビレ部両側縁は剝離面の稜を叩き潰したような状況。重量 771.2g。	7.5Y4/1　灰 玢岩	SG9 区の遺構外 完形 UT-SG-IX 6.5-21 1
41 打製石斧	長　16.4 幅　10.0 厚　2.8	両面中央がほぼ平坦で扁平な自然礫を加工。図下側の刃部は右図面の破損剝離が進行しやや薄くなったように見える。図上側の刃部は稜が潰れたような使用痕あり。クビレ部の両側縁は剝離面の稜を叩き潰したような状況。重量 572.4g。	2.5Y6/1　黄灰 安山岩	SG2 区で表面採集 完形 UT-SG-II B 区表採
42 打製石斧	長　18.9 幅　9.7 厚　4.3	やや扁平な自然礫を素材とし、右図の面は加工が少ない。図下側の刃部は磨耗が見られず、使用で大きく剝離破損した状態かもしれない。図上側の刃部全体が磨耗気味。クビレ部両側縁は剝離面の稜が叩き潰したように不鮮明。重量 801.5g。	5Y6/2　灰オリーブ ホルンフェルス	SG1 区東部の低地調査 5-10 グリッド 完形　　UT-SG-1 5-10
43 打製石斧	長　14.4 幅　8.0 厚　2.9	丸味を持つ自然礫の片面全面と対面の約半分を加工。上下両側が刃部。上側は主軸に対しかなり斜行し、図示した破損は発掘時のもの。下部は片面加工だが、対面も丸味があるので両刃状の縦断面形。刃部は磨耗せず、使用して小剝離が進行したらしい。側面着柄部は左面が自然面、右側は図示した小剝離で面を作る。重量 359.0g。	N3/　暗灰 ホルンフェルス	SG5 区東部の低地調査 31 グリッド　　完形 UT-SG-V 31 グリッド 11
44 打製石斧	長　11.6 幅　8.4 厚　2.5	少し丸味のある自然礫から割り取った剝片を主に片面加工して成形。右図の面の中央部の稜がかなり高い。クビレ部を中心とする両側縁は両面から加工する。上下端の刃部はやや磨耗気味で、二次加工をあまり加えない。重量 199.7g。	N6/（B）　灰 安山岩	SG10 区の古墳時代竪穴 完形 UT-SG-X SI-61 94



第 48 図　権現山遺跡　遺構外出土の石器 (4)



第 49 図　権現山遺跡　遺構外出土の石器 (5)

45 打製石斧	長　18.1 幅　6.5 厚　2.3	石材の節理に沿って平たく割れた扁平な破片を素材として、クビレ部の両側を加工して不整な分銅形に仕上げる。上下両側は比較的薄い刃部だが、石材が非常に硬いので脆い感じは受けない。磨耗痕は不明確。重量 209.6g。	N5/（B）　灰 ホルンフェルス	SG5 区の古墳時代溝 完形 UT-SG-V SD-101 37
46 打製石斧	長　15.9 幅　10.2 厚　3.4	左図面に丸味がある扁平礫の、右図面を深く、左図面を浅く剝離する。上下の刃部は磨耗気味。クビレ部両側縁は稜をよく叩き潰す。さほど軟質な石材ではないが、両面の擦痕状痕跡が着柄部で途切れないので砥石に転用か。重量 642.3g。	10YR7/1　にぶい黄橙 安山岩	SG10 区の時期不明井戸　　完形 UT-SG-X SE-455 1 層
47 打製石斧	長　15.1 幅　7.2 厚　3.0	断面形に丸味のある細長い自然礫（あるいは磨製石斧）を素材として製作。図の下側は刃部が明瞭で、上側は刃部に鋭さを欠きやや磨耗気味。クビレ部両側面は稜を叩き潰している。重量 425.0g。	2.5GY7/1 明オリーブ灰 流紋岩質緑色凝灰岩	SG2 区　遺構外 完形 UT-SG-II A 区西 108
48 磨石	長　14.6 幅　9.3 厚　5.1	やや扁平な自然の円礫を使用し、両面で研磨する。両面の中央にごくわずかな浅い凹みまたは敲打痕あり。両側の長側面中央部も平坦気味に磨耗している。重量 782.7g。	多孔質安山岩	SG 調査区　出土状態 不明　　完形 UT-SG 一括
49 磨石	長　10.2 幅　7.7 厚　4.1	凹石を兼用する。左図よりも右図の面がやや平坦な自然の円礫を利用し、中央部と上部の両面に深さ 1 ～ 2㎜の凹みを 3 ～ 4 箇所ずつ持つ。両面が磨耗する。重量 376.7g。	10YR6/1　褐灰 多孔質安山岩	SG 調査区　出土状態 不明　　完形 UT-SG
50 磨石	長　10.5 幅　7.6 厚　5.9	凹石を兼用する。表裏と上下左右の計 6 面の中央付近に深さ 3 ～ 4 ㎜の明瞭な凹みを 2 ～ 5 箇所ずつ持つ。研磨使用痕は不明確。重量 638.4g。	7.5Y4/1　灰 多孔質安山岩	SG10 区の古墳時代溝 完形 UT-SG SD-221 №3
51 磨石	長　16.9 幅　8.1 厚　6.0	自然の円礫を利用し、表面全体が磨耗する。図示した 2 箇所の表面に煤が付着する。また全面がやや被熱赤化する。重量 674.3g。	2.5Y7/2　灰黄 多孔質安山岩	SG10 区の 13.5-16.5 グリッド　　完形 UT-SG-V 13.5-16.5
52 石皿	長　残 8.2 幅　残 9.1 厚　残 4.1	表裏両面と 1 側縁の残存部が良く磨耗する。上面は緩くわずかに凹む。下面はごくわずかな段差も残るが、ほぼ平坦。側面は良く磨いた斜面。残存する外形が弧状になる。残存重量 240.2g。	10YR5/2　灰黄褐 多孔質安山岩	SG1 区の古墳時代竪穴破片 UT-SG-I SI-13 16

45 打製石斧	長　18.1 幅　6.5 厚　2.3	石材の節理に沿って平たく割れた扁平な破片を素材として、クビレ部の両側を加工して不整な分銅形に仕上げる。上下両側は比較的薄い刃部だが、石材が非常に硬いので脆い感じは受けない。磨耗痕は不明確。重量 209.6g。	N5/（B）　灰 ホルンフェルス	SG5 区の古墳時代溝 完形 UT-SG-V SD-101 37
46 打製石斧	長　15.9 幅　10.2 厚　3.4	左図面に丸味がある扁平礫の、右図面を深く、左図面を浅く剝離する。上下の刃部は磨耗気味。クビレ部両側縁は稜をよく叩き潰す。さほど軟質な石材ではないが、両面の擦痕状痕跡が着柄部で途切れないので砥石に転用か。重量 642.3g。	10YR7/1　にぶい黄橙 安山岩	SG10 区の時期不明井戸　　完形 UT-SG-X SE-455 1 層
47 打製石斧	長　15.1 幅　7.2 厚　3.0	断面形に丸味のある細長い自然礫（あるいは磨製石斧）を素材として製作。図の下側は刃部が明瞭で、上側は刃部に鋭さを欠きやや磨耗気味。クビレ部両側面は稜を叩き潰している。重量 425.0g。	2.5GY7/1 明オリーブ灰 流紋岩質緑色凝灰岩	SG2 区　遺構外 完形 UT-SG-II A 区西 108
48 磨石	長　14.6 幅　9.3 厚　5.1	やや扁平な自然の円礫を使用し、両面で研磨する。両面の中央にごくわずかな浅い凹みまたは敲打痕あり。両側の長側面中央部も平坦気味に磨耗している。重量 782.7g。	多孔質安山岩	SG 調査区　出土状態 不明　　完形 UT-SG 一括
49 磨石	長　10.2 幅　7.7 厚　4.1	凹石を兼用する。左図よりも右図の面がやや平坦な自然の円礫を利用し、中央部と上部の両面に深さ 1 ～ 2㎜の凹みを 3 ～ 4 箇所ずつ持つ。両面が磨耗する。重量 376.7g。	10YR6/1　褐灰 多孔質安山岩	SG 調査区　出土状態 不明　　完形 UT-SG
50 磨石	長　10.5 幅　7.6 厚　5.9	凹石を兼用する。表裏と上下左右の計 6 面の中央付近に深さ 3 ～ 4 ㎜の明瞭な凹みを 2 ～ 5 箇所ずつ持つ。研磨使用痕は不明確。重量 638.4g。	7.5Y4/1　灰 多孔質安山岩	SG10 区の古墳時代溝 完形 UT-SG SD-221 №3
51 磨石	長　16.9 幅　8.1 厚　6.0	自然の円礫を利用し、表面全体が磨耗する。図示した 2 箇所の表面に煤が付着する。また全面がやや被熱赤化する。重量 674.3g。	2.5Y7/2　灰黄 多孔質安山岩	SG10 区の 13.5-16.5 グリッド　　完形 UT-SG-V 13.5-16.5
52 石皿	長　残 8.2 幅　残 9.1 厚　残 4.1	表裏両面と 1 側縁の残存部が良く磨耗する。上面は緩くわずかに凹む。下面はごくわずかな段差も残るが、ほぼ平坦。側面は良く磨いた斜面。残存する外形が弧状になる。残存重量 240.2g。	10YR5/2　灰黄褐 多孔質安山岩	SG1 区の古墳時代竪穴破片 UT-SG-I SI-13 16

第６章　権現山遺跡２区

権現山遺跡２区は、宇都宮市東谷町字立野・字杉村、砂田町字吉原に所在し、「西谷田」の低地を東側に望む低台地の東端に立地する。発掘調査前の標高は南部 81.12m・中央部 81.96m・北部 83.08m、低地との比高は南部 0.2m・中央部 0.7m・北部 1.2m 程である。２区の範囲は南北 290 ×東西 105m。古墳時代遺構は、そのうち２区北部で東西 40 ×南北 50m の範囲に分布する。遺構が集中する２区北部の位置は、北緯 36° 29′ 16″、東経 139° 54′ 15″である（世界測地系）。２区南部には「桜稲荷古墳」の存在が考えられていたが、２区でその周囲を発掘調査した結果では古墳やその周溝は確認されず、後世のごく低い塚の上に祠を祀った地点と判断された。この塚の範囲は区画整理から除外されて公園内に現況保存されている。

２区南部の谷状にやや低い遺構希薄部分を隔てて、権現山遺跡４区の遺構集中部が南側に隣接する。２区の北側は遺構・遺物が確認されなかった権現山遺跡３区になるので、権現山遺跡２区は古墳時代集落が台地東端に望む部分の北端に当たり、集落の中心部からは離れた部分である。

第１節　古墳時代の竪穴建物跡

２区 SI-1a（第 53 ～ 59 図、写真図版 13・14・115）

［位置］２区北寄りの台地平坦面、46.5-11.0・11.5、47.0-11.0・11.5 グリッド。古墳時代建物は、SI-98・99 が北へ 34m と 28m、SB-3 が西へ 5m 離れる。時期不明の SK-16・80 が南と北東にある。

［規模と形状］カマド、壁溝、柱穴など各施設を二回作り替えて、拡張建替を行う。ａ期建物はｂ期の四辺を拡張している。他遺構との重複はない。確認調査トレンチで北部が地山まで削平される。

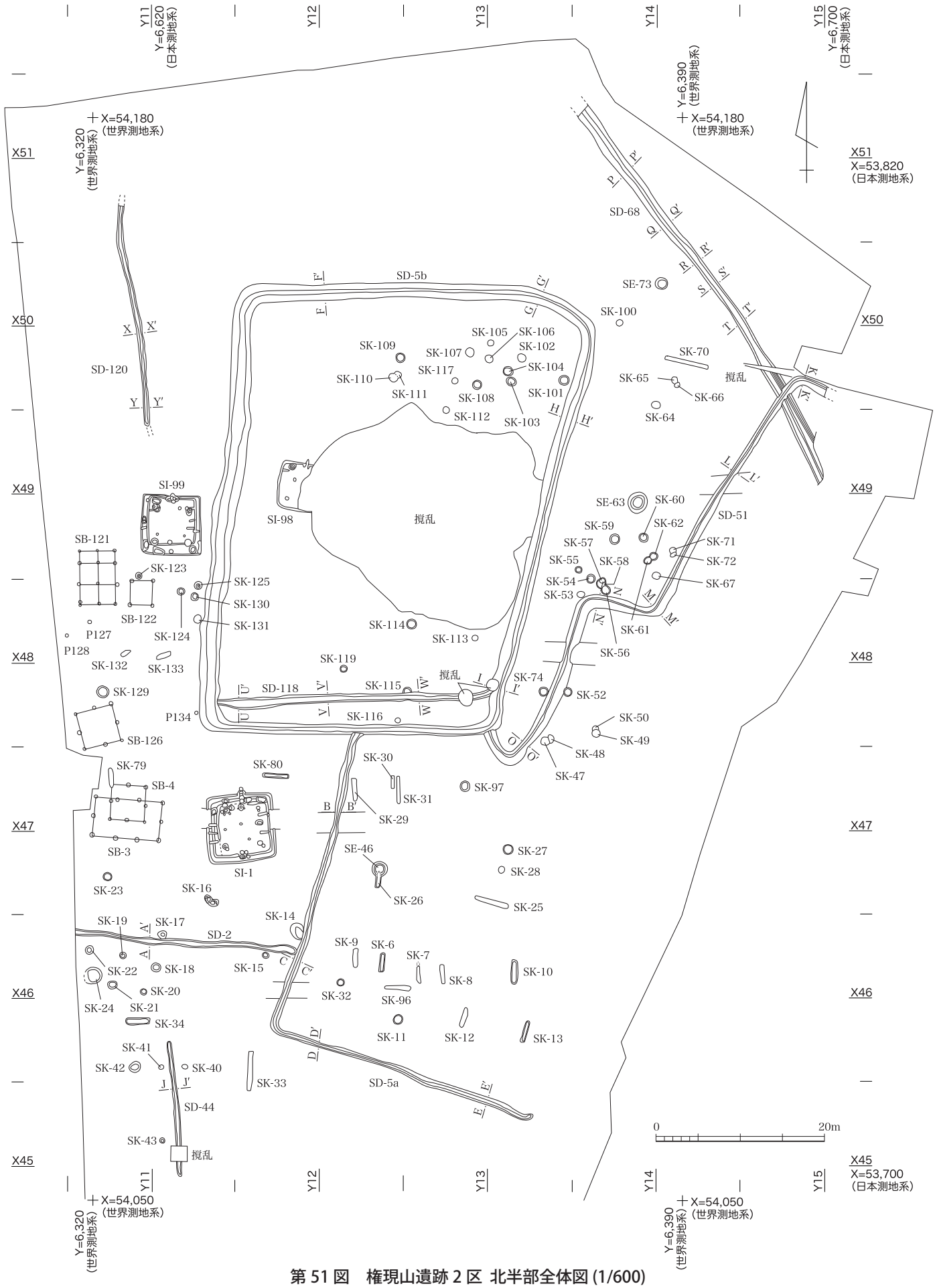
方形で中軸は N-5°-W。東西長 8.07m、南北長 8.22m。壁はわずかに外傾し、残存高 0.24 ～ 0.30m。床面は緩い凹凸があるがほぼ平坦で、傾斜しない。硬化部はないが、全体に締まる。ｂ期の竪穴を埋め戻し、ローム塊の多い６層でほぼ全面を貼床するが、壁際の拡張部では浅く、一部はロームをそのまま床面とする。床から掘方底までの深さはｂ期建物床面まで６～ 15cm、拡張部で１～５cm である。主柱穴は P1 ～４の４本。P1 は径 50 × 45 ×深さ 62cm、P2 は径 62 × 53 ×深さ 56cm、P3 は径 42 × 38 ×深さ 41cm、P4 は径 38 × 36 ×深さ 45cm。規模に大きな差はないが、P4 以外は中位に段を持ち、幅数 cm の平坦面を設けるものもある。南北の柱間がわずかに狭いが、ほぼ正方形配置で P1-2 間 4.30m、P3-4 間 4.09m、P1-4 間 4.28m、P2-3 間 4.19m。入口ピット P7 が、南貯蔵穴 P6 の東に近接して南壁際にある。径 30 × 24 ×深さ 37cm。壁溝 D1 がカマド部以外を全周する。断面逆台形の部分が多く、幅 16 ～ 30cm、床から深さ約８～ 12cm。３本の間仕切溝 D2 ～ 4 が西壁際にある。D2 は確認調査トレンチ底、D3・D4 は床面で確認した。幅 19 ～ 31cm、深さは記録不備で不詳。D3・D4 は西端が壁溝に接し、D2 も同様と推定される。D2・D3 間が心々 96cm、D3・D4 間が心々 110cm。

貯蔵穴は北西部に P5、南壁際中央に P6 がある。複数の貯蔵穴を持つ建物は杉村遺跡 GN1 区に多く（第４章）、南側の権現山遺跡４区 SI-27 などにもある。P5 は東西軸の隅丸長方形で 100 × 72 ×深さ 35cm。床面下３～７cm で全周に幅５～ 15cm の平坦面がある。平坦面内側の形状も隅丸長方形。ほぼ平底で壁は外傾する。ローム粒・塊が下層ほど多く、焼土・炭を２層に含む。P6 は東西軸の隅丸長方形で 100 × 72 ×深さ 35cm である。床面下 12 ～ 14cm で南辺を除く各辺に平坦面がある。平坦面内側の形状は隅丸方形。底面は南北軸の長方形で、南より北が約４cm 低い。壁は直線的で、南北辺よりも東西辺が強く外傾する。覆土第１層は褐色土塊、２層は褐色土・ローム塊、３層はローム塊を含む。

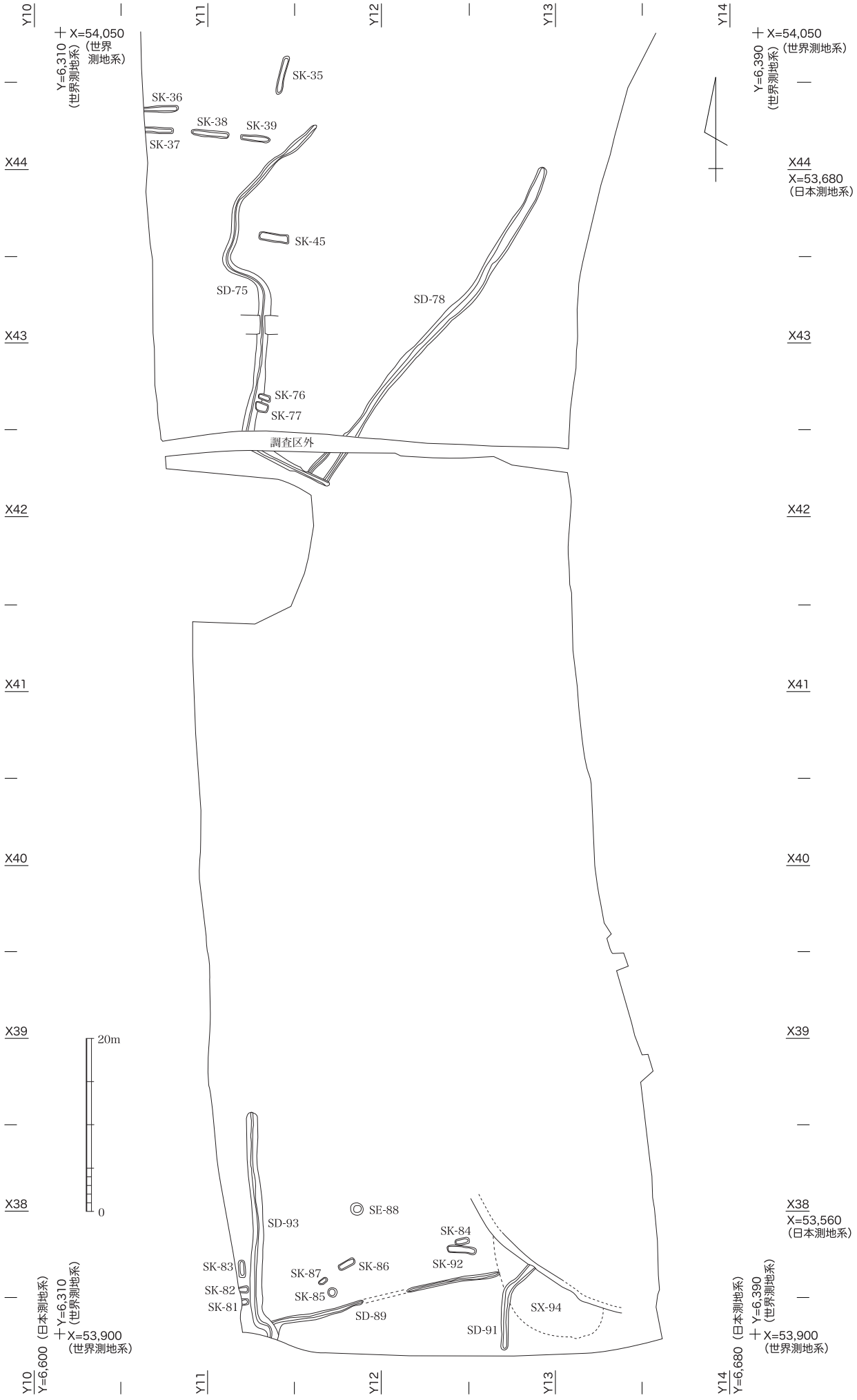
［カマド］北壁際中央やや東寄りにある。天井は崩れるが、残りは良い。規模は 96 × 156cm。竪穴貼床上に袖を作る。埋土は７層の上に粘土の多い６層が載る。火床は 10 層上面で、床からやや下がった平坦面。



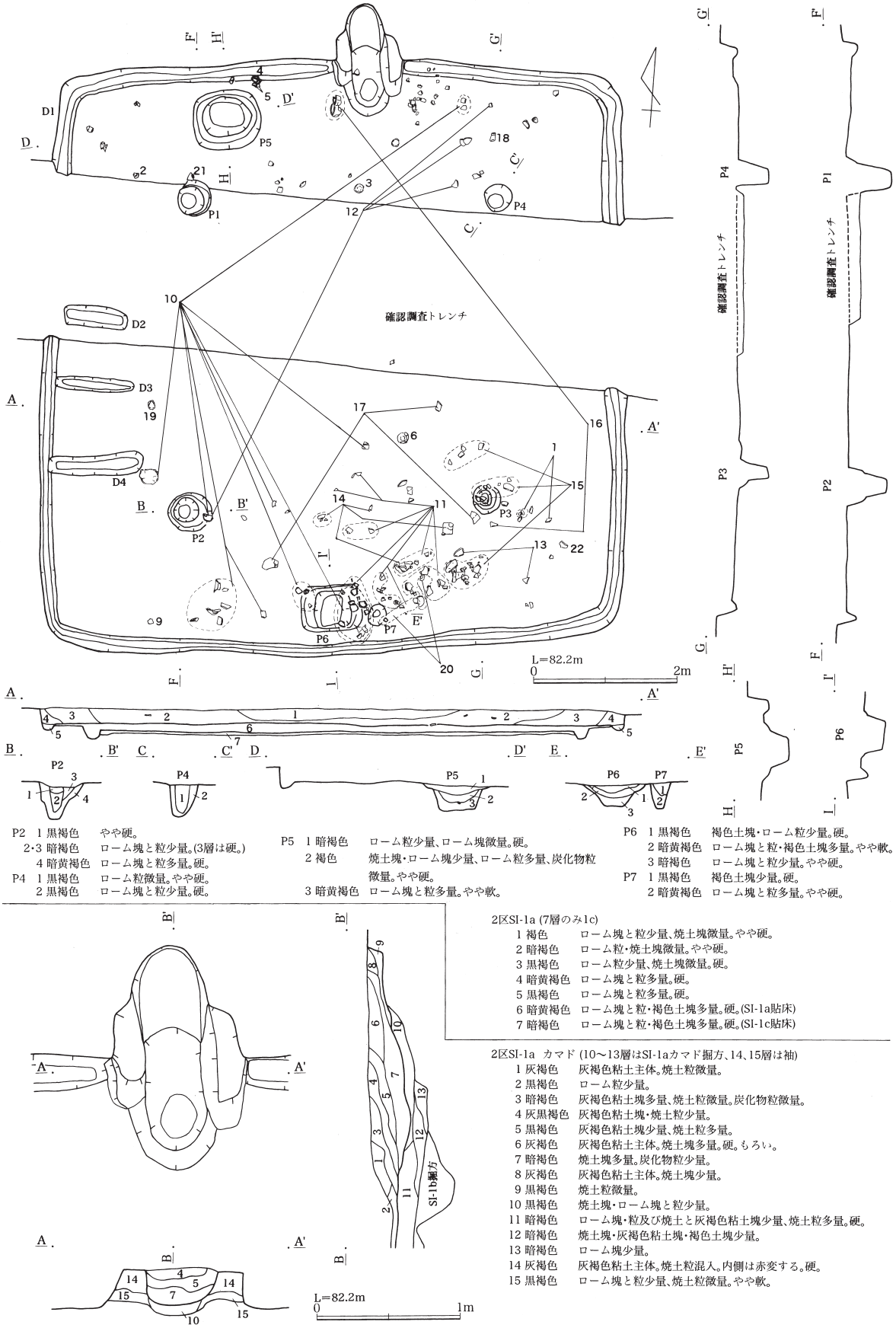
第 50 図　権現山遺跡 2 区 全体図（1/1,200）



第 51 図　権現山遺跡 2 区 北半部全体図 (1/600)



第 52 図　権現山遺跡 2 区 南半部全体図 (1/600)



P2　1 黒褐色　やや硬。
2･3 暗褐色　ローム塊と粒少量。(3層は硬。)
4 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。硬。
P4　1 黒褐色　ローム粒微量。やや硬。
2 黒褐色　ローム塊と粒少量。硬。

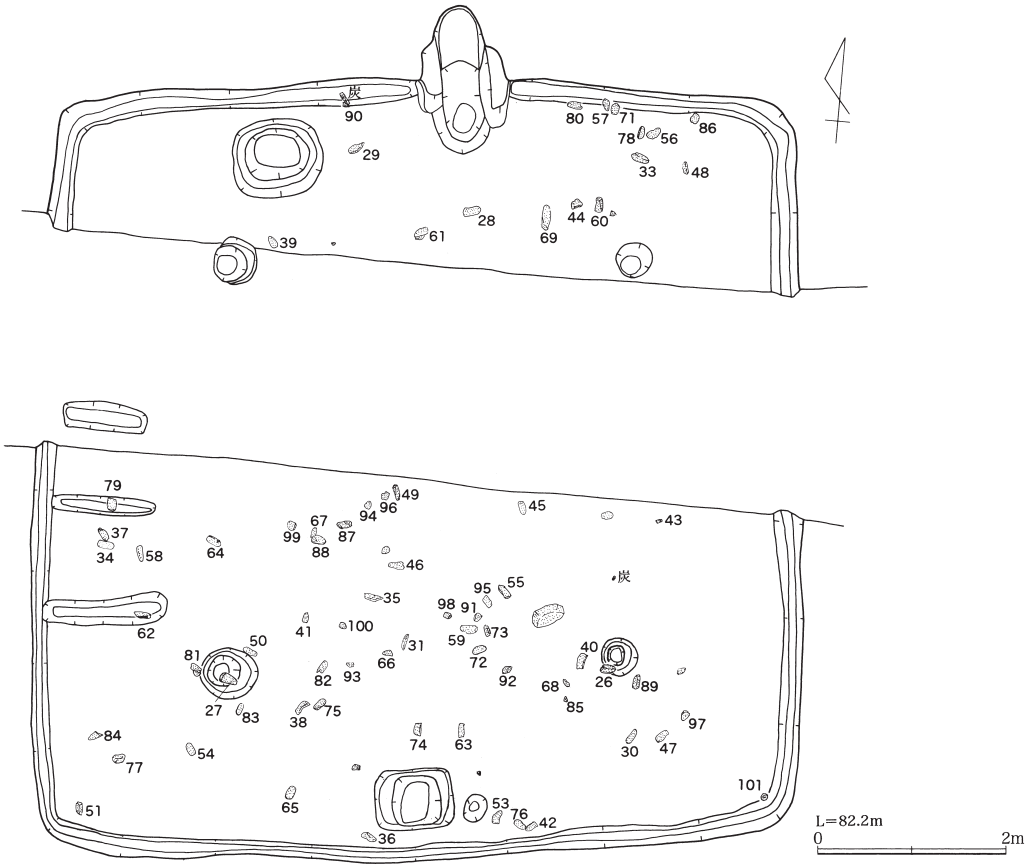
P5　1 暗褐色　ローム粒少量、ローム塊微量。硬。
2 褐色　焼土塊･ローム塊少量、ローム粒多量、炭化物粒微量。やや硬。
3 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。やや軟。

P6　1 黒褐色　褐色土塊･ローム粒少量。硬。
2 暗黄褐色　ローム塊と粒･褐色土塊多量。やや軟。
3 暗褐色　ローム塊と粒少量。やや硬。
P7　1 黒褐色　褐色土塊少量。硬。
2 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。

2区SI-1a (7層のみ1c)
1 褐色　ローム塊と粒少量、焼土塊微量。やや硬。
2 暗褐色　ローム粒･焼土塊微量。やや硬。
3 黒褐色　ローム粒少量、焼土塊微量。硬。
4 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。硬。
5 黒褐色　ローム塊と粒多量。硬。
6 暗黄褐色　ローム塊と粒･褐色土塊多量。硬。(SI-1a貼床)
7 暗褐色　ローム塊と粒･褐色土塊多量。硬。(SI-1c貼床)

2区SI-1a　カマド (10～13層はSI-1aカマド掘方、14、15層は袖)
1 灰褐色　灰褐色粘土主体。焼土粒微量。
2 黒褐色　ローム粒少量。
3 暗褐色　灰褐色粘土塊多量、焼土粒微量。炭化物粒微量。
4 灰黒褐色　灰褐色粘土塊･焼土粒少量。
5 黒褐色　灰褐色粘土塊少量、焼土粒多量。
6 灰褐色　灰褐色粘土主体。焼土塊多量。硬。もろい。
7 暗褐色　焼土塊多量。炭化物粒少量。
8 灰褐色　灰褐色粘土主体。焼土塊少量。
9 黒褐色　焼土粒微量。
10 黒褐色　焼土塊･ローム塊と粒少量。
11 暗褐色　ローム塊･粒及び焼土と灰褐色粘土塊少量、焼土粒多量。硬。
12 暗褐色　焼土塊･灰褐色粘土塊･褐色土塊少量。
13 暗褐色　ローム塊少量。
14 灰褐色　灰褐色粘土主体。焼土粒混入。内側は赤変する。硬。
15 黒褐色　ローム塊と粒少量、焼土粒微量。やや軟。

第 53 図　権現山遺跡 2 区 SI-1a (1) 遺構



第 54 図　権現山遺跡 2 区 SI-1a (2) 遺構

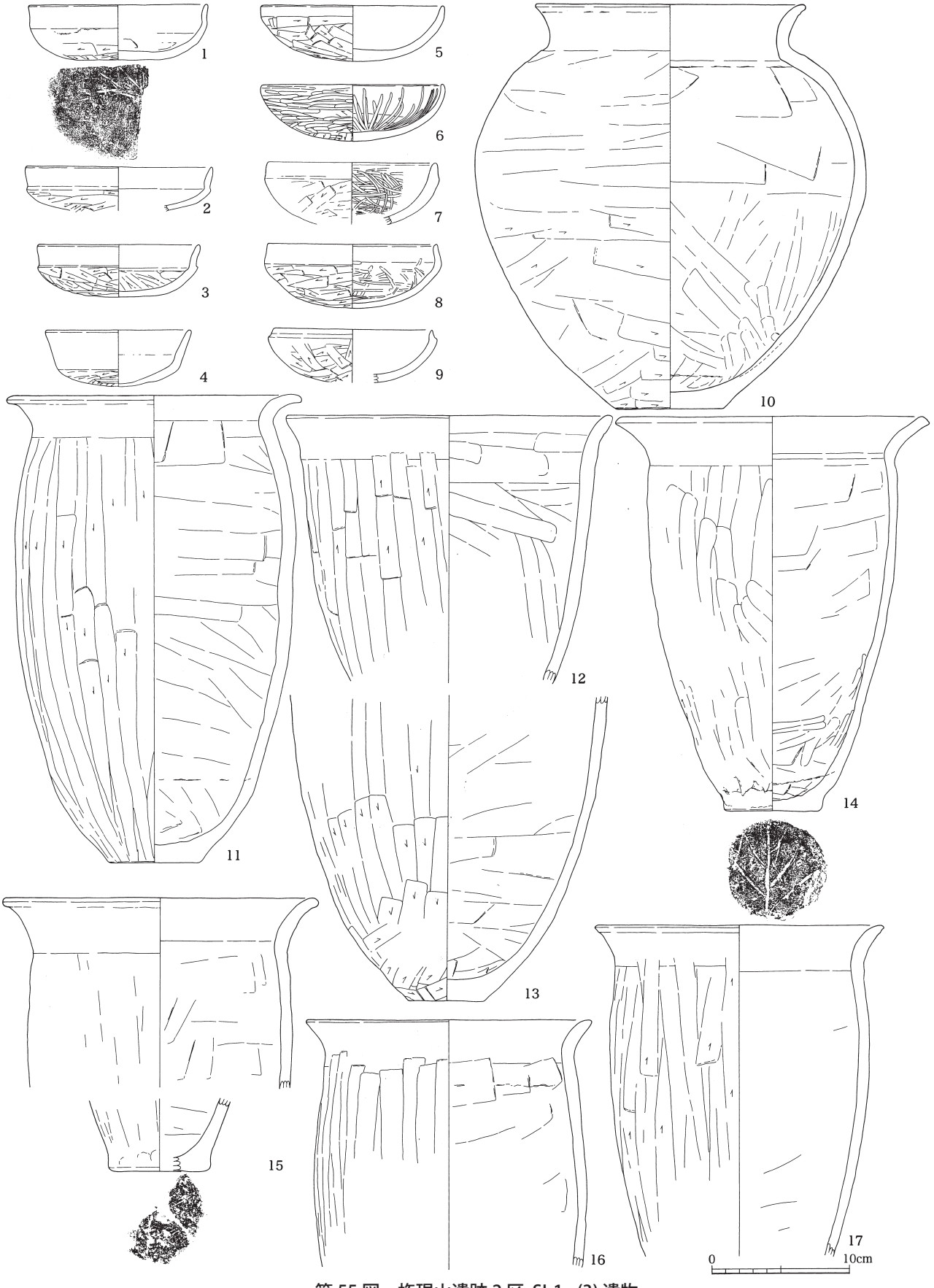
燃焼部に、天井内面が焼土化・崩落した 5 層、天井部崩落粘土の多い 3 層などが堆積する。3・4・7 層は火床面に接する。煙道は北東壁を約 20cm「U」字状に掘り、10 層上面が底面で、先端には 9 層や、袖部と類似する 8 層がある。煙道底面は火床よりわずかに高い平坦面。

［**覆土**］ローム塊を 1・4・5 層に、焼土塊を 1 ～ 3 層に含む。

［**遺物と出土状況**］遺物は多く、特に編物石が多い。通常と異なりカマド周辺に集中せず、土器・石器とも全域で出土した。ほとんどが床直上ないしやや浮いた状態で、大きく浮く遺物はない。甕はほとんどが長胴甕で、11 以外は口縁部に最大径を持つ。甑は無底式だけが数点ある（21）。焼粘土塊は 2 点ある。図化以外の土師器 615 片（7,231 g）は、杯 125 片（1,195 g）と甕甑類 490 片（6,036 g）が主体。この他に、土師器高杯脚部 1 片と、図示以外に甕と思われる須恵器小片が 1 片ある。編物石は敲打や剥離があるものが多いが、被熱したものは少ない。

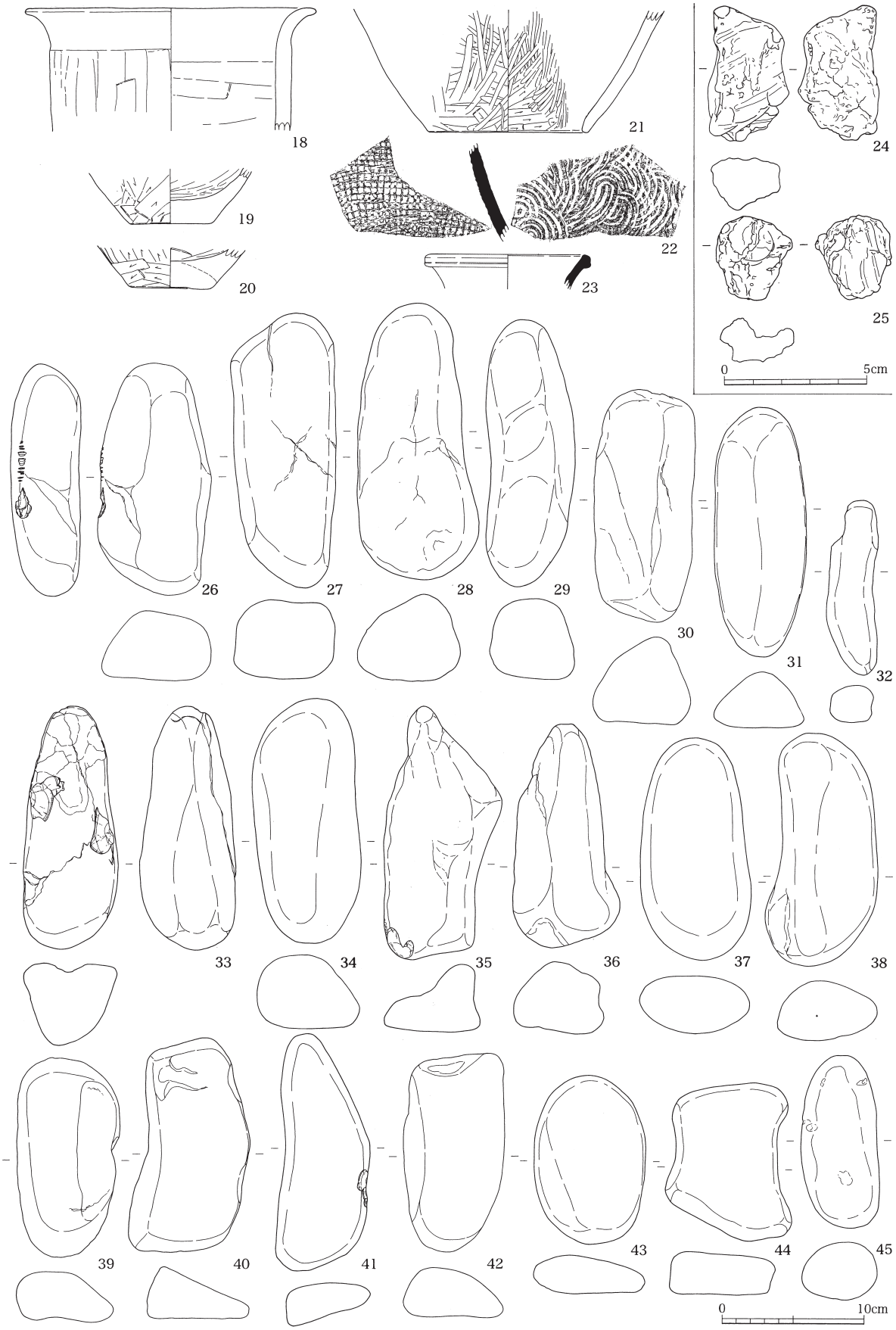
第 14 表　権現山遺跡 2 区 SI-1a 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 13.0 高　4.0	外面口縁部ヨコナデ、体部上半軽いナデ、体部下半～底部丁寧なケズリ。底部中央にミガキ状の短いヘラ痕数本あり。内面体部ヘラナデのち口縁～底部ヨコナデ。ヘラナデされない底部中央は器壁厚い。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。底部は作出されないが、安定して正立する。	2.5Y7/3　浅黄 やや緻密　白・黒細粒少、赤粗～細粒微 やや硬質	南東隅床上 7cm 口～底 1/4 周 56、57
2 土師器 杯	口　復 13.6 高　残 3.2	外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリ。内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。	7.5YR7/4　にぶい橙 緻密　白・黒・透明・赤細粒微　やや硬質	北西隅床上 4cm 口～体 1/4 周 8
3 土師器 杯	口　11.8 高　3.8	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ。内面口縁～体部ヨコナデのち体～底部光沢のあるヘラナデ。口縁部上半はわずかに内彎。内面口縁部下端は浅く溝状にくぼむ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　白・砂粗～細粒少、赤細粒微 やや硬質	中央北部床直上、正位 完形 2
4 土師器 杯	口　10.6 高　4.1	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ。内面全体ヨコナデ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　白・黒細粒微 やや硬質	北壁際西部床上 7cm、斜位 ほぼ完形　3



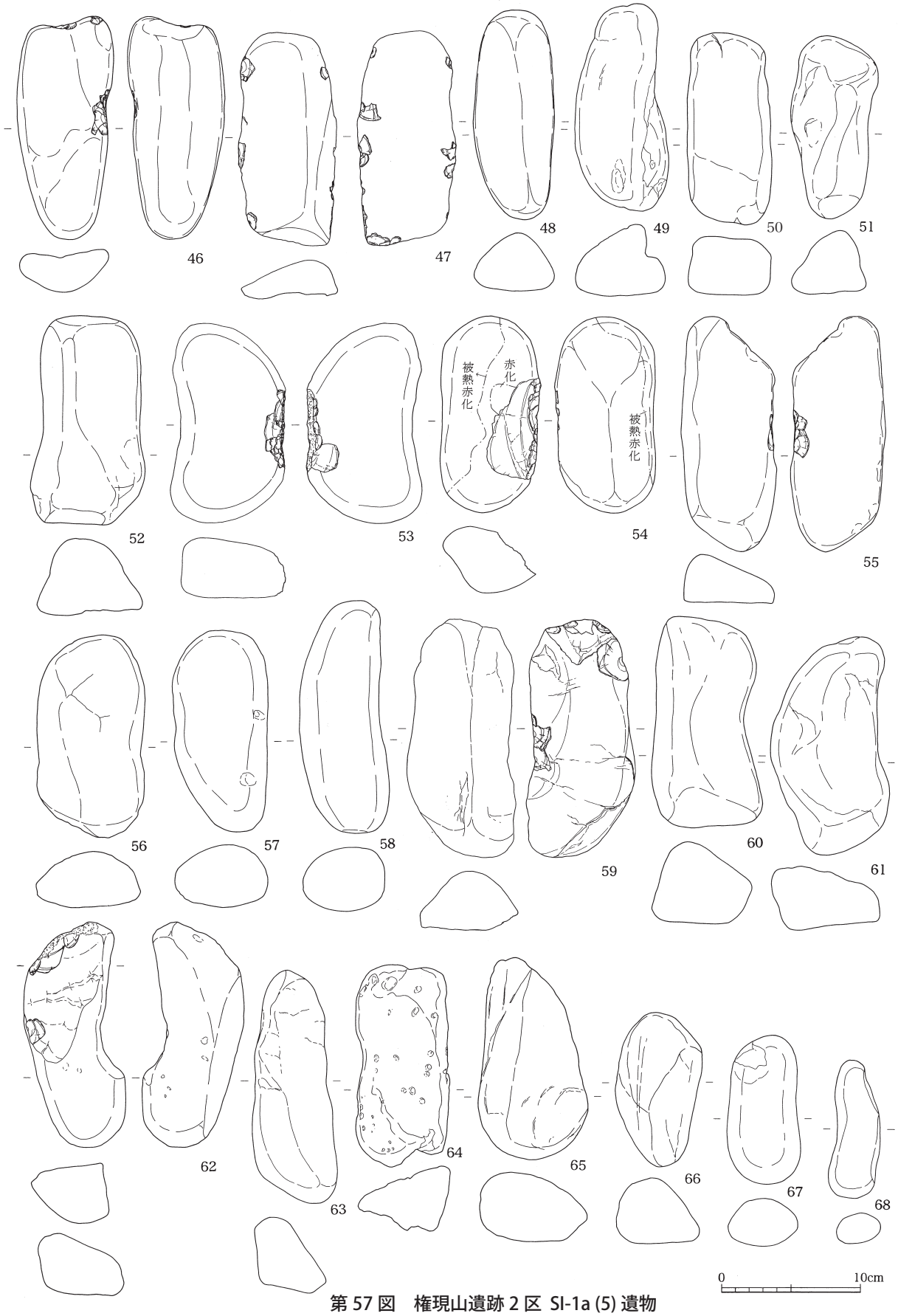
第 55 図　権現山遺跡 2 区 SI-1a (3) 遺物

5 土師器 杯	口　13.2 高　4.0	外面口縁部ヨコナデ、体～底部丁寧なケズリ。内面口縁～底部ヨコナデ。口縁端部は磨滅・剝落する部分が多い。	7.5YR7/4　にぶい橙 緻密　赤・白細粒微 やや硬質	北壁際西部床上 5㎝ 口～底 3/4 周 4
6 土師器 杯	口　13.4 高　4.1	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリのち口縁～体部ミガキ。内面口縁～底部ヨコナデのち放射状の疎らなミガキ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。	5YR6/6　橙 やや緻密　白・黒・赤細粒少 硬質	中央西部床直上、逆位 ほぼ完形 35
7 土師器 杯	口　復 12.2 高　残 4.2	口縁部ヨコナデで、下端はわずかな稜となる。体部丁寧なケズリ。内面口縁～体部ヨコナデのち横方向主体のミガキ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げと見られるが、剝落している部分が多い。口縁端部は細かく欠損している。	10YR7/3　にぶい黄橙 緻密　赤粗粒微、白微粒少 やや硬質	口～体 1/5 周
8 土師器 杯	口　12.4 高　残 4.6 最大　12.8	外面口縁部ヨコナデ、体～底部丁寧なケズリ。内面口縁～底部ヨコナデのち体～底部多方向の疎らなミガキ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。内面の大部分は黒褐色。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　砂・白粗～細粒微 やや硬質	口～底 3/4 周
9 土師器 杯	口　復 11.6 高　残 3.8 最大　復 12.2	胎土精良で、精緻な作り。外面口縁部強いヨコナデ、体部ケズリ。内面口縁～体部ヨコナデ。内外面全体漆仕上げ。	7.5YR7/4　にぶい橙 緻密　白・黒・透明微粒少 やや硬質	南西隅床上 6㎝ 口～体 1/5 周 141
10 土師器 甕	口　復 19.6 高　29.3 底　復 7.8 最大　復 28.4	外面胴部中位～底部ケズリのち胴部上半ナデのち口縁部ヨコナデ。口縁部上端にはわずかな稜あり。底部平底。内面口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラナデで、胴部下半には一部にケズリのようになる部分あり。胴部下半には積み上げ休止による接合痕があり、内面に継ぎ目や器厚の変化として残っている。外面胴部上半煤付着、胴部中位～底部被熱により赤変。外面胴部には一部にミガキの集中あり。	10YR8/4　浅黄橙 やや緻密　砂・白・透明礫微、白・半透明粗～細粒少 硬質	中央南西部床直上、正位 口～底 2/3 周 24、29、30、31、32、33、136、138、140
11 土師器 甕	口　21.4 高　33.8 底　6.4	外面口縁部ヨコナデのち胴～底部ケズリ。底部は一方向のケズリで、平底。内面口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラナデ。	5YR6/6　橙 粗い　白・砂礫微、透明・白・砂粗～細粒少 硬質	南東部床上 9㎝ 口～底 3/4 周 33、40、42、43、44、45、47、48、50、66、69、70、159、一括
12 土師器 甕	口　復 23.6 高　残 19.4	13 と同一個体の可能性高い。外面口縁部ヨコナデのち胴部上半ケズリ。内面口縁部ヨコナデのち胴部上半ナデ。外面胴部中位に褐色粘土わずかに付着。	5YR7/6　橙 やや粗い　砂・白粗粒微、白・黒・透明細粒少 やや硬質	北東部床上 17㎝ 口～胴上半 1/5 周 19、21、25、140
13 土師器 甕	高　残 22.2 底　5.4	12 と同一個体の可能性高い。外面胴部下半～底部ケズリ。底部ケズリは二方向で、丁寧に平底に調整される。内面胴部下半～底部ヘラナデ。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　白・砂・赤礫微、白・透明・砂細粒多 やや硬質	南東部床上 9㎝、斜位 胴下半 1/5 周、胴下端～底完存 52、54、一括
14 土師器 甕	口　復 22.8 高　復 28.5 底　7.2	胴部中位接合せず。外面胴部ナデのち口縁部ヨコナデ。胴部のナデは上半主体で、下半には無調整の部分もある。底部木葉痕で、突出する平底。内面口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラナデ。	2.5YR6/6　橙 やや粗い　金雲母粗～微粒多、白粗～細粒少 硬質	南東部床上 3㎝ 口～胴上半 1/4 周、胴下半～底ほぼ完存 37、47、65、68
15 土師器 甕	口　復 23.0 高　残 19.0 底　復 7.4	破片は多いが、破片周囲が崩れているため接合できず。胎土は粗いが、調整は丁寧。外面口縁部ヨコナデ、胴部縦方向のナデ。底部木葉痕で、小礫などの圧痕も残る。平底。内面口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラナデ。外面胴部上半煤付着。内面胴部下端～底部コゲ付着。	5YR5/6　明赤褐 粗い　金雲母・白・砂粗～細粒多 やや硬質	南東部床上 12㎝ 口～底 1/3 周 51、60、133
16 土師器 甕	口　20.6 高　残 17.8	外面口縁部ヨコナデのち胴部上半丁寧なケズリ。内面口縁部ヨコナデのち胴部上半ヘラナデ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　白・砂礫微、白・砂細粒少 硬質	カマド西床上 18㎝、横位 口～胴上半完存 1、62
17 土師器 甕	口　復 21.0 高　残 24.0	外面口縁部ヨコナデのち胴部上半～中位ケズリ。口縁部上端にわずかな段あり。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半～中位丁寧なナデで調整の単位つかめず。外面胴部中位被熱により赤変。	2.5YR7/8　橙 やや粗い　白・砂・透明粗～細粒多、赤細粒微 やや硬質	南西部床上 8㎝ 口～胴上半 1/3 周 34、63、134
18 土師器 甕	口　復 20.4 高　残 8.5	外面口縁部ヨコナデ、胴部上半ケズリ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半ヘラナデ。外面胴部上半一部煤付着。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　白・透明粗～細粒少、赤粗～細粒微　硬質	北東隅床直上 口～胴上半 1/4 周 160 床直下、一括
19 土師器 甕	高　残 3.8 底　5.6	13 に類似する。外面胴部下端～底部ケズリ。底部ケズリは多方向で、丁寧に平底に調整される。内面胴部下端～底部やや荒いヘラナデ。内面黒褐色。	5YR7/6　橙 やや粗い　白・砂粗粒微、白・透明・砂細～微粒多 やや硬質	中央西部床上 8㎝ 胴下端～底完存 142
20 土師器 甕	高　残 2.8 底　5.6	13、19 に類似する。外面胴部下端～底部ケズリ。底部ケズリは多方向で、一部削りすぎにより凹む。内面胴部下端～底部ヘラナデ。外面胴部下端～底部被熱により赤変。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　白・砂粗粒微、白・透明細～微粒多 やや硬質	南東部床上 8㎝ 胴下端～底一部欠 44、49
21 土師器 甑	高　残 8.5 底　復 11.0	無底式。外面胴部下半ケズリのちナデ。内面胴部下半ケズリのちミガキ。下端はケズリにより面取りされる。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや粗い　白・透明粗～細粒・黒細粒少　硬質	P1 北床上 1㎝ 胴下半～底 1/6 周 9
22 須恵器 甕	高　残 6.8	外面胴部上半深い格子目風タタキのちカキ目。内面胴部上半同心円当て具痕。内面黒褐色。	5Y6/2　灰オリーブ やや緻密　白・黒細粒少 やや軟質	南東隅床上 9㎝ 胴部上半破片 36
23 須恵器 瓶類	口　復 11.6 高　残 2.4	口縁部内外面ともロクロナデ。端部は肥厚し、丸味を持つ方形に成形される。	7.5Y6/1　灰 やや緻密　白・黒細～微粒少 やや硬質	口縁部破片
24 土師質 焼粘土塊	長　4.7 幅　2.9 厚　1.7	不定形で、表側の表面には植物圧痕と見られる細い沈線が目立つ。重量 12.0g。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒微 やや軟質	完形
25 土師質 焼粘土塊	長　2.9 幅　2.7 厚　1.0	小形・不定形。裏側は平坦で、木目状の凹凸が残る。重量 4.9g。	2.5YR6/6　橙 やや緻密　赤・白・透明・黒細粒微　軟質	完形
26 石器 編物石	長　16.3 幅　8.0 厚　4.8	河原石。左側縁には、剝離のほか、縁辺と直交する方向の条線状の傷が多数ある。金属器により付けられたものか。重量 893.1g。	5Y4/3　暗オリーブ やや粗い 流紋岩	P1 南西床直上 完形 77
27 石器 編物石	長　19.1 幅　7.4 厚　5.6	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 1334.2g。	5Y6/2　灰オリーブ 緻密 流紋岩	P2 内底上 42㎝ 完形 103
28 石器 編物石	長　19.4 幅　8.5 厚　6.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 1081.7g。	5YR7/6　橙 やや緻密 流紋岩	北部床上 7㎝ 完形 145



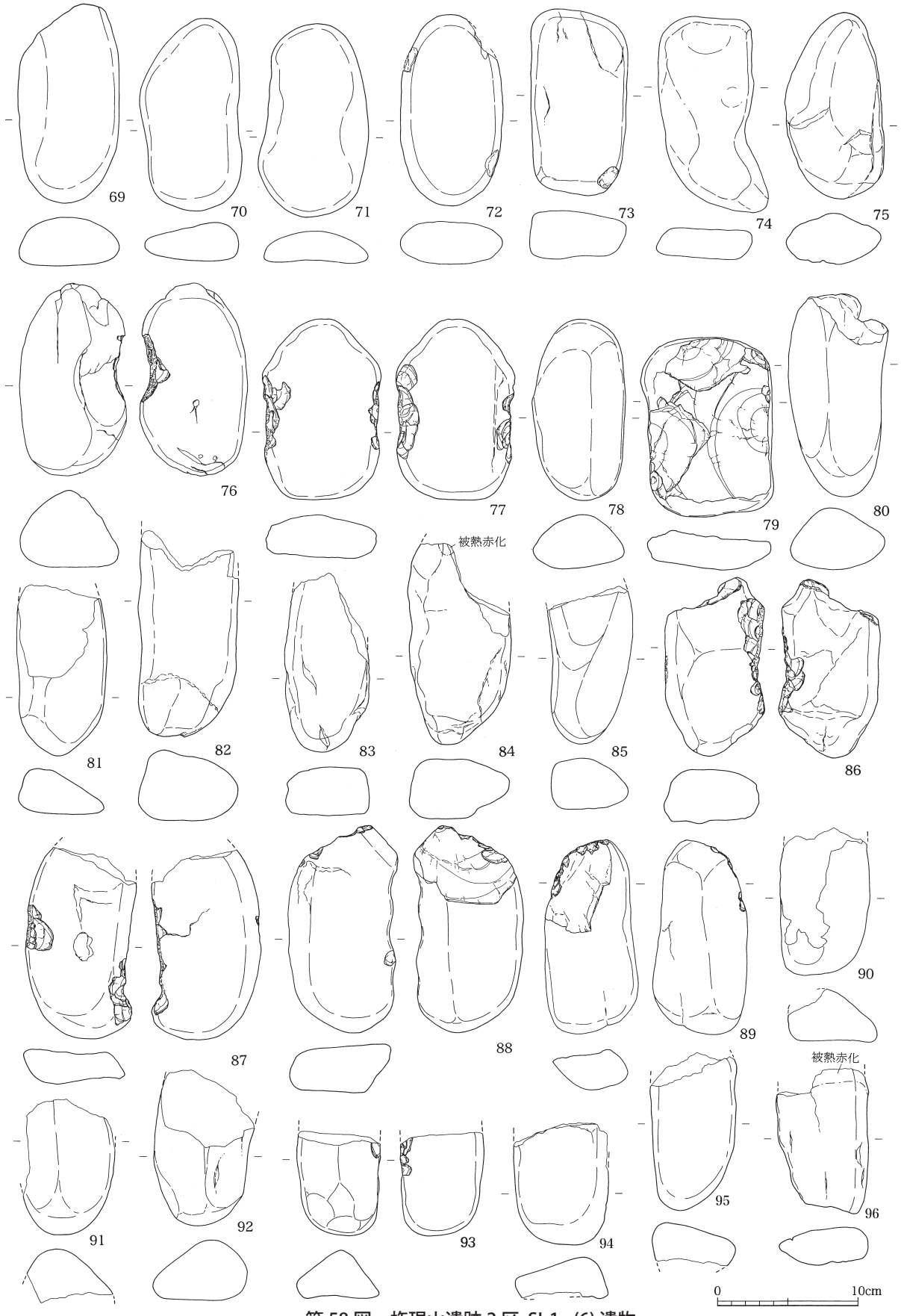
第 56 図　権現山遺跡 2 区 SI-1a (4) 遺物

29 石器 編物石	長　18.6 幅　6.2 厚　6.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 907.4g。	7.5YR4/1　褐灰 やや緻密 流紋岩	P5 東床上 10㎝ 完形 143
30 石器 編物石	長　16.3 幅　7.1 厚　6.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 1010.0g。	2.5GY6/1　オリーブ灰 やや粗い 礫岩	南東隅床上 9㎝ 完形 82
31 石器 編物石	長　17.4 幅　6.5 厚　4.1	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 618.0g。	5Y7/2　灰白 緻密 安山岩	中央南部床直上 完形 96
32 石器 編物石	長　12.2 幅　3.6 厚　2.8	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 174.3g。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密 流紋岩	完形
33 石器 編物石	長　17.0 幅　6.7 厚　6.0	河原石。表側両側縁中央付近に剝離あり。重量 846.1g。	2.5Y7/4　浅黄 緻密 安山岩	北東隅床上 7㎝ 完形 155
34 石器 編物石	長　17.1 幅　7.6 厚　6.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 1013.0g。	5Y7/2　灰白 緻密 安山岩	西部床直上 完形 112
35 石器 編物石	長　17.7 幅　8.3 厚　4.7	河原石。左下端にわずかな敲打痕とそれに伴う 1 回の剝離あり。重量 645.4g。	10YR7/3　にぶい黄橙 緻密 流紋岩	中央南部床直上 完形 97
36 石器 編物石	長　15.7 幅　7.5 厚　6.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 764.5g。	5Y7/3　浅黄 粗い 礫岩	南壁際西部床直上 完形 91
37 石器 編物石	長　15.5 幅　7.7 厚　4.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 719.8g。	2.5Y6/2　灰黄 やや緻密 安山岩	西部床直上 完形 113
38 石器 編物石	長　16.3 幅　7.8 厚　4.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 757.0g。	5Y7/2　灰白 やや粗い 礫岩	中央南西部床上 5㎝ 完形 93
39 石器 編物石	長　13.9 幅　7.1 厚　5.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 577.7g。	2.5Y5/4　黄褐 やや粗い 流紋岩	北西部床上 6㎝ 完形 10
40 石器 編物石	長　15.0 幅　8.2 厚　4.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 606.8g。	10Y4/1　灰 やや緻密 礫岩	P1 西底上 19㎝ 完形 76
41 石器 編物石	長　16.6 幅　6.6 厚　2.7	河原石。右側縁に剝離が施され、わずかな抉りが作出される。重量 387.1g。	5Y8/2　灰白 やや緻密 安山岩	中央南西部床直上 完形 101、107
42 石器 編物石	長　13.9 幅　7.1 厚　3.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 438.8g。	2.5Y6/2　灰黄 やや緻密 安山岩	南壁際東部床上 1㎝ 完形 84
43 石器 編物石	長　11.8 幅　7.8 厚　2.8	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 350.5g。	2.5GY6/1　オリーブ灰 やや緻密 安山岩	東部床直上 完形 132
44 石器 編物石	長　11.1 幅　8.9 厚　3.1	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 467.9g。	2.5Y7/4　浅黄 やや緻密 流紋岩	北東部床上 18㎝ 完形 147
45 石器 編物石	長　12.1 幅　5.4 厚　4.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 404.3g。	5Y6/1　灰 やや粗い 礫岩	中央東部床上 2㎝ 完形 130
46 石器 編物石	長　16.0 幅　6.9 厚　3.0	河原石。右側縁中央および上端中央に敲打が施され、緩やかな抉りが作出される。重量 448.3g。	7.5YR7/2　明褐灰 緻密 安山岩	中央南部床直上 完形 125
47 石器 編物石	長　15.4 幅　7.0 厚　2.8	河原石。縁辺に数ヶ所の剝離あり。突出部分を除去するためか。重量 400.4g。	2.5Y6/1　黄灰 緻密 安山岩	南東隅床上 15㎝ 完形 81
48 石器 編物石	長　15.0 幅　5.8 厚　4.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 550.6g。	5Y7/2　灰白 緻密 安山岩	北東隅床上 7㎝ 完形 156
49 石器 編物石	長　14.9 幅　6.7 厚　5.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 639.6g。	7.5Y7/1　灰白 やや緻密 安山岩	中央床直上 完形 119
50 石器 編物石	長　13.8 幅　6.1 厚　4.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 659.0g。	5Y7/2　灰白 やや粗い 流紋岩	P2 北東底上 16㎝ 完形 102
51 石器 編物石	長　13.2 幅　6.3 厚　4.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 473.8g。	5Y6/2　灰オリーブ 緻密 安山岩	南西隅床直上 完形 108
52 石器 編物石	長　15.0 幅　8.2 厚　5.6	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 885.0g。	2.5Y7/4　浅黄 やや粗い 閃緑岩	完形
53 石器 編物石	長　14.3 幅　8.3 厚　4.3	河原石。右側縁中央が集中して敲打され、わずかに凹む縁辺部となる。重量 769.5g。	2.5Y7/2　灰黄 やや緻密 安山岩	P7 南東床直上 完形 86
54 石器 編物石	長　13.9 幅　7.0 厚　4.5	河原石。右側縁中央に 1 回の剝離と数回の敲打を加え、緩やかに凹む縁辺としている。表面の 1/3 程が被熱により赤変する。重量 597.1g。	2.5Y7/1　灰白 緻密 安山岩	南西隅床上 9㎝ 完形 105
55 石器 編物石	長　16.8 幅　6.9 厚　3.5	河原石。右側縁中央に敲打が施され、緩やかな抉りが作出される。重量 515.6g。	2.5GY7/1　明オリーブ灰 やや粗い 流紋岩	中央東部床上 5㎝ 完形 128
56 石器 編物石	長　14.5 幅　7.7 厚　4.1	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 665.9g。	5Y5/1　灰 やや粗い 流紋岩	北東隅床直上 完形 154
57 石器 編物石	長　14.4 幅　6.8 厚　4.8	河原石。上端側縁部にわずかな平坦面があるが、敲打によるものとは見られない。重量 610.6g。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い 流紋岩	北壁際東部床上 7㎝ 完形 151
58 石器 編物石	長　16.7 幅　6.1 厚　4.6	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 748.0g。	2.5Y7/4　浅黄 やや粗い 安山岩	西部床直上 完形 114

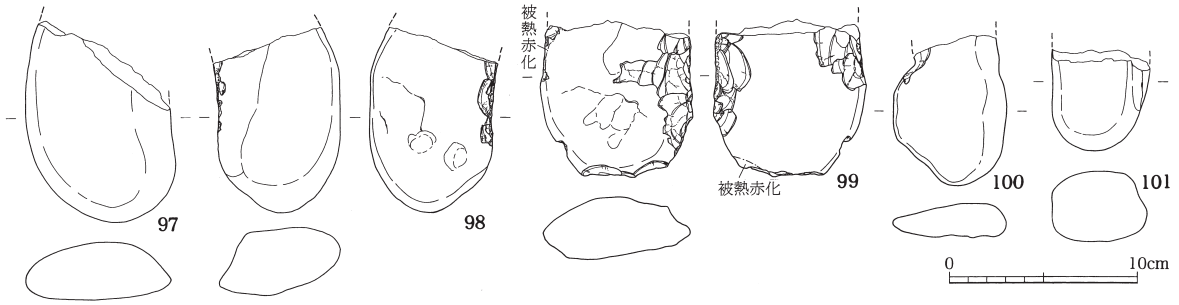


第 57 図　権現山遺跡 2 区 SI-1a (5) 遺物

59 石器 編物石	長　17.1 幅　7.8 厚　4.6	河原石。右側縁中央および上端に剝離が施され、右側縁中央はやや凹んだ縁辺となる。裏面全体におよぶ右側縁からの剝離は、剝離面の磨滅の状態などから人為ではない可能性がある。重量 707.5g。	2.5Y5/2　暗灰黄 やや粗い 礫岩	中央南部床直上 完形 72
60 石器 編物石	長　15.1 幅　7.9 厚　6.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 964.5g。	5Y7/3　浅黄 やや粗い 流紋岩	北東部床上 13㎝ 完形 148
61 石器 編物石	長　15.7 幅　8.5 厚　5.6	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 931.6g。	2.5Y7/3　浅黄 緻密 ホルンフェルス	北部床上 2㎝ 完形 144
62 石器 編物石	長　15.9 幅　6.8 厚　5.2	河原石。左上縁のやや鋭角的な部分に敲打痕と敲打に伴う剝離が集中する。表側上半の大きな剝離面は自然のものと考える。重量 722.7g。	2.5Y8/2　灰白 やや粗い 安山岩	南西部床上 4㎝ 完形 111
63 石器 編物石	長　16.7 幅　6.1 厚　5.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 660.8g。	2.5Y5/1　黄灰 緻密 ホルンフェルス	南部床上 8㎝ 完形 88
64 石器 編物石	長　14.5 幅　6.6 厚　5.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 624.5g。	10YR6/6　明黄褐 やや緻密 流紋岩	中央西部床直上 完形 116
65 石器 編物石	長　14.6 幅　7.8 厚　6.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 790.0g。	5Y6/2　灰オリーブ 緻密 流紋岩	南西部床直上 完形 92
66 石器 編物石	長　11.1 幅　6.2 厚　6.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 397.0g。	5Y4/1　灰 緻密 ホルンフェルス	中央南部床直上 完形 95
67 石器 編物石	長　10.7 幅　5.3 厚　3.6	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 283.5g。	5Y6/2　灰オリーブ やや緻密 流紋岩	中央西部床直上 完形 121
68 石器 編物石	長　9.9 幅　3.7 厚　2.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 113.5g。	2.5Y7/2　灰黄 やや緻密 玢岩	南東部床上 14㎝ 完形 38
69 石器 編物石	長　14.1 幅　7.2 厚　3.6	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 475.5g。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや粗い 安山岩	北東部床上 8㎝ 完形 146
70 石器 編物石	長　13.7 幅　7.3 厚　3.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 425.0g。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い 流紋岩	完形
71 石器 編物石	長　13.7 幅　7.8 厚　2.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 374.5g。	5Y7/2　灰白 やや緻密 安山岩	北壁際東部床上 2㎝ 完形 152
72 石器 編物石	長　13.6 幅　7.3 厚　3.2	河原石。特に加工の痕跡なし。上半 2 ヶ所に剝離があるが、意図的に施されたものとは考えにくい。下半のものは表面の剝落。残存重量 434.9g。	10YR5/4　にぶい黄褐 やや粗い 流紋岩	中央南部床上 5㎝ ほぼ完形 74
73 石器 編物石	長　13.2 幅　6.8 厚　3.7	河原石。特に加工の痕跡はない。右下隅の剝離は意図的に施されたものとは考えにくい。重量 571.5g。	2.5Y5/2　暗灰黄 やや緻密 流紋岩	中央南部床上 40㎝ ほぼ完形 73
74 石器 編物石	長　13.9 幅　6.8 厚　3.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 389.1g。	2.5Y6/2　灰黄 緻密 安山岩	南部床上 1㎝ 完形 89
75 石器 編物石	長　13.2 幅　7.1 厚　3.8	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 443.4g。	2.5Y6/1　黄灰 やや緻密 流紋岩	中央南西部床上 1㎝ 完形 94
76 石器 編物石	長　13.7 幅　7.6 厚　5.4	河原石。右側縁中央の元来くびれた部分に敲打が施されている。重量 808.7g。	5Y6/1　灰 やや緻密 安山岩	南壁際東部床直上 完形 85
77 石器 編物石	長　12.8 幅　8.4 厚　3.1	河原石。左右両側縁中央に入念に敲打が施され、緩やかな抉りが作出される。重量 398.6g。	5Y7/1　灰白 やや緻密 安山岩	南西隅床上 20㎝ 完形 109
78 石器 編物石	長　12.8 幅　6.6 厚　3.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 457.0g。	2.5Y7/3　浅黄 粗い 礫岩	北東隅床上 4㎝ 完形 153
79 石器 編物石	長　12.7 幅　9.1 厚　2.7	河原石。節理面からすでに割れていた平坦面に対し、縁辺からの剝離により平坦な剝離がなされる。重量 475.6g。	10Y7/1　灰白 緻密 安山岩	西部床直上 完形 115
80 石器 編物石	長　14.3 幅　7.1 厚　4.5	河原石。特に加工の痕跡なし。上端は古い欠損と見たが、一部に新しい剝離が施された可能性はあろう。重量 557.4g。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い 礫岩	カマド東床上 5㎝ 完形 150
81 石器 編物石	長　残 12.1 幅　6.4 厚　3.3	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 289.2g。	5Y7/3　浅黄 やや粗い 閃緑岩	P2 西床直上 破片 106
82 石器 編物石	長　残 14.3 幅　7.1 厚　5.2	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 742.0g。	5Y6/3　オリーブ黄 やや粗い 安山岩	中央南西部床上 5㎝ 破片 100
83 石器 編物石	長　残 12.7 幅　6.0 厚　3.6	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 409.0g。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い 流紋岩	P2 南床上 4㎝ 破片 104
84 石器 編物石	長　残 14.2 幅　7.2 厚　4.7	河原石。特に加工の痕跡なし。上端に被熱による赤変部分あり。残存重量 547.9g。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い 流紋岩	南西隅床上 3㎝ 一部欠 110
85 石器 編物石	長　残 11.2 幅　5.9 厚　3.7	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 279.8g。	N5/0　灰 やや粗い 安山岩質溶岩	南東部床上 11㎝ 破片 39
86 石器 編物石	長　12.7 幅　7.1 厚　4.0	河原石。左右両側縁に敲打が加えられるほか、上端にも敲打とそれに伴う剝離がある。左側縁は中央付近に敲打が集中、右側縁は広範囲に敲打され、緩やかな抉りが作出される。重量 487.7g。	10YR7/4　にぶい黄橙 粗い 礫岩	北東隅床上 2㎝ 完形 157
87 石器 編物石	長　残 13.5 幅　7.8 厚　2.8	河原石。左右両側縁に敲打が加えられる。左側縁は中央付近に敲打が集中し、緩やかな抉りが作出される。右側縁は広い範囲が敲打される。表側は被熱により赤変しており、中央には焼けハジケと見られる表面の剝落がある。残存重量 359.0g。	7.5YR7/4　にぶい橙 緻密 安山岩	中央西部床直上 破片 123



第 58 図　権現山遺跡 2 区 SI-1a (6) 遺物

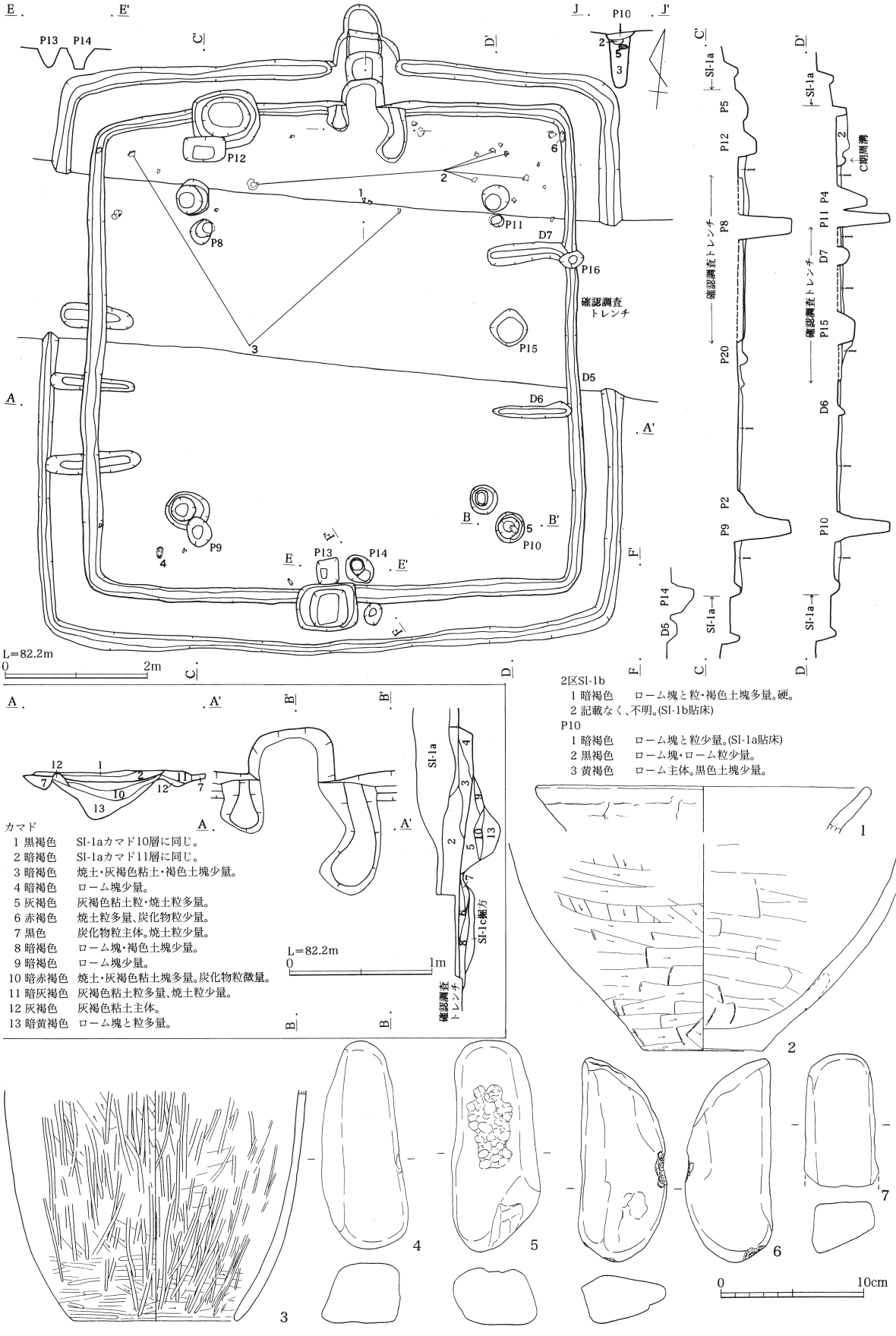


第 59 図　権現山遺跡 2 区 SI-1a (7) 遺物

88 石器 編物石	長　14.6 幅　7.7 厚　3.4	河原石。上半を裏面から大きく剝離したのち、鋭角的な右上側縁を鈍角にするように細かな剝離が加えられる。左側縁の最も突出した部分に、敲打に伴うと見られる剝離あり。重量 553.2g。	2.5Y6/2　灰黄 やや粗い 流紋岩	中央西部床直上 完形 122
89 石器 編物石	長　13.8 幅　6.5 厚　4.0	河原石。左上側縁に連続した剝離あり。節理面で割れたことによって生じた鋭い縁辺に剝離を施す。縁辺を鈍くすることを目的とした敲打の結果か。重量 504.5g。	5Y5/2　灰オリーブ やや粗い 輝緑岩	P1 南東床上 9㎝ 完形 78
90 石器 編物石	長　残 10.5 幅　6.4 厚　3.7	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 322.7g。	5YR5/3　にぶい赤褐 やや粗い 礫岩	P1 北西床直上 破片 15
91 石器 編物石	長　残 9.6 幅　残 6.5 厚　残 4.1	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 281.4g。	2.5Y7/4　浅黄 やや粗い 礫岩	中央東部床直上 破片 126
92 石器 編物石	長　残 11.2 幅　7.0 厚　4.3	河原石。特に加工の痕跡なし。表面は被熱により赤変している可能性あり。残存重量 336.8g。	7.5YR4/2　灰褐 やや粗い 礫岩	中央南東部床上 1㎝ 破片 75
93 石器 編物石	長　残 7.4 幅　6.0 厚　3.4	河原石。右側縁に剝離あり。残存重量 191.7g。	5Y6/2　灰オリーブ 緻密 安山岩	中央南西部床直上 破片 99
94 石器 編物石	長　残 8.6 幅　6.6 厚　3.0	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 213.6g。	2.5Y7/4　浅黄 緻密 安山岩	中央床直上 破片 117
95 石器 編物石	長　残 11.1 幅　6.1 厚　残 3.2	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 268.6g。	2.5Y7/4　浅黄 やや粗い 流紋岩	中央東部床直上 破片 127
96 石器 編物石	長　残 10.3 幅　6.5 厚　2.8	河原石。特に加工の痕跡なし。上端欠損部分が被熱により赤変する。残存重量 213.7g。	2.5Y6/3　にぶい黄 やや緻密 流紋岩	中央床直上 破片 118
97 石器 編物石	長　残 10.6 幅　8.0 厚　3.0	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 355.6g。	5Y5/1　灰 やや緻密 安山岩	南東隅床上 15㎝ 破片 80
98 石器 編物石	長　残 9.7 幅　6.6 厚　3.9	河原石。左側縁は敲打され、やや凹んだ縁辺となる。残存重量 309.2g。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密 流紋岩質溶結凝灰岩	中央南部床上 1㎝ 破片 71
99 石器 編物石	長　残 8.2 幅　8.0 厚　3.1	河原石。左右両側縁には敲打とそれに伴う剝離が施され、緩やかな抉りが作出される。下端には裏面からの鈍角な剝離がなされる。上端欠損部分付近および下端の一部に被熱による赤変あり。残存重量 261.7g。	2.5Y6/4　にぶい黄 やや粗い 礫岩	中央西部床直上 破片 120
100 石器 編物石	長　残 7.9 幅　6.0 厚　2.2	河原石。上半を欠損する。左縁上端に剝離があるが、欠損に伴うものの可能性もある。残存重量 132.0g。	5Y7/1　灰白 緻密 安山岩	中央南西部床上 2㎝ 破片 98
101 石器 編物石	長　残 5.3 幅　残 5.1 厚　残 3.7	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 144.9g。	10YR6/4　にぶい黄橙 粗い 流紋岩	南東隅床上 1㎝ 破片 83

2 区 SI-1b（第 60 図、写真図版 14・15）

［規模と形状］ b 期建物は c 期と南・東辺を共有し、北および西側へ拡張建替している。東西長 7.02m、南北長 6.98m の方形で中軸は N-5°-W。SI-1a に切られるため残存壁高は 0.13 ～ 0.19m である。壁は直線的にやや外傾する。床面はほぼ平坦で、傾斜しない。全体に締まるが、硬化部はない。掘方は床から深さ 3 ～ 13cm だが、北東隅や北西隅付近は床面下 15 ～ 20cm まで土坑状に深い。ローム粒・塊の多い暗褐色土で全体を貼床する。主柱穴は P8 ～ P11 の 4 本で、SI-1c と共有する。P8 は径 35 × 27 ×深さ 74cm、P9 は径 41 × 34 ×深さ 78cm、P10 は径 42 × 40 ×深さ 77cm、P11 は径 18 × 15 ×深さ 75cm で、4 本とも深い。柱間は P8-P11 間 4.05m、P9-P10 間 4.35m、P8-P9 間 4.62m、P11-P10 間 4.27m でほぼ等しく、建物平面と同様の方形配置だが、南東に偏る。東壁際中央に P15（径 52 × 45 ×深さ 22cm）と P16（径 45 × 22cm、深さ不明）がある。入口ピット P13・P14 が南壁際中央にある。P13 は 43 × 30 ×深さ 27cm の長方形で、狭く平坦な底面が西に偏るため西半はやや急に、東半は緩くやや彎曲する。覆土はローム粒・塊が多く、人為的に埋め戻したと考えられる。P14 は P13 の東にある楕円形ピットで 47 × 36 ×深さ 33cm。南東部中位に段があり、覆土は不明。壁溝 D5 がカマド部分以外を全周し、SI-1a の貯蔵穴



第 60 図　権現山遺跡 2 区 Sl-1b 遺構・遺物

P5・6 に切られる。断面「U」字状で幅 16 ～ 38cm、床から深さ 8 ～ 14cm。間仕切溝 D6・D7 が東壁溝と接する。断面「U」字状で床からの深さは D6 が 9cm、D7 が 17cm。D6・D7 間の心々距離は 212 ～ 220cm。北西部にある貯蔵穴 P12 は東西軸の長方形で 62 × 35cm、床面から深さ 25cm。底面はわずかに凹凸があり、壁は直線的に外傾する。覆土は不明である。

［**カマド**］北壁際東寄りにある。天井が崩れて SI-1a に上部が切られ、残りは悪い。規模は 110 × 118cm。竪穴貼床と共通する 13 層上に、粘土の多い 11・12 層で袖を作る。火床は 5 層上面で、床からやや下がった平坦面である。燃焼部は、天井由来の焼土・粘土を含む 3 層が火床面に接する。煙道は北東壁を 30 ～ 40cm「U」字状に掘り、底面は火床よりわずかに高い平坦面で、覆土にローム塊が多い。

［**覆土**］SI-1a の貼床層と、壁溝内堆積層である。壁溝を人為的に埋め戻したかどうかは不明確。

［**出土遺物**］遺物は少なく、北壁寄りに多い。土師器はすべて破片で、図示以外の土師器 39 片（878 g）は甕が主体で甑・杯片も少量含む。

第 15 表　権現山遺跡 2 区 SI-1b 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 甕	口　復 23.4 高　残 3.2	口縁部内外面ヨコナデだが、外面口縁部中位にはヨコナデが及ばず、粘土の皺が顕著に残る。胎土の特徴から、花崗岩地域からの搬入品の可能性あり。SI-1c の 2 と同一個体の可能性あり。	2.5YR5/6　明赤褐 やや粗い　黒雲母・透明・白粗～細粒多 やや硬質	カマド東床直上 口 1/4 周 184、貼床、SI-1（Ⅰ） K-191
2 土師器 甕	高　残 14.3 底　8.4	外面胴部下半～底部ケズリ。胴部ケズリは縦のち横方向、底部は一方向に数回施される。平底で、全体に中央がわずかに凹む。内面胴部下半～底部ヘラナデで、積み上げ休止による接合面があり、内面ではこの部分で器壁が厚くなる。外面胴部下半～底部被熱により赤変。	2.5YR6/6　橙 やや粗い　白・透明粗粒微、白・透明細～微粒多 硬質	北西部床直上、逆位 胴下半 1/6 周、底完存 166、167、169、SI-1（Ⅲ） 55、59、164、168
3 土師器 甑	高　残 16.0 底　復 11.4	無底式。外面胴部下半ケズリのち密なミガキ。内面胴部下半ヘラナデ・胴部下端～底部ケズリのち胴部下半全体密なミガキ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　白・黒粗～細粒・透明細～微粒少 硬質	北西隅床直上 胴下半～底 1/5 周 182、187、貼床、SI-1（Ⅰ）194
4 石器 編物石	長　14.5 幅　6.1 厚　3.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 553.4g。	5Y6/2　灰オリーブ やや粗い 礫岩	南西隅床直上 完形 176
5 石器 編物石	長　14.7 幅　6.1 厚　3.9	河原石。表側中央に不定形のくぼみがあるが、表面の状態などから敲打ではなく自然に形成されたものと判断した。重量 497.7g。	2.5Y6/4　にぶい黄 やや粗い 礫岩	P10 内底上 54cm 完形 P10
6 石器 編物石	長　14.1 幅　6.3 厚　4.8	河原石。右側縁中央が集中的に敲打され、抉りが作出される。上端および下端は使用前の欠損であり、自然に磨滅している。下端の一部に敲打あり。重量 506.6g。	7.5Y5/2　灰オリーブ やや粗い 流紋岩	北東隅床直上 完形 177
7 石器 編物石	長　残 9.2 幅　5.2 厚　3.6	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 265.2g。	2.5Y7/2　灰黄 やや粗い 礫岩	貼床 破片 貼床

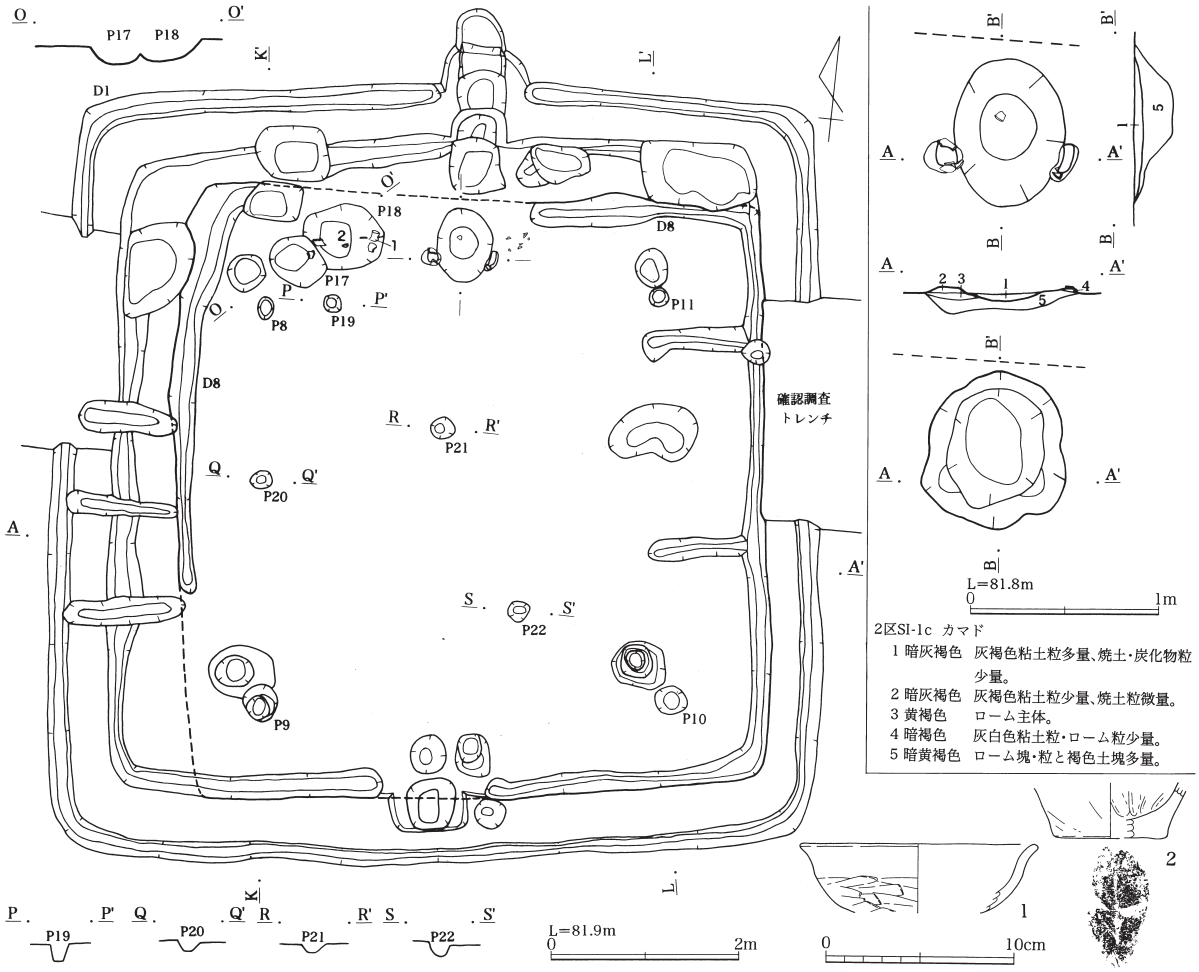
2 区 SI-1c（第 61 図、写真図版 15）

［**規模と形状**］ c 期建物は、 b 期と南・東辺を共有する。 b 期の掘方底面（地山ローム上面）や確認調査トレンチ底面で付属施設を確認して c 期の存在が判明したもので、壁・床・覆土は不明な部分が多い。建物規模と形は、部分的に確認した壁溝から計測・推定した。東西長 6.20m、南北長 6.15m の方形で中軸は N-5°-W。拡張部以外の掘方・貼床は SI-1b と同じと見られる。 b 期の主柱穴でもある P8 ～ 11 の 4 本を共有する。 b 期の場合主柱穴は建物南東に偏るが、 c 期では壁と柱穴間の距離は均等に近い自然な配置。ただし、各柱穴ともかなり四隅に寄る。この他、掘方底面で確認した柱穴状ピットは P19 ～ 22 の 4 本がある。P19 は径 20 × 18 ×掘方底面から深さ 19cm、P20 は径 23 × 20 ×掘方底面から深さ 11cm、P21 は径 25 × 21 ×掘方底面から深さ 9cm、P22 は径 24 × 22 ×掘方底面から深さ 16cm。壁溝 D8 はカマド周辺と西壁南半では確認できないがほぼ全周すると推定され、断面「U」字状部分が多く、幅 12 ～ 47cm で西辺北部が広い。貯蔵穴 P17 と P18 が北西部にある。P17 は東西軸の不整長楕円形で 62 × 48 ×掘方底面から深さ 20cm。やや西に寄る底面はほぼ平坦で、東壁は大きく外傾し、他壁はやや急である。覆土は不明。P17 と重複する P18（86 × 70 ×深さ 21cm）も貯蔵穴と考えられ、a 期の中で作り替えたのであろうが、b 期に伴う可能性も残る。覆土の特徴や P17・18 の前後関係は不明である。

［**カマド**］北壁際ほぼ中央にある。SI-1b に上部が切られ、残りは悪い。58 × 77cm の楕円形の凹みが残る。上半の 1・2 層に焼土を含み、下半の 3・5 層には含まない。b 期カマドは灰褐色粘土を用いるが、c 期は灰

白色粘土粒も含む点が異なる（4 層）。

［出土遺物］カマド周辺と貯蔵穴 P17・18 でわずかな土師器片が出土した。図示した杯・甕各 1 点以外には土師器小破片 19 点（183g）しかない。



第 61 図　権現山遺跡 2 区 SI-1c 遺構・遺物

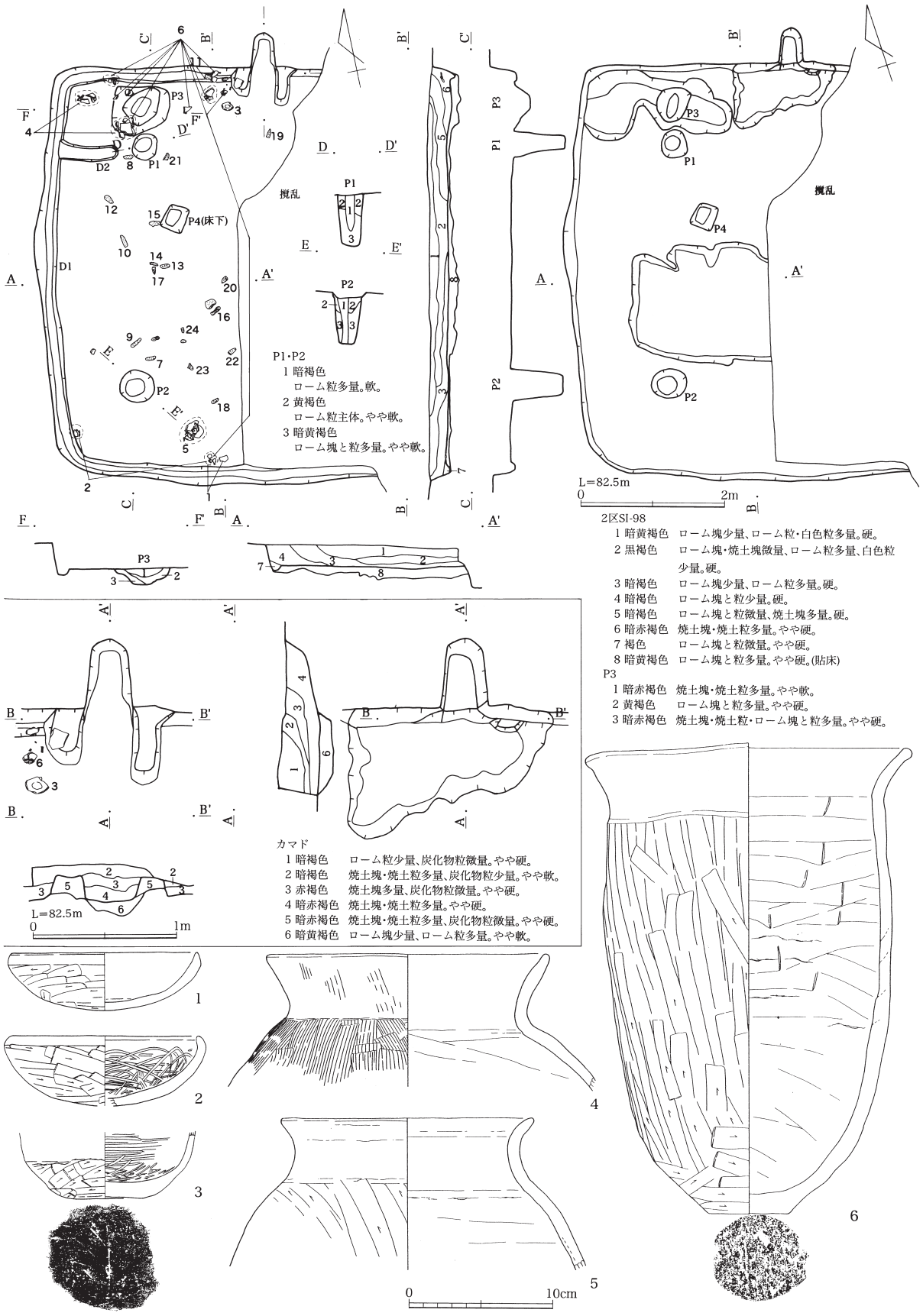
第 16 表　権現山遺跡 2 区 SI-1c 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 12.6 高　残 3.7	外面口縁部ヨコナデのち体部ヘラナデ。内面口縁～体部ヨコナデ。	7.5YR7/6　橙 緻密　赤粗粒微 やや軟質	P18 内底上 1cm､正位 口～体 1/5 周 194
2 土師器 甕	高　残 2.9 底　復 6.0	外面胴部下端ナデ、底部木葉痕。内面胴部下端～底部ナデ。胎土の特徴から、花崗岩地域からの搬入品の可能性がある。SI-1b の 1 と同一個体の可能性あり。	5YR6/8　橙 粗い　黒雲母・透明・白粗～細粒多　硬質	P18 内底上 1cm､逆位 底 1/3 周 193

2 区 SI-98（第 62・63 図、写真図版 16・115）

［位置］2 区北寄りの台地平坦面､48.5-11.5､49.0-11.5 グリッド所在。南 34m に SI-1､西 9 m に SI-99 がある。重複遺構はないが、大規模な撹乱で東半が削平されている。

［規模と形状］東半は不明だが方形と推定され、南北長 5.78m。主柱穴 4 本が正方形配置で東西壁までの距離などが同一と仮定すると､東西長は推定約 6m。南北の中軸は N-11°-E。壁は直線的に外傾し､残存高 0.28～ 0.38m。床は緩い凹凸があるがほぼ平坦で、硬化部はなく、全体に締まる。掘方は中央～南部と北西隅が特に深く、床面からは浅い部分で 2～6 cm、深い部分では 8～ 16cm の深さである。ローム粒と塊の多い 8 層で貼床する。中央部北寄りのごく一部は、ロームをそのまま床面とする。主柱穴は P1（径 38 × 34 ×深さ 72cm）と P2（径 48 × 44 ×深さ 70cm）で、ともに柱痕が明瞭。P1-P2 間は 3.4m。中央部北寄



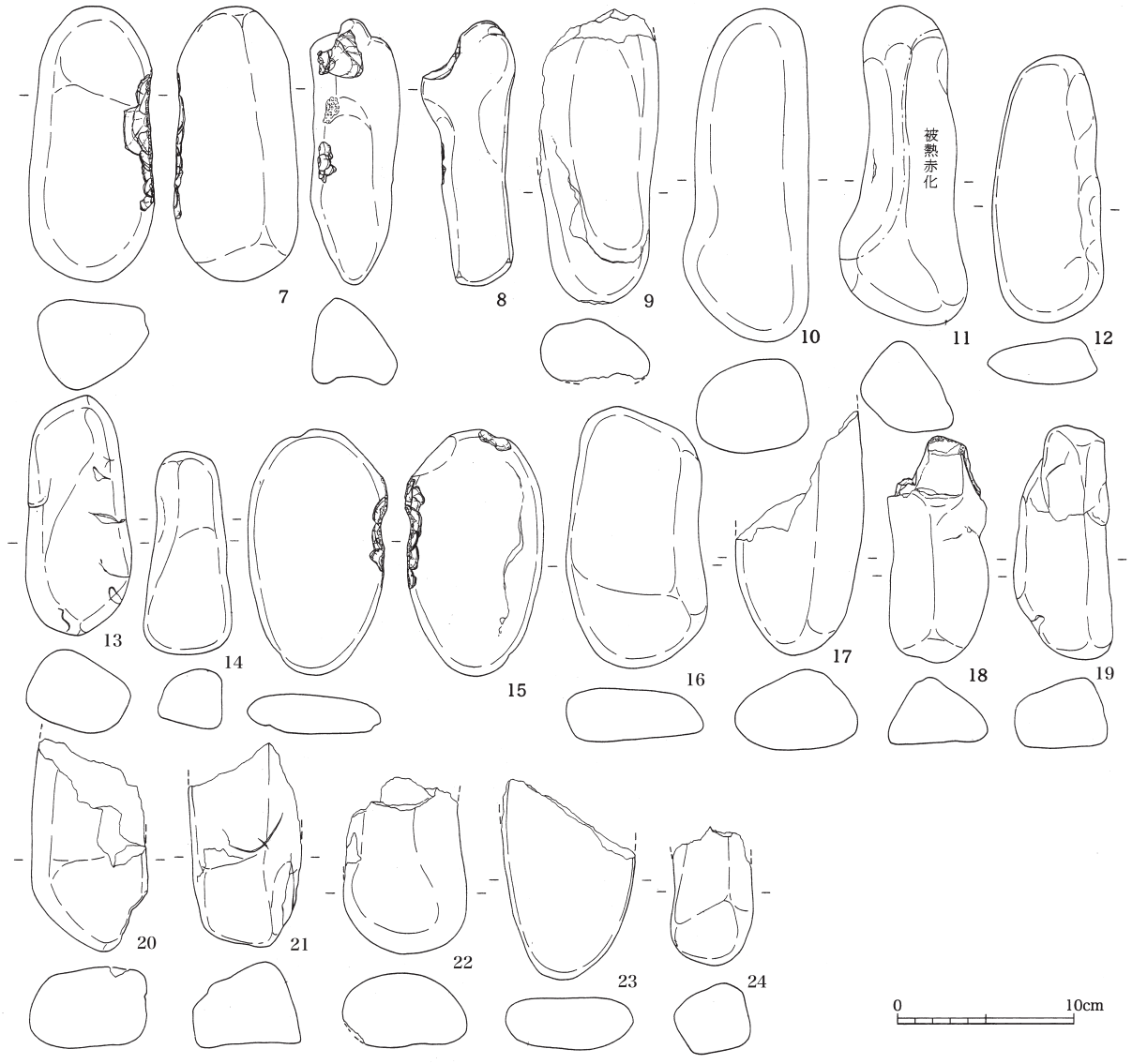
第 62 図　権現山遺跡 2 区 SI-98 (1) 遺構・遺物

りの床下で確認した P4 は径 36 × 30cm で、深さは不明。壁溝 D1 がカマド部以外に認められる。床面で確認し、断面「U」字状で深さ 3 ～ 10cm。西壁から主柱穴 P1 に向かい、壁溝と接する間仕切溝 D2 は床面で確認し、断面「U」字状で床面から深さ 8cm。北西隅にある貯蔵穴 P3 は東西に長い不整長方形で 80 × 64 ×深さ 62cm、東半に丸みを持つ。底面は平坦で小さく、壁中位での平坦に近い面よりも上部が急傾斜である（F-F′）。焼土塊とローム粒・塊を 1 ・ 2 層に含む。

［カマド］ 主柱穴配置が正方形で柱穴と東西壁の距離が同一であれば、北半主柱穴および北壁の中央にカマドがあることになる。規模は 84 × 103cm で、天井は崩れるがよく残る。竪穴貼床と同じ 6 層で火床面付近を埋め戻した上に作る袖は、焼土とロームが主体で粘土はほとんど含まない。火床はほぼ平坦で、天井内面が焼土化・崩落した 2 ～ 4 層が堆積する。煙道は北壁に 48cm 突出し、先端が直線的に外傾する。

［覆土］ 覆土各層はローム塊を少量含み、上層ほど硬く締まる。焼土の多い 6 層はカマド流出土。 1 ・ 2 層中の白色粒が火山灰かどうかは不明。

［遺物および出土状況］ 編物石が多いのが特徴で中央付近にまとまる。少量の土師器が南北壁際にある。杯はやや深く、身模倣形杯は出土していない。甕は口縁に最大径があり、ハケ調整甕を含む。図示の他に土師器小破片が 154 片（977g）あり、杯類が 42 片（273g）、甕・甑類が 112 片（704g）。杯は口縁直立・口

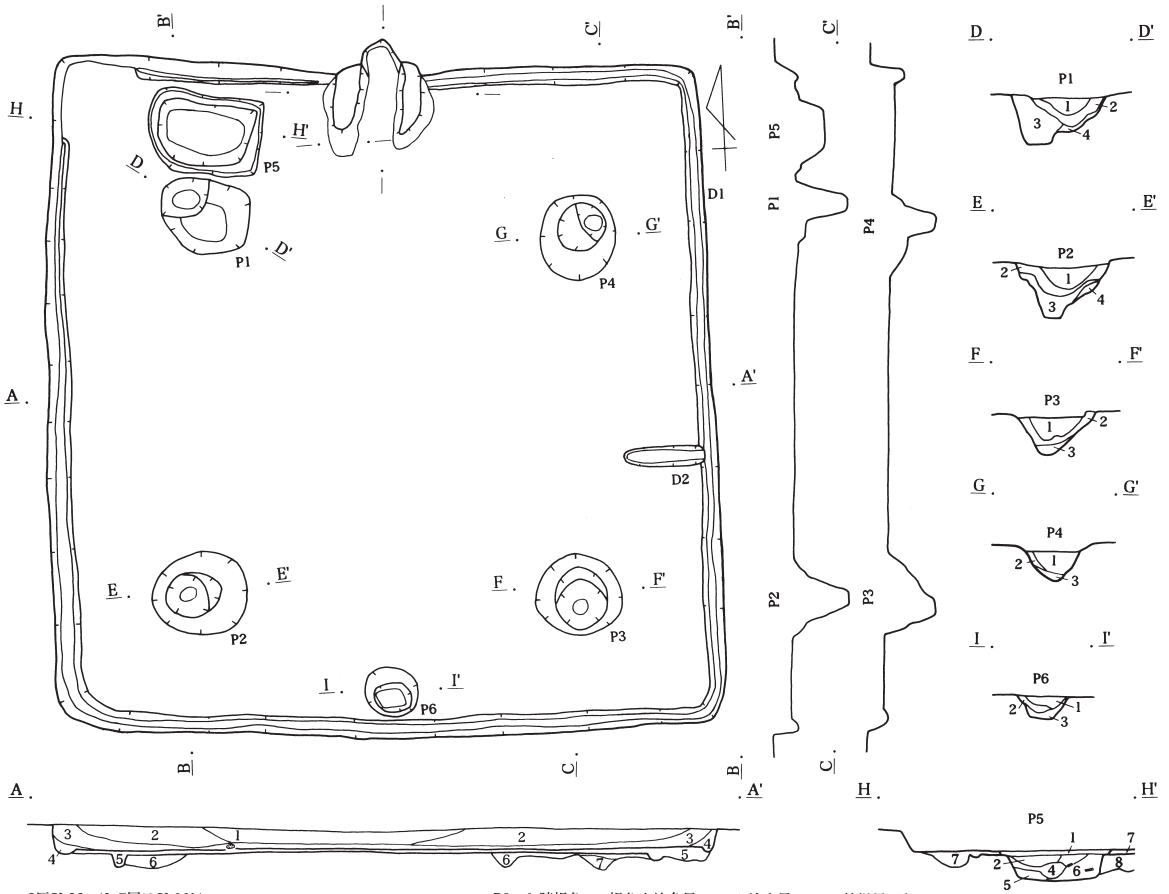


第 63 図　権現山遺跡 2 区 SI-98 (2) 遺物

縁外傾・半球状がある。甑は数片ありすべて無底大孔。高杯片はない。

第 17 表　権現山遺跡 2 区 SI-98 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 13.0 高　4.0 最大　復 13.4	外面口縁部ヨコナデで、やや上向きの平坦面となる。体～底部丁寧なケズリ。内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ。	5YR6/6　橙 緻密　白・黒細粒少、赤細粒微 やや硬質	南壁際中央床上 3cm 口～底 1/4 周 12、13
2 土師器 杯	口　復 13.0 高　残 4.9 最大　復 14.0	外面口縁部ヨコナデ、体～底部丁寧なケズリ。内面口縁～底部ヨコナデのち体～底部花弁状の乱雑なミガキ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。外面底部付近のみ 7.5YR7/6 橙色の胎土を使用している。	10YR5/1　褐灰 緻密　黒・白微粒少、赤粗粒微 やや硬質	南西隅壁際床上 0.6cm 口～底 1/2 周 10、12
3 土師器 鉢	高　残 4.6 底　5.0	外面口縁部ヨコナデ。底部木葉痕のち体部～底部外周光沢のあるケズリで、体部上端には紐積痕あり。底部は丸味を持つ平底で、全体に浅くくぼむ。内面口縁～底部ヨコナデのちミガキ。ミガキは口縁～体部横方向主体、底部多方向。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密　白粗～細粒・赤細粒微、白微粒少 やや硬質	カマド掘方内床上 2 cm 口一部、体～底完存 K38
4 土師器 甕	口　19.6 高　残 9.4	外面口縁～胴部上半 4 本 /1cmのハケのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半ナデ。口縁部上半はやや内彎する。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　白・赤粗粒微、白・黒・透明細～微粒多 硬質	北西隅床上 3cm 口完存、胴上半 2/3 周 1、5
5 土師器 甕	口　復 17.4 高　残 10.5	外面口縁部ヨコナデのち胴部上半ケズリ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半ナデで、紐積痕残る。内面口縁～胴部上半表面の剝落著しい。	2.5YR6/8　橙 やや粗い　砂粗～細粒多、透明・赤・白粗～細粒少 やや軟質	南壁付近中央床上 6 cm 口～胴上半 2/3 周 11
6 土師器 甕	口　22.5 高　32.5 底　5.6	外面胴部上半ヘラナデのち胴部中位～下半ケズリ。ケズリは胴部下半主体。底部木葉痕のち外周ナデ。口縁部内外面ヨコナデ、胴部中位～底部軽いヘラナデのち胴部上半～中位強いヘラナデ。内面胴部下半には紐積痕わずかに残る。外面胴部下半～底部被熱により赤変。内外面ともヘラナデはハケ状工具によるもの。	7.5YR7/6　橙 粗い　砂粗～細粒多、白・赤粗～細粒・金雲母細片微 軟質	カマド西床上 3cm 口～胴 2/3 周、底完存 2、3、4、5、6、7、8、12、37
7 石器 編物石	長　15.4 幅　6.9 厚　5.0	河原石。右側縁が広く敲打され、直線的な縁辺となる。重量 786.6g。	5Y6/1　灰 やや緻密 輝緑岩	P2 北床上 5cm 完形 29
8 石器 編物石	長　14.9 幅　5.2 厚　5.3	河原石。上端から左側縁にかけて、敲打と剝離が施される。重量 429.7g。	2.5Y6/1　黄灰 やや緻密 安山岩	P1 西床上 14cm 完形 17
9 石器 編物石	長　残 16.5 幅　残 6.8 厚　残 3.5	河原石。上端から裏面側が大きく欠損するほか、下端は表面が磨滅する。敲打などにより欠損した可能性もある。残存重量 529.4g。	5Y6/2　灰オリーブ やや粗い 流紋岩	P2 北床上 5cm 一部欠 28
10 石器 編物石	長　18.7 幅　7.1 厚　5.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 1047.0g。	10YR8/4　浅黄橙 やや緻密 安山岩	中央北西部床上 5cm 完形 19
11 石器 編物石	長　18.0 幅　7.2 厚　5.2	河原石。特に加工の痕跡なし。被熱のため、表面の 2/3 程が赤変している。重量 831.0g。	7.5R6/1　赤灰 緻密 安山岩	北壁際カマド西床上 11cm 完形 14
12 石器 編物石	長　15.1 幅　6.4 厚　2.6	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 377.6g。	5Y5/1　灰 やや緻密 安山岩	北西壁付近床上 10cm 完形 18
13 石器 編物石	長　13.5 幅　6.0 厚　4.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 515.5g。	5Y6/2　灰オリーブ やや粗い 礫岩	中央北西部床上 9cm 完形 23
14 石器 編物石	長　11.4 幅　5.0 厚　3.7	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 250.5g。	2.5GY5/1　オリーブ灰 やや粗い 流紋岩	中央西部床上 0.6cm 完形 21
15 石器 編物石	長　13.9 幅　7.8 厚　2.3	河原石。右側縁が集中して敲打され、小さな抉りが作出される。上端に剝離あり。重量 321.5g。	2.5Y6/1　黄灰 緻密 安山岩	P1 南床上 5cm 完形 20
16 石器 編物石	長　14.7 幅　8.0 厚　3.1	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 547.8g。	N7/　灰白 緻密 安山岩	中央西部床上 1cm 完形 26
17 石器 編物石	長　残 13.7 幅　残 7.3 厚　4.5	河原石。残存部分には特に加工の痕跡なし。残存重量 410.9g。	2.5Y8/2　灰白 やや緻密 安山岩	中央西部床上 3cm 破片 22
18 石器 編物石	長　12.8 幅　5.5 厚　3.7	河原石。上端の敲打を挟んで左右両側縁に剝離が施され、やや尖った形状となる。重量 325.7g。	2.5Y7/4　浅黄 やや粗い 礫岩	中央南部床上 2cm 完形 34
19 石器 編物石	長　13.1 幅　5.7 厚　4.8	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 453.7g。	5Y7/2　灰白 やや緻密 流紋岩	カマド南床上 2cm 完形 15
20 石器 編物石	長　残 12.0 幅　6.6 厚　4.6	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 436.2g。	2.5Y6/2　灰黄 粗い 礫岩	中央西部床上 2cm 破片 24
21 石器 編物石	長　残 11.5 幅　6.4 厚　4.8	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 398.1g。	N4/　灰 密 ホルンフェルス	P1 東床上 8cm 破片 16
22 石器 編物石	長　残 9.9 幅　6.9 厚　4.2	河原石。残存部分には特に加工の痕跡なし。残存重量 354.9g。	2.5Y7/4　浅黄 やや粗い 流紋岩	中央付近床上 1cm 破片 27
23 石器 編物石	長　残 11.2 幅　残 7.5 厚　2.9	河原石。残存部分には特に加工の痕跡なし。残存重量 281.6g。	2.5Y7/1　灰白 緻密 安山岩	中央南西部床上 3cm 破片 33
24 石器 編物石	長　残 7.8 幅　4.5 厚　3.9	河原石。残存部分には特に加工の痕跡なし。残存重量 167.6g。	5Y7/2　灰白 やや粗い 流紋岩	中央南西部床上 5cm 破片 31



2区SI-99a (6･7層はSI-99b)
- 1 黒褐色　ローム粒微量、炭化物粒・焼土粒少量。
- 2 暗褐色　ローム塊と粒・焼土粒少量。
- 3 暗褐色　ローム塊少量、ローム粒多量。
- 4 褐色　ローム塊と粒少量。
- 5 暗黄褐色　ローム塊と粒多量、焼土粒微量。硬。(SI-99a貼床)
- 6 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。硬。(SI-99b貼床)
- 7 黄褐色　ロームのみ。軟。しまりなし。(SI-99b貼床)

P1
- 1 暗褐色　褐色土塊多量、ローム塊少量、ローム粒微量。硬。
- 2 褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。
- 3 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。
- 4 黄褐色　ローム塊主体。褐色土塊微量。

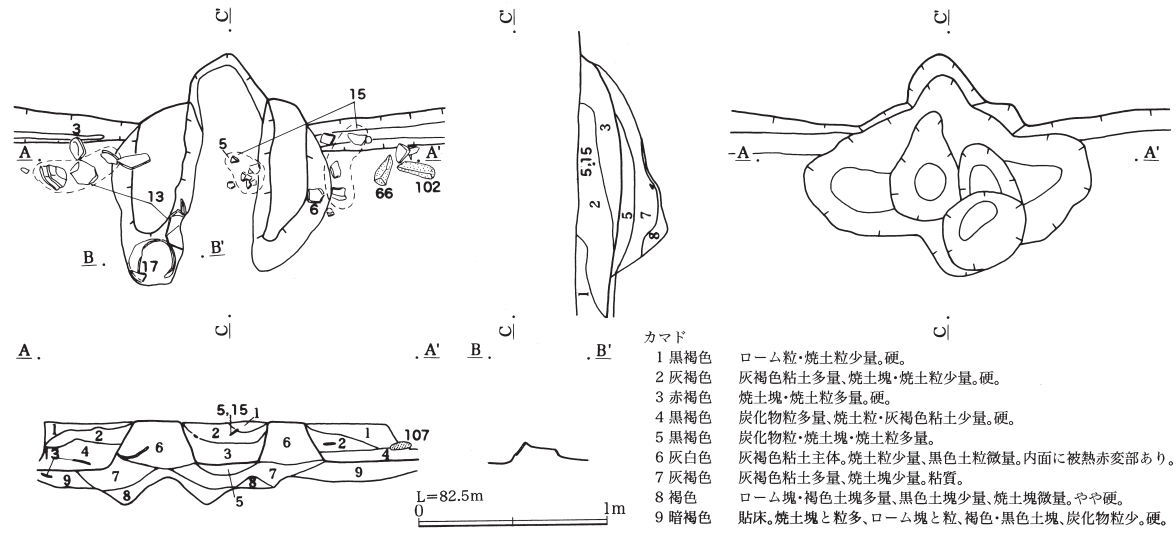
P2
- 1 暗褐色　褐色土塊多量、ローム塊少量、ローム粒微量。硬。
- 2 褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。
- 3 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。
- 4 黄褐色　ローム塊主体。褐色土塊微量。

P3
- 1 暗褐色　褐色土塊多量、ローム塊少量、ローム粒微量。硬。
- 2 褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。
- 3 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。

P4
- 1 暗褐色　褐色土塊多量、炭化物粒少量、ローム塊微量。硬。
- 2 褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。
- 3 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。

P5
- 1 暗褐色　ローム塊と粒少量、褐色土塊・焼土粒多量。(住居跡覆土3層に対応)
- 2 黒褐色　ローム粒少量、焼土粒微量。
- 3 黒褐色　ローム粒・焼土塊・焼土粒少量。
- 4 褐色　ローム塊と粒・焼土粒少量。
- 5 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。
- 6 暗黄褐色　褐色土塊少量、ローム塊・焼土塊多量。
- 7･8 貼床(7は竪穴5層、8は竪穴6層と同じ。)

P6
- 1 暗褐色　ローム粒微量。硬。
- 2 褐色　ローム塊と粒・黒色土粒・焼土粒少量。やや硬。
- 3 暗黄褐色　ローム塊多量、褐色土塊少量。やや硬。



カマド
- 1 黒褐色　ローム粒・焼土粒少量。硬。
- 2 灰褐色　灰褐色粘土多量、焼土塊・焼土粒少量。硬。
- 3 赤褐色　焼土塊・焼土粒多量。硬。
- 4 黒褐色　炭化物粒多量、焼土粒・灰褐色粘土少量。硬。
- 5 黒褐色　炭化物粒・焼土塊・焼土粒多量。
- 6 灰白色　灰褐色粘土主体。焼土粒少量、黒色土粒微量。内面に被熱赤変部あり。
- 7 灰褐色　灰褐色粘土多量、焼土塊少量。粘質。
- 8 褐色　ローム塊・褐色土塊多量、黒色土塊少量、焼土塊微量。やや硬。
- 9 暗褐色　貼床。焼土塊と粒多、ローム塊と粒、褐色・黒色土塊、炭化物粒少。硬。

第 64 図　権現山遺跡 2 区 SI-99a (1) 遺構

2 区 SI-99a（第 64 ～ 70 図、写真図版 16 ～ 18・116）

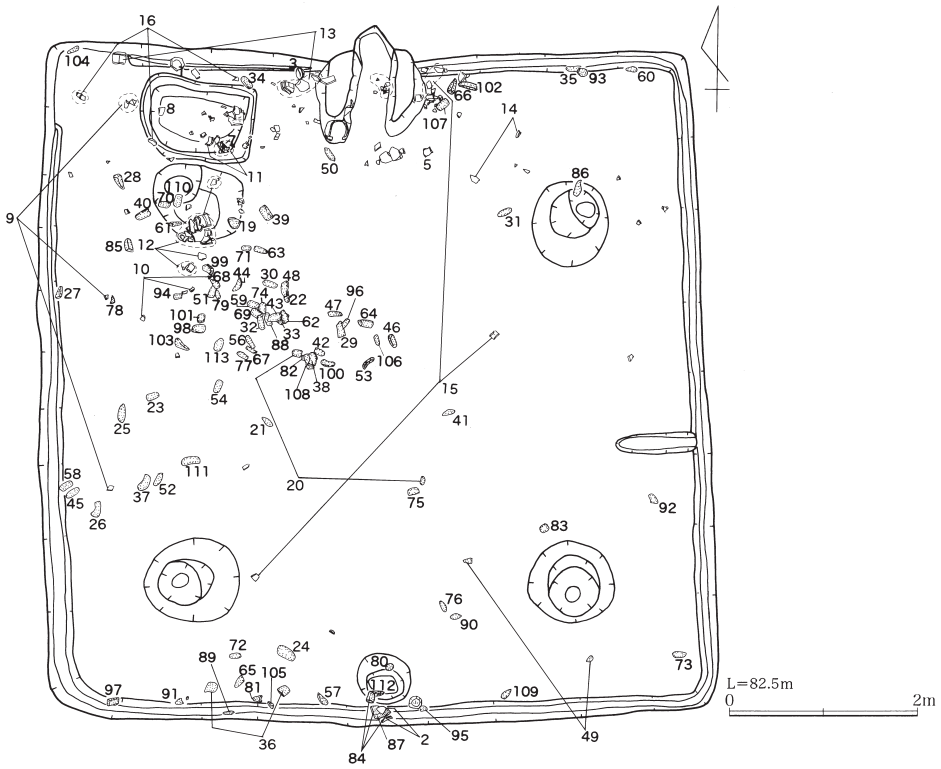
［**位置**］2 区北寄りの台地平坦面、48.5-10.5・11.0、49.0-10.5・11.0 グリッド所在。古墳時代建物は、南 28m に SI- 1 、東 9 m に SI-98 がある。時期不明の遺構は、南に SK-123、SB-122 や SK-125 がある。

［**規模と形状**］ b 期から a 期へ建て替えて各辺を拡張し、主柱穴や入口ピットも作り替えている。東西長 7.10m、南北長 7.16m の方形で、北西隅がやや突出する。南北の中軸は N-3 ° -W。壁は外傾し、残存高は 0.12 ～ 0.28m。床面はほぼ平坦で傾斜せず、特に硬化部はなく全体に締まる。

b 期建物を埋め戻してローム粒・塊が多い 5 層で貼床をほぼ全面に施す。床面からの深さは b 期床面まで 2 ～ 8 cm、壁際の拡張部では凹凸が著しく 1 ～ 18cm。主柱穴は P1 ～ P4 で、P1 は径 94 × 82 ×深さ 54cm、P2 は径 100 × 84 ×深さ 60cm、P3 は径 90 × 88 ×深さ 46cm、P4 は径 90 × 80 ×深さ 42cm。4 本とも径は大きく、下部が一段深くなる。柱配置はほぼ方形で南北間がわずかに狭く P1-2 間と P3-4 間がともに 4.00m。東西は P1-4 間が 4.00m、P2-3 間が 4.14m。南中央にある入口ピット P6 は上面が円形、底面は平坦な長方形で、径 56 ×深さ 26cm。底面から上 15cm 前後までの傾斜がやや急である。壁溝 D1 がカマドと北西隅以外を全周し、断面「U」字状で幅 16 ～ 22cm、床面から深さ 3 ～ 10cm。南東部床面で確認した、東壁溝と接する間仕切溝 D2 は断面「U」字状で長 84cm、幅約 20cm、床面から深さ 7.5cm。北西隅にある貯蔵穴 P5 は東西軸の不整長方形で 120 × 82 ×深さ 32cm。床面下約 5cm で幅 3 ～ 13cm の平坦面が全周する。平坦面内側は 99 × 64 ×深さ 25cm の不整長方形で底面と壁は直線的。焼土粒・塊が 1 ・ 6 層に多く、ローム塊は 5 層に最も多い。

［**カマド**］北壁際中央にある。天井は崩れるが良く残り、幅 116 ×長 126cm。貼床 (9 層) と 7 層の上に灰褐色粘土で袖を作る。床より約 5cm 低い凹みを 5 層で埋め戻した火床面には、床とほぼ同レベルでわずかに低い。天井内面が焼土化して崩れた 3 層と、天井粘土が崩れた 2 層が燃焼部に堆積する。煙道は北壁を長さ約 40cm の「凸」字状に掘り、底面は燃焼部と同じ 7 ・ 8 層で整地する。西袖先端に土師器甑（17）を倒立する。

［**覆土**］ 4 層までが a 期の覆土で、ローム粒が 4 層に多く、 2 ・ 3 層にも少し含む。焼土と炭を 1 ・ 2 層に



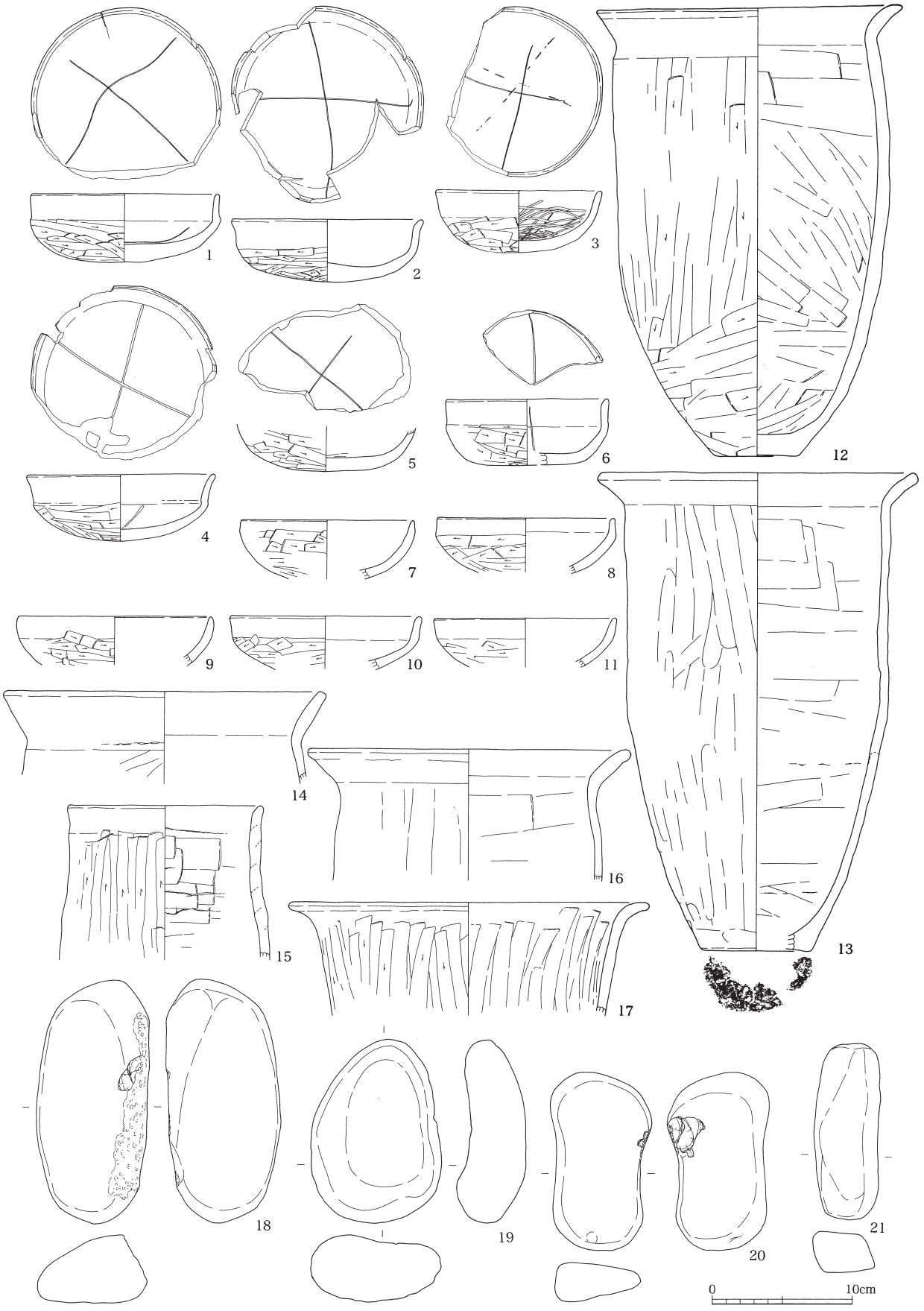
第 65 図　権現山遺跡 2 区 SI-99a (2) 遺構

少量含む。

［遺物および出土状況］土師器はさほど多くないが、編物石が極めて多い。図示した杯のうち６点は内面に十字の線刻を施す。６点とも線刻は同様の幅約１mm で、工具先端にやや荒れた平坦面を持つ。大きさや器形から１・２・４・５と３・６の２種がある。３だけは内面を磨き、ミガキ前に先が尖った工具で一度線刻し、ミガキ後に他の土器と同様の線刻を再び行う。編物石は建物全体で出土し、北西部に特に集中する。図化以外の土師器 206 片（887g）は杯 66 片（627g）と甕類 140 片（260g）が主体で他器種はほとんどなく、甕類の中に底部一孔の甑片と無底式の甑片が数片混じる程度である。外面ハケ目調整の甕片もある。

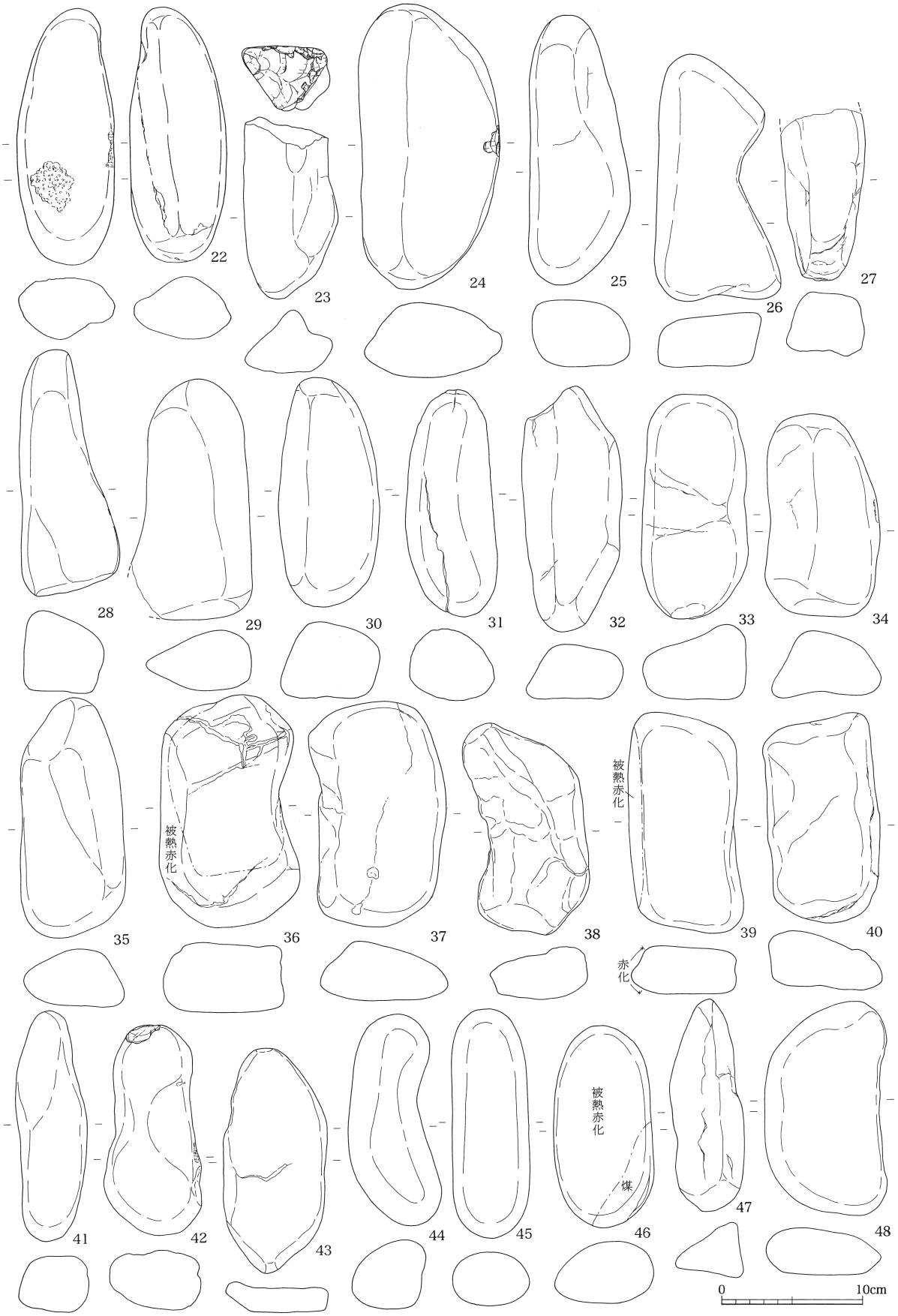
第 18 表　権現山遺跡 2 区 SI-99a 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　13.4 高　4.8	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ。丸底。内面口縁～体部ヨコナデのち底部ナデ。内面には十字の線刻があり、うち１本は底部中央の突出部を避けて彎曲する。線の巾は約 1㎜で、工具先端はやや荒れた平坦面を持つものと見られる。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤・白・透明細～微粒少 やや硬質	P5（貯蔵穴）北周溝付近床上 5cm 口～体 2/3 周、底完存 2
2 土師器 杯	口　13.6 高　4.4	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ。丸底。内面口縁～底部ヨコナデのち底部中央ナデ。内面に十字の線刻あり。線の巾は約 1㎜で、工具先端はやや荒れた平坦面と見られる。外面口縁部・内面全体漆仕上げ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　白・赤細～微粒少 やや硬質	南側周溝付近床上 9cm 口～体 2/3 周、底完存 21、22、一括
3 土師器 杯	口　11.8 高　4.4	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリで、体部上端は緩やかな稜となる。内面口縁～底部ヨコナデのち横方向主体のミガキ。内面には十字の線刻２組あり。１組はミガキ前に施されており、工具は先端が尖ったものを使用する。もう１組はミガキ後のもので、線刻の巾は約 1㎜、先端はやや荒れた平坦面と見られる。外面口縁部・内面全体漆仕上げ。	7.5YR7/6　橙 緻密　白・黒細～微粒少 やや硬質	カマド西床上 5cm 口～体 2/3 周、底完存 6
4 土師器 杯	口　13.4 高　4.7	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ。丸底。内面口縁～底部ヨコナデのち底部ナデ。内面には十字の線刻あり。線の巾は約 1㎜、工具先端はやや荒れた平坦面と見られる。ちょうど線刻がある部分で割れているため、線刻を観察できない部分が多い。外面口縁部・内面全体漆仕上げ。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　白・黒微粒少、赤細～微粒少 やや硬質	南側周溝付近床上 9cm 口～体 1/2 周、底完存 20
5 土師器 杯	高　残 3.3	外面体～底部ケズリ。丸底。内面体～底部ヨコナデのち底部ナデ。内面には十字の線刻があり、線刻の巾は約 1㎜、工具先端はやや荒れた平坦面と見られる。1･2 などと類似する杯だろう。内面漆仕上げの可能性があるが、痕跡は認められない。	10YR7/3　にぶい黄橙 緻密　白・赤微粒少 やや硬質	カマド袖床上 0.4cm 体～底 1/2 周 29、176
6 土師器 杯	口　復 11.5 高　4.7	外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリ。丸底だろう。内面口縁～体部ヨコナデ。内面には線刻１本あり。巾 1㎜、工具先端はやや荒い平坦面と見られるものであり、本来は本住居跡出土の他の杯と同様十字に施されていたものと考える。外面口縁部・内面全体漆仕上げ。内面黒褐色。	5YR7/6　橙 緻密　白・黒・透明微粒少 やや硬質	カマド袖の中床上 4cm 口～体 1/5 周 180
7 土師器 杯	口　復 12.4 高　残 4.2	外面口縁部ヨコナデのち体部丁寧なケズリ。内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　白・黒微粒少、砂・赤粗粒微　やや硬質	P5 内底上 6cm 口～体 1/5 周 13
8 土師器 杯	口　復 12.6 高　残 3.9 最大　復 12.8	外面口縁部ヨコナデ、体部丁寧なケズリで、紐積痕残る。内面口縁～体部ヨコナデ。	7.5YR7/4　にぶい橙 緻密　赤・黒・白細～微粒微　硬質	P5 内底上 6cm 口～体 1/4 周 54
9 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 3.5	外面口縁部ヨコナデのち体部丁寧なケズリ。内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁部・内面全体漆仕上げ。	10YR7/3　にぶい黄橙 緻密　白・黒・赤微粒少 やや硬質	P5 西側床上 0.5cm 口～体 1/4 周 44、55
10 土師器 杯	口　復 13.6 高　残 3.8	外面口縁部ヨコナデのち体部ケズリ。内面口縁～体部ヨコナデ。	7.5YR7/6　橙 緻密　白・黒・透明微粒少 硬質	北西壁部床上 4cm 口～体 1/4 周 38、40、43
11 土師器 杯	口　復 13.0 高　残 3.5	外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリ。内面口縁～体部ヨコナデ。全体が被熱により赤変しているほか、表面のクレーター状の剝落が著しい。	2.5YR7/8　橙 緻密　白・黒微粒少、赤微粒微 やや硬質	P5（貯蔵穴）内底上 6cm 口～体 1/3 周 13、15
12 土師器 甕	口　21.8 高　32.0 底　6.0	外面胴～底部ケズリ。底部は主に一方向のケズリ。口縁部内外面ヨコナデ、内面胴～底部ヘラナデ。外面口縁～底部の 1/2 程が被熱により赤変している。	5YR6/6　橙 やや粗い　白・赤粗粒微、白・透明細～微粒多 やや硬質	P1 底上 6cm ほぼ完形 19、41、42、47
13 土師器 甕	口　復 22.8 高　復 34.0 底　復 7.8	外面胴部縦方向のナデのち口縁部ヨコナデ。底部木葉痕で、平底。内面口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラナデ。胎土は粗いが、調整は丁寧。花崗岩地域からの搬入品か。胴部に接合しない部分があるため、直径から接合部位を推定して器高を決めている。	2.5YR5/6　明赤褐 粗い　金雲母・白・透明粗～細粒多 やや硬質	カマド西床上 3cm 口～胴上半 1/6 周、胴下半～底 1/3 周 1、7、179
14 土師器 甕	口　復 23.0 高　残 6.6	外面胴部上端ナデ、口縁部内外面ヨコナデ、内面胴部上端ヘラナデ。花崗岩地域からの搬入品か。	2.5YR5/6　明赤褐 やや粗い　金雲母粗～細粒少、白・透明粗～細粒多 硬質	北東隅床上 6cm 口 1/3 周、胴上端一部 23、28、K
15 土師器 甕	口　復 14.0 高　残 11.0	小形。外面口縁部ヨコナデのち胴部上半ケズリ。内面口縁部ヨコナデのち胴部上半ヘラナデで、紐積痕残る。粗い作り。	5YR7/6　橙 やや緻密　砂・黒礫・赤・白・透明細～微粒少 やや軟質	カマド袖付近床上 0.4cm 口～胴上半 1/2 周 30、161、176、K
16 土師器 甕	口　復 23.0 高　残 9.3	外面胴部上半丁寧なナデ。口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部上半ヘラナデ。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　金雲母・白粗～細粒多、透明・赤粗～細粒微 やや硬質	北西隅床上 1cm 口 2/3 周、胴上半一部 4、51、56、183
17 土師器 甑	口　25.7 高　残 8.0	外面口縁部ヨコナデのち胴部上半ケズリ。内面口縁部ヨコナデのち胴部上半ヘラナデ。	10YR7/6　明黄褐 やや粗い　砂礫微、白・黒・透明粗～細粒少　硬質	カマド袖床上 2cm 口～胴上半 3/4 周 178
18 石器 編物石	長　17.5 幅　8.1 厚　4.9	河原石。右側縁が広範囲に敲打され、直線的な縁辺部となる。重量 822.2g。	10YR6/2　灰黄褐 やや粗い 流紋岩	 完形 D
19 石器 編物石	長　13.0 幅　9.4 厚　4.9	河原石。特に加工の痕跡なし。小形の石皿の可能性あり。重量 577.5g。	5Y5/1　灰 やや粗い 安山岩質溶岩	P1 底上 6cm 完形 68



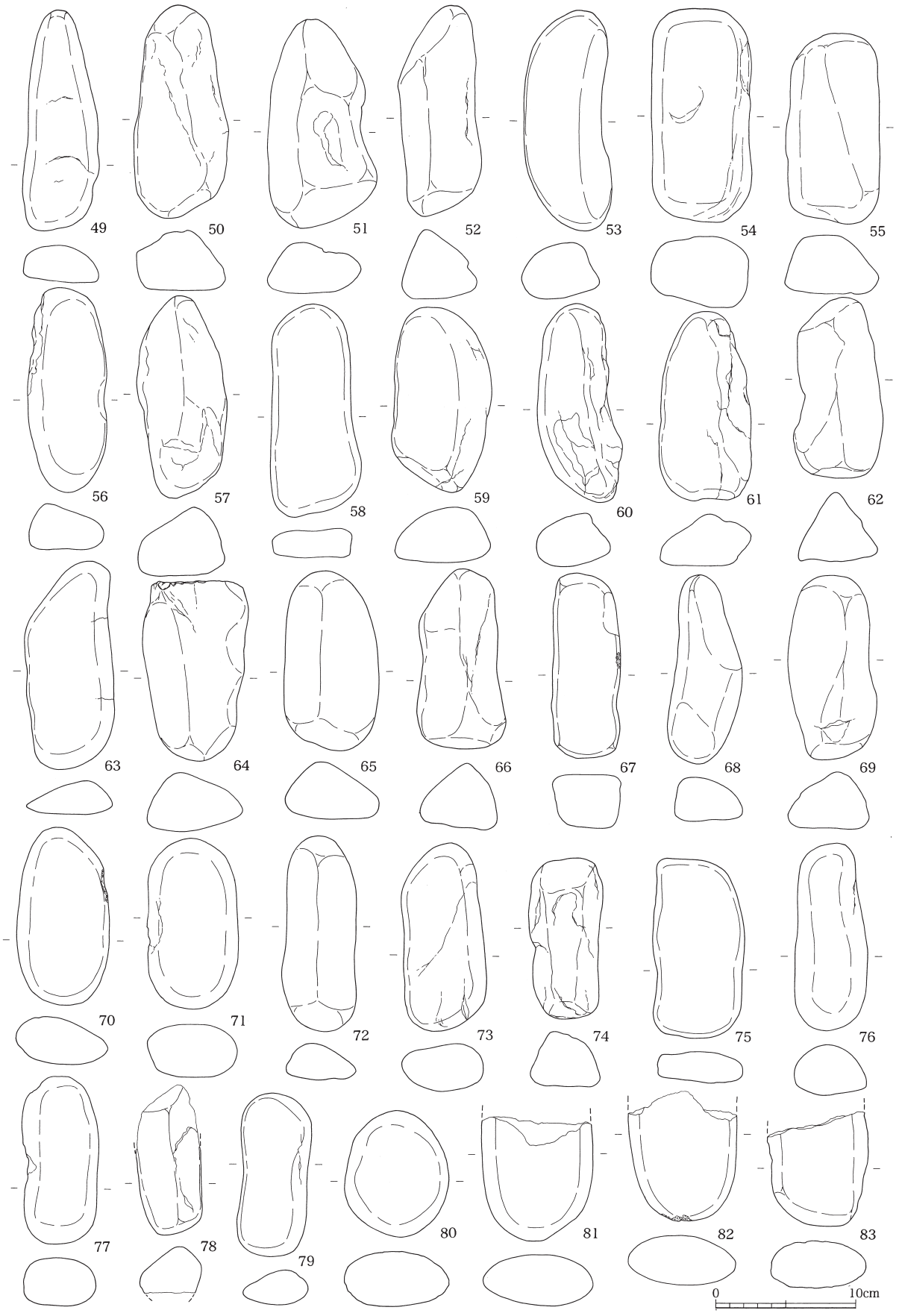
第 66 図　権現山遺跡 2 区 SI-99a (3) 遺物

20 石器 編物石	長　12.6 幅　7.2 厚　3.3	河原石。右側縁に敲打が施される。重量 391.3g。	5Y6/1　灰 緻密 安山岩	北西中央部床上 4㎝ 完形 118、146
21 石器 編物石	長　12.6 幅　4.7 厚　3.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 311.6g。	2.5Y6/3　にぶい黄 やや粗い 礫岩	南西中央部床上 2㎝ 完形 148
22 石器 編物石	長　18.0 幅　7.0 厚　4.5	河原石。表側下半および右側縁下寄りに敲打あり。重量 706.6g。	5YR5/3　にぶい赤褐 やや粗い 安山岩質溶岩	北西中央部床上 7㎝ 完形 93
23 石器 編物石	長　12.8 幅　6.6 厚　4.7	河原石。上端は大きな剝離ののち、外周に調整を加えている。重量 478.7g。	5Y5/2　灰オリーブ やや緻密 流紋岩	南西壁寄り床上 0.3㎝ 完形 151
24 石器 編物石	長　20.1 幅　9.7 厚　5.6	河原石。右側縁中央に敲打あり。敲打範囲は狭く、敲打に伴う剝離は表側のみに見られる。重量 1488.0g。	5Y6/2　灰オリーブ やや粗い 閃緑岩	南西壁付近床上 0.7㎝ 完形 131
25 石器 編物石	長　19.1 幅　7.2 厚　6.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 975.2g。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い 礫岩	南西壁寄り床上 16㎝ 完形 152
26 石器 編物石	長　17.5 幅　8.9 厚　4.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 939.9g。	2.5Y7/2　灰黄 やや粗い 玢岩	南西壁際床上 0.7㎝ 完形 155
27 石器 編物石	長　残 12.1 幅　5.9 厚　4.8	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 454.1g。	10YR6/1　褐灰 粗い 礫岩	北西周溝付近 一部欠 63
28 石器 編物石	長　17.4 幅　7.0 厚　5.8	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 989.9g。	5Y7/2　灰白 やや緻密 安山岩	南西壁寄り床上 8㎝ 完形 60
29 石器 編物石	長　17.0 幅　残 8.6 厚　4.5	河原石。特に加工の痕跡なし。左下の欠損部分付近には、わずかに赤変した部分も見られるため、被熱による焼けハジケによる欠損と考えられる。残存重量 929.1g。	2.5Y7/1　灰白 緻密 安山岩	中央部床上 8㎝ 一部欠 108
30 石器 編物石	長　16.2 幅　7.2 厚　5.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 971.7g。	2.5Y5/3　黄褐 やや粗い 流紋岩	北西中央部床上 2㎝ 完形 92
31 石器 編物石	長　16.0 幅　6.4 厚　5.1	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 691.9g。	2.5Y4/2　暗灰黄 やや粗い 流紋岩	P4 西床上 8㎝ 完形 106
32 石器 編物石	長　17.4 幅　7.0 厚　4.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 728.4g。	2.5Y7/3　浅黄 やや粗い 礫岩	北西中央部床上 1㎝ 完形 82
33 石器 編物石	長　15.9 幅　7.6 厚　5.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 829.1g。	2.5Y7/3　浅黄 やや緻密 流紋岩	北西中央部床上 1㎝ 完形 88
34 石器 編物石	長　14.3 幅　8.1 厚　4.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 802.6g。	N6/　灰 緻密 安山岩	P5 北側床上 6㎝ 完形 119
35 石器 編物石	長　17.0 幅　7.4 厚　4.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 671.9g。	2.5Y5/3　黄褐 やや緻密 礫岩	北東壁溝底上 0.8㎝ 完形 175
36 石器 編物石	長　16.4 幅　9.9 厚　5.4	河原石。特に加工の痕跡なし。表側下半および裏側全面が被熱のため赤変する。重量 1189.3g。	5YR6/3　にぶい橙 やや緻密 流紋岩	南西隅壁際床上 0.4㎝ 完形 124、130
37 石器 編物石	長　15.9 幅　9.7 厚　4.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 930.3g。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密 安山岩	南西壁部床上 13㎝ 完形 156
38 石器 編物石	長　15.0 幅　8.9 厚　3.7	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 496.8g。	N5/　灰 緻密 安山岩	北西中央部床上 16㎝ 完形 116
39 石器 編物石	長　15.8 幅　8.0 厚　3.6	河原石。特に加工の痕跡なし。左側縁部のみが細長く赤変している。重量 804.7g。	5Y7/3　浅黄 緻密 安山岩	pit 東床上 11㎝ 完形 96
40 石器 編物石	長　14.9 幅　8.2 厚　4.7	河原石。特に加工の痕跡なし。表側は煤のため黒く変色し、裏側は被熱により赤変している。重量 792.8g。	7.5YR6/4　にぶい橙 粗い 礫岩	P1 西側床上 4㎝ 完形 61
41 石器 編物石	長　16.3 幅　5.3 厚　4.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 433.9g。	2.5Y7/2　灰黄 やや粗い 礫岩	中央付近床上 6㎝ 完形 149
42 石器 編物石	長　14.8 幅　6.8 厚　4.8	河原石。上端に剝離、右側縁に敲打あり。重量 634.5g。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや粗い 流紋岩	北西中央部 8㎝ 完形 115
43 石器 編物石	長　15.9 幅　7.3 厚　2.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 354.0g。	7.5Y7/1　灰白 緻密 安山岩	北西中央部床上 11㎝ 完形 86
44 石器 編物石	長　14.9 幅　5.8 厚　5.1	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 681.0g。	5Y7/3　浅黄 やや緻密 安山岩	北西床上 7㎝ 完形 74
45 石器 編物石	長　16.2 幅　5.4 厚　3.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 558.1g。	2.5Y7/4　浅黄 やや緻密 安山岩	南西壁際床上 11㎝ 完形 154
46 石器 編物石	長　14.3 幅　7.0 厚　4.3	河原石。特に加工の痕跡なし。表側は被熱により赤変する部分が多く、表側右下から裏面の多くは煤が付着する。重量 669.2g。	10YR6/2　灰黄褐 やや緻密 安山岩	中央部床上 8㎝ 完形 112
47 石器 編物石	長　15.0 幅　5.2 厚　4.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 380.2g。	5Y6/2　灰オリーブ やや粗い 礫岩	中央部床上 4㎝ 完形 107
48 石器 編物石	長　15.1 幅　8.6 厚　3.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 581.6g。	2.5Y6/3　にぶい黄 緻密 安山岩	北西中央部床上 13㎝ 完形 91
49 石器 編物石	長　15.7 幅　5.4 厚　3.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 360.2g。	2.5Y6/2　灰黄 やや緻密 流紋岩	P3 南床上 6㎝ 完形 139、143



第 67 図　権現山遺跡 2 区 SI-99a (4) 遺物

50 石器 編物石	長　15.1 幅　6.7 厚　5.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 587.9g。	2.5Y7/4　浅黄 緻密 流紋岩	カマド南床上 13㎝ 完形 97
51 石器 編物石	長　14.8 幅　7.8 厚　4.1	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 575.1g。	10YR5/6　黄褐 粗い 礫岩	北西床上 6㎝ 完形 72
52 石器 編物石	長　14.9 幅　5.9 厚　5.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 600.3g。	7.5YR6/6　橙 粗い 礫岩	南西壁部床直上 完形 157
53 石器 編物石	長　15.6 幅　6.3 厚　4.1	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 516.9g。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密 流紋岩	中央部床上 2㎝ 完形 113
54 石器 編物石	長　15.2 幅　7.1 厚　5.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 945.9g。	5Y6/3　オリーブ黄 粗い 礫岩	南西床上 1㎝ 完形 150
55 石器 編物石	長　13.6 幅　6.7 厚　4.7	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 603.3g。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密 流紋岩	 完形 D
56 石器 編物石	長　14.6 幅　5.6 厚　3.4	河原石。特に加工の痕跡なし。右側縁中央に抉りがあるが、人為的に作出されたものではない。重量 441.0g。	7.5Y7/1　灰白 やや粗い 安山岩	北西中央部床上 1㎝ 完形 81
57 石器 編物石	長　14.4 幅　6.5 厚　4.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 535.0g。	5Y6/1　灰 粗い 礫岩	南側壁際床直上 完形 132
58 石器 編物石	長　15.1 幅　6.5 厚　2.1	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 303.3g。	2.5Y6/3　にぶい黄 緻密 安山岩	南西壁際床上 15㎝ 完形 153
59 石器 編物石	長　13.2 幅　7.1 厚　4.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 472.1g。	5Y7/2　灰白 緻密 安山岩	北西中央部床上 3㎝ 完形 84
60 石器 編物石	長　14.1 幅　6.1 厚　3.8	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 397.2g。	2.5Y8/2　灰白 緻密 安山岩	北東隅壁際床上 2㎝ 完形 104
61 石器 編物石	長　13.4 幅　6.6 厚　3.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 431.9g。	10YR7/6　明黄褐 やや粗い 流紋岩	P1 底上 2㎝ 完形 67
62 石器 編物石	長　12.8 幅　6.3 厚　4.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 499.4g。	5Y7/2　灰白 やや緻密 安山岩	北西中央部床上 1㎝ 完形 89
63 石器 編物石	長　14.8 幅　6.4 厚　2.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 292.9g。	5Y6/3　オリーブ黄 やや緻密 閃緑岩	P1 東付近床上 6㎝ 完形 95
64 石器 編物石	長　12.8 幅　7.6 厚　4.3	河原石。特に加工の痕跡なし。上端は欠損のようにも見えるが、磨滅の様子から、使用時にはすでに欠損した状態であったと考える。重量 563.6g。	N6/　灰 緻密 安山岩	中央部床上 9㎝ 完形 110
65 石器 編物石	長　12.7 幅　6.7 厚　4.1	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 539.2g。	7.5Y6/1　灰 やや緻密 安山岩	南西隅壁付近床上 0.7㎝ 完形 126
66 石器 編物石	長　12.7 幅　6.3 厚　4.7	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 504.6g。	N6/　灰 やや粗い 礫岩	カマド東床直上 完形 99
67 石器 編物石	長　13.1 幅　5.0 厚　3.9	河原石。表側に近い右側縁中央に敲打あり。重量 464.9g。	2.5Y6/3　にぶい黄 やや緻密 流紋岩	北西中央部床上 1㎝ 完形 80
68 石器 編物石	長　13.4 幅　4.8 厚　4.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 299.6g。	2.5Y5/1　黄灰 やや緻密 輝緑岩	北西床上 10㎝ 完形 71
69 石器 編物石	長　13.1 幅　6.4 厚　4.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 504.3g。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い 礫岩	北西中央部床上 2㎝ 完形 83
70 石器 編物石	長　12.6 幅　6.6 厚　3.5	河原石。右側縁上半に集中して敲打が施され、小さな抉りが作出される。重量 416.9g。	2.5Y7/3　浅黄 緻密 安山岩	P1 底上 5㎝ 完形 65
71 石器 編物石	長　12.2 幅　6.4 厚　3.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 499.7g。	5Y7/3　浅黄 やや緻密 流紋岩	P1 東付近床上 13㎝ 完形 94
72 石器 編物石	長　13.9 幅　5.3 厚　2.6	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 274.5g。	N7/　灰白 緻密 安山岩	南西隅壁付近床上 5㎝ 完形 127
73 石器 編物石	長　13.4 幅　6.1 厚　3.6	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 428.9g。	10YR6/1　褐灰 緻密 ホルンフェルス	南東隅壁際床上 5㎝ 完形 140
74 石器 編物石	長　11.5 幅　5.3 厚　4.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 381.2g。	10YR6/4　にぶい黄橙 粗い 礫岩	北西中央部床上 3㎝ 完形 85
75 石器 編物石	長　12.8 幅　6.5 厚　2.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 315.5g。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い 流紋岩	中央付近床上 6㎝ 完形 147
76 石器 編物石	長　13.3 幅　5.2 厚　3.6	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 380.2g。	5Y7/2　灰白 やや緻密 安山岩	P6 北床上 3㎝ 完形 144
77 石器 編物石	長　11.9 幅　5.5 厚　3.6	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 375.8g。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや粗い 流紋岩	北西中央部床上 2㎝ 完形 79
78 石器 編物石	長　残 10.6 幅　残 4.6 厚　残 3.6	河原石。残存部分には特に加工の痕跡なし。残存重量 208.3g。	2.5Y7/3　浅黄 やや緻密 流紋岩	北西壁寄り床直上 破片 64
79 石器 編物石	長　11.6 幅　5.0 厚　2.6	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 251.4g。	5Y6/1　灰 やや緻密 安山岩	北西床直上 完形 73



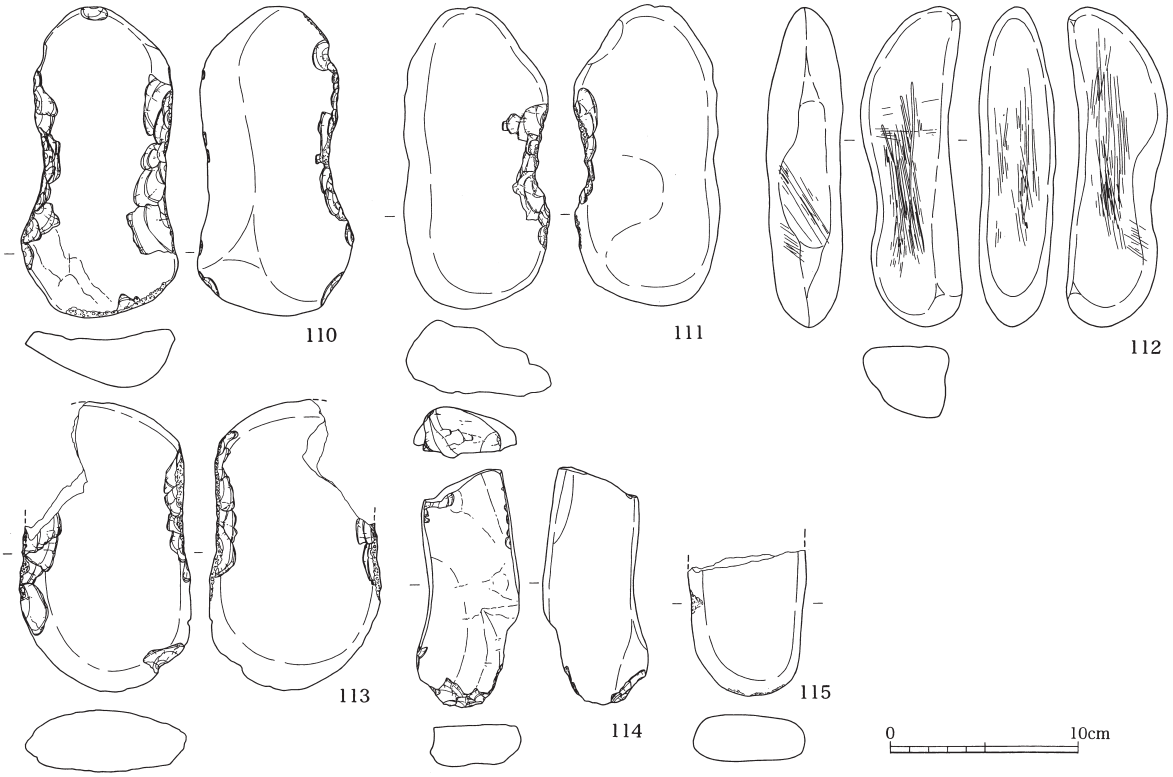
第 68 図　権現山遺跡 2 区 SI-99a (5) 遺物

80 石器 編物石	長　9.0 幅　7.4 厚　4.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 286.2g。	10YR4/1　褐灰 やや粗い 安山岩質溶岩	P6（入口 pit）内底上 4cm 完形　136
81 石器 編物石	長　残 8.9 幅　7.9 厚　3.6	河原石。残存部分には加工の痕跡なし。残存重量 329.0g。	10YR6/1　褐灰 やや緻密 安山岩	南西隅壁際床上 1cm 一部欠 128
82 石器 編物石	長　残 9.2 幅　7.7 厚　3.5	河原石。下端に敲打あり。残存重量 327.1g。	2.5Y6/2　灰黄 やや緻密 安山岩	南西中央部床上 2cm 一部欠 172
83 石器 編物石	長　残 7.2 幅　7.2 厚　3.6	河原石。残存部分には加工の痕跡なし。残存重量 242.4g。	2.5Y7/4　浅黄 粗い 安山岩質溶岩	P3 北床上 9cm 破片 142
84 石器 編物石	長　残 17.2 幅　9.1 厚　5.2	河原石。残存部分には加工の痕跡なし。残存重量 1096.2g。	2.5Y6/3　にぶい黄 やや粗い 礫岩	南側壁溝底上 9cm 一部欠 134
85 石器 編物石	長　残 13.0 幅　8.0 厚　5.4	河原石。残存部分には加工の痕跡なし。残存重量 872.5g。	7.5YR6/3　にぶい褐 やや緻密 流紋岩	北西壁寄り床上 7cm 破片 62
86 石器 編物石	長　残 15.9 幅　6.0 厚　3.8	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 363.4g。	2.5Y7/1　灰白 緻密 安山岩	P4 内底上 14cm 完形 105
87 石器 編物石	長　15.5 幅　6.2 厚　5.4	河原石。特に加工の痕跡なし。ほぼ全面が被熱のため赤変しており、表側下端および裏側に焼けハジケと見られる表面の剝落がある。残存重量 795.9g。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや粗い 礫岩	P6 南壁溝底上 9cm ほぼ完形 173
88 石器 編物石	長　13.5 幅　7.1 厚　4.7	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 654.5g。	2.5Y6/4　にぶい黄 やや緻密 安山岩	北西中央部床上 2cm 完形 87
89 石器 編物石	長　残 12.2 幅　7.0 厚　4.7	河原石。残存部分には加工の痕跡なし。残存重量 494.6g。	2.5Y5/3　黄褐 やや粗い 礫岩	南西隅壁溝底上 17cm 一部欠 125
90 石器 編物石	長　12.3 幅　5.3 厚　4.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 328.2g。	2.5Y7/4　浅黄 やや粗い 石英斑岩	P6 北東床上 4cm 完形 145
91 石器 編物石	長　残 8.2 幅　8.0 厚　3.3	河原石。残存部分には加工の痕跡なし。残存重量 236.8g。	7.5Y5/2　灰オリーブ 粗い 礫岩	南西隅壁際床直上 破片 122
92 石器 編物石	長　12.4 幅　6.0 厚　3.3	河原石。特に加工の痕跡なし。上端は使用前の欠損と考えたが、人為的な加工の可能性もある。重量 350.3g。	5Y6/2　灰オリーブ やや緻密 流紋岩	南東壁際床上 4cm 完形 141
93 石器 編物石	長　9.4 幅　6.9 厚　3.7	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 294.4g。	10YR7/6　明黄褐 やや粗い 流紋岩	北東壁際床直上 完形 103
94 石器 編物石	長　残 8.4 幅　残 6.0 厚　残 2.8	河原石。残存部分には、加工の痕跡なし。裏側は大きく欠損するが、磨滅の様子から、編物石としての使用時にはすでに欠損していた可能性がある。残存重量 194.6g。	5Y6/1　灰 やや緻密 流紋岩	北西壁寄り床上 5cm 破片 70
95 石器 編物石	長　残 9.3 幅　残 6.3 厚　3.4	河原石。残存部分には加工の痕跡なし。残存重量 259.6g。	7.5Y7/1　灰白 やや緻密 玢岩	南側壁際床上 9cm 一部欠 137
96 石器 編物石	長　残 11.3 幅　残 6.6 厚　4.5	河原石。残存部分には特に加工の痕跡なし。残存重量 519.4g。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密 流紋岩質凝灰岩	中央部床上 4cm 一部欠 109
97 石器 編物石	長　残 12.0 幅　6.1 厚　3.7	河原石。残存部分には加工の痕跡なし。残存重量 363.6g。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや粗い 流紋岩	南西隅壁溝底上 8cm 一部欠 121
98 石器 編物石	長　12.7 幅　8.7 厚　3.8	河原石。両側縁の中央付近に敲打がある。側縁部の形状は変化しない。重量 541.3g。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや緻密 安山岩	北西床上 4cm 完形 76
99 石器 編物石	長　13.2 幅　6.2 厚　2.8	河原石。上端が敲打されるとともに、上半に剝離が集中する。厚さを均一にするためか。重量 387.5g。	2.5Y7/4　浅黄 やや粗い 礫岩	P1 床直上 完形 69
100 石器 編物石	長　15.2 幅　5.6 厚　4.3	河原石。上端および下端にそれぞれ剝離あり。重量 426.0g。	5Y5/2　灰オリーブ やや粗い 礫岩	北西中央部 7cm 完形 114
101 石器 編物石	長　残 7.4 幅　6.9 厚　1.6	河原石。特に加工の痕跡なし。表側のみ煤付着。残存重量 145.1g。	10YR6/2　灰黄褐 緻密 安山岩	北西床上 7cm 破片 75
102 石器 編物石	長　21.3 幅　6.8 厚　5.9	河原石。上端に敲打あり。下端のみ赤変する。重量 1423.8g。	2.5Y5/3　黄褐 やや緻密 流紋岩	カマド東床上 4cm 完形 98
103 石器 編物石	長　17.8 幅　7.3 厚　3.7	河原石。右側縁に敲打あり。重量 731.4g。	2.5Y6/1　黄灰 緻密 玢岩	北西床上 9cm 完形 78
104 石器 編物石	長　13.4 幅　5.1 厚　3.0	河原石。上下両端が集中的に敲打され、下端にはわずかな抉りが作出される。重量 263.5g。	2.5Y7/4　浅黄 緻密 安山岩	北西隅壁際床上 11cm 完形 59
105 石器 編物石	長　残 6.7 幅　7.2 厚　4.1	河原石。残存部分には加工の痕跡なし。残存重量 242.4g。	2.5Y7/2　灰黄 やや粗い 流紋岩質凝灰岩	南西壁溝底上 6cm 破片 129
106 石器 編物石	長　12.5 幅　5.4 厚　5.2	河原石。両側縁上半に剝離が施され、狭い抉りが作出される。重量 459.4g。	7.5Y7/1　灰白 緻密 安山岩	中央部床上 7cm 完形 111
107 石器 編物石	長　14.1 幅　8.2 厚　2.5	河原石。左右両側縁に部分的な敲打が施される。重量 402.7g。	2.5Y6/2　灰黄 やや緻密 安山岩	カマド東床直上 完形 171
108 石器 編物石	長　15.7 幅　6.6 厚　2.7	河原石。左右両側縁に敲打を施す。左側縁は狭い抉りとなるが、右側縁はやや直線的。表側上半は左上からの打撃により大きく剝離する。重量 287.8g。	2.5YR7/1　明赤灰 やや緻密 安山岩	北西中央部床上 8cm 完形 117
109 石器 編物石	長　14.2 幅　6.2 厚　3.7	河原石。表側は左側縁から大きく剝離されたのち、中央の稜および右側縁中央に対して細かな剝離が施される。残存重量 360.4g。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い 流紋岩	南東壁際床上 5cm 完形 138



第 69 図　権現山遺跡 2 区 SI-99a (6) 遺物

110 石器 編物石	長　16.4 幅　8.3 厚　3.3	河原石。左右両側縁および下端が集中的に敲打されており、これによって両側縁は広く抉られた形状となる。重量 516.3g。	2.5Y7/3　浅黄 緻密 安山岩	P1 底上 2㎝ 完形 66
111 石器 編物石	長　15.9 幅　7.9 厚　4.0	河原石。右側縁中央が集中的に敲打され、緩やかな抉りが作出されている。重量 598.4g。	10YR6/4　にぶい黄橙 粗い 流紋岩	南西壁部床上 2㎝ 完形 158
112 石器 編物石	長　16.9 幅　5.4 厚　3.8	河原石。表裏左右の 4 面に使用による擦痕がある。表側が最も顕著で、多数の細い擦痕のほか太い条線状の使用痕も認められる。表裏面では、擦痕の集中する部分が浅くくぼむ。重量 432.9g。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密 安山岩	P6 内底上 3㎝ 完形 174
113 石器 編物石	長　15.3 幅　8.5 厚　3.2	河原石。両側縁とも広範囲が敲打され、直線的な縁辺となる。残存重量 531.0g。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密 安山岩	北西床上 11㎝ 一部欠 77
114 石器 礫器	長　12.7 幅　5.4 厚　2.7	棒状の河原石を素材にしていると見られる。節理面に沿って縦に分割したのち、下端に剝離を加えて刃部を作出している。上端は折断面であろう。重量 207.5g。	10Y6/1　灰 緻密 安山岩	 完形 貼床
115 石器	長　残 7.7 幅　6.3 厚　2.5	河原石。下端および左側縁に敲打あり。残存重量 181.0g。	7.5YR5/3　にぶい褐 やや緻密 流紋岩	 一部欠



第 70 図　権現山遺跡 2 区 SI-99a (7) 遺物

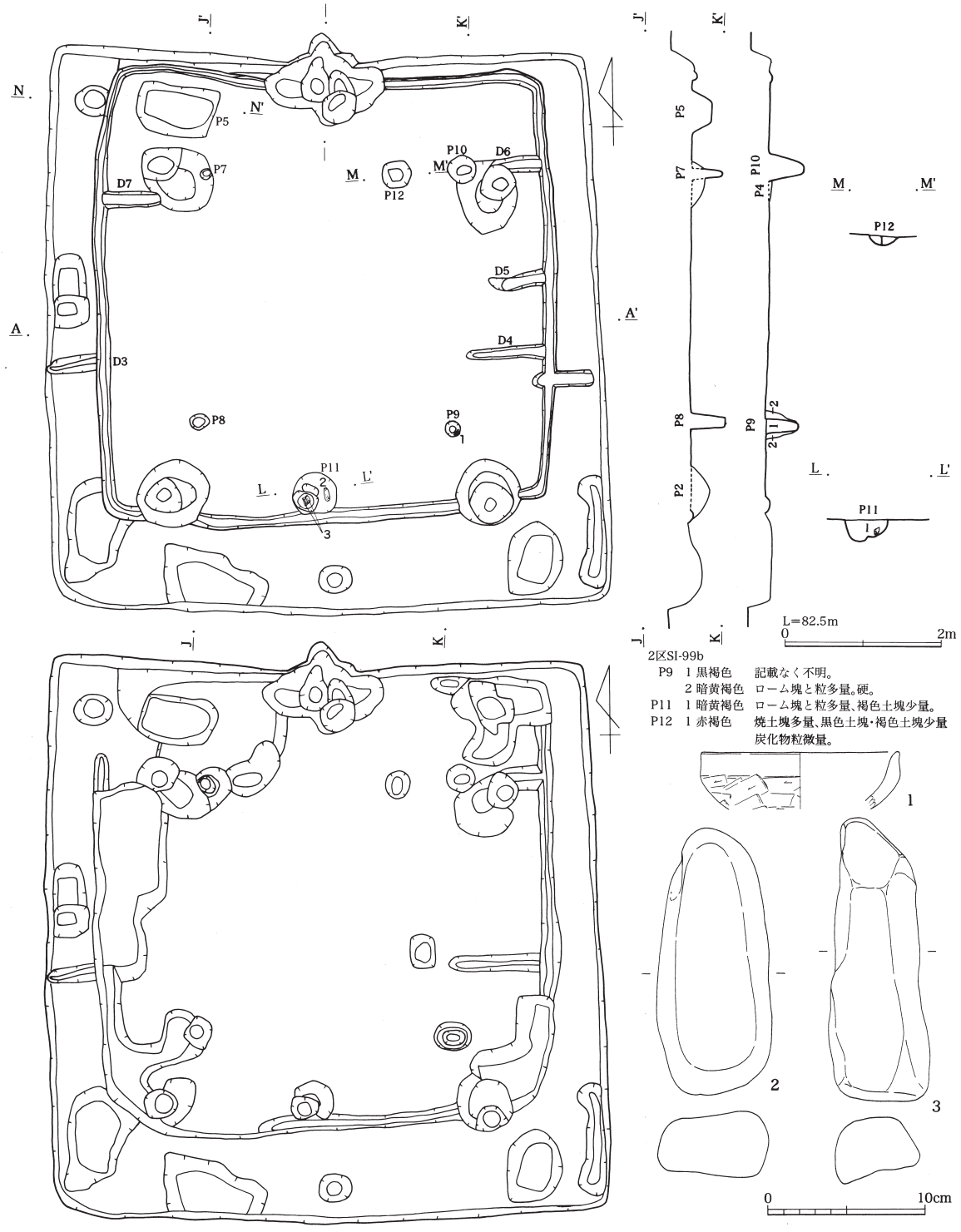
２区 SI-99b（第 71 図、写真図版 17・18）

［位置］拡張して SI-99a に建て替えられる。

［規模と形状］東西 5.88m、南北 5.86m の方形で、SI-99a と同様に北西隅がやや突出する。南北の中軸は N-3°-W。残存壁高は 0.22 ～ 0.28m で、ごく低い。床面はほぼ平坦で傾斜せず、特に硬化部はなく全体に締まる。掘方は床から深さ 4 ～ 20cm で主に四隅と壁際が深い。ローム粒・塊が多い黄褐色系の土で貼床し、中央はロームをそのまま床面とする。主柱穴は P7 ～ P10 の 4 本である。北東主柱穴 P10 は SI-99a の P4 に切られて把握しにくく、貼床除去後に確認した。P7 は径 14 × 14 ×深さ 40cm、P8 は径 24 × 22 ×深さ 44cm、P9 は径 20 × 20 ×深さ 44cm、P10 は径 36 × 34 ×深さ 44cm。SI-99a の主柱穴とは異なり径が小さい。柱配置はほぼ方形で、南北は P7-8 間がわずかに狭く 3.16m、P9-10 間が 3.30m。東西は P7-10 間が 3.28m、P8-9 間が 3.24m である。このほか、北東部床面で確認した P12 は径 36 × 34 ×深さ 14cm で焼土塊を含む。入口施設 P11 が南壁際中央で壁溝と接する。円形で径 54 × 50 ×深さ 28cm、南西部が柱穴状に一段深い部分は 35 × 29cm、底は平坦で、南西壁がやや急な他は一度緩やかになり彎曲して急に上がる。覆土にローム粒・塊が多い。壁溝 D3 が全周するが、SI-99a のカマドと P2・P3 に切られる部分は

不明。断面「U」字状で幅 9 ～ 20cm、床から深さ 2 ～ 14cm。間仕切溝は東側に D4 ～ 6、西側に D7 があり、壁溝と接する。D6 と D7 は、SI-99a の P1 と P4 に切られる。幅 15 ～ 20cm、D6 と D7 が床面から深さ 8cm、D4-D5 間が 0.9m、D5-D6 間が 1.5m である。北西隅にある P5 が SI-99a と共通の貯蔵穴と推定される。a 期と異なるのは床面の高さのみで、形状は同じでわずかに小さくなる。東西軸の不整長方形で 100 × 60 ×深さ 28cm。

［**カマド**］b 期のカマドは北壁際中央の a 期カマドにほぼ完全に破壊され、掘方の一部がわずかに残る。SI-



第 71 図　権現山遺跡 2 区 SI-99b 遺構・遺物

99a のカマド断面図に見られる８層がｂ期カマド掘方の残存部である。

［覆土］ SI-99a の貼床（５層）で埋められている。

［出土遺物］ ｂ期に伴うと考えられる遺物は、図示した土師器杯１点と編物石２点のほか、土師器甕の小破片数点のみである。

第 19 表　権現山遺跡 2 区 SI-99b 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 12.6 高　残 3.6	外面口縁部ヨコナデ、体部丁寧なケズリ。内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁部・内面全体漆仕上げ。	10YR6/6　明黄褐 緻密　白微粒少、赤細粒微 やや軟質	P9 底上 14cm 口～体 1/4 周 184
2 石器 編物石	長　16.9 幅　7.3 厚　4.6	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 947.9g。	7.5Y6/1　灰 緻密 ホルンフェルス	P11（入口 pit）内底上 4cm 完形　185
3 石器 編物石	長　17.9 幅　6.5 厚　4.4	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 705.7g。	2.5Y7/3　浅黄 やや緻密 流紋岩	P11 内底面直上 一部欠 186、187

第２節　古墳時代の掘立柱建物跡

２区 SB-3（第 72 図、写真図版 18）

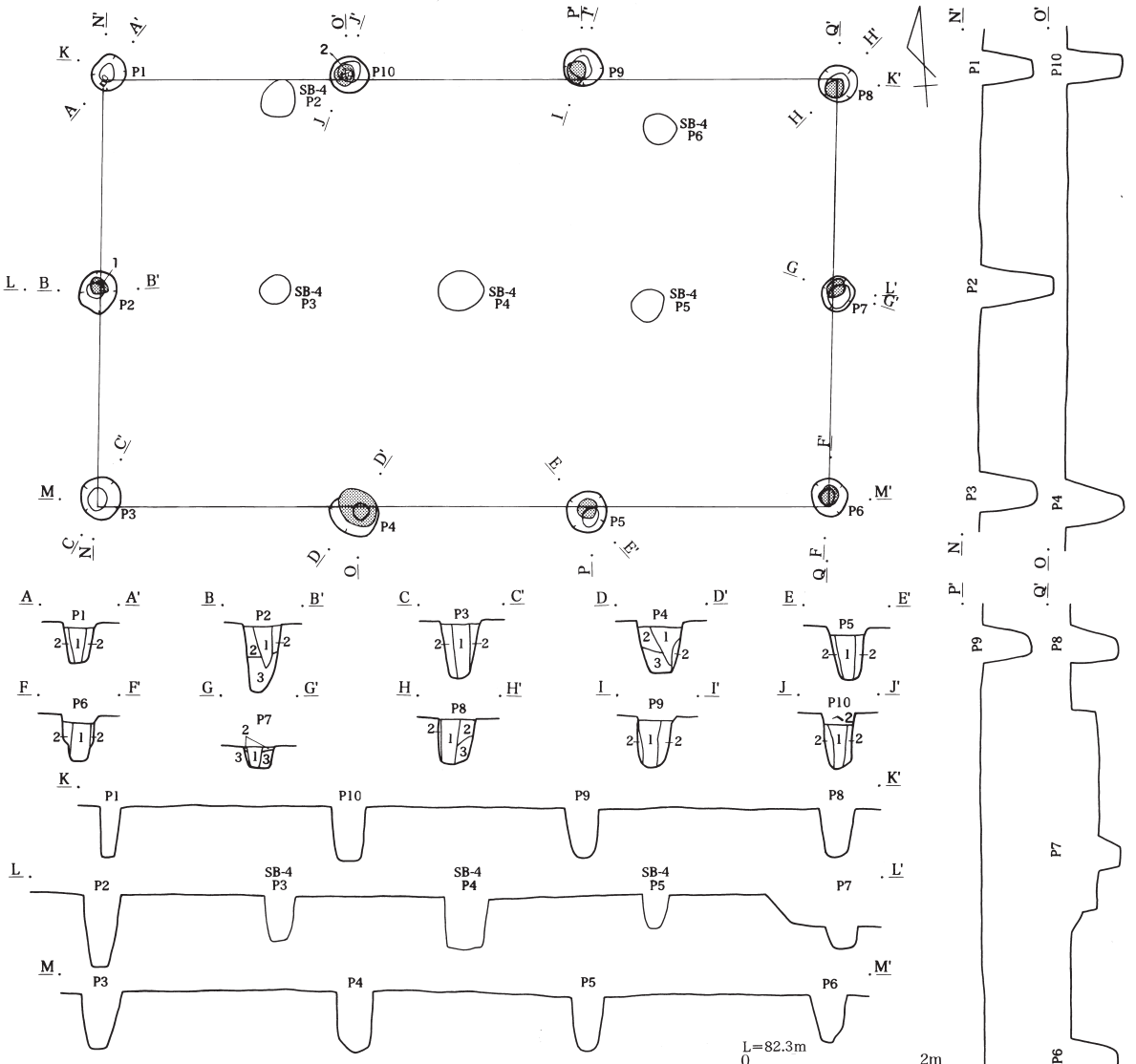
２区中央から西寄りの台地平坦面で、46.5-10.5・11.0、47-10.5・11.0 グリッド所在。東 5m に古墳時代の SI-1、北 6m に時期不明の SB-126 がある。SI-1(a ～ c 期) とセットになる建物の可能性が高い。北部で古墳時代の SB-4 と範囲が重複するが、新旧関係は不明である。東側柱列の中央柱穴 P7 の上部が確認調査トレンチに切られる。

東西棟で、桁行３間（8.03 ～ 8.15m）、梁行２間（4.52 ～ 4.98m）の側柱建物。東西の中軸線は N-85 ° -E で柱穴は 10 本あり、配置はほぼ長方形。柱間は桁行方向が 2.5 ～ 2.9m、梁行方向が 2.2 ～ 2.4m。柱痕が明瞭なものが多い。

遺物は少ない。P2 と P10 の柱痕部分から図示した１と２がそれぞれ出土した。１の杯からみて古墳終末期初め頃の可能性がある。土師器長胴甕・杯・鉢の他には礫 4 点と、混入した縄文時代の石匙がある。６は敲打・剥離痕があり、隣接する SI-1 に多い編物石に似る。遺物からみて東にある２区 SI-1 と関連する可能性がある。SI-1 には３期の変遷があるのに対して、掘立柱建物跡の SB-3 と SB-4 が対応すると考えることもできる。

第 20 表　権現山遺跡 2 区 SB-3 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 12.2 高　残 3.7 最大　復 12.6	外面口縁部ヨコナデ。体部ケズリで、体部上半に無調整部分があり、紐積痕が残る。内面口縁～体部ヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　白細～微粒微 やや硬質	P2 内底上 67cm 口～体一部 P-2 No.1
2 土師器 鉢	口　復 13.2 高　8.3 最大　復 15.7	精緻な作り。外面胴部上半光沢のあるナデ、口縁部内外面ヨコナデ、内面胴部上半ヘラナデ。	2.5Y7/2　灰黄 緻密　赤・黒粗～細粒微 やや硬質	P10 内底上 57cm 口～胴上半 1/3 周 P-10 No.1
3 礫	長　13.8 幅　6.6 厚　3.3	河原石。特に加工の痕跡なし。下半表側は節理面から剝落していると見られる。編物石の可能性あり。重量 313.2g。	2.5Y7/3　浅黄 やや緻密 ホルンフェルス	完形 P4
4 礫	長　12.1 幅　5.5 厚　3.8	河原石。特に加工の痕跡なし。編物石の可能性あり。重量 358.3g。	10Y6/1　灰 やや緻密 安山岩	完形 P6
5 礫	長　残 9.8 幅　5.6 厚　4.9	河原石。残存部分には加工の痕跡なし。左側縁は被熱により赤変する。形状から、編物石の可能性あり。残存重量 436.5g。	2.5Y5/2　暗灰黄 やや粗い 流紋岩	破片 P4
6 石器 編物石	長　12.0 幅　6.2 厚　2.2	河原石。右側縁に表裏両面への剝離が施され、本来やや突出していたと推測される縁辺が直線的になっている。SI-1 等からの混入か。重量 229.4g。	2.5Y6/1　黄灰 やや緻密 安山岩	完形 P6

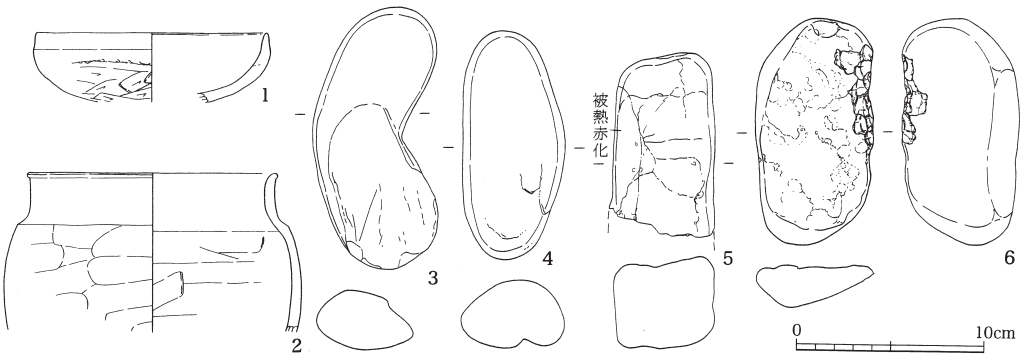


2区SB-3

P1　1 暗褐色　ローム塊と粒少量。やや軟。柱痕。
　　2 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。やや軟。
P2　1 暗褐色　ローム塊と粒少量、焼土塊・炭化物粒微量。やや軟。柱痕。
　　2 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。やや軟。
　　3 黄褐色　ローム塊と粒多量。硬。
P3　1 暗褐色　ローム塊と粒少量。やや軟。柱痕。
　　2 褐色　ローム塊と粒微量。やや硬。
P4　1 暗褐色　ローム塊と粒少量、焼土塊微量。やや軟。柱痕。
　　2 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。
　　3 暗黄褐色　ローム塊少量、ローム粒多量。
P5　1 暗褐色　ローム塊と粒少量。やや軟。柱痕。
　　2 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。
P6　1 暗褐色　ローム塊微量、ローム粒少量。やや軟。柱痕。
　　2 暗黄褐色　ローム塊少量、ローム粒多量。やや硬。
P7　1 暗褐色　ローム塊少量、ローム粒多量。やや軟。柱痕。
　　2 黄褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。
　　3 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。
P8　1 暗褐色　ローム塊と粒少量。やや軟。柱痕。
　　2 黄褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。
　　3 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。
P9　1 暗褐色　ローム塊少量、ローム粒多量。やや軟。柱痕。
　　2 黄褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。
P10　1 暗褐色　ローム塊と粒少量。やや軟。柱痕。
　　2 暗黄褐色　ローム塊少量、ローム粒多量。

	径	深さ
P1	40×35	56
P2	47×41	80
P3	47×44	64
P4	55×50	66
P5	47×44	60
P6	44×40	54
P7	37×35	24
P8	43×40	62
P9	43×40	56
P10	40×38	61

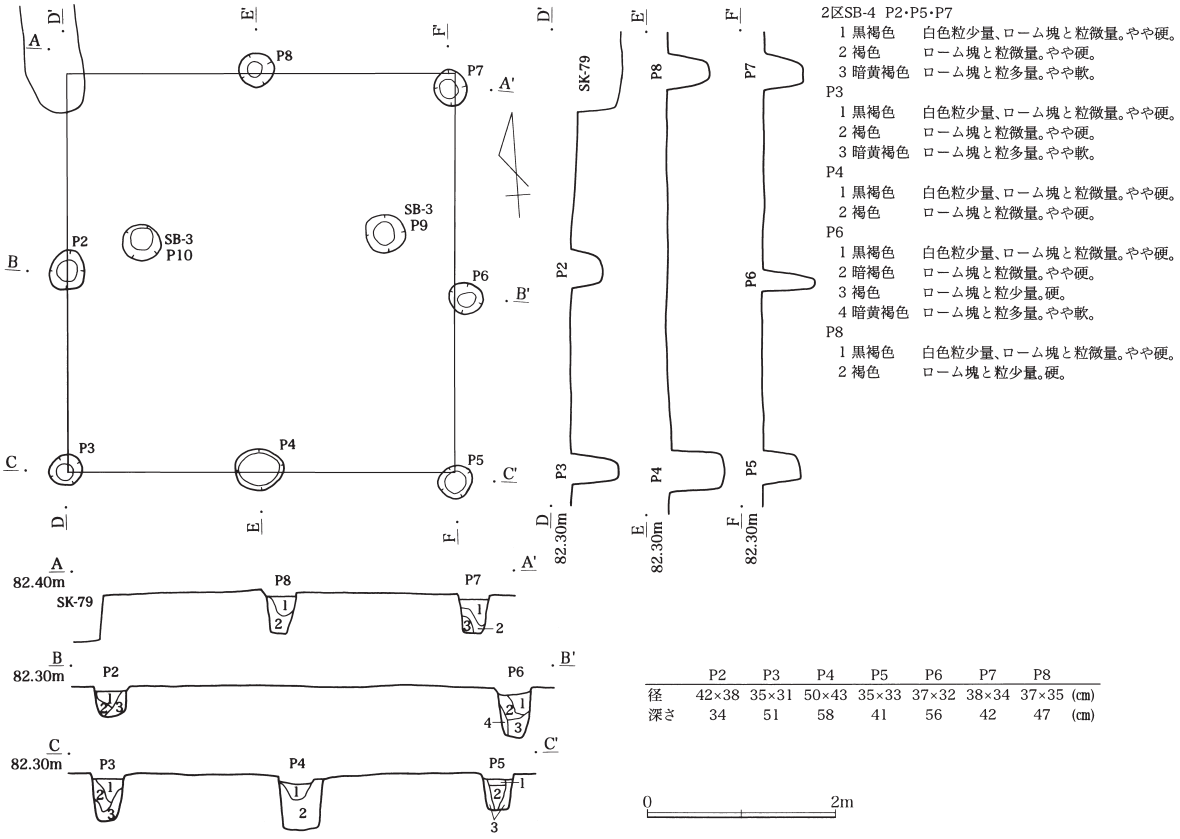
(単位:cm)



第 72 図　権現山遺跡 2 区 SB-3 遺構・遺物

２区 SB-4（第 73 図、写真図版 18）

前述した SB-3 とほぼ同じ位置に所在する。南部で古墳時代の SB-3 と範囲が重複するが、新旧関係は不明である。北西柱穴が時期不明の SK-79 に切られて消滅したと見られる。桁行・梁行ともに２間（4.14 ～ 4.22m）の側柱建物である。南北の中軸線は N-10° -E で柱穴は推定８本、配置は正方形で P6 が少し外側に出る。柱間は約 2.1m（1.9 ～ 2.2m）でほぼ等間隔。P5 以外の各柱穴は柱痕状の層がないので、柱を抜き取った可能性もある。ただし、確実な抜き取り穴は見られない。遺物はミガキ調整がなく漆仕上げの杯口縁部１片だけで、古墳後～終末期の土師器であろうが詳しい時期は不明。東側にある SI-1 が拡張建て替えされるのに対応して、西側の建物も SB-4 から SB-3 へ規模が拡大したと想定することもできる。



	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	
径	42×38	35×31	50×43	35×33	37×32	38×34	37×35	(cm)
深さ	34	51	58	41	56	42	47	(cm)

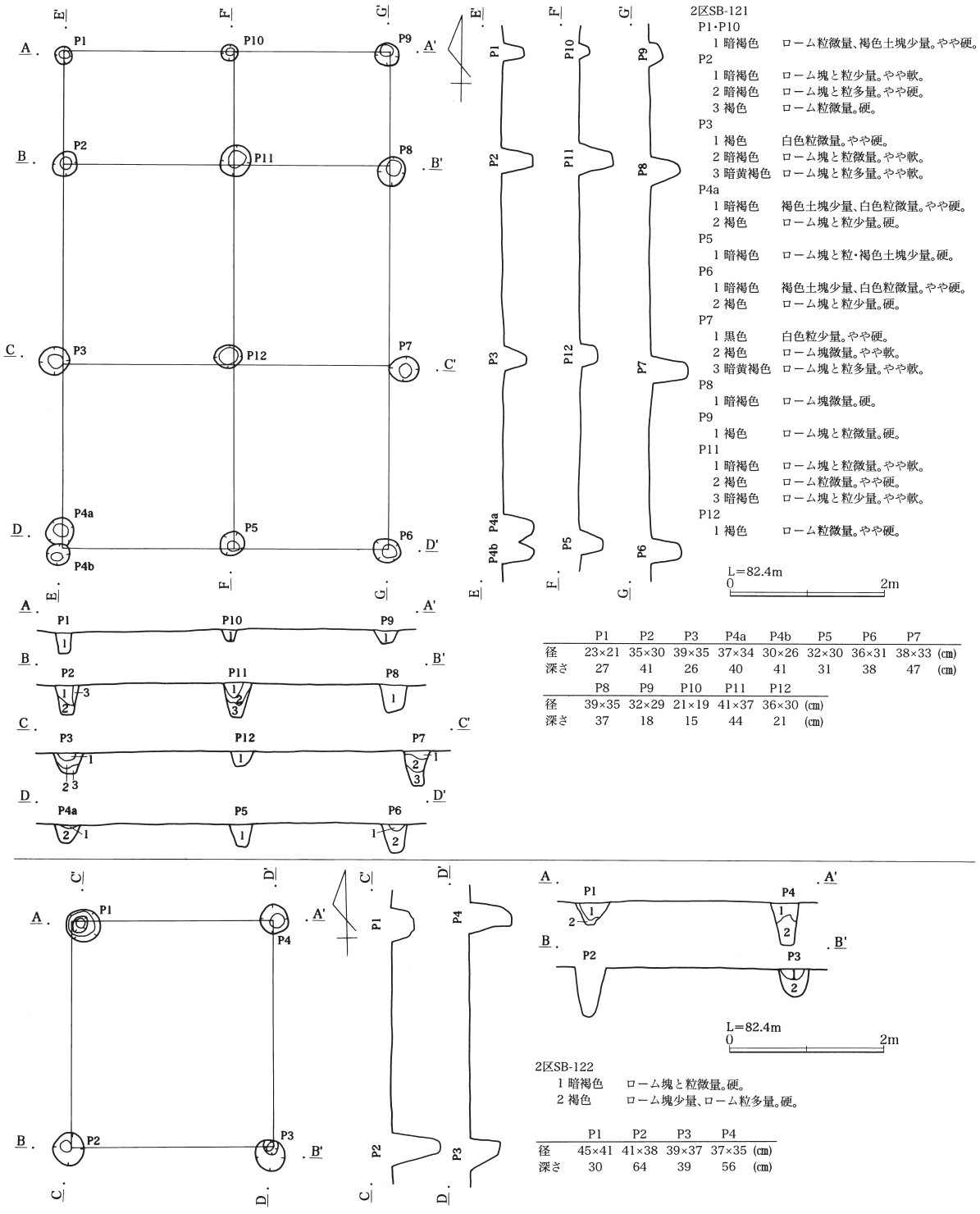
第 73 図　権現山遺跡 2 区 SB-4 遺構

２区 SB-121（第 74 図、写真図版 18）

２区北寄りの台地平坦面で、48.0-10.5 および 48.5-10.5 グリッド所在。古墳時代遺構は、北東に SI-99、東に SB-122 が隣接する。SB-121 と 122 の南柱列が揃う。重複する遺構はない。２×３間で南北棟の総柱建物。桁行総長は 6.37 ～ 6.48m で、柱間は南の２間が広く 2.2 ～ 2.5m、北の１間は狭く 1.4 ～ 1.5m で、庇かもしれない。梁行総長は 4.17 ～ 4.52m で柱間は 2.1 ～ 2.3m。柱筋はよく通り、主軸方位は GN-0° -E。掘方形状は円形で径 21 ～ 41cm、遺構確認面からの深さは 15 ～ 47cm。柱根の当たりは認められない。埋土には柱痕が残らないので抜き取った可能性がある。遺物は内面に粗いミガキを持つ土師器杯体部片のみで、時期は限定できない。隣接する古墳終末期の竪穴建物 SI-99a・99b に隣接し、主軸方向も近いので、それと同じ時期を推定することもできる。SB-121 と 122 も南柱列が揃うので、同時期か、または SI-99 の拡張にあわせて SB-122 から 121 へ拡張建替したものかもしれない。

２区 SB-122（第 74 図、写真図版 18・19）

前述した SB-121 のすぐ東側で、48.0-10.5 と 11.0 グリッド所在。古墳時代遺構は、北に SI-99、西に SB-121 が隣接する。重複する遺構はない。桁行・梁行ともに１間で南北棟の側柱建物である。南北に長く（2.88



第 74 図　権現山遺跡 2 区 SB-121・122 遺構

～ 2.91m)、東西が短い（2.56 ～ 2.64m)。主軸方位は GN-2° -E。掘方形状は円形で径 25 ～ 49cm、遺構確認面からの深さは 43 ～ 66cm。柱根の当たりは認められない。埋土には柱痕が残らないので抜き取った可能性がある。遺物はなく、時期を限定できない。SB-121 の項で上述したとおり、SI-99a・99b や SB-121 と同時期か、または SI-99 の拡張にあわせて SB-122 から 121 へ拡張建替したものかもしれない。

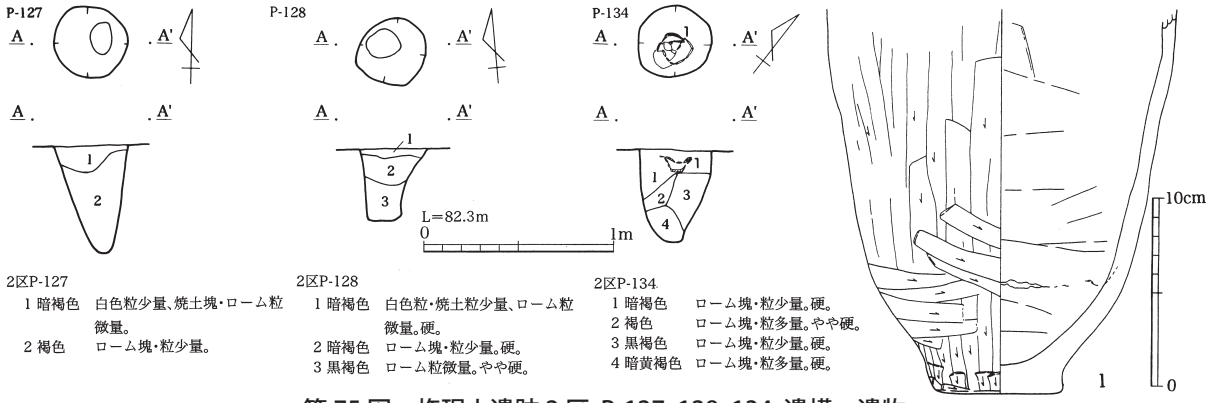
第３節　古墳時代の柱穴状土坑

２区 P-127・128・134（第 75 図、写真図版 19）

２区北部の台地上にある３本の小ピット。P-127・128 は埋土に古墳時代テフラ（Hr-FA）の可能性のある白色粒を含み、北側にある SB-121 と同じく古墳時代遺構の可能性があると推定した。P-134 は古墳後期の土師器長胴甕を出土している。

第 21 表　権現山遺跡 2 区 古墳時代の柱穴状土坑

遺構名	グリッド	平面形	重複関係	規模 (m)	埋土
P-127	48.0-10.5	円形	なし	0.39 × 0.38	自然埋没で白色粒（テフラ？）あり
古墳時代の可能性がある SB-121 の南側で、P-128 も近くに所在。					
P-128	48.0-10.0	円形	なし	0.39 × 0.35	自然埋没で白色粒（テフラ？）あり
古墳時代の可能性がある SB-121 の南側で、P-127 も近くに所在。					
P-134	47.5-11.0	円形	なし	0.78 × 0.76	自然埋没で白色粒（テフラ？）なし
古墳後期の土師器甕出土。古墳時代の SI-1・99 や SB-3・4・121・122 が周囲に所在。					



第 75 図　権現山遺跡 2 区 P-127・128・134 遺構・遺物

第 22 表　権現山遺跡 2 区 P-134 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 甕	高　残 20.3 底　6.8	外面胴部下半縦方向のケズリのち一部横方向のケズリ。底部は多方向のケズリで、突出する平底。内面胴部下半～底部ヘラナデ。胴部下半には、積み上げ休止による接合面あり。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　砂礫微、白・透明粗～細粒多 やや硬質	pit 内底上 36cm、正位 胴下半～底完存 1、2、3、4、5、6、7

第４節　古墳時代の遺物集中地点

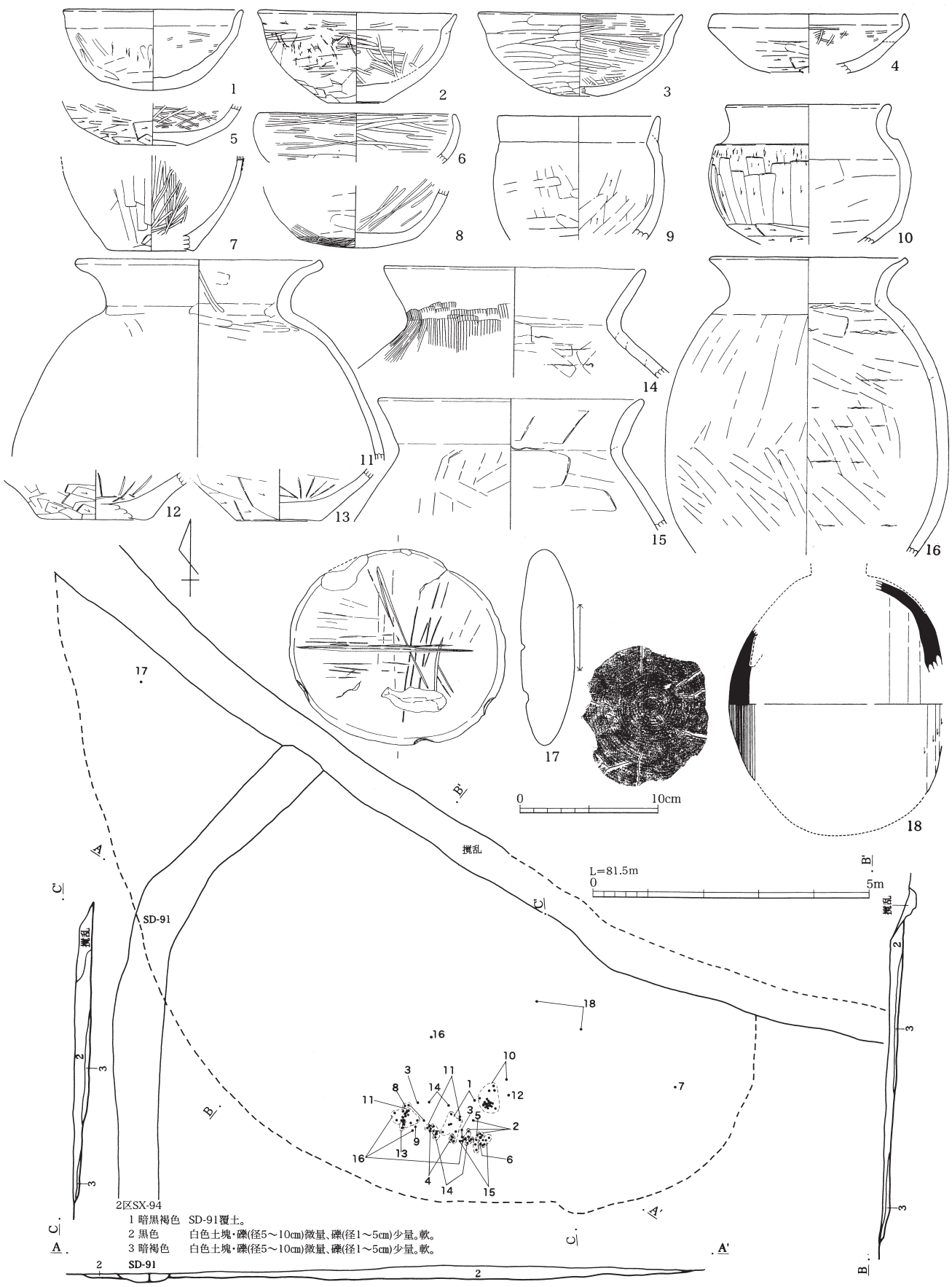
２区 SX-94（第 76 図、写真図版 19・116）

２区南端の 37.0-12.5・13.0 および 37.5-12.5・13.0 グリッドの、北東へ向かう緩斜面に位置する。西側に時期不明の溝 SD-89・91 があり、SD-91 に切られると思われる。北側は現代のゴミを含む撹乱溝に切られる。

図に破線で示した範囲（長軸 15.7 ×短軸 6m）の、白色土塊を含む厚さ 5 ～ 60cm の２層中から、古墳中・後・終末期の遺物が出土した。覆土の３層は、２層と色調が異なるが混入物は同様である。図でわかるように、中央南部に遺物が集中し、周辺部では疎らである。

遺物のうち、現地調査時に番号を付けて取り上げたものは 356 点で、そのうち 68 点が礫である。礫は自然石が主体で、図示した砥石 1 点と縄文時代の礫器 1 点も含まれていた。図示した以外の遺物量は 1,238 片（10,776g）で、内訳は土師器甕 1,146 片（9,736g）、土師器杯 90 片（956g）、須恵器 2 片（84g）である。図化できない小破片が多く、被熱したものも目立つ。

古墳中期の甕・壺・杯が主体で、後期以降の破片も少量混じる。中期中葉の土師器杯と、後～終末期と見



第 76 図　権現山遺跡 2 区 古墳時代の遺物集中地点 SX-94 遺構・遺物

られる土師器鉢・甕・須恵器提瓶を図示した。提瓶は破片だが、杯と鉢はほぼ全周が残る。南側に隣接する権現山遺跡４区の古墳時代集落から廃棄された遺物の包含層であろう。

第 23 表　権現山遺跡 2 区 SX-94 出土遺物

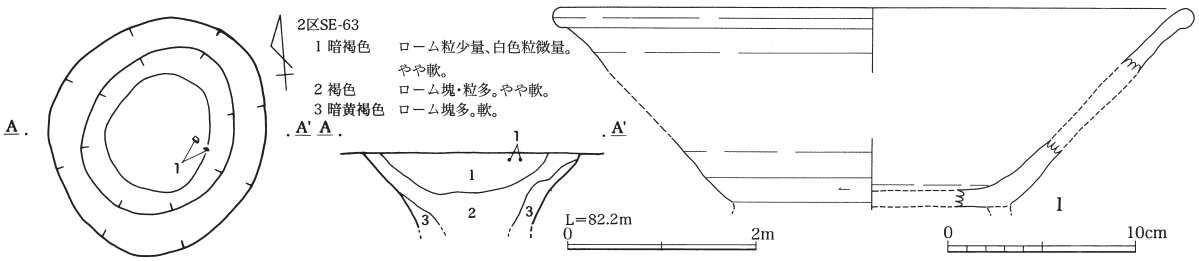
番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　13.2 高　5.8	内斜口縁。外面口縁部ヨコナデ、体部軽いナデで、粘土の皺残る。底部ケズリと見られるが、表面が細かく剝落しているため不詳。丸底で、体部との境目は緩やかな稜となる。内面体～底部クレーター状の剝落著しい。口縁部ヨコナデ・体～底部ナデのち口縁～底部横方向主体のミガキ。	2.5YR6/8　橙 やや粗い　白・黒・赤粗～細粒少 硬質	南底上 18cm 口～体部 3/4 周、底完存 48、80、82、84、91、226、232、242、255
2 土師器 杯	口　復 14.4 高　残 6.7 底　4.0	内斜口縁。外面口縁部ヨコナデ、体部上半軽いナデのち疎らなミガキで、粘土の皺残る。体部下半～底部光沢のあるケズリ。内面口縁部ヨコナデのち疎らなミガキ、体～底部ヘラナデのち疎らな斜位のミガキ。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒少 やや硬質	南底上 20cm 口～体 1/2 周、底完存 105、110、115、117、124、125、138、243、246、251、252
3 土師器 杯	口　復 14.8 高　残 6.0 底　復 2.4	内斜口縁で、薄手・硬質。外面口縁部ヨコナデ・体部ナデのち口縁～体部幅広なミガキ。底部ケズリのちミガキで、全体がくぼむ。内面口縁部ヨコナデのち疎らなミガキ、体～底部ナデのち底部多方向のミガキのち体部密な横方向のミガキ。	5YR5/6　明赤褐 緻密　赤細粒・白微粒少 硬質	中央南部底上 19cm 口～底 1/4 周 93、101、146
4 土師器 杯	口　復 13.8 高　残 4.3 最大　14.4	口縁部は短く直線的に内傾する。外面口縁部ヨコナデ、体部上半軽いナデで、粘土の皺や紐積痕残る。体部下半ケズリ。内面口縁～体部ヨコナデのちミガキ。ミガキは横方向のち縦方向。外面口縁～体部一部煤付着。	7.5YR4/4　褐 やや緻密　白礫～粗粒微、赤粗～細粒少 硬質	南底上 12cm 口～体 1/3 周 58、229
5 土師器 杯	高　残 3.0 底　5.1	外面体部下半ケズリのちわずかにミガキ、底部ケズリで、全体がくぼむ。内面体～底部ヘラナデのち多方向のやや疎らなミガキ。	2.5YR6/6　橙 緻密　白微粒・赤細粒少 硬質	南底上 16cm 体 1/3 周、底 3/4 周 112
6 土師器 杯	口　復 14.2 高　残 3.6 最大　復 15.0	外面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ。体部上半軽いナデ・体部下半ケズリのち体部疎らなミガキ。内面口縁部ヨコナデ・体部ナデのち口縁～体部疎らなミガキ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤細～微粒・白微粒少 硬質	南底上 15cm 口～体 1/5 周 230、252
7 土師器 鉢か	高　残 7.0 底　復 6.2	外面胴部下半～底部幅広なミガキ。底部平底で、全体にくぼむ。内面胴部下半～底部ヘラナデのちミガキ。甑の可能性あり。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　赤粗～細粒少 やや硬質	南東底上 4cm、正位 胴下半 1/2 周、底 1/5 周 355
8 土師器 鉢か	口　13.8 高　残 4.7	外面体部軽いナデ、底部 5 本 /1cmのハケのちわずかにミガキ。底部は丸味を持ち、体部との境は稜となる。内面体～底部ナデのち疎らな斜放射状のミガキ。底部付近では、外面に近い側の胎土が赤変しており、火にかけられた可能性あり。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　白粗粒微、白・透明細～微粒少 硬質	中央南部底上 15cm 体 1/3 周、底一部欠 21、22、43
9 土師器 鉢	口　復 11.8 高　残 9.0 大　12.4	外面口縁部軽いヨコナデ、体部軽いナデ。口縁部は粘土紐貼付により作出されており、外面には接合痕がそのまま残る。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、体部縦方向のケズリのち斜め方向のナデ。外面および内面口縁部は橙色（5YR6/6）、内面体部が明黄褐色。	10YR6/6　明黄褐 緻密　赤・白細～微粒微 やや硬質	南底上 16cm 口 1/5 周、体 1/2 周 36
10 土師器 鉢	口　12.0 高　残 10.1 最大　14.6	外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリで、上端に無調整部分あり。内面体部ナデのち口縁～体部上半ヨコナデ。内面は丁寧に調整される。	7.5YR8/6　浅黄橙 緻密　赤粗～細粒少 やや硬質	中央南部底上 25cm 口～体ほぼ完存 209、210、211、212、213、214、329
11 土師器 甕	口　復 18.0 高　残 14.4	16 に類似する甕。外面胴部上半丁寧なナデ。口縁部内外面ヨコナデ。口縁端部は上につまみ上げられており、口縁部上半は内彎気味になるとともに、端部は斜めの平坦面となる。内面胴部上半ナデ。外面口縁～胴部上半煤付着。接合できない胴部片多量にあり。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密　砂・白礫～粗粒微、白・黒・透明細～微粒少 やや硬質	南西底上 14cm 口完存、胴上半一部 1、30、221、238
12 土師器 甕	高　残 3.5 底　復 7.6	外面胴部下端～底部ケズリ。底部は突出する平底で、全体にややくぼむ。内面胴部下端～底部ヘラナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　砂礫微、白・透明細～微粒少 やや硬質	中央南部底上 18cm 胴下端～底 1/4 周 327
13 土師器 甕	高　残 3.8 底　6.2	外面胴部下端～底部ケズリ。底部は全体にわずかにくぼむ。内面胴部下端～底部ヘラナデ。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　砂粗粒微、白・黒・透明細～微粒少 やや硬質	南西底上 11cm 胴下端～底一部欠 7、25、26
14 土師器 甕	口　復 19.0 高　残 7.9	外面胴部上端 5 本 /1cmのハケのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ。胴部上端ナデで、紐積痕と指頭圧痕残る。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや粗い　砂・赤粗粒微、白・黒・砂細～微粒少 硬質	南底上 17cm 口～胴上端 1/2 周 46、66、106、107、108、154、183、222
15 土師器 壺	口　復 19.3 高　残 9.5	外面口縁部ヨコナデ、胴部上端丁寧なヘラナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、胴部上端ヘラナデ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　赤・白礫～細粒微 やや硬質	南底上 22cm 口～胴上端 1/3 周 103、111、113、114、116、118、120、122
16 土師器 甕	口　復 14.4 高　残 21.5 最大　復 20.6	外面口縁部ヨコナデ、胴部丁寧なナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部ナデで、紐積痕残る。口縁部上半はわずかに内彎する。外面口縁～胴部煤付着。胴部下半被熱により赤変。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　白・赤粗粒微、黒・透明・白細～微粒少 硬質	南底上 16cm 口一部、胴 1/3 周 2、6、8、10、11、13、15、17、23、28、29、35、40、104、312
17 石器 砥石	長　15.7 幅　14.2 厚　3.9 重　870.9	径２～ 8mm の礫を含む石質。深さ約 5mm の太い条線を中心とする縦方向の研磨痕のほか、中央～下半に横および斜めの条線があり、計３方向の研磨痕が残る。右上には発掘調査時の工具によるキズあり。裏面には同様のキズはあるが、研磨痕は認められない。裏面中央にやや表面が荒れた部分があり、砥石を安定させるために調整された可能性がある。	2.5Y7/4　浅黄 粗い 凝灰岩	北東隅底面下 3cm 完形 258
18 須恵器 提瓶		外面は胴部中央から片側にカキ目、もう一方は回転ケズリ。内面胴部ロクロナデ。左端のカキ目が施された部分は接合面から欠損する。	2.5Y5/1　黄灰 やや緻密　白粗～細粒・灰色粗粒微、白微粒少 硬質	中央東部底上 6cmと 3cmが同一個体 胴 1/4 周 296、300、350

第５節　中世の井戸跡

２区 SE-63（第 77 図、写真図版 20）

２区北部の台地東端で、48.5-13.5 と 49.0-13.5 グリッドに位置する。時期不明の SD-5・51 の間にあり、南側に時期不明の土坑 SK-53 ～ 62・67・71・72 がまとまる。重複する遺構はない。1995 年３月の確認調査トレンチで北端を切られている。

平面円形で上部が開く。確認面での径 2.53 × 2.25 m、掘り下げた深さは 0.77 mまでで、調査を実施した 1997 年７月にはこのレベルで既に湧水し、それより下部は調査を実施できなかった。主にローム塊・粒の多い層で埋まるので、人為的に埋め戻したものであろうか。遺物は、同一個体のこね鉢の破片だけである。知多（常滑）窯５～６型式で、13 世紀前半頃の可能性がある。SG1 区の中世遺構と時期が近く、同種の有台こね鉢は SG1 区 SD-37 にもある。



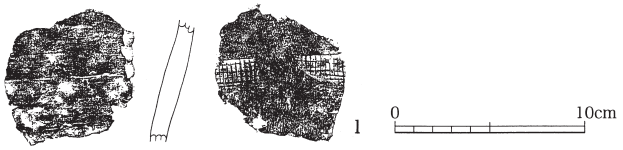
第 77 図　権現山遺跡 2 区 SE-63 遺構・遺物

第 24 表　権現山遺跡 2 区 SE-63 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 陶器 鉢	口　復 33.8 高　残 6.9 底　復 13.8	外面口縁～胴部ロクロナデ、胴部下端・底部ケズリ。貼り付けた高台は剝落している。内面口縁～底部ロクロナデで、底部ほど緑色を帯びた透明釉がかかる。口縁～底部外面の器高は 10.5cmと推定。	5Y7/1　灰白 やや粗い　白礫微、白粗～細粒少 硬質	確認面下 6cm 口・胴下半～底一部 1、2

第６節　遺構外出土の中世遺物

常滑産とみられる陶器甕胴部が１片ある（第 78 図）。採集位置は２区中央部で、時期不明の溝 SD-75・78 の中間付近である。



第 78 図　権現山遺跡 2 区 中世の遺構外出土遺物

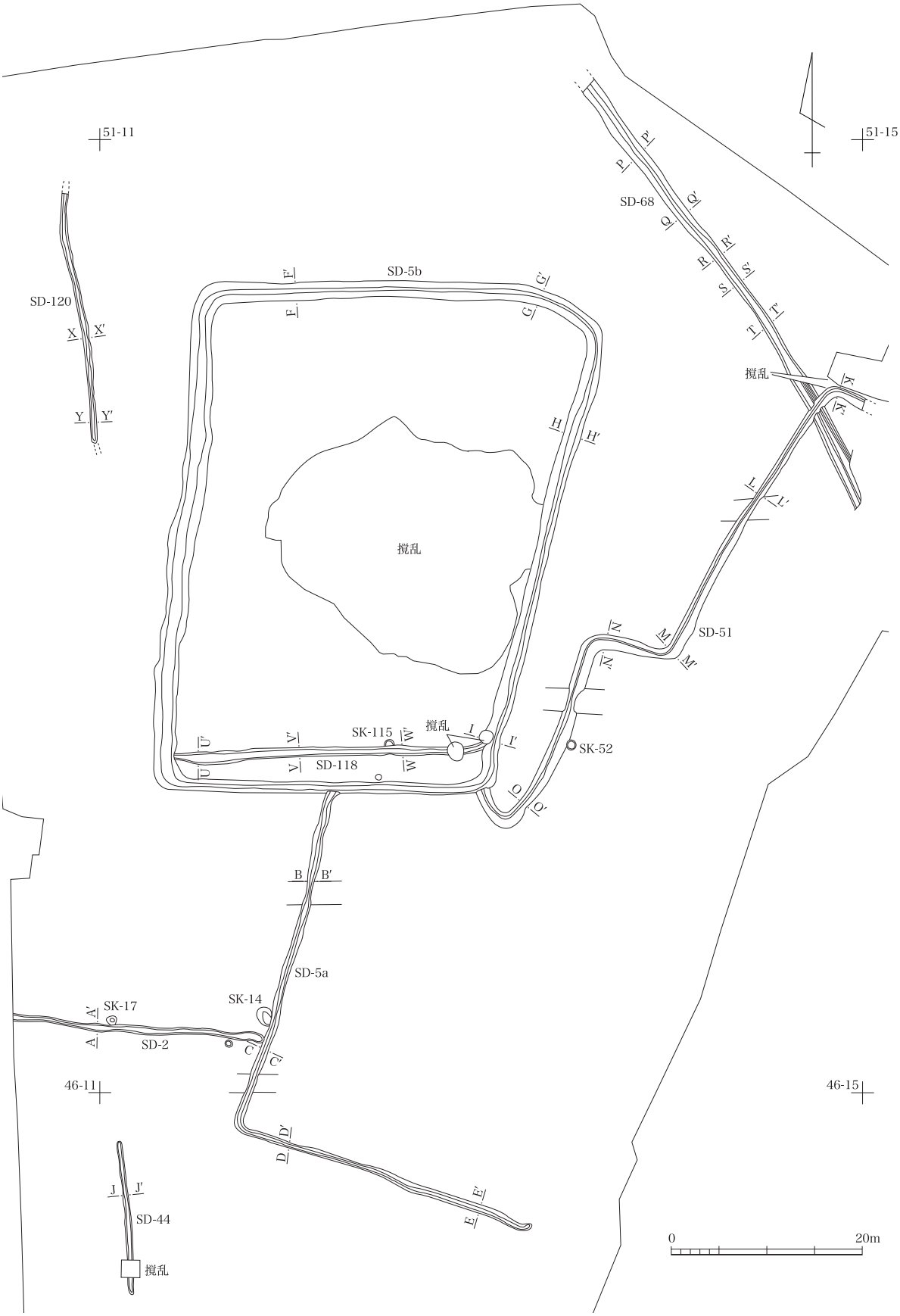
第 25 表　権現山遺跡 2 区 中世の遺構外出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 陶器 甕	高　残 6.4	外面胴部縦方向のナデのち押印文。内面胴部横方向のナデで、指頭圧痕残る。外面はにぶい赤褐色（5YR5/3）。常滑産。	10YR5/3　にぶい黄褐 緻密　白粗～細粒少 硬質	表採 胴部破片 43.5-12.5 表採

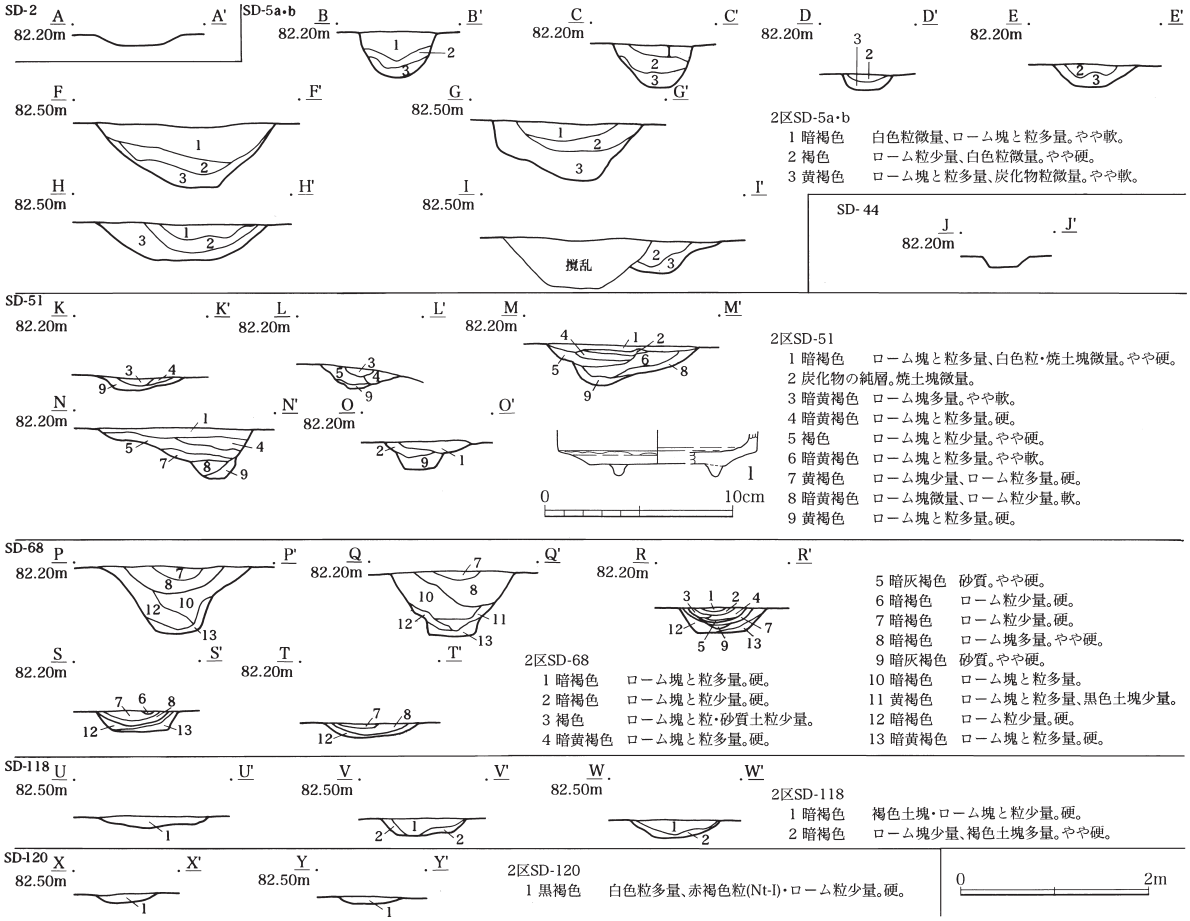
第７節　近世の溝状遺構

２区 SD-5a（第 79・80 図、写真図版 20）

２区北部の X44.0 ～ 47.5 間、Y11.5 ～ 13.0 間にあり、同時期と見られる溝 SD-5b 南辺に SD-5a 北端が連結する。時期不明の溝 SD-2 との重複関係は不明だが、SD-2 が SD-5a と接する位置で終わるので同時に存在していた可能性がある。時期不明の SK-14 に切られていた可能性が高い。Ｌ字状に曲がる溝で、南東



第 79 図　権現山遺跡 2 区 SD-2･5･44･51･68･118･120 (1) 平面図



第 80 図　権現山遺跡 2 区 SD-2・5・44・51・68・118・120 (2) 断面図

端は傾斜面の途中で途切れて確認できなくなる。断面形は深い皿状で、幅 0.6 ～ 1.05m、残存する深さ 0.18 ～ 0.48m、底面幅 0.15 ～ 0.45m。覆土は自然埋没で、上～中層に含む白色粒子が As-B テフラならば 12 世紀以前の遺構になるが、テフラ検出分析は実施していない。SD-5b を介して近世の SD-51 に連結するので、むしろ近世の溝と考えるべきであろう。遺物は古墳中～後期の土師器長胴甕・杯・小形壺 (?) が 5 片混入していた。

２区 SD-5b（第 79・80 図、写真図版 20）

２区北部の X47.5 ～ 50.5 間、Y11.0 ～ 13.5 間にある方形区画溝。南辺と南東隅にそれぞれ連結する SD-5a・51 や、東辺に連結して南部を区画する SD-118 と同時期の遺構であろう。南西部から西辺にかけての部分は現地調査時に完掘していないが、航空写真からみて長方形の区画であったことがわかる。西辺は近代以降の道路が重複していたらしく、車の轍があるので溝を確認しにくい。区画溝の内部の規模は東西 32 ～ 40m、南北 51m、南端を区画する SD-118 よりも北側の部分は南北 47m である。各辺の方位は、北辺と南辺が N-89° -W、東辺が N-14° -E、西辺が N-10° -E。断面は逆台形で溝幅 1.2 ～ 2.7m、溝底面幅 0.3 ～ 0.15m。深さ 0.32 ～ 0.66m。底面標高は東辺と北辺が 81.6 ～ 81.7m でほぼ一定し、南辺（81.8m）と西辺（82.0m）が少し高い。埋土は自然埋没で、SD-5a と同一である。遺物は出土しなかった。

２区 SD-51（第 79・80 図、写真図版 20・21・116）

２区北部の X47.5 ～ 50.0 間、Y12.5 ～ 15.0 間にあり、東は２区東方の低地へ向かって伸びる途中で遺構を確認できなくなっている。時期不明の SD-68 と重複するが、両者の新旧関係は記録が存在せず不明である。時期不明の SK-52 を切る。確認調査時のトレンチに３箇所を削られている。長い部分は北東に向かい、方向は南半部で N-22° 30′ -E、北半部は N-31° -E。長さは 68m 以上。断面は皿状または逆台形で、幅 0.9

～ 1.8m、底面幅 0.15 ～ 0.45m、残存する深さは 0.14 ～ 0.52m。埋土は自然埋没で、焼土･炭･白色粒（テフラ？）を上層に含む。遺物は連房Ⅲ期の美濃産陶器で、17 世紀末～ 18 世紀前半と思われる（第 80 図中段右）。

第 26 表　権現山遺跡 2 区 SD-51 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 陶器 香炉	高　残 1.75 底　復 8.4 最大　復 10.6	美濃産。外面体～底部ロクロナデで、体部には緑がかった透明釉がかかる。底面回転ヘラケズリ後に脚部の粘土塊を指頭で貼り付け、１ヶ所のみ残存。内面体～底部ロクロナデ。	5Y7/3　浅黄 緻密　黒粗粒微、黒細粒少 硬質	 体～底 1/4 周 47-13 グリッド

２区 SD-118（第 79・80 図、写真図版 21）

２区北部の 47.5-11.0 ～ 12.5 グリッドにあり、同時期とみられる SD-5b に東西両端が連結するので、方形区画の南端部を区画する溝である。時期不明の SK-115 を切る。長さ 32.7m の直線状で方位は N-88°-E。幅 0.6 ～ 1.5m、底面幅 0.3 ～ 0.9m、残存する深さは 0.14 ～ 0.2m。底面が東へ傾斜し、標高は西端で 81.92m、東端で 81.84m。埋土は自然埋没で、白色粒などはみられない。遺物は混入品とみられる土師器が２片ある。

第８節　時期不明の溝状遺構

２区 SD-2（第 79・80 図、写真図版 21）

２区北部西半の 46.0-10.5/11.0/11.5 グリッドにまたがり、西側は調査区外へ伸びる。東端が時期不明の SD-5a に接して終わる。重複部がわずかで SD-5a との新旧は不明だが、両者が同時存在していた可能性がある。時期不明の SK-17 の南側に接する。東西方向（N-86°-W）に延びる直線状で、調査した長さは 26.4m。断面は皿状で、確認面での幅は 0.6 ～ 0.9m、底面幅は 0.6 ～ 0.75m、残存する深さは 0.12m。埋没状態やテフラの有無が調査時に記録されていない。それほど古い時期の遺構ではないために土層を記録しなかったのであろう。遺物は出土しなかった。

２区 SD-44（第 79・80 図、写真図版 21）

２区北部の 45.0-11.0 と 45.5-11.0 グリッドにある。重複する遺構はなく、南側の一部が確認調査時のトレンチに切られる。南北方向（N-9°-W）に延びる直線状で断面は皿状。長さ 16.2m、幅 0.45 ～ 0.6m、底面幅は 0.15 ～ 0.3m、残存する深さは 0.11m。埋没状態やテフラの有無が調査時に記録されていない。それほど古い時期の遺構ではないために土層を記録しなかったのであろう。遺物は出土しなかった。

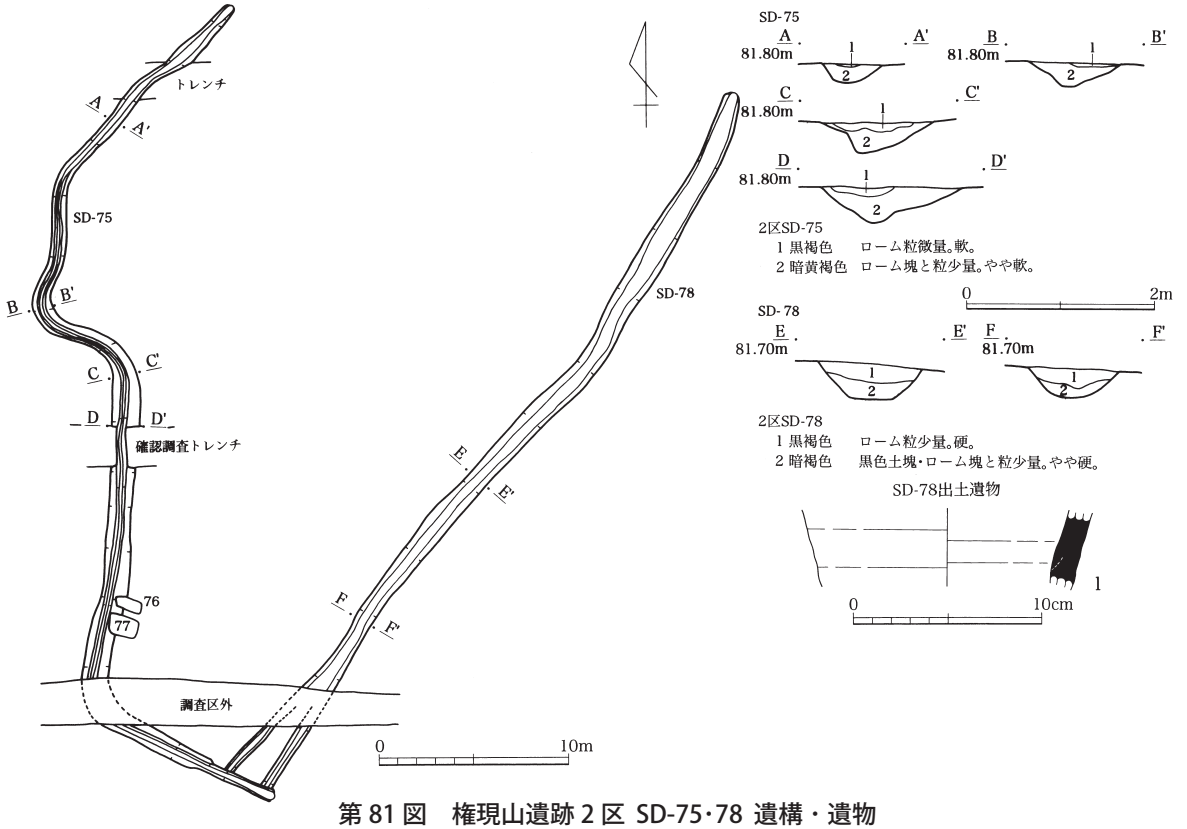
２区 SD-68（第 79・80 図、写真図版 21・22）

２区北東部の 49-14、50-13・14、51-13 グリッドにあり、北西と南東の両端は調査区外まで伸びる。近世の SD-51 と重複するが、両者の新旧関係については記録が残されていない。確認調査時のトレンチに一箇所を削られている。

N-36.5°-W の方位へ伸びる直線状で長さ 52.5m。断面は逆台形で幅 0.9 ～ 1.95m、底面幅 0.3 ～ 0.9m、残存する深さ 0.16 ～ 0.7m。自然埋没と人為的な掘り返しを繰り返し、土層は３期に分けられる（1 ～ 6 層 /7 ～ 9 層 /10 ～ 13 層）。平面図でも２時期分あることがわかる。砂質土を含む点が２区の他の溝と異なる。テフラの層や粒は見られない。遺物は古墳中期の杯または小形壺と見られる体部片が１点あり、混入品であろう。

２区 SD-75（第 81 図、写真図版 22）

２区中央部の 42-11、43-11、44-11 グリッドにまたがる。時期不明の SK-76・77 に切られる。時期不明の SD-78 の南端部が接するので関連する可能性が高い。ただし両者の新旧関係は不明。北部と中央部を確認調査のトレンチに切られている。東に開く不整の弧状で長さ 43.7m。断面は開いた三角形で底部が丸



第 81 図　権現山遺跡 2 区 SD-75･78 遺構・遺物

く、東側よりも西側が急である。幅 0.10 ～ 1.50m、底面幅 0.10 ～ 0.50m、残存する深さは 0.21 ～ 0.38m。自然埋没状で、テフラの層や粒はみられない。遺物は出土しなかった。断面形が近世の SD-51 に似ることなどから、近世以降の可能性がある。

2 区 SD-78（第 81 図、写真図版 22）

2 区中央部の 42-11・12 および 43-12 グリッドにある。南部が 2 条に分かれるので新旧の 2 時期があるのかもしれない。南端の 2 条がそれぞれ時期不明の SD-75 に接するので関連する可能性が高い。ただし両者の新旧関係は不明。北東端は浅くなって終わる。

長さ 44.70m の直線状で等高線に平行して延びる（方位は N-37° -E）。幅 0.50 ～ 1.50m、底面幅 0,20 ～ 1,00m、残存する深さは 0.37 ～ 0.41m。自然埋没状で、テフラの層や粒はみられない。遺物は混入と思われる古墳時代後期の須恵器が 1 片ある。

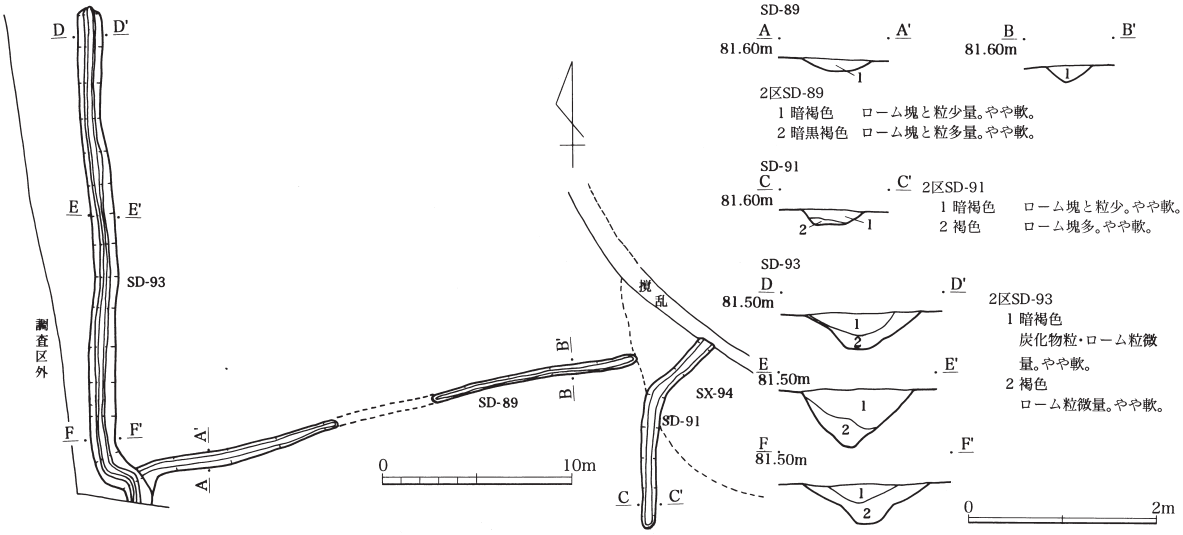
第 27 表　権現山遺跡 2 区 SD-78 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 瓶	高　残 4.3	内外面胴部ロクロナデ。接合面あり。	5Y4/1　灰 緻密　白細粒少 硬質	 胴部破片 43-12

2 区 SD-89（第 82 図）

2 区南部の 37.0-11.0・11.5 および 37.5-12.0・12.5 グリッドにある。間が途切れているので SD-89（東半）および 90（西半）と現地調査時には呼称したが、同一の溝 SD-89 として報告する。南西端が時期不明の SD-93 に切られ、両者が合流するような配置なので近い時期の遺構と考えられる。

東西方向の直線で方位は N-76° -E、長さ 26.9m。断面は浅い皿状で幅 0.40 ～ 1.30m、底面幅 0.10 ～ 0.30m、残存する深さ 0.07 ～ 0.16m。溝底面は東へ傾斜し、底面の標高は西部で 80.2m、東端で 80.0m。埋土は単層で軟らかく、テフラの層や粒は見られない。遺物は混入と思われる土師器小破片（壺甕類の胴部 6 片と杯 3 片）がある。



第 82 図　権現山遺跡 2 区　SD-89・91･93 遺構

２区 SD-91（第 82 図）

２区南部の 37.0-12.5 と 37.5-12.5 グリッドにあり、古墳時代の遺物出土地点 SX-94 を切る。北東部は南端は低地に向かう傾斜地の途中で浅くなり、北端は最近の撹乱溝に切られて終わる。「く」の字形に曲がる短い溝で南半部の方位は N-0° -E･W。長さ 10.3m。断面は皿状で幅 0.40 ～ 1.30m､底面幅 0.10 ～ 0.30m、残存する深さ 0.07 ～ 0.16m。溝底面は北東へ傾斜し、標高は南部で 81.15m、北東端で 80.8m。埋土は自然埋没かもしれないが不確実で、テフラの層や粒は見られない。遺物は出土しなかった。

２区 SD-93（第 82 図）

２区南部の 37.0-11.0 から 38.0-11.5 グリッドまでの間にある。北端は撹乱に切られて消滅し、南端は屈曲して時期不明の SD-89 を切った後に調査区外へ伸びる。N-20° -W の方向に延びる直線状で長さ 26.50m、断面は底部が一段深くなる形の逆台形または浅い三角形で、西壁が東壁よりも急になる。幅 1.10 ～ 1.60m、底面幅 0.10 ～ 0.40m、深さ 0,40 ～ 0,60m。自然埋没状の軟らかい土層からみておそらく近世以降の可能性が高い。テフラの層や粒は見られない。古墳中期前～中葉の土師器が数片混入していた。

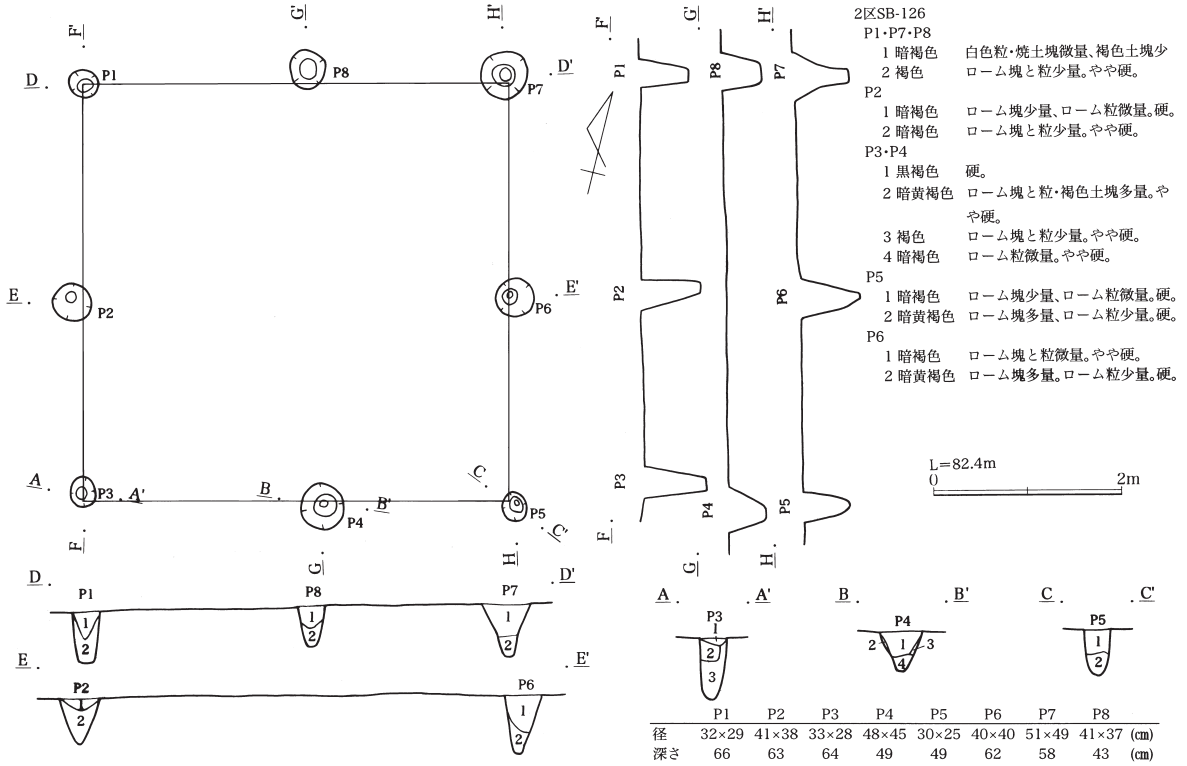
２区 SD-120（第 79・80 図、写真図版 22）

２区北西部の 49.5-10.5 から 50.5-10.5 グリッドにあり、南北両端は確認面よりも浅くなって終わる。重複する遺構はない。N-7° -W の方位に延びる直線状で長さ 26.4m。断面は皿状で幅 0.3 ～ 0.9m､底面幅 0.15 ～ 0.3m､残存する深さ 0.08 ～ 0.1m。埋土は単層で硬く､白色粒(テフラ？)が多い。遺物は出土しなかった。

第９節　時期不明の掘立柱建物跡

２区 SB-126（第 83 図、写真図版 22）

２区北寄りの台地平坦面で、47.0-10.5、47.5-10.5 グリッド所在。古墳時代と推定される SB-3･4（南側）と SB-121・122（北側）の間にあるが、主軸が揃わない。重複する遺構はない。桁行・梁行ともに２間の側柱建物である。南北長（4.32 ～ 4.58m）と東西長（4.47 ～ 4.64m）がほぼ等しい。P4 と P8 が少し外に出るので南北棟の可能性があり、主軸方位は GN-15° -W。埋土には柱痕が残らないので抜き取った可能性がある。柱根の当たりは認められない。遺物は古墳後期かと思われる土師器壺甕類破片のみで、遺構の時期は限定できない。周囲にある SB-3・4・121・122 と同じく古墳時代と推定することも可能だが、明らかにできない。

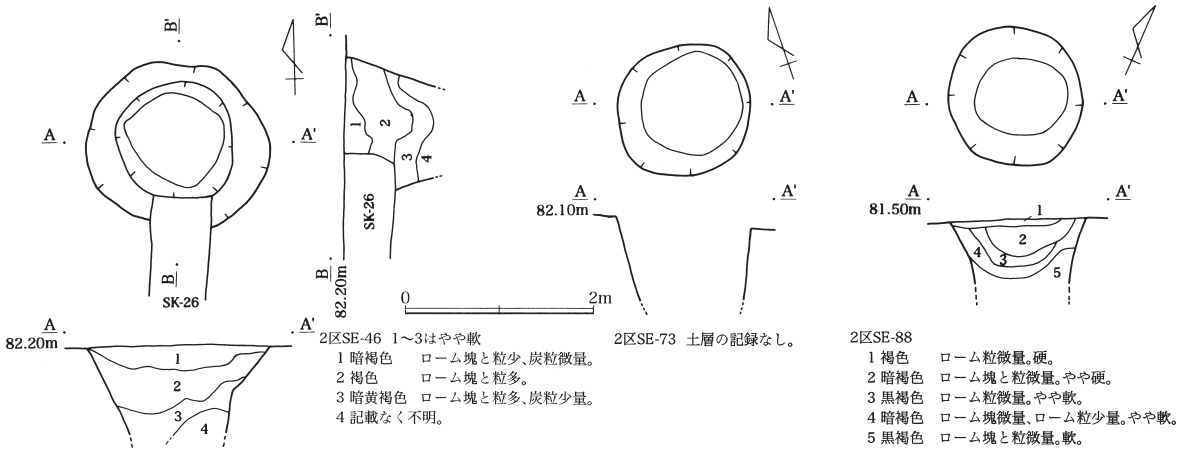


第 83 図　権現山遺跡 2 区 SB-126 遺構

第 10 節　時期不明の井戸跡

2 区 SE-46（第 84 図、写真図版 22）

2 区北部の台地東端で、46.5-12.0 グリッドに位置する。時期不明の SK-26 に南側上部を切られる。平面円形で上部が開き、東壁上半はさらに外傾する。確認面での径 1.93 × 1.83m、掘り下げた深さは 0.95m で、調査した 1997 年 7 月末にはこのレベルで既に湧水していて、それより下部は調査を実施できなかった。埋土は東側から流入し、やや軟らかい。遺物は、金色雲母と石英が胎土中に目立つ陶器甕（？）の小破片だけで、近世以降のものかと見られる。近世またはそれ以降の井戸であろう。



第 84 図　権現山遺跡 2 区 SE-46・73・88 遺構

２区 SE-73（第 84 図、写真図版 22）

２区北部の台地東端で、50.0-14.0 グリッドに位置する。時期不明の SD-5・68 の間にあり、南 24m には中世の井戸 SE-63 がある。重複する遺構はない。平面円形で確認面での径は 1.50 × 1.36m。調査時の写真によると深さ 1m 程度まで掘り下げ、それより下部は調査を実施していない。調査した 1997 年７月にはこのレベルで既に湧水していた。２区にある他の井戸は上部が外に開くが、この井戸はほぼ円筒形である。土層断面の写真や図が残されておらず、埋土の詳細は残念ながら不明である。遺物は出土しなかった。

２区 SE-88（第 84 図、写真図版 22）

２区南端付近の台地上で、37.5-11.5 グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面円形で、形状は SE-46 や 63 に似て上部が開く。確認面での径は 1.51 × 1.43 m。0.71 mまで掘り下げ、それより下部は調査を実施できなかった。調査時に湧水の有無は記録されていない。埋土はレンズ状堆積で、確認面付近が硬く、他は軟らかい。遺物は出土しなかった。

第 11 節　時期不明の土坑（第 85 ～ 88 図、写真図版 23 ～ 31）

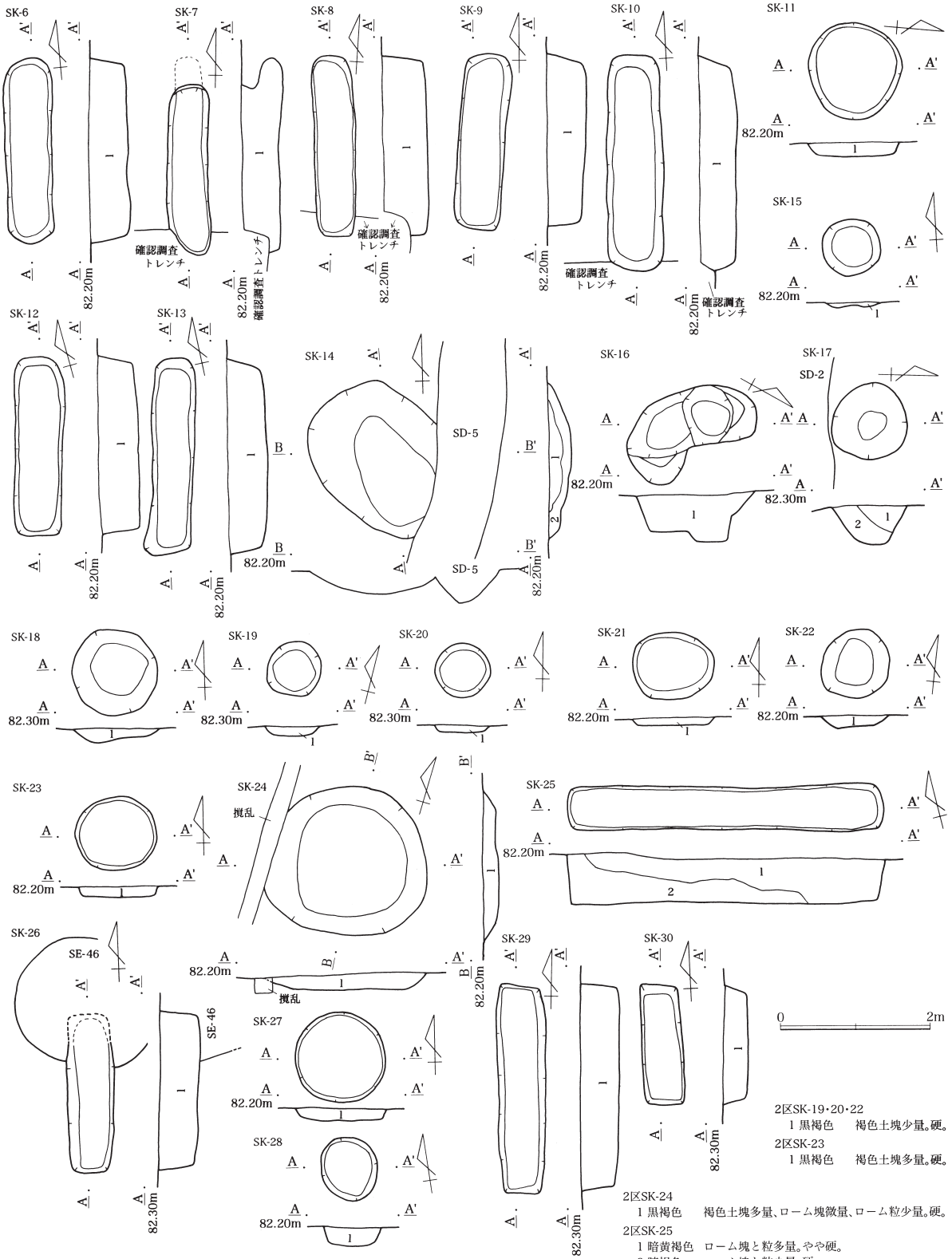
時期不明の土坑は２区で 103 基を調査した。長方形土坑の多くは「イモ穴」と通称される近代以降の農業関連土坑と推定される。

円形土坑は、時代が古い可能性のある SK-17 や、古墳時代の可能性がある土坑（SK-27・28・32、40 ～ 43・47 ～ 50、52 ～ 55、61・62・64、100 ～ 103・105 ～ 112・117・119・124・125・129 ～ 131）も含む。ただし、確実な時期がわかるものはない。白色粒子が古墳後期始めに降下した Hr-FA であれば、それを含む土坑は古墳後期の可能性があるといえる。しかし、SK-132・133 のようにイモ穴状の長方形土坑で白色粒と焼土を含む例もあるので、単純には決められない。

古墳中・後期に多い円筒形土坑を含むかもしれないが、これも確実ではない。円筒形土坑は大形の例が多いが、２区では径 1.5m を越える円形土坑がなく、比較的大きな SK-110 や 129 も円筒形土坑と呼ぶには壁面の垂直度が不足している。

第 28 表 権現山遺跡 2 区 時期不明の土坑

遺構名	グリッド	平面形	重複関係	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	中軸	覆土
SK-6	46.0-12.0	長方形	重複なし	2.45	0.58	0.54	N-5°-E	人為堆積
南北方向の長方形土坑。中央西側上半を撹乱させた部分に地山礫露出。土坑内にも礫少量あり。SK-6 ～ 10 は東西方向に並び、互いに関連するものと見られる。								
SK-7	46.0-12.5	長方形	重複なし	2.28	0.52	0.55	N-3°-W	人為堆積
南北方向の長方形土坑。北端に抉り込む部分あり。周囲の SK-6・8 等と関連するものと見られる。南端は確認調査時のトレンチに切られる。								
SK-8	46.0-12.5	長方形	重複なし	2.40	0.54	0.60	N-6°-W	人為堆積
南北方向の長方形土坑。周囲の SK-6・7 等と関連するものと見られる。覆土は SK-6 と同じ。南端は確認調査時のトレンチに切られる。								
SK-9	46.0-12.0	長方形	重複なし	2.35	0.60	0.53	N-1°-E	人為堆積
南北方向の長方形土坑。周囲の SK-6・7 等と関連するものと見られる。覆土は SK-6 と同じ。								
SK-10	46.0-13.0	長方形	重複なし	2.85	0.68	0.53	N-1°-E	人為堆積
南北方向の長方形土坑。周囲の SK-6・7 等と関連するものと見られる。底面に地山礫露出。覆土は SK-12・13 と同じ。南端が確認調査時のトレンチに切られる。								
SK-11	45.5-12.0	円形	重複なし	1.28	1.21	0.18		
円形土坑。底面が広く平坦。								
SK-12	45.5-12.5	長方形	重複なし	2.37	0.61	0.52	N-16°-E	人為堆積
南北方向の長方形土坑。底面に地山礫露出。覆土は SK-10・13 に同じ。遺構のあり方は SK-13 と平行しており、関連があるように見られる。								
SK-13	45.5-13.0	長方形	重複なし	2.62	0.51	0.54	N-13°-E	人為堆積
南北方向の長方形土坑。底面に地山礫がわずかに露出。覆土は SK-10・12 と同じ。SK-12 と平行しており関連があるように見える。								
SK-14	46.0-11.5	楕円形	SD-5 を切る可能性が高い	2.20	1.62	0.30	N-43°-W	
楕円形土坑。SD-5 と重複。平面図では SD-5 重複部を描いていないが、SK-14 を先に調査しているので、時期不明の溝 SD-5 を切る可能性が高い。								
SK-15	46.0-11.5	円形	重複なし	0.77	0.75	0.06		
浅い小円形土坑。SD-2 に近接する。								
SK-16	46.5-11.0	不整楕円形	重複なし	1.76	0.75	0.68	N-44°-W	人為堆積
不整楕円形土坑。土坑２基の重複のようにも見えるが、土層から見て１基の土坑。いびつな形状で底面も段差あり。								
SK-17	46.0-11.0	円形	重複なし	1.02	0.99	0.52		
深い円形土坑。覆土は硬いので古い時期かもしれない。写真では時期不明の溝 SD-2 と重複しているようにも見えるが、図では接しているのみ。								



2区SK-6・7・8・9
　1 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。硬。

2区SK-10・12・13
　1 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。硬。

2区SK-11
　1 暗褐色　　ローム粒微量。やや硬。

2区SK-14
　1 暗褐色　　褐色土塊少量。硬。
　2 黄褐色　　ローム粒と塊多量。軟。

2区SK-15
　1 黒褐色　　ローム塊微量、褐色土塊少量。硬。

2区SK-16
　1 暗黄褐色　ローム塊多量。

2区SK-17
　1 黒褐色　　硬。
　2 暗褐色　　ローム粒少量。硬。

2区SK-18・21
　1 暗褐色　　黒色土塊少量。硬。

2区SK-19・20・22
　1 黒褐色　　褐色土塊少量。硬。

2区SK-23
　1 黒褐色　　褐色土塊多量。硬。

2区SK-24
　1 黒褐色　　褐色土塊多量、ローム塊微量、ローム粒少量。硬。

2区SK-25
　1 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。
　2 暗褐色　　ローム塊と粒少量。硬。

2区SK-26
　1 暗黄褐色　ローム塊と粒・褐色土塊多量。硬。

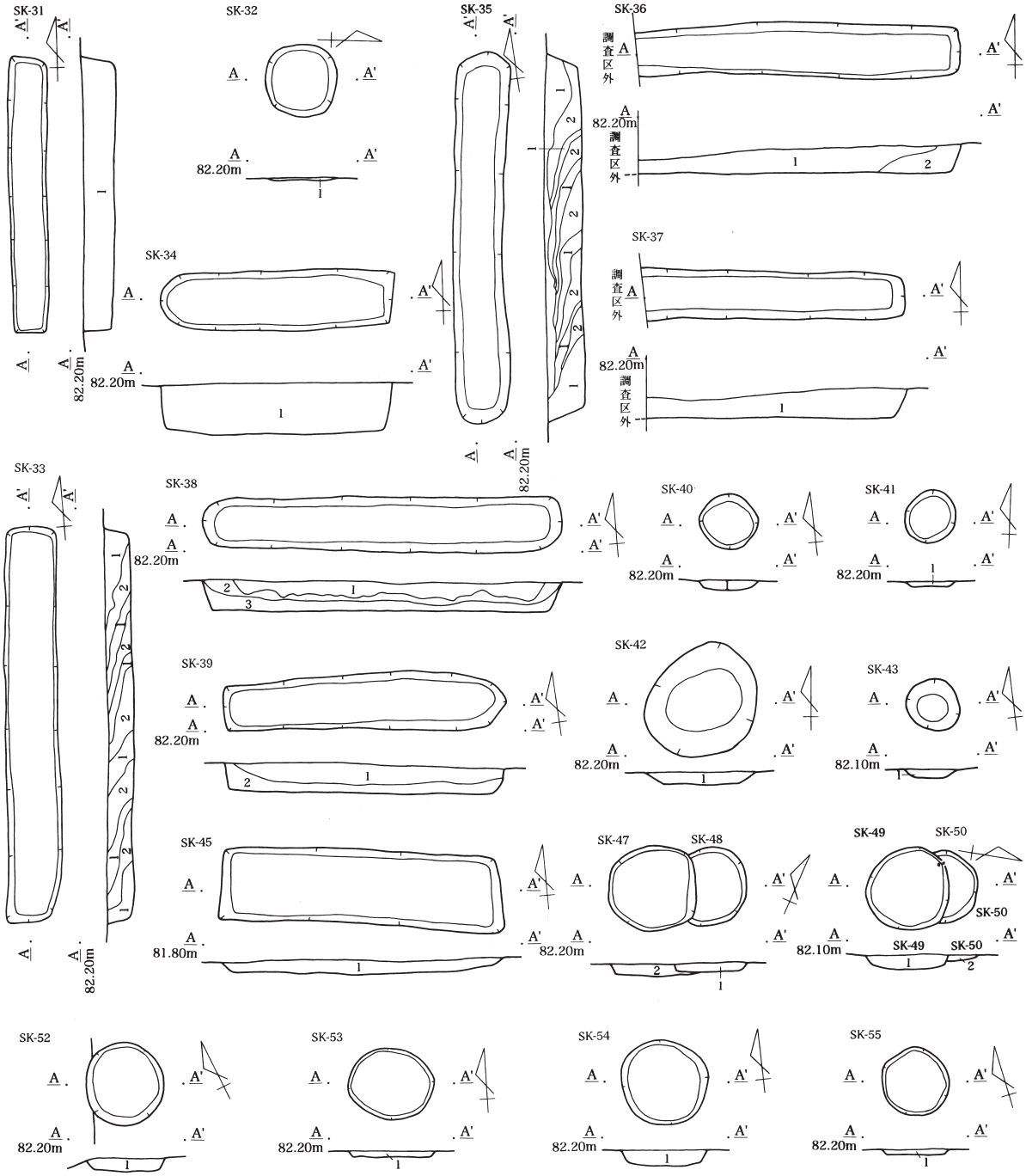
2区SK-27・28
　1 暗褐色　　白色粒・褐色土塊少量。硬。

2区SK-29
　1 暗黄褐色　ローム塊と粒多量、褐色土塊少量。硬。

2区SK-30
　1 暗黄褐色　ローム塊多量、ローム粒・褐色土塊少量。硬。

第 85 図　権現山遺跡 2 区　時期不明の土坑 (1) 遺構

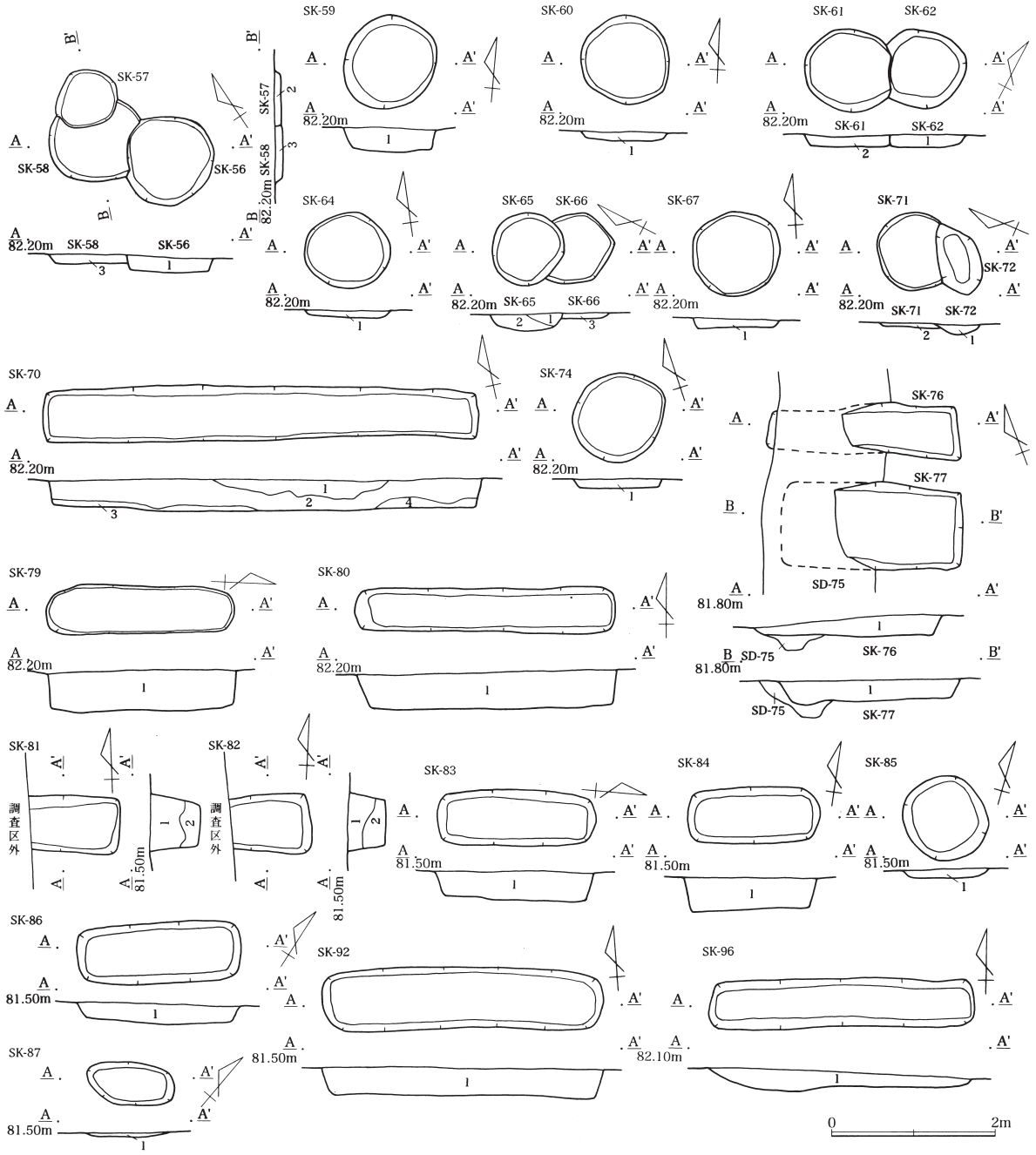
SK-18	46.0-10.5・11.0	円形	重複なし	1.15	1.13	0.19		SK-21 と類似
円形土坑。底面はやや凹凸あり。								
SK-19	46.0-10.5	円形	重複なし	0.77	0.75	0.14		SK-20･22･23 と類似
小円形土坑。周囲に SK-20・21･22 等の小円形土坑が多い。								
SK-20	46.0-10.5	円形	重複なし	0.74	0.70	0.10		SK-19･22･23 と類似
小円形土坑。周囲に SK-19・21･22 等の小円形土坑が多い。								
SK-21	46.0-10.5	楕円形	重複なし	1.08	0.90	0.10	N-88°-W	SK-18 と類似
楕円形土坑。周囲に SK-19・20・22 等の小円形土坑が多い。								
SK-22	46.0-10.5	円形	重複なし	0.94	0.88	0.16		SK-19・23 と類似
小円形土坑。周囲に SK-19・20・21 等の小円形土坑が多い。								
SK-23	46.5-10.5	円形	重複なし	1.08	0.96	0.14		SK-19・22 と類似
円形土坑。大きく見ると、SK-17~22 等の円形土坑のまとまりの一部となろうか。								
SK-24	46.0-10.5	円形	重複なし	2.06	2.00	0.22		
大きな円形土坑。西端は塩ビ管入りの農業用水溝に切られる。								
SK-25	46.5-12.5・13.0	長方形	重複なし	4.20	0.54	0.69	N-75°-W	人為堆積
東西方向の長い長方形土坑。南半は確認調査時のトレンチに浅く切られる。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）か。								
SK-26	46.5-12.0	長方形	SE-46 を切る	2.10	0.62	0.57	N-0°	人為堆積
南北方向の長方形土坑。時期不明の井戸 SE-46 より新しい。								
SK-27	46.5-13.0	円形	重複なし	1.20		0.17		SK-28 と類似
円形土坑。遺物は小破片 2 点のみ。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。								
SK-28	46.5-13.0	円形		0.84	0.74	0.15		SK-27 と類似
小円形土坑。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。								
SK-29	47.0-12.0	長方形	重複なし	2.79	0.62	0.52	N-2°-W	人為堆積
南北に長い長方形土坑。ごく新しい溝状の掘り込み（塩ビ管入りの溝か？）に切られる。SK-30・31 と関連するか。								
SK-30	47.0-12.0	長方形	重複なし	1.62	0.52	0.34	N-0°	人為堆積
南北方向の長方形土坑。SK-31 と近接。SK-29・31 と関連するか。								
SK-31	47.0-12.0	長方形	重複なし	3.49	0.43	0.43	N-1°-W	人為堆積
南北方向の長方形土坑。人為堆積と見られる。SK-30 と近接。ごく新しい溝状の掘り込み（塩ビ管入りの溝か？）に切られる。SK-29・30 と関連するか。								
SK-32	46.0-12.0	円形	重複なし	0.90	0.88	0.04		自然堆積
円形土坑。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。								
SK-33	45.0-11.5、45.5-11.5	長方形	重複なし	4.84	0.64	0.34	N-5°-W	人為堆積
南北方向のきわめて長い長方形土坑。南方にある SK-35 と類似するように見える。SK-33・35 ～ 39 はすべて長く、あり方が類似するため関連する土坑か？								
SK-34	45.5-10.5	長方形	重複なし	2.84	0.74	0.64	N-89°-W	人為堆積
東西方向の長方形土坑。図面から人為堆積と見られる。								
SK-35	44.0-11.0、44.5-11.0	長方形	重複なし	4.58	0.60	0.44	N-10°-E	人為堆積
南北方向のきわめて長い長方形土坑。北方にある SK-33 と類似するように見える。								
SK-36	44.0-10.5	長方形	重複なし	4.00	0.66	0.36	N-88.5°-E	人為堆積
東西方向のきわめて長い長方形土坑。西側は調査区外。西寄りの一部が塩ビ管入りの溝に切られる。北東にある SK-33･35 と関連するものか。SK-36 ～ 39 は方位が揃う。								
SK-37	44.0-10.5	長方形	重複なし	3.20	0.60	0.38	N-87.5°-E	人為堆積
東西方向の長方形土坑。SK-36 と平行する。西側は調査区外。西寄りの一部が塩ビ管入りの溝に切られる。SK-36 ～ 39 は方位が揃う。								
SK-38	44.0-10.5・11.0	長方形	重複なし	4.42	0.68	0.36	N-84.5°-W	人為堆積
東西方向のきわめて長い長方形土坑。SK-36 ～ 39 は方位が揃う。								
SK-39	44.0-11.0	長方形	重複なし	3.50	0.72	0.34	N-81°-W	人為堆積
東西方向の長方形土坑。SK-36 ～ 39 は方位が揃う。								
SK-40	45.5-11.0	円形	重複なし	0.72	0.65	0.12		
小円形土坑。近くに SK-41 があり、関連する遺構と見られる。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。								
SK-41	45.5-11.0	円形	重複なし	0.65	0.59	0.07		SK-42 と類似
小円形土坑。近くに SK-40 があり、関連する遺構と見られる。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。								
SK-42	45.5-10.5	楕円形	重複なし	1.47	1.27	0.17	N-66°-E	SK-41 と類似
楕円形土坑。SK-40･41 が近くにあり、これらと関連する遺構の可能性もある。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。								
SK-43	45.0-11.0	円形	重複なし	0.67	0.62	0.11		
小円形土坑。SK-40・41 等と関連する遺構の可能性もある。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。								
SK-45	43.5-11.0	長方形	重複なし	3.51	0.91	0.21	N-9°-W	人為堆積
東西方向の長方形土坑。								
SK-47	47.5-13.0	円形	SK-48 に切られる	1.15	1.05	0.17		
円形土坑。やや広い範囲に SK-47 ～ 50・52・74 といった同じ大きさ位の円形土坑がまとまる。確認調査時のトレンチに浅く削られる。古墳時代の可能性もある。								
SK-48	47.5-13.0	円形	SK-47 を切る	1.01	0.93	0.12		
円形土坑。確認調査時のトレンチに浅く削られる。古墳時代の可能性もある。								
SK-49	47.5-13.5	円形	SK-50 を切る	1.05	1.02	0.18		
円形土坑。遺物は時期不詳の土師器 2 片のみ。確認調査時のトレンチに浅く削られる。古墳時代の可能性もある。								
SK-50	47.5-13.5	円形	SK-49 に切られる	0.90	不明	0.07		
SK-49 に大きく切られるため半分ほどしか残っていないが、おそらく SK-49 によく似た円形土坑と推定される。確認調査時のトレンチに浅く削られる。古墳時代の可能性もある。								
SK-52	47.5-13.0・13.5	円形	SD-51 に切られる	1.01	0.96	0.18		
円形土坑。SK-47 ～ 50・52・74 といった同じ大きさ位の円形土坑が集中している部分のうちの 1 つ。古墳時代の可能性もある。近世の溝 SD-51 に切られる。								
SK-53	48.0-13.5	楕円形	重複なし	1.04	0.88	0.08	N-83°-W	SK-55 と同一
円形土坑。円形土坑集中部にある。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。								



2区SK-31
　1 暗黄褐色　ローム塊と粒・褐色土塊多量。硬。
2区SK-32
　1 黒褐色　白色粒少量。硬。
2区SK-33
　1 暗黄褐色　ローム塊と粒・褐色土塊多量。硬。
　2 暗褐色　ローム塊と粒少量。やや硬。
2区SK-34
　1 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。硬。
2区SK-35
　1 暗黄褐色　ローム塊と粒・褐色土塊多量。硬。
　2 暗褐色　ローム塊と粒少量。やや硬。
2区SK-36
　1 暗黄褐色　ローム塊と粒・褐色土塊多量。硬。
　2 暗褐色　ローム塊・褐色土塊少量。ローム粒微量。やや硬。
2区SK-37
　1 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。硬。
2区SK-38
　1 暗黄褐色　ローム塊と粒・褐色土塊多量。硬。
　2 黒褐色　ローム塊と粒微量。やや硬。
　3 暗褐色　ローム塊微量、褐色土塊少量。硬。
2区SK-39
　1 暗黄褐色　ローム塊と粒・褐色土塊多量。硬。
　2 暗褐色　ローム塊と粒・褐色土塊少量。やや硬。
2区SK-40
　1 黒褐色　白色粒微量、褐色土塊少量。やや硬。
2区SK-41
　1 黒褐色　白色粒微量、褐色土塊多量。硬。
2区SK-42
　1 黒褐色　白色粒微量、褐色土塊多量。硬。
2区SK-43
　1 黒褐色　白色粒・褐色土塊多量、炭化物粒・焼土塊微量。硬。
2区SK-45
　1 暗褐色　褐色土塊少量、ローム塊と粒多量。やや硬。
2区SK-47・48
　1 暗褐色　ローム塊と粒・褐色土塊少量。やや硬。(SK-48覆土)
　2 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。硬。(SK-47覆土)
2区SK-49・50
　1 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。硬。(SK-49覆土)
　2 暗褐色　ローム塊少量、ローム粒多量。やや硬。(SK-50覆土)
2区SK-52
　1 暗褐色　ローム塊・褐色土塊多量。硬。
2区SK-53
　1 黒色　ローム粒・白色粒微量。硬。
2区SK-54
　1 暗褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。
2区SK-55
　1 黒色　ローム粒・白色粒微量。硬。

第 86 図　権現山遺跡 2 区　時期不明の土坑 (2) 遺構

SK-54	48.0-13.5、48.5-13.5	円形	重複なし	1.07	1.03	0.20	
円形土坑。円形土坑集中部にある。ハの字に開く円孔がある高杯１片出土。赤味がありやや厚手で古墳時代中期か。但し、SK-54 に伴うかどうかは不明。古墳時代の可能性もある。							
SK-55	48.5-13.5	円形	重複なし	0.84	0.80	0.06	SK-53 と同一
円形土坑。円形土坑集中部にある。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。							
SK-56	48.0-13.5	円形	SK-58 を切る	1.13	1.07	0.18	
円形土坑。円形土坑集中部にある。							
SK-57	48.0-13.5、48.5-13.5	円形	SK-58 を切る	0.76	0.70	0.08	
円形土坑。円形土坑集中部にある。							
SK-58	48.0-13.5、48.5-13.5	楕円形	SK-56・57 に切られる	1.15	不明	0.12	
円形土坑。円形土坑集中部にある。							
SK-59	48.5-13.5	円形	重複なし	1.16	1.06	0.31	
円形土坑。円形土坑集中部にある。							
SK-60	48.5-13.5	円形	重複なし	1.08	1.06	0.11	
円形土坑。円形土坑集中部にある。							
SK-61	48.5-13.5	円形	SK-62 に切られる	不明	0.99	0.17	
円形土坑。円形土坑集中部にある。高杯脚下半１片出土。１孔あり。外面はハケ→ミガキ、内面はハケ→ヨコナデで、前期に多い調整のように見られる。胎土は明るい褐色。焼成は良好で粗砂粒が多い。遺構に伴うかどうかは不明だが、このような土器はほとんど出土していないことから、古墳時代の土坑の可能性もある。							
SK-62	48.5-13.5・14.0	円形	SK-61 を切る	1.00	0.95	0.15	
円形土坑集中部にある円形土坑。甕胴部、別個体の壺胴部と口縁部、高杯口縁部各１片出土。中期の土師器に見えるが、遺構に伴うかどうかは不詳。古墳時代の可能性もある。							
SK-64	49.5-13.5・14.0	円形	重複なし	1.04	0.90	0.10	
円形土坑。SK-64・65・66 の３基がまとまる。大きさは SK-61・62 等の円形土坑集中部の土坑と同じ位。古墳時代の可能性もある。							
SK-65	49.5-14.0	円形	SK-66 を切る	0.90	0.86	0.20	
円形土坑。SK-64・65・66 の３基のまとまりのうちの１つ。							
SK-66	49.5-14.0	円形	SK-65 に切られる	0.84	0.60	0.06	
円形土坑。SK-64・65・66 の３基のまとまりのうちの１つ。							
SK-67	48.5-13.5・14.0	円形	重複なし	1.04	1.06	0.14	
円形土坑。円形土坑集中部にある。							
SK-70	49.5-14.0	長方形	重複なし	5.28	0.66	0.38	N-77°-W　人為堆積
東西方向のきわめて長い長方形土坑。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）か。							
SK-71	48.5-14.0	円形	SK-72 に切られる	0.96	0.66	0.06	
円形土坑。円形土坑集中部にある。							
SK-72	48.5-14.0	楕円形	SK-71 を切る	0.90	0.50	0.12	N-48°-E
楕円形土坑。円形土坑集中部にある。写真では不整形に見え、細く深く続くような小さい穴が多量にあることから、木の根の撹乱を土坑として見誤った可能性もある。							
SK-74	47.5-13.0	円形	重複なし	1.16	1.06	0.12	
円形土坑。円形土坑集中部（SK-47 ～ 50・52）の近くにある。							
SK-76	42.5-11.0	長方形	SD-75 を切る	2.32	0.50	0.24	N-65°-W
東西方向の長方形土坑。SK-77 と平行する。時期不明の溝 SD-75 を切る。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）か。							
SK-77	42.5-11.0	長方形	SD-75 を切る	2.22	1.04	0.24	N-66°-W
東西方向の長方形土坑。SK-76 と平行する。時期不明の溝 SD-75 を切る。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）か。							
SK-79	47.0-10.5	長方形	SB-4 を切る	2.28	0.56	0.50	N-0°　人為堆積
南北方向の長方形土坑。SB-4 の北西柱穴を切ると見られる。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）か。							
SK-80	47.0-11.5	長方形	重複なし	3.16	0.52	0.46	N-89°-W　人為堆積
東西方向の長方形土坑。							
SK-81	37.0-11.0	長方形と推定	重複なし	不明	0.65	0.61	N-88°-W　人為堆積
東西方向の長方形土坑。SK-82 と平行する。西側は調査区外。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）か。							
SK-82	37.0-11.0、37.5-11.0	長方形と推定	重複なし	不明	0.61	0.47	N-87°-W　人為堆積
東西方向の長方形土坑。SK-81 と平行する。西側は調査区外。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）か。							
SK-83	37.5-11.0	長方形	重複なし	1.94	0.59	0.37	N-5°-W　人為堆積
南北方向の長方形土坑。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）か。							
SK-84	37.5-12.0・12.5	長方形	重複なし	1.60	0.62	0.42	N-81°-E　人為堆積
東西方向の短い長方形土坑。SK-92 と近接。							
SK-85	37.0-11.5、37.5-11.5	円形	重複なし	1.06	0.98	0.12	
円形土坑。調査区南端にある。付近に他の円形土坑はない。							
SK-86	37.5-11.5	長方形	重複なし	1.99	0.67	0.27	N-56°-E
東西方向（やや斜め）の長方形土坑。中軸線が SK-87 と近い。覆土の記述がわずかなので、人為堆積かどうかは不明。							
SK-87	37.5-11.5	長方形	重複なし	1.07	0.47	0.05	N-56°-E
浅い楕円形土坑。中軸が近い SK-86 と同じライン上にのるものか。本来は長方形土坑で、削られて深いところだけが残ったものかもしれない。							
SK-92	37.5-12.0・12.5	長方形	重複なし	3.42	0.73	0.40	N-83°-W　人為堆積
東西方向の長方形土坑。SK-84 と近接する。							
SK-96	46.0-12.0・12.5	長方形	重複なし	3.22	0.56	0.29	N-89°-E　人為堆積
東西方向の長方形土坑。周囲には南北方向の長方形土坑はあるが、東西方向のものはない。確認調査時のトレンチに全体が削られる。							
SK-97	47.0-12.5	円形	重複なし	1.22	1.11	0.28	
円形土坑。付近には他に円形土坑はない。写真で見る限りでは断面は鍋底状で壁は斜めであるため、古墳時代に見られる円筒形土坑とは少し違うように見える。							
SK-100	50.0-13.5	円形	重複なし	0.81	0.76	0.09	
円形土坑。やや離れている SK-101・102 等の円形土坑集中部の１つかもしれない。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。							



2区SK-56・57・58
- 1 褐色　ローム塊と粒多量。硬。(SK-56覆土)
- 2 黒色　ローム塊・褐色土塊微量、ローム粒多量。硬。(SK-57覆土)
- 3 暗褐色　ローム塊・赤褐色粒(Nt-I)微量、ローム粒少量。硬。(SK-58覆土)

2区SK-59
- 1 暗褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。

2区SK-60
- 1 暗褐色　ローム塊と粒少量。やや硬。

2区SK-61・62
- 1 暗褐色　ローム塊少量、ローム粒多量。やや硬。(SK-62覆土)
- 2 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。硬。(SK-61覆土)

2区SK-64
- 1 暗褐色　ローム塊と粒多量。硬。

2区SK-65・66
- 1 褐色　ローム塊と粒少量。硬。(SK-65覆土)
- 2 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。(SK-65覆土)
- 3 褐色　ローム粒微量。硬。(SK-66覆土)

2区SK-67
- 1 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。

2区SK-70
- 1 黄褐色　ローム塊と粒多量。硬。
- 2 黄褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。
- 3 黄褐色　ローム塊主体。やや軟。
- 4 暗褐色　ローム塊と粒少量。軟。

2区SK-71・72
- 1 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。軟。(SK-72覆土)
- 2 暗褐色　ローム塊と粒少量。硬。(SK-71覆土)

2区SK-74
- 1 暗褐色　ローム塊微量、ローム粒・褐色土塊少量。やや硬。

2区SK-76
- 1 暗褐色　ローム塊と粒多量。軟。

2区SK-77
- 1 暗褐色　ローム塊と粒少量。やや軟。

2区SK-79
- 1 暗褐色　ローム粒微量、ローム塊少量。硬。

2区SK-80
- 1 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。やや軟。

2区SK-81
- 1 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。やや軟。
- 2 暗黒褐色　記載なく不明。

2区SK-82
- 1 暗黄褐色　ローム塊少量、ローム粒多量。やや軟。
- 2 暗黒褐色　記載なく不明。

2区SK-83
- 1 暗褐色　ローム塊微量、ローム粒少量。やや軟。

2区SK-84
- 1 黄褐色　ローム塊と粒多量。

2区SK-85
- 1 暗黒褐色　やや軟。

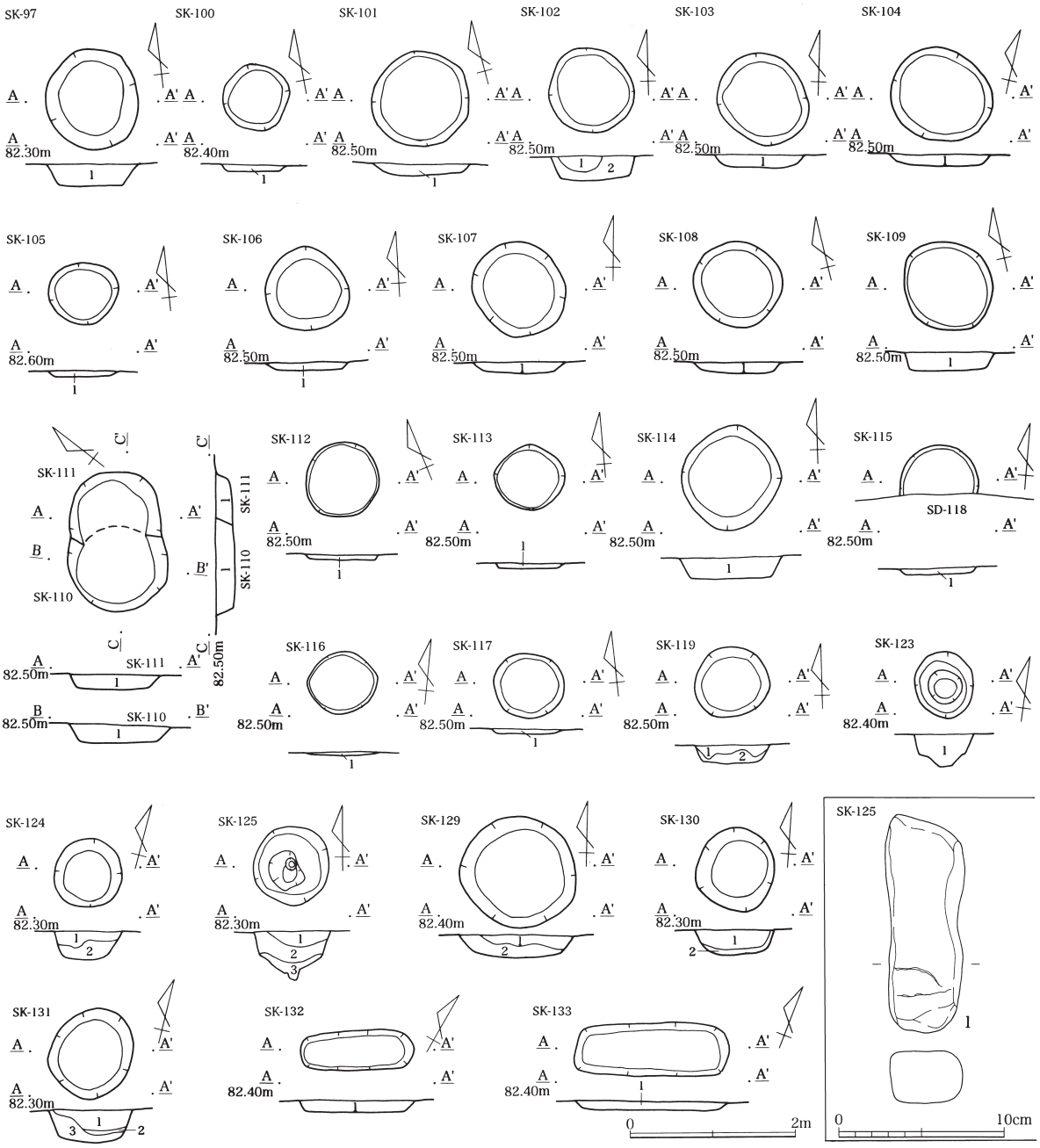
2区SK-86
- 1 暗黒褐色　やや硬。

2区SK-87
- 1 暗黒褐色　やや軟。

2区SK-92
- 1 黄褐色　ローム塊と粒多量。

2区SK-96
- 1 暗褐色　ローム塊・褐色土塊少量、ローム粒微量。やや硬。

第 87 図　権現山遺跡 2 区　時期不明の土坑 (3) 遺構



2区SK-97
　1 暗褐色　褐色土塊・ローム塊多量、ローム粒少量。やや硬。
2区SK-100
　1 黒色　白色粒微量。やや軟。
2区SK-101
　1 黒褐色　白色粒・炭化物粒微量、褐色土塊少量。やや硬。
2区SK-102
　1 黒色　ローム粒微量。やや硬。
　2 暗褐色　褐色土塊多量、白色粒微量。硬。
2区SK-103
　1 黒褐色　白色粒・ローム粒・焼土粒微量。やや硬。
2区SK-104
　1 暗褐色　褐色土塊多量、ローム粒微量。やや軟。
2区SK-105
　1 黒色　白色粒微量。硬。
2区SK-106
　1 暗褐色　白色粒微量、ローム粒少量。やや軟。
2区SK-107
　1 暗褐色　ローム塊・白色粒微量、ローム粒少量。やや硬。
2区SK-108
　1 暗褐色　褐色土塊少量、白色粒微量。やや硬。
2区SK-109
　1 暗褐色　ローム粒少量、白色粒微量。硬。
2区SK-110
　1 黒褐色　ローム粒少量、白色粒微量。やや硬。
2区SK-111
　1 暗褐色　褐色土塊多量、ローム粒・白色粒微量。硬。
2区SK-112
　1 黒色　褐色土塊少量、白色粒微量。やや硬。
2区SK-113・114・115・116
　1 暗褐色　褐色土塊少量、ローム粒微量。やや硬。
2区SK-117
　1 黒色　白色粒・ローム粒微量。硬。
2区SK-119
　1 黒褐色　白色粒多量。硬。
　2 暗褐色　褐色土塊少量、ローム粒微量。やや硬。
2区SK-123
　1 褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。
2区SK-124
　1 暗褐色　ローム塊少量、ローム粒微量。硬。
　2 褐色　ローム粒・白色粒少量。硬。
2区SK-125
　1 暗褐色　炭化物粒・焼土粒・白色粒少量、ローム粒微量。硬。
　2 褐色　ローム塊と粒少量、炭化物粒・焼土粒微量。硬。
　3 暗黄褐色　ローム塊と粒多量。やや硬。
2区SK-129
　1 暗褐色　白色粒・褐色土塊少量、焼土粒・ローム粒微量。硬。
　2 黒褐色　褐色土塊・褐色土粒微量。硬。
2区SK-130
　1 黒褐色　白色粒多量、焼土塊・ローム塊と粒少量。硬。
　2 褐色　ローム塊少量。やや硬。
2区SK-131
　1 暗褐色　白色粒・ローム粒少量。硬。
　2 暗黄褐色　ローム塊と粒少量。硬。
　3 黒褐色　褐色土塊少量。やや硬。
2区SK-132
　1 暗褐色　白色粒・焼土粒少量、ローム粒・焼土塊微量。
2区SK-133
　1 暗褐色　白色粒・焼土粒少量、ローム粒・焼土塊微量。

第 88 図　権現山遺跡 2 区　時期不明の土坑 (4) 遺構

SK-101	49.5-13.0	円形	重複なし	1.20	1.14	0.16
円形土坑。円形土坑集中部にある。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。						
SK-102	49.5-13.0	円形	重複なし	1.03	1.00	0.31
円形土坑。円形土坑集中部にある。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。						
SK-103	49.5-13.0	円形	重複なし	1.14	1.02	0.16
円形土坑。円形土坑集中部にある。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。						
SK-104	49.5-13.0	円形	重複なし	1.12	1.02	0.15
円形土坑。円形土坑集中部にある。						
SK-105	49.5-13.0	円形	重複なし	0.84	0.74	0.07
円形土坑。円形土坑集中部にある。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。						
SK-106	49.5-12.5・13.0	円形	重複なし	1.03	0.96	0.10
円形土坑。円形土坑集中部にある。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。						
SK-107	49.5-12.5	円形	重複なし	1.15	1.04	0.13
円形土坑。円形土坑集中部にある。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。						
SK-108	49.5-12.5	円形	重複なし	1.06	1.04	0.14
円形土坑。円形土坑集中部にある。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。						
SK-109	49.5-12.0・12.5	楕円形	重複なし	1.10	1.08	0.24
円形土坑。円形土坑集中部にある。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。						
SK-110	49.5-12.0	円形	SK-111 を切る	1.22	1.04	0.24
円形土坑。円形土坑集中部にある。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。						
SK-111	49.5-12.0	円形	SK-110 に切られる	1.10	0.64	0.18
円形土坑。円形土坑集中部にある。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。						
SK-112	49.5-12.5	円形	重複なし	0.92	0.86	0.06
円形土坑。円形土坑集中部にある。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。						
SK-113	48.0-12.5	円形	重複なし	0.84	0.76	0.08	SK-113 ～ 116 が同一
円形土坑。大きな撹乱の南側。SK-113 ～ 116・119・52・74 等の円形土坑が一定の距離を置いて位置するため、これらを大きく 1 つのまとまりと見ることもできる。							
SK-114	48.0-12.5	円形	重複なし	1.28	1.12	0.26	SK-113 ～ 116 が同一
円形土坑。SK-113 と同じ円形土坑分布域にある。							
SK-115	47.5-12.0・12.5	円形	SD-118 と重複、新旧不明	0.94	0.60	0.06	SK-113 ～ 116 が同一
円形土坑。SK-113 と同じ円形土坑分布域にある。							
SK-116	47.5-12.0	円形	重複なし	0.84	0.76	0.04	SK-113 ～ 116 が同一
円形土坑。SK-113 と同じ円形土坑分布域にある。							
SK-117	49.5-12.5	円形	重複なし	0.86	0.78	0.06	
円形土坑。円形土坑集中部にある。SK-113 と同じ円形土坑分布域にある。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。							
SK-119	47.5-12.0	円形	重複なし	0.90	0.84	0.22	
円形土坑。SK-113 と同じ円形土坑分布域にある。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。							
SK-123	48.5-10.5	円形	重複なし	0.80	0.71	0.39	
円形土坑で 2 段に掘り込まれる。SK-124・125 等が集まる円形土坑の集中部となっている。やや深い。							
SK-124	48.0-11.0	円形	重複なし	0.84	0.81	0.35	
やや深い円形土坑。SK-123 と同じ円形土坑集中部にある。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。							
SK-125	48.0-11.0	円形	重複なし	1.06	0.90	0.57	
やや深い円形土坑。中央が 1 段低い。SK-123 と同じ円形土坑集中部にある。長胴甕の胴・底部、杯等の土師器小片と礫 1 点があり、北にある古墳時代の SI-99a・99b から混入した可能性があるので、この土坑の時期を示すかどうか不明。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。							
SK-129	47.5-10.5	円形	重複なし	1.40	1.34	0.28	
円形土坑。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。							
SK-130	48.0-11.0	円形	重複なし	1.00	0.92	0.30	
円形土坑。やや深い。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。							
SK-131	48.0-11.0	円形	重複なし	1.11	0.97	0.40	
円形土坑。やや深い。埋土に白色粒（テフラ？）を含むので、古墳時代の可能性もある。							
SK-132	48.0-10.5	長方形	重複なし	1.37	0.41	0.15	N-57°-E　自然堆積か
東西方向（やや斜め）の長方形土坑。付近の SK-133 とともに同じ方向を向く。土層は SK-133 と同じで人為堆積とは言えない。							
SK-133	48.0-11.0	長方形	重複なし	1.87	0.59	0.13	N-70°-E　自然堆積か
東西方向（やや斜め）の長方形土坑。付近の SK-132 とともに同じ方向を向く。土層は SK-132 と同じで人為堆積とは言えない。							

第 29 表　権現山遺跡 2 区 SK-125 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 礫	長　13.2 幅　4.8 厚　3.2 重　363.0	河原石。特に加工の痕跡はないが、編物石の可能性がある。	10YR5/3　にぶい黄褐 やや粗い 流紋岩	完形

第７章　権現山遺跡２区・杉村遺跡 GN1 区・磯岡遺跡３区の古環境

第１節　分析結果の概要と考古学的評価

東谷・中島地区南部の磯岡・杉村・権現山遺跡で、1994 年度確認調査トレンチの土層試料を分析した。権現山遺跡北部と杉村遺跡の分析結果を報告する。磯岡遺跡は『東谷・中島地区遺跡群 6』（2005）302-308 頁と本章３・５節、権現山遺跡南部は続刊報告書で分析結果を報告する。以下は分析結果へのコメントである。

［更新世の泥炭層］権現山遺跡の東に隣接する低地である磯岡３区（20-25）の泥炭層（19,560 ± 90BP）では、ゴヨウマツ類やトウヒ属等の亜高山帯針葉樹の花粉が優勢で、最終寒冷期に比定される。

権現山２区東部低地（39-13）では、古墳前期の As-C より約 1.2m 下層の泥炭層中の木で、18,390 ± 90BP の ^{14}C 年代を得た。樹種はトウヒ属（亜寒帯・亜高山帯に分布する常緑針葉樹）、同じ層中の種実もトウヒ属と水湿地植物で、最終寒冷期の湿原環境を示す。しかし、同じ泥炭層の樹木花粉組成は磯岡３区と大きく異なり、下記の縄文・弥生時代に近い。磯岡３区より埋没時期が少し下るか、または二次堆積（？）の可能性もあろう。関連する遺物は、権現山遺跡 SG1 区に尖頭器が 1 点ある。

［縄文時代～古墳前期の植生］権現山２区東部低地（39-13）では、落葉広葉樹のコナラ亜属が主である。As-C よりも下位 25cm および 120cm の２試料に相当すると見られる縄文・弥生時代の遺物は、権現山２区では縄文早～前期に中心があり、数は少ない（撚糸文２片・条痕文３片・黒浜式６片・加曽利 E 式５片）。

［完新世の指標テフラと堆積環境］杉村遺跡 GN1 区の４地点と、権現山遺跡２区の１地点でテフラ検出分析を実施した。確認できたテフラは下位から Nt-S、K-Ah、As-C、Hr-FA、As-B である。

杉村 GN1 区北端部（45-20）では、縄文早期の K-Ah よりも下位に水成堆積の砂および礫層があり、二次堆積した縄文草創期の Nt-S を含む。草創期から K-Ah 下位まで、厚さ 60cm 以上の砂礫層が低地に形成された堆積環境がわかる。権現山・杉村遺跡や周辺遺跡では撚糸文期から一定量の遺物が出土することと対応するかもしれない。草創期の土器片は磯岡遺跡３区と立野遺跡宇都宮市調査 A 区にあるが、僅少である。

杉村 GN1 区南端と権現山２区東部低地（37-16 と 39-13）で、1cm 厚の灰色粗粒火山灰層を古墳前期の As-C に同定した。杉村 GN1 区北端（45-19）でも、純層ではないが As-C 軽石を確認した。また、古墳後期初頭の Hr-FA の軽石を５地点すべてで確認した。杉村遺跡周辺と権現山遺跡２区東部低地に、古墳前～後期の連続的な堆積層が安定して形成されたことがわかる。この間の堆積層には、洪水に伴うような砂礫層がない（第 89 図）。

［古墳時代と古代の稲作］As-C が薄い層のまま残る状況は、古墳前期の建物が少なく（前期末に北関東自動車道の杉村遺跡で３棟）、権現山２区東部低地の As-C 直下層にイネ植物珪酸体がない（＝水田化しなかった）ことと関わるかもしれない。反対に、集落が大形化する中～後期の境に降下した Hr-FA は、純層をなさない。杉村 GN1 区南端 37-16G の FA 上層と、杉村 GN1 区北端 45-20G の FA 混層にイネ植物珪酸体を 2,000 ～ 2,300 個 /g 含む（＝古墳後期に近辺が水田化した）ことと関わるのだろうか。ただし、水田遺構自体は未確認である。

杉村 GN1 区の東端と北端（43-21 と 45-20）で、1108 年降下の As-B 混層にイネ珪酸体が多い（3,000 ～ 6,200 個 /g）。ここでも水田遺構は確認できなかった。周辺の稲作は、４区の分析結果（第９章第 14 節）でもふれる。

［古墳時代～古代の流路］杉村 GN1 区北端（45-19）では、南東～北西へ延びる旧流路が、古墳前期の As-C 降下から、1108 年の As-B 降下までの間に埋没したことが判明した。テフラ分析報文では「溝」と記述しているが、96 年度の杉村 GN1 区本調査では遺構として記録されていない。幅約 10m と大規模で、水成堆積のローム・砂礫・青灰色砂が交互に堆積していたので、溝状遺構ではなく埋没した自然流路と判断される。

第２節　権現山遺跡２区と杉村遺跡 GN1 区のテフラ分析

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

宇都宮市域には、日光火山群男体火山をはじめ、浅間火山や榛名火山などの噴火に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が分布している。これらテフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされており、それらとの層位関係を求めることで遺物包含層の堆積年代や遺構の構築年代がわかる示標テフラがある。

東谷中島遺跡の発掘調査では、低地部や台地部の土層断面中にテフラの層や粒子の濃集層が検出された。そこで地質調査を行い土層の層序を記載することになった。そしてテフラおよび土壌の試料などを対象にテフラ検出分析を行って、噴出年代が明らかにされている示標テフラの検出同定を行い、土層の堆積年代に関する資料を収集することになった。さらに屈折率測定を行って、示標テフラとの同定の精度を向上させた。

調査分析の対象とした地点は、37-16 グリッド、39-13 グリッド、45-20 グリッド、45-19 グリッド、43-21 グリッドの 5 地点である。

２．土層の層序

（1）37-16 グリッド〔杉村遺跡 GN1 区南端部〕

この地点では、下位より灰色砂混じりシルト層（層厚 43cm 以上）、灰色粗粒火山灰層（層厚 1cm）、黒灰色粘質土（層厚 7cm）、白色粗粒火山灰混じり黄灰色土（層厚 5cm）、暗灰色土（層厚 13cm）、灰色土（層厚 12cm）、作土が認められる（第 89 図）。

（2）39-13 グリッド〔権現山遺跡２区東部〕

本地点において検出された木本類の大型植物遺体の上位には、下位より黒褐色泥炭層（層厚 1cm）、灰色砂層（層厚 5cm）、灰色砂混じり黒褐色泥炭層（層厚 62cm）、暗灰色粘質土（層厚 27cm）、黄灰色粘質土（層厚 8cm）、黒色粘質土（層厚 11cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚 1cm）、黒褐色土（層厚 1cm）、白色粗粒火山灰混じり暗褐色土（層厚 7cm）、灰色粗粒火山灰混じり黒褐色土（層厚 18cm）、作土（層厚 23cm）が認められる（第 89 図）。

（3）45-20 グリッド〔杉村遺跡 GN1 区北端部〕

本地点では、台地構成層の上部とその上位の土層が認められた。台地の構成層は、下位より亜円礫層（層厚 35cm，礫の最大径 128mm）、灰色砂層（層厚 8cm）、黄白色シルト質砂層（層厚 6cm）、黄白色軽石混じり灰色砂層（層厚 4cm）、桃灰色砂質土（層厚 6cm）からなる。これらのうち、黄白色軽石混じり灰色砂層の基底に軽微な侵食の痕跡が認められる（第 89 図）。

桃灰色砂質土を不整合に覆って表層部の土壌が形成されている。土壌は、下位より暗灰色土（層厚 11cm）、灰色土（層厚 5cm）、暗灰色土（層厚 7cm）、黄色砂質土（層厚 2cm）、暗灰色砂質土（層厚 7cm）、灰色砂質土（層厚 3cm）、暗灰色砂質土（層厚 18cm）からなる。

（4）45-19 グリッド〔杉村遺跡 GN1 区北端部〕

ここでは溝状遺構が検出されている。溝状遺構の覆土は、下位より亜円礫混じり暗灰色砂層（層厚 11cm，礫の最大径 24mm）、層理の発達した暗灰色砂質土（層厚 32cm）、とくに暗い暗灰色土（層厚 20cm）、暗灰色土（層厚 9cm）、灰色土（層厚 5cm）、暗灰色表土（層厚 21m）が認められた（第 89 図）。

（5）43-21 グリッド〔杉村遺跡 GN1 区東端部〕

本地点では、下位より亜円礫層（層厚 5cm 以上、黒灰色粘質土（層厚 9cm）、褐色粗粒火山灰混じり黒灰色土（層厚 0.3cm）、黄色細粒火山灰層（層厚 0.7cm）、暗灰色砂質土（層厚 6cm）、暗褐色土（層厚 9cm）、黄色砂質土（層厚 11cm）、暗灰色土（層厚 14cm）、黄灰色砂質土（層厚 6cm）、暗灰色砂質土（層厚 19cm）、灰色がかった暗褐色表土（層厚 39cm）が認められた（第 89 図）。

３．テフラ検出分析

（１）分析試料と分析方法

前述した地点において認められたテフラ層およびテフラの濃集層について、示標テフラの検出同定を行うためにテフラ検出分析を行った。また示標テフラの降灰が期待された土壌についても、基本的に５cm ごとに採取された試料のうちの 5cm おきの試料を対象にテフラ検出分析を試みた。分析の対象とした試料の合計は、26 点である。テフラ検出分析の手順は、次の通りである。

１）試料 10g を秤量。

２）超音波洗浄装置により泥分を除去。

３）80゜C で恒温乾燥。

４）実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

（２）分析結果

1）37-16 グリッド〔杉村遺跡 GN1 区南端部〕

ここでは、試料番号２に As-C に由来する灰白色軽石（最大径 2.0mm）がとくに多く含まれている。層相を合わせて考えると、試料番号２のテフラ層は As-C に同定される。また試料番号１には Hr-FA に由来すると考えられる白色軽石（最大径 1.5mm）が比較的多く含まれている。層相を合わせて考えると、試料番号１のテフラ層は、Hr-FA に同定される可能性が大きいと考えられる。

2）39-13 グリッド〔権現山遺跡２区東部〕

試料番号１の灰白色粗粒火山灰層には As-C に由来する灰白色軽石（最大径 2.2 mm）がとくに多く含まれている。層相を合わせて考えると、試料番号１のテフラ層は、As-C に同定される。またその上位の暗褐色土中に含まれる白色粗粒火山灰は、層位や岩相などから Hr-FA に由来する可能性が大きいと考えられる。

3）45-20 グリッド〔杉村遺跡 GN1 区北端部〕

ここでは、試料番号７に最大径 10.3mm の白色軽石が認められる。斑晶には単斜輝石や斜方輝石さらに角閃石が認められる。この軽石は、その岩相から Nt-S に由来すると考えられる。ただし、この軽石は２次堆積の水成砂層中に含まれていることから、元来の層位を保っているとは考えにくい。

試料番号６には、ごくわずかながら淡褐色の平板状（バブル型）ガラスが認められた。この火山ガラスは、その特徴から約 6,300 年前に南九州鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，町田・新井，1978）に由来すると考えられる。また試料番号３には、Hr-FA に由来する白色軽石（最大径 1.7mm）が、試料番号１には As-B に由来する淡褐色軽石（最大径 1.1mm）が各々比較的多く含まれている。

4）45-19 グリッド〔杉村遺跡 GN1 区北端部〕

ここでは、覆土基底の試料番号 15 から試料番号 11 にかけて、As-C 起源の軽石（最大径 1.4mm）が少量ずつ認められた。また基底の試料番号 13 にはより多くの軽石が検出された。このことから、溝状遺構の構築は As-C 降灰直前以降の可能性が考えられる。また試料番号５以上では、As-B 起源の軽石が比較的多く認められる。このことから遺構の構築は 1108 年より古いと考えられる。なお検出された量がわずかなことから明確なことは言えないが、試料番号 13 には Hr-FA 起源の軽石が認められた。したがって、遺構の構築は６世紀初頭を遡る可能性も考えられるのかも知れない。

5）43-21 グリッド〔杉村遺跡 GN1 区東端部〕

試料番号 11 および 10 には、最大径 2.5mm の Hr-FA 起源の軽石が多く認められる。したがって、これらのテフラ試料、とくに試料番号 10 の黄色細粒火山灰層は、層相から Hr-FA に同定される。また試料番号１には、As-B 起源の軽石（最大径 0.9mm）が比較的多く含まれている。

４．屈折率測定

（１）測定試料と測定方法

As-C に同定された 14-20 グリッド試料番号 1、Hr-FA、As-B に同定された 12-21 グリッドの試料番号 3 および２の３試料について位相差法（新井，1972）による屈折率の測定を行い、示標テフラとの同定の精度を向上させることにした。

〔報告書編者註：14-20 および 12-21 グリッドは権現山遺跡南部の報告書に掲載する SG2 区周辺地点のため、今回は土層図と分析結果を掲載していない。〕

（２）測定結果

屈折率の結果を第 30 表に示す。14-20 グリッド試料番号 1 には、斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱が含まれている。火山ガラスの屈折率（n）は、1.513-1.519 である。また斜方輝石の屈折率（γ）は、1.707-1.711 である。これらの特徴は As-C のそれと一致する。

また 12-21 グリッド試料番号３には角閃石のほか斜方輝石や磁鉄鉱が含まれている。火山ガラスの屈折率（n）は 1.500-1.502、斜方輝石の屈折率（γ）は 1.710 ±、角閃石の屈折率（n2）は 1.672-1.680 である。これらの重鉱物の組合せや屈折率は Hr-FA の特徴と一致する。さらに試料番号２には、斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱が含まれている。火山ガラスの屈折率（n）は 1.525-1.530、斜方輝石の屈折率（γ）は 1.708-1.7101 である。これらの重鉱物の組合せや屈折率は、As-C の特徴と一致する。以上のように、屈折率測定の結果、テフラ検出分析によるテフラ同定の結果を支持している。

第 30 表　権現山遺跡 2 区・杉村遺跡 GN1 区 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
37-16G	1	＋＋	白	1.5
	2	＋＋＋	灰白	2.0
39-13G	1	＋＋＋＋	灰白	2.2
45-20G	1	＋＋	淡褐	1.1
	2	＋＋	淡褐＞白	0.9,1.0
	3	＋＋	白	1.7
	4	＋	白	1.6
	5	－	－	－
	6	－	－	－
	7	＋	白	10.3
45-19G	1	＋＋	淡褐＞白	0.8,1.0
	3	＋＋	淡褐＞白	0.9,1.1
	5	＋	淡褐，白	0.8,1.1
	7	＋	白	1.2
	9	－	－	－
	11	＋	灰白	0.8
	13	＋	灰白＞白	1.0,1.0
	15	＋＋	灰白	1.4
43-21G	1	＋＋	淡褐	0.9
	3	＋	白	1.0
	5	－	－	－
	7	－	－	－
	9	＋	白	1.2
	10	＋＋	白	2.0
	11	＋＋＋	白	2.5
	13	－	－	－

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋：中程度，
＋：少ない，－：認められない．最大径の単位は，mm.

第 31 表　権現山遺跡 2 区・杉村遺跡 GN1 区 屈折率測定結果

地点	試料	重鉱物	屈折率
14-20 グリッド	1	opx.cpx,mt	gl（n）　:1.513-1.519
			opx（γ）:1.707-1.711
12-21 グリッド	2	opx.cpx,mt	gl（n）　:1.525-1.530
			opx（γ）:1.708-1.710
	3	ho>opx,mt	gl（n）　:1.500-1.502
			opx（γ）:1.710 ±
			ho（n2）:1.672-1.680

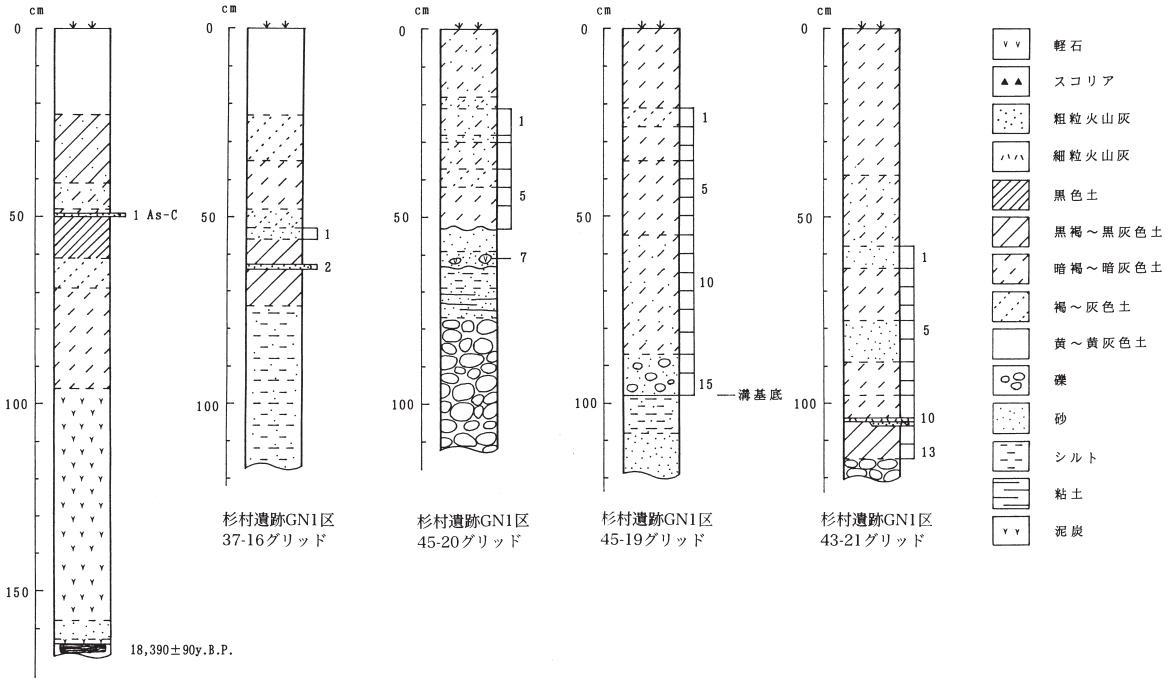
屈折率の測定は，位相差法（新井，1972）による．gl：火山ガラス，
opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石．

５．まとめ

東谷中島遺跡において、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を合わせて行った。その結果、下位より男体七本桜軽石（Nt-S，約 1.2 ～ 1.3 万年前）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約 6,300 年前）、浅間 C 軽石（As-C，４世紀中葉）、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，６世紀初頭）、浅間 B テフラ（As-B，1108 年）、浅間粕川テフラ（As-Kk，1128 年）に同定されるテフラ層またはそのテフラ粒子が検出された。

〔報告書編者註：浅間粕川テフラは 12-21 グリッドと 26-18 グリッドで検出され、今回掲載した分析結果には登場しない。12-21 グリッドは未報告の権現山遺跡南部（SG2 区）、26-18 グリッドは『東谷・中島地区遺跡群 3』で報告済みの杉村遺跡 SG1 区に該当する。〕

文献
新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.
新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.
新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.157，p.41-52.
町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラ起源の広域テフラ－アカホヤ火山灰．第四紀研究，17，p.143-163.
町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.
坂口　一（1986）榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119.
早田　勉（1989）６世紀における榛名火山の２回の噴火とその災害．第四紀研究，27，p.297-312.
早田　勉（1991）浅間火山の生い立ち．佐久考古通信，no.53，p.2-7.



第 89 図　権現山遺跡 2 区と杉村遺跡 GN1 区の土層柱状図とテフラ分析試料

第３節　権現山遺跡２区と磯岡遺跡３区の放射性炭素年代測定結果

株式会社 古環境研究所

第 32 表　権現山遺跡 2 区・磯岡遺跡 3 区　放射性炭素年代測定試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	20-25 グリッド 砂層直下	泥炭	酸洗浄 ベンゼン合成	β線法
No.2	39-13 グリッド 最下層	木	酸 - アルカリ - 酸洗浄 ベンゼン合成	β線法

第 33 表　権現山遺跡 2 区・磯岡遺跡 3 区　放射性炭素年代測定結果

試料名	^{14}C 年代 （年 BP）	δ^{13}C (‰)	補正 ^{14}C 年代 （年 BP）	測定No. (Beta-)
No.1	19,600 ± 90	-27.6	19,560 ± 90	81734
No.2	18,430 ± 90	-27.3	18,390 ± 90	83173

１）^{14}C 年代測定値：試料の ^{14}C/^{12}C 比から、単純に現在（1950 年 AD）から何年前（BP）かを計算した値。^{14}C の半減期は 5,568 年を用いた。

２）δ^{13}C 測定値：試料の測定 ^{14}C/^{12}C 比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正 ^{14}C 年代値：$\delta^{13}C$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、$^{14}C/^{12}C$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

〔報告書編者註：39-13 グリッドが本報告書の権現山遺跡２区に該当する。20-25 グリッドは『東谷・中島地区遺跡群 6』で報告済の磯岡遺跡３区（第８図）。〕

第４節　権現山遺跡２区と杉村遺跡 GN1 区の植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

２．試料

試料は、37-16 グリッドで３点、45-20 グリッドで５点、43-21 グリッドで６点、39-13 グリッドで４点の計 18 点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料の絶乾（105℃・24 時間）
２）試料約 1g を秤量、ガラスビーズ添加（直径約 40 μ m、約 0.02g）
　※電子分析天秤により１万分の１g の精度で秤量
３）電気炉灰化法による脱有機物処理
４）超音波による分散（300W・42KHz・10 分間）
５）沈底法による微粒子（20 μ m 以下）除去、乾燥
６）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400 倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cm あたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は 2.94（種実重は 1.03）、8.40、6.31、1.24 である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は 0.48、クマザサ属は 0.75 である。

４．分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第 34・35 表および第 91・92 図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。なお、39-13 グリッドを除く地点については、水田跡の探査が主目的であることから、同定および定量はイネ、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属など）、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な５分類群に限定した。

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ、キビ族（ヒエ属など）、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など）、ジュズダマ属、キビ族型、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大型）、くさび型、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、地下茎部起源、未分類等

５．稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料 1g あたりおよそ 5,000 個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にイネの密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

（1）37-16 グリッド（第 91 図）〔杉村遺跡 GN1 区南端部〕

Hr-FA の上層（試料 1、2）と直下層（試料 3）について分析を行った。その結果、Hr-FA の上層（試料 1、2）からイネが検出された。密度は 2,000 個 /g 前後と比較的低い値である。

（2）45-20 グリッド（第 91 図）〔杉村遺跡 GN1 区北端部〕

As-B 混層（試料 1）から Hr-FA の下層（試料 5）までの層準について分析を行った。その結果、As-B 混層（試料 1）から Hr-FA 直下層（試料 4）までの各層からイネが検出された。このうち、As-B 混層（試料 1）では密度が 3,000 個 /g と比較的高い値である。Hr-FA 混層（試料 3）では密度は 2,300 個 /g と比較的低い値であるが、直上層よりは高いことから上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、これらの層準の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。その他の試料では密度が約 1,500 個 /g と比較的低い値である。

（3）43-21 グリッド（第 91 図）〔杉村遺跡 GN1 区東端部〕

As-B 混層（試料 1）から Hr-FA 直下層（試料 6）までの層準について分析を行った。その結果、As-B 混層（試料 1）からイネが検出された。密度は 6,200 個 /g と高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

（4）39-13 グリッド（第 92 図）〔権現山遺跡 2 区東部〕

As-C 直下層（試料 1）およびその下位層（試料２～４）について分析を行った。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

以上のように、43-21 グリッドの As-B 混層ではイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、12-21 グリッドの As-B 直下層や 16-19 グリッドの Hr-FA 直下層、26-18 グリッドの As-B 下層、45-20 グリッドの As-B 混層と Hr-FA 混層などでも稲作が行われていた可能性が認められたが、密度は比較的低い値である。その原因としては、１）稲作が行われていた期間が短かったこと、２）洪水などによって耕作土が流出したこと、３）土層の堆積速度が速かったこと、４）採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、５）稲の生産性が低かったことなどが考えられるが、ここでの原因は不明である。

６．イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ類が含まれる）やキビ族（ヒエやアワ、キビなどが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）などがある。このうち、本遺跡の試料からはキビ族とジュズダマ属が検出された。

キビ族は、13-21 グリッドの As-C 直下層（試料 2）、45-20 グリッドの Hr-FA 混層（試料 3）、43-21 グリッドの As-B 下層（試料 3）、39-13 グリッドの泥炭層（試料 3）から検出された。キビ族にはヒエやアワ、キビなどの栽培種が含まれるが、現時点ではこれらの栽培種とイヌビエやエノコログサなどの野・雑草とを完

第 34 表　杉村遺跡 GN1 区 植物珪酸体分析結果

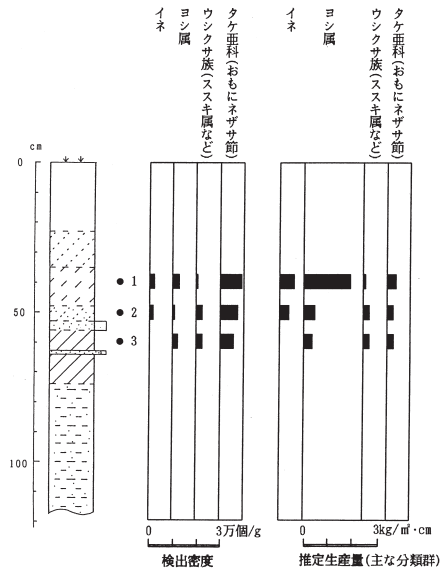
検出密度（単位：× 100 個 /g）

分類群 ＼ 試料	杉村 GN1 区南端部 37-16			杉村 GN1 区北端部 45-20					杉村 GN1 区 43-21					
	1	2	3	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6
イネ	23	15		30	16	23	15		62					
キビ族（ヒエ属など）						8					8			
ヨシ属	31	8	22	23	54	31	15	24	8	23	8	16	62	46
ウシクサ族（ススキ属など）	8	31	30	15	23	39	38	55	70	8	54	70	23	8
タケ亜科（おもにネザサ節）	93	77	60	83	101	78	107	102	23	39	15	62	15	31

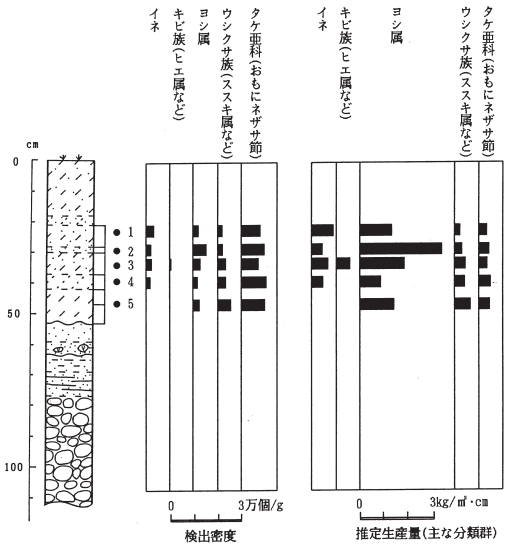
推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	0.69	0.45		0.88	0.47	0.68	0.44		1.82					
キビ族（ヒエ属など）						0.67					0.67			
ヨシ属	1.97	0.49	1.41	1.45	3.41	1.96	0.95	1.51	0.50	1.45	0.50	1.01	3.91	2.90
ウシクサ族（ススキ属など）	0.10	0.38	0.37	0.19	0.29	0.48	0.47	0.68	0.87	0.10	0.67	0.87	0.29	0.10
タケ亜科（おもにネザサ節）	0.45	0.37	0.29	0.40	0.48	0.37	0.51	0.49	0.11	0.19	0.07	0.30	0.07	0.15

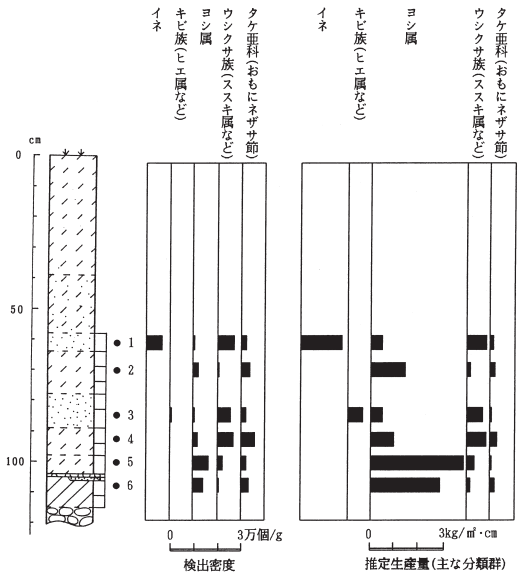
※試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出。



杉村遺跡GN1区　37-16グリッド
※主な分類群について表示



杉村遺跡GN1区　45-20グリッド
※主な分類群について表示



杉村遺跡GN1区　43-21グリッド
※主な分類群について表示

第 90 図 杉村 遺跡 GN1 区の植物珪酸体分析結果

第 35 表　権現山遺跡２区　植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：× 100 個 /g）

分類群 ＼ 試料	権現山２区 39-13			
	1	2	3	4
イネ科				
キビ族（ヒエ属など）			7	
ヨシ属	29	86	21	51
ウシクサ族（ススキ属など）	58	29	99	51
ジュズダマ属	7	7		7
キビ族型			14	
ウシクサ族型	465	342	99	196
ウシクサ族型（大型）	15	7		14
くさび型			7	
タケ亜科				
ネザサ節型	36	7	7	
クマザサ型	36	29	28	
未分類等	51			14
その他のイネ科				
表皮毛起源	80	36	14	
棒状珪酸体	1147	949	396	370
茎部起源	15	86		14
地下茎部起源		14	7	
未分類等	733	692	516	486
植物珪酸体総数	2672	2284	1215	1203

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・㎝）

キビ族（ヒエ属など）			0.59	
ヨシ属	1.83	5.40	1.34	3.20
ウシクサ族（ススキ属など）	0.72	0.35	1.23	0.63
ネザサ節型	0.17	0.03	0.03	
クマザサ型	0.27	0.21	0.21	

※試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出。

全に識別するには至っていない（杉山ほか, 1988）。また、密度も 1,000 個 /g 未満と低い値であることから、ここでヒエなどのキビ族植物が栽培されていた可能性は低いと考えられる。

ジュズダマ属は、39-13 グリッドの As-C 下層（試料 1、2）と最下層（試料 4）から検出された。同属には野草のジュズダマの他に栽培種のハトムギが含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを識別するのは困難である。また、密度も 1,000 個 /g 未満と低い値であることから、各層準でハトムギが栽培されていた可能性は低いと考えられる。

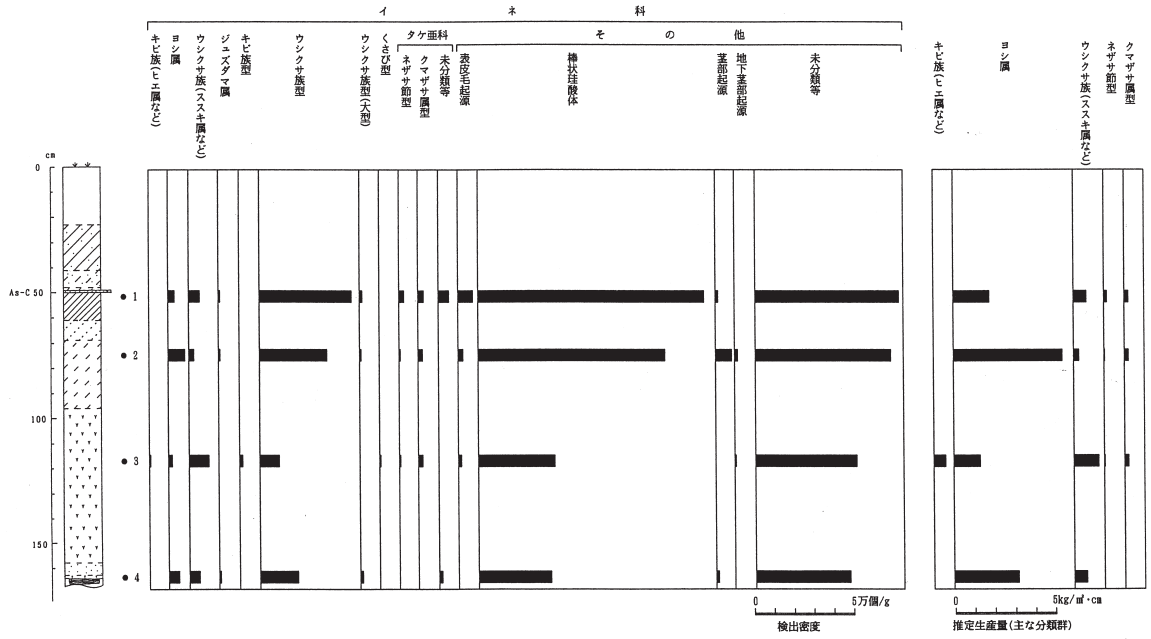
イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

〔報告書編者註：上記の 13-21 グリッドは未報告の権現山遺跡南部（SG2 区）に該当する。〕

７．植物珪酸体分析からみた植生・環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。

As-C より下位では、棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族型も比較的多く検出された。また、ヨシ属やウシクサ族（ススキ属など）、タケ亜科なども少量検出された（第 91 図）。棒状珪酸体はおもにイネ科植物の結合組織細胞に由来しているが、イネ科以外にもカヤツリグサ科やシダ類などでも形成される。棒状



第 91 図　権現山遺跡 2 区　39-13 グリッドの植物珪酸体分析結果

珪酸体の形態についてはこれまであまり検討がなされていないことから、その給源植物の究明については今後の課題としたい。

おもな分類群の推定生産量（各図の右側）によると、As-C より下位ではヨシ属が卓越しており、As-C 混層から Hr-FA 直下層にかけても多くの地点でヨシ属が優勢となっていることが分かる。

これらの結果から、Hr-FA より下位の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境が継続されていたものと考えられ、Hr-FA 直下層の時期に調査区の一部でそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

8．まとめ

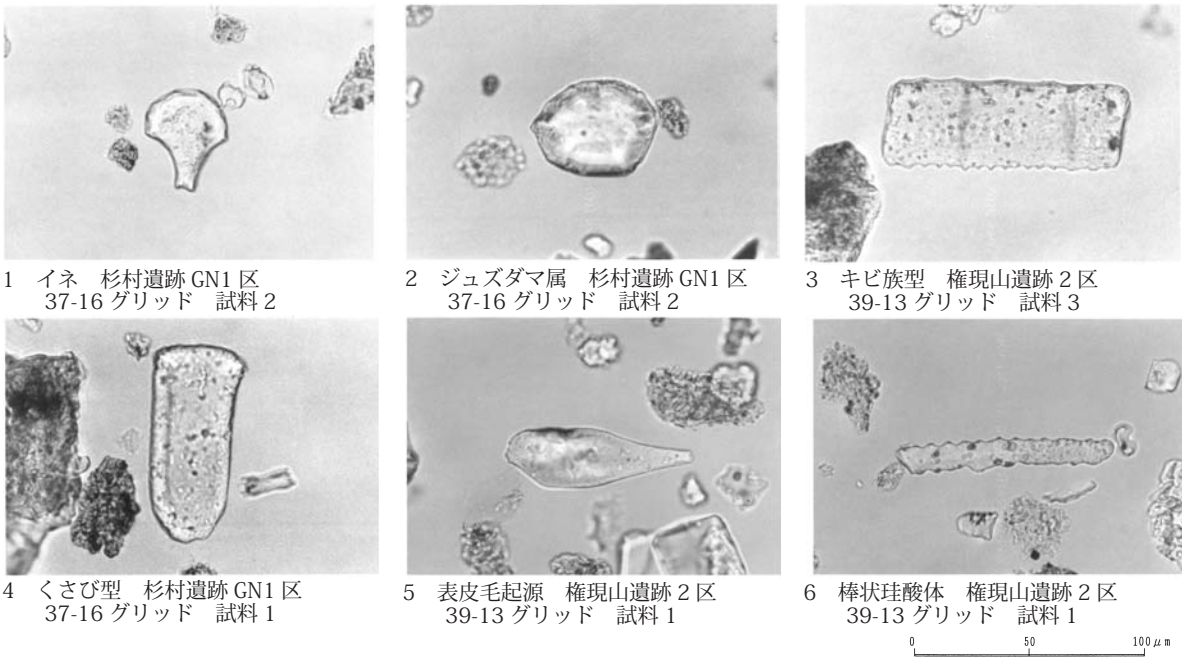
以上のように、43-21 グリッドの浅間 B テフラ（As-B，1108 年）混層ではイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、12-21 グリッドの As-B 直下層や 16-19 グリッドの榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，6 世紀初頭）直下層、26-18 グリッドの As-B 下層、45-20 グリッドの As-B 混層と Hr-FA 混層などでも、稲作が行われていた可能性が認められた。

遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、Hr-FA 直下層の時期に調査区の一部でそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

〔報告書編者註：上記の 12-21、13-21、16-19 の各グリッドは未報告の権現山遺跡南部（SG2 区）、26-18 グリッドは『東谷・中島地区遺跡群 3』で報告済の杉村遺跡 SG1 区に該当する。今回掲載した分析結果には登場しない。〕

参考文献

杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第 2 号：p.27-37
杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－．考古学と自然科学，20:p.81-92.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) －数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9:p.15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) －プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17:p.73-85.



1　イネ　杉村遺跡 GN1 区
37-16 グリッド　試料２

2　ジュズダマ属　杉村遺跡 GN1 区
37-16 グリッド　試料２

3　キビ族型　権現山遺跡２区
39-13 グリッド　試料３

4　くさび型　杉村遺跡 GN1 区
37-16 グリッド　試料１

5　表皮毛起源　権現山遺跡２区
39-13 グリッド　試料１

6　棒状珪酸体　権現山遺跡２区
39-13 グリッド　試料１

第 92 図 杉村遺跡 GN1 区と権現山遺跡 2 区の植物珪酸体の顕微鏡写真

第５節　権現山遺跡２区と磯岡遺跡３区における花粉分析

株式会社 古環境研究所

１．試料

39-13 グリッドで４点、20-25 グリッドで２点の計６試料である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

２．方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、以下の順で物理化学処理を施して行った。

１）５％水酸化カリウム溶液を加え 15 分間湯煎する。

２）水洗した後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

３）25％フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置する。

４）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。

５）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm・２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）を基本とし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

３．結果

分析の結果、樹木花粉 29、樹木花粉と草本花粉を含むもの３、草本花粉 26、シダ植物胞子２形態の計 60 分類群が同定された。花粉遺体一覧を第 36 表に示し、花粉数が 100 個以上の試料は樹木花粉および花

粉総数を基数とする花粉組成図を作成した。以下に同定された分類群を示す。

〔樹木花粉〕

モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ－シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、キハダ、カエデ属、トチノキ、シナノキ属、エゴノキ属、モクセイ科、トネリコ属、ツツジ科、ニワトコ属－ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、マルバオモダカ、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、イボクサ、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、コウホネ属、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ワレモコウ属、ツリフネソウ属、セリ科、シソ科、ナス科、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子・三条溝胞子

（1）39-13 グリッド（第 93・94 図）〔権現山遺跡２区東部〕

試料４では樹木花粉と草本花粉の占める割合がほぼ等しい。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が優占し、ハンノキ属、クマシデ属－アサダ、ニレ属－ケヤキなどが出現する。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が優占する。他にマルバオモダカ、イボクサなども出現する。試料３では樹木花粉より草本花粉の占める割合がやや高い。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が優占し、ハンノキ属、クマシデ属－アサダ、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキが伴われる。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科が優占し、イボクサが出現する。試料２では樹木花粉と草本花粉の占める割合がほぼ等しい。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が優占し、ハンノキ属が主に伴われる。他にマツ属単維管束亜属が出現している。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が優占し、オモダカ属が出現する。試料１では樹木花粉の占める割合が草本花粉よりやや高い。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が高率になり、他は低率である。草本花粉ではカヤツリグサ科、イネ科、ヨモギ属がやや出現率が高く、ガマ属－ミクリ属、ミズアオイ属などが伴われる。

（2）20-25 グリッド（第 95・96 図）〔磯岡遺跡３区〕

試料２では樹木花粉と草本花粉の占める割合がほぼ等しい。樹木花粉ではマツ属単維管束亜属、マツ属複維管束亜属、トウヒ属、モミ属の針葉樹が優占し、ハンノキ属、クマシデ属－アサダ、カバノキ属などの広葉樹が伴われる。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属、セリ科が優占する。試料では樹木花粉の占める割合が草本花粉よりやや高い。樹木花粉ではトウヒ属、マツ属単維管束亜属が優占し、モミ属、カバノキ属などが低率ながら出現する。草本花粉ではカヤツリグサ科が優占し、イネ科、ヨモギ属などが低率ながら伴われる。

４．花粉分析からみた植生・環境・農耕

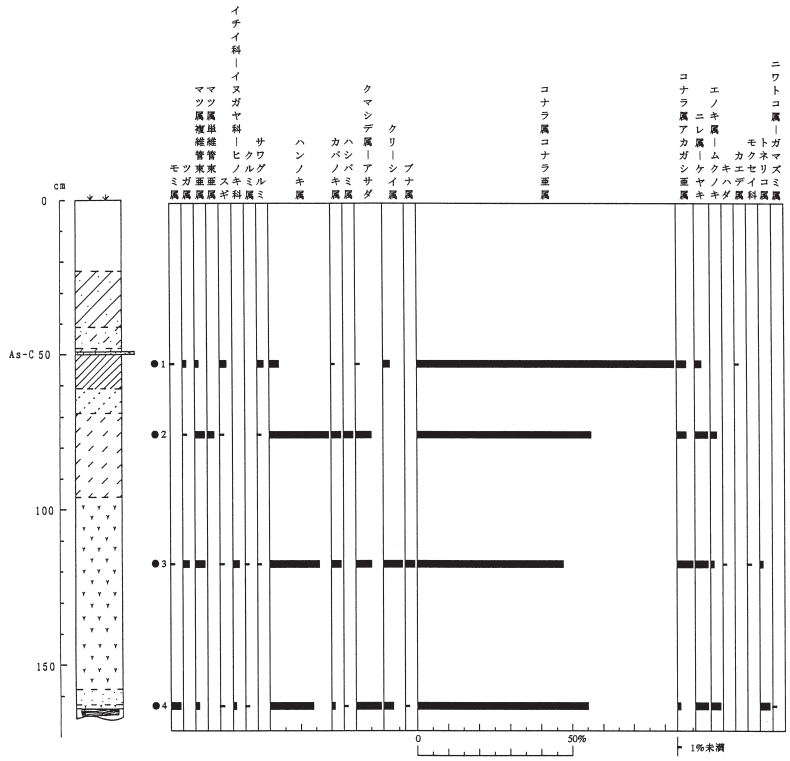
（1）39-13 グリッド（第 93・94 図）〔権現山遺跡２区東部〕

As-C より下位（試料 2、3、4）の時期は、樹木花粉と草本花粉の割合からみて、草本がやや優勢であったとみなされる。イネ科、カヤツリグサ科およびガマ属－ミクリ属、オモダカ属、マルバオモダカ、イボクサなどの繁茂する水湿地が分布し、その縁辺にはヨモギ属などの分布するやや乾燥したところも分布していたと推定される。周辺にはコナラ属コナラ亜属を主とする落葉広葉樹林が分布し、ハンノキ（ハンノキ属）の湿地林も分布していたと考えられる。

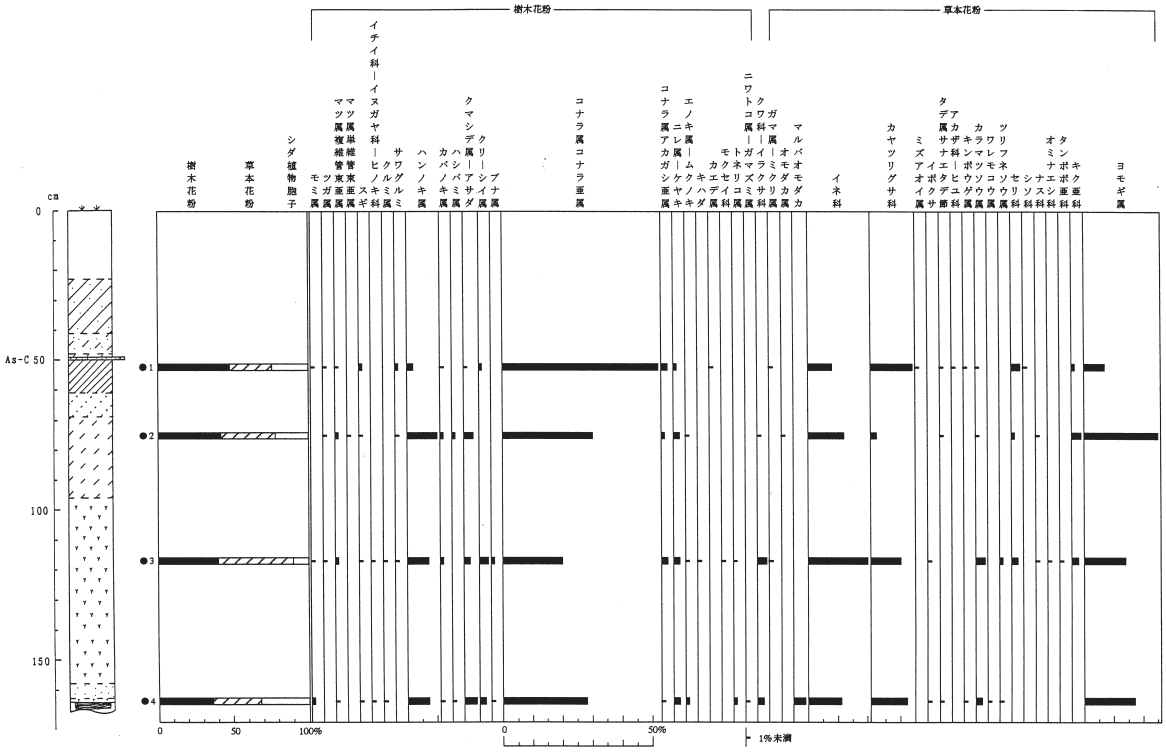
As-C 直下（試料 1）の時期になると、ハンノキ（ハンノキ属）の湿地林が減少しコナラ属コナラ亜属の

落葉広葉樹がやや拡大する。これは気候の乾燥化によるものと推定される。

（2）20-25 グリッド（第 95・96 図）〔磯岡遺跡３区〕

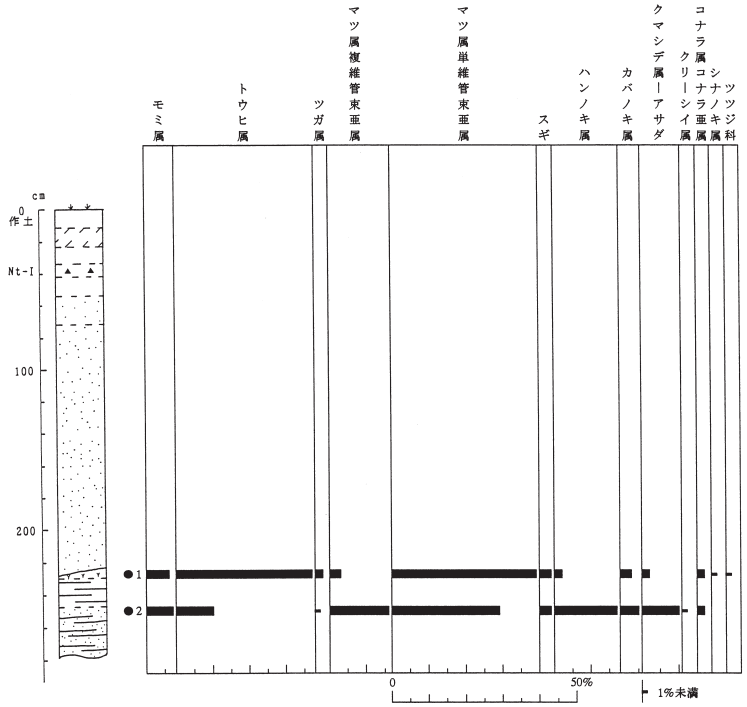


第 93 図　権現山遺跡 2 区　39-13 グリッドにおける樹木花粉組成図

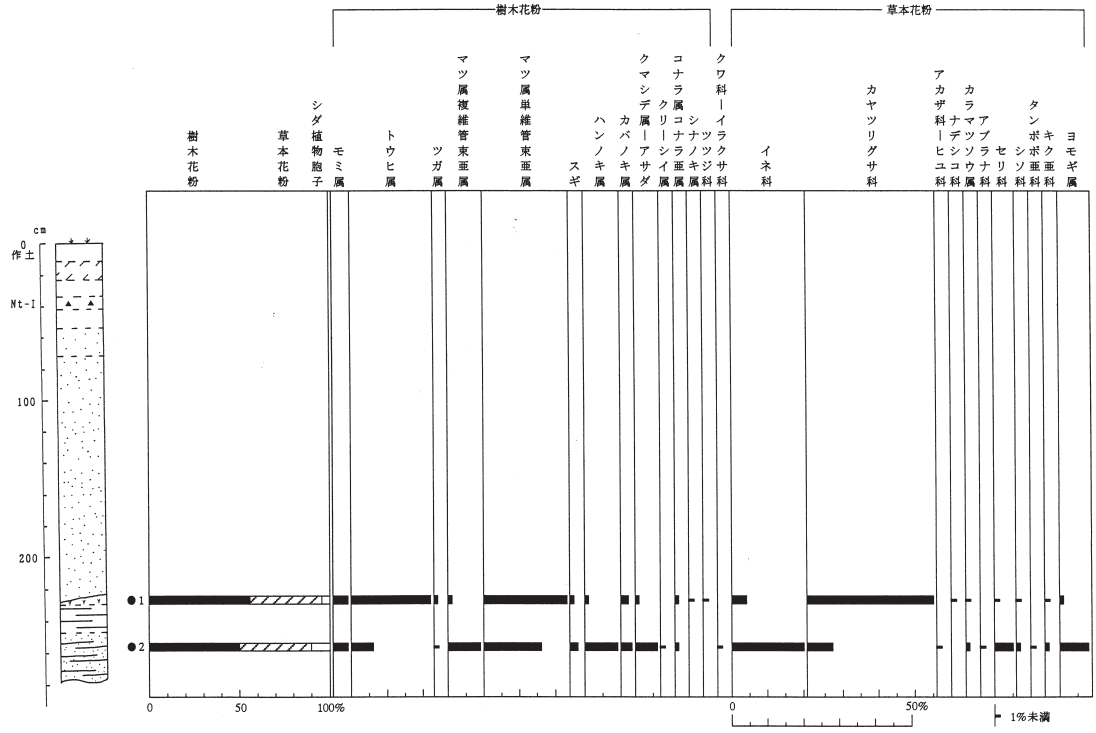


第 94 図　権現山遺跡 2 区　39-13 グリッドにおける樹木花粉組成図（花粉総数が基数）

試料 1、2 の時期は、マツ属単維管束亜属やトウヒ属などが優占するため、寒冷な気候が示唆され、周辺地域はマツ属単維管束亜属（ゴヨウマツ類）、トウヒ属、モミ属の亜高山帯（亜寒帯）針葉樹林に覆われていたと推定される。試料 2 の時期には、針葉樹林以外にハンノキ（ハンノキ属）の湿地林やクマシデ属－アサダ、カバノキ属などの広葉樹も分布していたと考えられ、イネ科やカヤツリグサ科の分布する湿地も分布していたと推定される。試料 1（泥炭層、19,560 ± 90yB.P.）の時期になると、ハンノキ属などの広葉樹が減少し、トウヒ属、マツ属単維管束亜属の針葉樹林が増加したものと推定される。また、周囲にはカヤツ



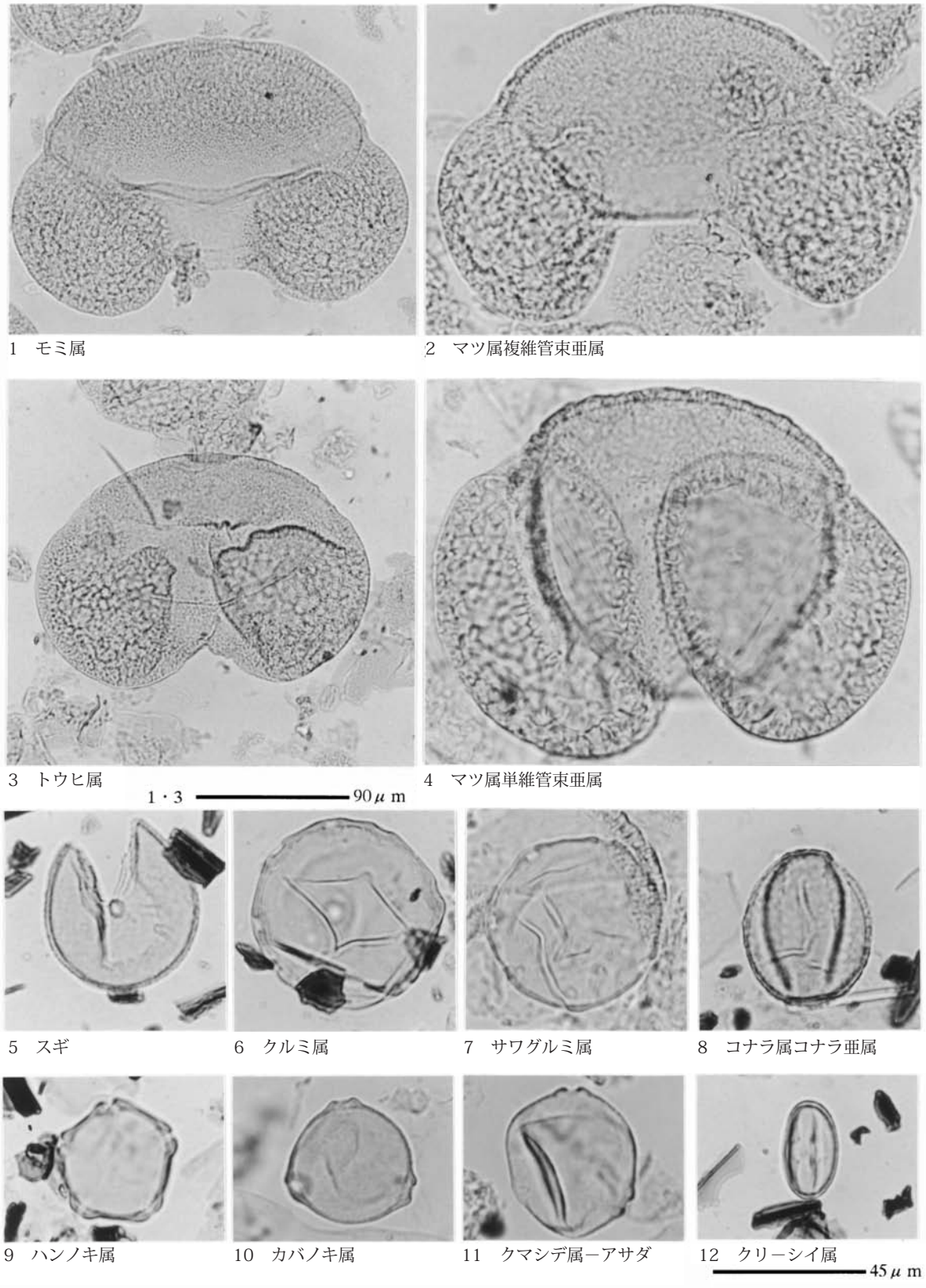
第 95 図　磯岡遺跡 3 区　20-25 グリッドにおける樹木花粉組成図



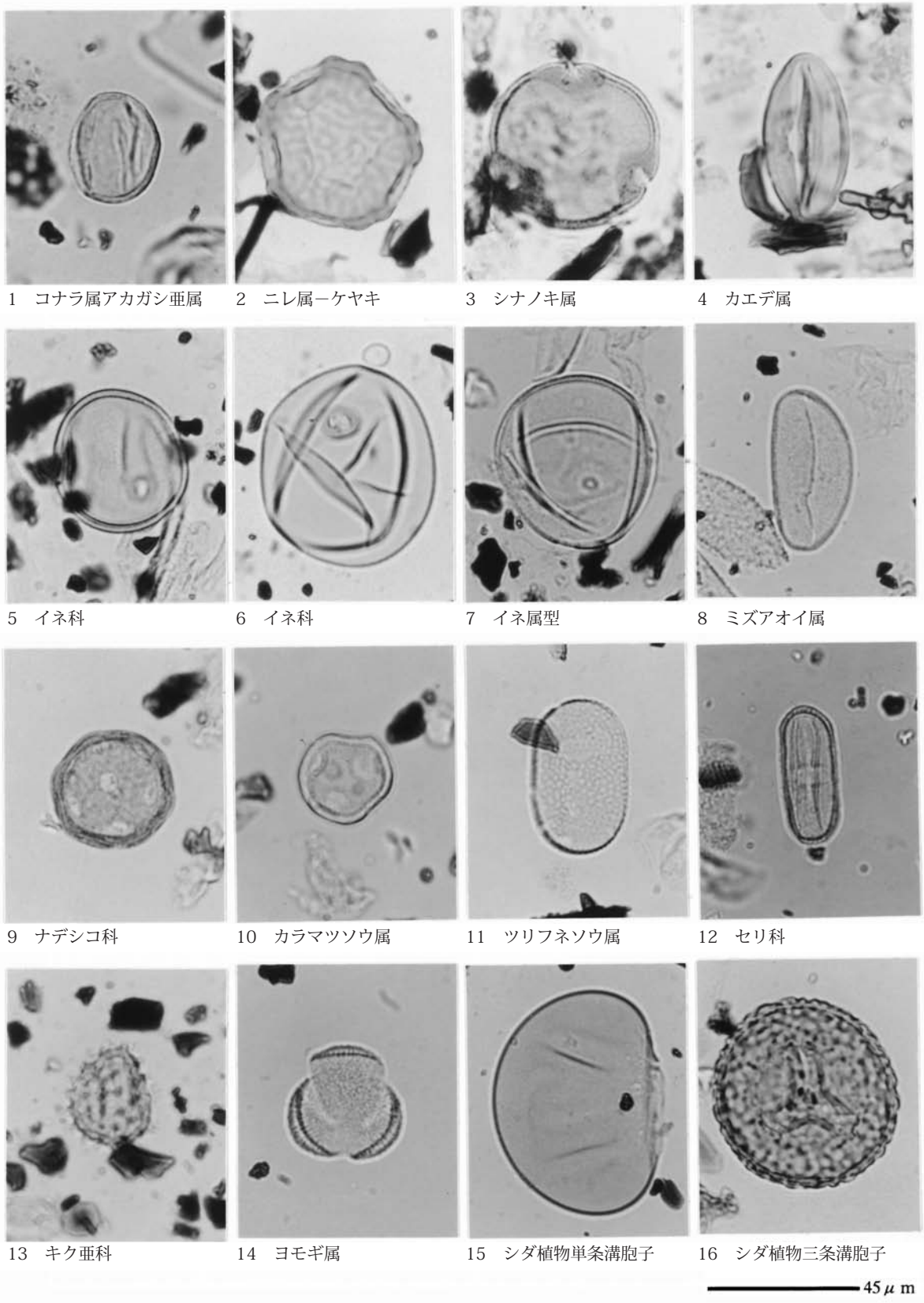
第 96 図　磯岡遺跡 3 区　20-25 グリッドにおける樹木花粉組成図（花粉総数が基数）

第 36 表 権現山遺跡 2 区・磯岡遺跡 3 区 花粉分析結果

分類群		権現山遺跡2区東部 39-13グリッド				磯岡遺跡3区 20-25グリッド	
学名	和名	1	2	3	4	1	2
Arboreal pollen	樹木花粉						
Abies	モミ属	1		1	5	18	7
Picea	トウヒ属					106	11
Tsuga	ツガ属	4	1	3		6	1
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	4	3	4	2	7	17
Pinus subgen. Haploxylon	マツ属単維管束亜属		2			111	31
Cryptomeria japonica	スギ	8	1	1	1	7	3
Taxaceae-Cephalotaxaceae -Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科 -ヒノキ科			3	2		
Juglans	クルミ属			1	1		
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ	7	1	1			
Alnus	ハンノキ属	9	21	24	24	6	18
Betula	カバノキ属	1	3	4	2	8	5
Corylus	ハシバミ属		3		1		
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	3	6	7	14	6	11
Castanea crenata-Castanopsis	クリ-シイ属	7		9	6		1
Fagus	ブナ属			5	1		
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	293	63	73	97	7	2
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	11	3	7	2		
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	6	4	6	7		
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ		2	2	5		
Phellodendron amurense	キハダ			1			
Acer	カエデ属	1					
Tilia	シナノキ属					1	
Oleaceae	モクセイ科			1			
Fraxinus	トネリコ属			2	5		
Ericaceae	ツツジ科					1	
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属				1		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科		1	11	7		1
Nonarboreal pollen	草本花粉						
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属	2		2			
Sagittaria	オモダカ属		1				
Caldesia parnassifolia	マルバオモダカ				13		
Gramineae	イネ科	46	25	72	37	19	39
Cyperaceae	カヤツリグサ科	77	4	35	41	172	13
Monochoria	ミズアオイ属	4					
Aneilema keisak	イボクサ			1	1		
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	1	2		1		
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	2					1
Caryophyllaceae	ナデシコ科					2	
Ranunculus	キンポウゲ属	4			1		
Thalictrum	カラマツソウ属	1	2	12	6	1	2
Cruciferae	アブラナ科						1
Sanguisorba	ワレモコウ属				2		
Impatiens	ツリフネソウ属			5	1		
Umbelliferae	セリ科	16	3	6		2	10
Labiatae	シソ科	2				1	2
Solanaceae	ナス科		1	2			
Valerianaceae	オミナエシ科			1			
Lactucoideae	タンポポ亜科			1			1
Asteroideae	キク亜科	8	7	6		1	2
Artemisia	ヨモギ属	41	54	51	59	7	15
Fern spore	シダ植物胞子						
Monolate type spore	単条溝胞子	166	59	22	30	12	22
Trilate type spore	三条溝胞子	9	3	23	132	13	2
Arboreal pollen	樹木花粉	355	113	155	176	284	107
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	1	11	7	0	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	204	99	194	162	205	86
Total pollen	花粉総数	559	213	360	345	489	194
Unknown pollen	未同定花粉	3	5	6	4	4	5
Fern spore	シダ植物胞子	175	62	45	162	25	24



第 97 図　権現山遺跡各地区および磯岡遺跡 3 区の花粉・胞子遺体 (1)



第 98 図　権現山遺跡各地区および磯岡遺跡 3 区の花粉・胞子遺体 (2)

リグサ科などが繁茂する湿地も分布していたものと考えられる。

以上のように、当時はマツ属単維管束亜属やトウヒ属などの亜高山帯針葉樹林が優勢な植生であり、最終寒冷期に比定される。

５．小結

20-25 グリッドの泥炭層（19,560 ± 90yB.P.）の堆積当時は、マツ属単維管束亜属（ゴヨウマツ類）やトウヒ属等の亜高山帯針葉樹林が優勢な植生であり、最終寒冷期に比定される。

浅間Ｃ軽石（As-C，４世紀中葉）より下位から榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，６世紀初頭）直下層にかけては、森林植生としてはコナラ属コナラ亜属を主とする落葉広葉樹林が優勢であり、周辺にはハンノキ属（ハンノキ）の湿地林が広がっていたと考えられる。Hr-FA 直下層では、樹木が減少してイネ科やカヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本が増加したと考えられ、やや開けた景観を呈していたと推定される。

〔報告書編者註：20-25 グリッドは磯岡遺跡３区で、報告書『東谷・中島地区遺跡群 6』に未掲載となってしまったため、近接遺跡の分析結果として権現山遺跡２区とともに掲載した。また、「小結」で述べている Hr-FA 直下層の状況は、続刊の権現山遺跡南部の報告書で扱う権現山遺跡 SG2 区と SG10 区の分析結果を指している。〕

参考文献
中村純 (1973) 花粉分析，古今書院.
金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原，新版古代の日本　第 10 巻　古代資料研究の方法，角川書店.
日本第四紀学会編 (1993) 第四紀試料分析法，東京大学出版会.
島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態，大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集.
中村純 (1980) 日本産花粉の標徴，大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集.
中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として，第四紀研究 13.
中村純 (1977) 稲作とイネ花粉，考古学と自然科学　第 10 号.

第６節　権現山遺跡２区における種実同定

株式会社 古環境研究所

１．試料

試料は、39-13 グリッドの最下位の泥炭層である。同層では、放射性炭素年代測定によって 18,390 ± 90y.B.P. の年代値が得られている（本章第３節参照）。

２．方法

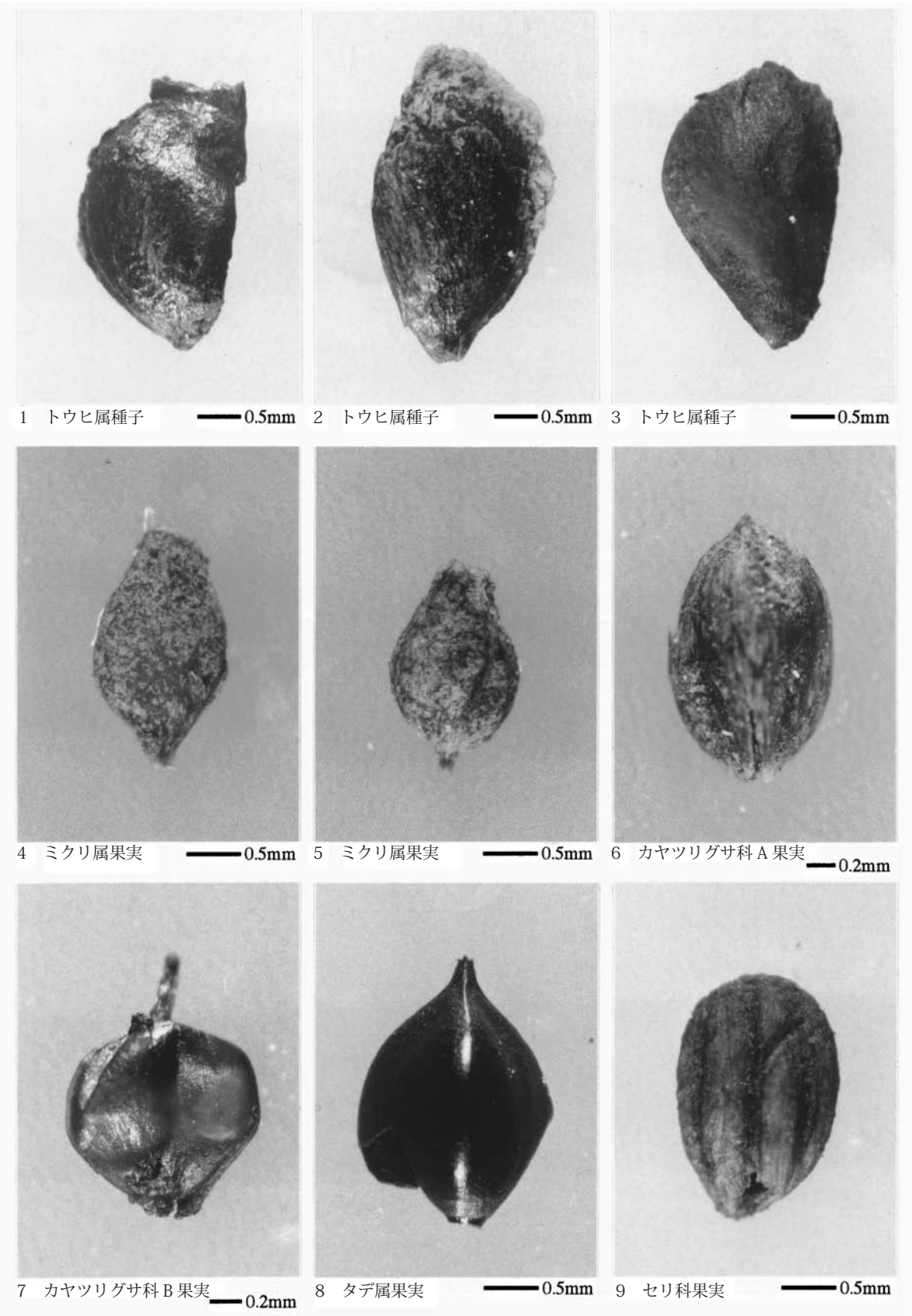
種実の抽出は、試料 500cc を 0.25mm の篩を用いて水洗選別して行った。同定は肉眼及び双眼実体顕微鏡（ビノキュラー）下で、形態学的特徴により現生標本との対比で行った。分類群は同定レベルによって科、属の階級で示した。

３．結果

抽出、同定の結果、樹木１、草本５の計６分類群の種実が検出された。以下に、主要な分類群の形態学的特徴を記し、写真を示す。

第 37 表　権現山遺跡 2 区　種実同定結果

分類群			39-13 グリッド
学名	和名	部位	№４　脇下土層
arbor	樹木		
Picea	トウヒ属	種子	26
herb	草本		
Sparganium	ミクリ属	果実	23
CyperaceaeA	カヤツリグサ科 A	果実	1
CyperaceaeB	カヤツリグサ科 B	果実	6
Polygonum	タデ属	果実	1
Umbelliferae	セリ科	果実	2
Total	合計		59



第 99 図　権現山遺跡 2 区 39-13 グリッド最下層の種実

〔樹木〕

a. トウヒ属　*Picea*　種子　マツ科

淡褐色～黄褐色で倒卵形を呈す。表面は粗く、断面は両凸レンズ形である。翼は欠落する。長さ 3.3 ～ 4.1mm、幅 2.0 ～ 2.3mm。

〔草本〕

b. ミクリ属　*Sparganium*　果実　ミクリ科

淡褐色で倒卵形を呈す。表面には縦方向に５本程度の繊維状の溝を持つ。長さ 2.0 ～ 2.4mm、幅 1.2 ～ 1.3mm。

c. カヤツリグサ科Ａ・Ｂ　Cyperaseae A･B　果実

Ａは茶褐色で倒卵形を呈す。断面は三角形である。長さ 2.1mm、幅 1.3mm。

Ｂは黄褐色で広倒卵形を呈す。断面は扁平である。長さ 1.7 ～ 1.8mm、幅 1.0 ～ 1.5mm。

d. タデ属　*Polygonum*　果実　タデ科

黒褐色でやや光沢がある。卵形を呈し、一端は欠損している。断面は三角形である。長さ 2.7mm、幅 1.9mm。

e. セリ科　Umbelliferae　果実

淡褐色で楕円形を呈す。片面には三本の隆起がある。長さ 2.3 ～ 2.4mm、幅 1.6mm。

４．種実同定からみた植生・環境

検出された種実遺体は 500cc 中に約 60 個が含まれていた。樹木ではトウヒ属、草本ではミクリ属が多く、他にカヤツリグサ科、タデ属、セリ科が検出された。樹木１、草本５と種類が少ないのが特徴的である。

トウヒ属はアカエゾマツ、ヒメバラモミ、ハリモミ、イラモミなどがあり、ほとんどが亜高山帯（亜寒帯）針葉樹林の主要構成要素である。このことから、遺跡周辺にトウヒ属を主とする亜高山帯（亜寒帯）針葉樹林が分布していたことが推定される。草本ではミクリ属、カヤツリグサ科、セリ科の水湿地植物が繁茂しており、湿原の環境が推定される。

以上のように、39-13 グリッドの最下層の種実遺体群集は、最終寒冷期の遺体群の特徴を示している。

参考文献

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276-283.

第７節　権現山遺跡２区出土木材の樹種同定

株式会社 古環境研究所

１．試料

試料は、39-13 グリッドの最下層から出土した自然木である。同試料は、放射性炭素年代測定によって 18,390 ± 90y.B.P. の年代値が得られている（本章第３節参照）。

２．方法

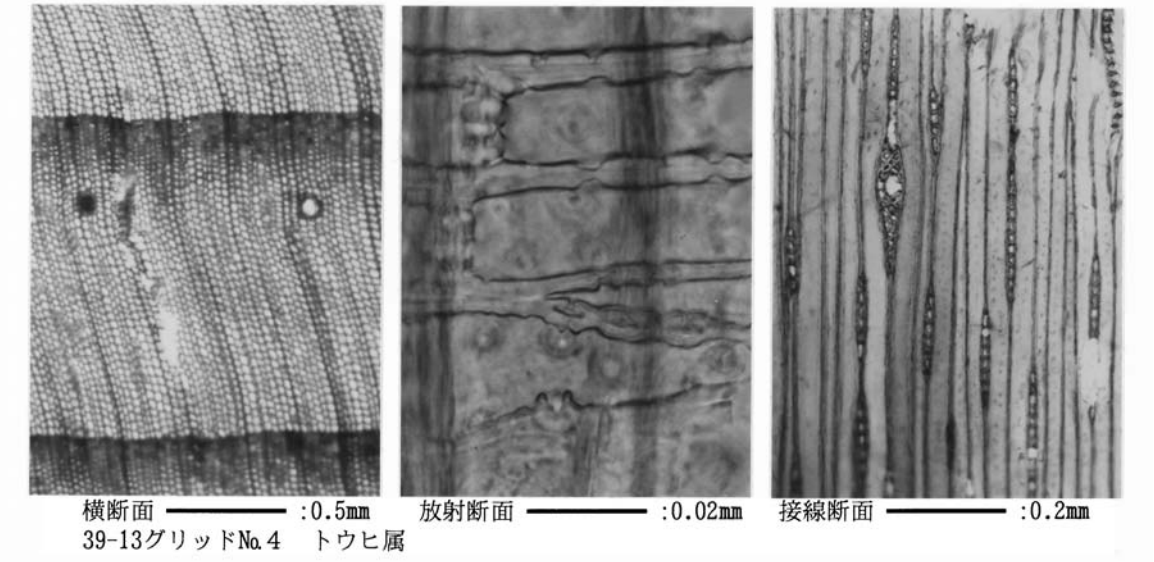
試料からカミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面・放射断面・接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって 60 ～ 1500 倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比で行った。

３．結果

鑑定の結果、トウヒ属（*Picea*）と同定された。同定根拠となった特徴を以下に記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

道管、放射柔細胞、放射仮道管および垂直、水平両樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部に正常な垂直樹脂道が見られる。



第 100 図　権現山遺跡 2 区 39-13 グリッド最下層の出土木材の顕微鏡写真

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なトウヒ型で、１分野に３～６個存在する。放射仮道管の有縁壁孔対の断面は、壁孔縁の先端が角張っているもの、壁孔縁に鋸歯状の突起をもつものが多く、孔口も小さい。

接線断面：放射組織は単列で１～ 20 細胞高であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

トウヒ属にはアカエゾマツ、エゾマツ、トウヒがあり、アカエゾマツとエゾマツは北海道に自生し、トウヒは関東山地・中部山岳地・大台ヶ原に自生する。寒冷な亜高山帯ないし亜寒帯に分布する常緑針葉樹である。

参考文献
島地謙ほか（1985）木材の構造．文永堂出版，p.20-100.

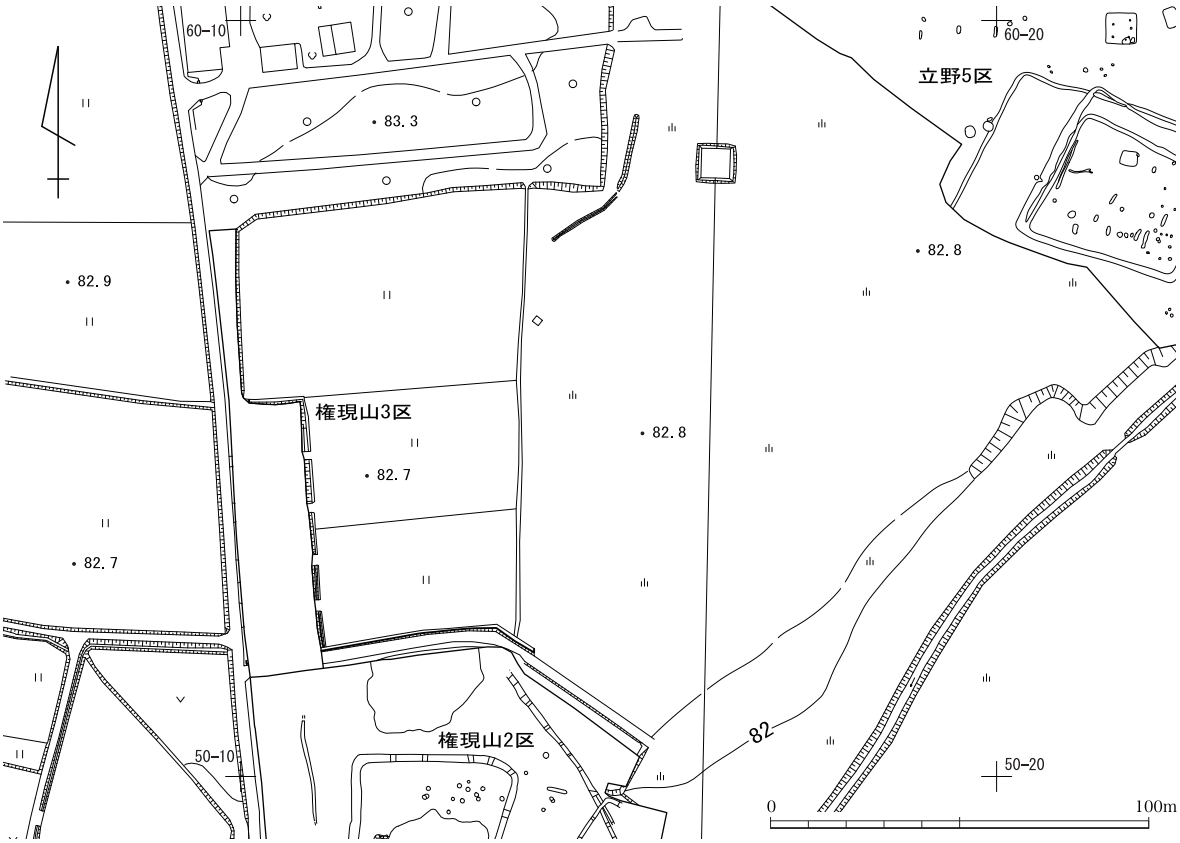
第８章　権現山遺跡３区

権現山遺跡３区は、東谷町字立野地内 865-3 番地・889 番地に所在し、「西谷田」の低地を東側に望む低台地の東端に立地する。３区は権現山遺跡の北端部であり、南に隣接する権現山遺跡２区と、北に 110 ～ 190m 離れて所在する立野遺跡（2・4・7・8 区）との間に相当する。権現山遺跡２区の中心部と考えられる遺構集中地区からは、北へ約 50 ～ 170m の地点である。

平成 10 年度（1998 年 5 月 29 日～ 1998 年 6 月 9 日）に発掘調査を目的として表土除去を実施したが、遺構・遺物ともに認められなかった。小形で浅い穴が 1 箇所だけ認められたが、その埋土からタバコのフィルターが出土したので、近代または現代の穴と判明した。表土除去を行った範囲の写真撮影を行って、調査を終了した。基準点測量・航空写真撮影は行わず、等高線測量図も作成しなかった。縮尺 2,000 分の 1 の地図に調査範囲を記入して下に示す。

３区の調査で遺構・遺物が認められなかったので、台地東端部分に関しては権現山遺跡の北限が２区までであることが判明した。なお、３区周辺では、本調査前の確認調査は実施しなかった。

３区の位置は北緯 36° 29′ 21″、東経 139° 54′ 14″（世界測地系）。発掘調査前の現況地形では、３区が所在する台地部分で南部が標高 83.03 ～ 83.12m、北部が標高 83.22m。３区の東側にある低地部分では、南部が標高 82.71 ～ 82.73m、北部が標高 82.78 ～ 82.97m。東側低地から３区（台地上）までの比高は、南部が 0.3 ～ 0.4m、北部が 0.2 ～ 0.4m 前後である。３区の範囲は南北約 120m ×東西幅約 20m で、北部では東西幅が狭くなる部分もある。表土除去を実施した対象面積は 2,400 平方 m。



第 101 図　権現山遺跡 3 区とその周辺（1/2,000）

第９章　権現山遺跡４区

権現山遺跡４区は、宇都宮市東谷町字杉村、砂田町字原田に所在し、「西谷田」の低地を東側に望む低台地の東端に立地する。権現山遺跡の中心部と考えられる豪族居館跡（SG1 区・北関東自動車道路調査区）の北に続く遺構集中地区である。４区の位置は北緯 36° 29′ 07″、東経 139° 54′ 16″（世界測地系）、発掘調査前の現況地形では台地部分が標高 81.43 ～ 82.26m、低地部分が 80.70 ～ 80.96m で、低地との比高は 0.3 ～ 0.7m 前後である。４区の範囲は南北 100 ×東西 60m。

権現山遺跡４区の北側は、２区の南部が谷状にやや低くなる部分を隔てて、２区北半部の遺構群が存在する。４区遺構群と２区北部遺構群の間は遺構が希薄で、２区南端付近にある遺物集中地点（２区 SX-94）は４区集落に関わる遺構と考えられる。また、４区の南側には、４区南部が谷状にやや低くなる部分を隔てて、権現山遺跡 SG1 区の居館跡と遺構集中部が隣接する。４区の東側は、開析谷をはさんだ対岸の微高地上に杉村遺跡の北関東自動車道路調査区が立地する。４区の西側は未調査である。

第１節　古墳時代の竪穴建物跡

４区 SI-1（第 103 図、写真図版 33・117）

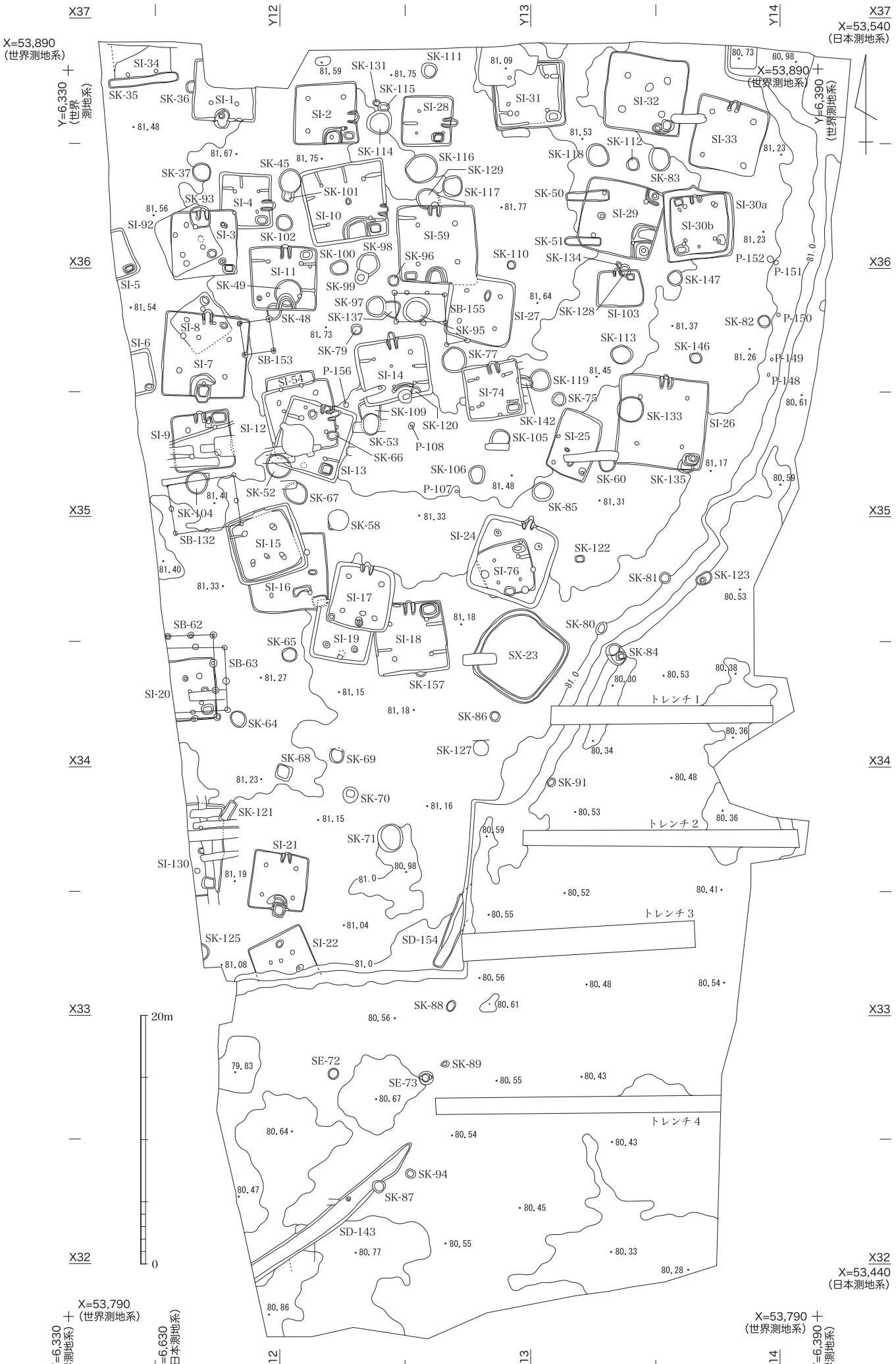
［位置］ ４区北西隅の台地平坦面、36.5-11.5 グリッド。古墳後期の建物は SI-3 が南にあり、中期末の SI-2・4 と終末期の SI-34 が東・南・西にある。西壁中央が時期不明の SK-36 に切られる。北半東寄りは調査区外。

［規模と形状］ ほぼ方形と考えられる。中軸は N-3°-E。東西長 5.05m、南北長 4.91m である。壁は直線的に外傾し、残存高 0.63m。床面は平坦で、傾斜も認められない。掘方は中央部から南壁際中央付近が浅く、南西壁際がやや深く、床面から深さ２～ 10cm。ローム粒と塊が多い暗茶褐色土で壁際を中心に貼床し、中央部はロームをそのまま床面とする部分がある。北の主柱穴２本が調査区外にあり、本来は４本と推定される。P1 は径 35 × 29 ×深さ 40cm、P2 は径 35 × 30 ×深さ 43cm。P1-P2 間は 2.05m。P1 は柱痕が明瞭である。張出ピット P3 が南壁中央にある。壁付近で幅 122cm の不整半円形で南壁から 58cm 張り出し、その内側は 75 × 50cm の平坦面。北側で P4 の周囲が 115 × 90cm の半円形に高まる。高まりは貼床上にロームと焼土の塊を含む黄褐色の 12 層で作る。張出部平坦面と高まり上面は、床から約２cm 高い。ピット内・壁溝内・張出部底面に灰褐色粘土（11 層）を貼る。入口ピット P4 は、南壁際中央で P3 北側の高まり上にある径 53 × 43 ×深さ 10cm の柱穴状。さらに北に径 18 ×深さ 13cm の小ピット P5 がある。壁溝は確認部では南壁際東寄りでわずかに途切れる他は全周する。断面は「U」字状。

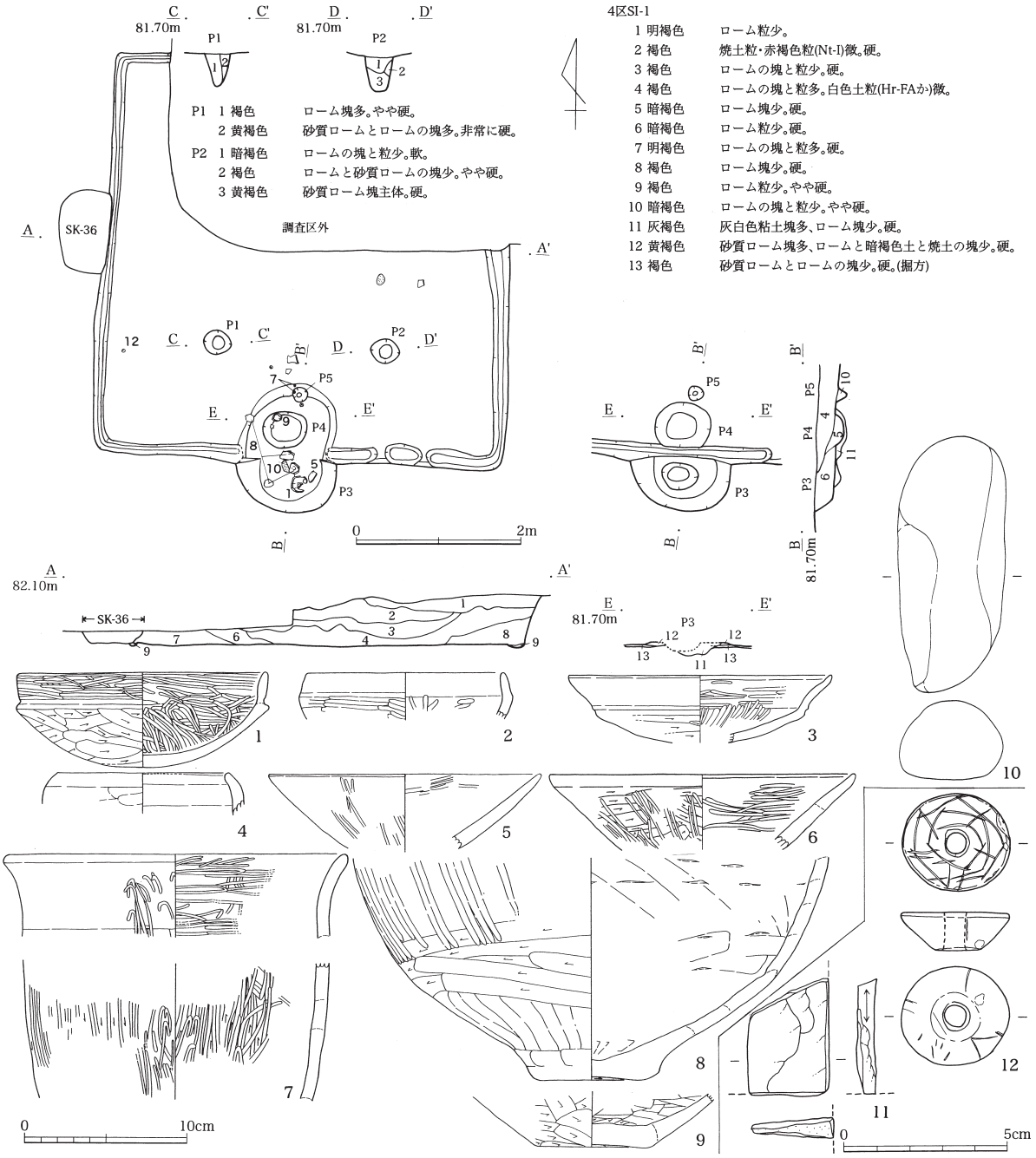
［火処］ 調査範囲内では火処が確認されなかった。

［覆土とテフラ］ 覆土６・８層にローム塊が多い。３層に微量の白色土粒を含むが、火山灰かどうかは不明。

［遺物および出土状況］ 遺物は少なく、南壁の P3 にまとまる。完形に近く復原できて遺構に伴うと見られるのは炭素吸着の黒色処理を行う１だけで、搬入品の可能性もある。３は体部を放射状に磨く後期初めの杯。５と６は脚形や長さが不詳だが、橙色胎土で内外面を密に磨く高杯は中期末～後期初めに見られる。８と９は大形壺の可能性があり、外底面を削って少し上げ底状。図化以外の土師器 99 片（1,020g）の内訳は、杯 14 片（80g）、高杯６片（126g）、壺甕類 55 片（646g）、甑 24 片（168g）。内傾口縁の椀形杯片もわずかに混入している。図化していない高杯に脚部３片や内外面赤彩の大形杯部片がある。甑はすべて精良な橙色胎土の無底大形甑で、図化以外に特厚の破片が２点ある。滑石製紡錘車と砥石の小破片が１点ある。刻線で文様を描く紡錘車は、本遺跡では４区 SI-1・24・28、次回報告する南半部の SG10 区 SI-36、および県道調査２区 SI-08（篠原・亀田 2009）と高速道路調査 A 区 SI-472・493（谷中・大島 2001）にある。



第 102 図　権現山遺跡 4 区　全体図（1/400・等高線主曲線 20cm）



第 103 図　権現山遺跡 4 区 SI-1　遺構・遺物

第 38 表　権現山遺跡 4 区 SI-1　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　15.0 高　5.7 最大　15.4	外面は体部上端が強く張り出し、口縁部下端が凹線状にくぼむ。底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。口縁部ヨコナデ後、内面体部に多方向と内外面口縁部に横位の密なヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。	10YR5/4　にぶい黄褐 やや緻密　白・透明粗～細粒多、赤粗粒と黒細砂少 やや硬質	P3 内の床上 5cm 口 3/4 周、体全周、底部一部欠 12
2 土師器 杯	口　復 12.2 高　残 2.8 最大　残 13.0	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラミガキ。内面は口縁部と体部にヨコナデ後、不定方向の疎らなミガキ。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや緻密　黒・白・赤細粒微　やや硬質	口 1/6 周
3 土師器 杯	口　復 16.0 高　残 4.1	外面は口縁部ヨコナデの下端と体部ヨコヘラケズリの上端との間に削り残し部があるため口～体部の境が二段状。内面は口縁端部を短く折り返し、口縁部に横位の後、体部に放射状のヘラミガキ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白・黒・赤粗～細粒少　やや硬質	口 1/6 周
4 土師器 鉢？	口　復 10.5 高　残 2.5 最大　残 12.3	鉢の口縁部か、または上下逆になり甑の底部かもしれない。外面口縁部の先端はヨコナデで、やや面取り状。その下は横方向ナデ？内面口縁部および体部ヨコナデ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗粒多 やや軟質	口 1/8 周

5 土師器 高杯	口　復 16.6 高　残 4.5	外面は縦位、内面は横位にかなり密なミガキを行っていたと見られる。焼成が軟質なので内外面とも磨滅が著しく、調整の詳しい状況は不詳。	5YR6/8　橙 やや緻密　赤細～粗粒と黒細粒少、白・透明微粒微 やや軟質	P3 内の床上 19cm 口～体 1/4 周 13
6 土師器 高杯	口　復 18.6 高　残 4.6	外面は体部ヨコヘラケズリで、口縁部のヨコナデよりも後の可能性あり。内面杯部ヨコナデ。外面にやや粗いタテヘラミガキ、内面に密なヨコヘラミガキ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　透明微粒多、白細粒少、赤細粒微 やや硬質	口 1/12 周、杯下部 1/4 周
7 土師器 甑	口　復 21.0 高　残 13.5	口縁部と胴部が同一個体だが接合点がない。外面胴部に縦位のヘラケズリおよびヘラナデ、内面胴部タテヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ後、内外全面ヘラミガキ。口縁部外面のミガキはやや疎ら。	2.5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白・褐色・灰色粗粒多、白・褐色細粒多、透明礫微　やや硬質	床面直上 口 1/6 周、口～胴部 16、17、南西、東南
8 土師器 大形壺	高　残 13.5 底　6.5 最大　残 28.8	突出する平底で、底面は底径に沿ってヘラケズリして上げ底状。底面から高さ 6.5cm に積み上げ休止面あり。外面は胴下位におそらく横～斜位ヘラケズリ後タテヘラナデ。積み上げ休止部の外面をヨコヘラケズリ後、中位以上にタテヘラミガキ。内面は横および斜位ヘラナデ。外面に 15cm 大の黒斑が残り、被熱使用痕はない。内面は一部剝落し、外底面の外周は丸く磨耗する。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　白・黒・透明粗～細粒多、白礫少 やや軟質	P3 底上 9 ～ 16cm と床上 2 ～ 4cm が接合 底全周、胴下半～底部 2、8、9、11、14
9 土師器 大形壺？	高　残 3.4 底　6.7	外底面は一方向ヘラケズリで少し上げ底。外面体部ナナメヘラケズリ。内面は底面に 1 ～ 2 方向ヘラケズリ後、体部ナナメヘラナデ。	5YR6/8　橙 やや粗い　白礫～細粒多、褐色粗粒と黒・透明粒少 やや硬質	P4 底上 9cm 底全周 4
10 礫 （編物石？）	長　15.5 幅　6.4 厚　5.1	自然の河原石。加工や被熱の痕跡は見られない。重量 734.2g。	2.5Y7/4　浅黄 緻密で硬質な礫岩	P3 底上 24cm 完形 10
11 石製品 砥石	長　残 3.5 幅　残 2.5 厚　残 0.6 重　残 6.4	砥石の隅部破片で、石材の節理に沿って薄く剝離したもの。側面図に矢印を記入した部分が砥面で、比較的平滑に良く磨耗する。下面図に示した部分は使用していない自然面。	2.5Y6/3　にぶい黄 硬質な粘板岩系の変成岩 やや硬質	小破片
12 石製品 紡錘車	径　32.35㎜ 短径　29.80㎜ 厚 11.30㎜ 重 15.50㎜	下面側から穿孔し、初孔径 6.55 ～ 6.70㎜、終孔径 6.10 ～ 6.75㎜。平面はやや楕円形気味で、下面側では平坦面（径約 11.5㎜）と斜面との境界がやや不明瞭。上面側の外周側面はやや丸味のある狭い面で、磨滅して光沢を持つ。他の面も丁寧に研磨しているので擦痕は不明確。上面には渦巻状の刻線を描き、また斜め放射状の線刻も 7 本見られる。下面にも刻線状の傷が少しあるが、偶発的なものと思われる。	5BG4/1　暗青灰 緻密な滑石	床面直上 完形 1

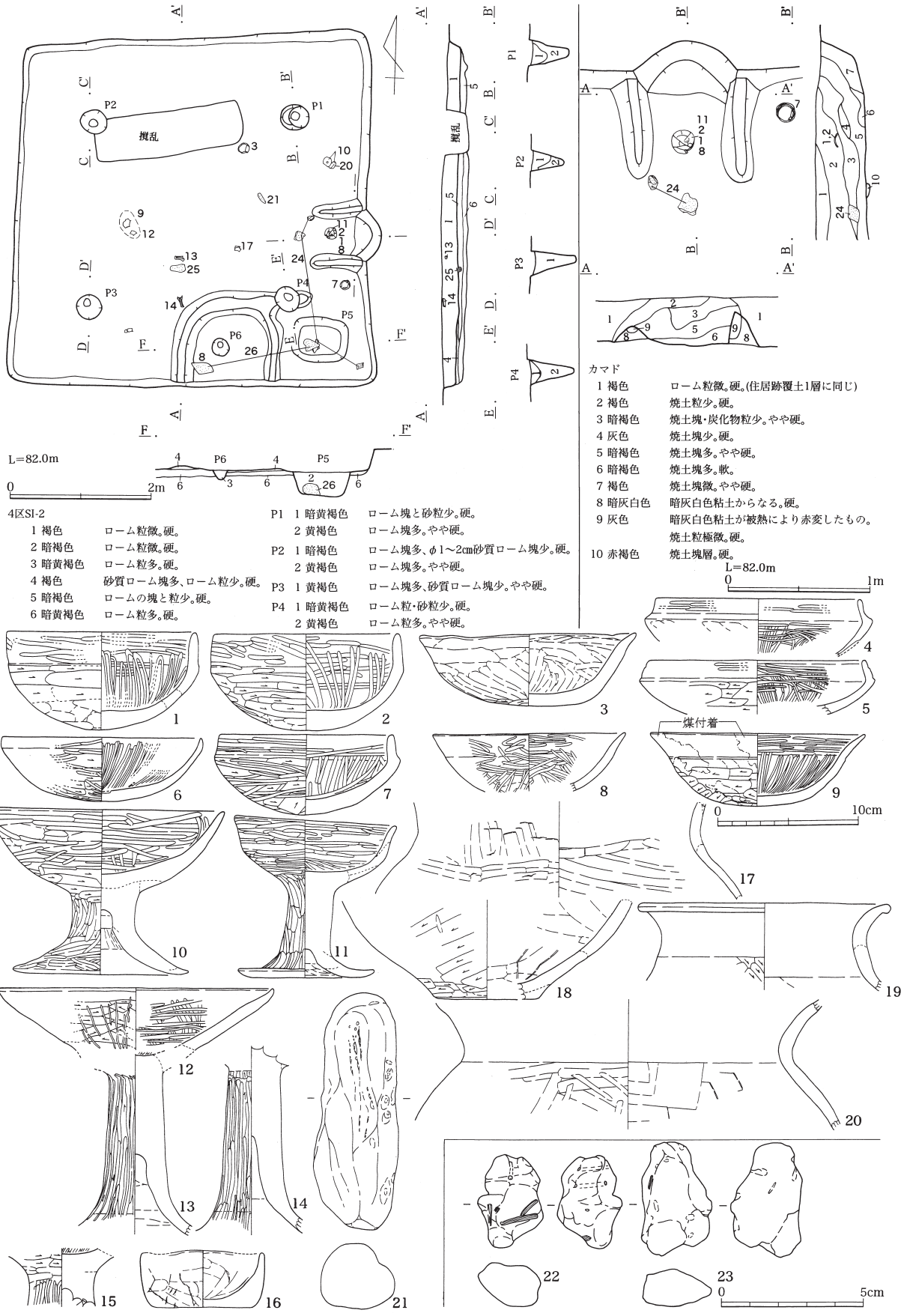
4 区 SI-2（第 104・105 図、写真図版 33 ～ 34・117）

［位置］ 4 区北端の台地平坦面、36.0-12.0、36.5-12.0 グリッド。古墳中期末の SI-10・28 や円筒形土坑 SK-114 が南と東、後期の SI-1 が西、時期不明の SK-115・131 が東にある。北半の長方形撹乱以外に重複はない。

［規模と形状］ 東辺 5.0m、西辺 4.7m、南辺 5.2m、北辺 4.8m のやや不整方形。南北の中軸は N-7 ° -W。各辺中央で東西長 5.27 ×南北長 5.05m。壁は直線的にやや外傾し、残存高 0.16 ～ 0.24m。床はおおむね平坦で傾斜しない。南壁際東寄りの堤状高まりは、半円形部から北東～東に延びた直線部が主柱穴 P4 と重複する。高まりの範囲は 155 × 127 ×幅 20 ～ 35cm で、貼床上に高さ 3cm でローム粒・塊の多い 4 層を盛る。内側平坦面は 100 × 92cm で、中央に入口ピット P6 がある。掘方底は緩い凹凸があり、床から深さ 3 ～ 10cm。ローム粒が多い暗黄褐色の 3 層でほぼ全面を貼床する。主柱穴は 4 本あり、P1 は径 40 × 35 ×深さ 57cm、P2 は径 38 × 33 ×深さ 47cm、P3 は径 36 × 34 ×深さ 64cm、P4 は径 36 × 32 ×深さ 65cm。P2 は他に比べて浅い。P1 は上半に段がある。柱間は P2-P1 間 2.85m、P3-P4 間 2.84m、P3-P2 間 2.53m、P4-P1 間 2.56m で、東西にやや長い方形配置。南壁際東寄りにある入口ピット P6 は円形柱穴状で、径 25 × 24cm、深さ 13cm。覆土はローム粒の多い暗黄褐色の 3 層。貯蔵穴 P5 が南東隅にある。南壁とほぼ平行する東西軸の長方形で 80 × 63cm、床面から深さ 36cm。底面はほぼ平坦な長方形で、壁がやや外傾する。覆土はローム粒微量を含む暗褐色土。

［カマド］ 東壁の南部にある。天井や袖上半は崩れるが、比較的良く残る。両袖幅 1.04m、煙道先端から袖先端まで 100cm。竪穴貼床上に袖を作る土の主体は灰褐色粘土の 8 層で、左袖外側のみ粘土にロームが混じる 9 層がある。袖内面は被熱赤変部が多い。焚口、火床および煙道立ち上がりまでは、袖と同様の粘土を主体とする 7 層を貼床上に貼る。火床はほぼ平坦で、床面よりわずかに下がる。燃焼部は、焼土と炭の多い流入土の 5 層、天井の崩れた 4 層、流入土の 2・3 層が堆積する。煙道は北壁を約 20cm「U」字状に掘り、7 層を約 10cm の厚さで貼る。覆土は燃焼部と同じ 5 層である。火床から煙道は緩く曲線的に上がる。

［遺物出土状況］ 中央部とカマド、貯蔵穴、入口（南東部）に多い。カマド内では高杯の上に杯（1 と 2）をかぶせていた。カマド北側で短脚高杯 1 点、南側で上向きの杯 1 点が、それぞれ床面付近で出土した。非

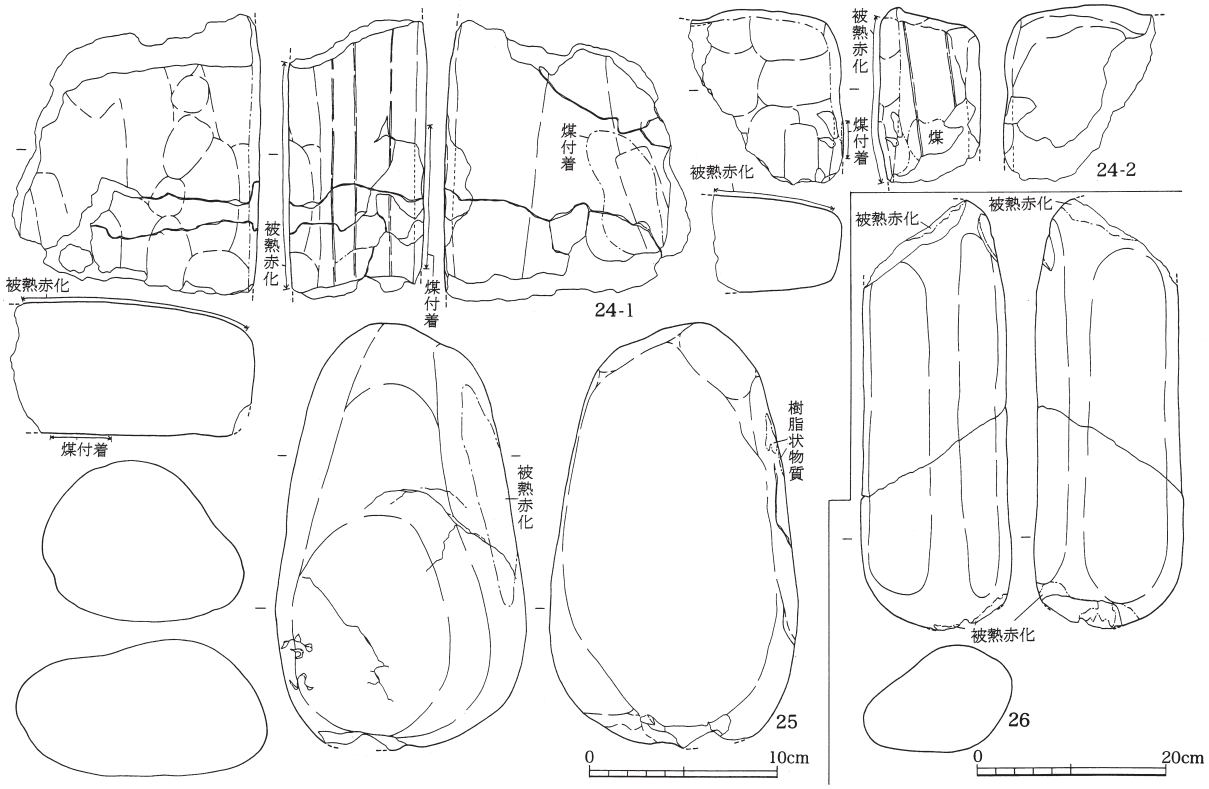


第 104 図　権現山遺跡 4 区 SI-2（1）　遺構・遺物

常に長脚化した高杯は床面より 15 ～ 18cm 浮いていた（13・14）。大きな石（26）は、入口施設付近と南東部貯蔵穴底付近の各 1 点が接合した。24-1・2 は砂岩切石で、カマド周辺にあるので構築材片と思われる。[**出土遺物**] 1・2 は須恵器蓋模倣杯の同工品。3 は仕上げ調整を省略した粗製品。1・9 は被熱や煤が見られる。4・5 は破片が少ないので混入品の可能性もある。中実短脚の 11 も含め、長脚または長脚気味の高杯が目立つ。9 と 15 は赤彩する。12 ～ 14 は赤褐色に発色する胎土で製作した同工品。大形壺のうち 17 と 18 は同一個体の可能性がある。24-1・2 は同一個体の被熱した砂岩切石で、図示した他に数 cm 大の小片が数点あり、カマド構築材であろう。26 もカマド構築材の可能性のある大きな自然石。25 は被熱痕跡と樹脂状物が見られる。図示以外の土師器 681 片（6,694g）の内訳は杯類 141 片（882g）、高杯 7 片（84g）、甕 470 片（4,676g）、壺 1 片（39g）、甑 62 片（1,013g）で、他に小形土器 2 片・粘土塊 1 点がある。図化以外に、無底式大形甑片もある。杯・高杯は赤彩破片が比較的多い。甕片としたものの中には壺を含む可能性もある。

第 39 表　権現山遺跡 4 区 SI-2　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　13.1 高　6.8 最大　13.7	2 と同工品。厚く重い。外面口～体部境に段あり。外面底部に雑なナデ、体部ヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面上半にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部にやや斜位の放射状ヘラミガキ。内外面に二次的な被熱・変色あり。	7.5YR5/6　明褐 やや緻密　透明礫～微粒多、白・黒微～粗粒少 軟質	カマド底面に置いた高杯（11）の上に被さり、その上を杯（2）が覆う ほぼ完形 22
2 土師器 杯	口　13.4 高　6.9 最大　13.6	1 と同工品。厚く重い。外面口～体部境に段あり。外面底部に非常に雑なナデ、体部ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部に放射状ヘラミガキ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　透明礫～微粒多、白・黒微～細粒少 軟質	カマド底上 13cm。高杯（11）と杯（1）の上に被さって出土 口 5/6 周、体全周 8、23
3 土師器 杯	口　14.3～15.3 高　5.2	仕上げのナデやケズリを行なわない、粗雑な作り。外面は口縁部に雑なナデの後、体部に斜位ヘラナデ、底部に 1 方向ヘラケズリ。内面は雑なナデの後、口縁部に横位と体部に 1 方向のヘラナデ。	5YR6/6　橙 緻密　赤粗～細粒多、黒・透明微粒少　やや硬質	床上 19cm 口 5/6 周、体全周 3
4 土師器 杯	口　復 14.4 高　残 4.0 最大　復 16.0	外面体部はナナメヘラナデで、やや光沢あり。外面口縁部と内面にヨコナデ後、ヘラミガキ。内面口縁部のミガキはやや疎ら。内外面は炭素吸着している可能性もあるが不確実。	2.5Y3/1　黒褐 やや粗い　白・透明礫～細粒多、黒細粒少 やや硬質	口 1/12 周、体 1/6 周
5 土師器 杯	口　復 15.0 高　残 3.8 最大　復 16.6	外面の口縁部下端に浅い段あり。外面は口縁部ヨコナデ後に疎らなヘラミガキ、体部ヨコヘラケズリ。内面は体部に放射状と口縁部に横位のヘラミガキ。内外面に炭素吸着と、それに加えてさらに内面を漆仕上げしている可能性もある。	7.5Y3/1　オリーブ黒 やや粗い　白粗～細粒多、黒細粒少 硬質	口 1/8 周
6 土師器 杯	口　復 14.0 高　4.5 最大　復 14.2	外面底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ後、疎らなヘラミガキ。口縁部は内外面ヨコナデ後、外面ヨコヘラミガキ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。内面全面と外面上位に漆仕上げ。	5YR6/6　橙 緻密　黒微～細粒と赤細粒少　やや硬質	口～底 1/4 周
7 土師器 杯	口　12.2 高　5.7 最大　13.1	厚く重い。外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ後、体部ヨコヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部多方向ヘラナデ後、放射状ヘラミガキ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白・赤・黒・透明粗～細粒多、白礫少 やや軟質	カマド南側の床上 1 cm 口 5/6 周、体全周 9
8 土師器 杯	口　復 13.6 高　残 4.1	内外面に稜を持たないで口縁部がゆるく外反する。内外面ともに体部ナデ後ナナメヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	5YR6/6　橙 緻密　透明微粒少、赤微～細粒少 やや硬質	カマド底面にある№ 11 の高杯付近で出土 口～体 1/5 周 23
9 土師器 杯	口　復 15.2 高　5.2	外面口～体部境に浅い段あり。外面体部ナデ後、底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内面体部ナデ後放射状ヘラミガキ、内外面口縁部ヨコナデ後内面にヨコヘラミガキ。外面口縁部上半と内面全面に赤彩。外面口～底部の各所に黒く光沢のある煤が付着。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　透明微～細粒多、黒微～細粒と赤・透明細粒少 やや硬質	床上 13cm 口 1/6 周、体 1/4 周 4
10 土師器 高杯	口　復 16.8 高　11.5 脚裾　12.4 脚柱　4.5	杯部と脚裾部の中心が少しずれている。外面は杯上半に雑なナデ、杯下半に横位と脚柱部に縦位のヘラケズリ、脚裾と口縁部の内外面にヨコナデ。外面全面と内面杯部に密なヘラミガキ。脚部内面は上半部タテナデの後に下半部ヨコナデ。外面に 10cm大の黒斑 2 箇所あり。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白・赤礫と細砂少、赤粗粒多、黒・透明細粒少 やや硬質	床上 3cm 口 1/4 周、脚裾 3/4 周、杯底～脚柱全周 1、2
11 土師器 高杯	口　復 11.5 高　11.4 脚裾　9.6	脚部は中実で、その外周に杯体部と脚裾部を成形する。杯口縁部と脚裾部にヨコナデ後、脚柱～脚裾部に縦位と杯部に横位の密なヘラミガキ。杯部内面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラミガキ。脚部下面は中央を凹ませてナデ後、脚裾部にヨコナデ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　褐色粗粒多、透明微粒・黒細粒少、灰色・透明礫微 やや硬質	カマド底面。上に№ 1 と 2 の杯が被さっていた 口 3/5 周 8、23
12 土師器 高杯	口　復 19.6 高　残 4.4	13 と同一個体の可能性あり。口縁部内外面ヨコナデ後、杯部外面ヨコヘラケズリ後疎らなタテヘラミガキ。杯部内面は縦位の後に横位のヘラミガキ。	2.5YR4/6　赤褐 やや緻密　白細粒多、黒・透明細粒と赤粗粒少 硬質	床上 13cm 口 1/6 周 4
13 土師器 高杯	高　残 12.7 脚柱　3.9	12 と同一個体の可能性あり。上半は中実で、脚上端の外周に杯部を成形。下半は中空で長く開く。外面は上半と下半を上方向と下方向にそれぞれヘラケズリ後、裾部にヨコナデと全体に密なタテヘラミガキ。杯内面底部は密な 1 方向ヘラミガキ。脚内面はユビナデ。脚裾部が 1 片あるが接合できない。	2.5YR4/6　赤褐 やや緻密　白細粒多、黒・透明細粒と赤粗粒少 硬質	床上 15cm 脚柱全周 11
14 土師器 高杯	高　残 13.3 最大　復 7.5 脚柱　3.8	上半は中実で、脚上端の外周に杯部を成形する。下半はかなり長い中空。外面は下半の一部が下方向、他は上方向へヘラケズリの後に密なタテヘラミガキ。脚柱部内面はユビナデ、脚下半部内面はヨコナデ。	2.5YR5/8　明赤褐 やや緻密　白細粒多、黒・透明細粒と赤粗粒少　硬質	床上 18cm 脚柱全周 15
15 土師器 高杯	高　残 4.1 脚柱　復 4.6	外面は杯底部ヘラケズリ後脚上端ナデ、脚柱部タテヘラミガキ。杯部内面は 1 方向ヘラミガキ。脚外面と杯内面を赤彩。脚柱部は中実で、稲籾圧痕が粘土中に見られる。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　白・黒・透明細～微粒少　やや軟質	杯 1/2 周、脚 1/4 周



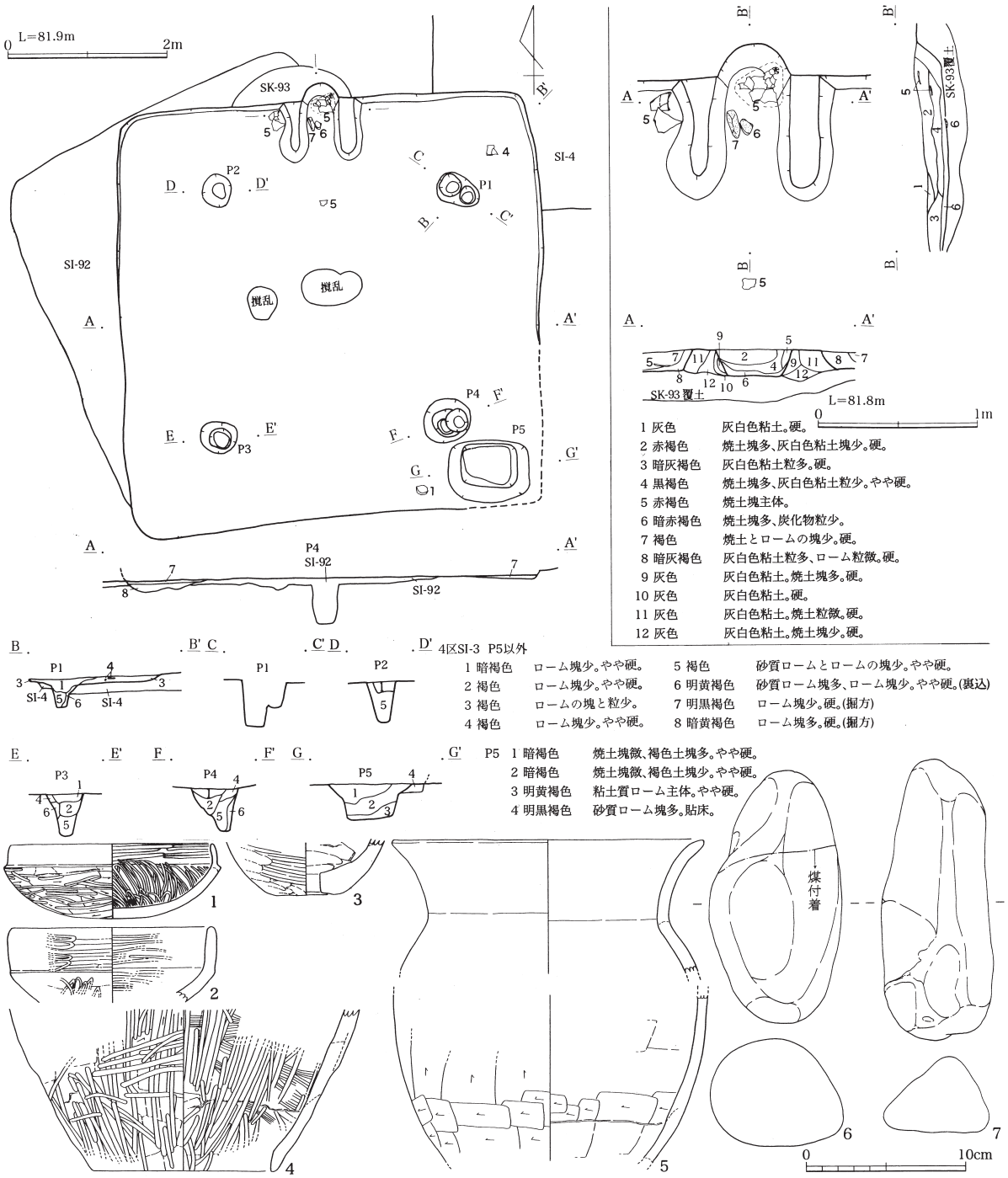
第 105 図　権現山遺跡 4 区 SI-2（2）　遺物

16 土師器 小形土器	口　復 8.8 高　3.9 底　復 6.8	体部外面に斜位の紐積み痕を残す。外底面は無調整で平坦。外面に横位と内面に縦位のユビナデ痕あり。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　黒・透明粗～細粒多、赤粗粒と白細粒少 硬質	口 1/12 周、底 1/3 周
17 土師器 甕	高　残 6.8	18 と同一個体の可能性あり。外面は頸部ヨコナデ後、頸下端部タテヘラナデ、肩部ヨコヘラナデ。内面は肩部ナナメナデ後、頸部ヨコナデ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　透明微粒・灰色粒・白微～細粒多、黒細粒少　やや硬質	床上 10㎝ 頸～肩 1/3 周 10
18 土師器 甕	高　残 7.0 底　復 7.4	17 と同個体の可能性あり。粘土円板を貼り突出させた底面は円周方向に削って凸レンズ状突出面になる。胴外面斜・横位ヘラケズリ。内面は底部多方向ナデ、胴部ヨコヘラナデ。二次被熱の有無は不明確。	10YR5/4　にぶい黄褐 やや緻密　透明微粒・灰色粒・白微～細粒多、黒細粒少　やや硬質	底 5/12 周
19 土師器 甕	口　復 17.8 高　残 6.1	大形壺の可能性もある。口縁端部外面が丸く肥厚する。胴部の外面ナナメヘラケズリと内面ナナメナデ後、口縁部内外面にヨコナデ。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや緻密　透明・白微～細粒と半透明細粒～礫多 やや硬質	口 1/6 周
20 土師器 大形壺	頸　復 23.0 高　残 9.3 最大　復 29.9	内外面ともに、胴部ヨコヘラナデ（部分的にナナメヘラナデ）の後、口～頸部ヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　透明微～細粒多、白細～粗粒少、黒細粒少 やや軟質	カマド北側床上 3cm 頸 1/6 周 2、カマド
21 石器 編物石	長　16.7 幅　6.0 厚　4.6	河原石をそのまま利用。被熱痕や加工痕は見られない。重量 692.8g。	5GY6/1　オリーブ灰 やや粗い　流紋岩 硬質	カマド西側床上 13cm 完形 5
22 土師質 焼粘土塊	長　3.2 幅　2.2 厚　1.5	不整形で草本植物の茎と思われる圧痕が目立ち、粘土塊の中を貫通する。左図の中央を縦に貫通する孔が 1 箇所と右図の面にも横方向の孔が 2 箇所見られる。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　黒・赤細～粗粒 微　やや軟質	完形
23 土師質 焼粘土塊	長　4.0 幅　2.4 厚　1.3	不整形で右図の面は比較的平滑、他は不規則な凹凸が多い。草本植物の茎と思われる圧痕あり。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや粗い　赤・黒細～粗粒 微　やや軟質	完形
24-1 カマド 構築材	長　残 14.8 幅　残 13.0 厚　7.0 重　残 1015.2	24-2 と同一個体だが接点はない。板状石材の側縁部破片。左図の面が均一・明瞭に被熱赤化し、石材には亀裂が進行していて脆い。図示した側面は石材の節理を反映して縞状。両面には石の表面を削った調整痕が不明瞭に残る。右図の面は荒れ、一部に煤が付着。	10YR7/4　にぶい黄橙 粗い　砂岩 軟質	貯蔵穴底上 5㎝とカマド前面床上 1 ～ 4 と南東隅部床上 8㎝一部残 6、7、20、21（未注記）
24- 2 カマド 構築材	長　残 9.2 幅　残 8.1 厚　5.2 重　残 252.4	24-1 と同一個体だが接点はない。長方形板状または直方体状の石材の隅部破片。左図の面だけが均一・明瞭に被熱赤化し、石材全体が脆くなっている。図示した側面は、石材の節理を反映して縞状になり、図示した部分には煤が付着する。左図の面は石の表面を削って調整した痕を残す。右図の面は荒れて調整痕不明。	10YR6/4　にぶい黄橙 粗い　砂岩 軟質	貯蔵穴底上 5㎝とカマド前面床上 1 ～ 4 と南東隅部床上 8㎝隅部残 6、7、20、21（未注記）
25 台石？	長　22.4 幅　13.2 厚　8.4	自然石で、図下端の小破損部は人為加工ではない。両面に平坦面を持ち、図の手前が薄くなる。右図の中央はやや平滑化するが、使用痕かどうかは不詳。弱い被熱痕と樹脂状褐色物質あり。重量 3596g。	2.5Y7/4　浅黄 やや緻密　安山岩 硬質	南部の床上 4cm ほぼ完形 12
26 礫	長　45.3 幅　15.7 厚　11.3	自然石を利用したカマド構築材の可能性あり。中央で 2 片に折れて出土。人為的な加工はない。両端は被熱部分で折損し、熱で亀裂が入って折れたのかもしれない。残存重量 12.7kg。	2.5Y7/3　浅黄 やや緻密　安山岩 硬質	貯蔵穴底上 3㎝と竪穴南部床上 13㎝の各 1 点が接合 一部欠　16、18

4 区 SI-3（第 106 図、写真図版 34 ～ 35・117）

［位置］ 4 区北西の台地平坦面、35.5-11.5、36.0-11.5 グリッド。古墳後期の SI-5・7・11 が西・南・東に、中期の SI-8 が南にある。中期末の SI-4 の南西隅上部を切る。古墳時代の遺構 3 基が SI-92 → SK-93 → SI-3 の順に重複し、本建物が最も新しい。SI-92 は遺物が少ないが炉を持つので中期中葉以前、SK-93 は白色粒（Hr-FA テフラ？）を含むので古墳後期の土坑の可能性がある。

［規模と形状］ 基本的に方形で、西辺（5.35 m）が東辺（5.10 m）より若干長いため、やや歪む。中軸は N-3°-W。北東 - 南西長 5.35m、南東 - 北西長 5.20m。残存壁高は 0.08 ～ 0.10m である。床面はおおむね平坦で傾斜しない。SI－92 と重複する部分は、部分的にロームを主体とした土で貼床を施すなど硬く締まる。



第 106 図　権現山遺跡 4 区 SI-3　遺構・遺物

その他は地山を平坦にして床面とする。主柱穴は４本（P1 ～ P4）。P1 は径 55 × 35 ×深さ 59（31）cm、P2 は径 42 × 36 ×深さ 52cm、P3 は径 47 × 40 ×深さ 55cm、P4 は径 61 × 55 ×深さ 49（39）cm。東側の P1･4 は重複し、柱の据え換えも考えられるが、P1 南東側、P4 西側のピットは西側主柱穴に比べ浅く、主柱を支える補助柱穴かもしれない。柱間は P1-P4 間 2.96m、P2-P3 間 3.11m、P2-P1 間 2.94m、P3-P4 間 3.00m で、ほぼ方形配置。貯蔵穴 P5 は南東隅にある。南壁とほぼ平行する東西軸の長方形で 102 × 80cm、床面から深さ 44cm、底面は 60 × 48cm。壁は底面から 30cm ほどやや外傾してから緩く床に至る。レンズ状堆積の覆土最下層はロームが主体で、１・２層は微量の焼土塊を含む。貯蔵穴周囲に砂質ロームが認められる。

［カマド］北壁中央にある。天井や袖上半は崩れるが、比較的良く残る。両袖幅 104cm、煙道先端から袖先端まで 98cm。袖は SK-93 上に９～ 12 層で作る。主体は灰褐色粘土で、袖内側の９・10 層は被熱赤変が著しい。焚口、火床および煙道立ち上がりまでは、焼土塊多量と炭少量を含む６層を貼る。火床はほぼ平坦で、床面よりわずかに下がる。燃焼部は、焼土の多い流入土の４層、天井内壁の崩れた２層が堆積する。煙道は北壁を約 20cm ほど「U」字状に掘り、火床から煙道は緩く曲線的に上がる。掛口下と思われる部分で支脚に使用した２個の細長い河原石が出土した。

［覆土］レンズ状の自然堆積で、全体にローム粒が多い。

［遺物出土状況］南東部床面で杯（１）、北東部床面で甑（４）、カマドにかけていたと見られる状況で土師器甕（５）が出土した。カマドのほぼ火床面レベルで、支脚の可能性がある河原石２点が出土した。

［出土遺物］遺物は少ない。全形が残る遺物は杯（１）のみで、他は破片ばかりである。破片は甕と思われるものが主体で、甑と杯が少量ある。SK-93 と SI-92 を切っているので、SI-92 の遺物が混入している可能性も考えられる。図示した以外の遺物は、土師器杯 23 点（115g）、甑５点（264g）、甕 82 点（574g）、合計 110 点（953g）である。１は炭素吸着で黒色処理を行う薄手の杯で、搬入品の可能性もある。３は底面が単孔で、一般的な甑と異なり外面がハケ調整。５はおそらく口径と胴部径が同じくらいの大きさになる古墳後期中頃の甕。小形甑は、４区では SI-3・12・18・24・27、SG1 区では SI-7 などに例がある。

第 40 表　権現山遺跡 4 区 SI-3　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　12.8 高　4.7 最大　13.7	薄く軽い。外面は口縁部ヨコナデ後、底部１方向と体部横位のヘラケズリ。内面はヨコナデ後、底部１方向、体部斜位、口縁部横位の密なヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。	5YR6/6　橙 やや緻密　透明・黒粗～細粒多、白・灰色細粒少 やや硬質	南東部床面直上で、やや床にめり込む 口 7/12 周、体 2/3 周 1
2 土師器 杯	口　復 12.6 高　残 4.7 最大　復 12.8	厚く重い。外面口～体部境に浅い段あり。外面体部はおそらくヘラケズリ（横位？）の後にタテヘラミガキ。外面口縁部と内面全面にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面体部上位より上方と内面全面に漆仕上げ。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒細粒と赤粗粒多、白・透明細粒少 やや硬質	口 1/12 周、体 1/6 周
3 土師器 小形甑	高　残 3.4 底　復 3.4 孔　復 1.8	単孔と推定して図上で反転復原した。外面は体部下端～底面ナデ、体部ナナメハケ。内面は円周方向のヘラケズリ後ナデ。	2.5Y5/2　暗灰黄 やや緻密　白・黒・透明細～微粒少 硬質	底 1/4 周
4 土師器 甑	高　残 10.1 底　復 11.5	外面は胴部下端タテナデと胴部タテおよびヨコヘラケズリの後、ヘラミガキ（主に縦位の後に横位）。内面は胴部下端ヨコナデと積み上げ休止面付近に横～斜位ハケメの後、全体に密なタテヘラミガキ。内面にやや黒斑あり。	2.5YR6/8　橙 緻密　赤粗粒多、白・赤・黒・透明細粒少 硬質	北東部床面 底 1/12 周、胴 1/6 周 2
5 土師器 甕	口　復 19.6 高　残 18.9 最大　復 19.7	破片が不足して接合できないが、口縁部径と胴部最大径が同程度の大きさになると思われる。胴部下位は外面タテヘラケズリと内面ヨコヘラナデ後、内外面の積み上げ休止面周辺を薄くするためのヨコヘラケズリ。肩部は磨滅して調整不詳。口縁部内外面にヨコナデ。土器全体が被熱で脆くなっている。	10YR7/4　にぶい黄橙 粗い　白・透明粗～微粒多、黒細粒少 軟質	カマド火床面上９～18cmとカマド周辺の床面直上が接合 口 1/4 周、胴 1/4 周 3、4、8、9
6 礫	長　16.0 幅　8.3 厚　7.1	自然の河原石。図の中位より下側の範囲で、石の全周の表面に煤が薄く付着する。加工痕は見られない。重量 1193.4g。	5Y5/2　オリーブ灰 やや粗い　安山岩 硬質	カマド火床面上 1cm 完形 5
7 礫	長　17.6 幅　6.7 厚　5.0	自然の河原石。全体がやや被熱して桃色～赤色化し、図の下半部ほどその程度が強くなる。加工痕は見られない。重量 715.7g。	2.5Y6/2　灰黄 やや緻密　流紋岩 硬質	カマド火床面上 完形 6

4 区 SI-4（第 107 図、写真図版 35・117）

［**位置**］ 4 区北西の台地平坦面、36.0-11.5 グリッド。古墳時代遺構は、中期末の SI-10・11 が東と南東に、古墳後期の SI-1 が北に、円筒形土坑 SK-37・45・102 と土坑 SK-101 が東西にある。後期初めの SI-3 に南西部を切られる。

［**規模と形状**］ ほぼ方形で中軸は N-90°-E。東西長 4.33m、南北長 4.55m である。壁は外傾し、残存高 0.15 ～ 0.48m。床面はおおむね平坦である。掘方は中央部より壁際がわずかに深い。南東壁際が深さ 10cm ほどで、直径 1 m ほどの略円形の窪みがある。床面から 3 ～ 5cm の厚さでロームが多い暗黄褐色の 7 層でほぼ全体を貼床する。主柱穴は 4 本（P1 ～ P4）。P1 は径 23 × 22 ×深さ 37cm、P2 は径 29 × 25 ×深さ 26cm、P3 は径 30 × 25 ×深さ 40cm、P4 は径 25 × 23 ×深さ 41cm。北西の P2 が他の 3 本に比べ 10 ～ 15cm 浅い。柱間は P1-P4 間 1.64m、P2-P3 間 1.68m、P2-P1 間 1.93m、P3-P4 間 1.88m で、南北間より東西間が 20 ～ 30cm 広い。壁溝 D1 が東壁カマド部以外を全周する。断面「U」字状で幅 15cm、床面から深さ 3 ～ 5cm。間仕切溝は北半の東西壁際と北壁際で各 1 本の D2 ～ D4 を確認した。D2・D4 は掘方で確認し、主柱穴に付随して直線的に並ぶ。北壁の D3 は、P2 から若干中央に離れる。断面「U」字状で、長さ 70 ～ 100cm、幅 12 ～ 20cm、床面から深さ 8 ～ 22cm。貯蔵穴 P5 は南東隅にある。南壁とほぼ平行する東西軸の隅丸長方形で 91 × 61cm、床面から深さ 29cm で、平坦面内側の規模は 70 × 48cm。底面は隅丸長方形で、壁はやや緩く外傾する。覆土は下層ほどロームが多く、自然堆積。

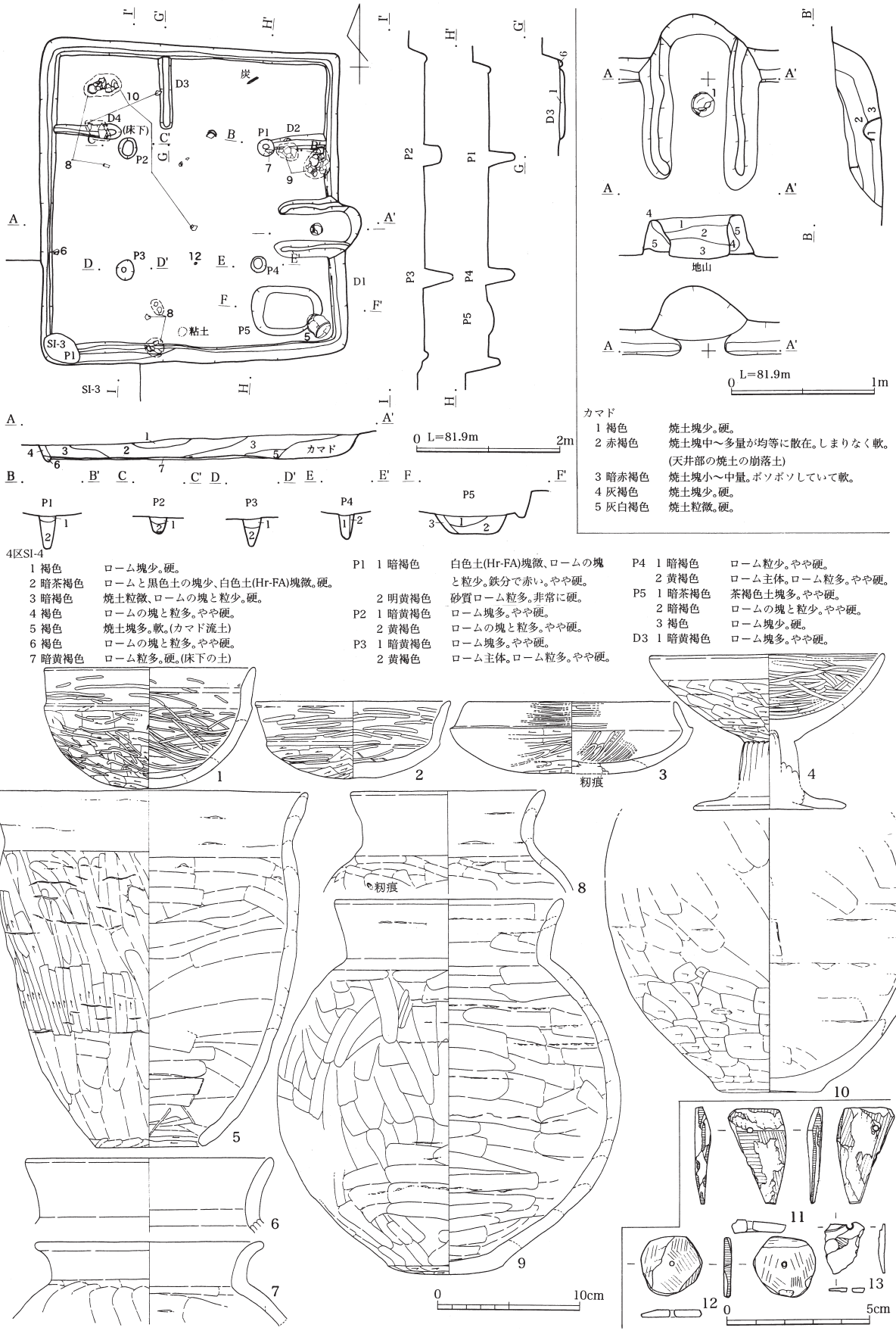
［**カマド**］ カマドが東壁中央にある。両袖間 80cm、袖の長さ 75 ～ 80cm、煙道は壁外へ 30cm ほど「U」字状に掘り、東壁ラインから曲線的に上がる。天井や袖上半は崩れるが、比較的良く残る。袖は地山を 5 cm 前後掘り残して基部とし、上に灰白色粘土主体の 4・5 層で作る。袖内面は被熱・赤変部が多い。主体は灰褐色粘土の 8 層で、左袖部外側にのみ粘土にロームが混じる 9 層がある。2・3 層は天井崩落土で、焼土が多くボソボソし、使用頻度の高さが窺える。ほぼ中央で鉢形土器が倒立して出土し、支脚に使ったもので、その上が掛口と予想される。底面はほぼ平坦で、鉢形土器の前面が赤化していることから、ここが火床と考えられる。

［**覆土**］ 5 層で、おおむねレンズ状に堆積する。全体にローム粒を少し含み、床面に近い 3 層に焼土粒をわずかに含む。

［**遺物出土状況**］ 残存度の高い土師器甕（9）がカマド北側床面でつぶれている。 5 は南東隅部の床付近。カマドの火床面に 1 が伏せてある。

［**出土遺物**］ 遺物はやや少ない。図示した以外の遺物は計 176 片（1,713g）。土師器甕が主体で（131 片・1,391g）、胴部形は球胴のものばかりである。土師器杯は少なく（45 片・322g）、高杯の可能性がある破片もごくわずかに見られた。赤彩のある破片や、明確に壺とわかる破片はない。図示した他に、箔？を貼った鉄製品が 1 点あり、これは後世の遺物が混入したものとみられる。

鉢および杯類は橙色に発色する土で製作してよく磨くもので、3 だけはさらに漆仕上げも行う。3 の胎土中や 8 の外面に見られるような稲籾痕は、4 区では SI-12 の鉢、SI-14 の杯・壺・甑、SI-16・27 の高杯、SI-59 の粗製鉢にも見られ、SG1 区 SI-5 などにもある。短脚高杯は脚が中実化するので、4 が中空になる点は古い要素。5 は磨きを省略した珍しい甑。土師器甑は内面をよく磨くのが通例で、古墳中期後葉～後期前半では外面まで密に磨くものが一般的である。6・8・9 は外面に煤の付着する甕で、カマドというよりは炉で使用したと考えたいような付着状況である。滑石製模造品は、有孔円板・剣形品と破損品（小破片）がある。表裏面には研磨が行き届かない剥離痕を多く残し、また側面を横方向に研磨する点などからみて、かなり省力化が進んだ新しい段階の遺物である。4 区では SI-4・16・24・29 と遺構外（第 181 図）に石製模造品、SI-14 などに粘板岩の破片や砥石がある。南側では SG1 区 SI-5 等に模造品がある。



カマド
1 褐色　焼土塊少。硬。
2 赤褐色　焼土塊中～多量が均等に散在。しまりなく軟。(天井部の焼土の崩落土)
3 暗赤褐色　焼土塊小～中量。ボソボソしていて軟。
4 灰褐色　焼土塊少。硬。
5 灰白褐色　焼土粒微。硬。

4区SI-4
1 褐色　ローム塊少。硬。
2 暗茶褐色　ロームと黒色土の塊少、白色土(Hr-FA)塊微。硬。
3 暗褐色　焼土粒微、ロームの塊と粒少。硬。
4 褐色　ロームの塊と粒多。やや硬。
5 褐色　焼土塊多。軟。(カマド流土)
6 褐色　ロームの塊と粒多。やや硬。
7 暗黄褐色　ローム粒多。硬。(床下の土)

P1 1 暗褐色　白色土(Hr-FA)塊微、ロームの塊と粒少。鉄分で赤い。やや硬。
2 明黄褐色　砂質ローム粒多。非常に硬。
P2 1 暗黄褐色　ローム塊多。やや硬。
2 黄褐色　ロームの塊と粒多。やや硬。
P3 1 暗黄褐色　ローム塊多。やや硬。
2 黄褐色　ローム主体。ローム粒多。やや硬。
P4 1 暗褐色　ローム粒少。やや硬。
2 黄褐色　ローム主体。ローム粒多。やや硬。
P5 1 暗茶褐色　茶褐色土塊多。やや硬。
2 暗褐色　ロームの塊と粒少。やや硬。
3 褐色　ローム塊少。硬。
D3 1 暗黄褐色　ローム塊多。やや硬。

第 107 図　権現山遺跡 4 区 SI-4　遺構・遺物

第 41 表　権現山遺跡 4 区 SI-4　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口　14.8 高　8.5	外面は肩部に強い段があり、底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面体部ヘラナデ、内外面口縁部にヨコナデ。外底面以外の内外全面に横またはやや斜位のヘラミガキ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　黒・透明微～細粒少、白微～粗粒少 やや硬質	カマド火床面に伏せて出土 完形 K19
2 土師器 杯	口　復 13.7 高　5.4	口縁端を少し外に折る。外面は体部横位・底部 1 ～ 2 方向ヘラケズリ、内面は体部多方向ヘラナデ。内外面体部上位に少量のヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後、やや密なヨコヘラミガキ。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　赤粗～細粒多、黒・白・透明細粒少 やや硬質	北部の床面直上 口 1/3 周、体 2/3 周 6
3 土師器 杯	口　復 14.6 高　5.0 最大　復 17.0	外面は底部に 1 ～ 2 方向と体部に横位のヘラケズリ。外面上位ヨコヘラミガキ。内外面口縁部はヨコナデ後、密なヨコヘラミガキ。内面体部に放射状ヘラミガキ。内外全面に漆仕上げ。	7.5YR5/6　明褐 やや緻密　赤・白・灰色細粒多、白礫微　やや硬質	口 1/6 周
4 土師器 高杯	口　16.2 高　推約 11 脚裾　復 10.6	脚部下位に接点がないので器高は推定。外面は杯部に横～斜位と脚部に縦位のヘラケズリ。脚裾部内外面と口縁にヨコナデ。杯部内面は主に円周方向の密なヘラミガキ。脚柱部内面はタテナデ。	2.5YR5/8　明赤褐 やや緻密　黒細粒と赤粗粒多、白・透明微粒少 やや硬質	カマド付近 口 7/12 周、脚 1/2 周、脚裾 1/3 周 K
5 土師器 甑	口　22.3 高　24.8 底　7.4 孔　6.8	器面調整がやや粗雑。外面は下部にナデ、上部にナデとヘラナデの後、中位にタテヘラケズリ。内面はヨコヘラナデ。内外面口縁部にヨコナデ、内面下端と外底面にヨコヘラケズリ。通常の甑の内面のミガキを省略したような製品。内面全体に暗褐色の汚れ付着。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・透明微～粗粒多、赤・黒細粒微 やや硬質	南東隅部の床上 2cm 一部欠 12
6 土師器 甕	口　復 16.0 高　残 5.8	内外面ともに胴部ヘラナデ後、口～頸部ヨコナデ。残存する外面全体に煤付着。	2.5Y3/1　黒褐 やや粗い　白・黒・透明細粒多　やや硬質	床上 4cm 口 1/36 周、頸 1/6 周 20
7 土師器 甕	口　復 17.0 高　残 5.2	内外面ヨコナデ。外面全体に黒褐色の付着物が薄く見られる。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや粗い　赤粗粒と白・灰色礫少、黒・白・透明細粒少 やや軟質	P1 底上 30cm 口 1/4 周 15
8 土師器 甕	口　復 13.6 高　残 7.2	破片が不足し、胴部は接合できない。内外面ともに胴部ナデ後、口～頸部にヨコナデ。胴部外面に籾圧痕が 1 箇所付着。肩部外面に煤が多く付着する。	7.5YR4/6　褐 やや粗い　透明細粒多、黒・白・赤細粒と白礫少 やや硬質	南西部の床上 4 ～ 8 cmが接合 口 1/4 周 9、10、11
9 土師器 甕	口　復 16.0 高　26.2 底　復 8.1 最大　復 24.0	外面は胴部にやや雑なヘラナデ後、底部は円周方向のヘラケズリで中央部が突出する。内面は胴部ヘラナデで粘土紐接合痕顕著。内外面口縁部にヨコナデ。外面肩部（底面から上 11 ～ 18cm）に煤が多く、内面中位（底面から上 2 ～ 16cm）に帯状のコゲ痕。	2.5Y7/3　浅黄 やや粗い　黒・白・赤・透明・灰色粗～細粒多、白・赤・灰色礫少　やや軟質	北東部の床直上 口 1/3 周、底 1/2 周、胴 2/3 周 14、16、P1 南東際
10 土師器 甕	高　残 19.1 底　7.0 最大　復 22.6	胴部は内外面に横および斜位ヘラナデ後、外面下位にヨコヘラケズリ。外底面は不定方向ヘラナデで、少し凹み底になる。外面では底から上 7 ～ 11cmの範囲に帯状の煤が付着し、それよりも下部は被熱赤化。内面は底から上 2 ～ 8cmの範囲で約半周にコゲ付着。	2.5Y7/4　浅黄 やや緻密　白・透明粗～細粒と黒細粒多 やや軟質	北西部の床上 1 ～ 3 cmと間仕切溝底より上 11cmが接合 底全周、肩 1/3 周 1、2、4、7
11 石製模造品 剣形品	長　3.4 幅　2.0 厚　0.50 重　3.5	図示した状態で完成品と見られる、粗雑な品。表面は 3 方向、裏面は 1 方向の研磨痕。両面ともに形割工程の剝離面を広く残し、高い部分だけが研磨されている。側面研磨は横方向で、図の左側面は研磨が部分的。片面穿孔で、裏面に穿孔剝離痕あり。初孔径 2.00㎜、終孔径 1.70㎜。	10Y3/1　オリーブ黒 緻密・軟質で節理の発達した滑石	完形
12 石製模造品 有孔円板	長　2.0 幅　2.2 厚　0.27 重　2.1	表裏面はそれぞれ 2 ～ 3 方向への研磨痕が見られる。また、両面ともに形割工程の剝離面を少し研磨しただけの面をそれぞれ 1 面ずつ広く残す。側面研磨はすべて横方向。片面穿孔で、裏面に穿孔剝離痕あり。初孔径・終孔径ともに 1.45㎜。	5GY4/1　暗オリーブ灰 緻密・軟質で節理の発達した滑石	南部床上 5cm 完形 8
13 石製模造品 不明	長　残 1.7 幅　残 1.4 厚　残 0.2 重　残 0.5	製品の一部が節理に沿って破損剝離した小破片。図示した面の中央に研磨部がわずかに残る。これ以外はすべて破面。孔径 1.95㎜。	10Y4/1　灰 緻密・軟質で節理の発達した滑石	小破片

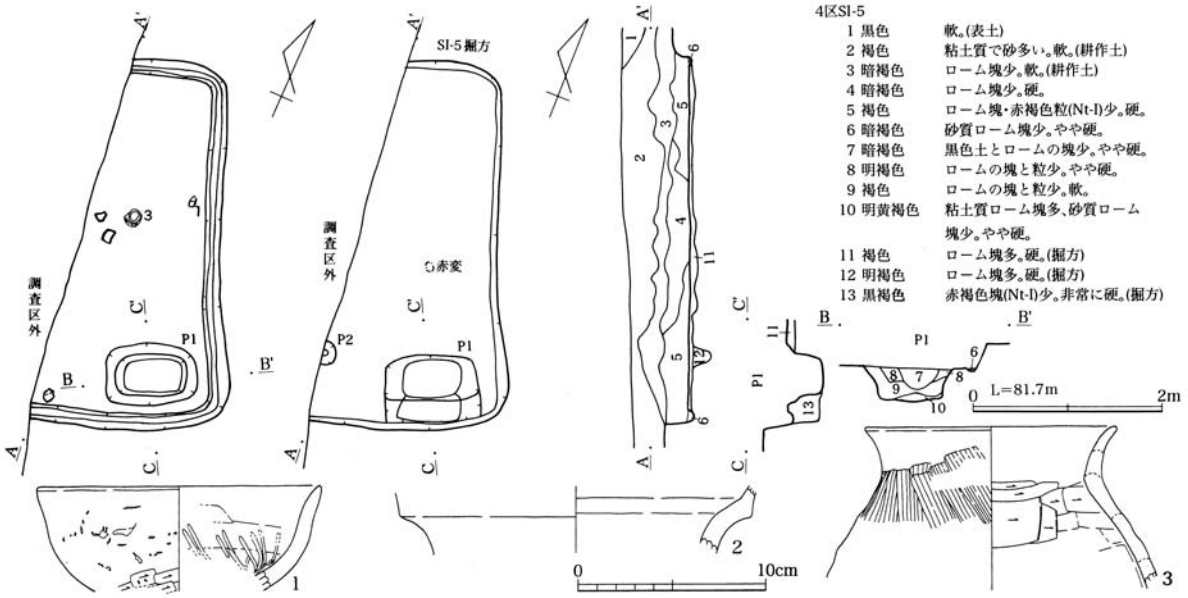
4 区 SI-5（第 108 図、写真図版 35・36）

[**位置**] 4 区北西の台地平坦面、35.5-11.0、36.0-11.0 グリッド。南から東に古墳中期の SI-6・8 と後期の SI-3・7、時期不詳の SI-92 がある。重複はない。西半は調査区外。

[**規模と形状**] 東側 1/3 のみの調査で全体は不明だが、方形と推定される。中軸は N-22°-W。南北長 3.92m、東西は残存長 2.08m である。壁は直線的に外傾し、残存高 0.16 ～ 0.22m。床面はおおむね平坦で、傾斜しない。掘方底は緩い凹凸があり、床面から深さ 3 ～ 6 cm。ローム塊が多い暗茶褐色の 11 層でほぼ全体を貼床する。床面では柱穴は確認されなかったが、掘方底面では、南壁寄りで 1 本を確認した（P2）。径約 24cm で、掘方底面から深さ 20cm である。壁溝が調査範囲内で全周する。断面「U」字状で幅は約 20cm、床面から深さ 3 ～ 5 cm。貯蔵穴 P1 が南東隅にある。東西軸の長方形で 98 × 66cm、床面から深さ 34cm、底面は 60 × 35cm。壁は底面から 20 ～ 30cm ほどほぼ垂直に上がってから緩く床に至る。覆土はレンズ状堆積。最下層はローム主体で、上層ほどロームが少ない。南辺には同じ幅、同じ深さで壁際までの掘方を確認した。今市軽石を少量含む黒褐色の 13 層で非常に硬く締まる。

[**火処**] 火処は検出されていない。

[**覆土**] 壁溝を含め 3 層（4 ～ 6 層）で、ほぼレンズ状に堆積する。



第 108 図　権現山遺跡 4 区 SI-5　遺構・遺物

［遺物および出土状況］主な破片はいずれも床面から 9 ～ 18cm 浮く。遺物はやや少ない。図示した以外の遺物 54 片（842g）の内訳は土師器壺・甕が主体で（38 片・730g）、土師器杯が少し混じり（15 片・100g）、高杯脚部が 1 片だけある（12g）。杯類は大半が橙色の胎土である。球胴甕破片や、受口状の壺（２）から中期後葉～末葉と見られる。受口状の大形壺は本遺跡 4 区 SI-27・29 や、北関東自動車道路調査区のＡ区 SI-16,23,36,80,253,479,493（谷中・大島編 2001）などにあり、SG1 区 SI-13 出土例も類似する（第 221 図 19）。また、近辺では杉村遺跡 GN1 区 SI-2（本書の第 16 図 8）・立野遺跡（５区 SI-60,67,68 と 2000 年度確認調査区 SI-10, 内山 2005）・砂田遺跡 4 区 SI-15・29（津野・篠原・今平 2007）・成願寺遺跡 31・32・46・90 号住居（篠原・杉浦他 2000）・宇都宮市塚山西古墳（常川他 1979）・権現山北遺跡（久保他 1979）にもある。ハケ調整甕（３）は使用により胴部が被熱・劣化している。やや長胴化しているので古墳時代後期初頭に下る可能性もある。

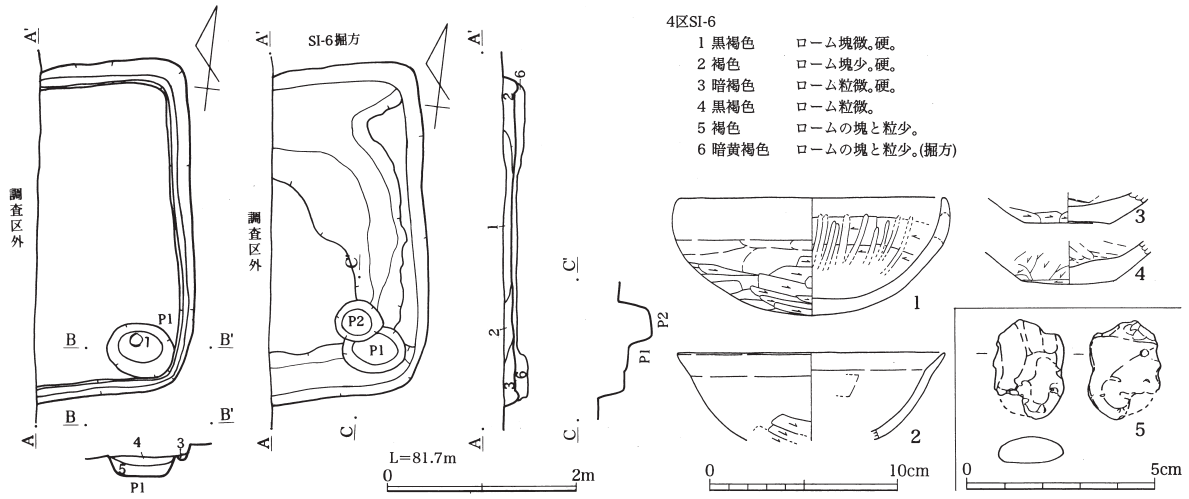
第 42 表　権現山遺跡 4 区 SI-5　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 14.8 高　残 5.5	外面は下位にヨコヘラケズリ。上～中位はヨコナデしているが、かなり弱いので粘土紐に生じた小さな皺や亀裂が残る。内面は口縁部ヨコナデと体部ヨコヘラナデの後、体部に疎らなナナメヘラミガキ。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　透明粗～細粒と白細粒多、黒細粒・赤粗粒少　やや軟質	床上 16cm 口 1/6 周 5
2 土師器 大形壺	口　復約 19.5 高　残 3.8	口縁部が受口状。内外面のヨコナデは、内面頸部が少し雑で内面口縁部と外面全体が丁寧。外面に暗褐色の汚れが薄く付着する。	10YR5/4　にぶい黄橙 やや緻密　白・透明粗～細粒と黒細粒多、赤粗粒・白礫少　やや硬質	頸 1/6 周
3 土師器 甕	口　13.3 高　残 8.6	外面は口～頸部ヨコナデ後、胴部ナナメハケを施して、頸の一部には再度ヨコナデを施してハケメを消す。内面は口～頸部ヨコナデと胴部ヘラナデ後、肩部ヨコヘラケズリ。胴部外面が脆弱化しているのは被熱によると思われる。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや粗い　白礫～細粒多、黒・透明・半透明礫～細粒多　やや軟質	床上 7 ～ 12cm 口全周 4

４区 SI-6（第 109 図、写真図版 36・117）

［位置］４区北西部（調査区西端）の台地平坦面、35.0-11.0、35.5-11.0 グリッドに所在する。同じく中期後葉の遺構は、東方にある円筒形土坑群（SK-64・97・100・114）や、南方の SI-16・20 がある。近接する竪穴建物は、古墳中期後葉から後期前葉の SI-5・7・9 が北・東・南東にある。重複する遺構はない。西半は調査区外。

［規模と形状］南東隅が丸みを持つが、ほぼ方形。中軸は N-7°-W。南北長 3.52m、東西は残存長 1.70m。壁は直線的に外傾し、残存高 0.16 ～ 0.20m。床面はおおむね平坦だが、壁周辺より中央がわずかに高い。



第 109 図　権現山遺跡 4 区 SI-6　遺構・遺物

掘方は、中央より壁周辺が幅広く浅い溝状に掘られる形状で、床面から深さ 5 ～ 12cm。ローム塊が多い明褐色の 6 層でほぼ全体を貼床する。

床面では柱穴は確認されなかったが、掘方底面では、貯蔵穴 P1 に重複する形で 1 本を確認した（P2）。径 52 × 44cm ほどで、掘方底面からの深さ 32cm である。調査範囲内で全周する壁溝は、幅 12 ～ 25cm の断面「U」字状で、深さは床面から 2 ～ 4cm である。南東隅で周溝に接する貯蔵穴 P1 は、東西に長い楕円形で 70 × 56cm、床面から深さ 22cm。P1 の底面は 48 × 34cm の楕円形で、壁はなだらかに床に至る。P1 の覆土はレンズ状に堆積し、下層のほうがロームの混入が多い（土層断面 B-B′ の 5 層）。

［火処］ 調査範囲内では火処は確認されていない。中期後葉の建物跡なので炉を持つことが予想されるが、断面 A-A′ の土層中でも焼土粒は認められていない。

［覆土］ 覆土は 3 層で、おおむねレンズ状に堆積する。

［遺物および出土状況］ 遺物はきわめて少ない。図示した以外の遺物は 25 片・254g で、器種は土師器甕（11 片・155g）と土師器杯（14 片・99g）がある。全形を知ることができる個体は古式の須恵器模倣土師器杯（1）だけで、南東隅の貯蔵穴底面からわずかに浮く。最新段階の内斜口縁土師器杯破片が見られる（2）。また、焼粘土塊が 1 点ある（5）。

第 43 表　権現山遺跡 4 区 SI-6　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　14.1 高　6.2 最大　14.6	外面は体部ナデ後に底部 1 方向と体部横位のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ後、内面体部ヨコヘラケズリと放射状ヘラミガキ。内面下部は使用で磨滅して調整が不明瞭。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　白・透明微～粗粒と黒細砂多、赤細粒微 軟質	貯蔵穴底上 2cm 口 3/4 周、体全周 1
2 土師器 杯	口　復 14.2 高　残 4.6	外面は体部ナデ後底部ヘラケズリ、内面体部ナデまたはヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤微～粗粒多、白・透明微粒微 やや硬質	口～体 1/5 周
3 土師器 杯	高　残 1.6 底　復 4.6	平底でわずかに中央が凹む。外面は胴部下端ヘラケズリ、底部はおそらくケズリ後にナデ。内面は底部にヘラナデか。被熱使用痕は見られない。	7.5YR5/6　明褐 粗い　白・透明微～細粒多、赤・黒細粒少 やや軟質	底 1/4 周
4 土師器 甕	高　残 2.3 底　復 5.0	平底だが中央部が突出気味になるような丸味を持つ。外面は底部に円周方向と胴部に斜位のヘラケズリ。内面は底部に斜放射状と胴部に斜位のナデ。	10YR4/2　灰黄褐 やや粗い　透明・白微～細粒と黒細砂少 やや硬質	底 1/4 周
5 土師質 焼粘土塊	長　2.6 幅　1.9 厚　0.8 重　残 2.5	不整形にこねた状態のままで、ナデなどの調整は行わずに焼成されている。植物質の圧痕なども認められない。	7.5YR6/6　橙 緻密　白・黒・透明細粒微 やや硬質	1/8 欠損

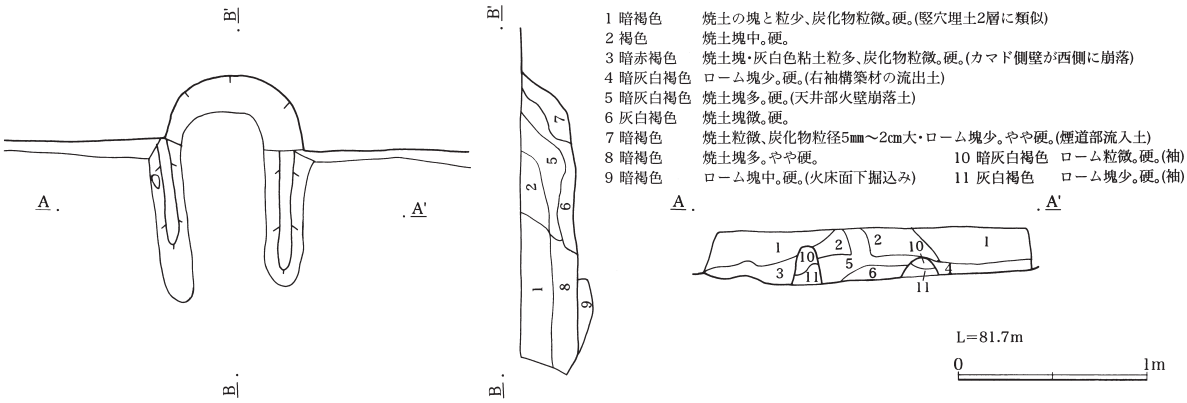
４区 SI-7（第 110 ～ 112 図、写真図版 36 ～ 37・117 ～ 118）

［位置］ ４区北西部の台地平坦面、35.0-11.5、35.5-11.5 グリッド。古墳中期末から後期初めの SI-5・9・11・13 が北西・南・北東・南東にある。周辺に古墳中期の SI-6 や古墳後期の SI-3・12 もある。SI-92・54 は時期不明。北壁際中央付近で古墳中期後半の SI-8 を切る。北東隅部と東壁に時期不明の SB-153 の柱穴を２本確認した。SI-7 の貼床除去後に SB-153 の北西柱穴 P2 を記録しているので SB-153 が古い可能性もあるが、SB-153 の南西柱穴が SI-7 を切るという所見のほうを採用するべきと思われる。

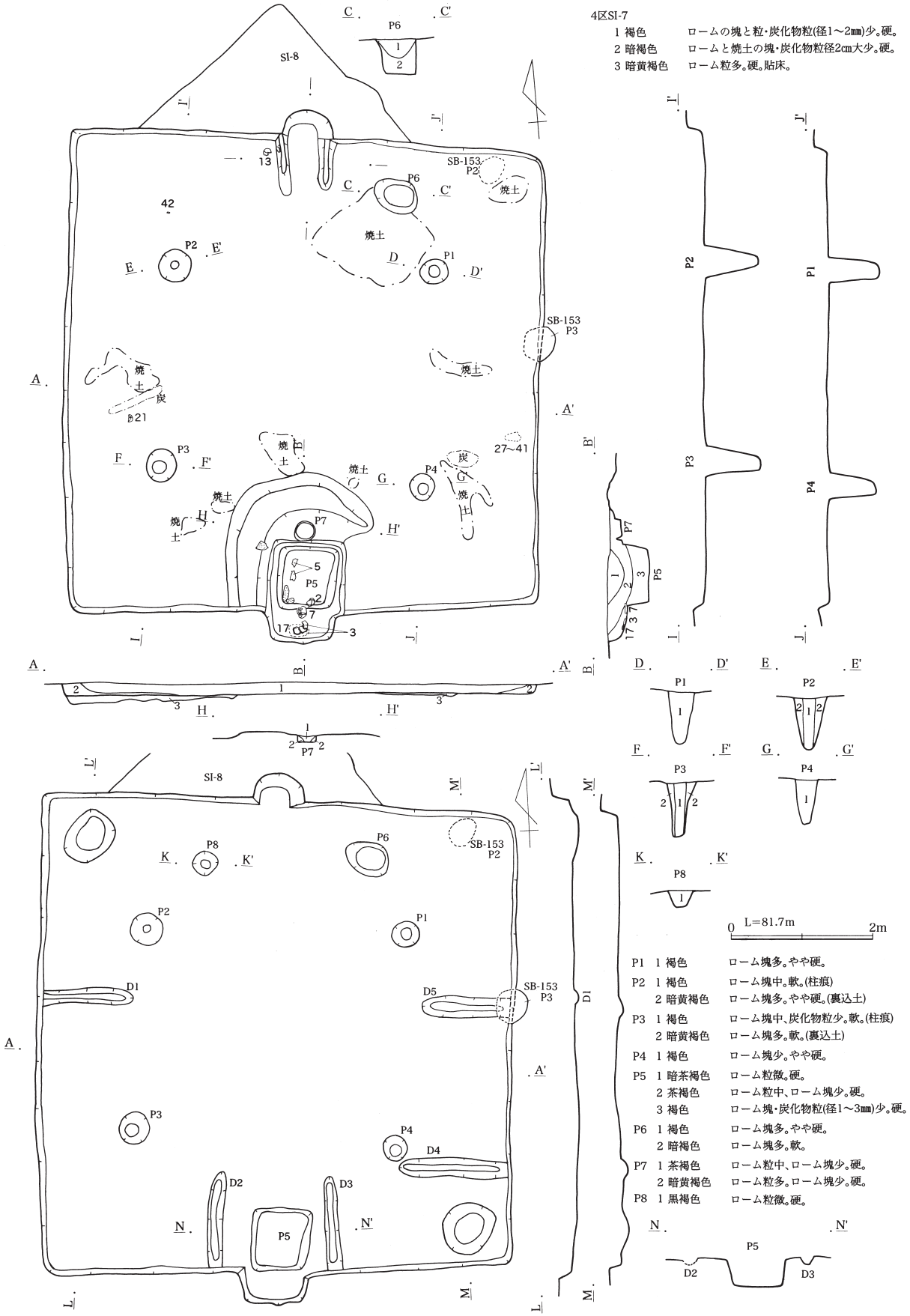
［規模と形状］ 方形で中軸は N-5°-E。東西長 6.78m、南北長 6.72m。壁は直線的に外傾し、残存高 0.12 ～ 0.24m。床面はおおむね平坦だが、西側に若干傾斜する（東西壁際壁中央で比高約 10cm）。主柱穴をそれぞれ結んだ線の内側（内区）が硬化し、壁際は軟弱である。P6 南をはじめ外区の床面直上に、焼土集中部が確認されている。掘方は中央部より西壁際が５cm ほどわずかに深い傾向がある。北西と南東隅は、径 80 ～ 100cm・深さ 10cm ほどの円形に浅く窪む。掘方底は緩い凹凸があり、ローム粒が多い暗黄褐色の３層で硬く埋め戻す。主柱穴は４本（P1 ～ P4）。P1 は径 40 × 36 ×深さ 78cm、P2 は径 48 × 46 ×深さ 75cm、P3 は径 46 × 42 ×深さ 79cm、P4 は径 38 × 34 ×深さ 67cm。P2・3 で柱痕を確認した。南東の P4 が小さくやや浅い。柱間は P1-P4 間 3.08m、P2-P3 間 2.86m、P2-P1 間 3.68m、P3-P4 間 3.76m で、南北間より東西間が 70 ～ 80cm 広い。

張出ピット P5 が南中央にある。張出部は隅丸方形で、南壁から南端まで 40cm、幅は壁付近で 110cm、南端で約 83cm。張出部内側に、床面と同じ高さの幅 40cm 前後の平坦面を設ける。ピット本体は南北軸の長方形で 140 × 110 ×床から深さ 56cm。底は平坦で、壁は直線的に外傾する。自然堆積で廃絶時に開口していたと思われ、３層に炭を少量含む。西～北側に幅 60 ×高５～ 10cm のカマボコ状土堤が巡る。南壁の張出土坑は、４区 SI-14・21、SG1 区 SI-18 にある。P5 の北に接する入口ピット P7 は円形柱穴状で径 32 × 28 ×深さ 10cm。覆土は不明である。間仕切溝は西壁際１本、東と南の壁際に各２本の計５本を床面で確認した（D1 ～ D5）。D1・5 は東西壁中央で直線的に並ぶ。D4 は南東主柱穴 P4 に付随する位置。D2・3 は張出ピットを挟んで平行する。断面「U」字状で長 130 ～ 150cm・幅 20 ～ 30cm、床から深さ４～ 10cm。カマド南東 60cm にある貯蔵穴 P6 は東西軸の楕円形で 62 × 48cm、床から深さ 50cm、底面は径 41 × 32cm の平坦な楕円形。壁はほぼ垂直で、西壁上方が崩れてややなだらかになる。覆土はローム塊が多く、２層より１層がやや硬い。張出ピットを持つ建物は別に貯蔵穴を持たないことが普通だが、この建物は両者を持つ。張出ピットも含め複数貯蔵穴を持つ建物は４区 SI-27 などがある。

［カマド］ 北壁中央にある。両袖間 82cm、袖の長さ 75cm、煙道は壁外へ 35cm ほど「U」字状に掘る。ローム塊を少量含む灰白色粘土主体の７・８層で袖を作る。袖内面は被熱・赤変部が多い。５・６層は灰白色粘土が多く、天井崩落土であろう。火床は不明瞭だがほぼ平坦で、床よりわずかに低い。火床から煙道は緩く曲線的に上がる。西袖下にカマド構築前の深さ 5cm 程の浅い床面の掘方がある。



第 110 図　権現山遺跡 4 区 SI-7（1）　遺構



第 111 図　権現山遺跡 4 区 SI-7（2）　遺構

［覆土］おおむねレンズ状堆積。炭粒少量と、２層に焼土塊少量を含むので、火災か焼却処理後に廃絶した可能性がある。

［遺物出土状況］カマド南東の貯蔵穴および南側張出ピットと、カマド周辺に遺物が多い。13 はカマドの西側で出土した高杯脚部で、被熱して荒れているので、支脚に使った可能性もある。残存度の高い鉢（15）がカマド南東の貯蔵穴 P6 で出土した。東壁際で臼玉が纏まって出土した。

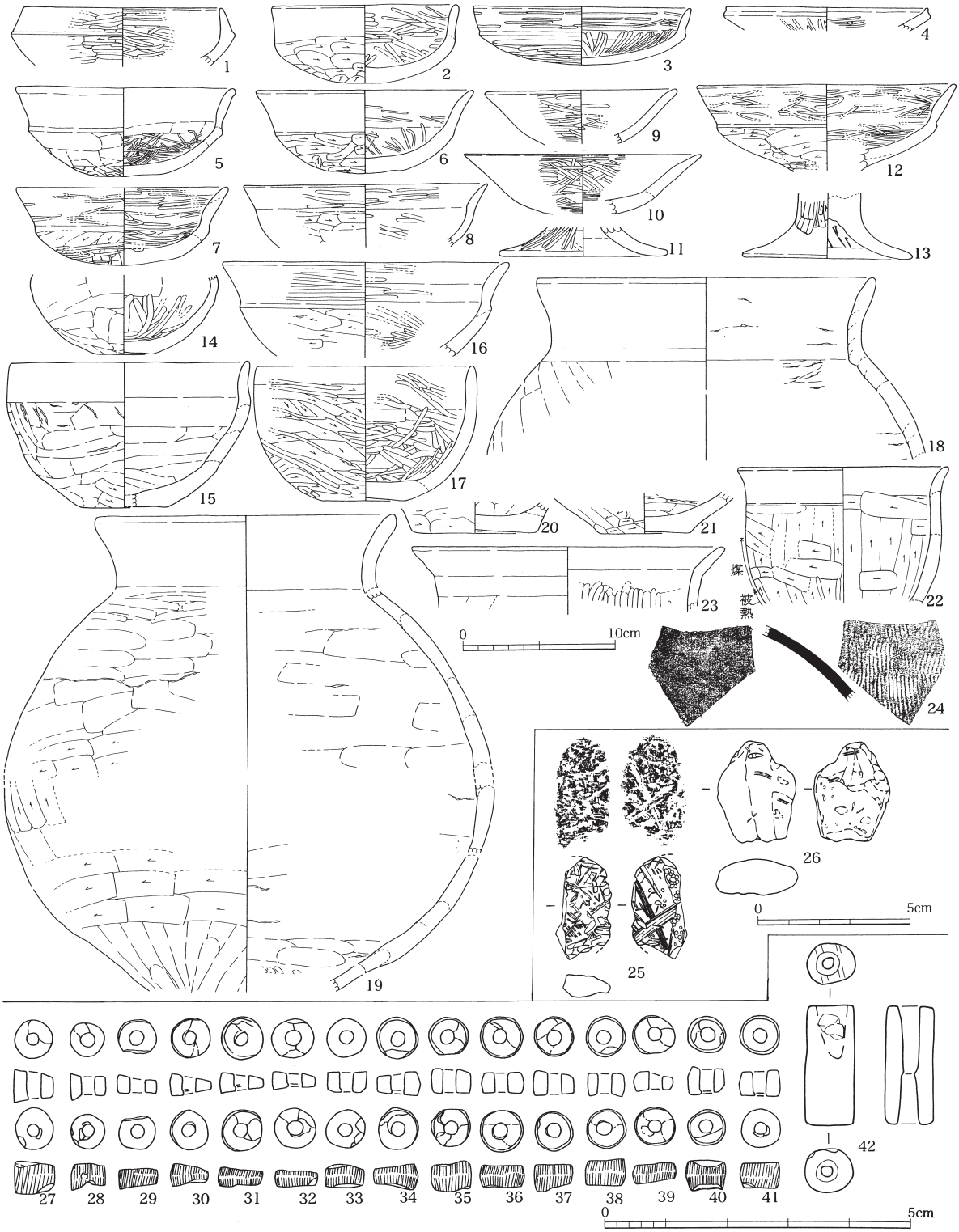
［出土遺物］遺物は多い。図示した以外の遺物は土師器 627 片（5,688g）あり、杯が主体で（206 片・1,545g）、高杯 9 片（63g）、壺・甕 401 片（3,871g）、甑 11 片（209g）もみられる。須恵器は図示した甕片（24）だけである。先行する SI-8 を切るので、SI-8 の遺物が混入している可能性がある。杯・高杯は橙色に発色する胎土を使う。鉢（14・16・17）も同様である。杯類は口縁部が外傾するものが主体で、それ以外の形態（1・2・4）は非常に少ない。

３は精製品で他の杯と異質。８は赤彩する外反口縁の杯の小破片。11 は９か 10 の脚部かもしれない。甕類はハケ調整の破片が少量あり、明確な長胴甕はない。小形甕の内外面に煮炊痕がよく残る（22）。甑（23）は、器形・胎土からみて古墳後期後半の遺物が混入した可能性がある。24 は内面を磨り消す古墳中期の須恵器甕破片。焼粘土塊は 25・26 の他に小形品が１点ある。

滑石製管玉（42）は丁寧に研磨した両面穿孔品。滑石製臼玉 15 点は、表裏面を研磨せず、側面研磨痕をよく残す片面穿孔品。権現山遺跡４区の遺構外に滑石製臼玉があり（第 181 図）、４区 SI-19 にも臼玉があったが紛失した。滑石製から粘板岩製に変化した臼玉は、権現山遺跡４区 SI-59 と SG1 区 SI-34 および杉村遺跡 GN1 区 SI-5 にある。

第 44 表　権現山遺跡 4 区 SI-7　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （㎝・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 12.8 高　残 3.8 最大　復 14.6	外面口～体部境に明確な段あり。外面は体部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ後、密なヨコヘラミガキ。内面はおそらくヨコナデの後に、密なヨコヘラミガキ。	5YR6/8　橙 やや緻密　赤微～粗粒多、透明・白・黒細粒微 硬質	カマド南東の P6 内 口 1/12 周、体 1/6 周 カマド東貯
2 土師器 杯	口　12.2 高　5.1	外面は口縁部ヨコナデ後、底部に１方向と体部に横位のヘラケズリで、口～体部境の段は大半を削ってなくしている。内面は、体部ヘラナデ（?）の後に横～斜位ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　赤微～粗粒多、白・透明微～細粒と灰色礫少　やや硬質	P5 の底面 ほぼ完形 4
3 土師器 杯	口　14.1 高　3.8	調整が精良な品。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面体部ヘラケズリ後、体部に横位と底部に２方向の密なヘラミガキ。内面体部に放射状と底部に多方向の密なヘラミガキ。	5YR6/6　橙 やや緻密　白・黒・透明細～微粒と白礫少 やや硬質	南張出部の床上１～7cm が接合 口 3/4 周、体 5/6 周 1、2
4 土師器 高杯	口　復 13.2 高　残 1.5 最大　復 13.5	器形からは脚端部の可能性もあるが、内面調整が非常に丁寧なので杯部と判断した。丁寧なヨコナデ後、外面に縦位と内面に密な横位のヘラミガキ。	2.5YR4/8　赤褐 やや緻密　透明微～細粒と白・灰色粗粒多、黒・赤微～細粒少　やや硬質	口 1/8 周
5 土師器 杯	口　復 14.3 高　5.8	口縁部の歪みがやや目立つ。外面は体部ナデ後、底部に多方向ヘラケズリ。内面はおそらく体部ヘラナデ後、内外面口縁部ヨコナデ、内面体部に多方向ヘラミガキ。	5YR4/6　赤褐 粗い　白・灰色礫～粗粒と白・黒・透明細粒多 硬質	張出土坑（P5）の底上 3㎝ 口 1/2 周、底全周 5、入口貯
6 土師器 杯	口　復 14.1 高　5.4	外面は口縁部ヨコナデ後、体～底部に横位のヘラケズリ。内面は体部ヘラナデ後ナナメヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後下半部ヨコヘラミガキ。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　赤細～粗粒多、黒・透明微粒と白微～細粒少　やや軟質	張出土坑（P5）内 口 1/3 周、体 1/2 周 入口貯
7 土師器 杯	口　復 13.9 高　5.1	外面は体部に横～斜位ヘラケズリと口縁部ヨコナデの後、一部にヨコヘラミガキ。内面は体部ヘラナデと口縁部ヨコナデの後、体部に多方向と口縁部に横位のやや密なヘラミガキ。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗粒多、白細粒少、透明微粒微 やや軟質	南張出部の床面 口 1/3 周、体全周 3
8 土師器 杯	口　復 16.0 高　残 4.1	口縁部ヨコナデ後、ヨコヘラミガキ。外面体部上半ヘラケズリ、下半ヘラナデ。内面ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外面赤彩で、外面は主に口縁部が明瞭。	7.5Y5/4　にぶい褐 やや緻密　白・透明細～微粒多、黒細粒少 やや硬質	口 1/8 周 カマド
9 土師器 高杯	口　復 12.6 高　残 3.5	内外面口縁部ヨコナデ後、外面ヨコヘラミガキ、内面上半に横位と下半に斜位のヘラミガキ。口縁部外面に暗褐色の汚れ付着。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　透明微粒多、赤細粒と黒・白微粒少 やや硬質	口 1/4 周
10 土師器 高杯	口　復 15.5 高　残 3.9	外面の杯底部が杯体部よりわずかに凹む可能性あり。外面体部ヨコヘラケズリ後、杯体部～底部に斜位と横位のヘラミガキ。内面は底部に円周方向と体部に横～斜位の密なヘラミガキ。	2.5YR6/8　橙 緻密　赤粗粒と白・赤・黒・透明細粒多 やや硬質	SI-7 覆土中の７片とカマド出土の１片が同一個体 口 2/3 周 カマド
11 土師器 高杯	高　残 1.9 脚裾　復 11.0	脚裾部内外面にヨコナデ後、外面にタテヘラミガキ。9 または 10 と同一個体の可能性あり。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白・黒・透明微～細粒多、赤細～粗粒少 やや軟質	脚裾 5/12 周



第 112 図　権現山遺跡 4 区 SI-7（3）　遺物

12 土師器 高杯？	口　復 17.0 高　残 5.7	外底面が突出気味なので高杯と思われる。外面は体部ヨコヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデの後、密なヨコヘラミガキ。	2.5YR5/8　明赤褐 やや緻密　赤微～粗粒多、透明・白微～細粒と黒細粒少 やや硬質	カマド出土（12 片）と貼床中（1 片）が接合 口 5/6 周 カマド、床下
13 土師器 高杯	高　残 4.3 脚裾　復 11.1	脚部は外面タテヘラケズリ。内面ヨコヘラナデ。脚裾部内外面ヨコナデ。全体が被熱して脆い。	7.5YR6/8　橙 やや緻密　赤微～粗粒多、透明・白・黒微～細粒少 軟質	カマド西側床上 3cm 脚部下半完存 7、カマド

14 土師器 鉢？	高　残 5.2 底　3.7 最大　復 12.3	杯の可能性もある。外底面はヘラケズリで小さい上げ底状。外面体部は磨滅して調整不明瞭で、ヘラケズリ後ナデ。内面体部はおそらくヘラナデの後に密な多方向のヘラミガキ。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　赤粗～細粒と黒・白・透明微粒少 やや硬質	底 1/2 周 カマド
15 土師器 鉢	口　15.5 高　9.5 底　5.5 最大　15.9	外面口～体部境に弱い稜あり。外底面は雑なナデで平底。外面体部はナデおよび下端の一部にナナメヘラケズリし、粘土紐積み痕や成形時の亀裂がやや残る。内面は底部に多方向と体部に横位のナデ。内外面口縁部にヨコナデ。	10YR7/6　明黄褐 やや緻密　褐色粗粒多、白粗～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	カマド南東の P6 内 口 4/5 周、底 2/3 周 カマド東貯
16 土師器 鉢	口　復 18.8 高　残 6.2	内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面体部はヨコヘラケズリでミガキも少し施す（?）。内面体部は密なナナメヘラミガキ。内外面漆仕上げの可能性あり。	5YR5/8　明赤褐 やや緻密　赤粗粒少、白・赤・黒・透明細～微粒少 やや軟質	貼床中で 6 片、張出土坑（P5）で 1 片 口 1/6 周 床下、入口貯
17 土師器 鉢	口　復 14.0 高　8.7 底　5.4 最大　復 14.5	口～体部の境に稜や段を持たない。外底面は多方向ヘラケズリで中央が少し凹む。外面体部に横～斜位ヘラケズリと内面体部ヨコヘラナデ後、内外面口縁部ヨコナデ。内面底部に多方向と内外面体部に横～斜位のヘラミガキ。	2.5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白・透明粗～細粒多、赤粗粒と黒細粒少 やや硬質	張出土坑（P5）内と、その南側の床上 1㎝が接合 口 1/12 周、体 1/4 周、底全周 1、入口貯
18 土師器 甕	口　復 21.8 高　残 11.9 最大　推約 30	胴部は破片が不足して接合できない。肩部は外面ナナメヘラナデ、内面はナデで粘土紐積み痕を若干残す。口縁部内外面ヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　白細～粗粒と透明微～細粒多、赤細～粗粒少、灰色礫・黒細粒微 やや硬質	口 1/2 周 入口貯、カマド、P2 柱穴
19 土師器 甕	口　復 19.4 高　残 30.0 最大　復 32.0	胴部中位より上は接合できないので図上復原。外面は胴下位と肩部にナデ、胴中位にヘラナデとヘラケズリ。内面は胴部ナデと肩部ヨコヘラナデ。胴部下位の積み上げ休止面付近に外面ヨコヘラケズリと内面ナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面が被熱した可能性もあるが不明確。	7.5YR8/6　浅黄橙 粗い　灰色礫～粗粒と黒・白・透明粗～細粒多 軟質	口 1/12 周、頸 1/3 周、肩 1/6 周、胴下位全周 カマド
20 土師器 甕	高　残 2.0 底　復 8.2	外底面は一定方向ケズリで中央がやや凹む。外面胴下端はヨコヘラケズリ。内面底部は 1 ～ 2 方向ナデ。外底面が被熱している可能性もあるが不明確。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　白・黒・透明細～微粒少、白粗粒・灰色礫微　硬質	底 1/3 周 P2 柱穴
21 土師器 甕	高　残 2.6 底　復 5.8	外底面は多方向ヘラケズリで底面中央が少し凹む。外面胴部は横～斜位ヘラケズリ。内面は底部に多方向と胴部に横位のヘラナデ（一部ヨコヘラケズリ）。明確な被熱使用痕は見られない。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや粗い　透明粗～細粒と黒細粒多、白粗～細粒少 硬質	西部の床上 9cm 底 3/4 周、底部片 6
22 土師器 小形甕	口　復 13.8 高　残 8.9	外面体部タテヘラケズリ（部分的に光沢を持つ）の後にヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデ後、体部ヘラケズリ（縦位の後、主に上半部に横位）。外面下位が被熱し、中位に煤付着。内面頸部に暗褐色の汚れあり。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや緻密　白・黒・赤・透明粗～微粒少 やや硬質	貼床土中の 8 片と SI-7 覆土中の 1 片が接合 口～胴部 床下
23 土師器 甑	口　復 20.4 高　残 4.4	外面胴部ヘラナデ（?）の後、内外面口縁部ヨコナデ。内面胴部はヘラナデまたはヘラケズリの後、密なタテヘラミガキ。古墳後期後半の遺物が混入？	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒・透明粗～細粒と白細粒・赤粗粒少 やや軟質	口 1/4 周
24 須恵器 甕	高　残 4.9	外面は縦位の平行叩きで、木目直交の溝を彫った叩き板の疑いもあるが木目があまりよく浮き出ていないので不確実。内面は当て具痕をスリ消している。外面に暗緑色の自然釉が薄くかかる。	7.5Y3/2　オリーブ黒 やや緻密　白粒・細粒少、透明細粒微 硬質	
25 土師質 焼粘土塊	長　残 3.4 幅　残 1.8 厚　0.8 重　残 3.3	両面に草本植物の葉と茎および籾？の圧痕が密に付着。ただし粘土の内部まで入り込んではいない。右図の面の右端を中心として丸棒状工具（または植物の茎？）で刺突した痕が目立つ。外周の約 6 割は破損。	7.5YR5/3　にぶい褐 やや緻密　白・透明微粒微 やや硬質	一部欠
26 土師質 焼粘土塊	長　3.4 幅　2.6 厚　1.3 重　6.2	こねた粘土塊をそのまま焼成したもので、ナデなどの調整は行わない。左図より右図の面に凹凸が目立つ。ごく細い草本植物の茎と思われる圧痕が疎らに表面に付着する。	5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　白・黒・透明細粒少 軟質	完形 カマド
27 ～ 41 石製品 臼玉	第 45 表参照	表裏面は破面のままで、研磨痕なし。側面は穿孔方向と同じ方向に研磨し、中位で径が最大になるように側面を丸く仕上げるものが主体。片面から穿孔し、貫通する前に軽く叩いて終孔を開通させている。	10Y3/1　オリーブ黒 やや緻密　滑石 軟質	東部床面 完形 10
42 石製品 管玉	長　1.93 幅　0.80 重　1.94 孔　0.3 ～ 0.4	両面から穿孔し初孔径 3.25 ～ 3.30㎜。側面図に示した切削時の傷を消し切れず、そのため上面図に示した小口の形状も少し歪になっている。それ以外は全面を丁寧に研磨して光沢があり、擦痕は片側の小口にわずかに見られるだけである。丁寧な製品なので石製模造品というよりは装飾品と考えられる。使用による磨滅はあまり認められない。	2.5GY3/1　暗オリーブ灰 緻密　緑色を帯びた滑石 軟質	北西部床面 完形 9

第 45 表　権現山遺跡 4 区 SI-7　滑石製臼玉の計測値

番号	最小径	最大径	最小高	最大高	初孔径	終孔径	重量
27	6.20	6.30	3.30	5.35	2.15	2.15	0.29
28	5.55	5.85	3.20	4.95	2.30	2.10	0.19
29	5.55	6.35	1.60	3.15	2.20	2.20	0.13
30	6.25	6.40	1.45	3.65	2.20	1.90	0.15
31	6.50	6.85	2.30	3.75	2.45	2.20	0.20
32	6.70	6.95	1.90	2.95	2.25	2.05	0.21
33	6.15	6.20	3.25	3.75	2.35	2.00	0.23
34	6.70	6.85	2.80	3.85	2.20	2.15	0.25
35	6.00	6.40	3.75	4.90	2.20	2.10	0.26
36	6.60	6.95	3.25	3.55	2.30	2.00	0.26
37	6.10	6.35	3.10	4.35	2.30	2.10	0.25
38	6.30	6.35	4.00	4.45	2.25	2.15	0.27
39	5.85	6.40	2.00	3.25	2.15	2.15	0.15
40	6.00	6.30	3.90	4.95	2.35	2.20	0.24
41	6.15	6.30	3.80	4.45	2.30	2.10	0.26

（重量は g 単位。大きさは mm 単位で、1/20mm まで計測。）

4 区 SI-8（第 113 図、写真図版 37）

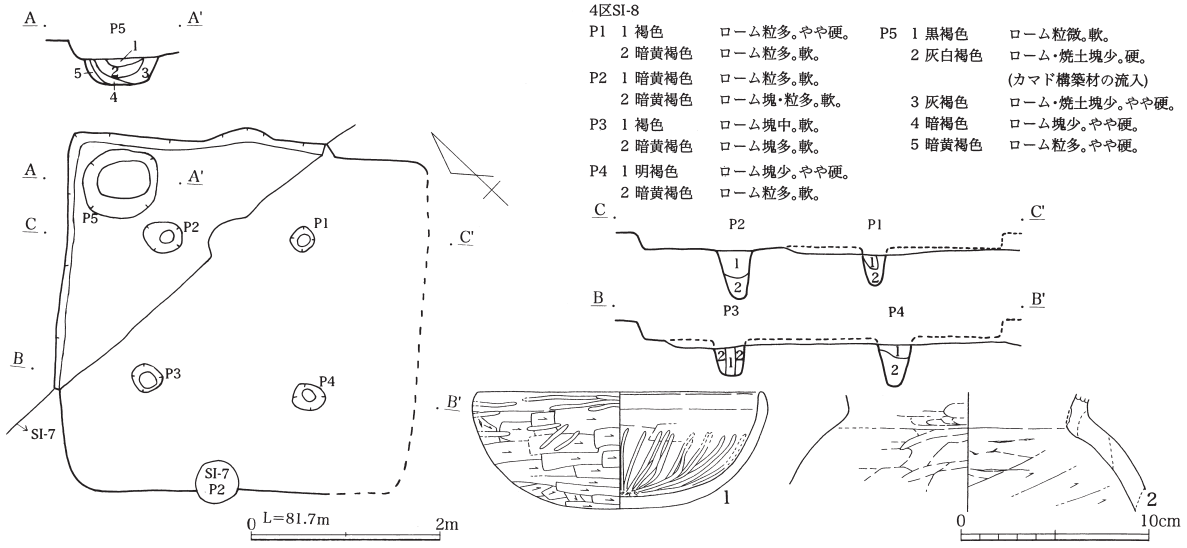
［**位置**］ 4 区北西部の台地平坦面、35.5-11.5 グリッド。古墳中期の SI-5 が北西 4 m にある。北に古墳後期の SI-3・11 がある。中央付近から南半が古墳中期末～後期初めの SI-7 に切られる。

［**規模と形状**］ほぼ方形で中軸は N-50°-W。SI-7 の下層に僅かに残る掘方などから南壁の位置を推定した結果、東西長 3.72m、南北長 3.84m である。壁は直線的に外傾し、残存高 0.16 ～ 0.20m。残存する床面はほぼ平坦である。掘方底面は緩い凹凸があり、床面から深さ 2 ～ 5 cm で、中央部より壁際がわずかに深い。ローム塊が多い明褐色土で貼床する。主柱穴は 4 本（P1 ～ P4）。P2 以外は SI-8 の貼床除去後に確認した。P1 は径 28 × 26 ×深さ 32（40）cm、P2 は径 40 × 34 ×深さ 52cm、P3 は径 34 × 30 ×深さ 32（38）cm、P4 は径 36 × 28 ×深さ 44（52）cm。（ ）内は、推定床面からの深さである。柱間は P1-P4 間 1.66m、P2-P3 間 1.56m、P2-P1 間 1.46m、P3-P4 間 1.72m である。P1 が若干西側に寄るため北側柱間が狭い。P3 で柱痕を確認した。貯蔵穴 P5 が北西壁際にある。東西軸の楕円形で 78 × 74cm、床面から深さ 30cm で、平坦面内側の規模は 54 × 38cm。壁は緩く外傾する。覆土 2 ・ 3 層にカマド構築材の灰白色粘土と焼土を含む。

［**カマド**］北壁中央にある。袖や天井は大きく壊され確認できなかった。北壁中央で煙道を壁外へ僅かに掘り、カマド構築材の灰白色粘土や焼土が周辺に散布することから判断した。火床はほぼ平坦である。

［**覆土とテフラ**］覆土 2 層は床面直上に薄くあるのみで、 1 層に白色土粒と焼土粒を含む。壁周辺はわからないが、カマド部分の断面から判断すると、黒褐色土（ローム粒少量、締まりあり）が主体。

［**遺物および出土状況**］遺物はきわめて少ない。図示した以外の破片は 20 片あり、杯 4 片（23g）と甕 16 片（118g）である。SI-8 を切る SI-7 に、SI-8 の遺物が混入している可能性がある。貯蔵穴からは図示した杯の他に甕口縁部が出土している。残存度が比較的高い杯（1）は古墳中期中～後葉と思われる。



第 113 図　権現山遺跡 4 区 SI-8　遺物・遺物

第 46 表　権現山遺跡 4 区 SI-8　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 15.0 高　6.1 最大　復 15.6	薄く軽い。外面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、体部に横位と底部に多方向のヘラケズリ、体部上位に部分的なヘラミガキ。内面は体部ヘラナデ後放射状ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	2.5YR4/8　赤褐 やや粗い　赤・白粗～細粒多、黒・透明細粒少 やや硬質	貯蔵穴 口 1/3 周 貯穴
2 土師器 壺	高　残 6.3 頸　復 12.6	外面は肩部ヘラナデ、頸部ヨコユビナデ。内面は頸～肩部ナデ後、肩部に軽いナナメヘラケズリ。	2.5Y8/3　淡黄 緻密　白・黒・透明粗～細粒少 硬質	頸 1/12 周、肩 1/6 周

４区 SI-9（第 114 図、写真図版 37・118）

［位置］ 4 区北西部の台地平坦面、35.0-11.5 グリッド。古墳中期末～後期初めの SI-7 が北に、後期の SI-12 が東にある。南東に終末期の SI-15、東に中期の SI-13・54、北西に中期の SI-6、南に時期不明（古墳時代？）の SB-132 がある。南壁際西寄りが古墳時代の円筒形土坑 SK-104 と近接するが、重複はしない。

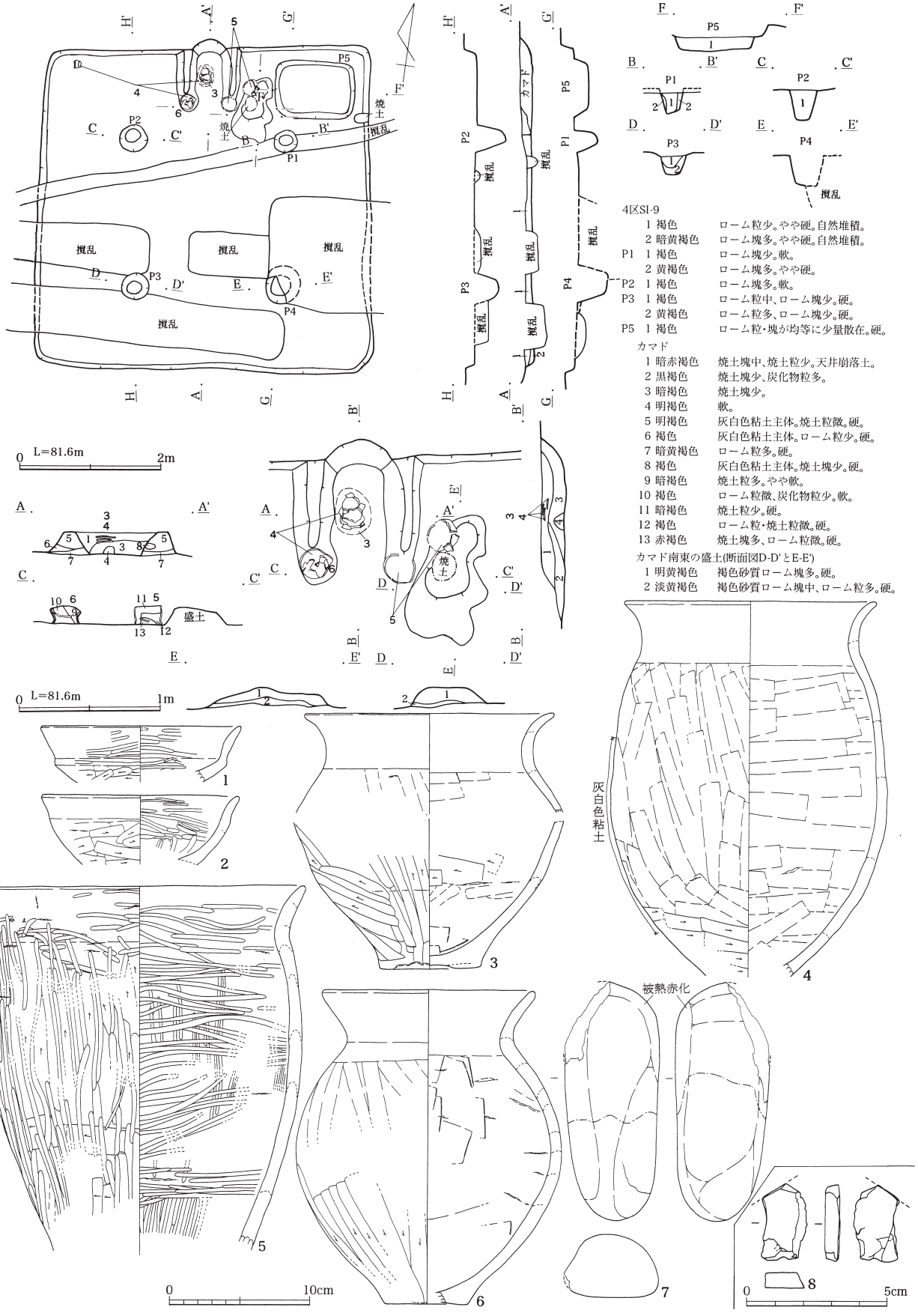
［規模と形状］ 東西 4.80 ×南北 4.33m の方形で中軸は N-8° -W。壁は直線的に外傾し、残存高 0.12 ～ 0.19m。床は緩い凹凸があるがほぼ平坦。東西壁際を除き床が硬化する。硬化範囲は他の床面よりわずかに高く、比高約 5cm。掘方は北西隅で 85 × 80 ×深さ約 10cm の皿状に窪む。主柱穴は 4 本で P1 は径 33 × 31 × 深さ 33cm、P2 は径 40 × 38 ×深さ 43cm、P3 は径 39 × 37 ×深さ 30cm、P4 は推定径 53cm、深さ 43cm。柱間は P1-P4 間 2.03m、P2-P3 間 2.17m、P2-P1 間 2.19m、P3-P5 間 2.07m で、ほぼ方形配置。P1 に柱痕がある。北東隅の貯蔵穴 P5 は東西軸の長方形で 113 × 79 ×床から深さ 21cm。底面は 100 × 65cm の長方形で壁はやや外傾する。覆土は大半が硬く締まる 1 層で、壁際の 2 層にロームが多い。

［カマド］ 北壁中央にあり、天井や袖上半は崩れる。規模は 104 × 92cm。数 cm 厚のローム（7 層）で整地後、粘土主体の 5・6 層で袖を作る。焚口構築材として、西袖に 6 の小形甕、東袖に 5 の甑を倒立する。この甑の胴部下位は、図示していない甕胴部とともに東袖の東で出土した。火床はほぼ平坦で、3・4 の甕破片の下にある 7 の支脚を、山状に堆積する 4 層の明褐色粘土で支えたとみられる。煙道は北壁を約 10cm「U」字状に掘る。カマド東袖と貯蔵穴の間に、南北 90 ×東西 50 ×高さ 10cm 程の高まりがある。褐色の砂質ロームを突き固めた上に土師器甕胴部を伏せ、カマド東袖先端に立てた甑の胴部片と焼土塊も認められた。

［遺物および出土状況］ 出土状況はカマドの説明で述べた。撹乱が多いことを考えると、遺物量は比較的多い。図示した以外の土師器 152 片（1,125g）の内訳は、杯 62 片（349g）、高杯 1 片（37g）、甑 8 片（84g）、甕 81 片（655g）。高杯はハ字形に開く脚部片があり、甕と甑はやや丸味を持つ長胴で、甑は長胴・無底式の大形甑破片だけが見られた。杯類は橙色に発色する土を使い、口縁が外傾する後期前葉のもの。5 は外面を磨くので、古墳後期中頃以前の甑。8 は石製模造品の素材かもしれない粘板岩剥片だが、加工の有無は不明。4 区では SI-14 などに粘板岩の破片や砥石、SI-4 などに石製模造品がある。

第 47 表　権現山遺跡 4 区 SI-9　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 4.9	外面は体部ナデ後ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、体部ヘラナデ後に疎らな放射状ヘラミガキ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤粗～細粒多、黒・白・透明細～微粒少 やや硬質	口 1/8 周
2 土師器 杯	口　復 14.2 高　残 4.0	外面は体部ナデ後ヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。内面体部に密な多方向ヘラミガキ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤粗粒微、白・黒・透明細～微粒微 やや硬質	貯蔵穴 口 1/12 周、体 1/6 周
3 土師器 甕	口　復 17.6 高　残 17.5 底　7.2	上下が接合しないが、同一個体。外面は胴下位に縦～斜位ヘラケズリ。外底面は外周に粘土を貼り足して雑なナデ、肩部タテヘラナデ。内面は胴下位ヨコヘラナデ後に中位を成形してヨコヘラケズリ、肩部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。底面から高さ 6㎝を境にして下側は浅黄橙色（10YR8/3）、上側はにぶい黄橙色の粘土で成形。外面に灰白色粘土付着。口～胴中位は特に被熱して脆い。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　透明・白・灰色粗～細粒多、黒細粒少 やや軟質	カマド底上 7 ～ 10㎝。カマド東袖先端付近にも 3 片あり 口 1/2 周、胴上半 1/5 周、胴下半 1/3 周、底全周　3、4
4 土師器 甕	口　17.7 高　残 26.5 最大　19.6	外面は胴部タテヘラナデ後に下位をヨコヘラケズリ。内面胴部ヨコヘラナデ、内外面口縁部ヨコナデ。胴部中～下位の外面（口縁部から 10 ～ 23㎝）に灰白色粘土が少量付着。外面の底部近くが弱く被熱する。	10YR8/6　黄橙 やや緻密　白・透明粗～細粒と黒細粒多、白・半透明・透明礫少 やや硬質	カマド底上 7 ～ 10㎝。北西部床上 10㎝とカマド西袖先端付近で口縁部各 1 片出土 口 2/3 周、胴下位全周　1、2、4、カマド一括
5 土師器 甑	口　23.4 高　残 25.5	外面下半に横位と上半に縦位のヘラケズリ後、口縁部ヨコナデ。上位に横位、下位に縦位の密なヘラミガキ。内面は胴部にヨコヘラナデ後、縦位後横位の密なヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	5YR6/6　橙 緻密　赤粗～細粒多、白・黒・透明細粒少 やや軟質	上半はカマド東袖先端部に倒立。下半はその東側で床上 4cm 口 11/12 周、頸全周　3、5、カマド一括
6 土師器 小形甕	口　14.9～16.0 高　残 22.1 底　復 5.8 最大　18.7	外面は胴部ヘラナデ後、胴下半タテヘラケズリ。外底面も円周方向のヘラケズリと思われる。内面は胴部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面上半には粘土積み上げ痕をやや残す。外面胴下半はかなり被熱赤化している。外面に灰白色粘土付着。	7.5YR6/4　にぶい橙 粗い　半透明・白礫～細粒 やや少 やや硬質	カマド西袖先端部に倒立 口～胴上半完存、胴下半～底 1/5 周　2
7 礫	長　16.8 幅　6.7 厚　4.5	自然の河原石で、図の上半部が被熱して弱く桃色味を帯びている。左上部の破面も少し赤化している。支脚に用いた可能性あり。残存重量 792.2g。	2.5GY5/1　オリーブ灰 やや緻密　硬質で緻密なホルンフェルス	カマド燃焼部内の土器の下（底上 4cm） 一部欠　6
8 粘板岩剥片	長　2.7 幅　1.6 厚　0.6	表裏面は節理に沿った板状の剝離面。外周は図の上側が自然の風化面で、それ以外はすべて折れ面。人為的な加工の有無は不明。残存重量 3.0g。	5GY4/1　暗オリーブ灰 やや緻密　緻密で軟質な粘板岩	

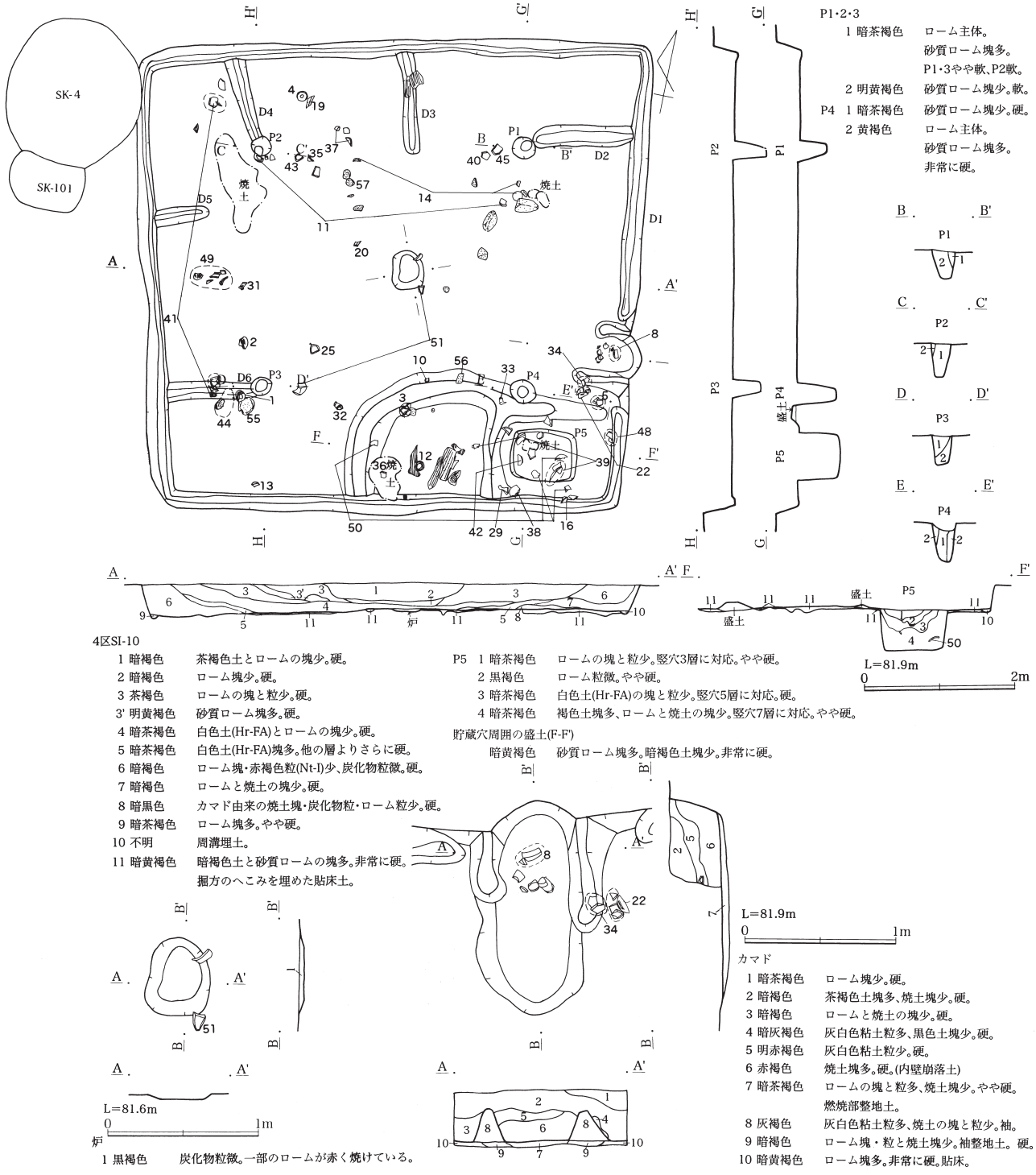


第 114 図　権現山遺跡 4 区 SI-9　遺物・遺物

４区 SI-10（第 115 ～ 117 図、写真図版 37 ～ 39・118）

［位置］ 4 区北部の台地平坦面、36.0-12.0 グリッド。古墳中期の SI-4・28 が西と北東にある。北・北東・南東に古墳後期の SI-2・11・59 がある。中央部南東寄りが撹乱坑（調査時名称 SK-38）に切られる。北西隅が古墳時代の円筒形土坑 SK-45 に切られるようだが、重複部分はごくわずかしかない。

［規模と形状］ 北壁（6.7 m）が南壁（6.0 m）に比べて長い台形状の方形。中軸は N-10°-W。東西はほぼ中央で長 6.50m、南北長 6.20m。壁は直線的に外傾し、残存高 0.31 ～ 0.45m。床面は主柱穴内区が平坦で



第 115 図　権現山遺跡 4 区 SI-10（1）　遺構

硬化するが、壁周辺の外区はやや軟弱で 5 ～ 10cm 低い。南壁中央やや東部で東西 215 ×南北 160cm の範囲に幅 24 ～ 50 ×高 2 ～ 5cm ほどのロームを突き固めた土手状高まりがあり、一部は貯蔵穴 P5 の北辺に沿って東に延びる。土手の内側は平坦で、床直上に炭化材や焼土がある。掘方は床面から深さ 2 ～ 8cm で、底は若干の凹凸があり中央より壁際が僅かに深く、ローム塊が多い暗黄褐色土でほぼ全体を平坦に貼床する。主柱穴は P1 ～ P4 の 4 本。P1 は径 30 × 28 ×深さ 38cm、P2 は径 27 × 25 ×深さ 44cm、P3 は径 28 × 24 ×深さ 39cm、P4 は径 34 × 30 ×深さ 41cm。柱間は P1-P4 間 3.23m、P2-P3 間 3.07m、P2-P1 間 3.50m、P3-P4 間 3.43m で、南北より東西間がわずかに広い。

カマド周辺以外を全周する壁溝 D1 は断面「U」字状で、幅 16 ～ 25cm、床から深さ 4 ～ 8cm。間仕切溝は北・西壁際で各 2 本、東壁際で 1 本の計 5 本（D2 ～ D6）で、カマド・貯蔵穴・入口施設のない部分にある。D2・4・6 は主柱穴に付随する位置、D3 は北壁中央にある。長 110 ～ 130cm、幅 18 ～ 38cm、床面から深さ 7 ～ 10cm の断面「U」字状。西壁北部の D5 は長 72cm で他の間仕切溝より短く、貼床除去後に確認した。南東隅にある貯蔵穴 P5 は東西軸の長方形で 88 × 61cm、床面から深さ 55cm、平坦面内側は 76 × 64cm。底面はほぼ平坦な長方形。壁はほぼ垂直に床面に至る。P5 覆土は自然堆積で 4 層に焼土とローム小塊を少量含み、竪穴覆土 7 層に対応するので、建物廃絶時に貯蔵穴が開口していたと考える。

［火処］ 炉とカマドを各 1 箇所持つことが特徴である。炉を 2 箇所持つ例は 4 区 SI-20 などにある。中央やや東寄りに東西 41 ×南北 52cm の楕円形地床炉がある。深さ 3 cm ほどの浅い窪みで、底面は被熱赤変する。

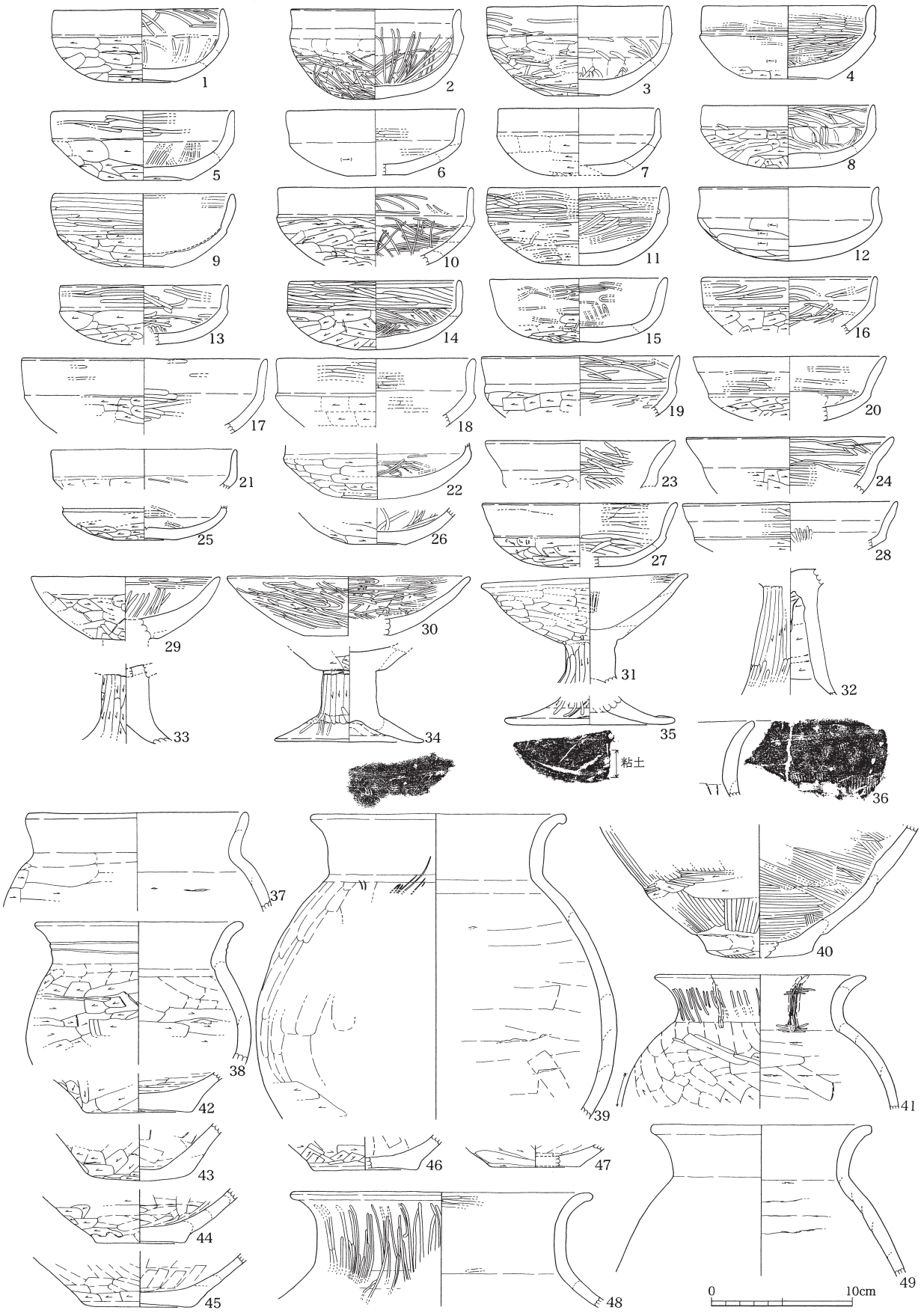
カマドは東壁中央南部にある。竪穴確認時には分からず、掘り下げた壁際で粘土や焼土が多く出土してその存在が分かった。天井や袖上半は崩れ、左袖が右袖より 30cm ほど短い。両袖間幅 90cm、長さ 140cm である。竪穴貼床上に灰褐色粘土の 8 層で袖を作る。 5・6 層が天井崩落土で、袖と天井内面は被熱・焼土化・赤変部分が多い。焚口、火床と煙道立ち上がりまでは 7 層で埋め戻している。火床はほぼ平坦である。煙道は東壁を約 10cm「U」字状に掘った程度で、急角度で直線的に上がる。

［覆土とテフラ］ 古墳中期末の建物で、後期初頭に降下した Hr-FA テフラ層が認められた。覆土はレンズ状の自然堆積で 10 層に分層され、4・5 層は FA 塊、6 ～ 8 層は焼土や炭を含む。土層断面では明確でないが、南及び西壁際で炭・焼土が多く認められた。火災建物か、または焼却処理を行ったと考えられる。

［遺物出土状況］ 掲載遺物のうち高杯や杯は FA 層の上下で接合する破片を含む。FA 層上下の遺物相は同様で、明らかに新しい混入遺物は少ない。この竪穴で使用した土器等が周辺に廃棄され、破損・流入する途中でテフラが降下したのであろう。甕・甑類は残存度の高いものがこの竪穴に伴い、破片は FA より上層に多い。大形の自然礫や石も若干が出土した。北東柱穴の南方 1 m 付近で床上 13cm（FA より上）に長 28 ×幅 16 ×厚 10cm・重さ 5,350g の安山岩、その南西では FA より下層の床付近に長 29 ×幅 13 ×厚 9cm・重さ 4,850g で煤が付着した安山岩がある。南西柱穴の南西側では床上 6cm の FA 層中に 55 の台石がある。

［出土遺物］ 遺物は多い。図示以外の 1,242 片（9,881g）の内訳は、杯 464 片（2,905g）、高杯 8 片（67g）、甑 85 片（463g）、壺・甕類 670 片（6,407g）、焼粘土塊 15 片（39g）。平底や凹底の蓋模倣形杯（安藤 2001）が目立つ。丸底の杯も一定量がある。図示以外にも接合できない杯破片が多い。

17 は大形の杯。28 はおそらく出現期の内彎口縁杯で、古墳後期後半の混入品と見られる。27 も混入の可能性がある。13 の内面底部と 41 の内外面頸部を不自然に磨き、また 35 の裾部外面に不規則な粘土を貼るのは、焼成前に生じた亀裂を補修した痕であろう。図示した高杯はそれぞれ別個体と思われる。長脚は 32 だけで、それ以外は短脚（31・33・34）。焼成前にひっかいた平行刻線が 39 の肩部にある。40 は内外面と底面のハケが非常に粗い。ハケ調整甕は不掲載品を含め数点ある。41・48 は頸部外面の縦位ヘラミガキが特徴。49 は破損後に被熱したようである。図示以外に甕・甑の底部は 6 点出土した。甑は無底の大形甑で、50・51 ともに外面の幅広いミガキまたはヘラナデと、内面のハケ調整が特徴。51 は口より胴径が大きい。鉢形の小形甑はみられない。55 は台石、57 は磨石。58 は草本植物の圧痕を側面に持つ焼粘土塊。



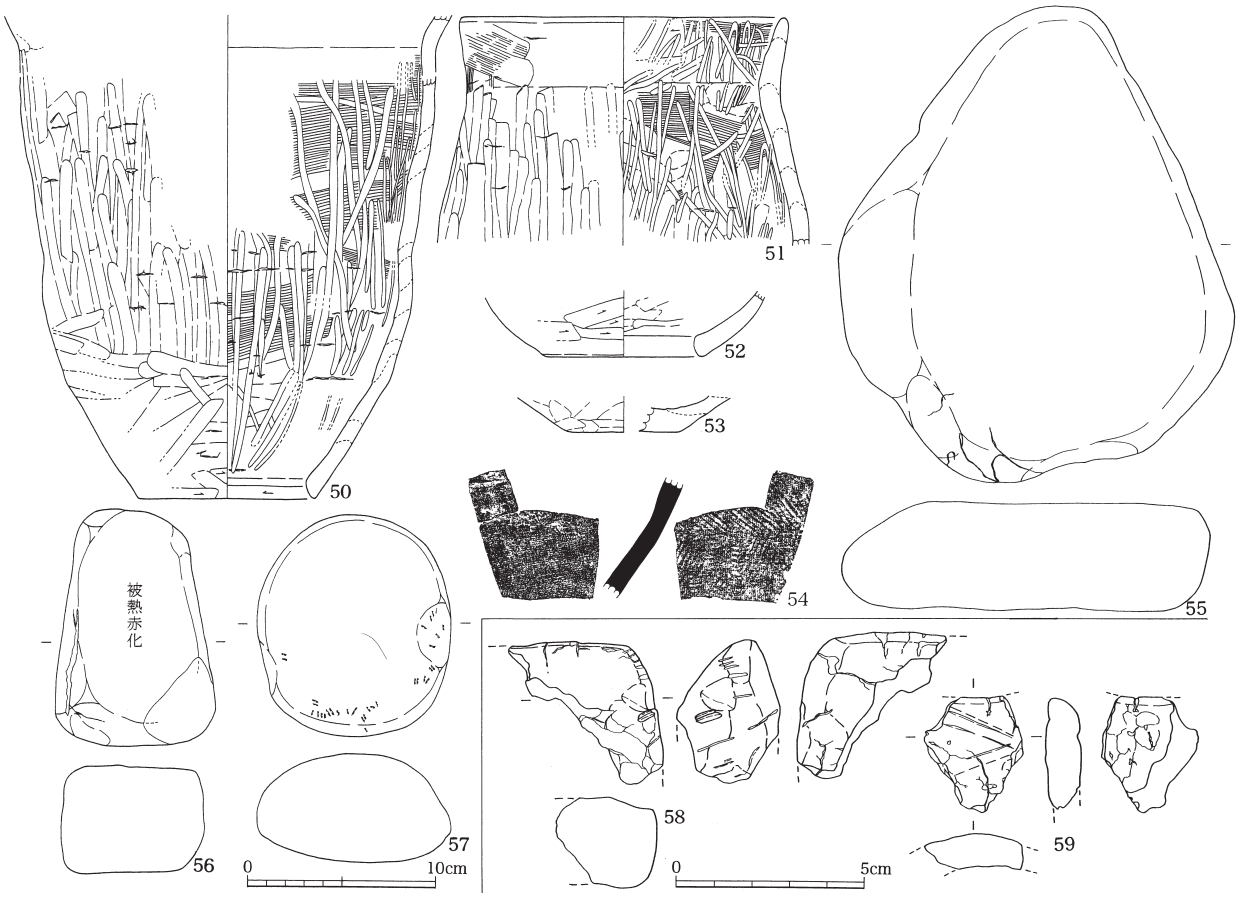
第 116 図　権現山遺跡 4 区 SI-10（2）　遺物

第 48 表　権現山遺跡 4 区 SI-10　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　11.9 高　5.2 底　4.8 最大　12.6 重　残 213	外面口～体部境に浅い段あり。外底面は 2 ～ 3 方向ヘラケズリで凹底。外面体部ヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面ヨコナデ後、内面の口縁部に斜位と体部に放射状のヘラミガキ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　透明微粒、黒・白微～細粒、赤細粒少 やや硬質	FA 層中に正立（床上 3cm） ほぼ完形 口 11/12 周、底全周 68、5 層
2 土師器 杯	口　12.0 高　6.4 最大　12.3	外面体部は雑なナデ後、中位以下に斜位ヘラケズリとヘラミガキ。内面体部に多方向ヘラナデ後、内外面口縁部ヨコナデ。内面に斜放射状のヘラミガキ。	5YR5/8　明赤褐 やや緻密　黒・透明微粒と白細粒少 硬質	FA 層より上（床面付近） 口 5/6 周、下半部全周 22、FA 上
3 土師器 杯	口　12.8 高　6.3 底　4.5 最大　13.0	外面口～体部境にごく弱い段あり。外底面は 1 方向ヘラケズリで凹底。外面体部ヨコヘラケズリ後に横～斜位ヘラミガキ。内面底部は 1 方向のナデ後に多方向ヘラミガキ。外面口縁部から内面中位までヨコナデ後に、外面は横位、内面中位は斜位のヘラミガキ。	5YR5/8　明赤褐 やや緻密　赤粗～細粒多、白・黒・透明微～細粒少 やや硬質	FA 層より上（床下 5 cm）。FA 上と FA 下の小片各 2 点も接合 口 1/2 周、底全周 43、FA 上、FA 下、FA 上面
4 土師器 杯	口　12.1 高　5.2 底　5.7 最大　12.5 重　274	外面は体部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ（ただし磨滅して観察できないところが多い）。外底面は中央部 1 方向と外周を円周方向にヘラケズリして凹底状。内面は底部に 1 方向と体部に横位の密なヘラミガキで、口縁部上半は著しく剝落して調整不明。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　黒・白・透明細粒少、赤粗～細粒微 やや硬質	FA 層より上（床上 14 cmで倒立） 完形 口全周、底全周 8
5 土師器 杯	口　復 12.9 高　4.9 底　6.0 最大　13.1	外底面は 1 方向ヘラケズリで凹底。外面口～体部境にはわずかな段をなす部分と稜だけの部分とがある。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部はおそらくヨコヘラナデの後に多方向の密なヘラミガキ。 [注記]50、カマド南、FA 下カマド南、カマド南床直	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　赤粗～細粒多、黒・白・透明粗～細粒少 やや硬質	FA 層より下（床上 3 cm）。カマド南側の 4 片（床直上と FA 下の各 1 片を含む）も接合 口 1/3 周、体 2/3 周、底全周　注記は左欄
6 土師器 杯	口　復 12.4 高　4.8 底　4.3 最大　復 12.6	内外面が磨滅して調整不明の部分が多い。内外面口縁部はおそらくヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面体部と底部はおそらくヘラケズリで、ミガキの有無は不明。内面体部はごくわずかにヨコヘラミガキが残る。	2.5YR5/8　明赤褐 やや緻密　赤粗～細粒と黒・白細粒少 やや硬質	FA 層より下の 4 片と FA 層より上の 8 片が接合 口 5/12 周、底 2/3 周 FA 下、FA 上面
7 土師器 杯	口　復 11.4 高　残 4.8 最大　復 11.6	外面は底部多方向（?）の後に体部を横位にヘラケズリ。内面体部ナデ、内外面口縁部ヨコナデ。現状でヘラミガキは見られないが、器面が荒れている部分も多いので少し磨いていた可能性も残る。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤微～粗粒多、白・黒・透明微～細粒少 硬質	南壁入口縁部の 5 片と FA 上面の 1 片が接合 口 1/4 周、体 1/3 周 南入口壁際、FA 上面
8 土師器 杯	口　復 12.1 高　4.4	外面は底部に 1 方向ヘラケズリ後、体部に光沢の生じる軽いヘラケズリ。内面体部ヘラナデ後に縦～斜位ヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後に内面ナナメヘラミガキ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤細～粗粒と白・黒・透明微粒微 硬質	FA 層より下（床上 4 cm） 口 1/3 周 46
9 土師器 杯	口　12.8 高　5.2 底　4.2 最大　13.2	口縁部上半が内彎する。外面は底部 1 方向ヘラケズリでわずかに凹み。体部は少し光沢のあるヘラナデ気味のヘラケズリ。内面体部は器面剝離のために調整不明。口縁部は内外面ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　白・赤粗～細粒多、白・黒・透明細砂少 硬質	FA より上（床上 27 cm）の 5 片、FA 上面の 2 片、遺構表面の 1 片が接合 口 3/4 周、底全周 23、表面、FA 上
10 土師器 杯	口　13.8 高　残 5.5 最大　14.0	外面体部ヨコヘラケズリ後に口縁部ヨコナデ。内面体部ヘラナデ後、斜～横位の後に縦位のヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ後、横～斜位の疎らなヘラミガキ。破損後に煤（?）が少量付着。 [注記]30、FA 下、カマド南床直、貯、貯 FA 下、SK-38	2.5YR6/8　橙 やや緻密　赤粗～細粒と白・黒・透明微粒少 やや硬質	FA より上層（床上 2 cm他 2 片）、下層の 5 片、貯蔵穴内 2 片、床面 1 片が接合。撹乱坑から 2 片出土 口 5/6 周　注記は左欄
11 土師器 杯	口　12.6 高　5.5 底　5.6 最大　12.8	外面口～体部境に広い凹線あり。外底面は平底で調整は磨滅のため不明瞭。外面口縁部と内面にヨコナデ後、密なヨコヘラミガキ。外面体部ヨコヘラケズリ後ヨコヘラミガキ。内外面口縁部上位に暗褐色の付着物あり（漆?）。胎土中に植物種子痕？の空洞あり（断面図参照）。	5YR6/8　橙 やや緻密　白・透明微～細粒多、赤細粒少 やや硬質	FA 層より上（床上 1 cm）と FA 層より下（床上 5cm）が接合 口 2/3 周、底全周 13、73
12 土師器 杯	口　12.7 高　5.2 最大　13.0 重　残 208	内外面が磨耗して調整が不明瞭。外面は体部ヨコヘラケズリ。口縁部内外面と体部内面はヨコナデと思われるが、ヘラミガキの有無は不明。	5YR6/6　橙 やや粗い　白・黒・透明細～微粒少 軟質	FA 層より上（床上 4 cm） 口 5/6 周、体全周 27
13 土師器 杯	口　復 12.0 高　残 4.2	内外面口縁部ヨコナデ後、外面に横位と内面に斜位のヘラミガキ。外面体部ヨコヘラケズリ。内面は体部ナナメヘラミガキ後、底面中央に密な 1 方向ヘラミガキ（焼成前に生じた亀裂を補修した可能性もある）。	2.5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤礫～粗粒多、赤細粒少、白・黒・透明微粒微　硬質	FA 層より下（床直上） 口 1/6 周、体 1/4 周 66
14 土師器 杯	口　12.0 高　4.9 最大　12.4	外面は底部 2 ～ 3 方向の後に体部横位ヘラケズリ。内面体部に多方向のヘラケズリまたはやや強いヘラナデの後、体部に斜位と底部に多方向のヘラミガキ。内外面の口縁部ヨコナデ後、横位～斜位の密なヘラミガキ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒多、白細粒と白・黒・透明微粒少 やや硬質	FA 層より 2cm上方と FA 層より下（床直上）が接合 口 5/12 周、体 1/2 周 3、74、75、FA 上
15 土師器 椀	口　復 12.5 高　4.5	外面は底部に多方向と体部下半に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部に縦位と底部に 1 方向（?）のヘラミガキ。内外面に暗褐色の煤（?）が薄く付着。	5YR6/6　橙 やや緻密　褐色粗粒多、白・黒・透明細粒少　硬質	口 1/8 周 南入口壁際
16 土師器 杯	口　復 12.4 高　残 4.1 最大　復 12.6	内外面口縁部ヨコナデ後に疎らな横～斜位ヘラミガキ。外面体部ヨコヘラケズリ。内面体部ヨコナデ後にナナメヘラミガキ。	2.5YR5/8　明赤褐 やや緻密　赤細～粗粒多、白・透明微～細粒少 硬質	FA 層より下（床上 1 cm） 口 1/4 周 54
17 土師器 杯	口　復 17.1 高　残 5.3 最大　復 17.4	外面の口～体部間に浅い段あり。外面体部ヨコヘラケズリ。内外面口縁部にヨコナデ後、疎らなヨコヘラミガキ。内面体部は比較的密なヨコヘラミガキ。	10YR7/6　明黄褐 やや緻密　透明微粒多、赤・白細粒微　やや硬質	口 1/12 周
18 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 4.8	内外面口縁部と内面体部にヨコヘラミガキ。外面体部ヨコヘラケズリ。全体の磨滅が進み、調整が不明瞭。	5YR6/6　橙 やや粗い　透明・赤粗粒と黒・白・透明細粒多 硬質	FA 層の上面と FA より上層の各 1 片が接合 口 1/6 周、体 1/8 周 FA 上面、FA 上

19 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 4.3	外面体部ヨコヘラケズリ。内面体部は横～斜位ヘラナデ後に疎らなヨコヘラミガキ。口縁部は内外面ヨコナデ後、内面に横～斜位の疎らなミガキ。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　赤細～粗粒多、白・黒・透明細粒少 やや軟質	FA 層より下（3 片中 2 片は床上 9㎝） 口 1/3 周 7、FA 下
20 土師器 杯	口　復 13.6 高　残 4.6	内外面口縁部ヨコナデ後、ヨコヘラミガキ。外面体部ヨコヘラケズリ。内面体部はヨコヘラナデ後、上端部にヨコヘラミガキ。残存する内外全面に漆仕上げの可能性あり。古墳後期後半の遺物が混入？	5YR5/6　明赤褐 緻密　黒・白・透明細～微粒と赤粗粒少 硬質	FA 層より上(床上 4㎝) 口 1/12 周、体 1/6 周 17
21 土師器 杯	口　復 13.2 高　残 2.8	外面体部ヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面ヨコナデ。内面体部に疎らなナナメヘラミガキ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤微～粗粒多、白・黒・透明微粒微 やや硬質	口 1/6 周、体 1/4 周 FA 上面
22 土師器 杯	高　残 3.9 最大　復 13.4	厚く重い。外面は底部に 1 ～ 2 方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部はヨコナデで、ミガキの有無は残存部が少なくて不詳。内面体部はおそらくヘラナデの後に、横～斜位のヘラミガキ。破損後にいくつかの破片に煤が付着。	2.5YR5/8　明赤褐 やや緻密　赤細～粗粒多、白・黒・透明微～細粒少 やや硬質	FA より上（1 片）と FA より下（貯蔵穴内の 3 片と床上 7㎝の 1 片）が接合 体 2/3 周 48、貯穴、貯 FA 下、FA 上
23 土師器 杯	口　復 13.4 高　残 3.4	内外面の口縁部ヨコナデ後、外面体部ヨコヘラケズリ。内面全体に横～斜位ヘラミガキ。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　赤細～粗粒多、白微～細粒と透明微粒少 やや硬質	FA 層より上層と下層で同一個体の破片が出土 口 1/4 周 FA 上、FA 下
24 土師器 杯	口　14.7 高　残 4.0	外面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ。内面はヨコナデ後、疎らな横～斜位ヘラミガキ。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　赤粗粒多、白・黒・赤・透明細粒少 やや硬質	遺構上面の 3 片と FA 層より上層の 1 片が接合 口 1/3 周 表面、FA 上
25 土師器 杯	高　残 2.4 底　4.6 最大　復 11.6	口～体部境に段あり。外面は底部 1 方向と体部横位のヘラケズリ。内面はヨコナデ後、底部に多方向と体部に横位のヘラミガキをしていた痕がわずかに残る。内面底部中央に焼成前または焼成時の亀裂が生じているが外面までは達しない。外面上半と内面は表面がやや暗褐色状（塗布物？）。	10YR5/3　にぶい黄褐 やや粗い　白・赤・黒・透明細～微粒と赤粗粒少、白礫微　やや硬質	FA層より上(床上4㎝) 体 1/36 周、底 5/6 周 20
26 土師器 杯	高　残 2.6 底　復 4.0	外面は底部に多方向と体部に横～斜位ヘラケズリを行いわずかに凹底。内面はヨコナデ後にやや交叉気味の放射状にヘラミガキ。	5YR3/4　暗赤褐 やや緻密 透明細粒多、赤・白粗～細粒少 硬質	遺構上面と FA より上層の各 1 片が接合 底 1/3 周 表面、FA 上
27 土師器 杯	口　復 13.6 高　残 4.5	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面はヨコナデ後、体部に多方向と口縁部に横位のヘラミガキ。内外面の口縁部上位に暗褐色の付着物が薄く残る（漆？）。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒と白・黒・透明細粒少　やや硬質	FA 層より上層 口 1/12 周、体 1/6 周 FA 上
28 土師器 杯	口　復 15.1 高　残 3.4	内外面ヨコナデ後、外面体部ヨコヘラケズリ。外面口縁部に横位と内面体部に放射状のヘラミガキ。内外面の口縁部に漆仕上げ（？）残存。古墳後期後半の遺物が混入。	2.5YR6/8　橙 緻密　透明・白微粒少、赤微粒微 やや硬質	FA 層より上層と FA 層中から出土 口 1/4 周 FA 上、FA
29 土師器 高杯	口　復 13.4 高　残 4.5	内外面口縁部ヨコナデ、外面体部ヨコヘラケズリ。内面体部に 1 方向または放射状のやや密なヘラミガキ。	5YR5/8　明赤褐 粗い　赤粗粒多、白・透明礫～粗粒少　硬質	FA より下層（床直上） 口 1/4 周 57
30 土師器 高杯	口　復 17.2 高　残 4.2	杯部下位の体～底部境に稜を持つ可能性があるが、残存部はごくわずか。内外面ともに体部ナナメヘラケズリ後に横～斜位ヘラミガキ。口縁部はヨコナデ後、内面にヨコヘラミガキ。	2.5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白細粒と赤細～粗粒多、黒細粒と透明微粒少　硬質	FA より上層 口 1/4 周 FA 上
31 土師器 高杯	口　14.3 高　残 12.7	脚柱は粘土塊成形で杯部は紐積み成形。外面は口縁部ヨコナデ後に他の全面をヘラケズリ。内面は剝落して大半が不明だが、縦位および横位ヘラミガキがごく一部に残存する。内外面に暗褐色の汚れが付着する部分あり。	2.5YR6/8　橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・黒細粒微 やや硬質	FA 上面の 11 片と FA より下層の 3 片が接合。脚部は FA 下（床上 5㎝） 口 1/2 周、脚柱全周 71、FA 上、FA 上面、FA 下
32 土師器 高杯	高　残 9.0 最大　復 6.7	外面タテヘラケズリ。内面は磨滅しているが、脚柱部はヨコヘラケズリと思われる。杯部内面の調整は磨滅のため不明。	10YR8/4　浅黄橙 やや粗い　白・褐色・灰色礫～粗粒と白・黒・透明細粒多　軟質	FA層より上(床上9㎝) 脚柱全周 24
33 土師器 高杯	高　残 5.6	脚柱部の上面に杯底部の粘土を貼り付けて杯部成形を始めたものと見られる。外面は脚部タテヘラケズリ。脚内面はヨコナデ。杯内面は残存部がわずかなので調整不明。	2.5YR6/8　橙 やや緻密 赤粗粒と白・赤・黒・透明細粒多 やや硬質	FA 層より上(床上 3㎝) 脚柱全周 29
34 土師器 高杯	高　残 6.8 脚裾　復 10.6	脚柱部は粘土塊成形で、杯部と脚裾部は紐積み成形。外面は脚裾部ヨコナデ後に脚部タテヘラケズリ、裾部にやや雑で疎らなヘラミガキ、杯部ヨコヘラケズリ。脚内面はヨコナデで、中央部が 3㎜ほど山形に突出する。杯内面は磨滅して調整不明。	7.5YR6/6　橙 やや緻密 赤粗粒と白・赤・黒細粒少 やや軟質	FA層より上(床上24㎝) 脚裾 1/12 周、脚柱全周 31
35 土師器 高杯	高　残 2.0 脚裾　復 12.0	おそらく短脚。脚柱部は外面タテヘラケズリ、内面斜～横位ヘラナデ。脚裾部内外面ヨコナデ後、断面図に示したような厚さ 1 ～ 2㎜の粘土貼り付けを外面裾部の 1 箇所に行い（補修痕跡か？）、また外面に縦位の沈線と疎らなヘラミガキを施す。	2.5YR5/8　明赤褐 やや緻密　白・黒・透明細粒少、赤粗～細粒微 やや硬質	FA 層より上の 2 片が接合（1 片は床付近） 脚裾 1/3 周 9、FA 上
36 土師器 甕	口　復18～20 高　残 5.3	外面頸部に 6 本 /㎝のタテハケ後、口縁部ヨコナデ。内面肩部にやや強いヨコヘラナデ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　白・黒・透明微～細粒多、半透明・灰色細～粗粒微　軟質	FA層より上(床上6㎝) 口 1/8 周 26、FA 上面
37 土師器 小形甕	口　復 15.5 高　残 7.0 最大　復 19.0	外面は肩部にやや雑なナデ後、胴部ヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面口～肩部にヨコナデ。外面の口端に狭い面を持つ。外面胴部に煤少量付着。	10YR6/4　にぶい黄褐 やや緻密　白・透明細粒少、赤・白粗粒微 やや硬質	FA 層より上（床上 8 ～ 13㎝が接合） 口 1/12 周、肩 1/3 周 4、6
38 土師器 小形甕	口　復 14.8 高　残 10.1 最大　復 16.0	内外面ともに肩部ナデ後、胴部ヨコヘラケズリ。口～頸部はやや雑なヨコナデで、外面に沈線状の段を 2 ～ 3 段生じているが、それを消すような仕上げナデを行わない。	10YR6/6　明黄褐 やや粗い　白・灰色礫、赤粗粒、透明・黒・白細粒少 硬質	FA層より下(床上14㎝) 口 1/6 周、頸 5/12 周 56
39 土師器 甕	口　復 18.4 高　残 21.5 最大　復 25.4	外面は胴部にやや雑なタテナデ後、下位ヨコヘラケズリ。内面全面と外面口縁部にヨコナデ。外面肩部に焼成前の平行刻線が 2 箇所あり、それぞれ 2 本と 7 本が見られる。外面胴～頸部全体に煤が付着し、内面にはコゲ痕などが見られない。	10YR5/2　灰黄褐 やや緻密　白・透明粗～細粒少、白・黒・赤・灰色礫微 やや硬質	FA 層より下（貯蔵穴底上 17 ～ 19㎝と入口部床上 5㎝） 口 1/4 周、頸 1/2 周 58､60､64､南入口壁際

40 土師器 甕	高　残 9.3 底　7.4	外面胴下端ナデ後に胴部タテヘラケズリ、積み上げ休止面付近に横位のヘラケズリとヘラミガキ。外底面はハケメ後に外周ヘラケズリ。内面は円周方向のハケメ。いずれもハケメは 3 本 /㎝で非常に粗い。外底面付近が弱く被熱している可能性あり。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　白・赤礫～粗粒多、透明細～粗粒と灰色礫少 やや軟質	FA 層より上部（床上 3㎝）・上面・下部が接合 底 1/2 周 2、FA 上、FA 下、FA 上面、FA
41 土師器 甕	口　復 15.0 高　残 9.5 最大　残 19.6	外面は胴部に斜位のヘラケズリとヘラナデ、内面胴部ヨコヘラナデ。内外面の口～頸部にヨコナデ後、外面頸部タテヘラミガキ。焼成前に口～頸部に縦位の亀裂が入った部分の内外面に、タテユビナデとタテヘラミガキで補修を行ってから焼成している。外面胴部（口から下へ 7㎝付近以下）に煤付着。	5YR4/6　赤褐 やや粗い　白・黒・透明粗～細粒少、白礫・赤粗粒微硬質	FA 層の上下（床上 2～ 7㎝）と遺構上面が接合 口 5/12 周、頸 1/2 周 15、16、70、表面、FA 上
42 土師器 甕	高　残 2.8 底　7.8	わずかに凹み底状。外底面に 2 ～ 3 方向と外面胴部にナナメヘラケズリ。内面底部に 1 方向と胴部に横位のヘラナデ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒・透明微～細粒と白微～粗粒多、灰色礫少 やや軟質	FA 層より下（貯蔵穴底上 9㎝） 底 1/2 周 62
43 土師器 甕	高　残 4.0 底　7.4	外面は胴部にナデまたはヘラナデ後、底面に多方向と胴下端に横～斜位のヘラケズリを行って丸底気味に仕上げる。内面は多方向ヘラナデ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒・透明・白微～細粒少、赤細粒少　硬質	FA より上(床上 11㎝) 底 7/12 周 10、FA 上
44 土師器 甕	高　残 3.8 底　6.3	円盤状に突出する外底面は円周方向ヘラケズリおよびヘラナデで丁寧な作り。外面胴部は横～斜位のヘラナデとヘラケズリ。内面は 2 ～ 3 方向のナデ。外面胴部の煤（底面から上へ 1㎝よりも上部）と内面残存部上端付近のコゲ痕が明瞭。	10YR5/4　にぶい黄褐 やや粗い　透明細～微粒多、白礫と白・黒細～粗粒少 やや軟質	FA 層下（床上 5㎝） 底 5/6 周 69
45 土師器 甕	高　残 3.8 底　6.7	外面胴部ナナメヘラナデ、胴下端ヨコヘラケズリ。外底面は多方向ヘラケズリでわずかに凹面にした後にヘラナデ。内面は斜位および円周方向のヘラナデ。外面胴部に煤少量と、内面に黒褐色の汚れが薄く付着。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　透明微～粗粒多、黒細粒と白粗～細粒少 軟質	FA 層より上(床上 1㎝) 底 3/4 周 1、FA 上
46 土師器 甕	高　残 2.4 底　復 7.3	円板状に突出する外底面は 1 方向ヘラケズリでわずかに凹面。外面胴部は横～斜位ヘラケズリ。内面は多方向ヘラナデ。かなり被熱して赤化した部分が目立つ。	10YR7/6　明黄褐 やや粗い　透明微～細粒と黒細粒多、白・半透明・灰色細粒～礫少　軟質	FA 層より上 底 5/12 周 FA 上
47 土師器 甕	高　残 1.5 底　6.3	外底面に 1 方向と外面胴部に横～斜位のヘラケズリ。内面胴部に斜位のヘラナデまたはナデ。外面胴部に煤少量付着。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・黒・赤・透明粗～細粒多　軟質	FA 層より上 底 1/2 周 FA 上、FA 上面
48 土師器 大形壺	口　復 21.4 高　残 8.1	外面はヨコナデ後タテヘラミガキ。内面口～頸部はヨコナデ後ヨコヘラミガキを行うが、磨滅が著しいので調整が不詳の部分が多い。内面肩部ナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　透明・黒微～細粒と白微～粗粒多、赤細粒少　やや硬質	FA 層より下（東壁際の床直上） 口 1/6 周、頸 1/4 周 51、床直
49 土師器 壺	口　復 15.6 高　残 10.6	外面は肩部ヘラナデまたはヘラケズリと見られるが、磨滅しているので不確実。内外面の口～頸部にヨコナデ。内面肩部は雑なナデで紐積み痕をよく残す。内外面全体が不規則に被熱するので、おそらく破損してから火を受けたものと見られる。	2.5YR5/8　明赤褐 やや粗い　透明白・黒微～細粒多、白・黒粗粒少 軟質	FA 層より下（西部床上 2㎝）。FA 層より上にも破片あり 口 2/3 周、頸全周 72、FA 上



第 117 図　権現山遺跡 4 区 SI-10（3）　遺物

50 土師器 甑	口　推 24 ～ 26 高　推 27 ～ 28 底　復 9.3 孔　復 8.4	外面は幅広いミガキのようなタテヘラナデ後、胴部下位の積み上げ休止面より下部にヨコヘラナデ。胴下端に部分的なヨコヘラケズリ。口縁外面のヨコナデ部は残存していない。内面は胴部下位にヨコヘラナデ、上～中位にヨコハケ、頸部にヨコナデ、孔縁部ヨコヘラケズリ、内面全体タテヘラミガキ。 [注記]25、53、59、60、61、FA 上貯、FA 下貯、FA 上、表面	5YR6/6　橙 やや緻密　白微～細粒・透明微粒・赤細～粗粒少 やや硬質	FA より上（床上 1cm）と FA より下（床上 10㎝と貯蔵穴底上７～17㎝）が接合 底 2/3 周、頸 1/36 周 注記は左欄
51 土師器 甑	口　復 17.4 高　残 12.0 最大　復 19.6	口縁部のヨコナデがやや粗雑。外面はヨコナデおよび口～頸の一部にハケ調整後、やや幅広いミガキのようなタテヘラナデ。内面は胴部に縦～斜位のナデとヨコハケ後ヘラミガキ。口縁部に雑なヨコナデ後ヨコハケと縦～斜位ヘラミガキ、内面の所々に暗褐色の汚れが付着。	2.5YR6/8　橙 緻密　白・透明微～細粒と赤細～粗粒少 やや軟質	FA より上（床上２～9㎝）と FA より下（床上２～ 10㎝）が接合 口～頸 1/2 周 19、21、28、49、55、FA 下、K 南
52 土師器 甑	高　残 3.5 底　復 8.2 最大　残 14.7 孔　復 7.4	底面の外周が弱く下へ突き出る。外面ナデ後に横～斜位ヘラケズリ。内面ヨコヘラナデ。孔の端面は磨耗して器面が荒れている。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや粗い　白・黒・透明粗～微粒多、灰色礫少　軟質	FA 層より下 底 1/4 周 FA 下
53 土師器 鉢	高　残 1.9 底　5.9	外面は体部ナナメヘラナデ、外底面はおそらくヘラケズリ後にナデ。内面はおそらくヘラナデと見られるが、器面剝離しているため不明瞭。	5YR5/6　明赤褐 緻密　白細～微粒と黒・透明微粒微　やや軟質	FA 層より下 底 1/2 周 FA 下
54 須恵器 甕	高　残 6.4	外面は平行タタキで、おそらく叩き板の木目と直交する溝を彫ってあるが木目はあまり浮き出ていない。内面はナデで無文。	10YR4/1　褐灰 緻密　透明微～細粒多、白微～細粒少、硬質	胴部片のみ FA 上
55 石器 台石	長　25.2 幅　20.9 厚　5.8	均一な厚さの偏平な自然石。硬質で緻密な石質なので使用痕は不明。被熱痕はない。重量 4500g。	5Y6/2　灰オリーブ 緻密　石英玢岩	FA 層中（床上 6cm） 完形 67
56 礫	長　12.3 幅　8.4 厚　5.7	両面が平坦な自然礫。全面が被熱赤化し、煤も付着。図の右下と図の左上裏面の隅部は被熱後に剝離し、打撃ではなく温度変化による破損かと思われる。使用痕や加工痕はない。重量 1032.4g。	2.5Y6/1　黄灰 流紋岩	FA 層より上（床上 5cm） 隅部破損 32
57 石器 磨石	長　11.7 幅　10.3 厚　5.7	自然の円礫を利用し、側面も含めて全体が磨耗する。図の下半部では外周寄りに細かい傷がみられるので、敲石にも使用していると思われる。被熱痕や加工痕は見られない。重量 1115.9g。	2.5Y7/2　灰黄 デイサイト	FA 層より下（床付近） 完形 41
58 土師質 焼粘土塊	長　残 4.1 幅　残 3.8 厚　残 2.7 重　残 16.6	不定形にこねた粘土塊で、特に図示した側面に草本植物の圧痕が平行して若干付着する。内部に植物が入り込む状況はない。図の上と右側は成形時の外形で、左下側は破面。破面と表面の色調が全く同一なので、焼成中に亀裂が生じて割れたものかもしれない。	7.5YR6/8　橙 緻密　白・黒・透明微粒少 やや硬質	
59 土師質 焼粘土塊	長　残 3.1 幅　残 2.6 厚　1.0	平たくつぶした粘土塊が割れた破片。右図の面は全体が剝離した可能性もあり、そうならばもう少し厚くなる。左図の面は線状圧痕が２方向に平行し、植物などの圧痕かもしれないが不確実。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗粒と白細粒微　やや硬質	FA 下

４区 SI-11（第 118・119 図、写真図版 39・40・118・119）

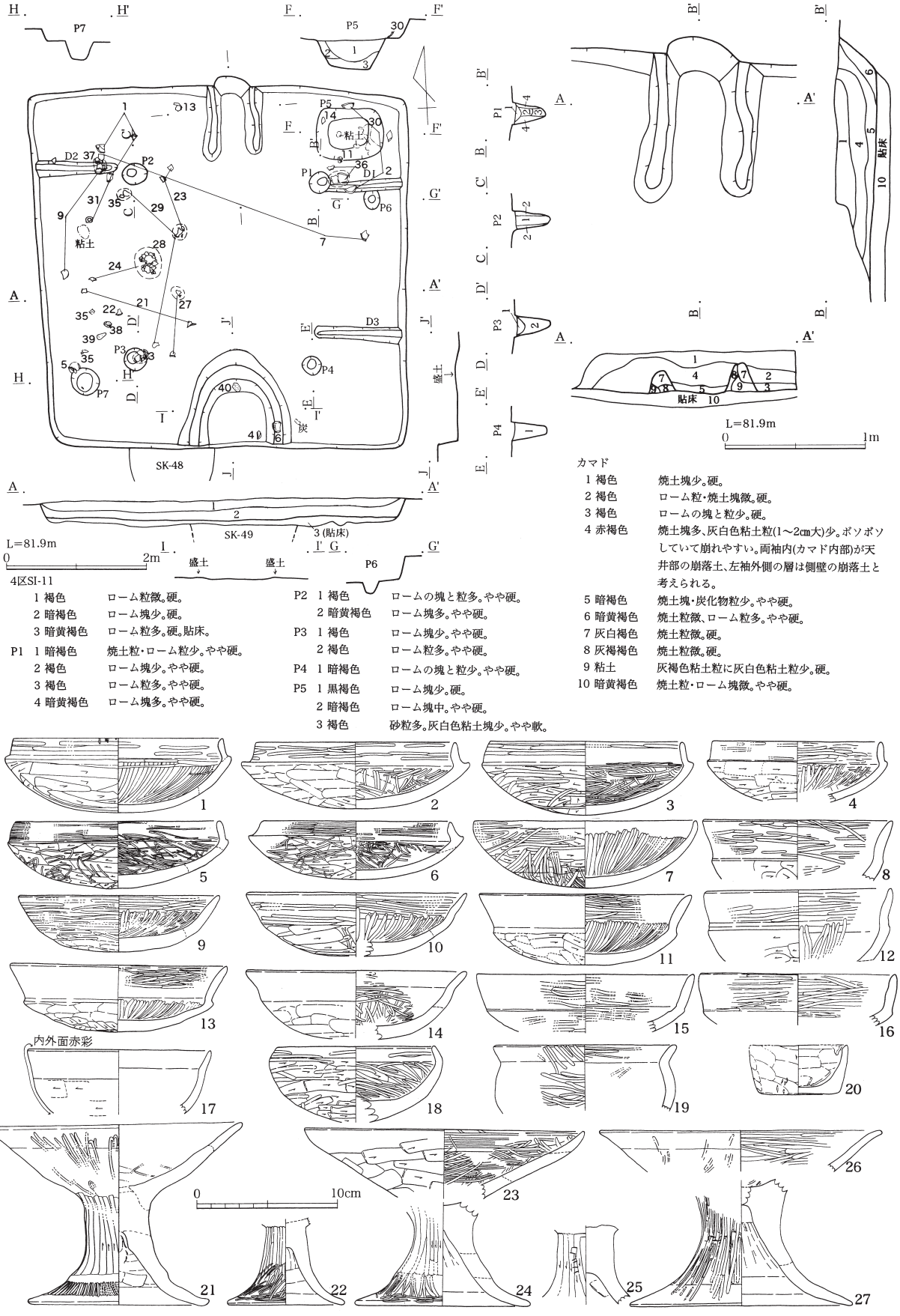
［位置］ ４区内北西部の台地平坦面、35.5-11.5・12.0 と 36.0-11.5・12.0 グリッド。古墳後期の SI-3 が北西に、古墳中期の SI-92 が西にある。南西に古墳中期末～後期初の SI-7 と時期不明の SB-153、北西・南西・北東・南に古墳中期の SI-4・8・10・54 がある。古墳中期の円筒形土坑 SK-48・49 を南壁西部と中央部で切る。調査開始時には SK-48 を SI-11 に付属する張り出しピットかと考えたが、別遺構と判明した。

［規模と形状］ 東西 5.38 ×南北 5.15m の方形で中軸は N-2°-E。壁は直線的に外傾し、残存高 0.17 ～ 0.32m。南西隅付近の確認面が低い。床面はおおむね平坦で、傾斜しない。掘方は若干の凹凸があり、床面から深さ 6 ～ 12cm で、中央より壁際がわずかに深い。ローム塊が多い暗黄褐色の３層でほぼ全体を貼床する。

主柱穴は４本（P1 ～ P4）。P1 は径 30 × 28 ×深さ 46cm、P2 は径 35 × 30 ×深さ 52cm、P3 は径 33 × 31 ×深さ 50cm、P4 は径 27 × 25 ×深さ 51cm。P1・2 では柱痕が確認された。柱間は P1-P4 間 2.60m、P2-P3 間 2.62m、P2-P1 間 2.72m、P3-P4 間 2.56m で、ほぼ均等配置。貼床除去後、北東主柱穴 P1 の東側と、南西主柱穴 P3 の南西で P6 と P7 を確認した。P6 は径 27 × 22 ×掘方底から深さ 18cm、P7 は径 30 × 27 ×掘方底から深さ 27cm。入口ピットはないが、南壁際中央で、幅 30 ～ 60 ×高 2 ～ 5cm の断面カマボコ状にロームを突き固めた土手状の高まりを確認した。東西 160cm、南北 130cm の馬蹄形で、入口施設に伴うものと考えられる。間仕切溝は西壁際１本と東壁際で２本の計３本が確認されている（D1 ～ D3）。D3 が若干北側に寄るが、３本とも主柱穴に付随するようにあり、壁に繋がる。断面形は「U」字状で、長さは 100 ～ 120cm、幅は 15 ～ 20m、床面からの深さは 10 ～ 15cm である。貯蔵穴 P5 が北東隅にある。東西軸の長方形で 95 × 61cm、床面から深さ 46cm、平坦面内側の規模は 56 × 41cm。底面は隅丸長方形で、壁は緩くやや外傾する。覆土最下層にカマド構築材の灰白色粘土を少量含む。1・2 層はローム塊を含み硬い。

［カマド］ 北壁中央にある。西側の方向へ崩れるが、袖は比較的良く残る。両袖間 82cm、長さ 118cm。竪穴貼床上に灰褐色粘土主体の７～９層で袖を作る。袖内面は被熱・赤変部が多い。火床はほぼ平坦で、煙道は北壁を若干「U」字状に掘り、６層を約 5cm の厚さで貼る。火床から煙道は緩く曲線的に上がる。

［覆土］ 覆土は２層で、自然堆積である。



4区SI-11

1 褐色　ローム粒微。硬。
2 暗褐色　ローム塊少。硬。
3 暗黄褐色　ローム粒多。硬。貼床。

P1　1 暗褐色　焼土粒・ローム粒少。やや硬。
2 褐色　ローム塊少。やや硬。
3 褐色　ローム粒多。やや硬。
4 暗黄褐色　ローム塊多。やや硬。

P2　1 褐色　ロームの塊と粒多。やや硬。
2 暗黄褐色　ローム塊多。やや硬。

P3　1 褐色　ローム塊少。やや硬。
2 褐色　ローム粒多。やや硬。

P4　1 暗褐色　ロームの塊と粒少。やや硬。

P5　1 黒褐色　ローム塊少。硬。
2 暗褐色　ローム塊中。やや硬。
3 褐色　砂粒多。灰白色粘土塊少。やや軟。

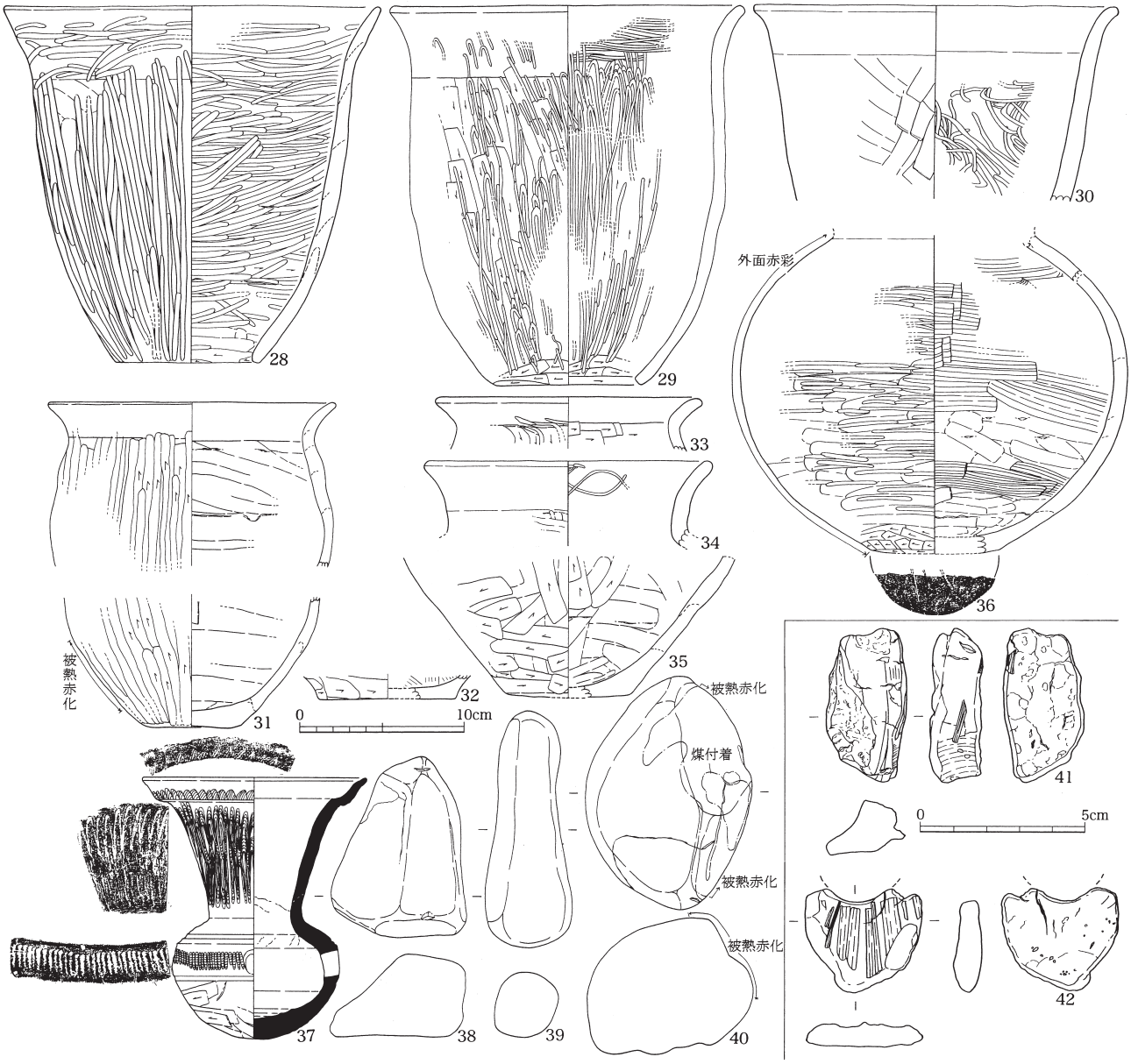
カマド

1 褐色　焼土塊少。硬。
2 褐色　ローム粒・焼土塊微。硬。
3 褐色　ロームの塊と粒少。硬。
4 赤褐色　焼土塊多、灰白色粘土粒(1～2㎝大)少。ボソボソしていて崩れやすい。両袖内(カマド内部)が天井部の崩落土、左袖外側の層は側壁の崩落土と考えられる。
5 暗褐色　焼土塊・炭化物粒少。やや硬。
6 暗黄褐色　焼土粒微、ローム粒多。やや硬。
7 灰白褐色　焼土粒微。硬。
8 灰褐褐色　焼土粒微。硬。
9 粘土　灰褐色粘土粒に灰白色粘土粒少。硬。
10 暗黄褐色　焼土粒・ローム塊微。やや硬。

第 118 図　権現山遺跡 4 区 SI-11（1）　遺構・遺物

［遺物および出土状況］遺物はやや多い。図示以外の 489 片（3,882g）の内訳は、杯 170 片（960g）、高杯 33 片（272g）、甑 9 片（136g）、壺 4 片（42g）、甕 265 片（2,451g）、焼粘土塊 8 点（21g）である。赤彩の壺（36）は床面付近と貯蔵穴内で出土した。竪穴西半部に遺物が多く、特に高杯が目立つ。

37 は MT15 型式並行期の破片で、波状文がかなり雑である。17 は赤彩、1・4・7・11 は漆仕上げ。口縁が外傾する赤～橙色系統の杯が主体で（8 ～ 10・14 ～ 16）、白色系統もある（7・11 ～ 13）。11 と 13 は薄く剥がれやすい。身模倣形の杯は炭素吸着で黒く処理する傾向がある（2・3・5・6）。1 は灰色系統の最も精良な胎土。4 は白色・金色雲母を含む褐色胎土の搬入品。雲母を含む土師器は 4 区 SI-24 などにある。20 は紐積みでなく手捏ね成形。高杯は赤～橙色系統が主体で、短脚から少し長脚化したものや大形品がある。21 と 24 は同工品。36 は古墳後期では珍しく底面以外の外面を赤彩する壺で、ゆるく突出する底面形や、内面ハケ調整が特徴である。32 も内面ハケ調整。他に小・中形の壺破片がごく少量出土した。埴輪のような粗いハケ調整の甕破片が数点ある。甑は底部に大孔を持つ大形品だけがある。後期前半なので外面ミガキ調整の甑が目立つ。自然礫のうち 40 は被熱している。41 は草本植物の圧痕を伴う焼粘土塊。



第 119 図　権現山遺跡 4 区 SI-11（2）　遺物

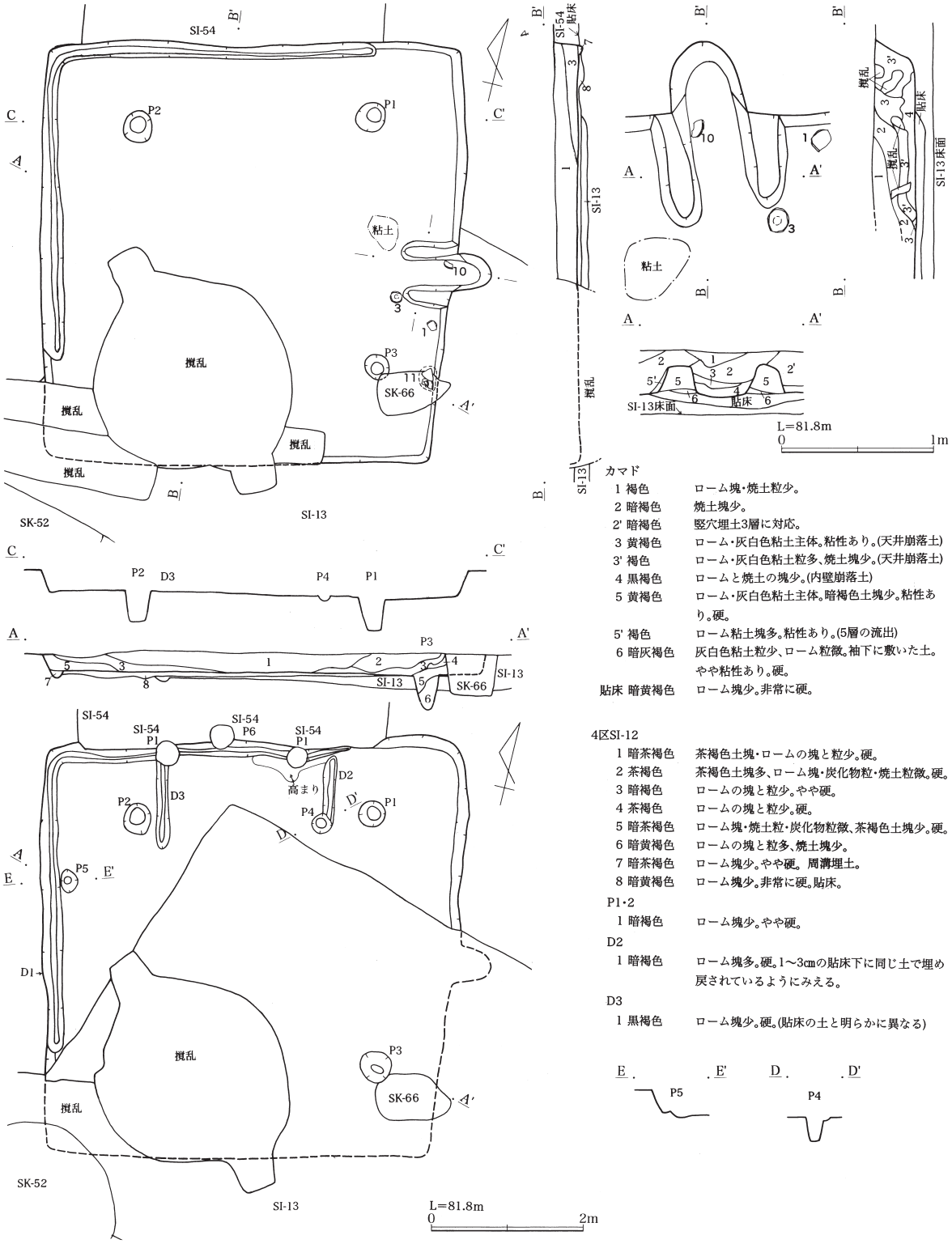
第 49 表　権現山遺跡 4 区 SI-11　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 14.8 高　5.2 最大　復 15.9	内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面底部 1 方向の後に体部横位のヘラケズリ。内面体部は密な放射状ヘラミガキ。中央付近の外面図に示した傷が口縁端についた後に、外面口縁部と内面に漆仕上げ。内面体部の漆はごく一部に残存する。	10YR5/2　灰黄褐 緻密　黒・透明微粒微 やや硬質	床上 15 ～ 19cmが接合 口 1/3 周、体 1/2 周 10、13
2 土師器 杯	口　14.0 高　4.7 最大　16.1	内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面底部 1 ～ 2 方向ヘラケズリ後、体部ヨコヘラナデ。内面体部ヘラナデ後、底部に多方向と体部に斜位のヘラミガキ。内外全面に炭素吸着の黒色処理。	2.5Y2/1　黒 やや緻密　白細粒・透明微粒多、白・半透明粗粒と黒細粒少 硬質	床上 2cmと間仕切溝底上 9cm（床面付近）が接合 口 11/12 周、体全周 2、7
3 土師器 杯	口　13.4 高　5.2 最大　14.8 重　220	内外面は口縁部にヨコナデ後、上半部ヨコヘラミガキ。外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ後、不規則なヘラミガキ。内面体部はヘラナデ後、横および斜位のヘラミガキ。内外全面に炭素吸着の黒色処理。	2.5Y3/1　黒褐 やや粗い　透明粗～微粒多、白細砂少 やや硬質	南西柱穴底上 50cm（周囲の床より上 2 cm） ほぼ完形、口全周 34、石英
4 土師器 杯	口　復 12.0 高　残 4.2 最大　復 12.8	外面口縁部ヨコナデ後ヨコミガキ。体部丁寧なケズリ。外面は口縁部で表面が剝落し、体部が磨滅しており、ミガキの疎密などは不詳。内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ後口～体部ミガキ。ミガキは口縁部横方向後体部放射状で密に施す。口～体部内外面漆仕上げ。	10YR6/4　にぶい黄橙 緻密　白雲母細粒多、金雲母微粒少、白粗～細粒微 硬質	床上 10cm 口～体 1/3 周 37
5 土師器 杯	口　復 14.6 高　4.8 最大　15.6	内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面底部 1 ～ 2 方向の後、体部ヨコヘラケズリと疎らなナナメヘラミガキ。内面体部ヘラナデ後、斜～横位ヘラミガキ。内外全面に炭素吸着の黒色処理。	5Y3/1　オリーブ黒 やや緻密　黒・白・透明細粒多、白・透明粗～細粒少 やや硬質	床上 11cm 口 1/2 周、体 7/12 周 33
6 土師器 杯	口　復 13.6 高　4.1 最大　復 15.2	内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面底部 1 方向の後体部横位のヘラケズリ、体部上位を中心にナナメヘラミガキ。内面体部ヘラナデ後、体部に斜位と体部上位に横位のヘラミガキ。内面全面と外面の約半分は炭素を吸着して黒色で、内面は意図的に処理したものと見られる。	5Y3/2　オリーブ黒 やや緻密　白・黒・透明細粒多 やや軟質	入口縁部の土堤上方 14cm（床上 16cm） 口 1/4 周、体 5/12 周 38
7 土師器 杯	口　復 15.6 高　残 4.7 最大　復 15.8	外面は口～体部境に弱い稜を持ち、口縁部ヨコナデ後に体部ヘラケズリ、底部に 1 方向と体部に横位のやや密なヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデ後に放射状の密なヘラミガキ。外面中位以上と内面全面に漆仕上げ。	7.5YR7/4　にぶい橙 緻密　白・透明微粒と黒細粒微 やや硬質	床上 15 ～ 20cmが接合 口 1/3 周 8、14
8 土師器 杯	口　復 13.4 高　残 4.2	外面口縁部ヨコナデ後疎らなミガキ、体部ケズリ後光沢のあるナデ。内面口縁～体部ヨコナデ後疎らなミガキ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒少、白細～微粒微　やや硬質	口～体 1/6 周
9 土師器 杯	口　14.3 高　4.0	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデ後口縁～体部疎らなミガキ。外面全体は表面が磨滅しているため、ミガキの疎密は不詳。内面口縁～体部ヨコナデ、体～底部ナデ後口縁～底部ミガキ。ミガキは口縁～体部ヨコ方向後体～底部放射状で密に施される。内外の器面に暗褐色の付着物（漆仕上げ?）。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒と白細～微粒少 やや軟質	床上 20cm。北西部の須恵器 37 付近にも小片 1 点あり 口～体 2/3 周 15、22
10 土師器 杯	口　復 15.5 高　残 4.5	外面は底～体部に 1 方向ヘラケズリ後、体部ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ（内面側が密）。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。	5YR4/8　赤褐 緻密　黒・白細～微粒と赤粗～細粒微　やや軟質	口 1/6 周、体 1/4 周
11 土師器 杯	口　復 15.0 高　残 5.0	外面は口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、体部に放射状の密なミガキ。内外全面漆仕上げ。外面は器面が剝離・破損した後に煤（?）が付着。	10YR8/3　浅黄橙 緻密　赤細粒微 やや硬質	床上 5cm。貯蔵穴内に小片 1 点あり 口 5/12 周、体 5/6 周 4、貯穴
12 土師器 杯	口　復 13.1 高　残 5.1 最大　復 13.4	内外面口縁部ヨコナデ後、ヨコヘラミガキ（内面側で密）。外面体部ヨコヘラケズリ。内面体部にやや密な放射状ヘラミガキ。	7.5YR7/6　橙 緻密　赤・白・黒微粒微 やや硬質	口 1/8 周
13 土師器 杯	口　復 15.4 高　残 4.7	外面体部上半に雑なナデ、体部下半に多方向ヘラケズリ。内外面の口縁部ヨコナデ後、内面口上半にヨコヘラミガキ。内面体部に放射状ヘラミガキ。内面口縁部は赤彩のようにも見えるが、おそらく焼成時の発色によると思われる。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　赤微～細粒少、透明・白微粒微 やや硬質	床上 5cm。カマド出土の小片 3 点も接合 口 1/4 周、体 1/3 周 9、K
14 土師器 杯	口　復 15.6 高　残 4.8	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデで体部には粘土の皺が残る。内面口縁～体部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ後口縁～底部やや疎らなミガキ。ミガキは体～底部放射状後口縁～体部横方向。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　赤粗～細粒少、白・透明微粒微 やや硬質	貯蔵穴底上 41cm（周辺の床面より上 5cm） 口～体 1/6 周 3
15 土師器 杯	口　復 15.3 高　残 4.1	内外面の口～体部境に明瞭な段あり。外面体部ヘラケズリ（?）と外面口縁部～内面ヨコナデの後に全体を通じて密なヨコヘラミガキ。	10YR7/4　にぶい黄橙 粗い　赤細粒～礫多 やや軟質	口 1/12 周、体 1/8 周
16 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 3.6	外面口縁部ヨコナデ後横方向の密なミガキ。体部は表面剝落し調整不明。内面口縁～体部ヨコナデ後横方向の密なミガキ。使用のためか、口縁端部の大半は磨滅。外面口縁部、内面全体漆仕上げ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤粗～細粒少、透明・白微粒微　やや軟質	口～体 1/6 周
17 土師器 杯	口　復 13.0 高　残 4.5	内外面口縁部ヨコナデ。体部は内外面ともに表面が剝落しているため調整不詳だが、外面はヘラケズリかと思われる。内外面赤彩（ただし内面体部は剝落）。	10YR7/3　にぶい黄橙 緻密　赤・白・黒・透明細粒微 やや硬質	口～体 1/8 周
18 土師器 杯	口　復 11.2 高　残 5.4 最大　復 12.2	底部が厚い（厚さ 16㎜）。外面口縁部ヨコナデ後疎らなミガキ、体～底部ケズリ後体部上位に疎らなヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ後疎らなミガキ、体～底部ヘラナデ後やや疎らな斜位のミガキ。底部内面は比較的平坦。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　赤粗～細粒多、白細～微粒微 硬質	床上 19cm 口～底 1/5 周 10
19 土師器 杯	口　復 13.0 高　残 4.7	内外面口縁部ヨコナデと外面体部にヨコヘラナデまたはヘラケズリの後、外面体部と内面口縁部にヨコヘラミガキ、外面口～頸部と内面体部にナナメヘラミガキ。内面体部は剝落が著しいので調整が不明確。古墳中期中頃の遺物が混入。	2.5YR6/6　橙 やや粗い　透明微粒多、白細～粗粒少、赤細～粗粒微 やや硬質	口 1/12 周、頸 1/6 周
20 土師器 小形土器	口　復 7.0 高　3.6 底　復 5.6	紐積みでなく手捏ね成形。外底面は平坦なところに押し付けて成形した後、軽いナデ。外面体部は雑なユビオサエ。内面底部は円周方向のヘラナデ、口縁部は雑なナデで粘土を折り返したカスがそのまま残る。	2.5Y4/1　黄灰 やや緻密　透明細粒多、白・黒・赤細～微粒少 やや軟質	口 1/6 周、底 1/3 周
21 土師器 高杯	口　復 18.0 高　12.9 脚裾　12.8	脚柱部は粘土塊成形で、杯部と脚裾部は紐積み成形。外面は脚柱部にタテヘラケズリ、脚裾部は右下がりのナナメヘラミガキ。脚端と口縁部ヨコナデ、杯部タテヘラミガキ。脚内面は脚柱部ナデ後に裾部ヨコナデ。杯部内面はナナメヘラミガキが残存するが、磨滅して不明な点が多い。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤粗～細粒多、黒・白・透明細粒少 やや軟質	床上 3 ～ 8cmが接合 口 1/3 周、脚柱全周 24、28

22 土師器 高杯	高　残 6.1 脚裾　8.3	脚部と杯部との接合面で分離している。外面全面に脚柱部で縦位、裾部で斜～横位の密なヘラミガキ。内面は脚上部タテナデ後に下部をヨコナデ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤微～粗粒と透明微粒多、白・黒微～細粒少 硬質	床上 8㎝ 脚完存 26
23 土師器 高杯	口　復 19.8 高　残 4.8	外面杯部口縁部ヨコナデ後体部ケズリ。内面杯部口縁部ヨコナデ、体部ナデ後口縁～体部多角形状の密なミガキ。口縁部はわずかに内彎する。	5YR4/8　赤褐 やや緻密　赤粗～細粒多、白微粒少 硬質	床上３～４㎝とカマド出土。SK-49 にも小片２点混入　口 2/3 周 11、12、20、K SK-49
24 土師器 高杯	高　残 7.2 底　12.4	外面は脚柱部タテヘラケズリ、脚裾部ヨコナデ後に斜位と横位のヘラミガキ。脚内面は上半にタテナデ、裾部ヨコナデ。杯部内面は残存部がわずかなので調整不明。	5YR6/8　橙 やや緻密　赤粗～細粒少、透明微粒と白・黒細粒微 やや軟質	床上６～８㎝が接合 脚柱 1/2 周、脚裾 2/3 周 21、23
25 土師器 高杯	高　残 5.3 脚柱　4.0	外面タテヘラケズリ。ヘラの当たった痕を多く残す。内面ヨコヘラナデ。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　赤粗～細粒多、白・黒・透明微粒少　硬質	脚柱 1/2 周
26 土師器 高杯	口　復 20.0 高　残 2.9	外面杯部口縁部ヨコナデ後口縁へ体部縦方向主体のミガキ？(外面は表面磨滅のため調整不詳)。内面杯部口縁部ヨコナデ、体部ナデ後口縁～体部横方向のミガキ。	7.5YR6/6　橙 緻密　赤細粒微 やや軟質	口 1/8 周
27 土師器 高杯	高　残 8.9 脚裾　復 15.8	外面脚部上半～中位ケズリ、下半ヨコナデ後脚部ミガキ。ケズリにより脚部は多角形状に面取りされる。内面杯部底部ヘラナデ後ミガキ。脚部上半ナデでしぼり目わずかにあり。脚部中位ナデ、脚部下半ヨコナデ。内面表面は磨滅している部分が多いため、ミガキの有無は不明。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤粗～細粒多、白粗～細粒少、黒・透明細粒微 硬質	床上 3㎝の破片が接合 脚柱 1/2 周、脚裾 1/12 周 27、35
28 土師器 甑	口　復 22.8 高　残 21.4 底　8.7 孔　7.8	外面は胴部ナデ後タテヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は胴部下位の積み上げ休止面付近と胴下端にヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後全体にヨコヘラミガキ。外面全体に若干の煤が付着。	10YR7/6　明黄褐 やや緻密　赤粗～細粒多、白・黒・透明微粒微 やや硬質	床上 6㎝ 口 1/2 周、底 7/12 周 21
29 土師器 甑	口　復 21.4 高　22.9 底　復 8.6 孔　復 7.8	残存部が少ないので復原径は参考程度。外面は胴部に縦位と下端部に横位のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、全体にタテヘラミガキ。内面は胴部に縦位と下端部に横位のヘラケズリ後に密なタテヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	5YR6/6　橙 やや緻密　白・灰色粗～細粒と赤細粒多、白礫と黒・透明細粒微　やや硬質	床上３～７㎝が接合 口 1/36 周、頸 1/4 周、底 1/6 周 17、20、29
30 土師器 甑	口　復 22.0 高　残 11.7	外面胴部にやや雑なナデとヘラナデ後、内外面口縁部ヨコナデ。内面胴部ヨコヘラナデ後ナナメヘラミガキ。内面は黒色に焼成されている。	7.5YR6/6　橙 緻密　赤粗粒少、黒・白・赤細粒微　硬質	床上 10㎝ 口 1/3 周 1
31 土師器 小形甕	口　復 17.4 高　残 17.8 底　6.0	上半と下半を接合できないので器高は不明。外面は底面に１方向と胴部に縦位のヘラケズリ。口縁部ヨコナデ後に胴部ヘラケズリを追加する箇所も見られる。内面は底部に多方向と胴部に横位のヘラナデ、口縁部にヨコナデ。胴部下半外面（底から上１～5㎝）が被熱赤化。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤微～粗粒多、透明・白微～細粒少 硬質	床上６～９㎝ 口 1/3 周、胴上半 1/4 周、胴下半 1/4 周、底全周 10、16、19
32 土師器 甕	高　残 1.4 底　復 8.2	外面は底面に１方向と胴下端に横位のヘラケズリ。内面は底面に雑なナデまたはヘラナデ、胴下端に４本/㎝のナナメハケ。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや粗い　透明微～細粒と白微～粗粒多、白礫少 硬質	カマド出土 底 5/12 周 K
33 土師器 小形甕	口　復 16.0 高　残 3.3	内外面の口縁部ヨコナデ後、外面胴部タテヘラナデまたはヘラケズリ、内面胴部ヨコヘラケズリ。	5YR4/6　赤褐 やや粗い　白・黒・透明細粒多、白粗粒少、白礫微 硬質	入口施設付近？ 口 1/3 周 入口 P
34 土師器 甕	口　復 17.4 高　残 5.1	外面頸部ヘラナデ（?）の後、内外面口縁部にヨコナデ。内面に波状のミガキを疎らに入れる。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　透明・白微～細粒多、赤・白粗～細粒少 硬質	口 1/6 周
35 土師器 甕	高　残 8.5 底　7.2	外底面は雑な多方向のヘラナデで中央がわずかに突出気味。外面胴部はタテナデ後、横～斜位のヘラケズリ。内面は円周方向のヘラナデ後、部分的なタテヘラケズリ。外面全体に少量の煤付着。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤・灰色粗粒多、白・黒・透明粗～細粒少 硬質	西部床上 7㎝。北西部床上 7㎝と南西部床上 8㎝にも同一個体（?）の破片あり 底 3/4 周 25、17、32
36 土師器 壺	高　残 19.1 底　7.6 最大　復 23.4	外底面は木葉痕（?）を部分的に残し、底面全体をヘラケズリで凸レンズ状にする。外面胴下位はヘラケズリ、中位以上はヨコヘラナデ後ヨコヘラミガキ。内面は底部ヨコヘラナデ、胴部ヨコナデ後ヨコハケ。外面は底面以外を赤彩。内面肩部にもわずかに赤色が及ぶことから見ると頸部内面も赤彩していたと推定できる。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　白・透明微～細粒多、黒微～細粒と赤細粒少 やや硬質	床上１～４㎝。貯蔵穴内と貼床下でも破片が出土 底～胴 1/3 周 5、6、貯蔵穴、貼床直下
37 須恵器 [illegible]	口　13.5 高　15.9 胴　10.1	外面は回転ナデ後、体部は上２本と下１本の沈線間に櫛刺突文。頸部は５～６歯前後の工具で櫛描波状文を頸下半の後頸上半に描く。口縁部は波状文が左下がり平行斜線のようになっている。底部は多方向ヘラケズリで丸くした後に軽い多方向ヘラナデ。波状文は左に向かって進行する。施文はかなり粗雑。	5B6/1　青灰 やや粗い　灰色粗～細粒と白細粒多、白粗粒と黒・透明細粒少 硬質	床上 5㎝（間仕切溝底上 19㎝） 口 2/3 周、胴 3/4 周、頸全周 15
38 礫	長　10.9 幅　8.2 厚　5.1	自然礫で、図の右側の側面部分で風化が進行している。使用痕・加工痕・被熱痕などは見られない。重量 551.6g。	2.5Y7/3　浅黄 やや緻密　砂質ホルンフェルス 硬質	床上 2㎝ 完形 30
39 礫	長　14.3 幅　5.3 厚　3.9	自然礫で、図の下面側がわずかに平滑気味である以外には、使用痕・加工痕・被熱痕は見られない。重量 409.6g。	2.5Y7/3　浅黄 やや緻密　斑晶がやや目立つ流紋岩 硬質	床上 2㎝ 完形 31
40 礫	長　14.1 幅　10.1 厚　8.4	自然礫で、全体が被熱する。図の右半部が特に熱で赤色化し、その中央付近には煤も見られる。重量 1384g。	5Y6/1　灰 やや緻密　安山岩 やや軟質	床上 9㎝ 完形 36
41 土師質 焼粘土塊	長　4.6 幅　2.4 厚　1.6 重　12.0	不規則な形状の粘土塊がそのまま焼成されたもの。側面図の下半に見られる弧状の擦痕は、糸切り痕の可能性もある。側面図中央と右図左上に草本植物の圧痕あり。左図の左下部と右図の中央部全体とは、乾燥時か焼成時に剝離破損した面かもしれない。	7.5YR8/4　浅黄橙 緻密　赤細粒少、透明微～細粒微 軟質	完形
42 土師質 焼粘土塊	長　3.1 幅　3.5 厚　0.8 重　7.6	板状に押し伸ばした後に外周を折損した粘土塊が、更に焼成されたものと思われる。図上縁が弧状に抉れた形は折損ではなくて粘土成形時の端面。左図の面は草本植物の平たい茎と見られる圧痕が並列する。右図の面は緩く盛り上がる曲面。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　透明微粒多、赤細粒少 軟質	

4 区 SI-12（第 120・121 図、写真図版 40・119）

［**位置**］ 4 区中央北半の台地平坦面、35.0-11.5・12.0、35.5-11.5・12.0 グリッド。北西・西・東に古墳中期末～後期初めの SI-7・9・14 がある。古墳中期の SI-13・54 を切る。SI-12 の貼床下に隠れた SI-13 の輪郭を、床面に黒く観察できた。時期不明の土坑 SK-66 に南東部を切られる。南西部で古墳中期の円筒形土坑 SK-52 を切るはずだが、撹乱され土層の関係は不明。南部の撹乱は現代の井戸。



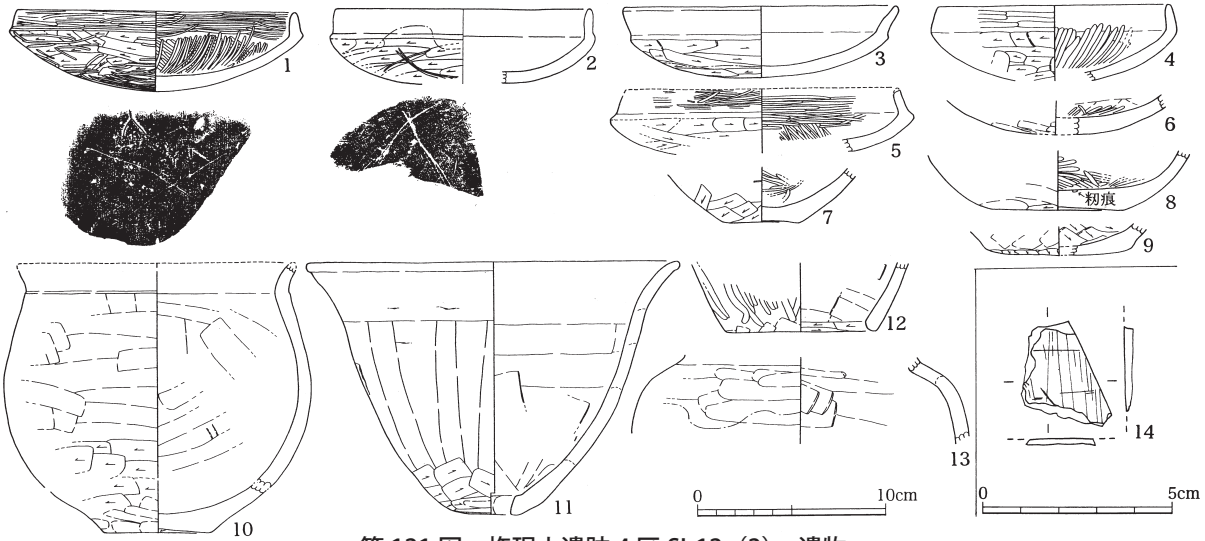
第 120 図　権現山遺跡 4 区 SI-12（1）　遺構

［規模と形状］方形で中軸は N-14°-W。東西長 5.59m、南北長 5.55m。壁は直線的に外傾し、残存高 0.29 ～ 0.39m。床面はおおむね平坦であり、傾斜も認められない。掘方底面は北端中央部が少し高い。確認した主柱穴は P1 ～ P3 だが、撹乱部（井戸）にも南西主柱穴が存在し、本来は４本主柱と考えられる。P1 は径 43 × 36 ×深さ 43cm、P2 は径 42 × 37 ×深さ 41cm、P3 は径 35 × 32 ×深さ 45cm。P1-P2 間が 3.10m、P3-P1 間が 3.32m で、東西よりも南北柱間が若干広い。掘方底面では、北東主柱穴 P1 の西側で P4、西壁際で P5 を確認した。P4 は径 27 × 24 ×掘方底から深さ 32cm、P5 は径 30 × 23 ×掘方底から深さ９cm。壁溝は東壁際中央のカマド周辺と北壁際東半を除き全周する（D1）。断面「U」字状で幅 20cm、床面から深さ５～８cm である。貼床除去後、北側主柱穴 P1・P2 の内側に間仕切溝が認められた。このうち東側間仕切溝の南端に柱穴 P4 が伴う。断面「U」字状で、壁から長さ 90 ～ 120cm、幅 10 ～ 19cm、床面から深さ４～ 11cm である。

［カマド］東壁中央にある。両袖幅 85cm、煙道先端から焚口部まで 120cm。竪穴貼床上に暗灰褐色の６層を敷いた後に褐色粘土で袖を作る。火床はほぼ平坦で、床面よりわずかに高い。燃焼部に、天井部が落下したロームと粘土の３層が残る。煙道は、東側の SI-13 埋土層に約 25cm ほど「U」字状に掘り、上述した３層が落下している。火床面から煙道下半部がやや急に上がったのち、煙道上半が緩く上がる。

［覆土］覆土５層はレンズ状の自然堆積で、最下層に微量の焼土・炭を含む。

［遺物および出土状況］遺物は少ない。カマド周囲の床面に小形甑と上向きの杯がある（１・３・11）。図示していない 373 片（2,960g）の内訳は、杯 185 片（938g）、高杯９片（133g）、甑 16 片（326g）、甕 163 片（1,563g）である。図示していない遺物として、ハケ調整甕４片、無底式の甑底部１片、甕か壺の底部４片、須恵器𤭯底部小片１点がある。先行する SI-13・54 の遺物が混在している可能性がある。１・３が床面で出土した残存度の高い杯で、この建物の時期を示す。図示した以外の杯類は小破片ばかりである。１と２は焼成後の刻線「×」が底にある。小形甕（10）は被熱し、ここのカマドにかけて使った可能性がある。小形甑（11）は、SI-12 の床面から SK-66 に流入したものと推定した。小形甑は、４区では SI-3 などに例がある。５は炭素吸着で、１の内面もそうかもしれない。８は胎土に混ざった稲籾の圧痕がある。籾痕は４区では SI-4 の甕などに見られる。６は内面に不規則なヘラミガキがまとまる状況があり、焼成前に生じた亀裂をミガキで補修したものかもしれない。13 は外面肩部を赤彩する。14 は粘板岩製の砥石または石製模造品の破片。４区では SI-4 などに石製模造品、SI-14 などに粘板岩の破片や砥石がある。７は中期中葉の椀形杯が混入したもの。外面を磨く甑（12）も後期前半以前に多いもので、おそらく混入品である。図示以外にも、複合口縁状の壺口縁部片が混入していた。



第 121 図　権現山遺跡４区 SI-12（2）　遺物

第 50 表　権現山遺跡 4 区 SI-12　出土遺物

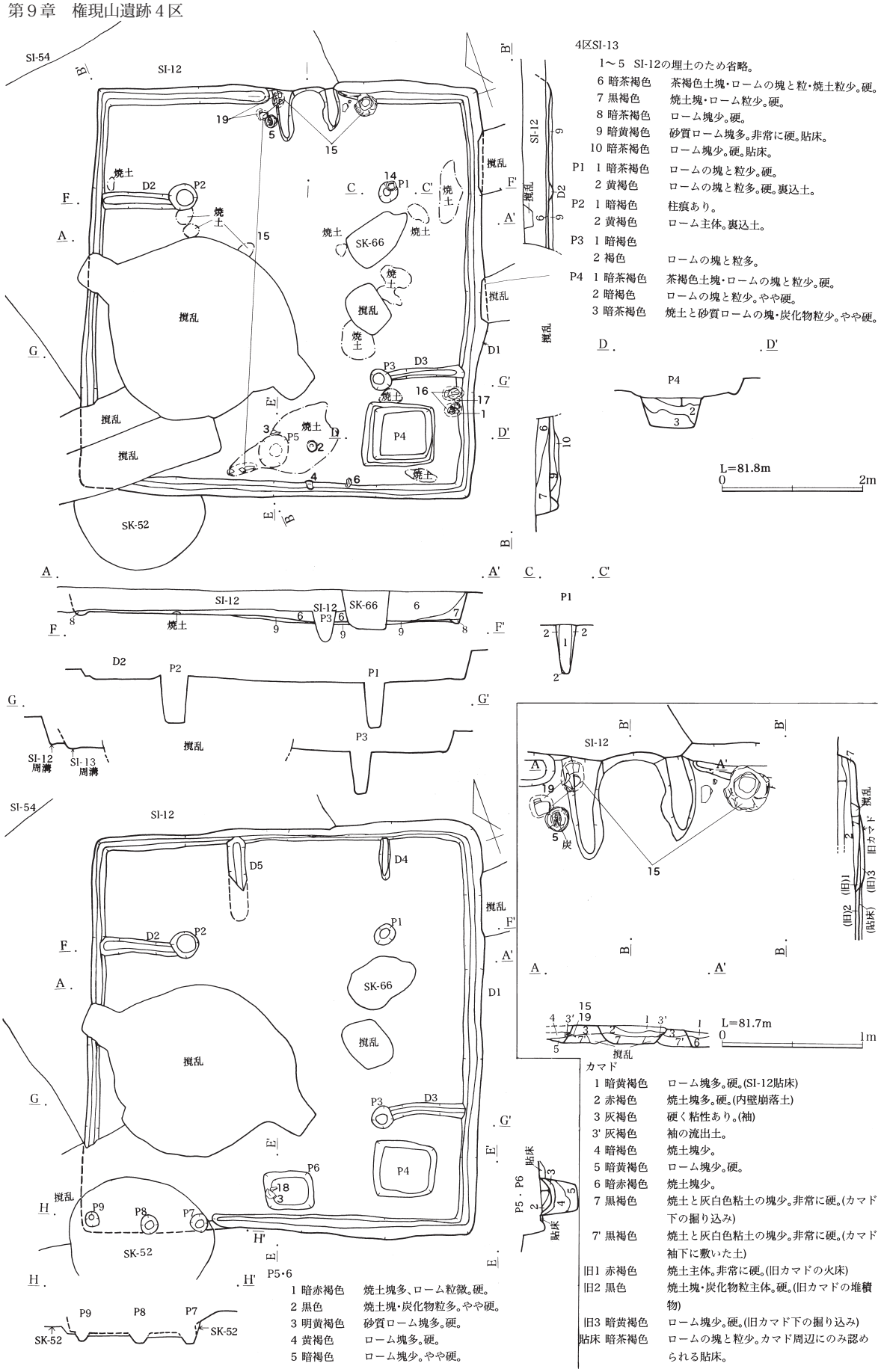
番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 14.8 高　残 4.3 最大　復 15.6	外面の口～体部境に明瞭な段あり。外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ後ヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部はヘラナデ後、多方向の密なヘラミガキ。内面は暗灰色で、意図的に炭素吸着している可能性もある。外底面に焼成後の細く鋭い刻線「×」あり。	10YR4/2　灰黄褐 やや緻密 透明微～細粒多、白微～細粒少 やや硬質	床直上 口～体 1/3 周 2
2 土師器 杯	口　復 13.4 高　残 3.9 最大　復 14.0	内面全面と外面口縁部ヨコナデ、外面体部ヨコヘラケズリ。内面全面と外面上半に漆仕上げ。外面体部に焼成後の刻線「+」あり。縦線・横線ともに繰り返して刻んでいるので、線が 2 本～ 3 本になっている部分が目立つ。	2.5Y6/1　黄灰 緻密　半透明礫と白・透明微粒微 やや硬質	口 1/8 周、体 1/6 周 上面
3 土師器 杯	口　14.5 高　3.8 重　223	外面口縁部ヨコナデ、底部 1 方向の後に体部横位のヘラケズリ。内面口縁～底部ヨコナデ。口縁端部はわずかに内彎する。外面中位以上と内面全体に漆仕上げ。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや緻密　透明微粒と白粗～細粒少、赤粗～細粒微 硬質	床直上 ほぼ完形 3
4 土師器 杯	口　復 12.2 高　残 4.0 最大　復 13.0	外面体部に横～斜位ヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ後、外面ヨコヘラミガキ。内面体部ヘラナデ後、密な放射状ヘラミガキ。確実な漆仕上げは認められない。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや粗い　赤礫～細粒多、白・黒・透明細粒少 やや軟質	口～体 1/6 周
5 土師器 杯	口　復 14.4 高　残 3.2 最大　復 16.0	外面は体部ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部ナナメヘラミガキ後に上端部ヨコヘラミガキ。内外全面に炭素吸着の黒色処理。	2.5Y2/1　黒 やや緻密　透明・白微～細粒多 やや硬質	口～体 1/6 周
6 土師器 杯	高　残 2.2	外面は底部に 1 方向と体部に斜位のヘラナデ。内面は多方向ヘラナデで、底面中心に近い破面付近に集中する多方向の密なヘラミガキが見られる。焼成前に生じた亀裂をヘラミガキで補修したのかもしれない。	2.5YR5/6　明赤褐 やや粗い　赤細粒～礫と透明微粒多、黒微～細粒少 硬質	底 1/2 周
7 土師器 杯	高　残 2.9 底　3.9	外面体部ナデ後、体部下端にナナメヘラケズリ。外底面は円周方向にヘラケズリしてわずかに凹む。内面は多方向ヘラミガキだが大半は磨滅している。古墳中期中頃の遺物が混入。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗粒多、白・黒・透明細粒少　軟質	底全周
8 土師器 鉢	高　残 3.1 底　復 7.0	外底面は多方向ヘラケズリでわずかに凹む。外面体部は横～斜位ヘラナデ。内面は底部に 1 方向ヘラケズリの後、体部に不定方向のヘラミガキ。胎土中に混ざった稲籾の圧痕が内面に 2 箇所あり。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　赤細～粗粒多、白・透明微粒少　やや軟質	底 5/12 周
9 土師器 甕	高　残 1.5 底　復 7.6 最大　残 9.4	外底面は 1 方向ヘラケズリ。外面胴部に横～斜位ナデ、内面底部ナナメヘラケズリ。	10YR4/2　灰黄褐 やや粗い　白礫と半透明粗～細粒多、透明細粒少 硬質	底 2/3 周
10 土師器 小形甕	口　復 14.6 高　推 14.2 底　5.6 最大　復 16.3	外底面は 1 方向ヘラケズリで凹底。外面体部ヨコヘラナデ後、下半部ヨコヘラケズリ、下端部ヨコナデ。内面体部ナナメヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。体部外面が脆弱なのは被熱によると思われるが、赤化痕は不明瞭。	10YR7/4　にぶい黄橙 粗い 白・透明粗～細粒多、黒・灰色細～微粒少 軟質	カマド火床上 17cm 頸 1/6 周、底全周 1、上面、カマド付近、SI-12
11 土師器 小形甑	口　19.7 高　13.4 底　3.6 孔　1.9 ～ 2.2	外底面は成形時に敷いた植物の茎の痕を残す。外面体部タテヘラナデ後体部下端に粗いヘラケズリ。内面体部ヨコヘラナデ後、口縁部内外面にヨコナデ。孔端面は雑なナデ。	2.5Y7/3　浅黄 やや粗い　透明微～細粒と白微～粗粒多、黒細粒と灰色粗粒少 軟質	床面レベル付近（SK-66 内に流入） 口 5/6 周、頸～底全周 4
12 土師器 甑	高　残 3.6 底　復 8.0 孔　復 6.8	外面ナデ後、胴部下端に軽いナナメヘラナデ、胴部タテヘラミガキ。内面ナナメヘラナデ。孔縁部はヨコヘラケズリ。古墳後期前半以前の遺物が混入。	5YR6/6　橙 緻密　赤・黒粗粒少、赤・黒細粒微 やや硬質	北東柱穴内 底 1/4 周 P1
13 土師器 壺	高　残 4.6 最大　残 17.8	外面ナデ、内面に横～斜位のヘラナデ。外面頸～肩部に赤色塗彩。	10YR4/1　褐灰 やや粗い　白・半透明礫～粗粒と白・透明細粒多 やや硬質	肩 1/6 周
14 粘板岩剝片	長　残 2.8 幅　残 2.3 厚　残 0.2	平滑に研磨されて、細かい擦痕がよく残る。図示した面の反対面と外形の全周はすべて破面。石製模造品または砥石の破片と思われる。平滑なので、砥石の可能性のほうがやや高い。残存重量 1.6g。	10Y4/1　灰 緻密　粘板岩 軟質	一部残

4 区 SI-13（第 122・123 図、写真図版 40・41・119）

［位置］ 4 区中央部北寄りの台地平坦面、35.0-11.5・12.0 グリッド。古墳中期末～後期初めの SI-7・9・14 が北西・西・東にある。南西に終末期の SI-15、南・北に中期の SI-16・54、東に後期の SI-12、南西に時期不明（古墳時代？）の SB-132 がある。古墳時代の SK-53・67・109 が近接する。古墳中期と推定される SI-54 の南部を SI-13 が切った後に、中央～北西の埋土上部を後期末の SI-12 に切られる。南西隅が古墳時代の円筒形土坑 SK-52 の上部を切る。中央部西寄りから西壁際に撹乱（井戸）がある。

［規模と形状］ 方形で中軸は N-20°-E。東西 5.65 ×南北 5.82m。壁は直線的に外傾し、残存高 0.10 ～ 0.23m。床はおおむね平坦で傾斜しない。掘方底は緩い凹凸があり、床面から深さ 5cm 前後。ローム塊が多い明褐色土でほぼ全体を貼床する。南西部の掘方は、直前期の円筒形土坑 SK-52 の埋土中に掘り込まれていた。

主柱穴は P1 ～ P3 の他、南西の撹乱部にも本来あり、4 本主柱と考えられる。P1 は径 29 × 26 ×深さ 70cm、P2 は 40 × 36 ×深さ 68cm、P3 は 32 × 29 ×深さ 61cm。南北柱間 2.63m より東西柱間 2.91m が若干広い。柱穴土層図は P1 しかないが、P2・3 も記録されている土層説明を図中に示した。竪穴床面と



4区SI-13

1～5　SI-12の埋土のため省略。
6 暗茶褐色　茶褐色土塊・ロームの塊と粒・焼土粒少。硬。
7 黒褐色　焼土塊・ローム粒少。硬。
8 暗茶褐色　ローム塊少。硬。
9 暗黄褐色　砂質ローム塊多。非常に硬。貼床。
10 暗茶褐色　ローム塊少。硬。貼床。

P1　1 暗茶褐色　ロームの塊と粒少。硬。
2 黄褐色　ロームの塊と粒多。硬。裏込土。

P2　1 暗褐色　柱痕あり。
2 黄褐色　ローム主体。裏込土。

P3　1 暗褐色
2 褐色　ロームの塊と粒多。

P4　1 暗茶褐色　茶褐色土塊・ロームの塊と粒少。硬。
2 暗褐色　ロームの塊と粒少。やや硬。
3 暗茶褐色　焼土と砂質ロームの塊・炭化物粒少。やや硬。

P5・P6
1 暗赤褐色　焼土塊多、ローム粒微。硬。
2 黒色　焼土塊・炭化物粒多。やや硬。
3 明黄褐色　砂質ローム塊多。硬。
4 黄褐色　ローム塊多。硬。
5 暗褐色　ローム塊少。やや硬。

カマド
1 暗黄褐色　ローム塊多。硬。(SI-12貼床)
2 赤褐色　焼土塊多。硬。(内壁崩落土)
3 灰褐色　硬く粘性あり。(袖)
3' 灰褐色　袖の流出土。
4 暗褐色　焼土塊少。
5 暗黄褐色　ローム塊少。硬。
6 暗赤褐色　焼土塊少。
7 黒褐色　焼土と灰白色粘土の塊少。非常に硬。(カマド下の掘り込み)
7' 黒褐色　焼土と灰白色粘土の塊少。非常に硬。(カマド袖下に敷いた土)
旧1 赤褐色　焼土主体。非常に硬。(旧カマドの火床)
旧2 黒色　焼土塊・炭化物粒主体。硬。(旧カマドの堆積物)
旧3 暗黄褐色　ローム塊少。硬。(旧カマド下の掘り込み)
貼床 暗茶褐色　ロームの塊と粒少。カマド周辺にのみ認められる貼床。

第 122 図　権現山遺跡 4 区 SI-13（1）　遺構

周溝底面で確認できなかった柱穴P7～9をSK-52の底面で確認した。この3本は径約40cm(38～52cm)で、主柱穴より浅く、P7・8が床から深さ20cm、P9が18cm。南壁際にある旧貯蔵穴P6を埋戻した上面に、入口ピットと推定される円形柱穴P5のプランが認められ、平面図の記録がないため破線で示した。断面E-E′の1・2層がP5覆土、3層以下はP6が埋戻土。断面図で確認したP5は径20～25×深さ15cm。

壁溝D1は北壁のカマド周辺を除き全周する。カマド袖を除去した下部でも、掘方図に示したように壁溝が認められた。断面「U」字状で幅15～20cm、深さは床面から1～2cmの浅い部分が多く、南壁際では約6cmの深さがある。間仕切溝は西壁際と東壁際でD2・D3、北壁際でD4・D5の計4本を確認した。D2・D3は主柱穴P2・P3に付随するようにある。D3・D4は北壁際で貼床除去後に確認した。断面「U」字状で長さ100cm、幅15cm前後、床から深さ6cm程である。南東隅部に新貯蔵穴P4、南壁際中央部に埋め戻された旧貯蔵穴P6がある。どちらも長方形。旧貯蔵穴は東西66×南北44cm、床面から深さ51cm。新貯蔵穴は東西100×南北88cm、床面から深さ53cmで、床面から8～9cm下の西・南側で壁面中位に狭い段状平坦面を持つ。旧貯蔵穴を埋め戻した埋土3層以下の上に、入口ピットP5が掘り込まれる（断面図1・2層)。貯蔵穴が2箇所ある竪穴は、4区ではSI-27などがある。

[カマド] 北壁中央の東部にある。天井や袖上半は崩れるが、比較的良く残る。両袖幅90cm。灰褐色粘土主体の3・7′層で作った袖の内面は被熱赤変部が多い。焚口・火床から煙道立ち上がりまで、袖と同じ粘土主体の7層を貼床上に貼る。火床はほぼ平坦で、床よりわずかに下がる。燃焼部は焼土と炭が多い流入土の2層上にSI-12の貼床が載る。煙道は壁外までは掘らない。火床の下には旧カマドの掘り込みが認められ、カマドを作り替えたと考えられる。カマド脇の床面直上に正立して壺（転用器台）や杯が出土した。

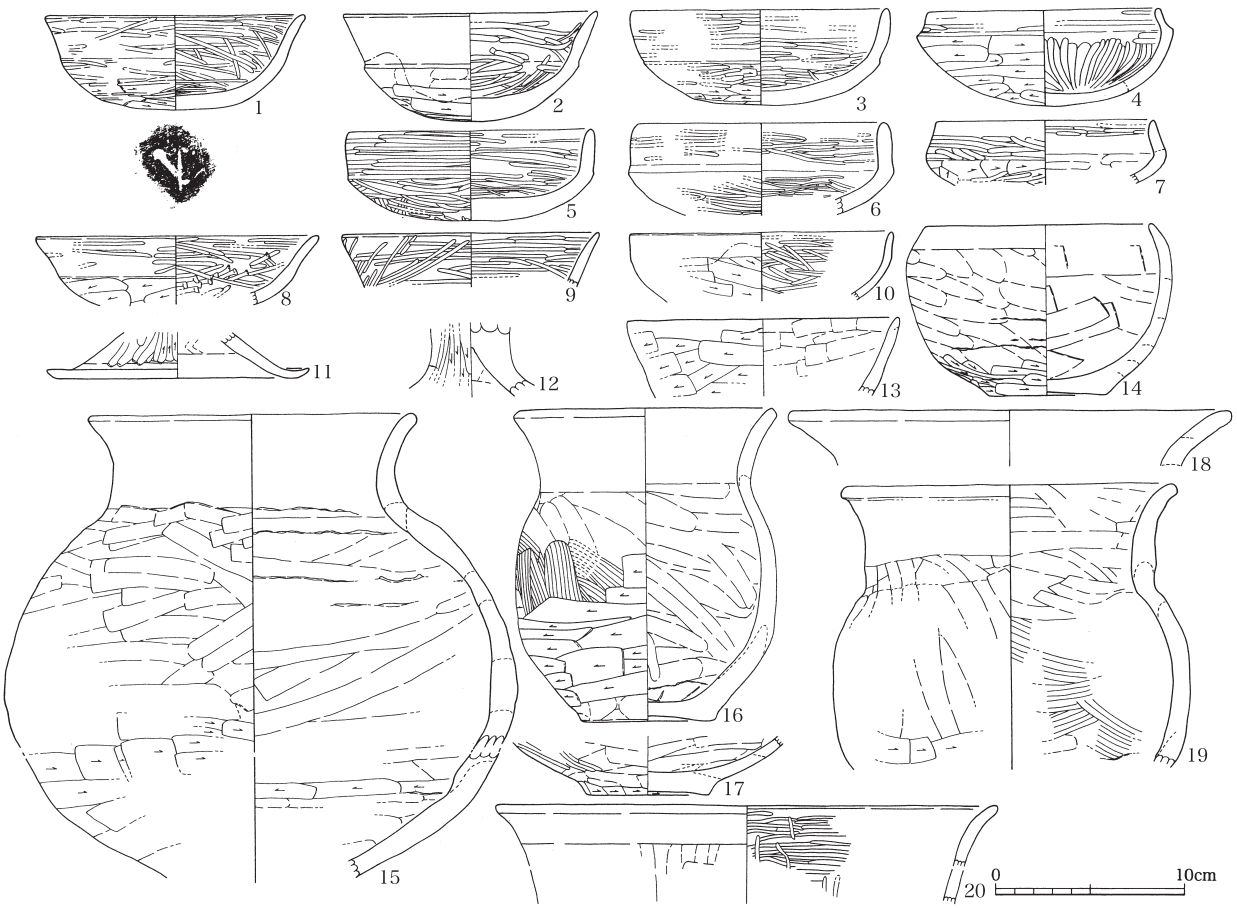
[覆土] 覆土は上下2層で、東壁際の三角堆積土に焼土を含む。南壁際から東側など数カ所で平面図に示した焼土塊が床面より10cm程浮く。炭化材は顕著でないが、火災建物の可能性がある。

[遺物出土状況] カマド東側の床面付近には胴部下半が壊れた壺（15）があり、器台に転用したものとみられる。カマド西側に置いた杯（5）には炭化材が入っていた。西袖部で出土した小形甕（19）は、カマドに掛けて使った可能性がある。甕（18）は旧貯蔵穴P6内と貼床内に埋まっていた破片。

[出土遺物] 遺物はやや少ない。図示していない土師器123片（1,059g）の内訳は、杯39片（270g)、高杯12片（134g)、甕70片（638g)、壺2片（17g)。SI-12など重複遺構からの混入品はほとんどないが、10は淡黄色で薄く、新しい遺物かもしれない。図示品以外は小破片で、図示品も高杯や甑は小破片。2が漆仕上げなら、古い時期の例。杯類は赤～橙色で厚い。高杯は短脚らしい破片がある。17の甕は胴の丸味が強いとみられる。ハケ調整甕は10片程出土したが、図示できるものはない。小形甕16・19は、長めの頸部やハケ調整が特徴的。15は、SI-14の壺33と類似する。大形甑20は杯類と同様の胎土で橙色。

第 51 表　権現山遺跡 4 区 SI-13　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　13.8 高　5.0	丸底だが、安定して正立する。外面口縁部ヨコナデ後疎らなミガキ、体～底部ケズリ後疎らなミガキ。底部中央には木葉痕がわずかに残る。内面口縁～底部ヨコナデ後横～斜め方向のやや疎らなミガキ。	2.5YR5/4　にぶい赤褐 やや緻密　赤粗～細粒多、白・黒細粒微 やや硬質	床上 6cm 口 3/4 周、体完存 6
2 土師器 杯	口　13.4 高　5.7 重　238	外面は体部上端ナデ後、底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面底部に 1 方向と口～体部に横位のヘラミガキ。外面上半と内面に黒褐色の付着物（漆？）があり、内面では中位付近に最も濃く残る。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒・白・透明細粒と赤粗粒少 やや硬質	床直上で正立 ほぼ完形 15
3 土師器 杯	口　13.5 高　5.0 最大　13.8 重　残 238	口～体部境に浅い段あり。外面は口縁部ヨコナデ後、底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。中位以上にヨコヘラミガキ。内面は底部に多方向と中位以上に横位のヘラミガキ。内外面に径 10cm強の黒斑あり。	5YR6/6　橙 やや緻密　白・透明粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	床上 4～7cmが接合 口 5/6 周、体全周 2、3
4 土師器 杯	口　復 12.3 高　5.1 最大　残 13.6	外面底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部にヨコナデ後、疎らなヨコヘラミガキ。内面体部は密な斜放射状ヘラミガキ。内外面に暗褐色の汚れ（?）が薄く付着。	7.5YR5/4　にぶい橙 やや緻密　白礫～細粒多、黒・透明粗～細粒少 やや硬質	床上 12cm 口 5/12 周、体 1/2 周、口 1/2 欠損 4
5 土師器 杯	口　12.9 高　4.8 最大　13.2 重　279	外面口～体部境に浅いが強い段あり。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面底部 1 方向と体部横位のヘラケズリ後、体部に横～斜位の密なミガキ、底面に疎らな 1 方向ミガキ。内面体部ヘラナデ後､多方向ヘラミガキ。内外面の体部～底部の約 1/4 にタール状の黒色物が付着。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白粗～微粒・透明細～微粒・黒微粒少 やや硬質	床上 4cmに正立。杯内に 10cm大の炭化材有 ほぼ完形 11



第 123 図　権現山遺跡 4 区 SI-13（2）　遺物

6 土師器 杯	口　復 13.2 高　残 4.9 最大　復 14.0	外面口～体部境に長く明瞭な段あり。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面体部ヨコヘラケズリ後ヨコヘラミガキ。内面体部にナナメヘラナデ後、横～斜位ヘラミガキ。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　白礫～細粒と透明粗～細粒多、赤・黒・灰色細粒少　やや軟質	床上 3㎝ 口 2/3 周 5
7 土師器 杯	口　復 11.6 高　残 3.3 最大　残 12.7	外面の稜は丸い。外面は体部ヘラケズリ後に部分的なヘラミガキ。内面体部上位にやや強いナデ。内外面口縁部はヨコナデ後、外面下半と内面上半にヘラミガキ。	10YR6/4　にぶい黄橙 黒・白・透明細粒少、白礫微 硬質	口～体 5/12 周
8 土師器 杯	口　復 16.2 高　残 3.6	外面の口～体部境に、かすかな段を持つが、体部のヨコヘラケズリでほとんど消えかかっている。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部はヘラ先を強く押し付けながら多方向ミガキ。	2.5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤粗～細粒少、白・透明細～微粒少　硬質	口 1/6 周
9 土師器 杯	口　復 13.6 高　残 2.8	口縁部ヨコナデ後、外面に横～斜位と内面に横位のヘラミガキ。	5YR4/6　赤褐 やや粗い　白・赤・透明粗～細粒少、白礫微 硬質	口 5/6 周 貯蔵穴
10 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 3.6	半球状で、外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。口～体部境の稜は不明瞭。内面は口縁部に横位と体部に斜位のヘラミガキ。外面口縁部と内面全面に漆仕上げ。	2.5Y8/3　淡黄 やや緻密　黒・透明微粒少 軟質	口～体 1/6 周
11 土師器 高杯	高　残 2.4 脚裾　復 13.8	薄く軽い。裾部ヨコナデ後、外面タテヘラケズリ、内面ヨコヘラナデ。	7.5YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・透明粗～細粒多、赤・灰色粗粒と黒細砂少 硬質	脚裾 1/6 周
12 土師器 高杯	高　残 4.0	上半が中実になる短脚。外面タテヘラケズリ、脚内面ナデ。	7.5YR 6/6　橙 やや緻密 赤微～細粒と白・透明微粒少　やや軟質	脚柱 1/4 周
13 土師器 鉢	口　復 14.4 高　残 4.1	内外面ともに口縁部ヨコナデ後、体部外面ヨコヘラケズリ、内面ヨコヘラナデ。外面は赤化していて、二次的に被熱した可能性あり。	10YR5/4　にぶい黄褐 やや粗い　白・透明微～細粒と黒・赤細粒多　やや硬質	口 1/6 周
14 土師器 鉢	口　12.1 高　9.0 底　6.2 最大　16.0	外底面は 1 方向ヘラケズリで緩く凹む。外面体部ナナメナデ後、体部下端ヨコヘラケズリと口縁部内外面ヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ。内面の中位（口から下へ 1 ～ 5㎝の範囲）に暗灰褐色の汚れ付着。残存重量 392g。	2.5Y6/3　にぶい黄 やや粗い　白・透明微～細粒多、黒微～細粒少 やや硬質	柱穴上方（床上 15㎝）で正立 口 11/12 周、体全周 8
15 土師器 壺	口　17.4 高　残 24.4 最大　27.1	胴部下位の破片は、接点がないので推定位置で図化した。厚く重い。胴部は内外面ヘラナデで、胴部下位の積み上げ休止部は厚く作った後に内外面ヨコヘラケズリ。口～頸部の内外面はやや雑なヨコナデ。頸部下半と胴部中位には全周の半分以上に暗褐色の汚れが広く付着。被熱痕は見られない。	10YR8/3　浅黄橙 やや粗い　白微～細粒と透明微粒多、黒細粒と灰色粗粒少 やや軟質	カマド東床上 3㎝に上半部が正立。カマド西床上 1 ～ 2㎝と南床上 9㎝でも破片出土 口 11/12 周、頸～肩全周 1、9、12、13、床下

16 土師器 甕	口　復 14.0 高　16.5 底　7.0	小形。外面胴部ナデ後下半ケズリ。底部はナデで突出する平底であり、中央の径約 4 ㎝の部分が浅く窪む。口縁部内外面ヨコナデで、端部は面取りされる。内面胴部ナデ、底部ヘラナデ。胴部下半には積み上げ休止による接合面があり、外面の器厚の変化として残っている。外面胴部は肩部にヘラナデ後、中位に浅いナナメハケ、下位ヨコヘラケズリ。	10YR5/4　にぶい黄褐 やや緻密　白微粒多、白・赤・黒粗粒微 やや硬質	床上 3㎝で西向きに横転 口 1/5 周、胴 3/4 周、底完存 6、7
17 土師器 甕	高　残 3.2 底　6.6	突出した平底で、底面は多方向ヘラケズリでわずかに凹底。外面胴部はナナメヘラケズリ後に光沢のあるナナメヘラナデ。胴下端はヨコヘラケズリ。内面は底部に多方向と胴部に横位のヘラナデ。外面胴部に煤が付着するが外底面にはない。内面胴部に暗褐色の汚れ付着。	10YR5/3　にぶい黄褐 やや粗い　白粗粒と白・透明細粒少 硬質	床上 4㎝ 底全周 14
18 土師器 甕	口　復 23.4 高　残 2.9	内外面ともに丁寧なヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒・透明粗～細粒と白細粒多、白・灰色礫少 やや軟質	旧期貯蔵穴内と貼床土中の各 1 片が接合 口 1/12 周、頸 1/4 周 16、床下 A ベルト内
19 土師器 小形甕	口　復 17.8 高　残 15.0 最大　復 18.8	調整が粗雑。外面は胴部ヘラナデ後に下半部ヨコヘラケズリ、頸部は雑なナデ後に上半だけヨコナデ。内面は胴部ナナメハケ、口～頸部に雑なヨコナデ。胴下半部は外面が被熱赤化し、胴部内面に暗褐色の汚れ付着。	2.5Y7/2　灰黄 粗い　白・灰色・黒・半透明・透明礫と白・赤・黒細粒多 やや軟質	カマド西袖付近（床上 1㎝） 口～肩 1/3 周 12、13
20 土師器 甑	口　復 26.5 高　残 5.3	外面胴部ナデ後、内外面口縁部ヨコナデ。内面は胴部に縦位、口縁部に横位のヘラミガキ。	7.5YR7/6　橙 赤細～粗粒少 やや硬質	口 1/12 周

4 区 SI-14（第 124・125 図、写真図版 41・42・120）

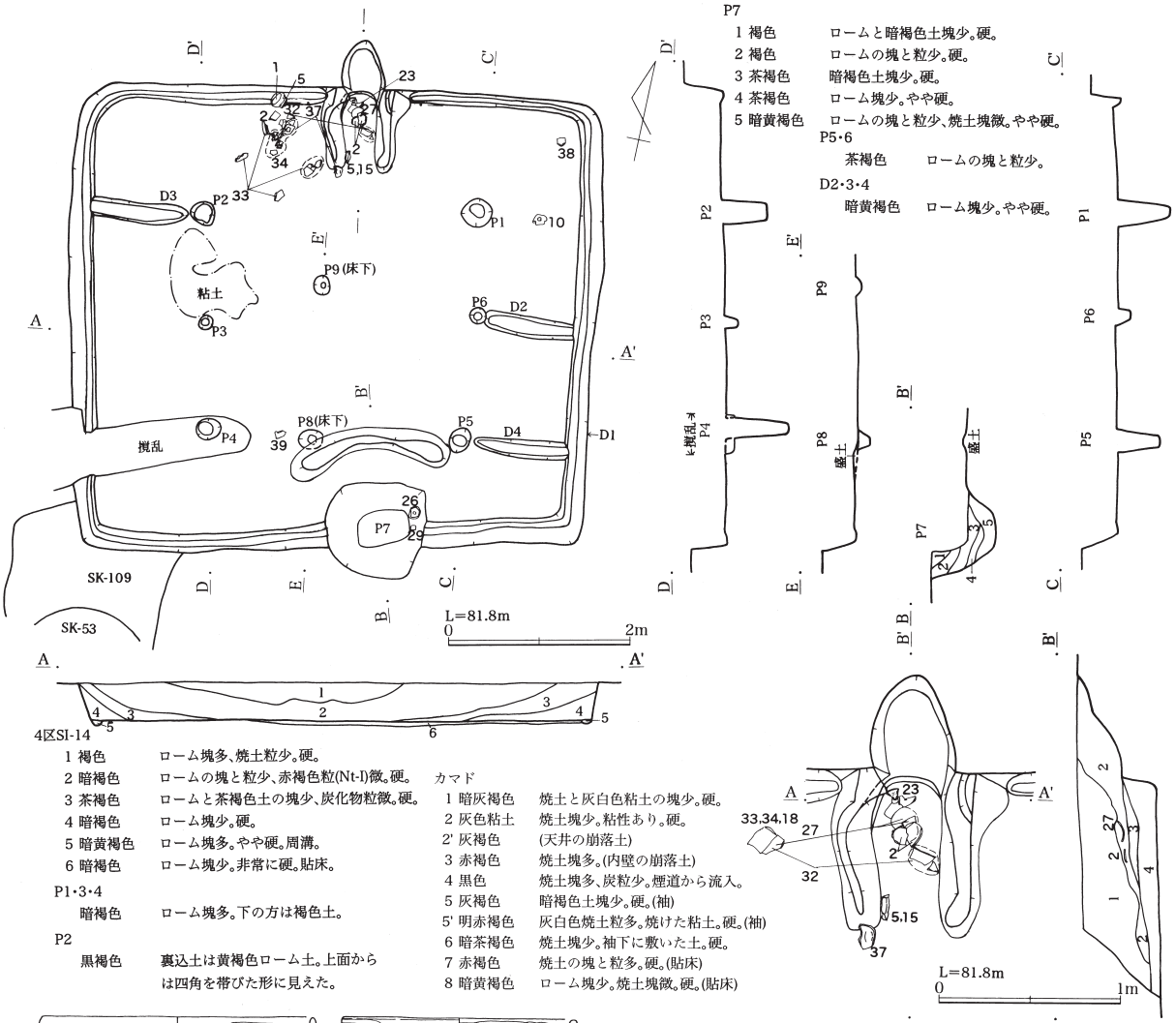
［位置］ 4 区中央部北寄りの台地平坦面、35.0-12.0・12.5、35.5-12.0・12.5 グリッド。古墳中期の SI-13・27・54 が南西・北東・西にある。西・北・東に古墳後期の SI-12・59・74、南西と東・北に古墳時代の円筒形土坑 SK-53・77・95、北に時期不明の SB-155 などがある。南東部床下にある SK-120 を切る。SK-109 とも重複し、SI-14 の土師器杯 1 片が SK-109 に混入しているので、おそらく SK-109 のほうが新しい。時期不明の掘立柱建物跡 SB-155 とも重複している可能性が高いが新旧は不明。

［規模と形状］ 西壁（5.1m）が東壁（4.8m）に比べ 30cm ほど長く、若干歪んだ方形。中軸は N-11 ° -W。東西長 5.81m、南北長 5.05m である。壁は直線的に外傾し、残存高 0.32 ～ 0.42m。床面はほぼ平坦。西側 P2・P3 の間にカマド構築材と考えられる粘土がある。少量のローム塊を含む暗褐色の 6 層で、西側以外を 2 ～ 4 cm の厚さで貼床する。柱穴 6 本中、P1・2・4・5 の 4 本が主柱穴。P1 は径 33 × 31 ×深さ 56cm、P2 は径 27 × 25 ×深さ 50cm、P4 は径 28 × 23 ×深さ 59cm、P5 は径 28 × 21 ×深さ 47cm。東西の主柱穴間に、径 17 ×深さ約 15cm の一回り小さく浅い支柱穴 P3･P6 がある。柱間は P1-P2 間 3.0m、P2-P4 間 2.35m、P4-P5 間 2.8m、P1-P5 間 2.5m で、竪穴の形と同じく東西がわずかに長い。貼床除去後、南主柱穴間と中央部で P8・9 を確認した。掘方底からの深さは浅く、P8 が 14cm、P9 が 6 cm。張出ピット P7 が南壁の東部にある。隅丸方形で 120 × 110 ×床から深さ 70cm。張出部は南壁外へ約 35cm 出る。底面は 55 × 38cm の長方形で、壁は緩く外傾する。北側 30cm に、長 175 ×幅 30 ×高さ 2 ～ 5 cm の若干彎曲する土手状高まりがある。 4 区で張出土坑を持つ竪穴は、SI-7・21 がある。壁溝 D1 が北壁中央のカマド以外を全周する。断面「U」字状で、床面から深さ 2 ～ 8cm。間仕切溝は西壁際で D3、東壁際で D2・D4 の計 3 本。柱穴 P2・5・6 に付随する位置で、壁溝 D1 に繋がる。断面「U」字状で長さ 100cm。撹乱されている P4 西側も間仕切り溝が存在した可能性がある。

［カマド］ 北壁中央のやや東にある。天井が崩れる。両袖幅 95cm、煙道先端から焚口部まで 145cm。竪穴貼床上に暗茶褐色の 6 層を敷いた後、 5 層の灰色粘土を主体に袖を作る。袖内面は被熱・赤変した 5 ′層が目立つ。火床はほぼ平坦で、北壁際でほぼ垂直に約 20cm 上がった後、壁外へ「U」字状に 55cm ほど出る煙道が緩く曲線的に上がる。燃焼部直上に焼土塊多量と炭少量を含む流入土の 4 層、その上に天井の崩れた 2 ・ 3 層が堆積する。 3 層は天井内壁で、焼土化が著しい。

［覆土］ 覆土は 4 層に分層される。レンズ状の自然堆積で硬く締まっている。全体的にローム塊を含み、 1 層に多い。

［遺物出土状況］ カマド西側の床面付近から床上 16cm 付近に土器がまとまっている。カマド内には鉢（27）を伏せて入れ、その北に横倒しの高杯（23）、南側に杯（2・5・15）と甑（32）がある。張出土坑には杯（7）・高杯（24）・鉢体部（26・29）がある。10 は貼床下で出土。遺構間では 17 の杯が SK-109 の 1 片と SI-14 の 2 片が接合した。SI-14 の杯の破片が SK-109 に混入したものであろう。



P7
1 褐色　ロームと暗褐色土塊少。硬。
2 褐色　ロームの塊と粒少。硬。
3 茶褐色　暗褐色土塊少。硬。
4 茶褐色　ローム塊少。やや硬。
5 暗黄褐色　ロームの塊と粒少、焼土塊微。やや硬。

P5・6
茶褐色　ロームの塊と粒少。

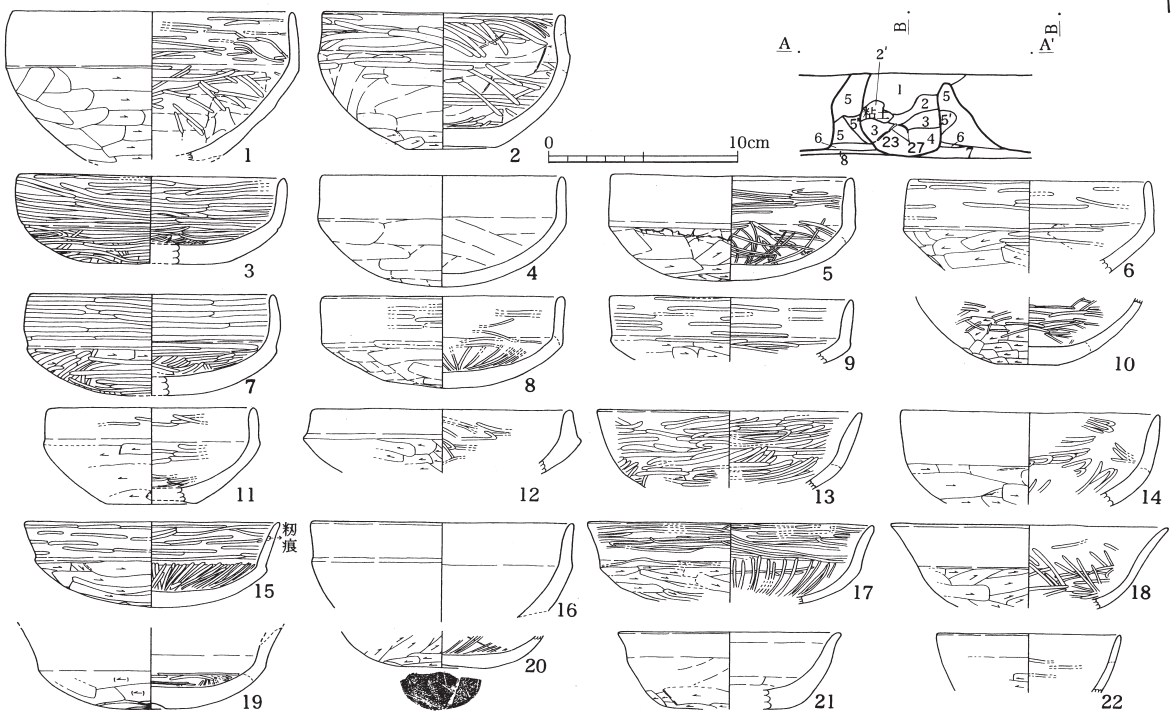
D2・3・4
暗黄褐色　ローム塊少。やや硬。

4区SI-14
1 褐色　ローム塊多、焼土粒少。硬。
2 暗褐色　ロームの塊と粒少、赤褐色粒(Nt-I)微。硬。
3 茶褐色　ロームと茶褐色土の塊少、炭化物粒微。硬。
4 暗褐色　ローム塊少。硬。
5 暗黄褐色　ローム塊多。やや硬。周溝。
6 暗褐色　ローム塊少。非常に硬。貼床。

P1・3・4
暗褐色　ローム塊多。下の方は褐色土。

P2
黒褐色　裏込土は黄褐色ローム土。上面からは四角を帯びた形に見えた。

カマド
1 暗灰褐色　焼土と灰白色粘土の塊少。硬。
2 灰色粘土　焼土塊少。粘性あり。硬。
2' 灰褐色　(天井の崩落土)
3 赤褐色　焼土塊多。(内壁の崩落土)
4 黒色　焼土塊多、炭粒少。煙道から流入。
5 灰褐色　暗褐色土塊少。硬。(袖)
5' 明赤褐色　灰白色焼土粒多。焼けた粘土。硬。(袖)
6 暗茶褐色　焼土塊少。袖下に敷いた土。硬。
7 赤褐色　焼土の塊と粒多。硬。(貼床)
8 暗黄褐色　ローム塊少。焼土塊微。硬。(貼床)

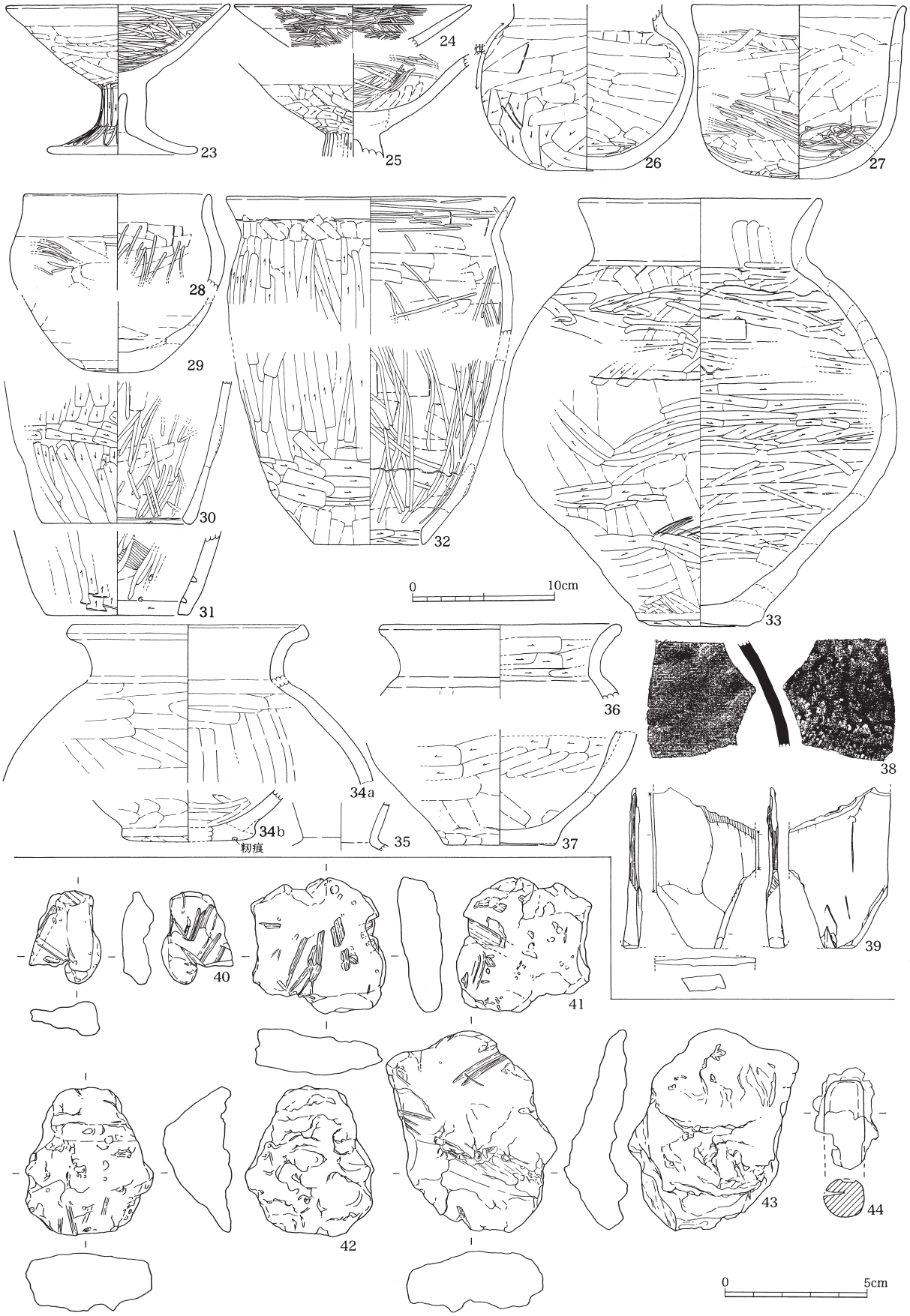


第 124 図　権現山遺跡 4 区 SI-14（1）　遺構・遺物

［**出土遺物**］遺物量が多い。番号をつけて取り上げた以外にも大破片がある。図示していない 597 片（4,261g）の内訳は、杯 370 片（1,961g）、高杯 22 片（209g）、甕 166 片（1,640g）、壺 9 片（102g）、甑 30 片（349g）である。8 は漆仕上げの杯として古い資料。17 は赤く発色する胎土を使う。他の杯・高杯類はほとんどが橙色胎土。小形の杯のうち、21 はやや粗製品で、22 は小形薄手で内面炭素吸着の黒色処理。15・32・34 は稲籾圧痕がある。4 区では SI-4 の甕などに籾痕がある。高杯は脚部が中実ではなく、細い中空状。26 は加熱使用痕がある鉢。31 は内面に焼成前の小孔を持つ甑。壺（33）は、SI-13 の壺とよく似た製品で、白味の強い胎土は甕（36）とも類似する。内面無文の須恵器甕（38）は中期中葉以前に多い。明黄褐色の小形壺（35）は古い遺物片が混入した疑いがある。図示した以外に、外面赤彩の大形壺破片や、ハケ調整甕 5 ～ 6 片も出土した。39 は粘板岩の砥石片。4 区では SI-9・12・14・22・24 に粘板岩質の破片や砥石、SI-4 などに粘板岩製模造品がある。焼粘土塊は図示した 4 点が出土し、いずれも植物圧痕がある（40 ～ 43）。棒状鉄製品（44）はやや太い丸棒で、古墳時代の遺物かどうか不詳。

第 52 表　権現山遺跡 4 区 SI-14　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　14.8 高　残 7.9 最大　15.6	底面は粘土積み上げ部分で剝離。外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリで、口～体部境にごく浅い段あり。内面は体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ後に横～斜位のヘラミガキ。体部下半内面は使用により磨滅した可能性あり。	10YR4/3　にぶい黄褐 やや粗い　赤粗粒と白・赤・透明細～微粒と黒微粒多 やや軟質	カマド西の床上 9cm 口～体部完存、底部欠 19
2 土師器 杯	口　12.7 高　7.2 底　4.6 最大　13.3	外面口縁部ヨコナデ後疎らなミガキ、体部ヘラナデ後疎らなミガキ、体部下端～底部ケズリ。底部は平底で全体が窪む。内面口縁部ヨコナデと体～底部ヘラナデ後口～体部に疎らなミガキ。	10R5/8　赤 やや緻密　赤粗～細粒多、白・黒・透明細粒少 軟質	火床面上 20cm（伏せた鉢の上）。カマド西の床上 8cmにも 1 片。 口～体 3/4 周、底全周 1、17
3 土師器 杯	口　復 13.1 高　残 5.4 最大　復 13.6	口縁部外面が丸く、口～体部境に明瞭な段あり。全面を密に磨く。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面体～底部ヘラケズリ後、体部に横位と底部に多方向のヘラミガキ。内面は底部に 1 方向と体部に横～斜位のヘラミガキ。	5YR5/8　明赤褐 やや粗い　赤礫～細粒多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	口～体 5/12 周
4 土師器 杯	口　復 12.6 高　5.8 最大　復 13.2	外面の口～体部境に低い稜あり。外面口縁部と内面ヨコナデ、外面体部はヘラケズリまたはヘラナデ。磨滅して調整が不明瞭。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白・黒細粒と透明微粒少　やや軟質	カマド周辺 口 1/6 周、体 1/4 周 K 周
5 土師器 杯	口　12.7 高　5.5 最大　13.0 重　241	外面口～体部境に浅い段あり、内面口縁端はやや斜面状。外面体部は上位に雑なナデ、中位にヘラナデ、下位にヨコヘラケズリ、底部に 1 方向ヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、体部に斜位と底部に多方向のヘラミガキ。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒粗～細粒多、赤・白・透明粗～細粒少 やや硬質	火床面上 12cmで横位。床上 3cmにも 2 片 ほぼ完形 7、20
6 土師器 杯	口　復 12.6 高　残 4.9 最大　復 13.3	外面口～体部境に弱い稜あり。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面体部ヨコヘラケズリ。内面体部ヘラナデの後、ヨコヘラミガキ。	5YR6/6　橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白・黒・透明細粒少　やや硬質	口 1/6 周
7 土師器 杯	口　復 14.0 高　4.6 最大　復 14.4	外面口～体部境に浅い凹線あり。全面を密に磨く。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面体～底部ヘラケズリ後ヨコヘラミガキ。内面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラミガキ。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤粗～細粒と黒・白細粒多。透明細粒少 やや硬質	貯蔵穴底面 口 1/3 周 貯底面
8 土師器 杯	口　12.8 高　4.8 最大　13.0	内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面体部はおそらくヨコヘラケズリ後に底部に 1 方向と体部に横位のヘラナデ。内面体部放射状ヘラミガキ。外面口縁部と内面に漆仕上げ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白・赤・黒・透明細粒多、赤粗粒少 やや軟質	口 1/4 周、体 1/3 周
9 土師器 杯	口　復 12.8 高　残 3.4	外面の口～体部境に弱い稜あり。外面口縁部と内面口～体部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面体部ヨコヘラケズリ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤粗～細粒と白・黒・透明細粒少　やや硬質	カマド周辺 口 1/6 周 K 周
10 土師器 杯	高　残 3.6 底　復 3.2	外底面は小さい平底で無調整。外面体部ヨコヘラケズリ後、中位以上にヨコヘラミガキ。内面はおそらくヘラナデ後、底部に多方向と体部に横位の密なヘラミガキ。	2.5YR5/6　明赤褐 やや緻密 透明微粒多、白・黒微～細粒と赤細粒少 やや硬質	貼床下出土 底全周 25、床下
11 土師器 杯	口　復 11.0 高　5.1 底　復 4.6 最大　復 11.5	外面口～体部境に明瞭な段あり。底部はやや凹む。外面口縁部と内面ヨコナデ後、やや疎らなヨコヘラミガキ。外面体部ヨコヘラケズリ。外底面もおそらくヘラケズリ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　赤微～粗粒多、白細粒と透明微粒微 やや硬質	口 1/6 周、底 1/6 周
12 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 3.4 最大　復 14.7	残存度が少ないので、復原径は参考程度。体部上位が部厚い。外面口縁部と内面ヨコナデ後、外面体部ヨコヘラケズリ、内面に横～斜位ヘラミガキ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　赤・黒・白・透明細粒多、赤粗粒少　やや軟質	口 1/12 周、体 1/8 周
13 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 4.1	口縁部内面が少し膨らむ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、外面体部ヨコヘラケズリ後、やや疎らなヨコヘラミガキ、内面体部は密なナナメヘラナデ。	2.5YR4/6　赤褐 やや緻密　白・透明微～細粒と赤微～粗粒と黒細粒多 やや硬質	口～体 1/4 周
14 土師器 杯	口　復 13.8 高　残 4.9	口～体部境に非常に弱い稜あり。外面体部ナデ後ヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面ヨコナデ。内面は口縁部に横位、体部に斜放射状のヘラミガキ。	5YR6/6　橙 やや緻密　白・黒・赤細粒少、赤粗粒微　やや軟質	口 1/12 周、体 1/4 周
15 土師器 杯	口　13.6 高　4.5	内外面の口～体部境に強い段あり。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面体部に横位の後、底部 1 方向のヘラケズリ。内面体部に放射状ヘラミガキ。内面に稲籾痕あり。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤粗～細粒と透明・白細～微粒少　やや硬質	火床面上 12cmで横位 口 3/4 周、体 5/6 周 7
16 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 5.1	内外面とも磨滅が著しいため調整が不明瞭。	5YR6/8　橙 やや粗い　赤微～粗粒多、白・黒・透明微～細粒少 軟質	口 1/8 周



第 125 図　権現山遺跡 4 区 SI-14（2）　遺物

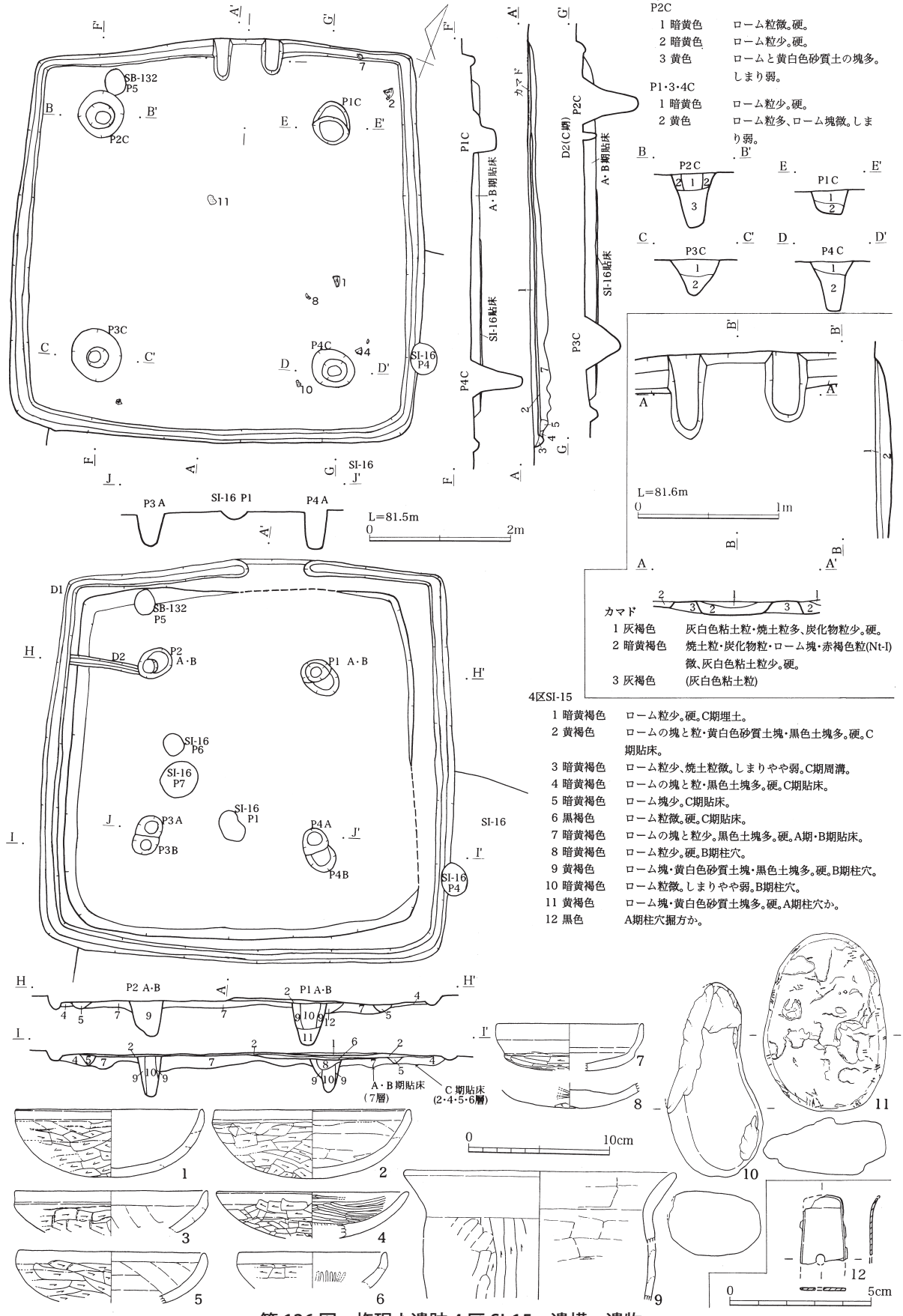
17 土師器 杯	口　復 15.2 高　残 4.2	赤く発色する胎土を使って薄く製作。口縁部内外面ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。体部外面に横～斜位ヘラケズリ、体部内面ヨコナデ後放射状ヘラミガキ。	2.5YR5/6　明赤褐 やや緻密 赤粗粒と白・黒・透明細粒少 硬質	SI-14 の 2 片と SK-109 の 1 片が接合 口～体 1/6 周 SK-109
18 土師器 杯	口　復 14.7 高　残 4.4	外面口縁部と内面ヨコナデ、内面下半に横～斜位ヘラミガキ。外面体部はヨコヘラケズリで口～体部境にほとんど段が残らないように削っている。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒多、黒・透明微粒少、白微～細粒微　やや硬質	カマド西側床面付近 口～体 1/6 周 24
19 土師器 杯	口　推 14～15 高　残 4.3	焼成前に彫って抉ったような凹みが外底面中央にある。内外面口縁部ヨコナデ、外面はヨコヘラケズリと見られるが磨滅して不明確。内面はヘラナデ後ヘラミガキで、いずれも底部に 1 方向と体部に横位方向。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗粒・黒細粒少 やや硬質	体 5/6 周、底全周
20 土師器 杯	高　残 1.8 底　復 4.0	外底面は浅く凹み、木葉の裏面の葉脈痕を 1 方向ヘラケズリで部分的に消している。体部は外面を横～斜位ヘラケズリ、内面をヘラナデ後放射状にヘラミガキ。	10YR5/3　にぶい黄褐 やや緻密　透明白微粒多、赤・黒細粒微　やや硬質	底 5/12 周
21 土師器 杯	口　11.8 高　残 4.1	体部が厚く重い。外面体部はナデ後に下半に雑なヘラケズリ、内面体部ナデ後、中位以上ヨコナデ。	5YR6/8　橙 やや緻密　赤微～粗粒多、白・黒微～細粒と透明微粒少 硬質	カマド周辺の 1 片と位置不明の 3 片が接合 口～体 1/2 周 K 周
22 土師器 杯	口　復 9.8 高　残 3.0	小破片なので復原径は参考程度。薄く小形。外面体部ナデ後に下半部ヨコヘラケズリ、内外面口縁部ヨコナデ。内面体部ヨコヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや緻密　透明微粒と白微～細粒多 やや硬質	口 1/8 周
23 土師器 高杯	口　15.8 高　10.3 脚裾　10.6	全体にやや歪みあり。外面杯部口縁部ヨコナデ後、体～底部に光沢のあるヘラナデ。脚柱部タテヘラケズリ、裾部ヨコナデ後花びら風の放射状のミガキ。内面は口縁部ヨコナデ・体～底部ヘラナデ後、上部に横位と底部に 1 方向のミガキ。脚柱部内面は径 0.7 ～ 1.3㎝のいびつな空洞で、成形後に脚柱をつぶして歪んだものとみられる。脚裾部ヨコナデ。内外面とも部分的に明褐色粘土付着。	7.5YR7/4　にぶい橙 緻密　白・赤粗～細粒と黒・透明微粒微 やや硬質	カマド火床面上 2㎝ 脚裾 7/12 周、口～脚柱完存 4
24 土師器 高杯	口　復 16.8 高　残 3.0	外面はおそらくヘラケズリかヘラナデ、内面はヨコヘラナデ、内外面口縁部ヨコナデ。内外全面に横～斜位の密なヘラミガキ。	2.5YR5/8　明赤褐 やや緻密　白細粒と赤粗～細粒少、黒・透明細粒微 やや硬質	貯蔵穴内 口 1/4 周 貯
25 土師器 高杯	口　推 17～18 高　残 7.3	外面は杯部上位ヘラナデと下位～脚柱部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。杯内面は底部に 1 方向と上半部に横位のナデ後、ナデと同様の方向にヘラミガキ。脚内面は上端部内径 1㎝程度の中空状。	5YR7/8　橙 やや緻密　白・赤粗～細粒と黒・透明微粒少 軟質	脚柱 1/2 周 南カク乱
26 土師器 鉢	高　残 11.7 底　5.6 最大　14.9	内外面ともに底部に 1 方向と体部下位に横～斜位のヘラケズリの後、体部中位以上にヨコヘラナデ、頸部にヨコナデ。内面中～下位に汚れ（コゲ痕）、外面肩部に煤付着。	10YR5/3　にぶい黄褐 やや粗い　白・黒・透明粗～細粒少 やや軟質	張出土抗底上 25㎝ 頸 3/4 周、底全周 22
27 土師器 鉢	口　14.9 高　12.2 最大　15.2	外面底部に多方向と底部外周に横位のヘラケズリで丸底化した後に 1 方向ヘラミガキ。内外面体部ヘラナデ後、外面下半にナナメヘラミガキ、内面下位～底面に不定方向ヘラミガキ。内外面口縁部にヨコナデ。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤礫～粗粒多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	カマド火床面上 13㎝で逆位。カマド西側床付近にも 1 片あり 口 2/3 周、底全周 2、3、24、貯
28 土師器 鉢	口　復 13.2 高　残 6.8 最大　復 15.2	外面は体部ヘラナデ後に口縁部ヨコナデ、体部に疎らなナナメヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデ後に、体部に強いヨコナデと疎らなタテヘラミガキ。	7.5YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　透明・白微～細粒多、赤細粒少 やや硬質	口 1/2 周
29 土師器 鉢	高　残 5.0 底　5.0	外底面は丸味を帯びて弱く突出する。外面全面ヘラナデまたはナデ。内面はヨコヘラナデ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤粗～細粒多、黒細粒と透明・白微粒少 軟質	張出土抗底上 2㎝ 底全周 23、貯
30 土師器 甑	高　残 10.1 底　復 10.4 孔　復 9.2	外面胴部タテヘラケズリ後、紐積み休止面付近の厚い部分をヨコヘラケズリ。内面ヘラナデ後タテヘラミガキ。孔端面はヨコヘラケズリ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒多、白細～微粒と黒・透明微粒微 やや硬質	底 1/6 周
31 土師器 甑	高　残 6.0 底　復 10.0 孔　復 8.6	残存部が少ないので復原径は参考値。外面タテヘラケズリ。下端面と内面胴下端にヨコヘラケズリ、内面ナデとナナメハケの後タテヘラミガキ。内面に焼成前穿孔が 2 個あり、外面まで貫通しない。	5YR5/6　明赤褐 緻密　赤粗粒と白・黒細～微粒少　やや軟質	底 1/12 周
32 土師器 甑	口　復 20.4 高　残 24.5 底　復 7.4	胴部中位の破片が不足して上下を接合できない。外面は胴部ナデ後タテヘラケズリ、胴下位の紐積み休止面付近と孔端面にヨコヘラケズリ、頸部ユビナデと口縁部ヨコナデ。内面は胴部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ後、主に縦位ヘラミガキ。胴部中位の破片で外面に稲籾圧痕が残るもの 1 箇所あり。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　赤粒～細粒やや多、白細～微粒と黒・透明微粒少 やや硬質	カマド西側の床面～床上 8㎝と火床面上 14 ～ 19㎝が接合 口 1/2 周、底 7/12 周 5、6、16、24、カマド周辺
33 土師器 壺	口　復 17.2 高　30.1 底　8.6 最大　復 27.6	外底面は雑な多方向ヘラケズリ。内外面は胴部ナナメヘラナデ後、紐積み休止部が厚くなっている部分を横～斜位ヘラケズリで薄くする。胴部下位外面に焼成前の鋭い平行刻線あり。口～頸部はヨコナデで、外面の仕上げがやや粗雑。胴下半の外面は橙色（2.5YR7/6）で、肩部内面は暗褐色になる。しかし、火にかけて使ったとは断定できない。	2.5Y8/3　淡黄 やや粗い　白・透明微～細粒と白粗粒多、黒細粒と赤粗～細粒少 やや軟質	カマド西側（床上 4 ～ 16㎝） 口 7/12 周、胴 1/2 ～ 2/3 周、底全周 10、11、12、13、14、24、 カマド、カマド周辺
34 土師器 壺	口　復 16.2 高　残 14.9 底　9.4 最大　復28～29	胴部破片が不足して接合できない。口縁端部上面を三角形に盛り上げる。外面は肩部に横位と胴部に斜位のナデ。内面は胴部に縦および横位ヘラナデ後肩部に雑なヨコナデ。内外面口～頸部ヨコナデ。底部内外面に多方向ヘラナデ、外面胴部下端ナデ。外底面に稲籾圧痕 1 箇所あり。	2.5Y6/3　にぶい黄 やや粗い　白礫と白・黒・透明粗～細粒少 やや軟質	カマド西側の床直上 口 5/6 周、底 5/6 周 15、24、K 周、床直
35 土師器 小形壺	高　残 3.4	全体が磨滅して調整不明。他の杯や高杯のような橙色の胎土を使っていないもので、先行する時期の遺物が混入した可能性がある。	10YR7/6　明黄褐 やや粗い　赤微～粗粒多、白・黒微～細粒少 やや軟質	頸 1/3 周
36 土師器 甕	口　復 17.1 高　残 5.2	外面肩部ヨコヘラケズリ（?）の後、内外面口～頸部ヨコナデ。内面頸部にヨコヘラケズリ。	10YR6/3　にぶい黄橙 粗い　赤・白・灰色粗～細粒多、赤・灰色礫と透明・黒細粒少 硬質	口～頸 1/12 周

37 土師器 甕	高　残 8.1 底　7.8	外底面は雑な多方向ナデで、外周部に粘土貼付け。胴部下端の外面にナデと内面にヘラナデ後、紐積みの休止面が厚くなった付近の内外面にヨコヘラケズリ、内面に強いナナメナデ。全体が被熱して脆弱化している。	5YR6/4　にぶい橙 粗い　白・透明粗～細粒と黒細粒多、白礫少 軟質	カマド西側（床上３㎝）と袖先端（床上５㎝）が接合 底全周 8、17
38 須恵器 甕		外面は木目に平行の溝を彫った叩き板で縦位の平行叩き。内面はスリケシで無文。外面は肩部なので、暗緑色の自然釉が下方へ流れ気味に厚く付着。	10Y4/1　灰 緻密　白細～微粒少 硬質	床上 9㎝ 胴部上半片 9
39 石製品 砥石	長　残 11.4 幅　残 7.1 厚　残 1.2 重　残 90.7	3 面（以上）を使用した直方体に近い砥石が、石材の節理に沿って薄く剝離した破損品。図示した表裏両面はどちらも大半が剝離破損面。左図の右上部に少し残る面と左右両側面を砥面に利用して、平滑に磨滅する。研磨方向が、図に記入した浅い条線として残る。左図の下辺（自然面）と左下隅は、本来の外形が残るが、砥面には使っていない。	5Y5/1　灰 粘板岩 軟質	床上 24㎝（撹乱中の可能性あり） 破片 21
40 土師質 焼粘土塊	長　3.3 幅　2.5 厚　1.2 重　5.0	やや幅広の植物の茎の圧痕が両面と側面に付着する。茎が中に深くめり込むように粘土を押しつぶした状況で焼成されている。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤・白・黒・透明細～微粒少 軟質	カマド周辺 完形 K 周
41 土師質 焼粘土塊	長　4.8 幅　4.7 厚　1.7 重　25.5	不整形の粘土を押しつぶした形。左図の面は比較的平坦で、右図の面は細かい凹凸が多い。やや幅広の植物の茎（稲藁か）の圧痕が両面に付着し、粘土塊の内部へ入り込んでゆく圧痕も目立つ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤・白・黒・透明細～微粒少 軟質	カマド周辺 完形 K 周
42 土師質 焼粘土塊	長　5.1 幅　4.5 厚　2.5 重　32.3	不整形で、左図に示した面は比較的平坦気味の２面が断面「く」の字形に連接して見られる。この面の図下部には草本植物の茎と思われる圧痕がある。図右下部にある小孔では内部に入り込んだ植物の茎が炭化して残る。左右側縁は焼成前の破面の可能性もあるが、ここでは植物痕は見られない。右図の面は不整で凹凸が多く、植物痕は見られない。	7.5YR7/3　にぶい黄橙 やや粗い　赤・白・黒・透明細～微粒やや多 軟質	完形
43 土師質 焼粘土塊	長　7.1 幅　6.0 厚　1.9 重　40.7	不整形で、左図に示した面は比較的平坦気味の２面が断面「く」の字形に連接して見られる。この面の左上・右下・中央下寄りには草本植物の茎と思われる圧痕があり、その末端が粘土塊の中へ少し入り込むものもある。外周部は成形時の輪郭かまたは焼成前の破面で、草本植物がごく少量だけ内部を通る状況が見える。右図の面は不整で凹凸が多く、植物痕は見られない。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　赤・白・黒・透明細～微粒やや多 軟質	完形 カマド周辺
44 棒状鉄製品	長　残 3.1 径　1.4 重　残 10.5	断面円形の棒状。残存する側の端面は平坦だが、側面との間には丸味を持って続く。現状で有機質は見られない。錆・亀裂・劣化が著しいので本来付着していなかったかどうかは不詳。続く部位の破片も出土していたが現地で行方不明。		埋土中位で出土 端部残

４区 SI-15（第 126 図、写真図版 42・120）

［**位置**］４区中央部の台地平坦面、34.5-11.5・12.0、35.0-11.5・12.0 グリッド。古墳後・終末期の SI-17・19 が南東３ｍにある。北に古墳中期の SI-13、後期の SI-9、古墳時代の円筒形土坑 SK-67 がある。南東部で古墳中期の SI-16 を切り、SI-16 の北西部壁が SI-15 の掘方下にわずかに残る。北西隅で重複する時期不明の SB-132 との確実な前後関係は不明。SI-15 の貼床除去下の旧竪穴（Ａ期・Ｂ期）の掘方まで掘り下げた段階で SB-132 の柱穴が確認・図化されているので、SI-15 より SB-132 が古い可能性もある。

［**規模と形状**］方形で、中軸は N-19°-W。東壁が西壁より約 20cm 長く、南西隅と南東隅がやや丸い。東西長 5.9m、南北長 5.7m。旧建物は 4.8 × 4.9m で新建物は四辺を 30 ～ 50cm 拡張する。残存壁高は 0.05 ～ 0.10m で低い。床面はおおむね平坦で傾斜しない。Ｃ期掘方は、Ａ・Ｂ期床面の外周を掘り下げ、貼床土４・５層を外周と内周に入れて床面を作る。Ｃ期貼床除去下で、旧期建物に伴う壁と柱穴（Ａ期・Ｂ期）が認められた。最新のＣ期には、先行するＡ・Ｂ期柱穴を貼床で覆い、竪穴壁を外側に拡張し、壁溝とＣ期柱穴を設ける。北側の主柱穴２本はＡ期とＢ期の位置をあまり変えない。北東柱穴 P1 の北西部が、P1 のＢ期柱穴と思われる。南側主柱穴２本は、Ｂ期柱穴をＡ期より南に移して建物を拡張する。北西部の間仕切溝 D2 は新期竪穴西壁まで伸びるのでＣ期と判断した。この溝の東端は旧柱穴ＡまたはＢ期の旧柱穴と重複する。Ｃ期主柱穴は４本（P1 ～ P4）。P1C は径 61 × 50 ×深さ 34cm、P2C は径 67 × 62 ×深さ 78cm、P3C は径 74 × 68 ×深さ 50cm、P4C は径 62 × 58 ×深さ 73cm。北東柱穴 P1C が浅い。P1C-P2C 間が 3.23m で P2C・P3C・P4C の３本の柱間は 3.40 ｍである。上方は重複するので、柱穴以外ではＡ・Ｂ期を分ける判断材料がない。Ａ期は P1A が径 58 × 43 ×深さ 57cm、P2A が径 51 × 40 ×深さ 49cm、P3A が径 37 × 29 ×深さ 45cm、P4A が径 36 × 35 ×深さ 56cm で、東側主柱穴がやや深い。柱間は 2.34 ～ 2.39 m でほぼ等間隔。Ｂ期は北側はＡ期と同じで、南側の P3A・P4A を南に 15 ～ 20cm ずらす。P3B は径 39 × 25 ×深さ 58cm、P4A は径 41 × 31 ×深さ 46cm。Ｃ期壁溝 D1 がカマド部以外を全周する。断面「Ｕ」字状で幅 15 ～ 20cm、床面から深さ３～ 11cm。Ａ・Ｂ期の壁溝は確認されなかった。Ｃ期貼床除去後、西壁際で間仕切溝 D2 を確認した。Ａ・Ｂ期の P1 に付随する位置にあるが、Ｃ期壁溝に繋がっているので、Ｃ期と判断するのが妥当である。断面「Ｕ」字状で長 100 ×幅 12cm、床面から深さ 12cm。



第 126 図　権現山遺跡 4 区 SI-15　遺構・遺物

［**カマド**］Ｃ期のカマドは北壁中央からやや東に寄る。天井や袖上半は削平され、袖の基部が残る。両袖幅97cm、壁から袖先端まで 50 ～ 60cm。袖を灰色粘土で構築する。１・２層は灰色粘土と焼土が多く、天井や袖上半の崩落土であろう。火床はほぼ平坦で、床面よりわずかに下がる。確認面が低かったため煙道部は不明。

［**覆土**］ローム粒を少量含む暗黄褐色土の単層。

［**遺物出土状況**］最終期建物の床付近で出土した土器は１・２・４・７で、２の残存度が最も高い。４・５・９は貼床出土の破片を含むので、拡張前の建物に伴う可能性を持つ。２点混入していた古墳中期の石製模造品は、SI-16 の遺物として掲載した。

［**出土遺物**］遺物は少ない。土師器杯が主体で、特に半球形杯がほとんどを占める。それ以外の器種はごく僅かしかない。先行する SI-16 の遺物も多く含んでいた。２は内面に炭素吸着の黒色処理を行うとともに、口縁部内外面に漆仕上げも行う点が珍しく、SI-21 にも類例がある。内面体部には漆仕上げが不明瞭なので、使用による口縁部の磨耗を漆仕上げで補修したのかもしれない。８は古墳中期の遺物が混入した可能性もある。７は非常に小形化した内彎口縁杯。４は密なヨコヘラミガキと漆仕上げを両方行う点が、７世紀の杯では異例。10 は非常に硬質で緻密なホルンフェルスの礫で、同質の磨石・砥石・敲石が周辺の古墳時代集落に見られる（SG1 区 SI-17 など）。12 は有孔で薄板状の不明鉄製品。非常に硬質のホルンフェルス製磨石・砥石・敲石は、周辺集落でもよくみられる（SG1 区 SI-17 など）。

第 53 表　権現山遺跡 4 区 SI-15　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　13.4 高　4.8	半球状で口縁部は外面に浅い段を持って短く直立。外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデで紐積み痕を残し、中位以下ナナメヘラケズリで丸底。内面ヨコナデ。外面上位と内面に漆仕上げ。内外面底部は磨耗する。	10YR5/4　にぶい黄褐 緻密　白微粒少、黒・透明微粒微 やや軟質	SI-15 床面の口 1/2 周とSI-16 の口 1/3 周が結合 口 5/6 周、体 3/4 周 4、SI-16
2 土師器 杯	口　13.8 高　4.9 最大　14.0	半球状で口縁部は外面に浅い段を持って短く直立。外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリ、底部多方向ケズリで丸底。内面体～底部ヘラナデ後口縁～体部ヨコナデ。内面全面に炭素吸着の黒色処理の後、内外面口縁部に漆仕上げも行っている。口縁端部の磨滅が著しい。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　透明細粒多、白・黒・赤細粒少 やや軟質	床上 3cm 口 5/6 周、体～底部 完存 2
3 土師器 杯	口　復 13.6 高　残 2.9	半球状で、口縁部は外面に浅い段を持って短く直立。体部上位は紐積み痕を残し、中位に横位と下位に斜位ヘラケズリ。内面は体部に斜位ナデ後、口縁部にヨコナデ。内外面を漆仕上げしていた可能性もあるか不確実。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒・透明細～微粒少、白・透明粗粒微 やや硬質	口 1/6 周
4 土師器 杯	口　復 13.6 高　残 3.3	半球状で浅身。外面は口縁部にヨコナデ後、体部上半にヨコヘラケズリ。内面は底部に 1 方向と体部に横位の密なヘラミガキ。外面口縁と内面に漆仕上げ。	7.5YR6/4　にぶい橙 緻密　赤粗粒、灰色細～粗粒と白細粒多 硬質	床上 4cmの破片（口縁部 2/3 周）に貼床中の口縁部 1 片が接合 口 5/6 周 5、貼床
5 土師器 杯	口　復 13.0 高　残 3.6 最大　復 13.5	半球状で外面口縁部ヨコナデ後体部ヘラケズリ。内面は体部横～斜位ナデの後口縁部ヨコナデ。内面全面と外面口縁部に漆仕上げ。	2.5Y7/4　にぶい黄橙 やや緻密　白細粒少、透明微～細粒・黒細粒微 やや軟質	貼床層中 口 1/8 周 貼床 A
6 土師器 杯	口　復 10.4 高　残 2.5 最大　復 10.6	外面に稜を持ち口縁部が内傾する。口縁部ヨコナデ後内面体部ヨコヘラケズリ。内面はヨコナデ後体部放射状ヘラミガキ。内外面漆仕上げ。外面体部下位は磨滅して調整不明確。	10YR8/3　浅黄橙 緻密　黒細粒少、透明微粒微 やや軟質	口 1/6 周、体 1/4 周
7 土師器 杯	口　復 10.4 高　残 3.3	口縁部上半が内彎し、外面で体部との境に段あり。外面は口縁部ヨコナデの後体部ヨコヘラケズリ。内面は全面ヨコナデ。外面口縁部と内面全面に漆仕上げ。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　黒粗～微粒少、白細粒と透明微粒微 硬質	床上6cm（壁溝底上 12cm） 口 1/3 周 1
8 土師器 杯	高　残 1.7	丸底で底部外面に凹みあり。外面はヘラケズリ後にミガキを行う可能性があるが不明瞭。内面は磨滅して調整不明。古墳中期末の遺物が混入？	2.5YR5/8　明赤褐 やや粗い　黒粗粒と透明・黒・白細粒多、白礫混入 やや硬質	床上 30cm 底全周、底部のみ 8
9 土師器 甕	口　復 19.2 高　残 9.1	外面は胴部ヘラケズリおよびヘラナデの後に口～頸部ヨコナデ。内面はヨコヘラナデの後に口縁部ヨコナデ。	5YR5/4　にぶい赤褐 粗い　白および透明礫～細粒と黒雲母片多　硬質	口 1/4 周 貼床、カマド
10 礫	長　13.8 幅　6.6 厚　4.3 重　506.1	非常に硬質で緻密な石質の自然の河原石。図の左上部が大きく剝離している他にも小さな剝離が見られるが、人為的な加工かどうかは不明。この他の被熱痕・使用痕などは見られない。	5B3/1　暗青灰 緻密　ホルンフェルス 硬質	床上 4cm 一部欠 9
11 礫	長　12.4 幅　8.6 厚　4.2 重　514.2	軟質石材の自然の円礫を使用。石の節理に沿った剝離がやや見られるが、人為的なものかどうかは不詳。作業に用いた痕と見られる短い線状の傷が全面にあり、特に外周寄りの部分から側面にかけて目立つ。	5B6/1　青灰 緻密　安山岩 軟質	床上 2cm 完形 6
12 板状鉄製品	長　残 2.4 幅　残 1.4 ～ 1.6 厚　0.8 ～ 1.2㎜	薄く軽い。端部を緩く反るように曲げる。横断面形は反りがなく平坦。径 3.2㎜の円孔が 1 箇所あり、穿孔時のバリや返りは生じていない。有機質は見られない。残存重量 1.2g。		片端の隅部と他端を欠く

4 区 SI-16（第 127・128 図、写真図版 42・43・120・121）

［**位置**］ 4 区中央部の台地平坦面、34.5-11.5・12.0 グリッド。古墳中期の SI-13 と円筒形土坑 SK-58 が北と北東にある。南東と東に古墳後期初めの SI-18 と終末期の SI-17、北西に時期不明の SB-132 がある。SI-15・19 に切られる。北西部は古墳終末期の SI-15 に切られて床面まで消滅し、掘方部だけ残る。SI-15 の貼床を除去した下で SI-16 の北西部壁と北西柱穴が認められた。また、南東隅の貯蔵穴付近を古墳後期の SI-19 に切られる。

［**規模と形状**］北西と南西の隅が丸く東西がやや長い方形。中軸は N-6°-W。東西長 6.50m、南北長 6.18m である。壁は外傾し、残存高 0.05 ～ 0.09m。床面はほぼ平坦である。南壁寄りの中央から南東主柱穴にかけて、長さ 160 ×幅 5 ×高さ 3 ～ 5 cm の土手状高まりがある。掘方底面は緩い凹凸があり、床からの深さ 10cm 前後。ローム粒と塊が多い暗黄褐色の 2 層で貼床する。北東隅に 200 × 140cm ほどの不整形でやや深い掘方が認められた。

主柱穴は 4 本（P1 ～ P4）。P1 は径 46 × 36 ×深さ 54cm、P2 は径 46 × 29 ×深さ 39cm、P3 は径 34 × 29 ×深さ 40cm、P4 は径 32 × 31 ×深さ 42cm。P1 が P2 ～ P4 より 10cm ほど深い。P2-P3 間が 3.09m、他の P2-P3 間・P2-P1 間、P3-P4 間はほぼ 3.25m。北西隅で SI-15 の貼床除去後、 2 基の浅いピットを確認した。P6 は径 31 × 28 ×深さ 10cm、P7 は径 54 ×深さ 42cm。貯蔵穴 P5 が南東隅にある。SI-19 に壊されるが、115 × 90cm の東西軸の長方形と考えられ、床面から深さ 25cm。底面はほぼ平坦で、壁はやや外傾する。

［**炉**］東主柱穴 P1-P4 ラインの中央から東壁方向に楕円形の地床炉がある。東西 68 ×南北 38 ×深さ 8 ～ 12cm で、東側が若干深い。西側に礫と磨石がある。

［**覆土**］ローム粒を少量含む暗黄褐色土の単層である。

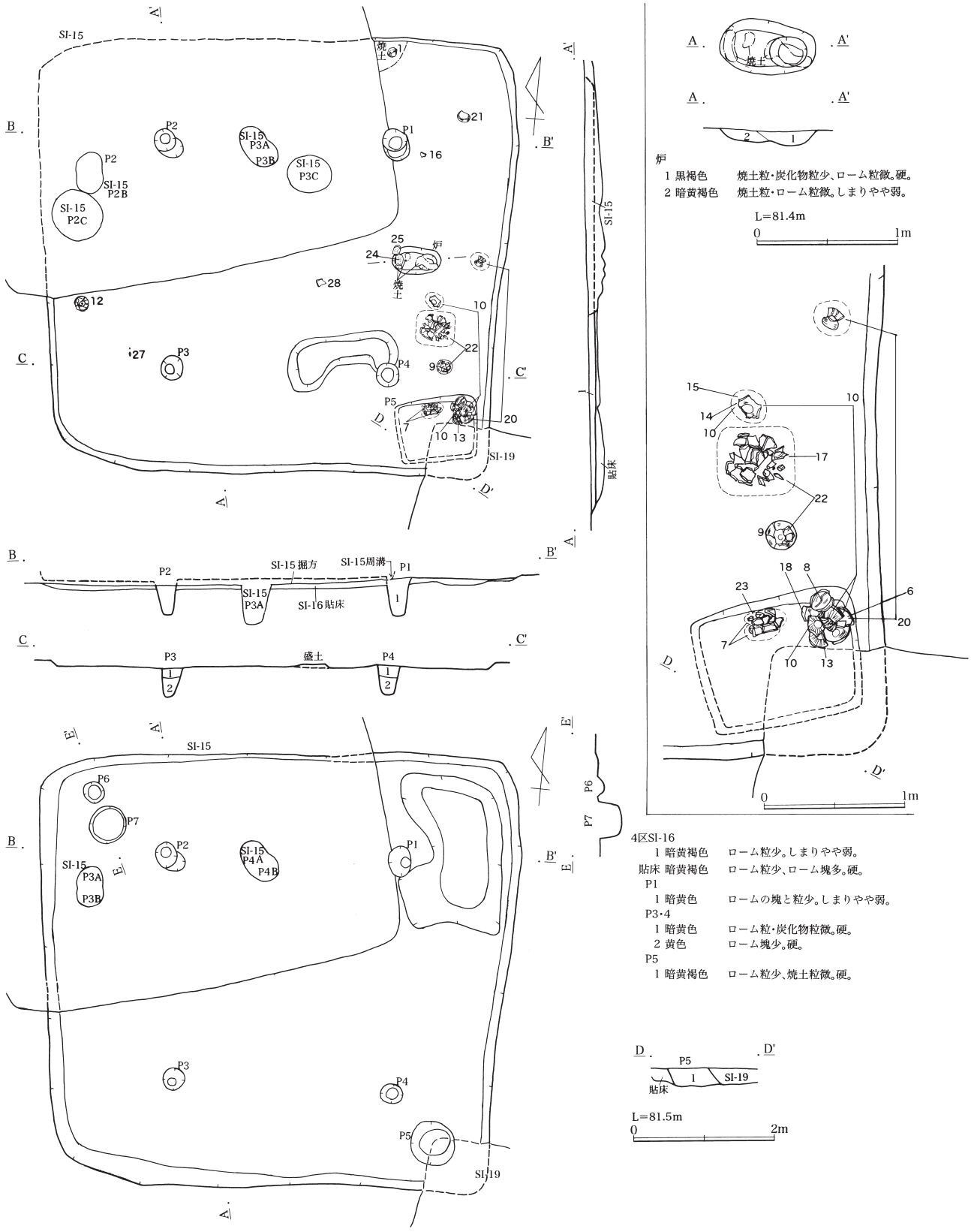
［**遺物出土状況**］石製模造品 3 点のうち 26 と 28 は SI-15 に混入していた。SI-17 と遺構間で接合した遺物も見られる。

22 は床直上でつぶれ、この甕の底部は伏せた高杯の杯部（9）に載っていた。この他の土器は、残存度が高くても床面よりも少し浮いたものが多い。貯蔵穴に北側から多くの土器が流れ込んでいる。煮炊具以外の 7 ・ 9 ・12・21 に煤が付着し、火災などの影響かもしれない。炉の北側に礫と磨石がある。

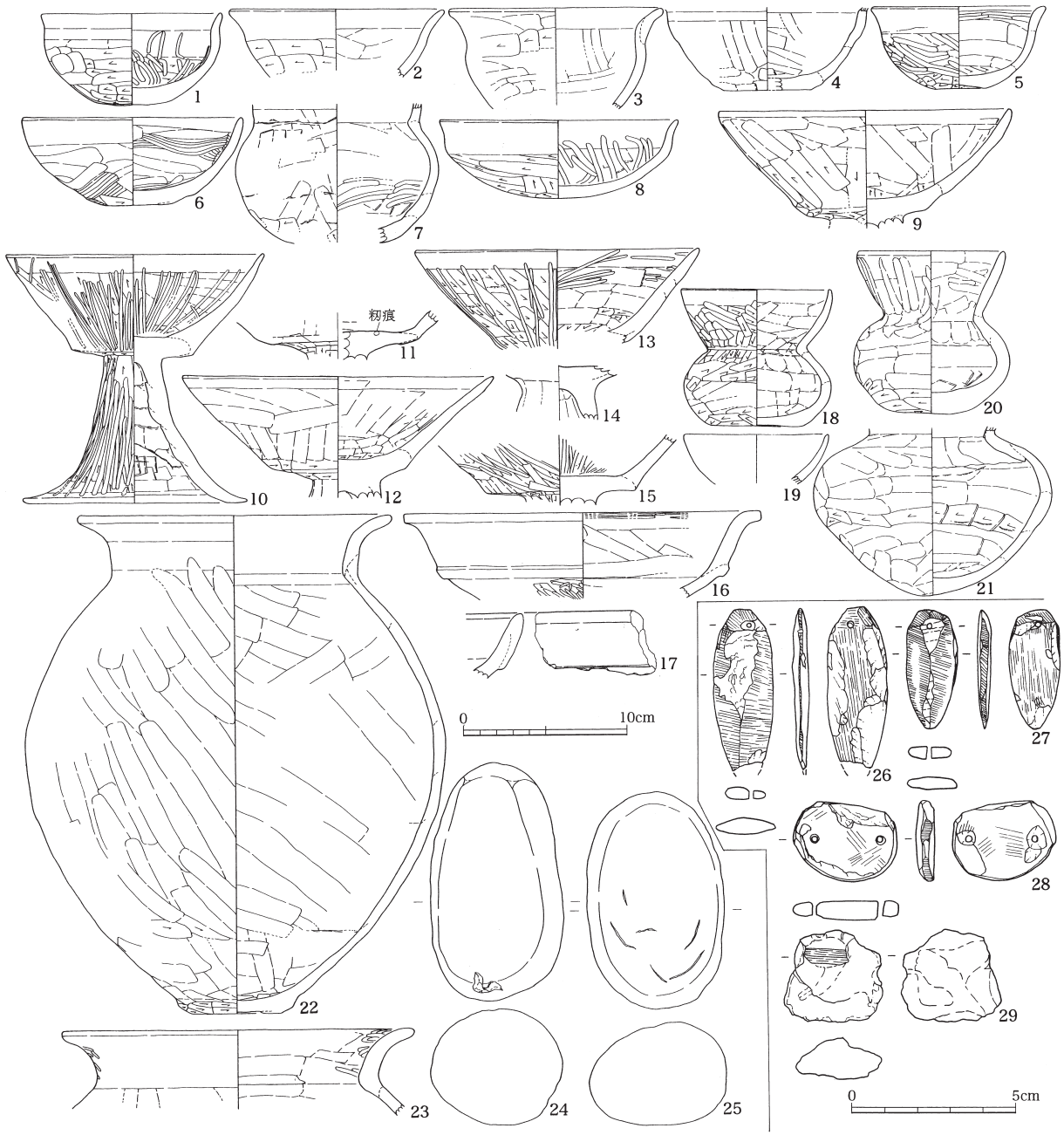
［**出土遺物**］遺物量がやや多い。図示していない 206 片（1,232g）の内訳は、杯 60 片（209g）、高杯 20 片（184g）、甕 110 片（701g）、壺 16 片（138g）。杯は丸底と平底がある。赤彩の器種はない。壺は中小形品が主体で、大形の壺甕類は僅かである。粗いハケ調整の甕胴部片も見られた。 6 は粗製の杯。内面杯底部を削る高杯が多い。10 は脚と杯部を異色の胎土で作る。11 は内面に稲籾圧痕があり、 4 区では SI-4 の甕などに例がある。16 は二重口縁状の大形壺。17 は弱い受口状。小形壺のうち 18・19 は口縁が内彎気味、21 はやや尖底気味。22 は炉で使った甕で、胴部が比較的薄く、煤が多い。23 は焼成前に生じた亀裂を内外面ヘラミガキで補修しているかもしれない。25 は磨石。石製模造品（26 ～ 28）は、剣形品は側面を斜方向、有孔円板は側面を横方向（両面に直行する方向）に研磨する。 4 区では SI-4 などに石製模造品がある。焼粘土塊が 1 点ある（29）。

第 54 表　権現山遺跡 4 区 SI-16　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 10.8 高　5.6	外面体部は上位ナデ後に中位～底面をヨコヘラケズリ、内面体部下半部ヘラナデ後に内外面口縁部ヨコナデ、内面体部に斜放射状のヘラミガキ。内面下半に暗褐色の汚れが薄く残る。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　赤・白粗～細粒少、黒・透明細粒微 やや硬質	焼土中（床上 6cm） 口 5/12 周 4
2 土師器 杯	口　復 13.0 高　残 4.1	外面は体部ヨコヘラケズリ、内面は体部横～斜位ヘラナデ（?）。内外面口縁部ヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・赤粗～細粒多、黒・透明細粒少　軟質	口 1/6 周、体 1/4 周
3 土師器 杯	口　復 13.0 高　残 6.1	外面は体部ナデと口縁部にやや雑なヨコナデの後、頸部ヨコヘラケズリ。内面は下半部に横位と上半部に縦位のヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　白・赤粗～微粒と黒・透明細粒少　軟質	口 1/4 周



第 127 図　権現山遺跡 4 区 SI-16（1）　遺構



第 128 図　権現山遺跡 4 区 SI-16（2）　遺物

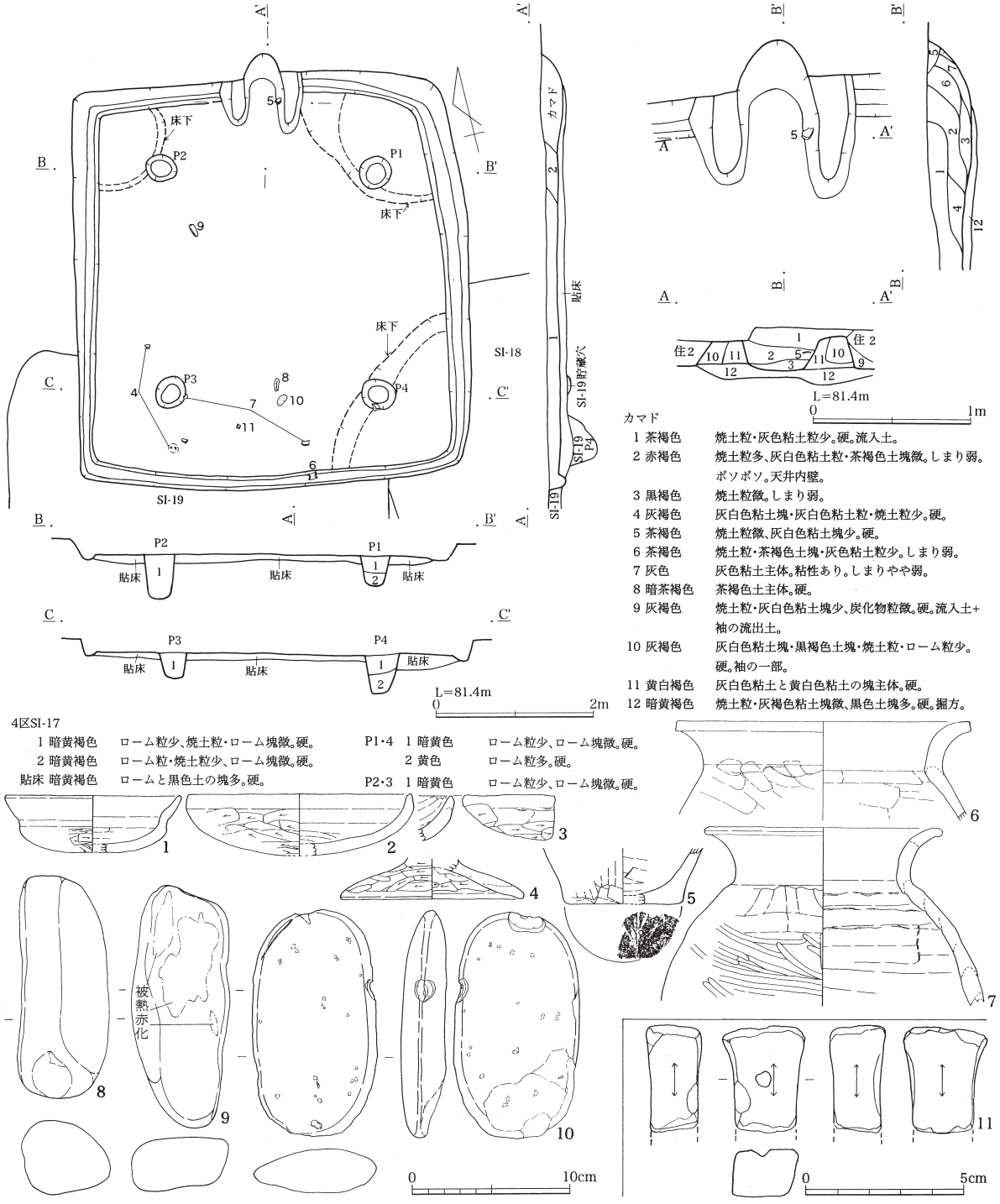
4 土師器 杯	口　推 13～14 高　残 5.0 底　5.3	外面は体部ナデ後、下端部ヨコヘラナデ。外底面は軽くナデるだけでほとんど不調整。内面体部に横～斜位ヘラナデ。内外面口縁部にヨコナデ。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや粗い　白細～微粒と透明微粒多、赤粗～細粒と黒細粒少　硬質	貯蔵穴・貼床各 1 片と地点不明の 10 片 頸 1/6 周、底 7/12 周 貼床、貯穴
5 土師器 杯	口　復 10.6 高　4.9 底　3.0	外面は体部下端ヘラケズリ後、中位以上に横～斜位のヘラナデとヘラミガキ。外底面はナデでやや上げ底状。内面は底部に 1 方向ヘラケズリ後、中位にヨコヘラナデ。内外面口縁部はヨコナデ後、内面にヨコヘラミガキ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　白・透明粗～細粒と黒細粒多　やや硬質	貯蔵穴 口 1/3 周、底 1/2 周 貯穴
6 土師器 杯	口　13.3 高　5.3 底　4.1	全体の調整がやや粗雑で、仕上げナデを省略している。内外面ヘラナデ後、外面下位と内面上位にヨコハケ。外底面は外周に薄く粘土を貼って底面を少し広げ、外面体部下端ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや粗い　透明細粒多、白礫と白・黒粗～細粒少 やや軟質	貯蔵穴底上 5㎝ 口 2/3 周、底全周 19
7 土師器 杯	高　残 8.4 最大　復 12.3	外面体部は中位にナデ、下位にヨコヘラケズリ、上位ヘラナデ。内面体部はヨコヘラナデ後ヨコヘラミガキ。内外面口～頸部ヨコナデ。外面体部に煤少量付着。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　白・黒細～微粒少、透明微粒多 やや硬質	貯蔵穴 P5 と床上 4～6㎝。SI-17 も 1 片接合 頸～体 1/4 周 23、24、貯蔵穴、SI-17
8 土師器 杯	口　復 14.4 高　4.8	外面底部多方向と体部横位ヘラケズリ、内面は体部ヨコヘラナデ、内外面口縁部ヨコナデ。内面は体部に斜位および底部に放射状のヘラミガキ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　透明粗～細粒多、白・黒・灰色細粒と灰色礫少、やや軟質	貯蔵穴底上 10㎝で正位 口 1/4 周 15

9 土師器 高杯	口　17.6 高　残 7.1	外面は下半部に軽いヘラケズリと上半にヘラナデ、杯底部ヨコヘラケズリ。内面は底部多方向ヘラケズリ後に杯体部ナナメヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内外面の広い範囲に煤が付着。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤・白細～粗粒多、黒・透明・灰色細砂やや多　やや硬質	床上５～６㎝と貼床中が接合 杯全周 13、14、貼床
10 土師器 高杯	口　15.7 高　15.0 脚裾　13.6	外面は杯底面を横位、他を縦位のヘラケズリ。口縁部と脚裾にヨコナデ後、杯底部以外にタテヘラミガキ。内面は杯底に多方向ヘラケズリ後、杯部ナナメヘラナデとタテヘラミガキ。脚内面は紐積み痕を残し、下部ヨコヘラナデと裾部ヨコナデ。脚部～杯底部は黄橙色、杯体部は橙色の２種の胎土で製作。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　白細～微粒と赤粗～微粒多、黒・透明・灰色細砂少 やや硬質	貯蔵穴底面～底上 11㎝が接合 口 2/3 周、脚裾 1/6 周、杯底全周 10、16、18、19、20
11 土師器 高杯	高　残 2.9 杯底　復 10.8 最大　復 12.2	外面は杯体～底部タテヘラナデ、杯底面外周ヨコヘラナデ、脚部タテヘラケズリ。内面は円周方向のヘラナデ。内面に稲籾圧痕があり、胎土中に混ざっていた可能性がある。	5YR6/6　橙 やや緻密　白細～微粒多、赤粗～細粒と黒・透明細砂少　硬質	貼床中 杯底 1/3 周 貼床
12 土師器 高杯	口　18.8 高　残 7.4	内外面の杯部下端～底部を横方向（内面底部は多方向）にヘラケズリ後、杯体部に横位および縦位のヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ、外面脚部タテヘラナデ。杯部外面上位に煤付着。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　白・赤粗～細粒やや多、黒・透明細砂少 やや硬質	床上 10㎝で逆位 杯全周 1
13 土師器 高杯	口　17.2 高　残 6.8	杯部底面の上に杯体部を積み上げた接合面で剝離している。外面は斜位ヘラケズリ、内面は斜位ヘラケズリ後にヨコヘラナデ。内外面口縁部に雑なヨコナデ後、外面に縦位と内面上半に横位の疎らなヘラミガキ。	5YR6/6　橙 やや粗い　白・赤粗～細粒多、透明・半透明・黒細粒少、白極粗粒と灰色礫少 やや硬質	貯蔵穴底上 1㎝ 口 2/3 周、杯全周 21
14 土師器 高杯	高　残 3.3 最大　残 6.7	内外面が磨滅して調整が不明瞭。外面脚部タテヘラケズリ（?）、内面脚上端ユビナデ(?)。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　赤・白粗～細粒多、透明・黒・灰色細砂少 軟質	床上 11㎝で逆位 脚柱全周 10
15 土師器 高杯	高　残 4.2 底　8.8	外面は杯底～脚部タテヘラケズリ後、杯体部に斜位のヘラナデ後ヘラミガキ。内面は杯体部にナナメヘラナデ後放射状ヘラミガキ、杯底部に１方向のヘラナデ後ヘラミガキ。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤礫～細粒多、白・黒・透明細粒少　硬質	床上 6㎝ 杯底 11/12 周 10
16 土師器 壺	口　復 21.6 高　残 5.2	外面口縁部はヨコナデで下端が突帯状。外面頸部に斜位のヘラケズリとヘラナデ後、斜～横位ヘラミガキ。内面は横位および一部に斜位のナデ後、内面上端に横位ヘラミガキ。内面は大きな黒斑あり。	5YR5/4　にぶい赤褐 やや緻密　白礫多、黒・白・透明粗～細粒多、赤礫少 硬質	P4 と床付近の破片が接合 口 1/12 周、頸 1/6 周 6、P4
17 土師器 壺	口　復 24～28 高　残 3.9	小破片なので復原径は参考程度。外面を貼付帯で複合口縁状にする。内面は弱い受口状。内外面ヨコナデ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　透明粗～細粒極多、黒細～粗粒多、白細～粗粒少、白・赤・半透明礫少　やや硬質	床直上の甕（22）付近 口 1/12 周 11
18 土師器 小形壺	口　9.0 高　8.3 底　5.2 重　残 168	外面は体部下位ナナメヘラナデと口縁部ヨコナデで、他がナナメヘラケズリ。外底面は製作時の台から外した平坦面を軽く多方向ヘラケズリ。内面肩部ユビオサエと口縁部ヨコナデで、他が横～斜位ヘラケズリ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤粗～細粒多、黒・白細粒微 やや硬質	貯蔵穴底上 3㎝で逆位 口 3/4 周、体全周 17
19 土師器 小形壺	口　復 8.8 高　残 3.0	薄く軽い。口縁部がかなり内彎する。内外面の器面が磨耗して調整不明。	7.5YR8/8　黄橙 緻密　赤・白微粒微 軟質	口 1/12 周
20 土師器 小形壺	口　8.6 高　9.9 底　3.0 最大　9.4	外面体部ナデ後、下位～底部に横位～多方向の粗いヘラケズリ。外面口縁部にやや雑なヨコナデ後、頸部タテナデ。内面は体部下位ヨコヘラナデ、中位ヨコナデ、上位タテナデ、頸部ヨコヘラナデ、口縁部にやや雑なヨコナデ。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密　白・赤粗～細粒と黒・透明細粒少、灰色礫微　やや軟質	床上 2㎝。貯蔵穴底上 1㎝の１片も接合 口 1/2 周、体全周 7、21
21 土師器 小形壺	高　残 10.2 最大　残 14.4	やや突出した底部は外面ヘラケズリ後ヘラナデ。内外面ともに体部ヨコヘラナデで、積み上げ休止部は削って薄くする。内面肩部ユビオサエ。外面に煤少量付着。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　白・赤粗～微粒と黒・透明細粒少、灰色礫～細粒微　やや軟質	床上 2㎝ 頸 5/12 周、体 2/3 周 5
22 土師器 甕	口　復 19.0 高　復 30.2 底　5.6 最大　25.5	胴部が薄い。外面は胴部にナナメヘラナデ。胴下端部と胴下位の積み上げ休止部付近にはヨコヘラケズリ。外底面の外周には部分的に粘土を貼り、軽いナデ。内面胴部ナナメヘラナデ。内外面の口～頸部ヨコナデ後、外面肩部にヘラナデを追加する。底面を除く口～胴部外面全体に煤付着。底から高さ 10㎝までの内面にコゲ付着。	10YR5/3　にぶい黄褐 やや緻密　黒・白・透明細～微粒多 やや硬質	床直上。底部片は伏せた高杯の上（床上 7㎝） 口 1/4 周、頸 1/2 周、底全周 11、12
23 土師器 甕	口　復 21.4 高　残 5.2	胴部外面に縦位と内面に横位のヘラナデ後、内面頸部ヨコヘラナデと内外面口縁部ヨコナデ。図で外周付近に示した口～頸部内外面の特定箇所に集中するヘラミガキあり。焼成前に生じた亀裂をヘラミガキで補修した可能性もある。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　白粗粒と透明礫～細粒と黒粗～細粒多 やや硬質	貯蔵穴底上 4㎝ 口 1/6 周、頸 1/4 周 24、貯穴
24 礫	長　14.3 幅　8.0 厚　7.2 重　1132.3	自然の河原石。ごく弱く被熱しているかもしれないが不確実。加工痕や使用痕は見られない。	2.5Y5/1　黄灰 やや多孔質気味で硬質な安山岩	床上 2㎝ 完形 9
25 石器 磨石	長　13.1 幅　8.3 厚　6.2 重　902.8	自然の河原石をそのまま利用。両面が若干磨耗し、外周側面は磨耗しない。全面が弱く被熱してわずかに赤色化する。	2.5Y5/2　暗灰黄 やや多孔質気味で硬質な安山岩	床上 1㎝ 完形 8
26 石製模造品 剣形	長　残 4.9 幅　1.8 厚　4.4㎜ 重　残 4.9	表面は４方向、裏面は３方向の細かい研磨痕。形割工程の剝離痕をかなり多く残す。側面は幅狭く、すべて斜方向に研磨する。背面中央の稜は下半部で明瞭。片面穿孔で、表面側に穿孔剝離あり。初孔径・終孔径ともに 1.50㎜。	10G1.7/1　緑黒 緻密・軟質で節理の発達した滑石	SI-15 に混入（床上 6㎝） 先端部欠 7
27 石製模造品 剣形	長　3.6 幅　1.5 厚　3.5㎜ 重　2.7	表面は４方向、裏面は２方向の細かい研磨痕あり。形割工程の剝離面を表面の中軸線上と裏面の周縁部に少しずつ残す。側面研磨はすべて斜方向。表面中央の稜は低いが明瞭。片面穿孔で、裏面に穿孔剝離痕あり。初孔径・終孔径ともに 1.50㎜。	10BG1.7/1　青黒 緻密・軟質で節理の発達した滑石	床上 2㎝ 完形 2
28 石製模造品 有孔円板	長　2.4 幅　3.1 厚　5.25㎜ 重　6.6	両面ともに３方向程度の研磨が少し見られるが、節理に沿った平坦な割れ面をそのまま利用している部分の方が多い。外周の側面は横方向に研磨し、成形時の切削加工痕も一部に残る。片面穿孔で、裏面に穿孔剝離あり。初孔径 1.90 ～ 2.00㎜、終孔径 1.70 ～ 1.95㎜。	2.5GY5/1　オリーブ灰 緻密・軟質で節理の発達した滑石	SI-15 に混入 完形 3
29 土師質 焼粘土塊	長　残 2.8 幅　残 3.0 厚　残 1.3 重　残 6.4	左図の面に草本植物の茎かと思われる圧痕２本が付着する。右図の面に示した部分は破面で、より大きな粘土塊から剝離したものと思われる。焼成後に剝離した可能性が高い。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　白微粒と赤粒少 軟質	

4 区 SI-17（第 129 図、写真図版 43・44・121）

［位置］ 4 区中央部の台地平坦面、34.5-12.0 グリッド。古墳終末期の SI-15・24 が西と東にある。すぐ西に古墳中期の SI-16 がある。南半で古墳後期の SI-18・19 を切る。

［規模と形状］ 北東と南東の隅がやや丸い方形で中軸は N-16°-E。東西長 4.95m、南北長 5.20m。崩落のためか、壁は北部がなだらかで、残存高 0.25 ～ 0.27m。床面はおおむね平坦で、若干北西から南東へ傾く（比高 8 cm）。貼床下の掘方底面に緩い凹凸があり、南西隅以外の隅が深い。南東隅が床面から深さ 3 ～ 10cm でやや深い。北西・北東隅の窪みは、それほど深くない。ローム塊が多い暗黄褐色土でほぼ全体を貼床す



第 129 図　権現山遺跡 4 区 SI-17　遺構・遺物

る。主柱穴は４本（P1 ～ P4）。P1 は径 41 × 40 ×深さ 38cm、P2 は径 40 × 34 ×深さ 46cm、P3 は径 43 × 33 ×深さ 32cm、P4 は径 43 × 37 ×深さ 53cm。P1･3 の２本がやや深い。柱間は P1-P2 間 2.82m、P3-P4 間 2.62m、P1-P4 間 2.72m、P2-P3 間 2.62m。壁溝が北壁際中央のカマド部分を除き全周する。断面「U」字状で幅 20 ～ 30cm、床面から深さ３～８cm。

［カマド］ 北壁中央にある。天井や袖部上半は崩れる。両袖幅 105cm、煙道先端～袖先端まで 100cm で、東袖が西袖より約 20cm 長い。灰褐色粘土主体の 10･11 層で貼床上に袖を作る。煙道立ち上がりから奥壁も、袖と同様の粘土主体の７層を貼る。火床は床面よりわずかに窪む。焼土の多い２層が天井内壁、その上の１･４層が天井崩落土であろう。煙道は北壁を約 25cm「U」字状に掘り、火床から緩く上がる。

［覆土］ 覆土はカマド付近以外では単層。カマド周辺は２層で埋没している。

［遺構間接合］ ７は SI-19 の破片と接合したが、実際は SI-18 の時期の遺物であろう。

［出土遺物］ 遺物は少ない。図示していない 172 片（1,454g）の内訳は、杯 49 片（30g）、高杯３片（64g）、壺２片（16g）、甕 107 片（938g）、甑 11 片（406g）である。古墳中期後半～末頃の杯などがあり、他遺構から混入した可能性が高い。内彎口縁杯を含む漆仕上げ杯（１～３）や、床面直上の短脚高杯片（４）からみて、古墳時代終末期である。５は金色雲母片が多い異質な胎土の他地域産甕。雲母を含む土師器は４区 SI-24 などにある。６・７は SI-18 からの混入品かもしれない古墳中期の甕・壺（７は上述した遺構間接合の項を参照）。10 は小剥離痕のある自然礫。編物石のうち９は被熱痕がある。４区では SI-24 などに編物石がある。11 の浅い孔は、有孔砥石に改造しようと試みた痕だろうか。穿孔が貫通しない砥石は４区 SI-31 にもある。

第 55 表　権現山遺跡 4 区 SI-17　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm･g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 11.1 高　3.6	外面口縁部と内面にヨコナデ。外面は体部下半に１～２方向と体部上位に横方向のヘラケズリ。外面口縁部と内面に漆仕上げ。	10YR8/4　浅黄橙 緻密　黒･赤細～微粒と白･透明微粒微 軟質	口～体 1/8 周
2 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 3.9 最大　復 14.4	外面口縁部ヨコナデ後、底部に１方向と体部に横～斜位のヘラケズリ。内面は底部に１方向ナデ、口～体部にヨコナデ。内面全面と外面上半に漆仕上げ。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　黒細粒少、黒･透明微粒微 やや硬質	SI-17 と SI-19 の各１片が接合 口 1/2 周 SI-19
3 土師器 杯	口　復12～13 高　残 2.9	外面口縁部ヨコナデと体部上位ナデの後、体部上～中位ヨコヘラケズリ。内面はナナメナデ。現状で漆仕上げは認められない。小破片で少し歪むので、正確な口径は不明。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　黒･透明細～微粒と白細粒微 やや軟質	口 1/8 周
4 土師器 高杯	高　残 2.4 脚裾　復 11.6	内外面の脚裾ヨコナデ後、外面を横～斜位ヘラケズリ。内面上半ヨコヘラナデ後、内面中位ヨコヘラケズリ。脚内面は炭素を吸着して黒色。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤･黒･透明細～微粒やや多、白細粒少 やや軟質	床面直上 脚裾 5/12 周 1
5 土師器 甕	高　残 3.5 底　復 7.3 最大　復 10.0	内外面胴部に横～斜位のヘラナデ。外底面に木葉裏面の圧痕あり。混和材の種類や粗い胎土が異質。	5YR4/6　赤褐 粗い　白･赤･透明礫～細粒と金色雲母粗～細片非常に多 やや軟質	カマド火床面上 10cm 底 1/4 周 11、カマド
6 土師器 甕	口　復 18.4 高　残 6.3	内外面ともに胴部ナナメヘラナデ、口～頸部ヨコナデ、外面全体と内面口縁部（外周から 2cm幅の範囲）に煤が付着するので、炉で使った土器と見られる。古墳中期の遺物が混入。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや粗い　黒･透明粒～細粒多、白粒～細粒少 硬質	床上 3cm（周溝底上 6cm） 口 1/12 周、頸 1/6 周 12
7 土師器 壺	口　復 15.0 高　残 11.1 最大　残 20.3	外面は肩部タテナデ、胴部ヨコヘラナデとヨコヘラミガキ、一部の厚い部分に補足的なヘラケズリ。内面胴部は紐積み痕を残し、ヨコヘラナデ。内外面口～頸部ヨコナデ。古墳中期末の遺物が混入。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　黒･透明細砂多、赤粗～細粒少、赤･白礫微 やや硬質	SI-17（床上１～７cm）と SI-19（床上 9cmと貯蔵穴内） 口 1/3 周、頸 1/2 周 2、5 SI-19No.16、貯蔵穴
8 石器 編物石	長　14.0 幅　5.6 厚　4.6	断面が隅丸三角形の細長い自然礫をそのまま利用。加工・使用痕や被熱痕は見られない。重量 612.4g。	5BG4/1　暗青灰 ホルンフェルス	床上 3cm 完形 7
9 石器 編物石	長　15.2 幅　6.1 厚　3.4	断面が隅丸長方形で細長い自然礫をそのまま利用。片面には薄い赤灰色に変色した部分があり、被熱痕と思われる。加工痕は見られない。重量 498.6g。	5Y6/1　灰 ホルンフェルス	床上 3cm 完形 10
10 礫	長　14.3 幅　7.8 厚　2.7	薄い楕円形の自然石。図の一側面と上端部に加工または破損時の小剥離痕がある。被熱痕や付着物は見られない。重量 407.0g。	10Y5/1　灰 やや多孔質気味で硬質の安山岩	床上 1cm ほぼ完形 6
11 石器 砥石	長　残 3.4 幅　2.6 厚　1.7 重　残 17.9	残存下端部付近は幅 2.5 ×厚 1.5cm。上端部付近では幅と厚さが増す。４面を使用して平滑に磨耗する。図の上端面は使用しない。一面の残存面中央部に径４～ 5㎜・深さ 1.5㎜の浅い孔がある。回転穿孔ではなく、工具の先端で抉るように窪めたものと見られる。	2.5GY8/1　灰白 緻密で軟質な流紋岩質緑色凝灰岩	床上 4cm 端部残 4

4 区 SI-18（第 130 図、写真図版 43・44・121）

［位置］ 4 区中央部の台地平坦面、34.0-12.0・12.5、34.5-12.0・12.5 グリッド。古墳後期の SI-76 が北東にある。北西と東に古墳中期の SI-16 と周溝遺構 SX-23、北西と北東に終末期の SI-15・24 がある。古墳後期初めの SI-18 と後期末の SI-19 を終末期の SI-17 が切る。遺物の時期から見て、SI-18 → SI-19 の順に造られたと見られる。南壁で古墳時代の SK-157 を切る。

［規模と形状］ 北西隅を SI-17・19 に切られるが方形と考えられる。中軸は N-6°-W。東西長 5.75m、南北長 5.68m である。壁は外傾し、残存高 0.06 ～ 0.18m。北西隅部が不明だが、床面はおおむね平坦で傾斜はない。掘方底面は緩い凹凸があり、床面から深さ 3 ～ 10cm で、北西隅と南東隅がわずかに深い。ローム粒が多い黄褐色の 5 層でほぼ全体を貼床する。主柱穴は 4 本（P1 ～ P4）。P1 は径 37 × 32 ×深さ 50cm、P2 は径 38 × 32 ×深さ 51cm、P3 は径 36 × 35 ×深さ 54cm、P4 は径 36 × 32 ×深さ 50cm。柱間は P1-P2 間 2.78m、P3-P4 間 2.77m、P1-P4 間 3.02m、P2-P3 間 2.95m で、南北間より東西間が 20cm ほど広い。

壁溝は、南壁から東壁南部と西壁中央の D1 と、北壁カマド西側の D2 を確認した。断面「U」字状で幅 15cm、床面から深さ 4 ～ 7cm。間仕切溝は、西壁際の D4 と東壁際の D3・D5 の計 3 本。貼床除去時に確認したが、建替等がないので、床面で間仕切溝を見落としたのだろう。D5 が主柱穴 P4 に付随し、D3・D4 は主柱穴より中央に寄る。断面「U」字状で長さ 100 ～ 135cm、幅 15 ～ 30cm、床面から深さ 15 ～ 20cm。SI-17 に切られる北西壁際付近にも溝があったかもしれない。貯蔵穴 P5 が北東隅、カマド東側にある。東西軸の隅丸長方形で 153 × 127cm。床面下約 10cm に 10 ～ 20cm の平坦面が全周し、平坦面内側に 114 × 80cm の長方形土坑を掘る。底面中央が若干窪み、壁はやや外傾する。床から底までの深さ 40cm。貯蔵穴周囲に 4 層（蓋などの施設に伴う黒褐色土？）が巡る。

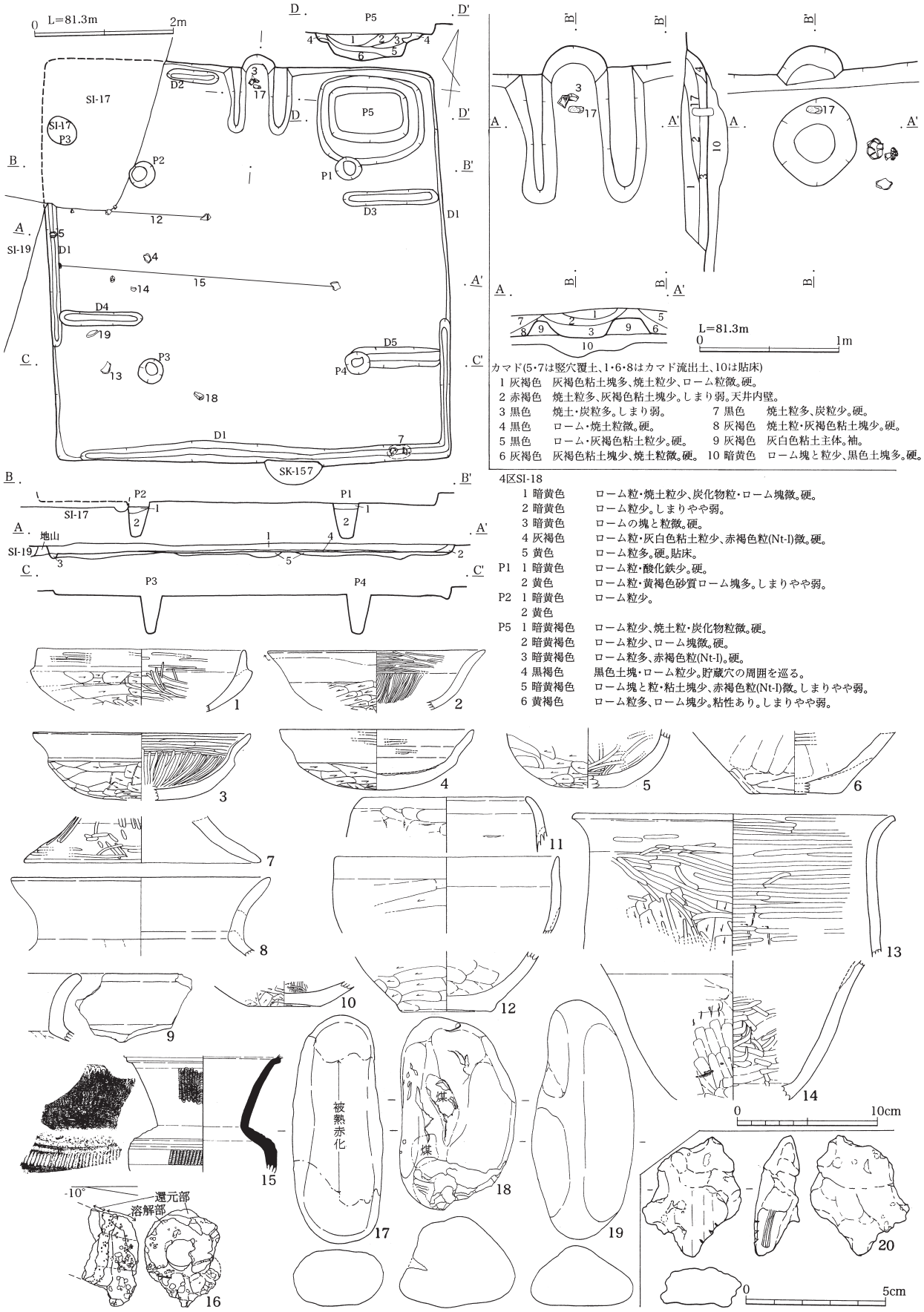
［カマド］ ほぼ北壁中央にある。天井と袖上半は崩れる。両袖幅 90cm、煙道先端から袖先端まで 120cm。灰褐色粘土主体の 9 層で袖を竪穴貼床上に作る。焼土化の著しい 2 層は天井内壁を主とした層、3 層は焼土と炭の多い燃焼部層。火床下の掘方は径約 120cm の鍋底状で、ローム・黒色混土で平坦に埋め戻す。推定掛口下に長 30cm の河原石の支脚を置く。煙道は北壁を約 40cm「U」字状に掘り、火床から緩く曲線的に上がる。

［覆土］ 貼床を含め 5 層ある。中央床面に薄く堆積する 4 層はカマド材と思われる灰色粘土を含み、締まるので貼床かもしれない。

［遺物出土状況］ 杯（4・5）と甑（13・14）が床付近で出土した。東袖の下で土師器甕の胴部が十数片出土し（カマド掘方図）、ハケ調整甕も含む。

［出土遺物］ 遺物は少ない。図示していない 415 片（3,141g）の内訳は、杯 102 片（125g）、高杯 8 片（84g）、壺 8 片（125g）、甕 264 片（2,066g）、甑 33 片（741g）（混入した古墳中期中葉の高杯 1 点を集計から除外した）。

須恵器は陶器山 15 号窯型式で、地方産と言えるような特徴が特にない。1 は漆仕上げの杯としては古い段階のもの。口縁が外反する杯のうち 2 は赤彩。大形の高杯（7）は、立野遺跡の 5 区 SI-51B や SI-61 に例がある（内山 2005）。12 は鉢だが、小形甕のように煮炊き・調理に使った可能性がある。外面を磨く甑（13）は、後期前半以前の特徴。8 は煤が付着するので、カマドではなく炉で使った甕とみられ、中期の混入遺物かもしれない。16 は専用羽口としては細身で、送風角度はあまり急でない。この建物と同じ古墳後期の遺物と考えてよい（穴澤義功氏による御教示）。この建物には鍛冶炉がないので、付近（調査区外？）にある鍛冶遺構から廃棄された羽口であろう。転用羽口は SG10 区 SI-36 や SG5 区 SI-100 などで出土している（第 287 図）。17 はカマドに据えた支脚。焼粘土塊は植物圧痕のある 1 点だけが出土した（20）。



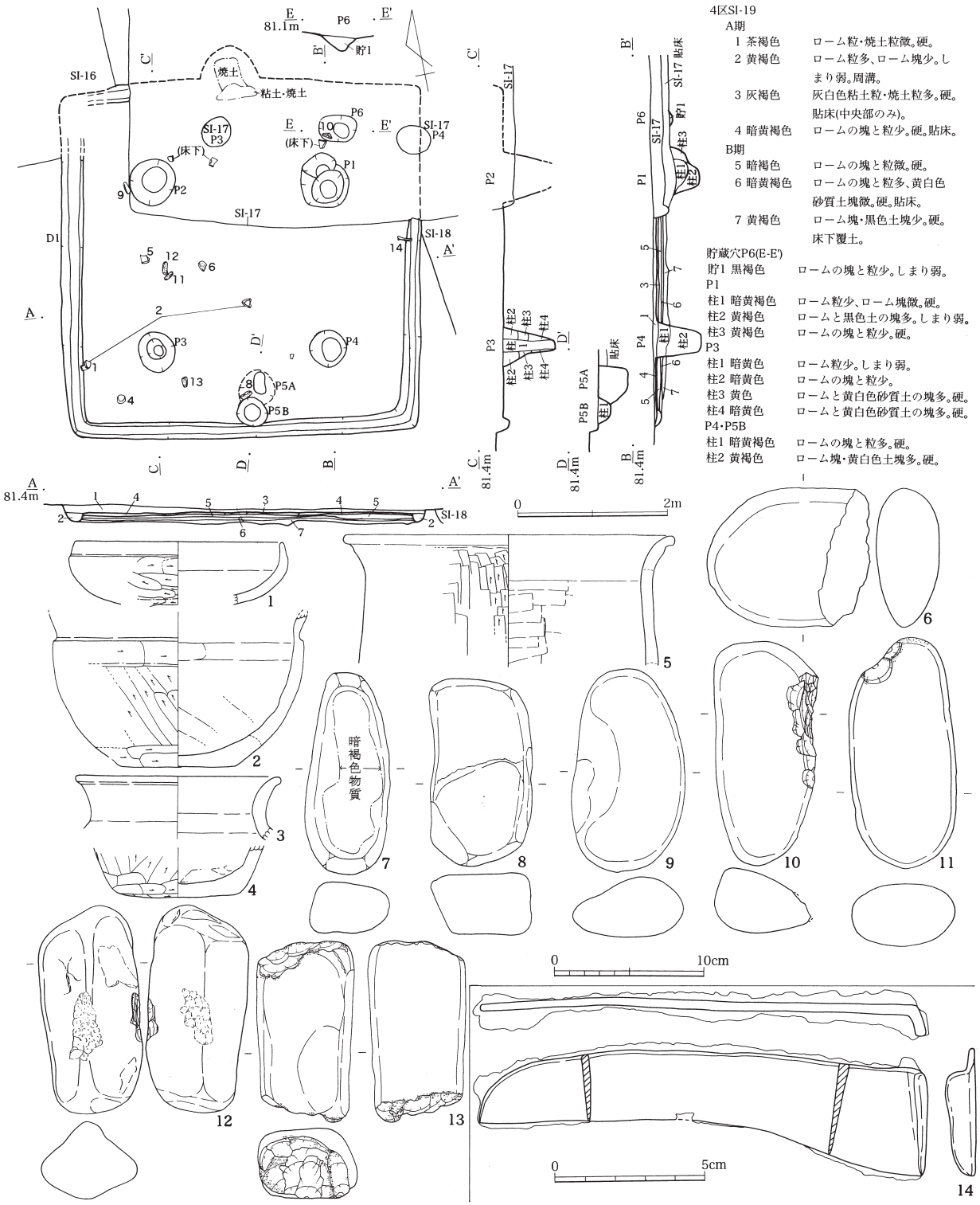
第 130 図　権現山遺跡 4 区 SI-18　遺構・遺物

第 56 表　権現山遺跡 4 区 SI-18　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 14.9 高　残 4.0 最大　復 15.8	体部上半が厚くて下半が薄い。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、外面体部ヨコヘラケズリ。内面体部ヨコナデ後斜～横位ヘラミガキ。外面上半と内面に漆仕上げ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　透明粗～細粒多、白・黒細～微粒少 やや軟質	口～体 1/6 周
2 土師器 杯	口　復 15.5 高　残 4.2	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は体部に放射状と口縁部に横位のヘラミガキ。内面全面と外面口縁部に赤彩あり。	10YR8/4　浅黄橙 やや緻密　白細～微粒多、透明・黒微粒少　硬質	口 1/6 周
3 土師器 杯	口　復 15.4 高　残 4.8	口縁部内面上半はわずかに内彎する。外面は口縁部ヨコナデ後、底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は口縁部に横位と体部に放射状のヘラミガキ。おそらく破片化した後に煤が少量付着。	7.5YR7/4　にぶい橙 緻密　黒微粒微 やや硬質	カマド床上 15cm 口 1/3 周 15、カマド
4 土師器 杯	口　復 13.7 高　4.4	外面口縁部ヨコナデ。底部 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部は磨滅しているがヨコヘラミガキの痕跡あり。内面体部は剝落・磨滅してミガキの有無が不明。	2.5YR6/8　橙 やや粗い　赤粗～細粒多、黒・白・透明細粒少 やや軟質	床上 2cm 底 1/8 周 8
5 土師器 杯	高　残 4.3 底　復 4.8 最大　残 11.6	杯としてはやや厚い。体部と底部の境はやや不明瞭。外底面に 1 ～ 2 方向と体部に横位のヘラケズリ。内面体部多方向ヘラミガキ。	7.5YR5/6　明褐 粗い　白・赤粗～細粒と黒・透明細砂多 やや軟質	床上 2cm 底 3/4 周 1
6 土師器 壺	高　残 4.4 底　復 6.5 最大　残 14.4	底部外面はわずかに上げ底気味。外面はおそらくヘラケズリの後に横～斜位のヘラナデ。内面はナナメヘラナデで、残存する上端部付近にヨコヘラミガキ。現状で被熱痕は見られず、混和材も少ないので、甕ではなく壺になる可能性が高い。	7.5YR5/4　にぶい褐 緻密　黒・透明細粒と赤粗～細粒少 軟質	底 1/3 周
7 土師器 高杯	高　残 3.3 脚裾　復 17.0	大形の高杯の脚部片。内外面の裾部に幅広いヨコナデの後、外面に多方向のヘラミガキ。内面は外面と同じく裾部に幅広いヨコナデ。	5YR7/6　橙 緻密　赤粗～細粒と黒・透明細粒少 やや軟質	南東部床上 9cm（周溝底上 14cm） 脚裾 1/6 周 13
8 土師器 甕	口　復 18.4 高　残 5.5	外面肩部にナデまたはヘラナデ後、口縁部内外面ヨコナデ。内面肩部もヨコナデ。外面に煤が少量付着。	10YR5/4　にぶい黄褐 粗い　白・黒・透明細～微粒多 やや軟質	貼床出土の 3 片が接合 口 1/12 周、頸 1/6 周 貼床
9 土師器 甕	口　復22～26 高　残 4.9	外面口～頸部ヨコナデ。内面肩部ナナメナデ後、口～頸部ヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　透明・黒細～微粒やや多、白細粒少 軟質	口 1/12 周、頸 1/8 周
10 土師器 甕	高　残 1.8 底　5.2	外底面は多方向ヘラケズリでわずかに上げ底状。外面胴部ナナメヘラケズリ。内面は多方向のヘラケズリ後にヘラミガキ。外底面は少し被熱赤化し、内底面は暗褐色状に汚れる。	2.5YR5/6　明赤褐 やや粗い　白礫～細粒と黒・透明細粒多 やや硬質	底 1/2 周
11 土師器 鉢	口　復 11.6 高　残 4.0 最大　残 14.2	外面口縁部と内面にヨコナデ後、外面体部に横～斜位のナデ。体部は橙色、口縁部は浅黄橙色の異質の粘土で成形。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒と透明細～微粒少 やや硬質	口 1/6 周
12 土師器 鉢	口　復 16.0 高　残 9.8 底　6.4 最大　残 16.2	破片が不足し、胴中位を接合できない。外底面は 1 方向ヘラケズリ。外面体部は上端と下端がナデで他はヨコヘラケズリ。内面下半部ナデ、内面上半と外面口縁部にヨコナデ。外面体部下位～底部に被熱痕。	10YR6/4　にぶい黄橙 粗い　白・灰色礫少、白・黒粗～細粒少 軟質	床上 1 ～ 3cm。SI -17 の 1 片も接合 口 1/6 周、底 3/4 周 3、9、SI-17
13 土師器 甑	口　復 23.0 高　残 10.1	外面頸部ナデと胴部ヘラケズリの後、口縁部ヨコナデと胴部横～斜位ヘラミガキ。内面は胴部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデの後、ヨコヘラミガキ。	10YR4/6　褐 やや緻密　白・透明粗～細粒やや少、黒細粒少 やや硬質	南西部床上 2cm 口 1/6 周、頸 1/4 周 11
14 土師器 小形甑	高　残 9.9 最大　復 19.0	外面は丸底で内面は平底気味。外面は胴部に縦位と頸部に横～斜位のヘラナデ。胴下半の外面に 1 段 L の縄の圧痕あり。内面体部はナナメヘラナデ後、横～斜位のやや密なヘラミガキ。内底面は円周方向にナデた後、1 方向（?）のヘラミガキ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　透明・黒微粒と赤粗～細粒少 やや硬質	床上 1cm 底 1/6 周 7
15 須恵器 **壺**	口　復約 12 高　残 8.5	外面口縁部下端に強い突線 1 本、肩部に稜 2 本。頸部は 33 本前後の櫛描波状文を、右回転（時計回り）のロクロにより左から右へ施文する。体部は 12 本前後の櫛刺突文を、左から右へ施文する。外面肩部と内面口～頸部に降灰あり。外面に黒色の均質な自然釉。破面は赤灰色。	N3/（B）　暗灰 やや緻密　白細粒少 硬質	床上 1 ～ 3cmが接合 頸 5/12 周、体 1/6 周 5、14
16 土製品 専用羽口	長　残 4.6 幅　残 5.1 厚　5.3 孔　2.1 ～ 2.3	細身の専用羽口の先端部破片。体部側は全周が破面となっている。通風孔部の径はほぼ直孔でわずかに歪んでおり、2.1cm× 2.3cmを測る。先端部は全体が溶損してガラス質の滓に覆われており、顎部には粘土質の溶解物がコブ状に突出する。また、先端部から見て右側の肩部には 2cm程の範囲で銹色の滓が形成されている。羽口の身厚は 1cm ～ 1.4cmの幅を持つ。胎土はやや密度の低いザラついたもので、一部に滓が含まれている。従って、鍛冶工房で製作された可能性が高い。側部の先端部と体部の境には何らかの粘土質の物体で押さえられていたためか筋状の被熱色の変化がある。図示した個体は 76.9g。小破片を加えると 80.9g。鍛冶関連遺物構成№ 74。	7.5YR8/3　浅黄橙 やや緻密　白・透明細粒少 軟質 磁着度　2 メタル度　なし	床上 1cm 一部欠、端部残 6
17 支脚	長　16.3 幅　6.4 厚　4.2	中央付近が被熱により強く赤変している。上下端もわずかに赤味を帯びる。加工痕は見られない。重量 583.8g。	2.5Y6/2　灰黄 やや多孔質気味で硬質な安山岩	床上 6cm 完形 18
18 礫	長　残 13.7 幅　8.1 厚　6.5	自然の円礫。図の下端は人為的な剝離ではない可能性が高い。図示した 3 箇所に暗灰色の煤が付着。加工・使用痕は見られない。重量 899.2g。	5Y6/1　灰 緻密で硬質な硬砂岩	床上 1cm以内 一部欠 12
19 石器 編物石	長　17.1 幅　7.2 厚　4.6	断面隅丸三角形の自然礫をそのまま利用。図の上半部で左側縁が凹んでいるが、中央部ではないので紐を掛けてもバランスはあまり良くない。加工痕・使用痕や被熱痕は見られない。重量 775.0g。	2.5Y6/2　灰黄 緻密で硬質な安山岩	床上 5cm 完形 10
20 土師質 焼粘土塊	長　3.9 幅　3.4 厚　1.6	不定形にこねた粘土が焼成されたもの。左図の面の下部は縦位にナデたようであるが、他は調整した痕跡なし。図示した側面に草本植物の茎と見られる圧痕あり。重量 10.9g。	7.5YR6/4　にぶい橙 緻密　赤細粒と黒微粒微 軟質	完形

４区 SI-19（第 131 図、写真図版 43・44）

［位置］ ４区中央部の台地平坦面、34.0・34.5-12.0 グリッド。北西３m に古墳終末期の SI-15 がある。北東隅が古墳後期初めの SI-18、北西隅が古墳中期の SI-16、北部が古墳終末期の SI-17 と重複する。SI-16 を 19 が切る。また、SI-18 と SI-19 を、SI-17 が切る。遺物の時期から見て、SI-18 → SI-19 の順に造られたと見られる。SI-19 の北部床面・壁面は、SI-17 に切られてほとんど消滅し、カマドおよび貯蔵穴 P6 の最も深い部分だけが SI-17 の貼床下に僅かに残る。



第 131 図　権現山遺跡 4 区 SI-19　遺構・遺物

［規模と形状］北半が SI-17 に切られるが、方形と推定される。中軸は N-11°-E。東西長 4.75m、南北は北壁が SI-17 に切られているが推定長 4.8m。壁はやや外傾し、残存高は西側で 20cm、東壁は 4 cm。床面はおおむね平坦である。貼床が 2 枚ある。新期貼床は中央が粘土・焼土の多い 3 層、周囲がロームの多い 4 層で、2 ～ 3 cm の厚さで硬く締まる。その下に 2 ～ 6 cm の古期覆土 5 層を挟んでローム粒と塊の多い 6 層を確認した。掘方底に緩い凹凸があり、ローム塊と黒色土が多い 7 層をほぼ全体に充填する。古期貼床と新期貼床の建物の差は、P1 と入口ピット P5 の据え換えが考えられる。ただし旧期入口ピット P5A は断面図では新期貼床に掘り込むので、新期に伴う可能性もある。

主柱穴は 4 本（P1 ～ P4）。P1・2 は SI-17 掘方底で確認した。P1 は径 50 × 48cm、深さは SI-17 の床面から推定 60cm。P2 は径 61 × 59cm で深さ不明、P3 は径 53 × 48 ×深さ 68cm、P4 は径 49 × 47 × 深さ 62cm、P3 では径約 15cm の柱痕がある。柱間は P1 の旧柱穴で測るとほぼ 2.3 mの等間隔である。P1 新柱穴は若干南に移動し、P1-P4 間が 2.15m で狭い。入口ピットと見られる P5 にはＡ・Ｂの２時期があり、貼床の下で北側に古い時期の P5A が認められた。ただしＡ・Ｂの新旧関係は土層断面では確定できず、同時存在の可能性もある。

壁溝 D1 を床面遺存部で確認した。北壁中央のカマド周辺を除き全周すると思われる。断面「U」字状で幅 20 ～ 25cm、床面から深さ 6 ～ 11cm。貯蔵穴（？）は、SI-17 の貼床除去後の掘方底面で、SI-19 の北東主柱穴の北側に P6 を確認した。41 × 31cm の楕円形で、SI-17 の掘方底面から深さ 21cm の浅い窪みである。底面の凹凸などから掘方ともみられるが、位置関係などから SI-19 の貯蔵穴の可能性がある。

［カマド］SI-17 の貼床除去後の掘方底面で、焼土及び焼土と粘土が混じった部分を確認した。北壁中央に位置することから、SI-19 のカマドの痕跡と考えられる。

［覆土］覆土は薄い単層で、ローム・焼土粒を微量含む。

［遺物出土状況］１は同一個体の３片が SI-17 の埋土と貼床中にも混入していたが、SI-19 の貯蔵穴から出土したので SI-19 の遺物と判断した。編物石（10）・磨石（６）などは床面付近か、そこから貯蔵穴上部へ流入して出土した。

［出土遺物］遺物は少ない。図示していない 228 片（1,843g）の内訳は、杯 63 片（256g）、高杯 15 片（123g）、鉢５片（55g）、壺２片（18g）、甕 135 片（1,300g）、甑８片（91g）である。SI-19 より古い土器もかなり混入していて、SI-16 や SI-18 から混入したものかもしれない。現地調査時の図面によると臼玉も 1 点出土しているが、所在が確認できなかった。１は漆仕上げの鉢。５は口縁部直下まで削る甕。磨石（６）・編物石？（７～ 10）・敲石（11 ～ 13）などの石器が多い。編物石は、４区では SI-24 などにある。古墳時代の鉄鎌は、周辺集落では磯岡１区、立野５区、権現山遺跡（高速道路調査）Ａ区・Ｂ区、砂田４区・５区などにあり、弱い曲刃形の類品は磯岡北９号墳で出土した。

第 57 表　権現山遺跡 4 区 SI-19　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 4.2 最大　復 14.6	外面の口～体部境に浅い段。外面体部ヨコヘラケズリ後、外面全面かまたは中位以上に漆仕上げ。内面は全面ヨコナデ後、漆仕上げ。 [注記]SI-17 3、貼床　SI-19 貯穴	7.5Y5/1　灰 やや緻密　白・黒・透明細粒少 やや硬質	SI-19 貯蔵穴で 1 片。 SI-17 に 3 片混入（貼床中・床上 3cm・位置不明） 口 1/6 周 注記は左欄
2 土師器 鉢	口　推 17～18 高　残 10.2 底　7.6	体部は斜位の後に上下端を横位ヘラケズリするが、器面磨滅のため調整不明の部分も多く、底部も調整不明。内面ナナメナデ後、内外面口～頸部ヨコナデ。外面上位と内全面に漆仕上げ。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや粗い　白・黒・透明粗～細粒少、赤礫微 やや軟質	中央部床直上と東部床上 4cmが接合 底 3/4 周 2、10
3 土師器 小形甕	口　復 13.6 高　残 4.2	口～頸部内外面ともヨコナデ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤礫～粗粒と白・透明・赤細～微粒少 硬質	口 1/6 周 貯穴
4 土師器 甕	高　残 3.3 底　8.2	外面は胴部タテヘラケズリ、底部中央にナデまたはヘラナデ、底面外周と胴部下端にヨコヘラケズリ。内面はヨコヘラナデで、器面が凹凸状になる細かい剝離が多い。やや被熱した可能性もある。	10YR6/4　にぶい黄橙 粗い　白・灰色礫～粗粒多、黒・透明・赤・灰色粗～細粒やや多　軟質	床上 6cm 底全周 1

5 土師器 甕	口　復 22.0 高　残 8.7	外面は口縁部ヨコナデ後、頸～胴部タテヘラケズリ。内面は胴部ヨコヘラナデ後、口～頸部ヨコナデ。	5YR6/6　橙 粗い　赤粗～微粒と白粗～細粒多、黒・透明細～微粒少 硬質	床上 3㎝ 口 1/12 周、胴上半 1/6 周 4
6 石器 磨石	長　残 10.8 幅　9.2 厚　4.4 重　残 550.8	片面の丸味が対面よりも強い。おそらく両面を使用したと思われ、強く突出した方の面がより磨滅しているようにも見えるが、明瞭に使用範囲を図示できるほどではない。外周には幅を持つ面がなく、使用もしていないと思われる。被熱痕や欠損後に使用した痕は見られない。	N5/（B）　灰 多孔質でやや硬質の安山岩	床上 1㎝ 端部欠 9
7 石器 編物石？	長　13.4 幅　5.6 厚　3.8	断面が隅丸方形気味の自然礫を使用。図示した面にだけ暗褐色の薄い汚れ（付着物）が見られる。被熱痕や加工・使用痕は見られない。重量 393.9g。	5Y6/2　灰オリーブ わずかに多孔質気味だが硬質な安山岩	完形
8 石器 編物石？	長　12.5 幅　6.7 厚　4.2	図の上半部（厚さ 3.5㎝）よりも下半部（厚さ 4.2㎝）が少し厚い形の扁平な自然礫をそのまま利用。加工・使用痕や被熱痕は見られない。重量 597.2g。	5Y5/2　灰オリーブ 緻密で硬質な石英玢岩	床上 2㎝ 完形 12
9 石器 編物石？	長　12.5 幅　7.4 厚　4.1	扁平気味で図示した面がやや中高になる自然礫をそのまま利用。加工痕・使用痕・被熱痕は見られない。重量 577.2g。	2.5Y6/1　黄灰 硬質でやや緻密な安山岩	床直上 完形 8
10 石器 編物石？	長　14.8 幅　6.9 厚　4.4 重　622.7	断面が三角形気味の自然礫を利用。図の右側縁の両面に剝離が加えられている。この石を敲石に使った結果の破損と見るよりも、この石を成形した痕と考えた方がよさそうである。被熱痕や磨耗痕は見られない。	7.5Y6/1　灰 緻密で硬質な流紋岩	貯蔵穴底上 17㎝（床面より下 2㎝） 完形 18
11 石器 敲石	長　15.3 厚　4.3 重　656.6	自然礫をそのまま利用。図の左上部はもともと隅角が落ちていた形状の部分に、更に剝離が２回と、その周辺に細かい敲打による磨耗痕が見られる。これらの剝離（破損）より後に被熱したらしく、全体が均一に暗赤灰色味を帯びている。	5YR5/1　褐灰 硬質でやや緻密な安山岩	床直上 ほぼ完形 5
12 石器 敲石	長　13.8 幅　6.8 厚　5.3 重　608.7	断面が不整四角形の柱状の自然礫をそのまま利用。中央部の稜線上の３箇所を敲打に使用。図の側縁部は剝離面をなし、左図の面はやや強い敲打による細かい剝離、右図の面はやや弱い敲打による浅い傷状の痕跡。被熱痕は見られない。	2.5Y5/2　暗灰黄 緻密・硬質で緑色味を帯びた石英玢岩	床直上 完形 6
13 石器 敲石	長　残 12.0 幅　6.4 厚　4.4	自然礫の両端を強い打撃に使用しているので、繰り返し急角度の剝離が生じて、また稜線上の突出した部分がかなり磨耗している。剝離後に全体がやや被熱して橙色を帯びる。残存重量 566.7g。	2.5Y5/1　黄灰 緻密で硬質な石英斑岩（石英斑晶径５～８㎜）	床上 1㎝ 完形 11
14 鉄製品 鎌	長　14.9 幅　2.0 ～ 3.6 厚　0.2 ～ 0.3 重　66.6	非常に弱い曲刃形。棟部の厚さは、基部よりも先端側がわずかに薄くなる。基部は約 100°～ 105°の角度で鈍角に曲げる（背面図参照）。折り返し部の高さは最大８㎜。表裏両面ともに柄木の痕跡は見られない。		床上 2㎝ ほぼ完形 14

４区 SI-20（第 132 図、写真図版 44・45・121）

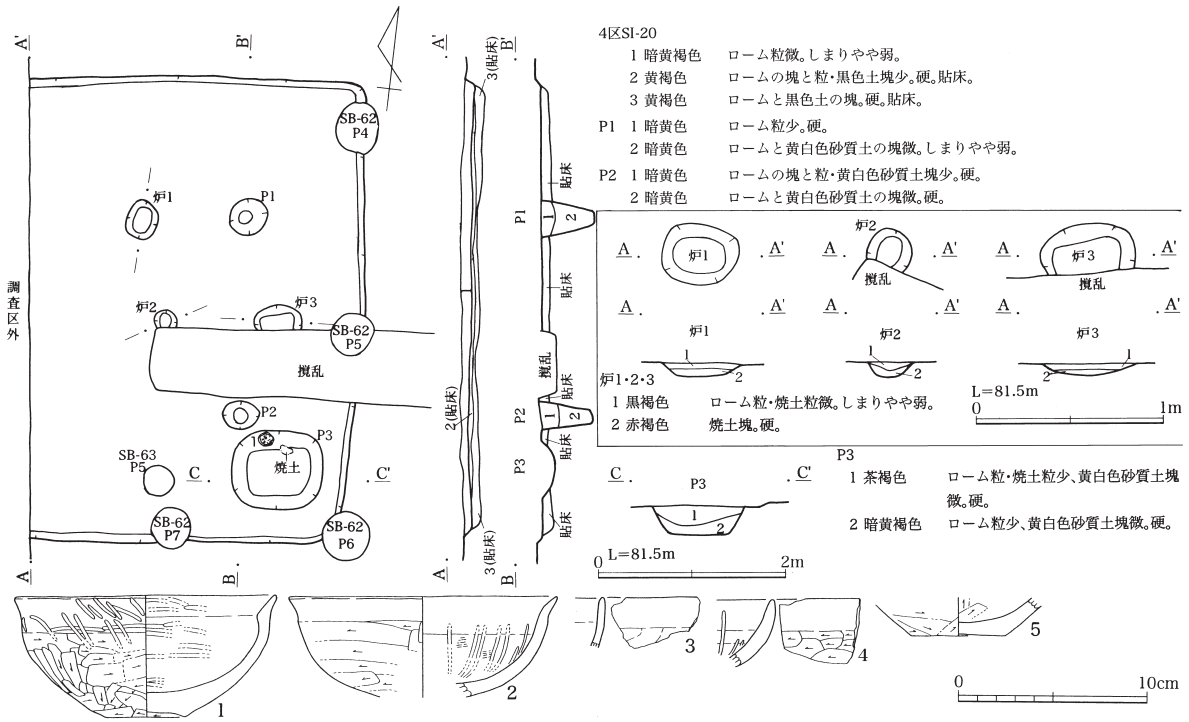
［位置］ ４区中央部の台地平坦面、34.0-11.5 グリッド。古墳中期末～後期初めの遺構は、SI-16・18 ～ 19 が北東に、円筒形土坑 SK-64 が南東にある。古墳時代と考えられる SB-62・63 の柱穴により南部と東壁・南壁が切られ、東半が長方形撹乱坑に切られる。

［規模と形状］ 西側が調査区外で不明だが、東側の柱穴配置と調査範囲から、東西の柱間が南北の柱間より広いと予想され、若干東西に長い方形と考えられる。中軸は N-7°-W。南北長 4.93m、東西は残存長 3.54m。壁は直線的に外傾し、残存高 0.04 ～ 0.11m。床面はほぼ平坦である。掘方は床面から深さ６～ 12cm で、中央部より壁際がわずかに深い。ローム小塊と黒色土の混じる３層で埋め戻し、さらにローム塊を少し含む黄褐色の２層を壁際以外に２～３cm 厚で貼る。主柱穴 P1 と P2 の他に、対応する西側の主柱穴２本が調査区外にあると思われ、４本主柱と推定される。P1 は径 42 × 38 ×深さ 56cm、P2 は径 39 × 30 ×深さ 58cm。柱間は P1-P2 間 2.10m。同じ間隔で西側に主柱穴がないので、南北間より東西間が若干広いと予想され、建物はわずかに東西に長い方形と考えられる。貯蔵穴 P3 は南東壁際にある。東西軸の隅丸長方形で 102 × 78cm、床面から深さ 30cm。底面は 67 × 48cm の長方形で壁はやや外傾する。覆土は下層ほどローム粒が多い。

［炉］ 地床炉が３箇所ある。炉１は北側主柱穴ラインのやや内側にあり 40 × 32cm の楕円形。炉２・炉３は長方形撹乱坑（所謂イモ穴）に切られる。炉２が中央やや東寄りで 24 ×推定 30cm、炉３が東側主柱穴ラインの中央やや壁寄りに位置し、50 ×推定 40cm の楕円形である。いずれも床面を６～ 10cm 掘り、下層は焼土化し硬化赤変する。貼床等で機能停止させた様子はなく、新旧関係は認められない。炉を複数持つ建物は、４区では SI-20 と 25、SG1 区では SI-1 と 69 がある。周辺では南東 350m の磯岡遺跡１区 SI-55 や北方の立野遺跡５区 SI-41 に例があり、通常の竪穴とはかなり異なる特徴を持っている。また、４区 SI-10 は炉とカマドを１箇所ずつ持っている。

［覆土］ 覆土はローム粒を微量含む暗黄褐色土の単層。

［遺物出土状況］ 主に貯蔵穴で出土した。１は貯蔵穴底面からかなり浮いている。SI-20 東壁を切る撹乱（旧名称 SK-61）および SB-62・63 との間で接合する遺物はなかった。



第 132 図　権現山遺跡 4 区 SI-20　遺構・遺物

第 58 表　権現山遺跡 4 区 SI-20　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　13.9 高　6.4 底　3.9	内面口～頸部境に強い稜あり。外面体～底部は多方向ヘラケズリで凹み底。外面口縁部と内面はヨコナデ後にやや密なヘラミガキ。内面に細かい剝落が非常に多い。	5YR4/6　赤褐 やや粗い　白・灰色粗～細粒多、黒・透明細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 8cmで正位 ほぼ完形 口 11/12 周、底全周 1
2 土師器 杯	口　復 14.2 高　残 5.3	外面は口縁部ヨコナデ後、体部に軽いヨコヘラケズリ。内面は体部ヨコハケ後ヨコナデ、口縁部ヨコナデ、体部に疎らな放射状ヘラミガキ。内外全面赤彩（10R4/4 赤褐色）。外面口縁部に黒色付着物あり（煤か ?）。丁寧な製品。	2.5Y8/2　灰白 緻密　白・透明細粒少 やや軟質	貯蔵穴内焼土中 1 片と位置不明 2 片が接合 口 1/6 周 貯穴焼土中
3 土師器 杯	口　復 12～14 高　残 2.7	内外面体部ナデ後、内外面口縁部ヨコナデ。ヘラミガキを行っていないが内面は意図的に炭素吸着させて黒色処理していると思われる。非常に薄い（厚さ 3.0 ～ 3.5㎜）。	2.5YR4/6　赤褐 やや緻密　白・灰色礫～細粒微　硬質	貯蔵穴 口 1/12 周 貯穴
4 土師器 杯	口　復 14～16 高　残 3.5	外面体部ヨコヘラケズリ後、外面口縁部と内面ヨコナデ。内面にごく疎らな放射状ヘラミガキ。古墳後期末の遺物が混入。	10YR6/4　にぶい黄橙 緻密　白・黒・透明細～微粒少　やや軟質	貯蔵穴 口 1/12 周 貯穴
5 土師器 甕	高　残 2.0 底　復 5.0	外底面はおそらく多方向のヘラナデ調整で平滑にする。外面胴部ナナメヘラケズリ。内面底部多方向ヘラケズリ。底部の残存する上端付近の内面に黒色のコゲ痕が少量残る。	2.5YR5/8　明赤褐 やや緻密　白・黒細～微粒多、透明細粒少 やや硬質	貯蔵穴出土 底 5/12 周 貯穴

［**出土遺物**］遺物は極めて少ない。図示していない 65 片（524g）の内訳は、杯 9 片（48g）、高杯 6 片（67g）、甕 50 片（409g）である。残存度の高い杯（1）は中期後葉で、カマド普及期直前の遺物。貯蔵穴内外で破片が出土した外反口縁・内外面赤彩の杯（2）は後期初頭に多く、中期では異例で、深身の形状もやや異質なので搬入品であろうか。3 は内面を意図的に炭素吸着で黒色処理した可能性がある。7 世紀の 4 は混入品であろう。

4 区 SI-21（第 133 図、写真図版 45・121）

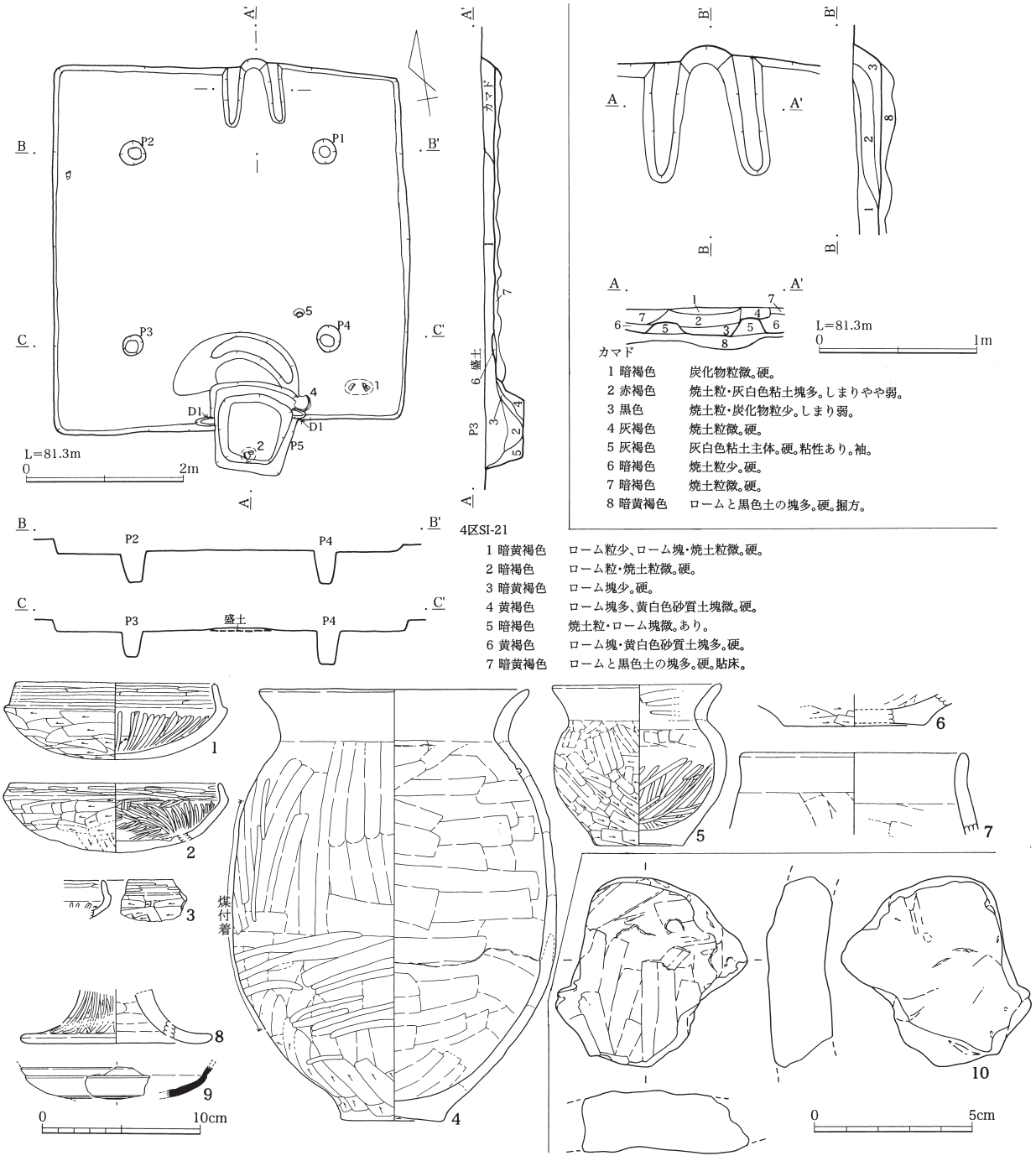
［**位置**］4 区中央部南寄りの台地平坦面、33.0-11.5・12.0、33.5-11.5・12.0 グリッド。南と西に古墳中期の SI-22・130 がある。東側に建物はない。重複はない。

［**規模と形状**］西壁（4.6m）が東壁（4.3m）より約 30cm 長いため若干歪むが、ほぼ方形。中軸は N-8°-E。東西長 4.51m、南北長 4.55m。壁は外傾し、残存高 0.08 ～ 0.18m。地形が東に傾くため、西壁より東壁が低い。床面はおおむね平坦で傾斜しない。張出ピットの北側に三日月状の高まりがある。ロームを主と

した黄褐色の６層で、長 160 ×幅 35 ×高さ３cm ほどのわずかな高まりである。掘方底は緩い凹凸があり、床面から深さ３～ 11cm。ローム塊と黒色土の多い暗黄褐色の７層でほぼ全体を貼床する。

主柱穴は４本（P1 ～ P4）。P1 は径 31 × 29 ×深さ 44cm、P2 は径 33 × 30 ×深さ 38cm、P3 は径 27 × 24 ×深さ 32cm、P4 は径 33 × 30 ×深さ 41cm。柱間は P1-P4 間 2.37m、P2-P3 間 2.42m、P2-P1 間 2.39m、P3-P4 間 2.47m のおおむね等間隔で、ほぼ方形に配置する。

張出ピット P5 が南壁のやや東部にある。北辺が南辺よりやや長い隅丸方形で、南壁から約 60cm 出る。南北長 123cm、南辺幅 80cm、北辺幅 110cm、床面から深さ 35cm。南北軸は竪穴の軸より若干東に振れる。張出ピット北壁の、床から７～８cm 下に幅 10cm 前後の平坦面がある。ピット底面は 70 × 65cm の



第 133 図　権現山遺跡 4 区 SI-21　遺構・遺物

ほぼ平坦な方形で、壁は外傾する。覆土２～５層は自然堆積。南壁の張出ピットは、４区では SI-7 と SI-14 に例がある。張出ピット両側の南壁際に長さ 20 ×幅 10 ×床面から深さ５cm ほどの壁溝 D1 を確認した。

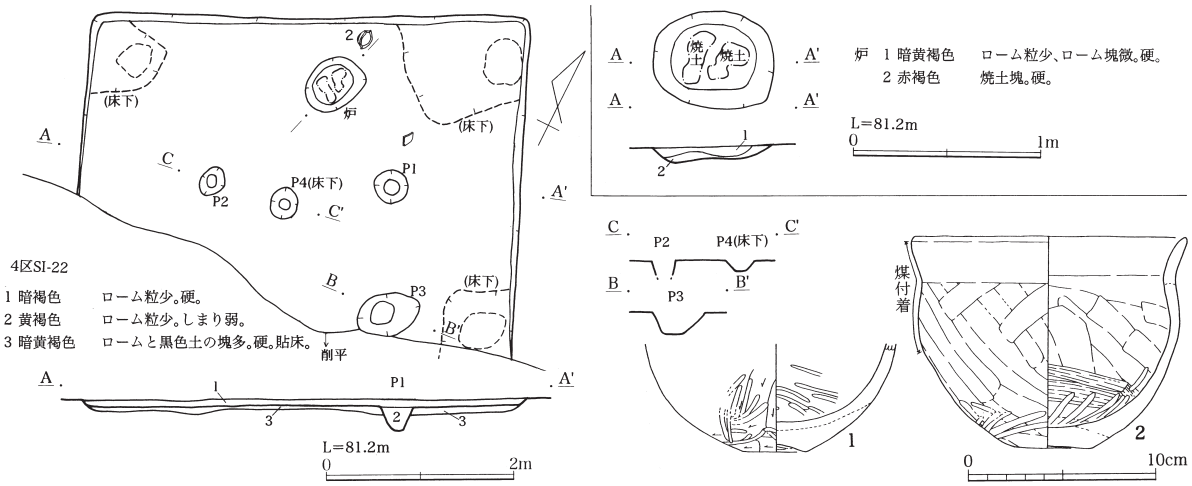
［**カマド**］北壁の中央からやや東寄りにある。カマド主軸は建物軸より若干西に振れる。天井や袖上半は崩れる。両袖幅 78cm、煙道から袖先端まで 84cm。灰色粘土主体の５層で袖を竪穴貼床上に作る。袖内面は被熱・赤変部が多い。火床はほぼ平坦で、焼土と炭を少量含む３層が煙道から流入した上に、天井が崩れた２層が堆積する。煙道は北壁を若干「U」字状に掘り、壁よりなだらかに上がる。

［**覆土**］張出ピットの覆土２～５層を除くと、基本的にローム粒・小塊と焼土粒を含む暗黄褐色土の１層で埋まる。

［**遺物および出土状況**］遺物は少ない。この建物に伴うと考えられる杯や甕が、床面付近や張出土坑にいくつかある。図示していない 154 片（1,260g）の内訳は、杯 37 片（275g）、高杯 16 片（92g）、甕 83 片（598g）、壺 18 片（295g）。口縁部外面を磨く後期前半頃の土師器杯がみられる。破片の大きい１や２がこの建物に伴うであろう。２は炭素吸着と漆仕上げを両方行った可能性があり、SI-15 にも類例がある。土師器杯は須恵器杯身模倣形が主体である。図示していない破片では半球形杯が１点あり、その胎土は２と類似して黒色味を帯びる。土師器甕（４）は外面に煤が多く、炉で使ったような状況。５は短頸の小形甕。須恵器無蓋高杯（９）は群馬県太田金山窯産の可能性がある。10 は厚手板状の焼粘土塊破片。８は古墳中期末の遺物の混入品。

第 59 表　権現山遺跡 4 区 SI-21　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 12.7 高　4.8 最大　復 14.2	外面体部ヨコヘラケズリ。内面体部はヘラナデ後、上半部をヨコナデし、放射状ヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面上半と内面に漆仕上げ。おそらく使用により口縁端部が磨耗。	10YR5/3　にぶい黄褐 緻密　透明微粒多、白・透明粗粒微 やや軟質	床直上の２片が接合 口 1/3 周 3、4
2 土師器 杯	口　13.3 高　4.4 最大　14.2	外面口～体部境に浅い段と強く突出する稜あり。内外面口縁部ヨコナデ後、外面体部ヘラケズリ（底部はおそらく１方向）。内外面口縁部に横位と内面体部に斜位の密なヘラミガキ。外面上半と内面に漆仕上げをしていると見られるが、その前に炭素吸着も行って全面を黒くしている。	10YR4/2　灰黄褐 やや緻密　白細～微粒・透明微粒多 やや軟質	張出土坑の底上 11cm 口 3/4 周 6、入口 Pit
3 土師器 杯	口　復 14～16 高　残 2.4 最大　復 15～17	小破片なので復原径は参考程度。外面体部ナデ後、上端部を残して他をヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面にヨコナデ後、口縁部に横位と内面体部に放射状のやや密なヘラミガキ。漆仕上げなどは見られない。	10YR6/4　にぶい黄橙 緻密　白・透明微粒微 やや軟質	口 1/12 周
4 土師器 甕	口　復 17.1 高　27.2 底　6.6 最大　復 20.4	中～下位の境付近に積み上げ休止部あり。外面胴部ヘラナデ後、下端部タテヘラケズリと休止部付近に幅広で横位のミガキまたはヘラナデ。外底面は多方向ヘラケズリで凹底状。内面胴部ヨコヘラナデ。内外面口～頸部ヨコナデ。外面中位（底上６～ 20cm）に煤が多い。内面下半（底上２～ 11cm）にコゲ痕あり。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや粗い　白・黒・透明粗～細粒多、白・灰色礫と赤粗粒少 やや軟質	床面直上 口 1/6 周、頸 1/2 周、底全周 5
5 土師器 壺	口　10.7 高　10.1 底　5.5 最大　10.8	外底面はおおよそ１方向ヘラケズリでやや凹む。外面体部は横～斜位ヘラケズリ後、上半にナナメヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面体部はヘラナデ後、下半部ナナメヘラミガキ、口～頸部ヨコナデ。被熱痕や付着物は見られない。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・灰色・半透明礫～細粒多、透明細～微粒と赤細粒微 やや硬質	床上 0.3cm 口 1/4 周、頸～底全周 2
6 土師器 壺	高　残 2.0 底　復 8.8	外底面は多方向ヘラケズリでわずかに凹み底。外面胴部下端ヨコヘラケズリ。内面はナナメヘラナデで平滑に仕上げる。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・黒細～微粒多、透明微粒少 やや軟質	底 1/4 周
7 土師器 小形甕	口　復 13.8 高　残 5.1	残存部分が少ないので復原径は参考程度。体部内外面にナナメヘラナデ後、口縁部内外面ヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　赤粗～細粒と白・黒・透明微粒少 やや軟質	口 1/12 周
8 土師器 高杯	脚裾　復 12.2	脚柱部外面タテヘラケズリと内面ナデの後、脚裾部内外面ヨコナデ。外面に密なタテヘラミガキ。古墳中期末の遺物が混入。	2.5Y5/6　明赤褐 やや緻密　赤細粒多、白・透明微粒微 やや軟質	脚裾 1/3 周
9 須恵器 無蓋高杯	高　残 2.1 体部径　復約 12	小破片なので復原径は参考程度。体部上位外面に浅い段が２箇所あり。外底面にカキメを施す。ロクロ回転方向は不詳。関東地方産。	5Y5/1　灰 やや粗い　白粗～微粒やや多 硬質	体 1/6 周
10 土師質 焼粘土塊	長　残 6.0 幅　残 6.1 厚　2.0 重　残 53.0	左図の面はやや凸面で、主に図の縦位方向のヘラナデ。右図の面は凹面状で、小さな凹凸はあまりなく比較的平滑。両面と各周の破面との間で色調にあまり差がないので、焼成されてから外周が破損したものというよりも、焼成前か焼成中に板状の粘土に亀裂が生じて現状の破片になった可能性がある。	7.5YR7/4　にぶい橙 緻密　白・赤・黒・透明微粒少 軟質	外周全体が破面



第 134 図　権現山遺跡 4 区 SI-22　遺構・遺物

第 60 表　権現山遺跡 4 区 SI-22　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	高　残 5.7 底　3.4 最大　残 13.2	外底面はヨコヘラケズリで明瞭な凹底状にし、部分的にヘラミガキ。外面体部ヘラケズリ（中位タテ・下位ヨコ）の後、多方向のヘラミガキ。内面体部ヨコヘラナデ後ナナメヘラミガキ。外面下位に径 12cm大以上の大黒斑あり。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　白細～微粒多、赤細～微粒少、透明・黒微粒少 やや硬質	胴中位 1/6 周、底全周
2 土師器 小形甕	口　14.3 高　11.1 底　4.4	外面体部ナナメヘラナデ後に体部下位ナナメヘラミガキ、外底面に雑な 1 方向ヘラケズリ。内面体部ナナメヘラナデと下位に弱いヨコハケの後、下位にタテヘラミガキ。内外面口～頸部ヨコナデ。外面上半（口縁部から下 6cm）に煤多量。内面中位（口縁から下 5 ～ 8cm）に暗褐色のコゲ痕あり。	7.5YR5/3　にぶい褐 やや粗い　透明細～微粒多、白・黒・赤細粒少、灰色礫微　軟質	床面直上 口 5/6 周、頸～底全周 1

４区 SI-22（第 134 図、写真図版 45・121）

［位置］ 4 区中央部南寄りの台地平坦面、33.0-11.5・12.0 グリッド。古墳中期の SI-130 が北西 5 m にある。北に古墳後期の SI-21 が近接する。南側は確認面下 40cm 前後まで削平され、その範囲は本建物以南の台地面全体に及ぶ。現状では 4 区で最も南の建物だが、さらに南にも建物が存在した可能性はある。重複はない。

［規模と形状］ やや歪んだ方形ないしは長方形で、中軸は N-26°-W。東西長 4.77m、南北は東壁で残存長 3.63m。壁は外傾し、残存高 0.05 ～ 0.07m で浅い。床面はおおむね平坦である。掘方底は緩い凹凸があり、床面から深さ 4 ～ 10cm で、四隅（南西は削平され不明）は中央よりも深く、床面から 20cm 前後。ローム塊と黒色土の混じる暗黄褐色土の 3 層でほぼ全体を貼床する。主柱穴と推定されるものは 3 本（P1 ～ P3）。削平部に南西主柱穴が存在し、本来は 4 本主柱と考えられる。P1 は径 36 × 35 ×深さ 25cm、P2 は径 32 × 26cm で深さ不明、P3 は径 62 × 44 ×深さ 24cm。P1-P2 間が 1.90m、P1-P3 間が 1.35m で南北間より東西間が広い。掘方底では P1-P2 間の若干内側で P4 を確認し、径 33 × 28 ×掘方底から深さ 10cm である。上記の案とは別に、南東柱穴と考えた P3 を小形の貯蔵穴と考えて長方形 2 本柱の建物に復原できる可能性も残る。長方形建物の例としては 4 区 SI-25・103 や SG1 区 SI-6・(21?) がある。貯蔵穴は確認されなかった。ただし、南東柱穴と考えた P3 が小形の貯蔵穴である可能性も無いわけではない。

［炉］ 北壁際中央から約 25cm 離れて地床炉がある。65 × 53cm の楕円形で、床面から深さ 6 ～ 8 cm。下層は焼土化し硬化赤変している。

［覆土］ ローム粒を少量含む暗褐色土の単層である。

［出土遺物］ きわめて少ない。図示していない 50 片（348g）の内訳は、杯 20 片（93g）、高杯 1 片（12g）、甕 28 片（232g）、壺 1 片（11g）。 1 は古墳中期中葉頃に多い深身の椀形杯。小形甕（２）の外面には、炉で使ったと思われる煤が多い。図示できなかった遺物では粘板岩の小破片（長 18mm・厚さ 1mm・重さ 0.5g）が 1 点あり、砥石破片かもしれない。4 区では SI-4 などに石製模造品、SI-14 などに粘板岩の破片や砥石がある。

4 区 SI-24（第 135 ～ 138 図、写真図版 45・46・121・122）

［**位置**］4 区中央の台地平坦面、34.5-12.5・13.0、35.0-12.5 グリッド。古墳終末期の SI-17 が西、中期の SX-23 が南、後期の SI-18 が南西にある。東は 6 ～ 7m で斜面となる。下層に後期の SI-76 がある。

［**規模と形状**］方形で東西 6.51 ×南北 6.49m、中軸は N-20 ° -E。壁は崩落のためか緩く外傾し、残存高 0.28 ～ 0.34m。床面はおおむね平坦で傾斜しない。掘方は、平面図に破線で記入した南東・南西隅が周辺より 5cm 程深い。床面レベルは SI-76 とおおよそ一致する。西半では SI-76 床面の上に薄く貼床土を入れて SI-24 床面を作り、東半部では SI-76 床面レベルをそのまま SI-24 の床面にする（断面図 A-A′）。

主柱穴は P1 ～ P4 の 4 本。現地所見では、南側の柱穴 2 本が、柱の位置をわずかにずらして建て替えたと推定している（P3 と P4 の A・B）。しかし、柱穴土層に確実な柱の据え換えがないので、掘方と柱根（あたり）との段差と考えた方が妥当と思われる。他の部分で床の貼り替え、拡張、カマドや貯蔵穴の作り替えもないので、建て替えの可能性は低い。P1 は径 58 × 51 ×深さ 53cm、P2 は径 59 × 53 ×深さ 42cm、P3 は径 65 × 60 ×深さ 53（50）cm、P4 は径 62 × 51 ×深さ 68（53）cm。左の括弧内は B の深さを示す。柱間はほぼ等間隔で P1-P4 間 3.54m、P2-P3 間 3.55m、P2-P1 間 3.47m、P3-P4 間 3.53m。

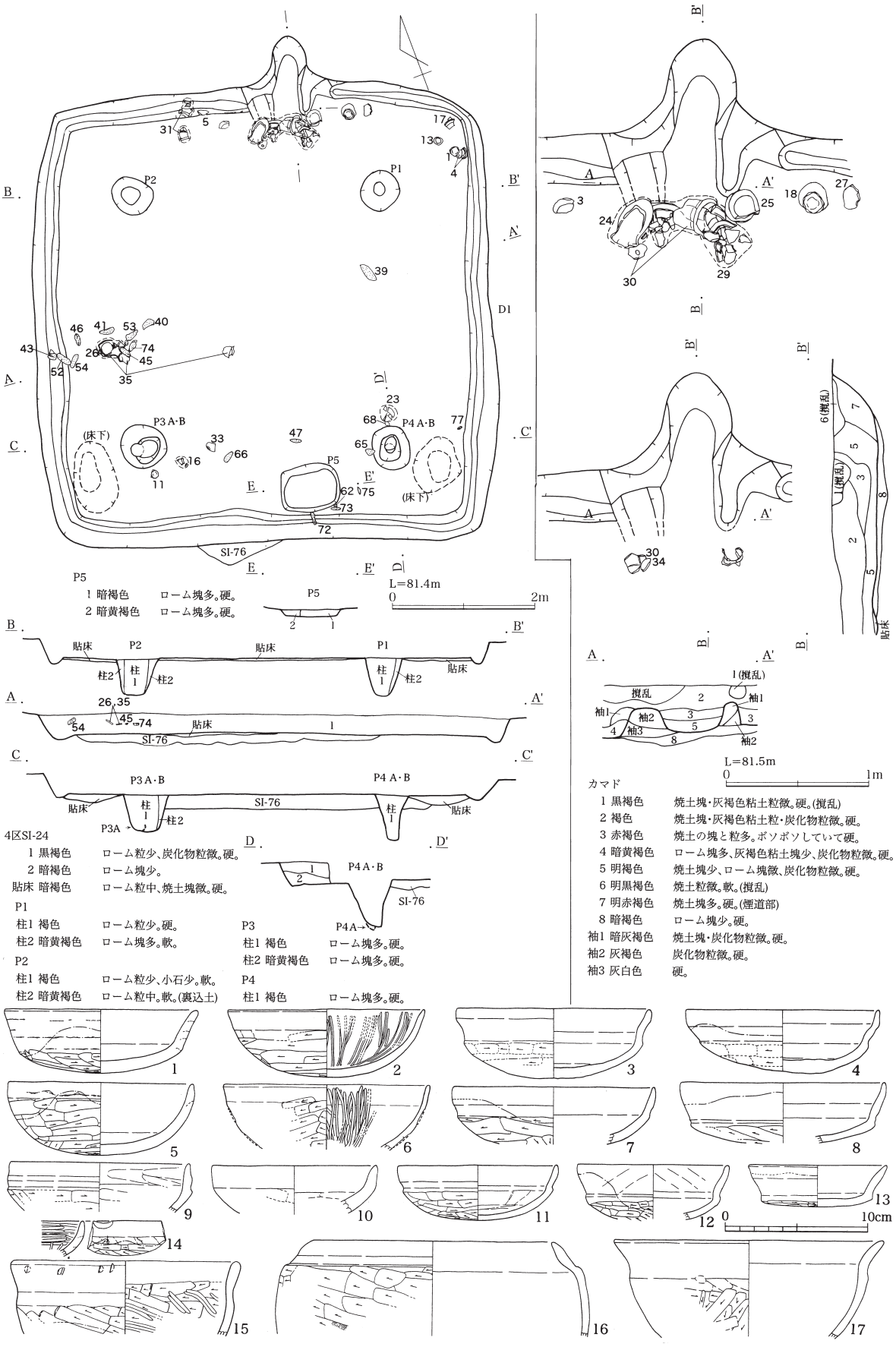
カマド以外を全周する壁溝は断面「U」字状で幅 30cm 前後、床から深さ 5 ～ 10cm。壁溝を埋めてカマド袖を構築している（次項参照）。貯蔵穴 P5 は南壁際の東部にある。東西軸の隅丸長方形で 83 × 68cm、床面から深さ 16cm。底面は 71 × 50cm のほぼ平坦な長方形。P5 覆土はロームが多く硬い。

［**カマド**］北壁の東部にある。天井や袖上半は崩れる。両袖幅 100cm、煙道から袖先端まで 140cm。灰褐色粘土で袖基部を作る。火床はほぼ平坦で、煙道から流入した焼土・炭混じり層の上に、天井の崩れた 3 層が堆積する。煙道は北壁を約 60cm「U」字状に掘り、なだらかに上がる。両袖先端に土師器甕を正位に据え、同じく土師器甕 2 個を横位に入れ子に渡して焚口天井とする。土師器甕に粘土が付着するので、固めて補強したと思われる。カマド袖部はすべて粘土で作られ、地山を掘り残した部分はない。カマド断面図 A-A′ では西袖の基底が東袖より低い。これは、竪穴の周溝内に入る位置で西袖側の断面を図化したためである。周溝の端部を袖 3 層（白色粘土）で埋めて西袖を造ることがわかる。東側の周溝はカマド袖の外側で立ち上がって途切れ、ここで西袖と同様に周溝を埋めて袖を造ったかどうかは不明。

［**覆土**］ローム粒と炭を少し含む黒褐色の 1 層が主体で、2 層は南壁の崩れたローム塊を含む（断面図 D-D′）。

［**遺物出土状況**］カマド焚口は 30 の口縁部に 29 の胴部を入れて天井を構築し、24・25 を焚口東西に正立したと推定できる。カマド東側では完形の鉢が正立している（18）。北東部では上向きの杯 4 上に杯 1 を少しかぶせていた。位置が記録された編物石は、南部と西部で床から 10cm 以上浮くものが多い。

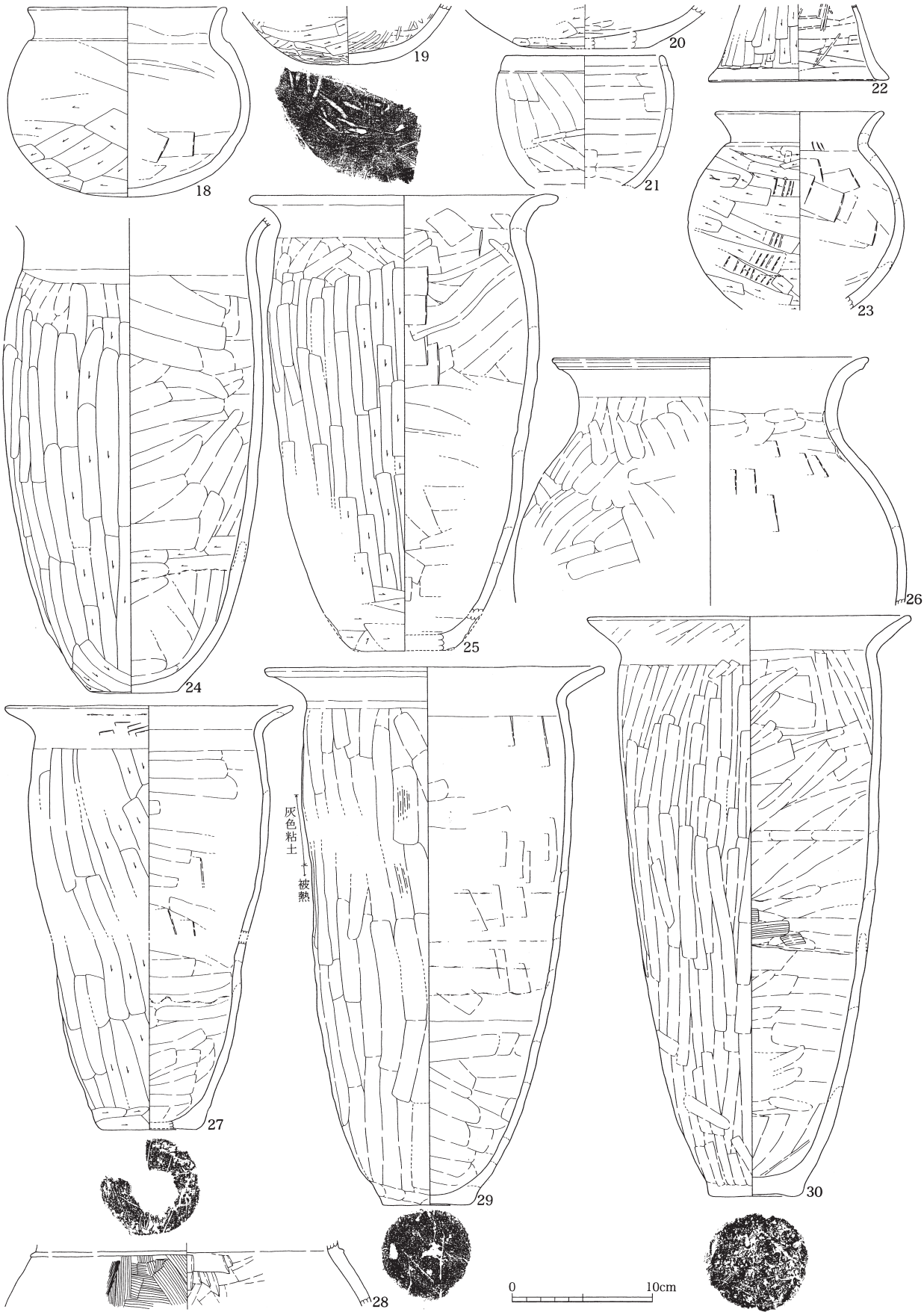
［**出土遺物**］非常に多い。図示していない 698 片（5,937g）の内訳は、杯 155 片（684g）、高杯 9 片（112g）、鉢 35 片（254g）、甕 443 片（4,248g）、甑 56 片（639g）。杯は 6 に炭素吸着の可能性がある他は多くが漆仕上げ。内彎口縁杯（3・4・7・8・11 ～ 13）のうち 11 は漆仕上げが見られない。鉢は 15・16 が炭素吸着、18 が漆仕上げ。19 の底面外周の圧痕は、土器乾燥時の敷物か。鉢のうち 21 は黒雲母が多い搬入品。26 は白雲母が多い茨城県筑波山麓産の「常総型甕」。27・29・30 も黒・白・金色雲母が多い木葉底の搬入品。雲母を含む土師器は 4 区 SI-11・17・24 や SG1 区 SI-5・7・89・SA-103 などにある。雲母を含まない甕は底面ヘラケズリ。土師器・須恵器高杯（22・38）は下野市松香遺跡 SI-01（中山他 1988）に例がある。32 は鉢に穴を開けたような小形甑。33 は底面中央を削り残した部分に木葉痕がある。小形甑は 4 区では SI-3 などにある。36・37・81 は古墳中期～後期前半の混入品。39 は煤の付着した自然石、41 は敲石。編物石が多く、58 は節理が発達したホルンフェルス、70・71 は板状の礫を用いる。4 区では SI-17 や 19 にも編物石がある。刻線で文様を描く紡錘車（77）は、4 区 SI-1 などにある。78 は端部を折返覆輪（？）にする板状鉄製品。79 は焼粘土塊。80 は砥石に使った粘板岩の剥片だろうか。81 は古墳中期の石製模造品（鎌か剣、または刀子）の混入遺物。4 区では SI-4 などに石製模造品、SI-14 などに粘板岩の破片や砥石がある。



第 135 図　権現山遺跡 4 区 SI-24（1）　遺構・遺物

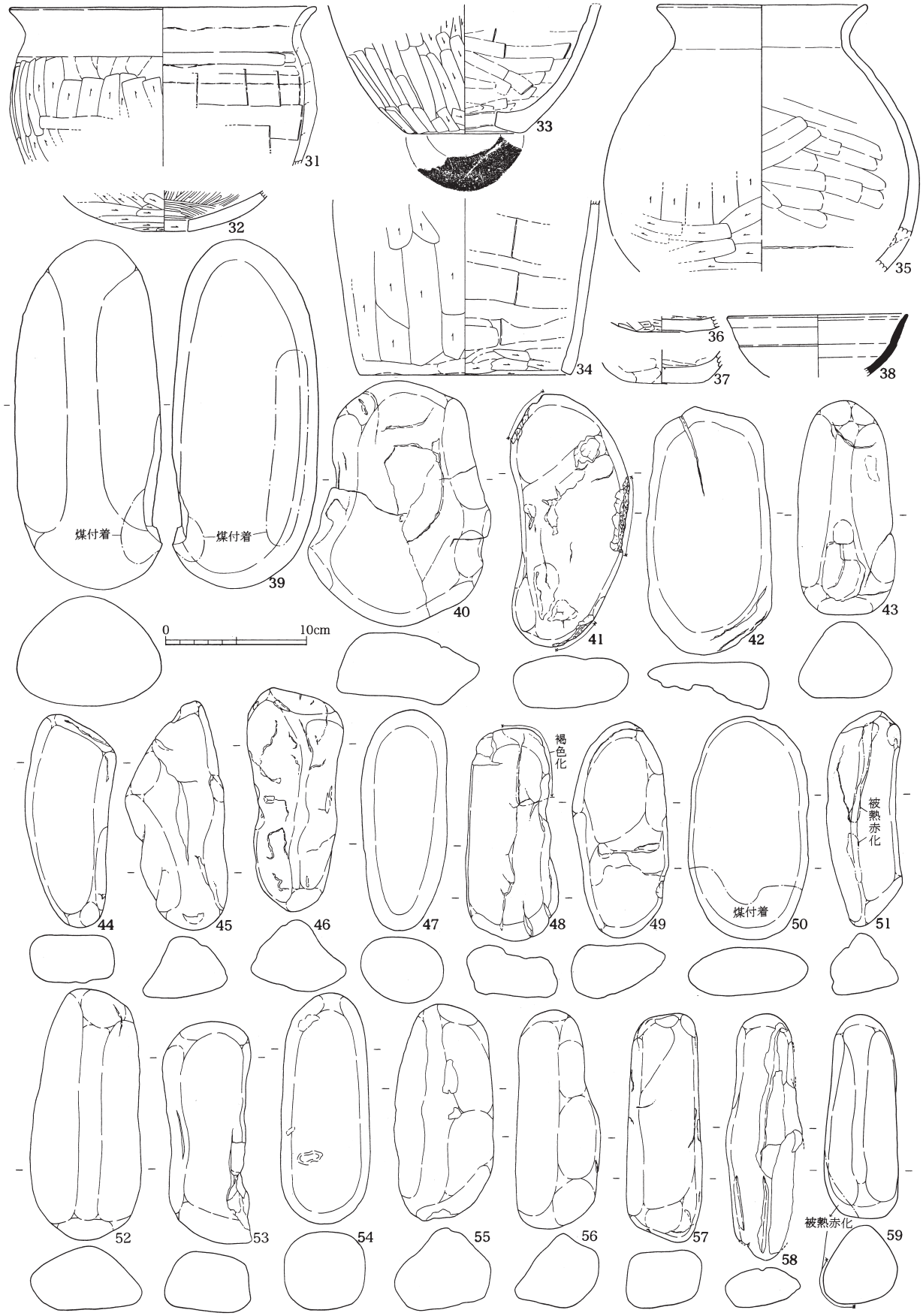
第 61 表　権現山遺跡 4 区 SI-24　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　13.3 高　4.4 最大　13.5	外面は口～体部間にごく浅い段を残す部分と、体部ヘラケズリで段を除去してしまう部分とがある。内外面口縁部ヨコナデ後、外底面に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内面底部は円周方向または多方向ナデ。外面口縁部と内面全面に漆仕上げ。	10YR7/3　にぶい黄橙 緻密　白・黒・透明細粒多 やや軟質	北東部床上 9cmで倒立 口 3/4 周、底全周 28
2 土師器 杯	口　復 13.7 高　4.7	外面は底部多方向と体部に横位のヘラケズリ。外面口縁部と内面中位以上にヨコナデ後、内面に放射状ヘラミガキ。内面口縁部にだけ漆仕上げが残存する。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白・赤細～微粒と黒・透明微粒少　やや軟質	口 1/6 周
3 土師器 杯	口　13.4 高　4.9 最大　13.6	口縁部上半が内彎する。外面口縁部と内面にヨコナデ後､外面体部ヨコヘラケズリ。内面全面と外面口縁部に漆仕上げ。口縁部先端と外面体部が磨滅および剝落している。	2.5Y6/2　灰黄 緻密　白細粒少、黒・透明細粒微　やや軟質	カマド西側床上 15cm 口 1/2 周 38、K
4 土師器 杯	口　13.3 高　4.5 最大　13.5	口縁部上半が強く内彎する。口～体部境の段が明瞭だが、図の左半部では体部を削りすぎて段をほとんど除去してしまっている。外面口縁部と内面にヨコナデ後、外面体部ヘラケズリ。外面口縁部と内面に漆仕上げ。外面体部は磨滅のため調整不明瞭。	10YR8/3　浅黄橙 緻密　黒細～微粒やや多、透明微粒少　軟質	北東部床上 4cmで正立 口 7/12 周 27
5 土師器 杯	口　12.9 高　5.0 最大　13.0	内面上～中位と外面口縁部にヨコナデ後、外面体部に横位と底部に多方向のヘラケズリ。外面上位と内面全面に漆仕上げ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　赤粗～細粒と白細粒少、黒細～微粒と透明粗粒微　軟質	カマド西側床上 21cm 口 7/12 周 39、K
6 土師器 杯	口　復 14.2 高　残 4.5	口縁端部が外へ弱く肥厚する。外面体部ヨコヘラケズリ後に口縁部をヨコナデし、部分的に再度体部をヘラケズリする。内面はヨコナデ後に放射状ヘラミガキ。内面は 6 × 4cmの範囲に炭素吸着が残存し、本来は内面黒色処理していたものが二次的な被熱で消えかけた状況かもしれない。	10R6/6　赤橙 緻密　白細～微粒と黒・透明微粒少 硬質	口 1/6 周
7 土師器 杯	口　復 13.9 高　残 4.0 最大　復 14.2	口縁部上半がわずかに内彎する。外面口縁部と内面にヨコナデ後、外面の体部に横位と底部に 1 方向のヘラケズリ。外面口縁部と内面全面に漆仕上げ。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　白・黒・赤・透明細～微粒少　やや軟質	口 1/6 周
8 土師器 杯	口　復 14.2 高　残 4.2 最大　復 14.4	口縁部上半が内彎する。外面口縁部と内面にヨコナデ後、外面体部ナナメヘラケズリ。外面口縁部と内面全面を漆仕上げ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　赤細粒・灰色礫と黒・透明微粒少　硬質	3 片中 1 片はカマド出土 口 1/6 周　K
9 土師器 杯	口　復 12.5 高　残 3.4 最大　残 12.9	外面口～体部境の段が強く、その上側が深く凹む。内外面口縁部ヨコナデ後に外面体部ヨコヘラケズリ、内面口～体部にやや雑なナナメナデ。現状で漆仕上げ等は見られない。	10YR7/2　にぶい黄橙 やや緻密　黒・白・透明細～微粒少 やや軟質	カマド出土の 1 片と出土位置不詳の 2 片が接合 口 1/4 周　K
10 土師器 杯	口　復 11.3 高　残 3.3 最大　復 11.5	外面口～体部境に弱い稜あり。外面は磨耗して調整不明。内面は体部ナデ、口縁部ヨコナデ。漆仕上げをしていた可能性もあるが不明確。	10YR7/6　明黄褐 緻密　赤粗～細粒と白・黒細粒微 やや軟質	3 片中 1 片がカマド出土 口 5/12 周 K
11 土師器 杯	口　11.0 高　3.9 最大　11.2 重　113.1	口縁部上半が弱く内彎する。口縁部内外面ヨコナデ。外面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内面体部はヨコヘラナデとヨコナデ。漆仕上げや炭素吸着は見られない。	7.5YR6/6　橙 粗い　赤粗～微粒と透明細粒多、黒・白細粒少 やや硬質	南西部床上 14cmで正位 完形 14
12 土師器 杯	口　復 10.4 高　残 3.8 最大　復 10.6	口縁部上半が内彎する。外面体部上端ナデ後､体部に横～斜位ヘラケズリ。外面口縁部と内面にヨコナデ。外面中位以上と内面に漆仕上げ。口縁部内外面に漆を斜位に塗った痕あり。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　黒・透明微粒少、赤粗～微粒と灰色粒微 やや硬質	口 1/4 周
13 土師器 杯	口　9.4 高　2.9 底　7.8 最大　9.6 重　81.1	体部下面が扁平で、底部と呼んでも良いような器形。口縁部上半がごくわずかに内彎気味。外面口縁部と内面をヨコナデ後、外面体部中央に 1 方向と外周に横位のヘラケズリ。外面口縁部と内面に漆仕上げをしているが、大半は剝落。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　赤粗粒と白・黒・透明細～微粒少 やや軟質	北東部床上 5cmで倒立 完形 29
14 土師器 杯	口　復 12～13 高　残 2.4	外面は口縁部ヨコナデ、体部に雑なナデ後ヨコヘラケズリ。内面は密なヨコヘラミガキ後に疎ら（?）な放射状ヘラミガキ。外面口縁部に漆仕上げ残存（内面は剝落 ?)。	10YR7/3　にぶい黄橙 緻密　黒・透明微粒微 軟質	口 1/12 周
15 土師器 鉢	口　復 15.6 高　残 5.1 最大　復 16.0	頸部は内面を削るので薄くなる。内外面ともにヨコナデ後、外面体部と内面頸～体部ヨコヘラケズリ、内面体部ナナメヘラミガキ。外面口縁部上端にヘラの当たった痕あり。外面口～体部上位と内面に漆仕上げ。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　白・黒・透明微粒微 やや軟質	カマド出土 口 1/5 周 K
16 土師器 鉢	口　復 16.4 高　残 6.6 最大　復 21.8	外面の口～体部境に段を持ち、口縁部の上半がやや厚い。外面口縁部と内面口～体部ヨコナデ後、外面体部ヨコヘラケズリ。内面全面と外面体部上端より上方に炭素吸着の黒色処理。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤粗～細粒と透明細砂やや多、白細粒少 やや硬質	南西部床上 12cm 口 1/2 周 13
17 土師器 鉢	口　復 18.8 高　残 6.8	外面の頸～体部境に弱い稜あり。外面体部上端ナデと体部ナナメヘラケズリ。外面口～頸部と内面にヨコナデ。被熱痕などは見られない。	10YR7/6　明黄褐 やや粗い　白・灰色礫～細粒と透明粗～細粒多、黒・赤細粒少　やや硬質	北東部床上 12cm 口 1/6 周 30
18 土師器 鉢	口　14.1 高　13.4 最大　17.1 重　764	外面頸部に強い段あり。外面は底部に多方向と体部に横～斜位のヘラケズリ。内面は横位（肩部は斜位）のヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面上半と内面口縁部に漆仕上げ。	10YR8/3　浅黄橙 緻密　黒・透明微粒少、赤粗～細粒微 軟質	床上 5cmで正立 ほぼ完形 32
19 土師器 鉢	高　残 4.2 最大　残 14.8	外面は底面に多方向と体部に横位のヘラケズリ。底面外周に沿って丸棒状の圧痕が連続して見られ、草本植物状の繊維を介して痕が付く部分もある。内面は多方向ヘラナデ後、縦位～斜位のヘラミガキ。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密　白・黒・透明細～微粒少　やや軟質	底 2/3 周
20 土師器 鉢？	高　残 3.1 底　9.2 最大　残 17.0	大形壺の可能性もある。外底面は多方向ヘラケズリで、削る前に木葉痕が付いていた可能性もある。外面体部ヨコヘラケズリ、内面体部ナデ。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　白・灰色礫～細砂と白・黒・赤・透明細～微粒少　やや軟質	底 1/2 周
21 土師器 鉢	口　復 11.3 高　残 9.4 最大　復 12.5	外面の口～体部境に浅い段あり。外面体部はおそらくヘラケズリ後に雑なナナメナデ。内面体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	7.5YR4/4　褐 粗い　白・半透明礫～細粒と黒雲母粗～細片多、透明・黒細粒少　軟質	カマド出土 口 1/4 周 K
22 土師器 高杯	高　残 5.4 脚裾　復 12.8	裾部は厚いが、脚柱部は極めて薄い。裾部外面と底面にヨコナデ後、外面タテヘラケズリ、内面は上部ヨコヘラナデと下部ヨコヘラケズリ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白粗～細粒と透明細～微粒少、黒細粒微 やや硬質	脚裾 1/12 周、脚柱 1/4 周
23 土師器 小形甕	口　12.0 高　残 14.0 最大　復 15.3	外面の頸～体部境に浅い段あり。外面体部はヨコヘラケズリで、上半の後に下半を逆方向に削る。内面体部はヨコヘラナデ。内外面の口～頸部にヨコナデ。被熱痕は見られない。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　白・黒・透明微粒多、赤粗～細粒微　軟質	南東部床上 5cm 口～肩全周 1



第 136 図　権現山遺跡 4 区 SI-24（2）　遺物

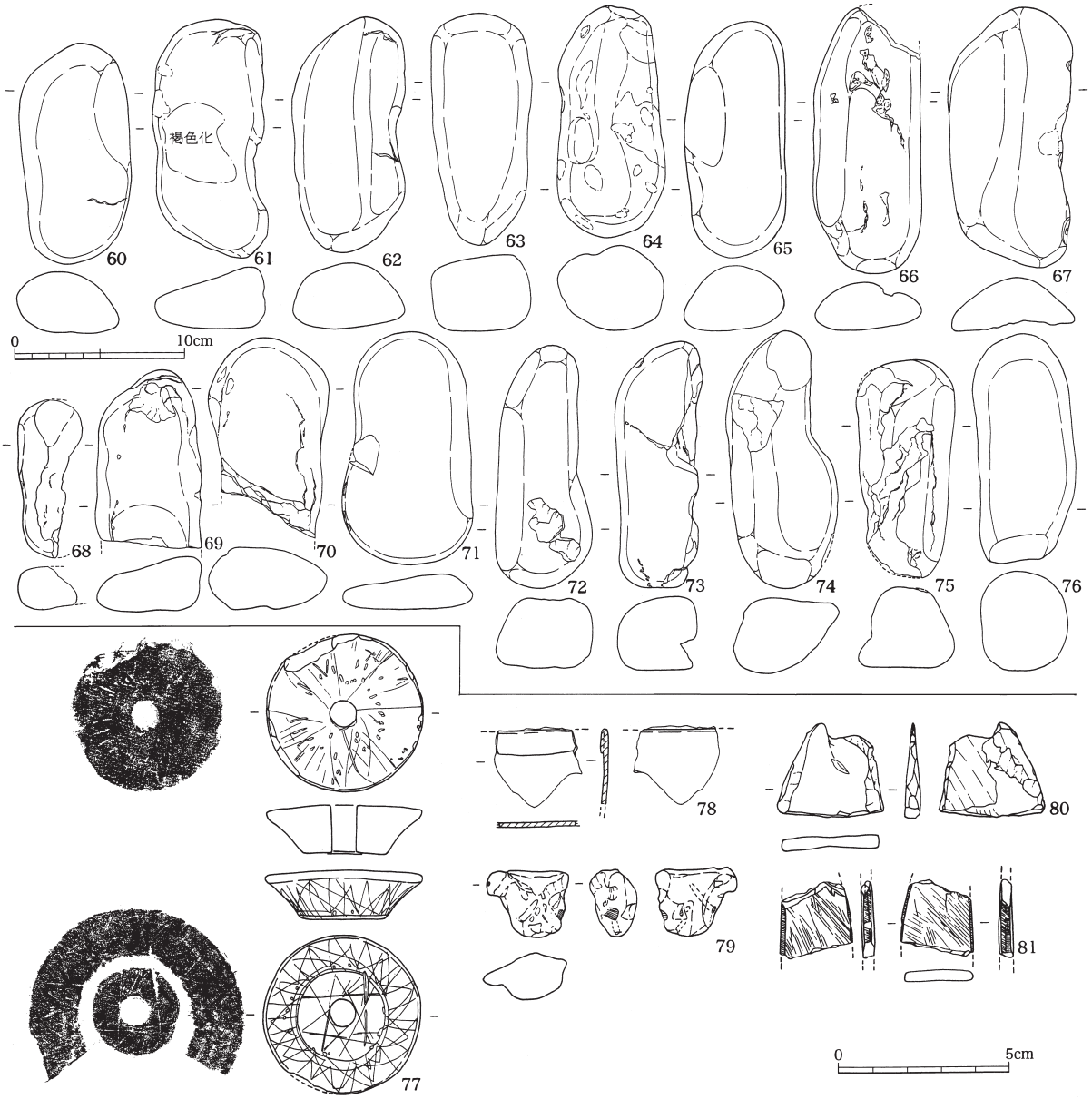
24 土師器 甕	高　残 33.6 底　6.3 最大　残 18.4	外面は頸部ナデ、胴部に縦位と胴下端に斜位のヘラケズリ、外底面は多方向ヘラケズリで弱い凸面にする。内面胴部は下部に縦位、中部に斜位、上部に横位のヘラナデと胴下部の積み上げ休止部付近にヨコヘラケズリ。内外面の口～頸部にヨコナデ。外面胴部全体に粘土が薄く付着し、底部には見られない。内面に明確なコゲや汚れはない。	10YR6/4　にぶい黄橙 粗い　白・灰色・透明礫～細粒と黒粗～細粒多 やや軟質	カマド西床上 2 ～ 20 ㎝ 頸 1/2 周、底全周 36、K
25 土師器 甕	口　21.8 高　残 29.7 （推 32） 底　復 6.3	外面は頸部ナデ後、胴部に縦位と胴下端に横位のヘラケズリ。外底面も残存している部分はヘラケズリ。内面はやや雑なヨコヘラナデ。内外面の口～頸部ヨコナデ。外面胴部中位以下が被熱気味であること以外の使用痕は不明確。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや粗い　白・透明・灰色礫～細粒多、赤粗～細粒と黒細粒少　やや軟質	床上 3㎝。カマド出土の 1 片も接合 口 3/4 周、底 1/12 周 33、43、K
26 土師器 甕	口　22.4 高　残 17.6 最大　復 27.8	外面は胴部に調整痕の不明確なナデ、頸部にナナメナデ。内面は胴部ヨコヘラナデ後に頸部ナデ。内外面の口～頸部上半におそらく回転台を利用したヨコナデ。被熱痕や使用痕は不明。	7.5YR6/6　橙 粗い　白・半透明粗～細粒と白雲母細片多、黒細粒少 やや軟質	西部床上 8㎝に倒立。カマドでも破片出土 口 1/2 周、頸全周 16、K
27 土師器 甕	口　復 20.4 高　復約 30 底　6.8	上半と下半が接合できないので器高は推定。外底面に木葉裏面の圧痕があり、葉を外した後で軽いナデ調整。外面は胴部に縦位と胴下端に横位のヘラケズリ。頸部外面にヘラ痕を残し気味のヨコナデ。内面胴部にヨコヘラナデ。内外面とも被熱痕や使用痕はない。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　白礫と黒細砂少、白・透明粗～細粒と黒雲母粗～細片多　やや軟質	カマド東側床上 7㎝ 口 5/12 周、底 3/4 周 31、K
28 土師器 甕	高　残 4.7 頸　復 21.4	小破片なので復原径は参考程度。外面肩部ナナメハケと内面肩部ヨコヘラナデの後、内外面頸部ヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒・白・透明細～微粒少　硬質	2 片中 1 片カマド出土 頸 1/12 周 K
29 土師器 甕	口　復 24.0 高　38.0 底　6.2	外底面は木葉痕をヘラナデで消し、中央付近に葉脈痕が残る。外面胴部はタテヘラナデで、それ以前のタテハケ（?）痕跡もわずかに残存。内面胴部はヨコヘラナデ。内外面の口～頸部にヨコナデ。外面の胴部上位（口縁から下へ 9 ～ 14㎝）に少量の灰色粘土と煤が付着し、それより下方は被熱する。内面は暗褐色の汚れが少し見られ、胴部上位に目立つ傾向がある。	7.5YR4/6　褐 粗い　白礫～細粒と白雲母粗～細片多、黒・透明細粒少 やや硬質	カマド南床上 3 ～ 8 ㎝が接合 口 1/2 周、底全周 34、35、K
30 土師器 甕	口　22.9 高　40.9 底　6.2 重　残 2142	外底面に複数枚（?）の不明瞭な木葉痕。外面胴部タテヘラナデ、口縁部外面ナナメナデ後内外面にヨコナデ。内面は底部に縦～斜位、胴部中位に横位、上位に横～斜位のヘラナデで、胴部中位の積み上げ休止部にヨコハケ。外面全体に肌色の粘土が付着。	2.5YR5/8　明赤褐 粗い　白粗～微粒と金色雲母細～粗片多、黒・透明細粒少　やや硬質	床上 10㎝。床上 4㎝と 13㎝の各 1 片も接合 口と底全周、胴一部欠 34、36、37、44
31 土師器 甕	口　復 21.7 高　11.1	外面は胴部上位ナデ後胴部全体タテヘラケズリ。内面は胴部ヨコヘラナデ。内外面口～頸部ヨコナデ。使用痕や被熱痕は不詳。	10YR6/2　灰黄褐 粗い　白・灰色礫～細粒と透明粗～細粒多、黒・赤粗～細粒少　硬質	カマド西側床上 8 ～ 9㎝が接合 口 7/12 周 40、41
32 土師器 小形甑？	高　残 2.9 最大　残 14.2 孔　復 3.2	中形の鉢の底面に焼成前に孔を開けた形か。外面体部は斜位の後に下端部を横位ヘラケズリ。孔端面ヨコヘラケズリ。内面体部は多方向ナデ後、上部に縦～斜位と下部に斜～横位のヘラミガキ。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや緻密　赤粗粒多、黒・透明細粒少　やや軟質	底 1/3 周
33 土師器 小形甑	高　残 9.0 底　復 8.4 最大　復 19.1 孔　復 5.8	孔は底面の中心よりも少し偏った位置にある。外底面は木葉の裏面の圧痕を残し、外周部にヘラケズリ。外面体部タテヘラケズリ、内面体部ヨコヘラナデ。孔端面ヨコナデ。	10YR8/4　浅黄橙 やや緻密　黒・透明微粒少、赤細粒微 軟質	南西部床上 10㎝ 孔 1/4 周、底 1/3 周 12
34 土師器 甑	高　残 12.2 底　復 15.0 孔　復 13.4	外面タテヘラケズリ。孔下端面ヨコヘラケズリ後ナデ。内面ヨコヘラナデ後に下端部ヨコヘラケズリ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・赤・黒・透明粗～細粒多、白礫微 やや軟質	床上 4㎝で№ 24 の甕の下 底 1/6 周 44
35 土師器 壺	口　復 14.8 高　残 18.8 最大　残 22.2	外面の頸～胴部境に浅い段あり。外面胴部上半は器面が荒れているため調整不明で、下半は縦位の後に最下部を横位のヘラケズリ。内面胴部は横～斜位のナデ。内外面の口～頸部にヨコナデ。被熱痕や使用痕は不明。外面の広域に焼成時の大黒斑あり。	10YR7/6　明黄褐 緻密　白・黒・透明細～微粒多 硬質	中央床上 5㎝と西部床上 12㎝ 口 1/5 周、頸 7/12 周 10、15、16
36 土師器 杯	高　残 1.1 底　3.4	外面体部と底部はヘラケズリで小さな上げ底にする。内面は円周方向のユビナデ。外面に黒色の付着物あり（煤または漆仕上げ?）。古墳中期末～後期前半の小破片の混入か。	7.5YR7/6　橙 緻密　黒・透明微粒少、赤細粒微　軟質	底全周
37 土師器 鉢	高　残 2.4 底　5.2 最大　残 8.4	丸味を帯びた平底。内外面の底面に 1 方向ナデ、体部にヨコナデ。内面底中央におそらく乾燥時か焼成時の亀裂が生じているが、外面まで達してはいない。古墳中期末～後期前半の遺物が混入。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤粒・白細粒と透明微粒微　やや軟質	底全周
38 須恵器 高杯	口　復 12.7 高　残 4.4	外面口～体部境と内面口縁端部に浅い段を持つ。細粒の動きから見てロクロ左回転(反時計回り）の可能性あり。	5Y6/1　灰 やや緻密　白粗～細粒少、半透明粗粒微　硬質	口 5/12 周
39 礫	長　24.5 幅　10.2 厚　7.7	平面形が棒状で断面形が三角形気味の河原石をそのまま利用。図示した表裏両面の一部に薄く煤が付着する。破面が 1 箇所あり、煤が付着した後に割れたものと見られる。重量 2819.2g。	2.5Y7/2　灰黄 やや多孔質で硬質な安山岩	床上 4㎝ 完形 9
40 礫	長　17.2 幅　12.2 厚　5.2	図示した面の丸味がやや強く、反対面が凹面気味になる、扁平な河原石。被熱痕や加工・使用痕は見られない。重量 1289.7g。	2.5Y6/2　灰黄 緻密で硬質な安山岩	床上 11㎝ 完形 20
41 石器 敲石	長　17.8 幅　8.1 厚　4.6	扁平な河原石をそのまま利用し、側面の 3 箇所を使用した敲打痕が明瞭に残る。やや重いが、長い三日月形なので、片手で握れる大きさと形状である。重量 826.9g。	2.5Y5/3　黄褐 緻密で硬質なチャート	床上 10㎝ 完形 26
42 石器 編物石？	長　17.4 幅　8.7 厚　3.1	扁平な河原石で、裏面は全体が古い剝離面で、磨滅してやや丸味を持つ。その面全体が被熱して赤色化している。重量 593.1g。	10YR7/2　にぶい黄橙 2 ～ 3㎜大の石英が多い流紋岩	完形
43 石器 編物石	長　15.0 幅　6.9 厚　5.4	断面が三角形状の河原石をそのまま利用。被熱痕や加工・使用痕は認められない。重量 829.7g。	5Y6/2　灰オリーブ 緻密で硬質な礫岩	床上 14㎝ 完形 24
44 石器 編物石	長　15.0 幅　6.0 厚　4.2	扁平で断面長方形の河原石をそのまま利用。被熱痕や加工・使用痕は見られない。重量 530.2g。	5Y7/2　灰白 濃緑色と白色の斑晶が多い緻密で硬質な安山岩	完形
45 石器 編物石	長　16.1 幅　7.0 厚　4.6	図示した面が中高になる河原石をそのまま利用。被熱痕や加工・使用痕は認められない。重量 647.4g。	10Y5/1　灰 緻密で硬質なホルンフェルス	床上 10㎝ 完形 17
46 石器 編物石	長　15.8 幅　6.7 厚　5.1	横断面形が三角形気味の河原石をそのまま利用。被熱痕や使用・加工痕は見られない。重量 536.4g。	5Y5/2　灰オリーブ 緻密で硬質なチャート	床上 16㎝ 完形 21
47 石器 編物石	長　15.5 幅　5.9 厚　4.7	断面楕円形の河原石をそのまま利用。被熱痕や加工・使用痕は認められない。重量 680.8g。	7.5Y6/1　灰 1 ～ 2㎜大の石英が目立つ緻密でやや硬質な流紋岩	床上 10㎝ 完形 8



第 137 図　権現山遺跡 4 区 SI-24（3）　遺物

48 石器 編物石	長　15.0 幅　6.4 厚　4.2	断面長方形で図示した面の中央に縦位の段を持つ河原石をそのまま利用。図示した面の上部から上端面と右側面にかけての部分が褐色化し、鉄分の付着と思われるが被熱痕の可能性も残る。加工痕・使用痕は見られない。重量 588.7g。	5Y4/2　灰オリーブ 1 ～ 3㎜大の白色斑晶が多い緻密で硬質な安山岩	完形
49 石器 編物石	長　15.1 幅　6.6 厚　3.9	図示した面の下部が厚さ 3㎝程度まで薄くなる形の河原石をそのまま利用。被熱痕や加工・使用痕は見られない。重量 494.3g。	5Y5/1　灰 緻密で硬質な安山岩	完形
50 石器 編物石	長　15.6 幅　8.4 厚　3.3	断面が楕円形の河原石をそのまま利用。全面が被熱して赤色化する。また図の下端部は特に図示した面を中心として左右側面と下端面にかけて煤が付着するが、図の反対面ではわずかしか見られない。加工・使用痕は見られない。重量 562.7g。	2.5YR6/2　灰赤 黒色斑晶が多くやや多孔質で硬質な安山岩	完形
51 石器 編物石	長　15.1 幅　4.9 厚　4.6	断面三角形でやや反った棒状の河原石をそのまま利用。図示した稜線上の部分だけが被熱して赤色化している。加工・使用痕は見られない。重量 420.1g。	5Y6/2　灰オリーブ 3㎜大以下の石英が多く緻密・硬質な流紋岩	完形
52 石器 編物石	長　17.7 幅　7.9 厚　4.6	断面が低い三角形状の河原石をそのまま利用。被熱痕や加工・使用痕は見られない。重量 943.6g。	5Y6/2　灰オリーブ 1 ～ 4㎜大の石英が目立つ緻密で硬質な石英斑岩	床上 13㎝ 完形 23
53 石器 編物石	長　15.5 幅　6.2 厚　4.4	両面が平坦に近く、また図の右側面（割れ面）がかなり風化・円磨した状態の河原石をそのまま利用。被熱痕や加工・使用痕は見られない。重量 671.7g	2.5Y7/3　浅黄 緻密で硬質な礫岩	床上 9㎝ 完形 19
54 石器 編物石	長　16.3 幅　5.8 厚　5.6	図の上部が厚くて下部が厚さ 4㎝程になる河原石をそのまま利用。表面全体に褐色の鉄分（?）が明瞭に付着する。被熱痕や加工・使用痕は見られない。重量 815.5g。	10YR5/4　にぶい黄褐 やや多孔質気味の安山岩	床上 15㎝ 完形 22
55 石器 編物石	長　15.2 幅　6.95 厚　5.8	中央部がやや厚い河原石をそのまま利用。全面が弱く被熱してやや赤色化する。加工痕や使用痕は見られない。重量 850.5g。	2.5Y4/1　黄灰 2 ～ 4㎝大の石英と長石が目立ち硬質な石英斑岩	完形
56 石器 編物石	長　15.4 幅　5.9 厚　6.2	断面四角～台形に近い、細長い河原石をそのまま利用。被熱痕や加工・使用痕は見られない。重量 681.2g。	2.5Y7/4　浅黄 2 ～ 3㎜大の石英を少量含む緻密で硬質な安山岩	完形
57 石器 編物石	長　16.1 幅　5.3 厚　4.2	断面長方形で厚さもほぼ一定の河原石をそのまま利用。被熱痕や加工・使用痕は見られない。重量 672.6g。	10Y5/1　灰 緻密で硬質なホルンフェルス	完形
58 石器 編物石	長　17.3 幅　残 5.3 厚　3.6	節理が発達した棒状の河原石または円礫をそのまま利用。破線で図示した箇所に、節理に沿った剝離（破損）がやや広く生じている。被熱痕や加工・使用痕は見られない。残存重量 352.4g。	2.5Y6/2　灰黄 粘板岩起源の緻密・硬質なホルンフェルス	一部欠
59 石器 編物石	長　14.4 幅　5.3 厚　5.6	三角柱状の河原石をそのまま利用。図示した隅部分だけが熱を受けて赤色化する。加工痕や使用痕は見られない。重量 622.4g。	5Y5/1　灰 緻密で硬質なホルンフェルス	完形
60 石器 編物石	長　12.8 幅　6.2 厚　3.5	図示した面に丸味があり、対面が平坦な河原石をそのまま利用。被熱痕や加工・使用痕は見られない。重量 470.3g。	7.5Y6/1　灰 緻密で硬質な安山岩	完形
61 石器 編物石	長　13.9 幅　6.5 厚　3.8	断面が扁平な三角形の河原石をそのまま利用。図示した面の中央部が褐色化し、被熱痕と思われるが付着物の可能性もある。加工・使用痕は見られない。重量 485.3g。	5Y6/2　灰オリーブ 1 ～ 3㎜大の白色斑晶が多い緻密で硬質な安山岩	完形
62 石器 編物石	長　13.7 幅　6.5 厚　4.0	中軸線上の稜部分が厚くなる形の河原石をそのまま利用。図の右側縁が凹む位置では、中央部の厚さも少し狭くくびれる。全面が強く被熱・赤化する。それ以外の加工・使用痕は見られない。重量 512.5g。	7.5YR5/3　にぶい褐 1 ～ 3㎜大の石英斑晶が多く、緻密・硬質な安山岩	床上 17㎝ 完形 7
63 石器 編物石	長　13.5 幅　5.9 厚　4.7	断面四角形の河原石をそのまま利用。被熱痕や加工・使用痕は見られない。重量 617.6g。	2.5Y6/4　にぶい黄 緻密で硬質な礫岩	完形
64 石器 編物石	長　13.5 幅　6.2 厚　5.0	輪郭・厚さともに中央部がくびれる形の河原石をそのまま利用。表面全体に褐色の鉄分（?）が付着する。被熱痕や加工・使用痕は見られない。重量 536.9g。	10YR5/2　灰黄褐 1 ～ 3㎜大の石英が目立ちやや粗粒で硬質な流紋岩	完形
65 石器 編物石	長　13.7 幅　5.9 厚　3.8	断面円形で細長い自然の河原石をそのまま利用。加工・使用痕や被熱痕は見られない。重量 497.8g。	2.5Y6/3　にぶい黄 比較的緻密で硬質な安山岩	床上 7㎝ 完形 3
66 石器 編物石	長　残 15.5 幅　6.2 厚　2.8	図の下面側が扁平な河原石をそのまま利用。表面に鉄分（?）が薄く付着する。被熱痕や加工・使用痕は認められない。残存重量 377.1g。	2.5Y7/3　浅黄 柱状の黒色斑晶が目立つ緻密・硬質な安山岩	床上 14㎝ 一部欠 11
67 石器 編物石	長　15.2 幅　7.2 厚　3.1 重　490.0	図の下面側の古い割れ面がかなり磨滅した状態の河原石をそのまま利用。図の右側縁部の表裏両面に少しずつ剝離があり、やや薄い側縁部が他の石などに当たって破損した痕と思われる。これ以外に被熱痕や加工痕は見られない。	2.5Y7/2　灰黄 緻密で硬質な安山岩	完形
68 石器 編物石	長　残 9.2 幅　残 3.5 厚　残 2.5	扁平で細長い自然の河原石をそのまま利用。縦位に割れている以外には、加工や使用の痕跡は見られない。残存重量 85.8g。	2.5Y8/3　淡黄 緻密で硬質な流紋岩	床上 1㎝ 約 1/2 残 2
69 石器 編物石	長　残 10.4 幅　6.2 厚　3.3	扁平な河原石をそのまま利用。被熱痕や加工・使用痕は見られない。下端部の折損は、破面の状況から見て古いものではない。残存重量 301.7g。	2.5Y6/4　にぶい黄 緻密で硬質な流紋岩	破片
70 石器 編物石	長　残 11.6 幅　12.0 厚　3.6	図の下面がやや扁平気味な河原石をそのまま利用。図の下端は人為的な加工ではなく衝撃等で折損した痕と見られる。被熱痕や加工・使用痕は見られない。残存重量 328.7g。	5Y6/1　灰 緻密で硬質な安山岩	破片
71 石器 編物石？	長　13.6 幅　7.6 厚　2.0	扁平な河原石で、被熱痕や加工・使用痕は見られない。図の下端から約 1/3 のところで折損した 2 片として出土。残存重量 312.1g。	2.5Y6/3　にぶい黄 緻密で硬質な安山岩	一部欠
72 石器 編物石	長　14.1 幅　5.7 厚　4.4	厚さが均一な細長い河原石をそのまま利用。図の左側縁が弱くくびれる。全面が少し被熱する他には、加工・使用痕は見られない。重量 470.0g。	10YR6/4　にぶい黄橙 1 ～ 3㎜大の石英斑晶が多く、緻密・硬質な安山岩	床上 18㎝ 完形 6
73 石器 編物石	長　14.4 幅　4.7 厚　4.3	図の右半部が割れた後に自然の磨滅で円礫化が途中まで進んだ状態の河原石をそのまま利用。表面全体が弱く被熱している以外には、加工・使用の痕は見られない。重量 487.3g。	10YR6/4　にぶい黄橙 緻密で硬質な安山岩	床上 21㎝ 完形 5
74 石器 編物石	長　15.0 幅　6.2 厚　4.8	図示した上面側が平坦な河原石をそのまま利用。図上端は節理に沿った割れ面で、外周の稜線が磨耗するので使用前からの形状と見られる。加工・使用痕や被熱痕等はない。残存重量 536.0g。	2.5Y4/2　暗灰黄 緻密で硬質なチャート	床上 9㎝ ほぼ完形 18
75 石器 編物石	長　12.7 幅　5.6 厚　5.1	断面台形状の自然の河原石をそのまま利用。全面がある程度被熱する。おそらくその際に表面が荒れて剝落した部分が図示した面の左半部に見られる。加工・使用痕は見られない。残存重量 484.5g。	2.5Y5/4　黄褐 やや粗粒で硬質な安山岩	床上 17㎝ 完形 4
76 石器 編物石	長　13.2 幅　6.0 厚　5.8	図の下部が厚く、上部が厚さ 4.3㎜にやや薄くなる河原石をそのまま利用。図下端は自然の折れ面で、周囲の稜が磨滅するので敲石状に用いた可能性もある。被熱痕や加工痕はない。重量 649.0g。	2.5Y5/3　暗灰黄 1 ～ 2㎜大の石英が目立ちやや粗粒で硬質な流紋岩	完形

77 石製品 紡錘車	径　45.23～45.78 孔　7.62～7.8 厚　14.7 重　39.2	下面側から穿孔し、初孔径 7.62 ～ 7.80㎜、終孔径 7.55 ～ 7.70㎜。下面は中央より外周がやや厚く、上面は外周よりも中央がやや厚い。全面を丁寧に研磨して光沢を持ち、研磨時の擦痕は不明。上面の外周の剝離面も、剝離した稜の部分は研磨または使用痕で磨滅する。上面に放射状、下面には孔外周に接する直線状、側面には放射状と鋸歯状の線刻あり。側面下端には約１周半巡る横線もある。	5Y5/2　灰オリーブ 緻密　蛇紋岩 硬質	南東区床上 3㎝ 完形 27
78 鉄製品 不明	長　残 2.2 幅　残 2.4 厚　0.15～2.5	鉄板の縁部を 7㎜程度折り返す。左図に示した面の全体が緩く外反するので、こちらの面が裏面になる可能性もある。有機質等は見られない。残存重量 1.7g。		
79 土師質 焼粘土塊	縦　2.0 横　2.4 厚　1.9	はっきりした草本植物の圧痕は側面に１箇所見られる。草本植物が通っていたと思われる孔は３箇所あり、図に破線で示したように比較的長く続くようである。重量 3.2g。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　赤・白細粒少 軟質	完形
80 砥石？ 粘板岩剝片	長　残 2.8 幅　3.1 厚　0.5 重　残 3.7	劈開の方向に沿って薄く剝離した小破片。本来の外形や正確な厚さは不明。左図の面は平坦であるが、右図の面はおそらく破損によって生じた不規則な割れ面。被熱痕や研磨痕等は見られない。砥石破片の可能性がある。	5Y4/1　灰 緻密で軟質な粘板岩	小破片
81 石製模造品 不明	長　残 2.1 幅　残 2.3 厚　0.34 重　残 2.7	鎌形または剣形の可能性があり、刀子形の可能性はやや低い。側縁は一方が直線的で、他方が少し曲がる。両面ともに２方向程度の研磨を行う。側面はいずれも横研磨で、長軸方向の２～３面に分割することで側面にやや丸味を持たせている。古墳時代中期の遺物が混入。	7.5GY4/1　暗緑灰 滑石	破片



第 138 図　権現山遺跡 4 区 SI-24（4）　遺物

4 区 SI-25（第 139 図、写真図版 46・47・122）

［位置］ 4 区中央部北寄りの台地緩斜面、35.0-13.0 グリッド。古墳中期の建物は北西に SI-27 がある。東に古墳後期の SI-26、西に後～終末期の SI-24・74 がある。中央南半から東壁際中央を長方形撹乱土坑に切られる。

［規模と形状］ 西辺と東辺の比高が 10cm ある緩斜面に立地するためやや歪むが、南北に長い長方形の独特な建物。中軸は N-22°-E。長方形建物は、4 区では SI-22 にその可能性があり、SG1 区では SI-6 などがある。東西長 3.60m、南北長 5.25m である。壁は外傾し、残存高 0.22 ～ 0.30m。床面はおおむね平坦で、傾斜しない。掘方底面はほぼ平坦で、ローム塊が多い暗黄褐色土（5 層）でほぼ全体を貼床する。床面からの深さは 3 ～ 8 cm である。床面では柱穴は確認できなかったが、西壁際中央付近と南西隅の掘方底で P2・P3 を確認した。P2 は径 25 × 23 ×掘方底から深さ 19cm、P3 は径 27 × 25 ×掘方底から深さ 27cm である。貯蔵穴 P1 が南東隅にある。南北に若干長い長方形で 55 × 46cm、床面から深さ 27cm。底面は鍋底状で、壁は東側を除き崩れてなだらかになる。覆土は 3 層で、壁が崩れたと思われる 3 層はローム塊が多い。貯蔵穴上面及び周辺から高杯や甕が纏まって出土した。

［炉］ 中央南西寄りと南側で 2 基の地床炉がある。炉 1 は 44 × 32cm の東西に長い楕円形で、床面を 5 cm ほど掘る。炉 2 は北側を長方形土坑に切られ、東西 42 ×南北残存 32（推定 55）cm の南北に長い楕円形で、床面を 8 cm ほど掘る。いずれも下層は焼土化・硬化・赤変する。炉を 2 箇所持つ点も特徴的である。複数の炉を持つ建物は、4 区 SI-20 などがあり、通常の竪穴とはかなり異なる特徴を持つことが多い。

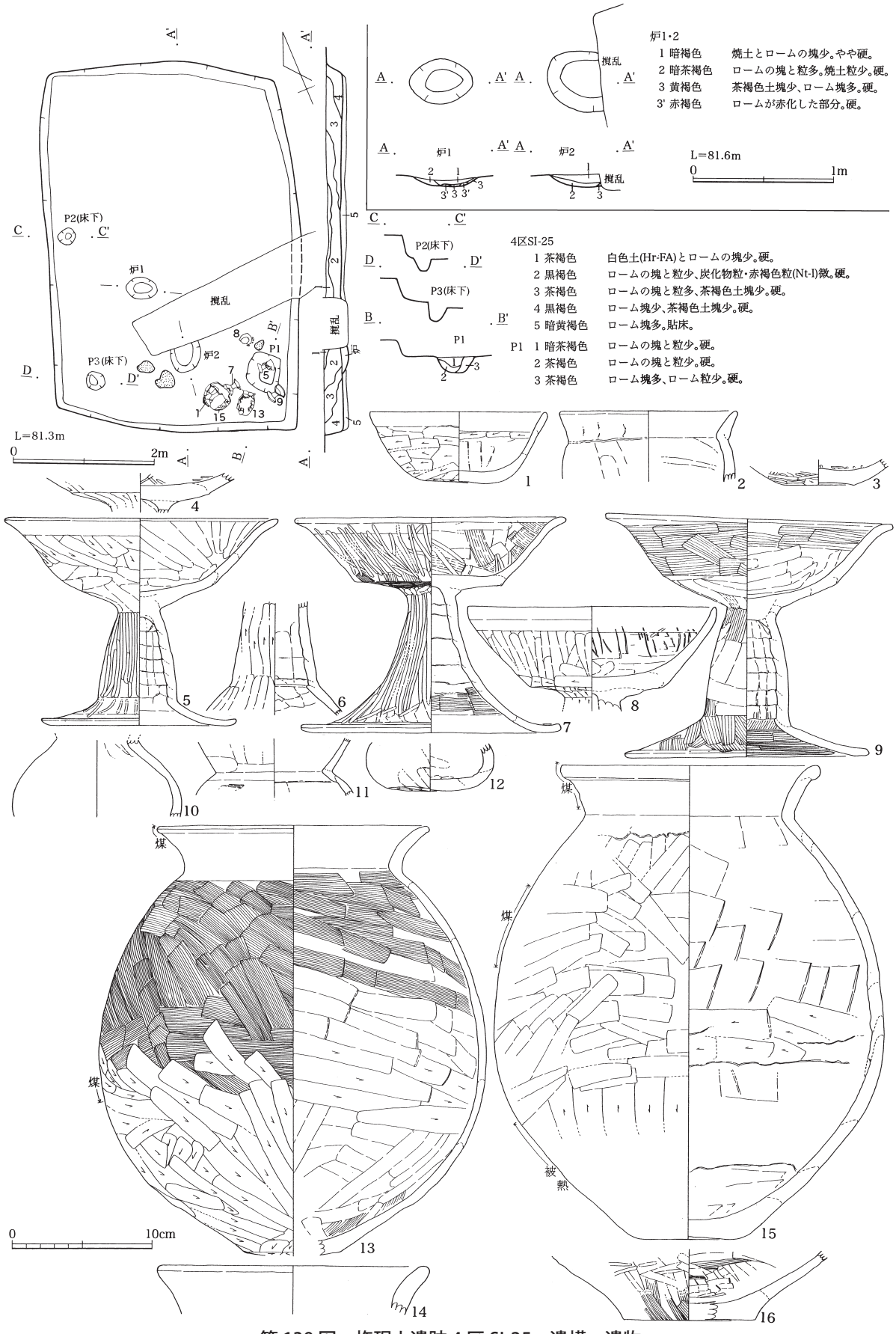
［覆土とテフラ］ 覆土は 4 層の自然堆積で、1 層に FA テフラ塊を少量含む。

［遺物出土状況］ 貯蔵穴周辺の床付近にまとまる。高杯 7 ・ 9 が貯蔵穴上面付近に倒れ、その北側では高杯杯部（8）、甕（13 と 15）、甕の下部には杯（1）が、床から数 cm の高さにある。高杯（5）は貯蔵穴上面出土。

［出土遺物］ 遺物は少ない。図示していない 202 片（1,267g）の内訳は、杯 45 片（349g）、高杯 38 片（226g）、甕および壺 119 片（692g）。明確な甑はない。大形の壺・甕片は多いが、小形・中形壺は少ない（10 ～ 12）。1 は内斜口縁が外開きに変化した中期中葉の杯。2 は貼付口縁の杯または鉢。ハケ調整の高杯を含み、脚内面上端が杯部底と連結する部分を指でナデたり、粘土小円板を貼るものがある（5・9）。外面に煤、内面にコゲ痕が付く甕があり、15 の付帯状口縁や、13 の小さな凸面底が特徴的。凸面底の甕は中期中葉の立野遺跡 5 区 SI-21・29（内山 2005）や成願寺遺跡 16 号住居（篠原他 2000）に例がある。

第 62 表　権現山遺跡 4 区 SI-25　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　12.5 高　5.1 底　4.0	外底面は中央部がナデで弱く凹み、底面外周部を円周方向のヘラケズリ。外面体部はナデ後、中位にヨコヘラケズリ。内面体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部にヨコナデ。	10YR8/4　浅黄橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・黒・透明細～微粒少 やや硬質	床上 1cm 口 5/6 周、底全周 6、7
2 土師器 杯	口　復 12.5 高　残 5.0	体部内外面ナデ後、外面口縁部に粘土帯貼付し、内外面口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒少、白・黒・透明微粒微 やや硬質	口 1/8 周
3 土師器 杯	高　残 1.8 底　5.1	外面は体部・底部ともに円周方向のヘラケズリで、底面は弱い凹み底状にする。内面はナデ。内外面の体～底部全体にやや疎らなヘラミガキ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密 赤細粒と白・黒・透明微粒微 硬質	底 5/6 周
4 土師器 高杯	高　残 2.8 最大　残 13.2	外面タテヘラケズリ。脚内面上端ユビナデ。杯部内面ナデ後に疎らな多方向ヘラミガキ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　白・灰色・赤粗粒と黒・透明細砂少 硬質	杯底 1/3 周
5 土師器 高杯	口　19.3 高　14.7 底　13.6	杯部脚内面上端に薄い粘土塊を入れるので、脚部最上端と杯部との接合法は不詳。脚端部側から見て左回り（反時計方向）の巻き積みで脚部を倒立成形。外面は杯部に斜位ヘラケズリとナデ、口縁部と脚裾部ヨコナデ、脚部タテヘラミガキ。脚内面は巻き積みと裾部ヨコナデ。杯部内面はナナメナデ後に口縁部ヨコナデ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密 白・灰色礫と白・黒・透明粗～細粒多 硬質	貯蔵穴上面 ほぼ完形 口全周、脚裾 3/4 周 2
6 土師器 高杯	高　残 7.9 最大　残 9.6	脚部下位が屈折して外へ開く部分の内面が積み上げ休止面。外面は脚柱部タテヘラケズリ後、裾部タテヘラナデでややミガキ状の仕上がり。内面は脚柱部タテナデ後に裾部を成形してヨコナデ。	10YR4/2　灰黄褐 やや粗い　黒・白・透明粗～細粒多 硬質	脚柱 1/3 周



第 139 図　権現山遺跡 4 区 SI-25　遺構・遺物

7 土師器 高杯	口　19.1 高　15.3 脚裾　18.3 重　残 713.3	外面はナデと杯体部下端～杯底部ハケ調整、口縁と脚裾にヨコナデ。杯体部と脚部の外面に軽いタテヘラミガキ。脚部は脚裾から見て左回り（反時計方向）の紐積みで倒立成形して裾近くにヨコハケ後、裾部ヨコナデ。杯内面はナナメヘラナデとハケの後に口縁部ヨコナデ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　白粗～微粒多、透明粗～微粒と赤粒少 硬質	床上 2cm 口全周、脚裾 11/12 周 4、5
8 土師器 高杯	口　17.6 高　残 7.4	口縁部上半が内彎する。外底面に粘土を貼り足してから脚部を成形したか、またはこの粘土と一緒に別途成形した脚部を接合していると見られる。外面は杯部タテナデと脚～杯部下端ヘラケズリ。内面体部ヨコヘラナデとヨコナデ、底部多方向ナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	10YR7/6　明黄褐 緻密　赤粗～細粒と黒細砂少、白・透明細粒微 軟質	床上 6cm 口 11/12 周 3
9 土師器 高杯	口　20.3 高　16.4 ～ 17.3 脚裾　17.2 重　残 763.4	杯底面に脚裾から見て左回り（反時計方向）の紐積みで脚部を倒立成形し、杯底内面に粘土塊を充填して塞いだ後、雑なユビナデで脚内面上端を少しナデ。外面は全体にハケ調整後に口縁・脚端部と脚柱・杯底部をナデ消す。脚内面は紐積み痕をユビオサエし、脚裾部内外面にハケ調整。杯部内外面は口縁部ヨコナデ後、杯底部に横～斜位のナデ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・黒・透明細～微粒少、白・黒礫微 軟質	貯蔵穴上面 ほぼ完形 1、35.5-13.5
10 土師器 小形壺	高　残 5.4 最大　復 12	器面は内外面とも磨耗していて調整不詳。肩部内面にユビオサエ痕あり。	10YR7/6　明黄褐 やや粗い　赤粗～細粒と黒細粒少 軟質	頸～体 1/4 周
11 土師器 小形壺	高　残 4.2 頸　復 8.2	外面は頸部・体部タテヘラナデ後に頸～体部境をヨコナデ、内面は肩部ユビオサエ後に粘土紐積み上げ痕を残し、頸部ヨコナデ。	7.5YR5/6　明褐 やや緻密　赤粗粒多、白・黒細粒少 やや硬質	頸 1/4 周
12 土師器 小形壺	高　残 3.4 底　復 6.4 最大　復 9.0	外面体部ナデ後、底部に円周方向のヘラケズリ。内面はやや雑なヨコユビナデ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　透明・白・黒細～微粒と赤粗～微粒少 硬質	底 1/3 周
13 土師器 甕	口　復 19.3 高　残 30.4 底　復 6.6 最大　復 27.4	外底面は凸レンズ状に突出する。外面ナナメハケ後に下半部と底部ナナメヘラケズリ。内面は底部ハケ後ヘラナデ、中位ヨコヘラケズリ後ヨコヘラナデ、上位ナナメハケ。内外面口～頸部ヨコナデ。外面は口縁部から下へ 19cmまでに煤付着。内面は底から上へ 1 ～ 10cmにコゲ残存。	10YR5/4　にぶい黄褐 やや粗い　黒・透明細粒やや多、赤・白細粒と灰色礫少、赤礫微 やや軟質	床直上 口 3/4 周、底 1/3 周、頸 11/12 周 4
14 土師器 甕	口　復 19.2 高　残 3.5	口縁部が非常に厚い。内外面ともにヨコナデ。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　赤粗～細粒多、透明・黒粗～細粒少、灰色礫微 硬質	口 1/6 周
15 土師器 甕	口　復 18.3 高　33.4 底　6.4 最大　復 27.5	胴部中位に積み上げ休止面あり。外面は下半がおそらくタテヘラケズリ、上半が横～斜位ヘラナデ。内面は胴部中位の厚い部分がヨコヘラケズリ、それ以外がヨコヘラナデ。内外面口～頸部ヨコナデで、口縁外面を貼帯状にする。外面下位（底面から高さ 8cmまで）は被熱赤化で調整が不明瞭。外面口～頸部と肩部は煤が付着する。内面下半にコゲ少量（底面から上 12cmまで）。	7.5YR7/6　橙 粗い　赤粗～細粒と白礫～細粒多、灰色・透明礫～微粒と黒細粒少 やや軟質	床上 2cm 口 1/24 周、頸 1/4 周、底全周 6、35.5-13.5
16 土師器 大形壺	高　残 5.0 底　復 9.2	外面胴部はタテハケ後に斜～横位ヘラナデ。外底面は多方向のヘラナデまたはナデ。内面は多方向ヘラナデで、一部にヨコハケも混じる。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　赤・灰色粗～微粒少、黒・透明細～微粒微 やや硬質	底 1/4 周

4 区 SI-26（第 140・141 図、写真図版 47・48・122）

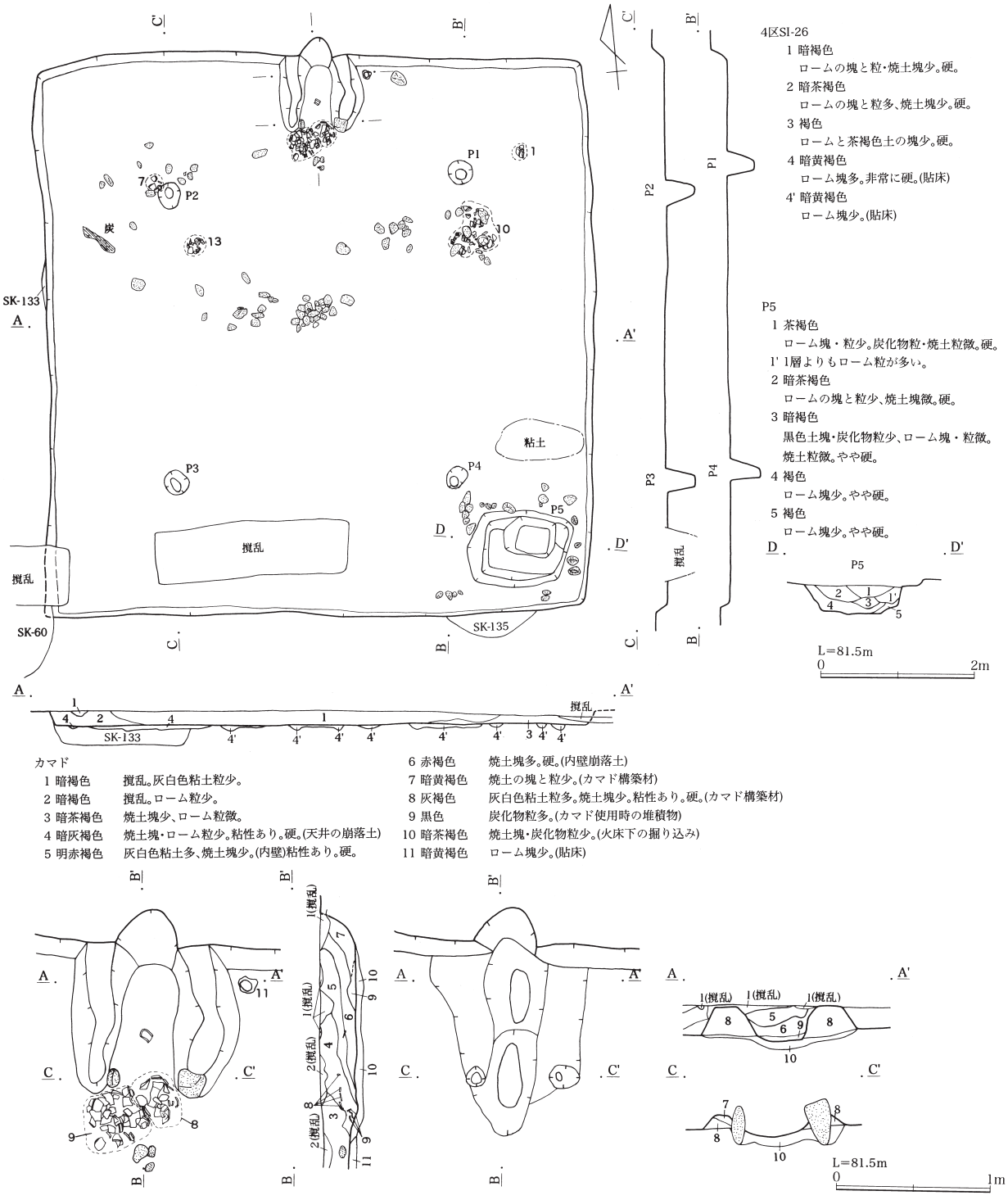
［**位置**］4 区中央部北寄りの台地平坦面東縁、35.0-13.0・13.5、35.5-13.0・13.5 グリッド。古墳後期の SI-103 が北 6.5m にあり、すぐ西に中期の SI-25 がある。床下で古墳時代の SK-135 と円筒形土坑 SK-133 を確認した。南東隅が SK-135 を切る可能性が高い。西壁中央が SK-133 を切る。現地所見では古墳時代の円筒形土坑 SK-60 に切られると記録しているが、重複部はわずかで詳細不明。南壁際中央と南西隅に撹乱がある。

［**規模と形状**］ほぼ方形で、中軸は N-5°-E である。東西長 7.11m、南北長 7.33m である。壁は直線的に外傾し、残存高 0.07 ～ 0.30m。緩斜面のため、北西隅で高く南東隅で低い。床面はほぼ平坦で、傾斜も認められない。掘方の緩い凹凸や SK-133 上を、ローム塊が多い暗黄褐色土で平坦に埋め戻して床面として、非常に硬く締まる。

主柱穴は 4 本（P1 ～ P4）。P1 は径 32 × 30 ×深さ 37cm、P2 は径 44 × 30 ×深さ 38cm、P3 は径 33 × 30 ×深さ 38cm、P4 は径 30 × 25 ×深さ 40cm。柱間は P1-P4 間 3.95m、P2-P3 間 3.75m、P2-P1 間 3.77m、P3-P4 間 3.58m。南北より東西間が 20cm ほど広く、P2 ～ 4 より P1 が 20cm ほど北東に寄るため、各主柱穴を結んだラインは若干歪んだ方形となる。

貯蔵穴 P5 が南東隅にある。東西軸の若干歪んだ長方形で 126 × 100cm、床面から深さ 35cm。底面北壁に接し 42 × 35 ×深さ約 3cm の方形の窪みがある。壁は南西が崩れるが、やや外傾し床に至る。P5 覆土上層の 1 ～ 3 層に炭・焼土を含む。

［**カマド**］北壁中央にある。天井や袖上半は崩れる。両袖幅 108cm、煙道先端から焚口まで 120cm。灰褐色粘土主体の 8 層で袖を竪穴貼床上に作る。焚口、火床および煙道立ち上がりを暗褐色の 10 層で埋め戻し、



第 140 図　権現山遺跡 4 区 SI-26（1）　遺構

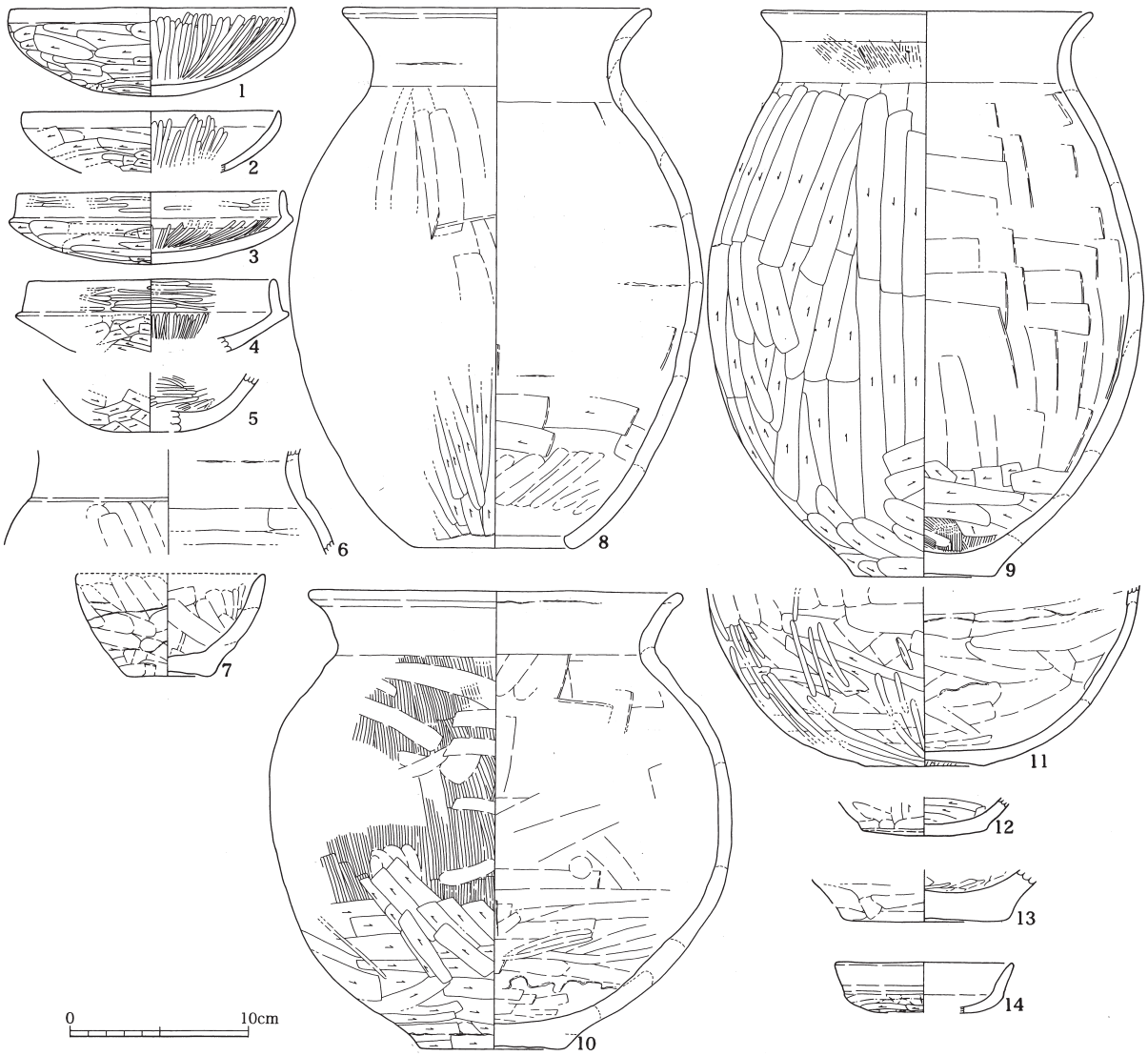
煙道は袖と同様の粘土を主体とする８層を貼る。４層が灰褐色粘土主体の天井崩落土、５・６層が内壁で、６層は焼土化が著しい。煙道は北壁を 23cm ほど「U」字状に掘り、火床から煙道は緩く曲線的に上がる。袖部先端の内側には長さ 25 ～ 30cm の河原石を立て焚口を補強する。カマド前面には２個の土師器がある。西側には口を西に向けてつぶれた甕９、東側には甑８を床面に倒立する。石とともに焚口に立てたか、または焚口天井の補強に使用した可能性がある。

［**覆土**］覆土は 3 層で、全体に少量のローム粒を含む。1・2 層に焼土粒、3 層に炭粒を含む。

［**遺物出土状況**］竪穴の中央部付近で出土した自然石は、その近辺の土師器と同じレベルで出土し、床面付近のものから 5 ～ 10cm ほど浮いたものまでがある。貯蔵穴周辺で出土した自然石は床面直上で、貯蔵穴を囲むような状況であるが、意図的に配置したものかどうかは不明である。カマドの遺物の状況はカマドの項で述べた。

［**出土遺物**］遺物はやや少なめである。図示していない 385 片（2,680g）の内訳は、杯 101 片（508g）、高杯 7 片（105g）、甑 33 片（335g）、甕壺類 244 片（1,732g）。ただし、中実で柱状脚の高杯破片や、オレンジ色の胎土を用いた古墳中期後葉頃の杯破片が少量ずつあり、これらは混入品と見られる。他に、縄文土器や縄文時代の黒曜石製スクレイパーなども混入していた。

杯はやや深身でよく磨き、漆仕上げされるものが多い。7 は仕上げが粗雑な小形土器。胴部径が口径より大きい長甕や甑が見られる。8 は口へ向けて開く通常の大形甑とは異なる甕のような形で、磨かない点も異例である。10 はハケ調整の丸甕。掲載した以外に、砥石が破損したものと見られる粘板岩の小剥片（長さ 2.5cm）が 1 点ある。



第 141 図　権現山遺跡 4 区 SI-26（2）　遺物

第 63 表　権現山遺跡 4 区 SI-26　出土遺物

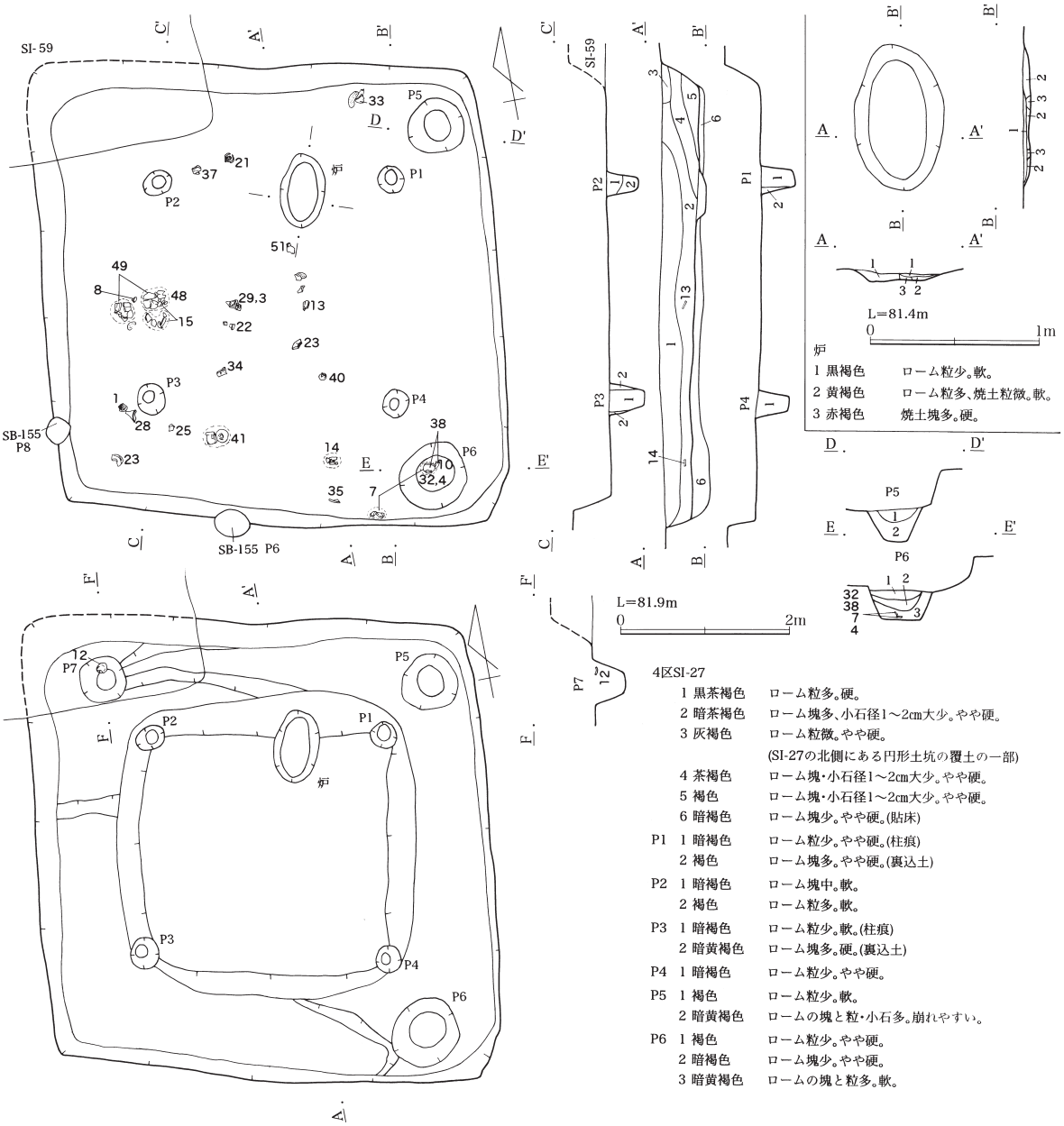
番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　15.6 高　4.9 最大　16.0	半球状で外面口～体部境にごく弱い稜あり。口縁部ヨコナデ後、外面ヨコヘラケズリ。内面は密な放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面に漆仕上げ。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密　黒・白・透明細～微粒少、灰色礫微 やや硬質	北東部床上 5cm 口 5/6 周 2
2 土師器 杯	口　復 14.2 高　残 3.4 最大　残 14.5	外面体部上端ナデ後、それより下にヨコヘラケズリ。内外面口縁部にヨコナデ、内面に密な放射状ヘラミガキ。外面上半と内面に漆仕上げ。	10YR5/2　黄褐 やや緻密　黒・透明粗～細粒やや多、白・赤・灰色細～微粒微　やや硬質	口 1/6 周
3 土師器 杯	口　復 14.7 高　4.0 最大　復 15.8	外面口～体部境に強い段あり。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面体部ヨコヘラケズリ、内面体部に密な放射状ヘラミガキ。外面上半と内面に漆仕上げ。	10YR5/3　にぶい黄褐 やや緻密　黒・透明細～粗粒多、白粗～細砂少 やや軟質	口 1/12 周、体 1/4 周
4 土師器 杯	口　復 13.8 高　残 4.0 最大　復 15.2	口～体部境の外面が強く突出する。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、外面体部ヨコヘラケズリ、内面体部ヨコナデ後に放射状ヘラミガキ。残存する内外全面に漆仕上げ。	10YR5/4　にぶい黄褐 やや緻密　黒・透明細～微粒多、白礫～細粒と灰色細粒少　軟質	口～体 1/6 周
5 土師器 杯	高　残 3.3	厚くて胎土がやや粗いので、鉢の可能性もある。外面は横～斜位のヘラケズリ。内面は底部に 1 方向と体部に横位の密なヘラミガキ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　透明細～微粒多、赤・白・黒粗～微粒少 硬質	胴下半 1/3 周
6 土師器 鉢	高　残 5.8 頸　復 14.6	薄手で、外面の頸～肩部間に浅い段あり。外面体部ナナメナデ、外面頸部と内面にヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒・透明・白・赤細粒少　やや軟質	頸 1/6 周
7 土師器 小形土器	高　5.7 底　4.7 最大　復 10.5	底部付近がやや厚く、外底面は上げ底状。仕上げナデ調整をすべて省略する雑な製品。口縁部のヨコナデも行っていないので、口縁部はあまり水平でなかった可能性があるが残存部が少なくて不詳。外面体部は左回り（反時計回り）の紐積み痕を残し、雑なナデ。外底面は無調整。内面はヨコヘラナデ後にナナメナデ。	5YR5/6　明赤褐 緻密　赤粗～細粒少、黒・白細粒微 やや硬質	北西部床直上～床上 7cmで周囲の石と同じレベル 口 1/36 周、底全周 7
8 土師器 甑	口　復 15.9 高　30.0 底　復 8.6 最大　復 23.0	外面は胴部上半ヘラナデと下半ヘラケズリ。内面は胴部ヨコヘラナデで、下位にはヨコヘラケズリとナナメナデ。内外面口～頸部にヨコナデ。二次的に被熱して脆くなった部分が多く、調整も不明瞭。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　白礫～微粒多、灰色・赤粗～細粒と黒・透明細～微粒少 軟質	カマド焚口部床直上～床上 13cm。口縁部を床に当てて倒立したものが潰れた状態 口 3/4 周、底 1/3 周 4、K
9 土師器 甕	口　復 18.4 高　31.4 底　7.8 最大　24.2	外面胴部は下半を上向きケズリ後、下端と上半を下向きにケズリ。外底面は多方向ケズリ後に軽いナデで少し凹む。口縁部は外面ナナメハケ後に内外面ヨコナデ。内面底部ナナメハケと胴部ヨコヘラナデの後に胴下位の積み上げ休止面付近をヨコヘラケズリで薄くする。外面のおおよそ下半が被熱する（底面から上方 7 ～ 18cm位まで）。	10YR6/3　にぶい黄橙 粗い　白・黒・透明・灰色礫～細粒多、赤細粒少 軟質	カマド南側床上 2 ～ 6 cmで、口縁を西に向けて横転し潰れた状況。床下から 4 片出土 口 1/2 周、底 2/3 周、頸全周 5、K、床下
10 土師器 甕	口　20.8 高　25.4 底　7.5 最大　25.5	外面は胴部タテハケ後、上半にナデと下半にヘラケズリ。外底面はほぼ 1 方向のヘラケズリで弱い凹み底。内面は胴部ヨコヘラナデ。口縁部内外面ヨコナデ。被熱痕はなく、焼成時の黒斑を内外面に残す。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　白・黒細～微粒と透明微粒多、赤細粒少 やや硬質	北東部床直上～床上 8cmで周辺の石と同じレベル 口 1/2 周、頸 5/6 周、底全周 1
11 土師器 大形壺	高　残 2.8 底　9.3	外面胴部下端ヨコナデ。外底面は乾燥時に付いた草本植物の茎圧痕を残す。内面底部 1 方向ナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　黒・透明粗～細粒多、赤灰色礫と白礫～細粒少　硬質	カマド東側床上 2cm 底全周 3
12 土師器 壺	高　残 2.1 底　6.9 最大　残 9.2	外底面に雑なナデ。外面胴部タテヘラケズリ・ヘラナデと胴部下端ナデ。内面に横位のナデとヘラケズリ。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや緻密　白・黒・透明細粒少、赤灰色礫と白粗粒微 硬質	底 1/2 周
13 土師器 壺	高　残 10.0 底　6.6 最大　復 24.0	薄手で丁寧な製品。底部はほとんど突出しない。外面は横～斜位のヘラナデ（一部ヘラケズリ）後にタテヘラミガキ。外底面は 1 方向の密なヘラミガキ。内面ヨコヘラナデ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒・透明細～微粒やや多、白細粒少 やや硬質	床直上～床上 6cm 胴 1/4 周、底全周 8
14 土師器 杯	口　復 10.0 高　残 2.8	外面口～体部境にごく浅い 1 段または 2 段を持つ。外面体部上端は雑なナデで、それより下部にヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面全面にヨコナデと漆仕上げ。古墳時代終末期の遺物が混入した可能性もある。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒細砂やや多、白・透明細～微粒少、赤粗粒微　軟質	口 1/6 周

4 区 SI-27（第 142・143 図、写真図版 48・49・122・123）

［位置］ 4 区中央部北寄りの台地平坦面、35.5-12.5 グリッド。古墳中期の SI-14・25 が南西と南東にある。南と東に古墳後期の SI-74・103 がある。古墳後期の SI-59 に切られる。西壁部が時期不明の SB-155 の柱穴と重複するが、両者の前後関係は不明である。

［規模と形状］ やや歪んだ方形で、中軸は N-11゜-E。東西長 5.42m、南北長 5.40m である。残存壁高は 0.29 ～ 0.45m。北・西壁は外傾する。床面はほぼ平坦である。床下の掘方は、中央部で床面から深さ 6 ～ 10cm、外周部分で深くなり 10 ～ 20cm である。ローム塊を少量含む暗褐色の 6 層で硬く埋め戻されている。

主柱穴は 4 本（P1 ～ P4）。P1 は径 33 × 30 ×深さ 41cm、P2 は径 35 × 27 ×深さ 38cm、P3 は径 38 × 32 ×深さ 42cm、P4 は径 33 × 29 ×深さ 40cm。柱間は P1-P4 間 2.65m、P2-P3 間 2.53m、P2-P1 間



第 142 図　権現山遺跡 4 区 SI-27（1）　遺構

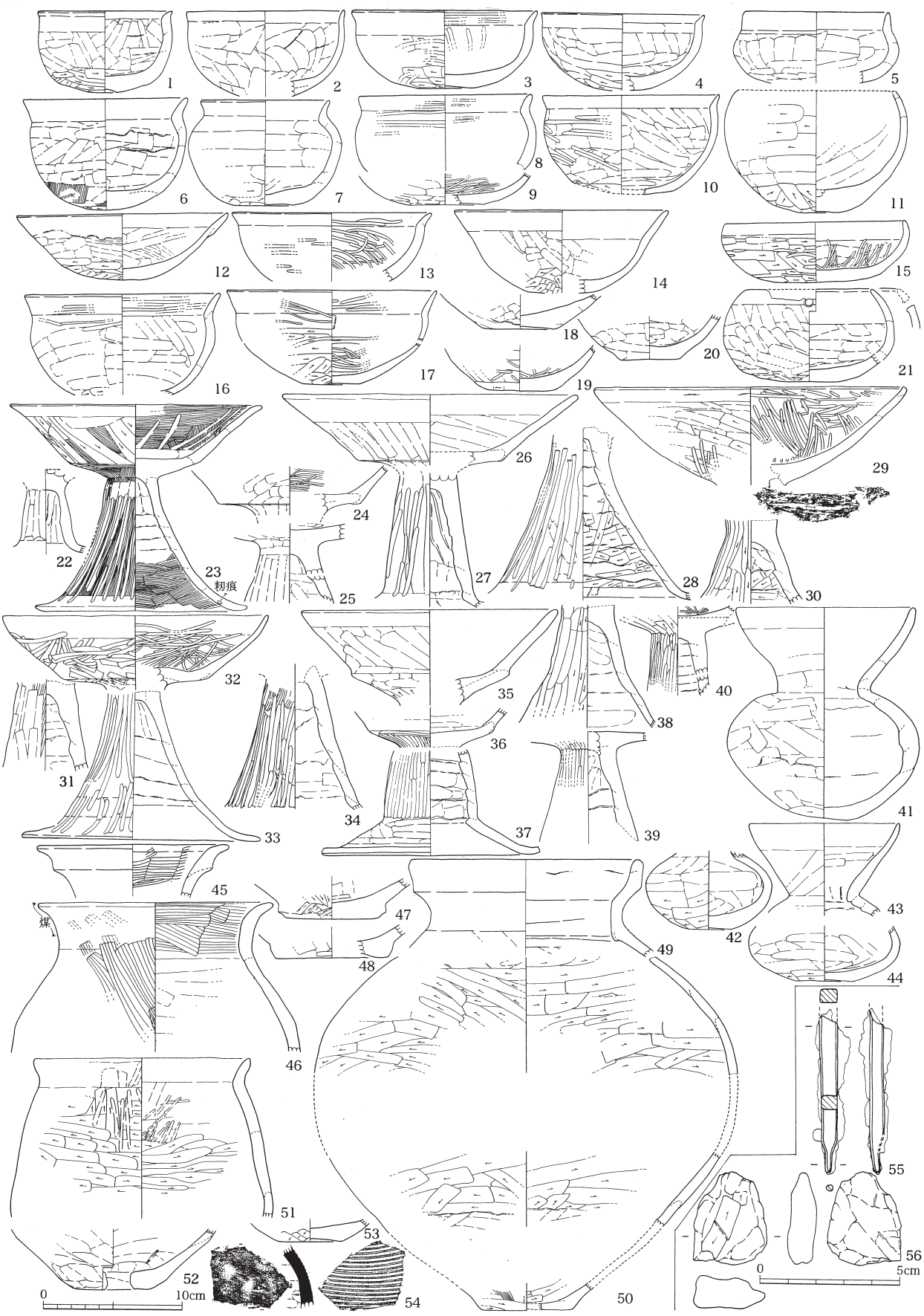
2.73m、P3-P4 間 2.88m で南北より東西間がわずかに広く、平面形同様、やや歪んで配置する。

3 箇所ある貯蔵穴のうち、北西隅の貯蔵穴 P7（56 × 53 ×深さ 39cm）は完形の土師器杯（12）が入ったまま埋め戻されていたもので、貼床を除去した下で確認した。南東の P6（80 × 73 ×深さ 42cm）と北東の P5（67 × 64 ×深さ 40cm）が、この建物の最終時期に伴う。張出ピットも含め複数貯蔵穴を持つ建物は、4 区 SI-7・13・27・29・SI-30b・32、SG1 区 SI-2 があり、杉村遺跡 GN1 区にも多い。

［炉］北側主柱穴 P1・P2 間のやや東寄りで地床炉を確認した。87 × 53cm の楕円形で、床面を 6 ～ 8 cm 掘り込む。2・3 層は焼土化・硬化・赤変する。

［覆土とテフラ］ 1 ・ 2 層はロームの粒や塊が多く、古墳後期初頭の FA テフラを含む可能性もある。

［遺物出土状況］8・15・48・49 は西部で床面から高く浮き、他個体の壺破片などと一緒にまとまっていたので、この遺構に伴う保証はない。12 は貯蔵穴 P7 とともに埋め戻された完形の杯。51 は接合する 1 片だけが SI-29 で出土した。



第 143 図　権現山遺跡 4 区 SI-27（2）　遺物

［**出土遺物**］量が比較的多い。図示していない 716 片（7,652g）の内訳は、杯および鉢 373 片（2,333g）、高杯 75 片（796g）、中～小形壺 6 片（76g）、大形壺 70 片（2,128g）、甕 182 片（2,097g）、甑 10 片（222g）。杯類は、内斜口縁で凹底の椀形杯が最も多く、平底・丸底も少量含む。図示した以外に杯底部が 7 片あり、内訳は凹底 3 点・平底 3 点・丸味ある平底 1 点である。12 は貼付口縁状。半球状の 15 は床から 24cm 浮いて出土し、時期が下がるかもしれない。21 は焼成前に 2 孔をあけた小形鉢で、SG1 区 SI-1 や、近辺では成願寺遺跡 38・88 号住居にもある（篠原・杉浦他 2000）。杯部と脚が接合しない高杯が多い。29 が破面を研磨具に使うように、破片を遺棄したものが多いであろう。22 だけは短脚。胎土に混和した稲籾痕（23）は、4 区 SI-4 の甕などにもある。28 と 30 は脚内面を削り、31 と 34 は脚上部に少しハケ目を残す。26 と 27、43 と 44 は同一個体の可能性がある。41 は不整尖底状の小形壺。42 の小形壺内面に、漆または黒色樹脂の薄い膜状物が付着する。45 は外面が有段口縁状。受口状の大形壺（49）は 4 区 SI-5 などにある。ハケ調整の甕は 46 よりさらにハケが粗いものが他に数片ある。小形甑（52）は、4 区 SI-3 などにある。55 は鉄鏃かもしれないが不確実。焼粘土塊が 1 点ある（56）。

第 64 表　権現山遺跡 4 区 SI-27　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　9.6 高　5.8 底　1.9	口縁部内外面が外に折れるように外反する。外面は体部に横～斜位ナデ後、下半部ヨコヘラケズリ。底面は小さく抉って凹底にする。内面は体部に横～斜位と底部に多方向のヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白・透明微粒多、黒細～微粒と赤細粒少 硬質	床上 10cm 口 1/2 周、底全周 24
2 土師器 杯	口　復 11.2 高　残 6.1	口縁部の外反は内面側の稜が比較的明瞭。外面は磨滅しているがおそらくナデ調整と底部ヘラケズリ。内面体部ヘラナデ。内外面口縁部にヨコナデ。	7.5YR6/6　橙 粗い　白・赤・透明粗～細粒多、黒細粒少 軟質	口 1/6 周
3 土師器 杯	口　復 13.2 高　残 5.5 底　3.8	外面は体部ヨコヘラケズリ後にやや疎らなヘラミガキ。外底面は凹底状に削る。内面は体部ナデまたはヘラナデ（?）の後にタテヘラミガキ。口縁部は内外面ヨコナデ後、内面ヨコヘラミガキ。	5YR5/6　明赤褐 緻密　赤粗粒と黒・白・透明微粒微 やや硬質	床上 8cm 口 1/6 周、底全周 11
4 土師器 杯	口　復 11.6 高　残 5.5	口縁部の外反は内面で明確な稜を持ち、外面では緩やか。外面は体部ナデ後、底部に 1 方向ヘラケズリ。内面は体部に斜位と底部に多方向のヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	5YR6/6　橙 やや緻密　白・黒・透明細～微粒少、白礫微　やや硬質	南東貯蔵穴底上 3cm 口 1/2 周 29
5 土師器 杯	口　復 10.4 高　残 5.1 最大　復 11.7	口縁部は内面側が弱く外反し、外面側は直立気味。口～体部境の内外面に弱い稜あり。体部は外面に縦および横位、内面に横位のヘラナデ。口縁部内外面ヨコナデ。内外面に煤（?）少量付着。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　赤・白粗～細粒と黒細粒少　やや軟質	口 1/6 周、体 1/4 周
6 土師器 杯	口　11.7 高　7.9	外面は下位に縦～斜位ハケメ後、底部に多方向ヘラケズリと体部ヘラナデ。内面ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	2.5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白・黒細～微粒と透明粗～微粒多、赤細粒微　やや硬質	口 11/12 周
7 土師器 杯	口　復 9.2 高　7.5 底　4.0 最大　10.9	少し凹底状。外面は体部に横位と底面に 1 方向のナデ。体部下位ナナメヘラケズリ。内面は体部に横位と底部に多方向（?）のナデ。内外面口～頸部ヨコナデ。外面口～体部下位には破片化する前の段階で煤が付着し、部分的に被熱して煤が消失している。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密　赤粗～細粒と透明細粒やや多、黒・白細粒少 やや軟質	床上 6cmと南東貯蔵穴底上 3cmが接合 口 1/6 周、底全周 28、29
8 土師器 杯	口　復 12.3 高　残 5.4 最大　残 12.8	内外面の口～体部にヨコヘラミガキ。内外面とも器面が剝落して調整が不明瞭な部分が多い。	7.5YR6/4　にぶい橙 緻密　白・黒細～微粒少 軟質	床上 30cm 口 1/12 周、体 1/2 周 7
9 土師器 杯	高　残 2.2 底　復 5.5 最大　残 12.2	外底面は 1 ～ 2 方向のヘラケズリで広い凹底にする。外面体部はヨコヘラケズリ後にヨコヘラナデで平滑に仕上げる。内面は密な多方向ヘラミガキ。	10YR5/2　灰黄褐 緻密　白・透明微粒少、白・赤粗粒微 やや硬質	底 1/3 周
10 土師器 杯	口　12.6 高　7.1 底　7.1	外面底部は凸面状で、不定方向の雑なヘラケズリ。外面体部は横位のヘラナデ後ヘラミガキ。内面は底部に 1 方向と体部に横～斜位のヘラナデ。内外面口縁部にヨコナデ。	10YR5/4　にぶい黄褐 やや緻密　白・透明粗～細粒少、白・灰色礫と黒細粒微 やや硬質	南東貯蔵穴底上 9cm 口 5/6 周、底 11/12 周 30
11 土師器 杯	口　復 10.8 高　8.7 底　2.9 最大　13.0	口縁端部が磨滅して本来の器面が残らないので、接合部で破損した小形壺の可能性も残る。口端付近が薄くなる状況や水平な点から、鉢であると判断した。外面は体部上位と下位をヘラケズリし、他はおそらくナデ。底部は狭い凹み底。内面は右上方向への強いヘラナデ。内外面とも器面が剝落しており、調整不明瞭。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　白・赤・透明粗～微量と黒細粒少、白・灰色礫微 硬質	口 1/6 周、体 1/2 周、底全周
12 土師器 杯	口　15.0 高　4.7	口縁部は外面が貼付帯で厚くなり、内面は稜を持って外へ折れる。 外面は体部ヨコヘラナデ後、底部に 1 方向と体部下位に横位のヘラケズリ。内面は体部ナナメヘラナデ。体部のヘラナデ後に口縁帯を貼って内外面ヨコナデ。	10YR8/4　浅黄橙 やや緻密　白・黒・透明細～微粒少 やや硬質	北西貯蔵穴底上 12cmに埋納 ほぼ完形 31
13 土師器 杯	口　復 14.2 高　残 4.7	口～体部境の稜は外面より内面がより明瞭。体部外面はおそらくナデかヘラナデ後にヨコヘラミガキしているが、磨滅して不明瞭。体部内面はナナメヘラミガキ。口縁部内外面ヨコナデ後、内面ヘラミガキ（外面も磨く可能性あり）。	5YR6/6　橙 緻密　赤・透明細～微粒多、赤粗粒と黒・白・赤細粒少 硬質	床上 11cm 口 1/12 周、頸 1/4 周 17
14 土師器 杯	口　復 15.2 高　残 5.9	口縁部が長く外反し、体部との境の稜は内面側だけに見られる。外面体部はヘラナデおよびヘラケズリと見られるが磨滅が著しくて不明瞭。内面体部ナナメヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	5YR7/8　橙 やや緻密　白・透明細～微粒多、黒・赤細～微粒微 軟質	床上 7cm 口 1/3 周 26

15 土師器 杯	口　12.8 高　4.3 最大　13.4	半球形を少し扁平にした形で、口縁部は外面に少し稜を持って内彎する。外面は口縁部ヨコナデ後に底部２～３方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体部ヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。内面にやや密な縦～斜位と外面に疎らな横位のヘラミガキ。	5YR6/6　橙 やや緻密　白・透明細～微粒多、白・赤粗粒と黒細粒少 硬質	床上 24 ～ 26㎝が接合 口 3/4 周 6、10
16 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 7.2	外面は体部ヘラナデと下位ヨコヘラケズリ。内面は体部ヘラナデで、ややミガキに近い光沢のある仕上げ。内外面口縁部はヨコナデおよび外面肩部も含めてヨコヘラミガキ。	10YR7/3　にぶい黄橙 緻密　黒・透明細～微粒と赤細粒少 やや軟質	口 1/4 周、頸 1/3 周
17 土師器 杯	口　復 14.9 高　残 6.5 底　4.0	体部中位の接点がないので器高は想定。外反する口縁部から体部への稜線は外面より内面が明瞭。外面は底部に１方向と体部に横位のヘラケズリで平底にする。体部内面ヨコヘラナデと口縁部内外面ヨコナデ。口～頸部内外面ヨコヘラミガキ、体部内面多方向と底部内面１方向のヘラミガキ。	5YR4/4　にぶい赤褐 やや緻密　白・赤粗～微粒と黒・透明細～微粒少 硬質	口 1/3 周、底全周
18 土師器 杯	高　残 2.5 底　5.1 最大　復 11.4	磨滅のため調整不明瞭。外底面は凹み底で、ヘラケズリしている可能性がある。	5YR6/6　橙 やや緻密　白・灰色粗～細粒多、半透明・黒細粒微 硬質	底 1/2 周
19 土師器 杯	高　残 3.3 底　5.0	底部が円板状に弱く張り出し、底面は丁寧なナデ。外面体部ナナメナデ後に体部下端と底面外周を円周方向のヘラケズリ。外面に疎らなヘラミガキ。内面ナデ後、やや放射状に近いヘラミガキ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　黒・白粗～細粒少 やや軟質	底全周
20 土師器 杯	高　残 3.1 底　4.2	底部が弱く突出気味。外底面は粗いヘラナデ。体部外面ナデ、体～底部内面ヨコヘラナデ。古墳後期の遺物が混入した可能性もある。	10YR7/3　にぶい黄橙 緻密　白・透明粗～細粒と黒・赤細粒少、赤礫微 やや硬質	底全周
21 土師器 鉢	口　復 9.0 高　6.6 最大　12.1 孔　約 0.6	口縁部に２個の孔が向かい合って存在する。焼成前の軟らかい時点で丸棒を外側から刺して引き抜くことで穿孔している。外面は底部にやや雑なヘラナデ後、乾燥時に敷いた草本植物の茎圧痕あり。体部外面ナデ、体～底部内面ヘラナデ（一部ナデ）、口縁部内外面ヨコナデ。	10YR6/4　にぶい黄橙 緻密　黒・透明微粒多、白細～微粒少 硬質	床直上で正立 口 1/4 周、体 2/3 周 3
22 土師器 高杯	高　残 5.9 最大　5.2	やや薄く軽い。脚内面はタテナデ後、絞り目状のタテジワを生じる。外面は脚柱部タテヘラナデと裾部ヨコナデ。杯部内面だけは浅黄橙色（7.5YR8/4）で、他は灰色。	2.5Y4/2　暗灰黄 やや粗い　白粗～微粒多、黒・透明細～微粒少 やや軟質	床面直上 脚柱全周 13
23 土師器 高杯	口　18.1 高　14.6 脚裾　15.1	脚部は倒立成形。外面はタテハケ後に杯部底面外周ヨコハケ。杯部外面は縦～斜位のハケ後にヘラケズリ。口縁部と脚裾部ヨコナデ。杯部内面は体部に横位と底面に多方向のハケメ後、体部に縦位と底面外周に横位のナデ。脚部内面は上半部ユビオサエの後に下半部を成形してヨコハケ。脚裾付近に胎土中に混和した稲籾の痕跡が１箇所あり。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　白・透明礫～細粒と黒細粒多、赤細粒少 硬質	杯部は中央床面、脚部は南西部床上 18㎝ 口 1/2 周、脚裾 3/4 周 18、25
24 土師器 高杯	高　残 3.5 杯底　復 10.2	杯底部外面タテナデ後に杯体部を成形した時の接合痕をナデ消さないで外面杯底部外周に残す。杯体部は外面にナデ、内面に横～斜位のヘラミガキ。	10YR8/4　浅黄橙 緻密　赤粗～細粒と黒・透明微粒少 やや硬質	杯底 1/3 周
25 土師器 高杯	高　残 5.7 最大　残 7.4	脚部外面はタテヘラナデ、杯底部外面はヨコナデ。杯底部内面は１方向、杯体部内面は横位のヘラナデ。脚内面は上半部タテナデ、下半部ヨコおよびナナメナデ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白・黒・赤細粒と透明微粒少、白礫微 やや軟質	床上 6㎝ 脚柱全周 22
26 土師器 高杯	口　復 21.0 高　残 5.1 杯部底　復 10.2	27 と同一個体の可能性あり。杯内面ナデ。杯部外面は縦～斜位のヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　透明粗～微粒と白粗～細粒少 軟質	貯蔵穴内 口 5/12 周 北東貯
27 土師器 高杯	高　残 9.4	26 と同一個体の可能性あり。脚部は倒立して成形する。脚内面は上半部が雑なタテユビナデ、下部ではやや雑なユビオサエ。脚外面はタテヘラケズリの後にヘラミガキ状のやや細いヘラナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　透明細～微粒と白粗～細粒多、黒細～微粒少 やや軟質	脚柱
28 土師器 高杯	高　残 12.3 最大　14.4	外面はナデ後に裾部をヨコナデし、やや間隔を空けたタテヘラミガキ。倒立状態で左回り（下から見て反時計方向）に積み上げた粘土紐痕を内面に残し、脚下半部の内面は主に横位のヘラケズリ。脚柱部上端の外面は杯部との接合を補強する補充粘土が剝落した痕あり。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤・白粗～微粒と黒・透明細～微粒少 硬質	床上 6㎝ 脚柱全周 23
29 土師器 高杯	口　復 22.3 高　残 7.0	外面は斜位のヘラナデ後ヘラケズリ、下半部に縦～斜位ヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。内面はヨコナデ後、底部に１方向・体部に斜位・口縁部に横位のヘラミガキ。底部の破片の破面を研磨具として使用した痕あり。	2.5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白・灰色粗～細粒多、黒・透明微粒微 硬質	床上 8㎝ 口 1/4 周 11
30 土師器 高杯	高　残 6.0 最大　残 7.3	脚柱上端部内面を紐積み成形後にナナメナデし、それより下は紐積み痕を残したまま横～斜位のヘラケズリ。外面はタテヘラケズリ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　赤粗～細粒多、赤礫少 硬質	脚柱上半全周
31 土師器 高杯	高　残 6.6 最大　復 6.0	内面下位には粘土紐積み上げ痕を残し、軽いヨコナデ。内面は上部にタテハケを残し、下部寄りではヘラナデでハケを消す部分がおそらく半分程度見られる。	7.5YR7/6　橙 緻密　赤粗～微粒多、白礫～細粒と黒細粒・透明微粒少 やや軟質	脚部上半全周
32 土師器 高杯	口　復 18.9 高　残 5.3 底　復 10.2	残存部で見る限りでは、別造りの脚部を杯底面に貼り付けた可能性がある。外面杯底部は多方向のヘラナデ。杯体部は内外面ともにナデ後口縁部ヨコナデ、横～斜位ヘラミガキ。杯底部内面はおそらく多方向ヘラミガキ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　黒・白・透明細粒と赤粗～細粒微 やや軟質	南東貯蔵穴底上 3㎝ 口 1/3 周、杯底 1/2 周 29
33 土師器 高杯	高　残 10.4 脚裾　復 17.0	脚部上端はおそらく粘土筒の一端を粘土塊で埋めて成形した後に、内面タテナデ。倒立状態で左回り（下から見て反時計方向）に積み上げた粘土接合痕を内面に残す。外面ナデと内外面の裾部に幅広いヨコナデの後、外面タテヘラミガキ。	7.5YR5/8　明褐 やや緻密　白・黒・透明細～微粒と赤・灰色粗粒少、白礫微 やや硬質	床上 8㎝ 脚裾 1/3 周、脚柱全周 1、北東貯
34 土師器 高杯	高　残 10.4 最大　残 9.8	外面は杯底との接合部にタテハケ後、脚部タテヘラミガキ。内面は粘土紐積み上げ痕をかなり残すが巻き積みの方向は不明で、やや雑なナデと下半部ヨコヘラナデ。	5YR7/6　橙 やや緻密　黒・白・透明細粒と赤粗～細粒少 軟質	床上 2㎝ 脚部上半全周 20
35 土師器 高杯	口　復 18.2 高　残 6.5	杯底部外面が段状になる。外面杯底部タテヘラケズリ後に外周部をヨコナデ。外面杯体部ナナメヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。内面は磨滅して調整不明。	2.5YR6/8　橙 やや粗い　赤粗～細粒多、白・黒・透明細粒少 軟質	口 1/2 周 27

36 土師器 高杯	高　残 2.8 底　復 8.9	杯底部外面に脚を接合または成形したと思われる。外面は杯体部ヨコナデ、杯底部に密な放射状ヘラミガキ。内面は杯底部 1 方向と体部に横位のナデ。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや粗い　白・透明細～微粒多、赤粗～細粒と黒細粒少 硬質	杯底 1/3 周
37 土師器 高杯	高　残 7.4 脚裾　復 15.5	脚柱部の径が大きい。薄手で丁寧。倒立状態で左回り（下から見て反時計方向）に粘土紐を積み上げて、軽いナデ調整。脚柱部のヨコナデは外面で狭く内面で広い。脚柱部外面は密なタテヘラミガキ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白・透明粗～微粒多、白礫と黒細粒少 やや硬質	床上 30㎝ 脚柱 7/12 周、脚裾 1/12 周 4
38 土師器 高杯	高　残 8.8 最大　残 9.7	脚柱上端部内面に強いナナメユビナデ後、倒立状態でおそらく左回り（下から見て反時計方向）に積み上げた粘土紐痕を内面に残し、軽いヨコナデ。外面はタテヘラケズリ。	7.5YR5/6　明褐 粗い　赤粗～細粒多、白・黒・透明細～微粒少 やや軟質	南東貯蔵穴底上 3 ～ 9㎝が接合 脚柱上半全周 29、30
39 土師器 高杯	高　残 7.8	外面は杯底部に放射状ヘラケズリ、脚柱部タテヘラミガキ（ただし下半は磨滅して不詳）。杯内面底部は多方向ヘラナデ（?）。脚内面はナナメユビナデと紐積み痕。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　白・赤粗～細粒多、黒・透明細砂少 軟質	脚柱 1/2 周
40 土師器 高杯	高　残 6.4	杯底部～脚部を倒立成形した後に、杯体部を追加成形することがわかる。外面は杯底部を放射状にヘラケズリ、脚柱部はおそらく上向きのヘラケズリ後に密なタテヘラミガキ。杯内面底部は中凹み形になるように粘土を貼って成形し、多方向ヘラミガキ。脚内面は粘土紐積み上げとヨコナデを交互に行う。	5YR4/4　にぶい赤褐 やや緻密　白・灰色粗～細粒、黒細粒、透明微粒少 硬質	床上 15㎝で逆位 脚柱全周 19
41 土師器 小形壺	口　12.8 高　15.5 底　4.0 最大　13.7 重　567.3	体部外面におそらくヘラナデの後、底部付近に大きな単位のヘラケズリをして不整な凸面の底部形状に仕上げる。体部内面ナデ。頸部は磨耗のため調整不明瞭だが、おそらく内外面ともにヨコヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。	10YR8/4　浅黄橙 やや緻密 赤粗～細粒と黒・透明粗～細粒多 やや軟質	床上 5㎝で少し傾く 体部と床上 7㎝の頸部が接合 完形 21
42 土師器 小形壺	高　残 5.6 底　3.2 最大　復 9.0	外面体部ナデ後、下半部に横～斜位と外底面に多方向のヘラケズリ。底面はわずかに凹面状。内面底部に黒色の樹脂状物質が薄く付着するので漆などを入れたのかもしれない。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　白・黒・透明粗～細粒多、白・灰色礫少 やや硬質	南東主柱穴内 底全周、体 1/3 周 P4
43 土師器 小形壺	口　復 10.8 高　残 6.5	44 と同一個体の可能性あり。頸部外面に斜位（?）のナデ、内面に縦位のヘラ圧痕。内外面口縁部ヨコナデ。肩部内面に紐積みとユビオサエの痕あり。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　黒・赤・透明粗～細粒少 軟質	口 1/3 周、頸全周
44 土師器 小形壺	高　残 3.9 底　4.0 最大　復 10.8	43 と同一個体の可能性あり。外面ヨコヘラナデ、外面体部下端と外底面に円周方向のヘラケズリ。内面体部ナデ。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤・黒粗～細粒と透明細粒少 軟質	底全周、体 1/4 周
45 土師器 壺	口　復 13.7 高　残 3.7	口～頸部境の外面に段あり。外面ヨコナデ、内面頸部ヨコハケ後に口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや粗い　白・灰色・透明粗～細粒と黒細粒やや多 硬質	口 1/18 周、頸 1/6 周
46 土師器 甕	口　復 16.8 高　残 10.6 最大　残 20.6	外面ナナメハケ後に口～頸部をヨコナデし、再び頸～肩部にナナメハケ。内面は胴部ヨコヘラナデ、口～頸部ヨコハケと口縁部に軽いヨコナデ。外面に煤が付着し、口縁部に目立つ。	10YR5/3　にぶい黄褐 粗い　白・灰色粗粒と白・黒・透明細粒多、白・灰色礫少 軟質	口 1/4 周
47 土師器 甕	高　残 2.9 底　復 7.6	外底面は 1 方向ヘラケズリ。外面胴部下端ナナメヘラケズリ。内面は多方向のヘラナデおよびヘラケズリ。	10YR6/4　にぶい黄橙 粗い　白・黒・透明細～微粒多、白礫少 やや硬質	底 7/12 周
48 土師器 甕	高　残 2.3 底　復 8.0	外底面は中凹みで外周に雑なヘラナデか擦痕。内外面胴部ヘラナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　白礫～微粒と透明・黒細～微粒少 硬質	床上 24㎝ 底 1/3 周 6
49 土師器 大形壺	口　16.0 高　残 6.8 最大　16.7	受口状で口縁部外面は直立または少し開き気味。胴部内外面は斜位のナデまたはヘラナデ。口～頸部の内外面はヨコナデ。胴部破片は出土していない。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い 白粗～細粒と黒・透明細～微粒多 やや軟質	床上 24 ～ 35㎝が接合 口 5/6 周 6、8
50 土師器 甕	底　復 6.4 最大　復約 30	破片が不足しているので形状は推定。大きさの割に薄い。外面は胴下端にタテハケ後ヨコヘラケズリ、胴部ヨコヘラケズリ。胴部の残存上端はナデなので頸部が近いと見られる。外底面は円周方向のヘラケズリ。内面はヨコヘラケズリ。胴部中位の外面に煤が付着するが、底部付近に被熱痕は認められない。	5YR4/4　にぶい赤褐 やや粗い　白・赤礫～粗粒と白・透明細粒多 やや硬質	底 1/6 周、胴 1/8 ～ 1/12 周
51 土師器 甑？	口　復 15.2 高　残 11.4 最大　復 18.6	外面は胴部タテヘラケズリとタテヘラナデを少しまじえるが、大半はヨコヘラケズリ。内面はヨコナデ後、肩部の厚い部分にヨコヘラケズリ、その上方にナナメヘラナデ。口縁部は内外面ヨコナデで、外面にユビオサエ痕や擦痕を残す雑な仕上げ。	2.5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白礫～細粒多、黒・透明粗～細粒少、赤・灰色粗粒微 硬質	床上 8㎝。SI-27 の 7 片と SI-29 の 1 片が接合 口 1/12 周、頸 1/8 周、肩 1/4 周 5、SI-29
52 土師器 小形甑	高　残 4.3 底　5.4 孔　1.6 最大　残 14.6	外面体部は丁寧なユビオサエとナナメナデ。外底面は雑なナデ。内面体部ヨコおよびナナメナデ。孔縁部はヨコナデ。口縁部破片も 4 片あるが、同一個体かどうか不確実。	5YR4/4　にぶい赤褐 緻密　白・透明細～微粒と赤粗～細粒少 やや軟質	口 1/6 周、底 2/3 周
53 土師器 杯	高　残 1.6 底　復 4.5 最大　復 8.4	外底面は凹み底で丁寧なナデ。体部は外面がナナメヘラケズリ。体～底部内面は主に円周方向のナデ。古墳後期の遺物が混入した可能性あり。	10YR6/3　にぶい黄橙 緻密　黒・透明微粒と白細粒と赤粗～細粒少 軟質	底 1/3 周
54 須恵器 壺か瓶	高　残 4.5 最大　復20～25	外面カキ目。内面は緩い回転ナデおよび回転を利用しない横位ナデ。外面に黒色の自然釉がごく少量あり。軸を 90°倒して使う古墳後期の瓶類になる可能性あり。	2.5Y6/2　灰黄 緻密　白細粒と透明微粒少 硬質	胴部片
55 鉄製品 不明	長　残 58㎜ 幅　6 ～ 7㎜ 厚　4 ～ 5㎜ 重　残 5.5	幅よりも厚さがやや薄い断面長方形。図下端の残存する端部に近づくと細くなって断面円形になり径約 2.7㎜。この部分を茎と考えると鉄鏃の可能性がある。太い部分と細い部分の間には明確な段や稜を持たない。木質等の有機質は認められない。		片端部欠
56 土師質 焼粘土塊	長　3.3 幅　2.6 厚　1.2 重　7.4	左図に示した面にヘラケズリ調整痕あり。他はユビオサエ。普通の焼粘土塊のように粉っぽい胎土ではない。草本植物の茎等が少量混ぜられている疑いあり。	5YR4/6　赤褐 やや緻密　白・赤粗～細粒と黒・透明微粒少 硬質	完形

４区 SI-28（第 144・145 図、写真図版 49・50・123）

［位置］ ４区北端の台地平坦面、36.0-12.0･12.5、36.5-12.0･12.5 グリッド。古墳中期の SI-10 が南西にある。西・東・南に後期の SI-2・31・59、西と南に古墳時代の円筒形土坑 SK-114・116、北に時期不明の SK-44 がある。重複はない。

［規模と形状］ 方形で、中軸は N-1°-W。東西長 4.1m、南北長 4.1m である。壁は直線的に外傾し、残存高 0.35 ～ 0.48m。床面はほぼ平坦だが、南半は壁周辺が中央より５～ 10cm 高く、緩い傾斜がある。掘方底面は緩い凹凸があり、床面から深さ４～ 10cm。ローム塊が多い暗黄褐色の８層でほぼ全体を貼床する。

主柱穴は４本とも地山礫層まで掘ったところで底面としている。P1 は径 18 × 16 ×深さ 32cm、P2 は径 20 × 12 ×深さ 38cm、P3 は径 20 × 18 ×深さ 28cm、P4 は径 22 × 20 ×深さ 22cm。貯蔵穴に接する南東の P4 が他の３本より浅い。柱間は P1-P4 間 1.76m、P2-P3 間 1.82m、P2-P1 間 1.74m、P3-P4 間 2.12m。カマドと貯蔵穴の位置関係から南東の P4 が約 30cm 東壁方向に寄るため、P3-P4 間が他より長い。

貼床除去後、西壁際ほぼ中央で間仕切溝 D1 を確認した。長さ 110 ×幅 20 ×床からの深さ 15cm（掘方底面からは深さ 5cm）ほどである。貯蔵穴 P5 は南東隅寄りにある。東西軸の長方形で 96 × 80cm、床から深さ 28cm。底面内側の規模は 63 × 45cm で、壁はやや外傾する。北側中位に幅約 10cm の段がある。P5 の覆土２・３層に焼土が多い。

［カマド］ 東壁中央にある。両袖幅 72cm、煙道先端から焚口部まで 138cm。灰色粘土（11 層）で、竪穴貼床上に袖を作る。焼土とロームを少量含む 10 層が煙道から流入し、６～８層は灰色粘土主体の天井崩落土で、７層は焼土化が著しい。９層は燃焼部内壁が崩落した焼土とみられる。７・９層中に土師器壺（11）の破片が多い。火床はほぼ平坦で、東壁際で急に約 15cm 上がって煙道が一段高くなる。煙道は壁外へ「U」字状に約 50cm 掘り、緩く曲線的に上がる。

［覆土］ 覆土は７層のレンズ状自然堆積である。中期末ころの建物跡なので Hr-FA テフラが見られても良いはずであるが、白色粒の混入も記録されていない。

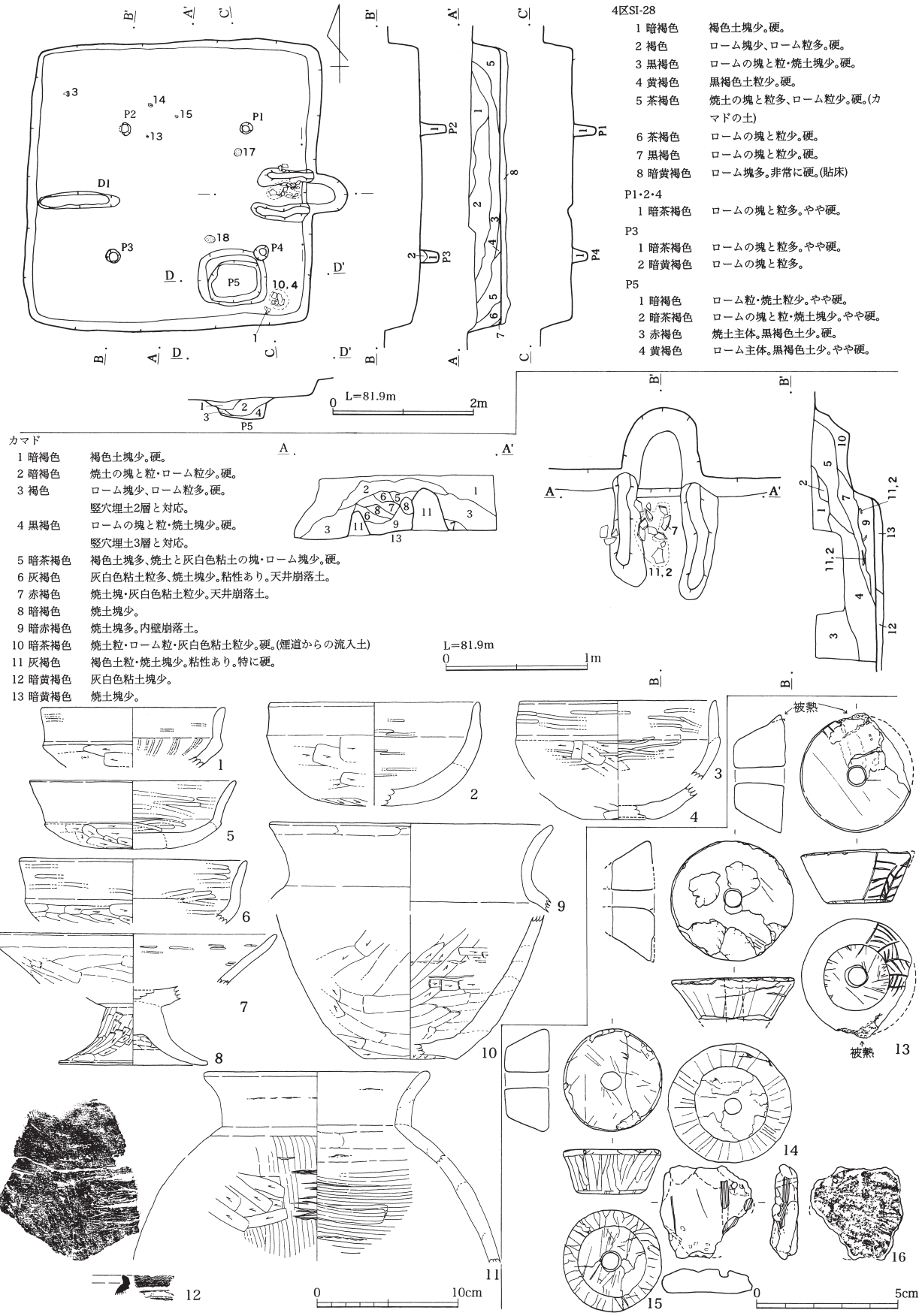
［遺物出土状況］ 石製紡錘車が北西部の床面に近接して３点ある（13 ～ 15）。カマド燃焼部内にある杯（２）と大形壺（11）の破片は、どちらが上で出土したのか不詳。杯（3）と台石（17）は床面からかなり浮いていた（床上 15 ～ 29cm）。

［出土遺物］ 量は少ない。図示していない 182 片（2,103g）の内訳は、杯 51 片（387g）、高杯１片（22g）、壺甕類 129 片（1,598g）、甑１片（96g）。内面ハケメ調整の大形壺（？）の破片も見られた。丸底と凹底の須恵器模倣杯があり、外傾口縁が多く、内傾口縁はない。杯と高杯は、古墳中期後葉を中心として特徴的に多用されるオレンジ色～黄橙色系の胎土を使う。

中期末ころの短脚高杯（8）があり、脚の長い高杯はない。ハケ調整大形壺の胴部を研磨具に転用したとみられる平行刻線がある（11）。口縁端に波状文を描く壺瓶類の破片（12）は、群馬県域産の可能性がある古墳後～終末期の須恵器が混入したもので、口縁部が同形の瓶類は太田市入宿 III 遺跡（酒井編 2007,p.92）、口縁端部波状文の壺は高崎市綿貫観音山古墳（徳江編 1999）に例がある。16 の焼粘土塊には草本植物が入り込む。石製紡錘車のうち 13 は被熱痕が明瞭で、14 も被熱か風化で変質している。刻線文様を描く紡錘車は、４区 SI-1 などにある。17 と 18 は作業用の台石（？）。

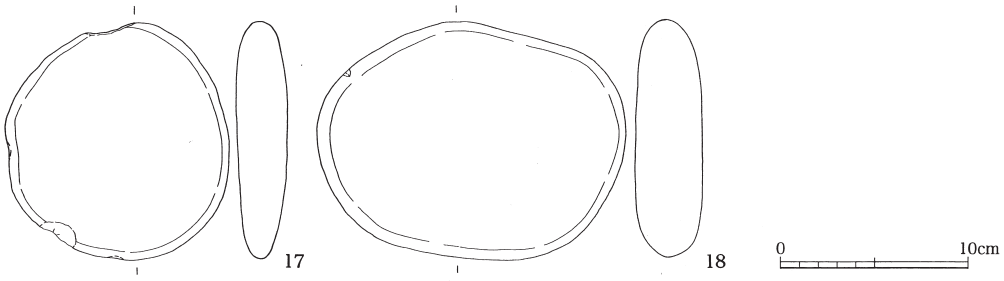
第 65 表　権現山遺跡 4 区 SI-28　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 13.0 高　残 4.2	外傾する口縁部と外面体部の間にやや丸味を帯びて突出する段あり。外面体部ヨコヘラケズリで、ミガキの有無は不明確。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。磨滅のために調整が不明瞭。	5YR6/6　橙 粗い　赤粗～細粒多、黒・透明・白細～微粒少 やや軟質	床直上 口 1/6 周 9
2 土師器 杯	口　復 14.8 高　7.3 最大　復 15.1	残存部が少ないので復原値は参考程度。体部が厚く（最大厚さ 14㎜）、重くて深い。口縁部が直立し外面体部との境に稜あり。内面と口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコヘラミガキ。外面は底部に１方向と体部に横位のヘラケズリ。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　赤粗～細粒と白細～微粒多、黒・透明細砂少　軟質	床面直上およびカマド床上７～ 33cm 口 1/6 周 4



第 144 図　権現山遺跡 4 区 SI-28（1）　遺構・遺物

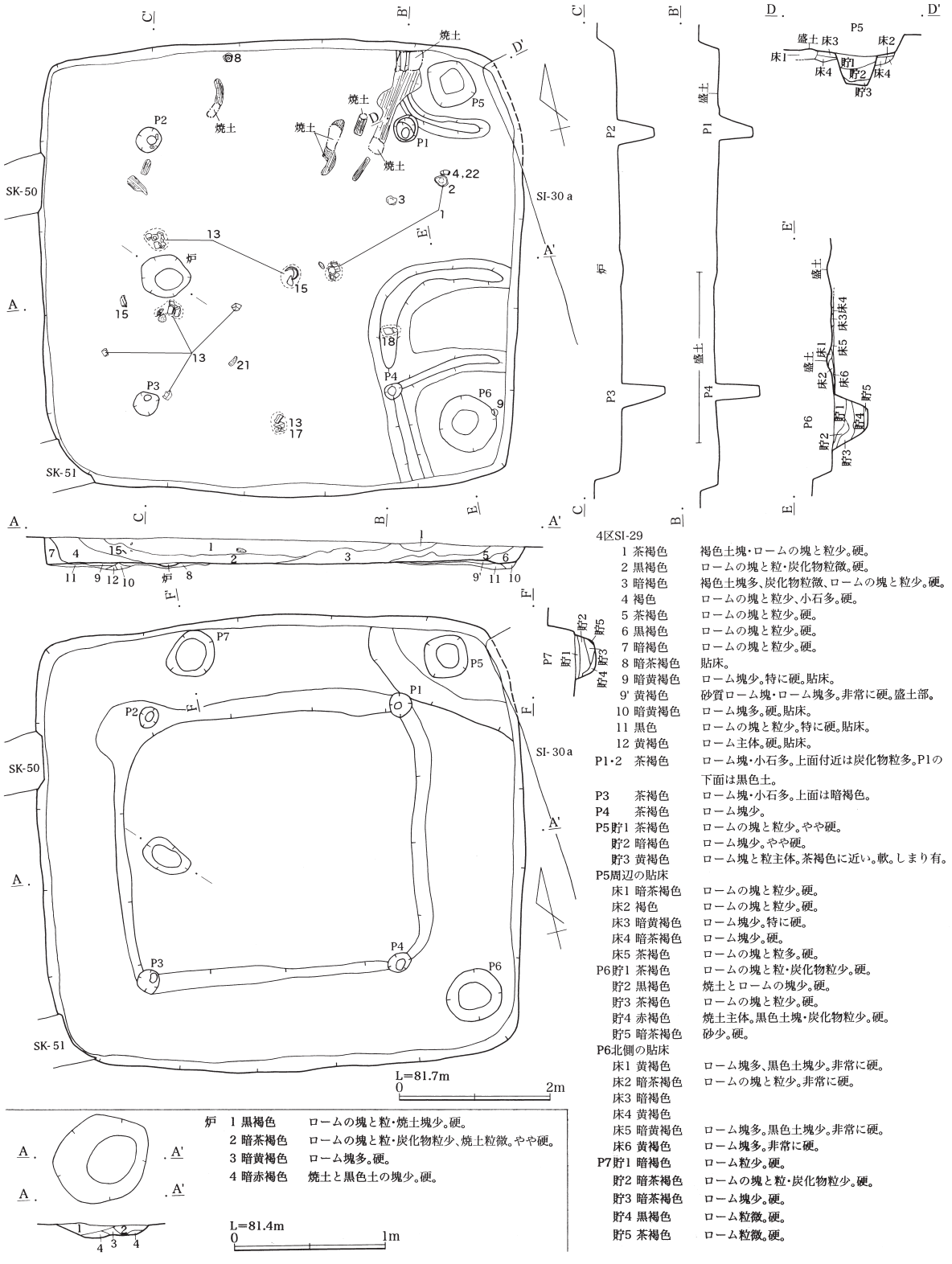
3 土師器 杯	口　復 13.8 高　残 5.5 最大　復 14.3	直立する口縁部から胴部への境には、外面に斜面状の明瞭な段と内面に明瞭な谷線を持つ。体部は外面ヘラケズリと内面ヘラナデの後にヘラミガキ。口縁部は内外面ヨコナデ後ヘラミガキ。	5YR5/8　明赤褐 緻密　赤粗粒少、白・透明微粒微 やや軟質	床上 29㎝ 口 1/4 周 13
4 土師器 杯	高　残 2.5 底　復 5.1	外底面は 2㎜程の凹底。内外面が磨滅して調整が不明瞭。外底面と外面体部はヘラケズリと思われるが、進行方向は不明。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　赤粗～細粒多、白・黒細～微粒と透明微粒少 軟質	床直上 底 1/3 周 8
5 土師器 杯	口　復 14.5 高　4.9	体部が厚く重い。内外面の口～体部境に稜あり。外面口縁部と内面にヨコナデ後、内面ヨコヘラミガキ。内底面のミガキは方向が不詳。外面体部ヨコヘラケズリ。底部は小さな円板の周囲に粘土紐を巻いて作り始めている可能性がある。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　赤粗～細粒多、白礫～微粒と黒・透明微粒少 やや軟質	貯蔵穴 口 1/2 周 貯穴
6 土師器 杯	口　復 16.0 高　残 4.5	口～体部境の稜は内外面ともに不明瞭。体部外面ヨコヘラケズリ。口縁部内外面と体部内面はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	2.5YR5/8　明赤褐 緻密　赤細～微粒と黒・白・透明微粒微 軟質	床直上 口 1/6 周 床直
7 土師器 高杯	口　復 20.2 高　残 3.5	外面はナナメナデ後に口縁部ヨコナデ。内面はヨコナデ後、ヨコヘラミガキをしているが磨滅気味で残りが悪いので、本来はより密に磨いていたと推定される。	5YR5/8　明赤褐 やや緻密　赤粗粒少、白・赤・黒細粒少 軟質	カマド内床上 4㎝ 口 5/12 周 1、カマド、カマド付近
8 土師器 高杯	高　残 5.6 脚裾　復 10.4	脚部内面ナデ、内外面脚裾ヨコナデ。外面杯部ヨコナデと脚部ナナメヘラケズリ。脚裾部外面にケズリ残しの粘土付着。杯部内面はおそらくヘラナデで平滑に仕上げ、ミガキも加えている可能性あり。杯部の小破片もあるが、接合できない。	7.5YR6/6　橙 緻密　白・黒・透明細粒と赤粗～細粒微 やや硬質	脚柱 1/2 周、脚裾 1/12 周
9 土師器 甕	口　復 19.9 高　残 6.2	内外面ともヨコナデ？　器面磨耗し、調整不明瞭。	7.5YR7/6　橙 粗い　白・透明礫と黒細砂少、白・透明粗～微粒多 軟質	カマド付近 口 1/6 周、頸 1/4 周 カマド付近
10 土師器 甕	高　残 10.2 底　6.4 最大　残 18.8	外面胴部はヘラナデ後ヘラケズリで、方向は不規則。外底面は 1 方向ヘラケズリ。内面は底部に円周方向と胴部に斜位のナデ後ヘラケズリ。内外面のヘラケズリは、厚い箇所を選んで削るような状況。外面は全体が弱く被熱する。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　白・透明細粒多、白粗粒と黒細粒少 やや軟質	床直上 底 1/2 周 8
11 土師器 壺	口　復 15.7 高　残 13.3 最大　復 26.6	頸部と胴部は接点がないので図上で合成。外面胴部タテハケ後、ナデとヨコヘラケズリでハケをかなり消す。内面胴部ヨコハケ、肩部ナデ。内外面口～頸部ヨコナデ。外面胴部に焼成後の平行刻線が多数あり、1 本ずつ方向がわずかに異なる。研磨具に転用した可能性を示している。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い 赤粗～細粒と白・黒細～微粒多、灰色礫と透明微粒少 硬質	床面直上およびカマド床上 7 ～ 33㎝ 口 2/3 周 4、カマド、カマド付近
12 須恵器 壺か瓶	口　復約 10 高　残 1.4	外面の先端上部に波状文。5 歯以上の工具で器面に向かって右から左へ描くのでロクロは左回転（反時計回り）。口縁部下端に鋭い突線 1 条と、その下方に浅い凹線 1 条。薄くて径も小さいので甕ではない。古墳後～終末期の群馬県域産品が混入。	N4/（B）　灰 白細～微粒微 硬質	口 1/12 周
13 石製品 紡錘車	長径　39.9㎜ 短径　39.8㎜ 厚　17.9㎜ 重　残 31.9	孔径は上面 6.90㎜・下面 6.85 ～ 6.90㎜で一定し、下面側の縁部から少し丸味を帯びる。上面は丁寧に研磨して平滑。側面は放射状の丁寧な切削成形痕がかすかに残る。側面の 1/4 周だけに刻線で文様を描く。縦線 5 本の後に斜線を 4 ～ 5 本ずつ刻んで綾杉文を構成する。下面には、孔に接する細線状の傷があり、使用痕と見られる。上面を中心として一部が被熱し、少し発砲・膨張している。	7.5YR6/6　橙 緻密な蛇紋岩か（熱により変質・変色）	床直上正位 1/4 周欠 12
14 石製品 紡錘車	長径　42.8㎜ 短径　41.7㎜ 厚　残 15㎜ 重　残 32.6	孔径は上面 6.30㎜～ 6.50㎜、下面側の破面で 6.15㎜～ 6.35㎜。両面穿孔のため、上面側の孔は少し位置がずれる。最終的には下面からの穿孔で貫通しているので、孔の大半はその時に生じている。上面は丁寧に研磨して平滑で、剝離破損あり。側面は放射状の丁寧な切削成形痕を残す。上面寄りの外周側面は磨耗および小破片が見られる。	7.5Y8/1　灰白 緻密な蛇紋岩か（風化または熱により変質・変色）	床直上正位 下面欠 11
15 石製品 紡錘車	長径　35.6㎜ 短径　34.7㎜ 厚　15.8㎜ 重　25.7	孔径は上面 6.20㎜～ 6.30㎜、下面 6.75㎜～ 6.85㎜で、下面側から穿孔。上面は丁寧に研磨して光沢を持ち、一部に見られる傷は使用痕と思われる。側面は放射状の丁寧な切削成形痕を残す。上面寄りの外周側面は磨耗して光沢を帯びる。下面には孔に接する細線状の傷と、下面外周の磨滅が見られ、使用痕と思われる。	2.5Y6/4　にぶい黄　部分的には黒 緻密な蛇紋岩（熱により一部変質・変色）	床直上。やや斜めの逆位 完形 10
16 土師質 焼粘土塊	長　3.3 幅　3.3 厚　0.9 重　残 6.7	扁平に押し付けた粘土が焼成されたもので、右図の面は浅い擦痕または木目等の圧痕。左図の表面や図示した側面に見えるような草本植物を胎土中に混和して焼成したため、トンネル状の空洞が 3 箇所に生じている。	5YR6/6　橙 緻密　白・赤・透明細～微粒少 軟質	隅部欠
17 石器 台石？	長　12.4 幅　11.7 厚　2.7 重　615.6	扁平な自然の河原石をそのまま利用。断面形は長楕円形状で、図示した面のほうがより平坦である。外周が剝離して凹む部分が 3 箇所あり、いずれも剝離面はかなり磨滅しているので、使用を始める以前の古いものかもしれない。擦痕や被熱痕は見られない。	7.5Y6/1　灰 わずかに多孔質気味の硬質な安山岩	床上 15㎝ 完形 6
18 石器 台石？	長　16.3 幅　12.9 厚　3.5	扁平な自然の河原石をそのまま利用。両面ともに中央部はかなり平坦。剝離・擦痕等の使用痕や被熱痕は見られない。重量 1166.0g。	10Y7/1　灰白 わずかに多孔質気味の硬質な安山岩	床上 2㎝ 完形 7



第 145 図　権現山遺跡 4 区 SI-28（2）　遺物

4 区 SI-29（第 146・147 図、写真図版 50・51・129）

[**位置**] 4 区北東隅の台地平坦面、36.0-13.0・13.5 グリッド。古墳中期の建物は、南西と北に SI-27・32 がある。北東の SI-31・33 と南の SI-103 は後期。南北に近接する SK-128・134 や SK-83・112・118 は時期不明の土坑。



4区SI-29

	1 茶褐色	褐色土塊・ロームの塊と粒少。硬。
	2 黒褐色	ロームの塊と粒・炭化物粒微。硬。
	3 暗褐色	褐色土塊多、炭化物粒微、ロームの塊と粒少。硬。
	4 褐色	ロームの塊と粒少、小石多。硬。
	5 茶褐色	ロームの塊と粒少。硬。
	6 黒褐色	ロームの塊と粒少。硬。
	7 暗褐色	ロームの塊と粒少。硬。
	8 暗茶褐色	貼床。
	9 暗黄褐色	ローム塊少。特に硬。貼床。
	9' 黄褐色	砂質ローム塊・ローム塊多。非常に硬。盛土部。
	10 暗黄褐色	ローム塊多。硬。貼床。
	11 黒色	ロームの塊と粒少。特に硬。貼床。
	12 黄褐色	ローム主体。硬。貼床。
P1・2	茶褐色	ローム塊・小石多。上面付近は炭化物粒多。P1の下面は黒色土。
P3	茶褐色	ローム塊・小石多。上面は暗褐色。
P4	茶褐色	ローム塊少。
P5貯1	茶褐色	ロームの塊と粒少。やや硬。
貯2	暗褐色	ローム塊少。やや硬。
貯3	黄褐色	ローム塊と粒主体。茶褐色に近い。軟。しまり有。
P5周辺の貼床		
床1	暗茶褐色	ロームの塊と粒少。硬。
床2	褐色	ロームの塊と粒少。硬。
床3	暗黄褐色	ローム塊少。特に硬。
床4	暗茶褐色	ローム塊少。硬。
床5	茶褐色	ロームの塊と粒多。硬。
P6貯1	茶褐色	ロームの塊と粒・炭化物粒少。硬。
貯2	黒褐色	焼土とロームの塊少。硬。
貯3	茶褐色	ロームの塊と粒少。硬。
貯4	赤褐色	焼土主体。黒色土塊・炭化物粒少。硬。
貯5	暗茶褐色	砂少。硬。
P6北側の貼床		
床1	黄褐色	ローム塊多、黒色土塊少。非常に硬。
床2	暗茶褐色	ロームの塊と粒少。非常に硬。
床3	暗褐色	
床4	黄褐色	
床5	暗黄褐色	ローム塊多。黒色土塊少。非常に硬。
床6	黄褐色	ローム塊多。非常に硬。
P7貯1	暗褐色	ローム粒少。硬。
貯2	暗茶褐色	ロームの塊と粒・炭化物粒少。硬。
貯3	暗茶褐色	ローム塊少。硬。
貯4	黒褐色	ローム粒微。硬。
貯5	茶褐色	ローム粒微。硬。

炉

	1 黒褐色	ロームの塊と粒・焼土塊少。硬。
	2 暗茶褐色	ロームの塊と粒・炭化物粒少、焼土粒微。やや硬。
	3 暗黄褐色	ローム塊多。硬。
	4 暗赤褐色	焼土と黒色土の塊少。硬。

第 146 図　権現山遺跡 4 区 SI-29（1）　遺構

北東隅の壁上部を古墳後期の SI-30a に切られ、北西と南西を時期不明の SK-50・51 に切られる。

［規模と形状］南西隅と北東隅がやや丸みをもつが、ほぼ方形。中軸は N-15°-E。東西長 6.35m、南北長 6.00 mである。壁は外傾し、残存高 0.18 ～ 0.35m で、東に傾斜するため西壁が高い。床面はおおむね平坦である。黄褐色ローム（９′層）を固めた高まりが南東隅と北東隅にある。南東隅のものは幅 40 ～ 50 ×高３～６cm の F 字状で、床面より区画内がわずかに低い。北側の区画は入口関連施設と思われ、東側に入口を持つことになる。北東隅のものは幅15～25×高さ２～３cmの三日月状のわずかな高まりで、東壁に接続しない。掘方主柱内の内区では、ローム面を平坦に整形して床面とする。主柱穴と壁の間の外区は、内区より４～８cm深く掘り、ローム塊の多い８～12層で硬く埋め戻す。南東隅は他よりやや深い。主柱穴はP1～P4の４本。P1 は径 35 × 32 ×深さ 45cm、P2 は径 34 × 32 ×深さ 49cm、P3 は径 33 × 31 ×深さ 56cm、P4 は径 24 × 20 ×深さ 58cm。北側のP1・P2より南側のP3・P4がやや深い。柱間はP1-P4間3.39m、P2-P3間3.38m、P2-P1 間 3.35m、P3-P4 間 3.22m で、P1 が若干北東に寄る。貯蔵穴が３基ある。複数の貯蔵穴（張出ピットも含む）を持つ建物は、４区 SI-27 などがある。北側の貯蔵穴 P7（69 × 55cm，掘方から深さ 27cm）は埋め戻され、貼床下で確認した。北東と南東の隅にある貯蔵穴（P5：69 × 59 ×深さ 53cm、P6：74 × 73 ×深さ 47cm）は、どちらも自然堆積状に埋没する。

［炉］西側主柱穴 P2・P3 間で地床炉を確認した。東西に長い楕円形で、130 × 112 ×深さ 10cm。底面に焼土の４層が堆積する。

［覆土］ほぼ自然堆積で、床面に近い２・３層に炭が多い。北側には放射状に炭化材も残り、火災建物と考えられる。

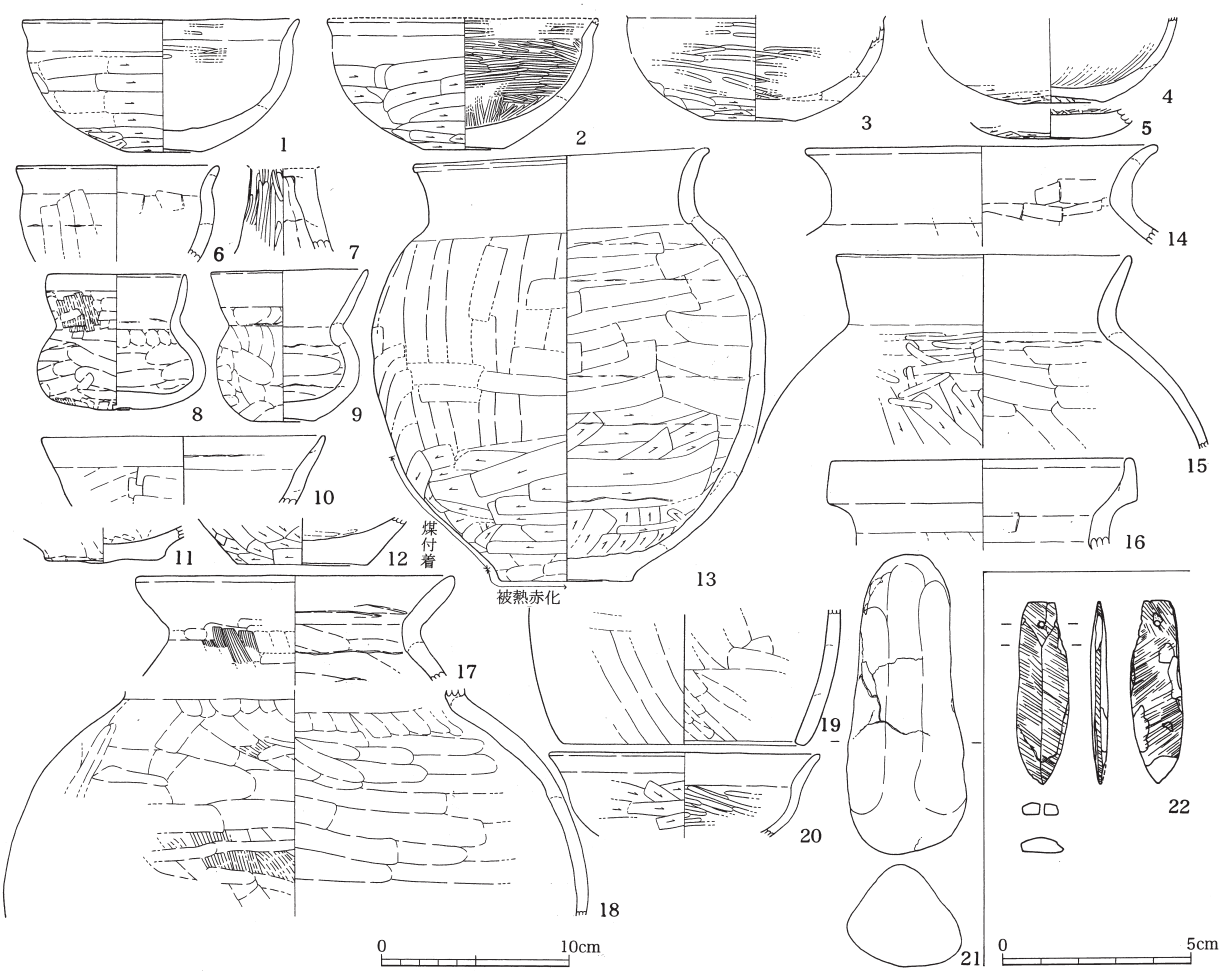
［遺物出土状況］床面から 10cm 以内の高さで出土し、全形がよく残る遺物として、小形壺２点と剣形石製模造品がある（８・９・22）。８は正立して出土した。竪穴北東部で床面から上 20cm 前後の高さに杯類が目立つ。13 は竪穴の南西部に破片が散る。遺構間接合品は、SI-27 の甑に接合する１片が混入していた。

［出土遺物］量はやや少ない。図示していない土師器 274 片（2,853g）の内訳は、杯 160 片（916g）、高杯 11 片（171g）、小形壺７片（45g）、壺甕類 95 片（1,704g）、甑１片（17g）。

外反口縁と凹底で内面をよく磨く杯が特徴。１と２は同工品。高杯は破片だけがある。ハの字形に大きく開く脚や、長い柱状で外側に屈曲する脚の破片が見られ、中実の脚部はない。小形壺のうち 10 はやや大きく、中形壺ともいえる。８は一部に浅いハケ調整を行う。小形甕（13）は外面に煤がよく残る。受口状口縁の甕（16）は、４区 SI-5 などにある。甕・壺と思われる底部片は図化の他に甕１点と壺２点がある。甑は図示以外に１片だけ、１孔の底部片がある。20 は後期初頭の混入品であろう。剣形石製品が１点ある。石製模造品は、４区では SI-4 などにある。

第 66 表　権現山遺跡 4 区 SI-29　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　14.7 高　残 7.0 底　3.8	口～体部の境の稜は外面で弱く、内面でやや明瞭。外面体部と底面は円周方向（横位）のヘラケズリでやや光沢のある仕上げ。外面口縁～頸部ヨコナデ。内面は全面の器面が荒れて調整不詳だが、体部・口縁部ともにヨコヘラミガキの痕をわずかに残す。２と同工品。	5YR4/8　赤褐 やや粗い 白粗～微粒と黒・透明細粒多、白礫少 硬質	床上 20cm 口 3/4 周、底全周 11、13
2 土師器 杯	口　復 14.3 高　6.7 底　4.2	口～体部の境の稜は外面で弱く、内面でやや明瞭。外面体部と底面は円周方向（横位）のヘラケズリ。外面口縁～頸部ヨコナデ。内面は底部に多方向と口～体部に横位のヘラミガキ。１と同工品。	2.5YR4/6　赤褐 やや粗い 白粗～微粒と黒・透明細粒多、白・灰色礫微 硬質	床上 20cm 底全周、頸 1/2 周 口縁端部欠 13
3 土師器 杯	高　残 5.6 底　4.5 最大　残 13.6	口縁部はヨコナデで外し外反する。外面体部はヨコヘラケズリ後上～中位にヨコヘラミガキ。外底面は円周方向のヘラケズリで凹底。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラミガキ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒多、白・黒・透明微粒少 やや軟質	床上 16cm 底全周 15
4 土師器 杯	高　残 4.5 底　4.4 最大　残 13.4	外面ヨコヘラケズリ。外底面は１方向ヘラケズリで凹底。内面は底部に１方向と体部に放射状のヘラミガキ。内外面ともに器面剝落のため調整不明瞭。	7.5YR6/6　橙 緻密 黒・赤細～微粒と白・透明微粒少　やや軟質	床上 22cm 底全周 14
5 土師器 杯	高　残 1.6	外底面中央は１方向ヘラケズリでわずかに凹むが、その周囲はヨコヘラケズリで、底～体部の境が不明瞭。内面底部は比較的方向を揃えた密なヘラミガキ。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや緻密 赤・黒細粒と白・透明微粒少　やや軟質	底全周



第 147 図　権現山遺跡 4 区 SI-29（2）　遺物

6 土師器 杯	口　復 10.6 高　残 5.1	口～体部境に弱い稜を持って口縁部が外反する。内外面口縁部ヨコナデ後、外面体部ナデ、内面体部ヨコヘラナデ。外面に二次的な被熱痕と煤付着あり。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　黒・赤・白・透明細粒少　軟質	口 1/6 周
7 土師器 高杯	高　残 4.5 脚柱　3.5	残存上端面は、杯底部から剝離した痕で、細かい凹凸が多い。外面はタテナデ後、密なタテヘラミガキ。内面はタテユビナデ。	5YR6/6　橙 やや粗い　白礫～細粒多、黒・透明細～微粒少　硬質	脚柱全周
8 土師器 小形壺	口　7.3 高　7.2 底　0.9 最大　9.1 重　残 198	外底面の中央に径 8 ～ 12㎜・深さ 1㎜の凹みあり。体部外面ナデ後、底部に多方向の浅いハケメとヘラナデ。頸部外面は浅いタテハケおよび横～斜位のナデ。内面は底部に多方向と体部に縦位のナデ、肩部ユビオサエ。外面口縁部から内面頸部までヨコナデ。	5YR6/6　橙 やや緻密　白粗～微粒多、黒・透明細～微粒と赤細粒微 硬質	床上 7㎝で正立 ほぼ完形 口 5/6 周、体全周 17
9 土師器 小形壺	口　8.2 高　8.0 底　3.4 重　残 154	外底面は外周をヘラケズリして平坦にし、中央は浅く凹んでいて削らない。外面頸部と体部にナデ後、体部下端ナナメヘラナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のナデ。外面口縁部と内面口～頸部にヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密 白・赤粗粒と白・黒・透明細～微粒少 やや軟質	貯蔵穴東側床上 1㎝ ほぼ完形 口 7/12 周、体全周 16、貯穴
10 土師器 小形壺	口　復 15.0 高　残 3.7	口縁部の上位が、内面に稜を持って薄くなる。内外面は磨滅して不明確だが、おそらくヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。高杯杯部片の可能性もある。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　白・赤粗～微粒多、黒・透明細砂少 軟質	口 1/4 周
11 土師器 壺か甕	高　残 2.0 底　6.4 最大　復 8.5	底部外面は円板状に突出し、底面は外周と中央部が出ている部分を多方向ヘラケズリでやや平坦にする。外面胴部タテナデ。内面底部に多方向ヘラナデ。明瞭な被熱痕は見られない。	5YR4/4　にぶい赤褐 粗い　白粗～微粒多、黒・透明細粒少　硬質	底 5/6 周
12 土師器 甕	高　残 2.6 底　復 6.8	外底面は雑なヘラナデまたはヘラケズリで少し凹み底。外面体部に斜および横位のヘラケズリ。内面は多方向ヘラナデ。外面は被熱して、薄く煤が見られる。	7.5YR6/6　橙 粗い　白礫～粒少、黒・透明・赤細～微粒多 やや軟質	底 1/4 周
13 土師器 小形甕	口　15.6 高　22.4 底　7.0 最大　20.7 重　残 1807	口縁端は外へ肥厚する。外底面は 1 ～ 2 方向に削ってほぼ平底。外面は縦位の後横位ヘラナデ、胴下端部ナデと胴部下位ヨコヘラケズリ。内面は下半部ヘラケズリと上半部ヨコヘラナデで、ヘラナデは浅く木目が見えてややハケメ風。内外面口縁部ヨコナデ。外面は底部が被熱し、底から高さ 1 ～ 7㎝の間に煤が付着。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　白粒～細粒多、白礫と黒・透明細粒少 軟質	床上 6 ～ 31㎝が接合 ほぼ完形 口 11/12 周、底全周 1、3、4、7、8、9、21
14 土師器 甕	口　復 18.6 高　残 5.3	外面胴部ナナメナデと内面肩部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ後、内面頸部下半ヨコヘラナデ。外面口縁部に煤少量付着。	7.5YR6/6　橙 粗い　白・黒・透明粗～微粒多、半透明粗粒と赤粒少 硬質	口 1/3 周

15 土師器 壺	口　15.5 高　残 10.2 最大　残 23.8	混和材が少なめで、煮炊痕は見られない。胴部外面に軽いナナメヘラケズリの後、肩部ヨコヘラナデ。胴部内面ナデ。口縁部内外面ヨコナデ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密 白・灰色礫と白・赤・透明細～微粒少 やや硬質	中央部床上 6㎝と西部床上 14㎝が接合 口 5/6 周、頸 11/12 周 5、9
16 土師器 大形壺	口　復 15.6 高　残 4.9 最大　復 16.4	受口状口縁の外側はわずかに内傾気味で端部内面がわずかに肥厚する。外面肩部ナナメナデと内面頸部ヨコヘラナデの後、内外面口～頸部ヨコナデ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密 白粗～細粒と黒・透明細～微粒やや多 硬質	口 1/12 周
17 土師器 大形壺	口　復 16.5 高　残 5.5 最大　復 17.0	外面は頸部に細かいタテハケ後、肩部と口縁部にヨコナデ。内面は肩部ナデ、頸部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　赤細粒と黒・白・透明細～微粒少 軟質	床上 21㎝ 口 1/6 周、頸 1/4 周 1
18 土師器 大形壺	頸　復 18.0 高　残 12.0 最大　残 30.7	外面胴部はナナメハケ後に横～斜位ナデ。内面胴部にヨコヘラナデ後、内面肩部ユビナデとユビオサエ。内外面頸部ヨコナデ。	10YR5/8　黄褐 粗い　白・黒・透明粗～微粒多、白礫・赤粒少 やや軟質	床上 15㎝ 頸 1/12 周、肩 1/4 周 12
19 土師器 甑	高　残 7.2 底　復 12.6	小破片なので復原径は参考値。内外面胴部ナナメヘラナデ。底面（孔縁部）もヘラナデで、明瞭な面を持つ。	7.5YR7/2　明褐灰 緻密　白・透明細～微粒少、黒・赤細粒微　軟質	底 1/8 周
20 土師器 杯	口　復 14.3 高　残 4.4	口～体部の境は内面側だけに明確な稜を持つ。内外面口縁部ヨコナデ後、外面体部ヨコヘラケズリ。内面体部ヨコヘラミガキ。内外全面に赤彩。古墳後期初頭の遺物が混入。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　白細～微粒多、透明・半透明・灰色粗～細粒少　軟質	口 1/3 周
21 石器 編物石	長　15.9 幅　6.2 厚　5.4	細長い自然の河原石をそのまま利用。深い亀裂が進行している。被熱痕・使用痕は見られない。重量 675.3g。	5Y6/2　灰オリーブ 緻密でやや軟質な白雲母花崗岩	床上 8㎝ 完形 2
22 石製模造品 剣形品	長　4.8 幅　1.3 厚　0.4 重　3.5	低いが明瞭な鎬があり、孔の付近で三叉状に砥ぎ分ける。背面図右上の剝離は少し磨滅するので、完成時または使用時に既に割られていたと思われる。腹面の剝離は、下端のものが破損で、他は形割工程の剝離痕。背面は１方向、腹面は２方向にやや粗く研磨する。側面はすべて斜方向に研磨する。背面から穿孔して腹面に穿孔剝離痕あり。初孔径 1.50㎜、終孔径 1.35㎜。	N3/0　暗灰 緻密で節理の発達した滑石	床上 7㎝ 先端部欠 26

４区 SI-30a・30b（第 148・149 図、写真図版 51）

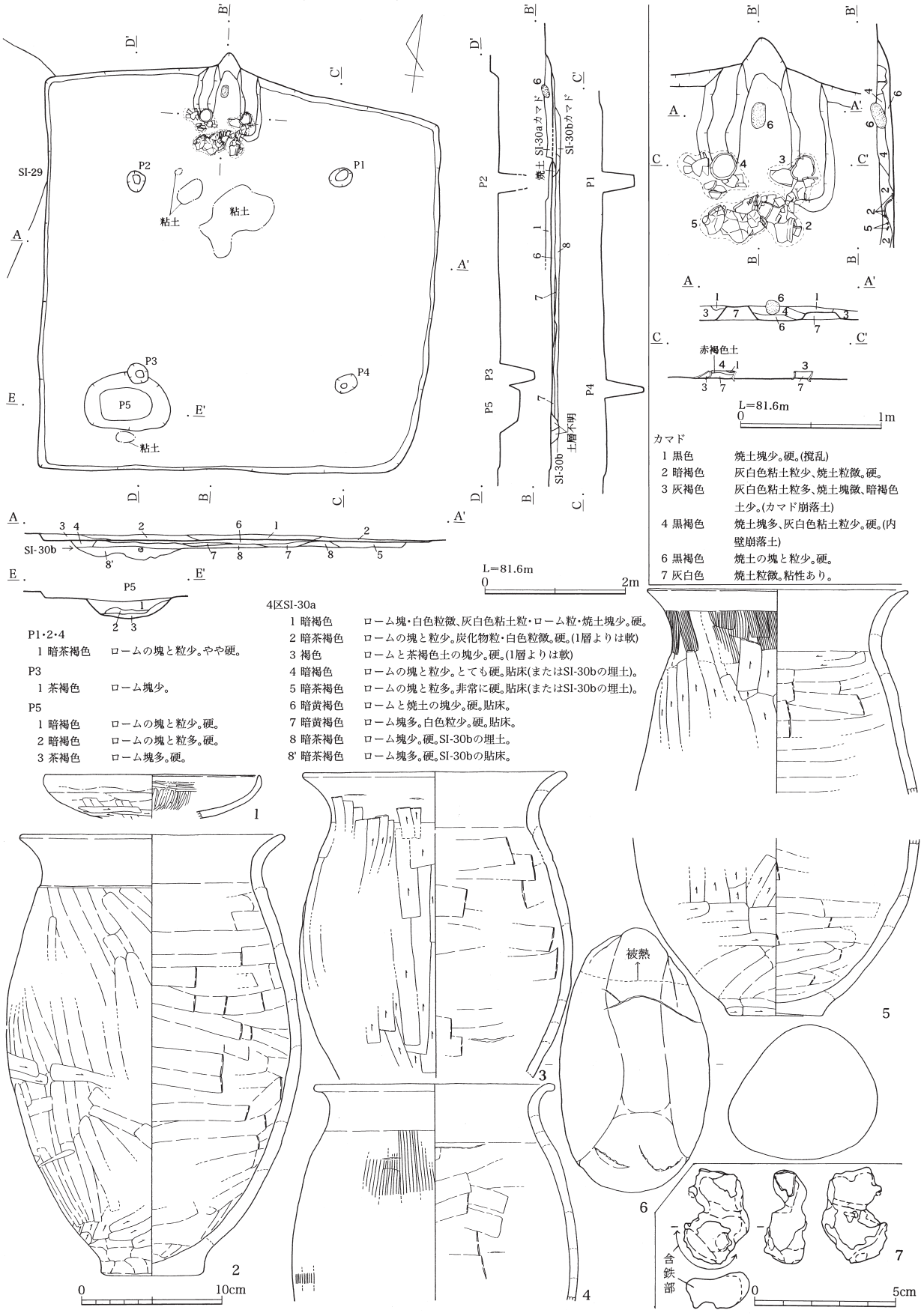
［**位置**］４区調査区内北東隅の台地平坦面にあり、36.0-13.5 グリッドに位置する。南に SK-147、北に SI-33 が近接してあるほか、南西 2.5m に SI-103、北西５m に SI-32 がある。東側には住居跡はなく、約６m ほどで低地に向かう斜面となる。SI-29・30b を SI-30a が切る。下層にある古い建物（SI-30b）の上層に貼床して、SI-30a を造っている。カマドの位置も、SI-30b のカマドの上に SI-30a のカマドが重なって造られている。

４区 SI-30a（第 148 図、写真図版 51・124）

［**位置**］４区北東隅の台地平坦面、36.0-13.5 グリッド。古墳後期の SI-33・103 が北と南西にある。西側の SI-29・32 は中期、南の SK-147 は時期不明。東側は約６m で低地に向かう斜面となる。古墳中期の SI-29 と後期の SI-30b を切る。下層にある古い SI-30b の上層に貼床して SI-30a を造る。SI-30b のカマド上に SI-30a のカマドが重なっている。

［**規模と形状**］東に下がる緩斜面で、東壁は一部流れて認定が難しい。方形だが南東隅は丸みがあり、北東の地山が礫混じりのため北壁東側がやや変形し、北東隅の角度が 105°と歪む。直角となる南及び西壁を基準とすると、中軸は N-7°-W。東壁が 4.9 m、西壁が 5.5 m、南壁 5.1 m、北壁 5.6 m と各辺長が異なる。壁中央で測ると東西長 5.55m、南北長 5.70m。壁は残りが悪く、西側で壁高 0.12 m、東側で 0.02 m。床面はほぼ平坦で、入れ子となる旧建物 SI-30b の部分を埋め戻し、ロームが多い６・７層で堅固に厚さ３～5cm の貼床を施す。入れ子となる旧建物 SI-30b の部分以外の壁周辺では、掘方と貼床は認められない。主柱穴は P1 ～ P4 の４本。P1 は径 33 × 27 ×深さ 45cm、P2 は径 29 × 26cm で深さ不明、P3 は径 31 × 26 ×深さ 49cm、P4 は径 34 × 24 ×深さ 55cm。南側の P2・3 より北側の P1・4 がやや深い。柱間は P1-P4 間 2.96m、P2-P3 間 2.74m、P2-P1 間 2.90m、P3-P4 間 2.89m で、西側の柱間 P2-P3 間が他より若干狭いが、ほぼ方形配置である。貯蔵穴 P5 が南西隅寄りにある。開口部北側は南西主柱穴 P3 と重複する。東西軸の楕円形で 120 × 80 ×深さ 29cm。底面は 73 × 45cm でやや鍋底状。壁は緩く外傾する。覆土は下層ほどロームが多い。調査時所見では P5 を SI-30a の貯蔵穴とするが、北側開口部が南西主柱穴 P3 と重複することや、平面的位置からは SI-30b の貯蔵穴と理解することも可能かもしれない。

［**カマド**］北壁中央やや西寄りにある。天井や袖上半は崩れてカマド前面に流れる。両袖幅 98cm、煙道先



第 148 図　権現山遺跡 4 区 SI-30a　遺構・遺物

端から焚口まで 120cm。７層の灰色粘土を主体に袖を竪穴床に構築する。焼土・ロームを少し含む６層が煙道から流入し、焼土塊と粘土を含む４層が天井内壁の崩落土、１～３層が天井や袖上半が崩れた層と考えられる。煙道は壁外へ約 20cm「V」字状に掘り、緩く曲線的に上がる。火床はほぼ平坦で、支脚と思われる長さ約 20cm の楕円形礫（６）が倒れていた。焚口は両袖先端に土師器甕３と４を１個ずつ逆位に立てる。入れ子にして天井に差し渡して焚口を補強したと思われる土師器甕２と５が床面に落ちて出土した。

［覆土］覆土１層はカマドの流れた灰色粘土を含む。カマド構築材と同質の灰褐色粘土塊が、中央北側の床面直上から遺構確認面まで認められる。

［遺物出土状況］遺物はカマド周辺で少量出土した。カマド両袖先端に各１個の土師器甕を倒立し、その上に渡した入れ子状の土師器甕２個が床面に落ちて出土した。「SI-30」出土として取り上げられた遺物は SI-30a に伴うと思われる。ただし、SI-30b からの混入品を含む可能性は残る。

［出土遺物］後期後半の漆仕上げ土師器杯片がある。頸外面に段を持つ土師器甕と持たない甕がある。２と５はカマド焚口天井を構築したために不規則に被熱し、５は外面のハケ調整が特徴。６は自然石の支脚、７は不定形含鉄鍛冶滓。図示していない 122 片（1,063g）の内訳は、杯 22 片（110g）、甕 89 片（852g）、甑 11 片（101g）。

第 67 表　権現山遺跡 4 区 SI-30a　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 15.0 高　残 3.1 最大　復 15.4	外面体部ナデ後に多方向ヘラケズリ、内外面口縁部ヨコナデ。内面は体部に放射状と口縁部に横位の密なヘラミガキ。外面口縁部と内面に漆仕上げ。内面の漆は口縁部で特に濃い。	7.5YR5/4　にぶい褐 緻密　白・黒細粒少 やや硬質	SI-30a 出土の可能性有 口 1/6 周
2 土師器 甕	口　18.8 高　31.1 底　7.3 最大　復 20.8	頸部外面に 1㎜程の段あり。外底面は１方向ヘラケズリで平底。底部外面ナデとナナメヘラケズリ後、胴部ナデと胴部中位ヨコヘラケズリ。内面底部に多方向と体部に横位のヘラナデ。内外面口～頸部ヨコナデ。底面から上へ 10 ～ 15cm以下の外面が被熱して赤色化。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや粗い　白・黒・透明細～微粒多、白・灰色礫と赤粒少 やや軟質	床にめり込み、底部を西側の甕の口に入れた状態（焚口天井材） 口 1/3 周、底全周、胴 2/3 周 3
3 土師器 甕	口　復 18.6 高　残 21.5 最大　復 19.2	内外面口縁部ヨコナデ後、外面胴部タテヘラケズリ。内面胴部ヨコヘラナデ。外面胴部下位に被熱痕あり。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・透明礫～細粒多、黒・赤細粒少 軟質	カマド東袖先端に倒立 口～頸全周、胴 1/2 周 1、4、SI-30b
4 土師器 甕	口　復 16.9 高　残 15.3 最大　復 20.1	胴部は外面タテハケ・内面ヨコヘラナデ。口～頸部は内外面ヨコナデ。全体が被熱して脆弱化し、外面調整をよく観察できない。細片化して接合できない部分が多い。胴部上半に不規則な被熱赤化痕と煤付着部あり。	10YR6/4　にぶい黄橙 粗い　白礫～細粒と透明・半透明粗～細粒多、黒細粒少 軟質	カマド西袖先端に倒立 口 5/12 周、頸 5/6 周 1、4
5 土師器 甕	口　復 18.4 高　残 26.8 底　6.4 最大　復 20.2	外底面ナデ。胴下位は内外面ヘラナデ後に外面ヨコヘラケズリ（胴下端および積み上げ休止部）。外面頸部タテハケ後に胴中位タテヘラケズリ。内面胴中位ヨコヘラナデ後、頸の一部にヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。口縁部・胴部・底部に不規則な黒斑と被熱部があり、カマド構築材に使ったことを示している。	10YR6/4　にぶい黄橙 粗い　白粗～細粒と透明細粒多、黒細粒と白礫少 軟質	床直上で東側の甕の底部を口に入れた状態（焚口天井材） 口 1/3 周、底全周 2
6 支脚？	長　18.6 幅　10.5 厚　9.5	平面は楕円形で、断面は隅丸三角形。やや長形の自然礫をそのまま利用。図示した端部で、石の表面が特によく被熱して荒れている。重量 2540.7g。	2.5Y5/2　暗灰黄 緻密でやや硬質な安山岩	カマド内 完形 5
7 鉄滓 不定形滓	長　3.3 幅　2.3 厚　1.5 重　10.0	小形の含鉄鍛冶滓で、細部の剝離は見られるが、破面はない。平面形・側面形ともに中央部がくびれる。端部の図示した範囲に銹ぶくれを生じるので鉄を含むと見られる。図示した側面を中心として浅黄色の酸化土砂が比較的多く付着する。表面では気孔は認められない。鍛造剝片や木炭痕は見られない。磁着度４（含鉄部）および３（滓部）。鍛冶関連遺物構成№ 75。	7.5YR4/3　褐	ほぼ完形

４区 SI-30b（第 149 図、写真図版 51）

［位置］位置は SI-30a と同じ。古墳後期の SI-30a が上面につくられる。

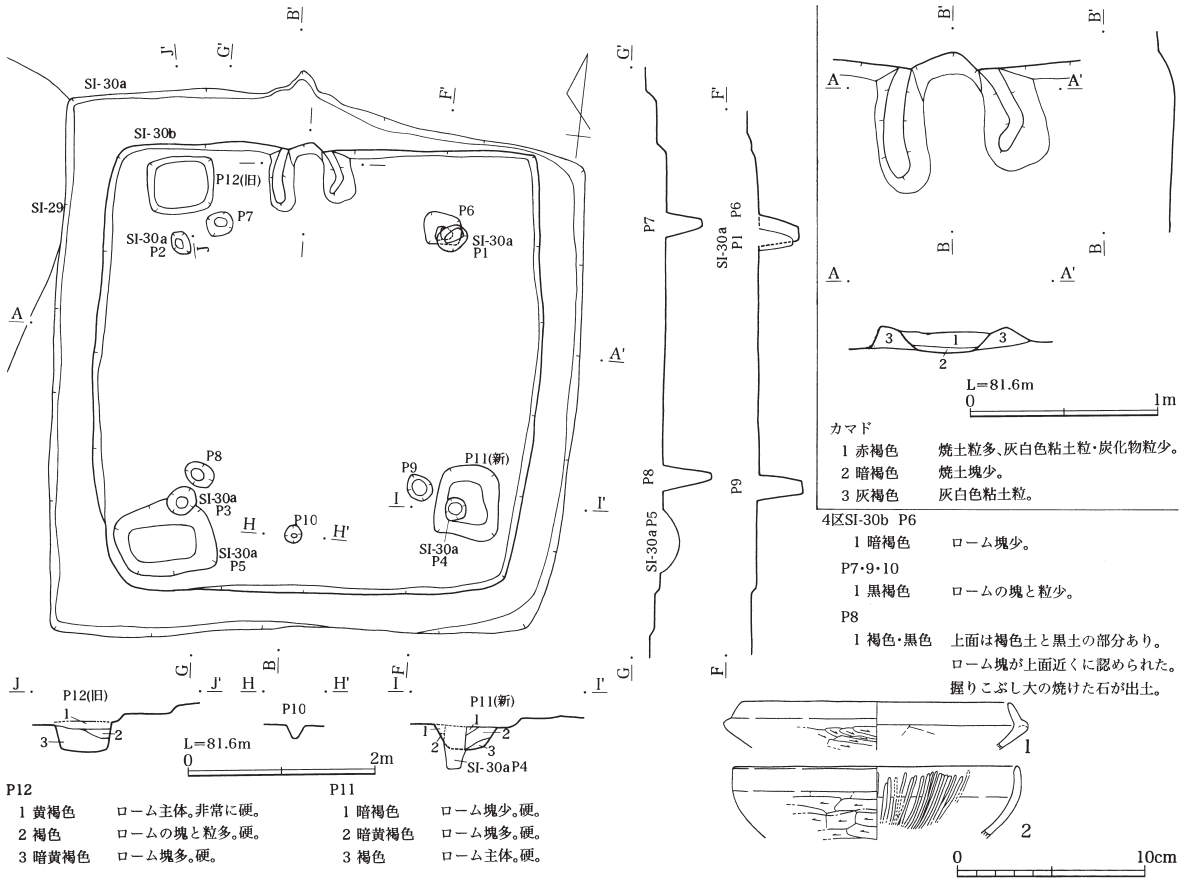
［規模と形状］南西隅と南東隅がやや丸みをおびるが、ほぼ方形。中軸は SI-30a とほぼ同じ N-7°-W。東西長 4.77m、南北長 4.75m である。SI-30a 床面までの残存壁高は 0.05 ～ 0.10m で、壁は外傾する。床面はほぼ平坦である。底面に緩い凹凸がある掘方が西壁際に認められた以外は、地山を平坦にして床面としている。主柱穴は P6 ～ P9 の４本。P6 は径 48 × 35 ×深さ 42cm、P7 は径 28 × 26 ×深さ 38cm、P8 は径 33 × 26 ×深さ 51cm、P9 は径 31 × 25 ×深さ 48cm。北側の P6・7 より南側の P8・9 がやや深い。柱間は P6-P7 間 2.38m、P8-P9 間 2.34m、P6-P9 間 2.70m、P7-P8 間 2.68m で、東西間より南北間がわずかに広い。入口ピット P10 が南壁から 50cm 離れて中央やや西寄りにあり、径 20 × 18 ×深さ 14cm。

貯蔵穴は 2 基あり、北西隅の P12 が旧期、南東隅の P11 が新期と見られる。北西隅の P12（70 × 56 ×深 30cm）はローム主体の黄褐色土で厚さ約 8 cm の堅固な貼床を施して建物の最終段階に埋めたことが明らかである。覆土も 2 層ともローム塊が多く硬く締まり、人為的に埋め戻している。南東隅の P11（80 × 64 ×深 24cm）は、SI-30a の南東主柱穴 P4 に切られる。覆土は下層ほどロームが多い。複数の貯蔵穴（張出ピットも含む）を持つ建物は、 4 区 SI-27 などがある。

［カマド］ 北壁中央やや西寄りにある。上方は SI-30a で削平され、袖の基部だけが残る。両袖幅 90cm、煙道先端から焚口まで 70cm。竪穴床面に、灰色粘土の 3 層を主体に袖を作る。暗褐色の 2 層が煙道から流入し、焼土と粘土を含む 1 層が天井内壁の崩落土と考えられる。煙道を壁外へわずかに掘り込み、緩く曲線的に上がる。火床はほぼ平坦である。

［覆土］ 覆土は SI-30a の貼床 6 ・ 7 層下にある 8 層が対応する。

［遺物および出土状況］ SI-30b 出土の遺物は少ない。図示していない破片 25 片（206g）の内訳は、杯 10 片（99g）、甕 4 片（21g）、甑 11 片（86g）。後期中頃～後半の漆仕上げ土師器杯 2 点を図示できた。半球形杯（ 2 ）で比較すると、SI-30a の杯よりも少し深身である。



第 149 図　権現山遺跡 4 区 SI-30b　遺構・遺物

第 68 表　権現山遺跡 4 区 SI-30b　出土遺物

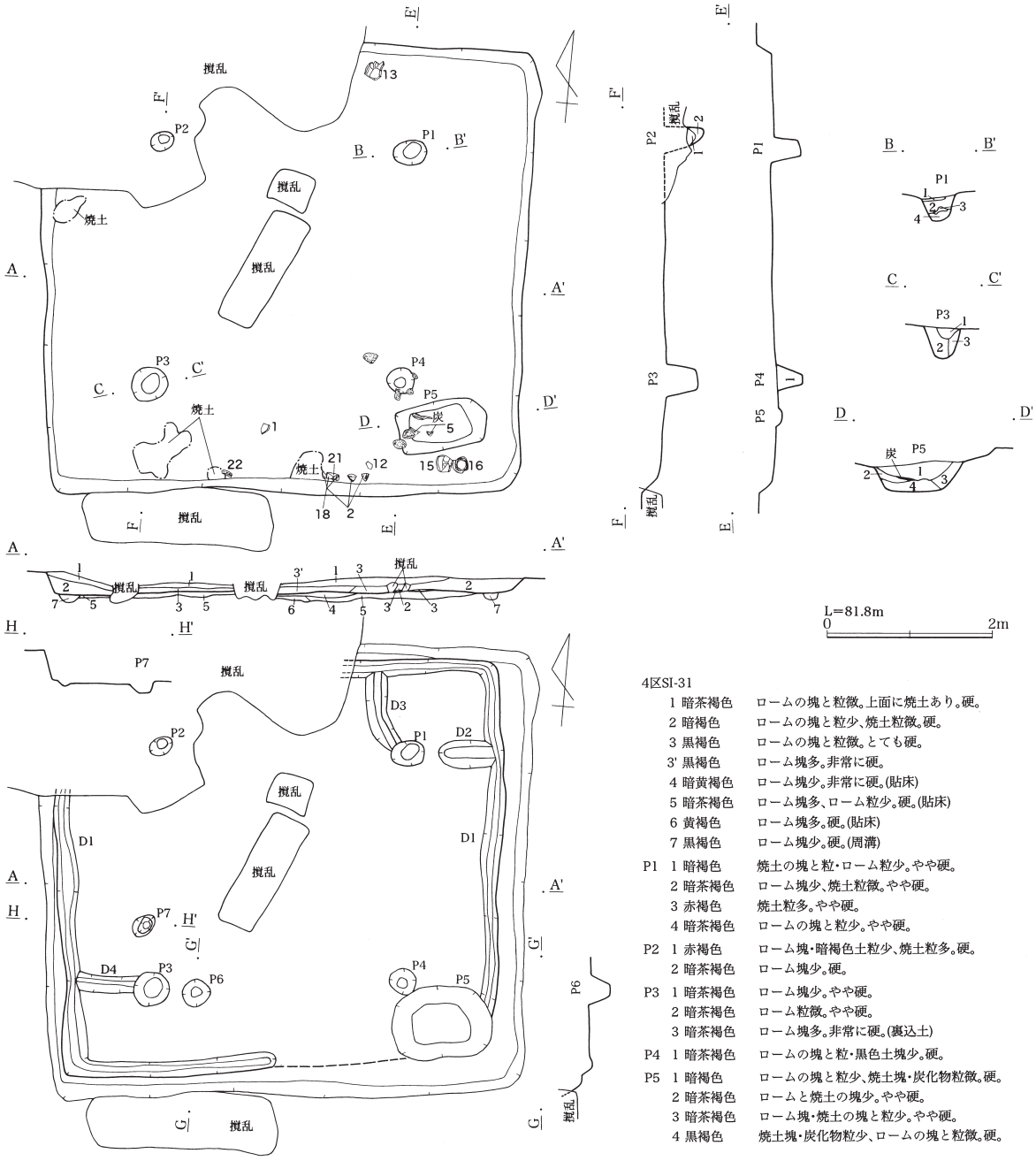
番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 2.5 最大　復 16.1	小破片なので復原値は参考程度。外面体部ナデ後ヘラケズリ、内面体部ナデまたはヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。残存する内外面全体に漆仕上げ。	7.5YR5/4　にぶい褐 緻密　白細粒少 やや硬質	口 1/12 周
2 土師器 杯	口　復 15.1 高　残 3.8	外面の口～体部境にごく弱い稜あり。外面体部ナデ後、ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面に密な放射状ヘラミガキ。外面上半と内面に漆仕上げ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・透明・黒細～微粒少 やや軟質	口 5/12 周

４区 SI-31（第 150・151 図、写真図版 52・124）

［位置］ ４区北端の台地平坦面、36.5-12.5・13.0 グリッド。周囲の建物とは一定の距離を置く。西・南東・東に古墳中期の SI-28・29・32、南西に後期の SI-59 がある。南壁西半が長方形撹乱坑（調査時名称 SK-41）に切られる。北西部は撹乱で消滅する。

［規模と形状］ ほぼ方形で中軸は N-5°-W。東西長 5.82 m、南北長 5.42 mである。また、拡張前の規模を壁溝の位置で計測すると、東西長 5.40m、南北長 4.84m である。壁は外傾し、残存高 0.08 ～ 0.35m。東傾斜地にあるため西壁が高い。床面はほぼ平坦である。拡張前の周溝内は、４～ 10cm ほどの厚さでローム塊が多い貼床（４～６層）を施す。非常に硬く締まり、拡張前の床面でもあったと考えられる。壁際の拡張部は貼床や掘方は認められず、地山を平坦にしてそのまま床面としている。

主柱穴は４本（P1 ～ P4）。P1 は径 40 × 30 ×深さ 34cm、P2 は径 29 × 24 ×深さ 31cm、P3 は径 43



4区SI-31
1 暗茶褐色　ロームの塊と粒微。上面に焼土あり。硬。
2 暗褐色　ロームの塊と粒少、焼土粒微。硬。
3 黒褐色　ロームの塊と粒微。とても硬。
3' 黒褐色　ローム塊多。非常に硬。
4 暗黄褐色　ローム塊少。非常に硬。(貼床)
5 暗茶褐色　ローム塊多、ローム粒少。硬。(貼床)
6 黄褐色　ローム塊多。硬。(貼床)
7 黒褐色　ローム塊少。硬。(周溝)

P1 1 暗褐色　焼土の塊と粒・ローム粒少。やや硬。
2 暗茶褐色　ローム塊少、焼土粒微。やや硬。
3 赤褐色　焼土粒多。やや硬。
4 暗茶褐色　ロームの塊と粒少。やや硬。

P2 1 赤褐色　ローム塊・暗褐色土粒少、焼土粒多。硬。
2 暗茶褐色　ローム塊少。硬。

P3 1 暗茶褐色　ローム塊少。やや硬。
2 暗茶褐色　ローム粒微。やや硬。
3 暗茶褐色　ローム塊多。非常に硬。(裏込土)

P4 1 暗茶褐色　ロームの塊と粒・黒色土塊少。硬。

P5 1 暗褐色　ロームの塊と粒少、焼土塊・炭化物粒微。硬。
2 暗茶褐色　ロームと焼土の塊少。やや硬。
3 暗茶褐色　ローム塊・焼土の塊と粒少。やや硬。
4 黒褐色　焼土塊・炭化物粒少、ロームの塊と粒微。硬。

第 150 図　権現山遺跡 4 区 SI-31（1）　遺構

× 40 ×深さ 38cm、P4 は径 32 × 30 ×深さ 31cm。柱間は P1-P4 間 2.77m、P2-P3 間 2.93m、P2-P1 間 2.97m、P3-P4 間 2.98m。東側の P1-P4 間が他より若干狭いが、東壁が若干短く、建物平面形に反映している。掘方底面の中央南西寄りには P6・7 がある。P6 は径 33 × 31 ×掘方底から深さ 26cm、P7 は径 30 × 22 ×掘方底から深さ 14cm。壁溝は、掘方精査の段階で、竪穴壁の若干内側から南辺東側を除き確認された。拡張以前の建物と思われ、東西 5.4 ×南北 5.0 mの方形である。拡張幅は西及び北壁は 5 ～ 10cm で一部接する。南側は 10 ～ 20cm、東側は 20 ～ 30cm で、南東隅が最も広い。間仕切溝は、北東と西壁際の掘方で D2 ～ D4 を確認した。断面「U」字状で、幅 20 ～ 30 ×床面から深さ 4 ～ 8 cm。３本とも主柱穴に付随する位置で、壁際で壁溝に繋がり、D2 は P1 からやや離れる。このことから、間仕切り溝は拡張前の建物に伴うもので、主柱穴の据え換えは行っていないことがわかる。

南東隅にある貯蔵穴 P5 は東西軸の長方形で 106 × 60cm、床から深さ 35cm。底面は 70 × 40cm のほぼ平坦な長方形。壁は緩く外傾する。覆土全層に炭と焼土を含み、1 層下面に層状の炭がある。拡張前の貯蔵穴も同じ位置にあったとすると、拡張前の周溝を切るように一回り大きく掘り直したものと推定できる。

［カマド］火処は確認されなかったが、北側中央付近撹乱部にカマド材と考えられる粘土や土器が混じることから、ここにカマドを付設したと推定される。

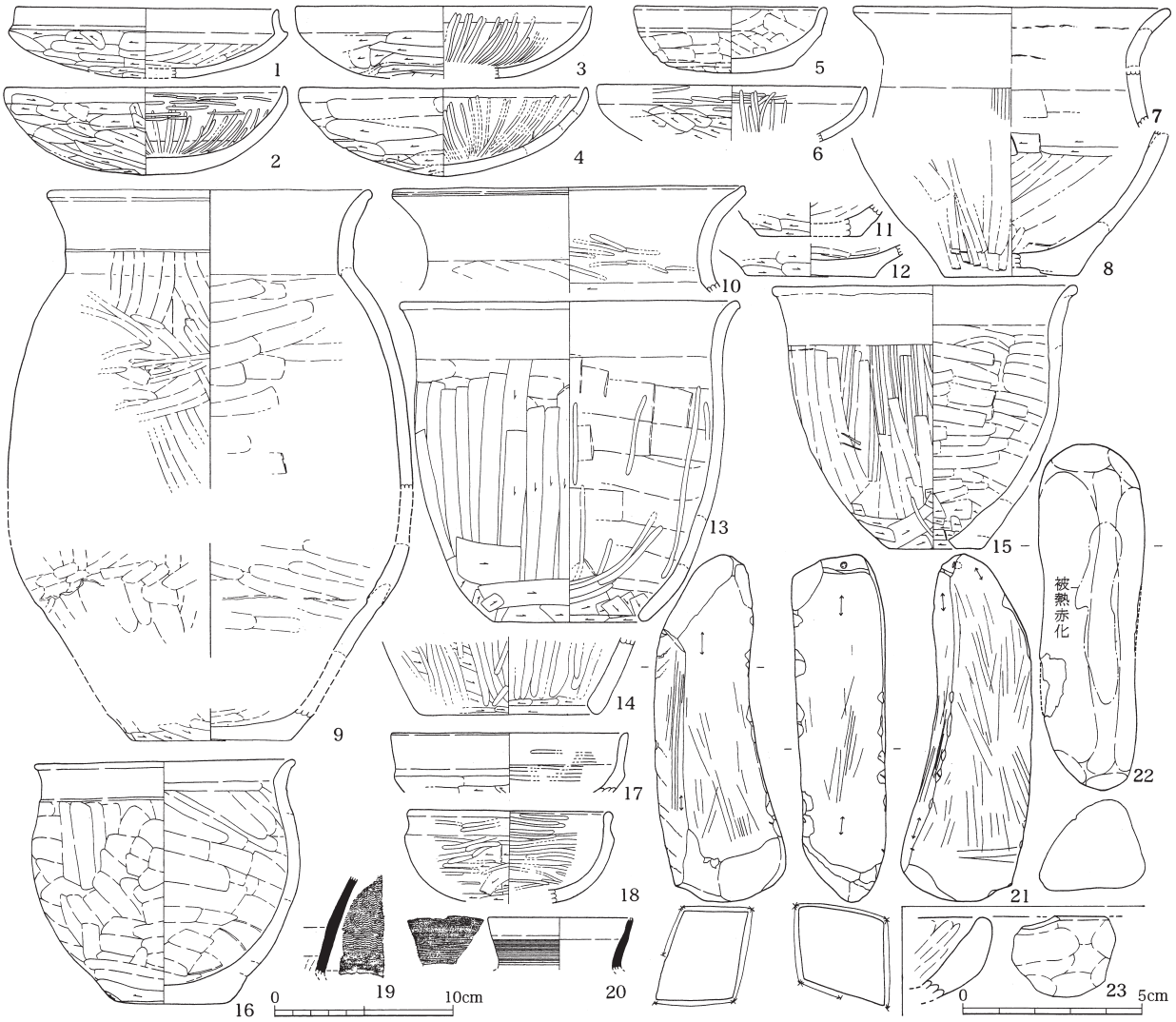
［覆土］覆土は３層ともおおむねレンズ状自然堆積である。１層や柱穴・貯蔵穴埋土に焼土が多く、南・西壁際に焼土塊があり、貯蔵穴南壁が焼けるので、火災建物の可能性が高い。３層は覆土としては硬化が著しく、貼床かと疑うほどだった。

［遺物出土状況］貯蔵穴周辺と、カマドを破壊した北西部撹乱中にやや目立つ。北壁付近では床上 1 ～ 13cm のレベルで甑（13）が倒れ、貯蔵穴南側には小形甕と小形甑が並ぶ。貯蔵穴南側の地山中には石が多いので、貯蔵穴周辺の石もこれに由来するものを含むと見られる。

［出土遺物］遺物量は少なめで、図示していない 294 片（3,036g）の内訳は、杯 52 片（273g）、甕 220 片（2,448g）、甑 21 片（313g）、焼粘土塊 1 点（２g）。杯類は内面ミガキと内外面漆仕上げをともに行う半球形杯が目立つ。９は頸部の途中で外面に浅い段を持つ甕。７は外面ハケ調整甕。小形甑（15）も一部にハケ調整を行う。16 は加熱使用痕のない小形甕。18 は内外全面を磨く須恵器模倣土師器杯で、古墳中期の混入遺物であろうか。𤭯（19）は SI-31 の時期かもしれないが、短頸壺（20）は中期後葉の混入遺物で TK-208 型式期の高蔵寺 235 号窯に例がある（中村編 1978）。21 は穿孔が貫通しないホルンフェルス製砥石で非常に硬質。硬質ホルンフェルスの磨石・敲石が周辺の古墳時代集落に見られる（SG1 区 SI-17 など）。また、穿孔が貫通しない砥石は 4 区 SI-17 にもある。

第 69 表　権現山遺跡 4 区 SI-31　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 14.5 高　残 3.9 最大　復 15.5	口～体部境には外面の段と内面の稜が明確。内面体部におそらく多方向のナデ後、体部上位から外面口縁部にヨコナデ。外面体部ヨコヘラケズリ。漆仕上げは見られない。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　白・黒・透明粗～細粒多、白・灰色礫と赤細粒少　やや硬質	床上 14cm 口 1/2 周 2
2 土師器 杯	口　15.7 高　4.9 最大　15.8 重　279	半球状で口縁端部は内面側だけが短く折れる。内面中位以上と外面口縁部にヨコナデ後、外面底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内面体部に放射状と口縁部に横位のヘラミガキ。図の底部左半外面は誤って深く削っている。内面全面と外面口縁部に漆仕上げ。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや粗い　白・透明粗～細粒多、黒細粒少 やや硬質	南中央壁際の床上 14～ 17cm ほぼ完形　口全周 3、5、6、南中央壁際
3 土師器 杯	口　復 16.4 高　残 4.0	外面の口～体部境に弱い稜あり。内外面口縁部ヨコナデ後、外面体部ヨコヘラケズリ、内面体部放射状ヘラミガキ。外面上～中位と内面全体に漆仕上げ。	10YR5/3　にぶい黄褐 やや粗い　白・透明粗～微粒と黒細粒少　やや軟質	口 1/8 周
4 土師器 杯	口　復 16.1 高　残 4.9	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。体部上位ヨコヘラナデ。内面は体部にヘラナデ後、放射状ヘラミガキ。口縁部内外面ヨコナデ。外面上～中位と内面全面に漆仕上げ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白・透明細～微粒多、半透明粗粒少 やや軟質	撹乱中出土。床下の細片 1 点も接合 口 7/12 周 床下、北西カクラン
5 土師器 杯	口　復 10.4 高　3.7 底　7.3 最大　復 10.7	丸味が強い平底。調整が雑でケズリ仕上げを行わないので、体部が厚くて重い。外面は底部ナデまたはヘラナデ、体部ユビナデ、口縁部ヨコナデ。内面は多方向ヘラナデ。口縁端部は磨耗と破損が著しい。	5YR6/6　橙 やや粗い　赤粗～細粒多 軟質	貯蔵穴内の底上３～5cmが接合 口 1/2 周、底全周 12、13、貯穴
6 土師器 杯	口　復 14.9 高　残 3.1	半球状で口～体部境の内外面に稜はない。内外面口縁部ヨコナデ、外面体部ナナメヘラケズリ。内外面口縁部に横位と内面体部に放射状のヘラミガキ。外面上半と内面全面に漆仕上げ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒・透明細～微粒多、白細粒少 硬質	口 1/4 周 北西カクラン



第 151 図　権現山遺跡 4 区 SI-31（2）　遺物

7 土師器 甕	口　復 17.6 高　残 6.7	口縁部と肩部の破片間に接点がないので器形は推定復原。外面胴部タテハケと内面胴部ヨコヘラナデの後、内外面口縁部にヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 粗い　白・透明粗～細粒多 軟質	 口 1/3 周 北西カクラン
8 土師器 甕	高　残 8.0 底　復 7.4 最大　復 17.5	外底面は凹底で、外周に粘土を付加した後に軽いヘラナデ。外面はタテヘラナデ。内面は底部に多方向と体部に斜位のヘラナデ後、粘土積み上げ休止部の厚い部分にヨコヘラケズリ。底部を含む外面全体が被熱赤化。	7.5YR7/6　橙 粗い　白粗～微粒と透明細～微粒多 軟質	北西撹乱部の 11 片と床下の小片 1 点が接合 底 1/2 周 北西カクラン
9 土師器 甕	口　復 18.1 高　残 25 底　復 8.8	外面頸部やや下位に低い段あり。胴部破片が不足して接合できない。胴部は下ぶくれで、下位に積み上げ休止痕あり。外底面ヘラナデ。外面は胴部ナデ後に胴下端ヨコヘラケズリ、胴部下位と肩部ナナメヘラナデ。内面胴部は斜～横位ナデ。内外面口～頸部にヨコナデ。外底面周辺に被熱赤化痕あり。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・黒・透明細～微粒多、白・灰色礫少 やや硬質	主に北西撹乱部で出土。貯蔵穴にも 4 片あり 口 7/12 周、底 1/3 周 北西カクラン、貯穴
10 土師器 甕	口　復 19.6 高　残 5.9	口縁部は内面端部が肥厚し、外面の端面が凹線状。胴部は外面ナナメヘラナデ、内面ヨコヘラケズリ。内外面の口～頸部にヨコナデ後、内面頸部ヨコヘラミガキ。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　白細～微粒・透明微粒多、灰色粒・黒細粒少 やや軟質	10 片中 6 片が床下で出土、他は出土位置不明 口 7/12 周 床下
11 土師器 甕	高　残 1.8 底　復 5.6 最大　復 8.0	外面は底部ナデまたはヘラナデ、胴部ナナメヘラケズリ。内面は多方向ヘラナデ。残存部全体が被熱して赤化し脆弱。	10YR5/3　にぶい黄褐 粗い　白・黒・透明細～微粒多　軟質	 底 7/12 周 北西カクラン
12 土師器 甕	高　残 1.8 底　7.2 最大　復 10.3	外底面は多方向ヘラケズリ、外面胴部下端ヨコヘラケズリ。内面は底部に多方向と胴部に円周方向のヘラナデ。底面を含めて外面が被熱赤化。	10YR5/3　にぶい黄褐 粗い　白・灰色礫と白・透明細～微粒多　やや軟質	床上 5㎝ 底 2/3 周 7
13 土師器 小形甑	口　復 18.8 高　17.8 底　8.4 孔　7.9	外面は胴部に軽いタテヘラケズリの後に下位ヨコヘラケズリ。内面は胴部にヨコヘラナデの後に下位ナナメヘラケズリと疎らなヘラミガキ。孔縁部ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。口縁部にごく少量の煤が付着。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや粗い　黒・透明粗～微粒多、白細粒少 やや硬質	床上 1 ～ 13㎝ 口 1/4 周、底 1/2 周 18
14 土師器 甑	高　残 4.3 底　復 9.4 最大　復 14.0	小破片なので復原径は参考値。胴部は外面ナナメヘラケズリ、内面ナデ（?）。内外面ともに胴下端～孔縁部ヨコヘラケズリ。内外面にやや密なタテヘラミガキ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・透明細～微粒多　やや軟質	貼床中 底 1/8 周 床下

15 土師器 甑	口　復 16.9 高　14.6 底　5.0 孔　1.9 重　残 671	外底面は無調整。外面は上半に粗いタテハケ後、中位にタテヘラナデ、下位にナナメヘラケズリ。内面は胴部ヨコヘラナデ後、下位および孔縁部にヨコヘラケズリ。胴部内面のヘラナデはややハケメ風に仕上がる。内外面口縁部ヨコナデ。	5YR6/6　橙 緻密　白粗～細粒微、透明微粒少 やや軟質	床上 4 ～ 10㎝と貯蔵穴内の破片が接合 口 1/4 周､頸～底全周 8、貯穴
16 土師器 小形甕	口　14.4 高　13.4 底　6.4 最大　14.9 重　残 686	外面頸部に浅い段あり。外面体部はナデとタテヘラナデの後、体部下端に部分的なナナメヘラケズリ。外底面は雑な 1 方向ヘラケズリ。内面は底部に円周方向と体部に斜位のヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。被熱痕はなく、カマドにかけるような使用は行っていないと見られる。口縁端部に焼成前の切りキズ少々あり。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　透明細粒多、白粗～細粒と黒細粒少 やや軟質	床上 1㎝ ほぼ完形 口 2/3 周､頸～底全周 9
17 土師器 杯	口　復 13.1 高　残 3.3	口～体部境の外面に緩い段あり。外面体部上端ナデ後体部ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ後、内面全面に密なヨコヘラミガキ。外面も磨いていたかもしれないが風化して不明確。古墳中期末の遺物の混入か。	2.5YR6/8　橙 緻密　白・黒・透明微粒少 やや軟質	貯蔵穴 口 1/8 周 貯穴
18 土師器 杯	口　復 11.0 高　残 5.1 最大　復 11.6	内外面の頸部がやや薄く、口縁端部が主に外面側へ肥厚する。口縁部内外面ヨコナデと体部外面ヨコヘラケズリの後に内外面ヨコヘラミガキを行い、特に内面側で密に磨く。内面に漆仕上げの可能性あり。古墳中期末の遺物の混入か。	10YR5/4　にぶい黄褐 やや緻密　赤・白細～微粒多、透明微粒少 やや軟質	床上 17㎝ 口 1/4 周、体 1/3 周 3
19 須恵器 𤭯	高　残 5.5 頸　復 5 ～ 6 厚　6.0 ～ 6.5	10 歯程度の工具で左から右へ波状文を回転施文。工具を移動して上部から下部へ埋めてゆくように描く。内面頸部下端にごくわずかな絞り目痕あり。破面の中央部は、にぶい赤褐色（2.5YR5/4）。関東地方産。	10Y5/1　灰 やや緻密　白細～微粒多、半透明細粒微 硬質	頸 1/6 周
20 須恵器 短頸壺	口　復 8.0 高　残 2.9	外面は頸部カキメ後に口縁部ヨコナデ。カキメ施文時のロクロは左回転（反時計回り）。破面は灰赤色（2.5YR4/2）。古墳中期後葉の遺物が混入。	7.5Y5/1　灰 緻密　白細～微粒と透明微粒少 硬質	口 1/6 周
21 石器 砥石	長　19.2 幅　5.2 厚　6.4 重　925.6	角柱状で 4 面を砥面として長軸方向に使用。うち 3 面は平滑に磨滅する。左図の左半部の面だけは約 1/2 の幅だけを使用して、残りは原石の割れ面のまま。一端に貫通しない孔を回転穿孔し、孔径 3.3㎜・奥行 4.5㎜。全面が被熱して赤化する。	5Y5/2　灰オリーブ 緻密で非常に硬質なホルンフェルス	床上 13㎝ 完形 4
22 石器 編物石	長　19.2 幅　5.9 厚　5.2 重　830.4	棒状の自然の河原石をそのまま利用。被熱によるハジケ？と見られる剝離が図の両側縁に 1 箇所ずつあり。図の中央部に 1 点鎖線で囲んだ範囲内は被熱赤化が認められない。他は全面が赤化する。	2.5Y5/3　黄褐 やや多孔質気味で硬質な安山岩	床上 3㎝ 一部欠 1
23 土師器 小形土器	高　残 2.3 厚　1.0	手捏ね成形で厚さが不均一。正確な口径は不明だが､4 ～ 5㎝大の可能性がある。内外面ともに雑なナデおよびユビオサエ。	10YR6/3　にぶい黄橙 緻密　白細粒少 軟質	口 1/6 周

4 区 SI-32（第 152 図、写真図版 52・124）

［位置］ 4 区北東隅の台地平坦面、36.5-13.0・13.5 グリッド。古墳中期の SI-29 が南にあり、南東・西・東に古墳後期の SI-30・31・33 がある。南 1 ～ 2 m にある SK-83・112・118 は時期不明。重複はない。南東隅、北部中央、北西隅に撹乱がある。

［規模と形状］ 南西隅と北東隅はやや丸みを持つがほぼ方形で、中軸は N-10°-E。東西長 6.45m、南北長 6.20m である。残存壁高は 0.05 ～ 0.13m である。床面はおおむね平坦で、わずかだが東に傾斜する。

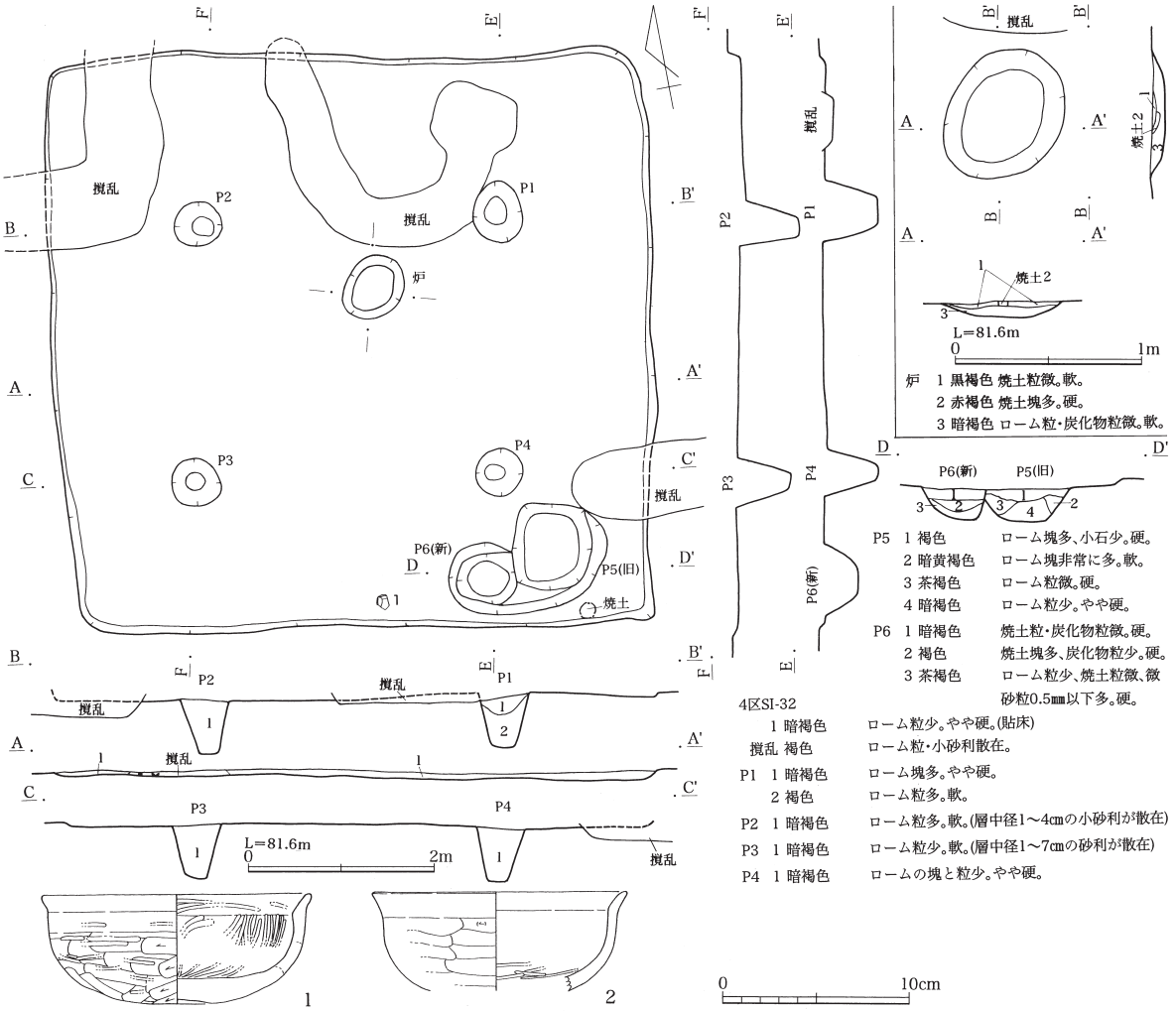
主柱穴は 4 本（P1 ～ P4）。P1 は径 64 × 52 ×深さ 59cm、P2 は径 50 × 47 ×深さ 59cm、P3 は径 55 × 50 ×深さ 58cm、P4 は径 51 × 48 ×深さ 59cm でほぼ同規模である。柱間は P1-P4 間 2.77m、P2-P3 間 2.71m、P2-P1 間 3.10m、P3-P4 間 3.18m で、建物平面形と同じく東西にわずかに長い。

貯蔵穴は南東隅に上端が重複する 2 基を確認した（P5・P6）。旧貯蔵穴 P5 は東西 93cm、南北 84cm のやや南北に長い方形で、床から深さ 35cm。底面は 70 × 58cm でほぼ平坦。壁は緩く外傾して床に至る。覆土最上層はローム塊多量と小石少量を含む褐色土で硬く締まる。新貯蔵穴 P6 は P5 の西側にある。東西 64 ×南北 52cm の円形で、床面から深さ 37cm。底面平坦部は 43 × 38cm で狭い。壁は緩く外傾して床に至る。覆土は全体に焼土・炭を含み、中層で顕著である。複数の貯蔵穴（張出ピットも含む）を持つ建物は、4 区 SI-27 などがある。

［炉］ 中央やや北寄りに地床炉がある。76 × 60cm の楕円形で、主軸は N-45°-E である。深さ 8 cm ほどの浅い掘り込みで、底面から若干浮いて中央に焼土塊（2 層）が認められた。

［覆土］ ローム粒を少量含む暗褐色土の単層である。

［遺物および出土状況］ 遺物は少ない。南壁際で少し浮いて出土した椀形の杯（1）は径が大きく浅い形になり、内面のミガキが発達する古墳中期後葉の杯である。杉村遺跡では GN1 区 SI-2 と北関東自動車道路調査区 21・102 号住居、権現山遺跡では 2 区 SX-94、4 区 SI-16・20、北関東自動車道路調査区 SI-064 などに例があり、北方にある磯岡北古墳群（内山 2006）に多くみられる。図示した杯 2 点以外の土師器は 4 片（54g）しかなく、内訳は杯 1 片（14g）、壺 2 片（26g）、甕 1 片（14g）である。



第 152 図　権現山遺跡 4 区 SI-32　遺構・遺物

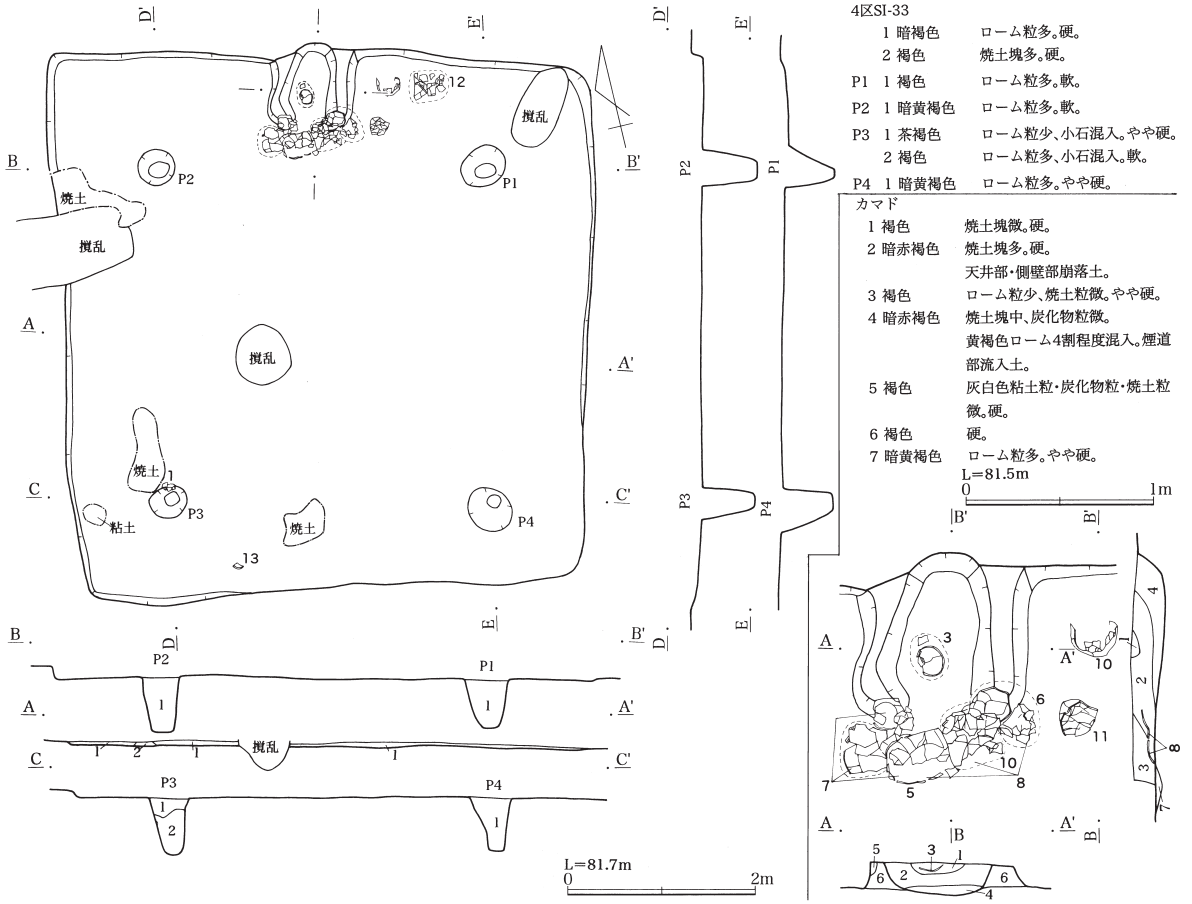
第 70 表　権現山遺跡 4 区 SI-32　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (㎝・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 14.4 高　5.8 底　3.4	口～体部境の稜は内面で強く、外面では弱い。外底面は凹底でおそらくヘラケズリ。外面体部は横～斜位ヘラケズリ後ヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面を磨く密度は風化のため不明確。内面体部は磨耗するが、本来は密な放射状ヘラミガキ。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒と白細～微粒少 やや軟質	床上 1㎝ 口 1/3 周、底全周 1
2 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 5.3	おそらく外面体部ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部ヨコヘラミガキ。内外面とも器面が磨耗し、調整不明瞭。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白・黒細粒と赤粗～細粒少 やや硬質	口 1/8 周

４区 SI-33（第 153・154 図、写真図版 53・124）

［位置］ ４区北東隅の台地東縁部、36.0-13.5、36.5-13.5 グリッド。古墳後期の SI-30 が南にある。南西と西に古墳中期の SI-29･32 がある。東側に建物はなく、２～４ｍほどで低地に向かう斜面となる。重複はない。中央部西寄りと北東隅に攪乱がある。西壁際中央は長方形土坑に切られる。

［規模と形状］ ほぼ方形で東西 5.62 × 5.68m、、中軸は N-14゜-E。壁は外傾し、最も残りの良い北西隅で残存高 15cm。斜面下方の南東隅はほとんど壁が残らない。床面はおおむね平坦で、傾斜しない。西・南壁際に焼土ブロックが分布する。ローム塊が多い暗褐色土をほぼ全体に厚さ２～ 5cm で貼床している。主柱穴は４本。P1 は径 49 × 41 ×深さ 52cm、P2 は径 39 × 37 ×深さ 59cm、P3 は径 40 × 32 ×深さ 58cm、P4 は径 51 × 42 ×深さ 57cm。南側の P2･3 より北側の P1･4 の２本がやや深い。柱間は P1-P4 間 3.49m、P2-P3 間 3.48m、P2-P1 間 3.45m、P3-P4 間 3.42m でほぼ方形配置。



第 153 図　権現山遺跡 4 区 SI-33（1）　遺構

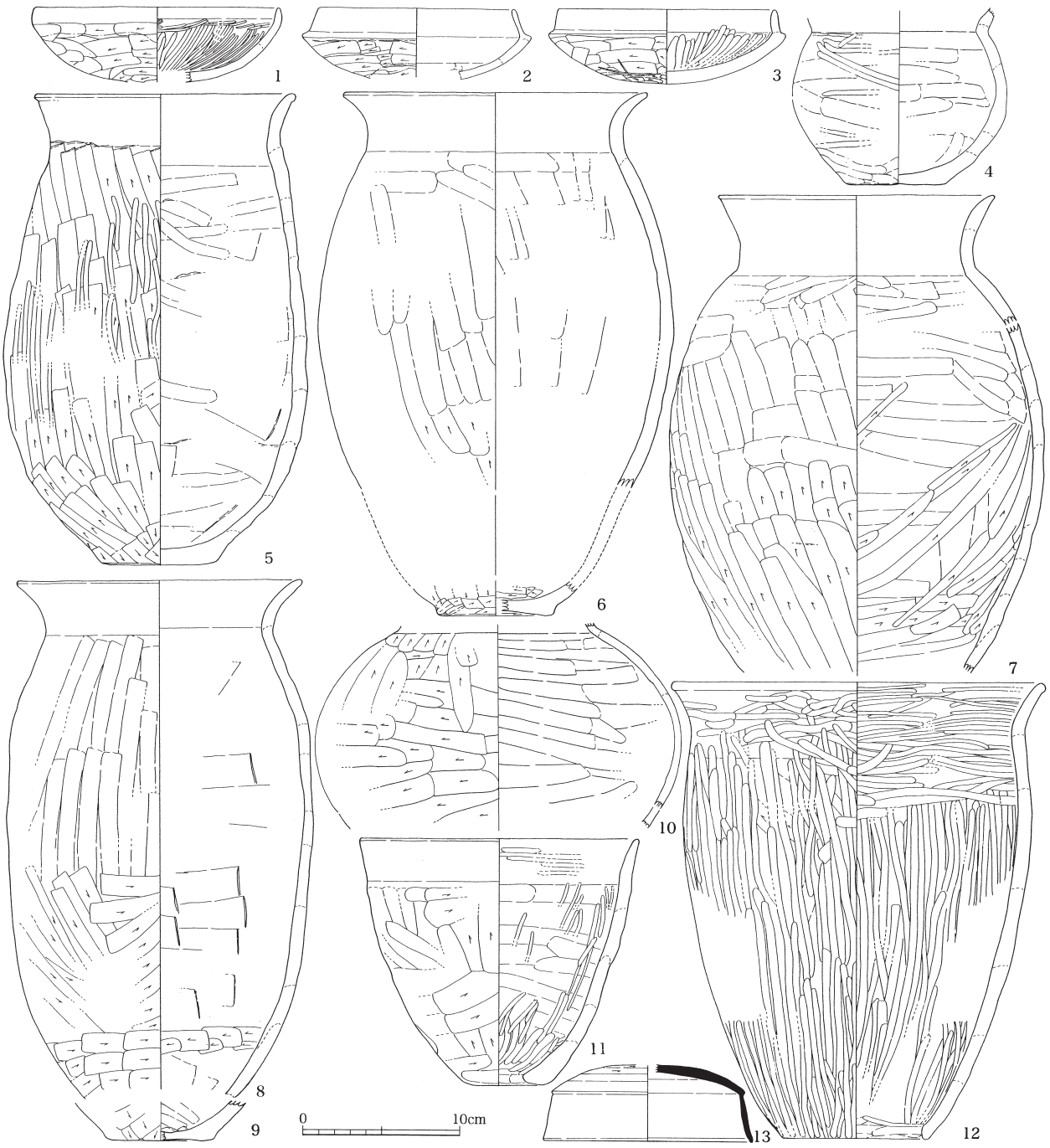
［**カマド**］北壁中央にある。天井や袖上半はカマド内外に崩れている。両袖幅 90cm、煙道先端から焚口部まで 94cm。袖は褐色粘土主体の 5・6 層で作る。火床はほぼ平坦で、床よりわずかに下がる。燃焼部は、焼土と炭化物の多い流入土の 4 層、天井内面の崩れた 2 層が堆積する。煙道は北壁をわずかに「U」字状に掘り、曲線的に上がる。土師器杯（3）付近が掛口であろうか。焚口部は崩れているが、両袖先端に土師器甕（6･7）を逆位に立て、土師器の甕（5･8）を入れ子にして差し渡し、焚口天井を補強したと思われる。

［**覆土**］覆土は大半が 1 層で、2 層は焼土塊である。

［**遺物および出土状況**］遺物はやや多く、カマド周辺にまとまる。カマド東側の床面に壺と大小の甑が各 1 点ある（10 ～ 12）。杯（3）は「×」の焼成後刻線を描く。カマド焚口に立てた甕 6・7 は胴径がやや大きく、焚口天井に掛け渡した甕 5･8 はやや細い。10 は外面に煤が付着する壺。長いハ字状口縁の「北関東型」須恵器杯蓋（13）は、肩の稜が古い要素で、太田市八幡窯例が近い（酒井編 2007,pp.42,71）。図示以外の土師器 181 片・1,108g の内訳は杯 7 片・105g と甕 174 片・1,003g で、身模倣形と思われる杯を 2 片含む。

第 71 表　権現山遺跡 4 区 SI-33　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 15.6 高　残 4.7 最大　残 15.8	半球状で内外面口～体部境の稜はごく弱い。内外面口縁部ヨコナデ後、外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体部に放射状の後に体部上端に斜位のヘラミガキ。外面口縁部と内面に漆仕上げ。	10YR5/3　にぶい黄褐 やや粗い　白・透明粗～細粒と黒細粒多 やや硬質	P3 にかかる（床上 1 cm） 口 5/12 周 2
2 土師器 杯	口　復 12.3 高　残 4.4 最大　復 14.4	外面体部ヨコヘラケズリ。内外面口縁部と内面体部ヨコナデ。内面底部ナデ。外面中位以上と内面に明瞭な漆仕上げ。	10YR6/3　にぶい黄橙 緻密　赤粗～細粒少、白・透明細粒微 やや硬質	口 1/3 周 カマド
3 土師器 杯	口　復 13.6 高　4.7 最大　15.0	外面は体部に横位と底部に 1 方向のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。外面体部下位の一部を除いて、内外のほぼ全面に漆仕上げ。外面体部下位に焼成後の刻線「×」あり。	10YR5/4　にぶい黄褐 粗い　黒・白・透明粗～細粒多、灰色礫微 やや軟質	カマド火床上 9cm 口 1/2 周 9、カマド



第 154 図　権現山遺跡 4 区 SI-33（2）　遺物

4 土師器 鉢	高　残 11.3 底　6.2 最大　13.5	外底面はナデまたはヘラケズリ。外面体部はヨコヘラナデまたはヘラケズリ後に中位以上ヨコヘラケズリ。内面は体部に横位と底部に斜位のヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。全面が磨滅気味で調整が不明瞭。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白・赤・灰色粗～細粒少、黒・透明細粒微 やや軟質	出土地点不明 17 片と カマドの 7 片が接合 胴～底全周、頸 1/18 周　カマド
5 土師器 甕	口　16.5 高　29.6 底　7.2 最大　19.2	胴部下位に最大径を持つ。外面胴部タテヘラケズリ後に、胴下端ナナメヘラケズリ。外底面は 1 方向ヘラケズリで平坦。内面体部ヨコヘラナデと胴部上半に疎らなヘラミガキ。外底面から上 10㎝までの範囲が被熱して赤色化。	10YR6/4　にぶい黄橙 粗い　白・灰色礫～細粒と 黒・透明細～微粒多、金色 雲母細片少　やや軟質	カマド焚口天井材（床 上 4㎝） 底 6/5 周、口～胴 3/4 周　カマド 6
6 土師器 甕	口　復 19.2 高　残 27.2 底　復 7.5 最大　残 22.5	外底面は外周をヘラケズリし、中央部は上げ底状。胴外面は下半と下端をヘラケズリ、上半をタテヘラナデ。胴内面はヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。底部破片は外面が被熱赤化する。胴部外面は脆くて器面が荒れ、調整不明瞭。	10YR6/4　にぶい黄橙 粗い　白・透明細～微粒多、 白・透明礫少、黒微粒微 軟質	カマド東袖先端の構 築材（床上 3㎝） 口 1/2 周、底 1/4 周 カマド、カマド 4
7 土師器 甕	口　17.4 高　残 30.2 最大　23.6	外面は胴部上半に縦および斜～横位ヘラナデ後、胴部下半タテヘラケズリ。内面は胴部ヘラナデ後、胴下位の積み上げ休止部が厚くなっている付近にヨコヘラケズリと、胴部上半に疎らなナナメヘラケズリ。口～頸部ヨコナデ。胴部の半周が被熱赤化し、対面の半周は暗褐色。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・黒・透明粗 ～微粒やや多、白礫少 やや軟質	カマド西袖先端に倒 立（床上 4 ～ 8㎝に崩 落） 口全周、胴 5/6 周 カマド 6、7、8

8 土師器 甕	口　復 18.0 高　残 32.6 底　復 19.2	外面胴部タテヘラナデ後、胴下半と底付近に横～斜位ヘラケズリ。内面胴部ヨコヘラナデ後、胴部下位の積み上げ休止部付近にヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。口縁部を含めて全体が被熱赤化。	7.5YR6/6　橙 粗い　白・透明粗～微粒多、黒細粒少 軟質	カマド焚口天井材（床上 4 ～ 6cm） 口～頸 1/2 周、破片では口～胴完存？、底なし？ カマド 5、6
9 土師器 甕	高　残 2.5 底　復 6.8 最大　残 10.8	外底面の外周をヘラケズリし、中央はナデで浅く凹む。胴下端外面ナナメヘラケズリ。内面は円周方向および斜位のヘラナデ。	2.5Y6/3　にぶい黄 粗い　白・透明粗～細粒多 軟質	底 1/2 周 カマド
10 土師器 壺	高　残 13.0 最大　復 23.0	外面胴部は横位と上半に縦位のヘラケズリ。内面体部ヨコヘラナデ。胴部中位以下の外面全周に煤付着。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・透明・灰色粗～細粒と黒・赤細粒少、白・灰色礫微　やや軟質	カマド東床直上～床上 6cm 頸 1/12 周、胴 5/6 周 カマド、カマド 2
11 土師器 甑	口　復 17.6 高　残 15.5 底　5.4 孔　2.4	底部に一孔あり。外面頸部にごく緩い段あり。内外面口縁部ヨコナデ後、外面体部に縦位（一部は横位）ヘラケズリ。外底面と口縁部にやや雑なヘラケズリ。内面体部ヨコナデ後、下半に幅広く密なヘラミガキ。上半に幅狭くやや疎らなヘラミガキ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒少、白・透明微粒微 やや軟質	カマド南東の床直上口 5/12 周、底全周 カマド、カマド 3
12 土師器 甑	口　復 23.6 高　28.8 底　復 9.2 孔　復 8.4	外面は胴部ヘラナデとナデ（一部ヘラケズリ）、内外面口縁部ヨコナデ。底部の孔縁部はやや雑なヨコヘラナデ。かなり幅広いミガキを内外面に施し、胴部が縦位で口縁部が横位。	10YR7/6　明黄褐 緻密　白・透明微粒と赤細～微粒少 硬質	カマド東側床上 1cm 口 2/3 周、底 1/3 周 カマド、カマド 1、右ソデ東側
13 須恵器 杯蓋	口　復 13.2 高　残 4.8	薄手で軽い。外面肩部に明確な稜あり。内面口端に段あり。外面天井部はロクロ右回転（時計回り）で回転ヘラケズリ。口を上に向けてロクロナデする時の回転方向も、砂粒の動きから見てこれと同じく右回転。	5Y5/1　灰 やや緻密　白礫と白粗～細粒少 硬質	南西部床上 4cm。カマドの 1 片も接合 口 1/12 周、天井 1/3 周 1、カマド

4 区 SI-34（第 155 図、写真図版 53）

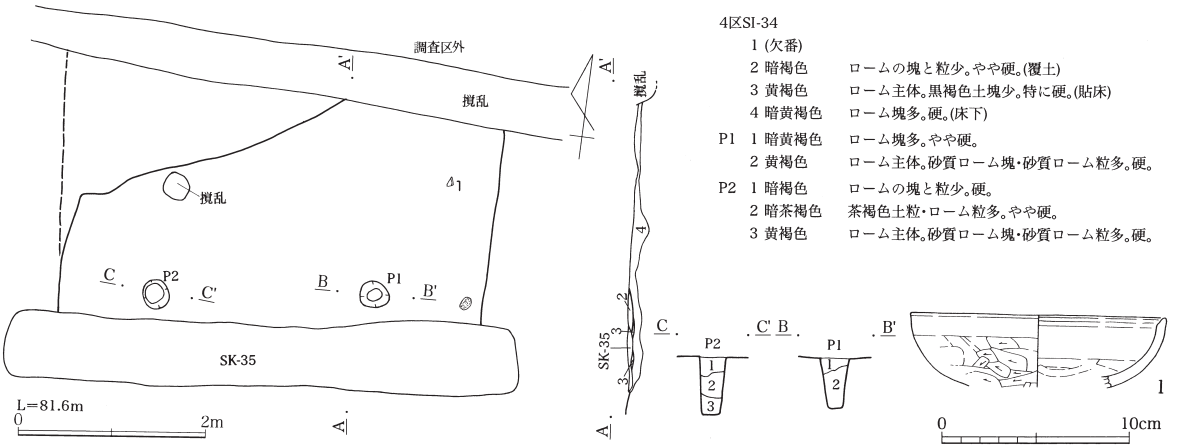
［位置］ 4 区北西隅の台地平坦面、36.5-11.0・11.5 グリッド。東 2 m に古墳後期の SI-1 と時期不明の SK-36 がある。南壁付近が時期不明の SK-35 に切られる。北側は撹乱と調査区外である。

［規模と形状］ わずかに残る掘方から方形と推定される。東壁と主柱穴の方向から推定すると中軸は N-7°-W 前後。東西長 4.74m。南北長は 2.40m 残るが、東西とほぼ同じ長さと推定する。壁は残らず、床面もほとんど残っていない。掘方底は緩い凹凸があり、床から深さ 2 ～ 18cm で、南がわずかに深い傾向がある。ローム塊が多い暗黄褐色の 4 層で埋め戻している。南側の SK-35 下に貼床の一部と思われる硬化したロームが層状にみられた。P1・2 は南側主柱穴と推定され、北側撹乱部にも存在して本来 4 本主柱穴と考える。P1 は径 31 × 21 ×深さ 52cm、P2 は径 31 × 28 ×深さ 61cm、P1-P2 の柱間は 2.35m。

［火処］ 火処は確認されなかった。

［覆土］ 覆土はほとんど削平され、南側で暗茶褐色土の 2 層がわずかに残る。

［遺物および出土状況］ 遺物はごく少ない。図示した以外の破片 7 片（46g）の内訳は、杯 1 片・2g、高杯 1 片・9g、甕 1 片・13g、甑 4 片・22g である。他に長さ 13.5cm で楕円形板状の自然礫が 1 点ある（434g）。口縁部内面に凹線を持つ半球形杯は、古墳後期末～終末期の栃木県域東部に多い（合田 2007,p.476）。



第 155 図　権現山遺跡 4 区 SI-34　遺構・遺物

第 72 表　権現山遺跡 4 区 SI-34　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 13.5 高　残 3.8	内面の口縁端部に広い凹面あり。内外面ともに体部ナデ後に口縁部をヨコナデし、外面体部の主に中位よりも下方をヨコヘラケズリ。残存する内外の全面に漆仕上げ。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　白・半透明細粒と透明微粒少　やや硬質	床上 4cm 口 1/4 周 1

４区 SI-54（第 156 図、写真図版 40・53）

［位置］４区中央部北寄りの台地平坦面の、35.0-11.5・12.0、35.5-11.5・12.0 グリッド。古墳後期初め（または中期末）の SI-7 と中期後葉の SI-14 が北西と東にある。西と北に古墳後期の SI-9・11、北に時期不明の SB-153 がある。南部が古墳中期後葉の SI-13 に切られた後に、北壁際を除く大部分が古墳後期末の SI-12 に切られる。

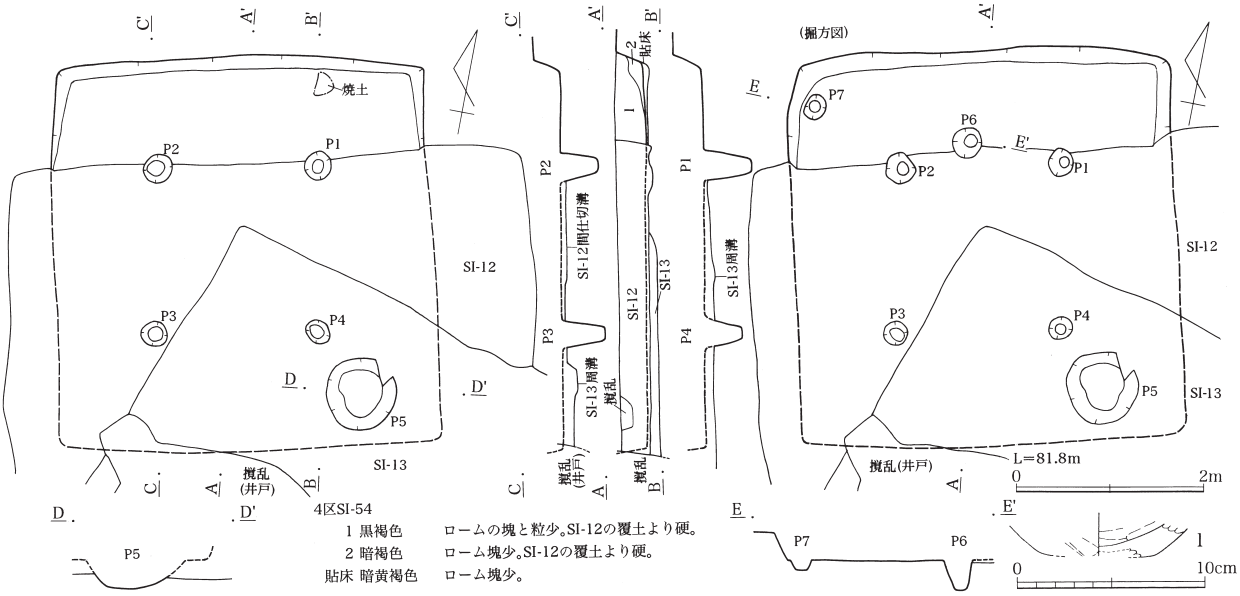
［規模と形状］主柱穴配置と同様に、竪穴も正方形と推定される。中軸は N-11°-W。東西長 4.0m。南北は北壁から 1.15 mしか残っていないが、東西長とほぼ同じと推定される。壁は直線的に外傾し、北壁で残存高 0.3m。SI-12 に切られ、北壁際約 1 mしか床面が残らないが、壁周辺が中央より若干高いと思われる。ローム塊を少量含む暗褐色土で 2 ～ 8cm ほどの厚さの貼床が確認された。

主柱穴は 4 本（P1 ～ P4）。P1 は径 30 × 28 ×深さ 51cm、P2 は径 33 × 29 ×深さ 40cm、P3 は径 29 × 27 ×深さ 43cm、P4 は径 29 × 24 ×深さ 30cm。P3 は SI-12 掘方、P4 は SI-13 掘方で確認した。柱間はすべて 1.70 ～ 1.75m で正方形配置。掘方底で北側主柱穴間の P6（径 30cm、掘方底から深さ 32cm）と北西隅の P7（径 25cm、掘方底から深さ 12cm）を確認した。貯蔵穴 P5 が南東隅で SI-13 の床下から確認された。径約 75cm の円形で、SI-13 の床下からの深さは 16cm であるが、SI-54 床面からの深さは 30cm ほどあったと思われる。底面は 50 × 45cm の楕円形で、鍋底状で壁はなだらかに上がる。

［火処］残存部に火処は確認されなかった。

［覆土］覆土は 2 層とも自然堆積でローム塊を少量含み、SI-12 の覆土より硬く締まる。

［遺物および出土状況］出土遺物はごくわずかな椀・甕・甑などの小破片で、時期を特定できるものはない。平底の底部片、内外面赤彩・内斜口縁などの杯が 23 片（115g）、甕 14 片（103g）、甑 3 片（30g）、高杯 1 片（10g）がある。古墳中期後葉の SI-13 と古墳後期末の SI-12 に切られるので中期末以前の遺構で、平底の杯片を含む点からも古墳中期の可能性がある。



第 156 図　権現山遺跡 4 区 SI-54　遺構・遺物

第 73 表　権現山遺跡 4 区 SI-54　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	高　残 1.8 最大　復 9.4	外面は雑な多方向のヘラナデとヘラケズリ。内面は多方向ナデ。不明瞭な平底であったかもしれないが不確実。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　白細～微粒多、黒・透明細～微粒と赤細粒少　軟質	底付近 1 片

4 区 SI-59（第 157 ～ 159 図、写真図版 53・54・124・125）

［位置］ 4 区北部の台地平坦面、35.5・36.0-12.0・12.5 グリッド。古墳後期の SI-31 が北東にある。北西・南・北に中期の SI-10・14・28、南に時期不明の SB-155 がある。古墳時代の円筒形土坑が多く、南西に SK-95・97 ～ 100、北に SK-116・117 がある。南西隅が古墳中期の SK-96 と接する。中期中頃の SI-27 を切る。北側にある古墳中期末の円筒形土坑 SK-129 と、それより古い風倒木痕を SI-59 が切る。

［規模と形状］ 南東隅が SI-27 と重複し不明確だが、北・西壁より南・東壁が 20 ～ 30cm 長いため、平面はやや歪んだ方形。東西 6.36 ×南北 6.28m、中軸は N-1 ° -E。壁は外傾し、残存高 0.26 ～ 0.34m。床は壁際より中央がわずかに低いが、おおむね平坦。南壁中央に接する東西 175 ×南北 125cm の馬蹄形の高まりは、幅 30 ～ 40 ×高さ約 3cm で、ローム塊の混じる土で内側は床面の高さ（8cm）まで埋め戻し、硬く締まる。掘方は床から深さ 3 ～ 10cm で底に緩い凹凸があり、ローム塊の多い褐色土で貼床する。

主柱穴 4 本は P1 が径 40 × 38 ×深さ 34cm、P2 は径 30 × 25 ×深さ 31cm、P3 は径 33 × 31 ×深さ 34cm、P4 は径 42 × 40 ×深さ 39cm。柱間はほぼ等間隔で、P1-P4 間 3.08m、P2-P3 間 3.04m、P2-P1 間 3.01m、P3-P4 間 3.10m。P2 の北西で壁に繋がる間仕切溝 D1 は断面「U」字状で長 150 ×幅 20 ～ 25 ×床から深さ 10cm。

［カマド］ 北壁中央にあり両袖幅 100cm、煙道先端から袖先端まで 118cm。袖は純粋な灰褐色粘土の 7 層で床に置いた芯を灰褐色粘土の多い 5 層で覆うが、やや流れている。北壁を約 30cm「U」字状に掘る煙道が火床から直線的に上がる。火床はほぼ平坦。焼土の多い流入土の 4 層、天井の崩れた 3 層が燃焼部に堆積し、横転した土師器小形甕 41 が火床から少し浮く（写真図版 54）。支脚と見られる被熱赤化した細長い円礫（長 16.8cm・径 5.8 ～ 6.9cm）が焚口から南東約 1 m の床上 16cm で出土したが、図化は省略した。

［覆土］ 自然埋没状で硬く、1 層にローム粒と小石を含む。東西壁際の数箇所で焼土塊が床から少し浮く。

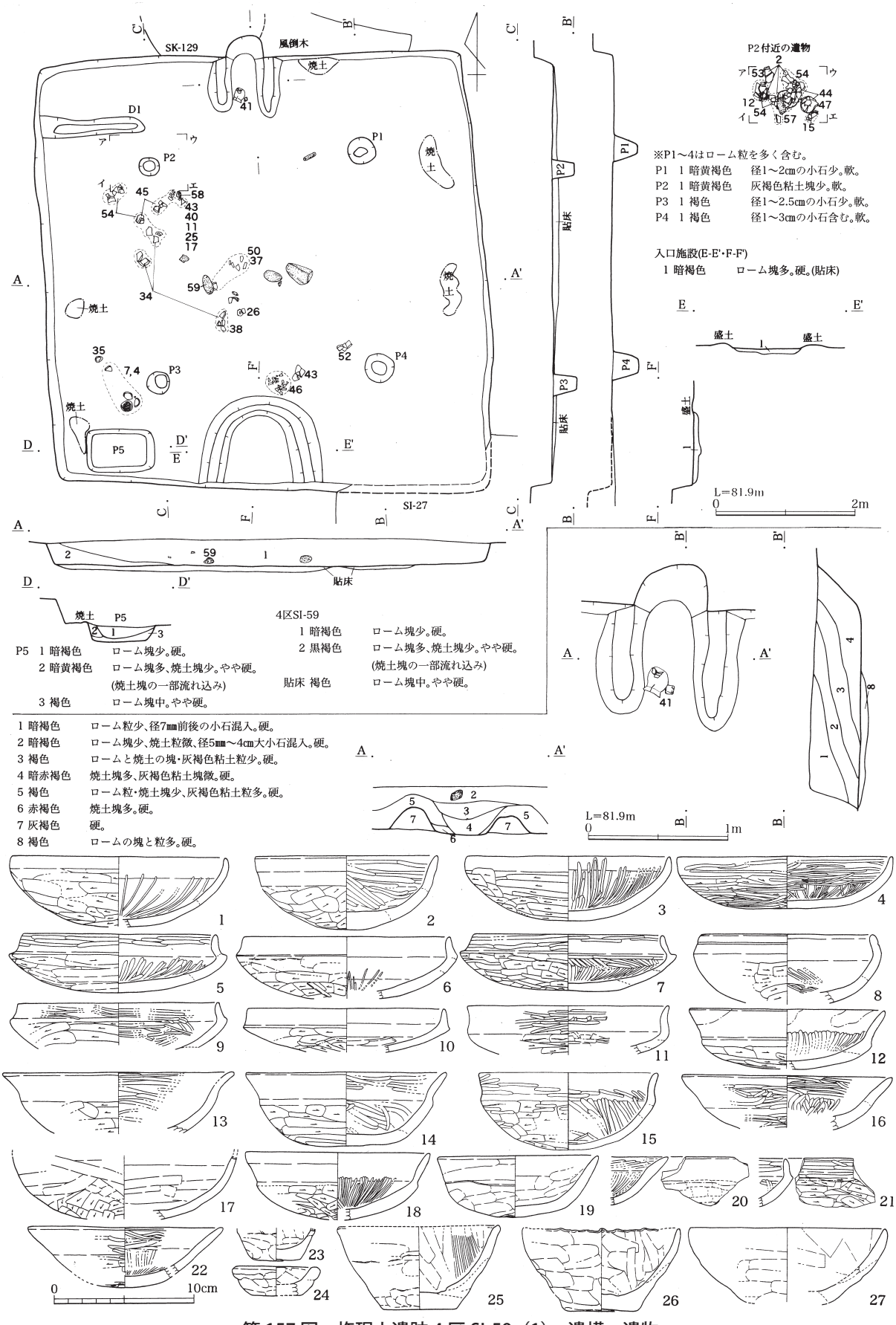
［遺物出土状況］ 床面付近で残存度が大きい遺物は 2・4・7・15・25・44・45・59。遺物が極めて多いので、番号をつけずに取り上げた破片が特に多い。重複する SK-129 と遺構間接合した杯破片は、古い SK-129 から混入した遺物と判断した（p.307 の第 171 図右下、SK-129 の 2 番）。

［出土遺物］ 各器種ともに、一定量の破片が出土した個体は出来る限り図示した。図示した以外の 1,101 片（8,068g）の内訳は、杯 302 片（1,774g）、高杯 28 片（272g）、小形土器 14 片（150g）、甕 478 片（3,441g）、甑 9 片（158g）、壺 270 片（2,273g）。壺のうち 207 片（1,742g）はオレンジ色の胎土を使う。オレンジ色の胎土は大・中形の壺・甕、甑・鉢・小形土器と深身の杯に多いのに対して、褐色で砂が多い胎土は壺よりも甕に多い。身模倣形と半球形の杯は褐色・黒褐色、外反口縁の杯は白色の土が主体である。

口縁部や外面体部まで磨く杯が多い。漆仕上げや器面無処理の他、赤彩（20）や内面炭素吸着（8・9・22）の杯も少量含む。22 は栗囲式系で、胎土は在地の土器と同様。栗囲式期（TK43 型式期以降）よりも SI-59 が僅かに古いので、22 は栗囲式出現期の遺物か、又は次段階以降の混入品。粗製鉢が目立ち、29 のような稲籾痕の例は 4 区 SI-4 などにある。図示の他に短脚高杯が少量だけある。鉢（34）・壺（36 ～ 39）・小形甕（41）にミガキを多用する。44・45・54 は貯蔵用の壺および丸甕。煮炊用甕は胴部が丸く膨らむ器形が多い（42・43・46・47・50）。46 は底が凸面状。甑の底部は無底・大孔で、53 を含めて 3 個体程を識別できた。臼玉（60 ～ 62）は粘板岩製。滑石製臼玉が 4 区 SI-7 などにある。被熱痕がある敲石（58）や擦痕のある台石（59）は、鍛冶道具と想定する余地もある。鉄滓（64）と羽口（65）は小片各 1 点だけで、65 が高杯転用羽口ならば中期の混入品ともみられ、この建物を鍛冶遺構と考えることは難しい。

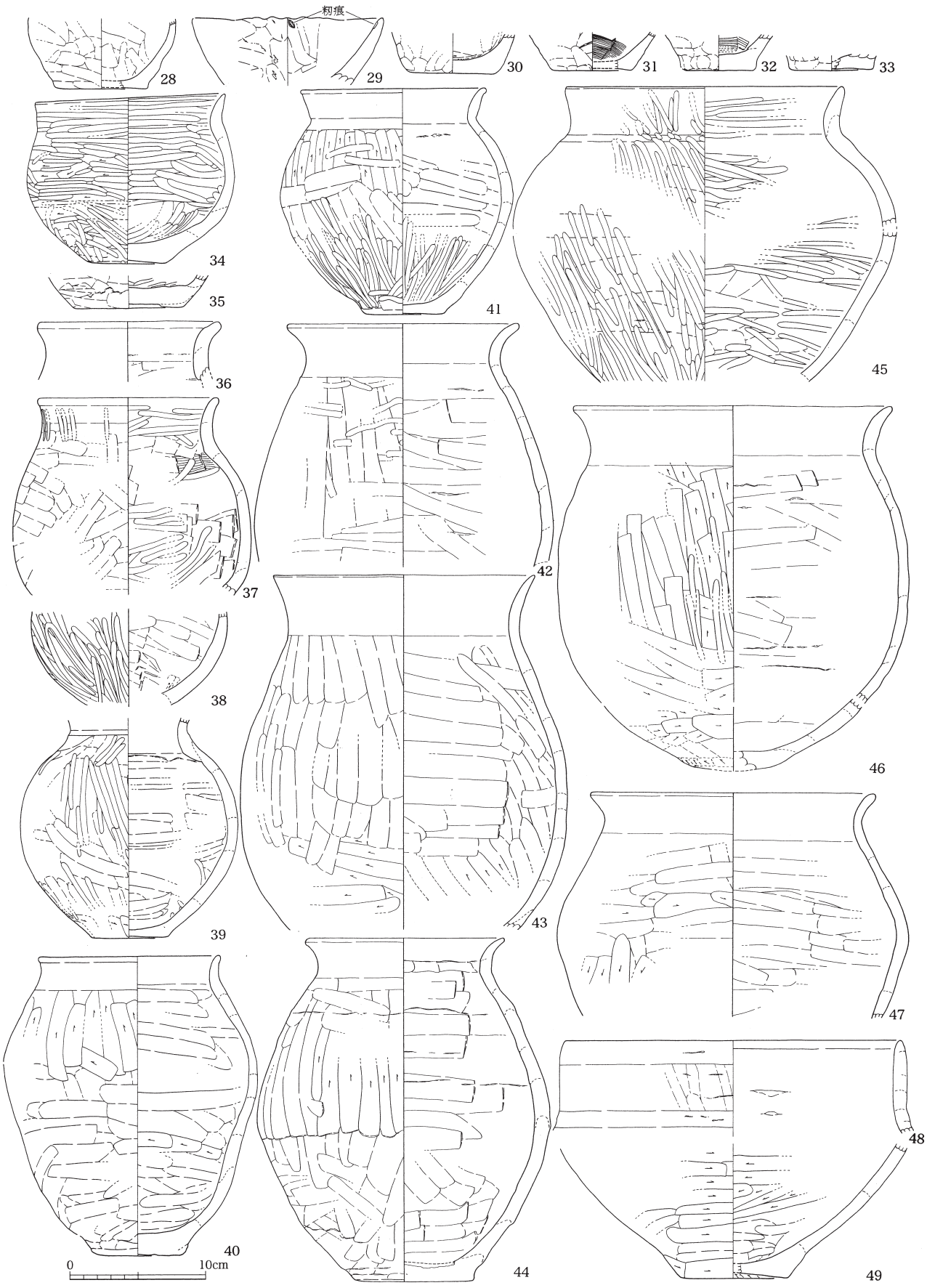
第 74 表　権現山遺跡 4 区 SI-59　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 15.4 高　残 5.0 最大　復 15.6	外面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内面体部ナデと内外面口縁部ヨコナデ後、内面体部にやや疎らな放射状ヘラミガキ。漆仕上げは見られない。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・黒・透明細～微粒多、白・赤・灰色礫微　やや軟質	口 5/12 周



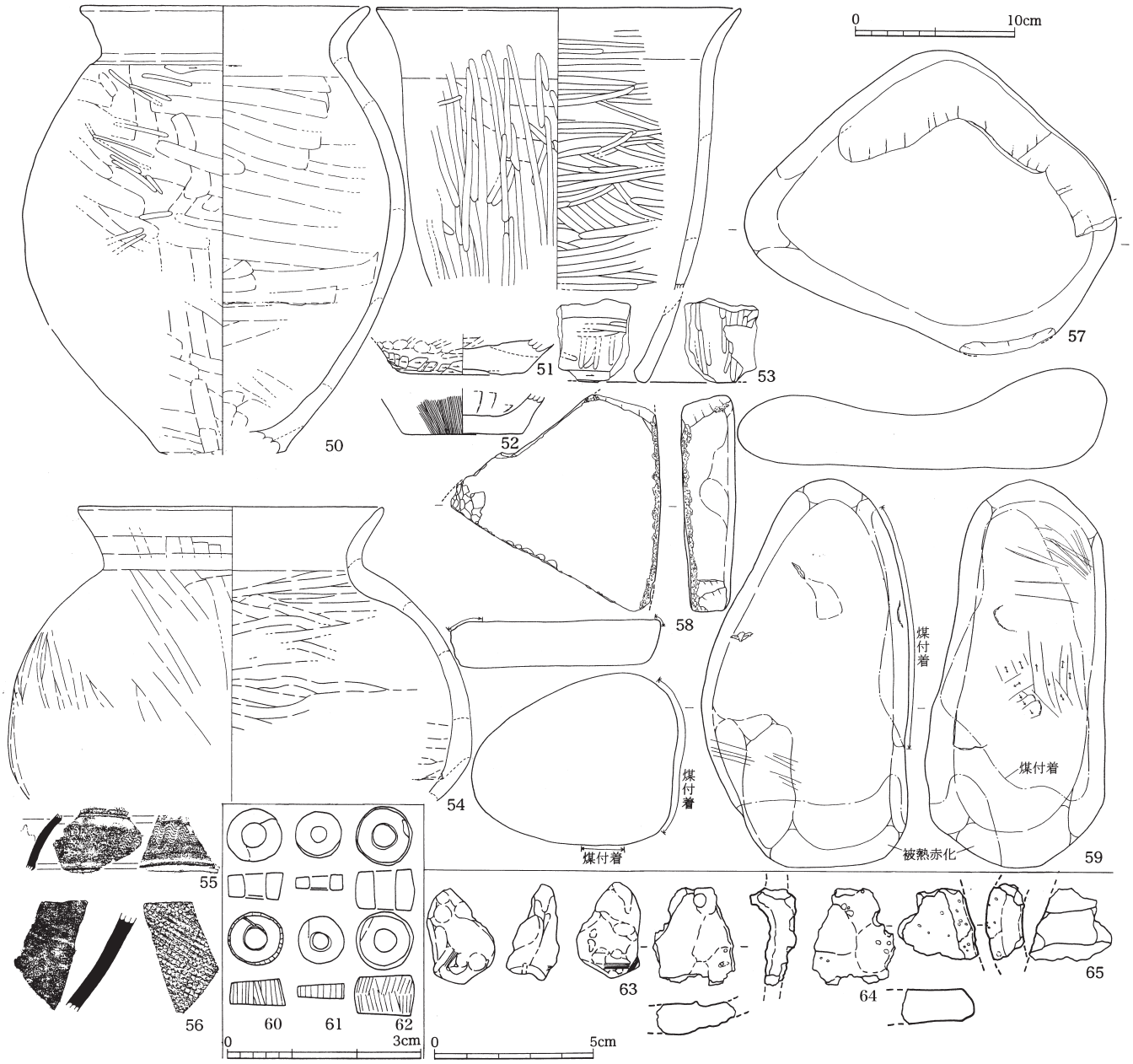
第 157 図　権現山遺跡 4 区 SI-59（1）　遺構・遺物

2 土師器 杯	口　復 13.0 高　残 5.3	口縁部中位の外面に弱い稜あり。外面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部にヨコナデ。内面は体～底部にほぼ 1 方向と口縁部に横位のヘラミガキ。	5YR6/8　橙 やや緻密　赤粗～細粒多、白・黒・透明微粒微 やや軟質	床上 4 ～ 6㎝が接合 口 1/2 周、体 3/4 周 3、4、5、7
3 土師器 杯	口　14.4 高　4.6 最大　14.6	内外面の口～体部境に弱い稜あり。外面は体部に横位の後、底部に 1 方向のヘラケズリ。外面口縁部と内面にヨコナデ、内面体部に密な放射状ヘラミガキ。外面上半と内面全面に漆仕上げ。	10YR5/2　灰黄褐 やや緻密　透明粗～微粒多、白・黒細粒と灰色粗粒少 やや硬質	口 5/12 周
4 土師器 杯	口　15.2 高　3.7 最大　15.3 重　206	外面は口縁部ヨコナデ後、底部に 1 方向のヘラケズリ後ヘラミガキ、体部に横位のヘラケズリ後ヘラミガキ。内面体部ヘラナデ後に放射状ヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。内外全面漆仕上げの可能性あり。	2.5Y6/3　にぶい黄 やや緻密　白・透明粗～微粒・黒細粒多、半透明粗粒微 やや硬質	床上 3㎝ 完形 23
5 土師器 杯	口　13.8 高　4.2 最大　15.5	外面体部ヨコヘラケズリ後、中位以下に 1 方向のヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ後、上半部にヨコヘラミガキ。内面体部放射状ヘラミガキ。内面全面と外面上半に漆仕上げ。	10YR5/3　にぶい黄褐 やや緻密　白・黒・透明細～微粒多、白・灰色礫～粗粒少 やや硬質	口 1/2 周
6 土師器 杯	口　復 14.6 高　残 4.4 最大　復 15.8	外面体部に雑なナデ後、中位以下ヨコヘラケズリ。外面口縁部～内面中位にヨコナデと内面底部ナデ後、内面体部に疎らな放射状ヘラミガキ。外面上半と内面に漆仕上げの可能性大。	5YR6/6　橙 やや粗い　白粗～細粒と透明細～微粒多、赤・黒細粒と灰色粗粒少 やや硬質	口 1/6 周
7 土師器 杯	口　13.4 高　4.0 最大　15.4 重　残 221	外面は底部 1 方向の後、体部に横位のヘラケズリ。外面口縁部と内面にヨコナデ後、口縁部と外面体部上位にヨコヘラミガキ、内面体部下半に放射状と上半に斜位のヘラミガキ。内外全面に炭素吸着の黒色処理。	2.5Y7/3　浅黄 やや粗い　白・透明・黒細～微粒多 やや硬質	床上 3㎝ ほぼ完形 口全周 23
8 土師器 杯	口　復 12.0 高　残 4.9 最大　復 13.4	残存円周が少ないので復原値は参考程度。口縁部ヨコナデ時に外面が沈線状になる。外面体部ヨコヘラケズリ。内面は体部に斜位と底部に多方向のヘラミガキ後、炭素吸着の黒色処理。	5YR6/6　橙 緻密　赤粗～細粒やや多、白・透明微粒少 やや硬質	口 1/24 周、体 1/8 周
9 土師器 杯	口　復 14.3 高　残 3.3 最大　復 15.4	体部外面ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部に斜～横位の密なヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白・黒・透明細～微粒少 やや軟質	口 1/12 周、体 1/6 周
10 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 3.1 最大　復 14.6	口～体部境の外面に強い稜。外面は体部に横位の後、底部に 1 方向のヘラケズリ。内面体部に多方向ヘラナデ後、内面上半と外面口縁部にヨコナデ。外面上半と内面全面に漆仕上げ。	10YR4/2　灰黄褐 やや緻密　透明・黒細～微粒多、白・赤細粒少 やや硬質	口 1/4 周
11 土師器 杯	口　復 14.4 高　残 3.4 最大　復 15.4	口縁部上半は外反し、口～体部境は弱い稜を持って内傾する。外面体部上端はナデで積み上げ痕を残し、それより下方はヨコヘラケズリ。内面体部はヨコヘラナデで、一部にヘラミガキも行う可能性あり。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。器表面は内外とも黒灰色だが、炭素吸着をしているかどうかは不詳。	2.5Y8/2　灰白 緻密　白・透明細～微粒少 硬質	床上 2㎝ 口 1/3 周 11
12 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 4.2	外面体部ナデ後に底部多方向と体部横位のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ後、内面体部に密な放射状ヘラミガキ。内外面口縁部にごくわずかに漆仕上げ痕（?）が残る。	10YR8/4　浅黄橙 緻密　黒・白・透明細～微粒少 軟質	床上 6㎝ 口 7/8 周、底 1/2 周 4
13 土師器 杯	口　復 16.5 高　残 4.3	外面の口～体部境に稜あり。外面口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。	5YR5/8　明赤褐 緻密　赤粗～微粒多、白細～微粒と黒・透明微粒少 硬質	口 1/6 周
14 土師器 杯	口　復 14.2 高　5.2	内外面の口～体部境が緩い段状に曲がる。外面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面は底部が疎らな 1 方向ヘラミガキで、体部が斜位・口縁部が横位のやや密なヘラミガキ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒やや多、白・黒・透明微粒微 やや軟質	口 1/6 周、体 1/2 周
15 土師器 杯	口　復 12.5 高　5.5 最大　復 12.8	口縁部下半は外面側が強く外反する。外面底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。口縁部内外面ヨコナデ後、横～斜位ヘラミガキ。内面体部に斜位と底部に多方向の密なヘラミガキ。漆仕上げは見られない。内外面に焼成時の黒斑あり。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　白・透明細～微粒多 やや軟質	床上 3㎝ 口 2/3 周 9
16 土師器 杯	口　復 15.0 高　残 3.8	外面の口～体部境に弱い稜あり。外面は体部ナデ後にやや雑なヨコヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部に密なタテヘラミガキ。	7.5YR7/6　橙 緻密　赤粗～細粒少、白・透明微粒微 やや軟質	口～体 1/6 周
17 土師器 杯（?）	高　残 4.5 最大　残 15.9	外面は底部 1 方向ヘラケズリ、体部ヨコヘラナデ。内面は少し光沢のあるヘラナデ。口縁部（?）の内面にヨコナデ。内外面の広い範囲に焼成時の黒斑あり。壺の体部片やそれを転用した杯の可能性もある。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　白粗～細粒多、黒・透明微粒少 硬質	床上 2㎝ 体 5/12 周 11
18 土師器 杯	口　復 13.1 高　残 4.8	口縁部上半がわずかに内彎気味。外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。口縁部内外面ヨコナデ後、内面体部に密な放射状ヘラミガキ。漆仕上げの可能性もあるが不確実。	10YR8/3　浅黄橙 緻密　透明微粒少、白細粒微 やや硬質	口 1/6 周、体 1/4 周
19 土師器 杯	口　11.4 高　残 4.4	やや雑で口縁部に歪みがある。口～体部境の外面に極めて浅く弱い段あり。外面は底部に多方向と体部に横位のナデ。内面体部はおそらくヘラナデの後にナデ。内外面口縁部ヨコナデ。全体に仕上げが粗雑。	5YR6/6　橙 やや緻密　白・赤粗～微粒少 やや軟質	口 1/2 周
20 土師器 杯	口　復 15～17 高　残 3.4	口～体部境の稜は不明瞭。内外面口縁部ヨコナデ。外面体部はおそらくヘラケズリだが磨滅して不明確。内面は口縁部に横位と体部に放射状の密なヘラミガキ。外面口縁部と内面全面に赤彩。口縁部破片 3 点がいずれも小さいので口径復原値は参考程度。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　黒・白・透明細～微粒少 やや軟質	口 1/4 周
21 土師器 杯	口　復 13～14 高　残 3.5 最大　復 14～15	外面体部ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部におそらく多方向の密なヘラミガキ。内外面口縁部に漆仕上げが少量残存する。	7.5YR6/4　にぶい橙 緻密　白細～微粒と透明微粒少 やや硬質	口 1/12 周



第 158 図　権現山遺跡 4 区 SI-59（2）　遺物

22 土師器 杯	口　復 15.0 高　推 4.3	内外面の口～体部境に弱い稜あり。体部に破片の接点がないので、器高は想定復原。外面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。体部内面放射状ヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。古墳後期末の栗囲式系。胎土は在地と思われる。	7.5YR7/6　橙 やや粗い　赤粗～細粒多、白・透明細～微粒少 硬質	口 1/8 周
23 土師器 小形土器	高　残 2.3 底　復 3.4 最大　残 5.6	紐積み成形痕をかなり残す程度のユビオサエで内外面を軽く調整する。外底面はナデ。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや緻密　赤・白細～微粒少、黒・透明微粒微 やや軟質	底 2/3 周
24 土師器 小形土器	口　復 5.8 高　2.1 底　復 3.3 最大　復 6.3	正円形ではないので復原径は参考値。外面は体部・底部とも雑なナデで、粘土紐積み痕を残す。内面は雑なナデで、口縁部が特に粗雑。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　白粗～微粒多、黒・透明細～微粒少 やや軟質	口 1/4 周、底 1/4 周
25 土師器 粗製鉢	口　復 11.2 高　6.0 底　復 5.0 最大　復 11.6	外面底部は丁寧なナデ。外面体部ナデ、内面体部は雑なナナメナデ後に部分的なナナメハケ。口縁部の残りが悪いが、厚さが一定しないので丁寧な仕上げナデを行わず、あまり水平には仕上げていなかったと見られる。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒多、白細粒・透明微粒少 やや硬質	床上 2㎝ 口 1/12 周、底 1/2 周、体 2/3 周 11
26 土師器 粗製鉢	口　復 11.2 高　残 5.9 底　5.2	外底面は丁寧なナデ。内外面体部は雑なナデで、内面底部は特に凹凸がひどい。口縁部に仕上げのヨコナデを行わないので、水平にならず小さな凹凸が多くて厚さも不均一。	5YR5/8　明赤褐 やや緻密　白礫～細粒と赤細粒少 やや軟質	中央床上 5㎝ 口 1/2 周、底全周 19
27 土師器 粗製鉢	口　復 13.8 高　残 5.3 最大　復 14.2	口縁端部が剝離した部分があるので、きちんと水平に仕上げていたかどうかは不詳。外面ナデ。内面はナナメヘラナデで底面付近は雑。	2.5YR6/8　橙 緻密　赤細～微粒多、白・黒細粒少 やや軟質	口～体 1/4 周
28 土師器 粗製鉢	高　残 5.1 底　復 6.6 最大　残 10.8	外底面と外面体部にナデ。内面体部は横～斜位ヘラナデの後に雑なタテナデ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密 赤粗粒と黒・赤・透明粒微 やや軟質	底 1/3 周
29 土師器 粗製鉢	口　復 14.0 高　残 4.9	口縁部の残存が少ないので復原径は参考値。外面はナデで成形時の粘土のヒビを残す。内面はタテヘラナデで、かすかにハケメ状。内面上端に稲籾圧痕が 1 箇所あり。	5YR6/6　橙 緻密　赤細～微粒多、透明微粒少 やや軟質	口 1/12 周、体 1/6 周
30 土師器 粗製鉢	高　残 2.9 底　復 6.6 最大　残 9.0	外底面ナデ。外面体部は雑なナデ（一部はヘラナデ）。内面体部は斜～横位のヘラナデ。	10YR6/4　にぶい黄橙 粗い　白・黒・赤粗～細粒少 やや軟質	底 2/3 周
31 土師器 粗製鉢	高　残 2.3 底　復 5.8 最大　残 9.2	外底面はナデ。外面体部はナデで、偶然生じた擦痕や傷を消さない程度のやや雑な仕上げ。内面はやや雑なナナメハケ。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒・赤・透明微粒少 やや軟質	底 1/3 周
32 土師器 粗製鉢	高　残 2.6 底　5.2 最大　残 7.8	外底面は不定方向のナデ。外面体部ヨコナデ。内面は体部に雑なヨコハケと底部に雑なヘラナデ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　赤・黒細～微粒と赤粗粒少 やや軟質	底 5/12 周、底部器面 1/2 欠
33 土師器 粗製鉢	高　残 1.1 底　復 5.8 最大　残 6.1	外底面は雑なナデとヘラナデ。外面体部下端にユビナデ。内面底部は雑なヘラナデで凹凸が酷い。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや緻密　白細～微粒少 やや軟質	底 1/3 周
34 土師器 鉢	口　13.8 高　12.0 底　5.8 最大　15.0 重　残 622	体部下位の積み上げ休止面より下部は、内外面ともにヘラナデ後にある程度方向を揃えた多方向ヘラミガキ。中位以上の外面はヨコヘラケズリ後ヨコヘラミガキ。外面口縁部から内面中位までは密なヨコヘラミガキ。外底面は雑なヘラナデ後ヘラミガキ。被熱痕や使用痕は確認できない。	7.5YR6/6　橙 緻密　赤細～粗粒やや多、黒・白細粒と透明微粒少 やや硬質	床直上～床上 4㎝ ほぼ完形 口 7/8 周、底全周 12、13、18
35 土師器 鉢（?）	高　残 2.3 底　復 8.0	外底面は外周を高くして雑な擦痕を残し、中央部はヘラナデと部分的なヘラミガキ。外面体部ヨコヘラナデ。内面底部はナデ後に多方向のヘラミガキ（または光沢のあるヘラケズリ）。43 の底部の可能性あり。	2.5YR5/6　明赤褐 やや粗い　白粗～微粒多、黒・透明細～微粒少 硬質	床上 9㎝ 底 2/3 周 22
36 土師器 壺	口　復 12.9 高　残 4.4 最大　復 13.5	内面頸部に積み上げ休止痕あり。内面口縁部上端は浅く凹む。内面頸部ヨコヘラナデ後、内外面口縁部ヨコナデ。残存する内外全面にヨコナデ。	2.5YR6/6　橙 やや粗い　白・半透明粗～細粒多、透明微粒少 硬質	口 1/2 周
37 土師器 壺	口　13.2 高　残 14.4 最大　17.9	口縁端部外面が弱く肥厚する。外面は胴部に横～斜位ヘラナデ後、口縁部にヨコナデとタテヘラミガキ。内面は胴部ヨコヘラナデ、肩部ヨコハケ、口縁部にヨコナデをそれぞれ施した後にやや疎らなヨコヘラミガキ。被熱使用痕は見られない。	5YR6/8　橙 緻密　赤粗～細粒多、白・黒・透明微粒少 やや軟質	主にカマド付近出土。 床上 8㎝や床下も各 1 片接合 口 5/6 周、頸全周 15、カマド、床下
38 土師器 壺	高　残 6,8 最大　復 14.3	外面は密なナナメヘラミガキ。内面ナナメナデ。	10YR7/6　明黄褐 緻密　赤・白細～微粒少 やや軟質	床直上 胴 11/12 周 18
39 土師器 壺	高　残 16.0 底　復 5.6 最大　残 15.8	外面は底面に 1 方向と体部下端に斜位のヘラケズリ。外面体部ナナメヘラナデ後ヘラミガキ。内面体部はヨコヘラナデ後、下半部に部分的なヘラミガキ。頸部内外面ヨコナデ。	5YR5/8　明赤褐 やや緻密　赤粗～細粒多、黒細粒少 やや軟質	口 5/6 周、底 3/4 周
40 土師器 小形甕	口　復 13.2 高　21.8 底　6.8 最大　復 18.4	外底面はおそらく多方向ヘラケズリ。外面はヨコナデ後に肩部タテヘラケズリ。内面は底部ヨコナデと胴部ヨコヘラナデの後、胴部下位の積み上げ休止部周辺が厚くなっているところにヨコヘラケズリ。内外面の口～頸部ヨコナデ。外面が被熱しているようだがあまり明瞭ではない。	5YR5/6　明赤褐 粗い　白・黒・赤・灰色粗～細粒多、白礫少 やや硬質	床上 2㎝ 口 1/2 周、底 7/12 周 11
41 土師器 小形甕	口　13.5 高　16.4 底　5.8 最大　16.9 重　残 792	外底面は円形に少し突出し、ヘラナデで平滑にする。外面胴部上位タテヘラケズリ、中位ナナメヘラナデ、下位タテヘラミガキ。内面胴部は下半タテヘラミガキと上半ヨコナデ。内外面口～頸部ヨコナデ。外面中位（底から高さ 4 ～ 10㎝）が弱く被熱し、それより下方は強く被熱して外面赤色。胴内面全体に暗色の汚れが付着。	7.5YR6/6　橙 粗い　白・半透明・透明礫～細粒多、透明微粒少 やや軟質	床上 23㎝ 口全周、底全周、胴下半 1/6 周欠 1



第 159 図　権現山遺跡 4 区 SI-59（3）　遺物

42 土師器 甕	口　復 16.6 高　残 17.7 最大　復 21.8	頸部外面に浅い段あり。外面は胴部に縦位と下半部に横位のヘラナデ、肩部に疎らな軽いナデ。内面は胴部ヨコヘラナデ。内外面の口～頸部にヨコナデ。胴部下半が被熱赤化するが、破片が不足して復原できない。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・透明・黒細～微粒多、赤細～微粒微 やや軟質	口 5/6 周、胴 1/2 周
43 土師器 甕	口　復 19.0 高　残 25.8 最大　復 23.8	胴部下位にある積み上げ休止面の付近は内面に斜位のヘラケズリおよびヘラナデ、外面ヨコヘラケズリ。それより上方は外面に縦位と内面に横～斜位のヘラナデ。口～頸部の内外面にヨコナデ。外面は残存する胴部の中位（口から下へ 10 ～ 17㎝の範囲）に煤が付着し、それよりも下方は被熱赤化が著しい。35 と同一個体の可能性あり。	7.5YR6/4　にぶい橙 粗い　白・赤・黒・透明粗～細粒多、白・赤礫微 軟質	床上 2 ～ 15㎝ 口 1/6 周、頸 1/2 周 11、25
44 土師器 甕	口　14.5 高　25.0 底　8.8 最大　21.4 重　残 2011	厚く重い。外面は胴部中位の積み上げ休止部を境にして下半がやや雑な多方向ナデ、上半はタテヘラケズリ後ヨコナデ。内面はヨコヘラナデ。内外面口～頸部ヨコナデ。使用による被熱痕はなく、破損後の破片に付着した煤が肩部外面に薄く見られる。	5YR6/6　橙 やや粗い　白・灰色大粒礫と白・赤粗～細粒と黒・透明細粒多 やや軟質	北西床上 4㎝ ほぼ完形 口全周、底 11/12 周 7、8
45 土師器 甕	口　復 20.0 高　残 21.5 最大　復 27.8	上半部と下半部の破片に接点がないので胴部の形は推定。内外面ともに胴部ヨコヘラナデ後、外面に斜位と内面に横位のやや密な太いヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後、外面に縦～斜位と内面に横位のヘラミガキ。被熱使用痕は全くなく、貯蔵用の丸甕と見られる。	5YR5/8　明赤褐 緻密　赤粗～細粒少、白・黒・透明微粒多 やや硬質	床上 2 ～ 6㎝ 口 1/2 周、頸 2/3 周 3、4、11、12、カマド
46 土師器 甕	口　復 23.2 高　推 26.6 底　推 5.5 最大　復 25.6	胴部と底部破片に接点がないので器高は推定。外底面はヘラケズリで凸面状。外面胴部は縦および横位のヘラケズリ後に疎らなタテヘラミガキ。内面胴部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面の底部が被熱し、胴中～下位に薄く煤付着。	10YR6/3　にぶい黄橙 粗い　白・灰色礫～細粒と黒・透明微粒多 やや軟質	床上 22㎝ 口 1/2 周、底 1/2 周 24

47 土師器 甕	口　復 20.8 高　残 16.4 最大　復 25.6	外面は縦位および横位のヘラナデ後、中位にヨコヘラケズリ、下位にタテヘラケズリ。内面はやや雑なヨコヘラナデ。内外面の口～頸部ヨコナデ。胴部外面中位以下（口から下へ 8㎝より下方）に煤が多量。	10YR6/4　にぶい黄橙 粗い　白・赤・半透明・灰色粗～細粒多 やや軟質	北西床上約 4㎝。カマド付近でも 1 片出土 口 7/12 周 8、カマド
48 土師器 甕	口　復 24.3 高　残 6.8 最大　復 26.2	小破片のため復原径は参考程度。外面口縁部ナナメナデの後、外面口縁部上半および頸部ヨコナデ。内面もヨコナデ。49 と同一個体の可能性あり。	10YR7/4　にぶい黄橙 粗い　白・透明粗～細粒多、白礫と黒細砂少 軟質	口 1/12 周
49 土師器 甕	高　残 9.8 底　7.8 最大　残 25.7	外底面は 1 方向ヘラケズリで上げ底。外面はヨコナデ後ヨコヘラケズリ。内面は底部寄りがヘラナデ、胴部寄りがヨコヘラケズリ。48 と同一個体の可能性あり。	10YR7/4　にぶい黄橙 粗い　白・透明粗～細粒多、白礫と黒細砂少 軟質	底 1/2 周
50 土師器 甕	口　復 18.2 高　残 28.1 底　復 7.9 最大　復 24.0	外底面は緩い凸面でナデまたはヘラナデ。外面は縦および横位ヘラナデ後、上半部に疎らなヘラミガキ。内面は胴部下位に積み上げ休止痕を残し、全体をヨコヘラナデ。内外面の口～頸部はヨコナデで、外面頸部に浅い段あり。外面胴部中～下位（高さ 19㎝以下）に煤付着。色調や粗い胎土が 51 の壺と類似。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　灰色大粒礫と白・赤・灰色粗～細粒少、黒細砂・透明微粒微 やや硬質	床上 8㎝ 口 2/3 周、底 1/12 周 15
51 土師器 大形壺	高　残 2.3 底　8.0	外底面は外周を少し高くし、部分的に円周方向の軽いヘラナデ。胴部外周は雑なユビオサエの後にヨコヘラケズリ。内面底部は雑な多方向ナデ。色調や粗い胎土が 50 の甕と類似。	10YR7/4　にぶい黄橙 粗い　白・灰色礫～細粒多、半透明粗～細粒と透明・黒細～微粒少 やや軟質	底全周
52 土師器 大形壺	高　残 2.6 底　復 7.2	外面胴部下端に浅く細かい丁寧なタテハケ。外底面は円周方向のヘラケズリ。内面は丁寧なヨコヘラナデ。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや粗い　白細～微粒多、黒・透明細～微粒少 やや軟質	床上 20㎝ 底 1/2 周 26
53 土師器 甑	口　復 22.8 高　残 17.6	内外面ともに胴部ナデおよびヘラナデの後、口縁部ヨコナデ。外面に縦位、内面に横位のやや密なヘラミガキ。底部は小破片 1 点だけで、正確な底径や器高は不明。内面胴部下端はタテヘラミガキで、孔縁部はヨコヘラケズリして中央に稜を持つように仕上げる。	5YR5/8　明赤褐 やや緻密　赤粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	北西部床上 5㎝ 口 1/3 周、底 1/12 周 3
54 土師器 壺	口　復 19.1 高　残 18.4 最大　復 29.0	胴部下位に積み上げ休止部がある付近が厚い。内外面胴部に狭いヘラナデを施し、ややミガキに近く丁寧に仕上げる。頸部に外面タテナデ後、内外面口縁部ヨコナデ。被熱使用痕は見られない。	7.5YR7/6　橙 やや緻密　赤粗～細粒多、白細粒と透明微粒少 やや軟質	床上 3 ～ 6㎝ 口 1/4 周、頸～胴上半 1/2 周 4、5、7、12、27
55 須恵器 壺	高　残 3.5 厚　0.6	現存下端部の復原径が 13 ～ 17㎝前後と思われる。高さ 1㎜の突線 2 本で区画した間に 7 歯の工具で右から左へ櫛描波状文。内外面に暗緑色の自然釉が厚く付着し、外面では黒色の薄い釉になる部分も見られる。古墳中期の遺物が混入。	5Y5/2　灰オリーブ やや粗い　白細～微粒多 硬質	口縁部片
56 須恵器 甕	高　残 6.2 厚　1.0	外面は木目直交の平行溝を彫った叩き板でおそらく斜位の擬格子叩き目。内面は当具痕を擦り消した痕が不明瞭なので、無文当具の可能性あり。古墳中期の遺物が混入。	5Y6/2　灰オリーブ 緻密　白細～微粒多、半透明細粒微 硬質	胴部 1 片
57 石器 台石	長　23.3 幅　残 19.0 厚　2.9 ～ 7.1 重　残 3078.9	断面図に示したように外周の片側が高く、中央部が低く凹む。外周が高い部分の頂部で平面 L 字形の範囲が広く剝離している。また、それと対角側の隅部も剝離している。いずれも人為的な加工ではなく、落下等による破損と思われる。各面ともに擦痕や磨耗等の使用痕は見られない。凹んだ部分を使用した可能性がある。	5Y6/2　灰オリーブ 緻密で硬質な流紋岩	北西部床上 10㎝ 一部欠 6
58 石器 敲石	長　13.5 幅　13.1 厚　2.9 ～ 3.0 重　729.2	板状の自然石を素材として、三角形の頂部と底辺にあたる部分を折損して台形状にした後に、隅部および縁辺部を用いて敲石に使用している。敲痕および剝離が生じている部分は図示した平面の側に集中し、反対面は稜が鋭くないためほとんど使用していない。敲痕および剝離部分は赤変も同時に生じているので、被熱するような条件の下で使用したと考えられる。	2.5Y6/2　灰黄 緻密で均質な硬砂岩	床上 12㎝ 完形 10
59 石器 台石	長　24.4 幅　13.0 厚　11.4 重　4847.7	長手の自然石を利用。端部がやや被熱して赤～桃色に変色し、一側面の広い範囲に煤が付着する。正面図下部と側面図に記入した範囲に擦痕が多数ある。右側面図中央の痕跡は発掘時の傷も含んでいるかもしれない。図示しなかった裏面は中央に煤が少量付着し、擦痕はない。	2.5Y6/2　灰黄 やや多孔質で軟質気味の安山岩	中央部床上 1㎝ 完形 16
60 石製品 臼玉	径　8.3 ～ 8.65㎜ 高　3.05 ～ 4.2㎜ 重　0.33	上下面は研磨痕なし。側面は穿孔と同一方向に粗い研磨。上面は穿孔後に分割して臼玉を量産した時の剝離面。下面はわずかに穿孔剝離があるので、分割前に穿孔したときの端面。初孔径 3.90㎜、終孔径 3.45㎜。	7.5Y3/1　オリーブ黒 やや緻密　軟質で節理の発達した粘板岩	南壁中央 完形 南壁中央
61 石製品 臼玉	径　7.3 ～ 7.35㎜ 高　1.9 ～ 2.35㎜ 重　0.17	上下面は研磨痕なし。側面は穿孔と同一方向に細かく研磨し、少し光沢あり。上面は穿孔後に分割した面。下面は穿孔剝離があるので、分割前に穿孔した時の端面。初孔径 2.50㎜、終孔径 2.45㎜。	7.5Y4/1　灰 緻密	南壁中央 完形？ 南壁中央
62 石製品 臼玉	径　9.05 ～ 9.15㎜ 高　5.85 ～ 6.5㎜ 重　0.68	上下面は研磨痕なく、穿孔後に分割した面。側面はわずかに斜位に研磨する。玉の中位に最大径があるので、この玉だけは分割後にも側面を研磨した例と言える。初孔径 3.85㎜、終孔径 3.20㎜。	10Y4/1　灰 やや緻密	南東区 完形 南東区
63 土師質 焼粘土塊	長　3.0 幅　1.9 厚　最大 1.5 重　4.8	不定形の粘土塊で草本植物の茎か細長い葉と思われる圧痕が表面にある。また側面図に記入した孔が下面から上方に向かってあり、粘土をこねた時の皺が孔となって粘土塊の中に残ったものと見られる。	5YR6/4　にぶい橙 やや粗い　白・黒細～微粒少 やや軟質	完形
64 鉄滓 椀形鍛冶滓 （極小）	長　残 3.1 幅　残 2.5 厚　1.1 重　残 10.7	厚さ 1㎝程の扁平な極小の椀形鍛冶滓破片。上下面のみが生きており、側部は全周が連続した小破面となる。滓質は緻密で上面は浅く凹む。鍛冶関連遺物構成№ 77。	7.5Y4/1　灰 磁着度　3 メタル度　なし	
65 土製品 （土器） 転用羽口	長　残 2.5 幅　残 2.2 厚　1.0 重　5.1	（土器）転用羽口の先端部小破片。厚味は 1㎝を測り、先端部は斜めに溶損している。残る側部 3 面が破面となる。内面には通風孔部の壁面の一部が確認される。胎土は緻密で土器に近い。外面肩部から体部にかけては発泡して部分的に薄皮状の滓が貼り付いている。鍛冶関連遺物構成№ 76。	7.5Y6/1　灰 やや緻密　白微粒微 やや硬質 磁着度　1 メタル度　なし	先端部 1/8 周

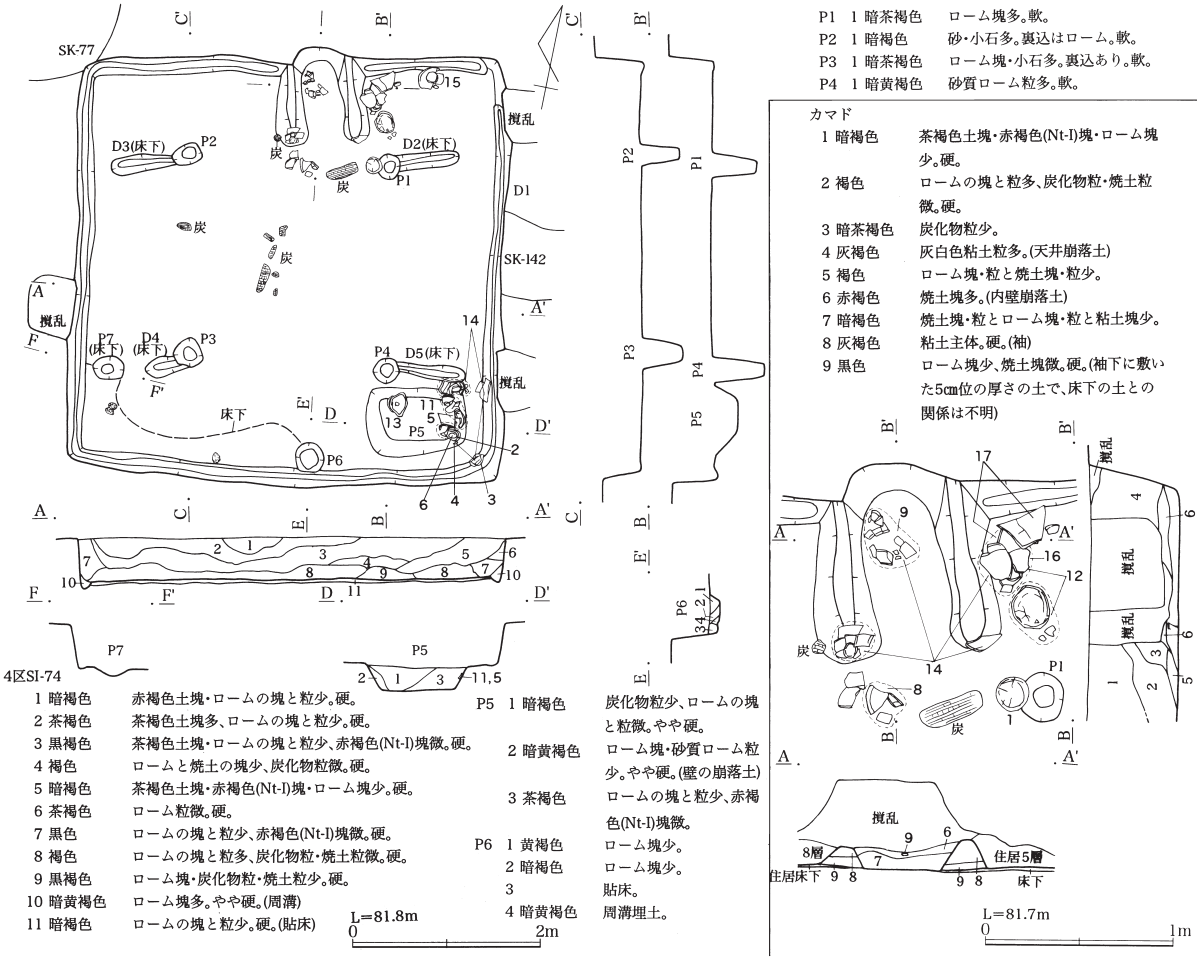
４区 SI-74（第 160・161 図、写真図版 54・55・125・126）

［位置］ ４区中央部北寄りの台地平坦面の、35.0-12.5、35.5-12.5 グリッド。古墳後期の SI-59 が北方にあり、南東と北に中期の SI-25・27、西に中期末の SI-14、南と東に古墳時代の土坑 SK-105 と円筒形土坑 SK-119 がある。北西隅が古墳中期の円筒形土坑 SK-77 を、東壁中央で時期不明の SK-142 を切る。

［規模と形状］ 東壁（4.5 m）が西壁（4.2 m）より 30cm ほど長く、南壁がやや彎曲するが、ほぼ方形である。中軸は N-11°-W。東西長 4.60m、南北長 4.52m である。壁はほぼ垂直。残存高は 0.41 ～ 0.52m で、北側の確認面が 10cm ほど高いため、壁高も南側より高い。床面はおおむね平坦である。ローム塊混じりの暗褐色土（11 層）でほぼ全体を厚さ 2 ～ 3cm で貼床する。南壁際中央から南西隅にかけて、幅 20 ～ 40cm、深さ 10 ～ 25cm の溝状の掘方が認められた。

主柱穴は 4 本（P1 ～ P4）。P1 は径 26 × 22 ×深さ 47cm、P2 は径 31 × 22 ×深さ 43cm、P3 は径 32 × 28 ×深さ 42cm、P4 は径 26 × 25 ×深さ 55cm。東側の P1・4 より西側の P2・3 がやや深い。柱間は P1-P4 間 2.15m、P2-P3 間 2.13m、P2-P1 間 2.14m、P3-P4 間 2.10m でほぼ等間隔。南西隅の西壁際で確認した P7 は径 31 × 20 ×掘方底から深さ 9cm。入口ピットは南壁際やや東寄り、壁溝に接して確認した（P6）。円形の柱穴状で径 31 × 30 ×深さ 10cm である。

北東隅が約 40cm 途切れる部分以外を全周する壁溝 D1 は、断面「U」字状で幅 10 ～ 20cm、床面から深さ 5 ～ 7cm である。間仕切溝は 4 本の各主柱穴から東西方向に計 4 本が確認されている（D2 ～ D5）。いずれも長さ 70cm、幅 15cm ほどで壁溝までは達していない。南西の D4 は 30cm と他に比べ短いが、P7 との関連と思われる。各溝は貼床除去後に確認した。南東隅にある貯蔵穴 P5 は東西軸の長方形で 108 ×



第 160 図　権現山遺跡 4 区 SI-74（1）　遺構

72cm、深さ 30cm。底面も 80 × 45cm のほぼ長方形で、おおむね平坦である。壁は緩く外傾する。P5 の 1 層は竪穴床面覆土の 8 層同様、炭化物を少し含む。P5 の 2 層はローム塊が多く、壁の崩落土であろう。周辺床面に置いたと思われる土器が貯蔵穴 P5 に流れ込んでいる。

［カマド］ 北壁中央東寄りにある。建物主軸に対しカマド主軸は北西 - 南東方向に若干振れる。上面は大きく撹乱されている。両袖幅 98cm、煙道先端から焚口部まで 120cm。袖部は竪穴床面にローム塊を少量含む黒色土（9 層）を 5cm ほどの厚さで敷き、その上に灰褐色粘土を主体とした 8 層で両袖を構築する。西袖先端は土師器甕（14）を逆位に立て、東袖先端も同じ土師器甕（14）の胴部の大破片で押さえて焚口を補強したと思われる。この甕の上半部破片は、カマド袖東側や貯蔵穴 P5 付近に移動された状況である。灰褐色粘土が多い 4 層は天井材の崩れで、焼土塊の多い 6 層が天井と内壁の崩落土と考えられる。火床はほぼ平坦で、煙道は壁外へ 15cm ほどわずかに掘り、急角度で直線的に上がる。

［覆土］ 覆土は自然堆積で、4・8・9 層に炭化物・焼土を含む。中央からカマド前面の床面直上に 10 ～ 30cm 大の炭化材が認められ、火災建物と考えられる。

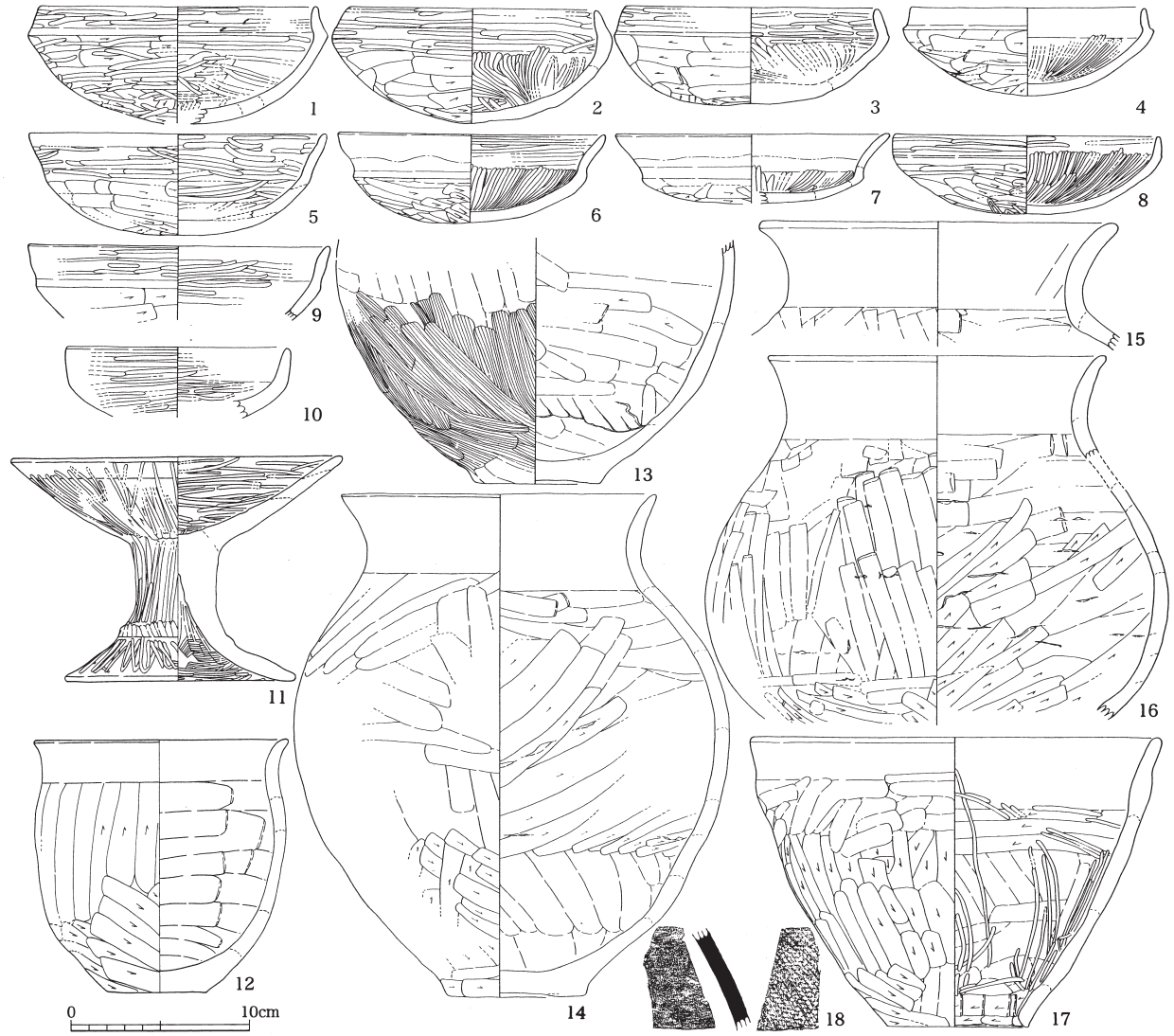
［遺物出土状況］カマド東･南側と貯蔵穴周辺にまとまる。杯のうち 1 と 8 はカマド前の床上 3cm 以内にあり、2 ～ 6 は貯蔵穴内で 5 以外は底面から少し浮く。14 は貯蔵穴周辺・カマド袖先端・燃焼部内に分かれて出土した。焚口を補強した甕の上半部破片をカマドから貯蔵穴付近に移動した状況である。下半部だけを鉢に転用した土器かもしれない壺（13）と完形の高杯（11）が貯蔵穴のほぼ底面に置かれている。残存度の高い小形甕（12）と完形に復原できる甑（17）がカマド脇の床面にある。床面に置いた頸部（15）は、器台に転用したものであろう。

［出土遺物］ 遺物量は多めである。図示した以外の 398 片（2,945g）の内訳は、杯 69 片（278g）、高杯 15 片（300g）、壺・甕類 303 片（2,139g）、甑 11 片（228g）である。甑は砂の多い甕のような土で作っている。オレンジ色の胎土は、杯の一部と高杯に用いている。

1・2・3 は内外全面を炭素吸着で黒色処理する深身の杯。4 と 8 は混和材が目立たない白色の胎土。10 は中期末に多い橙色の胎土で、後期に多い漆仕上げを行なっている。11 は後期前半に長脚化を始めた段階の高杯。小形甕（12）は外面が被熱して内面にコゲが付くが、底部周辺では目立たないので、カマドに掛けるのではなくて直置きで煮炊したらしい。13 はハケ調整の壺で、下半部だけを鉢に転用したものかもしれない。17 は直径は大きいが器高が低めの甑。台石に利用した可能性もある扁平な円礫（復原径 14.5 ×厚さ 3.5cm）が、南壁際中央やや西寄りの床面直上で出土したが、図示は省略した。

第 75 表　権現山遺跡 4 区 SI-74　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　15.6 高　残 6.5 最大　16.7	外面は体部に横位と底面に多方向のヘラケズリ後ヘラミガキ。内面は体部にヨコヘラナデ後、底部に 1 方向と体部に横位のヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外全面に炭素吸着の黒色処理。	10YR4/1　褐灰 やや粗い　白・透明細粒多、赤粗粒少 やや軟質	床直上 口 5/6 周、底部欠 16
2 土師器 杯	口　13.8 高　6.4 最大　15.6 重　残 329	外面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ後、体部上端にヨコヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面底部に多方向と体部に斜位のヘラミガキ。内外全面に炭素吸着の黒色処理。	2.5Y5/3　黄褐 粗い　白・黒・透明細～微粒多、白・透明・灰色礫少 やや硬質	貯蔵穴底上 15cm 口 11/12 周 4
3 土師器 杯	口　14.1 高　5.5 最大　15.3	外面の口～体部境に浅い段あり。外面底部に 1 ～ 2 方向の後、体部に横位のヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部に斜位の密なヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外全面に炭素吸着の黒色処理。	N2/　黒 やや粗い　透明粗～細粒多、白・灰色細～微粒少 やや硬質	南東隅部床上 3cm。貯蔵穴内の破片も接合 口 3/4 周 2、貯蔵穴
4 土師器 杯	口　13.1 高　4.9 最大　14.0	外面は体部上端にナデを残し、体部に横位と底部に 1 方向のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。外面上半と内面に漆仕上げ。白っぽい良質な胎土で製作。	10YR7/3　にぶい黄橙 緻密　黒・赤微粒微 やや軟質	貯蔵穴底上 23cm 口 3/4 周 10
5 土師器 杯	口　復 16.7 高　5.7	口縁部下半が外反し、上半は弱く内彎する。外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。外面口縁部と内面にヨコナデ後、やや密なヨコヘラミガキ。内面底部の調整不詳。内外面の一部に暗褐色の汚れが付着し、漆ではないと思われる。	5YR6/6　橙 やや緻密　赤粗～微粒多、白・透明細～微粒と黒細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上 1 ～ 2cm 口全周 8、9
6 土師器 杯	口　14.8 高　4.9 重　236.0	口縁部は下半が外反し、上半が弱く内彎する。外面は体部に横位と底部にほぼ 1 方向のヘラケズリ。口縁部は内外面ヨコナデ後に内面ヨコヘラミガキ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。外面口縁部と内面全面を漆仕上げ。内面体部の漆はおそらく使用により残りが悪い。	7.5YR7/4　にぶい橙 やや緻密　赤粒と透明・灰色細粒少 やや軟質	貯蔵穴底上 14cm ほぼ完形 口全周 3



第 161 図　権現山遺跡 4 区 SI-74（2）　遺物

7 土師器 杯	口　15.2 高　残 3.9	薄く軽い。外面体部上位ナデ後、体部に横位と底部に多方向のヘラケズリ。内外面口縁部はヨコナデおよび漆仕上げ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。	10YR6/3　にぶい黄橙 やや緻密　黒・透明細～微粒多、白細粒少 硬質	口 5/12 周
8 土師器 杯	口　14.6 高　4.4 最大　15.0	外面の口～体部境は、浅い段を持つ部分と、浅い凹線になる部分とがある。外面体部は横～斜位の幅狭いケズリで、やや光沢のある仕上がりになる。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部は密な放射状ヘラミガキ。内外面に広く漆仕上げをしているが、残存部はごく一部のみ。白っぽい良質な胎土で製作。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　透明微粒少 やや軟質	床上 3㎝ 口 2/3 周 18
9 土師器 杯	口　復 16.8 高　残 4.1	大形で、外面の口～体部境に整った稜あり。外面体部ヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面にヨコナデ後、密なヨコヘラミガキ。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白・赤・透明細～微粒少、黒微粒微 やや軟質	カマド燃焼部内底上 3㎝とカマド周辺が接合 口 2/3 周 22、カマド周辺
10 土師器 杯	口　復 12.6 高　残 3.9	やや厚い。内外全面に密なヨコヘラミガキと漆仕上げ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白・黒・透明細～微粒少 やや軟質	口 1/6 周
11 土師器 高杯	口　18.4 高　12.5 底　12.8 重　残 612	脚内面の中空部は底面から上 6㎝の高さまでで、円錐状に狭くなる。おそらく絞って成形し、下位にヨコハケと上位に棒状工具タテナデで調整して、内外面の裾部ヨコナデと内面横位・外面縦位のヘラミガキ。外面杯～脚部は縦位のヘラケズリ後ヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後、内面ヨコヘラミガキ。	2.5YR6/8　橙 緻密　赤粗～細粒・透明微粒多、白細粒少 やや軟質	貯蔵穴底上 2㎝ ほぼ完形 口 5/6 周、脚裾全周 8、9
12 土師器 小形甕	口　14.2 高　14.1 底　5.4	外底面はほぼ 1 方向のヘラケズリ。外面は上半を上方向の後に下位を横～斜位のヘラケズリ。内面はヨコヘラナデで、工具の木目の擦痕がかすかに見える。内外面口～頸部ヨコナデ。外面は被熱し内面はコゲ痕が明瞭だが、底から高さ 3㎝までの範囲は被熱が見られない。	10YR5/3　にぶい黄褐 やや粗い　白・透明粗～微粒多、黒細粒と赤粗粒少 やや軟質	カマド東側の床上 1 ㎝ 口 2/3 周、底全周 14、15

13 土師器 壺	高　残 13.7 底　7.0 最大　残 22.0	下半部だけの状態で鉢に転用した可能性もある。外底面は 1 方向のハケメ。外面胴部はタテナデ後に下半部ナナメハケ。内面は円周方向のヘラナデで、積み上げ休止部では下位がナナメユビナデ、上位がヨコヘラケズリも行っている。外面は被熱痕がなく焼成時の黒斑を残す。内面は上位の全周が暗褐色に汚れ、一部は中位まで及ぶ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・黒・透明細～微粒多、赤粗粒と白礫少 やや軟質	貯蔵穴底面 胴下半～底完存 7
14 土師器 甕	口　17.6 高　28.0 底　7.6 最大　24.3	外底面は外周を少し高くして円周方向の丁寧なヘラケズリ。外面胴部は上半にヘラナデ、下半にヘラケズリ。内面胴部は斜～横位のヘラナデ後、中位にナナメヘラケズリ。内外面の口～頸部をヨコナデして口端を薄めに仕上げる。内面胴下位（底から上 1 ～ 9㎝）に帯状のコゲ。外面は胴下半～底面が被熱し、肩部に煤少量。	10YR6/4　にぶい黄橙 粗い　白・黒・赤・透明粗～細粒多、白礫少 やや軟質	貯蔵穴周辺の床直上～床上 6㎝とカマド両袖先端とカマド内床上 3㎝が接合 口全周、底全周、胴下半の約半周欠 1、5、6、10、14、17、21、22、カマド、カマド周辺
15 土師器 甕	口　20.0 高　残 7.1	胴部は外面に斜位と内面に横位のヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。煤や被熱痕は見られないが、軟質焼成なので煮沸用の可能性あり。カマド脇に置いて器台に転用した可能性あり。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや粗い　灰色・透明粗～細粒多、白・黒細～微粒と灰色礫少 やや軟質	カマド東側の床直上 口～頸全周 11
16 土師器 甕	口　復 18.8 高　残 20.1 最大　復 25.8	胴部外面タテヘラナデ後、下半に横位のヘラナデとヘラケズリ。胴部内面はヨコヘラナデ後にナナメヘラケズリ。内外面の口～頸部にヨコナデ。外面の胴部中位と口縁部に煤少量。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・黒細～微粒多、赤粗～細粒と透明細粒少 軟質	カマド東側の床上 1 ㎝ 口 7/12 周 12 ～ 15、18 ～ 21、カマド、カマド周辺
17 土師器 甑	口　23.0 高　16.1 底　8.0 孔　6.9 重　1301	外面口～胴部境に浅い段あり。外面は胴下半ヘラケズリと口縁部ヨコナデの後に胴上半ナデ。内面は胴部ヘラナデ後に下位ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ、胴部にやや疎らなヘラミガキ。	10YR6/6　明黄褐 やや粗い　黒・白・灰色粗～細粒多、赤・透明粗～細粒少、灰色礫微 やや軟質	カマド東側の床直上 ほぼ完形 口全周、底全周 12、14
18 須恵器 甕	高　残 5.7 厚　8.5～9.5㎜	外面は木目に直交する溝を彫った叩き板で擬格子状叩き。内面はかすかな無文当具痕。甕としてはやや薄い（厚さ 8.5 ～ 9.5㎜）。古墳中期中～後葉の遺物が混入。	5Y6/1　灰 緻密　白粗～細粒と透明細粒少 硬質	胴部 1 片

4 区 SI-76（第 162 図、写真図版 46・55・126）

［位置］ 4 区中央部の台地平坦面にあり、34.5-12.5・13.0 グリッド。古墳後期の SI-18 が南西にある。西に終末期の SI-17、北東と南に古墳中期の SX-23 と SI-25 がある。東に建物はなく、6 ～ 10m ほどで低地に向かう斜面となる。南西隅のごく一部を除く大部分で、上部を古墳終末期の SI-24 に切られる。

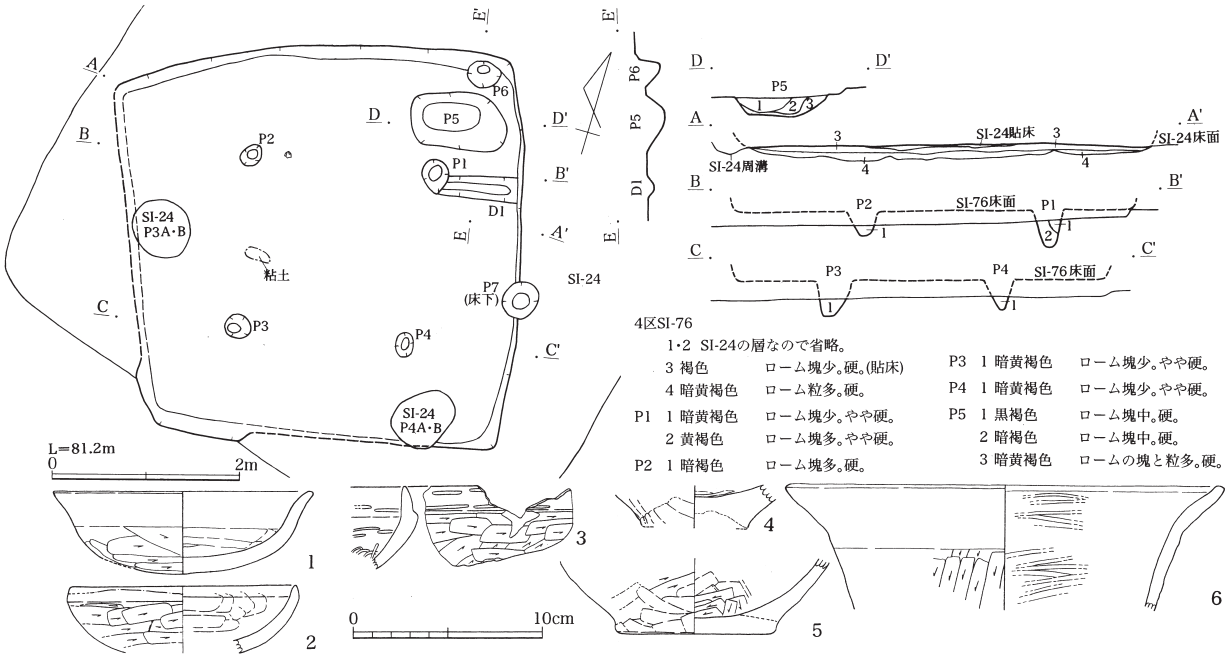
［規模と形状］ 歪んだ方形。中軸は N-16°-W。各壁の中心で、東西長 4.18m、南北長 4.20m である。しかし、東壁 4.10 m、西壁 3.65 m、南壁 3.60 m、北壁 4.10 m と長さが異なり、歪んだ隅丸方形である。確認面から残っている南西隅の残存壁高は 0.17m。壁は外傾する。SI-76 の壁はほとんど SI-24 に破壊されるが、SI-76 の掘方壁が SI-24 より下層に残っていたので竪穴形状を明らかにできた。SI-24 床面とほぼ同レベルを床面とし、おおむね平坦で傾斜しない、全体に軟弱な床面である。中央部西寄りの床面直上に 70 × 50cm の範囲で焼土が集中する。炉の可能性もあるが、床面に被熱痕はない。掘方は床面から深さ 3 ～ 10cm で底面は緩い凹凸がある。ローム粒が多い暗黄褐色の 4 層、ローム塊を少量含む褐色の 3 層でほぼ全体を貼床する。床面のレベルは、SI-24 とおおよそ一致する。西半部では SI-76 床面の上に薄く貼床土を入れて SI-24 床面を作り、東半部では SI-76 床面レベルをそのまま SI-24 の床面に用いる。

主柱穴は 4 本（P1 ～ P4）。掘方底面での規模は、P1 が径 36 × 28 ×深さ 30cm、P2 が径 26 × 20 × 深さ 10cm、P3 は径 27 × 25 ×深さ 19cm、P4 は径 25 × 19 ×深さ 19cm。床面が SI-24 とほぼ同じとすると、約 20cm 深くなる。柱間は P1-P4 間 1.81m、P2-P3 間 1.85m、P2-P1 間 1.95m、P3-P4 間 1.83m で、ほぼ等間隔の方形配置。掘方底では、北東隅で P6、東壁に重複して P7 を確認した。P6 は径 35 × 29 ×掘方底から深さ 22cm、P7 は径 40 × 35cm で深さ不明。間仕切溝 D1 が、東壁際で北東主柱穴 P1 に付随する位置にある。断面「U」字状で、長 42 ×幅 20 ～ 27 ×深さ 8cm。北東隅にある貯蔵穴 P5 は北壁とほぼ平行する東西軸の隅丸長方形で 100 × 60 ×床面から深さ 20cm、底面はほぼ平坦な 60 × 25cm の隅丸長方形。壁は緩く外傾する。P5 覆土は下層ほどロームが多く、硬く締まる。

［カマド］ 北壁際の中央床面に、カマド跡と考えられる被熱・焼土化部分がある。

［覆土］ SI-24 に切られて覆土はほとんど残っていない。

［遺物出土状況］ SI-24 に切られるので、SI-76 から SI-24 へ混入した遺物もあるかもしれない。ただし、両



第 162 図　権現山遺跡 4 区 SI-76　遺構・遺物

第 76 表　権現山遺跡 4 区 SI-76　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　13.7 高　4.4	外面は体部に横位と底部に 1 方向のヘラケズリ。内面は体部に横～斜位と底部に 1 方向のヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	5YR6/8　橙 やや粗い　赤粗～細粒多、白・黒細粒と透明微粒少 やや軟質	貯蔵穴内。3 片のみ SI-24 の床下に混入 口 3/4 周 貯蔵穴、SI-24 床下
2 土師器 杯	口　復 12.0 高　残 3.5 最大　復 12.4	外面の口～体部境に弱い稜あり。内外面口縁部ヨコナデ後に外面体部ヨコヘラケズリ。内面全体に横～斜位の丁寧なヘラナデを施して光沢のある仕上がりにする。内外面口縁部に漆仕上げが残存する。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　赤粗粒と黒・白・透明細粒少 やや軟質	口 1/6 周
3 土師器 杯	口　復 14～16 高　残 4.3 最大　復 16～18	残存円周が少ないが、やや大きめの器で深身と思われる。外面体部に横～斜位ヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、内面体部に横位と弧状（?）のヘラミガキ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　透明細～微粒多、黒細粒少　軟質	口 1/18 周、体 1/6 周
4 土師器 甕	高　残 2.2 底　復 5.6	外底面は粘土接合面で剥落し、粘土成形時の指頭圧痕が見られる。外面胴部はナナメヘラナデ、内面底部は多方向ヘラナデ。外面全体が被熱して脆弱化する。	10YR7/3　にぶい黄橙 やや粗い　白・黒・透明粗～細粒多、灰色礫微 やや軟質	底 1/2 周
5 土師器 大形壺	高　残 4.0 底　8.2 最大　14.2	外底面は円板状で多方向ヘラケズリ。外面胴部ナナメヘラケズリ後にナナメヘラナデ。内面は底部多方向ヘラケズリ、胴部ヘラナデ。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　黒・白・透明細～微粒多、赤粗～細粒少 やや軟質	SI-24 床下の 3 片と SI-76 の 1 片が接合 底 11/12 周 SI-24 床下
6 土師器 甑	口　復 23.1 高　残 6.6	口縁部内面上端が弱い稜を持って上方へ折れる。外面胴部タテヘラケズリ後、内外面口縁部ヨコナデ。内面はヨコヘラミガキで、磨滅して不明瞭な部分が多い。	2.5YR6/8　橙 粗い　黒礫～細粒・赤粗～微粒・透明細～微粒多 やや軟質	口 1/8 周

遺構の間で接合できた遺物は、ごく僅かな破片のみであった。

[出土遺物] 遺物は極めて少ない。図示した以外の 69 片（821g）の内訳は、杯 19 片（104g）、高杯 1 片（10g）、甕 48 片（640g）、甑 1 片（67g）で、ほとんどは甕と杯である。貯蔵穴出土の杯（1）が確実に伴う遺物で、体部が浅く内外面のミガキを省略しているので古墳時代後期後葉か、またはそれ以降とみられる。古墳終末期（2）や後期中葉（3）の杯もみられる。

4 区 SI-92（第 163 図、写真図版 55・56）

[位置] 4 区北西隅の台地平坦面にあり、35.5-11.5、36.0-11.0・11.5 グリッド。古墳中期の SI-4・5・8 が北東・西・南に近接する。東には古墳後期の SI-11 がある。古墳時代の遺構 3 基が重複し、SI-92（中期）→ SK-93（後期前葉 ?）→ SI-3（後期後葉）の順序になる。北東・北西の両隅部を除く大部分で古墳後期の SI-3 に、北東隅が SK-93 に切られる。

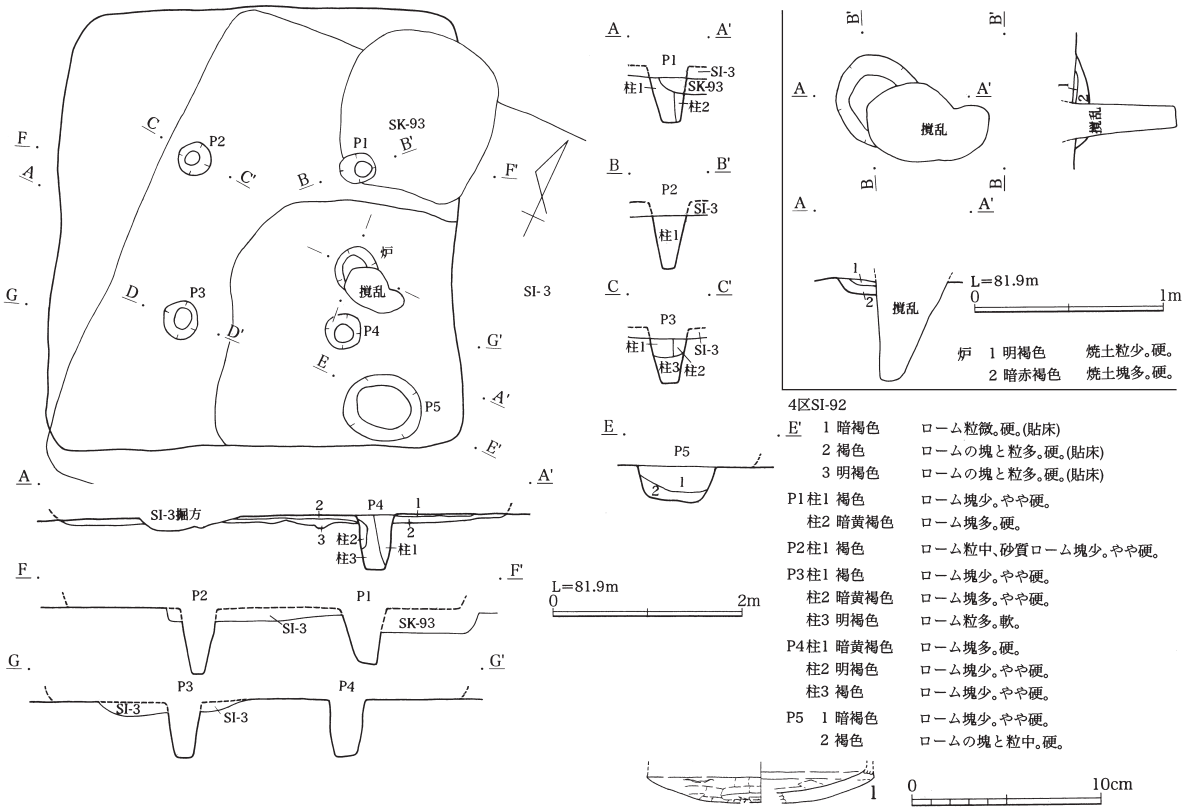
［規模と形状］南北が若干長いがおおむね方形で、中軸は N-25°-W である。掘方からの推定で、東西長 4.3m、南北長 4.6m である。確認面が床面ないしは床面をすでに削っているため、壁はない。床面はほぼ平坦と思われる。掘方底面は緩やかな凹凸があり、ローム塊の多い第 1 ～ 3 層でほぼ全体を貼床する。床面からの深さは 5 ～ 10cm である。

主柱穴は 4 本（P1 ～ P4）。P1 は径 38 × 31 ×深さ 47cm、P2 は径 37 × 34 ×深さ 56cm、P3 は径 40 × 36 ×深さ 47cm、P4 は径 41 × 37 ×深さ 58cm。P1・3 が P2・4 より 10cm ほど浅い。柱間は P1-P4 間 1.77m、P2-P3 間 1.72m、P2-P1 間 1.80m、P3-P4 間 1.70m でほぼ方形配置。南東隅にある貯蔵穴 P5 は、東西軸の楕円形で 83 × 71cm、床面から深さ 39cm。底部平坦面も 60 × 46cm の楕円形で、壁面はやや外傾する。P5 の覆土は 2 層で、下層ほどロームが多い。

［炉］東側主柱穴（P1-P4）ラインの南東主柱穴寄りに位置する。撹乱を受けているが、45 × 50cm ほどの楕円形の地床炉である。深さ 8cm ほどの鍋底状の浅い掘り込みで、底面には 5cm ほどの厚さで焼土塊の層（2 層）が認められた。

［覆土］覆土はほとんど残っていない。

［遺物および出土状況］遺物は 1 片だけで、SI-3 の貼床除去時に SI-92 の炉から出土したものである。古墳後期の土師器杯なので、カマドがなく炉を持つ SI-92 に伴うとは考えにくい。むしろ SI-3 の床面構築時に混入した遺物とみられる。



第 163 図　権現山遺跡 4 区 SI-92　遺構・遺物

第 77 表　権現山遺跡 4 区 SI-92　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	高　残 1.8 最大　復 11.9	外面口～体部境に浅い段または稜。残存度が少ないので復原径は参考程度。外面底部ヘラケズリ後に体部ヨコヘラナデ。内面体部ヘラナデ後、内外面口縁部ヨコナデ。内外面の残存部全体に漆仕上げ。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒・透明細～微粒多、赤・白細粒少 やや硬質	SI-3 貼床下の炉より出土 体 1/12 周 SI-3 貼床炉

４区 SI-103（第 164 図、写真図版 56）

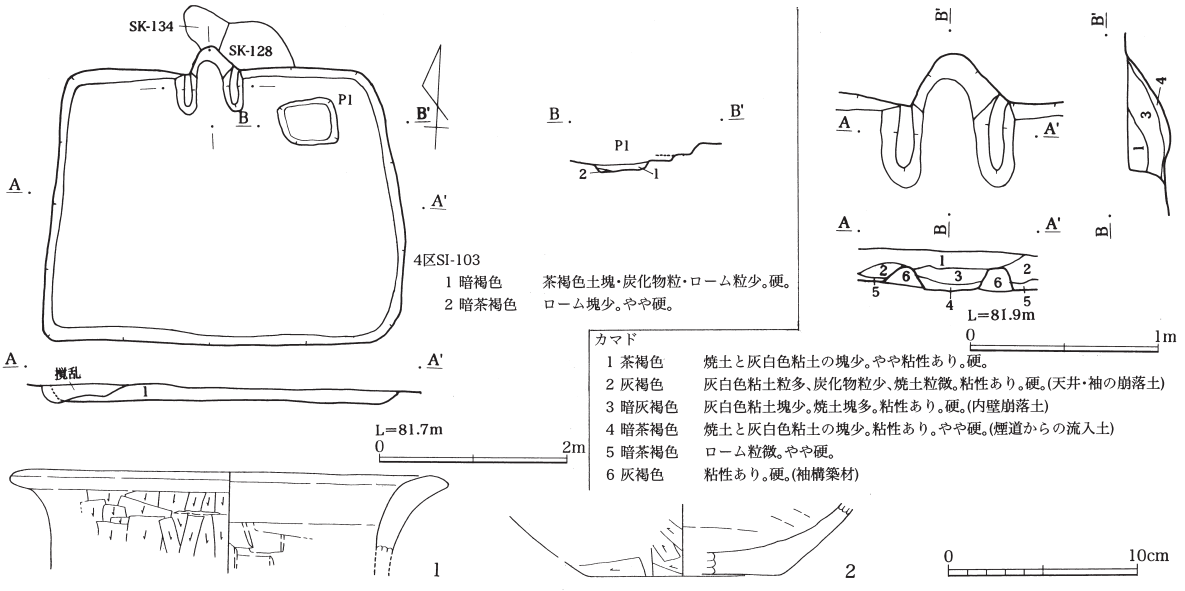
［位置］ ４区北東隅の台地平坦面にあり、35.5-13.0 グリッド。古墳後期の SI-30 が北東にある。西と北には古墳中期の SI-27・29 がある。北壁際中央付近が時期不明（縄文時代？）の SK-128・134 を切る。西壁は撹乱でほとんど壊れる。

［規模と形状］ 北壁 3.1 m、南壁 3.8 m東西壁 2.8 mで東西方向にやや長い台形で、南東隅の丸みが顕著である。中軸は N-2°-W である。各辺中央で、東西長 3.70m、南北長 2.90m である。壁はなだらかで、残存高 0.11 ～ 0.16m。床面は緩い凹凸はあるがほぼ平坦で、傾斜はない。西側床面は撹乱を受ける。地山を平坦にして床面とし、貼床はない。カマド東側、北東隅にある貯蔵穴 P1 は、東西軸の長方形で 60 × 48cm、深さは床面を掘り下げてしまったため 7cm しか残らないが、本来は約 20cm と考えられる。底はほぼ平坦で壁はやや外傾する。P1 の上層は竪穴覆土と同じで、廃絶時に開口していたことがわかる。

［カマド］ 北壁中央やや西寄りにある。両袖幅 70cm、煙道先端から焚口部まで 70cm で小形である。灰色粘土の６層を主体として床面に袖部を作る。袖の外側に散る２層は天井か袖が崩れたと考えられる灰褐色粘土が多い。３層は灰色粘土と焼土塊が多い天井内壁の崩落土、その下の火床上に薄く堆積する暗茶褐色の４層は煙道からの流入土と考えられる。火床は焚口に比べわずかに窪む。煙道は壁外へ 28cm ほど「U」字形に掘り、緩く上がる。

［覆土］ 覆土は１層で、ローム粒と炭化物を少量含む。

［遺物および出土状況］ 極少量の土師器がある。図示した以外の土師器 34 片（228g）の内訳は、杯 26 片（99g）、壺甕類６片（110g）、甑２片（19g）である。図示できなかった土師器杯小片は須恵器杯身模倣形（白色良質に漆仕上げするものと赤褐色のもの）および半球状杯で、内面を丁寧に磨くものがあり、後期前～中葉と見られる。重複する時期不明の SK-128・134 からも遺物は出土しなかった。



第 164 図　権現山遺跡 4 区 SI-103　遺構・遺物

第 78 表　権現山遺跡 4 区 SI-103　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 甕	口　復 23.2 高　残 5.3	頸部の外反する状況は場所によって異なり、急に折れる部分（図の左半）と大きく開く部分（図の右側）がある。外面は頸部タテヘラケズリ後、口縁部にやや狭いヨコナデ。内面は頸部ヨコヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　白・黒細粒と透明微粒少、灰色砂・赤粗粒微　硬質	口 1/4 周
2 土師器 大形壺	高　残 3.8 底　10.2	厚く重い。外底面はおそらくヘラナデできれいに仕上げる。外面胴部ヨコヘラケズリ、内面多方向ヘラナデ。外面に焼成時の黒斑が大きく残る。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　白粗～微粒多、黒・赤・透明細～微粒少 やや硬質	底 1/2 周

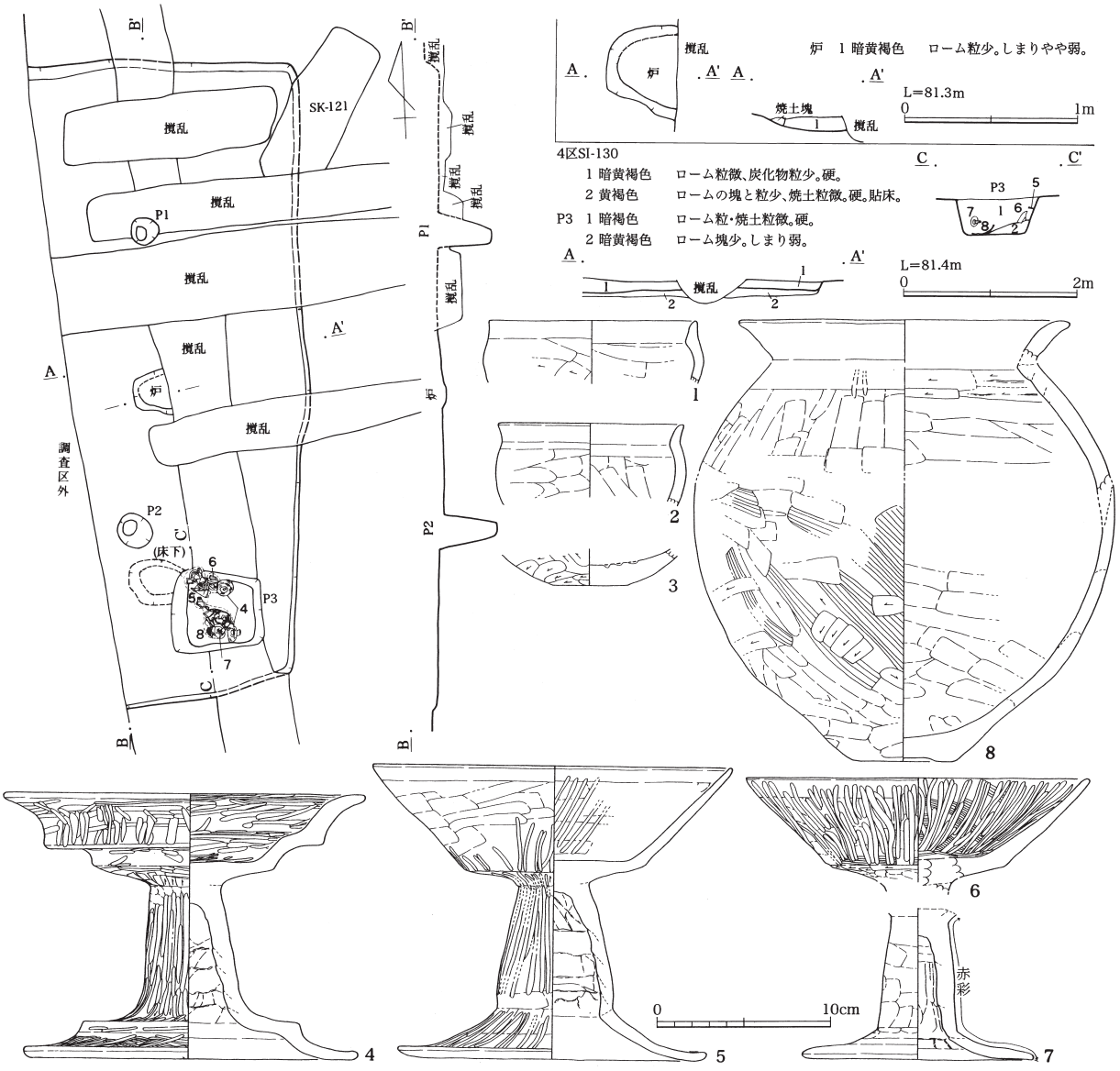
4 区 SI-130（第 165 図、写真図版 56・126）

［**位置**］4 区中央部南寄りの台地平坦面の、33.0・33.5-11.5 グリッド。古墳中期の SI-22 が南東にあり、東に古墳後期の SI-21 がある。東壁際中央から北東隅が SK-121（撹乱？）や長方形撹乱坑（旧名 SK-138 ～ 141）と重複する。また、東壁寄りには南北に延びる溝状の撹乱がある。いずれも本建物より新しい。

［**規模と形状**］全体の東側約 1/3 だけを調査したが、ほぼ方形と予想される。中軸は N-4°-E。東西は北壁際で 3.1m を調査し、南北長 7.48m である。壁は直線的に外傾し、残存高 0.05 ～ 0.11m。床面はおおむね平坦で、傾斜しない。掘方は床面からの深さが 3 ～ 10cm で、底面はほぼ平坦。ローム塊の多い黄褐色土でほぼ全体を貼床する。貼床を除去した下で、貯蔵穴の北西部が他よりも 10cm 程度深くなる。

主柱穴は東側の P1 と P2 を確認した。本来は 4 本主柱であろう。P1 は径 32 × 31 ×深さ 62cm、P2 は径 41 × 39 ×深さ 68cm。P1-P2 間が 3.38m。南東隅にある貯蔵穴 P3 は、西辺が東辺より 20cm ほど長いが、東西軸のおおむね長方形で 107 × 88cm、床面から深さ 46cm。底面はほぼ平坦で、壁はやや外傾する。P3 の覆土は上下 2 層で、北から流入した状態で高杯などがある。

［**炉**］東側主柱穴 P1-P2 ラインのほぼ中央に地床炉がある。東側は溝に切られるが、東西残存長 40cm（推



第 165 図　権現山遺跡 4 区 SI-130　遺構・遺物

定 80cm 前後)、南北 52cm の東西に長い楕円形で、深さ 8cm の鍋底状の窪みである。覆土は焼土・ローム粒を含むやや締まりの弱い暗黄褐色土で、焼土塊も認められる。

［覆土］　炭とローム粒を含む暗黄褐色の単層である。

［遺物および出土状況］　遺物は少量の土師器。図示した以外の 30 点（204g）の内訳は、杯 8 片（42g)、高杯 8 片（58g)、壺 3 片（27g)、甕 11 片（77g)。貯蔵穴から出土した古墳時代中期中葉の高杯が主体で、4 は段状、7 は外面赤彩。杯は内斜口縁の小破片しかない（1・2)。甕は炉で用いた状況の煤が付く（8)。SK-121・138・139・140・141 との間で接合できる遺物はなかった。

第 79 表　権現山遺跡 4 区 SI-130　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 11.9 高　残 3.6 最大　残 12.7	内面頸部に強い稜。体部は外面ヨコヘラケズリ、内面ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内外面とも器面が磨耗しているため調整不明瞭。	5YR6/6　橙 やや粗い　白・透明粗～微粒と黒細～微粒少 やや軟質	貼床中 口 1/8 周 貼床
2 土師器 杯	口　復 10.6 高　残 4.7	小破片なので、復原径は参考程度。体部に外面ナデと内面ヘラナデの後、口縁部内外面にヨコナデ。内面全面が炭素を吸着して黒色。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　黒細粒と白・透明粗～細粒少 やや硬質	貯蔵穴より出土 口 1/36 周、頸 1/12 周 貯
3 土師器 杯	高　残 2.1 底　4.5	外面底部に不定方向のヘラケズリ。体部外面ナナメヘラケズリ。内面は剝離して不明な部分が多いがおそらく多方向ヘラナデ。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　白・透明細～微粒と黒微粒少 やや軟質	貼床中 底全周 貼床
4 土師器 高杯	口　20.9 高　15.2 脚裾　19.3 重　1109	やや厚く重い。外面は口縁部・杯体部・脚裾部ヨコナデ、杯底部～脚柱部タテヘラケズリ。脚柱部と口縁部に縦位、それ以外と口縁部に横位のヘラミガキを行い、脚裾部は斜位のミガキも目立つ。杯部内面はヨコナデ後、底部に放射状、口～体部に横位のヘラミガキ。脚内面は脚柱部がユビオサエで積み上げ痕を残し、脚裾部ヨコナデ。	5YR7/8　橙 やや緻密　赤粗～細粒・透明微粒多、白細粒少 硬質	床上 5 ～ 6cmが接合 完形 2、5
5 土師器 高杯	口　復 20.7 高　16.9 脚裾　17.9	脚柱部上端をナナメユビナデ後に脚部を紐積みする。外面は脚柱部～裾部タテヘラナデ、杯底部タテヘラケズリ、杯体部ナデ、脚裾と口縁部ヨコナデ。杯部下位よりも下方にタテヘラミガキ。内面は杯部ナデと口縁部ヨコナデ後ナナメヘラミガキ、脚裾部ヨコナデ。	5YR5/6　明赤褐 やや粗い　白・黒・赤・灰色細粒多、灰色礫と透明細砂少 やや硬質	床上 21cm。SK-141 の 1 片と 33.5-11.5 の 4 片も接合 口 5/12 周、脚裾 5/6 周 3、SK-141、33.5-11.5
6 土師器 高杯	口　19.8 高　残 6.0	外面は底部にナデと外周ヨコヘラケズリ、杯体部に縦および横位ナデ後口縁部ヨコナデ、杯体部タテヘラミガキ。内面は斜位のハケメとナデの後に縦位またはやや斜位のヘラミガキ。内底面は多方向と外周に横位のヘラミガキ。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　赤粗～微粒多、白細粒やや多、黒・透明細砂少 硬質	床上 16cm 口 5/6 周 4
7 土師器 高杯	高　残 8.6 脚裾　13.3	残存する脚柱部上面は杯底からの剝離面。脚柱部は内面成形後に少し絞って縦皺が生じ、上端部に横位と中位以下に縦位のユビナデ。脚柱部外面はおそらくタテヘラケズリ後にヨコナデ。内外面の脚裾部はヨコナデ。残存する外全面に赤彩あり。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや緻密　白・黒細砂と透明粗～細粒少 やや硬質	床上 12cm 脚柱～脚裾全周 1
8 土師器 甕	口　復 19.2 高　推 25.4 底　6.0 最大　残 24.2	胴部中位の接点がないので器高は推定。外底面は多方向ヘラケズリでやや凹む。外面胴下半はヘラナデとナナメハケの後に積み上げ休止部の厚さを薄くするようなヘラケズリ。外面胴上半はタテヘラナデと横位のヘラナデおよびハケメ。内面胴部ヨコヘラナデと肩部ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。底部以外の外全面に煤付着。内面胴部下位（高さ 8cmまで）にコゲ痕が明瞭。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや粗い　白・透明細粒多、白・赤粗粒と黒細砂・白礫少 やや軟質	床上 5cm 口 1/3 周、底全周 6

第２節　古墳時代の掘立柱建物跡

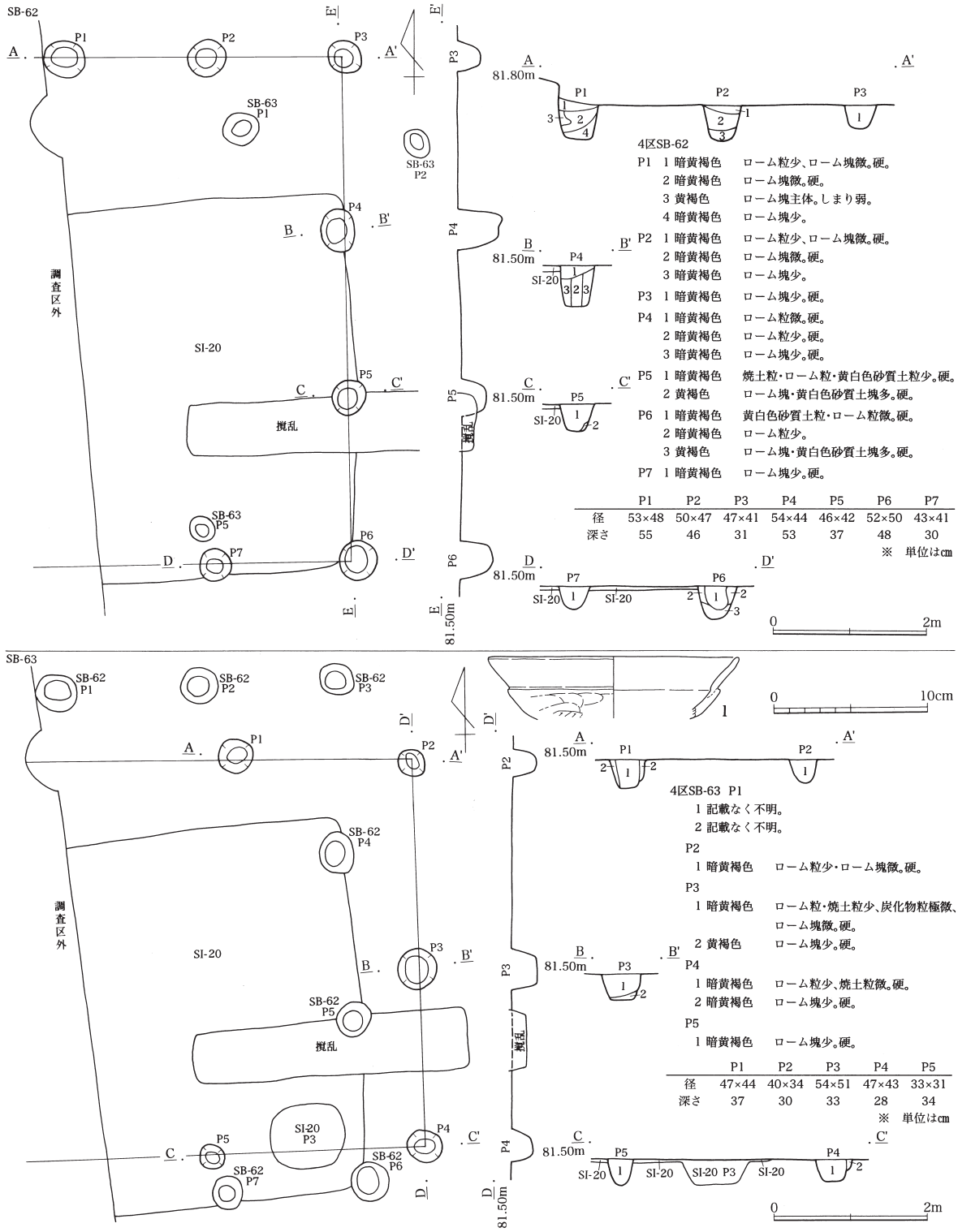
４区 SB-62（第 166 図、写真図版 56・57）

４区中央部の台地平坦面、34.0-11.5 グリッドに位置する。西側は調査区外となる。SB-62 と SB-63 が古墳中期後葉の SI-20 を切る。撹乱（現代の農業関連土坑）に切られる。西側は調査区外に出る。

南北棟と考えた場合の中軸線は N-2°-W である。柱穴は調査区内で７本確認した。西側が調査区外となるため明確ではないが、東西２間（3.6m）以上、南北３間（6.60m）の側柱建物である。柱間は東西が 1.8m、南北が 2.2 ～ 2.3m で南北の柱間が 40 ～ 50cm 広い。深さには若干の深浅がある。このうち P4 は柱痕が明瞭に認められる。

後期初頭の可能性がある SB-63 と範囲が重なり、時期が近い可能性が高いので、この建物も古墳時代と考えた。遺物は SI-20 から混入したと思われる古墳中期の小破片がほとんどで、時期を確定することは難しい。参考として、SB-62 と SI-20 を切る撹乱中に古墳後期の須恵器高杯片がある（第 181 図 2)。

SB-63・SI-20 および SI-20 東壁を切る撹乱（旧名称 SK-61）との間で接合する遺物はなかった。



第 166 図　権現山遺跡 4 区　古墳時代の掘立柱建物　SB-62・63　遺構・遺物

第 80 表　権現山遺跡 4 区 SB-63　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 16.3 高　残 4.0	高杯の可能性もある。小破片なので復原径は参考値。口縁部上半がわずかに内彎する。外面体部ナデ後に下位をナナメヘラケズリ。外面口縁部と内面にヨコナデ。	10YR5/3　にぶい黄褐 やや粗い　黒・白細～微粒と透明・灰色粗～細粒少 やや硬質	口 1/8 周 P4

４区 SB-63（第 166 図、写真図版 57）

４区中央部の台地平坦面､34.0-11.5 グリッドに位置する。SB-62 と SB-63 が古墳中期後葉の SI-20 を切る。撹乱（現代の農業関連土坑）に切られる。西側は調査区外に出る。

南北棟と考えた場合の中軸線は N-0°-E で、柱穴は調査区内で５本だけ確認した。東西棟の可能性もあるが正確には不明。東西推定２間以上、南北２間（5.01m）の側柱建物である。建物の西側は調査区外へ続くものと推定される。調査区内に収まる南北２間×東西１間の建物と考える場合には、西側柱列の中央に柱がないことになり、不自然である。

柱間が一定しない建物で、2.3m と 2.8m の２種の柱間隔が見られる。北側柱列の東部では柱間 2.3m で、等間隔ならば調査区内で西側に柱穴がもう一本確認されるはずだが、その付近の調査区西壁部を少し掘り広げて探した結果、認められなかった。南側柱列は柱間 2.8m。東側柱列は南半が柱間 2.3m、北半が 2.8m。

SB-62・SI-20 および SI-20 東壁を切る撹乱（旧名称 SK-61）との間で接合する遺物はなかった。遺物はごくわずかで、図示した P4 出土の杯（または高杯）１点の他には、杯類８片、高杯２片、壺・甕類 10 片がある。周辺遺構からの混入品が多いと思われる。

第３節　古墳時代の方形周溝状遺構

４区 SX-23（第 167 図、写真図版 57・126）

４区中央部で、低地に向かう緩斜面の 34.0-12.5・13.0、34.5-12.5・13.0 グリッド所在。すぐ北に古墳後～終末期の SI-24・76、西 1m に後期初めの SI-18 がある。長方形撹乱（所謂イモ穴）が西隅を切る。

基本的には隅丸方形である。緩斜面に立地するためか、北隅は丸みが強い。中軸線は N-37°-E である。各辺中央での規模は、周溝外側上端で北西～南東方向が 6.60m、北東～南西方向が 6.54m（場所により 6.72m）。周溝内側上端ではそれぞれ 5.74m × 5.78m である。

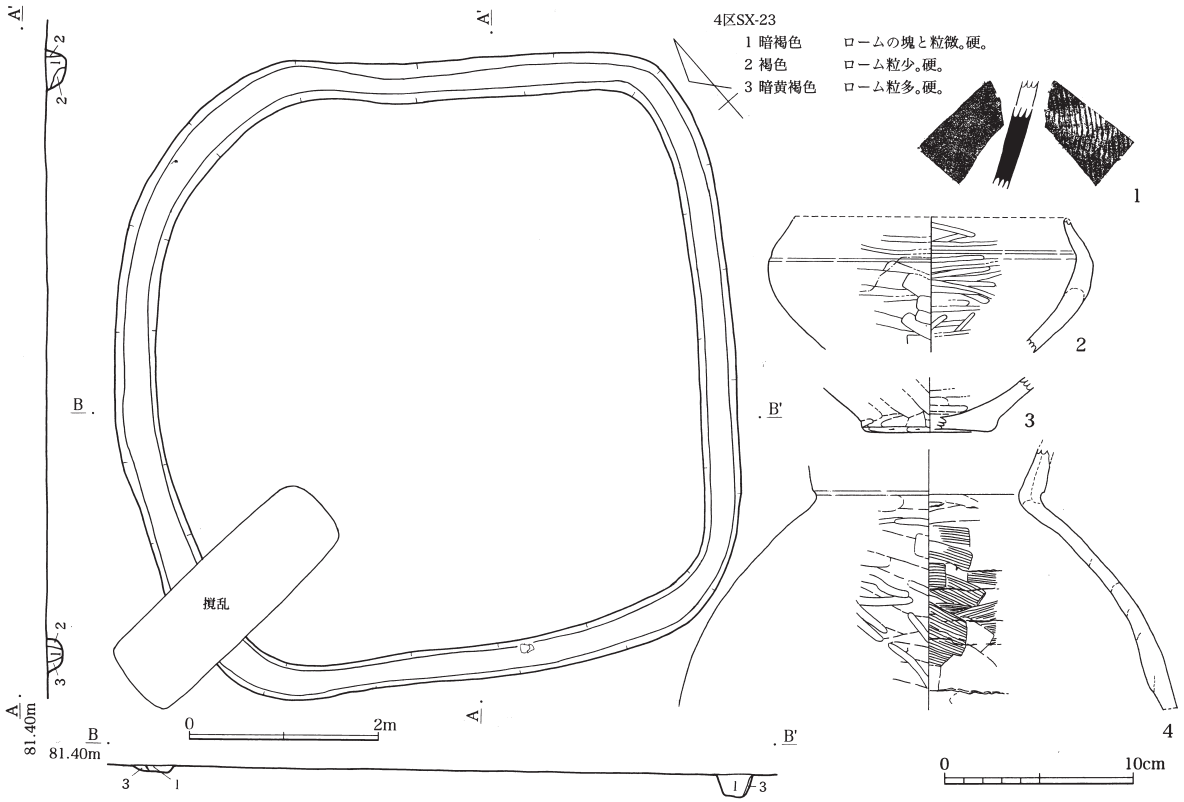
周溝幅は 0.35 ～ 0.50m、底面幅は 0.20 ～ 0.40m、深さは 0.07 ～ 0.23m である。西側が浅く、東側が深くなる。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。北西と南西の周溝底面での比高は 30cm あり、周溝は底面の深さを水平にするのではなく、地表からの深さを均一にしているものと考えられ、当時の地形も緩斜面であったことが予想される。

覆土は３層に分層された。全体的に硬く締まっている。自然堆積で、外側からはローム粒を多量含む暗黄褐色土の第３層が、内側からはローム粒を少量含む褐色土の第２層が流入する。残存する土層には白色粒子が記録されていないので、この遺構が FA テフラ降下より先行する可能性がある。

番号をつけて取り上げた遺物はない。周溝南西辺の中央部付近で平面図に記入した土器は、周溝確認面から２～ 3cm 下位で２片出土した土師器甕胴部で、図示はしていない。

図示以外の土師器杯 12 片・小形壺４片・壺甕類 45 片には内傾口縁杯や初期模倣杯らしき破片を含み、甕は長胴がなく球胴。図示したよく磨く橙色の鉢や、有段状貼付口縁で僅かに長胴の壺から中期末葉と見られる。貼付口縁の壺は、SG1 区の SI-12・69 と鍛冶遺構 SI-33 や４区 SI-16 などにある。

周辺遺跡における方形・円形周溝遺構は、東方の磯岡遺跡１区 SX-80 と杉村遺跡北関東自動車道路調査区 36,103C,103D 号遺構（塚原 1999、藤田・安藤 2000）、北方の立野遺跡５区 SX-39,214,449（内山 2005）、中島笹塚遺跡１区 SX-24,25（内山 2008）にある。北方にある砂田遺跡で特に多く、１区 SX-30・２区 SX-46・３区 SX-98・５区 SX-130,141・６区に SX-245 他７基がある（藤田・田代 2002、津野・篠原・今平 2007）。整理作業中の砂田遺跡７・９・10・16・17・27・31 区や、西刑部西原遺跡３・５・９・10・13・14 区などにもある。墳墓ではなく平地建物跡の可能性がある（石井・梅沢 1994,p.83）。本例のような隅丸方形や不整円形の類例としては磯岡１区 SX-80、立野５区 SX-214・砂田６区 SX-318 があげられる。



第 167 図　権現山遺跡 4 区　古墳時代の周溝状遺構　SX-23　遺構・遺物

第 81 表　権現山遺跡 4 区 SX-23　出土遺物

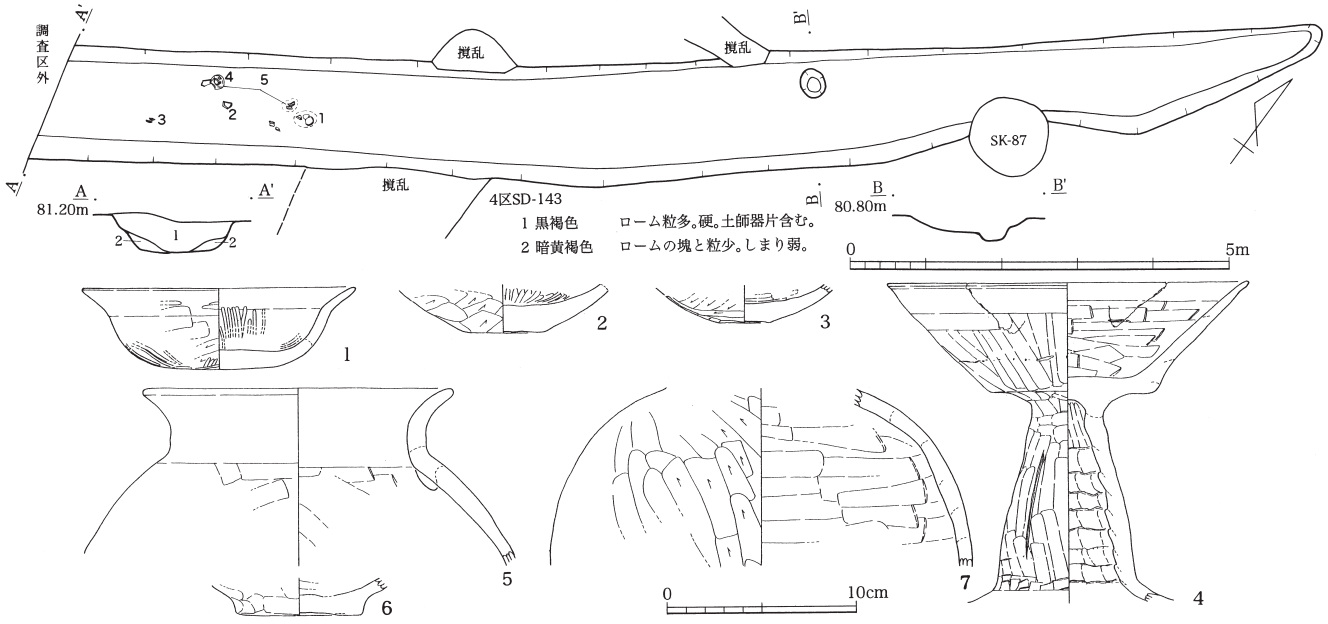
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 甕	高　残 5.7 厚　0.9	木目直交の平行溝を彫った叩き板で外面に縦位の擬格子叩き。内面は無文で、おそらくナデ消し。	7.5YR4/1　褐灰 緻密　白細～微粒と透明微粒少 硬質	胴部 1 片
2 土師器 鉢	口　復 14.4 高　残　7.0 最大　復 17.0	内外面の口～体部境に浅い段あり。外面体部ヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面全面ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面口縁部～体部上位と内面に漆仕上げ。内面の漆は口縁部だけに残存。	5YR6/6　橙 緻密　赤粗～細粒と白・透明細～微粒少 やや軟質	頸 1/6 周
3 土師器 甕	高　残 2.8 底　復 7.2	突出する平底で外底面に多方向とその外周に横位のヘラケズリ。外面胴部ナナメヘラナデ。内面底部に横～斜位のナデ。被熱痕の有無は不明確。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　透明粗～微粒多、白・黒細粒少 やや硬質	底 5/12 周
4 土師器 壺	高　残 13.7 最大　復 26.2	外面の口～頸部境に弱い稜を持ち、口縁部外面がやや急に立ち上がる。外面胴部ナデ後にやや疎らなナナメヘラミガキ。内面胴部ナデ後に浅いハケメ。内外面口～頸部ヨコナデ。	10YR8/3　浅黄橙 緻密　赤・白・黒・透明細～微粒やや少、赤・白粗粒少 やや軟質	頸 1/4 周

第 4 節　古墳時代の溝

4 区 SD-143（第 168 図、写真図版 57・126）

4 区南寄りにある低地の西側、台地平坦面から緩斜面にかけての 31.5-11.5・12.0、32.0-11.5 ～ 12.5 グリッドにある。周囲に竪穴建物跡は少ない。古墳中期末の SK-87 と撹乱溝（旧名 SD-144）に切られる。遺構確認面より上方で古墳時代の SK-94 と重複していた可能性もある。南西 - 南東方向に直線的に延びる。中軸は N-53°-E、確認できる長さは 8.50m。さらに北東へ延びていたとみられるが、斜面のため確認できなかった。確認面で幅約 1.50m、底面幅 1.00 ～ 1.15m、深さ 0.33 ～ 0.54m。断面はおおむね浅い皿状で、底面は平坦な部分が多い。覆土はレンズ状自然堆積の上下 2 層で全体的に締まり、下層はローム粒の多い初期流入土。西側の 1 層で、溝底面から約 30cm 浮いて土師器片が出土した。

遺物が多く、図示以外に土師器杯 66 片（298g）、高杯 4 片（54g）、壺甕類 110 片（1,084g）と須恵器小片 1 片（2g）がある。南側の SG1 区で調査した古墳中期の居館遺構と関係するか、または 4 区 SD-143 が僅かに先行する可能性もある。遺物は残存度の大きな土師器甕・高杯などがあり、古墳中期中葉の溝であることを示している。杯（1）は中期後葉まで下がるが、小破片である。脚外面に焼成前の縦位刻線がある高杯（4）は、図示した口縁部の亀裂が焼成時（？）に生じている。甕（5）の肩部内面にある粘土貼り付けは、焼成前の補修痕かもしれない。図示した以外に、古墳時代終末期頃の内彎口縁杯片も僅かに混じる。



第 168 図　権現山遺跡 4 区　古墳時代の溝　SD-143　遺構・遺物

第 82 表　権現山遺跡 4 区 SD-143　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口　復 14.4 高　残 4.3	内外面の頸部がやや明確に外へ折れる。外面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ後、底部に多方向の粗いヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後に疎らなヨコヘラミガキ。内面はヨコナデ後、体部に密なタテヘラミガキ。内外面の上半部が褐色に汚れるが、塗布物の可能性は低い。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　白礫と白・黒・透明粗～微粒少 やや硬質	底上 27cm 口 1/18 周、体 1/6 周 1
2 土師器 杯	高　残 2.6 底　4.0 最大　残 11.1	外面は底部 1 方向ヘラケズリ、体部斜～横位ヘラケズリ。内面は密な放射状ヘラミガキ。体部中位の積み上げ接合面で水平に壊れているので、この状態で使用した可能性もある。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・黒・灰色・透明粗～細粒と赤粗粒少 やや軟質	底上 38cm 底全周、体 2/3 周 4
3 土師器 杯	高　残 2.0 底　2.8 最大　残 9.4	外面は底部に円周方向と体部に斜位のヘラケズリ。内面は円周方向のヨコヘラナデ。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　赤・白・透明・灰色礫多、白・灰色粗粒と黒細粒少 やや軟質	底上 31cm 底全周 6
4 土師器 高杯	口　19.0 高　残 16.8 底（杯部）　8.7	脚柱部は倒立状態で反時計回りに紐積みして、脚内面は上端にタテナデ、脚柱部に短いヨコナデ、脚裾部にヨコナデ。外面は脚柱部と杯部にタテナデ、脚柱下端と杯底にヘラナデ、杯底部外周ヨコヘラケズリ。口縁部と脚裾部ヨコナデ。杯部内面ヨコヘラナデ。脚外面に焼成前の縦位刻線 1 本あり。口縁部に長い亀裂が 1 箇所あり、焼成前か焼成時に生じたもので、補修ナデ等は見られない。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　透明粗～微粒と白細～微粒多、赤・黒細粒少 硬質	底上 21cm 口 1/2 周、杯底部～脚柱全周 5
5 土師器 甕	口　復 16.4 高　残 9.3 最大　復 22.7	内外面ともに胴部ナナメヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。内面肩部上端に粘土を貼り付けた部分があり、焼成前に亀裂を補修した痕かもしれない（断面図参照）。外面は口縁部上端まで明瞭に煤が付着。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや粗い　白粗～微粒・透明微粒・灰色粗粒多、赤粗～細粒微 やや硬質	底上 21 ～ 32cm 口 1/2 周、頸 2/3 周 2、5、32-12
6 土師器 甕	高　残 2.0 底　6.6 最大　残 9.3	外底面は外周部がわずかに高く、軽い 1 方向ヘラナデ。内面は器面が磨滅しているために調整不明で、横方向ナデの可能性あり。外底面が被熱赤化。	2.5YR5/6　明赤褐 やや粗い　白・灰色礫と白・透明粗～細粒多、黒粗～細粒少 やや軟質	底 2/3 周
7 土師器 壺	高　残 9.4 最大　復 22.2	外面は縦～斜位ヘラケズリ。内面ヨコヘラナデ。二次的な被熱痕はなく、内面は焼成時に炭素が吸着して真っ黒。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　白・透明細～微粒多、黒・赤細粒微 やや硬質	胴 1/4 周

第 5 節　古墳時代の土坑（第 169 ～ 173 図、写真図版 57 ～ 63・126）

遺物の特徴や火山灰などからみて古墳時代の土坑と判断できたものは権現山遺跡 4 区に 52 基ある。このうち、円筒形土坑が 31 基（第 169 ～ 171 図・第 83 表）、円筒形以外の土坑が 21 基（第 72・73 図・第 85 表）である。

円筒形土坑とは、直径がおおむね 1 m を超える大形で、比較的深い円筒形（垂直に近い急傾斜の壁面と平坦な底面を持つ形）の、古墳時代の土坑である。栃木・茨城・福島県域で古墳中～後期にみられ、屋外の貯蔵施設と考えられている（内山 2005,p.745）。

円筒形土坑として扱った 31 基はおおむね定型的である。ただし、SK-99 はかなり深い点が少し異なるので、あるいは円筒形土坑に含めないで SK-101 とともに長筒型の土坑に分類したほうがよいのかもしれない。

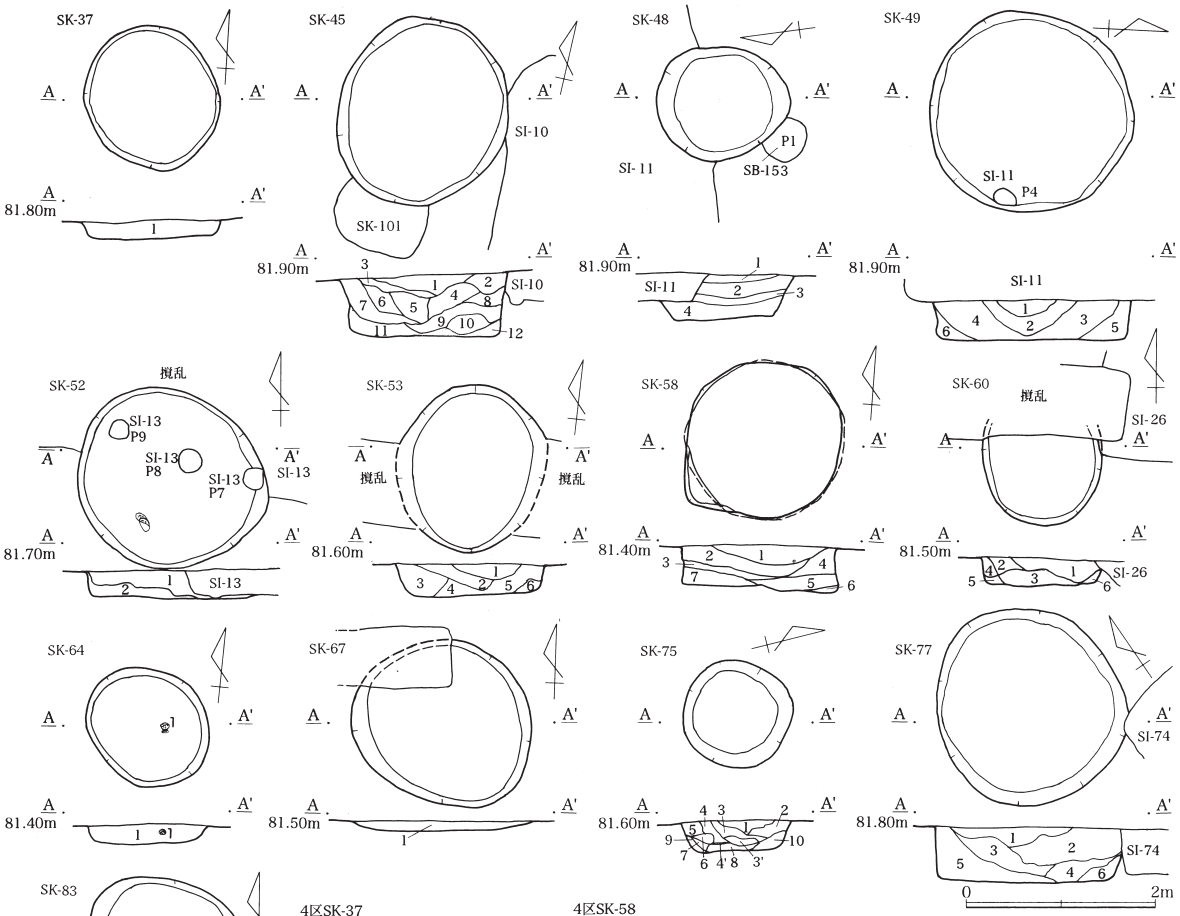
SK-65・71・105 は、直径 1 m を超える円形ではあるが、円筒形土坑から除外した。SK-65・71 は底面がやや平坦でない点が異なる。SK-105 は他の円筒形土坑と異なり底面が暗褐色土層中にある（地山ローム層まで達しない）ので、もともとかなり浅い土坑だったと判断した。SK-112 は径約 1 m で、円筒形土坑ではなく古墳時代の土坑に含めた。SK-93・109・137 は、底面が平坦な点では円筒形土坑と共通するが、方形に近い平面形が異なる。円筒形土坑から除外したこれらの大形土坑にも、古墳時代の貯蔵施設が含まれている可能性は否定できない。時期不明の土坑 SK-106 は直径 1.5m を超える大形平底形で、もしも古墳時代であれば、円筒形土坑の可能性もある（第 179 図）。

円筒形土坑出土の遺物で注意されるものは、SK-58 の鉄鏃や、SK-104 の紡錘車と群馬・埼玉県域の製品とみられる薄い土師器杯がある。土師器は古墳中期後半のものが多く、SK-117 では後期末の土師器がみられる。円筒形以外の土坑で注意される遺物は、SK-84 の須恵器𤭯や、SK-109 の須恵器壺・土師器ハケ調整甕がある。

第 83 表　権現山遺跡 4 区 古墳時代の円筒形土坑

遺構名	グリッド	平面形	重複	長径（m）	短径（m）	深さ（m）	覆土
SK-37	36.0-11.5	円筒形	重複なし	1.55	1.36	0.22	単層
出土遺物はないが、整った円筒形状なので古墳時代の円筒形土坑と考えられる。							
SK-45	36-11.5・12.0	円筒形	SI-10・SK-101 より新	2.00	1.80	0.69	人為堆積か
重複部分はごく僅かだが古墳中期末の SI-10 を切る。南側で古墳時代の SK-101 を切る。遺物は土師器 40 片（杯 20 片と甕 20 片）で、SI-10 からの混入と見られる。							
SK-48	35.5-11.5・12.0	円筒形	SI-11 より古・SB-153 より新？	1.42	1.21	0.47	自然堆積
古墳後期初頭の SI-11 に切られる。時期不明の掘立柱建物跡 SB-153 の P1 と重複。SB-153 の P1 を切る可能性もある。							
SK-49	35.5-11.5・12.0	円筒形	SI-11 より古	2.17	2.11	0.42	現地所見は人為堆積　白色粒有
古墳後期初頭の SI-11 床面で確認。SI-11 に切られる。土師器杯 8・高杯 2・甕 11・甑 5 の計 26 片出土し、杯は大半が椀形。SI-11 の遺物と同様で、SI-11 と接合する高杯片もある。							
SK-52	35.5-11.5・12.0	円筒形	SI-12・13 より古	2.07	1.91	0.30	焼土粒有
古墳中期末の SI-13 に切られる。古墳後期の SI-12 にも切られるとみられるが、撹乱のため土層の重複関係は不明。遺物は僅かで、古墳中期末の平底模倣杯を含む。図示以外の遺物は土師器杯 2 片・甕 3 片・壺 1 片の合計 6 片と長 21cm の自然礫 1 点がある。							
SK-53	35.0-12.0	円筒形	SK-109 より新？	1.76	1.60	0.34	硬い　現地所見は人為堆積
古墳後期末の SK-109 と重複するが土層断面図はない。遺物は古墳中期後～末葉の土師器杯 5 片（内斜口縁杯を含む）と壺・甕類 7 片があり、後期の遺物はない。							
SK-58	34.5-12.0、35.0-12.0	円筒形	重複なし	1.64	1.62	0.48	自然堆積か
壁下方が若干外に拡れ、南西壁が崩れる。底面東半やや深い。1 層出土の鏃と厚い赤褐色の杯（図示）以外にも土師器杯 6・高杯 8・甕壺類 17・大形甑 2 片があり、古墳中期後～末葉。							
SK-60	35.0-13.0	円筒形	SI-26 より古	1.27	0.95	0.30	白色粒有
古墳後期の SI-26 に北東壁上方をわずかに切られ、長方形撹乱坑に北半を切られる。土師器 4 片（杯 1 片・高杯 2 片・壺甕類 1 片）だけで時期を特定しにくいが、後期とわかる遺物はなく、中期の可能性あり。覆土上・中層に FA 火山灰粒が入るので中期後～末葉と考えられる。SI-26 と接合する遺物なし。							
SK-64	34.0-11.5	円筒形	重複なし	1.40	1.22	0.20	単層　炭粒有
図示した長脚の高杯以外に土師器 8 片（杯 2・高杯 1・壺甕類 5）があり、初期模倣杯・深身の外傾口縁杯を含むので中期後葉と見られる。							
SK-67	35.0-12.0	円筒形	重複なし	1.95	1.70	0.10	単層
やや楕円で、鍋底状。円筒形土坑 SK-52 の南で、形や大きさも近い。調査時も浅いが円筒形土坑だと観察されている。土師器片が出土したが、紛失。長方形撹乱に北西を切られる。							
SK-75	35.0-13.0	円筒形	重複なし	1.12	1.11	0.33	白色塊と粒有
底面中央がやや高い。遺物は土師器片（杯 9・高杯 1・壺甕類 3）と縄文時代石器 1 点で、杯は内斜口縁を含む。中期後～末葉と考えられ、FA 火山灰が入るという分析結果（本章第 14 節）とも矛盾しない。							
SK-77	35.5-12.5	円筒形	SI-74 より古	2.13	1.92	0.60	白色粒と焼土粒有
古墳後期初頭の SI-74 が南東上部をわずかに切る。土師器杯 20 片（直立口縁や半球状の初期模倣杯を少量含み、内斜口縁杯なし）・高杯 4 片・壺甕類 53 片（焼成時剥離のある大形壺胴部片も含む）・甑 3 片がある。SI-74 と接合する遺物はない。							

（p. 306に続く）



4区SK-37
1 褐色　ローム塊多。硬。

4区SK-45
1 暗茶褐色　ローム塊少。硬。
2 茶褐色　ローム塊少。硬。
3 暗褐色　ローム塊微。やや硬。
4 茶褐色　ローム塊多。硬。
5 暗茶褐色　ローム塊多。硬。
6 茶褐色　ローム塊多。硬。
7 暗褐色　ローム塊微、茶褐色土塊少。やや硬。
8 茶褐色　ローム塊少。硬。
9 褐色　ロームの塊と粒多。硬。
10 暗茶褐色　やや硬。
11 暗褐色　ローム塊少。やや硬。
12 茶褐色　ローム塊少。やや硬。

4区SK-48
1 褐色　ローム粒微。硬。
2 暗褐色　ロームの塊と粒少。硬。
3 褐色　ロームの塊と粒少。硬。
4 暗褐色　ロームの塊と粒少。硬。

4区SK-49
1 褐色　ローム塊多、灰白色シルト塊(径1～3㎝)少、白色土粒(Hr-FA)微。やや硬。
2 暗褐色　ローム塊・灰白色シルト(径1～3㎝)少。硬。
3 褐色　ローム塊多、灰白色シルト(径1～8㎝)中。やや硬。
4 暗黄褐色　ローム塊・灰白色シルト(径1～7㎝)多、焼土粒・炭化物粒極微。やや硬。
5 褐色　ロームの塊と粒多、白色土粒(Hr-FA)微。やや硬。
6 暗褐色　ローム塊・灰白色シルト塊少。やや軟。

4区SK-52
1 黒褐色　ローム塊少、焼土粒微。硬。
2 暗褐色　ロームの塊と粒多。硬。

4区SK-53
1 褐色　茶褐色土塊多、ロームと赤褐色(Nt-I)の塊少。非常に硬。
2 暗褐色　ローム塊少。非常に硬。
3 褐色　ロームと黒色土の塊少、茶褐色土塊多。非常に硬。
4 暗褐色　黒色土塊微、ローム塊少。非常に硬。
5 褐色　ローム塊微、茶褐色土塊少、茶褐色土塊多。非常に硬。
6 暗褐色　ローム塊少。非常に硬。

4区SK-58
1 暗黄褐色　ローム粒多、ローム塊微。硬。
2 暗褐色　ローム粒少。硬。
3 暗黄褐色　ローム粒多、ローム塊微。硬。
4 暗黄褐色　ローム塊少。
5 暗黄褐色　ローム粒微。粘性あり。しまりやや弱。
6 黄褐色　ローム粒少。粘性あり。しまり弱。
7 黒褐色　ローム粒微。粘性あり。硬。

4区SK-60
1 暗褐色　白色土(Hr-FA)塊と焼土塊・炭化物粒少。非常に硬。
2 暗褐色　ロームの塊と粒微。しまり軟。
3 暗黄褐色　ローム塊多、焼土と白色土(Hr-FA)の塊少。硬。
4 暗褐色　ローム塊少。硬。
5 暗黄褐色　ローム塊多。硬。
6 暗黄褐色　ローム塊少。硬。

4区SK-64
1 暗黄褐色　ローム粒少、炭化物粒・赤褐色粒(Nt-I)微。硬。高杯出土。

4区SK-67
1 暗褐色　ローム粒少。硬。

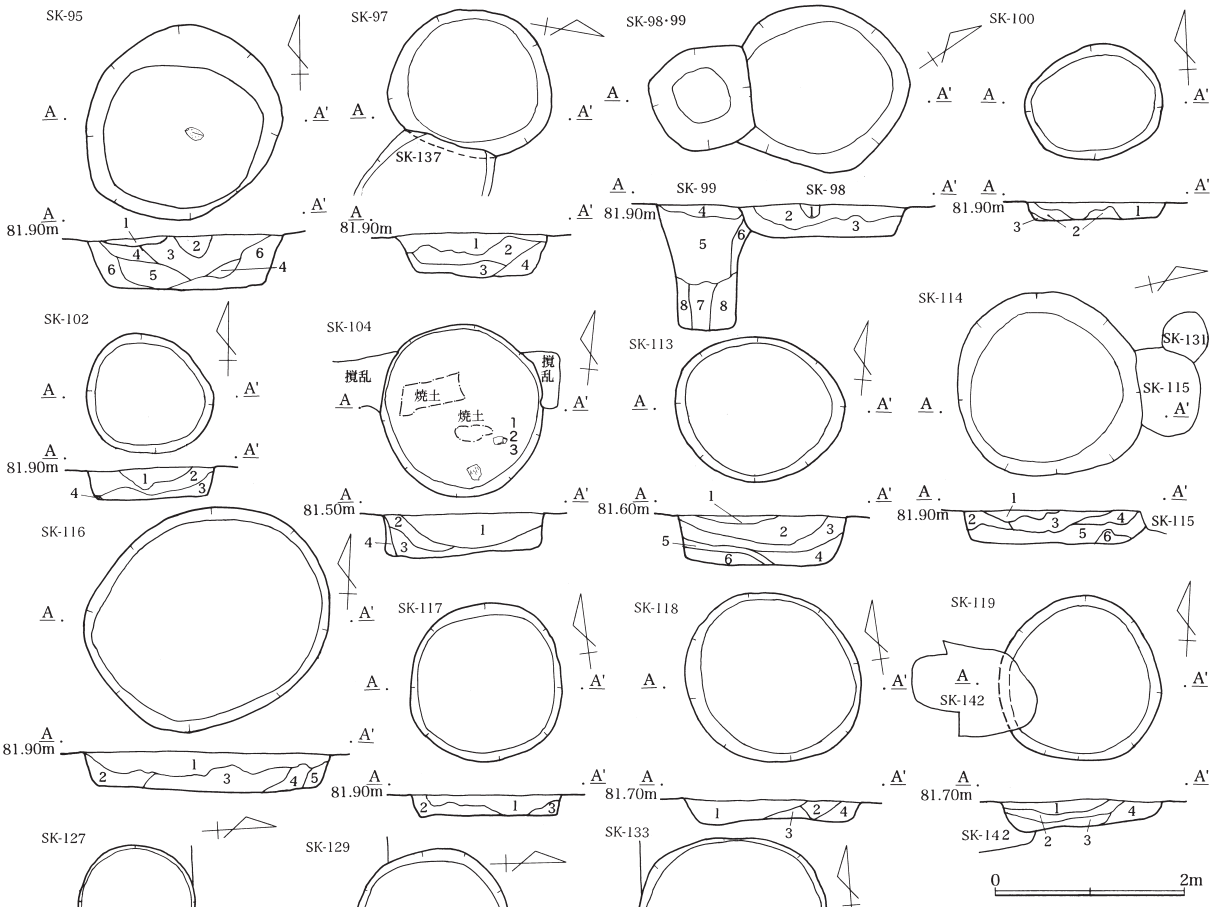
4区SK-75
1 暗茶褐色　焼土粒・白色土(Hr-FA?)塊微、ロームの塊と粒少。硬。
2 黒褐色　白色土(Hr-FA)塊少、ロームの塊と粒微。硬。
3 暗茶褐色　ローム塊少、白色土(Hr-FA)の塊と粒微。硬。
3' 3層よりローム塊多い。
4 暗茶褐色　ローム塊少。硬。
4' 暗茶褐色　ロームと白色土(Hr-FA)の塊少。硬。
5 暗茶褐色　ローム塊少。白色土(Hr-FA)の塊と粒微。硬。
6 黒褐色　白色土(Hr-FA)塊少、焼土粒・赤褐色(Nt-I)塊微。硬。
7 黒褐色　焼土粒・ローム粒微。硬。
8 暗黄褐色　ローム塊少。硬。
9 暗黄褐色　ロームと白色土(Hr-FA)の塊少。硬。
10 暗褐色　焼土塊少。硬。

4区SK-77
1 茶褐色　ローム粒・焼土粒微。茶褐色土塊少。硬。
2 茶褐色　ロームの塊と粒・白色土(Hr-FA?)塊少、焼土粒微。硬。
3 暗茶褐色　白色土(Hr-FA)塊・ロームの塊と粒・赤褐色(Nt-I)塊少、七本桜軽石微。硬。
4 暗褐色　白色土(Hr-FA)塊と粒・ロームの塊と粒少。やや硬。
5 暗褐色　白色土(Hr-FA)塊少、茶褐色土塊・七本桜軽石微。やや硬。
6 暗茶褐色　茶褐色土塊少。やや硬。

4区SK-83
1 茶褐色　ローム粒微。硬。
2 暗茶褐色　ローム粒少。硬。
3 褐色　ローム塊中。硬。
4 暗黄褐色　ローム粒多。硬。

4区SK-85
1 暗褐色　ローム粒少、ローム塊微。硬。
2 褐色　ローム塊多。硬。
3 褐色　ロームの塊と粒中。硬。

第 169 図　権現山遺跡 4 区　古墳時代の円筒形土坑（1）　遺構



4区SK-95
1 茶褐色　茶褐色土塊多、ローム粒微。硬。
2 暗褐色　茶褐色土塊少、赤褐色粒(Nt-I)・ローム粒微。やや硬。
3 暗茶褐色　茶褐色土塊多、ロームの塊と粒少。硬。
4 暗茶褐色　ロームの塊と粒少。硬。
5 暗褐色　ロームの塊と粒多。硬。
6 暗褐色　茶褐色土塊少、ローム粒微。やや硬。

4区SK-97
1 茶褐色　茶褐色土塊多、ロームの塊と粒少。特に硬。
2 暗茶褐色　ローム塊少、赤褐色粒(Nt-I)微。硬。
3 暗褐色　ロームの塊と粒少。硬。
4 黒褐色　ローム塊微。硬。

4区SK-98
1 暗褐色　硬。
2 茶褐色　茶褐色土塊多。硬。
3 黒褐色　白色粒少、赤褐色粒(Nt-I)微。硬。

4区SK-99
4 暗茶褐色　赤褐色粒(Nt-I)微。硬
5 黒褐色　七本桜軽石？少。硬。
6 暗茶褐色　ローム塊少。硬。
7 黒色　ローム塊少。
8 暗黄褐色　ローム塊多。

4区SK-100
1 暗褐色　白色粒少、赤褐色粒(Nt-I)微。硬。
2 暗黄褐色　ローム塊少。硬。
3 暗茶褐色　ローム塊少。やや硬。

4区SK-102
1 茶褐色　ロームの塊と粒微。硬。
2 暗茶褐色　茶褐色土塊多。硬。
3 暗褐色　ローム塊少。硬。
4 黒褐色　ローム塊少、茶褐色土塊微。硬。

4区SK-104
1 茶褐色　ローム粒・黄白色砂質土塊多。ローム塊微。硬。
2 暗黄褐色　ローム粒多、ローム塊・黄白色砂質土塊少。硬。
3 暗褐色　ローム塊・黄白色砂質土塊微、ローム粒・焼土粒少。土師器片含む。硬。
4 暗黄褐色　ローム粒微。弱。

4区SK-113
1 褐色　ローム粒微。硬。
2 明茶褐色　ローム塊多、焼土塊微。硬。
3 茶褐色　ロームと焼土の塊少。硬。
4 暗茶褐色　ローム粒少、焼土塊中。硬。
5 灰茶褐色　ローム粒微、灰白色粘土中。硬。粘性弱い。
6 暗褐色　ローム塊中。硬。

4区SK-114
1 暗茶褐色　ロームの塊と粒少。硬。
2 暗茶褐色　茶褐色土塊少。硬。
3 褐色　ロームの塊と粒多。硬。
4 暗茶褐色　茶褐色土塊・ローム粒少、赤褐色粒(Nt-I)微。硬。
5 暗褐色　ローム塊・茶褐色土塊少、炭化物粒微。硬。
6 暗黄褐色　ローム塊多。硬。

4区SK-116
1 茶褐色　ローム粒微、茶褐色土塊多。硬。
2 茶褐色　茶褐色土塊少。1層よりは軟。硬。
3 暗褐色　ロームの塊と粒少。1層よりは軟。硬。
4 暗黄褐色　ローム塊多。1層よりは軟。硬。
5 褐色　黒色土粒少。1層よりは軟。硬。

4区SK-117
1 茶褐色　ローム塊少。硬。
2 暗茶褐色　赤褐色(Nt-I)塊・ローム塊少。硬。
3 黒色　ローム塊少。硬。

4区SK-118
1 暗茶褐色　赤褐色(Nt-I)塊・七本桜軽石微。硬。
2 暗茶褐色　ロームの塊と粒少。硬。
3 暗黄褐色　黒色土塊・ロームの塊と粒少。硬。
4 茶褐色　ローム塊微、赤褐色粒(Nt-I)極微。硬。

4区SK-119
1 茶褐色　ローム塊少。硬。
2 明茶褐色　ローム塊中。硬。
3 淡褐色　ローム粒中。硬。
4 暗黄褐色　ローム粒多。硬。

4区SK-125
1 暗褐色　ローム粒微。硬。
2 暗黄褐色　ローム塊少。しまり弱。

4区SK-127
1 暗黄褐色　ローム粒多。しまり弱。
2 暗黄褐色　ロームの塊と粒・黒色土塊多。硬。
3 暗黄褐色　ローム粒少。しまり弱。

4区SK-129
1 明茶褐色　ローム粒微。硬くしまる。
2 茶褐色　ローム塊中。硬くしまる。
3 暗茶褐色　ローム塊中、ローム粒少。硬くしまる。

4区SK-133
1 暗黄褐色　SI-26の貼床。
2 暗黄褐色　赤褐色粒(Nt-I)微、ローム塊多。硬。
3 黒褐色　白色土(Hr-FA)塊・ローム塊少。硬。
4 褐色　ロームの塊と粒・赤褐色粒(Nt-I)少。硬。
5 暗褐色　ローム塊・赤褐色粒(Nt-I)少。硬。
6 暗黄褐色　ローム塊少。

第 170 図　権現山遺跡 4 区　古墳時代の円筒形土坑（2）　遺構

（p. 303から続く）

SK-83　36.0-13.0・13.5　円筒形　重複なし　1.93　1.68　0.31　自然堆積
円筒形土坑に類似。重複なし。遺物がなく時期を特定できないが、円筒形土坑 SK-118 や古墳時代の SK-112 と一群をなす可能性から、古墳時代と推定。

SK-85　35.0-13.0　円筒形　重複なし　1.70　1.58　0.32　自然堆積か
平面はやや楕円形。少量の遺物と円筒形の形から古墳時代と考えられる。遺物は土師器杯４・高杯１・平底鉢１・壺甕類４で、図示できないが赤彩の杯を含み、後期初めの可能性あり。

SK-95　35.5-12.5　円筒形　SB-155 と重複　2.08　1.97　0.56　人為堆積
中央底面直上に礫１個。南側が時期不明の掘立柱建物跡 SB-155 の柱穴と接近しているので確認面よりも上方では重複していただろうが、前後関係は不明。図示した初期の模倣杯から中期末頃と思われる。他に土師器杯 20・小形壺２・甑２・壺甕類 12 片がある。

SK-97　35.5-12.0　円筒形　SK-137 より新？　1.74　1.54　0.44　４層
古墳時代の SK-137 と重複し、先に調査した SK-97 が新しい可能性あり。図示した甕・高杯の他に土師器高杯２・杯 16・壺甕類６片があり、直立口縁や平底の初期模倣杯を含むので古墳中期後葉頃と見られる。

SK-98　35.5-12.0　円筒形　SK-99 より新　1.92　1.80　0.31　人為堆積か　最下層に白色粒有
古墳時代の円筒形土坑 SK-99 を切る。図示した平底杯片の他に土師器小破片（杯 16・高杯４・球胴壺甕類 14 片）がある。大形壺胴部数片や、群馬・埼玉県域に見られる薄い模倣杯も含む。また、側面を斜方向に研磨する石製模造品細片が１点ある。古墳中期末頃の遺構とみられる。

SK-99　35.5-12.0　円筒形　SK-98 より古　1.22　1.08　1.33　柱痕状土層有
調査時点では井戸とされていたが、底面が礫層に達しないので深い円筒形土坑として扱う。古墳中期末頃の円筒形土坑 SK-98 に切られる。下層は柱痕状の土層。遺物はない。

SK-100　35.5-12.0, 36.0-12.0　円筒形　重複なし　1.45　1.20　0.20　白色粒有
平面やや楕円形。図示した甕片の他に土師器小片（杯８・高杯１・小形壺 ?1・壺甕類６）有。大きく開く古墳中期後葉の内斜口縁杯があり、模倣杯はない。最上層に白色テフラ粒有。

SK-102　36.0-12.0　円筒形　重複なし　1.38　1.26　0.36　自然堆積か
円筒形土坑。土師器杯４・小形甕 ?1・壺甕類 10 片があるが図示できない。直立口縁と半球形の初期模倣杯を含む。埋土に白色テフラ粒を含まず、中期後葉の可能性がある。

SK-104　35.0-11.5　円筒形　SB-132 と重複　1.83　1.70　0.47　人為堆積　焼土有
焼土が多い。第１層下方で土師器片出土。古墳時代の SB-132 の北側柱列の中央柱が SK-104 と重複していたとみられるが、両者の前後関係は不明。図示した杯と紡錘車の他に土師器片がある（杯 15・鉢３・高杯１・壺甕類小破片 23）。中期末の初期模倣杯があり、図示した薄い杯は群馬・埼玉県域の製品。

SK-113　35.5-13.0　円筒形　重複なし　1.80　1.52　0.53　自然堆積　灰白色粘土有
埋土下位に含む灰白色粘土を古墳後期初めの Hr-FA テフラと判断し、後期初頭の土坑と考えても遺物と矛盾しない。大形の模倣杯が見られる。図示以外に土師器片（杯 15・高杯３・甑２・壺甕類 69）と安山岩剥片１点があり、２～３個体の大形壺が目立つが、接合できる破片が少なく図示できない。

SK-114　36.5-12.0　円筒形　SK-115 より古　2.10　1.92　0.35　人為堆積か
時期不明の土坑 SK-115 に一部を切られる。図示した凹み底や外傾口縁の土師器杯は古墳中期後葉。図示以外に土師器杯６・壺甕類 19・甑１片がある。

SK-116　36.0-12.5　円筒形　重複なし　2.60　2.20　0.43　自然堆積か
平面形は楕円形。図示した直立口縁の模倣杯の他に土師器片（杯９・高杯 ?1・壺甕類８）があり、内斜口縁の杯は含まない。古墳中期末頃と見られる。

SK-117　36.0-12.5　円筒形　重複なし　1.70　1.61　0.24　自然堆積か
図示した古墳後期末の内傾口縁模倣杯以外に、土師器高杯１片と壺甕類２片がある。

SK-118　36.0-13.0　円筒形　重複なし　1.93　1.77　0.27　自然堆積？
重複なし。遺物がないが、円筒形土坑 SK-83・118 と古墳時代の SK-112 が一群をなす可能性から古墳時代と推定。

SK-119　35.0-13.0、35.5-12.5・13.0　円筒形　SK-142 より新　1.76　1.72　0.29　自然堆積
時期不明の SK-142 を切ると判断したが土層断面がやや不明瞭。円筒形土坑状なので古墳時代の可能性あり。土師器杯１片と壺甕類２片あり。

SK-125　33.0-11.5　円筒形　重複なし　1.32　0.62　0.27　自然堆積
西半は調査区外で、半分だけを調査できた。遺物はないが、調査時の所見で古墳時代の円筒形土坑と判断されている。

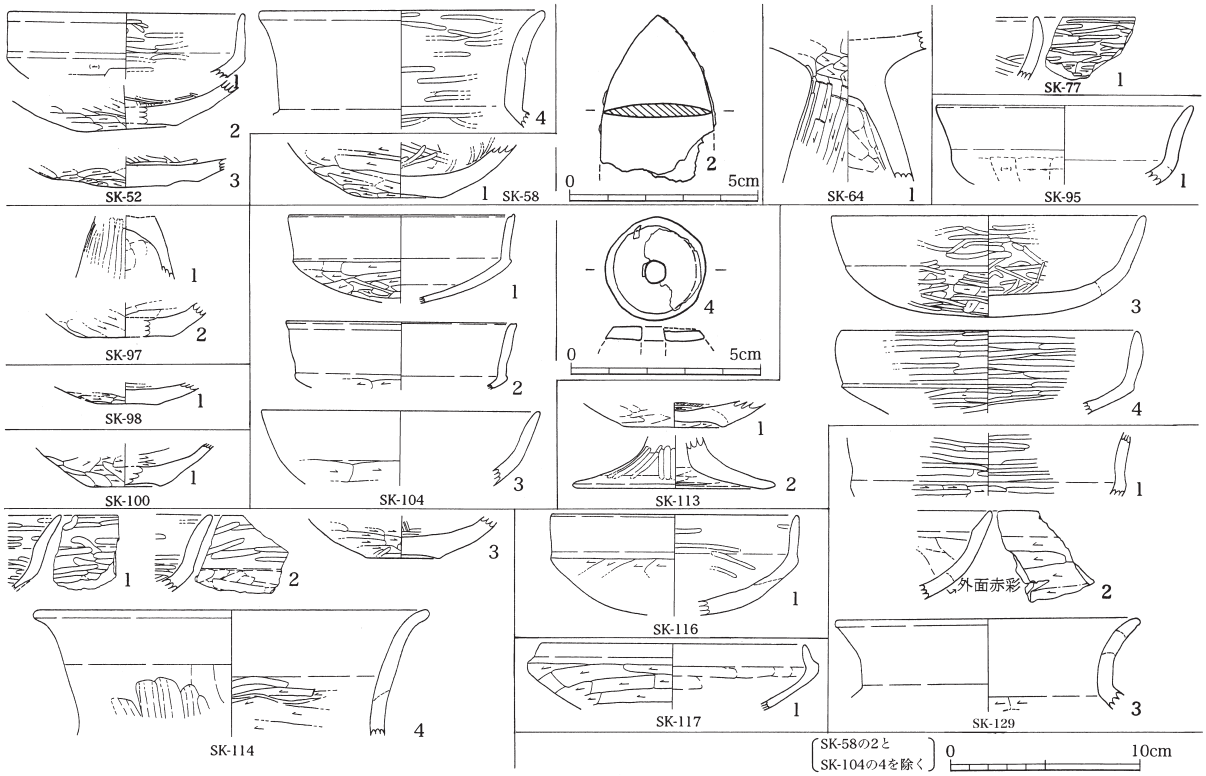
SK-127　34.0-12.5　円筒形　撹乱溝に切られる　1.27　1.23　0.42　人為堆積か
撹乱溝に切られる。土師器杯 10 片・高杯３片・壺甕類 19 片がある。身部が浅い古墳後期末～終末期初めころの漆仕上げ模倣杯（１片・調整不明）を撹乱中とみれば、他は球胴壺甕類や半球状杯など古墳中期が主体で、中期後～末葉の可能性もある。調査時所見でも古墳時代の円筒形土坑と判断。

SK-129　36.0-12.5　円筒形　SI-59 より古　1.89　1.68　0.71　人為堆積か
古墳後期前半の SI-59 に南側を切られ、倒木痕（旧名称 SK-136）を切る。長胴甕片や、SI-59 と遺構間接合した赤彩半球状杯は混入の可能性あり。図示以外に土師器杯 15・高杯３・甑１・壺甕類 26 片がある。杯類は初期模倣杯・外傾口縁杯が主体で中期末頃と見られる。

SK-133　35.0-13.0　円筒形　SI-26 より古　2.02　2.00　0.26　人為堆積か　白色塊有
古墳後期後半の SI-26 より古く、その床下にある。図示できない土師器杯４・高杯１・壺甕類 39 片がある。古墳中期中～後葉の初期模倣杯・口が開く内斜口縁杯・大形壺を含み、Hr-FA テフラ塊もあるので中期末か。長胴甕や SI-26 との接合品はない。近接する SK-135 と近い時期の可能性あり。

第 84 表　権現山遺跡４区　古墳時代の円筒形土坑　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （㎝・g）	特　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
4 区 SK-52				
1 土師器 杯	口　復 12.4 高　残 3.5 最大　復 12.6	外面の口～体部境にやや浅い段あり。外面は体部におそらくヨコヘラケズリ、口縁部外面と口～体部内面にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	7.5YR6/8　橙 緻密　赤細～微粒多、白微粒と透明細～微粒少 やや軟質	口 1/12 周、体 1/6 周
2 土師器 杯	高　残 2.3 底　復 5.0 最大　復 11.9	外底面は丁寧な１方向ヘラケズリで上げ底状。外体部ヨコヘラケズリ。内面は多方向ヘラミガキ。全体の調整を丁寧に仕上げている。外面に煤若干付着。	5YR5/6　明赤褐 緻密　白細～微粒多、赤・透明粗粒と黒細粒少 硬質	底 1/3 周
3 土師器 杯	高　残 1.1	丸底だが外面底部の多方向ヘラケズリがやや粗く、強いヘラケズリによって抉られている部分もある。内面は底部に１～２方向と体部に横位のヘラミガキ。	2.5YR5/8　明赤褐 やや緻密　白・赤粗粒と白・黒・透明細粒少　硬質	底部片
4 土師器 壺	口　復 15.1 高　残 6.2	外面はヨコナデで、器面が磨滅しているのでミガキの有無は不明。内面はヨコナデ後にやや密なヨコヘラミガキ。	5YR6/8　橙 やや粗い　赤粗～細粒多、白・透明粗～細粒と黒細粒少　やや軟質	口 1/6 周



第 171 図　権現山遺跡 4 区　古墳時代の円筒形土坑（3）　遺物

4 区 SK-58

1 土師器 杯	高　残 2.9 底　3.5 最大　残 12.0	やや厚い。外底面は 1 方向ヘラケズリで凹み底。体部外面は横～斜位ヘラケズリ。内面はヘラナデ後ヘラミガキで底部は多方向、体部は横位。	5YR5/8　明赤褐 やや緻密　赤粗粒多、黒・白・透明細粒少 やや軟質	底全周
2 鉄製品 鉄鏃	長　残 4.2 幅　残 2.95 厚　0.35 重　残 6.4	現存する側縁全体を刃部にする。断面は片丸造。錆が少なくて表面をよく観察でき、またＸ線写真でも観察したので、現存部に孔がないことは確実。	鉄製鍛造	1 層下部 基部欠

4 区 SK-64

1 土師器 高杯	高　残 8.1 最大　残 8.1	杯底～脚柱部外面タテヘラケズリ。脚内面に横～斜位のヘラナデ。杯部内面はヘラナデ後ヘラミガキと思われるが、剝離した部分が多くて詳細は不明。	10YR8/4　浅黄橙 やや粗い　白・赤・黒・灰色粗～細粒少、白・灰色礫微　やや硬質	床上 8㎝ 脚柱全周 1

4 区 SK-77

1 土師器 杯	口　復 13～15 高　残 3.3	半球状で外面の口～体部境に弱い稜あり。外面は体部下位ヨコヘラケズリと口～体部ヨコナデ後、全体をやや密なヨコヘラミガキ。内面はヨコナデ後、体部に横～斜位ヘラミガキ。	5YR6/6　橙 やや緻密　白・黒細粒と赤粗～細粒少 やや硬質	口 1/12 周

4 区 SK-95

1 土師器 杯	口　復 12.5 高　残 4.2	内外面とも器面が磨耗しているため、ミガキの有無は不明。体部外面のヘラケズリも推定。	5YR6/8　橙 緻密　黒・赤細粒微 軟質	口～体 1/4 周 1、2

4 区 SK-97

1 土師器 高杯	高　残 3.7 脚柱　3.3	脚部が上端部へ少し丸味を持って細くなる。脚の上端はおそらく杯部との接合面で剝離。外面タテヘラミガキ、内面は横～斜位のナデ。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白・赤細粒少、赤粗粒と黒・透明細粒微 やや硬質	脚柱 1/2 周
2 土師器 甕	高　残 1.8 底　復 5.0	外底面は多方向ヘラケズリ、外面胴部はナナメヘラケズリ。内面はやや雑なヨコヘラナデ。	10YR5/4　にぶい黄褐 やや粗い　白・黒・透明細粒多　硬質	底 1/3 周

4 区 SK-98

1 土師器 杯	高　残 1.2 底　3.4	平底で外底面はナデ。外面体部ヨコヘラケズリ。内面は多方向のヘラナデ。	5YR4/4　にぶい赤褐 やや粗い　白・灰色粗～細粒多、黒・透明細粒少 硬質	底 2/3 周

4 区 SK-100

1 土師器 甕	高　残 2.3 底　復 3.8	上げ底状で外底面に多方向と外面に横位のヘラケズリ。内面は剝落し、一部にヘラケズリが残存して見られる。杯の可能性もある。	7.5YR5/6　明赤褐 粗い　黒・赤・白・透明礫～細粒やや多　硬質	底 1/2 周

4 区 SK-104

1 土師器 杯	口　復 12.0 高　残 4.7	薄く、内面口縁部に浅い段あり。外面は体部に雑なナデ後、体部に横位と底部に 1 方向のヘラケズリ。内面は底部ナデ、体～口縁部ヨコナデ。北関東西部産。	5YR5/8　明赤褐 やや緻密　黒細～微粒と白・透明微粒少 やや軟質	底上 10㎝ 口 1/4 周 1

2 土師器 杯	口　復 12.2 高　残 3.5	薄い。口縁端部は内面に浅い段を持ち、外面に短く曲げる。体部外面ヨコヘラケズリ、口縁部内外面と体部内面ヨコナデ。北関東西部産。	5YR5/6　明赤褐 やや緻密　白・透明微粒微 やや軟質	底上 10㎝ 口 1/3 周 1
3 土師器 杯	口　復 14.6 高　残 3.9	残存円周が少ないので復原径は参考程度。外面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ。内面はヨコナデと思われるが磨滅して調整不明瞭。	5YR5/8　明赤褐 やや粗い　赤粗～細粒多、白・透明微粒少 軟質	底上 10㎝ 口 1/12 周、体 1/6 周 1
4 石製品 紡錘車	径　残 26.57㎜ 厚　残 3.73㎜ 重　残 3.01	残存する下面と側面はやや平滑に仕上げ、研磨痕は不明。石材の風化が進んでいるため、板状に剝離して破損している。灰白色の中に橙色（5YR7/6）の部分が縞状に少し入る石材を使用。	2.5Y7/1　灰白色 緻密　滑石片岩 硬質	上面全面欠

４区 SK-113

1 土師器 杯	高　残 1.3 底　復 5.0 最大　残 9.7	外底面は雑な 1 方向ヘラケズリで凹み底。外面体部は横～斜位ヘラナデ。内面底部は 1 方向のハケメ後に、間隔を空けた 1 方向ヘラミガキ。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒・透明細粒多、白・黒・赤粗～細粒少 やや軟質	底 1/2 周
2 土師器 高杯	高　残 2.8 脚裾　復 10.7	脚柱部内面は径 1.6㎝位の中空円筒状。内面ナデ、内外面の裾部ヨコナデ、外面タテヘラミガキ。	7.5YR6/6　橙 やや粗い 赤粗～細粒と黒・白・透明細砂少 やや軟質	脚裾 1/8 周
3 土師器 杯	口　復 16.5 高　5.4	外面の口～体部境に浅く弱い段あり。内外面の口縁部ヨコナデ。外面の底部に 1 ～ 2 方向と体部に横位のヘラケズリ。内面底部は多方向のヘラナデ後ヘラミガキ。内面口～体部ヨコヘラミガキ。	2.5YR6/8　橙 やや緻密　赤粗～細粒と透明微粒多、黒・白細粒少 硬質	口 1/12 周、体 1/6 周
4 土師器 杯	口　復 15.6 高　残 4.4 残　16.3	内外面ヨコナデと外面体部ヨコヘラケズリの後、内外面全体をヘラミガキ。	5YR5/8　明赤褐 やや粗い　赤・透明粗粒と黒・灰色細粒多、白礫～細粒少 やや硬質	口 1/8 周

４区 SK-114

1 土師器 杯	口　復 14～16 高　残 3.7	口～体部境の稜が内面側で明瞭。外面体部にナデまたはヘラナデ、内外面口縁部と内面体部にヨコナデ。内外全面をヨコヘラミガキ。	5YR5/6　橙 やや緻密　白・透明微粒と白・赤細粒少 硬質	口 1/24 周
2 土師器 杯	口　復 13～15 高　残 4.1	外面口縁部と内面はヨコナデ後にやや疎らなヨコヘラミガキ。外面体部ヨコヘラナデ。内外の器面が暗褐色で、漆仕上げの可能性もあるが不確実。	5YR6/6　橙 やや緻密　黒・白細～微粒と透明微粒多、赤細粒微 硬質	口 1/36 周、体 1/12 周
3 土師器 杯	高　残 2.2 底　復 3.8 最大　残 9.4	外底面は丁寧な多方向ヘラケズリで上げ底状。外面体部ヨコヘラケズリと一部ヘラミガキ。内面は多方向ヘラミガキで、剝落のため詳細は不明。	7.5YR6/6　橙 やや緻密　白・黒・透明細～微粒少 やや軟質	底 1/4 周
4 土師器 甕	口　復 20.1 高　残 6.0	外面胴部に浅く粗いタテハケ（またはヘラナデ）。内外面口～頸部ヨコナデ後、内面胴部ヨコヘラケズリおよび一部ヨコヘラミガキ。外面に煤若干付着。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや粗い　透明粗～細砂多、黒・白細～微粒少 軟質	口 1/18 周、頸 1/6 周

４区 SK-116

1 土師器 杯	口　復 13.1 高　残 5.4	外面体部ヨコヘラケズリ、内外面口縁部ヨコナデ。外面は磨滅してヘラミガキの有無や底部の調整が不明。内面は横～斜位ヘラミガキで、磨耗のため密度が不詳。	5YR6/8　橙 やや粗い　白・黒・赤・透明細～微粒少 軟質	口 1/6 周

４区 SK-117

1 土師器 杯	口　復 14.0 高　残 3.5	体部外面ヨコヘラケズリ、内面ヘラナデ。口縁部内外面ヨコナデ。ヘラミガキは行わない。内外面の残存部全体を漆仕上げしている可能性あり。	2.5Y3/1　黒褐 やや粗い　白・赤細～粗粒と透明細粒多 やや軟質	口 1/4 周

４区 SK-129

1 土師器 杯	高　残 3.3 最大　残 14.9	体部から緩い段の後に口縁部がわずかに外傾する。外面体部ヨコヘラケズリ後ヨコヘラミガキ。外面口縁部と内面にヨコナデ後、密なヨコヘラミガキ。	5YR5/6　明赤褐 緻密　白・黒・赤・透明細～微粒少 やや軟質	体 1/8 周
2 土師器 杯	高　残 4.7	半球状で内面の口～体部境に稜あり。体部は外面ヨコヘラケズリ、内面ナナメヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内面全面と外面体部以上に赤彩。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・黒細粒と透明粗～細粒少 やや軟質	SK-129 の口 1 片と SI-59 の体 1 片が接合。口 1 片（SI-59）が同一個体 口 1/12 周 SI-59
3 土師器 甕	口　復 16.0 高　残 4.8	肩部は内外面とも残存部が少なく調整不明で、内面はわずかにヨコヘラケズリが見られる。内外面口～頸部ヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　白・透明粗～微粒と黒細粒多 やや軟質	口 1/6 周、頸 1/12 周

第 85 表　権現山遺跡 4 区 古墳時代の土坑

遺構名	グリッド	平面形	重複	長径（m）	短径（m）	深さ（m）	覆土
SK-65	34.0-12.0	円形	重複なし	1.22	1.10	0.14	2 層

残りが浅く、遺物が 1 点だけなので時期を限定しにくいが、図示した土師器甕から古墳中期前葉～中葉の土坑と推定した。

SK-71	33.5-12.0	円形	重複なし	2.27	2.04	0.09	単層

底面鍋底状。土師器杯 7（浅身の内斜口縁杯を含む）・長脚高杯 1・壺甕類 6 片があり、古墳中期後～末葉と見られる。土坑の残りが浅いことを考えれば遺物は少なくないとも言える。

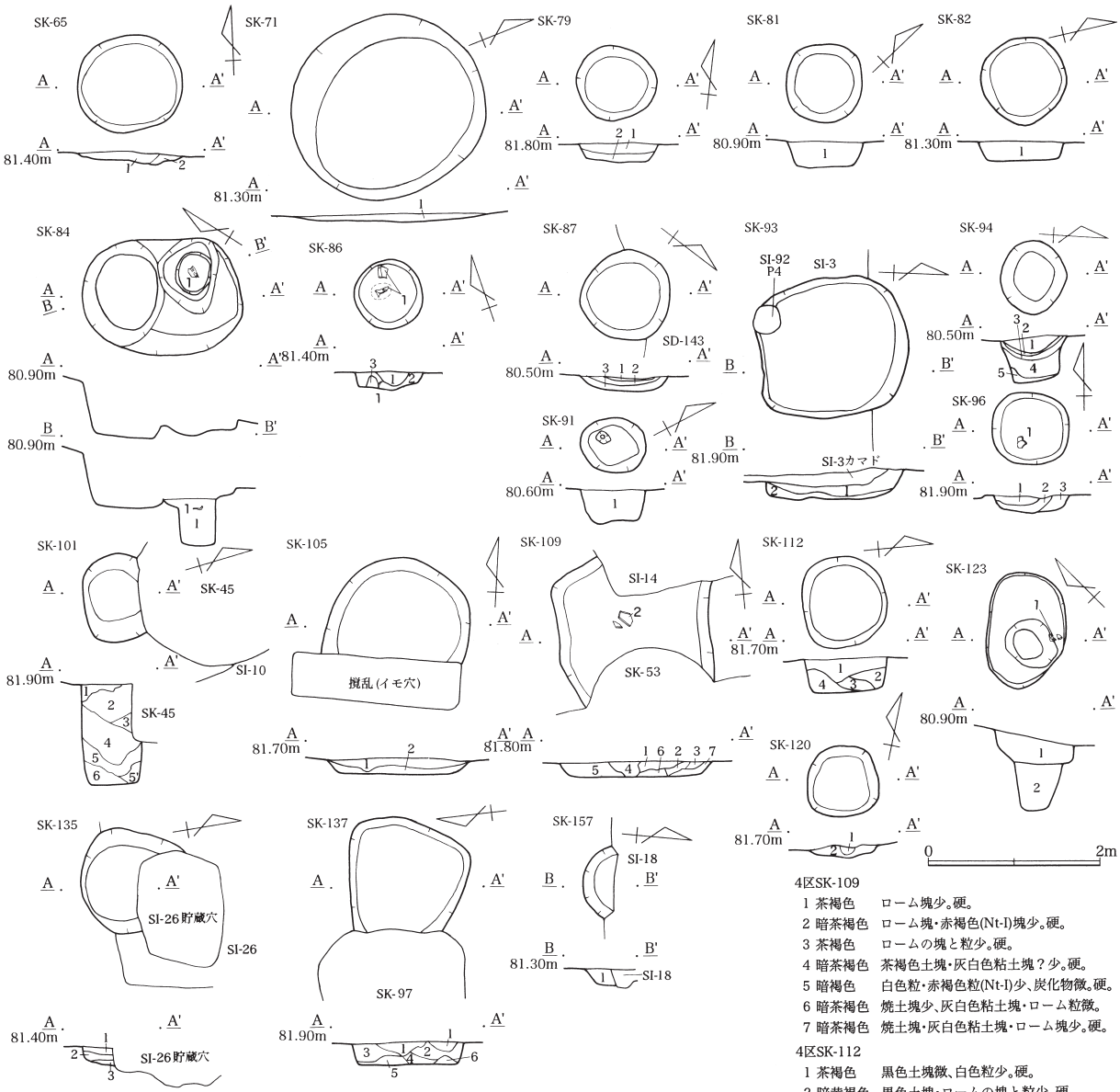
SK-79	35.5-12.0	円形	重複なし	0.92	0.88	0.22	自然堆積

古墳中期後葉～末葉の土師器杯 5 片と壺甕類 1 片出土。近接する古墳時代土坑が多く、古墳時代の SK-96 とも類似するので、古墳時代と判断した。

SK-81	34.5-13.5	円形	重複なし	0.95	0.88	0.31	単層

遺物は少量の土師器で、杯（半球形・直立口縁・外傾口縁）11 片と壺甕類 24 片がある。古墳中期の遺物もあるが、図示した杯から後期後葉～末頃の土坑と思われる。

（p. 310に続く）



4区SK-65
1 暗黄褐色　ロームの塊と粒微、黒色土塊多。硬。
2 暗黄褐色　ローム粒少。しまり弱。

4区SK-71
1 黒褐色　ローム粒微。硬。

4区SK-79
1 暗褐色　ローム粒少。硬。
2 褐色　ローム粒多。硬。

4区SK-81
1 暗褐色　赤褐色粒(Nt-I)微。硬。

4区SK-82
1 黒褐色　ローム粒微。硬。土師器片含む。

4区SK-84
1 黒色　ローム塊微。粘性あり。非常に軟。

4区SK-86
1 暗褐色　ローム粒少。硬。
2 暗黄褐色　ロームの塊と粒多。硬。
3 黒褐色　ローム粒微。硬。

4区SK-87
1 ベージュ色　粘土主体。粘性あり。白色土粒(Hr-FA)。
2 黒色　白色粒少。
3 灰褐色　鉄分含む。

4区SK-91
1 黒色　白色粒少、ローム塊微。粘性あり。硬。

4区SK-93
1 褐色　焼土塊・灰白色粘土粒少。やや硬。
2 淡褐色　ローム粒多、砂質ローム塊少。硬。

4区SK-94
1 灰褐色　ネズミ色。白色粒少。酸化鉄分微。
2 黄白色　ベージュ色で砂質気味。火山灰(Hr-FA)と見られる粘土および白色土粒。硬。
3 黒色　黒色土主体。粘性あり。しまり弱。
4 灰褐色　ネズミ色。ローム塊微。粘性あり。しまり弱。
5 淡黄褐色　ローム塊(水分を含み変色)・砂粒少。粘性あり。しまり弱。

4区SK-96
1 暗茶褐色　ロームの塊と粒・白色粒少。硬。
2 黒褐色　ローム粒・白色粒少。硬。
3 茶褐色　ローム塊微。やや硬。

4区SK-101
1 茶褐色　茶褐色土塊少。硬。
2 暗褐色　ローム粒微。硬。
3 暗褐色　ロームの塊と粒少。硬。
4 黒褐色　茶褐色土塊・赤褐色(Nt-I)塊少。硬。
5 暗黄褐色　ローム塊多。やや硬。
5' 黄褐色　ロームが5層より多い。やや硬。
6 黒色　ローム塊微。やや硬。

4区SK-105
1 暗褐色　ローム粒少。硬。
2 暗黄褐色　ローム粒多。硬。

4区SK-109
1 茶褐色　ローム塊少。硬。
2 暗茶褐色　ローム塊・赤褐色(Nt-I)塊少。硬。
3 茶褐色　ロームの塊と粒少。硬。
4 暗茶褐色　茶褐色土塊・灰白色粘土塊？少。硬。
5 暗褐色　白色粒・赤褐色粒(Nt-I)少、炭化物微。硬。
6 暗茶褐色　焼土塊少、灰白色粘土塊・ローム粒微。
7 暗茶褐色　焼土塊・灰白色粘土塊・ローム塊少。硬。

4区SK-112
1 茶褐色　黒色土塊微、白色粒少。硬。
2 暗黄褐色　黒色土塊・ロームの塊と粒少。硬。
3 暗褐色　茶褐色土塊・ローム塊少。硬。
4 黒褐色　ローム塊微。硬。

4区SK-120
1 褐色　ローム塊多。やや硬。
2 黒褐色　ローム塊・灰白色粘土塊少。焼土粒・炭化物粒極微。硬。

4区SK-123
1 黒褐色　白色粒少、赤褐色粒(Nt-I)微。粘性あり。やや硬。
2 黒褐色　小石・河原石多。

4区SK-135
1 暗褐色　ローム塊少。硬。
2 黒褐色　ロームの塊と粒少。硬。
3 褐色　ローム塊多。硬。

4区SK-137
1 茶褐色　ロームの塊と粒・赤褐色(Nt-I)塊微。硬。
2 暗茶褐色　ロームの塊と粒少。硬。
3 暗褐色　ローム塊少、赤褐色粒(Nt-I)多。硬。
4 暗褐色　ロームの塊と粒・七本桜軽石？少。硬。
5 暗黄褐色　茶褐色土塊・ローム塊少。硬。
6 暗黄褐色　ロームの塊と粒少。硬。

4区SK-157
1 暗黄色　焼土粒多、ローム粒少。

第 172 図　権現山遺跡 4 区　古墳時代の土坑（1）　遺構

（p. 308から続く）

SK-82　35.5-13.5　円形　重複なし　1.01　0.98　0.22　単層
遺物は少量の土師器で、高杯２片・小形壺４片・壺甕類１片がある。小形壺片および図示した土師器甕からみて古墳中期（末頃？）の土坑の可能性がある。

SK-84　34.0-13.0　楕円形　２基重複？　1.85　1.33　0.08　ピット内は単層
楕円形土坑内に土坑２基が並列または重複（113 × 92cm・深さ 52cm と、86 × 70cm・土坑底から深さ 54cm）。後者から土師器甕片出土。図示した以外に土師器杯 18 片と壺甕類 20 片がある。杯はすべて小破片で半球形・口縁直立・口縁外傾があり、内面にミガキを行うので後期後葉とみられる。

SK-86　34.0-12.5　円形　重複なし　0.80　0.78　0.20　人為堆積か
図示した土師器壺と同一個体とみられる破片が第２層で多数出土し、それ以外の土師器壺甕類は２片のみ。古墳中期の可能性あり。

SK-87　32.0-12.0　円形　SD-143 より新？　1.04　0.94　0.19　自然堆積　白色粒とテフラ層有
古墳中期前～中葉の SD-143 を切ると考えられる。底面から上約 7cm に Hr-FA テフラ純層があるので。中期末頃の遺構。

SK-91　33.5-13.0　楕円形　重複なし　0.75　0.63　0.39　単層　白色粒有
重複なし。底面に 15 × 10cm、深さ 8cm の小穴。谷へ向かう斜面に所在。遺物なし。白色粒が FA テフラならば古墳時代の可能性あり。

SK-93　36.0-11.5　略円形　SI-92 → SK-93 → SI-3　1.70　1.60　0.35　自然堆積　焼土・白色粘土粒有
古墳時代の遺構３基が SI-92 → SK-93 → SI-3 の順序に重複するので、古墳後期後葉の SI-3 よりも古い。遺物は土師器甕小破片 16 点（121g）のみで、詳しい時期は不明。上層に見られる白色粘土粒が Hr-FA とすれば後期前半頃か。古墳中期の SD-143 は、谷に向かう斜面にあるので SD-143 が細くなり、SK-93 と重複していない。

SK-94　32.0-12.5　円形　重複なし　0.86　0.78　0.53　自然堆積　白色粒・層有
深い小円形土坑。隣接する SK-87 と同じく Hr-FA テフラ純層があるので、中期末頃の遺構。遺物は詳しい時期不明の土師器大形壺胴部２片のみ。

SK-96　35.5-12.0　隅丸方形　重複なし　0.88　0.82　0.19　自然堆積　白色粒有
不整円形に近い。古墳後期後葉の SI-59 と近い。図示した土師器甕片はあまり長胴化していないので古墳中期の可能性がある。他の遺物は少量の小片（壺甕類４片と杯３片）。

SK-101　36.5-12.0　楕円形　SK-45 より古　1.00　0.63　1.16　6 層
調査時点では井戸とされていたが、底面が礫層に達しないので深い土坑として扱う。古墳後期の円筒形土坑 SK-45 に切られる。遺物はない。

SK-105　35.0-12.5　円形　重複なし　1.62　1.20　0.18　自然堆積
南側を長方形撹乱坑に切られる。土師器杯８片・壺甕類 10 片と須恵器壺瓶類１片があるが図示できない。杯類は直立口縁と外傾口縁の初期模倣杯ばかりで、古墳中期末と見られる。

SK-109　35.0-12.0　不定形　SK-53・SI-14 より新？　2.05　1.70　0.18　白色粒・灰白色粘土塊・粒有
古墳中期の円筒形土坑 SK-53・中期末の SI-14 に重複するが、土層断面図はない。最後に調査した SK-109 が古い可能性もあるが、SI-14 と接合する杯片が SK-109 に混入しているので SI-14 → SK-109 の順が考えられる。図示したハケ調整甕・浅い杯・須恵器壺は古墳後期末頃。図示以外に土師器甑１片・杯２片がある。

SK-112　36.0-13.0　円形　重複なし　1.04　0.95　0.41　最上層に白色粒
円筒形土坑に似るがやや小さい。SK-83・118 と一群をなす可能性有。重複なし。遺物はないが、白色粒（FA テフラ？）から古墳時代の可能性有。

SK-120　35.0-12.5、35.5-12.5　円形　SI-14 より古？　0.90　0.80　0.14　白色粘土塊有
古墳中期末の SI-14 の南東部床下で確認し、SI-14 に切られるものと見られる。SI-14 に関連する土坑の可能性も皆無ではない。遺物は出土しなかった。

SK-123　34.5-13.5　楕円形　２基重複？　1.34　0.91　0.92　上下２層
谷へ向かう斜面にある。２段に掘り込む形で、柱穴状ピット上に楕円形土坑が重複した疑いも残る。図示した平底の杯底部以外に、土師器杯 15・高杯５・壺甕類 14 片がある。広い上げ底状や、外傾口縁の初期模倣杯片も含むので、古墳中期後～末葉と見られる。

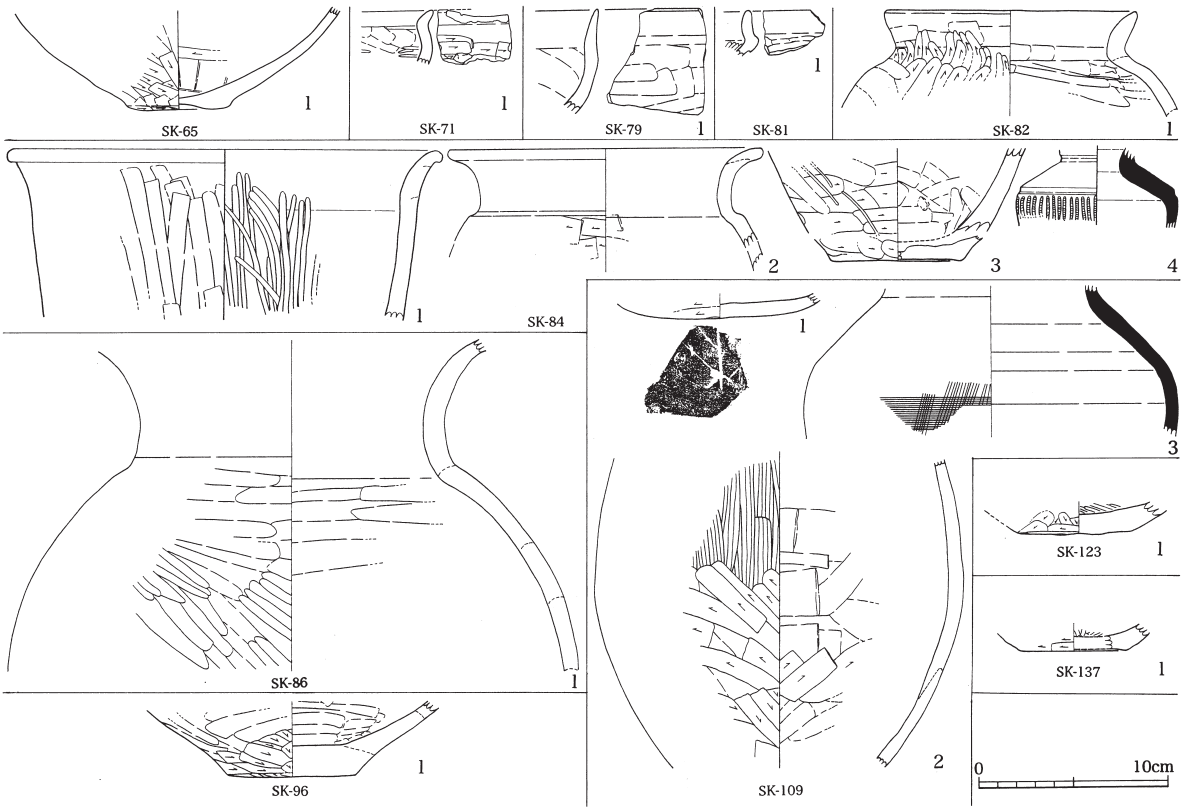
SK-135　35.0-13.5　不整円形　SI-26 より古？　1.30　1.22　0.23　自然堆積か
先に掘っている古墳後期後半の SI-26 より古い可能性がある。直立または外傾口縁の土師器杯１片があるが図示できない。北西の円筒形土坑 SK-133 と近い時期か。

SK-137　35.5-12.0　楕円形　SK-97 より古？　1.40　1.25　0.26　人為堆積か
古墳中期後葉の円筒形土坑 SK-97 と重複し、後で調査した SK-137 の方が古い可能性がある。不整円形で、円筒形土坑と同様の平底。遺物はすべて「SK-97 東」の注記で、SK-137 に伴うと推定した。図示した古墳中期後葉の凹底杯の他に、土師器杯２片・壺甕類７片があり、やや長胴の甕を含む。不確実だが中期後葉～末頃の可能性あり。

SK-157　34.0-12.5　円形　SI-18 より古　0.82　0.36　0.20　焼土粒有
古墳後期初めの SI-18 に北側を切られる。現地では番号を与えず、整理時に SK-157 とした。集落内にあって焼土粒を含み、竪穴にも切られるので、根拠は少ないが古墳時代と推定。

第 86 表　権現山遺跡４区　古墳時代の土坑　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
4 区 SK-65				
1 土師器 甕	高　残 5.3 底　復 5.5	外底面はいびつなドーナツ状で、外周に時計方向のヘラケズリ。胴部は薄く、外面に光沢のあるナナメヘラナデで、胴部下位はややヘラケズリ状になり、胴部下端にナナメヘラナデ。内面は底部に多方向ヘラナデ。胴部に部分的なヨコヘラケズリ。被熱痕は不明。	7.5YR4/3　褐 やや粗い　白・透明細～微粒多、赤・黒細粒少 やや硬質	底 1/3 周
4 区 SK-71				
1 土師器 杯	口　復９～ 11 高　残 2.9	内外面頸部にやや弱い稜を持って口が外反する。外面体部ヨコヘラケズリ、内面体部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外面の口～頸部ヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒・赤微粒微 やや硬質	頸 1/6 周
4 区 SK-79				
1 土師器 杯	口　復13～ 15 高　残 5.4	内面の口～体部境に弱い稜あり。体部は外面ヨコヘラナデと内面ナナメナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/6　橙 やや粗い　白・灰色礫と黒・白・透明微粒少 軟質	口 1/12 周
4 区 SK-81				
1 土師器 杯	口　復14～ 16 高　残 2.4	内外面の口～体部境に稜を持って口縁部が内傾する。外面体部にヨコヘラナデ、内外面口縁部ヨコナデ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。現存する内外全面に漆仕上げ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒細～微粒少 やや軟質	口 1/18 周
4 区 SK-82				
1 土師器 甕	口　復 13.2 高　残 5.6	外面は口縁部ヨコナデ後、頸～肩部にやや光沢のあるタテヘラケズリ、肩部ナナメナデ。内面は胴部ナナメヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。外面の残存部全体に煤付着痕。	7.5YR6/4　にぶい橙 やや粗い　白・赤粗～細粒と黒・透明細～微粒少 硬質	口～肩 1/4 周



第 173 図　権現山遺跡 4 区　古墳時代の土坑（2）　遺物

4 区 SK-84

1 土師器 甑	口　復 23.0 高　残 8.9	口縁部上端外面が頸部から明瞭に肥厚して丸くなる。内外面口～頸部ヨコナデ後、外面胴部タテヘラナデ、内面胴部タテヘラミガキ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや緻密　黒・白細～微粒と透明微粒多、黒・透明粗粒少　硬質	底上 51㎝ 口 1/6 周 1
2 土師器 甕	口　復 16.6 高　6.5	外面の口～胴部境に強い段あり。外面は口縁部ヨコナデ後に胴部ヨコヘラケズリ。内面は胴部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。	10YR7/4　にぶい黄橙 やや粗い　赤粗～微粒微、白・黒細～微粒と透明微粒多　硬質	口 1/6 周、頸 1/4 周
3 土師器 壺	高　残 5.9 底　復 6.8 最大　残 13.6	胴部片と底部片の接点がない。外面底部に一定方向の軽いヘラナデ。外面胴部ヨコヘラケズリ後、斜位の疎らなヘラナデとヘラミガキ。胴部内面は横～斜位のヘラナデ。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや粗い　白・黒・透明粗～細粒多、灰色礫～粗粒少　硬質	底 1/3 周
4 須恵器 壺	高　残 4.2 最大　残 8.5	頸部下端近くに浅い凹線あり。肩部に深い凹線を入れ、胴部側面に縦位の頸歯刺突文。肩部ヨコナデと胴部施文時のロクロは左回転（反時計回り）の可能性あり。内外面はオリーブ灰色で、器の芯部は橙色（2.5YR6/6）。	2.5GY6/1　オリーブ灰 やや緻密　白細粒やや多、白粗粒と透明細～微粒微 やや硬質	頸 1/6 周、肩 1/3 周

4 区 SK-86

1 土師器 大形壺	高　残 17.6 最大　復 30.2	外面胴部はヨコヘラナデ後、主に中位に幅広いナナメヘラミガキ。内面胴部はヨコヘラナデで、剝落して不明な部分が多い。内外面の口～頸部にヨコナデ。	10YR6/4　にぶい黄橙 やや緻密　白・灰色礫と白・黒・透明細～微粒少 やや軟質	底上 7 ～ 8㎝ 頸 1/2 周 1、2

4 区 SK-96

1 土師器 甕	高　残 4.0 底　6.8	外面は胴部ヘラナデ後に下端部を横～斜位ヘラケズリ。外底面を多方向ヘラケズリ。内面は胴部に横～斜位ヘラナデ、底部中央に 1 方向ヘラケズリ。外面は残存部全体が少し被熱気味。	7.5YR5/4　にぶい褐 やや粗い　白・赤・灰色・透明粗～細粒と黒細粒少、白・灰色礫微　硬質	底上 6㎝ 底全周 1

4 区 SK-109

1 土師器 杯	高　残 1.2	外底面に木葉裏面の圧痕があり、底面外周から外面体部にヨコヘラケズリ。内面は多方向のヘラナデ。	7.5YR6/4　にぶい橙 緻密　白・黒・透明微粒多 やや軟質	底 1/6 周
2 土師器 甕	高　残 16.2 最大　復 19.5	外面は粗いタテハケ（6 本 /㎝）の後に下位をナナメヘラケズリ。内面は底部に斜位と胴部に横位のヘラナデ後、胴部下位の積み上げ休止部が厚くなっているところにナナメヘラケズリ。外面下半（残存下端から 10㎝位まで）が弱く被熱する。	10YR7/4　にぶい黄橙 粗い　白・透明粗～微粒多、黒細粒少　やや硬質	底上 15㎝ 胴 1/6 周 1
3 須恵器 壺	高　残 8.0 最大　復 19.7	外面は肩部に平行叩きの後に浅いカキメ。内面は肩部回転ヨコナデでロクロ右回転の可能性があり、頸下端は回転が弱い。外面に緑色の自然釉が厚く付着し、部分的に黄色く発色する。	5Y6/1　灰 やや緻密　白礫～粗粒と黒湧出粒少　硬質	頸 1/12 周、肩 1/8 周

4 区 SK-123

1 土師器 杯	高　残 1.7 底　5.8	いびつな平底で、外面の体～底部境は明瞭。外面は体部・底部に多方向ヘラケズリ。内面は底部に 1 方向ヘラミガキ。	10YR7/4　にぶい黄橙 緻密　赤・黒・白細粒微 やや硬質	上段の土坑の底面 底 2/3 周 1

4 区 SK-137

1 土師器 杯	高　残 1.4 底　復 5.4	外底面は 1 方向ヘラケズリで上げ底状。外面体部にヨコヘラケズリ。内面底部に密な多方向ヘラミガキ。	7.5YR6/6　橙 緻密　白・透明細～微粒と赤細粒少　やや軟質	SK-97 の東側 底 1/4 周 東

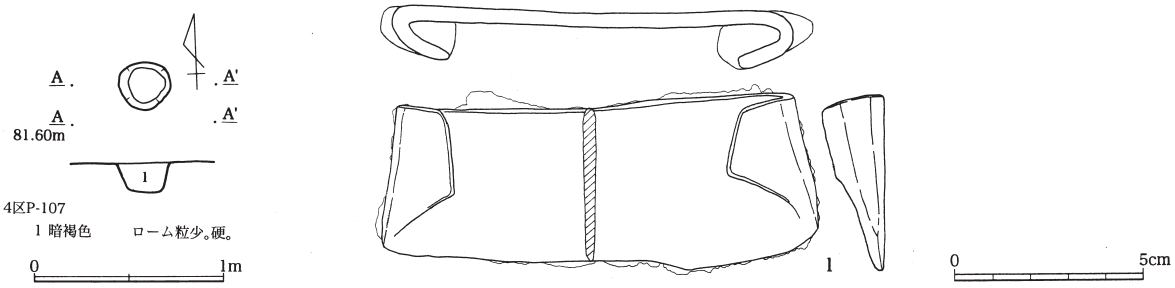
第６節　古墳時代の柱穴状土坑

権現山遺跡４区では古墳時代の柱穴状土坑（ピット）が１箇所ある。

４区 P-107（第 174 図）

35.0-12.5 グリッドに所在し、重複する遺構はない。確認面での直径 0.25 ～ 0.27m、深さ 0.15m の円形。

方形鍬鋤先が１点出土した。これ以外の遺物は出土しなかった。古墳中期後葉からはＵ字形鍬鋤先に交代するので、方形鍬鋤先は中期中葉以前の可能性が高いが、北関東など東日本の一部では後まで残存する場合もある（魚津 2003,pp.32,39）。近辺では中期後葉の鶴舞塚古墳や後期中葉の聖山公園２号墳で見られる（梁木・定岡他 1983, 梁木 1984）。古墳時代土坑で掘削具が出土した例として、東谷・中島地区では立野遺跡５区 SK-162 に有肩鉄斧がある（内山 2005）。



第 174 図　権現山遺跡 4 区　古墳時代の柱穴状土坑　P-107　遺構・遺物

第 87 表　権現山遺跡 4 区　P-107　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 鉄製品 方形鍬鋤先	長　4.5 幅　11.5 厚　1.6 重　残 73.9	横長の逆台形状の鉄板の左右両端を約 2cmずつ折り返す。鉄板の厚さは 2.2 ～ 3.5㎜。横幅 9.7 ×厚さ 0.8cm程の鍬鋤先を約 1.9cm挿し込む構造。内外面ともに有機質は見られない。		ほぼ完形

第７節　時期不明の掘立柱建物跡

４区 SB-132（第 175 図、写真図版 63）

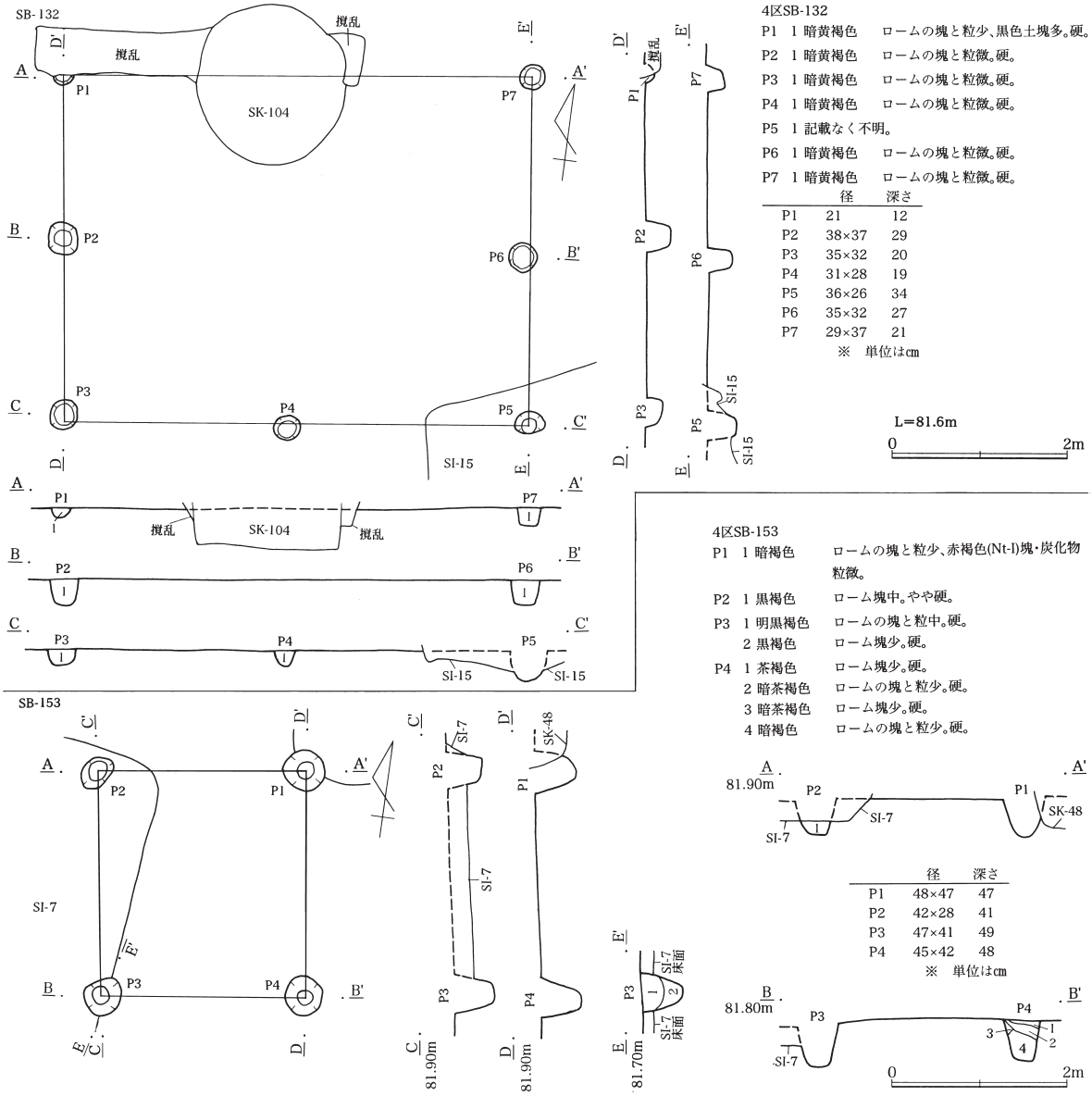
４区中央部の台地平坦面にあり、34.5-11.5、35.0-11.5 グリッドに位置する。北側に古墳後期初頭の SI-9 が近接する。古墳終末期の SI-15 および古墳中期後葉の円筒形土坑 SK-104 と重複するが、前後関係は不明。SI-15 の貼床を除去した下の旧竪穴（A 期・B 期）まで掘り下げた段階で SB-132 の柱穴 P5 が確認・図化されているので、SI-15 より SB-132 が古い可能性もある。

南北の中軸線は N-9°-W である。柱穴は調査区内で７本確認した。東西２間（5.35m）、南北２間（4.00m）の側柱建物である。柱間は東西が 2.6 ～ 2.7m、南北が 2.0m で東西の柱間が 60 ～ 70cm 広い。北西柱穴 P1 が、他の柱穴に比べてやや浅い。

遺物は P4 出土の土師器甑小破片１点だけで、図示できるものはない。

４区 SB-153（第 175 図、写真図版 63）

４区中央部の台地平坦面にあり、35.5-11.5 グリッドに位置する。西側は調査区外となる。古墳時代後期初頭の竪穴 SI-7 および古墳中期の土坑 SK-48 と重複するが、両遺構との正確な前後関係は不明である。SI-7 の貼床を除去した後に SB-153 の北西柱穴 P2 が確認されているので、SI-7 より SB-153 が古い可能性もある。しかし、南西柱穴が SI-7 を切ると記録されていること（断面図 E-E′）からみると、SB-153 の方が新しいと考えられる。



第 175 図　権現山遺跡 4 区　時期不明の掘立柱建物　SB-132・153　遺構

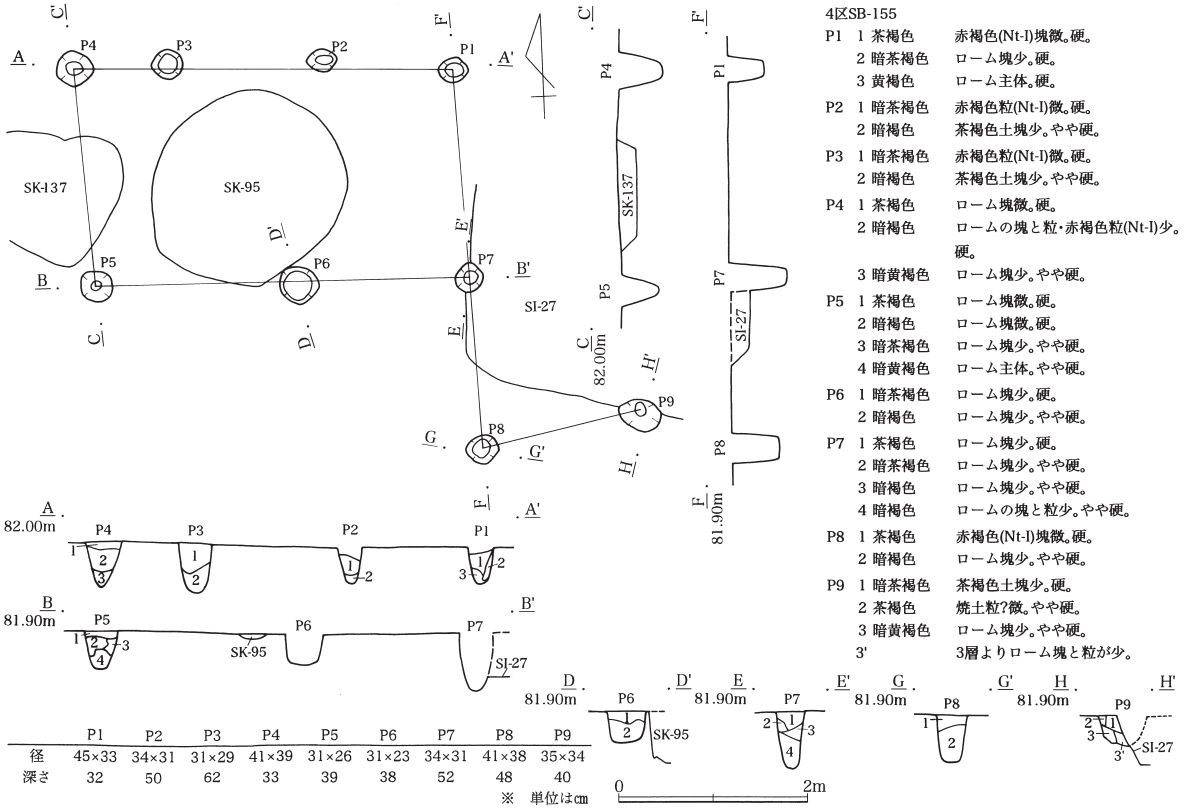
南北の中軸線は N-9°-W である。柱穴は 4 本確認した。東西 1 間、南北 1 間の側柱建物と考えられる。柱間は東西が 2.3 ～ 2.4m、南北が 2.6m で南北の柱間が 20 ～ 30cm 広い。遺物は出土しなかった。

4 区 SB-155（第 176 図、写真図版 63）

4 区北部の台地平坦面にあり、35.5-12.0、35.5-12.5 グリッドに位置する。

掘立柱建物跡になるかもしれないが、確実ではない。東柱列の中央柱穴が古墳中期中葉の SI-27 の西壁部と重複するが、両者の前後関係は不明である。中央部にある古墳中期末の円筒形土坑 SK-95 は、SB-155 の柱穴と接近し確認面より上方では重複していただろうが、両者の前後関係は不明である。古墳中期の SI-14 や後期の SI-59 との重複も推定されるが、確実な重複関係は不明である。

柱穴は 9 本確認した。柱間は東西が 0.8 ～ 2.0m、南北が 1.8 ～ 2.3m、深さも 32 ～ 62cm まで様々で、企画性を欠く。P8-P9 ラインは SB-155 の他の柱列と斜行するので、P9 が SB-155 を構成するかどうかは疑問もある。P9 を除外した場合の規模は東西 3 間（4.02m）以上×南北 2 間（4.01m）以上。東西棟と考えた場合の中軸は N-88°-W。遺物は出土しなかった。



第 176 図　権現山遺跡 4 区　時期不明の掘立柱建物　SB-155　遺構

第 8 節　時期不明の井戸跡

4 区 SE-72（第 177 図、写真図版 63・126）

４区南端のやや低い台地上で、32.5-12.0 グリッドに位置する。北 4 m には古墳中期後半の SI-22、東 4 m に時期不明の SE-73 が位置する。周辺の地山土層は、南方にある SG10 区標準土層に対比すると、Ⅳ層（ハードローム層）とⅤ層（灰色の円礫と砂の互層で、鹿沼軽石や黄褐色砂も一部に少し含む）に相当する。重複する遺構はない。

上面は長径 0.95m ×短径 0.76m の楕円形で、中軸の方向は N-43゜-E である。底面までの深さは 1.95m で下方はわずかにオーバーハングする。井筒は最も狭いところで直径 65cm ほどである。

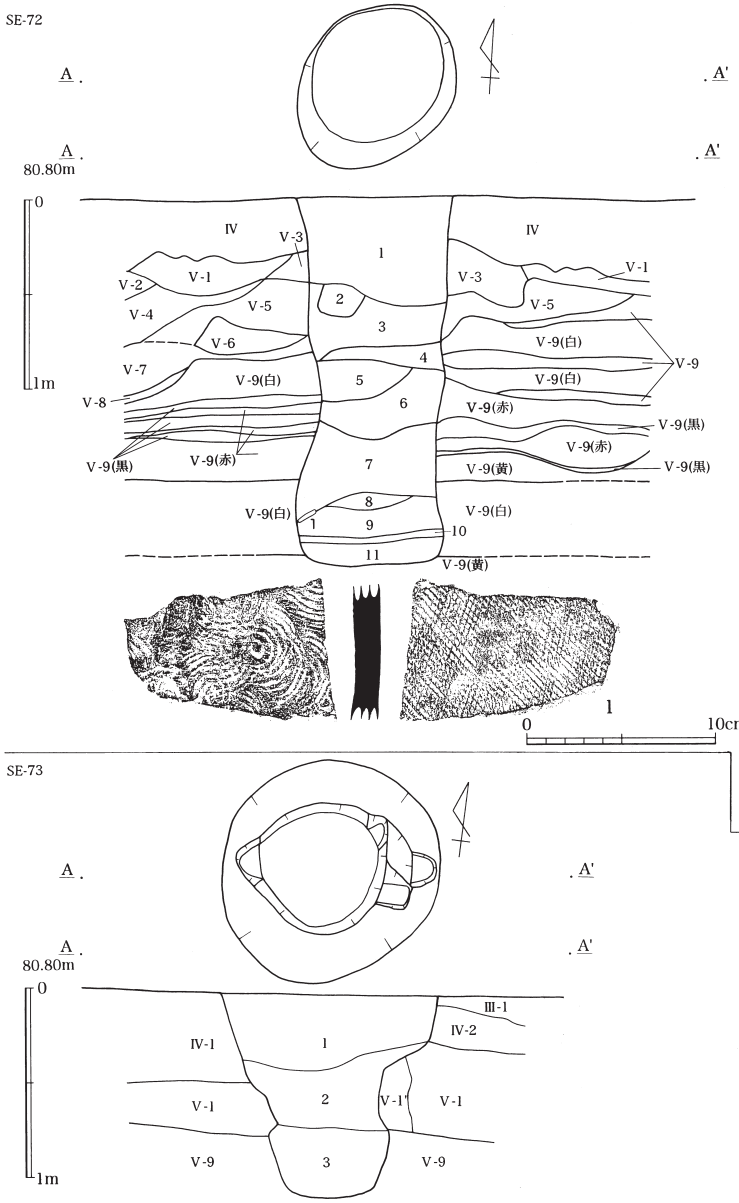
埋土は、６層以上の暗茶褐色・黒褐色土が人為的な埋め戻し土で、８層以下の茶褐色・黒褐色土層が自然堆積層と思われた。肉眼でテフラ層を観察することはできなかった。しかし、テフラ分析の結果、埋土の最下層から 12 世紀初めの As-B テフラが多く認められているので（第 92 表参照）、それより後の遺構であると考えられる。

底面から 25cm 上、第９層上面から須恵器甕胴部破片が出土した。また、４～９層中からも古墳中期後半を中心とする土師器片が出土している。12 世紀以降の井戸であることからみて、これらの土器は西側の古墳時代集落から混入した遺物であろう。

4 区 SE-73（第 177 図、写真図版 63）

４区南端の低地に向かう斜面にあり、32.5-12.5 グリッドに位置する。北東近くに時期不明の SK-89、西 4 m に時期不明の SE-72 が位置する。重複する遺構はない。

SE-72 よりもさらに東側の低地に近い位置にある。この井戸より西側の地山土層には黄褐色ロームが見ら



4区SE-72　埋土層
1 暗褐色　黄褐色ロームブロック多量と最大径23㎜の小亜円礫を含む　人為埋戻
2 黒褐色　人為埋戻
3 黒褐色　黄褐色ローム小ブロックと最大径58㎜の亜円礫少量を含む　人為埋戻
4 暗褐色　黄褐色ロームブロック多量と最大径43㎜の亜円礫多量を含む　人為埋戻
5 黒灰褐色　黄褐色ローム小ブロックと亜円礫少量を含む
6 暗褐色　黄褐色ロームブロック多量と最大径48㎜の亜円礫多量を含む　人為埋戻
7 黒色　黄褐色ローム小ブロックと最大径34㎜の亜円礫少量を含む　自然堆積または人為埋戻
8 黄褐色　黄褐色ロームの堆積層　自然堆積
9 黒褐色　水分が多くベタベタする　自然堆積
10 茶褐色　地山茶褐色土の堆積層　自然堆積
11 黒褐色　水分が多くベタベタする　自然堆積

4区SE-72　地山土層
IV 黄褐色　ハードローム　径1㎝程の赤色小ブロック(酸化した鉄分?)も含む
V 灰色　砂と径10㎝以下の礫との互層　V-1層からV-8層までは礫が少量　V-9層は礫が主体の層
V-1　灰白色砂と黄褐色ローム(IV層と同種)が混在
V-2　径1㎝以下の礫少量と灰白色砂が混合
V-3　径2㎝以下の小礫と黄褐色ローム(IV層と同種)が混在
V-4　白色の円礫と砂が混在
V-5　灰色の砂(乾くと灰白色)
V-6　V-1と同じ
V-7　V-5と同じ
V-8　V-2と同じ
V-9　径10㎝以下の礫を主体とする層
V-9(黒)　黒～深青色に還元
V-9(白)　灰白色
V-9(赤)　赤色味を帯びる(酸化鉄含む?)
V-9(黄)　黄色味を帯びる

4区SE-73　地山土層
III-1 淡茶色粘質　赤色鉄分・砂粒塊・黒色土小塊などを含む　低地トレンチの17～19層と対応
IV-1 黄褐色　ハードローム　径1㎝程の赤色小ブロック(酸化した鉄分?)も含む
IV-2 乳白色粘質　ロームの水成堆積層か？ 低地トレンチのIV-2層と同じ
V-1 灰白色砂と黄褐色ローム(IV-1層と同種)が混在　SE-72のV-1層と同じ
V-1′ V-1層に赤色小塊（酸化鉄?）が多量混入
V-9 礫層　径10㎝以下の礫を主体とする層　SE-72のV-9層と同じ

4区SE-73　埋土層
1 暗褐色　ローム粒微量。しまりあり。
2 暗黄褐色　ローム小ブロック少量。やや弱。粘性あり。
3 暗黄褐色　ローム小ブロック微量。弱。粘性あり。

第 177 図　権現山遺跡 4 区　時期不明の井戸　SE-72・73　遺構・遺物

第 88 表　権現山遺跡 4 区　SE-72　出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (㎝・g)	特　　徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 甕	高　残 7.2 厚　1.4 重　残 168.1	木目に斜行する溝を彫った叩き板で外面に斜擬格子叩き。内面は同心円文当具痕。破面は灰赤色（2.5YR5/2）。内外の器面に黒色の均質な自然釉。古墳中～後期の遺物が混入。	7.5Y3/1　オリーブ黒 緻密　白粗～微粒多、透明微粒少 硬質	底上 25㎝。9 層上面 胴部 1 片 1

れるが、東側の地山土層は東側低地のトレンチ調査で確認されたものと同様の淡茶色や乳白色土になっている（IV-2 層・IV-3 層）。ロームと砂が混在する地山 V-1 層よりも下にある礫層の湧水を利用している。低地へ移行する地点に掘ることで比較的浅く湧水層へ達することができたものと見られる。

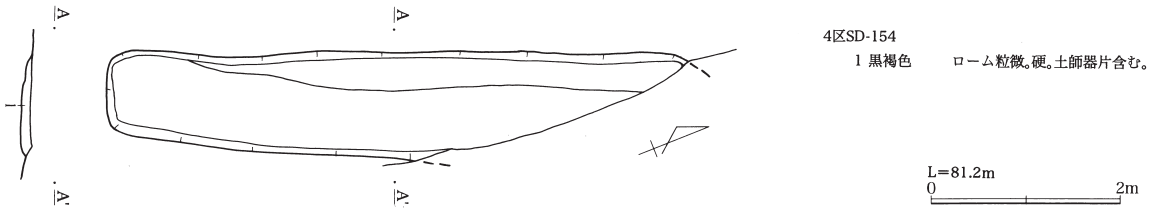
上面（井桁）は長径 1.20m、短径 1.15m の円形である。確認面から底面までの深さは 1.07m で下方はオーバーハングする。井筒は最も狭いところで直径 60cm ほどである。東西の壁面の上部付近には足かけ穴と思われる掘り込みが認められる（写真図版 63 参照）。

覆土は 3 層に分層された。おおむね水平に堆積している。第 1 層は締まりがあるが、第 2 ・3 層は粘性があり、締まりは弱い。上層からこぶし大の石が多く見られた。遺物は出土しなかった。

第９節　時期不明の溝状遺構

４区 SD-154（第 178 図）

４区南寄りの 33.0-12.5 グリッド所在。台地平坦面から低地に向かう緩斜面にあり、低地へ向かって降りてゆく台地端の地形に沿って掘られている。重複する遺構はない。ほぼ南西 - 南東方向にほぼ直線的に延びる。中軸は N-24°-E、確認できる長さは 6.15m で、さらに北側に延びるが、削平を受けて確認できない。確認面幅は 0.95 ～ 1.15m、底面幅は 0.77 ～ 0.98m、深さ 0.07 ～ 0.11m。断面は浅い皿状で、底面は平坦な部分が多い。覆土１・２層ともにローム・焼土粒を含む。現地調査時の図面には「土師器片を含む」と記されているが、遺物を確認できない。



第 178 図　権現山遺跡 4 区　時期不明の溝　SD-154　遺構

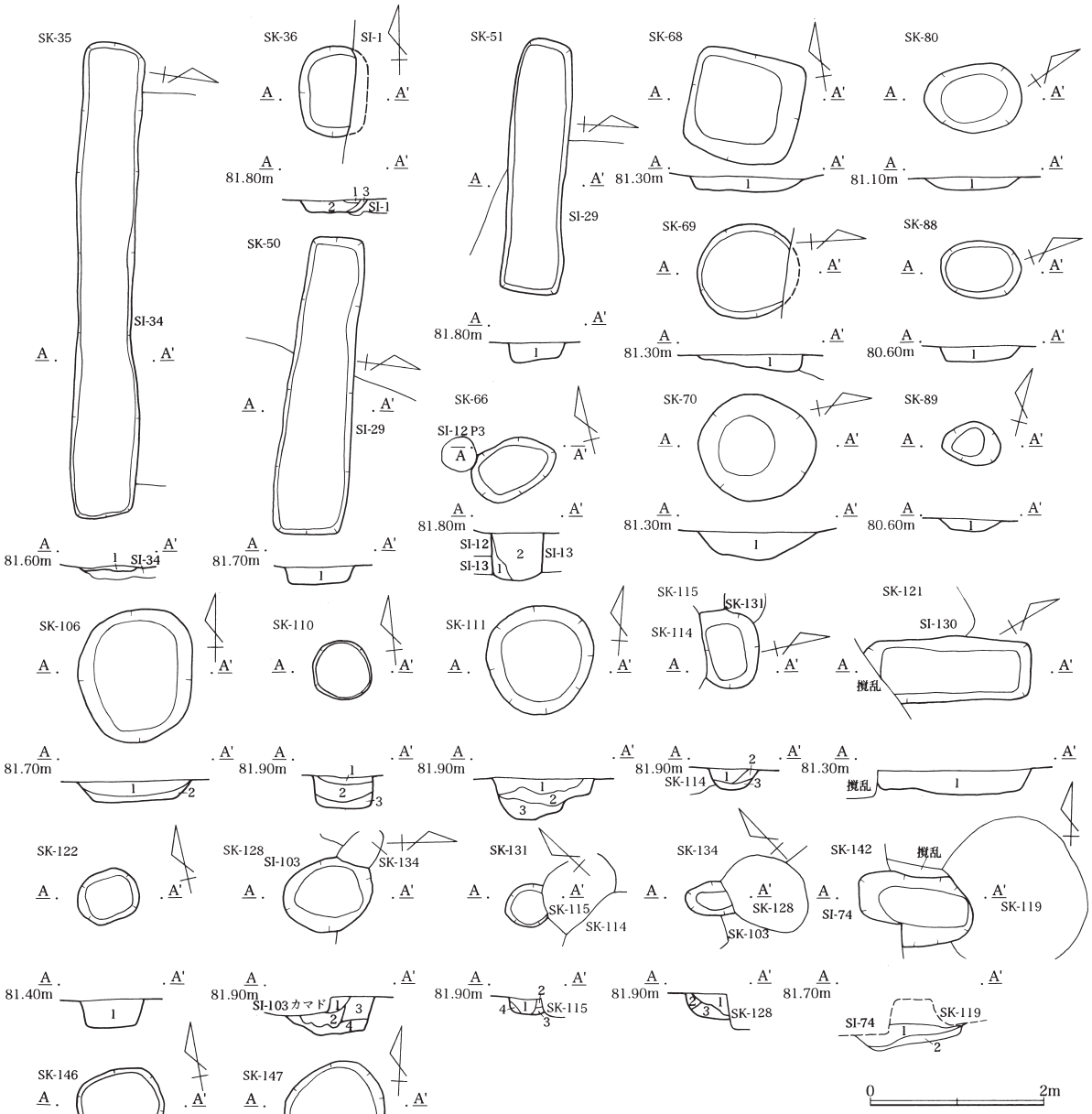
第 10 節　時期不明の土坑（第 179 図、写真図版 53・64 ～ 66）

遺物・白色火山灰粒などから時期を決定できなかった土坑は権現山遺跡４区に 23 基ある（第 179 図・第 89 表）。SK-128・134・142 は古墳時代中期以前の土坑で、縄文時代まで遡るかもしれない。SK-106 は直径 1.5m を超える大形平底の円形なので、これがもしも古墳時代であれば、円筒形土坑になる可能性もある。SK-35・36・50・51・121 は長方形土坑で、「イモ穴」と通称される近代以降の農業関連土坑かとみられる。この他は、時期を推定する手がかりがない。

第 89 表　権現山遺跡 4 区　時期不明の土坑

遺構名	グリッド	平面形	重複	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	中軸	覆土
SK-35	36.5-11.0･11.5	長方形	SI-34 より新	5.48	0.65	0.04	N-6°-E	単層
古墳終末期の SI-34 を切る。埋土の特徴が新しそうであり、近世以降の農業関連土坑 (所謂イモ穴) の可能性が高い。遺物は出土しなかった。								
SK-36	36.5-11.5	楕円形	SI-1 より新	1.03	0.80	0.14		3 層
古墳後期初頭の SI-1 を切る。遺物は土師器甕 3 片と杯 1 片で、図示出来るものはない。古墳時代土坑の可能性もある。								
SK-50	36.0-13.0	長方形	SI-29 より新	3.42	0.80	0.21	N-89°-W	単層
古墳中期の SI-29 を切る。近世以降の農業関連土坑 (所謂イモ穴) の可能性が高い。遺物は土師器杯 7 片と壺甕類 14 片があり、SI-29 から混入したと見られる。								
SK-51	36.0-13.0	長方形	SI-29 より新	2.94	0.64	0.26	N-0°	単層
古墳中期の SI-29 を切る。近世以降の農業関連土坑 (所謂イモ穴) の可能性が高い。遺物は土師器杯・高杯・壺甕類の小破片があり、SI-29 から混入したと見られる。								
SK-66	35.0-12.0	不整楕円形	SI-12･13 より新	1.00	0.65	0.55		2 層
古墳中期末の SI-12 と後期末の SI-13 を切る。SI-12 の小形甑は SI-12 床面から SK-66 に流入と推定。断面形が SK-110・平面形が SK-115 に近似。								
SK-68	33.5-11.5･12.0	略方形	重複なし	1.30	1.27	0.18	N-22°-W	単層
隅丸方形状。遺物は出土せず、時期推定の手がかりなし。								
SK-69	34.0-12.0	円形	撹乱溝と重複	1.18	1.10	0.20		単層
北側で溝状の撹乱を切るという所見が正しければ、撹乱坑の可能性がある。遺物は出土しなかった。								
SK-70	33.5-12.0	円形	重複なし	1.35	1.24	0.32		単層
やや深い。遺物は出土せず、時期推定の手がかりなし。								
SK-80	34.5-13.0	楕円形	重複なし	1.12	0.78	0.14	N-60°-E	単層
土師器杯 1 片と壺甕類 6 片があり、杯は内面を密に磨き漆仕上げで古墳後期初頭以前。古墳時代土坑の可能性もある。								
SK-88	33.0-12.5	楕円形	重複なし	0.92	0.66	0.17	N-68°-E	単層
小形。断面図の土層説明が欠落し不明。遺物が出土せず、時期を特定できない。								
SK-89	32.5-12.5	円形	重複なし	0.69	0.50	0.15		単層
断面図の土層説明が欠落し不明。古墳中期の土師器片が少量あるが (杯 1・小形壺体部 ?1)、遺構の時期を示すかどうかは不明。								
SK-106	35.0-12.5	楕円形	重複なし	1.55	1.31	0.25		2 層　自然堆積
円筒形土坑に似るがやや不整形。縄文土器 1 片と板状安山岩 1 片出土。覆土の特徴は周囲の古墳時代土坑に類似。縄文時代の可能性もある。								
SK-110	35.5-12.5、36.0-12.5	円形	重複なし	0.71	0.68	0.37		3 層　自然堆積
やや小さくて深い断面形が SK-66 に近似。遺物が出土せず、時期を特定できない。								
SK-111	36.5-12.5	円形	重複なし	1.25	1.25	0.50		4 層　自然堆積
不整形な底面や覆土からみて遺構ではない可能性もあり。遺物が出土せず、時期を特定できない。								

（p. 318に続く）



4区SK-35
1 暗褐色　ローム塊少。軟。しまり弱。

4区SK-36
1 茶褐色　ロームの塊と粒少。軟。
2 黒色　ローム塊微。軟。
3 黒色　ローム塊・茶褐色土粒少。軟。

4区SK-50
1 暗褐色　ロームと褐色土の塊少、炭化物粒微。やや硬。

4区SK-51
1 暗褐色　ロームと褐色土の塊少、炭化物粒微。やや硬。

4区SK-66
1 暗褐色　ロームの塊と粒多。硬。
2 暗茶褐色　茶褐色土塊多、ロームの塊と粒少。硬。

4区SK-68
1 黒褐色　ローム粒少。硬。

4区SK-69
1 暗黄褐色　ローム粒多、ローム塊少。硬。

4区SK-70
1 暗黄褐色　ローム粒少、赤褐色粒(Nt-I)微。硬。

4区SK-80
1 黒褐色　ロームの塊と粒微。硬。

4区SK-88
1 記載なく不明。

4区SK-89
1 記載なく不明。

4区SK-106
1 褐色　ローム粒少。硬。
2 暗黄褐色　ローム粒多。硬。

4区SK-110
1 暗褐色　ローム粒微。硬。
2 褐色　ロームの塊と粒少。硬。
3 暗黄褐色　ローム粒多。硬。

4区SK-111
1 茶褐色　ローム塊少。やや硬。
2 暗茶褐色　ローム塊少。七本桜軽石微。やや硬。
3 暗黄褐色　ローム塊多。やや硬。

4区SK-115
1 暗茶褐色　茶褐色土塊少。硬。
2 暗褐色　ローム塊・七本桜軽石?微。硬。
3 茶褐色　ローム塊少。硬。

4区SK-121
1 黒褐色　ローム塊多。土師器片含む。硬。

4区SK-122
1 記載なく不明。

4区SK-128
1 暗茶褐色　七本桜軽石少。非常に硬。
2 暗茶褐色　ロームの塊と粒少。非常に硬。
3 茶褐色　赤褐色(Nt-I)塊・茶褐色土塊少。非常に硬。
4 暗黄褐色　ローム塊少。非常に硬。

4区SK-131
1 暗褐色　茶褐色土塊少。硬。
2 暗茶褐色　茶褐色土塊少。硬。
3 茶褐色　茶褐色土塊多、赤褐色粒(Nt-I)微。硬。
4 暗茶褐色　茶褐色土塊少。硬。

4区SK-134
1 暗褐色　ロームの塊と粒少。硬。
2 暗褐色　ローム塊微。硬。
3 暗黄褐色　ローム塊少。硬。

4区SK-142
1 褐色　ロームの塊と粒少。硬。
2 暗黄褐色　ローム塊多。硬。

4区SK-146
1 暗茶褐色　ロームと焼土の塊少。硬。

4区SK-147
1 暗茶褐色　ロームの塊と粒少。硬。

第 179 図　権現山遺跡 4 区　時期不明の土坑　遺構

（p. 316から続く）

SK-115　36.5-12.0　楕円形　SK-114･131 より新　0.96　0.65　0.24　３層　自然堆積
古墳時代の円筒形土坑 SK-114 を切る。時期不明の SK-131 を切る可能性有。平面形が SK-66 に類似。古墳中期の可能性がある土師器杯 1・壺甕類２片出土。

SK-121　33.5-11.5　長方形　SI-130 より新　1.98　0.78　0.31　N-33° -W 単層　人為堆積
古墳中期の SI-130 を切り、土師器杯・高杯・甑・鉢 ?・壺や須恵器杯・高杯 ･甕? 混入。長方形撹乱 (旧名 SK-139) に切られ、SK-121 も同種の撹乱坑か ?。

SK-122　34.5-13.0　楕円形　重複なし　0.73　0.60　0.32　単層
断面図の土層説明が欠落し不明。骨が出土し、かなり新しい時期の動物埋葬坑か。他の遺物はない。

SK-128　35.5-13.0　楕円形　SK-134より新､SI-103より古　1.05　0.82　0.44　N-13° -E　4 層　非常に硬い
時期不明の SK-134 を切る。古墳後期前半の SI-103 に切られるので中期以前で、覆土から縄文時代の可能性もある。底面に凹凸有。遺物は出土しなかった。

SK-131　36.5-12.0　円形　SK-115 より古？　0.59　0.48　0.20　4 層
時期不明の SK-115 に切られると見られる。遺物は出土しなかった。

SK-134　35.5-13.0、36.0-13.0　楕円形　SI-103 と SK-128 より古　0.58　0.38　0.29　N-48° -E　3 層
SK-134 →時期不明の SK-128 →古墳後期前半の SI-103 の順に重複。縄文時代土坑の可能性もある。遺物は出土しなかった。

SK-142　35.5-12.5･13.0　長円形　SI-74 と SK-119 より古　1.34　0.94　0.30　N-6° -W　3 層以上　自然堆積
古墳後期初頭の SI-74 に切られるので中期以前。古墳時代の円筒形土坑 SK-119 にも切られると判断したが土層断面がやや不明瞭。縄文時代土坑の可能性もある。遺物はない。

SK-146　35.5-13.5　円形　重複なし　0.98　0.83　0.04　単層
遺物は出土しなかった。

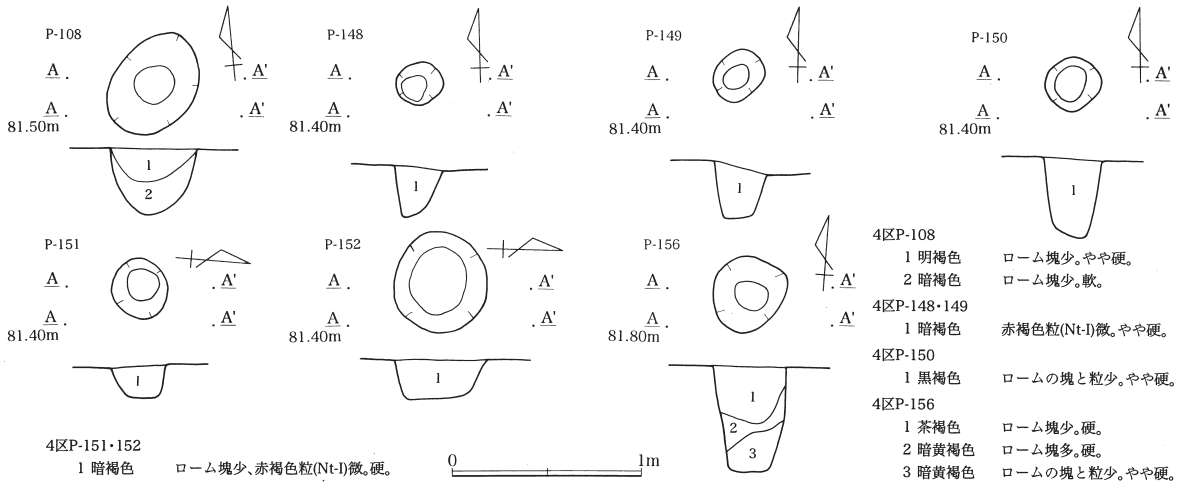
SK-147　35.5-13.5　円形　重複なし　1.18　1.14　0.24　単層
古墳時代の円筒形土坑にも類似する。覆土の特徴が地山に近く、遺構ではない可能性もある。遺物は出土しなかった。

第 11 節　時期不明の柱穴状土坑

時期を決定できなかった柱穴状土坑（ピット）は、権現山遺跡４区に７基ある（第 180 図・第 90 表）。P-150・156 は比較的しっかりした深さが残っている。他の柱穴状土坑は、遺構確認面からそれほど深くないものである。

第 90 表　権現山遺跡 4 区　時期不明の柱穴状土坑

遺構名	グリッド	平面形	重複	長径（m）	短径（m）	深さ（m）	覆土
P-108	35.0-12.5	不整楕円形	重複なし	0.58	0.43	0.34	２層　自然埋没
方形鍬鋤先を出土した古墳時代の柱穴状土坑 P-107 が南東 6m にある。現地調査時の名称は SK-108。径 40 ～ 50cm なので土坑と考えることも可能。遺物はない。							
P-148	35.5-13.5	円形	重複なし	0.25	0.22	0.28	単層
P-149 と覆土が共通する。遺物はない。							
P-149	35.5-13.5	円形	重複なし	0.28	0.24	0.3	単層
P-148 と覆土が共通する。遺物はない。							
P-150	35.5-13.5	円形	重複なし	0.31	0.27	0.43	単層
しっかりとした深い柱穴。遺物はない。							
P-151	36.0-13.5	円形	重複なし	0.32	0.29	0.18	単層
近接する P-152 と覆土が共通。土器片の出土が記録されているが、遺物を確認できない。							
P-152	36.0-14.5	円形	重複なし	0.53	0.48	0.21	単層
やや径が大きいが、近接する P-151 と覆土が共通するため、それと同じく柱穴状土坑（P）とする。土器片の出土が記録されているが、遺物を確認できない。							
P-156	29.5-12.5	円形	重複なし	0.42	0.37	0.56	３層　自然埋没
しっかりとした深い柱穴。現地調査時の名称は SK-156。遺物はない。							

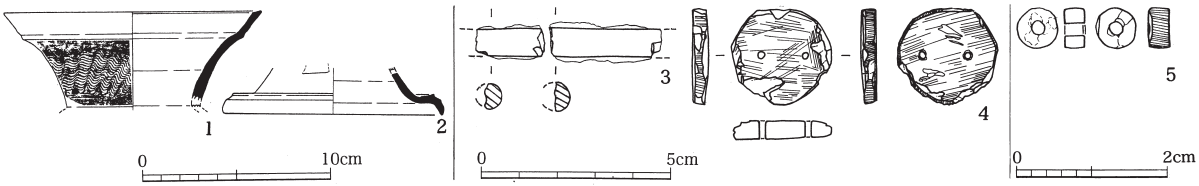


第 180 図　権現山遺跡 4 区　時期不明の柱穴状土坑　P-108 ～ 156　遺構

第 12 節　4 区の遺構外出土遺物

遺構外出土遺物のうち、須恵器𤭯・高杯、石製有孔円板・臼玉、棒状鉄製品を図示した（第 181 図、写真図版 126）。

須恵器𤭯・臼玉・棒状鉄製品は次節で扱う低地包含層で採集した。須恵器高杯（2）は、SI-20（古墳中期後葉）と SB-62（古墳後期？）を切る撹乱坑から出土したもので、SB-62 の時期を推定する手がかりになる可能性もある。2 のように脚端が長い須恵器高杯は、群馬県前橋市荒砥北三木堂 II 遺跡 2 区 30・41 号住居跡（小島 2008,pp.223,265）や埼玉県本庄市（旧児玉町）後張遺跡 32 号住居跡（横川・小川編 1983,p.79）に例があり、群馬県域で創出された形態と考えられている（酒井・藤野他 2009, pp.265-266）。石製模造品と臼玉はどちらも滑石製品。4 区では SI-4 などで石製模造品、SI-7 などで滑石製臼玉が出土している。



第 181 図　権現山遺跡 4 区　遺構外出土の遺物

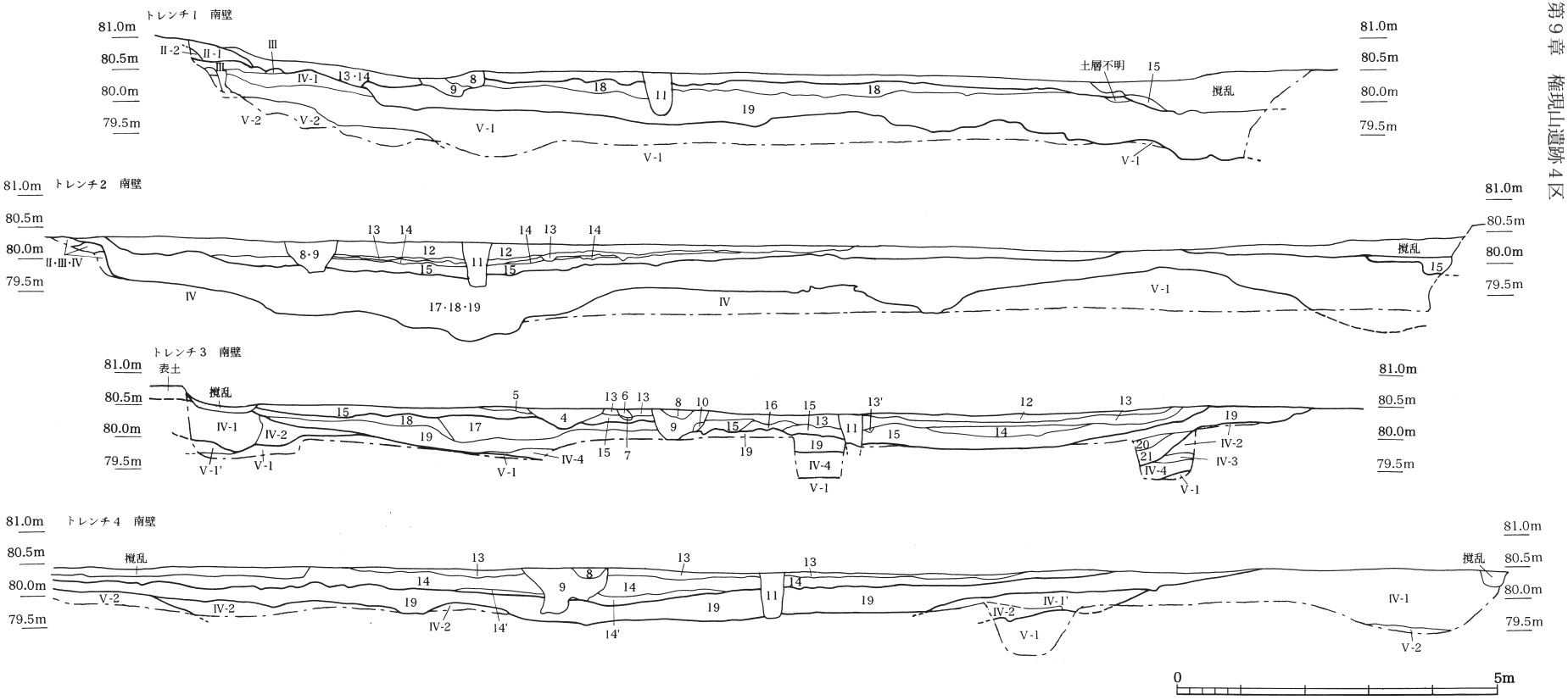
第 91 表　権現山遺跡 4 区　遺構外出土遺物

番号 種類 器種	大きさ （cm・g）	特　　徴	色調 胎土・焼成 （または素材）	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 𤭯	口　復 13.5 高　残 5.0	口縁端はわずかに内傾する斜面。口縁部下端の外面に浅い凹線 1 条と段あり。15 歯の工具で右から左へ櫛描波状文を回転施文する。内外全面に黒色の自然釉が均一に付着。	N6/（B）　灰 やや緻密　白・黒粗～細粒少、白礫微 硬質	34-13 杭から東 5m・南 2m の低地部で採集 口 1/8 周 33.5-13
2 須恵器 高杯	高　残 2.4 脚裾　復 11.4 最大　復 11.6	ほぼ均一な厚さ（3 ～ 4㎜）で、脚裾は端部が長く下がる。倒立成形の状態でロクロは左回転（反時計回り）。透孔下端部が 1 箇所だけ残存する。	7.5Y4/1　灰 やや粗い　白細～微粒多、白・透明粗粒少 硬質	SI-20 東壁と SB-62 を切る長方形撹乱坑（旧名 SK-141） 脚裾 1/4 周 SK-141
3 棒状鉄製品	長　残 46㎜ 幅　7㎜ 厚　残 5㎜ 重　残 3.1	本来は断面円形の棒状で、鍛造のため縦方向に割れて断面半円形状になる。3 片に割れたうち 2 片は接合し、残る 1 片も図示した配置に復原できると見られるが、少し欠失しているらしく破面が接合できない。有機質などの付着は見られない。	鉄製鍛造	東側低地部 一部残 33.5-13
4 石製模造品 有孔円板	長　2.48 幅　2.67 厚　0.45 重　4.88	片面は 3 方向、他面は 1 方向に研磨し、細かい擦痕がよく残る。側面は形割時の工具切削痕および剝離面を 1 割程度残し、他は横方向（穿孔と同じ方向）に表裏面と同種の研磨。穿孔は左図の面から行い、右図の面に細かい穿孔剝離あり。初孔径・終孔径ともに 1.55㎜。	5GY3/1　暗オリーブ灰 滑石 硬質	完形 33.5-12.5
5 石製品 臼玉	径　5.35 ～ 5.4㎜ 高　2.05 ～ 2.95㎜ 重　0.12	上下面は研磨し、荒割・形割痕の稜線をかすかに残す程度。下面の孔周囲に穿孔剝離痕あり。側面は穿孔と同一方向に研磨。全体にやや光沢があり、研磨痕はやや不明瞭。初孔径 1.85㎜、終孔 1.70㎜。	10Y3/1　オリーブ黒 緻密　滑石 やや軟質	32-12.5 の杭から北 0.47m・西 3.86m の低地部で採集 完形 32-12

第 13 節　4 区東側低地部の調査（第 182 図）

権現山遺跡 4 区の東側低地に、東西方向のトレンチを 4 本設けて、低地堆積層の状況、遺物の出土状況、火山灰の層準などを検討した。トレンチの名称は北から南へ順にトレンチ 1 ～ 4 と呼称する（p.183 の第 102 図右下参照）。各トレンチの南壁で土層図を作成し、いずれも左右反転図を掲載したので、第 182 図は左側が西、右側が東である。

埋没谷の基底は青色砂質土（V-1 層）である。各トレンチおよび低地の遺構外から土師器・須恵器片が、大量とは言えないが一定量ずつ出土した。第 12 ～ 13 層中に土師器・須恵器破片が多く、また谷内埋没土の最下層（19 層）に縄文後期中葉の土器が認められた。遺構外出土遺物のうち、須恵器𤭯・臼玉・棒状鉄製品は低地包含層で出土したものである（第 181 図 1・3・5）。トレンチ 2 の中央部北壁で土層断面の試料を採取して古環境復原のための自然科学分析を実施した。その分析成果については次節で述べる。



4区低地トレンチ1～4

1～3	撹乱のため欠番(台地縁辺に作った近年の溝)	
4	暗茶褐色	ローム粒・茶色土ブロック・黒色土ブロック多量。
5	黒褐色	ローム粒・茶色土ブロック・黒色土ブロック多量。
6	茶色	軟質。性格不明。
7	淡白色砂質	性格不明。
8	暗茶色	19層の土がブロック状に多量。
9	黒褐色	19層の土が粒子で入る。鉄分あり。
10	淡茶色	7層と類似するものが層状に入る。
11	撹乱	南北方向の暗渠。下部にはφ5cmの木が多量に入り、埋め戻されている。近年のものと思われる草が生えている。
12	黒褐色	白色粒少量、茶色土ブロックやや多量。土師器・須恵器混入する。
13	暗茶褐色	白色粒・茶色土ブロック少量。赤色鉄分含む。
13'		13層に砂を多く含む。
14	黒色	白色粒・茶色粒含む。
14'		砂層・黒色土・鉄分赤砂層が縞状。水流とよどみを反映するか?
15	黒色	
16	黒色	茶色粒・茶色ブロックやや多量。
17	暗茶褐色粘質	赤褐色鉄分少量。
18	淡茶色	少し粘質あり。
19	淡茶色	砂粒・ブロック多量、黒色土ブロック少量。やや粘質あり。
20	淡茶色	黒褐色土ブロック多量。粘質あり。
21	淡茶色	粘質あり。

地山土層

Ⅱ-1	暗茶褐色	
Ⅱ-2	暗茶褐色	Ⅱ-1層とⅢ層の漸移層。
Ⅲ	黄褐色	ソフトローム。赤色鉄分の小ブロック多量。谷部の17～21層に対応する台地部の層。
Ⅳ	黄褐色	ハードローム。
Ⅳ-1	黄褐色	ハードローム。径1cm程の赤色ブロック(酸化した鉄分?)も含む。
Ⅳ-1'		Ⅳ-1の上層部でやや砂が多い。
Ⅳ-2	乳白色粘質	ロームが水で変化した層か。
Ⅳ-3	青色砂	
Ⅳ-4	乳白色粘質	砂と粘土質の混合。赤色鉄分も含む。
Ⅴ	灰色	砂と径10cm以下の礫との互層。
Ⅴ-1	青色砂質	砂が主体。赤色鉄分少量。硬い。
Ⅴ-1'	青色砂質	Ⅴ-1層に赤色小塊(酸化鉄?)が多量混入。
Ⅴ-2	砂礫層	

第182図　権現山遺跡4区　低地トレンチ　断面図

第 14 節　権現山遺跡 4 区の埋没谷と井戸跡 SE-72 におけるテフラと古環境

9.14.1. 分析結果の概要と考古学的評価

権現山遺跡 4 区の東側低地に設けたトレンチ 2 の中央部北壁で土層断面の試料を採取して、古環境復原のための自然科学分析を実施した。古墳時代相当層（12・13・14・15・17 層）でテフラ検出分析とプラント・オパール分析、縄文後期土器を出土した 19 層下部で花粉分析と ^{14}C 年代測定を実施した。ここでは、自然科学分析成果と考古学的所見の関係についてふれる。

［テフラと年代］ 12 層に古墳後期初頭の Hr-FA テフラ、14 層に古墳前期の As-C テフラの降灰層準があると考えられる。また、19 層中の腐植質堆積物から 5,190 ± 60 BP（5,230 ± 60 cal BP）の ^{14}C 年代が得られた。

［縄文時代の環境］ 17 層下位よりも以前は、19 層の花粉分析結果とともに湿地的な環境であったことを示している。また、19 層では周辺に落葉広葉樹林が分布していたことが示された。

［古墳前・中期の環境］ 古墳前期～後期初頭を中心とする 12 ～ 17 層ではヒエ属型のプラント・オパール密度が 1,000 個 /g 程度で認められたが、栽培種か野生種かは不明である。権現山遺跡 4 区では古墳前期の遺構・遺物は確認されなかったので、少なくとも As-C を含む 14 層以下でヒエ属が栽培されていた可能性は、考古学的には低いということができる。

［古墳中・後期の稲作］ 12 層と 13 層ではイネの植物珪酸体プラント・オパールが検出された。そのうち Hr-FA テフラが混じる 12 層ではイネの珪酸体密度が 3,000 個 /g と比較的高い値を示しているので、古墳時代後期初頭頃にこの付近で稲作が行われていた可能性が高いと考えられた。Hr-FA 直下の 13 層でもイネの珪酸体が認められたが、密度は 800 個 /g と低い値であった。 4 区の集落形成時期とよく一致するので、東側の低地周辺で古墳中期末から後期初めころに稲作が行われていた可能性は高いであろう。

12・13 層中には集落から廃棄または流入したとみられる土器片が含まれていることや、このトレンチ内で 12・13 層以外も含め耕作関連資料（水田・水路遺構や関連遺物等）が出土していないので、 4 区のトレンチ周辺が耕作地そのものであったとは考えにくい。

周辺では、北東に隣接する杉村遺跡 GN1 区の南端部（FA 上層）と北端部（FA 混層）でも、近辺における水田耕作の可能性が指摘されている。ただし、ここではイネの植物珪酸体は 2,000 ～ 2,300 個 /g のやや低い密度である（第 7 章第 4 節）。同じ杉村遺跡の西側低地（北関東自動車道路調査区）では、FA 混層においてイネの植物珪酸体が 4,700 個 /g の高密度で認められたので、古墳後期水田の推定地として最も有力な地点といえる（株式会社 古環境研究所 2000「植物珪酸体分析」『杉村・磯岡・磯岡北』栃木県埋蔵文化財調査報告第 241 集 , p.386）。

［古墳時代土坑のテフラ］ 円筒形土坑 SK-75 で採取されたテフラは、古墳後期初頭の Hr-FA に同定された。出土土器からみて古墳時代中期後～末葉と考えられる土坑の埋土中に、後期初めに降下したテフラの塊が多数混じった状態と見られる。

［井戸埋土のテフラ］ 本章の次項（9.14.2.）で報告した時期不明の SE-72 は、埋土の最下層から 12 世紀初めの As-B テフラが多く認められたので、それより後の遺構であると考えられる。

以上の自然科学分析結果について、報告文を次に掲載する。

9.14.2. 権現山遺跡４区の埋没谷と井戸跡 SE-72 における土層とテフラ

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

栃木県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、日光、那須、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来する数多くのテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代の不明な土層が検出された権現山遺跡４区においても、地質調査を行って土層層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析と屈折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、土層の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、埋没谷部および SE-72 の２地点である。さらに SK-75 で採取された試料についても分析を行った。

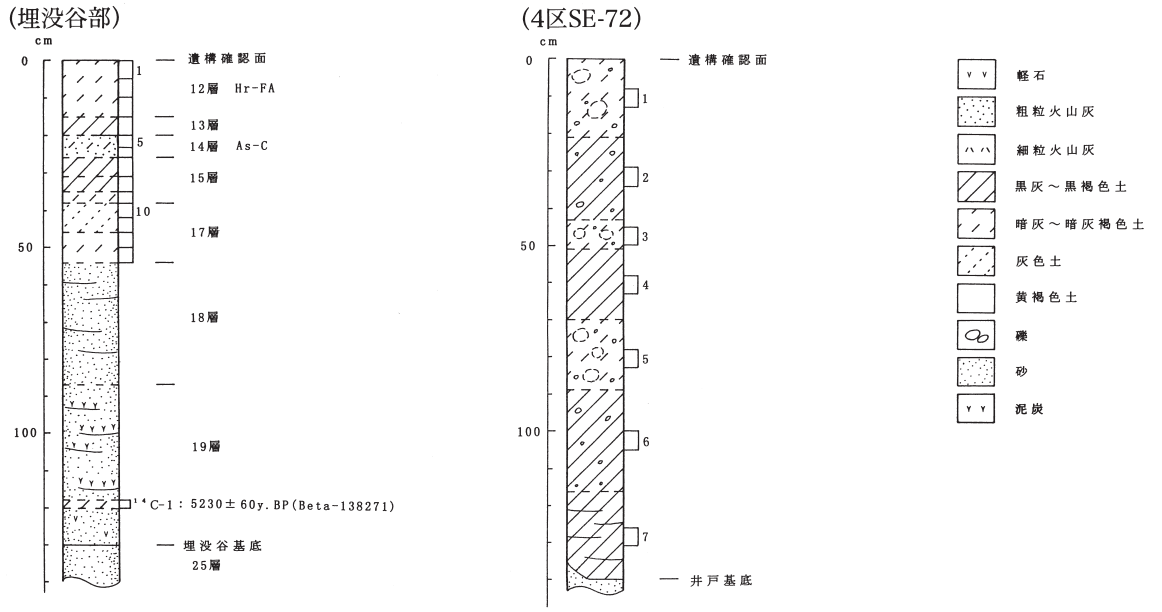
２．土層の層序

（１）埋没谷部

埋没谷部では、粒径がよくそろった灰白色砂層（層厚 10cm 以上，25 層）を切って発達した谷が認められた（第 183 図左）。谷の埋積層は、下位より黄灰白色軽石混じり灰色砂層（層厚 10cm，軽石の最大径 11㎜）、黒泥と砂の互層（層厚 33cm）、層理が発達した灰色砂層（層厚 33cm，以上 18 ～ 19 層）、暗灰色土（層厚 8cm）、灰色土（層厚 8cm，以上 17 層）、暗灰色土（層厚 3cm）、若干色調が明るい黒灰色土（層厚 4cm）、黒灰色土（層厚 5cm，以上 15 層）、黄灰色粗粒火山灰を多く含む暗灰色土（層厚 5cm，14 層）、黒灰色土（層厚 5cm，13 層）、暗灰褐色土（層厚 15cm，12 層）が認められた。

（２）SE-72

SE-72 の覆土は、下位より黄褐色土の薄層を含む黒褐色土（層厚 24cm）、亜円礫混じり黒色土（層厚 27cm，礫の最大径 34㎜）、亜円礫や黄褐色土ブロックを多く含む暗褐色土（層厚 19cm，礫の最大径 48㎜）、黒灰褐色土（層厚 19cm）、亜円礫混じりで黄褐色土ブロックを多く含む暗褐色土（層厚 8cm，礫の最大径 43㎜）、亜円礫混じり黒褐色土（層厚 22cm，礫の最大径 58㎜）、亜円礫混じりで黄褐色土ブロックを多く含む暗褐色土（層厚 21cm，礫の最大径 23㎜）からなる（第 183 図右）。



第 183 図　権現山遺跡４区　土層柱状図とテフラ分析試料

3．テフラ検出分析

（1）分析試料と分析方法

上述 2 地点から採取された 16 点と発掘調査担当者により採取された 1 点の合計 17 点の試料について、テフラ検出分析を行って示標テフラの検出同定を試みた。分析の手順は、次の通りである。

1）試料 15g を秤量。
2）超音波洗浄により泥分を除去。
3）80℃で恒温乾燥。
4）実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

（2）分析結果

テフラ検出分析の結果を第 92 表に示す。埋没谷部では、試料 9 に細粒の白色軽石（最大径 1.2㎜）が少量認められる。試料 7 から上位では、スポンジ状に比較的よく発泡した灰白色軽石（最大径 1.6㎜）が含まれている。とくにこの軽石は、試料 6 に多く含まれている。その産状から、試料 6 付近にその降灰層準があると推定される。軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。また、試料 2 には、あまり発泡のよくない白色軽石（最大径 1.3㎜）が比較的多く含まれている。軽石の斑晶としては、角閃石や斜方輝石が認められる。以上のことから、試料 2 付近にその降灰層準があるものと思われる。

SE-72 の覆土では、いずれの試料からも比較的よく発泡した淡褐色軽石（最大径 1.2㎜）が検出される。とくに最下位の試料 7 に多く含まれている。軽石の斑晶には、角閃石や斜方輝石が認められる。ほかにも、埋没谷部でも認められたスポンジ状に比較的よく発泡した灰白色軽石（最大径 1.5㎜）や、あまり発泡のよくない白色軽石（最大径 1.8㎜）が認められる。

SK-75 から採取された試料には、あまり発泡のよくない白色軽石（最大径 3 ㎜）が多く含まれている。この軽石の斑晶にも、角閃石や斜方輝石が認められる。

4．屈折率測定

（1）測定試料と測定方法

SE-72 において淡褐色軽石が認められた試料のうち、試料 7 と試料 3 の 2 点について、示標テフラとの同定精度を向上させるために、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）により屈折率の測定を行った。

（2）測定結果

屈折率測定の結果を第 93 表に示す。試料 7 に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は、1.525-1.531 である。重鉱物としては斜方輝石や単斜輝石が含まれており、斜方輝石（γ）の屈折率は 1.707-1.710 である。試料 3 に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は、1.524-1.531 である。重鉱物としては斜方輝石や単斜輝石が含まれており、斜方輝石（γ）の屈折率は 1.707-1.710 である。

第 92 表　権現山遺跡 4 区　テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
埋没谷部	2	＋＋	白＞灰白	1.3,1.2
	4	＋	灰白	1.2
	5	＋＋	灰白	1.2
	6	＋＋＋	灰白	1.6
	7	＋	灰白	1.1
	8	－	－	－
	9	＋	白	1.2
	10	－	－	－
	12	－	－	－
SE-72	1	＋＋	淡褐	1.0
	2	＋＋	淡褐＞白	1.2 > 1.8
	3	＋＋	淡褐	1.1
	4	＋＋	淡褐＞白	0.9 > 1.2
	5	＋＋	淡褐＞灰白	1.2 > 1.5
	6	＋＋	淡褐＞灰白＞白	1.1,1.3,1.3
	7	＋＋＋	淡褐＞灰白＞白	1.2,1.2,1.3
SK-75		＋＋＋	白	3.0

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋：中程度，
＋：少ない，－：認められない．最大径の単位は，mm.

第 93 表　権現山遺跡 4 区　屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス（n）	重鉱物	斜方輝石（γ）
SE-72	3	1.524-1.531	opx>cpx	1.707-1.710
	7	1.525-1.531	opx>cpx	1.707-1.710

屈折率の測定は，温度－定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による．
opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石．

５．考察－示標テフラとの同定

テフラ検出分析により検出された軽石のうち、スポンジ状に比較的よく発泡し、班晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる灰白色軽石は、その特徴から４世紀中葉＊1 に浅間火山から噴出した浅間Ｃ軽石（As-C，新井，1979）に同定される。したがって、谷の埋没開始時期は As-C 降灰よりも前のことと考えられる。

また、あまり発泡がよくなく班晶に角閃石や斜方輝石が認められる白色軽石は、その岩相や層位などから６世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，新井，1979，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992）に由来する可能性が高いと考えられる。

SE-72 の覆土から検出された淡褐色軽石については、色調、発泡の程度、重鉱物の組合せ、火山ガラスや斜方輝石の屈折率などから、1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ（As-B，荒牧，1968，新井，1979）に由来すると考えられる。最下位の試料から As-B に由来する軽石が多く検出されたことから、SE-72 の年代については、堆積物の除去が行われていない限り、As-B 降灰以後と推定される。

６．小結

権現山遺跡４区において、地質調査、テフラ検出分析さらに屈折率測定を行った。その結果、下位より浅間Ｃ軽石（As-C，４世紀中葉）、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，６世紀初頭）、浅間Ｂテフラ（As-B，1108 年）などの示標テフラを検出することができた。SE-72 の年代については、As-B 降灰以後の可能性が高い。

*1　西暦 300 年前後とする見方もある（友廣，1988 など）.

文献
新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.
新井房夫（1979）関東平野北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.157，p.41-52.
新井房夫（1993）温度－定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法－研究対象別分析法」，p.138-148.
荒牧重雄（1968）浅間火山の地質．地団研専報，no.45，65p.
町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.
坂口　一（1986）榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119.
早田　勉（1989）６世紀における榛名火山の２回の噴火とその災害．第四紀研究，27，p.297-312.
早田　勉（1990）群馬県の自然と風土．群馬県史通史編，１，p.37-129.
友廣哲也（1988）古式土師器出現期の様相と浅間山Ｃ軽石．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」，p.325-336.

9.14.3. 権現山遺跡４区の埋没谷における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

第 94 表　権現山遺跡４区　放射性炭素年代測定試料と方法

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	埋没谷部	腐植質堆積物	酸洗浄，低濃度処理	β線計数法

第 95 表　権現山遺跡４区　放射性炭素年代測定結果

試料名	^{14}C 年代（年 BP）	δ^{13}C（‰）	補正 ^{14}C 年代（年 BP）	暦年代（西暦）	測定№（Beta-）
No. 1	5190 ± 60	-22.8	5230 ± 60	交点：BC 4025,4015,4005 １σ：BC 4060 ～ 3970 ２σ：BC 4225 ～ 3950	138271

１）^{14}C 年代測定値

試料の ^{14}C/^{12}C 比から、単純に現在（1950 年 AD）から何年前かを計算した値。^{14}C の半減期は 5,568 年を用いた。

２）δ^{13}C 測定値

試料の測定 ^{14}C/^{12}C 比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は、標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正 ^{14}C 年代値

δ^{13}C 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}C の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動に対する補正により、暦年代（西暦）を算出した。具体的には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定、サンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により補正曲線を作成して暦年代を算出する。最新のデータベース（"INCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40（3））により、約 19,000 年 BP までの換算が可能となっている。ただし、10,000 年 BP 以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ（68%確率）・2 σ（95%確率）は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1 σ・2 σ 値が表記される場合もある。

9.14.4. 権現山遺跡 4 区の埋没谷における植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（杉山，2000）。

2．試料

試料は、埋没谷部から採取された 8 点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾）

2）試料約 1 g に対し直径約 40 μ m のガラスビーズを約 0.02g 添加（電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量）

3）電気炉灰化法（550℃・6 時間）による脱有機物処理

4）超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散

5）沈底法による 20 μ m 以下の微粒子除去

6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

7）検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400 倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 g あたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1 g 中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は 2.94（種実重は 1.03）、ヒエ属（ヒエ）は 8.40、ヨシ属（ヨシ）は 6.31、ススキ属（ススキ）は 1.24、タケ亜科は 0.48 である。

4．分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な 5 分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を第 96 表およ

第 96 表　権現山遺跡 4 区　植物珪酸体分析結果

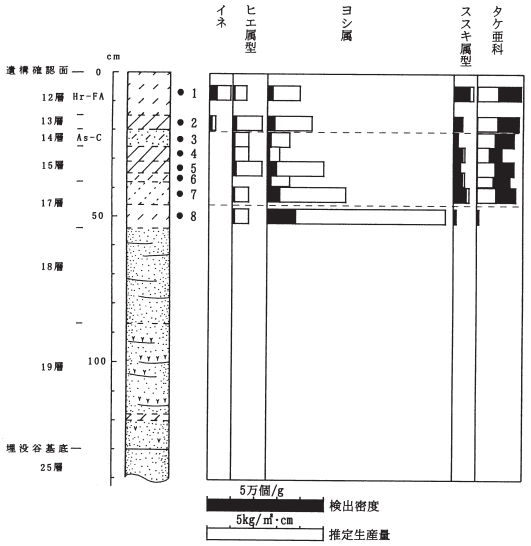
検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	埋没谷部							
			1	2	3	4	5	6	7	8
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)		30	8						
ヒエ属型	*Echinochloa* type		7	15	8	8	15		8	8
ヨシ属	*Phragmites* (reed)		22	30	15	8	38	15	53	121
ススキ属型	*Miscanthus* type		67	30	15	38	23	37	53	8
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)		187	180	159	106	158	142	166	8

推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	0.88	0.22						
ヒエ属型	*Echinochloa* type	0.63	1.26	0.64	0.64	1.27		0.64	0.64
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	1.42	1.90	0.96	0.48	2.38	0.94	3.34	7.65
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.84	0.37	0.19	0.47	0.28	0.46	0.66	0.09
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	0.90	0.87	0.76	0.51	0.76	0.68	0.80	0.04

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。



第 184 図　権現山遺跡 4 区　植物珪酸体分析結果

び第 184 図に示した。第 185 図に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

５．考察

（１）水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料 1 g あたり 5,000 個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、密度が 3,000 個 /g 程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を 3,000 個 /g として検討を行った。

埋没谷部では、12 層（試料１）から 17 層（試料８）までの層準について分析を行った。その結果、12 層（試料１）と 13 層（試料２）からイネが検出された。このうち、Hr-FA 混の 12 層（試料１）では密度が 3,000 個 /g と比較的高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

Hr-FA 直下の 13 層（試料２）では、密度が 800 個 /g と低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

（２）ヒエ属型について

ヒエ属型は、12 層（試料１）から 17 層（試料８）までの層準のうち、試料６を除くすべての試料から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点ではこれらを識別することは困難である（杉山ほか，1988）。また、密度も 1,000 個 /g 前後と低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

（３）堆積環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。おもな分類群の推定生産量によると、下位層準を中心にヨシ属が卓越しており、17 層上部より上位ではタケ亜科も多くなっていることが分かる。

以上のことから、稲作が開始される以前の調査地点は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、13 層もしくは 12 層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。また、遺跡周

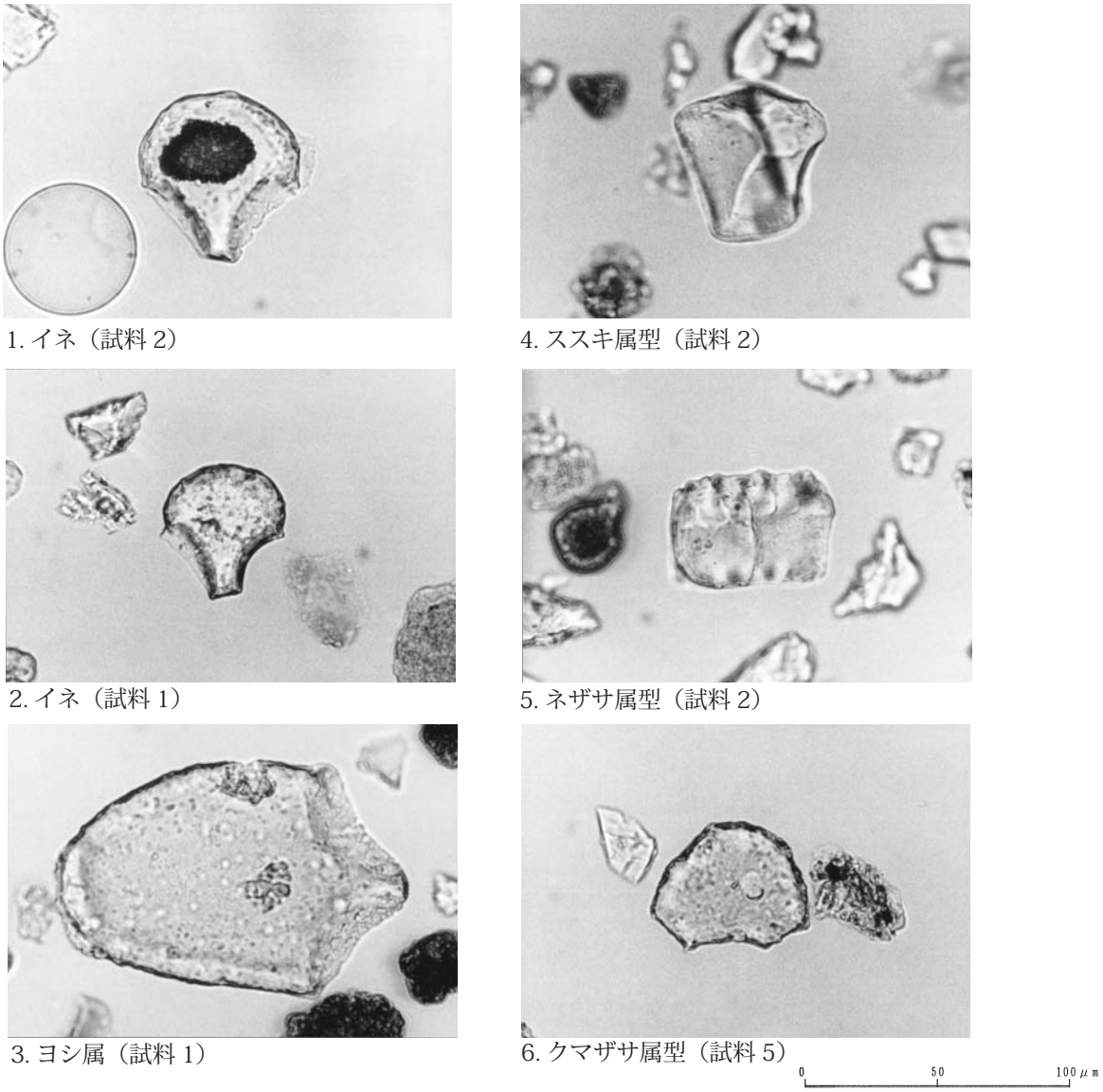
辺ではススキ属やチガヤ属、竹笹類などが生育する草原的なところも見られたと推定される。

6．まとめ

プラント・オパール分析の結果、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，6 世紀初頭）混の 12 層からは、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、Hr-FA 直下の 13 層でも、稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、Hr-FA 混の 12 層から浅間 C 軽石（As-C，4 世紀中葉）より下位の 17 層までの各層では、ヒエ属（ヒエが含まれる）が栽培されていた可能性も認められた。

稲作が開始される以前の調査地点は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、13 層もしくは 12 層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。

文献
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.
杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－．考古学と自然科学，20，p.81-92.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.



1. イネ（試料 2）
2. イネ（試料 1）
3. ヨシ属（試料 1）
4. ススキ属型（試料 2）
5. ネザサ属型（試料 2）
6. クマザサ属型（試料 5）

第 185 図　権現山遺跡 4 区　植物珪酸体の顕微鏡写真

9.14.5. 権現山遺跡４区の埋没谷における花粉分析

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地堆積物を対象として比較的広域な地域の植生や古環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存しない場合もある。

２．試料

試料は、埋没谷部の 19 層下部の黒灰色土層（試料１）である。同層では、縄文時代後晩期の土器が出土している。

３．方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

１）５％水酸化カリウム溶液を加え 15 分間湯煎する。

２）水洗した後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

３）25％フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置する。

４）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。

５）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1,500rpm、２分間）の後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ～ 1,000 倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

４．結果

（１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉 18、樹木花粉と草本花粉を含むもの２、草本花粉 12、シダ植物胞子２形態の計 34 である。これらの学名と和名および粒数を第 97 表に示し、主要な分類群を第 186 図に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、カエデ属、ブドウ属、ニワトコ属－ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

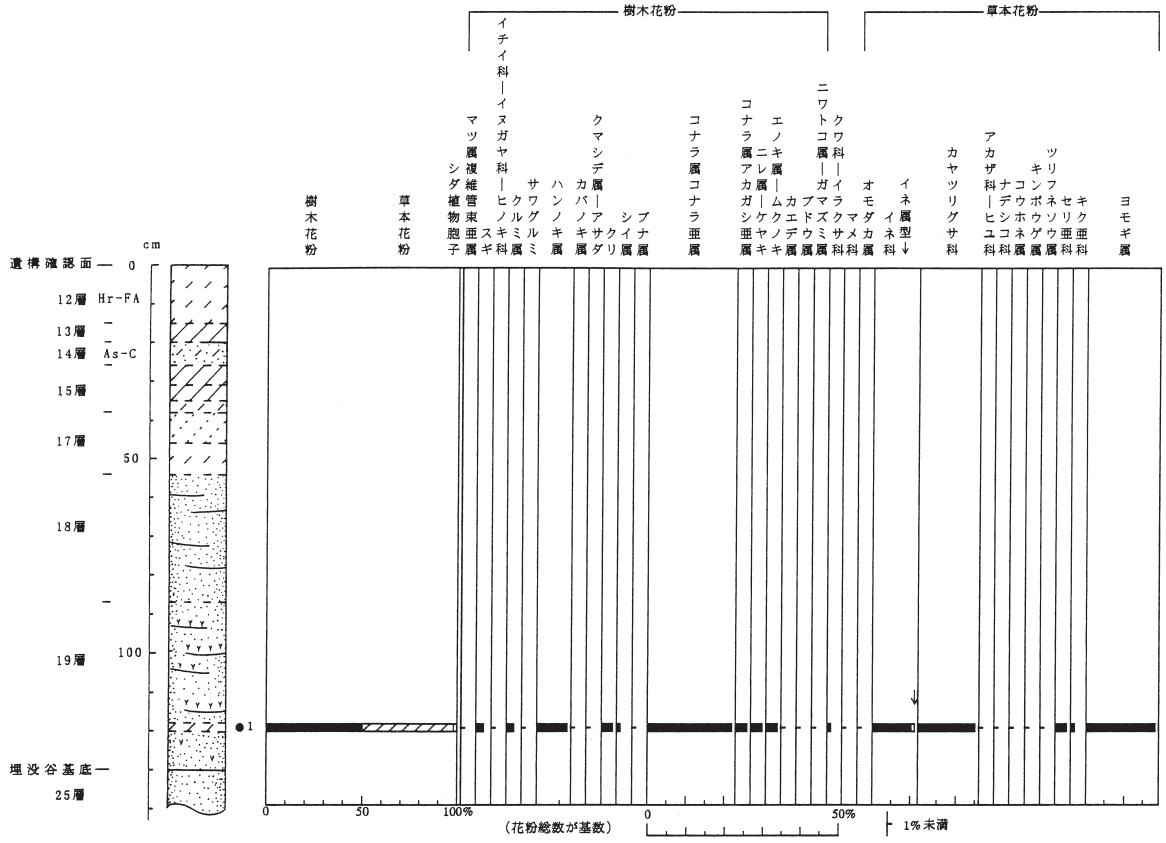
オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、コウホネ属、キンポウゲ属、ツリフネソウ属、セリ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

第 97 表　権現山遺跡 4 区　花粉分析結果

分類群		埋没谷部
学名	和名	1
Arboreal pollen	樹木花粉	
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	1
Cryptomeria japonica	スギ	8
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressacea	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	3
Juglans	クルミ属	8
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ	2
Alnus	ハンノキ属	30
Betula	カバノキ属	2
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	1
Castanea crenata	クリ	10
Castanopsis	シイ属	4
Fagus	ブナ属	2
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	80
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	9
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	9
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	11
Acer	カエデ属	1
Vitis	ブドウ属	1
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	4
Leguminosae	マメ科	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	
Sagittaria	オモダカ属	1
Gramineae	イネ科	37
Oryza type	イネ属型	1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	53
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1
Nuphar	コウホネ属	1
Ranunculus	キンポウゲ属	1
Impatiens	ツリフネソウ属	1
Apiodeae	セリ亜科	10
Asteroideae	キク亜科	4
Artemisia	ヨモギ属	64
Fern spore	シダ植物胞子	
Monolate type spore	単条溝胞子	4
Trilate type spore	三条溝胞子	2
Arboreal pollen	樹木花粉	183
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	7
Nonarboreal pollen	草本花粉	175
Total pollen	花粉総数	365
Unknown pollen	未同定花粉	4
Fern spore	シダ植物胞子	6
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)
	明らかな消化残渣	(-)



第 186 図　権現山遺跡 4 区　埋没谷部における花粉ダイアグラム

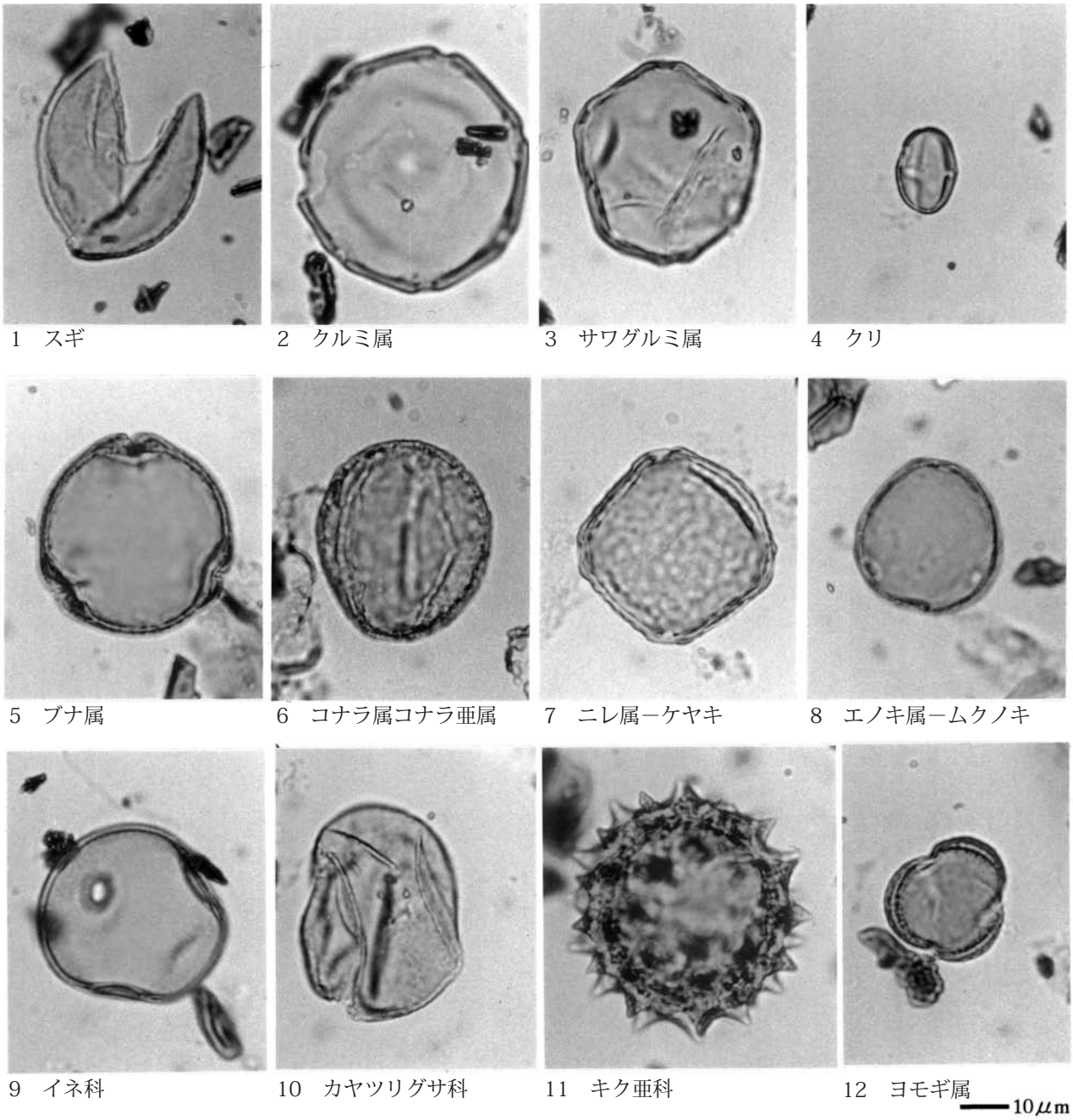
（2）花粉群集の特徴

樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が優占し、ハンノキ属（生態上からハンノキと考えられる）、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、クリが伴われる。草本花粉では、ヨモギ属、カヤツリグサ科、イネ科が多く検出され、水生植物のオモダカ属やコウホネ属が伴われる。

５．花粉分析から推定される植生と環境

縄文時代後晩期の土器が出土した 19 層下部（黒灰色土層）の堆積当時は、ヨモギ属、カヤツリグサ科、イネ科、オモダカ属、コウホネ属などが生育する沼沢から湿地の環境であったと考えられ、ハンノキの湿地林も見られたと推定される。森林植生としては、遺跡周辺にコナラ属コナラ亜属（ミズナラなど）を主としてコナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、クリなども見られる落葉広葉樹林が分布していたと推定される。

文献
中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第 10 巻　古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集，60p.
中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p.
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第 10 号，p.21-30.



第 187 図　権現山遺跡 4 区の花粉

報 告 書 抄 録

ふ り が な	とうや・なかじまちくいせきぐん　10　ごんげんやまいせきほくぶ・すぎむらいせき
書　　名	東谷・中島地区遺跡群　10　権現山遺跡北部（2 ～ 4 区・SG1 区）・杉村遺跡（GN1 区）
副 書 名	都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻　　次	10
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 331 集
編 著 者 名	内山敏行（編）、後藤信祐・谷中隆・亀田幸久・内山敏行・大澤正己・穴澤義功
編 集 機 関	財団法人とちぎ生涯学習文化財団　埋蔵文化財センター
所　在　地	〒３２９－０４１８　栃木県下野市紫４７４番地　TEL ０２８５－４４－８４４１
発 行 機 関	栃木県教育委員会　財団法人とちぎ生涯学習文化財団
発 行 年 月 日	西暦　2010 年 3 月 24 日（平成 22 年 3 月 24 日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	 遺跡番号	北　緯 °　′　″	東　経 °　′　″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ごんげんやま 権現山	とちぎけん うつのみやし とうやまち 栃木県 宇都宮市 東谷町 あざたての・あざすぎむら 字立野・字杉村、 すなたまちあざよしわら・あざはらだ 砂田町字吉原・字原田	09201	455	36 度 29 分 1 秒 （SG1 区） （世界測地系）	139 度 54 分 17 秒 （SG1 区） （世界測地系）	2 区 19970506 ～ 19971008 3 区 19980529 ～ 19980609 4 区 19990913 ～ 19991227 SG1 区 19960422 ～ 19970328	24,300 2,400 4,300 7,800	東谷・中島土地区画整理事業に伴う事前調査
すぎ　むら 杉　村	とちぎけん うつのみやし すなたまち 栃木県 宇都宮市 砂田町 あざはらだ・あざかみやだ・あざよしわら 字原田・字上谷田・字吉原、 かわうちぐん かみのかわまち 河内郡 上三川町 おおあざいそおかあざ 大字磯岡字コムナセゴ	09201	223	36 度 29 分 15 秒 （GN1 区） （世界測地系）	139 度 54 分 20 秒 （GN1 区） （世界測地系）	GN1 区 19960410 ～ 19961024	18,400	

所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
権現山 （2 区・4 区・ SG1 区）	集落	旧石器		尖頭器	
		縄文	土坑 1（前期）	縄文土器、石鏃、片刃石器、スクレイパー、石匙、剥片、石核、礫器、打製石斧、磨石（凹石）、石皿	早期～晩期の土器出土
		弥生		弥生土器・アメリカ式石鏃	前期末・中期・後期
		古墳	竪穴建物 84（鍛冶遺構 1 を含む）、方形周溝遺構 1、掘立柱建物 6、円筒形土坑 49、土坑 28（墓壙 ?1 を含む）、柱穴状土坑 4、溝 1、遺物集中地点 1	土師器、須恵器、焼粘土塊、石製品（模造品・管玉・臼玉・紡錘車・粘板岩剥片）、土玉（丸玉・棗玉）、耳環、鉄斧・鎌・鏃・方形板刃先、編物石、砥石、台石、羽口、鉄滓、炉壁	居館の周囲の集落 墓壙？も 1 基あり
	居館	古墳	外郭溝 1・塀 1・柵列 1・掘立柱建物 1・不明遺構 1・柱穴状土坑 61	土師器、須恵器	方形区画溝と塀に囲まれた内部に掘立柱建物
	集落	古代	道路遺構 1（別途報告済）、溝 1		道路遺構は推定東山道
		中世	竪穴遺構 2、井戸 2、溝 2、土坑 2	白磁、常滑産陶器、在地産こね鉢、呪符木簡、火打金、曲物桶	13 ～ 14 世紀中心、 区画溝内に竪穴遺構と井戸
		近世	溝 4		
		時期不明	掘立柱建物跡 4、井戸 7、溝 14、集礫土坑 1、土坑 190、柱穴状土坑 121		
杉　村 （GN1 区）	集落	縄文		縄文土器、片刃石器（打製石斧）	早期・後期の土器片出土
		弥生	土坑 1（後期）	弥生土器	後期の土器片出土
		古墳	竪穴建物 5、土坑 1	土師器、須恵器、鉄鏃、鉄滓	
		奈良	竪穴建物 1	土師器、須恵器	
		時期不明	溝 3、土坑 45		

要　約

田川の東岸で、開析谷をはさんだ西側に権現山遺跡、東側に杉村遺跡が所在。権現山遺跡の旧石器は水晶製尖頭器 1 点。黒浜期の土坑と撚糸文（井草・大丸・夏島・擦痕文）・沈線文（三戸・田戸下層・田戸上層・出流原）・条痕文・縄文条痕・黒浜・諸磯 a・b・浮島・興津・前期末・五領ヶ台・阿玉台 I ～ IV・加曽利 EI ～ II・堀之内 1 ～ 2・加曽利 B1 ～ 3・曽谷・安行 1・大洞 BC ～ A 式土器が出土。弥生土器は前期末・中期・後期（二軒屋式・樽式）。古墳時代中期の居館は長 98m の東辺の中央～北部を調査。古墳中期～終末期の集落は、中期の鍛冶遺構 2 棟を含む 206 棟を調査し、北半部 84 棟を今回報告した。耳環を 1 対出した土坑（墓壙？）も所在する。中世は不整五角形の区画溝内に竪穴遺構 2、井戸 1、土坑 1、溝 1 が所在する。

杉村遺跡は、縄文時代は早期条痕文系と後期安行 2 式土器、弥生時代は後期二軒屋式期の土坑を報告。古墳時代竪穴は中期 2 棟と後期 3 棟を調査し、古墳前期末～終末期集落（合計 72 棟）の北縁部にあたる。奈良時代初めの竪穴建物 1 棟も調査。

東谷・中島地区遺跡群埋蔵文化財調査報告書一覧

1「磯岡遺跡（Ⅰ区）」　栃木県埋蔵文化財調査報告第 229 集　1999（平成 11）年３月
2「砂田遺跡（１区・２区・３区）」　栃木県埋蔵文化財調査報告第 265 集　2002（平成 14）年３月
3「推定東山道関連地区（権現山遺跡 SG1 区　杉村遺跡 SG1 区　磯岡北遺跡 SG3 区・SG4 区・SG6 区・SG7 区・SG8 区・SG11 区・SG13 区・SG14 区　西刑部西原遺跡２区・６区・７区）」
栃木県埋蔵文化財調査報告第 274 集　2003（平成 15）年３月
4「琴平塚古墳群 (西刑部西原遺跡１・２・６区）」
栃木県埋蔵文化財調査報告第 283 集　2004（平成 16）年３月
5「立野遺跡」　栃木県埋蔵文化財調査報告第 290 集　2005（平成 17）年３月
6「磯岡遺跡（２～７区）」　栃木県埋蔵文化財調査報告第 292 集　2005（平成 17）年６月
7「磯岡北古墳群（磯岡北遺跡 SG12 区・SG16 ～ 18 区）」
栃木県埋蔵文化財調査報告第 299 集　2006（平成 18）年９月
8「砂田遺跡（４～６・18・19・23・24 区）」
栃木県埋蔵文化財調査報告第 305 集　2007（平成 19）年３月
9「中島笹塚古墳群・中島笹塚遺跡（１～８区）」
栃木県埋蔵文化財調査報告第 311 集　2008（平成 20）年３月
10「権現山遺跡北部（2 ～ 4 区・SG1 区）・杉村遺跡（GN1 区）」
栃木県埋蔵文化財調査報告第 331 集　2010（平成 22）年３月

栃木県埋蔵文化財調査報告第 331 集

東谷・中島地区遺跡群 10
権現山遺跡北部（2 ～ 4 区･SG1 区）･杉村遺跡（GN1 区）
（第1分冊）

－都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－

発行　栃　木　県　教　育　委　員　会
宇都宮市塙田1－1－20
TEL　028（623）3425
財団法人とちぎ生涯学習文化財団
宇都宮市本町1－8
TEL　028（643）1011
平成 22 年３月 24 日発行
編集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団
埋蔵文化財センター
下野市紫474番地
TEL　0285（44）8441
印刷　株式会社　泰明グラフィクス